# クルアーン

日本語読解

# クルアーン

日本語読解

目次


| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 第一章 | アル＝ファーティハ 開端 | マッカ啓示 | 全七節 | 1 |
| 第二章 | アル＝バカラ 雌牛 | マディーナ啓示 | 全二八六節 | 5 |
| 第三章 | アール・イムラーン イムラーン家 | マディーナ啓示 | 全二〇〇節 | 83 |
| 第四章 | アン＝ニサーゥ 女 | マディーナ啓示 | 全一七六節 | 125 |
| 第五章 | アル＝マーイダ 食卓 | マディーナ啓示 | 全一二〇節 | 175 |
| 第六章 | アル＝アンアーム 家畜 | マッカ啓示 | 全一六五節 | 211 |
| 第七章 | アル＝アアラーフ 高み | マッカ啓示 | 全二〇六節 | 249 |
| 第八章 | アル＝アンファール 戦利品 | マディーナ啓示 | 全七五節 | 291 |
| 第九章 | アッ＝タウバ 悔い改め | マディーナ啓示 | 全一二九節 | 309 |
| 第一〇章 | ユーヌス | マッカ啓示 | 全一〇九節 | 341 |
| 第一一章 | フード | マッカ啓示 | 全一二三節 | 363 |
| 第一二章 | ユースフ | マッカ啓示 | 全一一一節 | 387 |
| 第一三章 | アッ＝ラアド 雷鳴 | マッカ啓示 | 全四三節 | 409 |
| 第一四章 | イブラーヒーム | マッカ啓示 | 全五二節 | 419 |
| 第一五章 | アル＝ヒジュル 岩山の道 | マッカ啓示 | 全九九節 | 431 |

第一六章　アン＝ナフル　蜜蜂　マッカ啓示　全一二八節　441
第一七章　アル＝イスラーゥ　夜の旅　マッカ啓示　全一一一節　463
第一八章　アル＝カハフ　洞窟　マッカ啓示　全一一〇節　483
第一九章　マルヤム　マッカ啓示　全九八節　503
第二〇章　ター・ハー　マッカ啓示　全一三五節　515
第二一章　アル＝アンビヤーゥ　預言者たち　マッカ啓示　全一一二節　533
第二二章　アル＝ハッジ　巡礼　マッカ啓示　全七八節　551
第二三章　アル＝ムゥミヌーン　信仰者たち　マッカ啓示　全一一八節　569
第二四章　アン＝ヌール　光　マディーナ啓示　全六四節　585
第二五章　アル＝フルカーン　規範　マッカ啓示　全七七節　603
第二六章　アッ＝シュアーラーゥ　詩人たち　マッカ啓示　全二二七節　617
第二七章　アン＝ナムル　蟻　マッカ啓示　全九三節　637
第二八章　アル＝カサス　物語　マッカ啓示　全八八節　653
第二九章　アル＝アンカブート　蜘蛛　マッカ啓示　全六九節　671
第三〇章　アッ＝ルーム　ローマびと　マッカ啓示　全六〇節　685
第三一章　ルクマーン　マッカ啓示　全三四節　697
第三二章　アッ＝サジダ　平伏　マッカ啓示　全三〇節　705
第三三章　アル＝アフザーブ　諸部族の同盟　マディーナ啓示　全七三節　711
第三四章　サバア　マッカ啓示　全五四節　729
第三五章　ファーティル　創始者　マッカ啓示　全四五節　741
第三六章　ヤー・スィーン　マッカ啓示　全八三節　751
第三七章　アッ＝サーッファート　整列する者　マッカ啓示　全一八二節　761
第三八章　サード　マッカ啓示　全八八節　777
第三九章　アッ＝ズマル　勢揃え　マッカ啓示　全七五節　789
第四〇章　アル＝ムゥミン　信仰者　マッカ啓示　全八五節　803
第四一章　フッスィラ　解き明かし　マッカ啓示　全五四節　817
第四二章　アッ＝シューラー　相談　マッカ啓示　全五三節　827
第四三章　アッ＝ズフルフ　黄金の飾り　マッカ啓示　全八九節　837
第四四章　アッ＝ドゥハーン　煙　マッカ啓示　全五九節　849
第四五章　アル＝ジャースィヤ　ひざまずく　マッカ啓示　全三七節　855
第四六章　アル＝アハカーフ　砂の丘　マッカ啓示　全三五節　861
第四七章　ムハンマド　マディーナ啓示　全三八節　869
第四八章　アル＝ファトフ　勝利　マディーナ啓示　全二九節　877
第四九章　アル＝フジュラート　私室　マディーナ啓示　全一八節　885

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 第五〇章 | カーフ | マッカ啓示 | 全四五節 | 891 |
| 第五一章 | アッ＝ザーリヤート まき散らすもの | マッカ啓示 | 全六〇節 | 897 |
| 第五二章 | アッ＝トゥール 山 | マッカ啓示 | 全四九節 | 903 |
| 第五三章 | アン＝ナジュム 星 | マッカ啓示 | 全六二節 | 909 |
| 第五四章 | アル＝カマル 月 | マッカ啓示 | 全五五節 | 915 |
| 第五五章 | アッ＝ラフマーン 慈愛あまねく御方 | マッカ啓示 | 全七八節 | 921 |
| 第五六章 | アル＝ワーキア 出来事 | マッカ啓示 | 全九六節 | 927 |
| 第五七章 | アル＝ハディード 鉄 | マッカ啓示 | 全二九節 | 935 |
| 第五八章 | アル＝ムジャーディラ 異議を唱える女 | マディーナ啓示 | 全二二節 | 943 |
| 第五九章 | アル＝ハシュル 放逐 | マディーナ啓示 | 全二四節 | 949 |
| 第六〇章 | アル＝ムムタハナ 問いただされる女 | マディーナ啓示 | 全一三節 | 955 |
| 第六一章 | アッ＝サッフ 戦列 | マディーナ啓示 | 全一四節 | 961 |
| 第六二章 | アル＝ジュムア 集会 | マディーナ啓示 | 全一一節 | 965 |
| 第六三章 | アル＝ムナーフィクーン 偽善者 | マディーナ啓示 | 全一一節 | 959 |
| 第六四章 | アッ＝タガーブン だまし合い | マディーナ啓示 | 全一八節 | 973 |
| 第六五章 | アッ＝タラーク 離婚 | マディーナ啓示 | 全一二節 | 977 |
| 第六六章 | アッ＝タフリーム 禁止 | マディーナ啓示 | 全一二節 | 981 |
| 第六七章 | アル＝ムルク 威力 | マッカ啓示 | 全三〇節 | 985 |
| 第六八章 | アル＝カラム 筆 | マッカ啓示 | 全五二節 | 989 |
| 第六九章 | アル＝ハーッカ 避けがたい現実 | マッカ啓示 | 全五二節 | 995 |
| 第七〇章 | アル＝マアーリジュ 天に至る梯子 | マッカ啓示 | 全四四節 | 999 |
| 第七一章 | ヌーフ | マッカ啓示 | 全二八節 | 1003 |
| 第七二章 | アル＝ジン | マッカ啓示 | 全二八節 | 1007 |
| 第七三章 | アル＝ムッザンミル 包まる者 | マッカ啓示 | 全一九節 | 1011 |
| 第七四章 | アル＝ムッダッスィル 身を潜める者 | マッカ啓示 | 全五六節 | 1015 |
| 第七五章 | アル＝キヤーマ 復活 | マッカ啓示 | 全四〇節 | 1021 |
| 第七六章 | アル＝インサーン 人間 | マッカ啓示 | 全三一節 | 1025 |
| 第七七章 | アル＝ムルサラート 遣わされるもの | マッカ啓示 | 全五〇節 | 1029 |
| 第七八章 | アン＝ナバア 報せ | マッカ啓示 | 全四〇節 | 1033 |
| 第七九章 | アン＝ナーズィアート 引き抜くもの | マッカ啓示 | 全四六節 | 1037 |
| 第八〇章 | アバサ 眉をひそめる | マッカ啓示 | 全四二節 | 1041 |
| 第八一章 | アッ＝タクウィール 巻き上げる | マッカ啓示 | 全二九節 | 1045 |
| 第八二章 | アル＝インフィタール 裂ける | マッカ啓示 | 全一九節 | 1049 |
| 第八三章 | アル＝ムタッフィフィーン 欺くもの | マッカ啓示 | 全三六節 | 1051 |

第八四章　アル＝インシカーク　割れる　マッカ啓示　全二五節　1055
第八五章　アル＝ブルージュ　諸星座　マッカ啓示　全二二節　1057
第八六章　アッ＝ターリク　夜の星　マッカ啓示　全一七節　1061
第八七章　アル＝アアラー　至高　マッカ啓示　全一九節　1063
第八八章　アル＝ガーシヤ　圧倒するもの　マッカ啓示　全二六節　1065
第八九章　アル＝ファジュル　夜明け前　マッカ啓示　全三〇節　1067
第九〇章　アル＝バラド　町　マッカ啓示　全二〇節　1071
第九一章　アッ＝シャムス　太陽　マッカ啓示　全一五節　1073
第九二章　アッ＝ライル　夜　マッカ啓示　全二一節　1075
第九三章　アッ＝ドゥハー　朝の光　マッカ啓示　全一一節　1077
第九四章　アッ＝シャルフ　安堵　マッカ啓示　全八節　1079
第九五章　アッ＝ティーン　いちじく　マッカ啓示　全八節　1081
第九六章　アル＝アラク　凝った血　マッカ啓示　全一九節　1083
第九七章　アル＝カドル　天命　マッカ啓示　全五節　1085
第九八章　アル＝バイイナ　明白な証　マディーナ啓示　全八節　1087
第九九章　アッ＝ザルザラ　地震　マディーナ啓示　全八節　1089
第一〇〇章　アル＝アーディヤート　疾走するもの　マッカ啓示　全一一節　1091
第一〇一章　アル＝カーリア　叩く音　マッカ啓示　全一一節　1093
第一〇二章　アッ＝タカースル　蓄えの競い合い　マッカ啓示　全八節　1095
第一〇三章　アル＝アスル　時間　マッカ啓示　全三節　1097
第一〇四章　アル＝フマザ　中傷者　マッカ啓示　全九節　1099
第一〇五章　アル＝フィール　象　マッカ啓示　全五節　1101
第一〇六章　クライシュ　マッカ啓示　全四節　1103
第一〇七章　アル＝マーウーン　助け合い　マッカ啓示　全七節　1105
第一〇八章　アル＝カウサル　豊穣　マッカまたはマディーナ啓示　全三節　1107
第一〇九章　アル＝カーフィルーン［真理を］拒む者　マッカ啓示　全六節　1109
第一一〇章　アン＝ナスル　援助　マディーナ啓示　全三節　1111
第一一一章　アル＝マサド　椰子　マッカ啓示　全五節　1113
第一一二章　アル＝イフラース　真髄　マッカ啓示　全四節　1115
第一一三章　アル＝ファラク　夜明け　マッカ啓示　全五節　1117
第一一四章　アン＝ナース　人々　マッカ啓示　全六節　1119

# 第一章　アル＝ファーティハ　開扉

マッカ啓示

啓典の書の開始にあたるため、本章は「書を開く扉」あるいは「神の書の緒」として知られている。この章には、神の書の精髄（せいずい）という意味での「啓典の母」、「称賛の章」、「クルアーンの礎（いしずえ）」、また「アル＝ワーフィヤ（豊かなもの）」「アル＝カーフィヤ（十分なもの）」といった複数の呼称があり、また一日に五回の礼拝において何度も繰り返し暗唱されるため、「幾度も繰り返される七つ（の節）」とも呼ばれる。ブハーリーによれば、「啓典の母」という称号は預言者自身によって与えられたものである。

預言者は、「アル＝ファーティハの章を暗唱しない者の礼拝は有効ではない」と教えており、そのためあらゆる礼拝において、一連の動作ごとに暗唱される。病気の際にファーティハを暗唱すれば、恩恵にあずかるとされる。加えてファーティハは、ムスリムが最も大切にしている嘆願と祈りであり、人生のあらゆる場面において用いられている。

「バスマラ」について：バスマラとは、「慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において」という文言からなる成句である。ハナフィー学派によれば、この成句は、第二七章に現れる節は例外として、ファーティハその他の章の一部を成すものではないため、礼拝においては静かに唱えるものとされている。しかしながらシャフィーイー学派によれば、バスマラは章の一部であり、したがって声高く朗唱されるべきであるとされている。

別のハディースによれば、「バスマラをもって始めなければ、すべてのものごとは（神の祝福の）不足に陥る」。神の祝福が授けられるよう、ムスリムは皆、あらゆるものごとをバスマラで始めるのが良いと信じている。一六章九八節によれば、





バスマラとクルアーンを暗唱し始める前には、神の加護を求めるイスティアーザ（成句）を唱えることも必要であるとされている。

1 慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。[1]
2 アッラーに称賛あれ、諸世界の主に、[2]
3 慈愛あまねく御方、慈悲深い御方、
4 裁きの日の主宰者に。[3]
5 私たちはあなたに「のみ」仕え、またあなたに「のみ」助けを求めます。
6 まっすぐな道に、私たちを導いてください、[4]
7 あなたが恩寵を恵む者たちの道に、あなたの怒りを招く者の「道」でも、さまよえる者の「道」でもなく。

1　アラビア語の「ラフマーン」と「ラヒーム」は、おおむね「恩情にあふれる」「慈悲深い」などと訳せる。「アッ＝ラフマーン」とは神名のひとつであり、その恩恵は誰に対しても開かれており、信じる者か信じない者か、義人か罪人かを問われることとすらない。「アッ＝ラヒーム」もまた、神名のひとつである。来世においては、その恩恵は信じる者にのみ開かれている。

2　アラビア語「アーラミーン」とは、「アーラム（世界、領域）」の複数形である。あまねく宇宙に多くの世界が存在する。そこには「ナースート」の世界があり、これは諸感覚によって認知可能な人間の領域である。またそこには、目では捉

えることのできない「マラクート」の領域があり、これは天使やジンその他、霊的存在の世界である。最後に、「ラーフート」という神的本質の領域がある。宇宙のあらゆる惑星もまた、「世界」といえるかもしれない。天文学的・物理的な「世界」も数あれば、精神的な世界、形而上学的な世界なども存在する。そのほとんどは、神のみによって知られる。

3　ここでは「王者」としたアラビア語「マーリク」は、「所有者」ないし「支配者」、あるいはその両方とも訳せる。神は審判の日の所有者であり支配者である。

4　ここでの「導き」を意味するアラビア語からは、「私たちをまっすぐな道に導いてください、そして私たちが、そこから逸れることのないよう守ってください」という意味がもたらされる。一部のクルアーン解釈者によれば「まっすぐな道」とは、主の罰を受けたユダヤ教徒や、まっすぐな道から安易に逸れたキリスト者のそれではなく、預言者たち、また彼らに真に従う者たちの道のことである。イスラームに先行する二大宗教の民が、ムスリムに対する先例として挙げられているのは、それにより後者が注意を払い、真実から逸脱したり、誤った道を歩んだりすることのないようにという理由による。

# 第二章　アル＝バカラ　雌牛

マディーナ啓示

二八六節に及ぶ本章は、クルアーンの中では最も長い章である。六七節から七三節に言及のある雌牛から、この名がつけられている。二七五節から二八一節は、預言者が死没する直前の最後の月のものである。二八一節は、彼が受け取った最後の啓示と考えられている。

ユダヤ教徒は、雌牛を屠るように命じられたが従わなかった。真の信仰を失ったとき、ユダヤ教徒はムーサー（モーセ）に逆らい、様々な口実を編み出した。

本章は、クルアーン全体の啓示に通底する目的の宣言から始まる。人間が営むあらゆる世俗的な生活と、最も重要となる精神的な生活について、その導きが詳細にわたり説き明かされている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 アリフ、ラーム、ミーム。[1]

2 これは疑う余地のない啓典、畏れる者のための導き。

3 目には見えないものを信じ、礼拝のつとめを守り、われらが彼らの糧としたものから「施しに」費やす者、





4 またあなた「ムハンマド」に下されたもの、またあなた以前に下されたものを信じ、来世について確信する者、

5 これらの者こそ、主からの導きの上にある者。またこれらの者こそ、栄える者。

6 本当に、「真理を」拒む者たちは、あなたが彼らに「終末の日の懲罰について」警告しようと、あるいは警告しなかろうと同じこと。彼らは、信じないだろう。

7 アッラーは彼らの心と耳を閉ざした。また彼らの目には覆いがかけられている。彼らには「現世においても、来世においても」大いなる懲罰があるだろう。

8 人々の中には、信仰者ではないのに「私たちはアッラーと終末の日を信じます」と言う者がある。

9 彼らはアッラーと、信じる者たちを欺いたつもりでいる。しかし彼らは、自分でも気づかないうちに、ただ自分自身を欺いているだけ。

10 彼らの心の中にはやまいがある。アッラーは、そのやまいを重くさせる。そして彼らには痛烈な懲罰があるだろう、彼らが嘘であるとしていたために。

11 「地上に退廃を引き起こしてはならない」と告げられると、彼らは言う。「私たちはただ、世を改めようとしているだけです」。

12 まぎれもなく、本当に彼らこそ退廃を引き起こす者たち。しかし、彼らは気づかない。

13 また「人々が信じるように信じなさい」と告げられると、彼らは言う。「愚かな者が信じるように、信じるべきだというのですか」。まぎれもなく、本当に彼らこそは愚かな者。しかし「そのことを、」彼らは知らない。

14 また、信じる者たちに会うと、彼らは言う。「私たちは信じます」。しかし彼らと、その「仲間の」悪魔た

ちだけになると、彼らは言う。「本当に、私たちはあなたがたと共にある。私たちは、ただあざ笑ってやっただけだ」。
15 アッラーこそ、彼らをあざ笑う。そして彼らがその逸脱の中を、あてもなくさまようままにさせておく。
16 これらの者こそ、導きと引き換えに迷いを買い込んだ者たち。それで彼らの取引には益もなく、彼らは導かれてもいない。[2]
17 彼らは、例えるなら火を灯す者のようなもの。周囲が照らされるや、アッラーは彼らの光を取り去る。彼らは暗闇の中に置き去りにされ、何も見ることができない。[3]
18 耳も聞こえず、ものも言えず、目も見えない。それゆえ、彼らが［正しい道に］戻ることはないだろう。
19 あるいは暗闇と雷鳴と雷光の中、空から激しい雨に降られているかのよう。落雷のため、彼らは死を恐怖してその指で耳をふさぐ。しかしアッラーは、［真理を］拒む者を囲みこむ。
20 雷光は、彼らの視覚をほとんど奪うかのよう。彼らは、［光に］照らされればその中を歩く。そして暗闇になるときは立ち止まる。本当に、もしアッラーがそうと望めば、彼らの聴覚も視覚も取り去るだろう。本当に、アッラーはあらゆるものごとにおいて全能である。[4]
21 人々よ。あなたがたは、あなたがたとあなたがた以前の者を創造した、あなたがたの主に仕えなさい。それであなたがたは、畏れる者となるだろう。
22 かの御方はあなたがたのために大地を［広げて］休息の場とし、空を［掲げて］天蓋とし、また空から雨を降らせ、それにより果実を育て、あなたがたの糧とした。それゆえあなたがたは、そうと知りながらアッラーに同位のものを設けてはならない。[5]
23 また、もしあなたがたが、われらのしもべ［ムハンマド］にわれらが下したものについて疑っているなら、





これらと同じような章を、ひとつでも持ってきてみなさい。そしてアッラーをおいて他にあなたがたの証言者を連れてきなさい、もしあなたがたが、真実を語っているのなら。[6]
24 しかし、もしあなたがたにできないなら、決してできるはずもないが、それなら人々と石とを燃料とする、［真理を］拒む者のために用意された業火を畏れなさい。[7]
25 信じて正しい行いをする者たちには、良い報せを伝えなさい。彼らには、川がその下を流れる楽園がある。その中から、糧として果実をもたらされるたびに、彼らは言うだろう。「これは、以前に私たちの糧とされていたものです」。彼らには、それほど似たようなものが与えられるだろう。また、そこには彼らのための清純な配偶者がいる。そして彼らは、永遠にその中に住まうだろう。
26 本当にアッラーは、蚊であろうと、それ以上のものであろうと、例えに示すのをためらわない。信じる者たちは、それが彼らの主からの真理であると知っている。しかし［真理を］拒む者たちは、「このようなものを例えにして、アッラーは何を意図しているのか」と言うだろう。アッラーはこのようなもので多くを迷わせ、また多くを導く。この御方が迷わせるのは、ただ［真理を拒んで］背く者、[8]
27 ［すなわち］誓った後になってアッラーの契約を違え、アッラーが結ぶよう命じたものを断ち切り、地上で退廃を広める者のみ。これらの者は、敗者である。[9]
28 あなたがたは、どうしてアッラー［の真理］を拒んでいられるだろうか、無であったあなたがたを生かし、それから死なせ、それから［再び］生かす御方を。そののち、あなたがたはその御許へ帰されるのに。[10]
29 あなたがたのために地上にあるものすべてを創造し、それからさらに天に向かい、それを七つの天に仕上げた御方。ありとあらゆるものごとを知る御方。
30 ［ムハンマドよ、］あなたの主が、天使たちに告げたときのこと［を思いなさい］。「われは地上に、代理

となる者［として、人間のアーダム］を置こう」。彼らは言った。「退廃を広め、流血を招く者を置くのですか。私たちが称賛をもってあなたを讃美し、あなたを聖なるものとしておりますのに」。かの御方は告げた。「本当に、われはあなたがたの知らないことを知っている」。[11]

31 かの御方はアーダムに、諸々の名をすべて教えた。それから天使たちに、それらを示して告げた。「これらの名をわれに教えてみなさい、もしあなたがたが、真実を語っているのなら」。[12]

32 彼らは言った。「あなたに讃美あれ。あなたに教わるものの他に、私たちには何の知識もありません。本当に、すべてを知る御方、賢明な御方とはあなたのこと」。

33 かの御方は告げた。「アーダムよ。それら諸々の名を、彼らに教えなさい」。そしてそれら諸々の名を、アーダムが彼らに教えると、かの御方は告げた。「われはあなたがたに告げたではないか。本当にわれは、諸天と大地の目に見えないものを知っている。われは、あなたがたが明かすことも隠すことも知っている」。[13]

34 われらが、天使たちに告げたときのこと［を思いなさい］。「アーダムの前にひれ伏しなさい」。それで彼らはひれ伏した。イブリースは別で、彼は拒絶して高慢にふるまい、［真理を］拒む者となった。[14]

35 われらは告げた。「アーダムよ。あなたとあなたの妻［ハウワーゥ］は、楽園で暮らしなさい。その中であなたがたの望むまま、自由に食べ［、良いものを楽しみ］なさい。しかし、この木には近づいてはならない。さもないと、あなたがたは不正をなす者となるだろう」。

36 しかし悪魔が二人をそこから踏み外させ、元々いたところから彼らを立ち退かせた。われらは告げた。「あなたがたは落ちてゆけ、互いの敵となって。あなたがたには、地上に住まうところと、しばらくの暮らしの備えがあるだろう」。

37 そののちにアーダムは、主の御言葉を受け取っ［て悔い改め］た。それで主も［悔い改めを認め、］彼を





受け入れた。本当に、幾度でも悔い改めを受け入れる御方、慈悲深い御方。[15]

38 われらは告げた。「あなたがたは、皆そろってここから落ちてゆけ。しかし、いつであれあなたがたにわれからの導きが到来して、誰であれわれの導きに従う者には、恐れもなく、嘆きもないだろう。

39 しかし［真理を］拒み、われらのしるしを嘘よばわりする者、これらの者は火獄の仲間。彼らは、永遠にその中に住まうだろう」。

40 イスラエルの民よ。われがあなたがたの上にもたらした、われの恩寵を想い起こしなさい。われ［とあなたがた］の契約をまっとうしなさい。そうすれば、われもあなたがた［とわれ］の契約をまっとうするだろう。ただわれのみを畏れかしこみなさい。[16]

41 そして［すでに］あなたがたと共にあるもの［律法］の確証として、われが下したもの［クルアーン］を信じなさい。これ［の真理］を拒む最初の者となってはならない。われのしるしを、わずかな代価と引き換えにしてはならない。ただわれのみを畏れなさい。[17]

42 また、真理を虚偽と混ぜてはならない。また、そうと知りながら真理を隠してはならない。

43 礼拝のつとめを守り、喜捨をし、こうべを垂れる者たちと共にこうべを垂れなさい。

44 あなたがたは［律法の］啓典を復唱していながら、人々に徳を命じて、自分自身のことは［その実践を］忘れているのか。それでもあなたがたは、考えないのか。

45 忍耐と礼拝をもって助けを求めなさい。本当に、それは畏怖する者でなければ難しいこと。[18]

46 そうした者たちは必ず自分の主に会うこと、主の御許に帰りつくことを心得ている。

47 イスラエルの民よ。われがあなたがたに恵んだ、われの恩寵を想い起こしなさい。またわれが、万人の誰にもまさってあなたがたに恵んだことも。[19]

48 誰も他の者の代わりに何ひとつしてやれず、どのようなとりなしも受け入れられず、どのような償いも
受け取られず、どのような助けもないその日を畏れなさい。
49 ［イスラエルの民よ、］またわれらが、フィルアウンの一族からあなたがたを救ったときのこと［を思い
なさい］。彼らはあなたがたにひどい苦役を課した。あなたがたの息子たちは皆殺しにされ、女たちは生
かされた。本当にその中には、主からの大いなる試練があった。
50 またわれらが、あなたがたのために海を割り、あなたがたを救い、あなたがたの目の前で、フィルアウ
ンの一族を溺れさせたときのこと［を思いなさい］。[20]
51 またわれらが、四十夜をかけてムーサーに［律法を］託したときのこと［を思いなさい］。そのとき、あ
なたがたは、彼が出かけた後に仔牛［を崇拝すること］を選び、不正をなす者となった。[21]
52 そののち、われらはあなたがたを容赦した。それであなたがたが、［教訓から学び］感謝するようになる
だろうと。
53 またわれらが、ムーサーに啓典と［正誤の］規範を授けたときのこと［を思いなさい］。それであなたが
たが、導かれるようになるだろうと。
54 そしてムーサーが、自分の民に言ったときのこと［を思いなさい］。「私の民よ。仔牛を選んだことで、
本当にあなたがたは自分自身に不正をなした。それで、あなたがたの創造の主に立ち返って悔い改めな
さい。自分自身［の中にいる、仔牛を崇めたがる低い心性］を殺しなさい。創造の主の御許においては、
その方があなたがたのために良い」。それでかの御方も［悔い改めを認め、］あなたがたを受け入れた。
本当に、幾度でも悔い改めを受け入れる御方、慈悲深い御方。
55 またあなたがたが、ムーサーにこう言ったときのこと［を思いなさい］。「はっきりとアッラーを見るま





56 では、私たちはあなたを信用しない」。するとあなたがたの目の前で、落雷があなたがたを襲った。
そのときも、あなたがたの死の後で、われらはあなたがたをよみがえらせた。それであなたがたが、感
謝するようになるだろうと。[22]
57 われらは雲をもってあなたがたの上の日陰とし、また「われらがあなたがたの糧とした、諸々（もろもろ）の［合法な］
良いものを食べなさい」と［告げて］、あなたがたにマンナとうずらを下した。彼らは、われらに不正を
なしたのではない。ただ自分自身に不正をなしただけ。[23]
58 またわれらが、こう告げたときのこと［を思いなさい］。「この町に入り、その中であなたがたの望むま
まに食べなさい。［ただし、謙虚に］ひれ伏して門に入り、『許しあれ』と言いなさい。われらはあなた
がたのために、その過ちを赦そう。そして行いの善良な者には［その善良さと報奨を］増やそう」。[24]
59 しかし彼らのうち不正をなす者が、言葉を、彼らに告げられていたもの以外に変えてしまった。それで
われらは、不正をなす者の上に天から大難を下した。彼らが、背き続けていたゆえに。
60 またムーサーが、自分の民のために水を求めたときのこと［を思いなさい］。われらは彼に告げた。「あ
なたの杖で、岩を打ちなさい」。するとそこから、十二の泉が［別々に］湧き出でた。［こうして支族の］
人々は、確かにそれぞれの水飲み場を知った。「アッラーからの糧を食べ、飲みなさい。また地上をかき
乱して、退廃を広めてはならない」。[25]
61 またあなたがたが、こう言ったときのこと［を思いなさい］。「ムーサーよ。食べものがただ一種類だけ
では、私たちは耐えられない。私たちのために、緑の香草やうり、にんにく、レンズ豆や玉ねぎといった、
大地が育むものをもたらしてくれるよう、あなたの主に祈ってくれ」。彼［ムーサー］は言った。「あなた
がたは、より良いものを劣るものと取り替えようというのか。エジプトへ落ちてゆけ。そうすれば、あ

なたがたの願うものがあるだろう」。こうして彼らは屈辱と貧困をこうむり、またアッラーからの怒りを招いた。それは、彼らがアッラーの御しるしを［いつまでも］拒み、また預言者たちを正当な理由なくして殺害してきたため。それは彼らが逆らい、度が過ぎたため。[26]

62 本当に、［クルアーンを］信じる者、ユダヤ教徒、キリスト者、サービアの徒のうち、誰であれ、アッラーと終末の日を信じ、正しい行いをした者には、主の御許にその報酬があるだろう。彼らには恐れもなく、嘆きもないだろう。[27]

63 ［イスラエルの民よ、］われらがあなたがたの誓約を受け取り、あなたがたの頭上にかの山をそびえ立たせたときのこと［を思いなさい］。「われらがあなたがたに与えたものをしっかりと受け取り、その中にあるものを憶えておきなさい。それによりあなたがたは、［自分自身を悪から守る］畏れる者となるだろうから」。

64 ところがその後になって、あなたがたは背を向けた。もしあなたがたにアッラーの御恵みも憐れみもなかったなら、あなたがたは敗者となっていただろう。

65 あなたがたのうち、安息日［の法］に外れた者がいて、われらに「猿となり、卑しめられよ」と告げられたことを、あなたがたはすでに知っているはず。

66 われらはそれを、彼らの時代の者、また［彼らの］後を継ぐ時代の者への見せしめとし、また畏れる者たちへの教示とした。[28]

67 またムーサーが、自分の民に言ったときのこと［を思いなさい］。「本当にアッラーはあなたがたに、一頭の雌牛を［犠牲として］屠るよう命じている」。彼らは言った。「あなたは、私たちを笑いものにするのか」。彼は［祈って］言った。「アッラーよ、加護を求めます。私が、無知な者のひとりにならないように」。[29]





68 彼らは言った。「私たちのために、あなたの主に祈ってくれ。それ［雌牛］が何であるのか、明らかになるように」。彼は言った。「本当に、かの御方は告げている、それは老いてもおらず若くもない、その中間の［ほどよく成熟した］雌牛であると。それゆえ、あなたがたの命じられたとおりにしなさい」。

69 彼らは言った。「それが何色であるのか、明らかになるように」。彼は言った。「本当に、かの御方は告げている、それはあざやかで、見る者を喜ばせる黄色の雌牛であると」。

70 彼らは言った。「私たちのために、あなたの主に祈ってくれ。それがどれであるのか、明らかになるように。私たちにはどの雌牛も似通って見える。それに、もしアッラーがそうと望めば、本当に私たちも導かれるだろうから」。[30]

71 彼は言った。「本当に、かの御方は告げている、それは土地を耕し、［畑の］水やりをするようしつけられたのではない、疵ひとつないまったき雌牛であると」。彼らは言った。「今こそ、あなたは真理をもたらした」。それで彼らは、それを［犠牲として］屠った。彼らはほとんど、そうするつもりもなかったのだが。[31]

72 またあなたがたがひとりの人間を殺害し、それについて言い争ったときのこと［を思いなさい］。アッラーは、あなたがたが隠していたことを露わにした。

73 われらは告げた。「その［殺された］者［の亡骸］を、それ［犠牲の雌牛］の一片で打ちなさい」。このようにアッラーは死せる者に生をもたらし、［預言者に授けられた奇跡として］その御しるしを見せた。あなたがたも、考えるようになるだろうと。

74 ところがその後になって、あなたがたの心は岩のように硬くなった。あるいは、それよりも硬くなった。本当に岩の中には、その間から川が湧き出るものもあり、割れて水をあふれ出させるものもあり、アッラー

への畏怖から崩れ落ちるものもあるのに。しかしアッラーは、あなたがたの行いに無頓着ではない。

75 あなたがたは、「いつか」彼らがあなたがたを信頼することを願っているのか。かつて彼らのうちある者は、アッラーの御言葉を聞き、そののち、「その意味を」考えた後になってさえ、そうと知りながらそれをすげ替えたというのに。[32]

76 また、信じる者たちに会うと、彼らは言う。「私たちは信じます」。しかし、お互いだけになると、彼らは言う。「アッラーがあなたがたに開示したことを、彼らに話してしまうのか。そうすれば彼らは主の御前で、それについてあなたがたと口論するかもしれない。それでもあなたがたは、考えないのか」。[33]

77 彼らは知らないのか、本当にアッラーは、彼らの秘めるものもさらけ出すものも知っているということを。

78 彼らの中には文字を知らず、啓典を「自分の」思い通りにしか知ろうとしない者がいる。彼らは、ただ空想に耽っているに過ぎない。[34]

79 災禍あれ、その手で啓典を書き記し、そののち、わずかな代価と引き換えにするために「これはアッラーの御許からのもの」と言う者たちに。彼らに災禍あれ、彼らの手が書き記したもののために。彼らに災禍あれ、それにより彼らが得たもののために。[35]

80 彼らは言う。「業火が私たちに触れることは決してない。「触れたとしても、」数日に過ぎないだろう」。言いなさい。「あなたがたは、アッラーの御許から契約を受け取ったのか。「だとしたら、」アッラーはその契約を決して破らない。それともあなたがたは、アッラーについてあなたがたが知りもしないことを言うのか」。[36]

81 いいや、そうではない。誰であれ悪事をはたらいて、その過ちに囲みこまれる者、これらの者は火獄の仲間。彼らは、永遠にその中に住まうだろう。





82 しかし、信じて正しい行いをする者、これらの者は楽園の仲間。彼らは、永遠にその中に住まうだろう。

83 またわれらが、イスラエルの民の誓約を受け取ったときのこと「を思いなさい」。「アッラーの他に何ものにも仕えてはならない。また、両親には良くしなさい、近しい親族、孤児、貧しい者にも。人々にはやさしく語りなさい。そして礼拝のつとめを守り、喜捨をしなさい」。ところがあなたがたは背を向けた、ごくわずかを除いては。そしてあなたがたは背き去った。

84 またわれらが、あなたがたの誓約を受け取ったときのこと「を思いなさい」。「あなたがたは、自分たちで「互いの」血を流したり、自分たちで「互いを」追放したりしてはならない」。そうしてあなたがたはこれを承知し、みずからの証言者となった。

85 ところが、「今や」あなたがたは自分たちで殺し合い、また自分たちのうちある者を館から追放する。そして彼らに対し、罪と敵意をもって手を貸し合う。それでいて、彼ら「追放された者」が捕虜としてあなたがたのところに来ると、その代償を払う。「そもそも」彼らを追放すること自体、あなたがたには禁止されているのに。あなたがたは啓典のある一部は信じ、またある一部は拒むというのか。それならあなたがたのうちそうした者の報いは、現世においては恥辱でしかない。また復活の日には、厳しい懲罰へ引き戻されるだろう。アッラーは、あなたがたの行いに無頓着ではない。[37]

86 これらの者は、来世と引き換えに現世の生を買い込んだ者たち。彼らには懲罰は軽くもされず、どのような助けもないだろう。

87 こうしてわれらはムーサーに啓典を与え、また彼の後にも使徒たちを続かせた。われらはマルヤムの子イーサーに明白な証を与え、聖なる息吹によって彼を支えた。しかしあなたがた自身の意にそぐわないものをもって使徒が到来するたびに、あなたがたは高慢にふるまった。そして「使徒たちのうち」ある者

を嘘であるとし、またある者を殺害した。[38]

88 彼らは言う。「私たちの心は包まれている［ため、神の御言葉を十分に保つことができている］」。いいや、そうではない。恩を忘れたために、彼らはアッラーから忌まれた。それゆえ、彼らが信じるのはごくわずか。[39]

89 ［今まさに］アッラーの御許から、彼らと共にあるもの［律法］を確認する啓典が彼らのところへ到来した。ところが［真理を］拒む者に対する勝利を以前から願っていながら、そうと見分けられるもの［クルアーン］が彼らのところへ到来すると、彼らはそれを拒む。［真理を］拒む者は、アッラーに忌まれるだろう。

90 彼らが自らと引き換えにしたものの、何という悪さか。アッラーが下したもの［の真理］を彼らが拒むのは、アッラーがその御心のまま、しもべたちのうちある者に下す御恵みに嫉妬しているため。それゆえ彼らは、怒りの上にも怒りを招いた。［真理を］拒む者には、屈辱の懲罰があるだろう。

91 「アッラーが下したものを信じなさい」と言われるとき、彼らは言う。「私たちは、私たちに下されたものを信じます」。そうしてそれ以上のことは拒む、たとえそれが彼らと共にあるものを確認する真理であろうとも。言いなさい。「もしあなたがたが信仰者なら、どうして以前にアッラーの預言者たちを殺害したのか」。[40]

92 また、かつてムーサーは明白な証をたずさえてあなたがたに到来した。ところが彼の後に、あなたがたは仔牛［を崇拝すること］を選んで、不正をなす者となった。[41]

93 われらがあなたがたの誓約を受け取り、あなたがたの頭上にかの山をそびえ立たせたときのこと［を思いなさい］。「われらがあなたがたに与えたものをしっかりと受け取り、［命じられたことに］耳を傾けなさい」。彼らは言った。「私たちは聞きもするが、逆らいもする」。［真理を］拒んだために、彼らは仔牛［への崇拝］をその心の中にまで飲み込んでしまった。言いなさい。「もしあなたがたが信仰者なら、あなたがたの信仰が命じるものの何という悪さか」。[42]





94 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「もしアッラーの御許の来世の館が、［他の］人々をさし置いてあなたがただけのためにあるというなら、死を願いなさい。もしあなたがたが、真実を語っているのなら」。[43]

95 しかし彼らは、彼らがその手ですでに送り出したもの［悪事］のために、決してそうは願わないだろう。アッラーは、不正をなす者について知っている。[44]

96 人々のうちもっとも生を熱望するのは、［主に］何ものかを同列に連ねる者よりも、彼らの方であることが必ず見いだせるだろう。彼らは、それぞれ千年の寿命を欲する。しかし長生きをしたからといって、［きたるべき］懲罰がぬぐい去られることはない。アッラーは、彼らが行っていることをすべて見ている。

97 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「ジブリールを敵とみなす者は誰か。本当に彼こそはアッラーの思し召しにより、以前のものの確認として、また信仰者への導きと良い報せとして、あなたの心にこれを下した者」。[45]

98 アッラーと、その天使たちと、使徒たちと、またジブリールとミーカーイールとを敵とみなす者は誰か。本当に、アッラーは［真理を］拒む者の敵である。

99 ［ムハンマドよ、］またわれらはあなたに、すでに明白なしるしを［啓典として］下した。背く者の他は、誰もこれ［の真理］を拒まない。

100 彼らのうちある者たちは、契約を結ぶたびにそれを放り捨てるではないか。いいや、彼らの多くは［もとより］信じていない。

101 彼らと共にあるものの確認として、アッラーの御許から使徒が彼らに到来すると、［すでに］啓典を与えられている者のうち、ある者たちはアッラーの啓典を、まるで［啓典の中にあるものを］知らないかのよ

うに背後に投げ捨てた。[46]
102 そうして彼らは、スライマーンの統治について悪魔たちが言い立てていたことに従った。スライマーン
が［真理を］拒んでいたのではない。悪魔たちが［真理を］拒んでいた。彼らは人々に魔術と、バービル
のハールートとマールートの両天使に下されたものとを教えた。しかし彼らは両名とも、「私たちは誘惑
に過ぎない。［導きから逸れて魔術を試し、真理を］拒む者となってはならない」と告げることなくしては、
誰にも教えなかった。ところが彼ら［人間］は彼ら両名から、夫と妻の間を分かつすべを教わった。しか
し彼ら［悪魔］には、アッラーの思し召しがなければ誰を害することもできない。そして彼ら［悪魔］は、
自分の害にはなっても益にならないものを教わった。それを買い込めば、来世の［幸福の］分け前もない
だろうことを知っていたはずなのに、彼らが自らと引き換えに買い込んだものの何と悪いことか。もし
彼らが、知ってさえいたなら。[47]
103 もし彼らが信じ、畏れて［その身を守って］いたなら、アッラーの御許の報奨は必ずやより良いものだっ
ただろう。もし彼らが、知ってさえいたなら。
104 信じる者たちよ。あなたがたは、［預言者に対し］「私たちの面倒を見てください」と言ってはならない。
「私たちを見守っていてください」と言いなさい。そして［預言者に対し］耳を傾けなさい。［真理を］拒
む者には、痛烈な懲罰があるだろう。[48]
105 啓典の民のうち、［真理を］拒む者や多神を奉ずる者たちは、あなたがたの主からあなたがたに、何か良
いものが下されるのを好まない。しかしアッラーは御心のまま、誰であれその慈悲にかなう者を選ぶ。アッ
ラーは大いなる御恵みの所有者。
106 より良いものか、あるいは同様のものをもたらさない限り、われらがしるしを破棄したり、忘れさせた





りすることはない。あなたがたは知らないのか、本当に、アッラーはあらゆるものごとにおいて全能で
ある。[49]
107 あなたは知らないのか、本当に、諸天と大地の王権はアッラーに属する。アッラーをさし置いて、あな
たがたには守る者も助ける者もない。
108 それともあなたがたは、かつてムーサーが問い詰められたように、あなたがたの使徒をも問い詰めよう
というのか。信仰を［真理に対する］拒否と取り替える者は、本当に平らかな道から迷っている。[50]
109 真理が明らかになった後だというのに、啓典の民の多くは、自分たちの妬み心から、信じるようになっ
た後のあなたがたが、［真理を］拒む者に戻るのを望んでいる。しかし［彼らを］容赦し、見のがしてや
りなさい、アッラーがその命令をもたらすまでは。本当に、アッラーはあらゆるものごとにおいて全能
である。
110 礼拝のつとめを守り、喜捨をしなさい。あなたがたが自分自身のために送り出した善は、何であれアッラー
の御許に見出されるだろう。本当にアッラーは、あなたがたのすることを見ている。
111 彼らは言う。「ユダヤ教徒か、あるいはキリスト者でなければ、誰も楽園には入れないだろう」。それは
彼らの願望に過ぎない。言いなさい。「あなたがた［が述べていること］の証拠を出しなさい、もしあな
たがたが、真実を語っているのなら」。[51]
112 いいや、そうではない。［むしろその逆に、］アッラーに自分自身をあずけている行いの善良な者には、
主の御許に報酬があるだろう。彼らには恐れもなく、嘆きもないだろう。[52]
113 ユダヤ教徒は言う。「キリスト者には、何［の根拠］もない」。キリスト者たちは言う。「ユダヤ教徒には、
何［の根拠］もない」。彼らは［どちらも］啓典を復唱しているというのに。このように、知らずにいる

者たちも彼らと同じようなことを言う。アッラーは復活の日、彼らの間で相争っていたことについて判断を下すだろう。[53]

114 アッラーのマスジドで、その御名が想い起こされるのを妨げ、つとめてそれをとり壊そうとする者よりも不正な者があるだろうか。［そもそも］これらの者は、恐れることなくしてそこに入るべきではないのに。彼らには、現世においては恥辱があり、来世においては大いなる懲罰があるだろう。[54]

115 東も西もアッラーのもの。あなたがたがどちらを向こうと、そこにアッラーの御顔がある。本当にアッラーは果てしなく広大であり、すべてを知る。[55]

116 彼らは言う。「アッラーは御子をもうけたもう」。かの御方に讃美あれ。いいや、諸天と大地にあるものはことごとくこの御方に属する。すべてがこの御方に従順である、[56]

117 諸天と大地の創始者に。何ごとかを決めるとき、それにただ「在れ」と告げるとそれは在る。[57]

118 知らずにいる者たちは言う。「どうしてアッラーが私たちに語りかけることも、あるいはしるしが届けられることもないのか」。このように、彼ら以前の者たちも彼らの言っているのと同じようなことを言った。彼らの心はよく似ている。確信する民には、われらはすでに明白なしるしを示してある。

119 ［ムハンマドよ、］本当にわれらは真理をもってあなたを遣わした、良い報せを伝える者、警告する者として。それゆえ業火の仲間について、あなたが問われることはないだろう。

120 ユダヤ教徒もキリスト者も、あなたが彼らの宗旨に従わない限り、あなたに満足しないだろう。言いなさい。「アッラーの導きこそ、導きというもの」。あなたに知識がもたらされた後になって、もしあなたが彼らの欲求に従うなら、あなたには、アッラーに対してあなたを守る者も助ける者もない。

121 われらに啓典を与えられ、またそれを復唱というにふさわしく復唱する者たち。これらの者は信じる者。





しかしそれ［の真理］を拒む者、これらの者は敗者である。[58]

122 イスラエルの民よ。われがあなたがたに恵んだ、われの恩寵を想い起こしなさい。またわれが、万人の誰にもまさってあなたがたに恵んだことも。

123 どの者も他の者の代わりに何ひとつしてやれず、どのような償いも受け取られず、どのようなとりなしも受け入れられず、どのような助けもないその日を畏れなさい。[59]

124 またイブラーヒームがある御言葉をもって主に試みられ、彼がそれをまっとうしたときのこと［を思いなさい］。かの御方は告げた。「われはあなたを人々の導師とする」。彼［イブラーヒーム］が「私の子孫もですか」と言うと、かの御方は告げた。「われの約束に、不正をなす者は含まれない」。

125 またわれらが、かの家［カアバ］を人々のための中心とし、安全な場としたときのこと［を思いなさい］。「イブラーヒームが立ったところを、礼拝の場としなさい」。それからわれらは、イブラーヒームとイスマーイールに命じた。「［カアバの周囲を］巡り回る者、参籠する者、こうべを垂れる者、ひれ伏す者のために、われの家を清浄にしなさい」。

126 また彼［イブラーヒーム］が［祈って］言ったときのこと［を思いなさい］。「主よ。この町を、つつがなくやすらかにしてください。その住人に糧となる果実をもたらしてください。誰であれ、アッラーと終末の日を信じる者のために」。かの御方は告げた。「［真理を］拒む者には、つかの間の楽しみがあるだろう。そののち、われは火炎の懲罰へと追い立てよう。行き着く先の、何と悪いことか」。[60]

127 またイブラーヒームとイスマーイールが、その家の土台を築き上げたときのこと［を思いなさい］。［二人は祈って言った。］「主よ。私たちから、［この行いを］受け入れてください。本当にすべてを聞く御方、すべてを知る御方とはあなたのこと。[61]

128 主よ。私たちを、あなたに服従する者「ムスリム」にしてください。また私たちの子孫を、あなたに服従する者の共同体にしてください。私たちのなすべき儀式を見せてください。私たちの悔い改めを受け入れてください。本当に、幾度でも悔い改めを受け入れる御方、慈悲深い御方とはあなたのこと。

129 主よ。彼らの中からその使徒を立ち上がらせ、あなたの御しるしを読み聞かせ、啓典と知恵を授け、彼らを清らかにしてください。本当に威力ある御方、もっとも賢明な御方とはあなたのこと」。[62]

130 自分自身をごまかす者は別として、誰がイブラーヒームの宗旨を放棄するだろうか。われらは確かに現世において彼を選んだ。そして本当に来世においても、彼は正しい者のひとりとなるだろう。

131 主が彼にこう告げたときのこと「を思いなさい」。「服従しなさい」。彼は言った。「私は、諸世界の主に服従します」。

132 イブラーヒームは息子たちに「自分と同じく主に服従するよう」指図した、ヤアクーブもまた「同じように指図した」。「私の息子たちよ。本当にアッラーは、あなたがたのためにこの宗教を選んだ。それゆえあなたがたは、服従する者「ムスリム」になることなくして死んではならない」。

133 それともあなたがたは、ヤアクーブが死を迎えるところに立ち会ったのか。彼は息子たちに言った。「私が去った後に、あなたがたは何に仕えるのか」。彼らは言った。「私たちはあなたの神であり、あなたの先祖であるイブラーヒームの、イスマーイールの、イスハークの神である唯一の神に仕えます。私たちは、かの御方に服従する者となります」。

134 これは過ぎ去った共同体のこと。彼らには彼らの得たものが、あなたがたにはあなたがたの得るものがある。そして彼らが行ってきたことについて、あなたがたが問われることはない。

135 彼らは言う。「ユダヤ教徒か、あるいはキリスト者になりなさい。そうすれば、あなたがたも導かれるよ





うになるだろう」。言いなさい。「いいや、むしろ純正な人イブラーヒームの宗旨を「私たちは選ぶ」」。彼は、多神を奉ずる者ではなかった」。[63]

136 言いなさい。「私たちはアッラーと、私たちに下されたものを信じます。またイブラーヒームと、イスマーイールと、イスハークと、ヤアクーブと、諸々の支族とに下されたものを。またムーサーと、イーサーとに与えられたものを。また預言者たちに、主から与えられたものを。私たちは、彼らの間で誰のことも分けへだてはしません。私たちは、かの御方に服従する者となります」。[64]

137 それでもし彼らが、あなたがたが信じるのと同じように信じるなら、確かに彼らは導かれている。もし彼らが背を向けるなら、彼らはただ不和の中にいるだけ。彼らについては、あなたにはアッラーがいれば十分である。すべてを聞く御方、すべてを知る御方。

138 アッラーの彩り。彩ることにおいて、アッラーよりもすぐれた者があるだろうか。「言いなさい。」「私たちは、御方に仕える者」。[65]

139 言いなさい。「あなたがたはアッラーについて、私たちと口論するのか。かの御方は私たちの主であり、あなたがたの主でもあるというのに。私たちには私たちの行い「に対する責任」があり、あなたがたにはあなたがたの行い「に対する責任」がある。私たちは、かの御方に真摯な者」。

140 それともあなたがたはイブラーヒームと、イスマーイールと、イスハークと、ヤアクーブと諸々の支族とが、ユダヤ教徒か、あるいはキリスト者だったと言うのか。言いなさい。「あなたがたの方が、アッラーよりもよく知っているというのか」。アッラーからの証言をもっていながら、それを伏せておくよりも不正な者があるだろうか。アッラーは、あなたがたの行いに無頓着ではない。[66]

141 これは過ぎ去った共同体のこと。彼らには彼らの得たものが、あなたがたにはあなたがたの得るものが

ある。そして彼らが行なってきたことについて、あなたがたが問われることはない。[67]

142 人々のうち、愚かな者は言うだろう。「何が彼らに、かつてのキブラ［祈りの方角］から向きを変えさせたのか」。言いなさい。「東も西も、アッラーのもの。誰であれ、御心にかなう者をまっすぐな道へ導く」。[68]

143 このように、われらはあなたがたを中庸の共同体とした。あなたがたは人々の証言者となり、また使徒があなたがたの証言者となるだろう。またわれらが、あなたが向かっていたかつてのキブラをもうけたのは、使徒に従う者と、踵を返す者とを見分けるために他ならない。それはアッラーに導かれている者たちでなければ、本当に［乗り越えるのが厳しい］難事であった。しかしアッラーは、あなたがたの信仰を無為にはしない。本当にアッラーは、人々に憐れみ深く慈悲深い。[69]

144 ［ムハンマドよ、］われらはあなたが［主の導きを欲して］その顔を上げ、天を仰ぐのを確かに見た。われらは、必ずや満足のいくキブラにあなたを向かわせよう。あなたは、禁制のマスジドの方へその顔を向けなさい。そしてどこにいようとも、あなたがたの顔をそちらの方へ向けなさい。啓典を与えられている者は、それが主からの真理であることを必ずや知っている。そしてアッラーは、彼らの行いに無頓着ではない。[70]

145 たとえあなたが、啓典を与えられている者たちにすべての御しるしをもって来たとしても、彼らはあなたのキブラに従わないだろう。あなたも、彼らのキブラに従わない。彼らは、互いに相手のキブラにも従わない。あなたに知識がもたらされた後になって、もしあなたが彼らの欲求に従うなら、本当にあなたは、そのとき不正をなす者のひとりとなるだろう。[71]

146 われらが啓典を与えた者は、まるで自分の子を見分けるようにそれ［啓典や預言者］を見分ける。しかし彼らのうちある者は、そうと知りながら真理を伏せる。[72]





147 真理はあなたの主からのもの。それゆえ疑う者になってはならない。

148 すべての人に、それぞれの向かうべきところがある。それゆえ、何であれ良いことを競い合いなさい。たとえどこにいようと、アッラーはあなたがたを一斉に連れてゆくだろう。本当にアッラーは、あらゆるものごとにおいて全能である。

149 たとえどこから出てこようと、禁制のマスジドの方へその顔を向けなさい。本当に、それがあなたの主からの真理。アッラーは、あなたがたの行いに無頓着ではない。

150 たとえどこから出てこようと、禁制のマスジドの方へその顔を向けなさい。そしてたとえどこにいようと、そちらの方へその顔を向けなさい。そうすれば人々があなたがたに対し口論することもなくなるだろう、彼らのうち、不正をなす者を除いては。しかし彼らを恐れることはない。われを恐れなさい。そうすれば、われの恩寵があなたがたの上にまっとうされるだろう。それであなたがたも、導かれるようになるだろう。[73]

151 われらはあなたがたの中からひとりの使徒を遣わした。あなたがたにわれらのしるしを読み聞かせ、あなたがたを清らかにし、あなたがたに啓典と知恵を教え、またあなたがたの知らなかったことを教える者を。

152 それゆえ、われを憶えておきなさい。そうすれば、われもあなたがたを憶えておくだろう。われに感謝しなさい。恩を忘れてはならない。

153 信じる者たちよ。あなたがたは、忍耐と礼拝をもって助けを求めなさい。本当にアッラーは、よく耐える者と共にある。[74]

154 アッラーの道において討ち取られた者を、「死んだ」と言ってはならない。いいや、むしろ彼らは生きている。ただあなたがたが、そうと気づかないだけ。

155 われらは必ずやいくらかの恐れと飢え、また財産、生命、果実［の収穫］の喪失をもってあなたがたを試すだろう。しかしよく耐える者には、良い報せを伝えなさい、

156 災難が降りかかるとき、「私たちはアッラーのもの。私たちはかの御方に帰りゆく」と言う者たちに。

157 これらの者には、主から諸々の幸いと憐れみがあるだろう。これらの者は、導かれた者。75

158 本当にサファーとマルワは、アッラーの儀礼のうちにある。だから誰であれ［カアバの］かの家を巡礼あるいは参詣する者が、それらの間を巡り回っても誤りではない。自らすすんで良いことをする者が誰であれ、本当にアッラーは感謝もし、また知ってもいる御方。76

159 人々のために、われらが啓典の中で明らかにした後になって、われらの下した明白な諸々の証と導きを隠す者たち。これらの者はアッラーに忌まれ、また忌む者に忌まれるだろう、

160 悔い改めて自らをただし、［伏せていた真実を］明らかにする者を除いては。これらの者については、われらはその悔い改めを受け入れるだろう。われは幾度でも悔い改めを受け入れる者、慈悲深い者。

161 しかし［真理を］拒み、［真理を］拒む者として死ぬ者たち。これらの者はアッラーに、天使たちに、人々にことごとく忌まれ、

162 その中に永遠に取り残されるだろう。懲罰は軽くもされず、また猶予もされないだろう。

163 あなたがたの神は唯一の神。その他にいかなる神もない。慈愛あまねく御方、慈悲深い御方。77

164 本当に諸天と大地の創造に、夜と昼の交替に、人間の益となるものをもって海を渡る船に、アッラーが空から降らせ、死んだ後の大地に生をもたらし、その一面にすべての生きものを散らばせる雨に、また操られる風と、天と地の間を往来する雲との中には、考える民への御しるしがある。78

165 それでも人々の中には、アッラーをさし置いて諸々の同位のものを設ける者もある。彼らは、アッラー





を愛するかのようにそれらを愛する。しかし信じる者は、より強くアッラーを愛する。もし不正をなす者たちに、［審判の日の］懲罰を見ることができたなら。力はすべてアッラーにあり、またアッラーが懲罰において苛烈であるのを知ることができたなら。79

166 従わせてきた者たちが、従ってきた者たちとの縁を絶つときのこと。彼らは懲罰を目の当たりにするだろう。そして彼らの関わりは断ち切られるだろう。

167 従ってきた者たちは言うだろう。「もし私たちが［現世に］戻れるものなら、彼らが私たちとの縁を絶ったように、私たちが彼らとの縁を絶ってやれるのに」。このようにアッラーは、彼らにその行いを後悔として見せるだろう。彼らは、業火の中から出られないだろう。

168 人々よ。あなたがたは地上にある、合法で良いものを食べなさい。そして悪魔の足取りをたどってはならない。本当に彼は、あなたがたにとり公然の敵。

169 彼はあなたがたにただ悪と不品行のみを命じ、またアッラーについて、あなたがたの知らないことを言わせようとする。80

170 「アッラーがあなたがたに下したものに従いなさい」と言われると、彼らは「いいや、むしろ私たちは、先祖がやってきたとおりのことに従います」と言う。彼らの先祖は何ひとつ考えることをせず、また導かれてもいなかったというのに。

171 ［真理を］拒む者たち［に呼びかけること］とは、例えるなら何と呼びかけられても［羊飼いの］呼び声や叫び声しか聞きわけられない［羊の群れに呼びかける］ようなもの。［彼らは］聞かず、もの言わず、見ることもしない。それで彼らは、考えることもしない。81

172 信じる者たちよ。われらがあなたがたの糧とした、諸々の良いものを食べなさい。そしてアッラーに感

173 謝しなさい、もしあなたがたが、ただかの御方のみに仕えているなら。かの御方があなたがたに禁止したのは、ただ死骸、血、豚の肉、そしてアッラー以外に捧げられたものだけ。それゆえ、欲したのでも度を越したのでもなく、やむを得ずのことなら罪はない。本当にアッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。[82]

174 アッラーが啓典として下したものを隠し、またわずかな代価と引き換えにする者。これらの者がその下腹に飲むのはただ火炎だけ。アッラーは復活の日、彼らに御言葉をかけることも、清らかにすることもしないだろう。彼らには、痛烈な懲罰があるだろう。[83]

175 これらの者は導きと引き換えに迷いを、赦しと引き換えに懲罰を買い込んだ者。どれほど業火に耐えられることか。

176 これはアッラーが真理によって啓典を下したため。啓典について相争う者は、深刻な不和の中にある。[84]

177 正しくあるということは、あなたがたの顔を東や西に向けることではない。正しくあるということは、アッラー、終末の日、天使たち、啓典、そして預言者たちを信じること。近しい親族、孤児たち、貧しい者、旅路にある者、助けを乞う者、そして奴隷たちの解放のために自分の財を、それが大切なものであろうと費やすこと。礼拝のつとめを守り、喜捨をし、契約をしたときは契約をまっとうし、苦難や困難、また逆境の間もよく耐えること。これらの者は真実な者、これらの者は畏れる者。[85]

178 信じる者たちよ。あなたがたのために、殺害における報復の法が定められた。自由人には自由人を、奴隷には奴隷を、女には女を。しかし［被害者の］きょうだいから何らかの容赦があったなら、［加害者は］誠意をもってこれに従い、最善の代償を支払いなさい。それがあなたがたの主からの軽減と憐れみ。それで、この後になって法に外れる者には、誰であれ痛烈な懲罰があるだろう。[86]





179 この報復の法［の定め］には、あなたがたの生命［の救済］がある。分別をもつ者たちよ、それであなたがたも、畏れる者となるだろう。[87]

180 あなたがたのうち誰かが死を迎えるとき、もし財産を遺すなら、畏れる者の義務として、両親と親族に道理にかなう遺言［と遺贈（いぞう）］をすることがあなたがたのために定められた。

181 それを聞いた後になって［故人の遺志を］変える者があるなら、その罪はただ変えた者にのみある。本当にアッラーはすべてを聞き、すべてを知る。

182 しかし遺言する者に不公正あるいは罪があるのを恐れて、彼ら［相続者たち］の間を和解させるなら、その者に罪はない。本当にアッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。[88]

183 信じる者たちよ。あなたがた以前の者たちにも定められたように、あなたがたのために斎戒が定められた。それであなたがたも、畏れる者となるだろう。[89]

184 ［斎戒の］日数は定められている。しかしあなたがたのうち病の者あるいは旅の者は、［その間は斎戒せず、］他の日に定められた［のと同じ］日数を［斎戒しなさい］。［困難のために斎戒が］できなかった者たちは、代償として一名の貧しい者を養いなさい。誰であれ自らすすんで良いことをするなら、それはその者のために良いこと。しかしあなたがたのためには、斎戒がもっとも良いこと。もしあなたがたが、知ってさえいたなら。

185 ラマダーン月は、人々の導きとして、また導きの明白な証と規範としてクルアーンが下された月。それゆえあなたがたのうち、その月に立ち会った者は斎戒しなさい。しかし病の者あるいは旅の者は、他の日に定められた［のと同じ］日数を［斎戒しなさい］。アッラーがあなたがたに求めるのは安楽であり、あなたがたが定められた日数をまっとうし、あなたがたを導くアッラーをほめ称えることであり、あな

たがたに苦境は求めない。あなたがたは、感謝するようになるだろう。[90]
186 われのしもべたちが、われについてあなた［ムハンマド］に尋ねるとき、本当にわれは近くにいる。呼び
求める者がわれを呼び求めるとき、われはその呼び求めを聞き届ける。それゆえ彼らをわれに応じさせ、
われを信じさせなさい。それで彼らも、正しく導かれるだろう。[91]
187 斎戒の夜に妻と交わることは許されている。彼女たちはあなたがたの衣、またあなたがたも彼女たちの衣。
アッラーは、あなたがたが自分自身に不正直であったことを知り、あなたがたの悔い改めを受け入れ、
あなたがたを容赦した。それゆえこれからは彼女たちと交わり、アッラーがあなたがたのために定める
ところを求めなさい。夜明けの白い筋が、［夜更けの］黒い筋と見分けられるようになるまでに食べ、飲
みなさい。そののち夜まで斎戒をまっとうしなさい。マスジドに参籠している間は、彼女たちと交わっ
てはならない。これはアッラーの禁令であり、それゆえ近づいてはならない。このようにアッラーは、人々
のためにその御しるしを明らかにする。それで彼らも、畏れる者となるだろう。[92]
188 あなたがたの間で、互いの財をたわむれに貪りあってはならない。また、それを［見逃してもらうため
の賄賂として］権威ある者に贈り、他の者の財の一部を、そうと知りながら罪深く貪ろうとしてはなら
ない。[93]
189 彼らはあなた［ムハンマド］に、新月［と月の満ち欠け］について尋ねるだろう。言いなさい。「それは人々
と巡礼のための、時のしるべ」。正しくあるということは、自分の家に裏口から帰ってくることではない。
正しくあるということは、畏れること。家には、その［表の］扉から帰ってきなさい。アッラーを畏れな
さい。そうすれば、あなたがたは栄えるだろう。[94]
190 あなたがたに対して戦いをしかける者たちとは、アッラーの道のために戦いなさい。しかし度が過ぎて





はならない。アッラーは、度が過ぎる者を愛さない。[95]
191 どこであろうと、見つけしだいその場で彼らを討ち取りなさい。どこであろうと、あなたがたが追放さ
れたところから彼らを追放しなさい。迫害は殺害よりもはるかに悪い。しかし、彼らがあなたがたに対
して戦いをしかけない限り、禁制のマスジドの許で戦ってはならない。もし彼らがあなたがたに対して
戦いをしかけるなら、彼らを討ち取りなさい。［真理を］拒む者の報いとはこのようなもの。
192 しかし、もし彼らが［戦いを］やめるなら、本当にアッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。
193 迫害がなくなり、宗教がアッラーのものと［認められるように］なるまで、彼らと戦いなさい。しかし、
もし彼らが［戦いを］やめるなら、不正をなす者以外に対しては、敵意はなくさねばならない。
194 禁制の月には禁制の月、禁制のものには禁制のもの、それが［法の定める］報復。誰であれ、あなたがた
に法外のことをなす者には、それと同じように法外のことをやり返しなさい。そしてアッラーを畏れな
さい。アッラーは畏れる者と共にあると知りなさい。[96]
195 アッラーの道のために費やしなさい。ただし自らの手で自分自身を滅ぼすことのないように。善良な行
いをしなさい。アッラーは行いの善良な者を愛する。[97]
196 アッラーのために巡礼と参詣をまっとうしなさい。もしあなたがたが阻まれているなら、分相応の捧げ
ものをしなさい。そして捧げものがあるべきところに届くまで、あなたがたの頭部を剃ってはならない。
しかしあなたがたのうち病の者、頭部に傷などがある［ために剃髪せざるをえない］者は、その代償とし
て斎戒あるいは慈善をするか、あるいは犠牲を捧げるかしなさい。あなたがたが安全なときに参詣をし、
巡礼までの間を楽しもうというなら、分相応の捧げものをしなさい。しかし［捧げものを］見出せないな
ら、巡礼の間に三日、帰ったときに七日の斎戒をしなさい。それは合わせて十日となる。これは禁制の

マスジドのあたりに家族のない者のため。アッラーを畏れなさい。アッラーは懲罰に厳重であることを知りなさい。

197 巡礼の月々はそうと知られているとおり。それでその間、自らに巡礼を義務づける者は、巡礼の間は性的な交わり、不従順、言い争いがあってはならない。何であれ、あなたがたが行う良いことをアッラーは知っている。それゆえ［来世へと至る］旅の準備をしなさい。しかしもっとも良い準備とは畏れること。あなたがた分別をもつ者は、われを畏れなさい。[98]

198 ［巡礼の間に商取引を行い、］あなたがたの主の御恵みを求めても誤りではない。しかしアラファートを立ち去るときは、禁制の碑（いしぶみ）の許でアッラーを想い起こしなさい。かの御方があなたがたを導いたように、あなたがたもかの御方を想い起こしなさい。本当に以前のあなたがたは、迷い去った者だった。[99]

199 それから人々が立ち去るところから立ち去り、アッラーの赦しを願いなさい。本当にアッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。

200 そしてあなたがたが儀式を果たしたとき、［そののちも変わることなく］アッラーを想い起こしなさい。あなたがたが自分の祖先を想い起こすように、あるいはそれ以上に深く想い起こしなさい。人々の中には「主よ。現世において私たちに与えたまえ」と言う者がいる。そうした者に、来世における分け前はないだろう。[100]

201 また彼ら［人間］の中には、「主よ。現世においても善きものを、来世においても善きものを私たちに与えたまえ。業火の懲罰から私たちを守りたまえ」と言う者もいる。

202 これらの者には、彼らの得てきたことに応じた取り分があるだろう。本当にアッラーは、たちまちにして清算する。





203 数日の間はアッラーを想い起こしなさい。しかし畏れる者のうち、誰であれ急いで二日の間にしても、その者に罪はない。あるいは遅らせても、その者に罪はない。アッラーを畏れなさい。あなたがたは、かの御方に召し集められるものと知りなさい。[101]

204 人々の中には、現世の生についてあなたを感心させることを語り、心の内にあるものの証言者としてアッラー［の名］を呼ぶ者がいる。しかし、これこそもっとも激しく敵対する者。[102]

205 そうした者は背を向けると、地上に退廃を広めてその作物や子孫を滅ぼす。アッラーは、退廃が広まるのを愛さない。

206 「アッラーを畏れなさい」と言われると、高慢にふるまい罪にはしる。そうした者には地獄がふさわしい。何と悪い寝床だろうか。

207 しかし人々の中には、アッラーの喜びを求めて自分自身を売り払う者もいる。そしてアッラーは、そうしたしもべたちに親切である。[103]

208 信じる者たちよ。あなたがたは一途に平安に入りなさい。悪魔の足取りをたどってはならない。本当に彼は、あなたがたにとり公然の敵。[104]

209 明白な証がもたらされた後になって、あなたがたが逸脱するようなら、本当にアッラーは威力あり、もっとも賢明であることを知りなさい。

210 彼らは、アッラーが雲の陰の中を天使たちと到来し、事に決着がつけられるのを待っているのか。万事はアッラーに帰されるのに。

211 イスラエルの民に尋ねなさい、われらが、どれほど多くの明白な証を彼らに与えたかを。誰であれアッラーの恩寵を、それがもたらされた後になって変える者があれば、本当にアッラーは懲罰に厳しい。

212 ［真理を］拒む者には、現世の生はすばらしく見える。それで彼らは信じる者を嘲笑する。しかし畏れる者は、復活の日、彼らよりも上にある。アッラーは、御心にかなう者に計り知れない糧をもたらす。[105]

213 人間は、かつてはひとつの共同体だった。アッラーは良い報せを運ぶ者として、また警告者として預言者たちを立ち上がらせ、また彼らと共に、人々の間で相争っていることについて判断する、真理による啓典を下した。しかしそれ［啓典］を与えられていながら、明白な証が到来した後になって相争おうというのは、ただ嫉妬する者のみ。アッラーはその思し召しにより、信じる者たちを、彼らの間で相争っていた真理へと導く。本当にアッラーは、御心にかなう者をまっすぐな道へ導く。[106]

214 それともあなたがたは、あなたがた以前に過ぎ去った者たちにあったのと同じようなもの［試練］が来ないうちに、楽園に入れると思っているのか。彼らも苦境と困難に襲われた。彼らも動揺した。使徒や、共にいた信じる者たちが「神の助けはまだか」と口ばしるほどだった。［問うまでもなく、］アッラーの助けは近い。[107]

215 彼らはあなた［ムハンマド］に、何に費やすべきかについて尋ねるだろう。言いなさい。「良いことに費やすとは、あなたがたの両親、親族、孤児、貧しい者、そして旅路にある者のため［に費やすこと］。あなたがたが行うどのような良いことも、アッラーはよく知っている」。

216 戦うことがあなたがたに定められた、あなたがたがそれを嫌っていようとも。おそらくあなたがたは、あなたがたにとり良いことを嫌うこともあれば、おそらくあなたがたにとり悪いことを愛することもあるだろう。あなたがたが知らなくとも、アッラーは知っている。[108]

217 彼らはあなた［ムハンマド］に、禁制の月に戦うことについて尋ねるだろう。言いなさい。「その月に戦うのは重大なこと。しかしアッラーの道から人々を遮り、かの御方［の心理］を拒み、禁制のマスジドからその住人を追放することの方が、アッラーの御許ではさらに重大なこと。そして迫害は、殺害よりもはるかに重大なこと」。彼らは、できることならあなたがたが宗教を捨て去るまで、あなたがたに戦いをしかけるのをやめないだろう。しかしあなたがたのうち、宗教を捨て去り、［真理を］拒む者として死ぬ者があれば、これらの者はその行いも、現世においても来世においても無に帰される。これらの者は火獄の仲間。彼らは、永遠にその中に住まうだろう。[109]

218 本当に信じる者たち、［故郷を離れて］移り住む者たち、アッラーの道のために励む者たち。これらの者には、アッラーの慈愛が望めよう。アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。

219 彼らはあなた［ムハンマド］に、酒と賭博（とばく）について尋ねるだろう。言いなさい。「それらのいずれにも重大な罪と、人々の益となるものとがある。しかしいずれも罪の方が、益よりもはるかに重大である」。また彼らはあなた［ムハンマド］に、何を［慈善に］費やすべきか尋ねるだろう。言いなさい。「［必要な分を除き］余分となったものを」。このようにアッラーは、あなたがたのためにその御しるしを明らかにする。あなたがたも省（かえり）みるようになるだろう、[110]

220 現世について、また来世についても。彼らはあなた［ムハンマド］に、孤児について尋ねるだろう。言いなさい。「彼らのためになることをするのがもっとも良い。もし親身になって彼らと関わるなら、彼らはあなたがたのきょうだいである。アッラーは誰が悪くする者か、誰が良くする者かを知っている。もしアッラーがそうと望めば、あなたがたを本当の困難に陥らせることもできていた。アッラーは威力あり、賢明である。[111]

221 多神を奉ずる女とは、彼女が信じる者になるまで結婚してはならない。たとえあなたがたにとり好ましかろうと、信仰ある奴隷の方が、多神を奉ずる自由人よりも良い。また多神を奉ずる男とも、彼が信じ

る者になるまで［あなたがたの身内の者を］結婚させてはならない。たとえあなたがたにとり好ましかろうと、信仰ある奴隷の方が、多神を奉ずる自由人よりも良い。これらの者はあなたがたを業火に招く。アッラーはあなたがたを楽園に、またその思し召しにより赦しに招く。そして人々のために、その御しるしを明らかにする。あなたがたも、憶えておくようになるだろう。[112]

222 彼らはあなた［ムハンマド］に、月経について尋ねるだろう。言いなさい。「それは痛むもの。それゆえ女が月経の間は身を引いていなさい。清まるまでは彼女たちに近づいてはならない。そして清まったときに、アッラーがあなたがたに命じるところに従って彼女たちを訪れなさい。本当にアッラーは立ち返って悔い改める者を愛し、また自らを清浄に保つ者を愛する。[113]

223 あなたがたの妻は、あなたがたにとり田畑のよう。それゆえ、望むままにあなたがたの田畑を訪れなさい。しかし自分自身のために、前もってすべきことをしなさい。アッラーを畏れなさい。やがてかの御方に会うことになるのを知っておきなさい。そして信仰者たちに、良い報（しら）せを伝えなさい。[114]

224 徳を積むこと、畏れること、人々の間に和解をもたらすことについて、アッラー［の名］を自分の誓いの口実にしてはならない。アッラーはすべてを聞き、すべてを知る。[115]

225 アッラーは、あなたがたのうかつな誓いについて責めることはしない。しかしあなたがたが心に意図していたことについては、その責めを負わせるだろう。アッラーはもっともよく赦し、もっとも寛容な御方。

226 妻との絶縁を誓う者は、四か月を待たねばならない。しかし、もし元のとおりに戻るなら、本当にアッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。

227 しかし、もし離婚を決意するなら、本当にアッラーはすべてを聞き、すべてを知る。[116]

228 離婚した女は、三度の月経を待たねばならない。アッラーと終末の日を信じるなら、アッラーがその子





宮に創造したものを隠すのは、彼女にとり合法ではない。もし和解を欲するなら、この間に彼女を元のとおりに戻す方が、夫としてはよりふさわしいこと。［課された責任の］程度においては男の方が彼女たちより上であろうと、公平にみて彼女たちには男と同様の権利がある。アッラーは威力あり、もっとも賢明である。[117]

229 離婚［の宣言］は二度まで。以降は相応に遇してとどめおくか、あるいは良心をもって自由の身にさせなさい。両名が、アッラーの定めた限度を守れないことを案じているのでない限り、何であれ彼女たちに与えたものを取り返すのは、あなたがたにとり合法ではない。しかし両名が、アッラーの定めた限度を守れないのを恐れるなら、彼女が自分で［解放の］代償を支払っても誤りではない。これがアッラーの定めごと。それゆえ、これを越えてはならない。誰であれアッラーの定めた限度を越える者、これらの者は不正をなす者。[118]

230 そして、もし［三度めの宣言をして］離婚したなら、彼女が彼以外の配偶者と結婚するまでは、彼にとり彼女［との再婚］は合法ではない。しかし、もし彼女が［再び］離婚［あるいは死別］して、両名がアッラーの定めた限度を守れると考えるなら、互いに元のとおりに戻っても誤りではない。これがアッラーの定めごと。かの御方は、知っている民にはそれを明らかにする。

231 あなたがたが妻と離婚し［待つべき］期間に達したときは、相応に遇してとどめおくか、あるいは良心をもって自由の身にさせなさい。彼女たちを苦しめるために押しとどめ、法を外れてはならない。誰であれそのようなことをするのは、自分自身に不正をなす者。アッラーの御しるしを、笑いごととして受け取ってはならない。あなたがたに対するアッラーの恩寵を憶えておきなさい。また、かの御方があなたがたに下した啓典と、あなたがたに教示した知恵についても。アッラーを畏れなさい。本当にアッラーは、

ありとあらゆるものごとを知ると知りなさい。

232
あなたがたが妻と離婚したとき、［待つべき］期間に達した彼女が、互いに誠意をもって同意しているなら、［再び］夫と結婚するのを妨げてはならない。これは、あなたがたのうちアッラーと終末の日を信じる者への教示である。そのようにするのが、あなたがたにとってより高潔で清浄なこと。あなたがたが知らなくとも、アッラーは知っている。[119]

233
授乳の期間をまっとうしたい者なら満二年、母親は自分の子に授乳することができる。そして［子の］父親は、誠意をもって彼女たちの衣食を負う。誰も自分の能力以上に負わされることはない。母親が子のために苦しむことも、また父親が子のために苦しむこともあってはならない。相続者［の義務］についても、これと同じようなもの。また、もし両名が互いの同意と話し合いとによって離乳させたいとしても、両名に誤りはない。また、もしあなたがたがその子に乳母を雇いたいとしても、あなたがたが与えるべきものを相応に支払うなら誤りではない。アッラーを畏れなさい。本当にアッラーは、あなたがたがしていることを見ていると知りなさい。[120]

234
もしあなたがたのうち、配偶者を残して召される者があるなら、彼女は［再婚する前に］四か月と十日を待たなくてはならない。そして［待つべき］期間に達したときは、彼女たちが自ら相応の身の振り方をしても誤りではない。アッラーは、あなたがたの行いを十分に知り尽くしている。[121]

235
［待つべき期間の間に、］彼女たちにそれとなく求婚しても、あるいは内心に伏せていても誤りではない。アッラーは、あなたがたがそのことを思案するのを知っている。しかし、あなたがたが相応の言葉をもって言うのでなければ、彼女たちとひそかに会う約束をしてはならない。定められた期間の終わりに達するまで、結婚の取り決めを結んではならない。アッラーはあなたがたの内心を知っている。それゆえ用





心しなさい。アッラーはもっともよく赦し、もっとも寛容なことを知りなさい。[122]

236
触れてもおらず、また義務［の贈与］も定めていないうちなら、彼女たちと離婚しても誤りではない。しかし富める者はその分に応じて、貧しい者はその分に応じて、誠意をもって彼女たちを扶養しなさい。それが行いの善良な者のつとめ。[123]

237
もしすでに義務［の贈与］を定めており、しかしあなたがたが触れる以前に彼女たちと離婚するなら、彼女たちが辞退するか、あるいは結婚の取り決めを結ぶ者が辞退しない限り、定めたものの半分を［与えなさい］。辞退するのは、より篤信に近い。互いの間において、御恵みを忘れないようにしなさい。本当にアッラーは、あなたがたがしていることを見ている。

238
定めの礼拝と、その真中の礼拝とをよく守りなさい。アッラーの御前に、従順に立ちなさい。[124]

239
もしあなたがたが［危険を］案じるなら、歩きながら、あるいは騎乗しながら［礼拝しなさい］。そして安全になったときアッラーを想い起こしなさい、あなたがたの知らなかったことを、かの御方が教えたとおりに。[125]

240
もしあなたがたのうち、配偶者を残して召される者があるなら、彼女たちが追い出されることなく一年の間は扶養されるよう遺言［と遺贈（いぞう）］をしなさい。しかし、もし彼女たちの方から出てゆき、自ら相応の身の振り方をしても誤りではない。アッラーは威力あり、もっとも賢明である。

241
離婚した女を、誠意をもって扶養しなさい。それが畏れる者のつとめ。[126]

242
このようにアッラーは、あなたがたのためにその御しるしを明らかにする。あなたがたも、考えるようになるだろう。

243
見なかったのか、死を恐れた者が幾千人も、その住家から出ていったのを。アッラーは彼らに「死にな

さい」と告げ、そののち彼らを生き返らせた。本当にアッラーは、人々への御恵みの所有者。しかし人々の多くは感謝しない。[127]

244 アッラーの道のために戦いなさい。本当にすべてを聞き、すべてを知るのはアッラーであると知りなさい。[128]

245 アッラーに善良な貸付をする者は誰か。かの御方はそれを幾重にも、何倍にもするだろう。[富を]閉ざすのも、開くのもアッラー。そしてあなたがたは、御方に帰されるもの。

246 見なかったのか、ムーサーの後の、イスラエルの民の長老たちを。彼らが自分たちの預言者に「私たちのために王を立てなさい。そうすれば私たちも、アッラーの道のために戦います」と言ったとき、彼は「もし前もって戦うよう命じられたら、おそらくあなたがたは戦いを拒むのではないか」と言った。彼らは答えた。「自分の住家からも、子どもたちからも追い立てられた私たちが、どうしてアッラーの道のために戦わずにいられるだろうか」。しかし彼らに戦いが命じられると、ごくわずかを除いて彼らは背を向けた。アッラーは不正をなす者を知っている。[129]

247 彼らの預言者は、彼らに言った。「アッラーは、すでにタールートをあなたがたの王として立たせた」。彼らは言った。「私たちに対する王権が、どうして彼にあるというのか。彼よりも私たちの方が王権にふさわしいのに。それに、彼には十分な財も与えられていない」。彼は言った。「アッラーはあなたがたの上に彼を選び、知識と体躯（たいく）において彼をゆたかに富ませた。アッラーは、その御心にかなう者に王権を与える。アッラーは果てしなく広大であり、すべてを知る」。[130]

248 彼らの預言者は、彼らにこうも言った。「彼の王権のしるしとして、あなたがたに箱が到来するだろう。その中にはあなたがたの主からの平穏と、ムーサーの一族と、ハールーンの一族との遺品があり、天使たちが運んでくる。本当にその中には、あなたがたへの御しるしがある、もしあなたがたが信仰者なら」。[131]





249 軍勢と旅立つとき、タールートは言った。「本当に、アッラーは川であなたがたを試すだろう。それゆえ、それを飲む者は私の連れではない。それを味わわなかった者こそ私の連れ、手のひらにひとすくいだけする者の他は」。しかし彼らはそれを飲んだ、ごくわずかを除いては。それから彼と、また彼と共に信じる者たちとが渡りきると、彼らは「今日はジャールートとその軍勢に立ち向かうだけの力はありません」と言った。アッラーと会うことになるのを心得ている者は言った。「わずかな手勢がアッラーの思し召しにより、どれほど多勢を破ってきたことか。アッラーは、よく耐える者と共にある」。[132]

250 そしてジャールートとその軍勢の前に向き合うと、彼らは言った。「主よ、私たちに忍耐を注いでください。私たちの足元を確かなものとしてください。[真理を]拒む民に対し、私たち[の勝利]を助けてください」。[133]

251 こうして彼らは、アッラーの思し召しにより彼ら[ジャールートとその軍勢]を敗北させた。ダーウードはジャールートを討ち果たし、アッラーは彼に王権と知恵を与えた。そして御心のまま、諸々（もろもろ）のことを彼に教えた。もしアッラーが人々に、互いに対する自衛をさせていなかったら、地上には退廃が広まっていただろう。しかしアッラーは、万物への御恵みの所有者。

252 これらはアッラーの御しるし。われらは真理により、あなた[ムハンマド]にこれらを読み聞かせる。そして本当に、あなたは使徒のひとり。

253 彼ら使徒たちのうち、われらはある者には他の者よりも恵んだ。彼らのうちある者には、アッラーはじかに語りかけた。またある者には、その位階を高くした。われらはマルヤムの子イーサーに明白な証を与え、聖なる息吹[天使ジブリール]をもって支えた。もしアッラーがそうと望めば、明白な証が到来した後になって、後世の者たちが互いに争うこともなかっただろう。しかし彼らは、お互いの間で相争った。ある者は信じ、ある者は[真理を]拒んだ。もしアッラーがそうと望めば、彼らが互いに争うこともなかっ

ただろう。しかしアッラーは、意図するままにことを行う。

254 信じる者たちよ。あなたがたは、取引も、友情も、とりなしもないその日が来る前に、われらがあなたがたのための糧としたものを［慈善に］費やしなさい。［真理を］拒む者とは、不正をなす者のこと。

255 アッラー、その他にいかなる神もない。永生する御方、自存する御方。まどろみも眠りも、この御方をとらえられない。諸天にあるもの、大地にあるものはことごとくこの御方に属する。思し召しなくして、誰がその御許にとりなせるだろうか。彼らの前にあるものも、後にあるものも知っている。しかしその知のうち、御心にかなうことを除いて、彼らには何ひとつ把握することはできない。この御方の玉座は諸天と大地を網羅し、そのいずれをも守っていささかも疲れることはない。至高の御方、偉大な御方。[134]

256 宗教に無理強いがあってはならない。正誤の違いはすでに明らかとなっている。それゆえターグートを拒みアッラーを信じる者は、もっとも頑丈な決して壊れることのない把手を握った者。アッラーはすべてを聞き、すべてを知る。[135]

257 アッラーは信じる者たちの庇護者であり、暗闇から光へと彼らを連れ出す。［真理を］拒む者たちにはターグートがその庇護者であり、光から暗闇へと彼らを連れ出す。これらの者は火獄の仲間。彼らは、永遠にその中に住まうだろう。[136]

258 見なかったのか、アッラーに王権を与えられたことから［高慢になり］、主についてイブラーヒームと口論した者を。イブラーヒームが「私の主は、生かしも死なせもする御方」と言ったとき、彼は言った。「生かしも死なせもするのはこの私だ」。イブラーヒームは言った。「アッラーは太陽を東から昇らせる。あなたは、西から昇らせてみなさい」。それで［真理を］拒むこの者は困惑に陥った。アッラーは不正をなす民を導かない。





259 ［あなたは見なかったのか、］あるいは屋根も覆された［廃墟となった］町を通り過ぎた者を。その者は言った。「死んでしまったこの町を、アッラーがどうして生き返らせるだろう」。するとアッラーはその者を死なせ、それから百年ののちによみがえらせた。御方は告げた。「どれほどの間、そうやって過ごしていたのか」。その者は言った。「一日か、一刻ほどを」。かの御方は告げた。「いいや。あなたは百年の間、そうやって過ごしていた。あなたの食べもの、飲みものを見なさい。それは古くなっていない。しかし、あなたの［骨となった］ろばを見なさい。われらは、これをもって人々へのしるしとしよう。それで見なさい、われらがどのようにその骨を組み立て、そののち肉をかぶせるかを」。そうして［ものごとが］明らかになると、その者は言った。「本当にアッラーは、あらゆるものごとにおいて全能であると知りました」。[137]

260 イブラーヒームが「わが主よ。あなたがどのように死せるものを生き返らせるのか、私に見せてください」と言ったときのこと［を思いなさい］。かの御方は告げた。「あなたは信じないのか」。彼は言った。「いいえ、そうではありません。ですが私は、心を満たされたいのです」。かの御方は告げた。「では、四羽の鳥をとらえてあなたになつかせなさい。それから、［鳥を屠（ほふ）って］それを別々の山の上にひと切れずつ置きなさい。それから、それを呼びなさい。それら［鳥たち］は急いであなたのところへ［飛んで］来るだろう。本当にアッラーは威力あり、もっとも賢明であると知りなさい」。[138]

261 アッラーの道のために自らの財を費やす者とは、例えるならひと粒で七つの穂をつける［穀物の］種子のようなもの。ひとつの穂の中に、それぞれ百粒が詰まっている。アッラーは、御心にかなう者には［報奨を］何倍にも増やす。アッラーは果てしなく広大であり、すべてを知る。

262 アッラーの道のために自らの財を費やし、後になって［施した相手に］恩を着せたり、傷つけたりしない

者。彼らのために、主の御許にその報酬があるだろう。彼らには恐れもなく、嘆きもないだろう。
263 優しい言葉と寛容は、後になって傷つける慈善よりも良い。アッラーは満ち足りて、もっとも情け深い。[139]
264 信じる者たちよ。アッラーと終末の日を信じず、人々に見せびらかすためだけに自らの財を費やす者のように、［施した相手に］恩を着せたり傷つけたりすることで、あなたがたの慈善を無為にしてはならない。彼らは、例えるなら土をかぶってすべる岩のようなもの。大雨が降れば、むき出しになってしまう。彼らが自分で得てきたものでも、何ひとつ思いどおりにすることはできない。アッラーは［真理を］拒む民を導かない。[140]
265 アッラーの喜びを求め、自分自身を強めるために自らの財を費やす者は、例えるなら丘の上の庭園のようなもの。大雨が降れば、みのりは二倍に増える。もし大雨ではなく、霧雨が降るだけでも。アッラーは、あなたがたが行っていることをすべて見ている。[141]
266 川がその下に流れ、その中にはあらゆる果実がみのるなつめやしやぶどうの園を持ちながら、自分は老いており子どもたちは幼く弱いところへ、火炎の竜巻が襲いかかって焼け落ちるようなことを、あなたがたのうちひとりでも望む者があるだろうか。このようにアッラーは、あなたがたのためにその御しを明らかにする。あなたがたも、省みるようになるだろう。[142]
267 信じる者たちよ。あなたがたは、あなたがたが得た良いものと、われらがあなたがたのために地上に育んだ良いものの中から［慈善に］費やしなさい。自分なら目をつぶらずには受け取れないような劣ったものを、敢えて抜き出し［慈善に］費やしてはならない。アッラーは満ち足りて、称賛にふさわしいことを知りなさい。
268 悪魔は貧しさをもってあなたがたを脅し、不品行にはしらせる。アッラーはその赦しと御恵みをあなた





がたに約束する。アッラーは果てしなく広大であり、すべてを知る。
269 その御心にかなう者には知恵が与えられる。知恵を与えられた者こそ、多くの良いものを与えられた者。しかし分別をもつ者の他は、想い起こそうともしない。[143]
270 あなたがたが何に費やそうと、どのような誓いを立てようと、本当にアッラーはそれを知る。不正をなす者に、助け手はない。
271 慈善を公然となすのも良いこと。しかし押し隠して貧しい者に与えるなら、あなたがたにとってはより良いこと。それはあなたがたの悪い行いのうち、いくらかをぬぐい去ってくれるだろう。アッラーは、あなたがたの行いを十分に知り尽くしている。[144]
272 彼ら［人間］を導くことは、あなた［ムハンマド］の責任ではない。アッラーはその御心にかなう者を導く。何であれあなたがたが良いことのために費やすなら、それはあなたがた自身のためになる。あなたがたは、［慈善をするなら］ただアッラーの御顔だけを求めて費やしなさい。あなたがたが良いことのために費やしたものは、余さず十分にあなたがたに返される。あなたがたが、不正に扱われることもないだろう。[145]
273 ［慈善は］貧しい者のため、アッラーの道のために身動きがとれず、大地を歩き回ることもできずにいる者のため。無知な者たちは、彼らをその尊厳ゆえに裕福なものと思っている。彼らの特徴を見れば分かる。彼らは人々に、しつこく乞うことはしない。あなたがたが良いことのために費やすものを、何であれアッラーは知っている。[146]
274 夜も昼も、ひそかにもあらわにも［アッラーの道のために］自らの財を費やす者には、主の御許にその報酬があるだろう。彼らには恐れもなく、嘆きもないだろう。[147]
275 ［復活の日、］利子をむさぼる者たちは、悪魔に触れられた者のようにしか立つことができない。それは

彼らが「取引とは、利子をとるのと同じようなもの」などと言うため。アッラーは取引を許し、利子をとるのを禁じた。それゆえ、主の教示を受けてそれをやめる者は、それまでの分はそのままでよく、その者についてはアッラーに託される。しかし［利子をとることに］後戻りする者、これらの者は火獄の仲間。彼らは、永遠にその中に住まうだろう。[148]

276 アッラーは利子をくじくが、慈善には利子をつける。アッラーは恩を忘れる罪深い者を愛さない。[149]

277 信じて正しい行いをし、礼拝のつとめを守り、喜捨をする者。彼らのために、主の御許にその報酬があるだろう。彼らには恐れもなく、嘆きもないだろう。

278 信じる者たちよ。あなたがたはアッラーを畏れなさい。残っている利子を放棄しなさい、もしあなたがたが信仰者なら。[150]

279 もしそうしないなら、アッラーとその使徒からの戦いがあるものと心せよ。しかしもしあなたがたが悔い改めるなら、あなたがたの原資は手元に残される。それであなたがたが不正をなすことも、不正をなされることもない。

280 ［負債者が］苦境にあるなら、安楽になるまで［一定の期間を］猶予しなさい。しかし［債権を放棄して］慈善とみなすなら、その方があなたがたのために良い。もしあなたがたが、知ってさえいたなら。

281 アッラーに召されるその日を畏れなさい。そののち各人は、得てきたものに応じて十分に報いられ、不正に扱われることはない。[151]

282 信じる者たちよ。期限を決めて貸し借りをするときは、それを［記録として］書きとどめておきなさい。あなたがたの間のことを、公正な書記に書きとどめさせなさい。書記は書くことを拒んではならない。アッラーに教わったとおりに書きとどめること。負債ある者の口述を書きとどめなさい。主であるアッラー





を畏れるようにしなさい。［負債を］いささかも少なめにしてはならない。もし負債ある者が未熟な者か、あるいはか弱い者か、あるいは口述のできない者なら、その保護者が公正に口述しなさい。あなたがたの中から二名の男を、証人として立てなさい。もし二名の男がいないなら一名の男と、あなたがたが証人として認める二名の女を。それで二名のうち一名が誤っても、もう一名が思い出させることだろう。証人として呼ばれたときは、拒んではならない。ことの大小にかかわらず、期限について書きとどめておくのをなおざりにしてはならない。そうすることがアッラーの御許においてはより正しく、証言としてより強く、また疑いを抱かせることもない。あなたがたの間でじかになされる商売は別であり、それを書きとどめなくても誤りではない。しかし商取引を交わすなら、証人を立てなさい。書記も証人も害してはならない。もしそのようなことがあれば、本当にあなたがたは背いたことになる。アッラーを畏れなさい。アッラーはあなたがたに教える。アッラーは、ありとあらゆるものごとを知る。[152]

283 あなたがたが旅にあり、書記を見つけることができないときは、担保をとりなさい。互いに相手を信頼するなら［担保の必要はないが］、信頼された者は［負債を返すことで］信頼に応えなくてはならない。主たるアッラーを畏れなくてはならない。あなたがたは、証言を隠してはならない。隠す者は、本当にその心が罪深い者。アッラーは、あなたがたがしていることをよく知っている。[153]

284 諸天にあるもの、大地にあるものはことごとくアッラーに属する。あなたがたが自分自身の内側にあるものを明かそうと、あるいは押し隠そうと、アッラーはあなたがたにその清算をさせるだろう。誰であれ御心にかなう者を赦し、またそうと望めば誰であれ罰する。アッラーは、あらゆるものごとにおいて全能である。

285 使徒は主が彼に下したものを信じる、信仰者もまた。彼ら一人ひとりがアッラーと、その天使たちと、

その諸々の啓典と、その使徒たちとを信じる。「私たちは、使徒たちの間で誰のことも分けへだてしません」。彼らはこうも言う。「私たちは聞き、従います。主よ、私たちはあなたの赦しを求めます。行き着く先は、あなたにあります」。

286 アッラーはどの者にも、その能力以上のことを負わせない。自分の得たもので自分を益し、自分の得たもので自分を害する。「主よ。私たちが忘れたとしても、過ちを犯したとしても、私たちを責めないでください。主よ。私たち以前の者たちにあなたが背負わせたような重荷を、私たちに背負わせないでください。主よ。私たちが背負えないような重荷を、私たちに背負わせないでください。私たちを［罪から］清め、私たちを赦し、私たちを憐れんでください。私たちの守護者はあなたです。［真理を］拒む民に対し、私たちを助けてください」。154

1 アル＝フルーフ・アル＝ムカッタアと呼ばれるこれらの神秘的な文字列は、クルアーンの欠くべからざる一部として複数の章の冒頭に見受けられる。これらについては様々な解釈者や解説者が、それぞれ多岐にわたる見解を述べているが、この種の頭文字の真の意味を知るのは神のみであるという他に、どのような合意の形成ももたらされてはいない。

2 章の冒頭で述べられている通り、クルアーンは疑念をはさむ余地のない啓典の書であり、その中で神は人間を、信仰との向き合い方に応じて主に三つの型に分類する。（1）信仰者の資質については一節から五節にかけて論じられている。（2）六節と七節においては不信仰者の特性が論じられている。（3）偽善者については、その性質あるいは特徴が八節





から二一節にかけて論じられている。

クルアーンは、人間がまっすぐな道を歩む助けとして授けられた書である。その主題は人間であり、また正誤を問わず人間が抱く信念である。クルアーンの解釈は、人間が自分自身で選択し、自分自身の内部に取り入れた信念の結果として与えられる。クルアーンを読む際には、その語り手が全知全能の主であることを念頭におく必要がある。主は時として自らの被造物に語らせることもあれば、また時として読み手に熟考させるために、豊富な比喩をもってテクストの流れを中断することもある。

3 信仰していないにもかかわらず信仰者をよそおう者は偽善者と呼ばれる。ここでは彼ら偽善者たちの心の状態が記される。イスラームを受け入れるときの彼らは、まるで暗夜に苦しんでいたかのようにその光を享受する。しかし信仰が欠落し、後退すればその光は消えてしまう。彼らは以前の状態に戻り、光を失ってますますものが見えなくなる。

4 この節からもわかるとおり、信仰を持たない者も信仰者をよそおう偽善者も、心の無秩序のために苦しんでいる。彼らは、あるときは真実を見ているかのように行動する。またあるときは恐怖と興奮のために躊躇し、またあるときは完全な暗闇の中にいる。こうした内心の混乱にもかかわらず、彼らに分別を保たせているのは神である。信仰を欲さない者が信じようとせず、永遠の懲罰に自らその身を投じる準備をする間にも、信じたいと欲する者はただ信じるのみである。

次の節では、神が万物の創造主であり、崇拝するにふさわしいのは神のみであることが説き明かされる。いと高き神は、人間が存在するのに必要なあらゆるものの唯一の創造主である。この事実を知り、それに従って行動することが人間に課されている義務である。

5 この節で人類は、唯一の神を信じるよう呼びかけられている。また人間を創造し、また生と死、滋養を与えたのは神であることが説き明かされている。

6 人間に対する、これと類似したクルアーンを創造するよう挑みかけがある。

7 第二のクルアーンを創造するのは不可能であることが強調され、預言者と、彼のもたらす報せを信じない者は、その必然的な結果として業火により罰せられることが説き明かされる。次の節では、楽園の信仰者たちに対する吉報と、彼らの置かれる状態とが説き明かされる。この節において預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、信仰し、現世において善行する者は来世において報奨を授かるとの御言葉を授かっている。そうした祝福や報奨は、現世において用いられるものと似ているものもあるが、それよりもはるかに優れている。ブハーリーの伝えるハディースによれば、次の通りである。「楽園の人々は、いかなる目にも見られたことなく、いかなる耳にも聞かれたことなければ、いかなる死すべき心にも浮かんだことなきものをもって報いられるだろう」。

8 「背く者」とは、神が定めたあらゆる境界や限界を侵犯する者、不正をはたらく者や不服従の者を意味する。

9 神との聖なる「契約」を「アハド」という。神にのみ服従し神のみを崇拝し奉仕するようにという、全人類に対する永遠不変の命令である。アーダムの創造の際に、全人類がこの命令を承諾したことがアル＝アアラーフ章に記されている。同章一七二節において、全人類は神にのみ従い、神にのみ仕えると証言したものとされている。

神は人間の集団的ならびに個人的な幸福が何によって確立され、何を拠りどころとしているのかを、正しく適切に見極めるよう命じている。しかし人間は、相互の絆や関わりを断ってしまった。

10 この節では、死とは人間（すべての人間、あるいは個人）の置かれているある状態を指すものとされている。魂は、一生を通して（1）「死からの創造（無からの創造もしくは生命無きところからの創造）」（2）死そのもの（3）死後の生命の復活という三つの段階をたどる。この節はまた、審判の日、個々人がそれぞれに自分の行いについて申し開きをさせられることが明かされ、はからずも転生や輪廻といった概念が否定される形となっている。

11 天使たちには、地上における神の代理者として、審判の日まで絶えず一定の試練を課されるという、人間に単なる存在として以上の役割が課されたのが理解できなかった。





12 ここで「名」と訳された「イスム」という語は、「何らかの」物質や出来事、あるいは属性といった、「何かについて」の知識を伝えるのに用いられる表現である。「アーダム」とは人類の父祖かつ預言者の名であると同時に、前節において天使たちが「退廃を広め、流血を招く者」と形容した全人類を指すとも解せるだろう。七章一一節も参照。

13 神はさらに別の方法でも天使たちを「試した」ことが次の節で語られる。

14 天使たちが試されたのち、今度は「アーダム」、すなわち人間が試されることになる。

15 アーダムが主から授かった「御言葉」については、様々な解釈がある。それらは警告であったかもしれないし、あるいは助言であったかもしれない。イブン・マスウードによると、アル＝ファーティハ章の前に唱えられる、「スブハーナカ」と呼ばれる祈りの成句は、アーダムが主に捧げた祈りと嘆願である。アーダムの名のみが言及されてはいるが、ここにはハウワーゥ（イヴ）も含まれている。

16 神が自身を指す一人称について、動詞の主語の場合は「われら（複数形）」と訳し、動詞の目的語になる場合には「われ（単数形）」と訳した。

17 神の啓示という祝福を授かっているのは、全人類のうち自分たちのみであるといった選民思想に対する戒めでもある。「わずかな代価」とは、「自分たちこそは選ばれた民である」という誤った優越感を指す。こうした意識は、クルアーンにおいてはことごとく否定される。

18 この節での「忍耐」が意味しているのは断食と礼拝である。これらの宗教実践は信仰を強め、謙虚さを教え、怠惰と無為に終止符を打ち、あらゆる困難に立ち向かえるほどの力を人間に与える。歴史家のタバリーによると、預言者ムハンマドは、何らかの困難に直面したときはすぐに二ラクアの礼拝を行ったという。イブン・アッバースも彼と同様にふるまった。「畏怖する者」とは、その心が神への畏怖で満たされているために謙虚になった者のことである。そうした人々は断食や礼拝の実践や、ひいてはどのような状況においても真実を述べることに対して何の困難も感じることがない。

19 預言者が遣わされた民は、ある一面では確かに「選ばれた民」ではある。預言者とその家族、そしてその民は名誉ある立場に置かれる。しかし預言者と、神から下された啓典によって祝福されている分だけ、主に対する責任もより重大である。その意味でイスラエルの民は「選ばれた民」であったが、その後の神に対する逸脱と不服従のために、61節において説き明かされる通り不名誉な立場に置かれてしまった。彼らの忘恩が主の怒りを招いたのである。

20 ムーサーの民が安全に渡れるよう、真っ二つに割れた水域についての言及である。おそらくスエズ湾。フィルアウンの軍勢は溺死した。

21 ター・ハー章には、ムーサーがトゥールの山を訪れた物語がある。律法を託されたムーサーが山を下りたとき、サーミリーという名の男が黄金の仔牛の像を担ぎ出し、「これがあなたがたの主だ。ムーサーは、これを崇拝するようあなたがたに伝えるのを忘れてしまったのだ」と、人々をそそのかしていた。ムーサーの兄弟ハールーンには、これを防ぐことができなかった。

22 落雷に打たれた人々はわれに返り、自分たちの求めていたものが間違いであったことに気づいた。この節では、それが「死」と「復活」という語り口で説き明かされている。

23 イスラエルの民による不善が説き明かされる。ここから教訓を得ることができれば、神の怒りを招く者とならないよう努めることも可能となる。人間の最善の行動とは、悪行から身を守り、他者に寛容にし、人間は誰もが同等であるということを常に忘れずにいることである。

24 ここでは「町」と訳されている語は「土地」といった意味でも用いられ、この節に限っていうならパレスチナを指しているのは明らかであろう。したがってここでいう「町」とは、エルサレムまたはエリコである。「行いの善良な者」とは、自らに課された義務を不足なく果たす人を指し、この資質を持つ者は非常に高い評価を受ける。大天使ジブリールが登場する有名なハディースがあるが、その中で「行いの善良な者」とは、「自分には神を見ることはできなくとも、神が





自分を見ていることを常に意識し、あたかも神を眼前に見ているかのようにふるまう者」と定義されている。イブン・カスィールの解説によると、「イスラエルの民は謙遜の精神をもって約束の地を受け取るよう、すなわち『門に入』るよう命じられた」。

25 こで言及されている岩とは、ムーサーが携えてきた特別なものであった。複数の伝説によれば、その岩はアーダムが天から持ち帰り、世代から世代へ受け継がれ、最終的にムーサーの手に渡ったものとされる。

26 イスラエルの民はシュアイブ、ザカリーヤー、ヤフヤーならびにイーサーを暗殺している（イーサーに関しては、クルアーンに従うなら殺害されたのは彼の身代わりとなった者であり、イーサー本人は神により天上へ引き上げられた）。たとえ知性を授かっていようと、真実を見るに十分ではなく、また自分の悪い願望を抑制するのに用いるのでなければ無意味であり、地上での平安を得ることは難しい。しかし次の節が示す通り、真実の信仰を持つことができれば、神に受け入れられることは可能である。

27 黄金の仔牛を崇拝したことを悔い改めたイスラエルの民に、「ユダヤ」という名称が与えられた。別の伝承によればこの名称は、預言者ヤアクーブの長男ヤフーザーの名に由来するともいわれている。またキリスト者には「ナサーラー」という名称が与えられたが、これはおそらくイーサーの出身地であるナザレに由来する。

28 神は安息日を守らなかったユダヤ教徒を猿の状態に変えた。

29 ある伝承によると、イスラエルの民のうちある者が、財産目当てで自分のおじを殺害した。ムーサーは殺害した者を特定しようとしたができなかった。神に援助を求めたところ、雌牛を犠牲に捧げるようにとの命令が下された。ムーサーがイスラエルの民にこれを告げると、彼らはそれを冗談であるかのように扱い、命令を回避しようとして様々な言い逃れをした。彼らが問いを重ねるごとに、問いに対する答えも増えた。ついに言い逃れも尽きたころ、彼らはようやく命令に従った。イスラエルの民は雌牛を屠（ほふ）ると、その肉をもって死者を叩いた。すると死者はよみがえり、彼を殺害した

者の名を明らかにした。

30 些事にこだわって定義しようするユダヤ教徒の欲求により、ムーサーを通して明らかにされた平易な戒律が、ユダヤ教徒たち自身でさえほとんど実践が不可能なものになってしまった。タバリーは、イブン・アッバースの次のような言葉を引用している。「そもそも最初から自分たちで雌牛を選んで犠牲に捧げてさえいたなら、彼らは義務を果たせていたことだろう。しかし彼らは自分たちの手でものごとを複雑にしてしまった。それで神も、彼らのものごとを複雑にしたもうた」。ザマフシャリーも同様の見解を示している。

31 この節の前後で語られている物語の主題はムーサーに下された律法である。殺害が起こり、それが解決に至らないときは、雌牛を犠牲に捧げ、殺害が起きた場所に最も近い村や町の長老が自分の手を洗い、「われわれの手はこの血を流さず、われわれの目もそれを見なかった」と宣言することにより、共同体の集団責任が免除されることとなった。申命記二一章一節から九節を参照。

32 ムーサー以降の律法学者たちは、律法をもっぱら自分たちの欲望に従って解釈した。現代においても、自分のし好に従ってクルアーンを解釈しようとするムスリムが存在する。多くのハディースが、自分の個人的な意見を正当化する目的でクルアーンを解釈する者は誰であれ業火に入ると伝えている。

33 預言者は常にイスラエルの民の中から到来するという一種の選民思想の是非について「口論」が起こるのを危惧している。

34 一部の典拠においては、ここで「文字を知らず」とされているのはユダヤ教徒やキリスト者というよりも、クルアーンがアラビア語で下されたにもかかわらず、これを解さないアラブを指すともいわれている。

35 律法学者たちの中には、自分たちの解釈を律法に追加し、それにより律法が完成されたと称して、金銭と引き換えに人々に売りつける者もいた。





36 預言者ムハンマドの時代、現代ではマディーナの名で知られるヤスリブの周辺には、相当数のユダヤ教徒が住んでいた。待ち望まれていた預言者が、ユダヤ教徒の中からではなくアラブの中から到来したとき、彼らの中には激しく嫉妬する一派があった。クルアーンの中にユダヤ教徒に関する語りが多くみられることの一因はこれであろう。この一派のため最後の預言者であるムハンマドは、しばしばユダヤ教徒との間に緊張を抱えることになった。

37 この節は、一部のユダヤ教徒が引き起こしたある不善についての説き明かしである。イスラーム以前のマディーナでは、ユダヤ教徒が二つの派閥に別れて争っていた。彼らは互いに捕虜を捉えては身代金を要求し合い、その理由を問われると「これは神の掟だ」と説明していた。

38 この節には、非常に重要な二つの描写がある。ひとつめはムーサーの後にも継続して預言者が到来した以上、無知は言い訳とはならないということ。ふたつめは「ルーフ・ル＝クッドゥース（聖なる息吹）」すなわち「精霊」、神の霊威である大天使ジブリールについての描写である。

39 「私たちの心は包まれている」という言葉には、自分たちにはすでに宗教的な知識があり、そのことを考えればもはや新たな教戒は必要ないとする、ある種の自慢と不遜とが込められている。

40 ユダヤ教徒が「私たちに下されたもの」と言うとき、それはムーサーの律法を指している。律法は「汝、殺すなかれ」として殺人を禁じているが、ヤフヤー（洗礼者ヨハネ）やザカリーヤー、その他にも複数の預言者たちが殺害されている。

41 ムーサーによってもたらされた純正な啓示に背くことは、真理を拒むことである。彼らはこうして道を踏み外し、黄金の仔牛に象徴される物質的な世界を崇拝するようになった。

42 この節にはいくつかの主要な点が要約されている。ユダヤ教徒はやがて預言者が到来することを知っていたにもかかわらず、預言者ムハンマドの出自がユダヤではなくアラブであったために拒否した。多くの奇跡を起こしたムーサーについてさえ、真に信用してはおらず、「黄金の仔牛」を崇拝するという退歩に至ったのである。懲らしめのため、主は彼

らの上にそびえ立つ山を配した。彼らも初めは恐れ、「私たちは聞き、従います」と言ったが、たちまち不服従に戻った。これらの物語は大昔の、かつ特定の集団のものとして語られつつも、全人類に対する警告としての形を有している。

43 楽園は特定の宗教や集団にのみ約束されているとする根拠なき選民思想に対する批判である。

44 選民思想の持ち主は、しかしその信仰が根本的にぜい弱なため、楽園が約束されていると豪語しつつも決して本心から死を望まない。

45 ある伝承によると、アラブの町ファダクに住むアブドゥッラー・イブン・スーリーヤという名の律法学者が、預言者ムハンマドと討論した際に次のように尋ねた。「汝に啓示をもたらしたのは誰か？」。大天使ジブリールが、と預言者が答えると、彼は気色ばんでこう言った。「彼は我らの敵である。誰か他の者がもたらしたのなら、我らも信じただろう」。この出来事の後で、次の節が啓示された。

46 複数の伝承によると、啓示された宗教に従う人々は以下の四通りに分類される。（1）律法を信じ、受け入れる者たち。彼らは「啓典の民」と呼ばれ、その数は少ない。（2）啓典には複数あることを受け入れず、分裂を引き起こす者たち。これらの節で言及されているのはこの人々である。（3）無知のため、自分が何をしているのかも分からずにいる者たち。（4）信仰者を装いつつ、現実には地上で不善を働くことに勤しむ偽善者たち。

47 古代の諸部族は魔術を信じており、魔術師たちはそれらを用いて大衆を欺いていた。次のような複数の魔術が存在した。（1）カルデアの民の魔術。カルデアの民は、宇宙を支配しているのは星々であると考え、善も悪も星々がもたらすものであり、天の力と地の力が結びついたときに奇跡が起こると信じていた。こうした人々に啓示を伝えるために、イブラーヒームが神から遣わされ、真実が告げられた。（2）擬似的な心霊主義に依存した魔術。この種の唱道者によれば、人間は霊魂を抜き取ってこれを殺害したり、あるいは再び生命を与えたり、精神的な手法によって人間の身体に特定の変化をもたらすことができる。（3）ジンのような霊的存在を媒介として行われる魔術。（4）未来予知。





ムスリムの学者たちは、（1）と（2）の類に属するものは不信仰の産物であるという点で意見が一致している。しかしながら神を唯一の創造主と信じる限り、ある種の魔術を学ぶことには正当な理由が認められるともしている。多くの人々が、預言者スライマーンは偉大な魔術師であり、彼が自分の王国に加えて動物界やジンの領域さえも統治できていたのは、そのたくみな魔術によるものと信じていた。クルアーンがスライマーンを預言者として認めたとき、「ムハンマドはスライマーンが預言者だと考えているが、そうではない。彼は魔術師だったのだ」と言う者は少なくなかった。

48 ここでは「誘惑」と訳出した語「フィトナ」には様々な意味があり、あるいは「災厄」とも訳せるだろう。「私たちの面倒を見てください」と訳した「ラーイナー」の語は、敵意ある者が聞けば、嘲笑的な言葉としてその意味を歪曲されるおそれがある。「私たちを見守っていてください」というほどの意味の「ウンズルナー」であればそうした曲解も生じない。信仰者として誤解を招くおそれのない明晰な言葉で語るようにとの助言である。

49 以前に規定された啓示を相殺（無効化）する節が新たに啓示された場合、これは「ナスフ」すなわち「廃止」と呼ばれる。文化と文明が絶えず変化する現世の必要を満たすために、神は幾世紀にもわたって新たな預言者と啓典を送り届けてきた。クルアーンのテクストそれ自体においては、廃止された節はごくわずかである。

50 イスラエルの民は、ムーサーがいた時代には彼に「神とじかに会う」ことを求めた。ユダヤ教徒はクルアーンの啓示を拒否し、それが神に発したものであるという「客観的な証拠」を求めた。

51 以前の啓示を信仰する者たちの中には、ユダヤ教徒かキリスト者かを問わず、真理を拒み、同信の仲間に不信感を植えつけようとする者も少なくなかった。この節では、真理について何ごとかを語るなら、啓典（律法や福音）をその典拠として語るべきであることが述べられている。

52 主の従順なしもべであろうとするなら、「行いの善良な者」でなければならない。ただ主を拝むだけでは、救済を得るのに十分とはいえないのである。「行いの善良な者」とは、何ごとも神のために行い、神以外の何ものをも恐れない人

のことである。何をするにも、もっとも優れた方法で成し遂げる。

53 かつて一人のキリスト者が預言者を訪ねたことが伝えられている。議論のあとで、この節が啓示された。時代を経るにつれ、ムーサーとイーサーの本来の教えは徐々に忘れられてゆき、かわってユダヤ教徒もキリスト者も、来世において天国に入るのは彼らと同じ信仰（宗派）に従う者のみであり、また神の恩恵に値するのはただ彼らのみであると主張するようになった。

54 ムスリムの学者たちによれば、ここで言及されている「マスジド」とは、マッカのアル＝マスジド・アル＝ハラーム（「禁制のマスジド」）と、エルサレムのアル＝マスジド・アル＝アクサーである。ユダヤ教徒、キリスト者、多神を奉ずる者たちの中には、ムスリムがそれらの場所に出入りするのを妨害しようとする者も少なくない。しかしユダヤ教徒、キリスト者、多神を奉ずる者たちこそ、神への畏れと共に聖域に入るべきであることを述べる節である。

55 「あなたがたがどちらを向こうと、そこにアッラーの御顔がある」とは、「あなたがたがどちらを向こうと、そこにアッラーの選んだ方角がある」とも解せる。ここでいう「御顔」が、被造物である人間の「顔」とは異なる点に留意すべきである。すべてのムスリムが同一の方角に顔を向ける理由のひとつに、神への崇拝行為における同一性を確立するためであることが挙げられる。しかしムスリムの行いとは関わりなく、神はあらゆる時間と空間に存在し、あらゆる方位を取り囲んでいる。

56 ユダヤ教徒はウザイルが「神の息子」であったと主張し、またキリスト者もイーサーについて同様の主張をした。加えて多神を奉ずる者は、天使とは神の娘であると主張した。しかし知性を働かせるなら、神がそうした事柄をはるかに超越していることを十分に理解できるはずである。

57 神が何ごとかを望めばただ「在れ」と告げるだけで、あらゆる時間と空間に主の叡智が現されるのである。

58 元ユダヤ教徒の学者でアブドゥッラー・イブン・サラームという人物が、クルアーンを信じ、友人と共に信仰告白を行っ





た際に啓示された節である。別の伝承によれば、エチオピア出身の四十名の啓典の民がジャアファル・イブン・アビー・ターリブの指導の下にイスラームを受け入れた際に啓示されたともされている。

59 仲裁の可否は特定の条件にも左右されるが、最も重要なのは神の唯一性と正義を信じることである。

60 宗教的であるか、あるいは特定の信仰をもっているかといったこととは関わりなく、信仰者と不信仰者のいずれもが現世の恩恵を分かち合っている。神が授けた財産その他の恩恵を、善いことや正しいことのために使う者は、現世と来世の両方において成功するだろう。自らに授けられた財産や祝福を正しいやり方で使わなければ、道に迷い、現世と来世の両方における敗者となるだろう。

61 カアバの建立に関しては次の伝承が残されている。アーダムとハウワーゥが地上で暮らし始めたとき、二人はアラファートの名で知られる広大な山野で互いを見出した。それから二人は西へ向かい、現在のカアバに位置する谷間の平地にたどり着くまで歩き続けた。アーダムは神にひたすら感謝を捧げ、与えられたこの場所の周囲を、自分が歩いてタワーフ（巡回）することができるように、光の列柱が居並ぶような場所にしたいと望んだ。そこで彼は四つの壁からなる簡素な建物を建てることに決め、その建物の一角に黒い石を置いた。アーダムによる建立の当時から残されているとされるこの黒い石は、現代では「アル＝ハジャル・アル＝アスワド」と呼ばれている。預言者ヌーフの時代に起きた大洪水の後、この建物は砂に埋もれて失われた。預言者イブラーヒームは、主の戒めに従い、召使であったハージャルを息子イスマーイールと共にカアバに住まわせた。イブラーヒームとイスマーイールは助け合って砂を掘り起こし、元々の建物の土台を見つけると、改めてその上にカアバを建立した。イブラーヒームとイスマーイールが「家の土台を築き上げた」というクルアーンの言及は、現在のカアバの建立を意味している。

62 これらの節に込められている祈りのなんと美しいことだろうか。これこそ多神崇拝からの浄化がもたらすものである。崇拝の行為は、預言者イブラーヒームによって初めて真の意味での聖性を帯びるようになったのである。

63 「純正な人」を意味する「ハニーフ」とは、あらゆる迷信と偶像崇拝から解放され、真実の信仰を受け入れる準備ができている状態を指す。

64 ここで言及されている「諸々の支族」とは、預言者ヤアクーブの子孫を指す。

65 ザマフシャリーの注解によると、キリスト者の一部には、新生児に洗礼を施す際に、それが浄化の手順であると信じて黄色く染めた水を用いる人々がいた。そのためムスリムはこの節において、「私たちは神から自分の色を受け取る」と述べるよう命じられた。内発的ではない儀式には何の意味もなく、魂のために可能な唯一の「色染め」とは、純粋さと、人間の原初的な自然を自ら欲することによって獲得されうるのである。

66 預言者イブラーヒームこそ宗教における真実を具現しており、全能の主を崇拝する者であったという事実を確認し、彼を継ぐ者はすべてムスリムとしての素地を持つことを確認する節である。

67 マッカからマディーナへヒジュラ（移住）した預言者ムハンマドと教友たちは、その後の十数か月にわたり、エルサレムの方角に向かって礼拝していた。これを見たユダヤ教徒は、預言者はどちらに顔を向けるべきなのかもわかっておらず、そのためユダヤ教の導きを受け入れることにしたのだと言い始めた。そこで預言者は、礼拝のための方角が与えられるよう神に祈った。すると神の導きが下され、ムスリムはカアバの方角に向かって礼拝すべきであることを示す節が啓示された。

68 「キブラ」とは「礼拝の方角」あるいは礼拝をする際に顔を向ける方向を意味する。マディーナに到着して約十六か月ののちに、預言者は啓示を授かった。本章の一四二節から一五〇節を通して、カアバこそがイスラームに従う者たち、クルアーンを信じ、最後の預言者ムハンマドを信じる者たちのキブラであることが明確に定められた。

69 審判の日、神は預言者たちに、託された啓示を本当に送り届けたかどうかを問う。ムハンマドの共同体が証言者として呼ばれたとき、彼らは彼らの預言者が、確かに啓示を送り届けたことを証言するだろう。





70 ここには、キブラの問題に関して導きの光を探し求める預言者ムハンマドの真摯な願いが示されている。ユダヤ教徒もキリスト者も、エルサレムを神聖な都市とみなしており、したがってこの既成事実に基づいた上での宗教実践が続けられていたが、しかし預言者の時代には普遍的かつ決定的なキブラは存在せず、またエルサレムはビザンチン帝国の支配下にあった。キリスト者たちは彼らの教会を東の方角に向けていたが、聖なる場所の方角とは異なっていた。

71 預言者ムハンマドは、ユダヤ教徒やキリスト者の願望をかなえる者ではなかった。たとえ彼が彼らに同意を示したとしても、万人を満足させることは到底できなかっただろう。それで主は預言者に、人々におもねることで何らかの罪を犯すことのないよう、彼らの願望に従ってはならないと命じたのである。彼らの願望はしばしば信仰による抑制の埒外にあり、制御のきかない危険があった。

72 ユダヤ教徒とキリスト者は、彼らの啓典を通して、それとわかる特定の性質を備えた今ひとりの預言者が、いつの日か到来するだろうということを読み取っていた。この意識が世代から世代へと伝わり、新たな預言者の到来が切望されるようになった。しかしついにその預言者が、貧しいアラブの孤児として登場したとき、彼らのうちある者は、卑劣な人種・階層差別から即座に彼を拒絶した。しかし実際には彼らの多くが、彼が啓典を通して予告されていた真の預言者であることを確信していたはずである。しかし彼らの驕慢と頑固さが、彼らを歪ませてしまうほどに肥大していた。

73 クルアーンにおいては、ムスリムとはイブラーヒームに真実、従う者であるということが繰り返し強調される。ムスリムはイブラーヒームの「キブラ」とは別の方角を向いて祈っているという不信仰者たちの主張にしたがうなら、カアバをキブラとすることは真理の歪曲ということになる。これはクルアーンの啓示に対する不当な挑戦であった。

74 このふたつは、人間が自分の「ナフス」に立ち向かうのに最も優れた武器となる。ナフスとは、即物的な充足を優先させるよう人間を促す低劣な自我のことである。

75 これらの節は、バドルの戦いで殉教した人々に関するものである。これは「輝ける町」マディーナ・ムナウワラへの移

住後に起きた、マッカの攻撃的な多神崇拝者と、新たに形成されたムスリム共同体との間における最初の大規模な衝突であった。殉教者は死んではいない。なぜなら彼らの精神は、残された信仰者の中に生き続けるからである。恐怖や飢餓、飢饉や貧困、病気、愛する人との死別など、これらはすべての人間に課される試練である。困難の時こそ魂を浄化する好機であり、困難に対してどのようにふるまうかが試される。クルアーンはまた、あらゆる魂が最後には死を味わうことを想起させる。このことを理解し、学び続ける者は知性ある信仰者である。人間は知識に基づいて行動しなくてはならない。

76 ここでは「アッラーの儀礼のうちにある」と訳出しているが、「アッラーをより身近に感じることのできる場所」とした方がわかりやすいかもしれない。サファーとマルワは、カアバの東側に位置する小さな丘である。ハージャルはわが子のために水を探し求めて、このふたつの丘の間を七回、往来した。現代では、マッカでハッジまたはウムラ（それぞれ大巡礼、小巡礼とも訳される）を行う人々は、このふたつの丘の間で「サアイ」と呼ばれる儀式を行う。この二つの丘を走る行為には何の罪もないことが具体的に告げられているが、イスラーム以前のジャーヒリーヤ（イスラームがもたらされる前の、アラビア半島を無知が覆っていた時代の総称）の時代には、両方の丘に一体ずつ、計二体の偶像が祀(まつ)られていた。サアイについて疑義を呈する人々も中にはいるが、この節が下される以前は、その儀式のそもそもの起源でさえ忘れられていたのである。

77 以降、人間がいかに自らの主に対して忘恩的であるか、またそうした人間がいかに悲惨な結末を迎えるかが語られる。次の節では、人間は知性を用いることで自らの主に従うことを知り、また自らを取り巻く自然現象を観察することで主の教えを学ぶようになることが説き明かされる。論理的に考える者なら、努力を重ねて真理を理解し、自らの創造主を知るようになるだろう。

78 クルアーンは「理性を有し、知性を用いる」人々に対し、「海と大洋を疾走する船、音よりも速く空を飛ぶ飛行船、宇





宙飛行士を乗せて何度でも宇宙へ飛び立つ衛星」といった、人間自身の創意あふれる事績も含めて、森羅万象にみなぎる完全かつ至高の神の意識的かつ創造的な宇宙の性質と不思議を、数多の徴(しるし)として観察するよう繰り返し訴える。

79 この節で用いられている「諸々の同位のもの（複数形）」という語について、クルアーンの解説者たちは、神性か、あるいは神的ないし半神的な力を有するとみなされる一種の聖者的存在のそれであるかに関わらず、元をたどれば神の性質の一部または全部に帰される愛慕の対象を意味するとしている。人々の中には、崇拝の対象として神と同様の位置に神ならぬものを配し、神を賛美すると共にそれらを賛美する者がいる。しかしそうした行為は神罰に値する。

80 邪悪な者すなわち悪魔は、人間の内なる邪悪な思考や欲望を増幅させ、自分を愛するように仕向ける。アブー・バクルは「最も偉大な人とは、自らの内なる欲望に従わない者のことである」と指摘している。

81 ここで「叫び声」と訳されている語は、羊飼いなどが家畜の群れを追うのに発する言葉の態をなさない声音を示している。神はこれらの節を通して、祖先の因習に無分別に従う者を非難している。論理的にものごとを考えることのできる者は、何よりもまず自分自身の知恵と知性を使うべきなのである。

82 イスラームは安楽を旨とする宗教である。絶対的な必要性があり、そのような状況が続く場合は、通常なら禁じられる特定のものも許されている。そのため真に飢餓の危険にさらされたなら、豚の肉やその他の禁じられているものを食すこともあり得る。神は「もっともよく赦し、もっとも慈悲深い」。

83 アラビアに定住していたユダヤ教徒の律法学者たちは、新たな預言者の到来により彼らの権威が損なわれるのを恐れ、彼らの啓典に記されていたはずの、預言者ムハンマドについての前兆を隠蔽した。

84 クルアーンを改ざんしようと試み、堅固な証拠や証明による恩恵を無視して自らの好みに合った解釈を推し進めようとすれば、結果として自己分裂に陥る。

85 ここでも再びクルアーンは、単に外見上の形式に迎合しただけでは、篤信の要諦を満たしたことにはならないという原

則を強調している。礼拝の際に「顔を東や西に向けること」についての言及は、「キブラ」問題の文脈に沿うものである。
この節には「畏れる者」すなわち篤信の人の定義が示されている。それは神と、神の命ずる戒律に対して誠実か否かに
関わる問題である。またクルアーンは奴隷の解放に多大な価値を認めており、これを贖罪の手段のひとつとして扱って
いる。預言者ムハンマドは、ムスリムにできる行為のうち、囚われの身となっている人間を無条件に解放することこそ
神の御目にはもっとも称賛に価する行為であることを、ありとあらゆる機会をとらえて力強く訴え続けた。
86 およそ宗教と名のつくものは、殺人を死に値する罪とみなしている点で一致している。イスラームは、犯罪を誘発する
諸条件を根絶し、信仰を強め、崇拝の行為を磨き、各人の神に対する申し開きの責任を自覚させることによって倫理的
な価値観を育むことで人間の完成を目指す宗教である。しかしながらいつ・どのような社会においても犯罪は存在する。
そのため神は、犯罪に対処するための法と刑罰を定めている。死刑よりも賠償を希望する遺族に対しては、特定の条件
のもとに判決の無効を要求する権利が与えられる。
87 「あなたがたの生命［の救済］がある」という啓示は非常に重要な意味を持つ。この啓示は大いなる抑止力を発揮して殺
人を未然に防ぐことにより、また遺族がその寛大さを示す権利を保障することによって、「生命を与える」機会を授け
てもいるのである。
88 次の節では、聖月であるラマダーン月の間に守られるべき義務が述べられている。ラマダーン月の斎戒は、イスラーム
において定められている宗教的行為のひとつである。この月の最大の美徳のひとつに、ライラトゥ・ル＝カドルと呼ば
れる夜（「威力の夜」または「天命の夜」）が挙げられるだろう。この夜、天の「アッ＝ラウフ・ル＝マフフーズ（保護
された碑版）」から「バイトゥ・ル＝イッザ（力能の館）」にクルアーンが送り届けられはじめ、ヒラーの洞窟にいた預
言者が、その最初の一節を授かったのである。ラマダーン月の間、ムスリムは想起されるべきこの夜の意義にふさわし
い善行や斎戒をもってこれを祝うのである。





89 断食を含めた斎戒の役割と恩恵が説き明かされている。一定の期間、世俗的な要請から自分自身を切り離すことで神に
対する従属の意識を高め、悪から自分の身をより守れるよう成長するのである。
90 イスラームという宗教は困難を命じない。男女の別なく義務としての断食が命じられる一方で、病気を患う者や旅に出
ている者、妊娠・授乳中の女性など、実践が困難と思われる者は義務を免除され、再び実践ができるようになったとき、
翌年のラマダーン月までに同じ分の日数を断食すればよいとされている。また高齢によって体力が低下している者や、
慢性の疾患などのために断食をしない方がよい場合は、可能なら代わりに貧者への施しや慈善をすることが望ましいと
される。
91 かつて預言者は、次のように問われたことがあった。「主は私たちの近くにおられますか、それとも遠くにおられますか。
もし近くにおられるなら小声で礼拝を行いますが、遠くにおられるなら大声を出さねばなりません」。こうして、信仰
し服従する者の礼拝は必ず聞き届けられることを約束し、神は全能であり、たとえ音もなくなされた礼拝であっても聞
き届けられることを説き明かす節が啓示された。信仰する善良なしもべの礼拝は神に受け入れられることは確実である。
92 初期のムスリムたちは、夜の食事から翌日の夜の食事までの間、厳格に飲食を制限していた。食事をする前に眠りに落
ちた場合には一食分を放棄すべきであると解釈したため、飢えや渇きによって衰弱する者もいた。また配偶者との性行
為も同様に制限されていた。しかしこの節の「夜明けの白い筋が、［夜更けの］黒い筋と見分けられるようになるまで」
という啓示により、断食は日昇から日没の間に実践するよう定められて現在に至っている。
93 権威ある者への贈り物すなわち賄賂が禁じられたことについて、バイダーウィーやザマフシャリーといった解釈者は、
贈り物のために権威ある者の見解が正しさとは反対に決定づけられる可能性があるため、と解釈している。
94 預言者は、なぜ月は非常に細身の三日月に始まり、徐々に満ちてゆき、それからまた徐々に痩せて元の三日月に戻るの
かという問いを受けた。その答えとしてこの節が啓示された。月の満ち欠けにより暦が定まり、暦が定まることで巡礼

月が定まる。この節には、多神を崇拝するアラブの習慣に対する非難も含まれている。当時は「イフラーム（巡礼の際に求められる一種の精進の状態）」の間は、巡礼から帰還した際には自宅の表口から入るのを避けることが好ましいとされていた。ここで定められているのは、巡礼に限らず、より一般的な範囲での適切なふるまいのあり方である。ものごとは何であれ分かりやすく、単純明快かつ率直でおおらかなやり方でなされるべきである。

95 交戦時におけるイスラームの戒めの原則が示されている。侵略を目的とする戦争は明確に禁じられているが、自衛のための戦いは単に許されているというだけではなく、地上における騒乱や迫害の発生を防ぐための義務ともされる。

96 ヒジュラ暦六年、預言者はウムラ（小巡礼）を行う意思を表明し、マディーナを旅立ってマッカを目指した。しかしフダイビヤと呼ばれる地において、異教の者たちが彼の行く手を阻んだ。双方の間で激しい議論が繰り広げられたが、最終的には「フダイビヤの和議」が取り交わされることになった。この和議の条約によれば、この年にはムスリムたちはウムラを行わずにマディーナへ帰還するが、翌年以降は同じ聖月にこれを実践することが認められた。異教の者たちはこれを大きな成果と捉えたが、ムスリムたちは翌年以降、不可侵の聖地を訪問するという成果を得た。こうして「聖月の不可侵性」が約定として確立された。神聖なるものもまた、相互主義の対象となるのである。

97 「行いの善良な者」とは、正直な者、自らの仕事を成し遂げる者を指す。ハディースによれば、「イフサーン」と呼ばれるこの特質を定義するよう求められた預言者ムハンマドは次のように応じている。「あたかもアッラーを眼前に見ているかのように崇拝することである。たとえあなたにはアッラーが見えなくとも、アッラーはあなたを見ているのだから」。社会正義や、正義全般もこの概念に含まれる。脚注二三も参照。

98 その昔、イスラーム以前のアラブたちは巡礼の季節には通りに露店の軒を並べていた。そこにはありとあらゆる種類の品物が積まれた。こうした露店は、イスラーム以前に隆盛していたアラブの異教の慣習通りの取引をしていたため、ムスリムたちはそれを非合法とみなした。しかし神は次の節をもって、巡礼中に商取引を行う慣習を合法なものと定めた。





99 アラファートと「聖記念碑（マシュアル・アル＝ハラーム）」は、巡礼の儀式における主要な祭祀の場である。その他の崇拝の儀礼と同じく、巡礼もまた様々な形で社会に利益をもたらしている。例を挙げると、（1）縫取りのない二枚の布からなる巡礼用の衣装「イフラーム」は、巡礼者たちが所有する財産や肩書き、地位や権威といったあらゆる現世的なものを後にして、万人を平等に創造した神の前に等しく立つことを象徴している。（2）イフラームの衣装は、死者を埋葬する際の死装束にも似ている。アラファートの平野に群衆が集まる様子は、審判の日を思い起こさせる。（3）あらゆる人種や文化を問わず、世界じゅうの人々が共に集まって物質的・精神的な事柄について交換し合い、共通する問題についての解決策を探求する。こうして人類の間にある相違の溝が埋められるのである。

100 ダッハーク、アッラビーウ、アブー・ムスリムといったイスラーム初期の学者たちは、ここでの「祖先」が意味するのは実際の両親や祖父母であることもあれば、人間という生命体としての自分を形づくる、あらゆる善良さと力強さを象徴する比喩としての「祖先」である場合もあるとしている。

101 「数日の間」とは巡礼の終わりの三日間を指す。

102 以降の三節はアフナス・イブン・シャリークという名の男に関連して啓示された。アフナスは美男で弁舌たくみな人物だったが、偽善者であった。彼はいかにもムスリムらしく預言者を訪問しては礼儀正しく話をしていたが、その信仰はうわべだけのものであり、彼の心は害毒と奸計に満ちていた。彼の唯一の目的は、ムスリムを害することだったのである。人間の風姿や言葉に惑わされてはならない。重要な事柄を委ねる前に、その人物の事実を調べるべきである。人間には二つの対照的な姿勢がある。（1）実際に気にかけているのは現世の生活についてのみの人の姿勢。そして、（2）現在の生活のみではなく、それ以上に来世について意識している人の姿勢である。

103 スハイブ・イブン・スィナーン・ルーミーという人物のために啓示された節である。マッカの異教徒たちはこの男を捕えて迫害し、イスラームを棄教させようとした。スハイブは迫害者たちに、自分は裕福な老人であり、所有する財産を

すべて差し出してしまえば、自分がイスラームへの忠誠を保持し続けたとしても彼らには何の害も及ばないだろうと述べた。異教徒たちはこれに同意し、彼を解放した。この節が啓示されたのは、彼がマディーナへ向かう途中でのことである。アブー・バクルは彼に会うと、「あなたが成し遂げた取引は、あなたにすばらしい益をもたらすだろう！」と述べて歓迎した。するとスハイブもこれに応じ、啓示されたばかりのこの節を復唱した。

104 唯一の神への完全な服従こそ、あらゆる真の信仰の基礎である。ユダヤ教徒やキリスト者の中には、イスラームが出現した際にも新たな宗教を受け入れず、預言者ムハンマドを認めない者もいた。

105 マッカの豪族アブー・ジャフルが、友人と共に信仰者を嘲笑した。この出来事に関連して、この節が啓示された。だがこの節には、より普遍的な意味合いも含まれている。信仰の甘美を味わったことのない者は、低俗な現世に喜びを見出すという非難である。

106 預言者アーダムの後裔である人類は、かつてひとつに和合していた。だが時が経つにつれ、お互いに不和になった。この隔たりに終止符を打つことも、預言者たちが遣わされた理由のひとつである。

107 ムスリムにとり、現世と来世の双方における成功への道とは、信仰と熱意をもって努力し、あらゆる困難に耐え、決して敗北感を抱くことなく、悪魔や下位のエゴが絶えずささやく快楽や自堕落の誘惑よりも、精神的な喜びを優先させることにある。複数の伝承によればこの節は、ハンダク（塹壕）の戦いか、あるいはウフドの戦いにおいてムスリムたちが置かれた状態を指している。また別の伝承によれば、マッカに生家や財産、家族を残してマディーナに移住したムスリムたちを指しているともされる。苦難の状態にあるムスリムたちを慰撫するための一種の恩賞として啓示された節である。

108 およそ戦争を好む人間はいないだろう。精神的に問題のある特定の個人を除けば、殺戮や破壊、他者に危害を加えることを純粋に楽しむ者などいない。しかし人命救助のために壊疽を起こした四肢を切断する場合や、閉じ込められた子どもを保護するために火事で燃える家屋に突入する場合のように、平常時であれば避けられるべき行動も非常時には必要とされることもある。信仰と良心の自由を確立するためには、抑圧や残虐な行為に対して戦うことが必要な場合もあるのである。こうした場合は、自由と正義を守ることが名誉と矜持の源泉となる。イスラームにおいてジハード（奮闘、努力の意）が確立されたのは、抑圧や残虐な行為を終わらせるためである。ジハードは侵略行為を意味するものではない。クルアーンに完全に基づいた状態であれば、ムスリム・非ムスリムを問わず信仰や崇拝、良心の自由が保証される。戦線の布告が可能になるのは納税や条約が一方的に拒否された場合に限られる。懲罰が科されるべき民があれば、神はあらゆる災厄をもって彼らを罰するが、戦争もそうした災厄の一種ともとれるだろう。同時に、神が人々を互いに争わせることがなければ、かえって法と秩序が崩壊するだろうことを示唆する節もある。

109 ムスリムと交戦状態にあったクライシュ族の交易隊商に関わる情報を得ようと、預言者ムハンマドが、アブドゥッラー・イブン・ジャフシュ率いる兵士の小団を差し向けたことがあった。彼らは隊商を待ち伏せし、見聞したことを預言者に報告した。それはイスラーム暦第七の月であるラジャブ月初日の出来事であった。異教徒たちは、預言者はアラビアでは神聖とされる月に戦闘行為をしていると訴えた。その結果として、以下の節が啓示された。

110 ぶどう酒その他のアルコール飲料の飲用は、イスラームの観点からは禁止された悪習である。しかしながら、単に禁止されているからという理由でそれに益がないことを意味するのではなく、その益を上回る害があることも示唆される。賭博もこれと同様である。ギャンブルで何かしらを得る者には益があるように思えるが、全体を総計すれば益よりも多くの苦しみがもたらされるために禁じられたのである。また「酔わせるものと賭けごと」は、いずれも中毒や常習の状態を引き起こす可能性がある。

次の二二〇節の始まりの部分は、二一九節の終わりの部分と関連している。来世に属する事柄を考えるのと同じように、現世においてなすべき仕事についても考える者が、両方において成功するのである。

111 ムスリムは、孤児が両親の不在を苦にすることのないよう手厚く世話をしなくてはならない。孤児の後見人となる者は、常に試みられていることを意識すべきである。神はその者が、子どもの成長を阻害する者か、あるいは成長を促す者かをよくご存知である。自らの一挙手一投足が、絶えず創造主の監視の下にあることを念頭においておくようにしなければならない。

112 イスラームにおいては、人間の価値は信仰によってはかられる。神の御目には、社会的な地位よりも信仰の方がはるかにまさる。したがってムスリムには、偶像を崇拝する者との婚姻は禁じられている。

113 この節には、信仰ある女性への吉報がある。月経中の性行為は女性の心身にとり不快かつ不利なことが多く、また衛生の面でも問題が増える。イスラームは清潔を是とする宗教である以上、男性はこの時点で不衛生な行為を放棄しなければならない。

114 この節では、性行為にいたる以前の問題として、精神的な親密さや、相手に対する思いやりといった事前の配慮の重要性が説かれている。またムスリムはこの節をもって肛門性交を禁じられている。

115 この節では、神に対する義務を果たし、人類の間に平和をもたらす好機が目の前にあるならば、以前にたてた誓いに縛られる必要はないことが強調されている。そうした誓いは、おそらく破られたとしても贖いを要することはない。

116 イスラーム以前のアラブの間には、夫が妻から配偶者としての権利をはく奪できる習慣があった。しかも妻となった女性を一生涯、自分との婚姻関係に束縛して再婚できないよう仕向けることも可能だった。夫が非難されたとしても、誓いを立てたと言いさえすれば問題ないものとされた。これらの節では、イスラームにおける離婚の原則が規定されている。四か月のいわば「冷却期間」を定め、その後に婚姻関係を保持するか、解消するかを決定することが夫の義務として課される。もしも夫がこれに従うことを拒否した場合、妻は法の執行権を有する者に訴え、夫に決定を強制することができる。





117 女性は、男性が自分たち自身に望むのと同等の権利を有している。

118 ここでは、離婚に際しての法が詳述されている。前節での「絶縁」とは、婚姻関係は維持しつつも性的な交わりを断つことを指す。以前は期限の定めがなかったことであるが、それを四か月に限定し、そののちに復縁するか離婚するかを決めることになった。イスラームの法によれば、男性が二回の宣言をすることで離婚は成立するが、その後も妻と復縁が可能である。しかし離婚の宣言が三回に達したなら、離婚後の妻が別の男性と再婚し、再び離婚したのでもない限り、同じ妻と復縁することはできない。夫婦の調和の欠如は正当な離婚理由として認められる。基本的には、離婚は双方の合意によって成立する。男性側の要請によることもあれば、女性側の要請によることもある。

119 この節の啓示には、マーキル・イブン・ヤサールという人物の身の上に起きた出来事が関連している。この節が啓示されるまで、彼は自分の姉妹がその前夫と再婚するのを妨げていた。預言者がマーキルに使いを送ると、彼は預言者の許へやって来て、神は自らの傲慢を拭い去ったと言い切り、神の命令に従い彼の姉妹を前夫と再婚させた。これと同様の出来事がジャービル・イブン・アブドゥッラーにも起きている。これらの節は特定の出来事に関連して啓示されてはいるが、啓示を通して定められた法はすべての信仰者が履行すべきものである。

120 上記の節で論じられている主題は以下の通りである。すなわち離婚、再婚、再婚前の待婚期間、子どもの監護権、養育に関する父母の義務。詳細についてはスンナと、イスラームの法に関する古典文献を参照する必要がある。

121 待婚期間を設けるのは、女性が妊娠していないことを確認するためである。夫と死別した場合であれば、それは静粛な喪の期間を兼ねることもあるだろう。絶対的に避けられない理由があるのでもない限り、この期間中に女性を煩わせることがあってはならない。優先されるべき目的は、彼女の心の平安を確保することである。理由が離婚か死別かに関わらず、夫を失った女性とその近親者を労わり、彼女が新たな人生に備えるためにも、待婚期間は心理面においても非常に有用である。それはまた、女性側の近親者によって誘発されがちなある種の害悪の防止にも役立つ。

122 女性が夫を失った場合、妊娠していなければ四か月と十日後には再婚が可能である。未亡人となった女性との結婚に関心のある男性が複数いることも考えられる。その場合、そうした男性が彼女の待婚期間中に求婚の意思を表明したとしても罪とはならない。あるいはそうした気持ちを、心の中に留めおくことを選んでも構わない。

123 ここでの「義務［の贈与］」とは、婚姻の契約（ニカー）の前に、新婦と新郎が婚資（マハル）として合意しておかねばならないものについて指している。婚資の額は、婚姻の当事者である両名の裁量に委ねられており、イスラームにおいては婚姻の契約を交わす際の重要な要素である。しかしながら婚資は新郎の経済力によって決まるものであり、新婦は新郎が賄える以上の贈与を求めてはならない。

124 ハディースにもある通り、礼拝は主要な「イスラームの柱」のひとつである。「真中の礼拝」とは、午後の礼拝（アスル）であるとされている。預言者はアフザーブの戦いの中で「彼らは、我らの真中の礼拝を妨げた！　神よ、彼らの家に火を放ちたまえ！」と述べたと伝えられている。イブン・アッバースはこれを根拠に、真中の礼拝とは午後の礼拝（アスル）であるとの見解を示している。だがイブン・ウマルの見解に従うなら、真中の礼拝とは正午の礼拝（ズフル）であるとされる。

125 これは戦時下に限らずどのような危機的な状況にも通じることである。そうした状況においては、一か所で一定以上の時間を過ごすのは危険を増やすだけである。そのため、「ファルド」すなわち義務の礼拝は馬上や徒歩の最中でも、キブラを考慮に入れる必要すらなく、どの方角へ向かってでも捧げることが可能である。

126 これが何の法的な過失もなく離婚された女性に関する節であることは明白である。夫の側の財政能力および時代的・地域的な社会状況に応じて、扶養に相当する費用が支払われる。

127 結婚生活に関する訓令を締めくくると、「死を恐れた者が幾千人も、その住家から出ていった」と、明らかに敵対的な攻撃にさらされている人々の描写を通し、クルアーンは再び戦争の問題に戻る。





128 ここでの「アッラーの道」とは、抑圧または謂れなき攻撃に対する自衛のための正当な戦争を意味する。

129 マドヤンに住むアマレクの民は、ジャールート（ゴリアテ）の命令の下にイスラエルの民を攻撃し、彼らを征服した。イスラエルの民はその預言者に、防衛を指揮する統率者を指名するよう提案した。預言者はヤアクーブ（ヤコブ）の息子タールート（サウル）を選んだ。彼が極貧の者であったため彼らはこの選択を拒否したが、善良な性質、知恵、身体的能力ゆえの神の選択であることを預言者が宣言すると、戦争に勝利するに足ると見込んでようやく妥協した。

130 ここでのイスラエルの民は、支配権は資産と資本を有する人々にあるという選民思想にとらわれており、統治は功績と知力、体力、経験、勇気を基準に行われるべきとする預言者の教えとは相いれない。

131 複数の典拠によると、「王権のしるし」としてのこの「箱」はアカシア材に金で裏打ちをした一種の櫃であり、その中には十戒が刻まれた石板が収められていた。預言者ムーサーは、戦時にはこれを運んで軍勢の前線に送り届けたと伝えられている。イスラエルの民が弱体化したとき、この箱がジャールートに奪われてしまった。すると彼らはタールートの王権に挑んで次のように述べた。「もし彼が真の支配者なら、真のしるしを彼に持って来させてください」。すると神はこの箱を天使たちに運ばせ、これをもって彼の王権の証明とした。

132 タールートは自分の軍勢に、信仰の証としての忠順さを示すよう求めた。動機の公正さ ― 高められた自己が伴わなければ、どれほど立派な動機も価値を持たない ― に対する信頼とは、規律に従うこと、くわえて物質的な利益を度外視したところに生じる。そうすることで神が与えた試練を乗り越え、成功を収めることができるのである。

133 ここでは軍事上の規律が論じられている。軍隊の成功とは、その物量的な規模の大小以前に、兵士たちが司令官にどれほど順応しているか、また自分たちの動機にどれほど信を置いているかによって決まる。ジャールートを討伐したとき、ダーウードはわずか七歳だったと伝えられている。ジャールートはダーウードによって殺められるだろうことを、神から告げられていた預言者は、ダーウードを伴って戦場へ赴いた。道すがら、三つの石がダーウードに語りかけた。「ダー

ウードよ、われらを拾え。汝はわれらをもってジャールートを殺めるだろう」。彼はそれらを地面から拾い上げ、石投げ器から放って敵の軍将を殪すのに用いた。

134 「玉座の節（アーヤトゥ・ル＝クルスィー）」と呼ばれる、名高い節である。神の特質のうちいくつかが描写され、神の崇高さが指し示されている。当然ながら、それらの特質は神のみが有するものである。この節を唱えることで得られる大いなる霊的な価値については、数多くのハディースにおいて説き明かされている。その中のひとつにおいて、預言者は次のように語っている。「クルアーンの最も偉大な（あるいは、最も重要な）節とは、玉座の節である。誰であれこの節を唱える者があれば、神はご自分の書にその善行を記録するために、特別な天使を遣わす。この節が唱えられた家からはシャイターンも逃げ出し、三十日の間は戻って来ないだろう。その家には魔術や魔術師も、四十日の間は入り込めない。アリーよ！　これをあなたの家族に、あなたの子どもたちに、そしてあなたの隣人たちに教えてやりなさい。曜日の王は金曜であり、言葉の王はクルアーンであり、クルアーンの主君は雌牛の章であり、そしてその章の主君は玉座の節である」。真心と信心をもってこの節を唱える者は、あらゆる災厄から守護されると言われている。「永生する御方」である神は不断に永遠かつ永生であり、これは神のみが有する属性のひとつである。「自存する御方」もまた神の属性のひとつであり、神が万物を維持し管理する者であること、また復活の日における裁き手であることを示している。

135 「ターグート」とは、神以外の、神ではないにもかかわらず崇拝の対象となっているあらゆるものを指す。人間は、悪魔の内なるそそのかしの標的であり、容易に道に迷う。自己規律と自己抑制、そして導き手の助けにより、人間はそうしたそそのかしと戦うよう自らに教え、間違った行動を遠ざけることができるようになる。人生とはターグートとの戦いの連続である。神に仕えずにいるときの人間は、他の何ものかを、自らの創造者よりも仕えるに値すると仮定して過ごしているのである。この節にはまた、宗教の真贋（しんがん）についての教えも含まれている。真贋（しんがん）がすでに明白である以上、信仰を伝えるのに無理強いをする必要はないし、また何であれ無理強いや圧迫は決してあってはならない。

136 真理を受け入れた信仰者と、真理を拒む者との対比である。前者は正しく「光」に導かれているが、後者は悪魔と自らの気まぐれによって暗闇に惹かれているのである。彼らにできることは、あらゆる暗闇の原型である業火の中で終わりを迎えることのみである。

137 クルアーンの解説者の大半は、二五八節に登場する「口論した者」、またこの節の「屋根も覆された［廃墟となった］町を通り過ぎた者」は、いずれも信仰なき者であったとしている。同時にいくつかの口伝によれば、この廃墟となった「町を通り過ぎた者」とはウザイル（エズラ）であるとしている。彼はわずかな食糧をもってろばを連れて旅をし、この町にたどりついた。彼はあたり一帯を見渡して、この町の過去の住民たちが、再び息を吹き返すことはあるのだろうか、とふと思った。とりとめもなく考えているうちに彼は眠りに落ち、百年ののち、神によって眠りから覚めると、彼の食糧は朽ちてはいなかったが、彼のろばは死んでおり骨のみが残されていた。しかし廃墟となっていた町は復活し、再建されていた。それから神は、彼の目の前でろばをよみがえらせてみせた。これにより彼は謙虚な心持ちになり、神の無限の力を理解した。この物語の寓意とは、真理を知らずにいる状態に対する、信仰がもたらす優位性である。また、預言者イブラーヒームと議論した人物とはニムロードであるともされている。また一部の解釈者は、この挿話はイブラーヒームと、「生かし、殺すのはこの私だ」と主張したフィルアウンとの間に起きた、エジプトでの出来事であるとしている。いずれにせよ覚えておくべき教訓とは、神について真実を求め、神について真実を語ろうとする者に、神は奇跡ともいうべき様々な援助の手を差し伸べるということであり、一見、克服が不可能に思えることでさえも克服させるということである。

138 人類の過ちを正すための導きとして神に遣わされた預言者たちであれば、この数節にも暗示されている通り、神に与えられた使命を果たすための奇跡的な力を持っていることもあるかもしれない。とはいえ、そうした力を彼らに与えるの

139 はただ神のみである。したがって、そうした力が魔術的なものとして解されることはない。ここでは預言者イブラーヒームが、自らの身の上に起きた奇跡を通して神の戒め（いまし）を受け取る様子が描写されている。あらゆる本物の奇跡に共通するように、それは人々を導き、神を想起させるためのものであり、彼の個人的な喜びのために用いられるものではなかった。

「赦し」を意味する語が、この文脈においては「他者の困窮を覆い隠す」といった意味で用いられている。この節では、慈善における非常に高度な基準が次の通り定められている。（1）慈善は、神のためにのみなされるのでなければならない。（2）慈善に、現世での見返りを期待してはならない。（3）慈善を行っただけで満足してはいけない。慈善について何度でも学び、よりよい慈善のあり方を考え、内省を続けなくてはならない。（4）慈善は無条件に行われるべきであり、受け取る者がその引き換えに煩わされたり傷つけられたりすることがあってはならない。与えた者が慈善を自慢するなどは論外である。

140 自らの財産を惜しみなく慈善に費やすことが奨励されている。また慈善を行うにあたり、嘲笑、侮辱、自慢は禁物であり、また困窮する者に対し、その苦境について叱責したり、見下したりすることがあってはならない。そのようなことをすれば、自らの慈善によって善徳を積む代わりに、神の怒りと罰を蒙ることもあり得る。

141 慈善とは、慈雨と肥沃な土に恵まれた豊かな大地のようなものである。水分が土に染み渡り、しかも水はけの良い高度な状態に保たれている。こうした健やかで良好な状態の大地では、その収穫も大いに増やされる。真の慈善の人は霊的にも健やかであり、神の恩恵をもっとも多く引きつけるだろう。

142 現世において人が直面するだろう具体的な問題が例として挙げられ、情景として描かれている。地位や財産その他の現世的な利益を保証されている者は誰もいないのである。多くの国家や帝国からして、そのほとんどが地上から消滅した。残されているのはかつての栄華とその崩壊を雄弁に物語る遺跡のみである。多くの富める者たちもやがて貧しさに陥り、また多くの国家が内乱によって崩壊していった。しかし人間は常に美しい夢やまぼろしを思い描くばかりで、ものごと





がどのような結末を迎えるかについては熟考しない。唯一、確実なこと、また唯一のなぐさめとなるのは、唯一の主、唯一の維持者を信じて委ねることである。

143 ここでの「知恵」とは、クルアーンの知識を指している。これを最初に授かったのは預言者であり、次いで彼の後継者、また自らの知識に従って行為する学者たちがその後に続く。もっとも知識ある者とは、人類全体にとりもっとも役立つ者である。預言者は次のハディースにおいてこう語っている。「有用な知識を神に求めよ、無用な知識からの加護を神に求めよ」。この知恵を有する者の特徴として正直さ、公正さ、誠実さ、愛、敬意、謙譲、他者のために尽くすこと、寛大さ、思いやりといった諸々の善良な資質が挙げられるだろう。クルアーンをよく学び、実践し、邪悪から身を守る者は知恵ある者であり、「多くの良いものを与えられた者」である。

144 「慈善」ひいては施しには、義務の場合と任意の場合とがある。一般に「喜捨」と訳されるザカートは義務に分類され、以下の二点の機能を持ち合わせている。（1）財産に清めと祝福をもたらす。（2）自らの信仰を高める。義務の場合であれ任意の場合であれ、公然と施すよりも秘密裏に差し出す方が、見せびらかすという罪を犯さずに済む分だけすぐれている。秘密裏に差し出すことはまた、貧者の尊厳を守ることにもなる。

145 「彼ら〔人間〕を導くことは、あなた〔ムハンマド〕の責任ではない」とは、「あなたは、神のメッセージを伝えることにのみ責任を負う。それに対する人々の反応についての責任は負わない」という意味である。また援助すべき貧者をどう定義するかという点についても重要である。マディーナに移住したばかりの頃、預言者とその仲間たちは、ムスリムの共同体をくまなくおおう貧困に直面していた。預言者は教友たちに、「慈善はイスラームに従う者たちにのみ与えるべきである」と述べたが、この見解は啓示によってその誤りが指摘された（イブン・カスィール、ラーズィー、タバリーらによる）。この節が啓示されたのち、預言者はその仲間たちに、ムスリムであるかどうかに関わらず、貧しい者すべてを慈善の対象とするよう命じた。クルアーンのこの節は預言者に宛てたものであるという点には、すべての解説者た

ちが完全に一致している。加えてすべてのムスリムではない人々をイスラームに招くのに慈善や脅迫的な手段を用いてはならないという戒めが結論として導き出された。

146 神の道のために奮闘する人々、また知識を身につけ、知識を世界に広めるために人生を捧げる人々を指している。尊敬されるべき働きをしていながら、そのために十分に生計を賄うことができないでいる。喜捨と慈善の受益者となるべき人々である。

147 イスラームにおけるいわゆる「十分の一税」に相当する喜捨を制定する根拠となった節である。神の命じるところに従い、しかるべく喜捨が支払われていれば、地上に貧困のはびこる余地はない。喜捨を受け取る資格は特定の人々に限られる。当然ながらこうした義務の喜捨の他にも様々な形態での慈善があり、慈善の性質に応じてその受益者に寄付することが可能である。

148 慈善が何ら物質的な見返りを期待することなく与えることで成立するのに対し、金利とは、相応の努力をすることなくして得られる利益に対する期待によって成立している。

149 何らかの手法で金利を受け取ったり支払ったりすることは、イスラームにおいては禁じられた不正な行為である。どこであろうとイスラームが完全な形で実践されている状態なら、絶望的な債務と搾取に傾きかねない融資のあり方は不要である。イスラームにおいては、参加者全員がリスクを分かち合うパートナーシップに基づく投資が経済活動として推奨される。金利の禁止は事業のコストの削減になり、またインフレーションの抑制にもなる。金銭は、商品を交換する売買のための手段である。リスクを伴わずに金銭そのものを売買の対象にすることは、非合理的かつ搾取的であり、本質的にはただ寄生しているだけの者を多数、生じさせかねないと考えられている。

150 これは金利が禁止された当時の信仰者のみならず、のちの時代にクルアーンのメッセージを信じるようになった人々にも通じる。





151 この節は預言者が授かった最後の啓示であり、彼はこの後ほどなくして天に召された（ブハーリーによる）。

152 これはクルアーンの中で最も長い節である。公証人の職務に必要な規則が含まれているが、これはおそらく人類史上ではほとんど初のことである。イスラームにおける法は、人間の権利と利益を保護するという原則に基づいており、負債に関することについても詳細に説き明かされている。市民の権利を守るために、法廷で目撃証言や証拠が重要視されるのは、現代の世俗的な法の実践においても認められる要件である。クルアーンは、社会の安定と平等を支える法的な手続きに参加することは全市民に課された義務であり、神の惜しみない報酬に値するものであるとし、たとえどれほど多忙であろうと、召喚があれば証言者として赴くよう命じている。この節でいう「商売」や「商取引」には、制限のない貸借や商業的な売買といった、信用を本位とするあらゆる取引が含まれる。また「期限を決めた貸し借り」とは、債権者と負債者の双方を対象としている。加えてこの節での「書記は書くことを拒んではならない。アッラーに教わったとおりに書きとどめること」とは、書記はクルアーンを通して周知されている法令に従って記述しなければならないことを意味する。また「いささかも少なめにしてはならない」とは、約定の文書化はより立場の弱い方、すなわち負債者に委ねられることを示している。「未熟な者か、あるいはか弱い者か、あるいは口述のできない者」とは、身体的に不利な条件を負わされている者、こうした取引の仕組みや、契約につきものの専門用語を完全には理解していない者を指すものと理解される。また未成年者や、精神の働きが完全ではない高齢者もこれに準ずる。

153 「あなたがたは、証言を隠してはならない」。これは商取引に限らず、書面による合意や、かつ証人なしで貸与や信用を与えられたのちに、自分の負債を否定しようとする負債者にも通じることである。

154 雌牛の章の最後のふたつの節には、信仰者の誠実さと忠実、また神の法への服従が反映されている。その前の節において示された信仰者の責任（「アッラーはあなたがたにその清算をさせる」）があまりにも重大であったため、初めてそれを耳にした教友たちは恐れと驚きを禁じ得なかった。しかしそれに続く啓示はムスリムを慰め、課された負担を軽くす

るものだった。神に対する服従は喜びに満ちた結実をもたらすことを告げるこの節は、ミゥラージュの夜、大天使ジブリールを介することなく、じかに預言者に啓示されたものである。預言者は様々なハディースにおいてこの節を称賛しており、ムスリムに対して常にこの節を暗唱するよう、また特に夜の就寝前には欠かすことのないよう奨励している。ここには、神の意志に対して喜びをもって従うというイスラームの精髄と、天国における公正な義の成就が含まれており、それ自体が本章の完璧な結論となっている。

# 第三章　アール・イムラーン　イムラーン家

マディーナ啓示

本章は二〇〇の節からなり、三三節から三七節にあるイムラーンの一族、ならびに祝福の聖母マルヤムの祖先にちなんでこの名で呼ばれている。イムラーンとはムーサーの父の名であるともされ、ムーサー（モーセ）から洗礼者ヤフヤー（ヨハネ）、イーサー（イエス・キリスト）に至るまで、ユダヤ教徒の預言者の総称としても用いられる。前章ではユダヤ教徒について詳細に論じられていたのに対し、本章はキリスト者について多く論じられており、またイーサーの預言者としての栄光についても語られている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 アリフ、ラーム、ミーム。
2 アッラー、その他にいかなる神もない。永生する御方、自存する御方。
3 かの御方はあなた［ムハンマド］に、以前のものの確証として、真理をもって啓典を下した。また、かの
御方は、律法と福音を下しもした、
4 以前に、人々への導きとして。そして［今、］分別を下した。アッラーの御しるし［の真理］を拒む者には、





厳重な懲罰があるだろう。アッラーは威力ある、報復の所有者。[1]
5 大地にも天にも、アッラーから隠せるものは何ひとつない。
6 御心のままに、あなたがたを子宮の中に形づくる御方。その他にいかなる神もない、威力ある御方、賢
明な御方。
7 あなたに、クルアーンを下す御方。その中には、［意味の］明瞭な御しるしがある。それらは啓典の母で
あり、その他にあいまいなものがある。心に偏りのある者は、あいまいなものの方にこだわり、不一致
を求め、［彼らに都合のよい］解釈を求める。しかし［真の］解釈を知るのはただアッラーのみ。知識に
根ざしている者たちは言う。「私たちはこれを信じます。これはすべて私たちの主の御許からのものです」。
しかし分別をもつ者の他は、想い起こそうともしない。[2]
8 ［彼らは祈って言う。］「主よ。あなたが私たちを導いた後になって、私たちの心が［道から］外れること
のないようにしてください。あなたの御許から、私たちに慈愛を授けてください。本当に、惜しみなく
授ける御方とはあなたのこと。
9 主よ。あなたは疑う余地もないその［審判の］日、人々を一斉に集める御方。本当にアッラーは、決して
その約束を破らない」。
10 ［真理を］拒む者たちには、彼らの財も子どもも、アッラーに対し何の役にも立たない。これらの者は、
業火の燃料となるだろう。
11 フィルアウンの一族や、それ以前の民がそうしていたように。彼らは、われらのしるしを嘘よばわりした。
それゆえ彼らの罪のために、アッラーは彼らを捕えた。アッラーは応報に厳しい御方。
12 ［ムハンマドよ、真理を］拒む者たちに言いなさい。「あなたがたは打ち負かされ、地獄に集められるだ

13 ろう。何と悪い寝床だろうか」。[3]
［バドルの戦場で］遭遇したふたつの軍隊の中にも、あなたがたのための御しるしがあった。一方はアッ
ラーの道のために戦い、もう一方は［真理を］拒む者たち。彼らの目には、相手が倍に見えていた。アッ
ラーは御心にかなう者をその助けによって強める。本当にその中には、見る目を持つ者のための教訓が
ある。[4]
14 人々の目には、諸々（もろもろ）の欲望の追求はすばらしいことに見える。女、子ども、積み上げられた金や銀、焼
き印を押された名馬、家畜、耕作地。それらは現世の生の楽しみ。しかし最善の安息の場は、アッラー
の御許にある。
15 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「それよりも、もっと良いことをあなたがたに教えようか。畏れる者たち
には、主の御許に、川がその下を流れる楽園がある。彼らは永遠にその中に住まい、清らかな伴侶と、アッ
ラーからの喜びにあずかる。アッラーはしもべたちを見通している、[5]
16 『主よ、本当に私たちは信じました。ですから私たちの罪を赦し、私たちを業火の懲罰から救い出してく
ださい』と言う者たちを」。
17 よく耐える者、真実な者、従順な者、［道のために］財を費やす者、夜明け前から赦しを願う者たち。
18 アッラーは、その他にいかなる神もないことの証言者。天使たち、正道に立つ知識ある者たちもまた。
その他にいかなる神もない、威力ある御方、賢明な御方。
19 本当に、アッラーの御許の宗教とはイスラームのこと。知識が到来した後になって、［以前に］啓典を与
えられた者が相争うのは、彼らの間にある嫉妬のため。アッラーの御しるし［の真理］を拒む者があるな
ら、本当にアッラーは、たちまちにして清算する御方。[6]





20 ［ムハンマドよ、］もし彼らがあなたと口論するなら、言いなさい。「私はアッラーに服従している、私に
従う者たちもまた」。啓典を与えられた者たちにも、文字を知らない者にも言いなさい。「あなたがたは
服従したのか」。それで、もし彼らが服従したなら、彼らはすでに導かれている。しかし、もし彼らが背
を向けるなら、あなたに課されているのは、ただのべ伝えることのみ。アッラーは、しもべたちを見て
いる。[7]
21 アッラーの御しるし［の真理］を拒み、正当な理由なくして預言者たちを殺害し、人々の中にあって正道
を勧める者を殺害する者たち。彼らには、痛烈な懲罰の報せを伝えなさい。
22 彼らの行いは、現世においても来世においても全くの無に帰される。彼らには、助けとなる者はない。[8]
23 見なかったのか、啓典の一部を与えられた者たちを。彼らは、彼らの間のことを判断するための、アッラー
の啓典に呼び招かれた。そののち、彼らのうちある者は背を向けた。彼らは、背き去った者。[9]
24 これは彼らが、「業火が私たちに触れたとしても、数日に過ぎないだろう」などと言うため。自分たちで
ねつ造したもののために、彼らは自分たちの宗教について欺（あざむ）かれている。
25 疑う余地もないその日、われらが彼らを一斉に集めたならどのようであろうか。各人は、得てきたもの
に応じて十分に報いられ、不正に扱われることはない。
26 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「アッラー、王権の所有者よ。あなたは御心にかなう者に王権を与え、ま
た御心のままに王権を取り上げる。あなたは御心にかなう者を高め、また御心のままに低める。良いも
のは［すべて］あなたの手の中にある。本当にあなたは、ありとあらゆるものごとにおいて全能です。
27 あなたは夜を昼に入らせ、また昼を夜に入らせる。死せるものの中から生けるものを連れ出し、また生
けるものの中から死せるものを連れゆく。そして御心にかなう者には、計り知れない糧をもたらします」。

28 信仰者は、信仰者をさし置いて［真理を］拒む者を友としてはならない。誰であれそうする者は、畏れをもってあらかじめその身を守らない限り、何ひとつアッラーに望めないだろう。アッラーはあなたがたに、御自らについて警告している。行き着く先は、アッラーにある。[10]

29 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「あなたがたが胸の中にあるものを押し隠そうと、あるいは明かそうと、アッラーはそれを知っている」。かの御方は諸天にあるもの、大地にあるものをことごとく知っている。アッラーは、あらゆるものごとにおいて全能である。[11]

30 すべての者が、それぞれの行った善と、また行った悪とに直面させられるその日。自分とそれとの間が、遠く隔てられていたならと望むだろう。アッラーはあなたがたに、御自らについて警告している。アッラーは、しもべたちに親切である。

31 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「もしあなたがたがアッラーを愛するなら、私に従いなさい。アッラーはあなたがたを愛し、あなたがたの罪を赦すだろう」。アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。

32 言いなさい。「アッラーと、使徒とに従いなさい」。しかし、もし彼らが背き去るなら、アッラーは［真理を］拒む者を愛さない。

33 アッラーはアーダムと、ヌーフと、イブラーヒームの一族と、イムラーンの一族とを万人の上に選んだ。

34 彼らは互いの子孫である。アッラーはすべてを聞き、すべてを知る。[12]

35 イムラーンの妻がこう言ったときのこと［を思いなさい］。「主よ。私の胎内にあるものにかけて、私はこれをあなたに捧げます。ですから受け入れてください。本当に、すべてを聞く御方、すべてを知る御方とはあなたのこと」。

36 それから子を産み、彼女は「主よ。私が産んだのは女の子でした」と言った。アッラーの方が、彼女が





産んだ子についてより知っている。男の子は、女の子と同じようではない。「私は、彼女をマルヤムと名づけました。彼女とその子孫に、棄てられし悪魔に対するあなたの加護を求めます」。[13]

37 主はこれを嘉(よみ)して彼女を受け入れた。彼女をみごとに育み、ザカリーヤーにその世話をさせた。ザカリーヤーが彼女の聖所に入ると、そこにはいつでも彼女の糧があった。彼は言った。「マルヤムよ。これはどこから、あなたのところへ」。彼女は言った。「これはアッラーの御許から。本当にアッラーは、御心にかなう者には計り知れない糧をもたらします」。[14]

38 それでザカリーヤーも、主に祈った。「主よ。私に、あなたからの良い子孫を授けてください。本当にあなたは、祈りを聞き届けてくださいます」。

39 聖所に立って礼拝をしている彼に、天使たちが呼びかけた。「アッラーからあなたに、ヤフヤーについての良い報せを伝える。アッラーからの御言葉を確認する、ほまれ高く貞潔な預言者、正しい者のひとりとなるだろう」。[15]

40 彼［ザカリーヤー］は言った。「主よ。どうして私に男の子ができるでしょう、私はすでに年老いており、妻も身ごもることはできないのに」。彼［天使］は言った。「このように、アッラーは御心のままに行う」。

41 彼［ザカリーヤー］は言った。「主よ。私に御しるしを示してください」。彼［天使］は言った。「あなたへのしるしとして、三日の間、あなたは身ぶり手ぶりだけで人々と話をすることになるだろう。あなたの主を多く想い起こしなさい。晩も朝も讃美しなさい」。

42 天使たちがこう言ったときのこと［を思いなさい］。「マルヤムよ。本当にアッラーはあなたを選び、あなたを清浄にした。諸世界の女たちの上に、あなたを選んだ。

43 マルヤムよ。あなたの主に従順でありなさい。ひれ伏しなさい。こうべを垂れる者たちと共にこうべを

垂れなさい」。

44 これはわれらがあなた［ムハンマド］に啓示する、目には見えないものの話。マルヤムの世話をするのは誰かと、彼らが筆を投げていたとき、あなたはその場にいなかった。彼らが反目し合っていたとき、あなたはその場にいなかった。[16]

45 また天使たちがこう言ったときのこと［を思いなさい］。「マルヤムよ。本当にアッラーからあなたに、御許からの御言葉についての良い報せを伝える。その名はマスィーフ、マルヤムの子イーサー。現世においても来世においてもほまれ高く、［主の］そば近くにある者。[17]

46 ゆりかごの中でも、成人してからも人々に語りかけ、正しい者のひとりとなるだろう」。[18]

47 彼女は言った。「主よ。どうして私に男の子ができるでしょう、誰も私に触れていないのに」。彼［天使］は言った。「このように、アッラーは御心のままに創造する。何ごとかを決めるとき、それにただ『在れ』と告げれば、それは在る。[19]

48 アッラーは彼に啓典と、知恵と、律法と、福音とを教える。

49 そして彼を、イスラエルの民への使徒とするだろう。［イーサーは彼らに言うだろう。］『私は、あなたがたの主の御しるしをもってあなたがたのところへ来た。私はあなたがたに、泥から鳥の形を作ろう。私が息を吹き込むと、アッラーの思し召しによって、それは鳥になるだろう。私はアッラーの思し召しによって、目の見えない者、患う者をいやし、死せるものを生き返らせよう。あなたがたが何を食べ、何を家に蓄えるかを報せよう。本当にその中には、あなたがたのための御しるしがある、もしあなたがたが信仰者なら。[20]

50 私は、私より以前の律法を確認し、あなたがたに禁じられていた諸々の一部を、あなたがたのために合





法としよう。私は、あなたがたの主の御しるしをもってあなたがたのところへ来た。それゆえアッラーを畏れなさい、そして私に従うといい。

51 本当にアッラーは私の主であり、あなたがたの主。それゆえこの御方に仕えなさい、これこそはまっすぐな道』」。[21]

52 彼らから［真理に対する］拒否を感じ取ると、イーサーは言った。「アッラーの［道の］ために、私を助ける者となるのは誰か」。弟子たちは言った。「私たちが、アッラーの［道の］ために助ける者です。私たちはアッラーを信じます。ですから、私たちが［主に］服従する者［ムスリム］であることの証人になってください。[22]

53 主よ。私たちはあなたが下したものを信じ、あなたの使徒に従います。私たちを［真理の］証言者として書きとどめてください」。[23]

54 彼らは策略をめぐらせた。しかしアッラーも策略をめぐらせた。アッラーは、策略者のうちもっともすぐれている。[24]

55 アッラーがこう告げたときのこと［を思いなさい］。「イーサーよ。われはあなたを召し上げる。われのところにあなたを昇らせ、［真理を］拒む者たちからあなたを清める。またわれはあなたに従う者たちを、復活の日まで、［真理を］拒む者たちにまさる者としよう。そののち、あなたがたの帰りゆく先はわれにある。それからあなたがたが相争っていたことについて、われはあなたがたの間に判断を下すだろう。[25]

56 ［真理を］拒む者たちについては、現世と来世において、われが厳しい懲罰を加えよう。彼らには、助けとなる者はないだろう」。

57 信じて正しい行いをする者に、かの御方は十分に報いるだろう。アッラーは、不正をなす者を愛さない。

58 それはわれらがあなた［ムハンマド］に読み聞かせるしるし、賢明な戒め。

59 アッラーの御許のイーサーは、例えるならアーダムと同じようなもの。かの御方は彼［アーダム］を泥から創造し、そののち彼にただ「在れ」と告げると、彼は在った。[26]

60 真理はあなたの主から。それゆえ、疑う者のひとりになってはならない。

61 それで、あなたに知識がもたらされた後になって、これについてあなたと口論する者があれば、言いなさい。「さあ、私たちの子どもたちとあなたがたの子どもたち、私たちの女たちとあなたがたの女たち、私たち自身とあなたがた自身を呼び寄せて［一緒に］祈願しよう、嘘をつく者がアッラーに忌まれますようにと」。[27]

62 本当に、これぞ真実の物語。アッラーの他にいかなる神もない。そして本当に、アッラー、威力ある御方、賢明な御方。[28]

63 そして、もし彼らが背を向けるなら、アッラーは退廃を広める者を知っている。

64 言いなさい。「啓典の人々よ。私たちとあなたがたの間で同じくする御言葉に来なさい。私たちはアッラーの他に何ものにも仕えず、他の何ものをも同列に連ねることはしない。また私たちはアッラーをさし置いて、他の何ものをも自分の主とはしない」。しかし、もし彼らが背を向けるなら、言いなさい。「［では、せめて］私たちが［主に］服従する者［ムスリム］であることの証人になってください」。[29]

65 啓典の人々よ。あなたがたは、どうしてイブラーヒームについて口論するのか。律法も福音も、彼の後になって下されたもの。それでもあなたがたは、考えないのか。

66 見なさい。あなたがたは、すでに知識があることについてでさえ口論するのに、どうして知識のないことについてまで口論するのか。アッラーは知っている。しかしあなたがたは何も知らない。[30]





67 イブラーヒームは、ユダヤ教徒でもキリスト者でもなかった。彼は純正な人、ムスリムであり、多神を奉ずる者のひとりではなかった。

68 本当に、人々のうちイブラーヒームにもっとも近しいのは、彼に従った者たち、この預言者、そして信じる者たち。アッラーは信仰者たちの庇護者である。

69 啓典の人々のうち、ある一派はあなたがたを迷わせたいと望んでいる。しかし彼らは、自分でも気づかないうちに、ただ自分自身を迷わせるだけ。

70 啓典の人々よ。あなたがたは、どうしてアッラーの御しるし［の真理］を拒むのか。あなたがたも、その証人であるというのに。[31]

71 啓典の人々よ。あなたがたは、どうして真理を虚偽と混ぜ、そうと知りながら真理を隠すのか。

72 啓典の人々のうち、ある一派は言う。「信じる者たちに下されたものを、日の始まりには信じ、日の終わりにはそれ［が真理であること］を拒みなさい。［これにより］彼らも、［自分たちの信仰から］帰ってくることだろう。[32]

73 あなたがたの宗教に従う者以外、信用してはならない」。言いなさい。「アッラーの導きこそ、導きというもの。あなたがたが与えられているのと同じようなものが、他の誰かにも与えられ、あるいは彼らが主の御許で、あなたがたと口論するかもしれない［のを恐れるのか］」。言いなさい。「御恵みはアッラーの御手にあり、御心にかなう者にそれを与える。アッラーは果てしなく広大であり、すべてを知る。[33]

74 御心のままに、その慈悲にかなう者を選ぶ。アッラーは大いなる御恵みの所有者。

75 啓典の人々には、あなたが大金を預けるとこれを返す者もあれば、居続けて催促しない限り、金貨一枚でさえ返さない者もある。それは彼らが、「私たちには、文字を知らない者に対して何の義理もない」と

言うため。彼らはアッラーについて、そうと知りながら嘘をつく。[34]
76 いいや、そうではない。自分のした約束を果たし、畏れる者。本当にアッラーは、畏れる者を愛する。[35]
77 アッラーの契約と自分の誓いを、わずかな代価と引き換えにする者たち。これらの者に、来世の分け前
はないだろう。復活の日、アッラーは彼らに語りかけず、一瞥もせず、彼らを清らかにもしない。彼ら
には、痛烈な懲罰があるだろう。
78 彼らのうち、ある一派は自分の舌先で啓典［の言葉］をねじ曲げて、啓典にはないものを、啓典のように
あなたがたに思わせようとする。アッラーの御許からではないものを、「これはアッラーの御許からのも
の」と言う。彼らはアッラーについて、そうと知りながら嘘をつく。[36]
79 アッラーに啓典と、知恵と、預言者の資質とを与えられた人の身なら、アッラーをさし置いて、人々に「私
に仕えよ」などとは言わない。むしろ「あなたがたは啓典を教え、学ぶ者として主に仕えなさい」［と言
うだろう］。[37]
80 またあなたがたに、天使たちや預言者たちを主とするよう命じたりはしない。あなたがたが服従する者［ム
スリム］となったときに、どうして［真理を］拒むよう命じるだろうか。[38]
81 アッラーが、預言者たちの誓約を受け取ったときのこと［を思いなさい］。「われはあなたがたに啓典と
知恵とを与える。そののち、あなたがたと共にあるものを確認するため、ひとりの使徒が到来する。あ
なたがたは彼を信頼し、彼を助けなさい」。かの御方は告げた。「あなたがたはこれを承諾するか。あな
たがたは、われの課すものを引き受けるか」。彼らは言った。「私たちは承知します」。かの御方は告げた。
「では、証言しなさい。われも、あなたがたと共に証言しよう」。[39]
82 これの後になって背を向けるなら、これらの者は背く者。





83 それでもアッラーの宗教以外のものを探し求めるのか。諸天と大地にあるものは、好むと好まざるとに
関わらず、何であれかの御方に服従し、その御許へ帰されるというのに。
84 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「私たちはアッラーと、私たちに下されたものとを信じます。またイブラー
ヒームと、イスマーイールと、イスハークと、ヤアクーブと、諸々の支族とに下されたものを。またムー
サーと、イーサーと、預言者たちとに、主から与えられたものを。私たちは、彼らの間で誰のことも分
けへだてはしません。私たちは、かの御方に服従します」。
85 イスラーム以外の何かを宗教として探し求める者は、何ひとつ受け入れてはもらえない。来世においては、
敗者となるだろう。[40]
86 信じるようになり、使徒が真実であることを証言し、明白な証がもたらされた後になって［真理を］拒む
ようになった民を、どうしてアッラーが導くだろうか。アッラーは、不正をなす民を導かない。[41]
87 これらの者は、その報いとしてアッラーに、天使たちに、人々にことごとく忌まれ、
88 その［非難の］中に永遠に取り残されるだろう。懲罰は軽くもされず、また猶予もされないだろう。
89 後になって悔い改め、自らをただす者は別で、本当にアッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。
90 しかし、信じるようになった後で［真理を］拒むようになり、そののち拒否を深める者の悔い改めは、決
して受け入れてはもらえないだろう。これらの者こそ迷い去った者。
91 本当に、［真理を］拒み、また［真理を］拒む者として死ぬのなら、大地を満たすほどの黄金をその代償
としようと、決して受け入れてはもらえないだろう。これらの者には、痛烈な懲罰があるだろう。彼ら
には、助けとなる者はないだろう。[42]
92 自分の大切にしているものを［主の道のために］費やすようにならない限り、あなたがたは徳をなしたこ

とにならない。あなたがたが費やしたものは何であれ、アッラーはすべて知っている。[43]

93 律法が下される以前は、イスラエルが自ら禁じたものを除いて、すべての食べものがイスラエルの民にとり合法であった。言いなさい。「律法を持ってきて読み聞かせてみなさい、もしあなたがたが真実を語っているのなら」。[44]

94 それでもアッラーについて嘘をねつ造する者、これらの者こそ不正をなす者。

95 言いなさい。「アッラーは真実を語る。それゆえ純正な人イブラーヒームの宗旨に従いなさい。彼は、多神を奉ずる者のひとりではなかった」。

96 人々のために最初に建てられた家はバッカ［マッカ］にある。それは祝福された、諸世界のための導き。

97 その中には明白な諸々の御しるしと、イブラーヒームの立ったところがある。誰であれその中に入った者は安全であり、また誰であれそこへの道をたどれるなら、この家を巡礼することがアッラーに対して人々に課されている。また誰であれ［真理を］拒む者があっても、本当にアッラーは諸世界から［何も必要としない］満ち足りた御方。[45]

98 言いなさい。「啓典の人々よ。あなたがたは、どうしてアッラーの諸々の御しるし［の真理］を拒むのか。アッラーはあなたがたの行いの証言者であるというのに」。

99 言いなさい。「啓典の人々よ。あなたがたは、どうして信じる者をアッラーの道から遮り、つとめてねじ曲げようとするのか。あなたがたは［真理の］証人であるというのに。アッラーは、あなたがたの行いに無頓着ではない」。

100 信じる者たちよ。もしあなたがたが、啓典を与えられている者たちのうちある者に従うようなら、信じるようになった後のあなたがたを、［真理に対する］拒否に引き戻してしまうだろう。





101 アッラーの御しるしを読み聞かされ、その使徒があなたがたの中にいるというのに、どうして［真理を］拒んでいられるだろうか。アッラーにしっかりとすがる者は、確かにまっすぐな道に導かれるだろう。

102 信じる者たちよ。あなたがたは、畏れるべくしてアッラーを畏れなさい。服従する者［ムスリム］にならずに死んでしまってはならない。[46]

103 そしてアッラーの絆に、皆そろってしっかりとすがりなさい。離ればなれになってはならない。あなたがたに対する、アッラーの恩寵を憶えておきなさい。あなたがたが［互いに］敵であったときに、あなたがたの心を結び合わせた。その恩寵により、あなたがたはきょうだいになれた。火獄の穴の淵にいたあなたがたを救い出した。このようにアッラーは、あなたがたのために御しるしを明らかにする。あなたがたも、導かれるようになるだろう。[47]

104 そしてあなたがたは共同体として、［その内側から人々を］良いことに招き、親切を勧め、非道を禁じなさい。これらの者こそ、栄える者。[48]

105 明白な証がもたらされた後になって離ればなれになり、相争う者のようになってはならない。これらの者には、大いなる懲罰があるだろう。

106 その日、ある者の顔は明るくなり、またある者の顔は暗くなる。顔が暗くなった者には、「信じた後になって、［再び真理を］拒むようになったのか。それなら、あなたがたが［真理を］拒んでいたことへの懲罰を味わえ」。

107 しかし顔が明るくなった者は、アッラーの慈愛の中にある。彼らは、永遠にその中に住まうだろう。

108 これらはアッラーの御しるし。われらは真理をもってあなたに読み聞かせる。アッラーは諸世界に不正なことを望まない。

109 諸天にあるもの、大地にあるもの、ことごとくアッラーに属する。万事はアッラーに帰される。

110 あなたがたは、もっとも良い共同体として人々の中に立ち現れた。あなたがたは親切を勧め、非道を禁じ、アッラーを信じる。もし啓典の人々が信じるなら、その方が彼らのために良い。彼らの中には信仰者もいる。しかし、彼らの多くは背く者。

111 煩わしいことを除いて、彼らはあなたがたを傷つけることはしない。もし彼らがあなたに戦いをしかけたとしても、彼らはその背中を向けて逃げ去るだろう。そののち、彼らが助けられることはないだろう。

112 アッラーからの絆と、人々からの絆とを結んでいない限り、どこにいようと彼らは屈辱に打たれるだろう。彼らはアッラーの怒りを招き、貧しさに打たれるだろう。それは、彼らがアッラーの御しるし［の真理］を［いつまでも］拒み、また預言者たちを正当な理由なくして殺害してきたため。それは彼らが逆らい、法に外れたため。[49]

113 彼らの皆が皆、同じなのではない。啓典の人々の中には、夜の一刻にアッラーの御しるしを復唱してひれ伏す、正直な共同体もある。

114 彼らはアッラーと終末の日を信じ、親切を勧め、非道を禁じ、もっとも良いことのために競い合う。これらの者は、正しい者のひとり。

115 彼らが行うどのような良いことも、決して拒否されはしないだろう。アッラーは畏れる者を知っている。[50]

116 ［真理を］拒む者たちには、彼らの財も子どもも、アッラーに対し何の役にも立たない。これらの者は火獄の仲間。彼らは、永遠にその中に住まうだろう。

117 彼らが現世の生で費やすものを例えるなら、それは霜を含む寒風のようなもの。それは自分で自分に不正をなす民の作物を滅ぼす。アッラーが彼らに不正をなしたのではない。彼らが、ただ自分自身に不正





をなしただけ。[51]

118 信じる者たちよ。あなたがた同士以外の、あなたがたを傷つけるのも厭わない者と睦まじくしてはならない。彼らはあなたがたが苦しむのを望む。彼らの口からはすでにその憎悪がほとばしり出ている。しかし、胸の中に押し隠しているものはさらに大それている。われらはあなたがたのために、すでにしるしを明らかにした。もしあなたがたが、考えるようになりさえするなら。

119 見なさい。あなたがたは彼らを愛する。しかし彼らは、あなたがたを愛さない。あなたがたは啓典のすべてを信じる。しかし彼らは、あなたがたに会うとき「私たちは信じます」と言い、また彼らだけになるとき、あなたがたに対する怒りのために指先を噛む。言いなさい。「怒り狂って死んでしまえ。本当にアッラーは、胸の中に抱くことを知っている」。

120 良いことがあなたがたに触れると、彼らは落胆する。しかしあなたがたが悪いことに見舞われると、彼らは有頂天になる。もしあなたがたがよく耐えて畏れるなら、彼らの企みはいささかもあなたがたを害することはできない。本当にアッラーは、彼らの行いを把握している。

121 あなたが朝早くに家族のもとを立ち、信仰する者たちを戦列に配したときのこと［を思いなさい］。アッラーはすべてを聞き、すべてを知る。

122 あなたがたのうち二つの隊が勇気をなくしかけたときのこと［を思いなさい］。しかし、アッラーが彼らの庇護者だった。信仰者なら、アッラーにこそ委ねなさい。[52]

123 また確かにアッラーは、バドルにおいて弱々しかったあなたがたを助けた。それゆえアッラーを畏れなさい。あなたがたは、感謝するようになるだろう。

124 またあなたが、信仰者たちに言ったときのこと［を思いなさい］。「主があなたがたのために、援軍とし

て三千の天使たちを下しても、まだ十分ではないというのか」。

125 いいや、あなたがたがよく耐えて畏れるなら、もし彼ら［敵］が急に襲来しても、主はあなたがたのために、五千の練磨された天使たちを下して援軍とするだろう。

126 アッラーはこれを、ただあなたがたのための良い報せとし、またあなたがたの心のやすらぎとした。助けは、ただアッラーの御許からのみ。もっとも威力ある御方、もっとも賢明な御方。

127 また［真理を］拒む者たちの一端を切りくずすか、あるいは圧倒し、失意のうちに退却させるため。[53]

128 彼らを容赦するか、あるいは懲罰を科すかを決めるのは、あなた［ムハンマド］には何ひとつ関わりのないこと。本当に彼らは、不正をなす者。

129 諸天にあるもの、大地にあるもの、ことごとくアッラーに属する。御心にかなう者を赦し、またそうと望めば誰であれ罰する。アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。

130 信じる者たちよ。あなたがたは、何倍にも、また何倍にもなる利子を貪ってはならない。アッラーを畏れなさい。そうすれば、あなたがたは栄えるだろう。[54]

131 ［真理を］拒む者のために用意された業火に対し、畏れをもってその身を守りなさい。

132 アッラーと、使徒とに従いなさい。そうすれば、あなたがたは慈悲にあずかるだろう。

133 そして主からの赦しと、諸天と大地ほど広い楽園へ急ぎなさい。それは畏れる者のために用意されたもの。

134 安楽にあっても困難にあっても［主の道のために］費やし、怒りを抑え、すすんで人々に親切にする者。アッラーは、行いの善良な者を愛する。

135 そして不品行や、あるいは自分で自分に不正をなしたとき、アッラーを想い起こしてその罪の赦しを願う者たち。アッラーの他に、誰が罪を赦すだろうか。また、［それが罪であると］知りながら行ったこと





に執着することのない者。[55]

136 これらの者は、彼らの主からの赦しと、川がその下を流れる楽園をもって報われる。永遠に、その中に住まうだろう。［正しいことのために］労を惜しまぬ者の報酬の、なんという至福か。

137 あなたがた以前にも、過ぎ去った多くの情景があった。地上を旅し、そして見なさい、［戒め（いましめ）を伝えた使徒たちや、あるいは戒めそのものを］嘘よばわりした者たちの最後がどのようであったかを。

138 これは人々への説き明かしにして、アッラーを畏れる者への導きと教示。

139 臆することはない、嘆くことはない。もしあなたがたが信仰者なら、優位に立つのはあなたがたの方なのだから。[56]

140 もしあなたがたが傷を負っても、相手の民もまた同じように負っている。このようにわれらは人々の間に、日々の移り変わりをもたらす。それによりアッラーが信じる者を知り、あなたがたの中から証言者［あるいは殉教者］を選ぶため。アッラーは、不正をなす者を愛さない。[57]

141 それによりアッラーが信じる者を選りすぐり、また［真理を］拒む者をくじくため。

142 あるいはあなたがたは、アッラーが、あなたがたのうち誰が［主の道のために］励む者かを知ることも、また誰が［主の道のために］よく耐える者かを知ることもなく、あなたがたを楽園に入れると思うのか。

143 かつてあなたがたは死を望んでいた、それを［戦場で］目の当たりにする以前は。今こそあなたがたは、それを目の当たりにしただろう。

144 ムハンマドは、ひとりの使徒に過ぎない。彼以前にも、すでに［多くの］使徒たちが過ぎ去った。もし彼が死ぬか、あるいは討ち取られたなら、あなたがたはきびすを返して［信仰なき状態に］戻るのか。誰がきびすを返して戻ろうと、何ひとつアッラーを害せない。アッラーは、感謝する者に報いるだろう。[58]

145 ［あらかじめ］記された定めによるアッラーの思し召し無くしては、誰も死を迎えることはできない。誰であれ現世での報奨を欲する者には、われらがそれを授けよう。誰であれ来世の報奨を欲する者には、それもまた、われらが授けよう。われらは、感謝する者に報いるだろう。

146 多くの信仰あつい者たちと共に戦った預言者が、どれほどいただろうか。アッラーの道において彼らに何が降りかかろうと、臆することなく、衰えることなく、屈することもなかった。アッラーは、よく耐える者を愛する。

147 彼らが言っていたのは、ただ「主よ、私たちの罪と、私たちの度を過ぎた行いを赦してください。私たちの足元を確かなものとしてください。そして［真理を］拒む民に対し、私たち［の勝利］を助けてください」という言葉だけ。

148 それゆえアッラーは、彼らに現世の報奨も、来世のすぐれた報奨も与えた。アッラーは、行いの善良な者を愛する。

149 信じる者たちよ。もし［真理を］拒む者たちに従えば、彼らはあなたがたにきびすを返させるだろう。そしてあなたがたは、敗者に戻ることになるだろう。

150 いいや、あなたがたの庇護者はアッラー。この御方こそは最良の援助者。[59]

151 われらは、［真理を］拒む者たちの心に恐怖を投げ入れよう。それは彼らが、何の権威も下されていない何ものかを、アッラーと同列に連ねたため。彼らは、火獄がその住まい。不正をなす者の居どころの、何と悪いことか。[60]

152 思し召しによりあなたがたが彼らを討ち取ったとき、アッラーは確かにあなたがたに対し、その約束を果たした。しかしあなたがたの愛するものを見せたとき、その後になってあなたがたは勇気をなくし、［預





言者に］命じられたことについて争い、逆らうようになった。あなたがたのうちある者は現世を望み、また他のある者は来世を望む。そののち、あなたがたを試みるために、かの御方はあなたがたを彼らから退かせた。しかしかの御方は、すでにあなたがたを容赦している。アッラーは、信じる者への御恵みの所有者。[61]

153 あなたがたが、逃げ道を登っていったときのこと［を思いなさい］。使徒が後ろからあなたがたを呼んでいたのに、あなたがたは誰ひとり顧みようともしなかった。それゆえかの御方は、苦痛に次ぐ苦痛をもってあなたがたに報いた。それは失われたものや降りかかるものについて、あなたがたが嘆くこともできないようにするため。アッラーは、あなたがたの行いを十分に知り尽くしている。[62]

154 そののち、かの御方は、苦痛の後にはあなたがたに安全を下した。あなたがたのうち一部の者はまどろみに陥り、また他の一部の者は自分の身のことだけを心配し、無知の者がするように、アッラーについて真理ではないことを推測して言った。「このことと私たちに、何の関わりがあるのか」。［ムハンマドよ、］言いなさい。「このことは、すべてアッラーに関わること」。彼らは、彼ら自身の内側に押し隠してあなたには明かさない。そして「もしこのことと私たちに何か関わりがあるなら、私たちがここで殺されるはずがない」と言う。言いなさい。「もしあなたがたが自分たちの家にいたとしても、殺されることが定められている者は、必ずや自分の倒れる場所へと出てくる」。それはアッラーがあなたがたの胸の中にあるものを試し、心の中にあるものを選りすぐるため。そしてアッラーは、胸の中に抱くことを知っている。[63]

155 ふたつの軍隊が遭遇したその日、あなたがたのうち背を向けた者は、悪魔にすべり落とされただけ。しかしアッラーは、すでに彼らを容赦している。アッラーはもっともよく赦し、もっとも寛容な御方。[64]

156 信じる者たちよ。あなたがたは［真理を］拒む者たちのようであってはならない。彼らは自分のきょうだいが地上を旅したり、あるいは遠征に出ているとき、「もし彼らが私たちのところにいたなら、死んだり、殺されたりすることもなかっただろうに」などと言う。しかしそれはアッラーが、彼らの心の中に悔恨をもたらそうとしてのこと。アッラーは生かしも、死なせもする。アッラーは、あなたがたが行っていることをすべて見ている。

157 もしあなたがたが、アッラーの道のために殺されたり、あるいは死んだりしても、アッラーの赦しと慈悲の方が、彼らの積み上げるものよりもはるかに良い。

158 もしあなたがたが死んだり、あるいは殺されたりしても、必ずやアッラーへと集められるだろう。

159 あなた［ムハンマド］が彼らにおだやかでいられたのは、アッラーの慈悲によるもの。もしあなたが手厳しく、冷酷な心であったなら、彼らは必ずやあなたの周りから散り散りになっていただろう。それゆえ彼らを容赦し、彼らのために赦しを願いなさい。そして諸々（もろもろ）のものごとについて、彼らと相談しなさい。そして決定したことについてはアッラーに委ねなさい。アッラーは委ねる者を愛する。[65]

160 もしアッラーがあなたがたを助けたなら、あなたがたを打ち負かせる者はいない。もしこの御方があなたがたを見放したなら、この御方の後に誰があなたがたを助けるだろうか。それゆえ信仰者なら、アッラーにこそ委ねなさい。

161 預言者が詐欺をはたらくことなどあり得ない。もし詐欺をはたらけば、復活の日、その者がはたらいた詐欺も召し寄せられるだろう。各人は、それが得てきたものに応じて十分に報いられ、不正に扱われることはない。[66]

162 アッラーの喜ぶことに従う者と、アッラーの怒りを招く者とが同じようであるものか。彼らの住まいは





地獄である。行き着く先の、何と悪いことか。

163 彼らには、アッラーの御許において諸々（もろもろ）の［異なる］位階がある。アッラーは、彼らが行っていることをすべて見ている。

164 アッラーは信仰者たちをいつくしんだ。御しるしを読み聞かせ、彼らを清らかにし、啓典と知恵を教えるひとりの使徒を、彼ら自身の中から立ち上がらせた。それ以前の彼らは、明らかな迷いの中にいた。

165 それでいて、あなたがたの上に災難が降りかかると、かつて［あなたがたの敵に］その倍の災難をもたらしていながら、あなたがたは言う。「これは誰のせいなのか」。［ムハンマドよ、］言いなさい。「それはあなたがた自身のせい。本当にアッラーは、あらゆるものごとにおいて全能である」。[67]

166 ふたつの軍隊が遭遇したその日、あなたがたに降りかかったことはアッラーの思し召しあってのこと。それにより、誰が信仰者であるかを知るため、

167 また、誰が偽善者であるかを明らかにするため。「来なさい。アッラーの道のため戦うか、あるいは自衛をしなさい」と言われると、彼らは「もし戦いのことを知っていたなら、私たちも必ずやあなたがたに従っただろうに」と言った。その日、彼らは信仰よりも［真理の］拒否の方に近かった。彼らは、その口先で心にもないことを言った。アッラーは、彼らが隠すことを知っている。[68]

168 自分のきょうだいたちについて、［家の中に］座したままで「私たちに従っていれば、殺されることもなかっただろう」などと言う者たち。［ムハンマドよ、］言いなさい。「あなたがたも自分自身の死を防いでみせなさい、もしあなたがたが真実を語っているのなら」。

169 アッラーの道のために殺された者を、死んだものとは思ってはならない。いいや、むしろ彼らは生きている。主の御許で養われ、

170 アッラーが彼らに与えた御恵みと、やがて彼らに加わるだろう、後に続く者たちへの良い報せに歓喜している。彼らには恐れもなく、嘆きもないだろう、と。

171 彼らはアッラーの恩寵と、御恵みと、良い報せとを受ける。アッラーは信仰者への報酬を決して無為にしないだろう、と。

172 傷を負った後になっても、アッラーと使徒に応じた者たち。彼らのうち善をなし、畏れる者には大いなる報酬があるだろう。[69]

173 彼らに対し、人々は言った。「あなたがたに対し、すでに大勢の人々が集まっている。彼らを畏怖するべきだ」。しかし、それで彼らの信仰はますます深まった。彼らは言った。「私たちには、アッラーだけで十分。執りしきる者として、かの御方はもっともすぐれている」。[70]

174 こうして彼らはアッラーの恩寵と御恵みにあずかり、どのような悪に遭うこともなく、アッラーの喜ぶところに従って戻ってくることができた。アッラーは大いなる御恵みの所有者。[71]

175 悪魔は、その味方［となる人間］たちをただ恐れさせるだけ。それゆえ彼らを恐れずわれを恐れなさい、もしあなたがたが信仰者なら。

176 ［ムハンマドよ、真理の］拒否に向かってわれ先に急ぐ者たちのために、あなたが嘆くことはない。彼らには、いささかもかの御方を害することはできない。アッラーは、来世において彼らに分け前のあることを望まない。彼らには、大いなる懲罰があるだろう。

177 本当に、信仰を［真理の］拒否と引き換える者たちには、いささかもアッラーを害することはできない。彼らには、痛烈な懲罰があるだろう。

178 われらは、［真理を］拒む者たちを猶予している。しかしそれが自分たちにとり良いことだなどと、彼ら





に思わせてはならない。われらはただ、彼らがますます罪深くなるよう猶予しているだけ。彼らには、屈辱の懲罰があるだろう。[72]

179 アッラーは信仰者たちを、今あるような状態のままに放ってはおかない。やがて悪人を善人から区別するだろう。目には見えないものについて、アッラーはあなたがたに［直接に］明かすことはしない。しかしアッラーは、御心のままに誰であれ使徒として選ぶ。それゆえアッラーと、その使徒たちとを信じなさい。あなたがたがアッラーを信じ、畏れるなら、あなたがたには大いなる報酬があるだろう。[73]

180 アッラーの御恵みから与えられたものを差し出したがらない者がいる。しかし彼らに、その方が自分たちのために良いなどと思わせてはならない。彼らにとり、それはもっとも悪いこと。彼らが差し出したがらなかったものは、復活の日、彼らの首に巻きつくだろう。諸天と大地の遺産はアッラーに属する。アッラーは、あなたがたの行いを熟知している。[74]

181 彼らが「本当にアッラーは持たざる者、私たちは富める者」と言ったのを、アッラーは確かに聞いた。彼らの言うことも、また彼らが、正当な理由なくして預言者たちを殺害したことも、われらは書き記しておく。そしてわれらは告げるだろう。「燃えさかる懲罰を味わえ。

182 これは、かつてあなたがたが自らの手で送り届けたもの。本当にアッラーは、決してそのしもべたちを不正に扱わない」。

183 「アッラーは私たちに、火炎で焼き尽くされる捧げものをもってこない限り、どのような使徒も信じてはならない、と契約している」と言った者たち。［ムハンマドよ、］言いなさい。「私以前にも、あなたがたにはすでに使徒たちが、明白な証や、あなたがたが言っているそのものをもって到来していた。もしあなたがたが真実を語っているのなら、どうしてあなたがたは彼らを殺害したのか」。[75]

184 もし彼らがあなたを嘘よばわりするとしても、すでにあなた以前にも、明白な証を、詩篇を、光を照らす啓典をもって到来した使徒たちも嘘よばわりされている。[76]

185 各人は、それぞれ死を味わう。復活の日にこそ、あなたがたは十分に報いられる。火炎を隔てて楽園に入れられる者こそ、確かに成功する者。現世の生は、欺瞞（ぎまん）の楽しみに過ぎない。[77]

186 あなたがたは、財や自分自身のことについて必ずや試されるだろう。またあなたがた以前に啓典を与えられた者や多神を奉ずる者から、多く傷つけられるだろう。しかしあなたがたがよく耐えて畏れるなら、本当に、それは大いなる決心のあらわれというもの。[78]

187 アッラーが「人々に対してそれを明らかにし、隠してはならない」と、啓典を与えられた者に誓わせたときのこと［を思いなさい］。しかし彼らは、それを自分たちの後ろに放り捨ててわずかな代価と引き換えにした。彼らが引き換えにしたものの、何という悪さか。[79]

188 自分の行いに有頂天になる者、行いもせずに称賛されたがる者のことなど考えてはならない。彼らが、懲罰を切り抜けられるなどと考えてはならない。彼らには、痛烈な懲罰があるだろう。

189 諸天と大地の王権はアッラーに属する。アッラーはあらゆるものごとにおいて全能である。

190 本当に、諸天と大地の創造の中に、夜と昼との交替の中に、分別をもつ者への御しるしがある。

191 立っていても、座していても、横たわっていてもアッラーを想い起こし、諸天と大地の創造について理解する者。「主よ。あなたはこれを、たわむれに創造したのではありません。あなたに讃美あれ。私たちを火炎の懲罰から救い出してください。

192 主よ。あなたが火炎に入れる者は、あなたが恥辱を負わせた者。不正をなす者に、助け手はありません。[80]

193 主よ。本当に私たちは、信仰へと呼び招く者が『あなたがたの主を信じよ』と呼ぶのを聞いて、信じる





ようになりました。主よ、それゆえ私たちの罪を赦してください。私たちの悪い行いを咎めないでください。そして私たちを、徳ある者と共に召し寄せてください。

194 主よ。あなたの使徒たちによってあなたが約束したものを、私たちに与えてください。そして復活の日、私たちに恥辱を負わせないでください。本当に、あなたが約束を破ることはありません」。

195 それで主も彼らに応じる。「われはあなたがたのうち、男であれ女であれ、はげむ者のはたらきを無為にしない。あなたがたは互い同士。移住した者、自分の家から追放された者、われの道のために傷つけられた者、戦った者、殺された者。われは彼らの悪い行いを咎めず、川がその下を流れる楽園に入れさせよう」。それがアッラーの御許の報奨。アッラー、もっともすぐれた報奨はその御許にこそある。[81]

196 ［真理を］拒む者たちが国じゅうに跋扈しようと、欺（あざむ）かれてはならない。[82]

197 それは束の間の楽しみ。そののち、彼らの住まいは地獄である。何と悪い寝床だろうか。

198 しかし、自分の主を畏れる者のためには、川がその下を流れる楽園がある。彼らは、永遠にその中に住まうだろう。それはアッラーの御許における歓待。アッラーの御許にあるものこそ、徳ある者にはもっともすぐれている。

199 啓典の人々の中には、アッラーを、またあなたがたに下されたものと彼らに下されたものとを信じ、アッラーの御前にその身を慎む者がある。彼らはアッラーの御しるしを、わずかな代価と引き換えにはしない。これらの者には、主の御許に彼らのための報酬があるだろう。本当にアッラーは、たちまちにして清算する御方。

200 信じる者たちよ。あなたがたは耐えなさい。辛抱し、常に備えていなさい。そしてアッラーを畏れなさい。そうすれば、あなたがたは栄えるだろう。[83]

1 ここで「分別」と訳した「フルカーン」とは、正誤の区別をつけるものという意味であり、クルアーンの名称でもある。
2 一部のクルアーン解釈者によれば、「知識に根ざしている」とは、クルアーンの意味の中には、人間の知識が自然と変
化するにつれ、ようやく明らかになるものもあるということを暗示している。「明瞭な御しるし」「啓典の母」ならびに「あ
いまいなもの」とは、自明である表現と、文字通りに読んでもその意味が容易に読み取れない、より深い解釈が必要で
あると思われる表現との間に区別があることを示している。
3 容赦のない迫害を加えた偶像崇拝者たちとユダヤ教徒の敗北についての吉報を授ける節。この節が啓示された直後、ム
スリムたちは両方の敵を敗走させることができた。
4 ヒジュラ（移住）から二年後のラマダーン月第三週、預言者の率いる三一三名という中途半端な人数と不十分な装備のムスリムの軍勢は、千人近い重装備の兵士と七百頭のらくだ、百の馬からなるマッカの偶像崇拝者たちの軍勢に敗北をもたらした。これは土着のクライシュ族と、新たに確立されたマディーナのムスリム共同体との間に勃発した最初の戦いであった。一部の解説者によれば、この節では、敵には信仰者たちが「二倍の数」に見えると告げられているのに対し、実際には土着のクライシュ族の軍は、ムスリムの数の三倍以上の規模であった。ここから学べる教訓とは、（以前のさまざまな時代にもそうであったように）数でも劣り、装備も十分でない軍勢や集団が、自らの目的の正当性を強く信じることで（確かな神の援助を得て）、数でも装備でも優っているが、同様の信念（第一に神への信仰、第二に最も正しい行い）に欠いた敵に打ち勝つということである。
5 一四節は現世の祝福と、それを正しく受け取るにはあまりにも脆弱な人間についての説き明かしである。本能は人間の生存に必要であり、それゆえ人間の性質として自然かつ正しい部分ではある。だが自らの欲望の奴隷とならないためにも、過剰に偏ることがあってはならない。イスラームの道は、やがては滅ぶ現世の通り道と、永遠に生きる神の道とが重なる、あらゆる道の中でももっとも中庸を行く道である。





6 ここで「宗教」と言い表した「ディーン」という言葉には、「服従」「罰則」「国家」「神授の法」を含め、複数の意味を持たせることができる。同様に「イスラーム」という言葉にも、宗教としてのイスラームという固有のものを示す他に、「帰依」「服従」といった意味にもなり得る。それは神に対する全面的な忠誠と、敬虔な祈りの人生によって実現される、内なる平安を指している。この節でも示唆されている通り、イスラームとは、神の唯一性を信じ、創造主からの最後の法をもたらした預言者ムハンマドによって完成された生き方の中に、信仰の証を積み重ねてゆくことで完成をみるのである。
7 「文字を知らない者」、アラビア語で「ウンミー」とは、通常、読み書きのできない非識字を意味するが、一部の解釈者はこれを、神からの啓典を一度も授かったことがなく、偶像を奉じていた、イスラーム以前のアラブを指すものと解釈している。
8 信仰に至ることなく、真実と正義の伝播を妨げた者が最後には敗者となる。これよりも自然かつ公正なことがあるだろうか。彼らのあらゆる努力もむなしく、真実と慈悲の宗教が普及するのを妨げることはできない。迫害者や圧政者の労力に関わらず、この宗教は神の恩恵によって勝利をおさめるだろう。彼らの元手となるもの、すなわち現世における生が無駄に費やされることにより、不正な者の行為は無益に終わる。現世に善事を蓄えるのを拒む者が、審判の日に何らかの報奨を受け取ることは期待できない。
9 解釈者たちが、ユダヤ教徒が仲裁を求めて預言者に持ち込んだある出来事について言及している。預言者は彼ら自身の啓典の権威に訴えたが、ユダヤ教徒はそれを隠蔽し、言葉を濁してうやむやにしてしまった。ここで得るべき教訓とは、啓典の民こそは神の使徒ムハンマドを歓迎する最初の者たちであらねばならなかったことであり、また彼らの一部はそうしたものの、他の者たちは罪深い傲慢さをもって背を向け、原形の損なわれた啓典と、自らの想像にまかせて偽造した、理性とは合致しようのない教義に固執することを選んだ。

10 ここで禁じられているのは、信仰者とそうでない者との友情のうち、他の信仰者を捨て去ることが求められる類いの友情である。他のイスラーム諸国に害が及ばない限り、イスラームの諸国家が貿易や外交、またその他の諸問題に関しても、非イスラーム諸国との相互協定を結ぶことは可能である。

11 この節について、バイダーウィーはその解釈の中で次のように述べている。「あなたの心の中で、愛と友情が真理を拒む者に向かって傾いているのなら、あなたがそれを隠すか否かに関わらず、神はそれを認識しておられる。神は天と地の間のすべてを知る力を有し、あなたの心に何が隠されているか、また何を明らかにしているかも知っておられる」。信仰者よりもそうでない者との関係を優先させることで前者の利益を損ねる者には、神からの重荷を背負わされることになるだろう。

12 タバリーの解釈によれば、「子孫」とは預言者たちの具体的な血縁関係に限らず、彼ら全員の間には互いに霊的なつながりがあったこと、また同じひとつの根源的な真実を信じていたという事実を指している。

13 「男の子は、女の子と同じようではない」。ザマフシャリーはこの言葉を、イムラーンの妻の言葉ではなく、神の知識に関する挿入句として解釈し、また次のように解説している。「彼女は男児を賜われるよう祈った。しかしたとえ生まれてきたのが男児であったとしても、彼女が実際に授かった女児ほどの者にはなれなかっただろう」。イムラーンの妻の授かった女児、すなわちマルヤムの卓越性は、イムラーンの妻がそれまで望み描いてきた夢をはるかに超越していたという指摘である。

14 ザカリーヤーは、マルヤムのおばの夫にあたる。この節で説き明かされている通り、ザカリーヤーはマルヤムの後見という責任を引き受けた。彼は彼女のために、特別な小部屋を用意した。ここで「聖所」と訳した「ミフラーブ」とは、一般には「戦場」「戦域」を意味する言葉である。しかしここでは、隠遁して、あらゆる種類の祈りや、神を想起する行為に自らを捧げるために入る庵室を意味している。この意味でのミフラーブは、イマームが礼拝を導く際に用いる、





マスジドのキブラ壁に設置された窪み状のミフラーブとは別である。ザカリーヤーは、マルヤムの小部屋に入るたびに、その季節にはないはずのものも含めて様々な果物があるのを見た。ザカリーヤーは驚き、誰がそれらを届けたのかを尋ねた。マルヤムは、彼女を養っているのは主であると答えた。これは彼女の奇跡のひとつである。

15 クルアーンの解釈者たちによると、この節で言及されている「アッラーからの御言葉」とはイエス・キリストである。これについては四五節に更に説き明かされる。「御言葉」と訳した「カリマ」という語は、神からの告示あるいは意志の表明、または神の約束を表すのに、クルアーンにおいて頻繁に用いられている。

16 クルアーンの解釈者たちによれば、イスラエルの民は、誰がマルヤムの後見となるべきかを決めるために、彼らの持ち物である筆を川に投げ入れた。そして川面に浮いた筆の持ち主をマルヤムの後見としたのである。他の解釈では、筆ではなく矢が用いられたとされている。

17 「マスィーフ（メサイア）」とはヘブライ語で「油を注がれた者」を意味する。イーサーの名のひとつであり、彼の高貴で栄誉ある地位を示している。

18 マルヤム章の二七節から三三節によれば、生まれたばかりのイーサーはゆりかごの中で語り始め、自分は神に仕える従者であり、啓典と共に遣わされた預言者であると宣言した。

19 この節では、創造における神の無限の力が強調されている。四〇節も参照。いずれの節においても（どちらも、ザカリーヤーとマルヤムについてである）、神の意志が姿かたちをともなって顕現する。神の力は、予想もしなかったような、あるいは起こり得そうにもないような、ありとあらゆる事象を生じさせる。

20 一部の解説者たちによれば、イーサーによる「死者の蘇生」とは、霊的には死んだ状態にある人々の霊性を目覚めさせるという意味の隠喩である可能性が高い（六章一二二節も参照）。この解釈が正しいとするなら、「目の見えない者、患う者をいやし」もまた同様であろう。すなわち霊的に罹患している人々や、真理に対し盲目の人々の、内的ないやしで

ある。

21 四章一六〇節、六章一四六節、一六章一一八節では、ユダヤ教徒に課されていた厳しい戒めのうちいくつかが、イーサーの到来によって廃止されたことが説き明かされている。

22 ここでは「弟子」と訳した「ハワーリー」というアラビア語は、エチオピア・セム諸語に由来しており、元来は「手伝う者」を意味する。預言者イーサーの朋友となり、彼の招きに応じた人々が、この呼び名で呼ばれている。

23 「［真理の］証言者」とは、神の唯一性と、イーサーを含め神の遣わした預言者たちが真実であったことを証言する者という意味である。

24 ここでいう「彼らは策略をめぐらせた」とは、イーサーを預言者として認めることを拒否し、彼を滅ぼそうとしたユダヤ教徒の一派を指す。

25 彼を神の息子と信じる一部のキリスト者、彼を預言者として尊ぶムスリム、加えてイーサーを歴史上の人物として敬う者、あるいは完全に否定する者といったすべての立場の者が「相争っていたこと」について、判断を下せるのはただ神のみである。

26 神は泥から、父母もなしにアーダムを創造した。同様にイーサーを、父もなしに創造した。この節は全能の主の力を証明すると同時に、マルヤムの純潔を証言するものである。

27 「ムバーハラの節」として知られる一節である。ムバーハラとは、議論では互いに一致する結論に至ることができないとき、誤っている方に神の怒りが下るよう祈る儀式の一種である。解釈者たちによると、以下の通りである。イエメンのナジュラーンから、キリスト者の一団が預言者ムハンマドに会いに訪れた。彼らは、クルアーンはイーサーが父もなく誕生したことを事実として認めているのだから、イーサーを神とみなすこともできるはずであると述べた。そこで預言者は彼らをムバーハラに招き、この儀式に参加するよう求めた。彼らはその提案の受け入れを拒否し、代わりにムス





リムとの協定に署名し、彼らの保護を承諾した。

28 イーサーは人間以外の何ものでもない。彼を神もしくは神の息子と呼ぶことは、理性と啓示に反している。その点を強調するために、彼はイーサー・「イブン・マルヤム」、すなわち「マルヤムの息子」と呼ばれる。最も強大かつ賢明なのは唯一の神のみである。

29 「私たちとあなたがたの間で同じくする御言葉」。「カリマ」とは、主に「言葉」を意味するが、「命題」「主張」を意味するとも考えられる。「私たちは（……）他の何ものをも自分の主とはしない」という呼びかけは、「啓典の人々」すなわちキリスト者に限らず、聖人や聖者、あるいは学者と呼ばれる人々に対し、単なる尊敬以上の、神にも準ずる権威を付与してしまう人々全般に向けられたものである。

30 その昔、ユダヤ教徒とキリスト者の間にある議論が繰り返された。ユダヤ教徒がイブラーヒームはユダヤ教徒であったと主張する一方で、キリスト者は、彼はキリスト者であったと主張した。両者とも自分たちの指摘の正しさを証明しようと議論に議論を重ねたが、この節においてはどちらの宗教もイブラーヒームの後に興ったものであり、したがってどちらの主張も誤っていることが指摘されている。むしろイブラーヒームは宗教が枝分かれする以前の、神へと至る原初かつ真の道に従う者だったのである。

31 「あなたがたも、その証人であるというのに」。預言者ムハンマドの到来を預言する聖書上の記述に対する言及である。

32 ハイバルの十二人の指導者からなる一団を指している。一部のムスリムだけでもイスラームから離反させようとの目論見から、朝にはイスラームへの入信に合意し、宵には棄教したと伝えられる。

33 自分たちの啓典解釈と部分的な齟齬があることを理由に、クルアーンの存在を受け入れる準備ができずにいるユダヤ教徒とキリスト者を指す。

34 ここでの「文字を知らない者」という語は、啓典の人々以外のアラブを指すこともある。またこの語は、時にユダヤ教

徒以外の者を表すのにも用いられた。ここで取り上げられているのはユダヤ教徒に関することである。彼らの一部には、ユダヤ教徒以外の人々に対するあらゆる道徳的な責任を神から免除されている、と主張する者があった。そして彼ら自身の啓典にそうした主張の根拠は一切ないことを承知した上で、自分たち以外の人々を侮蔑する意図をもって「文字を知らない者」と呼んだ。

35 「いいや、そうではない」以下が示しているのは、「ウンミーユーン」すなわち「文字を知らない者」、あるいは「異邦の民」「ユダヤ教徒以外の民」と呼ばれた者たちであろうと、自分自身の行いに責任を持つ者、悪からその身を守る者こそ神に愛されるということである。またここでの「自分のした約束」とは、人間同士の約束もさることながら、第一には神に対する約束を指すのであり、「神に対する義務を果たす者」、あるいは「神との絆を維持する者」として解釈されねばならない。

36 クルアーンの解釈者のほとんどが、ここで言及されているのは、律法を複雑化し旧約聖書を故意に改変したユダヤ教徒であるとしている。しかし続く節も考慮に入れるなら、この節での言及はユダヤ教徒に限定されるものではないと結論づけねばならない。

37 歴史的に、キリスト者はイーサーと神を同一視する。これはイスラームの教えとも、場合によってはイーサーの教えとも異なる。イーサーは、神の絶対的かつ全面的な唯一性を説いている。クルアーンにおいては、イーサーは預言者のひとりであり、神ではないことが多くの節を通して主張される。例として三〇章三六節を参照。とりわけ後世の人々が、彼のためによかれと吹聴した大仰な主張が、彼自身によって否定される節である。その他五章一一六節も参照。

38 神性、あるいは半神的な権威を何ものかに付与すること、聖者や天使的な存在を崇拝することに対する明示的な否定である。

39 ザマフシャリーの解釈によると、ここで表されているのは個々人というより共同体全体からの、預言者を通して伝えら





れたメッセージを受け入れるという誓約である。

40 唯一の神の啓示に基づく諸宗教であれば、その原則は根本的には同一性を有しており、信仰者同士の理解と寛容のための壮大な基盤が供されている。ほぼ唯一の違いがあるとすれば、それは民それぞれに定められた礼拝等の儀式の所作であり、それは各々の文化的・社会的な習慣の必要に応じて形成されている。イスラームは思慮分別と、イスラームの啓示として周知されている原則に反することのない限り、他の宗教のあらゆる教えを受容する。啓示という一筋の鎖に連なる最後の環がイスラームである。霊的・倫理的・社会的等、なんであれそれぞれの時代の人間のあらゆる側面における必要を満たすことがイスラームという宗教の目的であるなら、特定の時代の痕跡に過ぎないものを探求するより、イスラームという宗教それ自体を不断に探究すべきであろう。

41 ユダヤ教徒もキリスト者も、預言者ムハンマドの到来をあらかじめ告げる啓典である聖書を真実として受け入れることにより、彼の預言者性が真実であることの「証人」となったのである。

42 安穏として現世を過ごし、なかば故意に根本的な諸々の真実から目を逸らし続けてきた者たちの嘆願は拒絶される。

43 ここでは「徳」とした「ビッル」という語は、善良かつ霊的な事柄に重きをおく無私無欲の状態を表している。宗教の観点からは、それは成熟の頂点にあたる。これについては二章一七七節においても暗示されている。「ビッル」に至るためには、自分が最も愛着しているものを手放さなくてはならない。解釈者たちによると、それは財産や所有物、地位、知識、健康など、主が祝福として授けた物質的・精神的な賜り物である場合もある。極端に陥ることなく、不健全なことや、家族を危うくするといったことのない限りにおいて、自分の世俗的な利益を度外視してなされるはたらきだけが、霊的な利益となりえるのである。

44 九三節から九七節は、一部のユダヤ教徒による異議に対する、クルアーンの法による反駁である。クルアーンの啓示が、初期の預言者たちの教えに内在する真理を確認するものであるということは、クルアーンそれ自体において繰り返し主

張されているが、にもかかわらず彼らはこれらを違背とみなしていた。彼らが唱えた異議とは（1）クルアーンによる、律法が定めた特定の食物に関する命令と禁令の無効化に対して、ならびに（2）キブラ（礼拝の方角）として新たに定められたマッカは、エルサレムの「代替」に過ぎない、という根拠なき断定である。クルアーンは、元来、すべての健全な食物はイスラエルの民にとり合法であり、律法による規定は彼らの罪に対する罰に過ぎず、真に神に服従する共同体に対して企図されたものではないことを思い出すよう告げている。（2）の異議に対する回答は、つづく節にある通り。

45 こうして、イスラームの第五の柱にあたる巡礼という義務が定められた。正統四学派においては、具体的に誰が巡礼を義務づけられているのかについては、異なった見解を示している。例としてイマーム・マーリクは、収入があり歩行が可能な者全員に巡礼を行う義務があるとしている。前節の「バッカ」とは、マッカを指す古くからの呼称のひとつ。

46 クルアーンの解釈者たちによると、神を畏れるということは誠心誠意、神に従うということであり、神に「見られている」ことを常に意識するということを意味する。アブドゥッラー・イブン・マスウードは、これを「神に対し不服従になることなく服従し、忘恩になることなく感謝し、忘れたり、怠けたりすることなく常に神を讃える」ことと解説している。

47 相互に敵意を抱けばどうなるかを考えさせ、神の導きによってのみ救われ得るだろう地上の多くの人々について暗示している節である。

48 ムスリムには、社会秩序を確立し、善を推奨し悪を禁じる法を実践することが義務づけられている。しかしこの義務を遂行するためには、それにふさわしい資質が必要となるのは言うまでもない。

49 すべての人類の主である神に対する全面的な服従に立ち返り、「神に選ばれた者」といった選民思想は放棄されねばならない。そうした優越意識は、「ひとつの神と共にある」というイスラームにおいて最も重要ともいえるタウヒードの思想に反して、神を信じる人々の間に障壁を築いてしまう。

50 解釈者たちはこの節を、元はユダヤ教徒であったアブドゥッラー・イブン・サラームがイスラームを受け入れたとき、





他のユダヤ教徒は「新たな宗教を受け入れたことにより、自ら大きな害悪を抱えることになった」と彼を批判した、という出来事に関連づけている。イスラームを宗教として受け入れたために、周囲の人々から否定的な反応を返されるというのはしばしば起こりうることである。しかしそうした期間を経た後には、現世にいながらにして静けさと救いがもたらされる。神はそうした改宗者たちの善行を決しておろそかにはしないこと、また必ずや報われるだろうことが宣言されている。

51 ザマフシャリーは、次のように解説している。「真実を否定する人々の『耕作』が失われるということは完全な喪失を意味する。そうなれば現世にも来世にも、残せるものが何ひとつない。一方で、信仰者の『耕作』は決して完全に失われることはない。たとえ失われたかのように見えても、逆境に耐えることにより、来世における報奨への希望が残されるからである」。真実の否定に屈してしまえば、あらゆる努力が完全に失われてしまう。信仰なき者が金銭を費やしても、本当の意味での利益にはならない。その意味で、それは実り多い慈雨というよりも、霜や寒気をもたらす風に似ている。

52 ウフドの戦いの最中に、ハズラジュ部族に属するサラマ族と、アウス部族に属するハーリサ族というムスリム軍の二つの部隊が怯えた様子をみせた。すると三百名の兵を率いていたイブン・ウバイドは、「自分と子どもたちを危険にさらすわけにはいかない」と彼らに言い捨て、自分の軍勢を引き揚げた。

53 「一端（あるいは「一部」）」とは、指導者や指令者、あるいは著名な戦士のいずれかを意味するものと考えられる。

54 二章二七五節、二七六節ならびに二七八節は、利息付きでの金銭の貸与を禁じているが、貿易は合法とされている。ここで複利への言及があるのは、イスラーム以前のアラブたちが、それを許可していたためである。

55 上記の三節には、イスラームにおいてふさわしいふるまいが要約されている。一三三節には道徳的な生活の目的が説き明かされている。あらゆる存在の普遍的な本源によって確立された価値観に立ち、その公正な尺度と調和しつつ、最終的にはその本源に接近することが必然とされる。そして一三四節、一三五節において、その調和の具体的なあり方が一

般的な言葉をもって説き明かされる。他者に貢献し、自制し、善良な性格を伸ばし、自らの行動を省みて、逸脱や過失に対する神の赦しを求めることである。そうすることで人は世俗的な欺瞞や追従という足枷から解放され、霊的な完成という最も高い水準に到達し得るのである。

56 この節はウフドの戦いの後に啓示された。多くのムスリムが、自分たちの明白な敗北のために絶望していた。この節において神は、真の信仰者なら最終的には勝利するだろうと語りかけている。これはムスリムにとり、将来、数多くの勝利がもたらされることを知らせる吉報でもあった。

57 この節については異なる解釈が存在し、「シュハダー」という語には「証言者」とも、「殉教者」とも読み取れる余地が残されている。しかしここでの要点とは、過去と未来の知識を有する神が、信仰者に試練を課すことを望んでおり、またそれは本当の信仰者と偽善者の違いを区別するためということである。

58 ウフドの戦いで、アブドゥッラー・イブン・カミーアという名の者が預言者に石を投げつけた。石が当たった預言者は、歯を折られて負傷した。すると偶像を奉ずる者たちは「ムハンマドは殺された！」と叫んだ。この虚偽の風聞がムスリムの兵士たちの間に広まると、彼らは散り散りに逃げ始めた。これを知った預言者が、恐慌に陥った信仰者たちを呼び戻すと、三十名ほどの教友たちがただちに彼を取り囲んで堅固な守りの姿勢をとった。この節は、根拠のないうわさ話を真に受けて浮足立ったムスリムへの批判であると同時に、預言者ムハンマドはただの人間に過ぎず、たとえ彼が死んだとしてもイスラームは残るということを告げている。ムスリムはこれを事実として受け止め、揺らぐことのない堅実さと忍耐を身につけねばならない。この節はまた、もうひとつの出来事にも関連している。預言者が死去した朝、アブー・バクルがマディーナのモスクに出かけると、悲しみのあまり気が動転している人々を目にした。すると彼は、「ムハンマドを崇拝していた者には、ムハンマドは死んだと知らせてやるがいい。だがムハンマドの主たる神を崇拝する者にとっては、神は永遠であり不死である」と述べた。





59 差し伸べられる救いのうち、主の救いこそ最も優れている。

60 この節では、信仰者の道徳的な強さの重要性に力点が置かれている。それは信仰者ではない者には慢性的に欠けているものである。ウフドの戦いでは、多くのムスリムが士気を失っていたにもかかわらず、偶像を奉ずる者たちには彼らを仕留めることができなかった。彼らは躊躇しており、攻め入って勝利を完徹するための十分な勇気を持ち合わせていなかったのである。本来得るべき益を何ひとつ得ないまま、彼らはマッカに帰還した。

61 ［預言者に］命じられたことについて争い、逆らうようになった」。勝利がほぼ確実となったかのように見えた瞬間、ほとんどの弓兵が自らの持ち場を放棄したことに言及している。ムスリムの弓兵五十名のうちその場に残った者は十名にも満たず、ハーリドの騎兵に殺害された。節の後半以降も、少数の教友を含め、ムスリムの大半以上が逃げ出した後も戦闘に残った者とそうでない者についての言及である。戦利品欲しさに参戦し、弓兵として丘の上にいたムスリムたちが戦いに勝利したと思い込んだそのとき、戦いの風向きが変わった。ムスリムは急所を露呈する形になり、偶像を奉ずる者たちを勝たせることになったのである。

62 ウフドの戦いに加わった者たちの一部が反抗的であったことは、最初は問題視されなかった。彼らを連れていくことで、何かしらの戦利品を得られるだろうとの期待があったからである。しかし弓兵たちが去ったのが分かると、敵は丘の周囲を中腹まで攻め入り、ムスリムをほぼ圧倒した。

63 ウフドの戦いでは、敵の兵士はムスリムの軍勢より数倍も多かった。勝利は神の手に委ねられていることを知る信仰者たちはやすらぎの中にあり、それは眠りという形をとって彼らの間を駆け抜けていった。アブドゥッラー・イブン・マスウードは、これについて次のように述べている。「戦時の眠りは神からのもの、礼拝時の眠りは悪魔からのもの」。アブー・タルハーはこう述べている。「私もウフドの戦いを戦った者たちの中にいた。私も眠りに襲われ、どうにもならなかった。手から剣がすべり落ち、拾い上げると再びすべり落ちた。そんなことが、何回も起こった」。この節では偽

善者たちの集団についても言及されている。

64 「彼らが得てきたことのために、悪魔にすべり落ちさせられた」。クルアーンにおける重要な教えが描かれており、それは以下の通り要約できるだろう。すなわち悪魔の人間への影響とは、罪の「原因」ではなく「結果」である。道徳的な危機の瞬間に、より安易な、あるいは一見すると安易な選択肢を与えられてそちらを選ぶよう仕向けられた際の、その人自身の心のあり方次第で、意識的か無意識的かに関わらず、罪を犯すことになるのである。しかしこの考え方は、人間の自由意志がその前提となっている。この場合の自由意志とは、特定の制限の範囲において、自分に可能な複数の行為を、それを行う前に認識・想定する能力というほどの意味である。

65 上記の節の「彼らにおだやかでいられた」について、「彼ら」とはウフドの災難の前にも、また災難の最中にも義務を果たさなかった追従者たちを意味している。信頼に足るすべての典拠を通して、預言者は彼らの行いについて、一言も非難を口にすることはなかったと伝えられている。

66 バドルの戦いの余波の中で、戦利品のうちいくつかの品物が行方不明となった。偽善者たちはこの出来事を利用し、預言者が盗んだのだと非難した。そこでこの節が啓示された。もうひとつの解釈では、戦利品を探すために自らの持ち場を捨て去ったウフドの弓兵たちを指すとされている。

67 預言者に従う者の多くは、たとえ状況がどうであろうと、神の勝利を授かるか否かは信仰のみにかかっていると確信していた。ウフドで味わった苦い経験は彼らに衝撃を与えたが、クルアーンは、この災難が彼ら自身の行為の結果であったことを思い起こさせている。バドルの戦いでは、ムスリムたちは七十名の偶像崇拝者を倒して彼らの中から捕虜を得たが、ウフドの戦いはそれとはまったく正反対に、ムスリムたちは七十名の殉教者を失った。この節で言及されている災難とは、この出来事を指すものとされている。

68 これはアブドゥッラー・イブン・ウバイイと彼の率いる三百名の兵士についてである。ウフドの山腹での戦いの寸前に





なって、彼は自らの軍勢を撤退させ、預言者と共に戦うのを避けた。彼は偽善的な人物で、戦闘になるとは思わなかったというそぶりをしていたが、心の底では戦闘が起こることを確信していたからこそ撤退したことは明らかである。神の大義からの離脱は、ほとんど神を否定するに等しいことだった。

69 「傷を負った後になっても」。大多数の解釈者が、これはウフドの戦いでムスリムが負った損失を示すものとみなしている。しかしこの節での表現には、ウフド以前に神の道のため命を落とした殉教者をも包摂する普遍的な言葉が用いられており、はるかに広い意味合いを含むものと思われる。

70 歴史家によるとウフドの戦いでは、ムスリムの軍勢が一時的に恐慌に陥ったにもかかわらず、敵は望んだ結果を達成できなかった。敵の軍勢を率いていたアブー・スフヤーンは、戦場を撤退する準備が整うと、預言者ムハンマドに次のように述べた。「ムハンマドよ、来年はバドルで会おう」。預言者は次のように応じた。「神が望みたもうなら」。翌年、アブー・スフヤーンが新たな軍勢を集めるのに奔走しているという報せがマディーナに届いた。預言者はただちに騎兵の軍勢を整え、敵と一戦交えるためにマディーナを出発した。この節は信仰者の信仰と勇気、そして決意を称賛するものである。

71 預言者の軍勢は、昨年アブー・スフヤーンがここで会おうと提案した場所までやって来た。しかし恐れをなしたアブー・スフヤーンが、約束を果たすことはなかった。預言者率いるムスリムの軍勢は、七日ほど待機したが、彼はついに姿を現さなかった。ムスリムたちはそのまましばらくその場に滞在して交易を行い、多くの利益をあげてマディーナに凱旋した。

72 クルアーンの用語で「スンナトゥッラー」すなわち「神の摂理」と呼ばれる、自然の諸法則について暗示する節である。人間の傾向や行動、そして宇宙におけるあらゆる出来事がその対象となる。この節を解説するとしたら、それは「真実を否定するか、あるいは真実の否定に賛同する人々がいる。神によって授けられた選択の自由も、態度を改めるための

猶予という時間の手綱も彼らに益をもたらさず、かえって彼らの偽りの自信や罪深さを増やすばかりである」ということである。これ以外の節においても、神は彼らの「罪深さの増加」を彼ら自身の意志によるものとしている。神のあらゆる創造物に、原因と結果という神の自然法則が当てはまるのである。

73 解釈者たちは、誰かが預言者に信仰を持つ者とそうでない者について尋ねた際、その応答として啓示されたのがこの節であるとしている。

74 ここでの「遺産」という語は、やがて人類がこの地上を去ったなら、残されたものすべてを継承するのは神であることを意味すると解釈される。人間は誰もがいつか必ず死を迎える。その時、唯一の相続者であり管財者であり、かつ執行者となるのは、人間を創造し、人間の所有するものすべてを貸し与えている全能の神に他ならない。

75 神を讃える儀式の核として燔祭を定めたムーサーの律法に従わない限り、使徒とは呼べないという意味。エルサレムの第二神殿の崩壊ののち、燔祭は一時的に停止されていた。しかし律法に次ぐ権威があるものとされるタルムードの成立以降のユダヤ教徒は、彼らに約束された救世主は、ムーサーの律法を完全に復活させる者であると考えていた。そのため彼らは、律法の法の隅々にまで完全に従わない者を預言者として認めることを拒否した。

76 この節には、以下三点への言及がある。（1）「バイイナ（奇跡、あるいは明証）」、（2）「ダーウードのザブール（詩篇）」、そして（3）「キターブ（啓典）」。すべての救済の書には、人間を善良な人生へと導く明晰な法が定められている。

77 物理的な死、身体の死によって、魂は身体との別離を味わう。その時、魂はそれまでの人生が猶予の期間に他ならなかったことを知る。それまでは一見すると公正ではないように思えたことも、最終的には審判の日に精算されるだろう。

78 財産や所有物、あるいはそれらへの欲望だけが試練ではない。個人的な才能や機会、知識や、愛する素質と愛される素質など、人格を形成する長所や短所のすべてが、試練を目的として配されている。

79 「わずかな代価と引き換えにした」。ここでいう「代価」は、自分たちは「神に選ばれし民」であるという確信や、「贖





いの代償」によって自分たちは何をしなくても救済が保証されているといった確信を暗示している。どちらの場合もそうした確信を通して、来世における免責を得ているものと錯覚しているのである。

80 来世における懲罰とは、現世における自分自身の行いによって積み重ねてきた霊的な恥辱の結果である。

81 「あなたがたは互い同士」とは、「人はみな人類という同一の種の一員であり、それゆえ互いに平等である」という意味である。イスラームは男女の平等な地位を単に認めるだけではなく、積極的に繰り返し主張する。そもそも性差とは生きものとして生まれながらに備わったものであるが、人間にとり最も重要な霊性において性差が度外視されるなら、階級や富、地位、人種、肌の色、出生地といったきわめて人工的な区別には、ほとんど何の意味もないことが理解されるだろう。

82 当時、多くの信仰者がそうでない者たちの物質的な豊かさと安定についてうわさし合い、「神の敵は豊かだが、私たちは貧しい」と訴えた。するとこの節が啓示された。より一般的にいうなら、これは世俗の慰みに惑わされ、神を想起することから逸れてゆくすべての人々に対する助言である。そうした慰みは決して神の恩寵のしるしなどではなく、むしろ災厄となる可能性が高いだろう。

83 「備えていなさい」とは、侵略者や抑圧者に立ち向かい、公正と啓示の法を守るための素地を整えておくようにとの、誠実な市民に対する助言である。本章は、この荘厳な一連の戒めと祈りによってしめくくられる。

# 第四章　アン＝ニサーゥ　女

マディーナ啓示

「ニサーゥ」は「女性」を意味する。そして本章の大部分においては、神聖な社会における女性の法的な地位と立場が扱われている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 人々よ。あなたがたを一個の魂から創造し、さらにそこからその配偶を創造し、さらにその二人から多くの男女をまき散らした、あなたがたの主を畏れなさい。あなたがたが、その御名において互いに尋ね合うアッラーを、また子宮［から生じる血縁］を畏れなさい。本当にアッラーは、いつもあなたがたを見守っている。[1]

2 孤児たちに、その財産を与えなさい。良いものを、悪いものと取り替えてはならない。また彼らの財産を、あなたの財産に取り込んではならない。本当に、それは大それた罪である。

3 もしあなたがたが、孤児たちを公正に扱えそうにないことを案じるなら、あなたがたにとりふさわしい女二人と、または三人と、または四人と結婚しなさい。しかし、もしあなたがたが［多くの相手を］公正





に遇せるかを案じるなら、一人だけにするか、あるいはあなたがたが正当に召しかかえる者のみにしておきなさい。偏りのないようにすることが、よりふさわしい。[2]

4 ［結婚相手となる］女には、［婚資として］丁重な贈りものをしなさい。しかし、もしその一部を、彼女たちの方から辞退するというのなら、円満にこれを受け取り、［受け取っても責めを負わされずに済むことを］喜びなさい。

5 アッラーから扶持として託されている財産を、［未成年者を含め、介助を要する］か弱い者に与えてはならない。それを用いて彼らの衣食としなさい。そして彼らに対しては、親切な言葉で話しかけなさい。

6 婚期に達するまで、孤児たちを試みなさい。それで、もし彼らに真っ当な判断力があると認められたなら、彼らにその財産を渡しなさい。彼らが成人する前に贅沢にむさぼったり、急いで使い込んだりしてはならない。［後見人となる者が］裕福な者なら、［扶養料を求めるのは］控えるべきである。しかし持たざる者なら、誠意をもって［適正に］用いなさい。彼らにその財産を渡すときは、彼らのための証人を立てなさい。アッラーは、清算者として十分である。

7 男は、両親や近親の遺したものの一部を取り分とする。女は、両親や親族の遺したものの一部を取り分とする。その大小にかかわらず、義務の通りに配分しなさい。[3]

8 配分にあたり、他の縁者や孤児、貧しい者がその場に居合わせたなら、その中から彼らにも何らかの養いをしなさい。そして彼らには、親切な言葉で話しかけなさい。[4]

9 彼ら［遺言の執行人や後見人となる者］は、もし自分がか弱い子どもたちを後に置いて去ることになったなら、と［我がことのように］恐れ、よく案じておかねばならない。そのためにはアッラーを畏れ、適正な言葉で話すようにしなくてはならない。

10 孤児の財産を不正にむさぼる者は、下腹の中に火炎をむさぼる者。彼らは烈火に焼かれるだろう。

11 あなたがたの子ども［への配分］について、アッラーはこう指図する。男児には、女児の二人分を。女児［のみ］が二人を超えるなら、遺されたものの三分の二を彼女たちに。女児［のみ］一人だけなら、半分が彼女のもの。もし［故人に］子どもがいるなら、［故人の］両親はそれぞれ遺されたものの六分の一を。もし［故人に］子どもがおらず、両親［のみ］が相続するなら、母親は三分の一を。もし［故人に］兄弟姉妹がいるなら、母親は六分の一を。［いずれの場合も、故人の］遺言あるいは借財［の清算］の後でのこと。あなたがたの両親とあなたがたの子ども、どちらの方があなたがたの益により近いか、あなたがたには分からない［のだから、どちらに対しても公平にしなさい］。これが、アッラーからの定め。本当にアッラーは、すべてを知っており賢明である。[5]

12 あなたがたは、もしその妻に子どもがいないなら、彼女が遺したものの半分をあなたがたに。もし彼女に子どもがいるなら、彼女が遺したものの四分の一をあなたがたに。［いずれの場合も、故人の］遺言あるいは借財［の清算］の後でのこと。彼女たちは、もしあなたがたに子どもがいないなら、あなたがたが遺したものの四分の一を彼女に。もしあなたがたに子どもがいるなら、あなたがたが遺したものの八分の一を彼女に。［いずれの場合も、故人の］遺言あるいは借財［の清算］の後でのこと。男であれ女であれ、相続すべき親も子どももなく、兄弟あるいは姉妹がひとりだけいるなら、それぞれに六分の一ずつを。しかし、もし二人以上いるなら、三分の一を全員で配分する。［いずれの場合も、故人の］遺言あるいは借財［の清算］の後でのこと。これで誰にも損害を及ぼすことはない。これが、アッラーからの定め。アッラーはすべてを知り、もっとも情け深い。[6]

13 これがアッラーの定め。誰であれ、アッラーとその使徒に従う者は、川がその下を流れる楽園に入れられ、





その中に、永遠に住まうだろう。大いなる成就とは、まさしくこのこと。

14 しかし誰であれ、アッラーとその使徒に逆らい、定めを逸脱する者は、業火に入れられ、その中に、永遠に住まうだろう。その者には、屈辱の懲罰があるだろう。[7]

15 あなたがたのうち不品行にはしった女たちについては、彼女たちに対し、あなたがたの中から四人の証人を立てなさい。もし彼ら［証人たち］が［彼女たちの罪を］証言したなら、死が彼女たちを召し寄せるか、あるいはアッラーが彼女たちに［別の］道をもたらすまで、家の中にとどめ置きなさい。[8]

16 あなたがたのうち二人してこれを犯した者については、両名とも懲らしめなさい。しかし、もし彼らが悔い改めて自らをただすなら、両名ともそのままにしておきなさい。本当にアッラーは、幾度でも悔い改めを受け入れ、もっとも慈悲深い。[9]

17 アッラーに受け入れられる悔い改めとは、ただ無知であったために悪を行い、そののちすぐに悔い改める者のものだけ。これらの者について、アッラーはその悔い改めを受け入れる。アッラーは、すべてを知っており賢明である。[10]

18 しかし、死を迎えるまで諸々の悪を行い、「本当に私は、今こそ悔い改めます」と言う者の悔い改めは受け入れてはもらえない、［真理を］拒んだままで死ぬ者もまた。これらの者に、われらは痛烈な懲罰を用意してある。

19 信じる者たちよ。女を、［本人の意志に反して］強いて相続することは、あなたがたにとり合法ではない。彼女たちが明らかな不品行にはしったのでもない限り、あなたがたが与えたものの一部を取り返そうとして、何ら彼女たちに強要してはならない。誠意をもって生活を共にしなさい。もし彼女たちを嫌うなら、あなたがたは、アッラーがその中に備えておいた多くの良いものまで嫌うことになるかもしれない。[11]

20 もしあなたがたが、ある妻を別の妻と入れ替えようとするなら、たとえ彼女に山と積んだ贈り物を与えていたとしても、何ひとつそこから取り返そうとしてはならない。あなたがたは、中傷という明らかに罪深いことをしてまで、それを取り返そうとするのか。[12]

21 どうしてそれを取り返すことができるだろうか、すでに互いと親密な関わりがあり、相手はあなたがたから厳粛な誓約を受け取っているのに。[13]

22 すでに過ぎたことは別として、あなたがたの父親と結婚していた女と結婚してはならない。本当にこれこそが不品行であり、憎むべき悪習である。[14]

23 あなたがたに禁じられているのは、あなたがたの母親、娘、姉妹、あなたがたの父親の姉妹、あなたがたの母親の姉妹、あなたがたの兄弟の娘、あなたがたの姉妹の娘、あなたがたに授乳した乳母、乳母を同じくする姉妹、あなたがたの妻の母親、あなたがたと関わりのある女の連れ子で、あなたがたが養育している娘。ただしあなたがたにその女との関わりがないなら、［その連れ子を妻としても］誤りではない。また、あなたがたの腰から生まれた息子の妻。また、すでに過ぎたことは別として、姉妹そろって同時にめとること。本当にアッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。[15]

24 また、あなたがたが正当に召しかかえる者を除いて、既婚の女。これらが、あなたがたに課されたアッラーの定め。それら以外を、自分の財の範囲で、［結婚の相手を］私通のようにではなく、貞潔のために探し求めるのは、あなたがたにとり合法である。あなたがたが相手から楽しみを享受するなら、義務として相応の手当を与えなさい。あなたがたが、互いに同意の上で義務を越えても誤りではない。本当にアッラーは、すべてを知っており賢明である。[16]

25 あなたがたのうち、自由な身の信仰者の女と結婚するに足る資力のない者は、あなたがたが正当に召し





かかえる信仰者の女と結婚しなさい。アッラーは、あなたがたの信仰についてもっともよく知っている。あなたがたは互い同士。それゆえ、相手の家族の許しを得て結婚しなさい。誠意をもって手当を与えなさい。放埒にふるまうことも、密会の相手を持つこともなく貞潔でありなさい。嫁いでから不品行にはしったなら、その罰は自由な身の女に課されるものの半分を。それはあなたがたのうち、風紀の乱れを案じる者のため。しかし、よく耐えることの方があなたがたにとってはより良いこと。本当にアッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。[17]

26 アッラーは、あなたがたのために明らかにし、あなたがたを、あなたがた以前の者たちの慣行に導き、あなたがたからの悔い改めを受け入れることを望む。アッラーはすべてを知り、もっとも賢明である。[18]

27 アッラーは、あなたがたからの悔い改めを受け入れることを望む。しかし欲望に従う者が望んでいるのは、あなたがたが大いに逸(そ)れること。

28 アッラーは、あなたがたに課されているものを軽くすることを望む。人間は、か弱く創造されているため。[19]

29 信じる者たちよ。同意の上での商売でない限り、あなたがたの間で、互いの財をたわむれに貪りあってはならない。また自分たち自身を殺し合ってはならない。本当にアッラーは、あなたがたにいつも慈悲深い。[20]

30 誰であれ法外に不正をなす者を、やがてわれらは業火に投げ入れるだろう。本当にそれは、アッラーにはたやすいこと。[21]

31 もしあなたがたが、禁じられている大きな罪を避けるなら、われらはあなたがたの悪事についてはぬぐい去り、あなたがたを貴い入り口へ入らせよう。[22]

32 アッラーがあなたがたのうちある者に、他よりも恵んでいるものを欲しがってはならない。男にも、自

分で得たものの中から取り分がある。女にも、自分で得たものの中から取り分がある。アッラーに御恵みを求めなさい。本当にアッラーは、ありとあらゆるものごとを知る。[23]

33 われらはすべての者に、それぞれの両親や親族が遺すものの相続者を定めた。また、あなたがたが誓って取り決めをした者についても、彼らの取り分を与えなさい。本当に、アッラーはあらゆるものごとの証言者である。[24]

34 男が女の世話役となるのは、アッラーが後者よりも前者に恵み、また自分の財の中から［扶養に］費やすため。貞潔な女は従順であり、独り身でいるときもアッラーが守らせるものを守る。不実が案じられる者に対しては、［最初に］忠告をしなさい。［改まらないなら、次に］寝台に放っておき、［改まらないなら、最後に怪我をさせないよう］打ちなさい。それで、もし言うことを聞くようなら、彼女に対してそれ以上は何もしてはならない。本当にアッラーは、至高であり至大である。[25]

35 もしあなたがたが、彼ら［夫と妻］の間の不和を案じるなら、彼の家族から一名の仲裁者を立て、また彼女の家族から一名の仲裁者を立てなさい。もし両名が和解を望むなら、アッラーが両名の間をとり持つだろう。本当にアッラーはすべてを知っており、熟知している。[26]

36 アッラーに仕えなさい。何ものかを同列に連ねてはいけない。また両親には良くしなさい。また親族、孤児、貧しい者、近くの隣人、遠くの隣人、仲間たち、旅路にある者、そしてあなたがたが正当に召しかかえる者［と、その家族］にも。本当にアッラーは、思い上がりをして自慢する者を愛さない。[27]

37 彼らは吝嗇（りんしょく）で、人々にも吝嗇（りんしょく）を勧め、アッラーがその御恵みから彼らに与えたものを隠す者。［真理を］拒む者に、われらは屈辱の懲罰を用意してある。[28]

38 人々に見せびらかすために財を費やし、アッラーも終末の日も信じない者。悪魔を身内にする者の、なんと悪い身内だろうか。

39 アッラーと終末の日を信じ、アッラーが彼らの糧としたものの中から［慈善に］費やしたからといって、何を負わされるというのか。アッラーは、彼らのことを知っている。

40 本当にアッラーは、塵ひと粒の重さでさえ不正に扱わない。もし善がひとつあればそれを二倍にし、御許から大いなる報奨を与えるだろう。

41 われらがすべての共同体からそれぞれ証人を連れてきて、またあなた［ムハンマド］を、彼らに対する証人として連れてきたとき、どうなるだろうか。[29]

42 その日、［真理を］拒み、また使徒に逆らっていた者たちは、大地が自分たちをうずめて平（たい）らかになるよう望むだろう。しかしアッラーには、どのような出来事も隠せないだろう。

43 信じる者たちよ。あなたがたが酔っている間は、自分の言っていることがわかるようになるまで礼拝に近づいてはならない。また不衛生な状態なら、旅路にある場合を除いて、沐浴を済ませなくてはならない。もしあなたがたが病んでいるとき、あるいは旅をしているとき、誰であれ厠（かわや）から出てきたとき、女と交わったときに水を見つけられない場合は、良質の砂を用いて顔と手を撫でなさい。本当にアッラーは容赦し、もっともよく赦す。[30]

44 見なかったのか、啓典の一部を与えられた者たちが迷いを買い込み、またあなたがたをも道から迷わせようと望んでいるのを。

45 アッラーはあなたがたの敵をもっともよく知っている。友はアッラーのみで十分、助けはアッラーのみで十分。

46 ユダヤ教徒の中には、諸々（もろもろ）の言葉をあるべきところから置き換え、「私たちは聞きも、逆らいもする」、

また「聞いたが、聞こえなかった」と言う者がいる。そして「私たちを見守っていてください」と言うべきところを舌先でねじ曲げ、宗教を誹謗する。もし彼らが「私たちは聞きも、従いもする」、また「聞いて見守っていてください」と言ったなら、その方が彼らのために良く、またもっとも正しいことだった。しかし彼らは、［真理に対する］拒否のためにアッラーから忌まれた。それゆえ彼らは信じない、ごくわずかを除いては。[31]

47 啓典を与えられた者たちよ。われらにあなたがたの顔を消し飛ばされ、後ろ向きにひねられる前に、あるいはわれらに忌まれた安息日の仲間のように忌まれる前に、あなたがたと共にあるものの確認として、われらが［ムハンマドに］下したものを信じなさい。アッラーの命令は、常に果たされる。[32]

48 アッラーは、何ものかをその同列に連ねることを赦さない。それ以外のことなら、その御心のままに赦す。しかし何ものかをアッラーと同列に連ねる者は、確かに大それた罪を編み出している。[33]

49 見なかったのか、自分で自分を清めるという者たちを。いいや、そうではない。アッラーが、その御心にかなう者を清める。そして誰も［なつめやしの種子にある］筋ほどさえも不正に扱われることはない。

50 見なさい。彼らがアッラーについて、どのように虚偽をねつ造しているかを。それ自体が明らかな罪である。

51 見なかったのか、啓典の一部を与えられた者たちが迷信やターグートを信じ、［真理を］拒む者たちのことを、「彼らの方が、信じる者たちより［正しい］道に導かれている」などと言うのを。[34]

52 これらの者こそアッラーに忌まれる者。アッラーに忌まれた者に、あなた［ムハンマド］は決して助けとなる者を見出せないだろう。

53 それとも彼らは、王権の分け前にあずかっているのか。たとえそうであっても、彼らは人々に、ほんの





かけらほどさえも与えはしないだろう。

54 それとも彼らは、アッラーがその御恵みから与えたもののゆえに人々を妬んでいるのか。われらは、すでにイブラーヒームの一族に啓典と知恵を与え、また彼らに大いなる王国を与えた。

55 彼らの中には、これを信じる者もあれば、顔を背ける者もいた。地獄は、［彼らを焼き尽くす］烈火として十分だろう。

56 本当に、われらのしるし［の真理］を拒む者たちを、やがてわれらは火炎で焼くだろう。彼らの皮膚が焦げるたびに、われらは他の皮膚で代えてやり、懲罰を味わわせてやろう。本当にアッラーは、威力あり賢明である。

57 しかし、信じて正しい行いをする者には、われらは川がその下を流れる楽園に入らせ、永遠にその中に住まわせる。その中には、彼らのための清浄な伴侶がいて、われらは彼らを、涼やかな木陰に入れるだろう。

58 アッラーはあなたがたに、託されたものを持ち主に戻すように、また人々の間に判断を下すときは、公正な判断を下すようにと命じている。アッラーの教示の、何という恩寵か。本当に、アッラーはすべてを聞き、すべてを見る。[35]

59 信じる者たちよ。アッラーに従い、また使徒と、あなたがたのうち権限ある者に従いなさい。もしあなたがたが何ごとかについて争うなら、アッラーと使徒にかけ合いなさい、もしあなたがたが、アッラーと終末の日を信じるなら。その方がより良く、また結果としてもっともすぐれている。[36]

60 見なかったのか、あなたに下されたものと、あなた以前に下されたものとを信じると言い張る者たちを。彼らは判断を下すのに、ターグートに向かうことを望む。彼らは、すでにそれを拒むよう命じられてい

るのに。悪魔が、彼らを遠く迷い去らせようと望むのである。[37]

61 彼らに「アッラーが下したものと、使徒のところへ来なさい」と告げられるとき、あなたは、偽善者たちが顔を背けてあなたから去っていくのを見るだろう。

62 自らの手で送り出したもののために、彼らに災難が降りかかるときどうなるだろうか。そうなると彼らはあなたのところへやって来て、アッラーにかけて誓う。「私たちは、ただ好意と仲介を望んだだけです」。[38]

63 これらの者について、その胸の中に抱くものをアッラーは知っている。それゆえ彼らと距離を置き、教示しなさい。そして彼らのことについて、深奥に届く言葉で語りかけなさい。

64 われらが使徒を遣わしたのは、ただアッラーの思し召しにより人々を仕えさせるため。もし彼らが自分自身に不正をなし、あなたのところへ来てアッラーの赦しを願ったとき、使徒もまた彼らのために［共に］赦しを願うなら、彼らは、アッラーが悔い改めを受け入れること、慈悲深いことがわかるだろう。[39]

65 いいや、あなたの主にかけて。彼らの間で生じた騒ぎについてあなたの判断を仰ぎ、またあなたの下した決着に、彼ら自身が不安をおぼえず、［心から］受け入れ、任せるようになるまで、彼らが信じたことにはならない。[40]

66 たとえわれらが彼らに「あなた自身を殺すか、あるいは住まいを出ること」と定めても、ごくわずかな者を除いては、誰も従わないだろう。しかし彼らが教示のとおりに行うなら、その方が彼らのために良いことであり、また［彼らの信仰も］より揺るぎないものとなっただろうに。

67 そのとき、われらはわれらの許から、彼らに大いなる報奨を授けるだろうに。

68 そして彼らを、まっすぐな道へと導くだろうに。

69 アッラーとその使徒に従う者は誰であれ、アッラーの恩寵に浴する預言者たち、真実な者たち、殉教者





たち、そして行い正しい者たちと共にある。これらの者こそ、仲間としてもっともすぐれている。[41]

70 これがアッラーからの恩寵。アッラーはすべてを知っている。

71 信じる者たちよ、あなたがたは慎重でありなさい。隊ごとに分かれて出征するか、あるいは全員で出征するかしなさい。[42]

72 そしてあなたがたの中には、必ず遅れる者がいる。もしあなたがたに災難が降りかかると、彼らは「私が彼らと共にいなかったのは、まさしくアッラーの恩寵だ」などと言う。[43]

73 しかし、もしあなたがたにアッラーからの御恵みがもたらされると、まるであなたがたとの間に何の親しみもなかったかのように、「私も彼らと共にいればよかった。大いに成功していただろうに」などと言う。

74 それゆえ、現世の生を来世と引き換えにする者を、アッラーの道のために戦わせなさい。アッラーの道のために戦う者には、討ち取られようと、あるいは勝利をおさめようと、やがてわれらは大いなる報酬を与えるだろう。

75 あなたがたは、どうしてアッラーの道のために、また虐(しいた)げられている男女や子どものために戦わないのか。彼らは叫ぶ、「主よ。不正をなす者たちのこの町から、私たちを連れ出してください。あなたから私たちのために、私たちの援助者を立ててください」と。[44]

76 信じる者たちはアッラーの道のために戦う。［真理を］拒む者たちはターグートの道のために戦う。それゆえ、悪魔の味方と戦いなさい。本当に、悪魔の企みは弱いもの。

77 見なかったのか、「［戦いから］あなた方の手をひきなさい。礼拝のつとめを守り、喜捨をしなさい」と告げられた者たちを。しかし戦いが定められると、彼らのうちある者は人間を畏怖する。まるでアッラーを畏怖するように、あるいはそれよりも強く畏怖する。そして「主よ。どうして私たちに戦いを定めた

のですか。しばらくの間、猶予してはくれないのですか」などと言う。言いなさい。「現世の楽しみはわずかなもの。畏れる者には、来世の方がより良いもの。そしてあなたがたは、「なつめやしの種子にある」筋ほどさえも不正に扱われることはない」。

78 あなたがたがどこにいようと、たとえ高く建てられた堅牢（けんろう）な塔の中にいようと、死は必ずあなたがたに追いつくだろう。もし幸運が舞い込むと、彼らは「これはアッラーの御許から」と言う。もし悪いことに見舞われると、彼らは「これはあなた「ムハンマド」のせいだ」と言う。言いなさい。「すべては、アッラーの御許から」。しかし、いったいこの民はどうしたのか。どのような話も理解できないのか。

79 あなたがたに良いことがもたらされたなら、何であれそれはアッラーの御許から。悪いことがもたらされたなら、何であれそれはあなたがた自身から。われらはあなた「ムハンマド」を、使徒として人々に遣わした。アッラーは、証言者として万全である。[45]

80 使徒に従う者は、まさしくアッラーに従う者。背き去る者があろうと、われらはあなたを、彼らの保護者として遣わしたのではない。

81 彼らは「従います」と言う。しかしあなたのところから離れたとき、彼らの一部は、あなたが言ったこととは別のことを企てて夜を明かす。アッラーは、彼らの夜の企てを書きとどめている。それゆえ彼らと距離を置き、アッラーに委ねなさい。執りしきる者はアッラーだけで十分である。[46]

82 彼らは、クルアーンを熟考しないのか。それがアッラー以外のところからのものなら、その中には多くの矛盾があっただろう。[47]

83 安全か、あるいは危険かの報がもたらされるとき、彼らはそれを言いふらしてしまう。もし彼らが使徒や、あなたがたのうち権限ある者に問いなおしていたなら、真偽を問う者たちも「正しい回答を」知ることが





できていただろう。もしあなたがたの上にアッラーの御恵みも慈悲もなかったなら、あなたがたはごくわずかを除いて、悪魔に従っていただろう。

84 それゆえ、アッラーの道のために戦いなさい。あなたが責任を負うのは、ただ自分自身のことだけ。信仰者を励ましなさい。アッラーはおそらく、「真理を」拒む者たちの武力を抑えるだろう。アッラーは武力において何よりも強く、処罰において何よりも強い。

85 善事のためにとりなす者には、その取り分があるだろう。悪事のためにとりなす者には、その負担が課されるだろう。アッラーは、いつもあらゆるものごとを見張っている。[48]

86 挨拶をされたときは、さらにていねいに挨拶をするか、あるいは「せめて同様の」挨拶を返しなさい。本当にアッラーは、あらゆるものごとを清算する。[49]

87 アッラー、その他にいかなる神もない。復活の日、かの御方はあなたがたをことごとく集める、それは疑う余地もないこと。そして誰がアッラーよりも真実の話をするだろうか。

88 あなたがたはどうしたのか、偽善者たちのことで二つの派に分かれるとは。彼らの得てきたもののために、アッラーが彼らを転落させたというのに。あなたがたは、アッラーが迷わせた者を導こうと望むのか。あなた「ムハンマド」には、アッラーが迷わせた者のために道を見出してやることは決してできない。[50]

89 彼らは、自分たちが「真理を」拒むように、あなたがたも「真理を」拒むようになり、彼らと同じになるのを望む。それゆえ彼らがアッラーの道に移り住むまで、彼らを友として選んではならない。もし彼らが「敵対して」背を向けるなら、どこであろうと見つけしだい彼らを捕え、その場で討ち取りなさい。そして彼らの中からは、誰も友や助け手として選んではならない。[51]

90 しかし、あなたがたとの間に「和平の」誓約がある民のところに加わった者、あるいはあなたがたと戦う

ことにも、あるいは自分の民と戦うことにも胸を痛めて、あなたがたのところへ来た者は別である。もしアッラーがそうと望めば、彼らはあなたがたにまさる権限をもって、あなたがたと戦っただろう。それゆえ彼らがあなたがたから身を引いて、あなたがたと戦わず和平を申し出るなら、アッラーはあなたがたに、彼らを制する道を設けない。

91 そのほかにもあなたがたは、あなたがたからの安全を望み、また自分の民からの安全をも望む者たちを見出すだろう。しかし彼らは試練に呼び戻されるたび、［自制できずに］その中へ転落する。それゆえ、もし彼らがあなたがたから身を引かず、和平を申し出ることもせず、あなたがたから手を引くこともないなら、どこであろうと見つけしだい彼らを捕え、その場で討ち取りなさい。これらの者に対し、われらはあなたがたに明白な権限をもたせた。[52]

92 過失を除き、信仰者が信仰者を殺害することがあってはならない。過失で信仰者を殺害してしまったなら、信仰ある奴隷をひとり解放し、遺族に流血の代償を支払わなくてはならない。彼ら［遺族］がそれを慈善と［して赦免］する場合を除いては。もしその者［被害者］が信仰者で、あなたがたと敵対する民のひとりなら、信仰ある奴隷をひとり解放しなくてはならない。もしその者［被害者］が、あなたがたとの間に［和平の］誓約がある民のひとりなら、遺族に流血の代償を支払い、信仰ある奴隷をひとり解放しなくてはならない。その手立て［となる資力］を見出せない者は、悔い改めがアッラーに受け入れられるよう、二か月にわたり斎戒しなくてはならない。アッラーはすべてを知り、もっとも賢明である。

93 そうと知りながら信仰者を殺害する者の報いは地獄であり、その中に永遠に住まうだろう。アッラーの怒りを招き、忌まれることとなる。そうした者には、大いなる懲罰が用意される。[53]

94 信じる者たちよ。あなたがたがアッラーの道のために出発するときは、ものごとをよく調べなさい。あ





なたがたにサラームの挨拶をする者に対し、「あなたは信仰者ではない」などと言ってはならない。あなたがたは現世の生の利得を求めようとしている。しかし戦利品なら、アッラーの御許にふんだんにある。あなたがたも以前はそのようだったが、アッラーはあなたがたをいつくしんだ。それゆえ、ものごとをよく調べなさい。本当にアッラーは、あなたがたの行いを熟知している。[54]

95 信仰者のうち、何の差し障りもないのに［家の中に］座している者と、自分の財も自分自身もアッラーの道に投じて励む者とは同等ではない。アッラーは、自分の財と自分自身とを投じて励む者に、座している者よりも上の位階を恵む。アッラーはすべての者に、それぞれ最善のものを約束している。しかしアッラーは励む者に、座している者よりも大きな報酬を恵む、

96 かの御方からの位階と、赦しと、慈愛とをもって。アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。

97 自分自身に不正をなしているところを、天使たちに召された者は［天使たちに］告げられるだろう。「あなたがたは、どのようなあり方をしていたのか」。彼らは言う。「私たちは、地上で虐げられていました」。すると彼ら［天使たち］が言う。「アッラーの大地は、あなたがたが移り住めるほど広大ではないか」。これらの者にとり、その住まいは地獄である。行き着く先の、何と悪いことか。

98 しかし、虐げられていた男女や子どもは別で、彼らは手だてを立てることもできず、道へと導かれることもなかった。

99 これらの者には、おそらくアッラーの赦しがあるだろう。本当にアッラーは容赦し、もっともよく赦す。

100 アッラーの道のために移り住む者は、地上には代わりとなる多くの場があり、広大であるのを見出すだろう。自分の家を立ち去り、アッラーとその使徒へと移り住む者が、そののち死に捕えられても、その報酬は確かにアッラーが担う。アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。[55]

101 あなたがたが地上を旅するとき、［真理を］拒む者たちがあなたがたに害を及ぼすのを案じるなら、礼拝を短くしても誤りではない。本当に、［真理を］拒む者はあなたがたのあからさまな敵。

102 あなた［ムハンマド］が彼らの中にいて、彼らのために礼拝に立つとき、彼らのうち一部をあなたと共に立たせ、また彼らに武器を持たせなさい。そして彼らがひれ伏し［て、礼拝を終え］たとき、彼らをあなたの後ろにして、礼拝していない別の一部を［前に］来させ、あなたと共に礼拝させなさい。また彼らにも用心させ、武器を持たせなさい。［真理を］拒む者たちは、もしあなたがたが自分の武器や糧食に無頓着になったなら、あなたがたに一撃を加えようとしている。もし雨に見舞われるか、あるいは病んでいるときは、武器を置いても誤りではない。しかし、用心しなくてはならない。本当にアッラーは、［真理を］拒む者には屈辱の懲罰を用意している。

103 礼拝を終えたなら、立っていても、座していても、横たわっていてもアッラーを想い起こしなさい。しかし平時のときは、［通常通りの］礼拝のつとめを守りなさい。信仰者には、決められた時刻に礼拝することが定められている。[56]

104 敵を追うのに怯んではならない。あなたがたが苦しいなら、彼らもまたあなたがたと同じく苦しいのである。しかしあなたがたには、彼らには望むべくもないことをアッラーに望むことができる。アッラーはすべてを知っており賢明である。[57]

105 本当にわれらは、真理をもってあなたに啓典を下した。それはアッラーがあなたに見せたものにより、人々のあいだに判断を下すため。それゆえ、裏切る者のために抗弁する者になってはならない。

106 アッラーの赦しを願いなさい。本当にアッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。

107 自分自身に不誠実な者のために言い争ってはならない。本当にアッラーは、不誠実な罪深い者を愛さない。[58]





108 人々には押し隠せても、アッラーから押し隠すことはできない。この御方には喜ばれないことを言って夜を明かすときも、この御方は彼らと共にいる。アッラーは、彼らの行いを把握している。[59]

109 見なさい。現世の生の中であなたがたは、彼らのために言い争っている。しかし復活の日に、誰が彼らのためにアッラーと言い争えるだろうか。あるいは、誰が彼らのための保護者となれるだろうか。

110 誰であれ悪事を行ったり、あるいは自分自身に不正をなしたりしても、そののちアッラーの赦しを願う者は、アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深いことを見出すだろう。

111 誰であれ罪深いことを得た者は、自分自身にそれを得ただけのこと。そしてアッラーは、すべてを知っており賢明である。

112 誰であれ過ちや、あるいは罪深いことを得て、そののちそれを潔白な者にかぶせる者は、中傷と明白な罪深さを自らに負う。

113 もしあなた［ムハンマド］にアッラーの御恵みと慈悲がなかったなら、彼らの一部はあなたを迷わせようとしただろう。しかし彼らは、ただ自分自身を迷わせるだけ。彼らはあなたを、何ひとつ害することはできない。アッラーはあなたに啓典と知恵を下し、またあなたの知らなかったことを教える。あなたに対する、アッラーの御恵みこそ大いなるもの。[60]

114 密談の多くは何も良いことがない。しかし慈善や親切を勧めるか、あるいは人々の間に和解をもたらすなら別である。アッラーの喜びを求めてそれらを行う者に、やがてわれらは大いなる報酬を与えるだろう。

115 導きが明らかにされた後になって使徒に歯向かい、信仰者以外の道に従う者には、われらは彼らの好きなようにさせておき、それから地獄で彼らを焼くだろう。行き着く先の、何と悪いことか。[61]

116 本当にアッラーは、御自らが何ものかと同列に連ねられるのを赦さない。それ以外のことは、その御心

のままに誰であれ赦す。しかしアッラーに何ものかを同列に連ねる者は、すでに遠くへ迷い去った者である。[62]

117 彼らはかの御方をさし置いて、女形の像に呼びかける。しかし彼らが呼びかけているのは、反逆の悪魔に他ならない。[63]

118 アッラーは彼［悪魔］を忌み、また彼は言った。「私はあなたのしもべたちのものから、当然の取り分を必ず私のものにする。

119 私は必ず彼らを迷わせ、必ず彼らの欲望をたきつけ、必ず家畜の耳を切り落とすよう命じ、アッラーの創造をそれ以外のものに変えさせる」。アッラーをさし置いて悪魔を友に選ぶ者は、誰であれ確かに明らかな損失をこうむる。[64]

120 彼［悪魔］は彼らに約束し、欲望をたきつける。しかし悪魔の約束は、ただ欺瞞に過ぎない。

121 これらの者にとり、その住まいは地獄である。彼らには、そこから逃げる手だてを見つけることはできない。

122 しかし、信じて正しい行いをする者たちを、われらは川がその下を流れる楽園へ入らせ、永遠にその中に住まわせるだろう。アッラーの約束は真理である。言葉において、誰がアッラーよりも真実でありえようか。

123 これはあなたがたの願望でもなく、啓典の民の願望でもない。誰であれ、悪を行う者にはその報いがあり、またアッラーをさし置いて、守る者も助ける者も見出せない。[65]

124 男であれ女であれ、信仰者として正しい行いをする者たち、これらの者は楽園に入るだろう。そしてほんのかけらほどさえも、彼らが不正に扱われることはない。[66]





125 宗教においては自分自身をアッラーにあずけ、行いも善良で、純正な人イブラーヒームの宗旨に従う者よりもすぐれた者があるだろうか。アッラーはイブラーヒームを、親しい友として選んだ。[67]

126 諸天にあるもの、大地にあるもの、ことごとくアッラーに属する。アッラーは、あらゆるものごとを取り囲む。

127 彼らはあなたに、女について裁定を求めるだろう。言いなさい。「アッラーはあなたがたに、彼女たちについてどうすべきかを告げている。また、あなたがたが、定められているものを与えることなく結婚しようとしている女の孤児たちについて、虐げられている子どもたちについて、正道に立って孤児たちを扱わねばならないことについても、あなたがたが読み聞かされている啓典にある通り」。あなたがたが行うどのような善も、アッラーはよく知っている。[68]

128 もし女が夫の不実や、あるいは遺棄を案じるなら、両名が自分たちの間に和解をもたらそうとするのは誤りではない。そして和解は、もっとも良いこと。自我は貪欲になりがちである。しかしあなたがたが善をなし、畏れるなら、本当にアッラーは、あなたがたの行いを熟知している。[69]

129 たとえあなたがたが熱望しようと、あなたがたには、決して［妻である］女たちの間を平等に扱うことはできない。一方にかまけ、他方を宙吊りのまま放置してはならない。あなたがたが和解し、畏れるなら、本当にアッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。[70]

130 しかし、もし彼らが［離婚して］離ればなれになったとしても、アッラーはその広大さをもってそれぞれを富ませるだろう。アッラーは果てしなく広大であり、賢明である。[71]

131 諸天にあるもの、大地にあるもの、ことごとくアッラーに属する。われらはあなたがた以前に啓典を与えられた者にも、またあなたがたにも、アッラーを畏れるよう指図してある。たとえあなたがたが［真

理を」拒もうとも、諸天にあるもの、大地にあるもの、ことごとくアッラーに属する。アッラーは満ち足りた、称賛されるべき者。

132 諸天にあるもの、大地にあるもの、ことごとくアッラーに属する。執りしきる者はアッラーだけで十分である。

133 もしそうと望めば、人々よ、かの御方はあなたがたを廃して、他のものを連れてくることもできる。アッラーには、そのようなことも可能である。[72]

134 現世の報奨を望む者もいるだろう。それなら「そうした者に知らせなさい、」アッラーの御許には、現世と来世の報奨がある。アッラーはすべてを聞き、すべてを見る。

135 信じる者たちよ。あなたがたは正道に立ち、アッラーのために証言しなさい、たとえそれがあなたがた自身に、あるいはあなたがたの両親や親族に反するとしても。富める者であれ、持たざる者であれ、そのどちらにもアッラーの方が「あなたがたよりも」近い。それゆえ私心に従ってはならない、さもないと踏み外すことになる。それで、もしあなたがたが背を向けるか、あるいは背き去ったとしても、本当にアッラーは、あなたがたの行いを熟知している。[73]

136 信じる者たちよ。あなたがたはアッラーと、その使徒とを信じなさい。またその使徒に下された啓典と、それ以前に下された啓典も。誰であれ、アッラーとその天使たち、その諸々の啓典、その使徒たち、そして終末の日「の真理」を拒む者は、すでに遠く迷い去った者。[74]

137 信じるようになって、そののち「真理を」拒むようになり、そののち「再び」信じるようになり、そののち「再び真理を」拒むようになり、そうしてますます拒否を深めてゆく者がある。アッラーは決して彼らを赦すことなく、また彼らを正道へと導くこともないだろう。[75]





138 偽善者たちに報せを伝えなさい、彼らには痛烈な懲罰があるだろうと。

139 信仰者をさし置いて、「真理を」拒む者を友に選ぶ者がある。彼らは、彼らの間で栄誉を得ようというのか。しかし、栄誉はことごとくアッラーに属する。

140 あなたがたには、すでに啓典の中に下されているはず。アッラーの御しるし「の真理」を拒み、あざ笑うのを聞いたときは、それ以外の話に入るまで、彼らと席を共にしてはならない。さもないと、あなたがたも彼らと同じようになる。本当にアッラーは偽善者と「真理を」拒む者とを、ことごとく地獄に集めるだろう。[76]

141 あなたがたを待ち受ける者たちは、アッラーからの勝利があなたがたにあれば、「私たちは、あなたがたと共にいたではないか」と言う。しかし、好機が「真理を」拒む者にあれば、「私たちは、あなたがたに好機をもたらしたではないか。あなたがたのために信仰者を妨げたではないか」と言う。復活の日、アッラーはあなたがたの間に判断を下すだろう。アッラーは「真理を」拒む者に、信仰者を制する道を設けない。

142 偽善者たちは、アッラーを欺いたつもりでいる。かの御方こそ彼らを欺く。礼拝に立つとき、彼らは怠惰に立ち、人々に見せかけるだけで、アッラーを想い起こすこともほとんどしない。

143 あちらに行ったり行かなかったり、こちらに来たり来なかったりしている。あなたには、アッラーが迷わせた者のために道を見出してやることは決してできない。

144 信じる者たちよ。あなたがたは、信仰者をさし置いて「真理を」拒む者を友に選んではならない。あなたがたは、自分に反する明らかな証拠をアッラーに差し出そうと望むのか。[77]

145 本当に、偽善者たちは火獄のもっとも深い底の中に。あなたには、彼らのために助ける者を見出してや

ることは決してできない、

146 悔い改めて自らをただし、アッラーにしっかりとすがり、宗教においてただアッラーに真摯な者を除いては。これらは、信仰者と共にいる者。やがてアッラーは信仰者に、大いなる報酬を与えるだろう。[78]

147 あなたがたが感謝し、信じるようなら、どうしてアッラーがあなたがたを罰するだろうか。アッラーはもっとも感謝に報い、すべてを知っている。

148 アッラーは、不正に扱われた者を除いて、悪い言葉が公然と発せられるのを愛さない。アッラーはすべてを聞き、すべてを知っている。[79]

149 あなたがたが公然と善をなそうと、あるいは押し隠そうと、あるいは悪事を容赦しようと、本当にアッラーは容赦し、全能である。

150 アッラーとその使徒たちを信じず、アッラーと、その使徒たちの間を分かつことを望み、「私たちは、あるものは信じるが、その他のものは［それが真理であることを］拒む」と言い、どちらでもない間の道を選ぼうと望む者、

151 これらの者こそ、真に［真理を］拒む者。われらは［真理を］拒む者に、屈辱の懲罰を用意してある。

152 アッラーとその使徒たちを信じ、彼らの間で誰のことも分け隔てすることのない者たち。これらの者に、やがて報酬が与えられるだろう。アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。

153 啓典の人々は、あなたに天から彼らのところに［直接に］啓典を下すよう求めるだろう。彼らは、すでにムーサーにも、より大それたことを求め、「アッラーをはっきりと見せてください」と言った。その不正のために、彼らは落雷に打たれた。そののち、明白な証が彼らにもたらされた後になってさえ、彼らは仔牛［を崇めること］を選んだ。それでもわれらは彼らを容赦し、ムーサーに明白な権威を与えた。[80]





154 また彼らの誓約のため、われらは彼らの頭上にトゥールの山をそびえ立たせ、彼らに告げた。「ひれ伏して門に入りなさい」。また、われらは彼らに命じた。「安息日の法に外れてはならない」。こうしてわれらは、彼らから厳粛な誓約を受け取った。[81]

155 しかし、彼らはその誓約を違え、アッラーの御しるし［の真理］を拒み、正当な理由なくして預言者たちを殺害し、「私たちの心は［殻によって］固くおおわれている」と言った。いいや、そうではない。彼らが恩を忘れたために、アッラーが［彼らの心を］封じたのである。そのため彼らは［真理を］拒む、ごくわずかを除いては。

156 ［真理に対する］彼らの拒否のために、また彼らの言う、マルヤムに対する大それた中傷のために、

157 また「本当に私たちは、マスィーフことマルヤムの子イーサー、アッラーの使徒を殺した」と言ったために。彼らは彼を殺しておらず、十字架にかけてもいない。彼らにはそう見えたというだけ。それについて相争う者たちは、それについて疑いを抱えている。彼らにはそれについての知識もなく、ただ推測に従っているに過ぎない。彼らが彼を殺していないのは確実なこと。[82]

158 いいや、アッラーが彼を御自らに引き上げたのである。アッラーは威力あり、賢明である。

159 啓典の人々のうち、その死の前に彼を信じない者はいない。復活の日、彼はその者たちに対する証人となるだろう。[83]

160 ユダヤ教徒のうち、ある者が不正を行った。それゆえわれらは、彼らにとり合法であった良いものを、彼らに対して禁じた。それは彼らが多くの者を、神の道から阻んだからでもある。

161 また彼らは、すでに彼らに禁じてあった利息を取り、人々の財産をたわむれに浪費した。われらは彼らのうち［真理を］拒む者に、痛烈な懲罰を用意してある。

162 しかし彼らのうち知識に根ざしている者、信仰者、あなたに下されたものと、あなた以前に啓示されたものとを信じる者、礼拝のつとめを守り、喜捨をし、アッラーと終末の日を信じる者。これらの者に、われらは大いなる報奨を与えるだろう。

163 本当に、われらはあなたに啓示した、ヌーフと、彼の後の預言者たちに啓示したのと同じように。またわれらは、イブラーヒーム、イスマーイール、イスハーク、ヤアクーブと諸々（もろもろ）の支族にも啓示した。またイーサー、アイユーブ、ユーヌス、ハールーン、スライマーンにも。またわれらは、ダーウードに詩篇を与えた。[84]

164 またわれらが、すでにあなたに語ったことのある使徒たちも、あなたに語ったことのない使徒たちも［遣わした］。アッラーは、ムーサーにはじかに語りかけた。[85]

165 使徒たちとは良い報せを伝える者であり、警告者である。それは使徒たちの［遣わされた］後になって、人々がアッラーについて言い争うことのないようにするため。アッラーは威力あり、賢明である。[86]

166 あなたに啓示されたものについて、アッラーはそれが御自らの知識から下されたことを証言する。また天使たちも証言する。しかしアッラーは、証言者として万全である。

167 ［真理を］拒み、アッラーの道をさえぎる者たちは、すでに遠く迷い去っている。

168 ［真理を］拒み、不正をなす者たち。アッラーは決して彼らを赦すことなく、またどのような道程にも導くことはないだろう、

169 彼らの永遠の住まいである、地獄への道程を除いては。そしてそれは、アッラーにはたやすいこと。[87]

170 人間よ。まさにあなたがたの主から、真理とともに使徒が到来した。それゆえ信じなさい、その方があなたがたのためにもっとも良いこと。しかしあなたがたが［真理を］拒もうとも、諸天と大地にあるもの





はアッラーに属する。そしてアッラーはすべてを知り、賢明である。

171 啓典の人々よ。あなたがたの宗教を逸脱してはならない。アッラーについては、真理の他に何も言うべきではない。マスィーフことマルヤムの子イーサーは、アッラーの使徒であり、マルヤムに伝えられた御言葉であり、またかの御方からの息吹である。それゆえアッラーと、その使徒たちを信じなさい。そして「三」と言ってはならない。控えなさい、その方があなたがたのためにもっとも良いこと。アッラーは唯一の神。かの御方に讃美あれ、子をもうけるなどとは［何ごとか］。諸天にあるもの、大地にあるもの、ことごとくこの御方に属する。執りしきる者はアッラーだけで十分である。[88]

172 マスィーフであろうと、神のしもべであることを決して軽んじはしない、そば近くの天使たちも。かの御方に仕えることを軽んじて高慢にふるまう者を、かの御方はことごとく御自らに召し集める。

173 信じて正しい行いをする者に、かの御方は十分に報い、さらにその御恵みから増やすだろう。しかし軽んじて高慢にふるまう者に、かの御方は痛烈な懲罰を科すだろう。アッラーをさし置いて、彼らには守る者も助ける者も見つけられないだろう。

174 人々よ。あなたがたの主から、すでに確証があなたがたに到来している。われらはあなたがたに、明白な光を下した。[89]

175 アッラーを信じてしっかりとすがる者を、この御方はその慈悲と御恵みの中に受け入れ、まっすぐな道を通して御方へと導くだろう。[90]

176 彼らはあなたに、［法の］裁定を求めるだろう。言いなさい。「親も子どももない者についての、アッラーの裁定である。もし誰かが亡くなり、子どももなく、ひとりの姉または妹があるなら、彼が遺したものの半分は彼女に。彼女が亡くなり、子どもはいないなら、彼女の遺したものは彼に。二人の姉妹がある

なら、遺されたものの三分の二を。また兄弟も姉妹もあるなら、男には女の二人分と同じだけのものを。アッラーは、あなたがたが迷うことのないよう、ものごとを明らかにする。アッラーは、ありとあらゆるものごとを知る」。

1 ここでは「一個の魂」と訳したが、これは「一人の人間」、すなわち最初の人間でありイスラームでは預言者のひとりとして数えられているアーダムを指す。

2 複婚（この場合、いわゆる一夫多妻婚）を神聖な制度として確証する節である。それはムーサーの律法において認められ、スライマーンからカール大帝に至るまで実践され、マルティン・ルターが擁護した婚姻の一形態でもある。イスラームにおける複婚には、いくつかの制限がもうけられる。男性は四人を超える配偶者を持つことはできない。また、全員に対し物心両面における公平な待遇ができない場合、配偶者は一人のみとするよう義務づけられる。例えば預言者のハディースによると、複数の配偶者を持つ場合、それぞれに同等の住居をひとつずつ与えるよう命じられている。複婚は男女双方にとり利点もある制度ではあるが、現実的にみてほぼ実現が不可能であるため、結論としては一夫一婦制の婚姻の推奨であると解釈されることも少なくない。

3 配分の際には、良識があり、道徳的にすぐれた証人に同席してもらうことが望ましいだろう。また、たとえ身内から選ばれた証人が、完全に基準を満たしていると思えたとしても、来世において神に申し開きしなくてはならないことを考えれば、厳正にも厳正を重ねるべきである。公正を重んじる者なら、この点を真剣に受け止めることだろう。

4 遺産の配分に関するこれらの節は、イスラームによってもたらされた社会的な改善の代表例であるといえる。預言者の





到来以前の時代、女性たちに遺産相続の権利はなかった。この啓示によって、それまで奪われていた女性の権利のひとつが認められることになったのである。第二に、この規定が近親者のみならず、より遠い親戚や隣人、また近辺の貧困層をも対象としている点にも留意すべきである。故人の遺産がどのような手段で築かれたのかにも関心が寄せられるべきであろう。遺産の配分を、故人が生前に引き起こしていたかもしれない様々な悪感情を払拭する機会としてとらえることは重要である。

5 この節からは、分配と責任の間のバランスを慎重に算出することの重要性を読み取らねばならない。扶養責任をになう者は、より多くの分配を受け取るべきである。イスラームの法の下では、婚資となる持参金を支払うのは女性ではなく男性であり、また婚姻の儀式に費やされる経費のみならず、食料、衣料、住居といった結婚生活を維持するための婚費や、子どもにかかる養育費の負担も男性側に義務づけられている。相続についてもこれを大前提として、男性により多く分配されるよう定められている。

6 節の最後尾、「誰にも損害を及ぼすことはない」とは、遺贈や、相続人の法定遺留分の簒奪を目的とした架空の債務を防ぐことを目的としている。ブハーリーやムスリムのハディースによると、預言者は、法の定める相続人がいる場合、遺産の三分の一を超えて他者に遺贈することを禁じている。だが法的な相続権を有する親族がいない場合、遺言者は自らの財産を自由に遺贈することができる。ここでは「相続すべき親も子どももなく」と訳した「カラーラ」というアラビア語は、預言者の生前には、どのような正式な定義もされていなかった。二代目のカリフをつとめたウマルは「預言者が亡くなる前に詳細にいたるまで定義されていたなら、と願わずにはいられない三つの言葉があることに気づいた」と述べているが、「ヒラーファ」、「リバー」、そして「カラーラ」がそれに相当する。本書では、いずれの語についても通説として受け入れられている定義に従っているが、「相続すべき親も子どももなく」との表現は、この箇所だけを抜粋すると、血縁のみに限定され、寡婦ないしは寡夫の存在を度外視しているかのように読めてしまう。もちろん、生存

している寡婦ないしは寡夫がいる場合は、すでに明確化されている通り、親族に先んじて相続する。クルアーンを読むにあたり、前後を含む文脈全体を把握しなければならないことを示す好例のひとつである。

7 相続に関しては、世界各地において様々に異なる法制度が採用・導入されている。世俗的な制度の多くは、たとえ遺言者がどれほど高齢であろうと、あるいは人格に問題があろうと、直系の親族からでさえも相続権を剥奪する権利を遺言者に付与している。イスラームの法の下では、故人の財産は、前節において詳しく説き明かされた配分に基づき一定の割合が親族や縁者に与えられねばならず、遺言による執行は一部に限られる。

8 「不品行にはしった女」について、解釈者の大半はこれを婚外の性的な交渉を指すものとしている。またその場合、この節で示されている罰則は、のちに啓示された二四章二節によって変更されたものとみなされている。

9 これらの節は、婚外の性的な交渉に関わるものである。一五節は二人のうちどちらか、あるいは二人共が既婚者の、いわゆる不倫の場合を扱っているが、一六節は未婚者を対象としているものとされる。またこれらについては前述のとおり、のちの新たな啓示により変更が加えられている。二四章二節の解釈によると、既婚者が婚外の性的な交渉という罪を犯した場合は石打刑が、単身者（未婚者）の場合は百回の鞭打刑が適用される。ただし刑の執行には、性的な交渉の現場を具体的に目撃した四名の証言者を要するため、実際に刑を執行するのはむしろ困難となる。しかしながら別のクルアーン解釈者によると、これらの節は二四章二節の啓示後も廃止されてはおらず、その場合この節が指しているのは異性間ではなく同性間の性的な交渉であり、一五節は女性の同性愛、一六節は男性の同性愛をそれぞれ扱っているとされる。

10 ここでは悪行をなした直後に、という意味で「そののちすぐに」と表現したが、死期が近づいた直後に、と解釈する者もある。この解釈の是非については、次の節において明らかになる。

11 イスラーム以前のアラブにとり、女性は部族の間で動産のように取引の対象として扱われる存在であり、実際にそれが





慣習となっていた。夫が死亡すれば、妻であった女性は遺産の一部となる。自分の意志とは関わりなく再婚させられるか、売られるか、あるいはその他の物質的な利益のために使役されることになった。この節の啓示により、そうした慣習は絶たれるべきものとされ、女性はその本来にふさわしい尊厳と尊敬を取り戻すこととなった。

12 結婚に際して男性が女性に、女性本人や女性の家族の指定に応じて金製品や宝飾品、通貨や不動産その他の物質的な品物を「贈与」として与えることは、イスラームにおいて定められた義務的な慣習法である。これは「マハル」と呼ばれ、例えば婚約の際など、結婚の事前に支払うことも、あるいは離婚の際や夫の死亡の際に支払うよう延期することも可能ではあるが、支払いの時期については花嫁となる女性に決定権がある。マハルとは、そもそも経済的に自立した地位を女性に与えることを目的としており、それを男性側が取り上げることは、イスラームの法の下ではあきらかな違法行為である。またあらゆる種類の虐待や圧迫、嫌がらせの行為は禁じられており、法廷に訴訟を提訴することも可能である。

13 性的な交渉を持った後に女性と離縁することを決めた男性は、取り決められたマハルの全額を支払う義務を負うが、実際の結婚生活については省略しても構わない場合もある（想定されていた婚費の負担はなくなる）。婚姻の契約が成立しているにもかかわらず、男性側が結婚の初夜に至らなかった場合、理由に関わらず女性側には取り決められたマハルの半分を受け取る権利が発生する。

14 この節により、「ジャーヒリーヤ（無明の時代）」と呼ばれるイスラーム以前の時代に行われていた未亡人と義理の息子の婚姻が廃止された。次の節では、婚姻が禁じられる親等の基準が定められている。

15 「あなたがたと関わりのある女の連れ子で、あなたがたが養育している娘」、すなわち結婚の契約を交わした女性の娘との結婚は禁じられる。結婚の契約が成立しているにもかかわらず、結婚生活が営まれておらず、実質的には離婚の状態が続いている場合、その女性と別の男性との間に出生した娘と結婚することは禁じられていない。結婚が可能な遠戚もあるが、近親者との結婚はクルアーンとハディースの両方において禁じられている。「あなたがたの腰から生まれた息子」

には、その子孫も含まれている。

16 夫ではなく妻が持参金を与える習慣を有する宗教は複数存在する。この習慣はヒンドゥー、アルメニア教会、ユダヤ教、ギリシャ正教の間で実践されている。それらの文化圏では、持参金は女性が男性を引きつける手段としてみなされている。しかしながらイスラームにおいては、その反対のことが定められている。ムスリムの男性は富を好まず、純潔と尊厳を好むべきであるとの考え方から、経済的な贈与は男性から女性へなされるものとされる。

17 高度に発達した宗教であれば、そのほとんどが不貞と姦通を禁じている。一部の者によって実践されているような、特定の代価と引き換えにした期限付きの擬似的な「結婚」は合法ではない。少なくとも結婚を決める際には、それが一時的なものではなく恒久的に続くものとして意図されねばならない。また秘密裏に愛人を持つことは姦通の一形態に過ぎない。ムスリムの男性は、結婚するなら信仰を有する女性を選ぶべきである。ムスリム男性はまた、啓典の民すなわちユダヤ教徒やキリスト者の中から配偶者を持つこともできる。また「あなたがたは互い同士」とは、奴隷の身分にある者たちを、ていねいに遇することの重要性を指してのものである。奴隷の身であろうと自由な身であろうと、男女の尊厳は非常に重要である。戦時に捕虜となった奴隷に対する親切により、捕虜がイスラームに導かれることもある。慈悲と公正さはどのような場合においても重んじられなければならない。一時的な奴隷化を許可すると同時に奴隷の解放を推奨するイスラームの秩序と、かつて子々孫々にわたる永続的な奴隷制を国民全員に義務づけていた近代国家とを対比する以上に、それぞれが何に重きを置いているかの違いを知らせるものはないだろう。

18 「あなたがた以前の者たちの慣行」とは、人間の身体的資質と、その精神が希求するものの調和を目的とする、かつてイブラーヒームが実践していた「純正な宗教」を指している。放蕩に取って代われるのは唯一、禁欲主義であるとみなされるとき、この調和は破壊されてしまう。結婚生活のあり方に始まる、性的な道徳についての議論の延長線上にある節である。





19 宗教的な助言と義務の目的は、人間に重圧を課すことではない。道に迷ったために自分自身や他者を傷つけるのを防ぐことを目的として授けられるものである。啓示の法とは人間を守り、人間を導くためのものであるということを認識した上で解釈することが大切である。それにより人間は、現世と来世の双方における静謐と幸福を成就するのである。

20 社会に公正と平等が保証され、お互いの権利が尊重されている限り、その社会において商取引を行い、品物や労働を交換することは有益である。これらの経済活動は、イスラームの視点からしても合法である。しかし合法の範疇から外れた商取引では、不変の幸福はもたらされない。特定の人々の集団だけが一時的な幸福を享受することは、むしろその他大勢の人々に災難と貧困をもたらすことになる。そうした不平等な経済活動は、暴動や紛争、革命といった多くの混乱を引き起こす可能性がある。二九節の「互いの財」という言葉は、財産とは、神から信託として委ねられた共同体全体の有であるという指摘であるとも考えられるだろう。

21 例えば正当と認められる理由もなく他者を殺害することは、「法外な不正」に相当する。

22 人間は天使と違い、罪を犯そうと思えば犯せる意志を持つものとして創造されている。意志が邪悪に傾くことのないよう、利己的な傾向に抵抗するところに美徳が生じるのである。道徳的な生活の本質とは、そうした努力を重ねることにあり、またそうした努力を重ねる者に対し、神は恩寵をもって過去の罪から救い、現世においても来世においても、神の傍により近づくことを許可する。

23 主はあらゆる個人に対し、その人にしかない資質や才能という祝福を授けている。そのことが信じられるなら、他者をねたむ理由は何ひとつなくなる。自分にないものをうらやむことに人生の貴重な時間を費やすなら、それは不幸な生き方である。それよりも、まずは神からすでに授かっている祝福に気づき、満足し、その上で自分に欠けているものについては、人をうらやむよりも神に対して恩寵を願うべきだろう。願うものが魂に関することなら、より幸いである。

24 ここでの「取り決め」とは、遺産の相続を前提として結ばれた契約を指す。一部の解釈者によると、こうした形態の契

約は別の啓示によって廃止された。しかし別の解釈者によると、ここでの「取り決め」とは結婚の契約を指すともされている。

25 男性にはある程度の経験と洞察が与えられているとみなすことが正当化されうるとすれば、それは決して生得的なものではなく、家父長制を本来的なあり方とする社会が、習慣としてある種の役割を男性に割り当てることを積み重ねてきたからに過ぎない。その上で、社会を築く最小単位は家族であり、その他すべての健全性を担保するのも家族である。コミュニティとは多かれ少なかれ複雑なものであるが、家族もまた例外ではなく、これを長続きさせるには指導者が必要である。イスラームにおいては、指導者や長となって管理する人物は、まず自らが神の法に従わねばならない。指導者が公正さと慈悲をもって管理する限りにおいて、指導者に反することは法の守護者に反することであり、その場合は相応の罰則が科されねばならない。

結婚生活における制裁は、忠告や寝室を別にするといった段階を経た上での最後の手段である点に留意すべきである。また預言者自身は、生涯に一度たりとも妻に手をあげたことはなかったことも強調されねばならないだろう。彼はムスリムの共同体に対し、妻に手をあげる者はろば同然であると警告してもいる。万が一、男性が妻に身体的な制裁を加えざるをえない場合があったとしても、傷やあざ、その他の跡が残るような方法は禁じられているため、それはあくまでも象徴的なものでなければならない。また夫からの待遇に不服があれば、妻は問題を解決するために公的な裁きの場に訴える権利を有している。

26 仲裁者を指名することは、物事を表沙汰にすることなく家族の争いを解決するためのすぐれた手段のひとつである。

27 神に仕える真のしもべは、美しい人格を有している。礼拝や断食を行っていながら、吝嗇で刺々しいままの者など、主の真のしもべの中には存在しない。

28 吝嗇とは、神への奉仕のために自らを捧げるのを拒むだけではなく、他者がそうすることをも妨げる者を指す。神は





吝嗇や利己主義を愛さない。

29 神の使徒たち全員が、主のメッセージを伝えるという同一の目的をもって到来した。市民的・社会的な条件は絶えず変化しているため、諸々の原則や道徳は不変であっても、どう適用されるかは時と場合によって変化してゆく。文明がより進歩した時代に最後の使徒として遣わされた預言者ムハンマドは、古来のメッセージの誤読を指摘し、最も適切な形でそれを提示し直した存在であるといえる。メッセージを改ざんしたり、あるいは宇宙に統一的な原則は存在しないと主張して、メッセージを完全に否定したりする人々は、終末の日の裁きにかけられる。また彼らに遣わされた使徒たちも、彼らについて証言するだろう。最後の預言者ムハンマドは、彼以前に遣わされた使徒たちのために証言することになる。ブハーリーが伝えるハディースによると、預言者はかつてイブン・マスウードにクルアーンを暗唱するよう頼んだ。イブン・マスウードが「私があなたに暗唱するのですか？　これはあなたに啓示されたものなのに」と尋ねたところ、預言者は「その通り。他の者が暗唱するのを聞くのは、私にとっては大いなる喜びなのだから」と答えた。イブン・マスウードは続けて次のように語ったと記録されている。「……そこで私は四章を暗唱した。私が四一章にさしかかると、預言者は『今はそこまでで十分』と言って私を制止した。私が彼を見ると、彼の目からは涙が流れていた」。

30 神聖な崇拝の行為にのぞむには、身を清めるための沐浴が必須である。にもかかわらず周辺に水が見出せないときは、「タヤンムム」と呼ばれる、砂を用いた浄めによって沐浴に替えることができる。イスラームにおいては、特に礼拝時にはその心身の清潔さと純粋さが厳しく求められるが、身体上の浄めが不可能な際には、浄めを象徴する動作を行うことでその代替とすることが認められている。水場が遠すぎる、病気のため遠距離の移動ができない、水の使用により病気が悪化する恐れがある、旅行中のため持ち物が限られている、あるいは敵や野生の猛獣に襲われる危険がある等、タヤンムムはある種の状況においてのみ推奨される手段であり、神の恩寵のあらわれである。

31 この節で用いられている「ラーイナー」というアラビア語は、「私たちの言うことに、耳を傾けてください」「どうぞ私

たちを見守ってください」」という意味である。しかし当時のユダヤ教徒の一部には、この語を口にする際に「私たちを牧草地に連れて行ってください」、あるいはヘブライ語で「悪しき者」といった侮辱的な意味を暗示するかのようなアクセントを加えて発音した。この節は、そうした態度に対する非難である。

32 アラビア語の言い回しから適切な意味を汲み取るには、翻訳は自由でなければならない。その意味では、「面目をつぶされ、うろたえる前に」とした方が、「顔を消し飛ばされ、後ろ向きにひねられる」よりも翻訳としては適切であったかもしれない。顔は、その人の持つ真の本質を最もよく表すものである。同時に、その人の品格や評価の指標でもある。啓典の人々の一部は、啓示という神の特別な恩寵を授かっていたにもかかわらず、啓示の改ざんや隠蔽によって裏切った。このふるまいにより、彼らは自分たちに価値のないことを明らかにしてしまい、そのために顔を失うことになったのである。「安息日の仲間」とは、安息日の禁を破った者たちを指す。

33 神の王国において、神の被造物を神と同等に配することは許されざる罪である。それは神に対する不服従と反逆であり、創造主に対する背信の行為である。

34 マディーナに住むユダヤ教徒のひとりに、カアブ・イブン・アル＝アシュラフという名の人物がいた。彼は預言者に対抗するための策謀を重ね、ユダヤ教徒と、イスラームに否定的なマッカ住民の間の結束を固めることに心血を注いでいた。あるとき偶像を奉ずる者たちが、カアブ・イブン・アル＝アシュラフの徒党に次のように尋ねた。「正しい道にあるのは我らか、それともムスリムか？」。すると彼らは「あなたがただ」と答えた。この応答に対して啓示された節である。

35 信託と誓約は果たされねばならないという、場所や時代を超えた普遍の原則を定めると同時に、啓示の下された特定の状況を反映してもいる節である。預言者ムハンマドがマッカを制圧したとき、カアバの管理人として鍵を預けられていたのは、ウスマーン・イブン・タルハーという名の人物だった。彼は一神教の預言者に鍵を渡すことを拒み、カアバの





屋根に登り、預言者に向けて次のように述べた。「あなたが本当に預言者であることが分かれば、私は必ずあなたに鍵を渡すだろう」。するとこれを横で聞いていたアリーが力ずくで彼から鍵を奪い、カアバの扉を開けた。預言者はカアバの中に入り、二ラクアの礼拝を捧げると再び外へ出た。預言者の叔父アル＝アッバースがやってきて、カアバの鍵を自分に預け、自分を管理人として任命するよう求めた。これに対し、この節が啓示された。預言者は叔父の求めを断り、元の管理人に鍵を返すようアリーに告げ、自らも詫びた。この一部始終を見聞きしたウスマーンは心打たれ、イスラームに入信した。

36 法律、共同体の運営、あるいは個別の宗教実践においての典拠となるものの序列ないし優先順位を確立する節である。その順位とは次の通り。（1）クルアーン、（2）預言者の生き方に見られるスンナ（法則）、（3）ムスリム共同体を代表する行政、司法または学者の合意。その上で、これら三つの典拠では確認が困難な問題を裁定するには、（4）類推により、諸々の前例を参照し、それらを新たな状況に当てはめることによって判断を下す。ある問題に関してムスリムの間に見解の相違がある場合は、以上の四つの優先順位を守らねばならない。この節は、偽善者のひとりがある判断を不服として、「われわれはカアブ・イブン・アル＝アシュラフの意見も聞かねばならない」と反論した際に啓示されたとも伝えられている。

37 「ターグート」という語は、一般には「偶像」などとも訳される。ここでは、神以外の崇拝の対象を「ターグート」と呼ぶものとする。真理たる神や、その神の預言者に対する叛逆（はんぎゃく）そのものである悪魔もターグートの範疇（はんちゅう）にある。

38 「自らの手で送り出したもの」とは、彼らのあいまいな態度や、そのせいで周囲の者がこうむった混乱を暗示するものである。次の節で預言者は、彼らとはきっぱりと決別するよう命じられている。

39 神は預言者の祈りをとりわけ受け入れるであろうことを示している。

40 イスラームにおける信仰とは、単なる口約束によって成り立つものではない。心の底から信じ、また心のすべてをもっ

て信じるのでなくてはならない。「神を信じ、その預言者を信じる」と口にするだけでは十分ではない。神の戒(いまし)めと預言者の教えを、誠実に模範として受け入れなくてはならない。

41 アーイシャが伝えるハディースによると、ある時ひとりの男が預言者を訪れ、次のように言った。「おお、神の預言者よ。私はあなたを、自分の妻や子どもたちよりも愛している。家にいてあなたを思い出すと、すぐにこうして会いに来ずにはいられない。あなたも私もいずれは死ぬ。そのときあなたが、他の預言者たちと共に楽園に行くだろうことは知っている。だが私はたとえ楽園に入れたとしても、そこであなたに会えるとは限らない」。これに対し、預言者はすぐには答えなかったが、しばらく待っていたところ、この節が啓示された。

42 平和というものが、多くの場合において暴力的な手段によってのみ確保されうるということは、地上における人の世皮肉のひとつである。善良な者が真理と善のために戦わずにいれば、邪悪な者が必ず勝利してしまう。そのため、たとえどれほど望まないことであったとしても、時と場合によっては武器を取ることが、神の真理を拠りどころとして立つ者の責務なのである。イスラームは人類に対し、抑圧や虐待、不正を阻止し、また真理と宗教の自由を確立するための公正な戦いを認めている。だがその目的はあくまでも平和である。紛争や分裂そのものはあくまでもその過程に過ぎず、回避できるなら回避すべきである。そのため正当な理由なき戦闘の開始は、それがどのような形態であれ禁じられている。

43 偽善的な心の動きの特徴が示されている。自らの便宜のためなら大義を掲げ、忠誠心を声高に語りはするが、真理と善徳を守るために命を賭けるよう求められると、何事もなかったように無関心と冷淡さをあらわにする者は少なくない。

44 ムスリムが制圧する以前のマッカでは、イスラームを信奉し、かつ他の地域に移住することもできずにいた人々が、マッカの偶像崇拝者から虐待され、迫害を受けていた。彼らは残酷な迫害からの救済を求め、謙虚に神に祈り、援助を乞うた。この節はムスリムに対し、それが世界のどこで起きていることであろうと、不正と抑圧に対して戦うよう命じている。





45 抑圧にあえぐ人々がムスリムであるかないかに関わらず、彼らを解放することはムスリムの義務である。
人はしばしば自らの成功を、自分だけで成し遂げた結果であると考えがちである。才能や技能、努力も含め、あらゆるものが創造主からもたらされていることを忘れてしまう。ところが災厄に見舞われたときは責任を回避し、自らの無力から目を逸らそうとする。そして他者や外部の条件、あるいは運命を責めるのである。一方、神とは恩恵であり至高であり、あらゆるものごとを判断し、それに応じてあらゆるものごとを割り当てる。主はご自分のいずれの被造物に対しても、何らかの害が及ぶのを望まない。主は自らの被造物を愛しているし、また慈悲こそは主の特別な属性でもある。主はしもべに対し、ある種の自由な意志を授けている。この信託は、悪用すればその持ち主を苦しめるようにできている。主は創造者であり、創造者は被造物を創造する。善であれ悪であれ、それを「獲得」するのは創造された被造物たる人間自身である。

46 マディーナ住民の中にいる偽善者たちは、信仰を拒否しているにもかかわらず、預言者の姿を前にしているときには従うふりをし、お互いだけになると、たちまち神が新たに啓示した宗教を混乱に陥れるための策を練り始めるのだった。

47 神の啓示であるクルアーンは、それを注意深く熟考する準備ができているすべての人々に完全なる調和として映し出される。魂が純粋で、主に対する敬虔な畏怖で満たされている限り、読む者はこの書の恩恵にあずかるだろう。そうした者が読めば読むほどに、この書の不思議が明らかにされ、言葉では言い表せないこの源泉に、思考と心が順応してゆく。この美しさ、霊的な対称性、疵ひとつない完全性は、慎重に、かつ純粋な心をもってものごとを見る者のためにある。またそうした人々の存在こそ、この書が神に起源を有することの十分な証明である。

48 公正さがもたらす利益を確保するためにも、社会は様々な形式での調停や仲裁を必要としている。しかしながらこの機能が、邪悪をなす人々との妥協のために悪用されてはならない。

49 他者に対して先に挨拶の声をかけることにより、人は自らの善良な意図を示すことも、またより善良な応答を受け取る

ことができる。互いに挨拶を交わすことはムスリムの間に平安と愛情を広める。誰にも疎外感を味わわせることのないよう、預言者によって確立された習慣である。

50 伝承によると、ここで言及されているのはマディーナの温厚なムスリムたちについてではなく、ある特定のアラブの改宗者の一派を指している。この一派は、ムスリムの間にも多種多様な意見があることを認めず、それが悪であるかのように咎めていた。後になって彼らはイスラームを去り、再び偶像崇拝に戻っていった。

51 「移り住む」とは、解釈を限定するなら、宗教の実践が許されない地域を立ち去るという意味であるが、そうした「ヒジュラ（移住）」をも含め、禁じられるすべてのものから正しい形で「逃げる」こと全般を言外に意味する語である。

52 この節では、マディーナ以外の土地に住む、真理を拒否していた者たちについて論じられている。彼らの一部はクライシュ族の偶像崇拝者たちと共にマッカに留まり、移住することもなければ協力し合うこともなかった。彼らがイスラームに敵対し、ムスリムたちに無慈悲な戦いを挑む以上、彼らに対し応戦する必要があった。彼らの中には、ムスリムが和平の協定を結んでいる集団の元へ避難しようとしていた者たちもいた。その他の者たちは中立を望み、自分の属する集団と戦うことはせずとも、ムスリムとは平和裡に暮らしたいと考えていた。後者の人々については、ここでは除外されている。

53 シャリーア（聖法）に従うなら、故意の殺人に対する刑罰は「キサース」と呼ばれる。これは正義との整合性を鑑みれば、奪われた生命は生命をもって贖われねばならないということを意味する。死刑という懲罰を執行する権利は被害者の家族に帰せられるが、彼らが望めば殺害者に賠償を要求することも、あるいは刑罰も賠償も放棄し、慈悲をもって殺害者を赦すこともできる。後者の場合、加害者に対しより軽い懲罰を科す権利が共同体に生じることになる。キサースの問題については二章一七八節から一七九節においても議論されており、そこでは精神的な刑罰について述べられている。例えば狩猟の際に獲物と誤って殺害してしまった、あるいは戦場で敵兵と誤って殺害してしまったといった、事故や過失に





よって起こりうる殺人については、死刑に替わり賠償の責任が課される。支払われるべき慰謝料は次の通り定められている。（1）加害者ないしその家族は、被害者に対しらくだ二百頭、あるいはそれに相当する金銭を支払う。加害者ないしその家族が貧窮者である場合、国家が彼らに代わりその全額あるいは一部を支払うことが求められる。（2）加害者は、所有する奴隷があれば解放し、社会に対する何らかの貢献をしなくてはならない。それができない場合は、二か月にわたって断食をする必要がある。

54 ある戦闘の最中に、ウサーマ・イブン・ザイド率いるイスラームの軍勢が敵の一群に遭遇した。この一群が、イスラームを受け入れる意志のあることを示す言葉をもって挨拶をしてきたにもかかわらず、ウサーマは納得せず、この一群を率いる長を殺害し、その他の者は捕虜にした。これを知った預言者は激しく怒り、「彼の心をふたつにたち割ったとき、おまえはそこに『神の他に崇拝すべき者はなし、ムハンマドは神の預言者なり』と書かれているのを見なかったか」と詰問した。ウサーマは、彼は欺瞞からイスラームへの関心を述べただけだと言った。しかし預言者は彼を叱責し、ただちに捕虜を解放するよう命じた。

55 マディーナへの大々的な移住以前、ムスリムは抑圧され、迫害され、ひどい扱いを受けていた。そこで預言者は、一部の者たちにエチオピアへ移住するよう指示した。西暦六二二年、預言者ムハンマドとその仲間たちは、マディーナ市街への大掛かりな移住に着手した。それは北を目指す一か月の旅程であった。ムスリムたちは神とその使徒のため、すべてを後に残し、マディーナで新たな社会を築きあげ始めた。その後、長旅に耐えられない弱い者や、背後に留まるよう命じられている者を除き、すべての信仰する男女に対し、偶像崇拝と不信仰から逃れて移住することが義務となった。家屋や事業、財産や友人知人を置いて立ち去りたがらない人々に対し、この節が啓示され、彼らの末路には地獄の業火が待ち受けているとする警告がなされた。移住を試みたものの、途上で命を落とした者たちについては、神の報奨があることも示されている。イマーム・ブハーリーが伝えるハディースによれば、マッカ制圧後、移住は義務ではなくなっ

たが、将来において同じ状態に戻った場合、再び義務になるとされている。

56 これらの節には、危険時や旅行中に、ムスリムは義務の礼拝をどう実践すべきかが記されている。八十キロメートルを超過する旅行の場合、旅行者の便宜のために、たとえ危険な状態ではなかったとしても、正午、午後、そして夜の礼拝を短縮することができる。戦時中であれば、この節にある通り義務の礼拝は省略すべきである。合同礼拝はどのように実践するべきかという問いに対しては、例としてハナフィー学派の場合、敵と遭遇する危険のある中で合同礼拝を実践する際には、参加者を二組に分け、一組が礼拝をしている間、別の一組が見張りを行うというのがその答えである。その後で、先に礼拝を済ませた一組が、見張りをしていた一組と交代すれば、全員が礼拝を済ませられる。いずれの場合も一ないし二ラクア、あるいは通常の合同礼拝の二分の一程度に留めるものとされ、その詳細は状況に応じて、また兵士各自の従う思想学派に応じて変更することも可能としている。

礼拝は神を想起し賛美するのに最もすぐれた方法である。精神的な健やかさを保てている人であれば、決して礼拝をおろそかにすべきではない。困難な時、危険な時には、神は信仰者のために物事を簡易にする許可を与えてはいるが、しかし義務は義務として残り、その力は有効である。礼拝は宗教の柱であり、柱が崩れれば宗教も崩れる。それは個人と神をつなぐ絆であり、また信仰を同じくする同胞との絆でもある。この二つの絆が失われれば、信仰も失われることになる。

57 「……あなたがたには、彼らには望むべくもないことをアッラーに望むことができる」。これは次のように解説できるだろう。すなわち宗教は強さの源泉である。あらゆる物事において「弱み」となるなら、それは宗教とはいえない。ムスリムが多大な努力を費やし、困難に耐えるとき、信仰を持たない者もまた同様に耐えている。その時、信仰の有無による違いが生じる。信仰者は神への希望で満たされているが、信仰を持たない者には、自らを支えるためのそれが欠落しているのである。





58 クルアーンが背信行為を、それが精神的か社会的かの別なく「自分自身に不誠実な者」として特徴づけている点は重要である。罪や過ち、すなわち「不正（ズルム）」を犯す者は、「自分自身に不正をなした者」であると説明される。故意に罪を犯せば、霊的には、害を被るのはその人自身に他ならないからである。

59 不法行為に走る者の企ては、すべて神の知るところであり、必要とあれば神の有する知恵のすべてをもって完全に回避することも可能である。ここで用いられている「把握している（ムヒート）」という語は、全方位を取り囲むということを表している。神はあらゆる物事を知るばかりか、あらゆる物事を取り囲む。もし神がそうと知りつつあるがままにまかせていたとしても、それは神が完全に支配していないからではなく、神が完全な円の中に囲んでいるからである。すべては神のご計画の中にあり、神は悪からでさえ善をもたらすことができる。

60 この節が啓示された経緯には、学ぶべき教訓が含まれている。鎧を一式盗んだトゥウマ・イブン・ウバイリクというザファル族出身のムスリムが、発覚するのを恐れ、盗品をあるユダヤ教徒の家に隠した。品物が見つかったとき、ユダヤ教徒は自分の罪を否定し、トゥウマを非難したが、ムスリムたちは、トゥウマがムスリムであるというただそれだけの理由で彼に同情を寄せた。裁判が始まった当初、人々の間にはユダヤ人を犯罪者扱いする空気が流れていた。しかし最終的には、イスラームの公平性が勝利した。情勢が逆転し、懲罰が差し迫っていることに気づくとトゥウマは逃亡し、そのままイスラームを去った。

61 この節も、前述に続くトゥウマのエピソードに関連しての言及である。彼の支援者たちは秘密の会合を開いていた。預言者が自らの権威を振るい、トゥウマに有利に物事が運ぶだろうと期待したのである。しかし彼らの先入観に反して、預言者はあくまでも公平にふるまい不動であった。逃げ出したトゥウマは背教し、マッカに落ち延びるとそこでもしばらく窃盗を続けたが、ある日、古い建物の壁が倒壊した際に、その下敷きになって死亡したと伝えられている。

62 この節をはじめ、クルアーンも、また預言者の残した多くの言葉も、同じひとつのイスラームの教義を繰り返し説いて

いる。それは神の慈悲についてである。神の慈悲は、多神や偶像を崇拝するという最大の罪を除き、あらゆる罪人に差し出されている。男女問わず、信仰をもった者がこの世を去ると、ある者は罪のために罰せられるかもしれないし、またある者は善行のために救われるかもしれない。あるいは全能の神により、絶対的な赦しを授かるかもしれない。信仰者であれば、いっとき地獄に送られ、罪や汚れを清めた後で、神の恩寵により楽園に迎え入れられることもあるだろう。しかし不信仰者には、こうした機会は決して巡ってくることはないのである。

63
神に仕えるにあたり、神に祈り、神に何ごとかを願うことは、貴くも必要不可欠な行いである。しかし神以外の何かに神性を付与し、それに願いをかけるのは、あらゆる罪の中でも最も罪深い。これは「シルク」すなわち多神崇拝と呼ばれる。

64
神の被造物に対し、その自然な姿に人の手を加え、必要もないのに一部を切り落としたり、刻印を刻んだり、焼印や烙印をつけたりすることは、イスラームでは許されていない。預言者は、むしろ人は動物に親切にしなくてはならず、（審判の日には）動物をどう扱い、どう世話したかが問われると教えている。古来の習慣なり魔術的な慣習は、しばしば動物に対する残虐な行為を伴う。この場合、裁きは更に厳しいものとなる。また人間が自分自身を傷つけることも許されていない。それは人間という神の被造物、神の信託の保管庫をもてあそぶこと他ならないからである。

65
キリスト者やユダヤ教徒の一部には、自分たちこそ「神に選ばれし民」であり、ゆえに来世における神の恩寵が保証されているという考え方を好む者がいた。またキリスト者の中には、イーサーを「神の息子」と信じる者たち全員に「主の贖罪」による救済が約束されているという考え方を教条とする人々もいる。こうした考え方には何の根拠もなく、それは単なる願望に過ぎないという啓示である。

66
この節において全能の神は、人間の価値はその行為によって決まるのであり、財産や地位、性別によるものではないと宣言している。イスラームの教えにおいては、究極的には誰にも他者を裁くことはできない。なぜなら裁きの対象とな





るものは、唯一、心の中にあるのであって、それを見ることができるのは神のみだからである。この主題は、次の節でも続けられる。

67
神の預言者たちはみな啓示の使者であり、主な役割に関してはまったく同じであるが、文化や霊的な条件においては様々に異なるところへ遣わされてきた。したがって彼らの内的実在も様々な側面を持っている。預言者イブラーヒームが「ハリールッラー（親しい友）」と呼ばれるように、例えば預言者ムーサーは、シナイ山で神と言葉を交わしたという故事にちなみ「カリームッラー（神と語らう者）」と呼ばれる。同様に預言者イーサーは「ルーフッラー（神の息吹、または神の霊）」と呼ばれるが、それは神が彼の母マルヤムの懐妊に際し、魂を吹き込んだことによるものである。預言者ムハンマドは「ハビーブッラー（神に愛されし者）」である。彼は神を愛し、神もまた彼を愛した。

68
これらの節で言及されている取り決めは、この章の始まりでも扱われていることであり、それらについて繰り返し言及されているのは、扱われている主題の重要性と、また男性に対し、彼らとは一対の翼である女性に対して課された責任の重大性を強調するためである。通常、クルアーン全体の構造としては、この箇所の場合のように、長文となる部分は純粋に道徳や倫理に関する問いを扱い、その後に社会的な法に関連する節が連なる。それにより、人間の霊的な生活とその社会的な行動の親密なつながりを目に見えて理解させるためである。

69
結婚生活を軌道に乗せるには、必要な犠牲を払う準備のできている二人が、互いの伴侶として努力しなくてはならない。この節で説き明かされている通り、男性は得てして利己的な傾向があるため、相手の女性が犠牲を払うことを期待しがちである。しかし和解とは相互の努力によってのみ達成される。平穏無事な結果を得ることこそ、誇りよりもいっそう優れているのである。

70
複数の妻との結婚生活を送る男性は、倫理的にも法的にも配偶者たちを平等に扱う義務がある。当然ながらどのような場合であろうと、これを成し遂げるのは困難である。ただひとりを他の誰よりも深く愛するのは自然なことであるし、

ひとりあるいは複数の配偶者のそれぞれが持つ特有の気質に一喜一憂するのもまた自然なことである。複数の妻との幸福な結婚生活を築こうとすれば、一夫一婦の関係よりもさらに多くの献身が必要となる。妻たち全員に対する公平・同等の処遇を保証するために法が定められるのはしごく当然のことである。所得の配分、住居の格、食料その他の日常生活の費用は、複数の配偶者たちの間で均等に分配されなくてはならない。

71 結婚生活が円滑に進まず、あらゆる努力や方策をもってしても修復が不可能な場合は離婚すべきである。家庭がある種の牢獄になってしまっているなら、大切な人生をそのような状態の中で送ってはならない。貧困への恐れや、準備や貯蓄の不足が、そうした状態にある夫婦の離婚を妨げる理由になってはならない。神は無限の慈悲をもって、二人をそれぞれに援助するだろう。

72 永遠性と絶対性は、神のみが有する属性である。人間は、その存在を神の恩恵と慈悲に依存している。もしも人間が神の信託を裏切り、また神に委ねることもしなければ、神の祝福も断たれるかもしれず、その存在も滅ぼされ、神の大地によりふさわしい存在と置き換えられるかもしれない。

73 この節では、人類は経済的、社会的、心理的あるいはその他どのような理由があろうと、公正さから逸脱することのないよう警告されている。物事を公正に執り行おうとするとき、人は公正者たる神の代理であることを覚えておかねばならない。

74 ここで意味されているのは、以前の啓示が「事実」であることを信じることである。今現在に残されている以前の啓示は、クルアーンにおいて繰り返し述べられている通り、原形を留めたものであるとは言いがたい。真の信仰においては、本来、その対象は神であり、次いで神の啓示、またそれを伝える神の使徒である。宗教とは生まれや習慣で決まるものではなく、また愛する人や尊敬する人がそうであるからという理由で従うべきものでもない。

75 変化する運命によって自らの信仰をゆるがせにする人々の特徴が描き出されている。これこそがクルアーンのいう偽善





者であり、こうした人々は最終的には信仰から完全に追放され、誤った導きの中を永遠にさまようことになるだろう。

76 真実を語っても、それを低く見下す評価が返ってくるのであれば、沈黙してその場を去ることが、そうした反応を示す人々に対する唯一、優れた抗議の作法である。ただし、まるで自分の方が他の人々よりも優れているかのように傲慢にそうするのではなく、真の謙虚さをもってそうするべきである。さもなければ、そうした人々と妥協を重ねて過ごすうちに、自分自身が授かっている本来の自分らしさを損ねてしまうだけだからである。抗議の意を示すことや、誠実に異議を申し立てることによって議論の内容が変わることもある。真実を嘲笑する過ちを犯させずに済むなら、その場合、結果として真実を卑しめようとしていた人々に善行を施すことにもなるだろう。

77 クルアーンは、友人を選ぶことに伴う危険性を意識するよう強調する。人と親しく交わることは、相手と少なからず同化するということであり、相手の自己形成の中から何かしらを吸収するということである。その意味において、イスラームを拒むということは、ムスリムの道徳的かつ精神的な生活の支えとなっているものを拒むということであり、表面上はおくとしても、真実、すべてを分かち合える友人としてみなすことは難しい。

78 つまり次の四つの条件を満たせば、偽善者でさえ赦しを得る道が開ける。（1）誠実な悔悟。これは心の浄化をもたらす。（2）行為を改めること。これは外的な生活の浄化をもたらす。（3）神に対する堅実さと献身。これは信仰を強め、悪意あるものからの身の守りとなる。（4）宗教に対する、あるいは自らの内面にあるものすべてに向き合う誠実さ。これにより人は、世界中じゅうの信仰上の同胞たちのひとりとしての自分を完全に取り戻すのである。

79 他者に対し、荒々しくきつい言葉を投げつけることはイスラームの論理に反している。しかし過ちを犯した者に対し、矯正や諫言としての効果が見込める場合に限っては別である。間違ったことをした者を、声をあげて批判するのは侮辱や中傷の行為ではない。例えば法廷においては、他者に対する批判は許されているのみならず、むしろ必要とされる行為である。

80 「啓典の人々」、すなわち現代では旧約・新約聖書と呼ばれるものを含め、クルアーン以前の啓示に従う人々。ここでは「以前の啓示」とは、とりわけユダヤ教徒のそれを指す。彼ら「啓典の人々」は、預言者ムハンマドの預言者性の証拠として、啓典を実際に天から彼らの許へ持ち帰るよう要求した。

クルアーンに頻繁に繰り返し現れる、ユダヤ教徒についての言及を見るに、当時の彼らは、神の啓示を受け取れるのは自分たちだけであると確信していた。しかし「神と直接、面と向かって会う」ことを要求するほど、懐疑的な精神を持ち合わせていたにもかかわらず、またそれにより「雷電」の奇跡を招き寄せ、明白な証拠を得たあとでさえ、彼らは黄金の仔牛を崇拝したのであった。ここから学ぶべき教訓とは、物的なものを通して霊的なものを判断しようとする、人間の側にある一種の自信過剰についてである。物的な形態を超越しており、時間や空間から独立した存在である神を、人間の物的な目に映るように求めるのは、その一例である。

81 預言者ムハンマドの時代、ユダヤ教徒もキリスト者も彼に対して多くの奇跡を要求した。そして実際に多くの奇跡が彼らに示されもしたが、それでも多くの者が信仰を拒否した。しかしこの節が指摘するように、はるか昔、ムーサーの民の場合もこれと同様であった。

82 神はヌーフを洪水から救った。イブラーヒームを炎から、ムハンマドを偶像崇拝者たちから、そしてイーサーを、彼を十字架にかけようとしたユダヤ教徒の邪悪から救った。預言者イーサーの代わりに十字架にかけられたのは、イーサーを裏切ろうとし、却って自らが捕縛されたヤフーザー（イスカリオテのユダ）であったとも伝えられる。

83 神は自らの預言者であるイーサーをユダヤ教徒から守り、彼らに殺害されることのないようにし、それから彼を神の許へ引き上げた。彼がいつ、どのように天国へ引き上げられたかについては様々な解釈がある。大多数の解釈によると、神は彼を天国まで高め、特別な場所に置いた。彼は復活の日の前に地上に帰り、そこで啓典の民は彼が本当に神の預言者であったことを確信し、イスラームに対する不信を放棄する。地上における二度めの滞在のあいだ、イーサーはクル





アーンをもって世界を統治する。あらゆる種類の迷信に終止符を打ち、十字架を切り崩し、豚肉の食用を禁じ、その他、のちの世代に生じた違背を正す。バシレイデース派やドケティズム（キリスト仮現論）をはじめ、初期キリスト者の教会の多くが、イーサーの十字架の磔刑という教理を受け入れてはいなかったことは興味深く、留意すべき点である。受肉や血の犠牲、贖罪（しょくざい）といった論理の由来はおそらく、預言者たちが伝えたユダヤ的一神教とは相反するギリシャ・ローマ的思想にあり、それが最初の数世紀の間に浸透したものとみなせるだろう。

84 預言者性とは最高度の人間の条件である。預言者は人と神の間の橋であり、原初の源と究極の還り所を思い出せるよう手助けする。「啓示」とは人と神の接点であり、「関わり」の状態を生じさせる。それは天使という仲介を通して、あるいは神からじかに、人を介することのない神の賜りものとして伝えられる。この節の「諸々（もろもろ）の支族」とは、預言者ヤアクーブの孫たちを指している。それ以前の時代に遣わされた幾人かの偉大な預言者の名が挙げられているが、次の節で説き明かされる通り、彼ら以外にも名を挙げられていない多くの預言者が存在する。一部の典拠によれば人間の創造以来、神が遣わしてきた預言者の数は十二万と四千にのぼるとされている。

85 神はシナイ山でムーサーに直接、語りかけた。そのためムーサーは、ムスリムの神学書の多くにおいて、神が親しく話しかけた者を意味する「神と語らう者」の呼び名で呼ばれている。脚注六六も参照。

86 すべての預言者が、神は正しい者を愛し、悔い改める者を赦すとの吉報と、信仰を拒み、罪を犯して過ごす者には怒りが下されるとの警告を伝えている。彼らに課された警告という使命は、吉報という使命の前触れであり補完でもある。知らなかったと言い逃れすることは誰にもできない。

87 「たやすい」の意味するところを、神が知識と威力における最高者であるという前提で理解しなくてはならない。叛逆者（はんぎゃくしゃ）たちが懲罰を免れうると考えるなら、彼らは愚かであり誤っている。懲罰は当然に受ける。神の側には、何の困難も労苦もないのである。

88 多くのキリスト者が、ユダヤ教やイスラームの教えによって高度に進化した純粋な一神教の理論を決して受け入れようとはしなかった。使徒に対する彼らの愛は、まるでローマびとの皇帝に対する崇拝と同様のあり方に変化してしまったのである。イーサーは、他のすべての預言者と同じく、神の絶対的な一性のメッセージをもたらしたが、後世のキリスト者は「三位一体」の理論を展開するようになった。この教義によれば、神は一であると同時に三であり、またこの三つで一つの主体には、二つの異なる人格があるとされる。彼は父、子、精霊であり、別々の主体ではあるが一体であって別個ではなく、完全に統一されているという。加えて人間はキリスト（救世主）の神的な自然と一体であり、別個ではない。三位一体を奉じるキリスト者が祈るとき、これらのうちどれに対して祈ってもよく、あるいはすべて一緒に祈っても構わないとされる。クルアーンが誤りとして指摘しているのは、ユダヤ教徒の宗教実践に見られる過度の形式主義や、キリスト者の形而上学的な混乱、すなわち「善良な、天国に住まう者」であるからという理由で、一度たりとも自らを神と主張したことのない者に神性を付与して崇拝する点である。いずれにせよ極端であることが問題なのであり、クルアーンはそうした極端さへの対処として、祈りによって神の加護を求めることを勧めている。

89 「確証」は預言者ムハンマドを、また「明白な光」はクルアーンを指す。

90 ここでは慈悲と御恵みが、神からの特別な授かりものとして表現されている。

# 第五章　アル＝マーイダ　食卓

マディーナ啓示

本章の大部分は、イスラーム暦六年めにマディーナで啓示された。ただし第三節はクルアーンのすべての啓示のうち最後のものである。ムスリムに対し、これをもって宗教の完成を宣言し、またイスラーム（神への完全な服従）が、彼らのための宗教として承認されたことが告げられている。

この節は、預言者がマッカで「別れの巡礼」を行った際に授けられた。アラビア全土がイスラームを受け入れつつあるその時に、死を間近にした彼は、アラファトに集まった何千もの聴衆を前に説教をし、その中でこの節について語った。本章の章題は、人々がイーサーに、食物を並べた食卓を天上から授けてもらうよう求めたこと、またその際のイーサーの祈りが、いかにして聞き届けられたかを伝える第一一二節に由来している。本章の全体的な主題は、宗教的な義務の遵守についてである。以前の預言者たちに従った者たちと同じく、ムスリムが神との約定を破ることのないよう戒められている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 信じる者たちよ。あなたがたは、約束を果たしなさい。「このクルアーンをもって」あなたがたに読み聞かされるものを除いて、放牧されたすべての家畜はあなたがたにとり合法である。巡礼者として禁忌の





状態の間の狩猟は、あなたがたに許されていない。本当にアッラーは、そうと望むままに判断を下す。1

2 信じる者たちよ。あなたがたは、アッラーの儀礼、禁制の月、犠牲として運ばれた家畜とその飾り「の聖性」を犯してはならない。また主の御恵みと喜びを求め、禁制の家を頼ってくる人々についても。あなたがたが禁忌の状態を解いたとき、狩猟をしてもよい。「かつて」禁制のマスジドから遮られたからといって、その民に対する憎悪にかられて、法に外れることのないようにしなさい。高潔と篤信をもって助け合いなさい。罪と違法において助け合ってはならない。そしてアッラーを畏れなさい。本当にアッラーは、応報に厳しい御方。2

3 あなたがたに「食することが」禁じられるものとは、屍体、血、豚の肉、アッラー以外に捧げられたもの、絞め殺されたもの、撲殺されたもの、墜落死したもの、「角などで」突き殺されたもの、野獣に食い殺されたもの、ただし「それらが絶命する前に、適切な手段で」あなたがたが屠ったものは別である。また、「偶像への犠牲として」祭壇の上で屠られたもの、賭け矢で配分されたものも「禁じられる」。それは違背である。この日、「真理を」拒む者たちはあなたがたの宗教「を害すること」をあきらめた。それゆえ彼らを畏怖するのではなく、われを畏怖しなさい。この日、われはあなたがたのために、あなたがたの宗教を完成し、あなたがたへのわれの恩寵をまっとうし、あなたがたのための宗教としてイスラームを認めた。誰であれ、罪を犯すことを意図したのではなく、飢えに迫られてのことなら、本当にアッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。3

4 彼らはあなた「ムハンマド」に、彼らにとり何が合法かを尋ねるだろう。言いなさい。「あなたがたに合法なものとは、良いもののこと。また、アッラーがあなたがたに教えた通りに、あなたがたが教え込んだ「犬や鷹といった」きん獣が、あなたがたのために捕えたものも」。それゆえ、それらを食べなさい。

ただし、それらに対してアッラーの御名を唱えなさい。そしてアッラーを畏れなさい。本当にアッラーは、たちまちにして清算する御方。

5 この日、良いものはことごとくあなたがたに合法となる。啓典を与えられた者たちの食べものはあなたがたに合法であり、あなたがたの食べものも彼らに合法である。また貞潔な信仰者の女、あなたがた以前に啓典を与えられた者たちの貞潔な女も、私通のようにではなく、密会の相手にするのでもなく、あなたがたが結納を与えて妻とし、貞潔であろうとするなら［合法である］。誰であれ［真理を］拒む者は、その行いは無に帰され、来世では敗者のひとりとなるだろう。[4]

6 信じる者たちよ。あなたがたは、礼拝のために立つ時には顔を洗いなさい。両手は肘のところまで、頭はぬぐい、両足は足首のところまで［洗いなさい］。身体が穢れた状態にあるときは、身体を清浄にしなさい。あなたがたが病んでいるとき、あるいは旅をしているとき、誰であれ厠から出てきたとき、女と交わったときに水を見つけられない場合は、良質の砂を用いて顔と手を撫でなさい。アッラーは、あなたがたに難しいことをさせようと望んでいるのではない。ただあなたがたを清浄にし、あなたがたへの恩寵をまっとうすることを望む。あなたがたは、感謝するようになるだろう。[5]

7 あなたがたに対する、アッラーの恩寵を憶えておきなさい。またあなたがたが「私たちは聞き、従います」と言ったとき、あなたがたと交わした約束についても。そしてアッラーを畏れなさい。本当にアッラーは、胸の中に抱くことを知っている。[6]

8 信じる者たちよ。あなたがたはアッラーのために、正道に立って証言しなさい。［特定の］民に対する憎悪にかられて、あなたがたが不公正になってはならない。公正でありなさい。その方が篤信に近い。そしてアッラーを畏れなさい。本当にアッラーは、あなたがたの行いを熟知している。[7]





9 アッラーは、信じて正しい行いをする者に約束した。彼らには、赦しと大いなる報酬があるだろう。

10 しかし［真理を］拒み、われらのしるしを嘘よばわりした者たち、これらの者は獄火の仲間。

11 信じる者たちよ。あなたがたに対する、アッラーの恩寵を憶えておきなさい。民があなたがたに手出しをしようとしたとき、この御方があなたがたからその手を防いだときのことも。それゆえアッラーを畏れなさい。信仰者なら、アッラーにこそ委ねなさい。[8]

12 かつてアッラーは、イスラエルの民から誓約を受け取った。われらは彼らの中から、十二名の長を立てた。アッラーは告げた。「本当に、われはあなたがたと共にある。もしあなたがたが、礼拝のつとめを守り、喜捨をし、われの使徒たちを信じて敬い、アッラーにすぐれた貸付をするなら、われは必ずあなたがたの悪事を免じ、またわれは必ずあなたがたを、川がその下を流れる楽園に入らせよう。しかしこの後になって、あなたがたのうち［真理を］拒むようになる者は、まさしく平らかな道から迷ったことになる」。[9]

13 しかし、彼らはその誓約を破った。そこでわれらは、これを忌むべきこととし、彼らの心を頑なにした。彼らは諸々の言葉をあるべきところから置き換え、憶えておくべきものの一部を忘れた。それゆえ彼らのうちわずかを除き、あなたは、絶えず彼らからの裏切りにあうだろう。しかし彼らを容赦し、見のがしてやりなさい。本当にアッラーは、行いの善良な者を愛する。[10]

14 またわれらは、「本当に、私たちはキリスト者です」と言う者たちからも誓約を受け取った。しかし彼らは、憶えておくべきものの一部を忘れた。それでわれらは彼らの間に、復活の日までの敵意と憎しみをかき立てておいた。彼らの築いたものについて、アッラーは、やがて彼らに告げ報せるだろう。[11]

15 啓典の人々よ。あなたがたが啓典について押し隠してきた多くのことを明らかにし、また多くのことを不問とするわれらの使徒が、あなたがたのところへ到来した。アッラーからの光と明らかな啓典が、ま

さしく到来したのである。[12]

16 それによりアッラーは、その喜びに従う者を平安の道へと導く。またその思し召しにより、彼らを暗闇から光へと連れ出し、まっすぐな道へと導く。[13]

17 「アッラーとは、マルヤムの子マスィーフのこと」と言う者は、すでに［真理を］拒んだ者。言いなさい。「もしアッラーが、マルヤムの子マスィーフを、その母を、また地上にあるものをことごとく滅ぼすことを望んだなら、誰に制することができるだろう」。諸天と大地と、その間にあるものの王権はことごとくアッラーに属する。御心のままに創造する。アッラーは、あらゆるものごとにおいて全能である。

18 ユダヤ教徒とキリスト者は言う。「私たちはアッラーの子であり、愛される者です」。言いなさい。「それならどうして御方は、あなたがたをその罪のために罰するのか。いいや、あなたがたは人間、かの御方が創造したもののひとつ。かの御方は御心にかなう者を赦し、またそうと望めば誰であれ罰する。諸天と大地と、その間にあるものの王権はことごとくアッラーに属する。そして行き着く先は、この御方にある」。[14]

19 啓典の人々よ。使徒たちの空白を経て、ものごとを明らかにするわれらの使徒が、あなたがたのところへ到来した。それはあなたがたに「私たちのところには、良い報せを伝える者も警告する者も来ませんでした」などと言わせないようにするため。あなたがたのところへ、今まさに良い報せを伝え警告する者が到来したのである。アッラーは、あらゆるものごとにおいて全能である。[15]

20 またムーサーが、その民にこう言ったときのこと［を思いなさい］。「私の民よ。あなたがたに対する、アッラーの恩寵を憶えておきなさい。あなたがたの中から預言者たちを立てて、あなたがたを王とした。諸世界の誰ひとりとして与えられなかったものを、あなたがたは与えられている。





21 私の民よ。アッラーがあなたがたに定めた聖なる地に入りなさい。［怯えて］あなたがたの背中を向けてはならない。さもないとあなたがたは、敗者として戻ることになるだろう」。

22 彼らは言った。「ムーサーよ。本当に、そこには強大な民がいる。彼らが出ていかない限り、私たちは決してそこに入れない。もし彼らが出ていけば、私たちは本当に入れるだろう」。

23 しかし恐れる者のうち二人が言った、両名にアッラーの恩寵あれ。「彼らの中に、門から入れ。中に入ってしまえば、本当にあなたがたの方が優勢となるだろう。もしあなたがたが信仰者なら、アッラーにこそ委ねなさい」。[16]

24 彼らは言った。「ムーサーよ。彼らがその中にいる限り、私たちは決してそこに入れない。だからあなたとあなたの主が連れ立っていき、戦えばいい。私たちはここに座っている」。

25 彼［ムーサー］は言った。「主よ。私は、自分自身と兄弟の他には誰も制することはできません。それゆえ私たちと、この背く民とを離ればなれにしてください」。

26 ［主は］告げた。「それでは彼らに対し、四十年の間、それ［この地］を禁じよう。彼らは地上をさまよい、放浪するだろう。だから、背く民のことで悲しんではならない」。[17]

27 アーダムの二人の子の話を、真理によって彼らに読み聞かせなさい。彼ら両名が、どのように犠牲を捧げたか。一方は受け入れられたが、もう一方は受け入れられず、こう言った。「私は、必ずやあなたを殺すだろう」。［受け入れられた前者の方は、答えて］言った。「本当にアッラーは、ただ畏れる者だけを受け入れる。

28 たとえあなたが、私を殺すためにあなたの手を伸ばそうと、私は、あなたを殺すために私の手を伸ばしはしない。私は諸世界の主アッラーを恐れる。

29 私は、むしろあなたが私の罪とあなた自身の罪の懲罰を受けて、火獄の仲間のひとりになることを望む。不正をなす者への報いとは、このようなもの」。[18]

30 自分自身にそそのかされ、彼は弟を殺し、敗者のひとりになった。

31 神は、一羽の大鴉を遣わし、大地を掻かせ、彼の弟の亡骸を葬るすべを示してみせた。彼は言った。「ああ、何と惨めなことだろう。私はこの大鴉のようにさえなれない。弟の亡骸を葬ることさえできないでいる」。こうして、彼は後悔するばかりの者となった。[19]

32 このことをもって、われらはイスラエルの民に定めた。誰であれ人を殺したか、地上に退廃を広めたというのでもないのに、人ひとりの命を奪った者は、すべての人々をことごとく殺したのと同様である。また、人ひとりを生かした者は、すべての人々をことごとく生かしたのと同様である。彼らのところへは、われらの使徒たちが明白な証をもってすでに到来していた。しかしそののちも、彼らの多くは地上で行き過ぎた者となっている。

33 アッラーとその使徒に対して戦いをいどみ、地上に退廃を広めようと励む者の報いは、討ち取られるか、磔刑にされるか、両手両足を交互に切り落とされるか、あるいはその地から追放される他はない。彼らには、現世においては恥辱があり、来世においては大いなる懲罰があるだろう、[20]

34 あなたがたに取り押さえられる前に、悔い改める者を除いては。アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深いことを知りなさい。[21]

35 信じる者たちよ。あなたがたはアッラーを畏れなさい。かの御方に近づく手だてを探し求め、かの御方の道のため励みなさい。そうすれば、あなたがたは栄えるだろう。[22]

36 ［真理を］拒む者たちは、たとえ地上にある一切のものと、さらにそれと同じだけのものをもって、復活





の日の懲罰からその身をあがなおうとしても、決して受け入れられないだろう。そして彼らには、痛烈な懲罰があるだろう。

37 彼らは業火から出ることを望むだろう。しかし彼らが、その中から出てくることはないだろう。彼らには、永劫の懲罰があるだろう。

38 盗みを働く者については、男であれ女であれ、その両手を切り落としなさい。それが彼ら自身の行いに対する報いであり、アッラーによる見せしめ。アッラーは威力あり、もっとも賢明である。

39 しかし、不正をなした後で悔い改め、自らをただす者については、アッラーはその悔い改めを受け入れる。アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。[23]

40 あなたは知らないのか、本当に、諸天と大地の王権はアッラーに属する。そうと望めば誰であれ罰し、御心にかなう者を赦す。アッラーは、あらゆるものごとにおいて全能である。

41 使徒よ。あなたは、［真理に対する］拒絶へとわれ先に急ぐ者たちのために嘆くことはない。そうした者は、口では「私たちは信じます」と言うが、心では信じていない。またユダヤ教徒の中には、嘘に聞き入り、他の民に耳を傾け、あなたのところには来ない者もある。彼らは諸々の言葉をあるべきところから置き換え、「もしこれがあなたがたに与えられたものなら、受け取りなさい。しかし、もしこれがあなたがたに与えられたものでないなら、用心しなさい」と言う。アッラーがある者を試練にかけようと望むなら、あなたにはアッラーを制することはできない。これらの者は、アッラーがその心を清浄にしようと望まなかった者たち。彼らには、現世においては恥辱があり、来世においては大いなる懲罰があるだろう。[24]

42 ［彼らは］嘘に聞き入る者、禁じられたものを貪る者。もし彼らがあなたのところへ来たなら、彼らの間に判断を下すか、あるいは彼らから立ち去るかしなさい。たとえ彼らから立ち去ったとしても、彼らに

はいささかもあなたを害することはできない。そしてもし判断を下すなら、正道に立って彼らの間を判断しなさい。本当に、アッラーは公平な者を愛する。[25]

43 しかし、どうして彼らはあなたに判断を下させようとするのか。彼らには律法があり、その中にはアッラーの知恵があるというのに。そうしたものの「下された」後でさえ、彼らは背き去る。これらの者は、信仰者ではない。[26]

44 本当にわれらは律法を下した。その中には、導きと光がある。服従する預言者たちは、これによりユダヤ教徒に判断を下した。教師も学者も、託されたアッラーの啓典をもってそのようにし、またそうすることにより証言者となった。それゆえ人々を畏怖せず、われを畏怖しなさい。われのしるしを、わずかな代価と引き換えにしてはならない。アッラーが下したものによらずに判断を下す者、これらの者こそ「真理を」拒む者。[27]

45 また、われらは彼らのために、その「律法の」中に定めた。命には命を、目には目を、鼻には鼻を、耳には耳を、歯には歯を。傷には「同等の」報復を。しかし誰であれ「報復はせず」慈善として見送るなら、それは自らの償いとなるだろう。アッラーが下したものによらずして判断を下す者、これらの者こそ不正をなす者。[28]

46 またわれらはマルヤムの子イーサーを彼らの足跡に続かせ、彼以前の「啓典である」律法の中にあるものを確認させた。また、われらは彼に福音を与えた。その中には導きと、光と、彼以前の律法の中にあるものの確認と、畏れる者への導きと、教示とがある。[29]

47 福音の人々には、アッラーがその中に下したものによる判断をさせなさい。アッラーが下したものによらずに判断を下す者、これらの者こそ背く者。[30]





48 われらはあなたに、真理をもって啓典を下した。それは以前の啓典を確認し、また保護するため。それゆえ彼らの間を、アッラーが下したものによって判断しなさい。あなたにもたらされた真理をおいて、彼らの欲求に従ってはならない。あなたがたのそれぞれに、われらは法と秩序をあらしめた。もしアッラーがそうと望めば、あなたがたを唯一の共同体にしていただろう。しかしかの御方は、あなたがたに与えたものによってあなたがたを試みる。それゆえ、何であれ良いことを競い合いなさい。あなたがたの帰りゆく先は、みな揃ってアッラーにある。そしてあなたがたの間で相争っていたことについて、かの御方はあなたがたに告げ報せるだろう。[31]

49 それゆえ彼らの間を、アッラーが下したものによって判断しなさい。彼らの欲求に従ってはならない。そして彼らに用心しなさい、アッラーがあなたに下したものから、一部たりとも惑わされることのないように。それでもし彼らが背を向けるようなら、それはアッラーが彼らの罪の一部を罰そうと望んでいると知りなさい。本当に、人間の多くは背く者。[32]

50 彼らが求めるのは、無明「の時代」の判断なのか。確信する民にとり、アッラーよりもすぐれた判断を下す者があるだろうか。[33]

51 信じる者たちよ。あなたがたは、ユダヤ教徒やキリスト者を味方に選んではならない。彼らは互いの味方である。あなたがたのうち彼らを味方とする者は、本当は彼らそのもの。アッラーは、不正をなす民を導かない。[34]

52 あなたは、心の中にやまいのある者たちが、彼らのところへわれ先にと急ぎ、「私たちは、不運に見舞われるのが怖い」などと言うのを見るだろう。おそらくアッラーはあなたがたに勝利をもたらすか、あるいは御許において決められたことを下すだろう。それで彼らは、その内側に秘めていたことについて後

悔するだろう。

53 信じる者は言うだろう。「これらの者は、アッラーにかけて自分たちはあなたがたと共にある、と、つとめて誓ったのではなかったか」。彼らの行いは無に帰される。彼らは敗者となるだろう。

54 信じる者たちよ。あなたがたのうち宗教から離れ去る者があれば、やがてアッラーは、御自らが愛し愛される民を連れてくるだろう。信仰者に対しては控えめで、〔真理を〕拒む者に対しては容赦なく、アッラーの道において励み、非難する者の非難を恐れない。御心にかなう者が与えられる、アッラーの御恵みとはこのようなもの。アッラーは果てしなく広大であり、すべてを知る。[35]

55 あなたがたの友とは、ただアッラーと、その使徒と、礼拝のつとめを守り、喜捨をし、こうべを垂れる、信じる者たちのみ。

56 誰であれ、アッラーと、その使徒と、信じる者たちを友とする者はアッラーの朋党。彼らは勝者となるだろう。

57 信じる者たちよ。あなたがた以前に啓典を与えられた者たちのうち、あなたがたの宗教を笑いごとにして軽んじる者や、〔真理を〕拒む者を友に選んではならない。アッラーを畏れなさい、もしあなたがたが信仰者なら。

58 あなたがたが礼拝に呼び招くとき、彼らはそれを笑いごとにして軽んじる。それは彼らが、考えることをしない民であるため。

59 言いなさい。「啓典の人々よ。あなたがたが私たちに立腹するのは、私たちがアッラーを信じ、私たちに下されたものと、以前に下されたものを信じるからというだけなのか。あなたがたの多くが、背く者だからではないのか」。[36]





60 〔ムハンマドよ、〕言いなさい。「アッラーの御許の応酬について、それよりももっと悪いものをあなたがたに報せようか。アッラーに忌まれし者、アッラーの怒りを招いた者、猿や豚にされた者、ターグートを崇める者。これらの者こそもっとも悪い場所にいて、平らかな道から迷っている」。

61 あなたがたのところへ来るとき、彼らは「私たちは信じます」と言う。そのじつ、彼らは〔真理を〕拒んだままで入り、〔真理を拒んだままで〕出てゆく。彼らが隠していることについて、もっともよく知るのはアッラーである。

62 あなたは彼らの多くが、罪と敵意へわれ先にと急ぎ、禁じられたものを貪（むさぼ）るのを見るだろう。彼らの行うことの何という悪さか。[37]

63 教師も学者も、どうして彼らが罪を語り、禁じられたものを貪（むさぼ）るのを禁じないのか。彼らが築いたものの、何という悪さか。

64 ユダヤ教徒は言う。「アッラーの御手は縛られた」。縛られているのは彼らの手であり、そんなことを言ったために忌まれたのは彼らである。いいや、むしろ御手は差し伸べられ、御心のままに施す。しかしあなたの主からあなたに下されたもののために、彼らの多くは逸脱と〔真理に対する〕拒否をつのらせるだろう。われらは彼らの間に、復活の日までの敵意と憎しみを投げ入れておいた。彼らが戦いの火をつけるたび、アッラーはそれを消す。彼らは、つとめて大地に退廃を広めようとする。しかしアッラーは、退廃を広める者を愛さない。[38]

65 もし啓典の人々が、ただ信じ、畏れさえするなら、われらは必ず彼らの悪事をとり除き、至福の楽園に入れさせるだろう。

66 もし彼らが、ただ律法と福音と、主が彼らに下したものを守りさえするなら、彼らは必ずその頭上から

も足下からも養われていただろうに。彼らの中には、穏やかな共同体もある。しかし彼らの多くは、悪事を行っている。[39]

67 使徒よ。あなたの主からあなたに下されたものをのべ伝えなさい。あなたがそれをしないなら、主の預言をのべ伝えたことにならない。アッラーは、人々からあなたを守るだろう。アッラーは、［真理を］拒む民を導かない。[40]

68 言いなさい。「啓典の人々よ。律法と福音と、主があなたがたに下したものを守らない限り、あなたがたには拠って立つべきものが何ひとつない」。あなたの主からあなたに下されたもののために、彼らの多くは逸脱と［真理に対する］拒否をつのらせるだろう。しかし、［真理を］拒む民のことで嘆いてはならない。

69 信じる者、またユダヤ教徒、サービアの徒、キリスト者のうち誰であれ、アッラーと終末の日を信じて正しい行いをする者には、恐れもなく、嘆きもないだろう。[41]

70 われらはかつてイスラエルの民から誓約を受け取り、彼らに使徒たちを遣わした。自分たち自身が欲しがらないものをもって使徒が到来すると、彼らは［使徒たちのうち］ある者を嘘であるとし、またある者を殺害した。

71 彼らは、そのせいで試みられることになろうとは考えなかった。そのために、耳も目も塞いでしまった。そののちアッラーは彼らの悔い改めを受け入れたが、彼らは再び、耳も目も塞いでしまった。アッラーは、彼らが行っていることをすべて見ている。[42]

72 「アッラーとは、マルヤムの子マスィーフのこと」と言う者は、すでに［真理を］拒む者。マスィーフは、「イスラエルの民よ。私の主であり、あなたがたの主であるアッラーに仕えなさい」と言ったのに。何ものかをアッラーと同列に連ねる者に、アッラーは楽園を禁じた。彼らは、火獄がその住まい。不正をな





す者に、助け手はない。[43]

73 「アッラーは三つのうちの一である」と言う者は、すでに［真理を］拒む者。唯一の神の他に、いかなる神もない。もし彼らが、彼らの言うことを控えないなら、彼らのうち［真理を］拒む者は、必ず痛烈な懲罰に遭うだろう。

74 彼らは、悔い改めてアッラーに立ち返り、赦しを願おうともしないのか。アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深いのに。

75 マルヤムの子マスィーフは、使徒のひとりに過ぎない。彼以前にも、すでに過ぎ去った使徒たちがいた。また彼の母は、真実な者であった。二人とも、［地上の］食べものを食べていた。見なさい、われらが諸々のしるしを、どのように彼らに明らかにしたかを。そして見なさい、彼らがどれほど惑わされているかを。[44]

76 言いなさい。「あなたがたはアッラーをさし置いて、あなたがたを害するにも益するにも力のないものに仕えるのか。アッラーこそはすべてを聞く御方、すべてを知る御方」。

77 言いなさい。「啓典の人々よ。真理をさし置いて、あなたがたの宗教の度を越してはならない。また、以前に迷い去った民の私心に従ってはならない。彼らは多くの者を迷わせ、また［自分たち自身も］平らかな道から迷っていった」。[45]

78 イスラエルの民のうち、［真理を］拒む者たちは、ダーウードの、またマルヤムの子イーサーの舌によって忌まれた。それは彼らが逆らい、法に外れたため。[46]

79 彼らは、互いに非道を禁じ合うこともしなかった。彼らの行ってきたことの、何という悪さか。

80 あなたは、彼らの多くが［真理を］拒む者たちを友にするのを見るだろう。彼らが自らすすんで行うことの、何という悪さか。彼らはアッラーの怒りを招き、懲罰の中に永遠に住まうだろう。

81 もし彼らがアッラーと、預言者と、彼に下されたものを信じていたなら、彼らは、彼らを友にはしなかっただろう。しかし、彼らの多くは背く者。

82 あなたは、人々のうち、信じる者に対しもっとも激しい敵意を示すのは、ユダヤ教徒と、多神を奉ずる者であるのを見出すだろう。また、信じる者に対しもっとも近しい親愛を示すのは、「私たちはキリスト者です」と言う者であるのを見出すだろう。彼らの中には司祭や修道者がいる。そのため彼らは、高慢にふるまわない。[47]

83 彼らが使徒に下されたものを聞くとき、あなたは、彼らが真理を認め、その目に涙をあふれさせるのを見るだろう。彼らは言う。「主よ、私たちは信じます。それゆえ私たちを、証言者たちと共に書きとどめてください。

84 アッラーと、私たちにもたらされた真理とを、どうして信じずにいられるでしょうか。私たちの主が、私たちを正しい行いの民と共に「楽園に」入れてくれるよう、どうして切望せずにいられるでしょうか」。

85 それでアッラーは、川がその下を流れる楽園をもって彼らの言うことへの報奨とする。彼らは、永遠にその中に住まうだろう。行いの善良な者の報いとはこのようなもの。

86 しかし「真理を」拒み、われらのしるしを嘘よばわりする者、これらの者は業火の仲間。

87 信じる者たちよ。アッラーがあなたがたに合法とした良いものを禁じてはならない。法に外れてはならない。本当にアッラーは、法外の者を愛さない。

88 アッラーがあなたがたの糧とした、合法な良いものを食べなさい。そしてアッラーを畏れなさい。あなたがたは、その信仰者なのだから。[48]

89 アッラーは、あなたがたのうかつな誓いについて責めることはしない。しかし誓いをもって取り決めを





したことについては、その責めを負わせるだろう。その償いは、あなたがたが家族に食べさせる、中ほどのものをもって十名の貧しい者を養うか、あるいは着るものを供するか、あるいは一名の奴隷の解放である。その手立てを見出せない者は、三日間の斎戒をしなさい。あなたがたが誓いをたてたときの償いとはこのようなもの。あなたがたの誓いを守りなさい。このようにアッラーは、その御しるしを明らかにする。あなたがたは、感謝するようになるだろう。[49]

90 信じる者たちよ。あなたがたにとり酒、賭博（とばく）、石碑（せきひ）「に捧げものをすること」、占い矢は嫌悪すべき悪魔の業（わざ）。それゆえ、これらを避けなさい。そうすれば、あなたがたは栄えるだろう。

91 悪魔は、酒や賭博（とばく）をもってあなたがたの間に敵意と憎しみを起こさせ、あなたがたがアッラーを想い起こし、礼拝するのを妨げようとしている。それでもあなたがたは、「それらを」断たないのか。[50]

92 アッラーに従い、使徒に従い、用心しなさい。たとえあなたがたが背を向けても、われらの使徒に課されているのは、ただ「教えを」明白にのべ伝えることだけと知りなさい。

93 信じて正しい行いをする者には、食べるものについての誤りはない。畏れ、信じ、正しい行いをし、さらに畏れ、信じ、さらに畏れ、善良な行いをするのなら。アッラーは、行いの善良な者を愛する。

94 信じる者たちよ。目には見えないところでアッラーを恐れているのは誰かを確かめるために、アッラーは、あなたがたが手や槍をもって狩る獲物を通してあなたがたを試すだろう。その後になって法に外れる者には、痛烈な懲罰があるだろう。

95 信じる者たちよ。巡礼者として禁忌の状態の間に、「狩猟をして」獲物を殺してはならない。あなたがたのうち、そうと知りながら殺した者の報いは、あなたがたの中から公正な者二名に判断をさせ、殺したものと同じような家畜を「主への」捧げものとしてカアバに届けること。あるいは自らの行いの結果を味

わうために、償いとして貧しい者を養うか、あるいは相応の斎戒をすること。アッラーは、過ぎ去ったことについては容赦する。しかし［同じ過ちを］繰り返す者には、アッラーからその報復があるだろう。アッラーは威力あり、報復の所有者である。[51]

96 海で漁をすること、また獲れたものを糧とすることは、あなたがたにも、旅人たちにも合法とされる。しかし巡礼者として禁忌の状態の間は、陸での狩猟は禁じられる。あなたがたを御自らに召し集めるアッラーを畏れなさい。

97 アッラーは、人々の拠って立つべきところとして禁制の家カアバを、また禁制の月と、捧げものと、［犠牲の家畜の］飾りとを定めた。これによりアッラーが諸天にあるもの、大地にあるものをことごとく知ることを、あなたがたに知らしめるため。本当にアッラーは、ありとあらゆるものごとを知る。

98 アッラーは懲罰に厳重であることを知りなさい。また本当にアッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深いことも。

99 使徒に課されているのは、ただ［教えを］のべ伝えることだけ。アッラーは、あなたがたが明かすことも隠すことも知っている。

100 言いなさい。「たとえ悪の多さに感心させられようと、悪いことと良いことは同じではない。それゆえ分別をもつ者よ、アッラーを畏れなさい。そうすれば、あなたがたは栄えるだろう」。[52]

101 信じる者たちよ。あなたがたは、ものごとを何でも尋ねてはならない。もし明かされれば、むしろあなたがたが困ることもある。しかし、クルアーンが下されている間に尋ねるなら、それはあなたがたに明かされるだろう。アッラーはそれを容赦する。アッラーはもっともよく赦し、もっとも寛容な御方。

102 あなたがた以前の民も、そうしたことについて尋ねていた。そしてそのために［真理を］拒む者となった。





103 バヒーラ、サーイバ、ワスィーラ、ハーミー［といった風習］を定めたのはアッラーではない。［真理を］拒む者たちが、アッラーに対して嘘をねつ造しただけのこと。彼らの多くは、考えようとしない。[53]

104 「アッラーが明らかにしたものと、使徒のところへ来なさい」と言われるとき、彼らは「私たちの先祖から習ったもので十分です」と言う。彼らの先祖は何ひとつ知らず、導かれてもいなかったというのにか。

105 信じる者たちよ。あなたがたが負っているのは、ただ自分自身のことだけ。あなたがたが導かれてさえいれば、迷える者にはあなたがたを害することはできない。あなたがたは、ことごとくアッラーに帰る。そしてかの御方はあなたがたに、あなたがたの行ってきたことについて告げ報せるだろう。[54]

106 信じる者たちよ。あなたがたのひとりに死が近づいたときは、遺言をさせなさい。あなたがたの中から公正な者二名を、証人として立てなさい。あるいは地上を旅する間に、死の災難があなたがたに降りかかったなら、あなたがた以外の者から二名を。礼拝の後に、その両名を引き留めなさい。もし疑わしいようなら両名に、「たとえ親族であろうと、証言を代価と引き換えにしません。また、アッラーの証言を隠すこともしません。さもないと私たちは、罪を犯す者となるでしょう」と、アッラーにかけて誓わせなさい。[55]

107 しかし、もし彼ら二名が［偽証の］罪にあることが露見したなら、権利を有する者の中から、彼らに代わる者二名を立てなさい。そして両名に「私たちの証言は、彼ら二名のそれよりも真実です。私たちは、決して法に外れたことはありません。もしそうなら、私たちは不正をなす者です」と、アッラーにかけて誓わせなさい。

108 あるべき証言をさせるには、これがもっともふさわしい方法というもの。こうすれば自分たちの誓いが、その後の誓いと矛盾するかもしれないことを恐れるだろうから。アッラーを畏れ、耳を傾けなさい。アッラーは、背く民を導かない。[56]

109 アッラーが使徒たちを集めるその日、「返答はどのようであったか」と告げる。彼らは言うだろう。「私たちは何も知りません。本当に、目には見えないものごとを知りつくす御方とはあなたのこと」。[57]

110 アッラーがこう言ったときのこと［を思いなさい］。「マルヤムの子イーサーよ。あなたと、あなたの母に対するわれの恩寵を憶えておきなさい。われは［大天使ジブリールの］聖霊によってあなたを強め、それによりあなたは、揺りかごの中でも成人してからも、人々に語りかけるようになった。またわれはあなたに啓典と、知恵と、律法と、福音を教えた。またあなたは、われの許しを得て泥から鳥の形を作り、これに息を吹き込むと、それはわれの許しを得て鳥になった。またあなたは、われの許しを得て目の見えない者、患う者をいやした。またあなたは、われの許しを得て死せるものをよみがえらせた。またあなたが明白な証をもってイスラエルの民のところへやって来たとき、われは［あなたが傷つけられることのないよう］彼らの手を制した。彼らのうち［真理を］拒む者は、『これは、明らかな魔術に過ぎない』と言った。[58]

111 そのとき、われは弟子たちに『われとわれの使徒を信じなさい』と啓示した［ことを思いなさい］。彼らは、『私たちは信じます。私たちが、服従する者［ムスリム］であることを証言してください』と言った。[59]

112 弟子たちがこう言った時のこと［を思いなさい］。「マルヤムの子イーサーよ。あなたの主は私たちのために、［食べものが並べられた］食卓を、天から下してくれるだろうか」。彼は言った。「アッラーを畏れなさい、もしあなたがたが、信仰者なら」。[60]

113 彼らは言った。「私たちはそこから食べ、私たちの心を満たしたい。あなたが私たちに、確かに真理を語っていることを知った上での証言者でありたいのです」。

114 マルヤムの子イーサーは言った。「アッラー、私たちの主よ。私たちのために、天から［食べものが並べ





られた］食卓を下してください。それをもって私たちの最初の者にも、最後の者にも祝祭としてください。またそれをもって私たちへの、あなたからの御しるしとしてください。私たちに糧をもたらしてください。本当にあなたは、糧をもたらす者として最良の御方」。[61]

115 アッラーは告げた。「本当に、われはあなたがたにそれを下そう。この後になって、あなたがたのうち［真理を］拒む者があるなら、われはその者に、諸世界の誰ひとりとして科されたことのない懲罰を科すだろう」。[62]

116 また、アッラーがこう告げるだろう［審判の日の］ときのこと。「マルヤムの子イーサーよ。あなたは人々に、『アッラー以外に、私と私の母を二神としなさい』と言ったのか」。彼［イーサー］は言うだろう。「あなたに讃美あれ。私に権利のないことを、私が言うはずがありません。もし私がそう言ったのなら、あなたはすでにそれを知っているはず。あなたは、私が何を抱いているのかを知っています。そして私は、あなたが何を抱いているのかを知りません。本当に、目には見えないものごとを知りつくしている御方とはあなたのこと。

117 私は、あなたが私に命じたこと、『私の主であり、あなたがたの主であるアッラーに仕えなさい』とだけ言いました。私が彼らの中にいた間は、私が彼らの証言者でした。しかし、あなたが私を召し寄せたときから、彼らを見張っていたのはあなたでした。あなたこそは、あらゆるものの証言者です。

118 たとえあなたが彼らを罰しても、本当に、彼らはあなたのしもべです。もしあなたが彼らを赦すなら、本当にあなたこそは威力ある御方、もっとも賢明な御方」。

119 アッラーは告げるだろう。「これは誠実な者が、その誠実ゆえに益される日。彼らには、川がその下を流れる楽園があり、永遠にその中に住まうだろう」。アッラーは彼らに喜び、彼らもこの御方に喜ぶ。大い

120 なる成就とは、まさしくこのこと。[63] 諸天と、大地と、そのあいだにあるものすべての王権はアッラーに属する。かの御方は、ありとあらゆるものごとにおいて全能である。

1 この節で用いられている「約束」という言葉には、（1）神と人の間の誓約、すなわち人間の神に対する義務（2）個人と、その人自身の魂の間の誓約（3）個人と、個人の属する集団との誓約という三つの意味がある。引き受けたことや約束、契約を果たすことはイスラームの社会的、法的、政治的な秩序の柱である。ここでは、それは絶対的な義務であると宣言されている。

2 「あなたがたが禁忌の状態を解いたとき」。巡礼を完了して巡礼着を脱ぎ、儀式的状態を終えた後であれば。

3 すべての世界宗教は、人間が自分ひとりでは真理に到達できないことを認め、法として何が正しく、また何が正しくないかを示すための道しるべを定めている。これらの法は、個人のみならず社会にも役立っている。イスラームにおける食の規定は、より簡易ではあるものの、その昔、神がイスラエルの民に授けたものを多くの意味で反映しており、それ自体が汚れている動物の肉を食することで生じる霊的な汚れから個人を保護することを目的としている。したがって、本来は廃棄物であるものを餌とする家畜の食用は（放牧によって育てられた家畜とは対照的に）原則として禁じられる。同様に、一神教的な規範に従った屠畜を経ていない動物の肉は、不正に殺害されたものとみなされ、これもその食用は禁じられる。これらの規定には、禁欲や節制といった要素も見られ、イスラームにおける斎戒や断食といった決まりごとを思い出させるものがある。どこに一線を引くか以前に、一線が引かれていることを意識することこそ重要なのである。現世や自我を「放棄」するとはいっても、神のみに自らのすべてを委ねることと、現世の何もかもを捨て去ることは必ずしも同義ではない。象徴、あるいは自分自身への備忘として、若干の取捨選択をする必要があるというだけである。





4 ムスリムは、本質的に健全で、かつ聖なる法が許すものであれば食べてよく、またそれらを食べることで祝福を得る。この節はまた、たとえ彼らの啓典が歪められ、改ざんされた状態にあるとしても、ユダヤ教徒とキリスト者が屠った肉を食べることは、それが適切に処理されている限りにおいて許される（ただし、豚の肉は除外される。後世になって付け加えられた干渉とは関わりなく、豚の肉を食することは、本来ならばユダヤ教においてもキリスト教においても許されていない。同様に、ムスリムの男性には、信仰を持ったユダヤ教徒やキリスト者の女性と婚姻することが許されている。しかしながらムスリムの女性と、ムスリムではない男性との結婚は許されていない。ムスリムの男性は他宗教の預言者も預言者として認めるが、一般的にはユダヤ教徒もキリスト者もムハンマドを認めていない。女性が、女性の信仰する宗教を完全に拒絶し、すべての預言者に対する愛情を、伴侶と共に分かち合おうとしない男性と共に暮らすことは避けるべきだろう。

5 ムスリムにとり礼拝とは、自らの主と、親密に心を通い合わせることである。あらゆる大切な逢瀬の前のように、それにふさわしい方法で準備をしなくてはならない。ほとんどすべての崇拝行為の前に必要とされているウドゥ（小浄）の実践は、外面を浄化するのと同時に、内面の浄化を象徴している。浄めの行為は、礼拝に立つ者を目覚めさせ、全能の神に向かわせる。容易に水を得ることができない場合は、一時的な手段として、清浄な土や砂で代用することも可能である。

6 「アッラーを畏れる」とは、神に対する義務を果たすことであり、ここで言及されている「約束」とは、創造の主に対する被造物の霊的な義務を指している。創造の主は人間に対し、理性や、魂の領域におけるより高い能力に加え、地上においては、創造の主の代理者としての地位を授けている。この節はまた、マディーナ出身の新たなイスラーム入信者

たちの、祝福の預言者に対する二度にわたっての誓約にも関連している。一度めはヒジュラ暦のおよそ十四か月前、二度めはその少し後、それぞれアカバとフダイビヤでの出来事である。

7 好意的で中立的な雰囲気の中で、公正な態度を示し、正義を行使するのも、これはこれで十分に称賛に値する。しかし真の公正さが試されるのは、自分の敵対者や、自分が嫌悪する者に対しても正義感を働かせなくてはならない時である。そうした時ほど、より高度な倫理が求められることはないだろう。

8 この節は、預言者の時代に、偶像を奉ずる民や偽善者から、預言者の暗殺をそそのかされたある人物に関連して啓示された。神の采配によって混乱をきたしたその人物は、邪悪な計画を果たせずに終わった。預言者ひとりを狙った企てではあったが、そこに含まれる意味合いは、信仰者全体の存在を脅かすものでもあった。

9 神は、フィルアウンの迫害からイスラエルの民を救うと、続いて彼らを聖なる町エルサレムへ向かうよう導いた。ムーサーに招かれた族長たちは、全員が口をそろえて「私たちは、主の命じる通りに従う」と宣言した。それから十二支族の族長は、カナーンの地を偵察するために密使を送り込んだ。使命を果たして戻ってきた密使は、誰もが「かの地の住民は強く、戦いに備えている」とイスラエルの民に警告した。ところがイスラエルの民はこれを聞いても、自分たちが受け継ぐべきもののために戦うのを望まなかった。こうして彼らは、預言者ムーサーの目の前で宣言した主への誓いを破ることになったのである。

ここではアッラーが直接話したことばを直接話法で伝えているため、「われ」と単数の扱いになっている。同時に動詞が強調形になっているため、単数形でも複数形の意味を含んでいると解釈される。

10 ムーサーとその後継者の時代には、作成されたタウラート（律法）の写本はただ一点のみであった。ところがイスラエルの民がバビロニアの民と戦って捕虜になったとき、この写本は失われてしまった。ようやく自由を取り戻したとき、イスラエルの民は再びそれを書き留めようと試みた。しかしその過程で、彼らは元の言葉を歪めはじめた。そして彼ら





に下された神の戒（いまし）めのうち、最良の部分を忘却の彼方に押しやってしまったのである。現在のタウラートは、原初のタウラートの不完全な抜粋集に過ぎない。

11 初期のキリスト者は、ローマびとやユダヤ教徒から多くの迫害を受け、広範囲に離散していった。その過程で、イーサーがその弟子たちに与えたキリスト者の契約も徐々に失われていった。多くの者の手によって、様々な福音書が記されたが、その中には、神の人間に対する啓示は未完了であること、神は唯一であるという教えを完成するために、アフマドという助け主が到来することについての婉曲的な記述も含まれていた。ヨハネの福音書一五章二六節と一六章七節には、そのかすかな残響が保たれている。真のキリスト者とは、イーサーだけではなくすべての神の預言者を受け入れ、神の絶対的な唯一性を肯定する者のことである。この節はまた、神がキリスト者とユダヤ教徒の間に定めた敵意をも思い起こさせるが、それは復活の日まで続くともされている。

12 「ムビーン」は「明白」と置き換えて訳すこともできるだろう。だがそれでは、読者に「簡素」といった印象を与えかねない。そして「簡素」は、美麗さとは正反対に位置する。しかしクルアーンは、最も美麗と呼べるものの一つであるし、またこれを読めるということは、人間に授けられた特別な恩寵の一つでもある。「明白かつ自明であり、その起源にも歴史にも、またその意味にも何ら不審な点はなく、特権的な立場にある者や、聖職者的な地位にある者による介入や制限なくして誰にでも読むことができ、また誰にとっても必要不可欠なものとして理解されうる」、という意味において、「明快」「明瞭」と訳すのも正しいだろう。「ムビーン」には、そうしたすべての意味が含まれているが、同時に、ものごとを明らかにし、真実と虚偽の判別をつけられるようにする、明るく照らす光の性質を示唆してもいる。そのため、「明らか」とする方がより優れていると思われ、そのように訳出した。

13 ここで「平安」と表現した「サラーム」という言葉は、他言語でも全く同じ意味になるかというとそうではない。「平安の道へと導く」とは、イスラームにおけるいわゆる救済である。ただし、ここで説き明かされている「救済」とは、

キリスト者の救済の概念とも異なる。それは内なる平安であり、身体的、精神的なあらゆる種類の害悪からの保護である。キリスト者の「原罪」という教義はイスラームでは正当化されておらず、なぜなら子どもはみな無垢で生まれるものであり、推論を用いて思考する年齢に達するまでは、あらゆる罪から解放されているからである。

14 出エジプト記四章二二節から二三節（「イスラエルはわたしの子」）、エレミヤ書三一章九節（「わたしがイスラエルの父」）など。また福音書にも、これに類似する多くの表現がある。「私たちはアッラーの子」については、ヨブ記三八章七節（「かの時には明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった」）など。詩篇第二九篇の一節、欽定訳には明らかに「神の子らよ、主に帰せよ、栄光と力とを主に帰せよ」とある。また創世記六章二節、「神の子たちは人の娘たちを見た」。「愛される者」については詩篇第一二七篇二節、「主はその愛する者に、眠っている時にも、なくてならぬものを与えられる」。一種の比喩として用いるなら、こうした表現は神の愛を意味するものといえよう。だが「子」という言葉を形而下的な感覚で用いたり、「愛される者」という言葉を、まるでユダヤ教徒のみが神に愛されているかのような、選民意識的な感覚で用いたりするようであれば、それは宗教そのものに対する侮辱でしかないだろう。

15 この節の「ファトラ」すなわち「空白」とは、「間隔」「途切れ目」ないし「休止」を意味する。救い主イーサーの到来ののち、預言者ムハンマドが遣わされるまでのおよそ六百年を指しており、それはまさしく世界にとり暗黒の時代であった。宗教は退廃し、道徳の規範は地に落ちた。多くのまやかしの思想体系や迷信的な崇拝がはびこった。助け主アハマド、すなわちムハンマドが到来するまでの間、預言者の継承が休止された時代だったのである。

16 その地を偵察して帰ってきた者の中に、信仰と勇気を持った二人の者がいた。ユーシャウとカラブである。ユーシャウは預言者ムーサーの跡継ぎにあたる者だった。彼らは、二人とも心からムーサーに従う者であり、ふさわしい門を通ってただちに中へ入るよう求めた。彼らは「恐るべき力強さの民」、すなわちカナーンの民の勢力には何の恐れも抱かなかったのである。ユーシャウとカラブの助言やムーサーの提言は、凡俗なイスラエルの民にとり、不快なものでしかなかった。





加えて彼らは、ユーシャウやカラブと共に密使を務めたその他十名の報せを聞いて、ますます先入観をつのらせていた。群衆はあからさまに反抗し、ムーサー、ハールーン（アロン）、ユーシャウ、カラブに石つぶてを浴びせた。エジプトに戻る心づもりでいたのである。なおユーシャウとカラブは、それぞれ聖書でのヨシュアとカレブに相当する。

17 神は幾度となく不服従を繰り返す人々を罰し、四十年にわたって荒野を放浪するようにさせた。そのため、法に背いた世代の人々が聖地を目にすることはなかった。成人していた者はみな荒野で命を落とした。そしてようやくその日が訪れた。四十年の歳月を経て、彼らはヨルダン川を反対の岸へ渡り、現代のエリコにたどり着いたのである。だがその頃にはムーサーやハールーンをはじめ、その他すべての年長者たちがすでにこの世を去っていた。

18 「私の罪とあなた自身の罪」について。直接的にも間接的にも、本人の行為にはまったく非がなかったにもかかわらず、暴力的で理不尽な死を遂げた場合、その死者の以前の罪は赦免されるだろうとする解釈があり、非常に確度の高い真正のハディースが典拠として存在する。「生かされていれば悔悟することもあり得ただろう。しかし殺害されてしまったならば、生命のみならず、その猶予さえも奪われたことになる。正当な理由なき殺害の場合、殺人者は殺害の罪に加え、さらなる罪を犯したことになる」というのがその理由である。ムジャーヒドによるこの解釈は、タバリーによって伝えられたものである。

19 傲慢、利己主義、そして嫉妬は、自らの兄弟を殺害してしまわせるほどに人間を圧倒する。人類の最初の争いと殺人を詳述するこの物語は、「ナフス・アンマーラ」の致命的な力を想起させる。ナフス・アンマーラとは、ナフス（魂、自我）の最も下等な状態を指す。衝動的で、絶えず人間に罪を犯させる。それが幾分か鍛錬されると、「ナフス・ラウワーマ」になる。それは自責の念を知り、自己批判を覚えたものの、しかしまだ浄化が足りていない状態にある魂を指す。そののちに、神の恩寵によって、人間は自分自身の衝動から解放された「ナフス・ムトマインナ」すなわち「安らげる魂」の状態に到達する。ここではカービールとハービール（カインとアベル）が、イスラエルの民の物語を俯瞰するために

簡潔に語られている。イスラエルの民は主に背き、正しい者を殺害して侮辱した。それでいて、神がその恩寵を他の民に授けると、今度は嫉妬に支配された。

20 この文脈での「使徒」という言葉は、明らかに包括的なものである。神と「その使徒に対して戦いを挑む」とは、神が定め、神の遣わすすべての使徒によって説き明かされた倫理的な戒めに対する敵意ある抵抗や故意の軽視と、他者の神に対する信仰を滅ぼし、覆そうと意識的に力を注ぐこととが混じり合った状態を意味している。「両手両足を交互に切り落とされる」とは、アラビア語で「力を削ぐ」を意味する慣用表現と同義の言い回しとして頻繁に用いられる。それはまた、身体的にも隠喩としても、あたかも十字架にかけられたかのように切り裂かれることを意味してもいる。

21 イスラームにおいては、正当な理由もなく誰かを殺害し、それによりカービールの犯した罪を繰り返すことは、全人類に対する犯罪とみなされる。殺人者は、ただ一人を殺害したのではなく全員を殺害したも同然とされるのである。テロ行為は、社会ならびに神とその預言者の両方に対する反逆である。これらの規定の解釈については、イスラーム法学者によって異なるが、殺害を伴う武力行使や強奪の行為者は、上述の四つの刑罰のうちひとつが課されることが認められている。実際の刑罰の執行は、地域の文化や規範に適合しているとみなされるところに従って司法が決定する。

22 神に「近づく手だて」のひとつは、神の御心に沿って努力することであり、それはこの節で述べられている通りである。その他の方法としては、崇拝行為や神への服従を含め、神のために善行をなすことである。

23 ここでは窃盗に対する罰則が非常に明確に定められている。とはいえ、それでもやはり被告人が飢餓やその他の切迫した必要や様々な困難のためにやむを得ず窃盗してしまった場合は罰則を科すことはできない。神は、自らのしもべが不当に扱われることを望まないからである。

24 ユダヤ教徒の中には、預言者に関するどのような嘘でも広めたがる者たちもいた。彼らは噂話をかき集め、たとえそれが、預言者に近しくもない者の話すことでも耳をそばだて聞き入った。そして彼らが、選ばれし預言者が聖なる法に背く瞬





間をとらえて暴いてやろうとしても、実際には、彼が細心の注意を払っているのが明らかになるのが常であった。

25 啓典の民は、望めば自由に自分たちの間で起きた紛議の解決を預言者に託すこともできる。預言者もまた、自分の元へ持ち込まれた紛議に判断を下すことはできるが、その場合はクルアーンに従って判断を下さねばならない。

26 ユダヤ教徒が自分たちの紛議の裁きを預言者に求める際の動機が示されている。彼らは、（1）彼が何を言おうとすべてを嘲笑するため、または（2）事実をごまかし、自分たちに都合の良い不公正な判断を下させるために彼を訪れたのである。もしも彼ら自身の法（タウラート」、すなわちムーサーの律法）が自分たちの利己的な関心にそぐわなければ、時にはそれをねじ曲げもした。しかし預言者ムハンマドは、公正さにおいては常に自らを曲げることはなかった。クルアーンが自分たちの先入観とは違うものであることに気づいたとき、彼らは離れていった。

27 「ラッバーニー」とは、学識を身につけた者が与えられるラビというユダヤ教の称号を指すものとする説、あるいは「ラッバ（面倒を見る、育成する）」の語から派生し、宗教的知識を備えつつも現世的な分野においても人々の教育と指導に携わる者、とする解釈（タバリー）などがある。「アフバール（学者）」とはヒブルないしハブルという語の複数形であり、ユダヤ教の律法学者と解される。後者の方は、他宗教のそれを指すのにも用いられる。

ユダヤ教徒に対し、ふたつの説示がなされている。（1）彼らは、自分たちの意図に沿わせるために、彼らの有していた啓典さえもその意味を歪めた。神よりも、むしろ人を怖れたためである。（2）彼らが有していたのはムーサーに授けられた律法の原典の断片に過ぎず、多くの半歴史的、あるいは伝説的な物語や、若干の美しい詩文と混ざり合っていた。クルアーンで言及されている律法とは、現在の旧約聖書のことでも、またいわゆるモーセ五書（旧約聖書の冒頭の五巻。半歴史的で伝説的な物語が多分に含まれている）を指すのでもない。

28 「アッラーが下したものによらずして判断を下す者」とは、以下、三つのグループに分類できる。（1）真理と知りつつ真理を拒み、それによりクッファール（真理を拒む者）となった者。（2）真実を知りながらそこから離れ、不正な判

断を下すことによりザーリムーン（不正をなす者）となった者。（3）四七節で述べられるファースィク（背く者）。

29 ここで言及されている「導き」と「光」のうち、「導き」とは行為を意味し、また「光」とは、より高度な信仰の領域についての洞察を意味している。

30 四四節、四五節、そして四七節における重要な言葉は、末尾にある「［真理を］拒む者」「不正をなす者」「背く者」であり、それぞれが文脈に沿っている。もしもユダヤ教徒が自分たちの啓典に対し立腹するようなら、それは「［真理を］拒む者」であるし、ムスリムが虚偽の判断を下すようなら、それは「不正をなす者」である。もしもキリスト者が、自分たちの光に従わないなら、それは「背く者」に他ならない。

31 神を信じ、その預言者の教えに従う人々が、個人的あるいは政治的な意見の相違を理由にお互いに争うべきではない。それよりも「良いこと」、自分たちの預言者たちがそれぞれに指し示した目的の達成のために、お互いに競い合うべきなのである。

32 神によって啓示された生き方に沿った人生を拒めば、その罪ゆえに殺戮や追放、隷属や投獄といった災禍を通して、現世においても咎めを受けるかもしれない。あるいは懲罰が、来世に延期されることもあり得る。

33 ここでの「ジャーヒリーヤ」すなわち「無明」「無知」とは、イスラームが啓示される以前にはびこっていた土着的な蒙昧の状態を指している。これは多くの社会と地域に今もなお残る、諸々の問題の根となっている。そうした場所には神の唯一性という概念や、他者のために尽くすといった義務を伝える明快なメッセージが十分に浸透しきっていない。

34 この節で用いられている「ワリー（※複数形でアウリヤー）」という語は、「近しい者」、「友人」、「援助者」、「保護者」などを意味する。非ムスリムとの「倫理観の共有」の禁止とは、彼らがムスリムに対して示す、ごく普通の友好的な関係を破棄することを意味しない。しかしムスリムに対して敵対的な姿勢を示す非ムスリムに、援助や同情を求めるべきではない。彼らが援助の手を差し伸べるよりも、お互いに相容れない可能性の方がより高いのである。そしてそれは、





預言者の生涯において一度ならず何度も繰り返し起こったことである。常日頃から行動を共にし、お互いに相談し合う者は、真に仲間と呼ぶにふさわしい者を選ぶべきである。

35 たとえ現世が邪心や浅はかな短慮に満ちていようと、神は常にまっすぐな者たちの一群を立ち上がらせ、イスラームの旗を掲げさせてきたことは歴史を見る限り明らかである。

36 当時、ユダヤ教徒のある集団は「あなたがたよりも悪い共同体、あるいはあなたがたのそれよりも悪い宗教は見たことがない」と宣言してムスリムを攻撃した。彼らの非難に対し、神は次の節の啓示をもって応答した。

37 「禁じられたものを貪る」の意味は、字義的にも、比喩的にも解釈することが可能だが、他者の財産や信託された資産の不正な搾取に言及するのに、「罪と敵意」が並置されている点からも、比喩的な意味で解釈する方が、理解が深まるかもしれない。

38 人間の多くが常に地上で戦争を始め、不善を広めようとしてきた。歴史上、異なる宗教集団同士の争いは枚挙にいとまがない。しかし宗教を持たざる人間同士の間にも争いは起こるし、同じ宗教に属する者同士の間にも、ささいなことで争い合う派閥が何千と存在するのである。そうしたすべてにもかかわらず、人間には、神の光を絶やすことはできなかった。

39 自らの宗教を離れ、自己保身と個人的な利益を優先する価値観に従って生きている者は、他者を搾取する際にも躊躇することがない。彼らは抑圧、貧困、不幸を引き起こし、戦争の主たる原因となっている。全能者たる創造主にすべてが帰されるならば、世界には抑圧も非道も、貧困もない。すべての人々が彼らにふさわしい正当な対価を得るようになれば、世界は豊かになり、あらゆる場面において、神の祝福が人類の上に注がれるだろう。だが私たちはそうした理念を遠く離れ、宗教を調和よりもむしろ不和の根源とし、かつてないほどに大量の人命を奪い、傷痕を残す世俗的なイデオロギーとして機能させてしまっている。

40 預言者ムハンマドには立ち向かわねばならない多くの困難と、避けるべき多くの敵や危険があった。彼に課された使命は、完遂されねばならなかった。そして彼は ― 実際にそうした通り ― 前へと進み、メッセージをのべ伝え、使命をまっとうし、神の加護を信じ、正しさを完全に失った人々に拒まれたり、脅されたりしても、平静さを保ち続けなくてはならなかった。

41 過去にどのような宗教を奉じていようと、どれほど罪を重ねていようと、イスラームを受け入れ、神を喜ぶような形で実践するようになれば、現世と来世の両方で勝利を得るだろう。二章六二節も参照のこと。

42 すなわち彼らは、神の徴から目をそらし、神のメッセージに対して耳を塞いだのである。

43 マタイによる福音書四章一〇節参照。神以外の崇拝を求める悪魔を、マスィーフ・イーサーが叱責する場面である。ヨハネによる福音書二〇章一七節では、イーサーがマルヤムに「私の兄弟のところへ行って、こう言いなさい。『私の父であり、あなたがたの父である方のところへ私は上る。私の神であり、あなたがたの神である方のところへ』」と告げている。また、ルカによる福音書一八章一九節ではイーサーが、彼を「良き師」と呼んだある役人を叱責する。「なぜ私を良き者というのか。神ひとりのほかに良い者はいない」。マルコによる福音書一二章二五節では、マスィーフ・イーサーは次のように述べている。「第一の戒めはこれである、『イスラエルよ、聞け。主なる私たちの神は、ただひとりの主である』」。ルカによる福音書四章八節も同様である。

44 一部のユダヤ教徒は、イーサーが徳の高い女性から生まれたとは決して信じず、彼女は不義の子を産んだと主張して中傷を浴びせた。ここではクルアーンは、イーサーの誕生が奇跡的なものであったことを示している。マルヤムは自らを「神の母」であると主張したり、息子が神であると主張したりはしなかった。彼女は敬虔で善良な女性だったのである。その一方でキリスト者たちの悪言に対しては、食事を必要としたマスィーフの人間性を指摘することにより反論がなされている。食事は人間を構成する最も基本的な必要条件であるが、神には必要とされないものである。神は唯一であり、





そのメッセージも唯一である。しかし人間の虚栄は、いとも簡単に真実を虚偽に変え、宗教を迷信に変えてしまう。

45 先行する節同様、この節も部分的にはキリスト者に向けられたものである。多くのキリスト者はイーサーへの愛ゆえに、イーサーを神の位階にまで高めることにより「真理から外れて」しまった。より広義には、（ラーズィーの解釈に従うなら）これは特定の宗教のみを指しているとばかりもいえず、既成の状態に固執するあまり「平らかな道から迷って」しまったすべての宗教実践者に共通することでもある。時間の経過と共に、精神的な指導者を神格化するに至った ― 宗教の歴史においてしばしば遭遇する現象である ― 多くの共同体を暗示している。

46 ダーウードのザブール（詩篇）には、邪悪な者に対するいくつかの批判がある。詩篇七八章一七節から一八節、二一節（「それゆえ、主は聞いて憤られた。火はヤコブにむかって燃えあがり、怒りはイスラエルにむかって立ちのぼった。これは彼らが神を信ぜず、その救の力を信用しなかったからである」）から二二節、三一節から三三節。詩篇六九章二二節から二八節、また詩篇五章一〇節。マタイによる福音書一二章三四節、また二三章三三節から三五節。

47 一定の解釈者たちによれば、クルアーンのこの節は、彼らの土地に移住した初期のムスリムを歓迎したアビシニア（現在のエチオピア）のキリスト者を指している。その他に、預言者ムハンマドとの条約に署名したナジュラーンのキリスト者を表すともされる。より一般的には、誠実なキリスト者にはムスリムの美徳を理解することができるという意味である。多くの狂信的ないわゆるキリスト者が、十字軍遠征時代のように、ムスリムに宣戦布告したり、ムスリムの土地を略奪したりしてきた歴史的な事実を変えることはできない。しかしそれ以前に、この節や他の節においても、キリスト者に対しては共感をもって接するよう繰り返し命じられていることを忘れるべきではない。

48 預言者ムハンマドの説き明かしのひとつに、アリー、イブン・マスウード、アル＝ミクダードを含む自らの教友たちに向かって自制と敬虔な祈りによって過ごす生活の重要な側面を論じたものがある。彼らは預言者の言葉に深く影響をうけた。その後の彼らは、ウスマーン・イブン・マズウーンの家に集まり、共に断食し、毎晩、夜を徹して礼拝し、性交

渉を断ち、肉食を放棄し、残りの生涯を粗末な衣類を着て過ごすことを誓った。このことが預言者の耳に入ったとき、彼はすぐさま彼らを訪ね、次のように言った。「あなたがたの身体は、あなたがたに対する権利を有し、あなたがたの目は、あなたがたに対する権利を有し、そしてあなたがたの妻は、あなたがたに対する権利を有している。あなたがたは断食と礼拝だけではなく、同時に食事と睡眠もとらねばならない。私は時に礼拝をして過ごし、また時に眠りにもつく。断食をし、それから断食を解く。肉を食べ、妻たちとも交わる。私の道を去る者は、私の仲間ではない」。これに関連して啓示されたのが、上記ふたつの節である。

49 贖罪（しょくざい）や節制の誓いは、意志を伴わない場合もあれば、善良な美徳の行為として成立することもある。ここで確立されているおおよその原則は以下の通りである。（1）意図せずして誓いを立てないこと。（2）合法かつ善良な行為から目を背け、自らを正当化するために神の名を利用してはならない。（3）自らの能力を最大限に発揮して、自らの厳粛な誓いを守ること。（4）それが果たせない場合は、貧しい者に食事や衣類をふるまったり、誰かの自由を確保したりすることによって、自らの不首尾の償いとすること。何の手立ても持たない者は、断食による償いも可能である。これらは問題の精神的な側面に関わることである。もしも自らの不首尾によって損害を被った者がいる場合は、贖罪（しょくざい）はその人物に対してなされるが、その場合は法的な問題として扱われる。

50 イスラーム以前の時代、アラブたちは、ぶどう酒その他の酒類を飲用していた。イスラームはこれを、三つの段階を経て禁じた。神はまず、信仰するムスリムたちにぶどう酒の飲用を思いとどまるように告げ、酩酊（めいてい）には益を上回る害があるという事実に目を向けさせた。その後、酒気を帯びた状態での礼拝が禁じられた。この節では、飲酒が完全に禁じられている。同時に賭け事も禁じられた。これらふたつの悪習には、共通する多くの特徴があるが、第一に挙げられるのはその中毒性、依存性だろう。ここでは「賭博（とばく）」と訳出したが、原義となる「賭け矢」とは、抽選やくじ引きで肉を配分するのに用いられていたものを指す。また、例えば一時的な運不運を確かめたり、神々の意向を質したり、ある行為





をすべきか、あるいは避けるべきかといったことを知るための占いに用いられもした。神秘的な内実があるかのように見えるかどうかに関わらず、あらゆる迷信は神の法によって禁じられている。

51 巡礼のためのイフラーム（禁忌の状態）にある間や、あるいはマッカ周辺の神聖な領域では、危険な爬虫類や昆虫類を除き、生きものに危害を加えることは禁じられている。このようにして、神は自らの町があらゆるものにとり平和と安全な場所であるという、神聖かつ不可侵な性質を人に想起させるのである。

52 量よりも質を重視することが勧められている。知性ある者は数に惑わされたり、自分を取り囲むあらゆるものごとに気をとられたりすることもない。むしろ、最も優れたものとはありふれたものではなく、極めて希少なものであり、それを見つけ出そうとすれば、相応の努力をしなくてはならないことを理解している。

53 この節は、イスラーム以前の時代におけるアラブの土着的な伝統に関連している。自然界に潜む様々な不思議を理解していない人々には、ある種の現象は神の怒りによるものとして映った。そうした迷信的な恐怖は、彼らの生命すら脅かすほどであった。雌のらくだや、雌の家畜が多くの仔を産んだなら、少なくとも五頭の雄の出産後にはその雌の耳に切れ目を入れて神に捧げられたものとされる。これらはバヒーラと呼ばれた。旅から無事に戻ってきたり、病気から回復したりした際にも、同様に雌のらくだが捧げられ、牧草地などで自由に放し飼いにされたが、これらはサーイバと呼ばれた。家畜が双子を産むと、偶像にある種の犠牲や供物が捧げられた。この時、捧げられるものはワスィーラと呼ばれる。種馬となったらくだは特定の儀式を経て神々に捧げられ、ハーミーと呼ばれた。こうした特定の事例をひもといてゆくと、ある普遍の真理に行き着く。すなわち、迷信とは無知によるものである。それは人間をおとしめ、神の名誉を傷つける。

54 私たちの魂こそは、私たちの生きるすべてである。私たちの行いのすべては、魂を忘却や醜い悪癖といった性質からの浄化へと導くものでなければならない。それにより、自分よりも悪い状態にある人々にそのかされ、取り込まれると

いった事態も防がれる。だが何よりも、自らの魂を撫育することは他者の、とりわけ自らが責任を負っている者たちの幸福を保障するためにすべきことの一部である。

55 ほとんどの解釈者（例えばラーズィーなど）によれば、「あなたがたの中から」という表現は、ムスリムの共同体の中から、という意味である。

56 死後であっても義務が果たされるよう、これらの節を通して一定の原則が確立されている。故人の近親者、あるいは遺言の執行者として指名された者は、借財やその他の負債が支払われているか、金銭が不正に流用されていないかを確認する必要がある。この節では、こうした責任とそれに対処する方法が説き明かされている。

57 九九節を参照。「使徒に課されているのは、ただ［教えを］のべ伝えることだけ」。使徒には、正しい道に従うよう人々に強制することも、また彼らの心の中にあるものを知ることもできない。

58 この節と、それに続く節のいずれにおいても、預言者イーサーの奇跡について論じられている。神はその預言者たち全員に、ある種の奇跡を働かせる能力を授けて彼らを強めた。これによって人々が、神とその使徒たちの教えを信じるのを助けたのである。これらの奇跡は、神の許しがあってのみ起こりうる。

59 「弟子たち」とは、イーサーに最も近しい従者たちであった。預言者ムハンマドの教友たちと同じく、彼らは神を信じ、忠誠をもって自らの師の教えに従い、自らを神に明け渡していた。そのあり方はアラビア語でいうところのイスラーム、すなわち神に対する全面的な服従である。

60 天上の「マーイダ（食卓。本章の章題である）」を乞う弟子たちの求め ― そして、それに続くイーサーの祈り ― は、主の祈り（マタイによる福音書六章一一節参照）に含まれる、日々の糧を求める祈りの残響のようにも思われる。弟子たちが「食卓」を求める際のその求め方は、次の節で説き明かされている通り、彼らの信仰に対する神の「承認」を確証するための「奇跡」を求めているかのようでもある。その上で、人間が得るあらゆる益は、たとえそれが人間自身の





努力によってもたらされたものであるとしても、宗教的文脈に従えば、それらはすべて神による「天からの賜りもの」である。

61 「糧」とは身体と精神の両方のためのそれを指すが、とりわけ後者の力を養うための糧について、人はおろそかになりがちである。イーサーのこの祈りは、精神の糧について想起させるものである。

62 現代においてさえ、物質的なあり方での神兆や奇跡を求める人は少なくない。求めるべきものがそもそも誤っていることに気づかない限り、通常、彼らの求めが満たされることはない。しかしそうした誤った求めに応じる形で虚偽をねつ造したり、偽の神々や偽の理想を提供したり、それらを受け入れたりすれば、とりわけ重い懲罰が科されることになる。

63 人間は有限かつ刹那の現象に過ぎない。実在するのは唯一、崇高なる神のみである。神は永遠の所有者である。人類の奮闘努力が繰り広げられているこの惑星も、百億光年の彼方にまで届くことで知られるこの宇宙と比べれば、砂漠の砂粒ほどの意味すら持たない。人間にとり、真の成功とは何か。それは神の喜びを求めることである。唯物論者にとってはこの現世がすべてであり、そこでの人間の行動は個々人に帰されるのみであるが、全能の神と共にある信仰者にとり、現世とは神を知る機会を与えてくれる場、神が用意した試練と御しるしを備えた場であり、そのように理解して初めて価値を発揮する。神の完全性は、人間が自分の不完全さを自覚し、また自分の無知を知った上で低いところからより高みを目指し、神を知ってゆく過程において明らかにされる。「アッラーは彼らに喜び、彼らもこの御方に喜ぶ」とは、信仰者にとり最良の状態を示す祈りであるともいえる。

# 第六章　アル＝アンアーム　家畜

マッカ啓示

マッカ時代の後期の章であるが、九一節、九二節、九三節、一五一節、一五二節ならびに一五三節は、おそらくマディーナで啓示されたものである。章の題名は家畜の供儀に関する迷信を戒める一三六節以降の数節に由来する。全体としての本章の主題は神の唯一性の説き明かしであり、その意味では前章の主題を引き継いでいる。本章が啓示されたこの時期は、預言者がイスラームの宣教を開始して十三年近くが経過していた。しかし多くの信仰者は、迫害が激しくなる一方のマッカを立ち去り、アビシニアへと移住していた。また預言者自身もその最大の支えであった叔父のアブー・ターリブ、妻のハディージャを失い、現世においてほとんど孤立無援の状態に陥っており、マディーナへの移住を余儀なくされた。しかしこうした中でも、マッカ周辺の人々の中にはイスラームを受け入れる者が徐々に現れ始めていた。この啓示が下された期間における勝利についての言及には注目すべきである。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 アッラーに称賛あれ、諸天と大地を創造し、暗闇と光を置いた御方に。それでも［真理を］拒む者たちは、彼らの主に同位のものを連ねる。





2 あなたがたを泥から創造し、そののち［寿命の］期限を定めた御方。その期限は、御許に定められている。それでも、あなたがたは疑っている。

3 アッラー、諸天と大地において［崇拝すべき御方］。あなたがたが秘めるものも露わにするものも知っている。またあなたがたが、［その行いによって］得てきたものも知っている。

4 彼らの主からどのような御しるしが到来しても、彼らは必ず背を向けてしまう。

5 かつて真理が到来しても、彼らはそれを嘘であるとした。しかし彼らがあざ笑っていたものについての報せが、やがて彼らに到来するだろう。[1]

6 彼らは見なかったのか、われらが、彼ら以前にどれほどの世代を滅ぼしたか。われらはあなたがたよりもしっかりと、地上に彼らを立たせてやった。またわれらは空から［雲を］遣わし、彼らの頭上に［雨を］豊かに降り注がせ、また彼らの足下には川を流れさせた。しかし彼らの罪のために、われらは彼らを滅ぼした。そして彼らの後には、別の世代を興した。

7 たとえわれらがあなた［ムハンマド］に、紙片に書かれた啓典を下し、彼らにその手で触れさせたとしても、［真理を］拒む者たちは必ず言うだろう、「これは、明らかな魔術に過ぎない」と。[2]

8 また、彼らはこうも言う。「どうして彼には、天使が下されないのか」。もしわれらが天使を下せば、ことは決着する。そうなれば、彼らは猶予されなかっただろう。[3]

9 たとえわれらが［使徒としての］彼を天使にしたとしても、われらは、［人々と話ができるよう］必ず彼を人の姿にしていただろう。彼らがすでに混乱していることを、われらがさらに混乱させていただろう。[4]

10 すでにあなた以前にも、嘲笑された［主の］使徒たちがいた。しかしあざ笑った者たちは、自分があざ笑っていたものに囲い込まれてしまった。[5]

11 言いなさい。「地上を旅し、そして見なさい、［真理を］嘘よばわりした者たちの最後がどのようであっ
たかを」。
12 言いなさい。「諸天と大地にあるものは誰に属するのか」。言いなさい。「ことごとくアッラーに属する。
かの御方は、［あらかじめ］慈悲を御自らの旨とした。復活の日、かの御方はあなたがたを必ず集めるだ
ろう。そしてそれは、疑う余地もないこと」。しかし、自分自身を失った者は信じない。
13 夜と昼とに憩うものは、ことごとくこの御方に属する。すべてを聞く御方、すべてを知る御方。
14 言いなさい。「諸天と大地の創始者であり、養いはしても養われることのないアッラーの他に、誰を私の
庇護者に選ぶだろうか」。言いなさい。「本当に私は、最初に服従する者になるようにと、また多神を奉
ずる者のひとりにならないようにと命じられた」。
15 言いなさい。「もし私が主に逆らおうものなら、私は大いなる日の懲罰が恐ろしい」。
16 その日、［懲罰を］免れる者はかの御方の慈悲にあずかる。明白な成就とは、このようなもの。
17 もしアッラーが、害をもってあなたに触れたなら、この御方の他にそれをとり除ける者は誰もいない。
そしてもしこの御方が、良いことをもってあなたに触れたなら［、誰もそれを取り上げることはできない
だろう］。あらゆるものごとにおいて全能の御方。
18 しもべたちを圧倒する至高者。賢明な御方、熟知する御方。
19 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「証言として、もっとも至大なこととは何か」。言いなさい。「アッラーが、
私とあなたがたの間の証言者であるということ。このクルアーンが私に啓示されたのは、これにより私
があなたがたに、また届く限りの者に警告するため。あなたがたは本当に、アッラーと共に諸々の神々
があると証言するのか」。言いなさい。「私なら、証言しない」。言いなさい。「この御方こそが唯一の神。





私は、あなたがたが同列に連ねているものとは何の関わりもない」。[6]
20 われらが啓典を与えた者たちは、わが子を見分けるかのようにそれを見分ける。しかし、自分自身を失っ
た者は信じない。[7]
21 アッラーについて嘘いつわりをねつ造するか、あるいはその御しるしを嘘よばわりするよりも不正な者
があるだろうか。本当に、不正をなす者は栄えないだろう。
22 その日、われらは彼らをことごとく集めて、それから［主に］同輩を連ねていた者たちに告げる。「あな
たがたが主張していた、『同輩たち』はどこにいるのか」。
23 そうなれば彼らは、「私たちの主、アッラーにかけて。私たちは決して多神を奉ずる者ではありませんで
した」と言う以外に、申し立てもできないだろう。[8]
24 見なさい、どのように彼らが自分自身に対して嘘をつき、また彼らがねつ造していたものが、彼らを迷
わせたかを。
25 彼らの中には、あなたに耳を傾ける者もいる。しかしわれらは彼らの心に覆いをかけ、彼らには理解で
きないようにし、また耳も鈍くさせた。たとえ彼らがすべての御しるしを目にしようと、彼らはそれを
信じない。彼らは、あなたと言い争うためにあなたのところへやって来る。［真理を］拒む者たちは言う、
「大昔の人の伝説に過ぎない」。[9]
26 そして彼らはそれを遠ざけ、自分たちも遠ざかる。しかし彼らは、自分でも気づかないうちに、ただ自
分自身を滅ぼすだけ。
27 もしあなたに、火炎の前に立たされるときの彼らを見ることができたなら。［そのとき、］彼らは言うだ
ろう。「もし私たちが、送り返してさえもらえたなら。そうすれば私たちも、主の御しるしを嘘よばわり

することもなく、信仰者のひとりになるだろうに」。

28 いいや、彼らが以前から押し隠していたものが、彼らの前にあらわとなっただけのこと。たとえ彼らが送り返されたとしても、彼らは禁じられていることを必ず繰り返すだろう。本当に、彼らは嘘をつく者。

29 彼らは言う。「あるのは現世の生のみ。私たちが、よみがえらされることはない」。

30 もしあなたに、主の御前に立たされるときの彼らを見ることができたなら。［主は］告げるだろう。「これこそ、真理ではないのか」。彼らは言うだろう。「まさしく、私たちの主にかけて」。［主は］告げるだろう。「それなら、あなたがたが拒んでいたことへの懲罰を味わえ」。

31 アッラーと会することを嘘であるとしていた者こそ、敗者である。そして突然、かの時が到来すると、彼らはその背に重荷を負わされ、「何と無念なことだろう、これを怠ってきたとは」と言う。彼らの背負うものの、何という悪さか。

32 現世の生は、ただの遊びか、なぐさみに過ぎない。畏れる者には、来世の館こそもっとも良い。それでもあなたがたは、考えないのか。

33 われらは、あなたが彼らの言うことにどれほど悲しんでいるかを知っている。本当に、彼らが嘘よばわりしているのはあなた［ムハンマド］のことではない。不正をなす者は、アッラーの御しるしを拒んでいるだけ。[10]

34 すでにあなた以前にも、嘘よばわりされた［主の］使徒たちがいた。しかし彼らは、われらの助けがもたらされるまで、嘘よばわりされ、苦しめられてもよく耐えた。何ものにもアッラーの御言葉を変えることはできない。そして使徒たちについての話［の一部］は、すでにあなたに届いているはず。

35 彼らに背き去られるのが、あなたにとり辛いことなら、大地に孔道を、あるいは天に梯子（はしご）を探し求めて、





彼らに御しるしをもたらしてみなさい。もしアッラーがそうと望めば、彼らはことごとく導きの上に集められていただろう。それゆえあなたは、無知な者のひとりになってはならない。[11]

36 ［真理に］応じるのは、［真理に］耳を傾ける者のみ。死者については、アッラーが彼らをよみがえらせるだろう。そののち、彼らはその御許へ帰される。

37 彼らは言う。「どうして彼には、主から御しるし［となる奇跡］が下されないのか」。言いなさい。「本当に、アッラーには御しるしを下すこともできる。しかし、彼らの多くはそれを知らない」。

38 大地に生きるものも、両の翼で飛ぶ鳥も、あなたがたと同じように共同体でないものはない。われらは、［われらの定めた］啓典の中にあるものを、何ひとつないがしろにはしない。やがて彼らは、主の御許に集められるだろう。[12]

39 われらのしるしを嘘よばわりする者とは、暗闇の中で耳も聞こえずものも言えない者のこと。アッラーは望みの者を迷わせ、また望みの者をまっすぐな道の上に置く。

40 言いなさい。「あなたがたは、考えてもみたのか。アッラーの懲罰がもたらされるか、あるいはかの時が到来したなら、あなたがたはアッラー以外のものを呼ぶのか。もしあなたがたが、真実を語っているのなら［答えてみなさい］」。

41 いいや、むしろあなたがたが呼ぶのはただこの御方のみ。そしてもし御心にかなえば、この御方は、あなたがたにこの御方を呼び求めさせたものをとり除くだろう。そうすればあなたがたは、［主と］同列に連ねていたものを忘れるだろう」。

42 すでにあなた以前にも、われらは［使徒たちを］遣わしてきた。われらは、苦難と困難をもって彼らを捕えた。それで彼らも、謙虚になるだろうと。[13]

43 われらの威が振るわれたとき、どうして彼らは謙虚にならなかったのか。彼らの心は硬くなり、悪魔が彼らの行いを、すばらしいもののように見せていた。

44 彼らがその戒めを忘れたとき、われらは彼らに、すべてのものの門を開いた。それから、与えられたものに彼らが有頂天になっていたとき、われらは突如として彼らを捕えた。すると見なさい、彼らは絶望してしまった。[14]

45 こうして、不正をなす者の民は根絶やしにされた。アッラーに称賛あれ、諸世界の主に。[15]

46 言いなさい。「あなたがたは、考えてもみたのか。もしアッラーがあなたがたの聴覚や視覚を奪い、また心も閉ざしたなら、アッラー以外にどのような神が、あなたがたにそれらを［再び］もたらしてくれるというのか」。見なさい、どのようにわれらがしるしを解き明かすか。それでも彼らは、背き去ってゆく。

47 言いなさい。「あなたがたは考えてもみたのか。たとえアッラーの懲罰が、突然に、あるいは公然とあなたがたにやって来るとしても、不正をなす民を除いて、誰が滅ぼされるだろうか」。[16]

48 われらが諸々の使者を遣わすのは、良い報せを伝える者として、また警告者として他ならない。それゆえ信じ、自らをただす者には、恐れもなく、嘆きもないだろう。

49 しかし、われらのしるしを嘘よばわりする者は、背いていたために懲罰に遭うだろう。

50 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「私はあなたがたに、アッラーの宝庫は私のところにあるとも、目には見えないものについて知っているとも言っていない。また、私は自分のことを天使であるとも言っていない。私はただ、私に啓示されたことに従っているだけ」。言いなさい。「目の見えない者と見える者が同じだろうか。それでもあなたがたは、いまだ省みようとしないのか」。[17]

51 自分たちが主に集められるのを恐れる者に、これ［クルアーン］をもって警告しなさい。彼らには主の他に、庇護者も、とりなす者もないのだから。彼らも、畏れる者となるだろう。





52 主の御顔を求めて、朝も晩も主に呼びかける者たちを追い払ってはならない。彼らの清算について、あなたは何ひとつ負っていない。またあなたの清算について、彼らも何ひとつ負っていない。それでも彼らを追い払うなら、あなたは不正をなす者のひとりとなるだろう。[18]

53 このように、われらは彼らのうちある者を、別の者によって試みる。彼らは、「私たちのうち、アッラーはこれらの者をいつくしむというのか」などと言うかもしれない。感謝する者について、もっともよく知るのはアッラーではないのか。[19]

54 われらのしるしを信じる者が、あなたのところへ来たときは言いなさい。「あなたがたに平安あれ。あなたがたの主は、［あらかじめ］慈悲を御自らの旨とした。それゆえ無知であったために悪を行った者が、その後になって悔い改め、また自らをただすなら、かの御方はもっともよく赦し、もっとも慈悲深い」。[20]

55 このように、われらはしるしを解き明かす。それは、罪を犯す者の道を明らかにするため。

56 言いなさい。「私は、あなたがたがアッラーをさし置いて呼びかけているものに仕えるのを禁じられている」。言いなさい。「私は、あなたがたの欲求には従わない。そうなったとき、私は必ず迷うことになり、導かれた者のひとりではなくなってしまう」。[21]

57 言いなさい。「私は、主からの明白な証を拠りどころとしている。しかしあなたがたは、それを嘘であるとした。私には、あなたがたが急ぎ求めていることはできない。ただアッラーのみが判断を下す。真理を語る、もっとも良い決着をもたらす御方」。

58 言いなさい。「もしあなたがたの急ぎ求めていることが、私のところにあったなら、私とあなたがたとの間で事は決着していただろう。不正をなす者について、アッラーはもっともよく知っている」。[22]

59 目には見えないものの鍵は御許にある。かの御方を除いて、それを知る者はいない。陸と海にあるものをすべて知っている。かの御方に知られずに落ちる葉は一枚もなく、大地の暗闇の中にある穀物の一粒も、潤っているのか枯れているのか、明らかな書の中に記されていないものはない。[23]

60 かの御方は、夜にあなたがた［の魂］を召し寄せ、昼のあなたがたが何をしていたのかを知り、またあなたがたをその中によみがえらせ、定められた期限をまっとうさせる。そののち、あなたがたの帰りゆく先はかの御方にある。かの御方はあなたがたに、あなたがたの行ってきたことについて告げ報せるだろう。

61 かの御方は、しもべたちの上におわす至高者。あなたがたの上に守護者を遣わし、またあなたがたのうち誰かに死が訪れるとき、われらの使者たちは怠りなくその者を召し連れてゆく。

62 そののち彼らは、真の庇護者であるアッラーへ連れ戻される。まぎれもなく、判断はこの御方にあるのではないか。たちまちにして清算する御方。

63 言いなさい。「あなたがたが謙虚に、またひそかに『もし私たちが救われたなら、必ず感謝する者のひとりとなります』と呼びかけたなら、陸と海の暗闇からあなたがたを救うのは誰なのか」。

64 言いなさい。「アッラーはそこからも、またすべての苦悩からもあなたがたを救う。それでもあなたがたは、何ものかをこの御方と同列に連ねる」。

65 言いなさい。「かの御方は、あなたがたの頭上からも、あるいは足下からもあなたがたに懲罰を送ることができる。あるいはあなたがたを分派にして混乱させ、互いに相手の暴力を味わわせることもできる。見なさい、どのようにわれらがしるしを解き明かすか。彼らも、理解するようになるだろう」。[24]

66 ［ムハンマドよ、］それが真理であるというのに、あなたの民は嘘であるとした。言いなさい。「私は、あなたがたの保護者ではない」。[25]





67 すべての預言には、それぞれ一定の期限がある。あなたがたも、やがて知るだろう。

68 そしてわれらのしるしについて、うわさ話に興じる者を目にしたなら、それ以外の話に入るまで、彼らから立ち去りなさい。そしてもし悪魔があなたに忘れさせたとしても、思い出した後になって不正をなす民と席を共にしてはならない。[26]

69 畏れる者は、彼らの清算について何ひとつ負っていない。しかし、これは戒め。彼らも、畏れる者となるだろう。[27]

70 自分の宗教をもてあそび、軽んじる者や、現世の生に欺かれている者のことは放っておきなさい。人は自分の得てきたものによって破滅することもあるのだと、これ［クルアーン］によって想い起こさせなさい。アッラーの他に、庇護者も、とりなす者もない。たとえすべての代償を差し出しても、受け取ってもらえないだろう。これらの者こそ、自分の得てきたものによって破滅する者。［真理を］拒んでいたために、彼らは煮えたぎるものを飲まされ、痛烈な懲罰を科されるだろう。[28]

71 言いなさい。「アッラーをさし置いて、私たちの害にも益にもならないものに呼びかけるべきだろうか。アッラーに導かれた後になって、踵を返すべきだろうか。『こちらへ来なさい』と、導きの方へ呼び招いてくれる仲間がありながら、悪魔にそそのかされ、地上で混乱している者のようにか」。言いなさい。「アッラーの導きこそが、導きというもの。そして私たちは、諸世界の主に身をあずけるよう命じられている、[29]

72 礼拝のつとめを守り、畏れるようにとも。あなたがたを、御自らに召し集める御方」。

73 諸天と大地を、真理によって創造した御方。その日、かの御方が「在れ」と告げればそれは在る。その御言葉は真理である。喇叭が吹き鳴らされるその日、王権はかの御方に属する。目には見えないものと

見えるものとを知る御方。賢明な御方、熟知している御方。[30]

74 またイブラーヒームが、その父アーザルにこう言ったときのこと「を思いなさい」。「あなたは、立像を「崇めるべき」神々として選ぶのですか。本当に私には、あなたもあなたの民も明らかな迷いの中にあると見えます」。[31]

75 このように、われらはイブラーヒームに諸天と大地の王国「の真相」を見せた、彼が確信する者のひとりとなるように。[32]

76 夜のとばりが彼を覆うと、彼はひとつの星を見て、「これぞ私の主」と言った。しかしそれが沈むと、彼は言った。「私は、沈むものを愛さない」。

77 それから、彼は月が昇るのを見て、「これぞ私の主」と言った。しかしそれが沈むと、彼は言った。「もし主が私を導いてくれないなら、私は、きっとさまよえる民のひとりとなっていただろう」。

78 それから、彼は太陽が昇るのを見て、「これぞ私の主。これぞ至大なもの」と言った。しかしそれが沈むと、彼は言った。「私の民よ。私は、あなたがたが同列に連ねているものとは何の関わりもない。

79 私は純正な者として、諸天と大地を創始した御方に顔を向けよう。私は、多神を奉ずる者のひとりではない」。[33]

80 彼の民は、彼と口論した。彼は言った。「あなたがたはアッラーについて私と口論するのか。かの御方は、すでに私を導いた。私は、あなたがたがかの御方と同列に連ねているものを恐れない、私の主が何ごとかを望むのでもない限りは。私の主は、あらゆるものごとをその知に網羅する。それでもあなたがたは、いまだ憶えておこうとしないのか。

81 どうして私が、あなたがたが同列に連ねているものを恐れるだろうか。あなたがたこそ、アッラーがあ





なたがたに何の権威も下していないものを、その同列に連ねて恐れもしないというのにか。それで両派のうち、安心していられる権利があるのはどちらの側か。「答えてみなさい、」もしあなたがたが、知っているのなら。[34]

82 自らの信仰に、不正を混ぜることなく信じる者たち。これらの者のために安心はあり、彼らは「正しく」導かれている」。[35]

83 これがわれらの論拠であり、イブラーヒームがその民と対峙するために与えたもの。われらは、われらがそうと望む者の位階を高める。本当にあなたの主は賢明であり、すべてを知る。[36]

84 またわれらは、彼「イブラーヒーム」にイスハークとヤアクーブを授け、彼らをそれぞれに導いた。また以前にはヌーフも導いた。また彼の子孫の中には、「われらが導いた」ダーウード、スライマーン、アイユーブ、ユースフ、ムーサー、ハールーンもいる。このように、われらは行いの善良な者に報いる。

85 またザカリーヤー、ヤフヤー、イーサー、イルヤースも「導いた」。彼らはそれぞれが正しい者だった。

86 またイスマーイール、アル＝ヤサウ、ユーヌス、ルートも「導いた」。われらは、万人の誰にもまさって彼らのそれぞれに恵んだ。[37]

87 また彼らの先祖と子孫と兄弟のうち、われらはある者たちを選び、まっすぐな道へ導いた。

88 これがアッラーの導き。しもべたちのうち、御心にかなう者を導く。しかし、もし彼らが何ものかを同列に連ねるなら、彼らの行いは無に帰されるだろう。

89 これらの者は、われらが、啓典と、知恵と、預言者の資質とを与えた者たち。しかし、もしこれら「の真理」を拒むなら、われらはこれら「の真理」を拒むことのない民に委ねるだろう。

90 これらの者は、アッラーに導かれている者たち。それゆえ彼らの導きに倣いなさい。「ムハンマドよ、」

言いなさい。「私はあなたがたに、これに対する報酬を求めない。これは、ただ諸世界への戒めに他ならない」。[38]

91 「アッラーは、人には何ひとつ下さなかった」と言うときの彼らは、アッラーの真価を見極められずにいる。言いなさい。「ムーサーが人々の光として、また導きとしてもたらした啓典を下したのは誰なのか。あなたがたはそれを紙片にして明かすが、その多くを押し隠している。あなたがたも、あなたがたの祖先も知らなかったことを教わっているのに」。言いなさい。「アッラーである」。そののちは彼らを放っておき、無駄話や遊びごとに興じさせておきなさい。[39]

92 これもまた、われらが下した祝福の啓典。これ以前のものの確認であり、またあなたが、諸々の町の母と、その周辺に警告するためのもの。来世を信じる者はこれを信じ、また彼らの礼拝をも守るだろう。[40]

93 アッラーについて嘘いつわりをねつ造する者、あるいは何ひとつ啓示されていないのに、「私に啓示があった」と言う者、あるいは「私は、アッラーが下したのと同じようなものを下せる」と言う者よりも、不正な者があるだろうか。死に際の苦悶の中にいる不正をなす者たちに、天使たちが手を伸ばし、「魂を手放せ。この日、あなたがたは恥辱の懲罰をもって報いられる。アッラーについて真理以外のことを言い、御しるしに対して高慢にふるまっていたがゆえに」と告げるときのことを、あなたが見ることができたなら。[41]

94 「あなたがたは、われらがあなたがたに持たせたものは何であれ後に残し、われらが最初にあなたがたを創造したとおりのままに、ひとりずつわれらのところへやって来た。あなたがたが自分たちのあいだで［主の］同輩だと主張していた『とりなす者』たちが、あなたがたと共にいるとは見えないが。すでにあなたがたの仲は断ち切られ、あなたがたが主張していたものも失われたのだ」。[42]





95 ［発芽のために］穀粒や種子を裂くのはアッラーである。死せるものの中から生けるものを連れ出し、また生けるものの中から死せるものを連れゆく。アッラーとはこのような御方。それなのに、どうしてあなたがたは惑わされるのか。[43]

96 暁を裂き、夜を憩いのために、太陽と月とを計算のもとに置いた御方。それが、威力ならびなくすべてを知る御方の計らい。[44]

97 また、あなたがたが、陸と海の暗闇の中でも導かれるようにと、あなたがたのために諸々の星を置いた御方。まさしくこのようにわれらは、知っている民にしるしを解き明かす。[45]

98 あなたがたを一個の魂から生じさせた御方、それからその居どころと預けどころも。このようにわれらは、理解する民にしるしを解き明かす。

99 空から雨を降らせる御方。それにより、ありとあらゆる植物を芽吹かせる。そこからわれらは緑［の葉］を生じさせ、また重なり合う穀物をみのらせる。なつめやしの花芯からは、たわわな房が垂れ下がる。またぶどう、オリーヴ、ざくろの果樹園を、似ているものも、似ていないものも。それらの果実を見なさい、どのように実を結び、またどのように熟すかを。本当にその中には、信じる民への御しるしがある。

100 ところが彼らは、ジンをアッラーの同輩とする。それらは、かの御方に創造されたものだというのに。また知識もないのに、かの御方には息子や娘があるなどとねつ造する。御方に讃美あれ。彼らが述べていることを超越して、いと高くにおわす。

101 諸天と大地の創始者、伴う者もなき御方が、どうして子をなすだろうか。ありとあらゆるものを創造する、ありとあらゆるものごとを知る御方。

102 これがアッラー、あなたがたの主。この御方をおいて神はない、ありとあらゆるものの創造主。それゆ

えこの御方に仕えなさい、あらゆるものごとを執りしきる御方に。

103 視覚では、かの御方を捉えられない。しかし、かの御方は視覚そのものを捉える。細やかな御方、熟知する御方。[46]

104 あなたがたの主から、まさしく開明が到来した。それゆえ、目を開くなら自身のためになり、また目を閉ざすなら、自身のためにならない。そして私は、あなたがたの保護者ではない。[47]

105 このように、われらはしるしを解き明かす。それは彼らに「あなたはよく学んだ」と言わせるためであり、また知識ある民に、これを明白にするため。

106 あなたの主から啓示されたことに従いなさい。この御方の他に、いかなる神もない。そして多神を奉ずる者から距離を置きなさい。

107 もしアッラーがそうと望めば、彼らが多神を奉ずることもなかっただろう。われらはあなたを、彼らの守護者に任じておらず、またあなたは、彼らの保護者ではない。[48]

108 彼らがアッラーをさし置いて呼びかけているものを罵ってはならない。さもないと、彼らは知りもせずに敵意をつのらせ、アッラーを罵るだろう。このようにわれらはすべての共同体を、それぞれすばらしいもののように見せた。そののち、彼らの帰りゆく先は彼らの主にある。かの御方は彼らに、彼らの行ってきたことについて告げ報せるだろう。[49]

109 彼らは、アッラーにかけて、もし自分たちに御しるしが到来したなら必ず信じるだろう、と、つとめて誓う。言いなさい。「御しるしは、ただ神の御許にあるのみ。しかし、たとえ御しるしが到来しても、彼らは信じないだろうことを、どのようにしてあなたがたに気づかせようか。

110 これを信じようとしなかった最初のときのように、われらは、彼らの心も目も逸らさせる。そしてわれ





らは、彼らがその逸脱の中を、あてもなくさまようままにさせておく。

111 たとえわれらが、天使たちを彼らに送り、死者が彼らに語りかけるようにし、またありとあらゆるものを彼らの前に寄せ集めたとしても、アッラーがそうと望まない限り、彼らは信じるようにはならないだろう。しかし、彼らの多くはそのことに無知である。[50]

112 このようにわれらは、すべての預言者にそれぞれの敵をもたせた。それは人間とジンの中にいる悪魔であり、お互いに相手をけしかけ合い、飾られた言葉で欺いている。もしあなたの主がそうと望んでいたなら、彼らもそうはしなかっただろう。それゆえ彼らも、彼らのねつ造するものも放っておきなさい、[51]

113 来世を信じない者の心をそちらに傾かせ、喜ばせ、何であれ彼らの続けたいように続けさせておくために。[52]

114 [言いなさい、]「アッラーの他に、どうして私が判断を求めるだろうか。あなたがたに、解き明かしの啓典を下した御方」。われらが啓典を与えた者は、これがあなたの主から真理によって下されたことを知っている。それゆえあなたは、疑う者のひとりになってはならない。[53]

115 あなたの主の御言葉は、真実と公正においてまっとうされた。何ものにもその御言葉を変えることはできない。すべてを聞く御方、すべてを知る御方。

116 もしあなたが、地上にいる多数の者に従うなら、彼らはあなたをアッラーの道から迷わせるだろう。彼らは空想に耽っているだけ。彼らは、ただ憶測しているに過ぎない。[54]

117 本当に、あなたの主は、その道から迷う者についてもっともよく知っている。また導かれた者についても、もっともよく知っている。

118 それゆえアッラーの御名が唱えられたものを食べなさい、もしあなたがたが、御しるしを信じているのなら。[55]

119 どうしてあなたがたは、アッラーの御名が唱えられたものを食べないのか。やむを得ない場合を除いてあなたがたに禁じられているものについては、アッラーはすでに解き明かしている。しかし多くの者が知識もないのに、自分の気まぐれから［他者を］迷わせている。本当にあなたの主は、法外の者についてもっともよく知っている。[56]

120 それゆえ外側にある、また内側にある諸々(もろもろ)の罪を捨ておきなさい。罪をはたらく者は、その犯してきたことに応じて報いられるだろう。[57]

121 あなたがたは、アッラーの御名が唱えられていないものを食べてはならない。本当に、それは背くことになる。悪魔たちは、［自分たちの］友人をけしかけて、あなたと言い争わせようとする。しかし、もし彼らに従うなら、本当にあなたがたは多神を奉ずる者になってしまう。[58]

122 ［霊的に］死んでいたのをわれらが生かし、光をあらしめたことにより人々の中を歩くようになった者と、暗闇の中にいて、そこから出て来ない者が同じであろうか。このように、［真理］を拒む者には自分の行いがすばらしいもののように見えている。[59]

123 またこのように、われらはそれぞれの町に、主だった罪ある者をそろえておき、そこで謀(はか)りごとをさせておく。彼らは、自分でも気づかないうちに、ただ自分自身に対して謀(はか)りごとをしているだけ。

124 そして彼らに御しるしがひとつ到来するとき、彼らは言う。「アッラーの使徒たちに与えられたのと同じようなものが、私たちに与えられるまでは決して信じない」。預言をどこに［、また誰に］置くべきか、アッラーがもっともよく知っていること。罪を犯す者たちは、その謀(はか)りごとのためにアッラーの御許においてさげすまれ、厳重な懲罰に襲われるだろう。

125 アッラーは、導こうと望む者はその胸をイスラームのために広げる。迷わせようと望む者はその胸を狭め、





まるで天にのぼってゆくかのように締めつける。このように、アッラーは信じない者に汚辱を加える。[60]

126 これが、あなたの主のまっすぐな道。すでにわれらは、憶える民にしるしを解き明かした。

127 彼らには、主の御許に平安の館がある。彼らの行ってきたことのために、かの御方は彼らの庇護者となるだろう。

128 その日、かの御方は彼らをことごとく集める。「ジンの会衆よ。あなたがたは、多くの人間を利用した」。すると人間のうち、彼ら［ジン］の近しい友が言う。「主よ、私たちは互いに相手を利用し合っていましたが、とうとうあなたが私たちに定めた期限に至りました」。かの御方は告げる。「あなたがたの居どころは業火であり、アッラーが何ごとかを望む場合を別として、永遠にその中に住むだろう」。本当に、あなたの主は賢明であり、すべてを知る。[61]

129 このようにわれらは、不正をなす者が、彼らが得てきたことのために互いに味方し合うようにする。[62]

130 「ジンと人間の会衆よ。あなたがたの中から使徒たちが到来し、あなたがたにわれのしるしを語り、あなたがたの会するこの日について、警告したのではなかったか」。彼らは言うだろう、「私たちは、自分のことについて証言せざるを得ません」。現世の生は彼らを欺(あざむ)いた。それゆえ彼らは、自分が［真理を］拒む者であったことを自分で証言することになる。[63]

131 これはあなたの主が、不正をなす諸々(もろもろ)の町を、住民が顧(かえり)みる間もないうちに滅ぼすことはしないため。

132 すべての者に、それぞれその行いに応じた位階がある。あなたの主は、彼ら［人間］の行いに無頓着ではない。[64]

133 あなたの主は満ち足りた御方、慈悲の所有者。もしそうと望めば、かの御方はあなたがたを廃して、他の民の子孫からあなたがたを興したように、御心にかなう者に後を継がせることもできる。

134 あなたがたに約束されていることは、必ず来る。あなたがたには、逃れることはできない。[65]

135 「ムハンマドよ、」言いなさい。「私の民よ。あなたがたのできることを行いなさい。私も「私にできることを」行う。やがてあなたがたも、最後の館を得るのは誰なのかを知るだろう。本当に、不正をなす者は栄えない」。[66]

136 彼らは、アッラーが増やした作物と家畜から一部を取り分け、自分たちの主張するにまかせて「これはアッラーのために」、また「これは『「主の」同輩』のために」と言う。しかし、彼らの「同輩」に供えられたものはアッラーには届かず、アッラーに備えられたものは彼らの「同輩」に届く。彼らの判断の、なんという悪さか。[67]

137 このように彼らの「同輩」は、多神を奉ずる者の多くに、その子どもたちを殺すことさえすばらしいことのように見せた。それは彼らを凋落させるため、また彼らを、その宗教において混乱させるため。もしアッラーがそうと望んでいたなら、彼らもそうはしなかっただろう。それゆえ彼らも、そのねつ造するものも放っておきなさい。

138 また彼らは、自分たちの主張するにまかせて「これらの家畜と作物は禁じられている。私たちが望まない限り、誰も食べてはならない」と言う。また、「これらはその背が禁じられている家畜、これらはアッラーの御名を唱えてはならない家畜」と、御方に対してねつ造する。彼らがねつ造してきたことについて、かの御方はいずれ報いるだろう。[68]

139 また彼らは、「これらの家畜の下腹にあるものは、私たち男のためだけにあり、女には禁じられている。しかし死産の場合は、皆で分かち合う」と言う。彼らが述べてきたことについて、かの御方はいずれ報いるだろう。本当に、かの御方はもっとも賢明であり、すべてを知る。[69]





140 知識もなく、愚かにもその子どもを殺し、アッラーが糧としたものを禁じ、アッラーに対してねつ造する者。彼らはまさしく迷っており、導かれてもいない。[70]

141 庭園を、手入れされたものもそうでないものも造りだす御方。またなつめやし、様々な味をもつ穀物、オリーヴ、ざくろ、同じようなものも、異なるものも。みのったときにそのみのりを食べ、また収穫の日には支払うべきものを支払いなさい。浪費してはならない。アッラーは浪費する者を愛さない。[71]

142 また家畜には、「荷を」運ぶものと「毛を刈って」まとうものがある。アッラーがあなたがたの糧とした、諸々の良いものを食べなさい。そして悪魔の足取りをたどってはならない。本当に彼は、あなたがたにとり公然の敵。[72]

143 羊のつがいと、山羊のつがいからなる八頭のつがい。言いなさい。「かの御方は雄の二頭を禁じたのか。あるいは雌の二頭か、あるいはその子宮にあるものをか。知識をもってしらせてみなさい、もしあなたがたが、真実を語っているのなら」。[73]

144 また二頭の駱駝と、二頭の牛。言いなさい。「かの御方は雄の二頭を禁じたのか。あるいは雌の二頭か、あるいはその子宮にあるものをか。あるいはアッラーがこれを指図したとき、あなたがたは立ち会ったのか」。人々を迷わせようとして、知識もなくアッラーについて嘘いつわりをねつ造するよりも不正な者があるだろうか。本当にアッラーは、不正をなす民を導かない。

145 言いなさい。「私に啓示されたものには、屍体、こぼれた血、嫌悪すべき豚の肉、あるいはアッラー以外に捧げられた違背のものを除いて、食べる者が食べることを禁止されているものは何ひとつ見出せない」。しかし、欲したのでもなく度を越したのでもなく、やむを得ずのことなら、本当にあなたの主はもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。[74]

146 ユダヤ教徒に対しては、われらはすべての蹄のあるものを禁じた。また牛と羊のうち、背と腸に付いているもの、骨と混じっているものを除いては、その脂も禁じた。これは彼らの反逆に対する報い。本当に、われらは真実を語る。[75]

147 もし彼らが、あなた［ムハンマド］を嘘であるというなら、言いなさい。「あなたがたの主は、尽きることのない慈悲の所有者。しかし罪を犯す民は、かの御方の威を避けられない」。[76]

148 ［主に］何ものかを同列に連ねる者は言うだろう。「もしアッラーがそうと望めば、私たちも私たちの先祖も、［主に］何ものかを同列に連ねることなく、また何かを禁じたりすることもなかっただろうに」。われらの威を味わうまでは、彼ら以前の者たちも同じように嘘であるとしていた。言いなさい。「あなたがたのところには、なんらかの［確かな］知識があるとでもいうのか。それなら、それを私たちに出してみなさい。あなたがたは空想に従っているだけ。あなたがたは、ただ憶測しているに過ぎない」。[77]

149 言いなさい。「究極の論拠はアッラーに属する。もし御心があれば、あなたがたをことごとく導いていただろう」。[78]

150 言いなさい。「アッラーがこれらを禁じたと証言できる、あなたがたの証言者を出しなさい」。たとえ彼らが証言しても、彼らと共に証言してはならない。われらのしるしを嘘であるとし、来世を信じず、何ものかを彼らの主と同位におく者の欲求に従ってはならない。[79]

151 言いなさい。「来なさい。あなたがたの主が、あなたがたに禁じたことについて読み聞かせよう。この御方に何ものかを同列に連ねてはならない。両親には良くしなさい。貧しいからといって、あなたがたの子どもを殺してはならない。われらはあなたがたにも、また彼らにも糧をもたらそう。現されるか否かによらず、不品行に近づいてはならない。アッラーが禁制のものとした生命を、正当な理由によらずし





て殺害してはならない。この御方があなたがたに命じているのは、このようなこと。あなたがたも、考えるようになるだろう。

152 もっともすぐれたことのためでない限り、孤児が成人に達するまではその財に近づいてはならない。正道に立ち、升と秤を十分に満たしなさい。われらはどの者にも、その能力以上のことは負わせない。そして話すときは、たとえ親族に対してであっても公正でありなさい。アッラーとの契約を果たしなさい。この御方があなたがたに指図しているのは、このようなこと。あなたがたも、憶えておくようになるだろう。

153 また本当に、これがわれのまっすぐな道。それゆえ、これに従いなさい。他の諸々の道に従ってはならない。さもないとあなたがたは、この道から離ればなれになるだろう。この御方があなたがたに指図しているのは、このようなこと。あなたがたも、畏れる者となるだろう」。

154 そののち、われらはムーサーに啓典を与えた。それは行いの善良な者にとり全きもの、ありとあらゆるものの解き明かし、導き、慈悲。彼らも、彼らの主と会することを信じるようになるだろう。

155 そしてこれは、われらが下した祝福の啓典。それゆえこれに従い、畏れなさい。あなたがたは慈悲にあずかるだろう。

156 「啓典が下されたのは、私たち以前のただ二つの派のみ。そして私たちは、彼らの学んでいるものについては関心がなかった」などと、あなたがたが言うことのないように。[80]

157 あるいは「もし私たちに啓典が下されていたなら、きっと彼らよりもよく導かれていただろうに」などと、あなたがたが言うことのないように。すでにあなたがたの主の御許から、明白な証と、導きと、慈悲とがもたらされた。それでもアッラーの御しるしを嘘であるとし、それらから背き去るよりも不正な者が

あるだろうか。われらのしるしから背き去る者には、われらは厳しい懲罰をもって背き去ったことに報いるだろう。

158 彼らは、彼らのところへ天使たちが来るのを待っているのか。あるいはあなたの主の［懲罰の命令の］到来をか。あるいはあなたの主の、なんらかの御しるしの到来をか。以前から信じていたのでも、信じて善を得てきたのでもない限り、あなたの主から、なんらかの御しるしが到来する日に信じても、その者には何の益ももたらされない。言いなさい。「あなたがたは［結末を］待ちなさい。本当に私たちも、待っている」。[81]

159 宗教を分裂させ、分派した者たちに、あなたは何ひとつ関わりがない。彼らのことは、アッラーに託される。かの御方は彼らに、その行ってきたことを告げ報せるだろう。[82]

160 善事をもって来る者には、それと同じようなものが十倍にされる。悪事をもって来る者は、それと同じようなもので報いられるだけ。彼らが、不正に扱われることはない。

161 言いなさい。「本当に私の主は、私をまっすぐな道に、もっとも正しい宗教に、純正な人イブラーヒームの宗旨に導いた。彼は、多神を奉ずる者ではなかった」。

162 言いなさい。「本当に、私の礼拝も、私の奉仕も、私の生も、私の死も、諸世界を統べる主アッラーのためにある。[83]

163 かの御方と同列に連なるものはない。これが私に命じられたこと。私は、ムスリムの先頭に立つ者である」。

164 言いなさい。「どうして私が、アッラー以外の主を求めるだろうか。かの御方こそはありとあらゆるものの主。どの者も、それぞれ自分の得たもののみを負う。また荷を負う者は、他者の荷を負わない。あなたがたの帰りゆく先はあなたがたの主にある。そののち、あなたがたの間で相争っていたことについて、





かの御方はあなたがたに告げ報せるだろう」。

165 あなたがたをして地上を継ぐ者とし、またあなたがたのうちある者の位階を、他の者よりも高める御方。これはあなたがたに与えたものにより、あなたがたを試みるため。本当にあなたの主は応報に迅速であり、またもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。

1 ここでの「真理」とは、クルアーンと、預言者に授けられたその他の奇跡を指している。

2 クルアーンは大天使ジブリールを媒介として、あるいはその他の方法を通じて預言者に啓示された。いずれの場合においても、啓示は書面によってではなく、いわば口頭での伝授と記憶を通して明らかにされた。「真理」の排斥者はこれを受け入れず、書面に記されたメッセージを見せるよう求めた。全能の神はここで人類に対し、たとえ書面に記されたメッセージが下されようと、拒否する者は拒否するだろうと告げている。

3 天使とは天上の存在であり、神の無限の力によって創造された、神の栄光の顕現であり、物質的身体を生きる人間には見ることもできない存在である。人間には、神への悔悟に立ち返り、神の光にふさわしい者となるための猶予が十分に与えられている。天使を遣わすよう願い出るのは、人間のためにならない。光が闇を切り裂くように、人間も闇の一部として光たる天使に切り裂かれてしまうだろう。

4 たとえ預言者が天使の姿で現れたとしても、彼らは「あなたは私たちと同様の人間に過ぎない」と言い、信じようとはしなかっただろう。人間に遣わされる預言者には人間の姿で到来することがふさわしく、さもないとすでに混乱している霊的生活のとらえ方について、ますます混乱させるだけである。

5 ローマの皇帝ティトゥスがエルサレムを破壊したとき、かつてイーサーを嘲笑していた者たちはどこで何をしていただろうか。預言者ムハンマドを嘲笑し、マッカから追放した者たちは、のちに彼がマッカを征服したときには彼に慈悲を乞うた。そしてムハンマドも、求めに応じて平安と慈悲を与えたのである。

6 マッカの人々は預言者を、彼の預言者性を証明する者が誰もいないとして非難した。するとこの節が啓示された。

7 「わが子を見分けるかのようにそれを見分ける」。すなわち、あらゆる真正な諸聖典が強調する神の超越的な自存性と唯一性という真実を見分けるという意味。解説者の一部は、ここでの「それ」という代名詞が指すのは「彼」、すなわち神の使徒ムハンマドであるとしている。

8 ここで「申し立て」と訳されている「フィトナ」は、元々は「挑む」「試す」「そそのかす」といった意味の語である。ここから拡大して扇動、内乱や騒乱を指すのに用いられる。またこの節のように、審問に対する虚偽の発言や、論争のための釈明や申し開きを示すこともある。

9 霊的に目や耳を塞がれる状況をもたらすのも神である。二章七節も参照。

10 預言者ムハンマドに敵対していたアブー・ジャフルは、次のように語った。「われわれは、あなたが嘘をついていると言っているのではない。あなたが正直で信頼できる者であることについてはまったく疑っていない。われわれはただ、啓示を信じていないというだけのことだ」。預言者はアブー・ジャフルの言葉に悲しんだ。すると主は、彼を慰撫するためにこの節を啓示した。

11 この節から分かるとおり、奇跡を起こすことは預言者の能力の範囲外である。預言者が奇跡を求め、主がそうと望めば、それに応じて預言者に授けられる。自然の諸法則を覆す能力は、諸法則を定めた主にのみ属する。

12 すべての生きものは、私たち人間と同様に社会的・個人的な生を営んでいる。そしてすべての生は神の計画に従っている。五九節では、神の意志なくして落ちる葉は一枚もなく、また枯れるも育つも神の書の中に記録されていると説き明かさ





れている。言い換えるなら、それらはすべて神の根源的な計画に従っており、万事はここで言及されている「啓典」に記されている通りなのである。

13 神は預言者ムハンマド以前にも多くの預言者たちを様々な民に遣わしたが、民の一部は彼らを拒絶した。そのため神は、あらゆる種類の災厄をもって彼らを罰した。

14 自分と世界の内なる真理を学ぶことは、感性と霊的な成長の過程において、すでに一定の高度な段階に達していることがその前提となる。より浅い段階では、日常における幸運や幸福といったことから、一種の共鳴や交感を学ぶこともあるだろう。そうした機会を通して啓示のメッセージが根づくこともある。しかし幸福によって虚栄や傲慢に陥る者もある。その場合、幸福とは試練であり、あるいは懲罰でもある。そうした者は何かしらの転機に恵まれない限りますます罪深くなり、最後には悔悟の機会を得る代わりに絶望を味わうのである。

15 彼らは神に感謝する代わりに、神に従わず過ちを犯した。そこで創造主は彼らを滅ぼした。主たる神は正当な報復者であり、自らの正しいしもべに対しては、悪の仲間にするように苦しみを味わわせたりはしない。

16 「突然に」とは、気づかぬうちに、何の予告も警告なしに、といった意味である。「公然と」とは、多くの事前の警告と共にという意味であり、たとえ聞く耳を持たなかろうと、罪人もその対象に含まれる。神の正義としての懲罰が到来するとき、それは道を誤っていた者にもたらされるのであって、道を正しく歩んでいた者に影響することはない。

17 偶像崇拝者たちは預言者ムハンマドにこう言った。「もしもあなたが本当に神の使徒ならば、あなたの主に、私たちに祝福を注いでくれるよう伝えよ。そうすれば私たちも、あなたを信じられるだろうから。さもなければ、私たちは信じない」。預言者の使命とは、現世的な祝福をもって人間を富ませることではなく、永遠のメッセージを人間に伝えることにある。彼らの思い違いを正すために、この節が啓示された。

18 クライシュ族の中でも裕福で影響力のある者たちの中には、預言者の教えを聞くのに、彼の周囲に集まる貧しい信仰者

たちの一群と同席するのは、自分たちの尊厳にかかわると考える者もいた。そうした者たちの要望があって、預言者は彼らを追い払うことを考えたが、その考えを改めさせるためにこの節が啓示された。彼ら貧しい弟子たちは、誠実な神の探求者だったからである。

19 たとえ社会的地位が高かろうと、裕福であろうと、貧しい信仰者たちと平等に扱われることに腹をたてるのは筋が通らない。神の目には、信仰と敬神といった内面のあり方を除いて、被造物の間には何の隔たりもないのである。人々はこのように神の正義によって試され、欠けているものがあることを露呈させられる者もいた。

20 「あなたがたに平安あれ」。イスラームの傘の下に逃れ、イスラームを信仰する者には、神の特別な恩寵による慈悲が約束される。

21 神を否定する者は、彼らが預言者を嘲笑したことに対する懲罰を急ぐよう挑発したが、預言者は、「懲罰は神の御心次第であり、私の定めることではない」と述べるよう命じられた。

22 預言者に、マッカの偶像崇拝者たちに対して以下の四点を伝えるよう教えが下された。（1）私は光を受け取り、それに従う。（2）私は、あなたがたの空想や欲望よりも私の光を好む。（3）あなたがたの「もしも唯一の神がいるなら、なぜ神は冒涜者を一斉に滅ぼしてしまわないのか」という挑発に対しては、懲罰は神の御心次第であり、私が定めることではないというのがその答えである。（4）もしも懲罰が私の一存次第なら、あなたがたの挑発に乗ることもできているかもしれない。しかし私が知っているのは、神は愚かな行為や邪悪の存在をよくご存知であるということ。またそれ以外にも、人間には計り知れないことも知っている。あなたがたには、神の計画をかいま見ることすらできない。しかしそれができていたなら、神はあなたがたに対し、その行いについて申し開きさせることを躊躇しないことが、あなたがたにも確信できただろう。

23 巨大な宇宙の広がりにおけるすべての流転と静寂を、全知の神はその創造以前から完全に把握している。それが自然界





に対する神の摂理なら、神が人間に関心を払わない理由があるだろうか。

24 即座に懲罰が下されずに済んでいるのは、ひとえに神の恩恵によるものである。過去においても、こうした罪を重ねた町々は完全に滅ぼされている。

25 人々に想起のきっかけを伝えることが預言者の仕事であり、受け入れるよう強制することではない、という意味である。

26 マッカにいた間、信仰者たちは応戦の許可を与えられていなかった。偶像崇拝者たちはこの状況を利用し、信仰者や、神から下された一連の啓示を嘲笑した。そのため神は、預言者に彼らとの交際を断つよう命じた。この啓示は、当初は預言者にのみ下された限定的なものではあったが、その含意は、涜神的で邪悪な者たちに囲まれており、立ち向かうのに十分な力を持たない環境にあるすべてのムスリムにも当てはまる助言だろう。

27 「しかし、これは戒め」。まっすぐな道をゆく者には、二つの義務が課されている。（1）感化されないよう自らを守ること。（2）どれほど無理なように思える状況であっても、神の真理を明白に伝えること。それにより、何らかの影響を与えうるかもしれないからである。

28 「自分の宗教をもてあそび、軽んじる」という文言は、（1）人生において主要な目的である宗教それ自体を遊興や娯楽の対象にしたか、あるいは（2）宗教をかえりみず遊戯と娯楽にふけっていた、というふたつの意味のいずれかに理解できる。現世における誘惑（金銭、権力など）は、人生における霊的ないし道徳的な価値の探求の妨げとなることもある。

29 真の唯一の神を主として受け入れていながら、再び多神の崇拝に後戻りしたときに、魂に生じる内なる混乱を表している。混乱と困惑のため心は荒れ果て、悪魔に捕らえられてさらに遠くの荒野に引きずり出される。それでも、真実かつ唯一の導きへ戻るよう、預言者たち、聖者たちの呼び声が届く。知性があり、悪魔たちと戦う強さを持つ人なら、その呼びかけに応じて預言者たちの道に戻り、最後には、自分が何よりも望んでいた平安と安寧を成就するだろう。

30 ここで言及されている「喇叭」とは、光でできた角笛のようでもあり、大天使イスラーフィールが世界の終末を知らせ

る合図に用いる。そのとき、彼は二度これを吹き鳴らす。一度めに、地上のすべての生きものは死に絶え、ただ真の唯一の神のみが残る。それから二度め、彼が再びこれを吹き鳴らすと、死に絶えた生きものがよみがえり、裁きを待つことになる。

31 イブラーヒームは、イラク北部の古代カルデアの民の中に預言者として遣わされた。父とその民とが偶像を崇拝するのを見て、人間の手で造られた不動の彫像が神であるはずも、また神を代弁するはずもないことを確信していたイブラーヒームは、彼らを激しく非難した。

32 「王国」と訳した「マラクート」という語は、外的な創造の裏側にあるリアリティを意味する。神は彼に、物質界の動力と諸法則の基礎をなす霊的な光を指し示したのである。

33 「ハニーフ」という語を、ここでは「純正な者」と訳した。神から下される宗教については知らなくとも、神は唯一であることを認識している人を表している。ここでのイブラーヒームの一連の行為が、唯一の真の神を探し求めてのことであるのか、あるいは彼にとり、天体を崇拝するのはそもそも不本意であったことが修辞的に表現されているのかについては、クルアーンの解釈者や翻訳者の間でも意見の分かれるところである。より受け入れられているのは後者の意見のように見受けられる。

34 ここで言及されている「両派」とは、(1) 唯一の全能の神を認める人々、(2) 複数の神々を崇拝し、偶像を崇拝する人々である。どちらの人々の方が、地獄の業火からの神の加護にふさわしいだろうか。その答えが、次の節を通して与えられる。

35 ここでの「不正」とは、神以外のものを、神と同列に並べることを指している。

36 ここでの「議論」とは、知恵、知識、尊厳、あるいはものごとを観察し、比較検討した上で結論を導き出す能力とも訳せるものである。





37 これらの預言者が何を恩恵として授かったかについては八九節で説き明かされている。一部の預言者は啓示を授かるのみであった。その他に、政治的、法的な権威を授かる者もあった。

38 前後の節も考慮して解釈するなら、預言者ムハンマドは以前の預言者たちによって教えられたメッセージを、再び人類に思い起こさせるという使命のもとに遣わされたということになる。

39 この節は、啓示の書を神聖なものとして口では褒め称えるものの、現実にはそれを「単なる紙の束」として — すなわち彼ら自身の実際のふるまいに反映させるべき実践的な書としてではなく、彼らとは隔離されたものであるかのように、「保存」することに意義があるかのように — 扱う信奉者たちに向けられている。彼らは啓示の書に含まれる真理を尊重しているかのようにふるまいつつ、彼ら自身の生活の中には真理が一切含まれていないという事実には目を背けている。

40 マッカは、人類最初のモスクの周囲に築かれた町であり、イスラームの精神的中心である。三つの大陸の軸に位置するその町は、全世界の中心である。そのため、マッカの呼び名のひとつに「諸都市の母」がある。

41 この節は、預言者の成功を目の当たりにし、自らも預言者であると主張したムサイリマ・アル＝カッザーブとアル＝アスワド・アル＝アンスィーへの非難として啓示されたといわれる。彼らはどちらも悲惨な末期を迎えた。

42 想像上の仲裁者や仲介者、神々、半神、諸々の救世主、富や財産、権力の象徴、影響力やプライド、親戚や友人、あるいは才能や社会的な恩恵といった、一種の防御となるもの、あるいは助けとなるものはすべて消え去り、今や魂はただ神のみと対峙せねばならないという現実に直面する。

43 この節は私たちに、生と死の相互作用について考えるよう求めている。植物界から穀物の種子となつめやしの種子を例にとり、私たちが生き抜いていく上で、どれほどそれらを頼りとしているかが説き明かされている。

44 夜と昼、太陽と月 — 神による壮大な宇宙の営みである。何と遠く、それでいて何と近いことか。神の宇宙はあまりにも広大で、私たちはその宇宙と自分たちとの関わりをほとんど理解できていない。しかし知性ある「知っている民」に

数えられた以上は、放棄することなく解明に取り組まなくてはならない。

45 太陽と月とが時間を計測する尺度として言及されているのと同様、クルアーンの多くの箇所で、人間のための道案内として機能する星々への言及がある。

46 人間の認識や知覚といった器官では、定義上それを超越する者（神）を捉えることはできない。しかし来世においては、純粋な魂は神のヴィジョンを経験するだろうことが約束されている。これは天の庭の住人に与えられる最高の喜びである。

47 物理的なものを見るために身体の目が与えられたのと同じように、神は、直観と心的な理解という、直接かつ疑念の余地のない方法で神を認識するための「心の目」をも与えている。

48 神が自らの導きをもってその人に恩寵を授けるのでない限り、他者に信仰をもたらす力を有する者は、ひとりも存在しない。

49 この節では、対話の原則として、ムスリムは他者が尊ぶ崇拝の対象を侮辱してはならないということが説き明かされている。ここでは例として偶像が挙げられているが、崇拝の対象となるものが高い宗教性を帯びていればいるほど、それに対する侮辱を避けることがどれほど重要であるかは計り知れない。特定の信条の誤りを指摘したいなら、それが罵倒に陥ることがあってはならない。何の効果もなく、聞く者を寄せつけない態度であるばかりか、彼らを招こうとしている神を嫌悪させてしまうこともありえる。

50 証明の不足ゆえではなく、その頑迷さゆえに道に迷った者とは、神を拒否する者のうち最も迷った者であり、悪魔に惑わされた者である。

51 タバリーが引用する、いくつかの確実な典拠のあるハディースによると、「人間の中に悪魔はいるだろうか」と問われた預言者は、「いる。そして彼らは目には見えない者（ジン）の中にいる悪魔よりも悪い」と答えた。この節は、すべ





ての預言者たちが、様々な動機によって真理の声に耳を傾けることを拒み、誤った道に他者を引きずり込もうとする者の精神的な ― そしてしばしば身体的な ― 敵意と戦わなくてはならなかったことを示唆している。

52 来世を信じない人々は、悪の欺瞞に耳を傾け、取り込まれてしまっている。それが彼らの喜びなら、そうさせておくことである。彼らの得ている益は、彼らの喜びと同じく欺瞞でしかない。悪い行為は、悪をもたらすだけである。

53 知性ある人が求める判断の基準とは、神の意志に他ならない。啓典の書は、神の意志を、知識を持つ者、持たない者のいずれにも分かりやすいよう説き明かしている。

54 憶測は、ひとたび許されるととどまるところを知らない。霊的な真理から人を迷わせるばかりか、他者にまで様々な行為を一方的に強制したり禁じたりする者が現れたり、無意味な自主規制を引き起こしたりすることはクルアーンにおいて暗示されている通りである。

55 これは食に関する規定を反復するものではなく、その根底にある重要なこと（神の唯一性への信仰）を思い起こさせるための節である。

56 正当なものと不法なものが何であるか、明白な法によってすでに説き明かされているにもかかわらず、次から次へと新たな疑念をいだき、無知と誤解を広めることは誤りでしかない。

57 「外側においても、また内側においても、諸々の罪を捨てておきなさい」。これは一一八節と関連づけられた命令である。すなわち、「神があなたがたに合法としたものの範囲を守りなさい。その範囲を身勝手に広げても、また狭めてもいけない」。

58 家畜の屠殺の間に、神の名が唱えられていなかった場合、それは誤った方法で生命を奪ったことになるため、ムスリムはその肉を食べることはできない。「悪魔たちは、［人間の］友人をけしかけて、あなたと言い争わせようとする」については二章一四節を参照。解説者の多くは、「悪魔たち（シャヤーティーン、シャイターンの複数形）」とは「邪悪な衝動」

を意味するものと解説している。その解説に即して理解するなら、「あなた自身の邪悪な衝動は、すでに神が明白に定めた禁令を見失わせ、あなたを無意味な議論に引きずり込もうとする」。

59 神の使命を持つ善人と、邪悪な使命を持つ悪人のたとえ話である。前者は、霊的な生命を得るまでは死者も同然であった。神の光に従おうとする者たちの足跡をたどり、自分の足元を光で照らしつつ導きに沿って進んでいけるようになったのは、神の恩寵によって霊的な生命を授けられたためである。その反対に、神の光を嫌い、暗闇の中に住みついて、良いものすべてに対して何ごとかを企み、落とし穴を掘ろうとする者がいる。それぞれ、自らの使命を果たそうとするが、真の成功とは、言うまでもなく前者の成功である。

60 二万メートルの上空では、人間は特別な装置なしには呼吸できない。高く上昇すればするほど、呼吸は苦しくなってゆく。霊的な酸素なしに正しい生き方をしようともがく人々を示す比喩である。

61 ほとんどの解説者が、ここで言及されているジンとは、彼らの中にいる悪魔のことであるとしており、また彼らが多くの人間を惑わせてきたことについては本章一一二節でも語られている通りである。邪悪な者同士が互いに組するのは非常に見慣れた光景であり、身内同士で仲間ぼめし合うことで益を得ているかのようにさえ思われる。しかしそれが通用するのも、この物質的な世界の中においてのみである。限られた一定の期間が終わってしまえば、彼らのいかがわしい取引は暴露され、後悔の他には何ひとつ残らないのである。

62 「互いに味方し合う」。互いに相手をかばい合う、といったニュアンスである。この節に用いられる「カザーリカ（このように）」、こうしたやり方で、という表現は、欺（あざむ）くことがすっかり習い性になり、互いに良いことしか言わず、ごまかし合う邪悪な者同士のあり方に対する遠回しな、しかし明らかな風刺である（本章一一二節も参照）。人間であろうとジンであろうと、善は善と、悪は悪と協調し合うのである。

63 「あなたがたの中から使徒たちが到来し」。ここでの「あなたがた」とは、人間とジンの全体に向けられたものである。





64 善と悪には、私たちの行動と意図に応じて無数の段階がある。人間の霊的な領域にも段階は存在する。神は全知であり、人間についても、本人自身よりも本人について熟知している。「すべての者に、それぞれその行いに応じた位階がある」が、この場合の「行い」とは、自ら意識的に起こした行動を指している。故意に罪を犯したのでない限り、知らずに犯してしまった罪については、神は問いただすことはしない。しかし何が道徳的な法則に反する行為であるかについては、預言者たちによってすでに明らかにされている。

65 最後の審判の日についての説明である。

66 信仰なき人々に宛てられたひとつの挑戦である。「課された義務を果たすのに、私を妨げるものは何もない。最後に勝利するのは誰であるのか、私たちは共に見届けよう」。そしてそれは永久の真理でもある。邪悪な者には邪悪なことをさせておくことである。信仰者は信仰者として、授けられた機会や能力に応じてできる限りのことを行うだけである。一人ひとりが自分の目の前にある責任を果たさなくてはならない。最後に裁くのは神である。神の裁きは常に真理であり、公正である。

67 無知の時代のアラブたちは、自分たちの収穫を、家畜と偶像にそれぞれ分けた。彼らは「これは家畜の分け前であり、これは同輩の分け前である」と言い、「同輩（すなわち偶像）」に割り当てられた分は、祭司や取り巻きたちの許へ送られた。「同輩」の数は多く、また彼らは自分たちの権利を騒々しく要求した。多くの「同輩」を奉じる祭司の方が、おそらくはより多くを受け取っていただろう。崇高者たる神は祭司を必要としていないが、祭司は偶像を必要とする。神に割り当てられたものなら、それは貧者の許へ送られるが、収穫が供えものとして山と積まれたとき、祭司たちはこれらを「同輩」への捧げものという名目のもとに貪欲に奪い取った。すべての不条理が、馬鹿馬鹿しくもまかり通っていたのである。

68 イスラーム以前のアラブでは、様々な禁忌が神によって定められたものであるという誤った主張がまかり通っていた。

ザマフシャリーはそうした誤りのひとつとして、供犠として捧げられた家畜の肉を食すことができるのは、特定の偶像を擁する祭司や部族の男性に限られ、女性には許されなかったことを挙げている。

69 家畜に関する迷信である。五章一〇三節にも言及がある。

70 男児を偏重し、女児を不要とみなして生き埋めにしたり、偶像に捧げる人身御供としたりした風習についての説き明かしである。

71 「手入れされたものもそうでないものも」。より原語に近く訳出するなら、「格子の垣のあるものもないものも」であるが、一般的に受け入れられている解釈は「手入れ」の方である。「庭園」「果樹園」という言葉は、―宇宙にあるすべてのもの同様に―生き生きと育つものすべてを育てるのはただ神のみであるという原理を知らしめるという役割を果たしている。本章九九節も参照。

72 神が人間に対して合法なものと定められたことを、禁忌であると迷信的に決めつけることについて。イスラームには、迷信の存在を許す余地はない。一三八節から一四〇節、また一四二から一四四節における、イスラーム以前の禁忌に関する言及は、神が禁じていないことが明らかな食物（その他の身体的な楽しみや喜びも含む）の合法性を、啓示を通して強調するためになされたものである。

73 より直截的には、「つがいの八頭。羊が二頭に、山羊が二頭」。残り二組のつがいについては次の節で言及されている。これはクルアーンに頻出する、最小限まで要素を省略した表現の最も顕著な例である。補足なくしてクルアーン以外の言語では正しく文意を伝えることが不可能な表現様式である。「ザワージュ（つがい）」という語は、対となるふたつの構成要素を示すと同時に、一対となったものを示す。

74 「こぼれた血」とは、肉に含まれる血液や、内臓に含まれるものとは区別される。食の禁止と許可については一一九節も参照のこと。





75 レビ記七章二三節にある通りだが、例外として過越の燔祭における「脂尾」や「内臓をおおう脂肪」など、祭司たちが命じられていることにも注意すべきである。

76 ここでの「彼ら」とは、神は人間に複雑な食事規定を課していると主張する人々のことである。一四五節にある通り、神によって禁じられている食物は、明確に定義されたほんのわずかな種類に過ぎない。

77 神は人間に対し、正しいことと誤ったことのいずれかを選択する能力を授けている。この節は、一般的に言われる意味での「あらかじめ定められた、変更不可能で抵抗できないものとしての運命」が、単なる空想でしかないことを暗示してもいる。

78 「究極の論拠はアッラーに属する」。それ以外の議論は虚偽に陥る。例として、（1）人間が個人的な責任を持たないことを暗に含んでいる。（2）人間を、決定論の無力な犠牲者とみなしており、そのため（3）「いっそのこと自分たちの好きなように行動しても構わない」といった極論になびく者も少なくない。仮に（2）が真であるなら、（3）は真ではありえず矛盾が生じる。真剣に受け止められるべき論ではない。

79 私たちが何よりも気にかけるべきは、すべてを創造し、すべてを愛し、すべてを保護する神のご満悦である。偽の権威をふりかざす者たちは、彼らの真の運命に対する、神による真の統治を理解できずにいるのである。

80 「二つの派」、すなわちユダヤ教徒、キリスト者というふたつの共同体。

81 「世界の終わり」の徴候は、彼らに対するイスラームの証明とはなるだろう。しかしそれを待っていたのでは遅きに過ぎる。クルアーンならびに預言者によると、主な徴候とは煙の出現、獣の姿で地上を徘徊するものの出現、ダッジャール（偽救世主）の出現、西から昇る太陽、ヤアジューシュとマアジューシュ（ゴグとマゴグ）の出現、アデンに発生する大火などである。

82 「宗教を分裂させ」るとは、（1）宗教のある部分をその他から区別し、自分たちにとり都合のよい部分だけを取り入れ、

その他を拒絶すること。（2）週のうち任意の日に宗教を実践し、その他の日は宗教を忘れて過ごすこと。（3）「宗教はしかるべき場所に保管しておくもの」といった考え方。また宗教と日常生活、宗教と世俗の間に隔たりを作ること。（4）党派主義的な偏見を露骨に示して、宗教がもたらす調和を破壊し、見解の相違を引き起こそうとすること。

83 「ヌスク」という語は「犠牲（二章一九六節）」「儀式（二二章三四節、六七節）」、巡礼時の儀礼などを表現するのに用いられる。ここでは「奉仕」と訳出した。

# 第七章　アル＝アアラーフ　高み

マッカ啓示

本章は、第四六節の「……その高みには目印によってすべての者をそれぞれ見分ける人がおり」にある語からその名がつけられている。アル＝アアラーフはマッカ後期に啓示された章だが、一部においては、一六三節から一六七節はマディーナで啓示されたものとみなされている。神の導きの歴史を通して、シャイターンをはじめとする、神の意志と目的に反する者たちを主題とした章であるともいえよう。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 アリフ、ラーム、ミーム、サード。
2 ［これは］あなたに下された啓典。それゆえ、これのためにあなたの胸を狭めて不安になってはならない。
［これは］あなたが警告するためのものであり、信仰者への戒め。
3 あなたがたの主から、あなたがたに下されたものに従いなさい。御方をさし置いて、他の庇護者に従っ
てはならない。あなたがたが、想い起こすことはわずかであるが。
4 われらはどれほどの町を滅ぼしたことか。われらの威は深夜に、あるいは彼らの午睡のあいだに［突如





として］振るわれた。
5 われらの威が振るわれるとき、彼らの叫びはただ「本当に私たちは、不正をなす者でありました」と言
うだけ。
6 それからわれらは、［使徒が］遣わされた者たちを問いただし、また遣わした者たちをも問いただす。[1]
7 われらは、知識をもって彼らに語りかけるだろう。われらが不在であったことはない。
8 ［行いの重さを量る］秤はその日、真理そのもの。その秤［の目方］が重かった者、これらの者こそ、栄
える者。
9 また、その秤［の目方］が軽かった者。これらの者は、われらのしるしに不正をなしたために、自分自身
を失う者。
10 われらは、地上にあなたがたの身を立てさせてやり、またあなたがたのために生活のすべを設けてやった。
あなたがたのうち、感謝する者はわずかであるが。
11 われらはあなたがたを創造し、それから姿づくり、それから天使たちに「アーダムにひれ伏しなさい」
と告げた。それで彼らはひれ伏した、イブリースを除いては。彼はひれ伏す者のひとりではなかった。[2]
12 ［主は］告げた。「われが命じたとき、あなたがひれ伏すのを妨げたのは何か」。［イブリースは］言った。「本
当に私の方が、彼よりも良い。あなたは私を火炎から創造し、彼を泥から創造しました」。[3]
13 ［主は］告げた。「それなら、ここから落ちてゆけ。あなたは、ここでは高慢にふるまうべきではない。
本当にあなたは、さげすまれる者となった」。
14 ［イブリースは］言った。「彼ら［人間］がよみがえらされる日まで、私を猶予してください」。
15 ［主は］告げた。「それでは、あなたも猶予される者のひとり」。

16 ［イブリースは］言った。「あなたが私を惑わせたのですから、私はあなたのまっすぐな道の上で［人々を］待ち伏せることにしましょう。

17 そうして前からも、うしろからも、右からも、左からも彼らに襲いかかりましょう。あなたはきっと、彼らの多くが［主の慈悲に］感謝しない者であるのを見出すでしょう」。4

18 ［主は］告げた。「ここから出てゆけ、貶められ、追いやられて。彼らのうちあなたに従う者［については］、われはあなたと共にいる者たちをもって地獄を満たすだろう」。

19 ［主は命じた。］「アーダムよ。あなたとあなたの妻［ハウワーゥ］は楽園で暮らしなさい。どこででも、あなたがたの望むように食べなさい。しかし、この木には近づいてはならない。さもないと、あなたがたは不正をなす者となるだろう」。5

20 しかし二人に悪魔がささやいて、彼らには見えないようにされていた、彼らの隠しどころをあらわに示そうとした。彼は言った。「主があなたがた二人にこの木を禁じたのは、あなたがたが天使になるか、あるいは永遠に生きる者にならないようにするために他ならない」。

21 それから彼は、二人に誓った。「私は、あなたがたのためを思って忠告しているのだ」。

22 こうして彼は二人を欺いた。二人がその木を味わうと、彼らの隠しどころがあらわに示され、二人は楽園の木の葉で、自分［の身体］を覆いはじめた。主は彼らを呼び寄せた。「われは、あなたがた二人にあの木を禁じなかったか。また悪魔は、あなたがた二人にとり公然の敵であるとも告げなかったか」。

23 二人は言った。「主よ、私たちは自らに不正をなしてしまいました。もしあなたが私たちを赦すことも、また私たちに慈悲をかけることもないなら、本当に私たちは敗者となるでしょう」。

24 ［主は］告げた。「あなたがたは落ちてゆけ、互いの敵となって。あなたがたには、地上に住まうところと、





しばらくの暮らしの備えがあるだろう」。

25 ［主は］告げた。「あなたがたはそこで生き、そこで死に、そしてそこから引き出されるだろう」。

26 アーダムの子らよ。われらは、すでにあなたがたの隠しどころを覆うもの、また装うものとしての衣を下した。しかし篤信こそ、衣としてもっとも良いもの。アッラーの御しるしとはこのようなもの。彼らも、憶えておくようになるだろう。6

27 アーダムの子らよ。あなたがたの［原初の］両親が、彼のせいで身にまとうものをはぎ取られ、隠しどころをあらわに示されて楽園を追われたように、あなたがたも悪魔に惑わされてはならない。彼も彼の一族も、あなたがたには見えないところからあなたがたを見ている。本当にわれらは悪魔たちを、信じない者たちの近しい友とした。7

28 不品行にはしるとき、彼らは言う。「私たちは先祖からこうするよう習った。それにアッラーが、こうするよう私たちに命じた」。言いなさい。「アッラーは、断じて不品行を命じたりしない。あなたがたは知りもせずに、アッラーについて何ごとか言おうとするのか」。

29 言いなさい。「私の主は正道に立つよう命じている」。それゆえどのマスジドにおいても、［主に］あなたがたの顔を向け、呼びかけ、宗教において真摯でありなさい。御方があなたがたを創始したように、あなたがたはその御許へ戻される。

30 かの御方は、［あなたがたのうち］ある者たちを導き、またある者たちは当然のこととして迷わされている。確かに彼らは、アッラーをさし置いて悪魔を友として選んだ者たちで、自分は導かれたものと思っている。8

31 アーダムの子らよ。どのマスジドにおいても、ふさわしい装いをしなさい。そして食べ、飲みなさい。ただし、浪費してはならない。アッラーは浪費する者を愛さない。

32 言いなさい。「アッラーが、そのしもべたちに与えた飾りものや、糧として差し出された良いものを禁じたのは誰か」。言いなさい。「それらは、現世の生のあいだは信じる者のためにあり、復活の日には、彼らだけのものとなる」。このようにわれらは、知っている民にしるしを解き明かす。[9]

33 言いなさい。「私の主が禁じたのは、現されるか否かによらず不品行と、罪と、［正当な］真理なき横暴と、何の権威も下されていないものをアッラーと同列に連ねることと、知りもせずにアッラーについて何ごとか言うことだけ」。

34 あらゆる共同体に、それぞれの［定められた］期限がある。期限が到来するとき、一刻も遅らせることはできず、また早めることもできない。[10]

35 アーダムの子らよ。あなたがたの中から使徒が到来し、われのしるしを読み聞かせたとき、畏れて自らをただす者には、恐れもなく、嘆きもないだろう。

36 しかし、われらのしるしを嘘よばわりし、高慢にふるまう者は火獄の仲間。彼らは、永遠にその中に住まうだろう。

37 アッラーについて嘘いつわりをねつ造するか、あるいはその御しるしを嘘であるとするよりも不正な者があるだろうか。これらの者には、啓典にある通りの取り分がある。われらの使者［となる天使たち］が訪れて、彼らが召されるとき、彼ら［天使たち］は言う。「あなたがたが、アッラーをさし置いて呼びかけていたものはどこにいるのか」。彼らは言う。「あれらは、私たちから離れ去ってゆきました」。こうして彼らは、自分が［真理を］拒む者であったことを、自らに対して証言する。

38 ［主は］告げる。「業火の中に入りなさい、あなたがた以前の、ジンや人間の共同体と共に」。共同体がひとつ、中に入るたびに、彼らは必ず、自分たち同様の別の共同体を忌み呪う。そうしてことごとくがその中に入ると、最後の者たちが最初の者たちについて言う。「主よ、彼らが私たちを迷わせたのです。だから彼らには、業火の懲罰を二倍にしてください」。［主は］告げる。「誰もがそれぞれ二倍にされる。しかし、あなたがたはそれを知らないだろう」。[11]





39 すると最初の者たちが、最後の者たちに言う。「あなたがたの方が、私たちよりもすぐれていたわけではない。それゆえあなたがたも、自分たちが得てきたことの懲罰を味わえ」。[12]

40 われらのしるしを嘘よばわりし、高慢にふるまう者に、天の門は開かれない。らくだが針の穴を通り抜けるまで、彼らが楽園に入ることもない。このように、われらは罪ある者に報いる。[13]

41 彼らには地獄がその寝床となり、その上には［火炎の］覆いがかぶさる。このように、われらは不正をなす者に報いる。

42 われらはどの者にも、その能力以上のことは負わせない。しかし信じて正しい行いをする者、これらの者は楽園の仲間。彼らは、永遠にその中に住まうだろう。[14]

43 われらは、何であれ彼らの胸の中にある鬱憤をとり除き、川をその足元に流れさせる。彼らは言うだろう。「アッラーに称賛あれ、私たちをここへ導いた御方。もしアッラーが導いてくれなかったら、決して導かれることはなかっただろう。主の使徒たちは、確かに真理をもたらした」。すると呼びかける声がある。「ここが楽園。あなたがたはここを受け継ぐこととなった、あなたがたが行ってきたことのために」。

44 楽園の仲間は、火獄の仲間に呼びかける。「本当に私たちには、主の約束が真理であったことがわかった。あなたがたには、主の約束が真理であったことがわかっただろうか」。すると彼らは「はい」と言う。呼び出しの者が、彼らのあいだで声をあげる。「不正をなす者はアッラーに忌まれる、[15]

45 アッラーの道から他者を妨げ、ねじ曲げようとし、来世［の真理］を拒んだ者たち」。[16]

46 彼らのあいだを隔てる壁があり、その高みには目印によってすべての者をそれぞれ見分ける人がおり、楽園の仲間に「あなたがたの上に平安あれ」と呼びかける。切望しつつも、中に入ることができないでいる。[17]

47 それから火獄の仲間の方へ目を向けると、彼らは「主よ。私たちを、不正をなす民と共にはしないでください」と言う。

48 高みにいる仲間は、目印によって見分けた人々に呼びかけて言う。「あなたがたは［財を］かき集め、高慢にふるまっていたが、［結局］それはあなたがたの役には立たなかった。[18]

49 こちらにいる人々が、決してアッラーの慈悲にあずかることはないだろう、と、あなたがたが断言していた人々なのか。楽園に入りなさい、あなたがたには恐れもなく、嘆きもないだろう」。

50 火獄の仲間が、楽園の仲間に呼びかける。「私たちに水を注いでくれ。あるいは、アッラーがあなたがたに賜ったものなら何でも」。彼ら［楽園の仲間］は言う。「アッラーはそのどちらをも、［真理を］拒む者に禁じています、

51 宗教をもてあそび、軽んじる者、また現世の生に欺（あざむ）かれた者には」。今日、われらは彼らを忘れよう、彼らがこの日に［主と］会することを忘れ、またわれらのしるしを否定していたように。

52 すでにわれらは、知識をもって解き明かす啓典を彼らにもたらした、信じる民のための導きとも、慈悲ともなるものを。

53 彼らは、解明の他に何を待つというのか。解明が到来するその日、以前からそのことを忘れていた者たちは言うだろう。「主の使徒たちは、本当に真理をもたらしていたのか。私たちのためにとりなしてくれる者はいないのか。あるいは、私たちがしていたのとは別の行いをするために、［現世の生に］戻してはもらえないのか」。彼らは自分自身を失い、彼らがねつ造していたものも去っていく。[19]





54 本当に、あなたがたの主とはアッラー、諸天と大地を六日の間に創造し、それから玉座に就いた御方。夜をもって［天幕のように］昼を覆い、それを［また別の昼と夜に、代わるがわる］急ぎ追いかけさせ、太陽も月も星々も命じるままに使役する御方。まぎれもなく、創造も命令もこの御方のもの。アッラーに祝福あれ、諸世界の主に。[20]

55 ［人間よ、］あなたがたの主に対しては、謙虚に、またひそかに［私的な形で］呼びかけなさい。かの御方は、度が過ぎる者を愛さない。

56 ひとたび、ただされた後の地上に退廃を広めてはならない。恐れと希望をもってかの御方に呼びかけなさい。本当にアッラーの慈愛は、行いの善良な者の近くにある。

57 慈悲の前に良い報（しら）せとして風を送る御方。それが重たい雨雲を運ぶとき、われらはそれを死んでいる土地に連れてゆき、雨を降らせて、さまざまな種類の果実を生じさせる。このようにして、われらは死せる者をよみがえらせる。あなたがたも、憶えておくようになるだろう。

58 良質な土地には、主の思し召しにより草木が生じる。しかし［土地が］悪いと、弱々しいものがまばらに生じるだけ。このようにわれらは、感謝する民のためにしるしを解き明かす。[21]

59 かつてわれらは、ヌーフをその民に遣わした。彼は言った。「私の民よ、アッラーに仕えなさい。あなたがたには、この御方をおいて他に神はない。本当に、私はあなたがたのために、大いなる日の懲罰が恐ろしい」。[22]

60 彼の民の長老たちは言った。「私たちが見るに、あなたは明らかな誤りの中にいる」。

61 彼は言った。「私の民よ、私に誤りはない。むしろ私は、諸世界の主の使徒だ。

62 私はあなたがたに、主からの言伝をのべ伝え、またあなたがたに忠告する。私は、あなたがたの知らないことをアッラーから知らされている。

63 あなたがたは、主の戒めが、あなたがたの中のひとりを通してもたらされたことに驚いているのか。あなたがたが慈悲にあずかれるようにと、警告し、畏れをもたせようとしているのに」。

64 しかし彼らは、彼［ヌーフ］を嘘であるとした。それゆえわれらは、彼と、彼と共に船の中にいた者たちとを救い、またわれらのしるしを嘘よばわりした者たちを溺れさせた。本当に彼らは、ものごとを見ようとしない民であった。[23]

65 またアード［の民］には、その同胞であるフードを［預言者として遣わした］。彼は言った。「私の民よ、アッラーに仕えなさい。あなたがたには、この御方をおいて他に神はない。それでもあなたがたは、畏れないのか」。

66 彼の民のうち、［真理を］拒んでいる長老たちは言った。「私たちが見るに、あなたは本当に愚かな者だ。私たちは、あなたは嘘つきのひとりだと思う」。

67 彼［フード］は言った。「私の民よ、私は愚かな者ではない。むしろ私は、諸世界の主からの使徒だ。

68 私はあなたがたに、主からの言伝をのべ伝える。私は、あなたがたにとり信頼に足る忠告者だ。

69 あなたがたは、主の戒めが、あなたがたの中のひとりを通してもたらされたことに驚いているのか。かの御方があなたがたを、ヌーフの民の後を継ぐ者とし、またあなたがたの体躯をますます強くしたことを思い出しなさい。アッラーの恩恵を憶えておきなさい。そうすれば、あなたがたは栄えるだろう」。

70 彼らは言った。「あなたは私たちを唯一、アッラーにのみ仕えさせ、私たちの先祖が仕えてきたものを捨てさせるために来たのか。それなら、あなたが私たちを脅しているものを持ってきなさい。もしあなた





が真実を語っているのなら」。

71 彼［フード］は言った。「あなたがたの上には、すでにあなたがたの主の非難と怒りが落ちている。あなたがたは、あなたがたとあなたがたの先祖が、アッラーが何の権威も下していないものに名づけた名について、私と言い争うのか。それなら、［その結末を］待っていなさい。本当に私も、あなたがたと共に［結末を］待つ者のひとり」。

72 われらは、彼と、彼と共にいた者たちとを、われらからの慈悲によって救い、われらのしるしを嘘よばわりし、信仰者にならなかった者たちを根絶やしにした。[24]

73 またサムード［の民］には、その同胞であるサーリフを［預言者として遣わした］。彼は言った。「私の民よ、アッラーに仕えなさい。あなたがたには、この御方をおいて他に神はない。すでにあなたがたの主から、明白な証がもたらされている。これはアッラーの雌らくだ、あなたがたのための御しるし。それゆえ、これを放ち、アッラーの大地で［自由に］食べさせなさい。これに危害を加えてはならない。さもないとあなたがたは、痛烈な懲罰に遭うだろう。[25]

74 かの御方があなたがたを、アードの後を継ぐ者とし、その土地に住まわせたことを思い出しなさい。あなたがたは平野を宮殿とし、また山々を刻んで家とした。それゆえアッラーの恩恵を憶えておきなさい。また地上をかき乱して、退廃を広めてはならない」。[26]

75 彼の民のうち、高慢な長老たちが、虐げられていた信じる者たちに言った。「あなたがたはサーリフが、彼の主から遣わされた者と知っているのか」。彼らは言った。「私たちは、彼が遣わされてもたらしたものを信じています」。[27]

76 高慢な者たちは言った。「あなたがたが信じるもの［が真理であること］を、私たちは拒む」。

77 こうして彼らは雌らくだの腱(けん)を切り、主の命令に対し無礼にふるまった。彼らは言った。「サーリフよ。あなたが私たちを脅しているものを持ってきなさい、もしあなたが［主に］遣わされた者だというなら」。[28]

78 すると、地震が彼らを襲った。［翌朝、］彼らはその家の中で、うつ伏せ［の亡骸］になっていた。[29]

79 それで彼［サーリフ］は、彼らから立ち去り、言った。「私の民よ。私はあなたがたに、主からの言伝をのべ伝え、また忠告した。しかしあなたがたは、忠告する者を好まない」。[30]

80 またルートが、その民にこう言ったときのこと［を思いなさい］。「あなたがたは、あなたがた以前には万人の誰ひとりとしてしなかった不品行にはしるのか。

81 あなたがたは劣情し、女をさし置いて男に言い寄る。いいや、あなたがたは行き過ぎた民である」。

82 しかし彼の民の答えは、ただ「彼らをあなたがたの町から追い出せ。自分で清浄ぶるような人々だ」と言うだけ。

83 そこでわれらは彼とその一族を救った、彼の妻を除いては。彼女は後に残される者のひとりとなった。

84 それからわれらは彼らの上に［石つぶての］雨を降らせた。見なさい、罪を犯す者の最後がどのようであったかを。[31]

85 またマドヤン［の民］には、その同胞であるシュアイブを［預言者として遣わした］。「私の民よ、アッラーに仕えなさい。あなたがたには、この御方をおいて他に神はない。すでにあなたがたの主から、明白な証がもたらされている。それゆえ升(ます)と秤(はかり)を十分に満たしなさい。人々の持ちものを奪ってはならない。ひとたび、ただされた後の地上に退廃を広めてはならない。その方があなたがたのために良い、もしあなたがたが、信仰者なら。[32]

86 どの道においても、それぞれ座り込んで［道を往来する者を］脅かしたり、アッラーの道から信じる者た





ちを妨げたり、ねじ曲げようとしたりしてはならない。わずかであったあなたがたを、この御方が増やしたことを憶えておきなさい。そして見なさい、退廃を広める者の最後がどのようであったかを。[33]

87 そしてもしあなたがたの中に、私が遣わされてきたものを信じる一派と、信じない一派がいるなら、アッラーが私たちのあいだに判断を下すまで、よく耐えていなさい。もっともすぐれた判断の御方」。

88 彼の民のうち、高慢な長老たちは言った。「シュアイブよ。私たちは、あなたも、あなたと共に信じる者たちも、必ずこの町から追放する。あるいはあなたがたが、私たちの宗旨に戻りなさい」。彼は言った。「たとえ私たちが、それを嫌ったとしてもか。

89 アッラーが、私たちをあなたがたの宗旨から救った後になって、もし私たちがそれに戻るなら、アッラーに対して嘘をねつ造したことになってしまう。私たちの主であるアッラーがそうと望まない限り、私たちがそれに戻ることはない。私たちの主は、あらゆるものごとをその知に網羅する。私たちは、アッラーに委ねる。主よ、私たちと私たちの民のあいだを、真理により裁いてください。あなたこそは、もっともすぐれたとり決めの御方」。[34]

90 しかし彼の民のうち、［真理を］拒んでいる長老たちは言った。「もしシュアイブに従えば、きっとあなたがたは敗者となるだろう」。[35]

91 すると、地震が彼らを襲った。［翌朝、］彼らはその家の中で、うつ伏せ［の亡骸］になっていた。

92 シュアイブを嘘であるとした者たちが、そこに住んでもいなかったかのよう。シュアイブを嘘よばわりした者たち、彼らこそ敗者であった。

93 それで彼［シュアイブ］は、彼らから立ち去り、言った。「私の民よ。すでに私は、あなたがたに主からの言伝をのべ伝え、また忠告した。どうして私が、［真理を］拒む民のために嘆かなくてはならないのか」。

94 われらは、ひとつの町に預言者を遣わすたびに、彼らが謙虚になるようにと、苦難と困難をもってその住民を襲った。[36]

95 そののちわれらが、悪いものを善事ととり替えると、十分に満ちたころになって彼らは言う。「確かに私たちの祖先にも、困難もあれば安楽もあったのだ」。それで、われらは突然に彼らを捕えた、彼らも気づかないうちに。

96 もし、これらの町々の住民が信じ、畏れるようになってさえいたなら、われらは必ず彼らのために、諸天と大地の諸々（もろもろ）の祝福を開いていただろう。しかし彼らは嘘であるとした。それで、われらは突然に彼らを捕えた、彼らが得てきたことのために。

97 こうした町々の住民は、深夜、眠っているあいだにわれらの威（い）が振るわれることはないと安心していたのか。[37]

98 それともこうした町々の住民は、昼間、遊んでいるあいだにわれらの威（い）が振るわれることはないと安心していたのか。

99 彼らはアッラーの謀（はか）りごとに、安心していたのか。しかしアッラーの謀（はか）りごとに安心していられるのは、敗者となる民に他ならない。[38]

100 これは、「滅んだ」住民の後にその地を受け継いだ者にとっての導きではないか。もしわれらがそうと望めば、われらは彼らを、その罪のために捕えることもできた。またわれらは彼らの心を封じ、聞こえなくすることもできた。

101 われらはあなた「ムハンマド」に、こうした町々の話を語る。すでに使徒たちが「アッラーの王権を示す」明白な証をもって彼らに到来していた。しかし彼らは、以前に嘘よばわりしたものを信じようとはしな





かった。このようにアッラーは、「真理を」拒む者の心を封じる。

102 われらは彼らの多くに、約束を守る者を見出せない。いいや、むしろ彼らの多くが、背く者であることを見出す。[39]

103 そののち、われらは彼らの後には、われらのしるしをムーサーにもたせ、フィルアウンとその長老たちへ送った。しかし彼らは、それらに対し不正をなした。それで見なさい、退廃を広める者の最後がどのようであったかを。

104 ムーサーは言った。「フィルアウンよ。本当に私は、諸世界の主からの使徒だ。

105 アッラーについては真理を除き、私は何も言うべきではない。私は、あなたがたの主からの明白な証をもってあなたがたのところへ来た。それゆえイスラエルの民を、私と共に行かせなさい」。[40]

106 彼「フィルアウン」は言った。「もしあなたが、しるしをもって来たのなら、出してみせるがいい、本当にあなたが真実を語っているのなら」。

107 そこで、ムーサーが自らの杖を投げると、見なさい。それは明らかに蛇となった。

108 それから、彼がその手を差し伸ばすと、見なさい。それは誰の目にも「光沢を放ち」真白となった。[41]

109 フィルアウンの民の長老たちは言った。「これは確かに、腕の立つ魔術師だ。

110 彼はあなたがたを、あなたがたの地から追い出そうとしている。では、あなたがたは何と進言するか」。

111 彼らは「フィルアウンに」言った。「彼「ムーサー」とその兄のことはひとまず置いて、「その間に」市街に人集めの者を遣わしましょう。

112 腕の立つ魔術師を、すべてあなたのところへ連れてこさせましょう」。[42]

113 こうして魔術師たちが、フィルアウンのところへやって来た。彼らは言った。「私たちが勝利したなら、

私たちに必ず報酬がありますように」。

114 彼は言った。「当然だ。またあなたがたを、必ず私の側近にするだろう」。

115 彼らは言った。「ムーサーよ。あなたが［先に］投げるのか、それとも私たちが［先に］投げるのか」。

116 彼は言った。「あなたがたが投げなさい」。彼らが投げると、それは人々の目を魔術で眩ませ、恐れおののかせた。彼らは大いなる魔術を見せつけた。

117 われらはムーサーに啓示した。「あなたの杖を投げなさい」。すると見なさい。それは彼らの偽っていたものを飲み込んでしまった。

118 こうして真理が立ち起こり、彼らの行ってきたことは虚偽となった。

119 ここにおいて彼らは敗北し、さげすまれる者となった。

120 魔術師たちはひざまずき、その身をひれ伏した。

121 彼らは言った。「私たちは、諸世界の主を信じます、

122 ムーサーとハールーンの主を」。

123 フィルアウンは言った。「私が許しもしないうちに、あなたがたは信じるのか。確かにこれはあなたがたによる、市街から住民を追放しようという謀りごとに違いない。しかし、やがてあなたがたも知ることになるだろう。[43]

124 私は必ず、あなたがたの両手両足を交互に切り落としてやろう。そののちあなたがたを、ことごとくはりつけにしてやろう」。[44]

125 彼らは言った。「本当に私たちは、私たちの主に戻されるのです。

126 主の御しるしが私たちにもたらされ、それを私たちが信じたというだけで、あなたがたは私たちに立腹





するのですか。主よ、私たちの上に忍耐を注いでください。そして私たちを、あなたに服従する者［ムスリム］として召し寄せてください」。

127 フィルアウンの民の、長老たちは言った。「［王よ、］あなたはムーサーとその民が、この地に退廃を広め、あなたとあなたの神々を捨てるがままにさせるのですか」。彼は言った。「彼らの息子たちを殺し、女たちは生かしておけ。本当に、私たちこそ彼らの支配者だ」。

128 ムーサーはその民に言った。「アッラーに助けを求め、よく耐えていなさい。本当に、大地はアッラーのもの。かの御方は、しもべたちの中で御心にかなう者にこれを受け継がせる。そして結末は、畏れる者のためにあるもの」。

129 彼らは言った。「あなたが私たちのところへ来る前も、来た後も、私たちは苦しめられてばかりだ」。彼は言った。「おそらく主は、あなたがたの敵を滅ぼし、あなたがたに地上を継がせるのに、あなたがたがどうふるまうかを見ているのだろう」。[45]

130 そしてわれらはフィルアウンの一族を、数年にわたる凶作とみのりの不足に遭わせた。彼らが、戒めを受け入れるようにと。

131 しかし彼らは、善いものが訪れると「これこそ、私たちのもの」と言い、悪いものが降りかかると、ムーサーと、彼と共にいる者たちがもたらす凶兆とみなした。吉凶の兆しは、他ならぬアッラーの御許にこそあるのではないか。しかし、彼らの多くはそれを知らない。[46]

132 彼らは言った。「たとえあなたが私たちを魔術にかけようとして、どのようなしるしを持ち出そうとも、私たちは決してあなたを信じない」。

133 そこでわれらは、洪水と、いなごと、しらみと、かえると、血とを［次

から次へ」彼らに送った。しかし彼らは高慢にふるまい、罪を犯す民となった。47

134 災難が下るたびに、彼らは言った。「ムーサーよ。あなたと約束をしたというあなたの主に、私たちのために祈ってくれ。もしあなたがこの災難をとり除けるなら、私たちは必ずあなたを信じ、イスラエルの民をあなたと共に行かせよう」。

135 しかし定められた期限になって、われらが彼らから災難をとり除くと、見なさい。彼らはさっそく「約束を」破った。48

136 それでわれらは、彼らに報復した。われらのしるしを嘘よばわりし、顧みずにいたために、われらは彼らを海に溺れさせた。

137 それからわれらは、無力とみなされていたこの民に、われらが祝福した大地の東西を継がせた。イスラエルの民に対するあなたの主の善き御言葉は、彼らがよく耐えたために果たされた。またわれらは、フィルアウンとその民が造ってきたもの、築いてきたものを崩壊させた。49

138 われらは、イスラエルの民に海を渡らせた。彼らは、自分たちでこしらえた立像を崇拝する民に出会った。彼らは言った。「ムーサーよ。彼らの持っている神々のように、私たちにも神をひとつ、こしらえてくれ」。彼は言った。「本当に、あなたがたは無知な民だ。50

139 本当に、彼らが奉じているもの「の行く末」にあるのはただ滅びであり、彼らの行ってきたこともたわむれに過ぎない」。

140 彼は言った。「どうして私があなたがたのために、アッラー以外の神を求めるだろうか。かの御方は、万人の誰にもまさってあなたがたに恵んだというのに」。51

141 われらがあなたがた「イスラエルの民」を、フィルアウンの一族から救ったときのこと「を思いなさい」。





彼らはあなたがたにひどい刑罰を加え、あなたがたの息子たちは殺され、女たちは生かされた。本当にその中には、主からの大いなる試練があった。

142 またわれらが、ムーサーのために三十夜を約束し、さらに十夜を加えて「律法を授け」、これをまっとうしたときのこと「を思いなさい」。こうして主の定めた期限は、四十夜をもって満たされた。ムーサーは、兄のハールーンに言った。「私の民のあいだで、私の代わりをつとめてください。行いを正しくし、退廃を広める者の道には従わないでください」。52

143 ムーサーがわれらの約束したところへ来て、主が彼に語りかけたときのこと「を思いなさい」。彼は言った。「主よ、あなた「の姿」をあらわしてください、私があなたを見られるように」。「主は」告げた。「あなたは、決してわれを見ることはできない。しかし、あの山を見なさい。もしあれが、そのままあの場にあるようなら、きっとあなたはわれを見るだろう」。主がその山に「姿を」あらわすと、それは微塵に砕けて散った。ムーサーは気を失い、昏倒した。それから正気に返ると、彼は言った。「あなたに讃美あれ。私は悔い改めてあなたに立ち返り、最初の信仰者となります」。53

144 「主は」告げた。「ムーサーよ。本当にわれは、われの言伝とわれの言葉をもって、人々の上にあなたを選んだ。それゆえわれがあなたに与えたものを受け取り、感謝する者のひとりとなりなさい」。54

145 われらは彼のために、ありとあらゆるものごとについての教示と、ありとあらゆるものごとについての解き明かしとを板に書き記して「告げた」、「しっかりと受け取りなさい。そしてあなたの民に、その最善をとるよう命じなさい。われはあなたがたに、背く者の館を見せるだろう。55

146 われは、真理なくして地上で高慢にふるまう者を、われのしるしから退けるだろう。たとえすべてのしるしを目にしても、彼らはそれを信じない。たとえまっとうな道を目にしても、彼らはそれを選ばない。

しかし、もし誤った道を目にすると、彼らはそれを選ぶだろう。それは彼らがわれらのしるしを嘘よばわりし、顧みずにいるため」。[56]

147 われらのしるしと、来世で「主と」会することを嘘であるとする者。彼らの行いは、全くの無に帰される。彼らが行ってきたことの他に、何が報いられるだろうか。[57]

148 ムーサーの民は、彼の「立ち去った」後になって、自分たちの飾りもの「の品々」から、鳴き声のする仔牛の姿かたちをしたものを作り上げた。彼らには、それが彼らに語りかけることも、どのような道に導くこともないのがわからなかったのか。それを彼らは選びとり、不正をなす者となった。[58]

149 それから彼らが後悔したとき、自分たちがひどく迷っていたのがわかると、彼らは言った。「主が慈悲をかけることも、赦すこともないなら、本当に私たちは敗者になってしまう」。

150 ムーサーは彼の民のところへ戻ってくると、怒り、悲しんで言った。「私の「出かけた」後で、あなたが私に代わってなしたことの何という悪さか。あなたがたは、主の「裁きの」決定を急かそうというのか」。それから彼は板を投げうち、兄の頭髪をつかんで引き寄せた。彼「ハールーン」は言った。「私の母の子よ。本当に、民は私を無力とみなして、私を殺さんばかりだった。それゆえ私「の誤り」について、敵を喜ばせるようなことはしないでくれ。そして私を、不正をなす民と一緒にしないでくれ」。[59]

151 彼「ムーサー」は言った。「主よ、私と私の兄を赦してください。そして私たちを、あなたの慈悲の中に受け入れてください。あなたこそは、慈悲深い者のうちもっとも慈悲深い御方」。[60]

152 本当に、仔牛を選んだこれらの者には、主からの怒りがあり、また現世の生においても屈辱をこうむるだろう。このように、われらはねつ造する者に報いる。

153 しかし悪事を行っても、そののちに悔い改めて信じる者たちについては、本当にあなたの主はもっとも





よく赦し、もっとも慈悲深い。

154 怒りが和らぐと、ムーサーは板を「拾って」とり上げた。その中に刻まれているものこそ、主を畏怖する者たちへの導きにして慈悲であった。[61]

155 それからムーサーは、われらとの定められた「逢瀬の」時のために、その民の中から七十名を選んだ。すると大きな地震が彼らを襲った。彼は言った。「主よ。もしあなたがそうと望めば、これ以前にあなたは彼らのことも、また私のことも滅ぼしていたでしょう。あなたは私たちの中にいる愚かな者が行ったことのために、私たち「全員」を滅ぼすのですか。本当にこれは、あなたの試練に他なりません。あなたは御心のままにある者を迷わせ、また御心のままにある者を導く。あなたは、私たちの庇護者です。それゆえ私たちを赦し、慈悲をかけてください。あなたはもっともすぐれた赦しの御方です。[62]

156 そしてこの現世においても、来世においても私たちのために善きものがあるよう定めてください。本当に私たちは、「悔い改めて」あなたへと向かいます」。「主は」告げた。「われの懲罰は、われがそうと望む者に科される。しかしわれの慈悲は、ありとあらゆるものにあまねく及ぶ。それゆえわれは、行い正しく、喜捨をする者、またわれらのしるしを信じる者たちのためにこれを定めよう、[63]

157 律法や福音の中に記されているのを見つけて、文字を知らない預言者である使徒に従う者たちに。彼は、彼らに親切を勧め、非道を禁じる。また諸々（もろもろ）の良いものを彼らのために合法とし、不純なものを彼らに禁じ、重荷と足枷（あしかせ）から彼らを解放する。それゆえ彼を信頼し、彼を敬い、彼を助け、下された光に彼と共に従う者たち、これらの者こそ、栄える者」。[64]

158 「ムハンマドよ、」言いなさい。「人々よ。本当に私は、あなたがた全員に遣わされたアッラーの使徒。諸天と大地の王権はこの御方に属する。他にいかなる神もなく、生かしも、死なせもする御方。それゆえアッ

ラーとその使徒を信じなさい、アッラーとその御言葉とを信じる、文字を知らない預言者のことを。そして彼に従いなさい。あなたがたも、導かれるようになるだろう」。

159 ムーサーの民の中には、真理によって導き、またそれにより公正をうち立てた共同体があった。

160 われらは彼らを、十二の支族の共同体に分けた。またわれらは、その民が水を求めたとき、ムーサーに啓示した。「あなたの杖で、岩を打ちなさい」。するとそこに、十二の泉が湧き出でた。人々はそれぞれの水飲み場を知った。われらはまた、雲をもって彼らの上の日陰とし、また彼らに、マンナとうずらを下した。「われらがあなたがたの糧とした、諸々の良いものを食べなさい」。彼らは、われらに不正をなしたのではない。ただ自分自身に不正をなしただけ。[65]

161 また彼らが、こう告げられたときのこと［を思いなさい］。「この町に暮らしなさい。そしてその中から、何であれあなたがたの望むままに食べなさい。ただし『許しあれ』と言い、ひれ伏して門に入りなさい。われらはあなたがたのために、その過ちを赦そう。そして行いの善良な者には［その善良さと報奨を］増やそう」。[66]

162 しかし彼らのうち不正をなす者が、彼らに告げられていた以外のものに言葉を変えてしまった。そこでわれらは彼らの上に、天からの大難を送った、彼らが不正をなし続けていたゆえに。[67]

163 ［ムハンマドよ、］彼らに尋ねなさい、海に面したある町のことを。彼ら［その町の住民］が、安息日に違背したときのこと。彼らの安息日には、魚が眼前にやって来ていた。しかし安息日をやぶると、それら［魚］はやって来なかった。このようにしてわれらは彼らを試みた、彼らが背き続けていたゆえに。[68]

164 また彼らの中の、ある共同体がこう言ったときのこと［を思いなさい］。「どうしてあなたがたは、アッラーが滅ぼすか、あるいは厳重な懲罰を科そうとしている民を教えさとそうというのですか」。彼ら［伝道者］





は言った。「あなたがたの主の御前で申し開きができるように。また彼らが、畏れてくれるように」。[69]

165 それで彼らが戒められていることを忘れると、われらは、悪を禁じた者たちは救い、また不正をなす者たちには無惨な懲罰を科した、彼らが背き続けていたゆえに。

166 それで彼らが無礼にふるまい、禁を犯すと、われらは彼らに告げた。「猿となり、卑しめられよ」。[70]

167 また復活の日にいたるまで、ひどい刑罰を科す者を彼らに送りつづけるだろう、と、主が申し渡したときのこと［を思いなさい］。本当にあなたの主は応報に迅速であり、しかももっともよく赦し、もっとも慈悲深い。

168 われらは彼らを、地上においていくつもの共同体とした。彼らのうち、ある者は行い正しく、またある者はそうではない。またわれらは、善事と悪事とをもって彼らを試みた、彼らが帰ってくるようにと。[71]

169 しかし彼らの後になって啓典を受け継いだ者たちは、この低い世の利得を受けとっては、「私たちは赦されるだろう」などと言った。もし同じような利得がもたらされたら、それを受けとるだろう。彼らには、アッラーについて真理の他に何も言ってはならないという、啓典の誓約があるのではなかったか。しかも彼らは、その［啓典の］中にあるものを学んだのではなかったか。畏れる者には、来世の館こそ最良のもの。それでもあなたがたは、考えないのか。

170 啓典をしっかりと守り、礼拝のつとめを守る者たち。本当にわれらは、自らをただす者の報酬を決して無為にしない。

171 われらが、かの山を天蓋のように彼らの頭上で揺らしたときのこと［を思いなさい］。彼らには、それが自分たちの上に落ちてくると思われた。「われらがあなたがたに与えたものを、しっかりと受け取り、その中にあるものを憶えておきなさい。あなたがたも、畏れる者となるだろう」。

172 主がアーダムの子らの腰からその子孫を取りあげて、彼らに、自分たち自身について証言させたときのこと［を思いなさい］。「われは、あなたがたの主ではないのか」。彼らは言った、「その通りです。私たちは証言します」。これは復活の日に、あなたがたが「私たちは、このことを顧みずにいました」などと言えないようにするため。[72]

173 あるいは「私たちの祖先が、以前から多神を奉じていたのです。私たちは、彼ら以降の子孫です。虚偽をなす者が行ったことのために、あなたは私たちまで滅ぼすのですか」などと言えないようにするため。

174 このようにわれらは、しるしを解き明かす。彼らも、帰ってくることだろう。

175 彼らに読み聞かせなさい、われらのしるしを与えられていながら、それを引きはがしたために悪魔に追いつかれ、踏み外した者の話を。[73]

176 もしわれらがそうと望めば、それら［しるし］によって彼を高めてやりもしただろう。しかし彼は地上に執着し、自分の欲望に従った。例えるなら、彼は犬のようなもの。叱られても舌を垂らし、あるいは放っておいても舌を垂らす。われらのしるしを嘘よばわりする民の例えとはこのようなもの。それゆえ、こうした物語を語りなさい。彼らも、省みるようになるだろう。

177 われらのしるしを嘘よばわりし、自分自身に不正をなす民の例えのなんと悪いことか。

178 アッラーが導く者こそ導かれている者。誰であれかの御方が迷わせるなら、これらの者こそ敗者たち。

179 われらは、ジンと人々の多くを地獄のために創造した。彼らは心がありながら理解せず、目がありながら見ず、耳がありながら聞きもしない。これらの者は家畜のよう、いいや、それよりもさらに迷っている。これらの者こそ、顧みない者たち。

180 もっとも美しい名はことごとくアッラーのもの。それゆえ、それら［の名］をもってかの御方に呼びかけ





なさい。かの御方の名を歪める者たちについては放っておきなさい。彼らは、その行ってきたことについて報いられるだろう。[74]

181 またわれらが創造した者の中には、真理によって導き、またそれにより公正をうち立てる共同体がある。

182 しかしわれらのしるしを嘘よばわりする者を、われらは彼らも知らないうちに、徐々に［破滅へ］連れてゆくだろう。[75]

183 われは彼らを猶予しよう。しかし、われの計画は揺るがない。

184 彼らは省みることをしないのか。彼らの仲間［であるムハンマド］に狂気はない。彼は、［警告を］明らかにするひとりの警告者に他ならない。

185 彼らは諸天と大地の王国の中に目を向け、アッラーが創造したものを見ようとはしないのか。また彼らの期限が、おそらく近づいていることについても。この後になって、どのような話なら信じるというのか。

186 アッラーが迷わせた者に導きはない。かの御方は、彼らがその逸脱の中をあてもなくさまようままにさせておく。

187 彼らはあなた［ムハンマド］に、かの時について「それはいつになるのか」と尋ねるだろう。言いなさい。「その知識は、ただ主の御許にのみある。かの時がいつかを明かすのは、かの御方の他にはない。それは、諸天と大地に重くのしかかるだろう。それは、必ず突然のこととしてやって来る」。彼らは、あなたがそのことについて詳しいかのように尋ねるだろう。言いなさい。「その知識は、ただアッラーの御許にのみある。しかし、人々の多くはそのことを知らない」。

188 言いなさい。「アッラーの御心でない限り、私は自分の利害さえどうすることもできない。もし私に、目には見えないものが知れたなら、きっとより良いものを増やしもしただろうし、悪いことに遭わずにも

189 済んだだろうに。私はひとりの警告者、信じる民に良い報せを伝える者であるに過ぎない」。[76]
190 一個の魂からあなたがたを創造したのも、またそこから、一緒に暮らせるようにと、その配偶を創造したのもこの御方。それから彼が彼女とまじわると、彼女は軽い荷をはらみ、それをそのまま運び続けた。しかしそれが重たくなると、二人はその主であるアッラーに呼びかけた。「もしあなたが良い子を与えてくれるなら、私たちはきっと感謝する者となります」。[77]
190 しかし、かの御方が二人に良い子を与えると、与えられたことにより、むしろ彼らは御方に何ものかを同列に連ねるようになった。しかしアッラーは、彼らが連ねるものを超越して、いと高くにおわす。[78]
191 彼らは、創造はされても、それ自体は何ひとつ創造しないものを［主と］同列に連ねるのか。
192 彼らを助けることも、自分自身を助けることもできないものをか。
193 たとえあなたがたが導きへと呼び招いても、彼らがあなたがたに従うことはないだろう。呼び招こうと、黙っていようと、あなたがたには同じこと。[79]
194 本当に、アッラーをさし置いてあなたがたが呼びかけているものは、あなたがた同様のしもべに過ぎない。それらに呼びかけて、あなたがたに応じさせてみなさい、もしあなたがたが真実を語っているのなら。
195 それらには、歩くための足はあるのか。あるいは、握るための手はあるのか。あるいは、見るための目はあるのか。あるいは、聞くための耳はあるのか。言いなさい。「あなたがたは、あなたがたの『同輩たち』に祈り、私に対して企んでいなさい。私を猶予するな。
196 本当に私の庇護者はアッラー、啓典を下した御方。正しい行いをする者を庇護する御方。
197 しかし、あなたがたがこの御方をさし置いて呼びかけるものは、あなたがたを助けることも、自分自身を助けることもできない」。





198 たとえあなたがたが導きへと呼び招いても、彼らがあなたがたに耳を傾けることはないだろう。あなた［ムハンマド］は、彼らがあなたの方を見ているのを見るだろう。しかし彼らには、何も見えていない。
199 ［ムハンマドよ、］容赦しなさい。親切を勧め、無知な者から距離を置きなさい。[80]
200 悪魔からの誘惑にそそのかされたなら、アッラーに加護を求めなさい。本当に、すべてを聞き、すべてを知る御方。[81]
201 本当に、畏れる者は、悪魔からのそそのかしに遭ったときは、想い起こすようにしなさい。そうすれば、たちまち目が見えてくるだろう。[82]
202 しかし彼らの同胞は、彼らをさらなる過ちの中へつき落とそうと、とどまることがない。
203 あなたがたが、御しるしをひとつももってゆかずにいると、彼らは言う、「どうして自分で作り出してしまわないのか」。言いなさい。「私は、ただ主から私に啓示されたことに従うだけ。これ［クルアーン］はあなたがたの主からの開明、また信じる民への導きと慈悲」。
204 クルアーンが読み聞かされるときは、沈黙して耳をかたむけなさい。そうすれば、あなたがたは慈悲にあずかるだろう。[83]
205 ［ムハンマドよ、］謙虚に畏れ敬い、声高に言葉を発することなく、あなた自身の内側において朝も夕もあなたの主を想い起こしなさい。顧(かえり)みない者のひとりになってはならない。
206 本当に、あなたの主の御許にある者は、かの御方に仕えるにあたり高慢にならず、かの御方を讃美し、かの御方にひれ伏す。

1 清算の日においては、警告のため遣わされた使徒たちも、教えを説いた教師たちも、自らの説教が真実であったことの証拠を示さねばならない。

2 イブリースは自らの創造者に平伏することを拒否しただけではなく、平伏する者たちの仲間となることも拒んだ。言い換えるなら彼は傲慢にも、平伏した天使たちのみならず、彼らが平伏した人間をも見下したのである。彼は傲慢、嫉妬、そして不服従という三重の罪を犯した。

3 イブリースの傲慢さと利己主義を示す節である。神は人間の身体を泥で造ったというだけではなく、そこに霊的な形態を授け、自然の摂理を教え、天使たちよりも高い地位を与えた。イブリースはこの事実を無視し、自分の出自ゆえに自分の方がすぐれているという根拠のない主張をして神の命じるところに背いた。

4 私たちが自分自身について忘れ、また私たちの創造者が誰であるのかを忘れて、生命と、生命を養うための糧を授けた主に感謝しない者になるなら、それが悪魔にとっての成功である。

5 人間は無垢と幸福の霊的な庭園に置かれたが、有限とはいえ選択の意志と能力を授けられていたことは、神の計画の一部であった。当初、神の法によって禁じられていたのは、唯一、かの木に近づくことのみであったが、人間は悪魔の誘惑に屈した。ここでイブリースからシャイターン（悪魔）へと呼称が変化した点に留意すべきである。前者は絶望と退廃といった概念を表しているが、後者は強情や憎悪、敵意を意味する。二章三四節から三六節でも、この箇所と同様の呼称の変化がみられる。

6 「篤信こそ、衣としてもっとも良いもの」。複数のイスラーム学者が、「篤信の衣」とは羞恥心や善良なふるまい、あるいは慎み深さや穏やかさ、謙虚な態度そのものか、あるいはそうした態度を表す質素で目立たない服装、あるいは戦士が身に着ける戦闘用の衣類を指すものと定義している。およそあらゆる社会において、服装とは、それをまとう者の理解や見識を反映しているものである。宗教的な意味を付与した服装は、それを身にまとう者には現世における信仰者と





しての役割を常に意識させることだろう。

7 悪魔はジンとも類似しており、通常は人間の目に見えることはない。だからこそ、悪魔のささやきには効果があるのである。しかしながら悪魔は、時に特定の人間の前に、多種多様な形態をとって現れることも可能である。

8 導きはすべての人々のためにある。だがある者には効果を発揮したとしても、また別の者は、悪を友としているがゆえに扉が閉ざされる場合もある。道を見失ったとしても、そうなるだけの十分な理由があるのである。独善的な考えから罪を自分の習慣とし、悪と善とをすり替え、意図的に選択してきたのは彼ら自身だからである。

9 世界にある美しく善良なものは、本来、神の起源を認識し理解する人々のために存在する。しかし時には、それにふさわしくないと思われる人々に祝福がもたらされることもある。これは悪魔によって引き起こされた混乱である。しかしこの世界の次に到来する世界、すなわち現世ののちの来世においては、美しいものは美しい魂にのみ属する財宝となる。このように、たとえ世界が倒錯しているように見えても、復活の日にはすべての均衡が整うようになる。

10 国家や政体とは人間のようでもある。生を受けて成長し、旺盛な精力を発揮し、最終的には死を迎える前の老衰の状態を迎える。その寿命は、短命であろうと長命であろうと、第一段階での成長の堅実さの度合いと、神の恩恵に依存している。

11 人々を誤った道へと迷わせた者には、二重の懲罰が課されることになる。第一に啓典による警告をしりぞけたこと、そして第二に、他者を誤解させたことについてである。誤った指導者に従った人々もまた、二重の罰を受ける。第一に誤った指導者を優先させ、神に対する信仰をおろそかにしたこと、そして第二に、不正に対して目を閉ざし、無分別に誤った道に従い続けたことについてである。

12 すなわち、「あなたがたもまた、自分自身の自由意志に基づいて誤った道を選び、進んできたのだ。だからあなたがたも私たちと同罪だ。他者のせいにせず、自分で自分の責任を負うべきだ」。この節については、不正をなす者や迷い去

る者というのは、お互いに相手に対して敬意を払うということの意味をまったく理解していない、という解釈もされている。

13 クルアーンの解釈者の一部には、ここでのジャマールという語は、「らくだ」ではなく「重さと太さのある縄」と訳すべきとの主張もある。いずれにせよ、その意味は明白である。天国に入るための扉は、創造主の警告を拒むほどにまでその傲慢さを肥大させた者たちが通るには、あまりにも狭いのである。

14 神の赦しを得るための道は、時として困難なように見えるかもしれない。だが主は、その道を歩むのは誰にとっても決して不可能ではないことを約束している。私たちはただ自分のできる範囲のことを行い、その上で主の圧倒的な慈愛と慈悲にすがる他はないのである。

15 火獄の仲間たちは、ただ「ナアム（はい）」と、ひとこと答えることしかできない悲惨な状態に置かれる。彼らの声は泣き叫ぶ者の悲鳴にかき消されるが、それだけで彼らの置かれた状態がわかるというものである。彼らは呪詛の中にあるが、それは神の恩恵と慈悲をはく奪された状態である。それは魂に加えられる苦痛のうち、最も悲惨でいたましいものである。

16 不正をなす者は、神の道が目の前にあるとき、自分自身の意識をそこに反映させる。道に沿ってまっすぐに進むのではなく、自分の考えに合ったものを見つけようとするのである。彼らの態度は、最終的な目的地である来世を信じていないことを示している。

17 「アアラーフ（高み）」とは天国と地獄の間の敷居であり、これがいわゆる辺土を成り立たせている。行った善と悪が同じ量の者たちは、主が彼らに慈悲を賜り、彼らが楽園に入るのを認めるまでの間、敷居に立って待たねばならない。

18 「高みにいる仲間」の呼びかけは火獄の仲間たちに向けられており、（法廷の裁判官たちによる囚人への説諭のように）現世における彼らの富や財産、傲慢の虚しさを思い起こさせるためのものである。また次の49節の前半では、今や天国





を継ぐ者となった人々を軽蔑していたことが、いかに間違っていたかが告げられる。四九節の後半部分、「楽園に入りなさい」以降は、現世では軽んじられていたが、来世では楽園の仲間となった人々を幸福へと招く呼びかけである。

19 信仰を持たない人が、来世で何が起こるのかを知るためにただ静観していたいというなら、もちろんそれは可能である。しかし知れるまでただ待っていたのでは、すべてが遅すぎることになるだろう。彼らが選んだあらゆる理想（それもまた偶像の一種である）は、彼らを迷うがままに放置するだろう。他者がその優しさや寛大さをもって助けてくれるだろうと思っているのなら、個人の責任が問われるその日、彼らは真理を思い知らされることになる。自らの行いの記録の他には、救済をもたらす手立てはないのである。別の機会を授けてほしいと乞い願おうと、彼らに与えられた機会はすでに失われている。これが信仰を持たない人の運命である。信仰者の場合であっても、たとえ信仰を持っていようと地獄へ落とされるに十分な罪を犯す人もいる。ただし、そうした者には預言者の仲裁にあずかることもできる。これにより審判の日の試練から救われ、神の赦しの下に地獄から救い出されることも可能になる。

20 天地が創造されるまで、時間は存在しなかった。諸世界が存在として出現する以前には「日」は存在しなかったのであるから、「六日間」での創造とは、言うまでもなく「諸々の段階」を表現したものである。二二章四七節では、神の御目における「一日」とは、人間の尺度に換算すれば一千年になり、また七〇章四節では五万日にも相当するとされている。したがってこの言葉は私たちの意図するところによって解釈可能な、比喩的なものであるといえる。神が「玉座の上に就く」とは、神が構築した世界における権威者とは神に他ならないことを意味しており、「玉座」はその支配の象徴である。しかし神がどのように「玉座の上に就」くのかは人間の想像の及ばぬところである。「玉座」は創造物であり、神は創造物を必要としていない。「玉座」があろうとなかろうと、神は満ち足りて自存する。

21 このたとえ話には三重の意味が込められている。（1）物質的な世界においては、風は吉報の前触れのように吹いてゆく。彼らは先駆けの騎兵のようでもあり、その背後から風の大軍勢が、重たい荷すなわち雨を積んだ雲を引き連れて押し寄

せてくる。神の恩恵は、あたかも田畑の元帥である。干上がった大地を目指して進み、慈悲の雨を降らせ、みのり豊かな地に変える。（2）精神な世界において、風は人間の意識の、あるいは人間を取り囲む「世界」の大いなる原動力である。神の慈愛の使者となって雲を運び、雨を降らせ、霊的には死んでいた魂を、再び豊かに肥えさせる。（3）これらのすべてを、ここ、この大地を這いながらにして目の当たりにし、経験として知ることができるなら、どうして復活を疑うだろうか。しかしすべては土壌の状態にかかっている。大地が貧弱では、豊かなみのりは望めないからである。

22 「大いなる日」とは、審判の日もしくは差し迫った大洪水のいずれかを指している。

23 ムハンマド・ユースフ・アリは、そのクルアーン翻訳の中で、この節を解説するにあたり以下のように述べている。「ヌーフから彼のメッセージを受け取った者だけが、彼を嘘つき呼ばわりした。……また、溺れたのも彼らのみであった。……大洪水は、聖書が我々に告げているように、全世界ではなくヌーフの民の住まう土地に影響を及ぼしたのである」。

24 六九章六節から八節に示されている通り、この破壊は七夜と八日にわたって間断なく吹き荒れた猛烈な砂嵐によってもたらされた。

25 神がサーリフを預言者としてサムードの民へ遣わしたとき、彼の民は次のように彼に尋ねた。「本当にあなたが神の預言者なら、あなたの主に、この岩から雌のらくだが生まれるよう頼んでほしい。そうしたら私たちも、あなたを本当に信じるだろう」。言われた通り、サーリフが正しく祈ると、神はただちにその祈りを聞き届け、岩から雌のらくだが生じた。この奇跡を目にすると、何人かの者はたちまち信仰の道に入ったが、自分たちの望む通りの奇跡をもたらされても、残りの者はなおも真理を拒み続けた。預言者サーリフは彼の民に、らくだには触れないよう、また自由に放牧するよう告げたが、彼らはらくだの腱を切り、最終的には殺害した。この出来事ののちに、預言者サーリフが生まれ故郷を立ち去ると、神は巨大な地震を送り、この傲慢な人々を滅ぼした。

26 アードの後を継いだサムードの民は、ダマスカスとヒジャーズ（マッカ）の間に位置するアル＝ヒジュルと呼ばれる土地に住んでいた。シャームの人々は高い水準の物質文明を達成しており、山々を切り開き、館や宮殿、貯水池を築いた。

歴史上、岩を切り刻んで居住地とした最初の人々は彼らであるといわれる。彼らが造ったこの種の住居は、千と七百にも及んだという。

27 通常、こうした場合によく見られる通り、信仰者は謙虚で慎み深いが、抑圧者は傲慢で、自然からの贈り物（それは神からの賜りものに他ならない）を独占し、正義や寛容の命じるところに耳を貸さない。預言者サーリフは、特権を持たない最下層の者たちの側についたため、攻撃されるようになった。

28 「アカラ」とは「家畜に傷をつける」ことを意味する。屠畜の前に、家畜が逃亡するのを防ぐという目的のために脚の腱を切るなどすることを指す。この残酷な慣習は、イスラーム以前のアラブの諸地域で広く行われていたが、やがてこの語は、イスラームの法に則した屠殺以外の残酷な方法で家畜を殺害する行為を指すようになっていった。

29 サーリフの民に対する罰が下されるまでに、そう長くはかからなかった。凄まじい地震が起きて人々を葬り去り、栄華を極めた文明も破壊された。五四章三一節なども参照。

30 ここでの彼の言葉は別れ際の最後の警告のようでもあり、あるいは罪と愚かさゆえに滅亡した彼の民のために嘆き悲しむ、追悼の祈りのようでもある。

31 預言者ルートは預言者イブラーヒームの孫にあたる。彼は現在のシリアに位置する死海の北東側の土地、ソドムとゴモラの民のもとへ預言者として遣わされた。この都の人々は、その他の民が犯したことのない罪業に惑溺していた。ソドムとゴモラの人々は、ルートの助言に注意を払おうとはしなかった。神は硫黄の雨と激しい地震をもって彼らを罰し、生き残った者は一人もいなかった。

32 「升と秤を十分に満たしなさい」とは、「財産の価値を不当に下げないことにより、売り手と買い手双方の権利を守るようにしなさい」という意味。マドヤンは預言者イブラーヒームの子孫であった。かれらは、かつてパレスチナとヒジャー

ズの間、紅海沿岸にある都に住んでいたものと信じられていた。その他の歴史家たちは、彼らが住んでいたのは南イエメンであったとしている。

33 マドヤンの民が住んでいた地域は、中東とアジアの商業的な交易路にあたり、エジプトと、アッシリアやバビロニアを擁するメソポタミアという高度に洗練されたふたつの文明の間に位置していたということになる。彼らには、終始、罪がつきまとっていたが、そもそも商取引において成功するには、誠実さが必須であるのに反して、彼らは長さや重さを少なく測っていた。こうした一種の詐欺行為が社会の隅々にまで浸透しており、人々が支払われるべき正当な対価はほとんど当たり前のように搾取されていた。その弊害として、以前は平和と秩序が確立されていたのが、次第に無秩序へ傾いていった。平穏だった人々の暮らしは荒み、往来での強奪などがはびこるようになった。人々は神への崇拝から切り離され、宗教が歪んだ目的のために悪用された。非合法な利益によって礼拝堂が建立されたり、詐欺的な行為によって得た利益を、慈善に見せかけた遊興に費やしたりと、宗教それ自体が搾取の手段となったのである。こうした悪事を指摘した預言者シュアイブは、次の二点を訴えた。(1)あなたがたは取るに足らない弱小の部族として始まり、神の好意によって人の数と財産を増やし、強くなった。それでいて、神の定めた法を順守せずに済まされるだろうか。(2)過去において、罪を犯した人々はどのような結末を迎えただろうか。先例がもたらす警告を受け入れずに済むだろうか。

34 ここでは、預言者シュアイブは彼の祖先の宗教に戻ることをきっぱりと断り、彼らに尋ねている。「あなたがたは、あなたがたの道の邪悪さを見せつけた後で、私たちに対し、自分の良心と自分の主に嘘をつけというのか。賄賂も脅迫も私たちには通用しないし、またどれほど私たちの愛郷心に訴え、祖先の宗教に対する敬意を求めようと、私たちを動かすことはできない。すべては神の御心と共にある。神の意志と喜びにこそ私たちは従い、神のみにこそすべてを委ねる。あなたがたの重大な偽りは、神の知識によりすべて白日の下にさらされるだろう」。

35 ここでも、真理を拒む人々の答えには彼らに特有の性質が見え隠れしている。あらゆる類いの賄賂や情実が退けられると、彼らは脅迫という手段に訴える。これは棍棒で叩きあう路上での喧嘩沙汰よりもなお悪い。彼らは決まってこう叫ぶ。「その先に行けば、おまえを待つのは破滅だけだ!」。それは信仰者が迫害や辱めにさらされ、放逐され、尊厳ある生活を送ることを妨害されるということを意味する。それでも相手が屈しないとなると、家族や親類縁者といった周囲の人々までもが、侮辱と非難の対象となって責め苛まれる。しかしながら九二節で述べられる通り、悪事も呪詛も、やがてはその者自身にはね返る。破滅にみまわれ、消し去られるのは彼ら自身なのである。

36 人間は元来、純正に創られている。すなわち、罪も汚れもない無垢である。預言者が必要とされるのは、そこに彼が取り組むべき腐敗と不正が生じているときである。預言者の到来は、預言者に従う人々にも多大な試練と労苦をもたらすものである。イーサーのように、穏やかさで知られる預言者でさえ「平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ(マタイ伝一〇章三四節)」と述べている。しかしそれもすべて神の計画の内である。神に仕えるにふさわしい者となるには、試練と労苦を通して謙遜を学ぶことから始めなくてはならない。

37 九七節から九九節は、節としては分かれていても全体として読まねばならない。既出の、五人の預言者たちの物語の説き明かしがここにある。人々が傲慢にも神の法を無視するか、あるいは惰眠をむさぼっているか、虚しい夢想に陥っているとき、神の怒りは夜と昼とを問わず下される。創造者の計画から逃げおおせる者、あるいは自分だけは計画の外にいると構えていられる者など、誰ひとりとしていないのである。

38 「アッラーの謀りごと」とは、前ぶれもなく突然に科される懲罰を意味する。この章で伝えられている預言者の伝道の物語は、土地や権力、あるいは過去の経験を継承している現代の人々や未来の世代の人々に対する警告である。もしも彼らが、自分たち自身の不服従によって心が頑なになり、助言にも警告にも耳を貸さず、そのために同じ過ちや罪を犯したなら、彼らもまた過去に破滅を迎えた人々と同じ運命に見舞われるだろうことを知らねばならない。

39 神を否定し滅ぼされた人々の物語が先例として挙げられたのち、章の流れは破滅を免れた人々の物語に向かう。ムーサー

の民の物語である。

40 ユースフがエジプトの宰相を務めていた頃、ユースフの父であり預言者の一人でもあったヤアクーブに率いられ、イスラエルの民がパレスチナからエジプトへ移住してきた。時代が下ると、エジプトの民は当然のごとくイスラエルの民を奴隷として使役し迫害するようになった。脱出を試みるべき時が来ているのは明らかであった。

41 エジプトの神話において蛇は大きな役割を果たしていた。自らのみわざをあらわすのに、神が蛇を象徴として選んだのもそのためである。そしてそれが魔術ではないことを示すために、ふたつめの奇跡がムーサーに授けられた。真白な手とは、神のみが授けることのできる光によって輝く手のことである。

42 長老たちのフィルアウンへの助言には、彼らが状況を読み誤っていることが示されている。彼らはムーサーのことを、自分たちの理解できる範囲でしか理解しようとせず、彼を魔術師であると思い込み、さらにこの明らかに強力な魔術師が、どのような魔術を仕掛けてくるかを思い、恐慌をきたしていた。そこで彼らはフィルアウンに、エジプトじゅうの最も強力な魔術師たちを呼びあつめ、彼らが到着するまでの間は、ムーサーとハールーンに屈することも、あるいは明確に歯向かうこともしないよう助言した。神の預言者たちには、待つための余裕は十分にあった。時間は、真理に対して常に好意的に働く。つまり時間はここでも彼らに味方したのである。

43 フィルアウンとその王宮は、二重の怒りに満ちていた。ひとつめに、神の力に直面させられて自分たちの卑小さが暴露されてしまったこと、そしてふたつめには、彼らの傀儡も方便も彼らを捨てて離れてしまったことによる。魔術師たちは、すぐさま神の御しるしを認めた。そのため、この場におけるムーサーとハールーンの使命はひとまず果たされたことになった。

44 罪が習慣となってしまっている人が、近しい者たちが罪や過誤から救い出そうとすればするほど、ますます憤慨して罪に固執するのは、一般によく見慣れた光景であるといえる。自分の動機を基準にして他者の動機を判断し、何か下心が





あるに違いないと決めつける。そうした者がそれなりの権力を有してでもいれば、躊躇なくそれを行使して残酷な復讐をしてのけるのである。

45 エジプトを脱出するまでの間は危機的な状況の連続ではあったものの、のちにイスラエルの民は、送り届けられた先のカナーンの地で権威を授かるようになる。ユーシャウによるエルサレム征服ののち、彼らはダーウードやスライマーンのように司祭的な王権を認められた者を輩出し、物質的な力も授かるようになった。

46 彼らは根深い迷信のために、彼ら自身の不正に対する神の罰を、凶事の前兆とみなした。彼らはムーサーとその民が、彼らに不幸をもたらしたと考えた。悪の根源と懲罰の原因が、自分たち自身の中にあるとは思いもしなかったのである。これはあらゆる時代に共通して起きることである。人間は神に罰せられた自らの過誤を、公平で正直な目をもって見つめ直す代わりに、高潔な人々の、他者とは異なる行いを非難するのである。

47 一七章一〇一節には「九つの明白な証」と言及されている。杖（七章一〇七節）、真白に輝く手（七章一〇八節）、数年にわたる凶作（七章一三〇節）、みのりの不足（七章一三〇節）。これに加えて、この節で述べられている五つ「洪水と、いなごと、しらみと、かえると、血」がそれに相当する。

48 ムーサーの仲裁とは、祈ることであった。災難や災厄には、それぞれ神の命じた通りの期限が定められていた。順当な期限に達すれば、災難もおさまった。仲裁にはふたつの意味があった。（1）神の名が呼ばれることにより、意識が神の存在に傾けられ、悔悟を誓った罪人の心をあるべきところへと連れてゆき、（2）祈りが聞き届けられれば、罪人であっても再び機会が与えられる。時代を超えた普遍の真理である。

49 ムーサーの先導の許に、イスラエルの民はしばらくの間はシナイ半島に留まった。そののち、彼らはエルサレムとダマスカスを占領した。クルアーン解釈者の多くが、「大地の東西」とは、ダマスカスとエジプトのことであると解釈している。その他、イスラエルの民がエジプトで権威の座についたことは一度たりともなかったことを指摘し、これはシナ

イ半島内に位置するパレスチナとダマスカスを指すものとする解釈者もいる。

50 紅海を渡り終えたイスラエルの民は、シナイ半島に住まうアマレク人に接した。偶像を崇拝する彼らを目にして、イスラエルの民はムーサーに、自分たちにも崇拝に用いる偶像をひとつ作ってくれるよう頼んだ。これは、人間の模倣を好む性質を示す出来事である。

51 神はムーサーを通して、イスラエルの民に注意を促した。奴隷の身分を強いられていた間に、イスラエルの民は、苦しみの中で忍耐と、堅固な忠誠を保ち続けることを学んだはずである。救いを得たのちは、謙遜と正義、そして公正さを学ばねばならない。

52 民を導く神の人が、何らかの理由で不在の場合、指導者としての義務を果たす代理者が必要となる。代理者には、必ずしも血縁の兄弟に限られないものの、同胞の中から選ばれるべきである。代理者は以下の三つを忘れず、謙虚にこの義務を履行しなくてはならない。（1）代理者として、常に本人の導きに従うこと。（2）権力の本質として、正義と公正さこそが最も重要であるのを知ること。（3）指導者本人の不在は、過誤がその頭をもたげる最上の機会となる。そのため代理者は、本人の不在に際し、目の前に置かれる罠を常に警戒すること。

53 神の栄光は、たとえその反射に過ぎなくとも卑俗な物質的存在には強大である。光り輝く山の峰でさえ、言語を絶する神の栄光の前には塵と化してしまう。そのためムーサーは、肉体的な感覚から離れることによってしか、神の顕現の瞬間を持ちこたえることができなかった。われに返ったとき、彼は信仰者の真のあり方を会得していた。また人間の有する感覚と、神の電撃のような栄光との間にある隔たりを悟った。彼はただちに悔い改め、改めて自らの信仰を告白した。

54 「人々の上にあなたを選んだ」。現代人も、ここにいう「人々」に含まれている。ムーサーには気高い使命に加えて、神とじかに語らうという名誉が授けられた。

55 今となっては失われてしまった律法の碑版には、霊的な真理の精髄が刻み込まれていた。ムーサーは預言者の使命として、





人々が従うべき訓令や禁令をこの碑版から導き出していたのである。次の節では、一部、神の語り口が、権威と栄光がどよもしているのを示す「われら」から、対個人に関わる「われ」に切り替わる。これはクルアーンの随所にみられる特徴であり、注目すべき点である。

56 クルアーンにおいて頻繁に述べられている通り、神が罪人を罪に陥「らせる」とは、彼ら自身の行為の帰着であり、彼ら自身の自由な選択の結果であることが示されている。

57 神の諸法に従わない者は、彼らが自ら得たものによって地獄の業火に入ることが示されている。

58 シナイ山でさらに十日、ムーサーが不在にしている間に、イスラエルの民の一人でサーミリーという名の男が、全員の所有していた金の装飾品を溶かし、エジプトのメンフィスにあったオシリスの雄牛にも似た仔牛の像を造った。サーミリーは人々にこう告げた。「これがムーサーとあなたがたの主である」。職人としての彼の腕前はみごとなものであり、金の仔牛に風が吹くと、それはまるで生きた雄牛のように鼻息のような音を立てたという。

59 ハールーンはムーサーに「私の母の子よ」と、親愛の情に訴える言葉で語りかけた。彼らを引き止めようとしたところ、人々は騒然となり、自分はほとんど殺されかけたのだと説明した。そして偶像崇拝は自分が引き起こしたことでもなく、また同意してもいないと述べた。二〇章八五節も参照。

60 兄の潔白を確信したとき、ムーサーの怒りは穏やかな優しさに変わった。彼は自分自身と自分の兄のために、彼の民の間に偶像崇拝が広まるのを止められなかったことへの赦しを求めて祈りを捧げた。

61 イスラエルの民は、金の仔牛を崇拝したことを後悔した。そののち神はムーサーに、彼の部族の中から七十名を選んで主の御前に集め、悔い改めをするよう命じた。これについては、次の節で説き明かされている。

62 七十名の長老たちが粛々と山へ連れてこられたが、神がムーサーに語りかけた場所からは少し離れていた。彼らは暗黙のうちに「信仰を」証言したが、「はっきりとアッラーを見るまでは、私たちはあなたを信用しない（二章五五節）」とも伝えら

れる通り、彼らの信仰は未だ完成していなかった。そこに強大な揺れ［地震］が起こり、彼らは全員、その場に昏倒した。ムーサーは、彼らに赦しがあるよう、また彼らを救ってくれるよう主に祈り、主もこれを聞き届けた。

63 神の慈悲はあらゆるもののためにある。神の慈悲は普遍であり、あまねく行き渡っている。神の正義と懲罰は、まっすぐな道から逸脱し、創造主に抗う者のために用意されたものである。

64 上記の節の「ウンミー（文字を知らない）」という語は、読み書きができないという意味で使われるのが一般的である。ここではこの語は、神の言葉を賜る者としての預言者が、神の言葉に触れたこともない、汚れなき純潔の状態であったことを強調するのに用いられている。

65 イスラエルの民は、預言者ヤアクーブの十二人の息子の子孫であった。彼らは増え続け、やがてそれぞれの支族をなすようになった。

66 これとその前の節については二章五七節から五八節も参照。ここでの「食べる」とは、文字通りの食事に限らず、人生の良きものを楽しむことを意味するものと解釈してもよいだろう。

67 ここでの「天からの大難」とは疫病であった。

68 神はイスラエルの民に対し、安息日として守られるべき土曜日には、魚を食べないよう命じた。そして彼らに対する試みとして、ある土曜日、浅瀬じゅうに魚の群れを泳がせて彼らに送り込んだ。それを目にしたイスラエルの民は、神の命令に背いて安息日にもかかわらず漁に出た。こうして彼らは、悪事をはたらく者となってしまった。

69 多くの人々が、悪人に説教をしたところで何の良いことがあるのかという疑問を抱くのも何ら不思議のないことである。これに対する答えは次の通りである。（1）誰であろうと、悪を目にしたなら、見過ごしにせず異議を唱えなくてはならない。それが神に対する人間の責任であり、義務である。（2）警告が効果をもたらし、尊い魂が救われる可能性は、いつ・どのような場合であっても存在する。この節には、預言者がマッカにおいて、たとえ目に見えて成果が現れずと





も伝道し、メッセージを説き続けていた時代の啓示であるという特別な意味がある。同時に、この節をもって説き明かされていることは、いつの世においても当てはまる。

70 安息日に敬意を払わなかったために、彼らは猿のようになった。注釈者たちの間には、彼らイスラエルの民が身体的にも猿のようになったのか、あるいは単にそれらしき行動をするようになったのかについて意見の相違がある。いずれにせよ、それは神の懲罰であった。神は彼らの内面下にあるものを、何かしらの形で外面上に明らかにしたのである。

71 「彼らが、帰ってくるようにと」。すなわち、「彼らが正義に戻るようにと」。

72 すべての魂は、誕生する以前に神の実在と唯一性を認め、証言しているという「始原の契約」という解釈の典拠となった節である。これが天地創造よりも前に起きたことであるか、あるいは母の胎内で起こるのかについては様々な議論がある。

73 「踏み外した者の話」。これが特定の個人を指しているのか、もしそうであれば誰のことであるのか、クルアーンの解釈者や注釈者たちの間には様々な見解がある。ある者は、これはムーサーと同時代を生きたバラアムという名の学者であり、後ろ盾を得て預言者ムーサーと敵対した人物であるという。彼には才能も地位もあった。加えて霊的な洞察を得る機会を与えられていながら、彼はそれを頑なに拒み、物質的な富と栄誉の方を好み、実際にそれらを手に入れた。エジプトの支配者フィルアウン、裕福な貴族階層を代表するカールーン、そして腐敗した打算的な学者の典型であるバラアムの間には、完璧な正三角形が確立していた。彼らはそろってムーサーに敵対した。彼らは時代を超えて繰り返し表象される、ある種の原型を造ったのである。

74 あるハディースによれば、「神は九十九の名を持つ。それを憶える者（それらの名の持つ意味を理解し、自らのふるまいに反映させようとつとめる者）は、誰であれ天国へ入るだろう」。ただしこのハディースは、神の名の数に九十九という制限を設けているのではない。神はそれ以上に多くの美名を有する。私たちが未だ知らずにいる名もあるだろう。

75 神の恩恵は、徴を拒んだからといってただちに断たれることはない。時として神はその恩恵を一定の期間まで与え続け、悪人が享楽におぼれ続けるように仕向ける。彼らがほとんど予期すらしていなかった頃になってその恩恵を取り上げ、代わりに懲罰が下される。神によるこの駆け引きは「イスティドラージュ」と呼ばれる。

76 クルアーンが繰り返し預言者の「人間性」を強調するのは、創造主の諸性質あるいは諸力を分かち合うことが可能な被造物は一切、存在しないという教えと対をなすものである。

77 人間の誕生の神秘は、乳児が生まれる前から、父となり母となる者に大きな影響を及ぼす。彼らは不安を抱きつつ神と向き合う。妊婦の胎内でかすかに動くその生命に、親となる者たちは想像力によってしか触れることができない。子どもの誕生後も、この厳粛で希望に満ちた感覚をもって神に向き合うことができるなら、それは親たち自身だけではなく、次の世代のためにも喜ばしいことである。しかし次の節で述べられる通り、多くの場合こうした姿勢は変化してゆく。

78 新たな生命が子宮の中で成長するという荘厳な事実を通して、人間は、唯一絶対の神の摂理をより意識するようになるのでなければならない。しかし出産は、往々にして魔術的な性質をもった不合理な迷信や、様々な風習と一神教の教えの奇妙な折衷案に取り囲まれている。神の徴のひとつであるはずの出産が、理性的な感覚の欠如によって歪められるのである。

79 偽りの礼拝がはびこれば、真理を教える師は落胆させられることしきりである。彼が「預言者」である限り、まるで自分が何の結果ももたらせていないかのように感じるだろう。それでも、一九九節に説かれている通りの精神をもって、敵対者を赦し、正しいことを教え、無知からくる彼らの疑念や優柔不断な態度に加担することなく、自らのなすべきことを行い続けるのが預言者の義務である。

80 ここで「親切」と訳出した語は、一神教的な信条と、新たな啓示による公正な社会的規範においても受け入れが可能な諸々のアラブの伝統的な慣習を指している。とはいえ、いくつかの無害な伝統は排斥されずに残ったものの、イスラーム以





前のアラブのしきたりの多くはイスラームの規範と置き換えられた。

81 神の預言者といえども人間である。悪が広まっていれば、復讐や報復、あるいは少しばかりの沈黙を有効な手段として用いるか、あるいは無視なり妥協なりすることが最善のように思えることもあるだろう。神の預言者でさえそうであるなら、日々、絶えず悪魔のささやきを耳にしている私たちの場合は一体どうであろうか。そのようなとき、預言者は常に神の加護を求めた。

82 霊的なヴィジョンが得られるのは、悪魔の誘惑が退けられているときだけである。悪魔の誘惑は心の錆のようなものであり、心の目が神の真理を捉えることの妨げとなる。

83 クルアーンが朗読されたなら、神の言葉に対する崇敬と共に、最大の注意を払って耳を傾け、その意味の理解に努めるべきである。それにより人は恩恵を得て、自らの人生に活かしてゆくことができるようにもなる。

# 第八章　アル＝アンファール　戦利品

マディーナ啓示

本章は、戦闘によって獲得された戦利品は神とその使徒に属するもの、すなわち公共財として扱われるべきものであることを宣言する第一節からその名がつけられている。全七五節の大半は、ヒジュラ暦二年めのマディーナにおいて啓示された。一部の解釈者によると、三〇節から三六節はヒジュラ直前のマッカ啓示であるとされている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 彼らはあなた［ムハンマド］に、戦利品について尋ねるだろう。言いなさい。「戦利品はアッラーと、そ
の使徒のもの。それゆえ、あなたがたはアッラーを畏れ、互いのあいだを正しなさい。アッラーとその
使徒に従いなさい、もしあなたがたが信仰者なら」。
2 信仰者とは、アッラーが想い起こされるとその心をおののかせ、その御しるしが読み聞かされると信仰
を深め、その主に委ねる者たちのこと。
3 礼拝のつとめを守り、われらが糧としたものの中から費やす者たちのこと。
4 これらの者こそ、真の信仰者。彼らには、主の御許に［高い］位階と、赦しと、貴い糧とがあるだろう。 1





5 あなたの主は、真理をもってあなた［ムハンマド］を家から出立させた。しかし信仰者のうち一部の者は、
それを嫌がっていた。
6 彼らは、真理が明らかにされた後になっても、そのことについてあなたと言い争う。あたかも、みすみ
す死に追いやられているかのように。
7 ふたつの隊のうち、ひとつはあなたがたのものになる、と、アッラーがあなたがたに約束したときのこ
と［を思いなさい］。あなたがたは、武器を持たない方をあなたがたのものにしたがっていた。しかしアッ
ラーは、その御言葉により真理を真理たらしめ、［真理を］拒む者が根絶やしとなることを意図した。 2
8 たとえ罪を犯す者たちが嫌がろうと、真理を真理たらしめ、嘘いつわりを嘘いつわりたらしめるため。
9 あなたがたが主に助けを願ったときのこと［を思いなさい］。かの御方はあなたがたに応じた。「われは
居並ぶ千の天使たちをもって、あなたがたを助けよう」。 3
10 アッラーは、それをただあなたがたへの良い報せとして伝えた。あなたがたの心が、それで安らかにな
るようにと。勝利は、ただアッラーの御許からのみ。本当にアッラーは威力あり、もっとも賢明である。 4
11 かの御方が、あなたがたを安堵させるためにまどろみでおおい、またあなたがたを清らかにするために、
空から雨を降らせたときのこと［を思いなさい］。悪魔のそそのかしは洗い流され、あなたがたの心は強
くなり、その足元も確かなものとなった。 5
12 あなたの主が、天使たちに啓示したときのこと［を思いなさい］。「われはあなたがたと共にある。それ
ゆえ、信じる者たちをしっかりと立たせなさい。われは、［真理を］拒む者たちの心に恐怖を投げいれよう。
それゆえその首を打ち、それぞれの指先をすべて打て」。
13 それは彼らが、アッラーとその使徒に歯向かったため。アッラーとその使徒に歯向かう者には、本当にアッ

ラーは応報に厳しい御方。

14 この通り。それゆえ、これを味わえ。［真理を］拒む者には業火の懲罰があると知れ。

15 信じる者たちよ。あなたがたは、［戦場において］進撃する［真理を］拒む者たちと会ったとき、彼らにその背中を向けてはならない。

16 戦いのために向きを変えるか、あるいは戦列に加わるためでない限り、その日、彼ら［真理を拒む者］にその背中を向ける者は、アッラーの怒りを招くだろう。彼らの住まいは地獄である。行き着く先の、何と悪いことか。

17 あなたがたが彼らを討ち取ったのではない。アッラーが彼らを討ち取ったのである。あなた［ムハンマド］が射たとき、射とめたのはあなたではない。アッラーが射とめたのである。それはかの御方が信仰者たちを、すぐれた試練をもって試みるため。本当にアッラーはすべてを聞き、すべてを知る。[6]

18 この通り。アッラーは、［真理を］拒む者の企みを弱らせる。

19 たとえあなたがた［真理を拒む者］が勝利を願おうと、すでに勝敗は到来した。あなたがたが［迫害を］やめるなら、それがあなたがたのためにもっとも良いこと。しかし、もしあなたがたが［迫害を］繰り返すなら、われらも［反撃を］繰り返すだろう。たとえ［数において］多かろうと、あなたがたの軍勢は何の役にも立たないだろう。アッラーは、信仰者と共にあるのだから。

20 信じる者たちよ。あなたがたは、アッラーとその使徒に従いなさい。聞こえていながら、立ち去ってはならない。

21 聞いてもいないのに、「私たちは聞いた」と言う者たちのようになってはならない。

22 本当に、生きるもののうち、アッラーの御許においてもっとも悪いものとは、聞かず、ものを言わず、





考えることをしない者たち。[7]

23 もしアッラーが、彼らに何かしらの良さがあるのを認めたなら、きっと聞こえるようにしていただろう。しかし、たとえかの御方が聞こえるようにしても、彼らは背を向けて立ち去っただろう。

24 信じる者たちよ。あなたがたを生かすものへと呼びかけられたときは、アッラーとその使徒に応じなさい。アッラーは、人間とその心とのあいだにおわすことを知りなさい。またあなたがたは、かの御方に召し集められることも。[8]

25 試練を畏れなさい。それはあなたがたのうち、特に不正をなす者だけが遭うものではない。アッラーは応報に厳しい御方であることを知りなさい。

26 あなたがたがこの地上で、［数において］少なく、無力とみなされ、人々があなたがたを襲うのではないかと恐れていたときのこと［を思いなさい］。かの御方はあなたがたをかくまい、その助けによってあなたがたを強め、諸々（もろもろ）の良いものをもってあなたがたの糧とした。あなたがたは、感謝するようになるだろう。

27 信じる者たちよ。あなたがたは、アッラーとその使徒を裏切ってはならない。そうと知りながら、あなたがたへの信頼を裏切ってはならない。[9]

28 あなたがたの財も子どもも、あなたがたに対するひとつの誘惑であると知りなさい。また大いなる報奨は、アッラーの御許にあることも。

29 信じる者たちよ。もしあなたがたがアッラーを畏れるなら、かの御方はあなたがたに［正誤の］規範をもたせ、またあなたがたから諸々の悪事を免じ、あなたがたを赦すだろう。アッラーは大いなる御恵みの所有者。[10]

30 ［真理を］拒む者たちがあなた［ムハンマド］に対し、あなたを拘禁するか、あるいは殺すか、あるいは追放しようと策略したときのこと［を思いなさい］。彼らは策略をめぐらせた。しかしアッラーも策略をめぐらせた。そしてアッラーは、策略者のうちもっともすぐれている。

31 われらの啓示を読み聞かされるとき、彼らは言う。「私たちはすでに聞いた。私たちも、望めばこれと同じようなことを言うことはできる。これは大昔の人の伝説に過ぎない」。[11]

32 また、彼らがこう言ったときのこと［を思いなさい］。「アッラーよ、もしこれがあなたの御許からの真理なら、私たちの上に天から石を降らせるか、あるいは痛烈な懲罰を下してみせよ」。

33 アッラーは、あなたが彼らの中にいるあいだは、彼らに懲罰を科さずにいた。また彼らが赦しを願うあいだは、彼らに懲罰を科さずにいた。

34 しかし庇護者でもない彼らが、［人々を］禁制のマスジドから妨げるとは、どうしてアッラーが懲罰を科さずにおくだろうか。ただ畏れる者を除いて、その庇護者にはなれない。しかし、彼らの多くはそれを知らない。[12]

35 かの家での彼らの礼拝は、ただ口笛を吹き、手を叩くだけ。「それなら、あなたがたが信じずにいたことへの懲罰を味わえ」。[13]

36 信じない者たちは、アッラーの道をさえぎるためにその財を費やす。費やさせておきなさい。それは彼らの悔恨となるだろう。そののち、彼らは打ち負かされるだろう。［真理を］拒む者たちは、地獄に集められるだろう。[14]

37 それはアッラーが、悪人を善人から区別するため。悪人の上に悪人を置いて積み重ね、ことごとく地獄に投げ入れる。これらの者こそ敗者。





38 ［真理を］拒む者たちに言いなさい。「もし［迫害を］やめるなら、過去のことは赦されるだろう。しかし、もし［迫害を］繰り返すなら、すでに先人の慣例があるではないか」。

39 迫害がなくなり、宗教のすべてがアッラーのみに帰されるまで、彼らと戦いなさい。しかし、もし彼らがやめるなら、本当にアッラーは、彼らのすることを見ている。[15]

40 もし彼らが背を向けるなら、アッラーはあなたがたの庇護者であることを知りなさい。なんとすばらしい庇護者だろうか。なんとすばらしい援助者だろうか。

41 あなたがたが得た戦利品は、何であれその五分の一はアッラーと、使徒と、［使徒の］近しい親族と、孤児と、貧しい者と、旅路にある者のものと知りなさい、もしあなたがたがアッラーを信じ、また分別の日、ふたつの軍隊が遭遇したあの日に、われらがしもべ［ムハンマド］に下したものを信じるなら。アッラーは、あらゆるものごとにおいて全能である。[16]

42 あなたがたが谷のこちら側に、彼らがあちら側に、そして隊商があなたがたよりも下方にいたときのこと［を思いなさい］。もしあなたがた［両方の軍勢］が、互いに約束し合っていたなら、あなたがたは約束を破っていただろう。しかしそれは、アッラーがあらかじめ命令していたことを果たすため。滅ぶ者が明白な証によって滅び、また生きる者も明白な証によって生き残るため。本当にアッラーはすべてを聞き、すべてを知る。[17]

43 アッラーがあなたに夢の中で、彼らを［数において］少なく見せたときのこと［を思いなさい］。もしアッラーがあなたに、彼らを多勢に見せていたなら、あなたがたは勇気をなくし、［戦うべきか否かの］問題についてきっと争っていただろう。しかしアッラーは救った。本当にかの御方は、胸の中に抱くことを知っている。[18]

44 かの御方が、あなたがたを彼らと遭遇させたときのこと［を思いなさい］。あなたがたの目に、彼らを少なく見せ、また彼らの目に、あなたがたを少なく見せていたのは、アッラーが、あらかじめ命令していたことを果たすため。万事はアッラーに帰される。

45 信じる者たちよ。［敵の］一隊に遭遇したときはしっかりと立ち、アッラーを多く想い起こしなさい。そうすれば、あなたがたは栄えるだろう。

46 アッラーと、その使徒に従いなさい。また、争ってはならない。さもないとあなたがたは勇気をなくし、強さも失われるだろう。よく耐えていなさい。本当にアッラーは、よく耐える者と共にある。[19]

47 得意げに、人々に見せびらかそうと自分の家から出てきて、アッラーの道をさえぎる者のようになってはならない。アッラーは、彼らの行いを把握している。[20]

48 悪魔が彼らの行いをすばらしいことのように見せ、こう言ったときのこと［を思いなさい］。「今日は誰も、あなたがたを破ることはできない。本当に私は、あなたがたの側にいる」。ところがふたつの軍隊が互いにまみえると、彼はきびすを返して言った。「本当に私は、あなたがたとは何の関わりもない。私には、あなたがたに見えないものが見える。私はアッラーが恐ろしい。アッラーは応報に厳しい御方」。[21]

49 偽善者や、心の中にやまいのある者が「彼らは自分の宗教に欺（あざむ）かれているのだ」と言ったときのこと［を思いなさい］。しかし、誰であれアッラーに委ねるなら、本当にアッラーは威力あり、もっとも賢明である。[22]

50 もしあなたに、天使たちが［真理を］拒む者たちの顔や背を打って、その魂を召し寄せるのを見ることができたなら。「燃えさかる懲罰を味わえ。[23]

51 これは、かつてあなたがたが自らの手で送り届けたもの。本当にアッラーは、そのしもべたちを不正に扱わない」。

52 フィルアウンの一族や、それ以前の者のやり方と同じで、彼らはアッラーの御しるし［の真理］を拒んだ。それゆえアッラーは彼らを、その罪のために捕えた。本当にアッラーは強力にして応報に厳しい御方。

53 それはアッラーが、ある民に恵んだ恩寵については、彼らが自分たちの内側にあるものを変えることがない限り、決して変えることはしないため。そして本当に、すべてを聞き、すべてを知るのはアッラーである。[24]

54 フィルアウンの一族や、それ以前の者のやり方と同じで、彼らは主の御しるしを嘘であるとした。それゆえわれらは彼らを、その罪のために滅ぼし、フィルアウンの一族を溺れさせた。彼らはみな、誰もが不正をなす者であった。

55 生きるもののうち、アッラーの御許においてもっとも悪いものとは［真理を］拒む者たち。彼らは信じるということをしない。

56 あなたと契約を結ぶたびに、後でいつも契約を破る者たち。彼らは、畏れる者ではない。[25]

57 もしあなた［ムハンマド］が、戦闘で彼らと向き合ったなら、彼らの背後にいる者たちへの見せしめにしなさい。それで彼らも、思い知ることだろう。

58 また、もしあなたが、いずれかの民の裏切りを恐れるなら、あなたの方から同じく彼ら［との契約］を突き返しなさい。本当にアッラーは、裏切る者を愛さない。

59 ［真理を］拒む者たちに、［主の目的を］追い越せるなどと思わせてはならない。本当に、彼らは逃げおおせることはできない。

60 彼らに対しては、あなたがたはできる限りの武力と軍馬を準備しておきなさい。それによりアッラーの敵、

あなたがたの敵、またそれ以外に、あなたがたは知らなくともアッラーが知る敵を恐怖させておきなさい。アッラーの道のためにあなたがたが費やしたものは、何であれ十分に返される。決してあなたがたが不正に扱われることはない。

61 もし彼らが和平に傾くのなら、あなたもそちらに傾き、アッラーに委ねなさい。本当に、すべてを聞く御方、すべてを知る御方。[26]

62 また、たとえ彼らがあなたを欺（あざむ）こうとしても、本当にあなたには、その助けにより、また信じる者たちによりあなたを支えるアッラーがあれば十分である。

63 また、彼ら［信じる者］の心を調和させるのも御方。たとえ地上にあるものをことごとく費やしても、あなたには彼らの心を調和させることはできない。しかしアッラーは彼らのあいだを調和させる。威力あり、もっとも賢明な御方。[27]

64 預言者よ。あなたにはアッラーがあれば、またあなたに従う信仰者たちがいれば十分である。

65 預言者よ。信仰者たちを奮い立たせ、戦いに向かわせなさい。もしあなたがたの中に、よく耐える者が二十人いれば、二百人を破るだろう。よく耐える者が百人いれば、千人の信じない者たちを破るだろう。それは彼らが、何も理解していない民であるため。

66 今、アッラーはあなたがたの負うものを軽くした。それはかの御方が、あなたがたに弱さのあることを知ったため。それゆえもしあなたがたの中に、よく耐える者が百人いれば、二百人を破るだろう。もしあなたがたの中に千人いれば、アッラーの思し召しにより二千人を破るだろう。アッラーは、よく耐える者と共にある。[28]

67 地上を制圧しつくすまでは、捕虜をとるなど預言者にふさわしいことではない。あなたがたは現世の品々





を欲する、しかしアッラーは［あなたがたのために］来世を欲する。アッラーは威力あり、もっとも賢明である。[29]

68 もしあらかじめアッラーからの定めがなかったなら、あなたがたは受け取ったもののために、大いなる懲罰に遭っていただろう。

69 あなたがたの戦利品に、合法で良いものがあればそれを食べなさい。そしてアッラーを畏れなさい。アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。

70 預言者よ、あなたがたの手の内にある捕虜たちに言いなさい。「もしアッラーが、あなたがたの心の中に何かしら良さがあるのを認めたなら、あなたがたが奪われたものよりも良いものを与え、またあなたがたを赦すだろう。アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い」。[30]

71 もし彼らがあなたを裏切ろうとするなら、彼らはそれ以前にすでにアッラーを裏切っている。それゆえ、かの御方はあなたに彼らを制させた。アッラーはすべてを知り、もっとも賢明である。

72 信じ、移り住み、自分の財も自分自身もアッラーの道に投じて励む者たち。また彼らをかくまい、助ける者たち。これらの者は、互いに味方同士。信じはしても移住せずにいる者たちについては、彼らが移り住まない限り、彼らの庇護についてあなたがたには何も負わされない。もし彼らが宗教のことで助けを求めているなら、あなたがたとのあいだに誓約のある民に反さない限り、彼らを助けなくてはならない。アッラーは、あなたがたが行っていることをすべて見ている。[31]

73 ［真理を］拒む者たちも、互いに味方同士。もしあなたがたがそうしなければ、地上は騒動になり、大いなる退廃が広まるだろう。[32]

74 信じ、移り住み、アッラーの道のために励む者たち、また彼らをかくまい、助ける者たち。これらの者

こそ、真の信仰者。彼らには赦しと、貴い糧とがあるだろう。

75
後になって信じるようになり、移り住み、あなたがたと共に励む者たち。これらの者も、あなたがたの身内。しかしアッラーの定めにより、血縁のある者同士のあいだはそれよりも近い。本当にアッラーは、ありとあらゆるものごとを知る。[33]

1 「バドルの戦い」以前の信仰者たちは、戦いとなると落ち着きを失い、不満げであった。一部の者たちは戦利品がどう分け与えられるかに関心を抱いていた。神は本章を啓示することによりこれに応じた。

2 バドルの戦いの直前、シリアとの交易によって財を築くことでマッカのクライシュ族による圧力をしのいでいたマディーナのムスリムたちには二つの選択肢があった。ひとつめは、シリアからマッカに戻るクライシュの隊商を、四十名ほどの手勢でもって襲撃することである。こちらはさほど危険を伴うことではない上に、多くの戦利品が約束されていた。もうひとつの選択肢とは、預言者が神の命ずるところに従って実行したことであるが、武装した千名からなるクライシュの軍勢を攻撃することである。ムスリムたちは三百名を超えず、武器にも乏しかった。しかし後者を選択することにより、ムスリムは世に知られるマッカの豪族に勝利した。マッカの支配層の権力はゆるがせになり、二度と失地を回復することはなかった。

3 ムスリムの軍勢を圧倒するかに思われた敵の兵士の数を見て、預言者ムハンマドは両の手を挙げて神に祈った。「主たる神よ！　あなたが私に与えた約束を果たしてください。あなたがこのわずかな信仰者の一団を滅ぼしたなら、あなたを崇拝する者は一人残らず消えてしまうでしょう」。彼がこの祈りを何度か繰り返すと、主は偶像を奉ずる者に対して





天使の軍勢を遣わし、真理と善導のための勝利を保証した。

4 ムスリム、アブー・ダーウード、ティルミズィー、アフマド・イブン・ハンバルその他の伝えるハディースと、加えてブハーリー編纂『サヒーフ』に見られる類似のハディースによると、この節は預言者の祈りに応じて啓示されたといわれる。「……バドルの戦いの日、預言者は自らに従う者たちを見、それから数にしておよそ千の、神を神とも思わぬ者たちを見た。そこで神の預言者は『キブラ』の方に向きを変え、両の手を掲げ、養いの主にドゥアー（祈願）した。『神よ！　あなたが私に約束したことを成し遂げてください！　神よ！　あなたに服従するこの小さき軍勢が、あなたゆえに滅ぼされたなら、あなたへの崇拝も地上から滅ぶでしょう。……』」。

5 先に到着したのはクライシュの軍勢で、彼らはバドルじゅうの井戸使用を厳重に確保した。しかし神はムスリムに味方した。最初に眠気を遣わし、彼の神経を鎮めると、次に雨を降らせた。それは水の必要を満たすだけではなく、雨で地面が固まることで接近戦に適したものとなった。

6 クライシュの軍勢がムスリムと戦うために進軍してきたとき、預言者は再び両の手を挙げて神に祈った。「あなたの使徒を拒む信仰なき者たち、心には傲慢の他に何ひとつ持たない者たちが、その指導者と共に、私と戦うために向かってきます。あなたが私に授けた約束を、今こそ果たしてください」。それからふたつの軍勢が出会うと、彼は地面からひとつかみの土を握り、神の名を唱えて敵に投げつけた。すると敵の目は視力を失い、何も見えなくなってしまった。

7 二章一八節を参照。「人間とは何ものであり、どこから来てどこへ帰るのか」という、人間の真の性質、真の目的を知らずにいること、あるいは知ろうとせずにいることは、人間を人間以下にしてしまう。実際、そうした者は動物よりも悪いといえる。動物たちは、少なくとも創造の秩序における自分たちの役割を果たしている。人間は地上における神の代理者たりえる。栄光と名誉の冠を戴くことも、あるいは動物よりも低い生きものとなることもできるのである。

8 人の本質はその魂にある。魂は、一般的な比喩としては心の中にあるとされ、また魂の働きにより人は神を知ることが

できる。前の節に続き、あらゆる生命の背後にある神の原則を受け入れ、認識するよう告げられる。これこそが魂に生命を与えるのであり、これがなければ魂は冷たく凍え、死の状態のままである。別の節では、神は頸動脈（けいどうみゃく）よりもその人の近くにあることが告げられている。ここでは、神は人と、その人の心の間に介在すると述べている。どのようなときも、神の知識と愛によって照らされた心を導くのは神である。そして人間はみな、やがて来世における永遠の生を与える神の許に再び集められるのである。

9 アマーナ（信頼、信託）には様々な種類があると考えられる。資産や所有物、計画や信任、秘密、知識、才能、機会など、人と人とが共に助け合うのに、実りのあるよう活用することが期待されているものがそれに相当する。神とその預言者の信頼を裏切るとは、財産を誤った使い道に費やしたり、自分の信用や、あるいは知識や才能を悪用したり、濫用したりすることである。当時のムスリムはまだ数も少なく、信仰を絶やさないために何ごとも慎重に行わなくてはならなかったこの時期、預言者から託された信頼もまた、細心の注意を払って守られねばならなかった。当時に限らず、他者からの信頼を尊重すべき機会は、日々、私たちの生活の中でも起こることである。信頼に応じるということは、どれほど努力しても完璧の水準に達することは難しい。この点において、アル＝アミーン（信頼に足る者）とも呼ばれていた預言者は、並の人々とは一線を画していた。

10 バドルの戦いは、ムスリム神学において「フルカーン（識別、分別）」とも呼ばれる。イスラームの歴史において、戦闘を通してその強さを示すようもたらされた最初の試練であったためである。誰が真の信仰者であるのかが試され、信仰の旗を掲げるに足る信仰を持たない者が選り分けられることになった。またこの戦いは、信仰者の倫理観を吟味する働きをした。四一節も参照。

11 六章二五節を参照。偶像を奉ずるマッカ住民は、クルアーンの美しさに匹敵する詩的な文言はいくらでも作れると繰り返し豪語していた（しかしそれは、決して実現することはなかった）。より広い意味では、これは啓示された諸啓典に





対し、少なからぬ人々が示す反応を暗示するものでもある。

12 多神を奉ずる民であったクライシュ族が、唯一の神のための礼拝堂としては初めて建立された「禁制の家」であるカアバ神殿の後見者の地位を占有していられたのは、彼らが、カアバ神殿の創設者であるイブラーヒームの末裔であったからに他ならない。ただしクルアーンは、それがイスラエルの民であれ、クライシュ族であれ、自分たちにはイブラーヒームの末裔という美徳が備わっており、ゆえに自分たちは「選ばれし民」である、といった主張を否定する（これに関しては二章一二四節を参照。「……かの御方は告げた。『われはあなたを人々の導師とする』。彼［イブラーヒーム］が『私の子孫もですか』と言うと、かの御方は告げた。『われの約束に、不正をなす者は含まれない』」）。それでも立場上、クライシュ族は神に対する信仰を幾分かは持ち合わせてはいたものの、マッカ住民のほとんどはイブラーヒームの信仰は完全に捨て去ってしまっていたため、彼の建立した「禁制の家」の後見者を名乗るにはふさわしくなかった。

13 イスラーム以前のアラブの民は、男女が共に裸体となってカアバ神殿の周囲を練り歩き、それが祈りの一形態であると信じて、口笛を吹いたり、手を叩いたりするなどしていた。

14 イスラーム以前のアラブの民は、バドルの戦い当時も、それ以降も、アラビア半島の一神教を抑圧しようとする試みに膨大な労力を費やしたが、何ひとつ情勢を変えることはできなかった。

15 すなわち、人々が神以外のものに仕えることを強要されず、ただ神のみを崇拝する自由を獲得するまで。二章一九三節も参照。

16 ムスリムが強い愛情を抱く「アフル・アル＝バイト（「家の人々」、すなわち預言者の家系）」という特別な立場については、その性格に関する議論が学者の間で多々なされている。イマーム・シャーフィイーによれば、それはハーシム家あるいはアル＝ムッタリブの子孫である。次に、それ以外で預言者との血縁関係があり、かつそのために喜捨を受け取る資格を持たない者たちがいる。第三に、クライシュ一族全体がある。軍事行動の結果として戦利品を獲得した際には、

17 この節に言及されている者たちに全体の五分の一が、遠征に加わった兵たちに残りが分配される。

戦闘が始まる前に、預言者と彼に従う者たちは、マディーナに最も近いバドルの谷の北部に陣を敷いて野営地とした。一方でマッカからの敵方は南側を占拠していた。この間に、シリアから来たアブー・スフヤーン率いるマッカの隊商が、沿岸の低地を南に向かって進んでいた。マッカの軍勢は、この隊商を援護しつつ、規模も小さく貧弱なムスリムたちの軍勢を滅ぼそうとしていた。二つの軍勢が出会うと同時に、決定的な戦闘が開始された。ムスリムの軍勢は規模こそ小さかったものの、神の計画に従い勝利を収めた。

18 「夢の中で」とは、預言者がバドルの戦いの開戦直前にみた夢を指している。これに関する真正のハディースは存在しないが、タービウーンと呼ばれる世代（預言者の死後に生まれ、預言者の生前を知る教友のいわば第一世代の中で育った世代）の一人であるムジャーヒドが、次のように語っている。「神は預言者の夢の中で、敵勢の姿を少なく見せた。彼が教友たちに、夢で見た通りのことを伝えたため、皆は大いに勇気づけられた」。

19 ここで「強さ」と訳出した語は、文字通りには「気」といった意味がある。道徳的な強さや「精神」、あるいは実際の「力」を表すのに比喩的に用いられる。

20 預言者ムハンマドとムスリムたちの最大の敵、アブー・ジャフルの指揮の下に集結したマッカ住民の軍勢についての言及である。彼らは、預言者と彼に従う者たちを壊滅させられるものと信じて疑わなかった。同時にこれらの言葉には、いついかなる時であれ、空疎な自尊心や虚栄心から、自慢げに戦場へ赴くことがあってはならないという、信仰者たちへの警告が込められている。名誉や虚栄ではなく、常に神の喜びを探求するのがムスリムである。

21 「本当に私は、あなたがたの側にいる」。隣人の保護や味方として名乗りをあげることを名誉とする、アラブの伝統や習慣から派生した表現である。悪魔が罪人を見捨てることについては、五九章一六節も参照。

22 「心の中にやまいのある者」とは、預言者に従う者のうち、戦場でマッカ住民と対峙するのを躊躇し、怯えていた者た





ちを指す。しかし神に信頼を置く者たちは、自分たち自身で神の報奨を引き寄せた。

23 多くの解釈者によれば、「天使たちが……彼らの顔や背を打つ」とは、具体的にはバドルの戦いに倒れたマッカの民のうち、特にクライシュ族の者たちを指すものと考えられる。これが彼らに対する現世における懲罰であり、来世においてはさらなる懲罰が加えられる。

24 一三章一一節参照。「民が自分で変わろうとしない限り、アッラーが民［の状態］を変えることはしない」。この節では、「人々の方が自らの内側にあるものを変えることがない限り、授けた恩恵については決して変えることはしない」とある。この文脈で示されているのは、神がその創造物に定めた法則であり、クルアーンの他の箇所では「スンナトゥッラー」すなわち「神の慣行」と呼ばれているものである。

25 この節で言及されているのは、ムスリムと盟約の合意を交わしたクライザ族と呼ばれるマディーナのユダヤ教徒の部族である。ムスリムが敗退したと思い込んだ彼らは、盟約を裏切り、偶像を奉ずる民の側に加わった。後になってこの部族は、盟約については単に忘れてしまったのだと主張した。そこで預言者と彼らの間に新たな盟約が結ばれた。ところが、彼らはハンダクの戦いの間にまたしても盟約を破り、偶像を奉ずる民を支援し、彼らの側についた。最終的に、彼らの首領であるカアブ・イブン・アル＝アシュラフは、マッカ住民と正式な盟約を交わした。

26 常に正義のための戦いに備えておかねばならない一方で、たとえ戦闘の最中であったとしても、相手の側が和平の姿勢を示したなら、常に応じられるようにも備えておかなくてはならない。自己利益のために戦うことには何の価値もなく、むしろそれは罪にあたる。戦闘とは正義と寛容、そして啓示された法に十分にかなうやり方で慎重に行われるべき義務であることが理解されなくてはならない。

27 人間の魂は、捉えることのできない周波数の信号を発し、はっきりと聞き取るのも難しいラジオに似ている。しかし神の恩寵は、非常に正確に魂の周波数を捉えて、魂と魂を調律することができる。そのおかげで人々は、互いに対する理

解と愛情によって驚くべき団結力を発揮できるようになるのである。アウスとハズラジュというマディーナのアラブ二大部族は、預言者の到来以前は絶えず互いに争い、戦っていた。終わりのない衝突と復讐の繰り返しが続き、多くの血が流された。しかし神が、イスラームの祝福を授けるにふさわしい者として彼らを選んだとき、彼らの間の流血沙汰は跡形もなく消え去った。二つの部族は、互いに親しい友人同士になった。この節はそのことへの言及である。

28 イスラームの初期にはムスリムの数もごくわずかであり、そのため一人で十人の敵を相手に戦うことが強いられた。しかし、そののちにムスリムの数も増えた。神はムスリムの負担を軽くし、一人で二人、あるいはそれよりも少ない敵を相手にすればよい時のみ戦うようムスリムたちに命じたのである。また彼らが毅然と構えてさえいれば、必ず彼らが勝利するだろうとも告げられた。

29 バドルの戦いの間に、ムスリムは偶像を奉ずる民の中から七十名の捕虜をとらえた。預言者は、この捕虜たちをどう処遇するかについて教友たちと相談した。最終的に彼らは、身代金と引き換えに彼らを解放することに決めた。これはその際に啓示された節である。戦時の捕虜は公明正大に遇するべきであるが（七六章八節）、戦闘中に敵を討ち果たすことを恐れてはならない。六七節から六九節は、預言者が、バドルの戦いでとらえた捕虜たちについては、過去の罪に照らして処刑するようにとのウマルの進言を退けて、身代金と引き換えに命を助けることを決めたときに啓示された。預言者は、この諸節を神の叱責として受け止めた。これらの節は、ムスリムの共同体にとっての最初の戦いにおいて、イスラーム以前のように戦利品の四分の一を部族の主領に与えることがあってはならない、という意味を持つものとも理解されている。

30 これは戦時の捕虜たちに対するなぐさめである。たとえ以前に敵意を抱いていたとしても、心に何か良いものがあれば、神は彼らを慈悲によって赦し、彼らが失ったものよりもはるかに価値のある賜りものを授けるだろう。そうした賜りもののうち、最も価値あるものとはイスラームの教えという祝福であるが、物質的な意味においても、例えば預言者の叔





父アル＝アッバースのように、のちに多大な幸運に恵まれた者もあった。

31 「これらの者は、互いに味方同士」。マッカからの「ムハージルーン（移住者）」と、彼らを迎え入れたマディーナの「アンサール（援助者）」と呼ばれた新たなムスリムたちのこと。生まれ故郷も住まいも捨てて、指導者と共に自らすすんで追放者となることを選んだ者たちと、「マディーナ・ムナウワラ（輝ける町）」の住民のうち、マッカから移住してきた者たちに避難の場を与え、物心両面において彼らを全面的に援助した者たちについての言及である。磁石のように人々をひきつける預言者の人格の下に、ふたつの集団はまるで血を分けた兄弟姉妹のようになった。真の血縁者とは決別した者も少なくなかったこの時期、相続に関しては互いを血縁とみなして遇するよう定められた。

32 神のメッセージが織りなす真理を否定することに躍起になっているという点が、彼らに共通するいわば分母である。これがある以上、彼らが信仰者たちの真の友人となる可能性はほとんどなきに等しい。ただし、これはコミュニティ間の関係を指しているのであって、必ずしも個人間の関係を指すものではない。この文脈での「アウリヤー（近しい者、味方、友）」という語はいわば「盟友」を意味する。悪は悪を盟友とする。善は善を盟友とする。もし善が悪にまさることがなければ、良心をもたない人々によって世界は侵食されてしまうだろう。そうなれば神の平安を確立し、真実と正義のあらゆる力を強めるという、善が果たすべき義務も果たされなくなる。

33 七二節で告げられている最初期の移住者たちと援助者たちの相互相続の権利は、あくまでも暫定的なものであり、全く異なる状況下において新たに入信した者たちには適用されない。

# 第九章　アッ＝タウバ　悔い改め

マディーナ啓示

一〇四節は悔い改めについてであり、これが通常、本章の章名となっている。ただし他の呼び名もあり、そのうち最も一般的なものに「バラーア（免責）」がある。本章には冒頭にバスマラが備えられておらず、これが個別の章であるか、あるいは前章の延長として考えるべきかは明らかにされていない。

　ヒジュラ暦九年、アブー・バクルに巡礼者たちをマッカまで先導する役目が課された。本章の啓示が始まったのはその時である。預言者はアリーに、一節から二九節めまでを巡礼者たちに報せるよう命じた。そこには、偶像を奉ずる者たちが不可侵の禁域に入ることは許されないという禁令が含まれていたためである。それから、主はムスリムの共同体に対し戦闘的な態勢にあった彼らに、悔い改めてそれまでの生き方を変えるための四か月の猶予を与えた。その意味で、章の冒頭部分は、マッカの偶像を奉ずる者たちに対する一種の最終通告に相当する。それ以外の部分は、ビザンチン帝国に対するタブーク遠征に関するものである。

1 ［これは］アッラーとその使徒から、あなたがたが契約を結んだ多神を奉ずる者に対する免責の通告。[1]

2 「あなたがたは四か月［あるいはそれ以上］のあいだ、土地じゅうを［自由に］往来しなさい。あなたがたはアッラーから逃げおおせることはできず、またアッラーは、［真理を］拒む者に恥辱を負わせることを知りなさい」。





3 ［これは］アッラーとその使徒から、人々に対する大巡礼の日における告知。「アッラーは多神を奉ずる者と何の関わりもない、その使徒もまた。もし悔い改めるなら、その方があなたがたのために良い。もし背を向けるなら、あなたがたはアッラーから逃げおおせることはできないと知りなさい」。［真理を］拒む者たちには、痛烈な懲罰の報せを伝えなさい。

4 多神を奉ずる者のうち、あなたがたが契約を結び、そののち何ひとつ破ることをせず、またあなたがたに敵対するどのような者にも手を貸さなかった者たちは別である。それゆえ彼らに対しては、その期限に達するまで彼らとの契約をまっとうしなさい。本当にアッラーは、畏れる者を愛する。

5 諸々の禁制の月が過ぎ去ったとき、多神を奉ずる者を討ち取りなさい。どこであろうと、見つけしだいその場で彼らを捕え、制圧しなさい。あらゆるところに座して彼らを待ち伏せなさい。しかし彼らが悔い改め、礼拝のつとめを守り、喜捨を払うなら、彼らには彼らの道を行かせなさい。本当に、アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。

6 もし多神を奉ずる者のうち、誰かがあなたの保護を求めるなら、その者がアッラーの御言葉を聞けるよう保護してやりなさい。そののち、安全なところまで送り届けてやりなさい。これは彼らが、何も知らない民であるため。

7 あなたがたが禁制のマスジドで契約を結んだ者は別として、どうしてアッラーの御許やその使徒の許に、多神を奉ずる者との契約がありえるだろうか。彼らがあなたがたに誠実である限り、あなたがたも彼らに誠実でありなさい。本当にアッラーは、畏れる者を愛する。

8 どうして［契約が］ありえるだろうか。あなたがたより優位になると、彼らはあなたがたとの血縁も盟約も尊重しない。彼らは、口ではあなたがたを喜ばせる。しかし心では拒絶する。彼らの多くは、背く者。

9 彼らはアッラーの御しるしをわずかな代価と引き換えにし、この御方の道をさえぎる。本当に、彼らの行ってきたことの何という悪さか。

10 彼らは、信じる者には血縁も契約も尊重しない。これらの者こそ、法外の者。[2]

11 しかし悔い改め、礼拝のつとめを守り、喜捨をするなら、彼らは宗教においてあなたがたの同胞。われらは、知っている民にしるしを解き明かす。[3]

12 もし彼らが、契約を結んだ後で誓いを破り、あなたがたの宗教を攻撃するなら、［真理を］拒む者の先導者たちと戦いなさい。本当に、彼らには［破ってはならない］誓いなど何もない。彼らは、［攻撃を］止めることだろう。[4]

13 あなたがたは、誓いを破り、使徒を追放しようと企て、またあなたがたに対し最初に［攻撃を］しかけてきた民と戦わないのか。あなたがたは、彼らを怖がっているのか。もしあなたがたが信仰者なら、あなたがたはアッラーをこそもっとも怖れなくてはならない。

14 彼らと戦いなさい。アッラーは、あなたがたの手をもって彼らに懲罰を科し、恥辱を負わせるだろう。そして彼らに対してあなたがたを勝利させ、信仰者の民の胸をいやすだろう。[5]

15 また彼らの心から、怒りをとり除くだろう。アッラーは御心にかなう者の悔い改めを受け入れる。アッラーは、すべてを知りもっとも賢明である。[6]

16 それともあなたがたは、あなたがたのうち誰が励んでいるか、またアッラーと、その使徒と、信仰者をさし置いてどのような友も持たずにいるか、アッラーが知りもしないままで、あなたがたを［試すこと





もせずに］放っておくと思うのか。アッラーは、あなたがたの行いを熟知している。

17 ［真理に対する］拒否を自ら証言する多神を奉ずる者に、アッラーのマスジドを管理させてはならない。これらの者は、その行いも無に帰される。彼らは業火の中に、永遠に住まうだろう。[7]

18 アッラーのマスジドを管理するのは、アッラーと終末の日を信じ、礼拝のつとめを守り、喜捨をし、アッラーの他には何も怖れることのない者に限られる。これらの者こそ、導かれる者となるだろう。[8]

19 あなたがたは、巡礼者たちに水をやり、禁制のマスジドの管理をすることと、アッラーと終末の日を信じ、アッラーの道のために励む者とを同じようにみなすのか。アッラーの御許において、それらは等しくない。本当にアッラーは、不正をなす民を導かない。

20 信じ、移り住み、自分の財も自分自身もアッラーの道に投じて励む者たちには、アッラーの御許に大いなる位階がある。これらの者こそ勝者。

21 主は彼らに、御自らの慈悲と、喜びと、彼らのための楽園についての良い報せを伝える。その中には尽きることのない至福があり、

22 彼らは永遠に、その中に住まうだろう。大いなる報奨は、アッラーの御許にある。

23 信じる者たちよ。もしあなたがたの父やきょうだいが、信仰よりも［真理の］拒否を選ぶなら、彼らをあなたがたの友としてはならない。あなたがたのうち、彼らを友とする者、これらの者こそ不正をなす者。[9]

24 言いなさい。「もしあなたがたの父、子ども、きょうだい、配偶者、縁者、手に入れた財、傾きはしないかと怖れている商売、満足のいく住家などが、あなたがたにとりアッラーとその使徒、またその道のために励むことよりも愛すべきものであるなら、アッラーが命令をもたらすまで待っていなさい。アッラーは、背く者の民を導かない」。

25 すでにアッラーは多くの戦場であなたがたを助けた、フナインの日にもまた。自分たちが多勢であることにあなたがたは感心していたが、それは何の役にも立たず、あれほど広々とした大地があなたがたには狭められた。そうしてあなたがたは、背を向けて退却してしまった。[10]

26 そののちアッラーは、その使徒と信仰者たちに御自らの平穏を下した。またあなたがたには見えない軍勢を下し、［真理を］拒む者たちに懲罰を科した。これが［真理を］拒む者への報い。[11]

27 さらにアッラーは、こうした後になっても、御心にかなう者の悔い改めを受け入れた。アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。

28 信じる者たちよ。多神を奉ずる者は不浄でしかない。それゆえこの年以降は、彼らを禁制のマスジドに近づけてはならない。たとえあなたがたが貧困を案じようと、アッラーはその御恵みをもって、やがて御心のままにあなたがたを富ませるだろう。本当にアッラーは、すべてを知りもっとも賢明である。[12]

29 啓典を与えられていながら、アッラーも終末の日も信じず、アッラーとその使徒が禁じたものを禁じず、真理の宗教に沿わない者たちに対しては、彼らがその身を低くし、自らすすんで税を納めるようになるまで戦いなさい。

30 ユダヤ教徒は、ウザイルは神の子であると言う。キリスト者は、マスィーフは神の子であると言う。これは彼らが口先で言っていることで、以前の、［真理を］拒んだ者たちの言ったことを真似している。彼らはアッラーに撃たれよ。彼らの、何と惑わされていることか。[13]

31 彼らはアッラーをさし置いて、自分たちの学者と修道者を、またマルヤムの子イーサーを自分たちの主とみなしている。その他にいかなる神もない、唯一の神に仕えるよう命じられたというのに。讃美あれ、彼らが同列に連ねるものを超越する御方に。[14]





32 彼らはその口先で、アッラーの御光を消したがっている。しかし、たとえ［真理を］拒む者が嫌おうとも、アッラーは何よりもただその御光をまっとうする。[15]

33 導きと真理の宗教とをもってその使徒を遣わし、すべての宗教の上に優勢とする御方、たとえ多神を奉ずる者がそれを嫌おうとも。[16]

34 信じる者たちよ。本当に、学者と修道者の多くは、嘘いつわりによって人々の財産をむさぼり、アッラーの道をさまたげている。また金銀を蓄えて、アッラーの道のために費やさない者も。彼らには、痛烈な懲罰の報せを伝えなさい。[17]

35 その日、それ［蓄えられた金銀］は地獄の火炎で熱せられ、彼らの額に、脇に、背に、それの焼き印が押されるだろう。「これらは、あなたがたが自分のために蓄えてきたもの。それゆえ、自分が蓄えてきたものを味わえ」。

36 本当にアッラーの御許において、［一年の］月の数は十二であり、アッラーが諸天と大地を創造したその日より、記録の中にそう定められている。そのうち四［か月］が禁制とされている。これが正しい宗教。それゆえそのあいだは、あなたがた同士で不正をなしてはならない。そして多神を奉ずる者に対しては、彼らがそろってあなたがたと戦うように、あなたがたもそろって戦いなさい。アッラーは、畏れる者と共にあるのを知りなさい。[18]

37 ［禁制の月を］延ばせば［真理に対する］拒否を増やすだけで、そのために［真理を］拒む者たちが迷うことになる。彼らは、ある年にはこれを合法とし、またある年にはこれを禁じる。そうして、アッラーが禁じたものの数を合わせようとしたり、アッラーが禁じたものを合法にしようとしたりする。彼らの行いの悪さも、彼らにはすばらしいことのように見えている。しかしアッラーは、［真理を］拒む民を導

かない。[19]

38 信じる者たちよ、あなたがたは一体どうしたのか。「アッラーの道のために出征しなさい」と言われて、地面にしがみつくとは。あなたがたは来世よりも、現世の生を喜ぶのか。現世の生の楽しみは、来世に比べればわずかに過ぎない。[20]

39 もしあなたがたが出征しないなら、かの御方は痛烈な懲罰をもってあなたがたを罰し、あなたがたを他の民と代わらせるだろう。そしてあなたがたには、いささかも御方を害することはできない。アッラーは、ありとあらゆるものごとにおいて全能の御方。[21]

40 たとえあなたがたが彼［預言者ムハンマド］を助けなくとも、［真理を］拒む者たちが彼を追放したときに、すでにアッラーが彼を助けている。彼ともうひとりの二人で洞窟の中にいたとき、彼は仲間に言った。「嘆くことはない。アッラーは私たちと共にある」。そのとき、アッラーは彼の上に御自らの平穏を下し、あなたがたには見えない軍勢をもって彼を支えた。［真理を］拒む者たちの言葉をもっとも低いものとした。アッラーの御言葉こそ、もっとも高いもの。アッラーは威力あり、もっとも賢明である。[22]

41 出征しなさい、軽装でも、重装でも。自分の財も自分自身もアッラーの道に投じて励みなさい。その方があなたがたのために良い、もしあなたがたが知ってさえいたなら。

42 もし手近な見返りがあり、また手頃な旅路であったなら、彼らはあなたに従っていただろう。しかしその道のりは、彼らには遠すぎ［ると思われ］た。彼らはアッラーにかけて誓う。「できるなら、私たちもあなたがたと共に出征したのだが」。彼らは、自分で自分を滅ぼす。アッラーは、彼らが嘘をついているのを知っている。[23]

43 あなたにアッラーの容赦あれ。真実を語っている者が明かされ、嘘をついている者が知れるようにならないうちに、どうして彼ら［が居残ること］を許したのか。[24]





44 アッラーと終末の日を信じる者たちは、財も自らも投じて努力することについて、［それを免れようとして］あなたに許しを求めたりしない。アッラーは畏れる者を知っている。[25]

45 ［それを免れようとして］あなたに許しを求めるのは、アッラーも終末の日も信じない者たちだけ。彼らは心に疑いを抱き、その疑いのためにためらっている。

46 もし彼らが出征を意図していたなら、きっとそのための準備をしていただろう。しかしアッラーは、彼らが送り出されるのを嫌って背後に留まらせた。そして彼らは、「座す者たちと共に座していなさい」と告げられた。

47 もし彼らがあなたがたと出かけていたら苦労が増すばかりで、騒動を求めてあなたがたの間を走り回り、そしてあなたがたの中には彼らに耳を貸す者もいただろう。アッラーは不正をなす者を知っている。

48 彼らは、すでに以前にも騒動を起こそうと、あなたに対してものごとをひっくり返したことがある。しかし、たとえ彼らが嫌おうとも、真理は到来しアッラーの命令があらわされた。[26]

49 彼らの中には、「［居残ることを］許してください。私を試練にさらさないでください」と言う者がある。すでに試練の中にいるではないか。本当に地獄は、［真理を］拒む者を囲みこむ。[27]

50 あなたに幸運が舞い込むと、彼らは落胆する。あなたが災難に見舞われると、彼らは「私たちは、ものごとには以前から用心していたのだ」と言い、大喜びで背を向ける。[28]

51 言いなさい。「アッラーが私たちのために定めたことを除き、私たちにふりかかることは何もない。この御方こそは私たちの守護者。信仰者なら、アッラーにこそ委ねなさい」。

52 言いなさい。「あなたがたは私たちに、二つにひとつのもっともすぐれたもの以外の何かを期待している

のか。私たちはあなたがたに、アッラーがその御許から懲罰を降らせるのか、あるいは私たちの手でかと期待している。それゆえ期待しなさい。本当に私たちも、あなたがたと共に期待しよう」。

53 言いなさい。「たとえ自らすすんで費やそうと、あるいは嫌々ながらであろうと、あなたがたからは決して受け入れられないだろう。本当にあなたがたは背く者の民である」。[29]

54 彼らの費やすものが受け入れられないのは、彼らがアッラーとその使徒［が真理であること］を拒んでいるからに他ならない。礼拝をするにもただ怠けているだけで、嫌々ながらにしか費やそうともしない。

55 それゆえあなた［ムハンマド］は、彼らの財にも子どもにも感心していてはならない。アッラーは、ただそれらにより現世の生で彼らに懲罰を科し、［真理を］拒む者として彼ら自身が果てることを意図しているだけ。[30]

56 彼らは「本当にあなたがたの同志です」と、アッラーにかけて誓う。しかし彼らはあなたがたの同志ではない。ただ怯えるだけの民である。

57 もし彼らが、逃げ場か洞穴、あるいは入り込めるところを見つけたなら、彼らは必ず大慌てでそこに駆け込むだろう。

58 彼らの中には、慈善のことであなたをそしる者がある。それを分け与えられると彼らは喜ぶ。しかしそれを分け与えられないと、見なさい。彼らは憤慨（ふんがい）する。[31]

59 彼らが、アッラーとその使徒が与えるものに満足して「私たちには、アッラーだけで十分である。アッラーは私たちに御恵みを与えるだろう、その使徒もまた。私たちは、アッラーに願い求める」と言ってさえいたなら。

60 慈善はただ、持たざる者、貧しい者、それ［慈善］にたずさわる者、心を寄せはじめた者、また［捕虜や





奴隷の］解放のため、負債を抱える者、そしてアッラーの道のために、また旅人のためにあるのみ。これが、アッラーからの定め。アッラーはすべてを知りもっとも賢明である。[32]

61 彼らの中には預言者を傷つけ、「彼は［何を言われても受け入れる］耳だ」と言う者がある。言いなさい。「あなたがたのために良いことを聞く耳である。彼はアッラーを信じ、信仰者を信頼している。あなたがたのうち、信じる者のための慈悲である」。アッラーの使徒を傷つける者には、痛烈な懲罰があるだろう。[33]

62 彼らはあなたがたを喜ばせようとして、アッラーにかけて誓う。しかし信仰者なら、アッラーとその使徒を喜ばせる方が、よりふさわしいことのはず。

63 彼らは知らないのか、アッラーとその使徒に敵対する者には地獄の火炎があり、その中に永遠に住まうだろうことを。それは、大いなる恥辱である。

64 偽善者たちは、彼らの心の中にあるものを告げ報せる章が下されることを危惧している。言いなさい。「嘲笑していなさい。アッラーは、あなたがたが危惧しているものを引き出すだろう」。[34]

65 もしあなたが彼らに尋ねたなら、彼らは必ず「私たちは、ただ無駄話に興じて遊んでいただけです」と言う。言いなさい。「あなたがたはアッラーとその御しるし、またその使徒を嘲笑していたのか。[35]

66 言い訳はいらない。あなたがたは信じた後になって、［真理を］拒むようになった」。われらは、たとえあなたがたのうち一部の者を赦すとしても、一部の者には必ず懲罰を科すだろう。彼らは、罪を犯す者であったため。[36]

67 偽善者の男女は、互いに同じ者同士。非道を勧め、親切を禁じ、［出し惜しみをして］その手を閉ざす。彼らはアッラーを忘れた。それゆえ、かの御方も彼らを忘れた。本当に、偽善者とは背く者のこと。[37]

68 アッラーは、偽善者の男女と［真理を］拒む者に地獄の火炎を約束した。彼らは、永遠にその中に住まう

だろう。彼らにはそれで十分。彼らはアッラーに忌まれた。彼らには、永劫の懲罰があるだろう。[38]
69 あなたがた以前の者たちと同じで、彼らはあなたがたよりも強く、財も子どももより多かった。彼らは「幸
福の」取り分を享受した。あなたがたも、あなたがた以前の者たちが享受していたように「幸福の」取り
分を享受し、あなたがた以前の者たちが興じていたように「無駄話に」興じている。これらの者は現世に
おいても来世においても、その行いは全くの無に帰される。これらの者こそ敗者。
70 彼らには、彼ら以前の者たちの報せが届いていないのか。ヌーフ、アード、サムードの民、またイブラー
ヒームの民、マドヤンの仲間、覆された諸々の町。彼らには、その使徒が明証をもってやって来ていた。アッ
ラーが、彼らに不正をなしたのではない。ただ彼らが、自分自身に不正をなしただけ。[39]
71 信仰者の男女は、互いに味方同士。親切を勧め、非道を禁じ、礼拝のつとめを守り、喜捨をし、アッラー
とその使徒に従う。これらの者に、アッラーは慈悲をかける。本当にアッラーは威力あり、もっとも賢
明である。[40]
72 アッラーは、男の信仰者にも女の信仰者にも、川がその下を流れる楽園と、その中に永遠に住まうこと、
また永遠の園の良き住家をも約束した。しかしアッラーの喜びはそれよりも至大なもの。大いなる成就
とは、まさしくこのこと。[41]
73 預言者よ。あなたは「真理を」拒む者と偽善者に対しては励み、厳しい態度をとるようにしなさい。彼ら
の住まいは地獄である。行き着く先の、何と悪いことか。
74 彼らは、「何も言っていない」とアッラーにかけて誓う。しかし彼らは確かに拒絶の言葉を語り、また服
従しておきながら、その後になって「真理を」拒むようになった。そして自分たちには成しえないことを
もくろんでいた。彼らはただアッラーとその使徒が、御恵みによって皆を富ませたことに立腹している





だけ。悔い改めるなら、その方が彼らのために良い。しかし、もし背を向けるなら、現世においても来
世においても、アッラーは痛烈な懲罰をもって彼らを罰するだろう。そして地上には、彼らを守る者も
助ける者もない。[42]
75 彼らの中には、アッラーに約束した者もある。「もし、かの御方が私たちに、その御恵みを与えてくれる
なら、私たちも必ず慈善をし、正しい者のひとりとなるでしょう」。
76 しかし、かの御方がその御恵みを与えると、彼らはもの惜しみし、背を向けて立ち去った。
77 それゆえ、かの御方は応報として、彼らがかの御方と会する日まで、彼らの心の中に偽善を抱かせる。
それは彼らがアッラーと結んだ約束を破り、嘘をついたため。[43]
78 彼らは知らないのか、アッラーが彼らの秘めることも、その密談も知っていることを。本当にアッラーは、
目には見えないことを知る。
79 自らすすんで慈善をする信仰者や、自分で励む以外に何も見出せない者をそしり、嘲笑する者、彼らを
こそアッラーは嘲笑する。彼らには、痛烈な懲罰があるだろう。[44]
80 あなたが彼らのために赦しを願おうと、あるいは願うまいと。たとえあなたが七十回、彼らのために赦
しを願おうと、アッラーは決して彼らを赦さないだろう。それは彼らが、アッラーとその使徒とを拒ん
だため。アッラーは、背く者の民を導かない。[45]
81 留まった者たちは、アッラーの使徒の後に残り、座していることを嬉しがっていた。自分の財も自分自
身もアッラーの道に投じて励むことを嫌って、彼らは言った。「この暑さの中を出征することはない」。
言いなさい。「暑さなら、地獄の業火の方が厳しい」。もし彼らが、理解さえしたなら。
82 それゆえ彼らを、わずかばかり笑わせておきなさい。そして彼らが得てきたことへの報いとして、多く

泣かせてやりなさい。

83 もしアッラーがあなたを彼らの群れに帰して、彼らが「次の機会の」出征の許しを求めたなら、言いなさい。「あなたがたが私と共に出征することは決してないだろうし、私と共に敵と戦うことも決してないだろう。本当にあなたがたは、最初の時に座して残ることを喜んでいた。それゆえ、後に留まる者たちと共に座していなさい」。

84 「ムハンマドよ、」彼らのうち誰かが死のうと、決してその者のために礼拝してはならず、また決してその墓に立ってはならない。本当に彼らはアッラーとその使徒とを拒み、背く者として死んだのである。[46]

85 あなた「ムハンマド」は、彼らの財にも子どもにも感心していてはならない。アッラーは、ただそれらにより現世で彼らに懲罰を科し、「真理を」拒む者として彼ら自身が果てることを意図しているだけ。[47]

86 「アッラーを信じ、その使徒と共に励め」との章が下されたとき、彼らのうち資力ある者は、あなたに許しを求めて言った。「私たちを、「家に」座す者たちと共に残してください」。

87 彼らは、後に留まる者たちと共にいることを喜ぶ。彼らの心は封じられており、そのため彼らは理解しない。

88 しかし使徒と、彼と共にある信じる者たちは、自分の財も自分自身も投じて励んだ。これらの者には良きものがあるだろう。これらの者こそ、栄える者。

89 アッラーは彼らのために、川がその下を流れる楽園を用意して、彼らはその中に住まうだろう。大いなる成就とは、まさしくこのこと。

90 アラブの中に、許しを求めて申し開きをしにやって来た者があった。また、アッラーとその使徒に嘘をついて座していた者も。彼らのうち「真理を」拒む者には、痛烈な懲罰が降りかかるだろう。





91 弱い者、病の者、また「出征しようにも」費やせるものが何も見つけられなかった者たちには、彼らが、アッラーとその使徒に誠実でありさえすれば何の落ち度もない。行いの善良な者に「責められるべき」筋はない。アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。[48]

92 また、「一緒に」乗せてもらおうとしてあなたのところへやって来たとき、あなたに「あなたがたを乗せてやれるものを見つけられない」と言われ、その目に涙を浮かべ、自分には費やせるものが何も見つけられないことを悲しみ、立ち去った者たちにも「何の落ち度もない」。[49]

93 しかし豊かであるにもかかわらず、あなたに「免除の」許しを求める者たちには「責められるべき」筋がある。彼らは、後に留まる者たちと共にいることを喜ぶ。アッラーは彼らの心を封じた。それゆえ、彼らは「その結果としてどうなるのかを」何も知らない。

94 あなたがたが彼らのところへ帰ったとき、彼らはあなたに言い訳をするだろう。言いなさい。「言い訳はいらない。私たちは、あなたがたを信用していない。あなたがたのことについては、すでにアッラーが私たちに知らせてくれた。アッラーはあなたがたの行いを見ている、その使徒もまた。そののち、あなたがたは、目には見えないものと見えるものとを知る御方の御許へ引き戻される。かの御方はあなたがたに、あなたがたの行ってきたことについて告げ報せるだろう」。

95 あなたがたが彼らのところへ戻ったとき、あなたがたが放っておいてくれるよう、彼らはアッラーにかけて誓うだろう。それゆえ彼らとは距離を置きなさい。彼らは嫌悪すべきもの。彼らの住まいは地獄であり、それが彼らの得てきたことへの報い。[50]

96 あなたがたを喜ばせようとして、彼らはあなたがたに誓うだろう。たとえあなたがたが彼らに喜んだとしても、アッラーは背く者を喜ばない。

97 「真理の」拒否と偽善においてアラブ「の部族」はもっとも激しく、アッラーがその使徒に下した禁令についても、彼らはほとんど無知であるというにふさわしい。アッラーは、すべてを知りもっとも賢明である。[51]

98 アラブ「の部族」の中には、自分が「主の道のために」費やすものを押収とみなし、あなたがたに不運がまわってくるのを期待している者がある。彼らの方こそ悪い不運がまわってくる。アッラーはすべてを聞き、すべてを知る。[52]

99 しかしアラブ「の部族」の中には、アッラーと終末の日を信じ、自分の費やすものを、アッラーの御許に近づくための手立てであり、また使徒の祈願を得られるものとみなす者もある。まさしく彼らにとり、これこそ近づくための手立て。アッラーは彼らを、その慈悲の中に受け入れるだろう。本当に、アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。

100 「信仰における」先駆者とは、第一に移住者たちと援助者たち、また善良な行いにより彼らに従った者たちのこと。アッラーは彼らに喜び、彼らもアッラーに喜ぶ。彼らのために、川がその下を流れる楽園がしつらえられ、彼らは永遠にその中に住まうだろう。大いなる成就とは、まさしくこのこと。

101 あなたがたの周囲のアラブ「の部族」たちの中にも、マディーナの住民の中にも偽善者がいる。彼らは偽善に執着している。あなたは彼らを知らない。われらは彼らを知っている。われらは彼らに、二度の懲罰を科すだろう。そののち彼らは、大いなる懲罰へ引き戻されるだろう。

102 またその他に、自分自身の罪を認めた者もある。彼らは、正しい行いとそれ以外の悪事とを混同していた。アッラーは、おそらく彼らの悔い改めに「慈悲をもって」応じるだろう。本当に、アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。[53]





103 彼らの財から慈善を受け取ることにより、彼らを清浄にし、高め、彼らのために祈りなさい。本当にあなたの祈りは、彼らの憩い。アッラーはすべてを聞き、すべてを知る。

104 彼らは知らないのか、アッラーこそはそのしもべたちの悔い改めを受け入れ、またその慈善を受け取る御方であるということを。本当に、アッラーこそは幾度でも悔い改めを受け入れる御方、もっとも慈悲深い御方。

105 言いなさい。「「すべきことを」行いなさい。アッラーは、あなたがたの行いを見ている。その使徒も、信仰者たちもまた。そしてあなたがたは、見えないものと見えるものを知る御方の御許へ連れ戻される。かの御方はあなたがたに、あなたがたの行ってきたことについて告げ報せるだろう」。

106 それ以外に、アッラーの命令が据え置かれている者もある。彼らは懲罰が科されるなり、悔い改めに「慈悲をもって」応じられるなりするだろう。そしてアッラーは、すべてを知りもっとも賢明である。[54]

107 害と「真理の」拒否とをもたらし、信仰者たちのあいだを分かつために、また以前にアッラーとその使徒に対して戦った者たちの控えの場とするためにマスジドを設けた者たちがある。彼らは、「ただ善のみを意図してのことです」と誓うだろう。しかしアッラーは、彼らが嘘つきであることを証言する。

108 あなたは、決して「礼拝のために」そこに立ってはならない。最初の日から篤信を礎として建てられたマスジドこそ、あなたが「礼拝のために」立つにふさわしい。そこには、自らを清浄にするのを愛する人たちがいる。アッラーは、自らを清浄にする者を愛する。

109 篤信と、アッラーからの喜びとを自分の建てるものの礎にする者の方が良いのか、あるいは崩れそうな崖のふちを自分の建てるものの礎にして、もろともに地獄の火炎の中に転げ落ちる者の方か。本当に、アッラーは不正をなす民を導かない。

110 彼らが自分で建てたものは、彼らの心が断ち切られてしまわない限り、疑念となって心の中にとどまるだろう。アッラーは、すべてを知りもっとも賢明である。

111 アッラーは、信仰者たちの生も財もあがなった。［引き換えに、］彼らのための楽園がある。彼らはアッラーの道のために戦い、討ち取り、討ち取られる。それは律法と、福音と、クルアーンとをもってなされた真理の約束。誰がアッラーよりも約束を守るだろうか。それゆえあなたがたは、あなたがたが交わした取引を喜びなさい。大いなる成就とは、まさしくこのこと。[55]

112 悔い改める者、仕える者、称賛する者、旅に出る者、こうべを垂れる者、ひれ伏す者、親切を勧め、非道を禁じる者、アッラーの定めた禁令を守る者。［これらの］信仰者たちに、良い報せを伝えなさい。[56]

113 多神を奉ずる者のために赦しを求めることは、たとえ親族の者であっても、彼らが業火の仲間であることが明かされた後では、預言者の、また信じる者たちのすることではない。[57]

114 イブラーヒームが父のために赦しを求めたのは、ただ彼［の父］と交わした約束があったために他ならない。しかし、彼［の父］がアッラーの敵であることが明かされると、彼［イブラーヒーム］は彼［の父］との縁を絶った。本当にイブラーヒームは、優しく、寛容であった。

115 アッラーは、何を畏れるべきかを明かすまでは、民を導いた後になって［再び］迷わせたりしない。本当にアッラーは、ありとあらゆるものごとを知る。[58]

116 諸天と大地の王権はアッラーに属する。かの御方は生かし、死なせる。アッラーをさし置いて、あなたがたには守る者も助ける者もない。

117 アッラーは、すでに預言者と、また苦境の時に彼に従った移住者と援助者の悔い改めを受け入れた。その後で、ある者たちの心はほとんど逸れそうになっていたが、それでも悔い改めを受け入れた。本当に、





かの御方は彼らにもっとも優しく、もっとも慈悲深い。

118 また、後に留まった三人の者にも。広大なはずの大地が彼らには狭められ、また彼ら自身の魂も、［罪の意識のために］彼らには狭められたかのようだった。そうして彼らはアッラーにたよる他に、この御方から逃れる先もないことを察した。するとこの御方は彼らを悔い改めさせ、その悔い改めを受け入れた。本当に、アッラー、幾度でも悔い改めを受け入れる御方、もっとも慈悲深い御方。[59]

119 信じる者たちよ。あなたがたはアッラーを畏れなさい。真実の者たちと共にありなさい。

120 マディーナの住民も、周囲のアラブ［の部族］たちも、アッラーの使徒［に従うこと］を放棄してその後に留まり、彼の命よりも自分たちの命を優先させるようなことをすべきではない。アッラーの道のために渇きや疲れ、飢えに見舞われるたびに、あるいは［真理を］拒む者を激怒させる一歩を踏み出すたびに、あるいは敵に対して何かをなし遂げるたびに、それらは必ず彼らのために、正しい行いとして書きとどめられる。本当にアッラーは、行いの善良な者の報酬を、決して無為にしない。[60]

121 その大小にかかわらず、彼らが何かを費やすたびに、あるいは谷をひとつ越えるたびに、それらは必ず彼らのために書きとどめられる。それはアッラーが、彼らの最善の行いに報いるため。[61]

122 信仰者たちは、全員で［一斉に］出征するべきではない。それぞれの隊の中から、出征しない一部の者は［後にとどまって］宗教を理解し、自分たちの民が帰ってきたときに警告しなさい。そうすれば彼らも、慎重になるだろう。[62]

123 信じる者たちよ。あなたがたの近くにいる、［真理を］拒む者と戦いなさい。あなたがたの厳しさを、彼らに知らしめなさい。アッラーは、畏れる者と共にあることを知りなさい。[63]

124 章が下されるたびに、彼らの中には「これによって誰の信仰が増したのか」と言う者がある。信じる者

たちなら、これによって喜び、その信仰も増す。[64]
125 しかし心の中にやまいのある者は、汚点の上にも汚点を増やし、［真理を］拒む者として死んでしまう。
126 彼らは見ないのか、毎年、一度あるいは二度は自分たちが試されていることを。それでも彼らは悔い改めることも、想い起こすこともしない。[65]
127 章が下されるたびに、彼らは「誰かが見ているとでもいうのか」とお互いを見まわす。それから彼らは、退いてゆく。アッラーが、彼らの心を退けたのである。彼らが、何も理解していない民であるため。[66]
128 あなたがたの中から、まさしくひとりの使徒が到来した。あなたがたの苦悩に胸を痛め、あなたがたを案じている。信仰者に優しく、慈悲深い。[67]
129 もし彼らが背を向けるなら、言いなさい。「私には、アッラーがおわせば十分。その他に、いかなる神もない。私はこの御方に委ねている、大いなる玉座の主たる御方に」。

1 「バラーア（免責）」という語は、「何かから自由になる」あるいは「何ごとかを免れる」という意味の動詞から派生している。何かしらの枷からの解放や、あるいは人と人どうしの倫理的・契約的な義務のない状態を指す。

2 ［真理を］拒む人々の侵略的な行為のために、戦いが避けられなくなったことを伝えている。

3 ここで再び、悔い改めによる慈悲の機会が強調されている。戦争という手段はたやすく選べるものではなく、回避できるものなら回避することが最も望ましい。

4 「契約を結んだ後で誓いを破」るとは、ムスリムたちとの友好の条約を結びながら、自分たちの方針には一切の変更をしなかった人々のことを指している。「彼らには［破ってはならない］誓いなど何もない」とは、のちのフダイビヤの和議における停戦［の合意］に対するクライシュの一族の違背を暗示するものであり、これがヒジュラ暦八年のムスリムたちによるマッカ征服の端緒となった。

5 節の末尾、「信仰者の民の胸をいやす」とは、襲撃や、敵による残酷な行為、あるいは嘲罵によってこうむった傷の治癒を意味している。

6 他の土地からマディーナの町を訪れ、イスラームを受け入れ、再び元の土地へと帰ってゆく人々は多くいた。ところが偶像を奉ずる者たちは、こうした人々の行く手を阻み、拉致して暴行を加えるなどした。この節において神は彼らに警告している。彼らが悔い改め、イスラームを受け入れるなら、彼らの悔い改めも受け入れられるだろう。

7 「アマーラ（管理する）」には、（1）訪れる（2）場を維持するという二つの意味がある。この節では、神が複数あるとする多神を奉ずる者に、唯一の神を崇拝するためのマッカの館を訪れたり、維持したりするのは許されないことが示されている。

8 ヒジュラ暦八年、マッカ征服によって聖域では再び真の神への崇拝が捧げられるようになり、一帯に設置されていた諸々の偶像も、破壊ののち撤去された。

9 クルアーンの多くの箇所において、神は両親や近しい親類縁者に対して善良であるよう強く奨励しているが、しかしながらその両親や近しい親類縁者が信仰の否定を好む場合、彼らに対し友人として接するべきではないとしている。しかし信仰を持たなくとも、ムスリムの共同体に敵対的ではない場合は、ムスリムが彼らと交易をしたり、政治的な条約を結んだりすることは禁じられていない。

10 マッカ征服を成し遂げた預言者は、ムスリムたちの勝利を警戒し、およそ四千の兵を整えてマッカを目指していたハワーズィンやサキーフといったターイフの町周辺の部族に向け、大規模な軍勢を進軍させた。その数およそ一万二千、全員

が情熱と自信に満ちあふれていた。戦闘はマッカから東におよそ二二キロメートル離れた、ターイフに続く山岳地帯の谷に位置するフナインで開始された。当初、戦いはムスリムたちに有利と思われた。兵の数と強い信念がその理由である。しかしこのことを過大視したムスリムたちは、丘陵地を熟知する敵勢の有利さを見過ごしていた。多くのムスリムが伏兵に討ち取られたため、他の大勢は混乱に陥り、身を翻して退却した。常に神にすべてを委ねていた預言者は冷静であった。彼は残った兵力を集め、神の援助を得て敵を圧倒し勝利した。

11 ほとんどの解釈者たち（バガウィー、タバリー、イブン・カスィール、ザマフシャリーなど）は、この節の「［真理を］拒む者」を、ムスリムと敵対した部族に関連するものとして解釈しているが、解釈者のひとりラーズィーは、フナインの戦いにおいて敵前逃亡という恥ずべきふるまいをした信仰者を指すものとしている。あり得ない解釈ではないが、次の節も考慮に入れた上で、前者の解釈をとる方がより好ましい（困難な状況における神の慈悲と恩恵を示す一例である。神の慈悲と恩恵は、常に信仰を持つ者に授けられる）。

12 「ナジャス（不浄、もしくは不明瞭とも）」という強い語が、ムスリムに対し、意識や心も含めて清潔を保つことが非常に厳しく命じられていることを示している。

13 ムーサーが神から授けられたトーラー（律法）は、クルアーンにおいて頻繁に言及されており、それが啓示の書であることはイスラームにおいて認められている。しかし現存するトーラーはムーサーに啓示されたものではなく、彼が授かった石板もその中には含まれていない。トーラーの再編の必要性が明らかになったとき、ウザイル（エズラ）率いる特定の司祭たちと書記たちが新たな規範として公布したものである。ウザイルは紀元前五世紀の有能な書記であり、バビロン捕囚の時代には占星術師であった。トーラーを再編するよう啓示を受けたとも伝えられている。この貢献に恩義を感じるユダヤ教徒の一部は、彼を「神の子」とみなしていた。キリスト者の一部にも、今なおマスィーフ（メシアの意。イエスのこと）を「神の子」と呼ぶ者がいる。





14 「学者」、すなわち聖職者や博学者、法学者のこと。また「修道者」は修行者、禁欲主義者、隠遁者、また俗世を離れた世捨て人を意味し、独身を貫く聖職者も含まれる。この語はまた、修道会的な会派の一員を指す場合もある。また、神通力を持つと信じられたり、神格化されたりする人物や、人々の祈りの対象となる「聖人」を指す語としても用いられる。

15 「彼らはその口先で」。これの説き明かしにはふた通りある。（1）信仰を否定する人々にとり、神の光は彼らの邪魔となる差し障りの元である。彼らは神の光を、ランプの裸火を口先で吹き消すように吹き消そうとする。（2）偽の宗教者たちは、口先の偽りの言葉によって神のメッセージを歪める。暗がりに住まう無知の者は、真理の光の消滅を望むのである。しかし神は、自らの光を広めることにおいて完全である。

16 三章一九節参照。「本当に、アッラーの御許の宗教とはイスラームのこと」。イスラームとは、「全身全霊を神に委ねること」である。

17 虚偽や無益な物事は、常に人間の心を捉える機会をうかがっており、ひとたび捕えられてしまえば、向上心や高い意識を保つことを阻む。現世の誘惑のために、人々は時として神への信仰を放棄することさえある。歴史上、これを最も顕著に例示しているのが中世のヨーロッパである。ラビたち、司祭たちは、彼らの職業を世俗的な権力や財を手に入れるための踏み台とした。例として修道院などは、個々人には清貧を誓わせつつ、組織として所有する資産は増えに増え、彼ら自身の間においてでさえ問題視されるようになるほどの蓄財がなされた。これは宗教的階層を構築することの危険性を示唆する実例である。

18 アラブたちの間には、一年の十二か月のうち四か月はいかなる戦闘も禁ずる、長きにわたって確立されてきた習慣があった。ズルカアダ月、ズルヒッジャ月、ムハッラム月、そしてラジャブ月がそれにあたる。ラジャブ月以外の三か月は連続しており、長期間、戦闘のない日が続くことになるため、他の部族を襲撃し、略奪して生計を立てることを常としていた一部のアラブは、この月々について、日を増やしたり減らしたりするなど、自分に都合のよいように変更を加え、

不当なやり方で敵よりも優位に立とうとした。イスラームは死傷者が出るようなあらゆる闘争を非難するが、とりわけこの時期には巡礼の隊商が移動するため、聖なる月々の特別な尊厳を確実に保つための措置を講じた。

19 ここで章の話題は北方の局面へ向かう。テオドシウスの勅令以来、正教信仰に従うことを拒否した者たちはすべて排除してきたビザンツ帝国は、アラビア半島侵略とムスリム討伐のための準備をしていた。世評に反して、預言者の下にはおよそ三万にのぼる兵が集まり、ビザンツの辺境近く、タブークに進軍した。預言者は四万の兵との戦闘に備えていたが、敵は逃亡した。そこで預言者は、地域のキリスト者やユダヤ教徒の部族といくつかの協定を結び、それからマディーナに帰還した。以降の節は、偽善者たちの態度に関連するものである。

20 大いなる目的のための召喚があった際に、その召喚に応じる特権を有する人こそは幸運な人である。不幸な人とは、俗世の物事に夢中になり、そうした召喚が耳に入らなくなった人である。彼らは、霊的な暗闇のただ中にいるのである。

21 多くの者がタブーク遠征への参加に躊躇したものの、また一方ではそれを上回るほど多くの者が参加したことも事実である。

22 多神を奉ずる部族のある者が、預言者ムハンマドの暗殺を企てたとき、彼は神から、すでに彼に従う者たち複数が移住していたマディーナへ、彼自身も移住するよう命じられた。アリーは彼の自宅に赴き、自らすすんで彼の身代わりとなって敵と対峙する役目を引き受けた。彼が出発したとき、彼に同行していた教友はアブー・バクルただ一人であった。彼がマッカから脱出したことに気づいたとき、暗殺者たちは彼を探して郊外までやってきた。預言者とアブー・バクルの二人は、サウル山の洞窟に身を隠した。預言者が命の危険にさらされていることに大いに不安を感じていたアブー・バクルは、「私たちは二人きりです」と言った。すると預言者は次のように言った。「いいや、神が私たちと共におられる」。この信仰の力が二人の魂にやすらぎをもたらし、神もまた二人の、揺るぎなき地マディーナへの到着を可能としたのだった。神の援助は、その場でたちどころに目に見えるというものではない。しかしそれはいつでも必ずあるのである。





23 夏の酷暑やマディーナでのなつめやしの収穫期など、偽善者たちはタブーク遠征の不参加について様々な言い訳を並べた。預言者は、彼らの言うことがすべて虚偽であることを知っていたが、彼らが参加したとしても、目的の達成には何ら益をもたらさないということも分かっていたため、彼らを残して遠征した。

24 「あなたにアッラーの容赦あれ」。この成句がこの節で示しているのは、何ひとつ過誤はなかったということであり、イマーム・ラーズィーがこれを感嘆の叫びを表現するものとして解釈している通りである。ここで神は、意図的ではない過ちに対する道徳的な責任から預言者を赦免している。本章のこの部分は、遠征の出立前ではなく、遠征の最中もしくは出立の直後に啓示されたものであることに留意しなくてはならない。

25 「ムッタクーン（畏れる者）」とは常に神を意識し、自分の身を悪から守る者を指す。

26 真理に対して奸計を企む者は、共同体の外側、内側の両方からそそのかし、扇動する機会を待ち構えている。彼らは、自分たち自身についてはあらゆる危険も犠牲も回避しようとするが、預言者のように、偉大なる知恵をもって神に導かれた指導者にかかれば、彼らのどのような努力も水の泡となる。

27 偽善者たちの一部は、敵方の女性兵士の誘惑に耐えられそうにないと嘆願し、遠征への参加を免除するよう求めた。しかしこのような嘆願をすることにより、彼らはただ単に、ある誘惑から別の誘惑に屈したことを自ら認めたに過ぎない。別の誘惑とは、すなわち臆病と怠惰である。

28 本章の大部分はタブーク遠征の最中に啓示されたが、これらの節は単に歴史的な出来事を描写するばかりではなく、偽善ないし不誠実というものの本質について説き明かすことを目的としていることを心に留めつつ読み進めるべきだろう。

29 信仰する者たちに対して常に隠し事を企てていた偽善者たちは、自分たちの見せかけを維持するために、イスラームの目的のために貢献しているかのようなそぶりをした。彼らの「貢献」は、しかしながら受け入れられることはなかった。

彼らの心に悪癖が宿っていたからである。次の節には、彼らが拒否される三つの理由が示されている。

30 ここでの「懲罰」とは、「真理を拒んだ者として現世を終え、その罪のために来世で苦しむ」ことを意図している、という意味。三章一七八節ならびに八章二八節も参照。

31 サダカ（慈善）とは、神の名において主に貧しい者や困窮している者、またこの後の六〇節で詳述されている目的のために与えられる寄進を指す。ザカート（喜捨）は、組織づけられたムスリム共同体における制度上の、かつ義務的な寄付行為であり、通常は年間を通しての所有財の四十分の一、また地上全体の果実の十分の一がこれに相当するものとされる。その詳細は、預言者のハディースや、イスラーム法の古典的な著作を通して伝えられている。

32 「それ［慈善］にたずさわる者」とは、寄付の集約や管理を委ねられた、行政者から任命されたいわば公務員的な存在を指す。

33 偽善者たちは預言者のことを、自己欺瞞に陥った、何でも聞き入れるだけの「耳」に過ぎないと中傷した。彼は真に信仰する者に対しては慈悲そのものであったが、信仰を否定する人や、彼に対して悪意を持つ者に対してまで同様であったわけではない。中傷者には痛ましい懲罰が待ち受けている。

34 ここで描き出されている相反する心のあり方は、偽善とは単に自分を取り巻く社会環境に関してだけではなく、偽善を抱えた自分自身に対しても向けられるということを示している。「この不健全な人々の集団は、本音では何を考えているのか」と内心では思いつつ、不本意ながらというよりも、むしろ他者への恐れから唯々諾々とその集団の中に入っていくのである。これは神の存在やムハンマドの預言者性に真の確信を持たない、ある種の偽善者を指す。偽善者のほとんどは、世俗的な利益を得るために信仰者としてみなされようと常に汲々としている。

35 偽善者たちがビザンツ帝国征服を試みる預言者を嘲笑したとき、彼らについての啓示が下された。問いただされると、彼らは「私たちはただ、戦いのために士気を高めようと努めただけだ」と言った。彼らは明らかに嘘をついており、そ





れでこの啓示が下された。

36 これは善悪のいずれかを受け入れるという選択を迫られた際の、偽善者たちに特有の優柔不断な態度についての言及である。善を選ぶ者は赦しを得るが、悪を選ぶ者には懲罰があるだろう。

37 ここでの「互いに同じ者どうし」とは、偽善者はそれぞれ別個の人格というよりも、本質的に同質・均質である、という意味である。

38 「忌まれる」とは、ここでも他と同様、主に拒まれることによって恩恵と慈悲が剥奪されることを意味する。

39 ヌーフの物語は七章五九節から六四節、アードは七章六五節から七二節、そしてサムードは七章七三節から七九節でそれぞれ語られている。イブラーヒームについてはクルアーンの様々な箇所にあるが、特に六章七四節から八二節を参照。マドヤンについては七章八五節から九三節を、またルートと、邪悪ゆえに徹底的に滅ぼされた都については七章八〇節から八四節を参照。滅ぼされた都とは、ルートの努力を無駄にしたソドムとゴモラのことである。これらの預言者たちは、たとえばアードの民に遣わされたフードや、サムードの民に遣わされたサーリフのように、それぞれ自分の民や土地に遣わされた使徒であった。

40 「信仰者の男女は、互いに味方同士」。男女は互いの保護者であり、友人であり、相手を守り、守られる間柄である。

41 「永遠の園」。エデン（アドン）、すなわち「永遠の楽園」の意。前節同様、明示的に「男女」の語を繰り返しているのは、イスラームにおいては両性ともに霊的な向上の可能性があることを認め、かつ宣言していることの証明である――「証明」が必要とされるならば、の話ではあるが。

42 ここで言及されているのは、具体的には、タブーク遠征からの帰還の後で発覚した預言者暗殺の企てについてである。企ては失敗に終わった。しかしイスラームの教えと、預言者のすぐれた統治によって平和が確立され、社会の隅々にまで繁栄がもたらされたマディーナの住人の中に、ごく一部とはいえ陰謀を企てる者たちがいたという意味では、状況は

はるかに悪いともいえた。交易が盛んになり、社会正義も申し分なく行き届いているかに見えていた。にもかかわらず、こうした者たちにできる唯一の返報が、善に対して悪をさし向けることであった。それはイスラームが利己主義を制することを目的とし、物質的な豊かさや社会的な地位に根拠を置くよりも、貧しい者や謙虚な者の権利を優先し、人間に優劣をつけるものは、ただ精神的な価値に他ならないと説いたことに対するある種の復讐だったともいえる。

43 クルアーンによれば、世俗的な所有物に対する過剰な愛着は、ある種の人間の意識をある種の状態に持っていくが、その状態こそが「偽善」である。アブー・フライラが語ったとされるハディースでは、預言者は次のように述べている。「偽善者には三つのしるしがある。話せば嘘をつき、約束すれば破り、信頼されれば裏切る」。ブハーリー、ムスリム、ティルミズィー、ナサーイーが伝えている。

44 偽善者たちの頭領アブドゥッラー・イブン・ウバイイは、病を患い、死の床についた。彼の息子は預言者に、彼のために祈ってくれるよう願った。息子は非常に誠実なムスリムだったため、預言者は彼を拒めず、その父親のために神の赦しを請うた。するとその後で、次の節が啓示された。

45 『リサーン・アル＝アラブ』、『タージ・アル＝アルース』（どちらもアラビア語の古典的辞書である）によれば、「七十」という数字は「数多の、沢山の」を意味することが多く、また「七」は「複数の、いくつかの」とほとんど同義語である。ブハーリーやムスリムによるハディースが伝えている通り、預言者が頻繁に、自らの敵に赦しがあるよう神に祈っていたことは明らかである。

46 イスラームに対する敵意を表明している人のために葬送の儀式を執り行うことは、イスラームでは禁じられている。しかしムスリムの死に際しては、故人を知っているか否かに関わらず、ささやかでも葬式を執り行えるよう手伝うのがムスリムの義務である。故人に慈悲があるよう祈り、墓地まで出向き、埋葬されるのを見届けるのがよいとされる。

47 「ハヤート（生）」という言葉がないことを除けば、この節は五五節の繰り返しである。五五節では、ムスリムの共同体の存続が自分たちにも必要であることがわかっていながら陰では否定的な態度をとる者たちが差し出す慈善が受け入れられないことを説き明かす節と関連して啓示されていた。八五節で「生」という言葉が取り除かれているのは、ここで論点となっているのがそうした者たちの死後の埋葬への参加の拒否についてであるからかもしれない。

48 身体の虚弱や、年齢、性別、疾病や疾患といった理由で軍事行動に参加できなかった者が非難されることがあってはならない。また、貧しさゆえに貢献することも、責任を果たすこともできない者も同様である。しかしながら彼らには、常に穏やかさを保ち、恐慌をきたすことのないよう心がけ、負傷した者の世話をしたり、戦場に赴いた者の家族を助けたりすることが求められる。そうした貢献は、軍事的な勝利において重要な役割を果たす。

49 預言者の教友たちの中には、タブーク遠征に赴きたくとも、そのための馬やらくだばかりか、ふさわしい衣類や食糧を確保することさえ難しいほどに貧しい者もいた。彼らは預言者に、そうした準備のための品々を授けてくれるよう頼んだ。しかし、そのようなことは預言者にも不可能だった。そう告げられた時の彼らの失望は、イスラームの道のために尽くしたいという熱望に比例していた。

50 タブーク遠征に参加せず残留した人々は、預言者が戻った際には罰せられるであろうことを恐れた。実際、彼らの怯え方は大変なものであったため、預言者は残留した人々に対し、懲罰的な対応は取らずに済ませた。

51 預言者はしばしば、「砂漠のアラブの生き方」といった遊牧民の生活様式に対する定住民の生活様式の優位性を強調した。「アル・バディーヤ（砂漠、荒野の意）は、住まう者の気質を荒々しくしてしまう」。ティルミズィー、アブー・ダーウード、ナサーイー、イブン・ハンバルが、イブン・アッバースの言を典拠にハディースとして伝えている。またアブー・フライラの言を典拠とする類似の伝承が、アブー・ダーウードとバイハキーによって伝えられている。

52 信仰が完全ではなかった砂漠のアラブたちは、義務として信仰者に定められている喜捨を強制的な罰金であるかのようにみなしていた。イスラームは、社会における極貧の発生を防ぎ、公共の支援を得てほぼ全員が一定の生活水準を維持

できるよう、慈善のために費やすことを大きな美徳としている。これは人間の貧困や不幸を解決するために組織的に取り組む必要のあることであり、またこれを実践することにより、人は神とその預言者の祈りにより近づくことができる。

53 タブーク遠征の間、自宅にとどまっていた人々の中には、後になって恥をおぼえ、悔い改めた者もいた。彼らは自分で自分の身体をモスクの柱に縛りつけ、預言者がやって来て［縄を］解くまで、その場にとどまることを誓った。タブークから戻った預言者は、その様子を見て次のように言った。「私もまた、主から命じられることのない限り［縄を］解くことはしないと誓おう」。

54 タブーク遠征に加わらなかった偽善者には、三種類の者たちがいた。（1）できる限りの言い訳を並べた者たち。言い訳することが、すでに習慣となってしまっている者たちであり、そのため彼らには何も期待することはできない。（2）悪のささやきに従ってしまったものの、後になって罪悪感を持ち、恥じて悔い改めた者たち。のちに彼らは自らの財を、償いとして差し出した。（3）いずれともつかない疑わしい者たち。彼らには、後になって神の判断が下された。一一八節参照。

55 マッカからの移住者たちを受け入れたマディーナのアンサール（援助者）のうち、七十名が預言者に忠誠を誓ったときのことである。そのうちの一人アブドゥッラー・イブン・ラワーハが、次のように尋ねた。「神の使徒よ！　あなたの主と、あなたの求める条件とは何か」。預言者は答えた。「私の主に対する忠誠の条件とは、主たるアッラーを信じ、何ものをも同位に配さず、アッラーのみを崇拝することである。私については、私の目的をあなたの目的とし、最後までそれを守ることである」。「私たちがそのように行えば、どのような報いがあるのか」と彼らが尋ねると、「楽園の庭と永遠の生」と彼は答えた。すると彼らは叫んで言った。「なんと有利な取引か！　私たちはこの誓いに背くことはしないし、また背きたいとも思わないだろう」。この神との間に結ばれる契約こそ、タウラート（律法）の、またインジール（福音）の、またクルアーンの示す救済である。救済とは、私たちが自分で自分を神に明け渡すことによってのみ得られるのであり、自分以外の他者の犠牲や美徳、仲裁などによって得られるものではない。自分を神に明け渡すには、それにより心を浄化し、神の恩恵に値する者となるための、身体と精神両方における様々な形での神への奉仕がある。

56 ここで「旅に出る者」と訳出した「サーイフーン」という語は、その意味を「神の道のために一心に献身し、自らの身の回りのすべてに私淑し、またすべてから訓戒を引き出し、厳粛な生活を送り、神のみわざについての知識を高め、神の祝福に感謝し、神のみを崇拝して生きてゆく者」と解釈できるだろう。

57 これは通常、死者のために捧げられる祈りについてであると理解されている。（1）イスラームについてその教えを知らされた後で、悔い改めることなく死を迎えた者、（2）最後まで、積極的に信仰と対立し、反対の姿勢をとった者、そして（3）罪に固執し、慈悲への扉を自ら閉ざした者。そうしたことを知りつつ、故人のために祈り続ける者に対しても、慈悲の扉が閉ざされる可能性は高い。しかしそもそも何をもってイスラームを「知る」状態になるのだろうか。預言者の生前であれば、それは彼がその生涯を通して一人ひとりに説き明かした通りで、知識とは特別な訓戒と命令によってもたらされるものであった。この預言者という光源が放つ光がない現代においては、私たちは可能な限り最善の判断に従ってふるまわねばならない。

58 ラーズィーを除くほとんどの解釈者は、この節で言及されているのは、一一三節の啓示が下される以前には、神以外のものに神と同等の神性を帰する「シルク」、いわゆる多神崇拝の状態のままでこの世を去った自らの近親者や友人たちに、神の赦しがあるよう祈っていた信仰者たちであるとしている。一方でラーズィーは、この節は本章全体を通して示されている「アッラーとその使徒を否定」する者、すなわち真理を否定する者と、神が「何を畏れるべきかを明か」した後になって道に迷う者たちに下される懲罰の熾烈さを暗に示すものであるとしている。

59 タブーク遠征に参加せず、その後になって自分たちの判断を深く後悔した、マディーナの信仰者たち三名についての言及である。

60 「マディーナの住民」と特定した上での言及は、マディーナとは預言者の導きの下にイスラームが広まった、いわば預言者の町であるということを示すものである。

61 タブーク遠征に加わらなかった者を非難する多くの啓示が下されたため、その後はムスリムの軍勢と共に行動しない者はほとんどいなくなった。するとその後に、次の節が啓示された。

62 誰も後に残さずに全員が戦場に赴くのは間違いである。知識と技術を有する者は、後に留まり年長者として若い世代を教え育てるべきであろう。文化と教養の継承という戦いを怠っていたのでは、前線での戦闘に勝利したところで何のためになるだろうか。イスラームにおける知識の探求とは、神に自らを捧げるすべての男女に課された聖なる義務である。この節では、宗教的な知識に限定された表現となってはいるが、そもそも宗教的な知識を完成させるためには、あらゆる分野の知識に積極的に関わってゆく必要がある。

63 「あなたがたの近くにいる、［真理を］拒む者」とは、物理的な意味で危険なのは、（侵略的な意図をもって遠方からムスリムの地に近づいてくる者たちも含めて）近くにいる者たちに限られることから生じた言及であるともいえる。

64 一一一節で示されている、楽園について「交わした取引」を喜ぶという意味である。

65 神の与える試練は、人間には理性が授けられており、したがって正しいことと間違ったことを分別し、選択する能力があるという前提の上に成り立っている。「毎年、一度あるいは二度」とは、試練とは一生涯に一度といったものではなく、それは絶えず繰り返し課されるものであることを示している。

66 信仰を否定する者でさえ、信仰と真理から離れれば、その内心と良心は落ち着きのなさを感じるものであり、そのため顔を背け、人の目を忍んで隠れたところで視線を交わし合うといった態度に及ぶのである。

67 「信仰者に優しく、慈悲深い」。全能の神はその使徒ムハンマドを、神名でもあるラウーフ（優しく）、ラヒーム（慈悲深い）の二つの名で呼んだ。神の使徒たちの中でも、これほどの名誉に浴した者はいないだろう。

# 第一〇章　ユーヌス

マッカ啓示

本章は預言者ユーヌスにちなみこの名がつけられている。ユーヌスの民は、彼らの犯した罪のためにほとんど滅ぼされかけたものの、悔い改めたことにより主の救いを得た。

アラブたちはムハンマドについて、叔父のアブー・ターリブに養育された孤児としてその存在を知ってはいたものの、彼を通して神のメッセージが下されたときには、その事実を決して受け入れようとはしなかった。彼らは、人間が啓示を運ぶ者ともなれる可能性を秘めているということさえ信じてはいなかったのである。また「仮にそうした者がいたとしても、少なくとも裕福で身分も地位も高い、有力な指導者や王族であるはずだ」というのが、彼らの意見であった。しかし彼の正直さや、主の道のために苦難をひきうける彼の姿勢を目の当たりにして、彼らは困惑した。そのあげくに、すべて魔術であると結論するにいたったのである。本章の多くの部分で、この不合理な姿勢について取り上げられている。

マディーナで啓示された三つの節を除き、本章はマッカ後期に啓示された。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 アリフ、ラーム、ラー。これは、賢明な啓典の御しるし。[1]

2 人々には、われらが彼らのひとりに「人々に警告しなさい。また信じる者たちに良い報せを伝えなさい。彼らには、主の御許に確かな足場がある」と、啓示したことが驚異なのか。［真理を］拒む者は言う。「本当に、これは明らかに魔術師だ」。[2]

3 本当に、あなたがたの主とはアッラーのこと。諸天と大地を六日の間に創造し、それから玉座の上に就いて万事を司る御方。この御方の思し召しなくして、とりなせる者はいない。それがアッラー、あなたがたの主。それゆえ、この御方に仕えなさい。それでもあなたがたは、想い起こそうとはしないのか。[3]

4 あなたがたの帰りゆく先は、ことごとくかの御方にある。アッラーの約束は真理である。かの御方は創造［の過程］を始め、そののちそれを繰り返す。それは信じて正しい行いをする者たちに公平に報いるため。［真理を］拒む者たちには、［真理を］拒む者であったために、煮えたぎる飲みものと痛烈な懲罰があるだろう。

5 太陽を輝かせ、月を照らし、諸々の位相を定めた御方。それはあなたがたが、年の数と［月日の］計算を知れるようにするため。アッラーはこれらを、ただ真理のみをもって創造した。このようにかの御方は、知っている民に御しるしを解き明かす。

6 夜と昼との交替の中に、またアッラーが諸天と大地の間に創造するものの中に、畏れる民への御しるしがある。

7 本当に、われらと会することを待ち望まない者、現世の生を喜び、満足しきっている者、われらのしるしを顧みない者、[4]

8 これらの者は、得てきたことのために業火がその住まい。

9 本当に、信じて正しい行いをする者には、その信仰により主の導きがあるだろう。至福の楽園の中、川

が彼らの足元を流れる。
10 その中での、彼らの呼びかけは「アッラーよ、あなたに讃美あれ」。その中での、彼らの挨拶は「平安あれ」。
そして呼びかけの終わりには、「アッラーに称賛あれ、諸世界の主に」。[5]
11 人々が良いものを急かすように、もしアッラーが人々に悪いものを急いでいたなら、彼らの期限はきっ
と済まされていた。しかしわれらは、われらと会することを待ち望まない者たちが、その逸脱の中をあ
てもなくさまようままにさせておく。
12 困難に遭ったとき、人間は横たわっていても、座していても、あるいは立っていてもわれらに呼びかける。
しかしわれらが困難をとり除くと、困難に遭ったためにわれらに呼びかけたことはなかったかのように
通り過ぎてゆく。このように、行き過ぎた者には自分の行いがすばらしいことのように見えている。
13 われらは、すでにあなたがた以前に、幾多の世代をその罪のために滅ぼしてきた。彼らには、その使徒
たちが明白な証をもって到来していた。しかし彼らは信じようとしなかった。このように、われらは罪
ある民に報いる。
14 そして彼らの後に、あなたがたをして地上を継ぐ者とした。それは、あなたがたがどのようにふるまう
かを見るため。
15 われらの明白なしるしが読み聞かされたときのこと。われらと会することを待ち望まない者たちは言っ
た。「これとは別のクルアーンを持ってくるか、あるいはこれを変えなさい」。言いなさい。「私が自分の
意のままに変えられるものではない。私はただ、私に啓示されたことに従うだけ。本当に、主に逆らお
うものなら、私は大いなる日の懲罰が恐ろしい」。[6]
16 言いなさい。「もしアッラーがそうと望めば、私があなたがたにこれを読み聞かせることも、またこの御





方があなたがたにこれを教えることもなかっただろう。これ「が啓示される」以前から、私はすでに生涯
のほとんどをあなたがたのあいだで過ごしてきた。それでもあなたがたは、考えないのか」。[7]
17 アッラーについて嘘いつわりをねつ造するか、あるいはその御しるしを嘘よばわりするよりも不正な者
があるだろうか。本当に、罪ある者は栄えないだろう。
18 彼らはアッラーをさし置いて、害にもならず益にもならないものに仕える。彼らは言う。「これらは、私
たちをアッラーにとりなしてくれるのです」。言いなさい。「あなたがたはアッラーに、諸天と大地にお
いてかの御方の知らないことを報せようというのか」。讃美あれ、彼らが連ねるものを超越して、いと高
くにおわす御方に。
19 人々は、かつてただひとつの共同体であった。それから「互いに」異なっていった。もし、あなたの主か
らあらかじめ御言葉がなかったなら、彼ら「人間」のあいだの異なりについては、彼ら「人間」のあいだ
で決着がついていただろう。[8]
20 彼らは言う。「彼には、なぜその主からしるし「となる奇跡」が下されないのか」。言いなさい。「目には
見えないものは、ただアッラーにのみ属する。それゆえ「その結末を」待っていなさい。本当に私も、あ
なたがたと共に「結末を」待つ者のひとり」。
21 困難に遭った後に、われらが人間に慈悲を味わわせると、見なさい。彼らはわれらのしるしに対して謀
りごとをする。言いなさい。「謀りごとなら、アッラーの方が迅速である」。本当にわれらの使者「であ
る天使」たちは、あなたがたの謀りごとを書きとどめている。[9]
22 あなたがたに、陸と海とを旅させる御方。あなたがたが船に乗るとき、良い風のおかげで「海の上を」渡
ると、彼らは有頂天になる。風が嵐になり、あたり一面から波が押し寄せると、彼らはこれで命運尽き

たものと察し、宗教に真摯になってアッラーに呼びかける。「もしあなたが私たちを、これから救い出したなら、私たちは必ず感謝する者となります」。10

23 しかし、かの御方が彼らを救い出すと、見なさい。彼らは地上で、真理なくして不義をはたらく。人々よ。あなたがたは、ただ自分自身に不義をはたらいているに他ならない。現世の生を楽しもうと、そののち、あなたがたの帰りゆく先はわれらにある。そしてわれらはあなたがたに、あなたがたの行ってきたことについて告げ報せるだろう。

24 本当に、例えるなら現世の生とは、われらが空から降らせる雨のようなもの。地上の草木はそれを吸い上げ、人間や家畜の食べるものとなる。大地が［植物の］飾りで美しく装われると、住民は自分たちがその所有者であるとみなす。しかしわれらの命令が夜に、あるいは昼にもたらされると、昨日は生い茂っていたはずが、まるで刈り取られたようになる。このようにわれらは、省みる民にしるしを解き明かす。11

25 アッラーは平安の館に呼び招き、誰であれ御心にかなう者をまっすぐな道へ導く。

26 善事をはたらいた者には、最善のものと、さらにそれ以上のものがある。影や恥が、彼らの顔を押しつぶすこともない。これらの者は楽園の仲間。彼らは、永遠にその中に住まうだろう。12

27 しかし悪事をはたらいた者には、それと同じような悪い報いがある。彼らは恥に押しつぶされ、アッラーから彼らをかばうものもない。彼らの顔は、まるで夜の一片に覆われたようになる。これらの者は火獄の仲間。彼らは、永遠にその中に住まうだろう。

28 その日、われらは彼らを一斉に集め、そののち［主に］同輩を連ねていた者たちに告げるだろう。「その場にいなさい、あなたがたも、あなたがたの『同輩たち』も」。それからわれらが、彼らの間を引き離すと、彼らの『同輩たち』が言う。「あなたがたが仕えていたのは、私たちのことではない。13





29 アッラーは、私たちとあなたがたの証言者として万全である。私たちは、あなたがたが仕えていることについては無関心であった」。

30 こうしてすべての者は、それぞれが先に行ってきたことと向き直させられ、そののち彼らの真の庇護者であるアッラーに連れ戻され、かつて彼らがねつ造していたものも、彼らから失われるだろう。

31 ［預言者よ、彼らに］言いなさい。「空と大地から、あなたがたに糧をもたらすのは誰か。聴覚と視覚を統べるのは誰か。死せるものの中から生けるものを連れ出し、また生けるものの中から死せるものを連れゆくのは誰か。万事を司るのは誰か」。すると彼らは「アッラー」と言うだろう。言いなさい。「それでもあなたがたは、畏れないのか」。

32 それがアッラー、あなたがたの主たる真理。真理をおいてその先に、迷誤の他に何があるのか。それなのに、どうしてあなたがたは遠ざかるのか。

33 このように、あなたの主の「本当に彼らは、信じないだろう」との御言葉は、背く者の上にその真理を証する。

34 言いなさい。「あなたがたの『同輩たち』のうち、創造を始め、そののちそれを繰り返せるものが誰かあるのか」。言いなさい。「創造を開始し、そののちそれを繰り返すのはアッラーである。それなのに、どうしてあなたがたは惑わされるのか」。

35 言いなさい。「あなたがたの『同輩たち』のうち、真理に導けるものが誰かあるのか」。言いなさい。「真理に導くのはアッラーである。従うに値するのは、導く者の方か、あるいは導きがないと自分では導けない者の方か。それなのに、あなたがたはどうしたというのか。どのように判断するのか」。

36 彼らの多くは、ただ憶測に従っているだけ。しかし憶測は、真理に対しては何の役にも立たない。本当

にアッラーは、彼らのすることをよく知っている。

37 このクルアーンは、アッラーを置いて他のものがねつ造できるようなものではない。むしろこれは、以前からあったものの確認であり、諸世界を統べる主からの、疑う余地もない啓典の解き明かし。[14]

38 それとも彼らは、「彼［預言者］がこれをねつ造した」と言うのか。言いなさい。「では、これと同じような章をひとつでも持ってきなさい。アッラーの他に［あなたがたを助ける者がいるなら］、あなたがたが呼べるものを呼びなさい。もしあなたがたが、真実を語っているのなら」。

39 いいや、しかし彼らは、自分たちの知識の及ばないものも、またその解き明かしがいまだもたらされていないことをも嘘であるとする。彼ら以前の者たちも、同じように嘘であるとしていた。それで見なさい、不正をなす者の最後がどのようであったか。[15]

40 彼らの中には、これ［クルアーン］を信じる者もあれば、信じない者もある。あなたの主は、退廃を広める者についてもっともよく知っている。

41 もし彼らがあなたを嘘よばわりするなら、言いなさい。「私は私のために行い、あなたがたはあなたがたのために行う。あなたがたは私の行いに何の関わりもなく、私もあなたがたの行いにまったく関わりがない」。

42 彼らの中には、あなたに耳を傾ける者もある。しかしあなたは、聞かない者に聞かせることができるだろうか。彼らは、考えようとさえしないのに。[16]

43 彼らの中には、あなたに目を向ける者もある。しかしあなたは、見ない者を導くことができるだろうか。彼らは、見ようとさえしないのに。[17]

44 本当に、アッラーが人々に不正をなすことは決してない。しかし人々は、自分自身に不正をなす。[18]





45 その日、かの御方は彼らを一斉に集める。彼らは、まるで［現世での時間が］昼の一刻しか過ぎなかったかのように、互いに相手の見分けがつくだろう。アッラーと会することを嘘よばわりし、導かれずにいた者たちは、確かに敗者となるだろう。

46 われらが、彼らに約束したものの一部をあなたに示そうと、あるいはあなたを召し寄せようと、彼らの帰りゆく先はわれらにある。彼らの行いについては、アッラーがその証言者となる。

47 すべての共同体に、その使徒がいる。使徒が到来するとき、彼らのあいだに公平な裁きがなされる。彼らが、不正に扱われることはない。[19]

48 彼らは言う。「もしあなたがたが真実を語っているのなら、その約束はいつ果たされるのか」。

49 言いなさい。「アッラーの御心でない限り、私は自分の利害さえどうすることもできない。あらゆる共同体に、それぞれの期限がある。期限が到来するとき、それは一刻も遅らせることはできず、また早めることもできない」。

50 言いなさい。「あなたがたは、考えてもみたのか。もし、かの御方の懲罰があなたがたに、夜か、あるいは昼に科されるなら、罪を犯す者はどちらを急かすのか。

51 あなたがたは、それが［実際に］起こったときに信じるようになるのか。今になってか。あなたがたは、それを急かしていたのに」。

52 そうして、不正をなす者たちは告げられるだろう。「永劫の懲罰を味わえ。あなたがたは、ただ自分が得てきたことに報われるだけではないか」。

53 彼らはあなたに、「それは真実なのか」と尋ねるだろう。言いなさい。「そうだ。私の主にかけて、それは真実である。そしてあなたがたには、逃れられない」。

54 もし不正をなした者が、それぞれ地上にあるすべてのものを持っていたなら、必ずそれをもってあがなおうとするだろう。懲罰を目の当たりにすると、彼らは後悔を打ち明ける。しかし彼らのあいだには、公平な裁きがなされるだろう。彼らが不正に扱われることはない。[20]

55 諸天と大地にあるものはすべてアッラーのものではないか。本当に、アッラーの約束は真理ではないか。しかし、彼らの多くはそれを知らない。

56 この御方は生を与え、死をもたらす。そしてあなたがたは、この御方に帰されるもの。

57 人々よ。あなたがたの主から、教示がもたらされている。あなたがたの胸の中にあるものの治癒であり、また信仰者のための導きともなり、慈悲ともなるもの。[21]

58 言いなさい。「アッラーの御恵みと慈悲を、歓喜すべきものとせよ」。これの方が、彼らの積み上げるものよりも良い。[22]

59 言いなさい。「あなたがたは、考えてもみたのか。アッラーがあなたがたのために下した糧を、あなたがたはあるものを非合法とし、またあるものを合法とした」。言いなさい。「アッラーが、あなたがたに［そうすることを］許したのか。それともあなたがたが、アッラーに対してねつ造したのか」。

60 復活の日、アッラーに対して嘘いつわりをねつ造していた者たちは何を思うだろうか。本当にアッラーは、人々に対し御恵みゆたかである。しかし彼らの多くは感謝しない。

61 あなたが何をしていようと、クルアーンのどの箇所を読み聞かせていようと、またあなたがたが何を行っていようと、何ごとかに没頭しているとき、われらは必ずあなたがたの上から立ち会っている。塵ひと粒の重さのものであろうと、大地にあるもの、諸天にあるもの、あなたの主から逃れるものはない。それより小さいものであろうと、大きいものであろうと、明白な記録の中に［記されてい］ないものはない。[23]





62 アッラーを友とする者には、恐れもなく、嘆きもないではないか。[24]

63 ［主を］信じ、畏れる者たち。

64 彼らには、現世の生においても来世においても良い報せがあるだろう。アッラーの御言葉に変わるところはない。大いなる成就とは、まさしくこのこと。[25]

65 ［ムハンマドよ、］彼らの言葉に嘆くことはない。本当に、栄誉はことごとくアッラーに属する。すべてを聞く御方、すべてを知る御方。

66 本当に、諸天にあるもの、大地にあるもの、すべてアッラーのものではないか。アッラー以外のものを呼び求めている者たちは、［主と］同列に連ねているものにさえ従っていない。彼らは空想に耽っているだけ。彼らは、ただ憶測しているに過ぎない。

67 あなたがたの憩いのために夜を、ものが見えるよう昼を設ける御方。本当にその中には、耳を傾ける民への御しるしがある。

68 彼らは言う。「アッラーは御子をもうけたもう」。かの御方に讃美あれ、満ち足りた御方に。諸天にあるもの、大地にあるもの、すべてこの御方に属する。これについて、あなたがたには何の権威もない。あなたがたは知りもせずに、アッラーについて何ごとか言おうとするのか。[26]

69 言いなさい。「アッラーについて、嘘いつわりをねつ造する者たちは栄えない」。

70 現世にはしばらくの楽しみがある。そののち、彼らの帰りゆく先はわれらにある。そのとき、われらは彼らに厳重な懲罰を味わわせよう、彼らが、［真理を］拒んでいたために。

71 彼らに、ヌーフの話を読み聞かせなさい。彼がその民に、こう言ったときのこと。「私の民よ。たとえ私が［あなたがたと共に］この場にいて、アッラーの御しるしを想い起こさせることがあなたがたにとり辛

いことであるとしても、私はアッラーに委ねている。それゆえあなたがたは、あなたがたの連ねている『同輩たち』と一緒にどうするか決めなさい。自分たちで決めたことに戸惑っていてはならない。私に対して猶予することなく、決めた通りにしなさい。[27]

72 たとえあなたがたが背を向けるとしても、私は、あなたがたに報酬を求めはしなかった。私の報酬は、ただアッラーのみにある。私は、服従する者［ムスリム］のひとりであるよう命じられている」。

73 しかし彼らは、彼［ヌーフ］を嘘よばわりした。それでわれらは彼と、彼と共にいた者たちを船に救い、彼らをして［地上を］継ぐ者とした。また、われらのしるしを嘘よばわりした者たちを溺れさせた。それゆえ見なさい、警告を受けていた者たちの最後がどのようであったか。[28]

74 そののちわれらは、彼の後にも［多くの］使徒たちをそれぞれの民にさし向けた。彼らは明白な証をもって到来したが、彼らは、以前に嘘であるとしたものを信じようとはしなかった。このようにして、われらは法外の者たちの心に封をする。[29]

75 そののちわれらは、彼らの後にムーサーとハールーンを、フィルアウンとその長老たちに、われらのしるしをもたせてさし向けた。しかし彼らは高慢であり、罪を犯している民であった。

76 われらの許から真理がもたらされると、彼らは言った。「これは明らかに魔術に違いない」。

77 ムーサーは言った。「もたらされた真理に対し、あなたがたの言うことはそれか。これが魔術なのか。しかし、魔術師が栄えることはない」。

78 彼らは言った。「あなたが私たちのところへ来たのは、先祖に習ったことから私たちをそむかせて、この地での権勢を得るためか。私たちは、決してあなたがたの信仰者にはならない」。

79 フィルアウンは言った。「腕の立つ魔術師を、すべて私のところへ連れて来い」。





80 こうして魔術師がやって来ると、ムーサーは彼らに言った。「あなたがたが投げようとしているものを投げなさい」。

81 そして彼らが投げると、ムーサーは言った。「あなたがたがもち出したものこそ魔術だろう。アッラーは、必ずそれを無に帰すだろう。アッラーは、退廃を広める者の行いを正当なものとはしない。[30]

82 たとえ罪を犯す者が嫌おうと、アッラーは御言葉をもって真理を確立する」。

83 しかし彼の民は、フィルアウンとその長老たちの迫害を恐れ、子孫の代になるまでは、誰もムーサーを信じようとはしなかった。フィルアウンはその地の頂点にあり、本当に度が過ぎた者であったため。

84 ムーサーは言った。「私の民よ。もしあなたがたがアッラーを信じるなら、もしあなたがたが服従する者［ムスリム］なら、かの御方に委ねなさい」。

85 すると彼らは言った。「私たちはアッラーに委ねます。主よ、私たちを、不正をなす民に対する［単なる一時の］試練にはしないでください。

86 あなたの慈悲によって私たちを、［真理を］拒む民から救ってください」。

87 われらはムーサーとその兄に啓示した。「あなたがたの民のために、エジプトに家をかまえなさい。またあなたがたの家をキブラとし、礼拝のつとめを守りなさい。そして信仰者たちに、良い報せを伝えなさい」。[31]

88 ムーサーは言った。「主よ、あなたはフィルアウンとその長老たちに、現世の生における飾りと財を与えました。主よ、［それにより］彼らが、あなたの道から迷い去ってしまうように。主よ、彼らの財を消し去ってください。彼らの心を固くしてください。そうすれば彼らは、痛烈な懲罰を目の当たりにするまで、信じようとはしなくなるでしょう」。

89 ［主は］告げた。「あなたがた両名の祈りは聞き届けられた。それゆえ、あなたがたはまっすぐな道にあ

りなさい。何も知らない者たちの道に従ってはならない」。
90 われらは、イスラエルの民を連れて海を渡らせた。フィルアウンとその軍勢は、暴虐と敵意をもって彼らを追ってきた。溺れ死にそうになったとき、フィルアウンは言った。「私は信じます。イスラエルの民が信じる御方の他に、いかなる神もない。本当に私は、服従する者のひとりです」。
91 「今になってか。以前には逆らい、退廃を広める者のひとりであったのに。[32]
92 しかし、今日われらはあなたの身を救おう、あなたを継ぐ者たちへのしるしとなるように。本当に、人々の多くはわれらのしるしを顧みない」。[33]
93 われらはイスラエルの民を安住の地にかまえさせ、良いものをもって彼らの糧とした。知識がもたらされるまでは、彼らが相争うこともなかった。彼らのあいだでの相違については、復活の日、あなたの主が彼らのあいだを裁くだろう。
94 われらがあなたに下したものに、もし疑わしさをおぼえるなら、あなた以前の啓典を読んでいる者に尋ねなさい。真理は、すでにあなたの主から到来している。それゆえあなたは、疑う者のひとりになってはならない。
95 また、アッラーの御しるしを嘘よばわりする者のひとりになってはならない。さもないと、あなたは敗者になるだろう。
96 本当に、あなたの主の御言葉のとおりになる者たちが信じることはないだろう、[34]
97 たとえすべての御しるしが到来しようと、痛烈な懲罰を目の当たりにしない限りは。[35]
98 信じたために、その信仰が益となった町が、どうしてただユーヌスの民だけであったのか。彼らが信じるようになると、われらは彼らから現世の生における恥辱の懲罰をとり除き、しばらくのあいだ楽しませておいた。[36]
99 もしそれがあなたの主の御心なら、地上の者はことごとく一斉に信じるようになっただろう。それをあなたは、人々に無理強いをして信仰者にしようとするのか。[37]
100 誰であれ、アッラーの思し召しがない限り信じるようにはならない。かの御方は、考えることをしない民の上には汚辱（おじょく）を加えるだろう。
101 言いなさい。「諸天と大地にあるものをよく見なさい」。しかし信じない民には、御しるしも警告も役に立たない。
102 それでは彼らは、彼ら以前の、過ぎ去った者たちの日々［に起きたこと］と同じようなものの他に何を待つというのか。言いなさい。「それなら［その結末を］待っていなさい。本当に私も、あなたがたと共に［結末を］待つ者のひとり」。
103 そののちわれらは、われらの使徒たちと、信じる者たちを救うだろう。このように、信仰者を救うことは、われらのなすべきつとめ。
104 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「人々よ。たとえ私の宗教に、あなたがたが疑わしさをおぼえるとしても、私は、アッラーをさし置いてあなたがたの仕える諸々（もろもろ）のものに仕えたりはしない。私は、あなたがたを召し寄せる御方であるアッラーに仕える。私は、ただ信仰者のひとりであるよう命じられている」。
105 純正な人として、あなたの顔をこの宗教に向けなさい。多神を奉ずる者のひとりにならないように。
106 アッラーをさし置いて、あなたの益にもならず、害にもならないものを呼び祈ってはならない。もしそのようなことをしたときは、本当にあなたは不正をなす者のひとりとなるだろう。
107 もしアッラーがあなたに、害をもって触れたなら、この御方の他にそれをとり除ける者は誰もいない。

もしアッラーがあなたに、何か良いものを意図したなら、その御恵みをつき返せる者は誰もいない。この御方は、しもべたちの中から御心にかなう者にそれを届ける。もっともよく赦す御方、もっとも慈悲深い御方。

108 言いなさい。「人々よ。まさにあなたがたの主から、真理が到来している。誰であれ導かれる者は、ただ自分自身のために導かれ、また誰であれ迷う者は、ただ自分自身に反して迷うだけ。私は、あなたがたの保護者ではない」。

109 ［ムハンマドよ、］あなたに啓示されるものに従いなさい。そしてアッラーが判断を下すまで、よく耐えていなさい。これぞもっともすぐれた判断の御方。

1 「アーヤ」とは「しるし」を意味し、クルアーンの各節を指す語としても用いられる。

2 創造主は人間に語りかける存在である。自らのメッセージを人間に伝えるために、人間の中から使徒を選び、また人間の言葉をもって人間に語りかけるのである。

3 六「日」間での天地の創造については、七章五四節を参照。以下に続く数節は、神の創造の驚異についてである。しかしここでは、創造主の目から見た人間の置かれている立場を第一に考察すべきだろう。

4 「われらと会（かい）することを待ち望まない者」。こうした者は死後の生や、神による最後の裁きを信じていないということを暗示している。「現世の生を喜び、満足しきっている者」。すなわち、現世の生のみが現実であると考え、復活というリアリティを単なる夢想に過ぎないとみなしている者を指す。





5 「その中での、彼らの挨拶は『平安あれ』」。「サラーム（平安）」という言葉には、内なる平和と充足、また悪しきすべてのものからの解放といった意味が含まれている。

6 使徒に課された義務とは、神のメッセージを啓示された通りにのべ伝えることである。人間の手によって何ひとつ変えることはできない。偶像を奉ずるマッカの住民たちは、預言者に、クルアーンの規範を変えるか、別の書を持ってくるように求めた。しかし宗教の腐敗はほとんどの場合、人間が自分の目的のために宗教を利用しようとしたときに生じるのである。

7 ムハンマドは、人々の中にあってその生涯を高潔に、周囲の者たちには親切に接して過ごしてきた。そして周囲の者たちは、彼が使徒としての使命を課される以前から、彼の人格をよく知っており、認めてもいたのである。それなのになぜ、その彼が授かった啓示に従い、人々の無知や不正を指摘せざるをえなくなったとき、人々は彼に背を向けたのだろうか。彼は人々に、繰り返し何度も訴えた。「なぜあなたがたは理解しないのか。主の啓示を授かることがどれほどの恩恵であるか、あなたがたは考えてもみないのか」。

8 「御言葉」とは神の戒（いまし）めであり、特定の事例を通して現される神の普遍の意志や叡智である。人間がお互いから離れて散り散りになり始めたとき、同胞愛も、利己主義や自己中心的なあり方によって切断されていった。しかし神は、まさしくそうした相違を足がかりとして人間が美徳と敬虔の価値をお互いに競い、深め合い、最終的な統一とリアリティに到達するようはからったのである。六章一一五節、九章四〇節、四章一七一節も参照。

9 この節はマッカの人々についてである。雨が一滴も降らない日々が七年続き、その後で起きた飢饉に多くの人々や家畜が死んでいったという出来事に関連して啓示された。神は豊かに雨を降らせ、祝福を授け、再び土地に実りをもたらしたが、真理を拒んだ人々は、これを偶像と星々のなせる奇跡とみなし、神の示す統一性のしるしを否定した。

10 人間が自分たちの誇りとしている偉大な発明や発見は、主が恩寵として惜しみなく授けた天与の資質や才能の結実であ

る。しかし、よく知られている海のたとえ話に描かれる通り、人間の精神はいつまでも矮小で未熟なままである。自分を乗せた船が波間を悠々と進むとき、人間はいかにも得意げである。しかし海原に神の厳粛さが現されると無力感を味わうだろう。そこでようやく人間は、彼が編み出したあらゆる道具も工夫も、藁くずでできた盾でしかなく、はかり知れない威力と混沌の前には何の役にも立たないことを思い出すのである。人間の身を守ることは、究極的には主のみがなし得ることである。しかし契機にめぐまれない限り、ほとんどの場合、私たちはそのことを知ることさえできない。

11 同様の教訓が、今度は乾いた土地を舞台とする二つめのたとえ話を通して説き明かされる。人間の知恵は、大地の表面をほんの少し掠った程度で自分がすべてを極めた主人であるかのように信じ込めるほど浅はかにできている。人間は、主の創り出した環境に全面的に依存しているのである。もしも主の賜り物に感謝することがなければ、そうした態度にふさわしいよう賜り物は取り上げられ、荒れ果てて痩せこけた土地に置き去りにされるかもしれない。

12 「イフサーン」、「フスナー」（善良あるいは善徳）とは、主の叡智ある戒めに従って行動することを意味する。預言者はそれを、あたかも主を目に見ているかのようにふるまう神のしもべとなること、と定義した。そのような水準に達していれば、あらゆる美徳が豊かにあふれて流れだし、必要としている人々に導きと救いの光が届けられるだろう。最大の恩寵とはそうした者に注がれる。加えてそれ以上に、神を目の前に見ることの幸せと喜びにまさるものはない。これが心の中に純正さを持つ者にとっての報奨であり、その報奨は、平安の住まいにおいて授けられる。

13 彼らは「同輩」、すなわち神ならぬものを最終的な力の根源として思い描いていた。しかし想像は想像に過ぎない。預言者たちをはじめとする偉人や善人などの名を、いたずらに神や、あるいは擬人化された概念と並べ立てる人々は少なくない。しかし並べたてられた当事者たちは、自分の名がそのような形で利用されることには抗議するだろう。実際、そうした崇拝は彼らに捧げられているのではなく、無知や迷信、また崇拝者たち自身の肥大化した願望に捧げられているからである。





14 長きにわたって下された主の啓示は、世代や民族を超えてその根源は唯一である。この唯一、真の啓示を確証し、満たし、まっとうした上でのさらなる説き明かしがクルアーンである。

15 神のメッセージは日々の営みにおける規範を与えるだけにとどまらず、精神生活に重要となる諸々の問題についても語っている。これについては以下、三通りの解明の道があるだろう。（1）霊的な教師による啓蒙。（2）人生を通しての実際の経験。（3）現時点では信仰によって確信されている希望と警告の、来世における最終的な成就。しかし真理を拒む人々は、こうした説き明かしを検討してみることすらせず、彼らには理解できないというただそれだけの理由で、神による想起を拒む。

16 心の中に偽善を抱え、信仰に対する抵抗が根深い人が、偉大な精神的教師の話を聞いたところで何の恩恵も得られないだろう。真理を切実に探求しているわけではないからである。見ようともせず、聞こうともせず、考えようともしない。導きを求める意志のないところに、導きはないのである。

17 人間の五感だけでは、真理を受け取るのに十分ではない。理解しようという自発的な意志と、内的な知覚、霊的な能力を用いなくてはならない。この内的な知覚についての無知こそ、あらゆる歪みのうち最も悪い。

18 すべての人はそれぞれに神を知る能力をもって創造され、生涯にわたって熟考する機会を豊かに与えられている。しかし多くの人々は、与えられた能力を、物質的な目的や悪事を働くために用いる。このように彼らは、自分自身に害をなし、自分が創造された目的を否定する。創造の目的とは、万物の根源がひとつであることを認識し、宣言することにある。

19 使徒を通してすべての時代のあらゆる人々に「想い起こすための戒め」を送り届けたのは、主の絶対の正義によるものである。メッセージそのものはひとつであるが、社会上の、あるいは慣習上の実践といった委細の一部は、個々の地域の文化的な必要性に応じて修正された。しかし使徒たちが現世を去ると、メッセージは徐々に忘れられるか、あるいはひどく歪曲されていった。最後の調整者として遣わされたのが預言者ムハンマドである。メッセージはいたるところで

聞くことができる。そして聞いた以上は応じなくてはならない。メッセージを聞き、積極的に応じる者は、神の正義がなされた日には喜びを授かるだろう。これは一個人やある特定の時代のみに限定されるというよりも、歴史を通して神の恩恵のために働くということを機能させてきた、キリスト教やユダヤ教といった複数の宗教とも共通する普遍の教義であるとみなせるだろう。

20 「後悔を打ち明ける」の「打ち明ける」は、動詞「アサッルー」であり、これは「宣言する」「表にだす」といった意味もあれば、逆に「隠す」「秘める」「紛らわす」といった意味の場合もある。この節をどう解釈するかについて、注釈者たちの見解は一致していない。前者であれば、この訳は適切であるといえる。後者であれば、懲罰を免れるために、何とでも言い逃れをして隠し通そうとしている、といったニュアンスにも読み取れるだろう。いずれにせよ、あらゆる行いの中で最も難しいのは、何もかもをさらけだし、その上で悔い改めることである。

21 祈りや神を想起するといった、霊的な活動がもたらすものほど大きな喜びはない。またこれによっていやすことのできない悲しみや苦しみ、動揺や心の痛みもありえない。神の言葉を傷の上に注ぎ、それによってもたらされる治癒をただ静かに待つのみである。

22 「彼らの積み上げるもの」すなわち、現世の富。

23 主の知識は、あらゆるものごとを網羅している。全知の御方からは何ひとつ隠しおおせることはできない。主の知識にはあいまいさや不正確さはなく、空間や時間、あるいはその他の条件によって限定されるものではない。それは存在以前より存在し、永遠に持続する。

24 「アッラーを友とする者（たち）」、「アウリヤー」とは「ワリー」の複数形である。クルアーンでは「援助者」「親密な友人」「庇護者」「守護者」といった感覚を表すのに頻繁に用いられる。信仰する者にとり、神の「アウリヤー」とは、常に神を身近に意識する者という意味で「神に近しい人」と解するのが最も適しているだろう。あらゆる古典解釈者た





ちもそのように解釈している。

25 現世における「良い報せ」とは、神のそばで過ごす永遠の生や、人間の意識では想像も及ばないながら、必ず授かるであろう賜り物の数々についての約束である。そうした良い報せは、クルアーンとスンナを通してもたらされる。あるいは正しい人であれば、夢を通してそうした報せを授かることもある。夢を見ることは、神の領域をかいま見ることでもあるからである。預言者の語った言葉にもあるように、正しい人の見る夢とは預言者性の小さな断片なのである。現世の去り際には、人間の死の瞬間にやって来る天使たちが、神の慈悲について朗報をもたらす。来世における「良い報せ」には、現世を去った後の魂に対する、楽園での生という来るべき至福についての天使からの告知が含まれている。

26 「かの御方に讃美あれ、満ち足りた御方に」。アッラーは、子をもつ・もたないといったことも含めてあらゆるものを超越している。

27 ヌーフは、自分が神に守られていることを確信していた。そこで上記の節にある通り、偶像を奉ずる者たちに抗議した。彼らには、ヌーフに手出しはできないということを分からせるためである。ここで彼の名に言及されているのは、本章に特有の主題を説き明かすために過ぎない。ヌーフの物語自体を知るには、一一章二五節から四九節を参照。

28 地上を継いだのは、神の警告を否定する者たちではなく、警告に耳を傾け、その日のために備えていた者たちであった。「生き残ったのは他でもない彼らであった（ザマフシャリー）」。

29 預言者ムハンマド以前の使徒たちは、特定の民や共同体に遣わされてきたが、その後にアラブの民の中から到来したムハンマドは、民族の別なく全人類に共通する普遍のメッセージを伝えた最初で最後の預言者であることが暗に示されている。

30 魔術は一種の心理的な操作に過ぎず、そこに究極の真理はない。しかしフィルアウンに象徴される物質的な文明は、唯一の真の神に対する奉仕よりも、モノと権力、そしてエゴに高揚感をもたらすことを本分としているため、魔術が宗教

の代替品になりえてしまうのである。事実、あらゆる物質的な文化では、サブカルチャーとしての魔術が大いに盛んである。

31 神からムーサーへのこの導きは、おそらく王宮の魔術師たちの失敗を転機として、エジプトの民の一部が信仰に入ったのちに下されたものと思われる。ムーサーはしばらくの間エジプトにとどまったが、おかげで出エジプトの前に彼のメッセージが伝播されるのに十分な時間をとることができたともいえる。公的に開放された礼拝所を設けることはフィルアウンが許さなかったため、彼らはその住まいを祈りの場所とした。

32 「今になってか」。すなわち、「いまさら、悔い改めたところで遅すぎる」。悪行を重ねたあげく、死の間際になってようやく「待ってくれ、わたしは今まさに悔い改めるから」と言う者の悔悟は、到底受け入れられるものではない。四章一八節参照。

33 フィルアウンは自らを神と主張し、彼を拒否した人々、とりわけ唯一の神を奉ずるイスラエルの民に拷問を加え、生まれた男児は殺害した。ムーサーとその兄は、イスラエルの民を連れてエジプトを離れることを目的としていた。ムーサーは神に命じられるままに民を連れて紅海の海岸を目指した。手にしていた杖で海面を打つと、海原は真っ二つに割れ、対岸まで通じる轍がひらけた。フィルアウンは彼の後を追おうとしたが、神の御心次第ではその軍勢と共に海の藻屑（もくず）となるところだった。

34 本章三三節を参照。

35 九〇節から九一節、フィルアウンが死の間際になってようやく「改心」したことについての暗喩である。四章一七節から一八節も参照。

36 ユーヌスの物語については、三七章一三九節から一四八節もあわせて参照。ユーヌスは、モースル近郊に栄えたニネヴェの町に遣わされた。彼が使命を課されたのが紀元前八〇〇年前後とすれば、新アッシリア帝国の勃興とも一致する。クルアーンで語られるユーヌスの物語は、きわどいところで神の懲罰を免れ（まぬが）、救済を得た人々のいわば原型である。





37 人間は、ささやかながら自由な意志を授かっており、これによってあるべき行為を自ら習得してゆく。もしも神にこれを授ける意図がなければ、その全能のみわざにより全人類は、互いに寸分違わぬものとなっていたことだろう。そしてすべての人間が、等しく信仰を持っていたことだろうが、そのような信仰は、人間の学習と進歩には何の益ももたらさないだろう。現実の世界では、人間には「忘れる」という一種の能力が備わっている。「忘れる」がゆえに、「思い出す」こともできるのである。思い出すことにより、自らの霊的な能力を再び清めることで信仰を整え、その信仰を通して、神からじかに恩寵を受けて完成されてゆく。このように信仰は、道徳的、霊的な積み重ねを経て完成するものであり、またこの完成に抗うことが罪として数えられるのである。補足として述べるなら、信仰者を自認する者が、信仰を持たない人々に対して何事かを主張せねばならないことがあったとしても、決して相手に怒りを抱かせてはならない。身体的な強制や社会的な圧力などの威を借りて、相手に信仰を強要しようなどという誘惑には、決して屈してはならない。

# 第一一章　フード

マッカ啓示

本章は往古のアラビアに遣わされた預言者のひとり、フードの物語が始まる五〇節にちなんでこの名で呼ばれている。本章には、その他に二人のアラブの預言者たちの物語も含まれている。サムード一族のサーリフ、マドヤン一族のシュアイブである。彼らについては、ヌーフとムーサーと共に、神の啓示の歴史の一部として、前章を補完する形で言及され、その真理を説き明かしている。フード章は、「マディーナ・ムナウワラ（輝ける町）」と呼ばれたイスラーム第二の都市マディーナで啓示された一一四節を除き、マッカ後期に啓示された。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 アリフ、ラーム、ラー。［これは］完成され、解き明かされた啓典。もっとも賢明にして熟知する御方からのもの。

2 ［その命じるところは、］「アッラー以外の何ものにも仕えてはならない。私は、かの御方からあなたがたへのひとりの警告者にして、良い報せを伝える者」。

3 ［その命じるところは、］「あなたがたの主に赦しを求め、悔い改めて立ち返りなさい。定められた期限





までは、かの御方はあなたがたに諸々のすぐれたものを楽しませるだろう。また御恵みに値する者には、それぞれに御恵みを与えるだろう。しかし、もし背き去るなら、私はあなたがたのために、至大なる日の懲罰を恐れる」。

4 あなたがたの帰りゆく先はアッラーにある。ありとあらゆるものごとにおいて全能の御方。

5 見なさい。彼らはその胸を折りたたんでかの御方から自分［の考えていること］を押し隠そうとする。しかし着衣で覆い隠そうとしても、かの御方は彼らの秘めるものもさらけ出すものも知っている。本当にかの御方は、胸の中に抱くことを知っている。

6 地上の生きもののうち、アッラーからの糧に頼らないものは何もない。かの御方はそれらの居どころも、預けどころも知っている。すべては、明白な書の中に［記されている］。[1]

7 諸天と大地を六日の間に創造した御方。あなたがたのうち、誰がもっともすぐれた行いをするか試すために、その玉座は水の上にあった。［ムハンマドよ、］あなたが「あなたがたは死後によみがえらされる」と言うと、［真理を］拒む者たちは必ず言うだろう。「これは、明らかに魔術に過ぎない」。[2]

8 もしわれらが、約束されているあいだは彼らの懲罰を遅らせると、彼らは必ず言うだろう。「何がそれを遅らせているのか」。本当にその日になれば、何ものもこれを避けられないではないか。彼らは、かつて自分があざ笑っていたものに囲い込まれるだろう。[3]

9 もしわれらが、人間に慈悲を味わわせ、そののちそれを引き上げると、必ず絶望して恩を忘れる。[4]

10 しかし、もし困難に遭った後にわれらが恩寵を味わわせると、必ず「諸々の悪は、私から去っていった」と言い、有頂天になって自慢する。[5]

11 ただ、よく耐えて正しい行いをする者だけは別で、これらの者には、赦しと至大の報酬があるだろう。

12 あなたはおそらく、自分に啓示されたものの一部を捨て置きたくなっており、そのせいで、彼らが「どうして彼には宝物が下さるなり、あるいは天使が共に来るなりしないのか」と言うことに、胸を狭められているのかもしれない。あなたは、ひとりの警告者に過ぎない。アッラーは、あらゆるものごとを執りしきる。[6]

13 それとも彼らは、「彼「預言者」がこれをねつ造した」と言うのか。言いなさい。「それなら、これと同様に十の章をねつ造して持ってきなさい。アッラー以外に、あなたがたが呼べるものを呼びなさい、もしあなたがたが真実を語っているのなら」。[7]

14 そうして、もしそれら「あなたがたの崇めるもの」があなたがたに応じないなら、これ「クルアーン」がアッラーの知識から下されたものであること、またこの御方の他に、いかなる神もないことを知りなさい。それで、あなたがたは服従する者になるのか。

15 現世の生とその飾りを欲する者には、われらはその行いに対しその場で十分に満たしてやる。そこでは、彼らは決して減らされることはない。

16 これらの者には、来世においては業火の他に何もない。そこでは、彼らの築いたものは無に帰され、行ってきたこともたわむれに終わる。[8]

17 また、主からの証言者が読み聞かせる明白な証の上にある者、またそれ以前の、先導にして慈悲であるムーサーの啓典がある者。これらの者は、それを信じる。しかし、それ「の真理」を拒む諸々の党派の者たちに約束されているのは業火。それゆえ、これに疑いを抱いてはならない。本当に、それはあなたの主からの真理。しかし、人間の多くは信じない。[9]

18 アッラーについて嘘いつわりをねつ造するよりも不正な者があるだろうか。これらの者は主の前に据えおかれ、その証言者たちに言われるだろう。「彼らは、主に対して嘘をついた者たちです」。本当に、不正をなす者はアッラーに忌まれる。

19 アッラーの道を妨げ、ねじ曲げようとし、また来世「の真理」を拒んだ者たち。

20 これらの者は、地上において逃れることはできず、彼らには、アッラー以外の庇護者はいない。彼らには、懲罰も倍にされるだろう。彼らは、聞くことも見ることもできずにいた。[10]

21 これらの者は、自分自身を失った者たち。彼らがねつ造していたものも、彼らから失われる。

22 まぎれもなく、来世における最大の敗者となるのは彼らだろう。

23 信じて正しい行いをし、主の御前に謙虚な者、これらの者は楽園の仲間。彼らは、永遠にその中に住まうだろう。

24 これら両方を例えるなら、目も見えず耳も聞こえない者と、目も見え耳も聞こえる者。彼らは同じといえるだろうか。それでもあなたがたは、想い起こそうとはしないのか。

25 われらは、ヌーフをその民に遣わした。彼は言った。「私はあなたがたへの、「警告を」明らかにするひとりの警告者。

26 あなたがたは、アッラーの他に何ものにも仕えてはならない。本当に、私はあなたがたのために、痛烈な日の懲罰を恐れる」。

27 しかし彼の民のうち、「真理を」拒んでいる長老たちは言った。「私たちには、あなたは私たちと同じ人間のひとりに見える。また、あなたに従っているのは、私たちの中でももっとも劣る、考えの浅い者たちだけ。またあなたがたが、私たちよりもすぐれているとも見えない。いいや、むしろ私たちには、あなたは嘘つきだと思われる」。[11]

28 彼は言った。「私の民よ、あなたがたは考えてもみたか。たとえ私が主からの明白な証の上にあり、またその御許から慈悲を与えられていても、それがあなたがたの目には見えないというなら、あなたがたが嫌っているのに、それを無理強いできるだろうか。[12]

29 私の民よ。私はあなたがたに、これに対する財貨を求めない。私の報酬は、ただアッラーのみにある。また私は、信じる者たちを追い払いもしない。本当に彼らは、その主と会する者。しかし、あなたがたは無知な民であると私は見る。[13]

30 私の民よ。もし私が彼らを追い払ったなら、アッラー［の懲罰］に対して誰が私を助けるだろうか。それでもあなたがたは、想い起こそうとはしないのか。

31 私はあなたがたに、アッラーの宝庫は私のところにあるとも、目には見えないものについて知っているなどとも言わない。また、私は自分のことを天使であるとも言わず、またあなたがたが見下している者たちに、アッラーはどのような良いものも決して与えない、などとも言わない。彼ら自身の内にあるものについては、アッラーがもっともよく知っている。［もし私が彼らを追い払ったなら、］本当に私は、不正をなす者となってしまう」。

32 彼らは言った。「ヌーフよ。あなたは私たちと言い争ってきた、それも幾度となく。あなたが私たちを脅しているものを持ってきなさい、本当にあなたが真実を語っているのなら」。

33 彼は言った。「それが御心なら、ただアッラーだけがそれをもたらすだろう。そしてあなたがたには、逃れることはできない。

34 もしアッラーが、あなたがたを惑わせようと決めたなら、たとえ私があなたがたに忠告したくても、私の忠告はあなたがたの役には立たないだろう。これぞあなたがたの主であり、あなたがたは、この御方





に帰されるもの」。

35 あるいは彼ら［マッカの住民］は、「彼がこれ［クルアーン］をねつ造したのか」と言う。［ムハンマドよ、］言いなさい。「もし私がねつ造したなら、私の罪は私が負う。しかし私は、あなたがたの犯す罪にまったく関わりがない」。[14]

36 ヌーフには、このように啓示された。「すでに信じるようになった者を除いて、あなたの民は信じるようにはならないだろう。それゆえ彼らの行いのために、あなたが憂うことはない。

37 われらの目の前で、われらの啓示によって船を築きなさい。そして不正をなす者たちについて、われに話しかけてはならない。彼らは溺れるだろう」。

38 そこで彼［ヌーフ］は、船を築きはじめた。彼の民の長老たちは、彼のところを通り過ぎるたびに彼を嘲笑した。彼は言った。「たとえあなたがたが私たちをあざ笑おうと、やがてあなたがたがあざ笑ったように、私たちがあなたがたをあざ笑うことになる。

39 そして誰に恥辱の懲罰が科されるのか、また誰の上に永劫の懲罰があるのか、やがてあなたがたも知ることになるだろう」。

40 ついにわれらの命令が到来し、かまどから水があふれ出たとき、われらはヌーフに告げた。「すべての生きものをひとつがいずつ、その中に運びなさい。またあらかじめ御言葉が申し渡されている者以外のあなたの家族と、信じる者たちとを」。しかし、彼と共に信じていた者はわずかであった。[15]

41 彼［ヌーフ］は言った。「この中に乗りこみなさい。その出航も停泊も、アッラーの御名において。本当に私の主はもっともよく赦し、もっとも慈悲深い」。

42 船は彼らを乗せて山のような波の上をすすみ始めた。ヌーフは、離れたところにいる彼の子に呼びかけた。

43 「息子よ、私たちと共に乗りなさい。［真理を］拒む者と共にいてはならない」。[16]
彼［息子］は言った。「私は山に避難する。私を、水から守ってくれるだろうから」。彼［ヌーフ］は言った。
「慈悲にあずかる者を除いて、今日は誰もアッラーの命令から守ってはもらえない」。彼らのあいだに波
が押し寄せ、彼［息子］は溺れる者のひとりとなった。
44 そこに、こう告げられた。「大地よ、あなたの水を飲み干しなさい。空よ、［雨を］控えなさい」。すると
水がひいて、ものごとに決着がついた。それ［船］はジューディー山の上に止まった。すると、また告げ
られた。「遠ざかれ、不正をなす民よ」。[17]
45 ヌーフは主に呼びかけた。「主よ。本当に、私の子は家族のひとりでした。そして本当に、あなたの約束
は真理です。あなたは、賢明な者のうちもっとも賢明な御方です」。[18]
46 ［主は］告げた。「ヌーフよ。彼はあなたの家族ではなかった。彼の行いは、正しいものではなかった。
それゆえあなたの知りもしないことを、われに尋ねてはならない。あなたが無知な者のひとりになるこ
とのないよう、われはあなたに教示しておく」。[19]
47 彼［ヌーフ］は言った。「主よ、あなたの加護を求めます。知りもしないことを、私があなたに尋ねるこ
とのないように。あなたの赦しもなく、慈悲にもあずかれなかったなら、本当に私は敗者のひとりとな
るでしょう」。
48 ［主は］告げた。「ヌーフよ。われらからの平安により［山から］降りなさい。祝福あれ、あなたにも、ま
たあなたと共にある共同体にも。しばらくの間、われらが楽しませておく共同体もある。しかし彼らは、
やがてわれらからの痛烈な懲罰に遭うだろう」。
49 これはわれらがあなた［ムハンマド］に啓示した、目には見えないものの話。これ以前にはあなたも、あ





なたの民もそれを知らずにいた。それゆえ、よく耐えていなさい。結果とは、畏れる者のためにあるもの。[20]
50 またアード［の民］には、その同胞であるフードを［預言者として遣わした］。彼は言った。「私の民よ、アッ
ラーに仕えなさい。あなたがたには、この御方をおいて他に神はない。あなたがたは、ただねつ造して
いるに過ぎない。
51 私の民よ。私はあなたがたに、これに対する報酬を求めない。私の報酬は、ただ私の創始者のみにある。
それでもあなたがたは、考えないのか。
52 私の民よ。あなたがたの主に赦しを求め、悔い改めて立ち返りなさい。あなたがたに空から［雨を］豊か
に降り注がせ、あなたがたの力の上に力を重ねて増やす御方。それゆえあなたがたは、背き去って罪を
犯す者となってはならない」。
53 彼らは言った。「フードよ。あなたは私たちに、明白な証をもたらしもしていない。私たちは、［単に］
あなたの言うことのために、自分たちの神々を切り捨てることはしない。また私たちは、あなたの信仰
者にもならない。
54 私たちに言えるのは、ただ私たちの神々のうち誰かが、悪をもってあなたを操っているということだけ」。
彼は言った。「私は、アッラーを証言者として呼ぶことにする。あなたがたも、私はまったく関わりがな
いことを証言しなさい、あなたがたが同列に連ねているもの、[21]
55 かの御方以外のものについて。あなたがたは、皆で私に対し企んでいなさい。そののち、猶予はいらない。
56 私は、私の主でありあなたがたの主であるアッラーに委ねている。生けるもののうち、この御方に前髪
を掴まれていないものはいない。本当に私の主は、まっすぐな道の上におわす。[22]
57 たとえあなたがたが背を向けようと、私はすでにあなたがたに、自分が遣わされてもってきたものを伝

えた。私の主はあなたがた以外の民に継がせるだろう。そしてあなたがたには、かの御方をいささかも害することはできない。本当に私の主は、ありとあらゆるものの守護者である」。
58 そしてわれらの命令が到来し、われらはフードと、彼と共に信じる者たちを、われらからの慈悲により救い、また手厳しい懲罰からも救った。[23]
59 これがアードであった。彼らは主の御しるしを拒み、その使徒に逆らいながら、頑迷な暴君の命令にはすべて従っていた。[24]
60 それゆえ彼らは現世においても、また復活の日にも忌まれるようになった。本当にアードは、彼らの主を拒んでいた。それゆえ遠ざかれ、アードも、フードの民も。
61 またサムード「の民」には、その同胞であるサーリフを「預言者として遣わした」。彼は言った。「私の民よ、アッラーに仕えなさい。あなたがたには、この御方をおいて他に神はない。あなたがたを大地から生じさせ、そこに住まわせた御方。それゆえあなたがたの主に赦しを求め、悔い改めて立ち返りなさい。本当に、私の主は近くにあり、あらゆることに応じる御方」。[25]
62 彼らは言った。「サーリフよ。これ以前のあなたは、私たちの中では期待されていた者のひとりだった。あなたは、私たちの先祖が仕えていたものに私たちが仕えるのを禁じるのか。あなたが呼び招いているものについて、私たちは不穏な疑わしさをおぼえる」。
63 彼は言った。「私の民よ、あなたがたは考えてもみたか。私は主からの明白な証の上にあり、またその慈悲を与えられているのに、もし私が逆らうなら、誰がアッラーから私を助けることができるだろうか。私をますます損ねる以外に、あなたがたには何もできないだろう。[26]
64 私の民よ。このアッラーの雌らくだはあなたがたへの御しるし。それゆえこれを放ち、「どこでも自由に」アッラーの大地で食べさせなさい。そしてこれに危害を加えてはならない。さもないと、あなたがたにはただちに懲罰があるだろう。[27]
65 しかし彼らは、その腱を切ってしまった。彼「サーリフ」は言った。「三日の間、あなたがたは自分たちの家で楽しみなさい。これが、嘘いつわりのない約束」。
66 そののち、われらの命令が到来した。われらはサーリフと、彼と共に信じる者たちとを、われらからの慈悲により救った、またその日の恥辱からも。本当にあなたの主はもっとも強大な御方、もっとも威力ある御方。
67 咆哮の一声が不正をなす者たちを襲った。彼らは、「翌朝には」その家の中でうつ伏せ「の亡骸」になっていた。
68 まるで彼らが、その中で賑わっていたことなどなかったかのように。本当にサムードは、彼らの主を拒んでいた。それゆえ遠ざかれ、サムードよ。[28]
69 われらの使者たちは、イブラーヒームに良い報せを伝えに到来した。彼らは言った。「平安あれ」。彼「イブラーヒーム」も「平安あれ」と言い、待たせることなく焼いた仔牛を持ってきた。
70 しかし彼らが、それに手を出さないのを見ると、彼はいぶかしく思い、おののきをおぼえた。すると彼らは言った。「怖がることはない。私たちは、ルートの民に遣わされた者」。
71 彼の妻がその場に立っており、われらがイスハーク「の誕生」と、またイスハークの後のヤアクーブ「の誕生」とについて良い報せを伝えると、彼女は笑った。
72 彼女は言った。「悲しいかな。私は年老いた女で、この私の夫も年老いているのに、どうして身ごもることができるでしょう。本当に、驚くばかりです」。[29]

73 彼らは言った。「あなたがたは、アッラーの命令に驚くのか。この家の一族の上に、アッラーの慈悲と祝福あれ。本当に、かの御方は称賛にふさわしく、栄光に満ちている」。

74 こうしてイブラーヒームの怯えがぬぐい去られ、彼に良い報せが伝わると、彼はルートの民のために［嘆願しようと、］われらと言い争いを始めた。

75 本当にイブラーヒームは寛容で優しく、常に［主へと］立ち返る者であった。

76 「イブラーヒームよ。このことから距離を置きなさい。すでにあなたの主の命令が到来している。彼らには、引き戻せない懲罰が科されるだろう」。

77 われらの使者たちがルートに到来すると、彼は無力に感じて悲しみ、言った。「今日は多難の日だ」。[30]

78 それから彼の民が、急いで彼のところへ来た。彼らは以前から悪事をはたらいていたため、彼は言った。「私の民よ。ここに私の娘たちがいる。彼女たちの方が、あなたがたには清浄だ。アッラーを畏れなさい。そして私の客人たちのことで、私に恥辱を負わせないでくれ。あなたがたの中に、真っ当な者はひとりもいないのか」。[31]

79 彼らは言った。「私たちには、あなたの娘たちに対して何の権利もないことを、あなたはよく知っているだろう。また私たちが何を欲しているかも、あなたはよく知っているはず」。

80 彼は言った。「私に、あなたがたに対する力があったなら。あるいは、力強い支えがあったなら」。[32]

81 彼ら［使者たち］が告げた。「ルートよ。本当に、私たちはあなたの主の使者。彼らは、決してあなたに手出しできない。それゆえあなたの家族と共に、夜の間に旅立ちなさい。そして誰にも後ろを振り返らせてはならない。あなたの妻だけは別で、彼らに降りかかるものは彼女にも降りかかるだろう。彼らには、朝がその時と約束されている。朝は近いのではないか」。





82 こうしてわれらの命令が到来した。われらは［その町を］逆さまにくつがえし、それから焼いた石のつぶてを幾重にも降らせた。[33]

83 それにはあなたの主の御許で烙印がつけられており、不正をなす者から外れることはない。[34]

84 またマドヤン［の民］には、その同胞であるシュアイブを［預言者として遣わした］。彼は言った。「私の民よ、アッラーに仕えなさい。あなたがたには、この御方をおいて他に神はない。升と秤を、少なく計ってはならない。あなたがたは栄えていると私は見る。しかし本当に、私はあなたがたのために、囲いこまれる日の懲罰を恐れる。[35]

85 私の民よ。正道に立ち、升と秤を十分に満たしなさい。人々から、諸々のものを奪ってはならない。また地上を乱して、退廃を広めてはならない。

86 もしあなたがたが信仰者なら、アッラーが残したものの方があなたがたにとりもっとも良いもの。そして私は、あなたがたの保護者ではない」。

87 彼らは言った。「シュアイブよ。あなたのする礼拝は、私たちの先祖が仕えていたものを捨て去るようあなたに命じているのか。あるいは私たちが、自分の財を自分の望むようにしてはならないというのか。本当にあなたときたら寛容で、真っ当な者ではないか」。[36]

88 彼［シュアイブ］は言った。「私の民よ、あなたがたは考えてもみたか。私は主からの明白な証の上にあり、また御許からのすぐれた糧に養われている。私は、あなたがたに禁じておきながら自分では破ろうなどと意図しているのではない。私はただ、できる限り改めようとしているだけ。そして私の成功は、ただアッラーのみによるもの。私はこの御方に委ね、この御方に立ち返る。

89 私の民よ。私とあなたがたの不一致のせいで、あなたがたが罪を犯すようなことがあってはならない。

さもないとヌーフの民やフードの民、あるいはサーリフの民に降りかかったのと同じことが、あなたがたにも降りかかるだろう。またルートの民にしても、あなたがたからは遠からぬこと。[37]

90 あなたがたの主の赦しを求め、悔い改めて立ち返りなさい。本当に私の主はもっとも慈悲深く、またもっとも愛情深い」。

91 彼らは言った。「シュアイブよ。私たちには、あなたの言っていることがほとんど理解できない。私たちは、あなたのことを私たちの中でも弱い者とみなしている。あなたの家族のことがなければ、私たちはあなたを石打にしていただろう。あなたは私たちに対し、何の力もないのだから」。

92 彼は言った。「私の民よ。あなたがたはアッラーよりも、私の家族の方を大きく見るのか。あなたがたは、かの御方を後回しにするのか。私の主は、あなたがたの行いを把握している。

93 私の民よ。あなたがたのできることを行いなさい。私もすべきことを行なう。誰に恥辱の懲罰が科されるのか、誰が嘘をついているのか、やがてあなたがたも知ることになるだろう。それゆえ見守っていなさい。私も、あなたがたと共に見守っていよう」。

94 そしてわれらの命令が到来した。われらはシュアイブと、彼と共に信じていた者たちを、われらからの慈悲により救った。咆哮（ほうこう）の一声が不正をなす者たちを襲うと、［次の朝には、］彼らはその家の中でうつ伏せ［の亡骸］になっていた。

95 まるで彼らが、その中で賑わっていたことなどなかったかのように。それゆえ遠ざかれ、マドヤンよ。サムードが遠ざかったように。[38]

96 またわれらは、われらのしるしと明白な権威ともどもムーサーを遣わした、

97 フィルアウンとその長老たちに。しかし彼らは、フィルアウンの命令に従った。フィルアウンの命令は、





真っ当なものではなかった。

98 復活の日、彼はその民の先頭を行き、彼らを連れて業火に入るだろう。彼らの連れてゆかれる水飲み場の、何と悪いことか。[39]

99 こうして彼らは現世においても、また復活の日にも忌まれ続けるようになった。彼らの賜る賜りものの、何と悪いことか。[40]

100 これらはわれらがあなた［ムハンマド］に物語った、諸々（もろもろ）の町についての話。いまだに立っているものもあり、また［報いを受けて］刈り取られているものもある。[41]

101 われらが彼らに不正をなしたのではない。彼らが、彼ら自身に不正をなしたのである。あなたの主の命令が到来したとき、彼らがアッラーをさし置いて呼び求めていた神々は何の役にも立たなかった。彼らには、ますます滅ぼされる以外に何もなかった。

102 不正をなしている諸々（もろもろ）の町を、あなたの主が捕えるときの捕え方とはこのようなもの。本当に、その捕え方は痛烈にして厳重なもの。

103 本当にその中には、来世の懲罰を恐れる者への御しるしがある。それは人々がことごとく集められる日にして、証言がなされる日。

104 われらはそれを、ただ一定の期限だけ猶予しているに過ぎない。

105 その日が来れば、誰もかの御方の思し召しなくして話すことはできない。彼らのうちある者は不幸であり、またある者は幸福である。

106 不幸な者たちは業火の中にいるだろう。その中で、ため息をついてはすすり泣く。

107 諸天と大地が在り続ける限り、永遠にその中に住まうだろう。ただし、それもあなたの主の御心しだい。

あなたの主は意のままにことを成し遂げる。

108 幸福な者たちは楽園の中にいて、諸天と大地が在り続ける限り、永遠にその中に住まうだろう。それは尽きせぬ贈りもの。ただし、それもあなたの主の御心しだい。[42]

109 それゆえ彼らの仕えるものに、あなたが疑いを抱くことはない。彼らは、ただその先祖が以前から仕えていたものに仕えているに過ぎない。われらは彼らの［懲罰の］取り分を、減らすことなく十分に報いる。[43]

110 われらはムーサーに啓典を与えた。しかし［後になって］、彼らのあいだに相違が起こった。もしあなたの主からあらかじめ御言葉がなかったなら、ものごとは彼らの間で済まされていただろう。しかし彼らはそれについて、不穏な疑わしさをおぼえている。

111 本当にあなたの主は、それぞれの行いに対して十分に報いる。本当に、かの御方は彼らの行いを十分に知り尽くしている。

112 それゆえあなたと、あなたと共に悔い改めてアッラーに立ち返る者とが命じられた通りに、しっかりと立ちなさい。逸脱してはならない。本当に、かの御方はあなたがたがしていることを見ている。[44]

113 不正をなす者たちの方へ傾いてはならない。さもないと、業火があなたがたに触れるだろう。あなたがたにはアッラーをさし置いて他に庇護者はなく、そののちに助ける者もない。

114 昼の両端において、また夜の始まりにおいて、礼拝のつとめを守りなさい。本当に、善行は悪行をぬぐい去る。これは想い起こす者への戒め。[45]

115 ［ムハンマドよ、］よく耐えていなさい。本当にアッラーは、行いの善良な者の報酬を決して無為にしない。

116 どうしてあなたがた以前の世代の中には、われらが救ったわずかな者以外に、分別をもって地上に退廃を広めることを禁じるだけの美徳をそなえた者がいなかったのか。不正をなす者たちは、奢侈（しゃし）を追い求





めては罪を犯していた。

117 その住民が自らをただす者である限り、あなたの主は、諸々（もろもろ）の町を不当に滅ぼすことはしない。

118 もしそれがあなたの主の御心なら、人々はただひとつの共同体になっていた。しかし彼らは相争い続けている、[46]

119 あなたの主の慈悲にあずかる者を除いて。かの御方は、そうなるように彼らを創造した。あなたの主の、「われは、ジンも人間も一緒にして必ず地獄を満たす」との御言葉は果たされるだろう。[47]

120 われらがあなたに、使徒たちそれぞれの話を物語ったのは、それによりあなたの心を揺るぎなくさせるため。この中に真理と教示が、また信じる者への戒め（いましめ）とがもたらされている。

121 信じない者たちに言いなさい。「あなたがたのできることを行いなさい。私たちもすべきことを行う。

122 あなたがたは［その結末を］待ちなさい。本当に私たちも待っている」。

123 諸天と大地の、目には見えないものはアッラーに属する。あらゆるものごとは、御方に帰される。それゆえこの御方に仕え、この御方に委ねなさい。あなたの主は、あなたがたの行いに無頓着ではない。[48]

1 「ムスタカッル（居どころ）」が形容しているのは、ものごとが定まるところ、止まるところといった、最終的な住みかを表しているとも説明できる。また「ムスタウダ（預けどころ）」とは、ものごとが一時的に保留されたり、しまい置かれたりするところであるともいえる。

2 六「日」のうちに天地を創造したとの言及については、七章五四節も参照。クルアーンが確証している通り、すべての

生命は水から創造された。玉座とは、疑う余地なき主権の象徴である。

3 「その日」とは、ここでは「審判の日」を意味する。「囲い込まれる」と訳出した部分は、原語では過去時制（「囲い込まれた」）になっている点について、ほとんどの解説者が、現時点での行為が未来に変化をもたらすことの必然性を暗示するためであると解釈している。

4 この節と次の節での「人間」という総称は、主に神の存在を確信できていない・あるいは納得できていないか、あるいは真理を吟味するというより、むしろ真理を否定することに夢中になっている状態の不可知論者を指す。より広い意味では、神を信じていたとしてもその信仰が弱く、外的な状況、とりわけ自分自身に何かが起これば、そのたびに容易に動揺する人々にもあてはまる。

5 すなわち、神の定めた天命あるいは時運の巡り合わせに過ぎないことを、まるで自分自身の手柄のように捉え、自分は「幸運」であると考える。

6 神の預言者はみな、反対されたり、嘘つき呼ばわりされたりしたとき、人間としての弱さから、「この一点のみ切り捨ててしまえば、神の真理がより受け入れられやすくなるだろうか」といった思いにとらわれることもあれば、「もう少し私に財力があって、私のこの活動をうまく進められるよう用意ができたなら、あるいは天使の隊列が来てくれて、彼らの注目を集めることができたなら、私のメッセージもはるかに効率よく広めることができただろうに」と感じたこともあっただろう。しかし、たとえその一部が受け入れがたく不快なものであろうと、真理は啓示された通りに伝えられねばならず、それが自分の思い通りに伝播されないことを、財力や手段の不足に転嫁するのは的外れであるといわねばならない。預言者に求められているのは、自分に授けられたものの範疇で使命を果たし、それ以外はすべて主に委ねることである。

7 クルアーンのような神の書も、人間であるムハンマドが「ねつ造した」可能性があり、「あなたの言っていることは疑





わしい」とされることがあった。二章二三節、一〇章三七節から三八節、一七章八八節とその注釈も参照。

8 現世での栄耀栄華を欲する世俗的な人は、審判の日、来世における彼らの取り分を授かることになる。復活と、現世の生の後の来るべき生を信じることを拒んだことにより、彼らにはより重い報いがあるだろう。

9 「主からの証言者」とは預言者ムハンマドであり、「読み聞かせる明白な証」とはそのムハンマドに授けられている書、すなわちムーサーに授けられた啓示の正本とも並ぶクルアーンを指す。イスラームは、真実かつ真性なメッセージの間を分け隔てしないこと、またその使徒たちの間にも優劣をつけないことを命じる。彼らはみな唯一の、あらゆるものの創造主たる神に召喚されたのである。

10 懲罰が倍加されるとは、（1）道から逸れ、神について嘘をねつ造し、自らの魂を死なせたことと、（2）他者の耳をふさぎ、神の道から逸らさせたことの、二重の罪を犯したためであることが示されている。こうして彼らは神の言葉を聞くための聴覚を失い、神の光から目を閉ざすことで、視覚そのものを失ったのである。

11 真理の拒絶者たちは、以下、三つの動機から真理を拒んでいる。（1）嫉妬。「私たちよりもすぐれているとも見えない」と、彼ら自身で述べている通りである。（2）他者を見下すこと。社会的には弱者や地位の低い人々が、道徳的にも、霊的にもすぐれている場合は少なくない。これは人間の霊性と現世の評価は比例するとは限らないことを示すが、世俗に重きを置く人は、とかく他者を軽蔑したがる傾向にある。（3）傲慢さ。自分は自足しており、自分一人だけで生きていけているという思い込み。いずれも神の啓示においては非難される態度であるが、それを攻撃と受け取った彼らの反応は、執拗に誹謗し、嘘だと罵ることであった。

12 ヌーフの応答は、柔和さと硬骨さとが一体となっている点が特徴的である。彼は自分の民に対し、彼が主からのメッセージを授かったことを穏やかに伝える。たとえ彼らにはそうとは分からなくとも、これは慈悲のメッセージなのだ、と彼は述べる。その上で最後に彼は、宗教は強制ではないこと、また自分はただ警告するのみである、と彼らに伝えている。

13 預言者ムハンマドは、使命を課された当初、クライシュ族をはじめとするアラブの指導者たちを相手に、ヌーフと同様の経験をしていた。ヌーフの出した回答とは次の通りである。第一に、まず神からの啓示を授かったことを率直に伝える。第二に、そこに警告が含まれていたとしても、メッセージ全体は慈悲そのものであるということ、その慈悲を覆い隠してしまっているのは「メッセージを耳にした者」自身の傲慢さであることを伝える。第三に、彼は、宗教には強制がないことをはっきりと述べている。しかし自分自身の利益のために、これに耳を貸そうとはしない人々は少なくない。

ヌーフの言葉に見られる第四の点は、彼は嘘をついており、自分自身が利益を得ようとしているのだという主張に対する応答である。これに対し、彼はむしろその逆で、彼らに対し何ら報酬も求めないこと、また彼に向けられるどのような侮辱も受け入れる心づもりであると述べている。第五に、信仰のために彼のところへ集う貧しい人々、か弱い人々を侮辱することを諫め、また彼自身がそうした人々を追い返し、その地のもっと権力のある豪族たちに擦り寄ろうとしているという憶測は間違いであることを指摘している。そして第六に、本当に無知であるのは主の真理を求める貧しい人々、か弱い人々ではなく、そうした人々を侮辱する者たちであることを、臆することなく明白に伝えている。

14 この節は、ヌーフの物語が預言者ムハンマド自身の置かれている状況にも通じるものであることを示すためにここに挟まれている。この節は、物語が語り終えられる四九節と対をなしている。

15 ここに登場している「タンヌール（かまど）」とは、預言者アーダムの所有であると信じられており、またこれについては複数の解釈がなされている。他にもこの語は「かまど」ではなく「大地の泉」とも解釈できる。水は地下から湧き上がってきただけではなく、空からも降り注いだという点には留意したい。

16 息子はすでに成人した男性であったが、父親であるヌーフは、息子の年齢には関わりなく「ヤー ブナッヤ」、すなわち「おお、私の幼な子よ」と、優しさと愛情をにじませる言葉で呼びかけている。ルクマーンもまた「ヤー ブナッヤ」と、彼の息子に対し同じように呼びかけている。三一章一三節を参照。





17 ムスリムの伝統に従うなら、大洪水は地表全体を巻き込んだのではなく、北部ティグリス盆地に限定されて起きた局所的な出来事であったということになる。また箱舟が乗り上げた先はアララト山ではなくジューディー山である。ジューディー山は、現代のトルコ、シリア、イラク国境の近くに位置する。

18 こうしてヌーフは、息子についての悲嘆を表しつつ、非難の調子を一切避け、神の意志に対する満足を伝えるという、申し分のない言い回しで主に呼びかけた。

19 ヌーフの息子（その名については、ヤーム、あるいはカナーンとも伝えられる）は、父のメッセージを信じていなかった。兄弟にあたるサーム（シャーム）、アーム、ヤフースは、信仰する者たちと共に箱舟に乗り込んだが、この息子だけはよそよそしく、洪水の前ぶれである雨が降り始めても、箱舟に乗ろうとしなかった。人々をつなぐ、最も緊密かつ真実の結びつきとは宗教であり、家族や人種ではない。クルアーンが告げている通り、「信仰者こそ互いのきょうだい」なのであり、異なる信念を持つ父と息子は、真の意味で家族とはみなされない。こうしてヌーフの息子は、彼の家族を去った。

20 ここで告げられているのは、神と同胞たちのために働く清らかな心の者たちは、嘲笑されたり、迫害されたりするかもしれなくとも、神の慈悲によって支えられているということである。結末は、神の愛する者たちのためにある。次に章は、アラビアの民に遣わされた預言者フードの同様の物語へと移る。この物語については、七章六五節から七二節でもすでに言及があり、偶像を奉ずるマッカの民による預言者に対する仕打ちと、初期の預言者の人生とを重ね合わせて描写することが意図されていた。しかしここでは、もうひとつの重要な点が強調されている。すなわち神の使徒が遣わされたにもかかわらず、偽の神々に執着する、アードの民の無分別な崇拝と傲慢さである。忍耐は、しかしながらヌーフの例と同様に必ず報われる。結末は、正しい者の側に味方するのである。

21 「あなたがたが同列に連ねているもの」。預言者フードはこのように、「あなたがたが神の神性を「神ではないものに」分かち与える罪を犯していることについて、私は何の関わりもなく潔白である」と述べ、彼の身内にあたる人々に対し、彼らの非

難が的外れであることを指摘した。

22 すべての美徳と正道の規範は、あらゆるものを司る普遍の法則すなわち神の意志にある。

23 激しい嵐によるアードの滅亡の物語については、五四章一九節、六九章六節から八節も参照。

24 彼らは主に従うよりも、むしろ預言者フードに逆らい、自分たち自身もまた「頑迷な暴君」としてふるまうことを選んだ。

25 以降、章は預言者サーリフの物語に進んでいく。この物語は、すでに七章七三節から七九節でも語られている。アードの罪は高慢と頑迷であったが、サムードの罪は、雌らくだによる試みを通して描写されている通り、弱者に対する抑圧であった。

26 サーリフの民は、サーリフが「アッラーの他に神と呼べるものはないという真理を示す数々の明白な証をもって、ただ預言を伝えているに過ぎない」にもかかわらず、まさしくそれを理由に彼に従わなかったのである。彼らはアッラーに別の神々を併置してもいたため、それだけでも十分に懲罰を科されるに値した。

27 雌らくだは、サーリフの民の求めに応じて岩石から生じさせられたひとつの奇跡であった。預言者サーリフは、神の怒りが降りかかることのないよう、雌らくだを害してはならないと警告したが、彼らは不用心なふるまいに及んだ。

28 七章での順序に従えば、次の物語はルートの番であり、実際に七七節以下に登場する。しかしここでは、彼のおじであるイブラーヒームの人生における短めのエピソードが紹介される。イブラーヒームはこの時、すでにメソポタミアの谷間の地での迫害をくぐり抜けた後であり、カルデアのウル（シャンルウルファ、通称ウルファのことともいわれる）における先祖代々の偶像崇拝を後にし、ニムロードの暴虐を乗り越え、カナーンに住んでいた。このようにすべての準備が整い、清められた彼は、偉大な預言者の系譜に連なる者として今まさにメッセージを授かる用意ができていた。

29 注釈者たちによれば、この時イブラーヒームは百二十歳、妻のサーラは九十歳だったという。

30 天使たちは、若く美しい若者の姿であらわれた。彼らを人間であると思った預言者ルートは、彼の民のうち卑劣で悪質





な人々が、彼らに対してみだらな行為に及ぶことを危惧した。

31 いくつかの古い資料には、ルートが自分の娘たちと近親婚にあたる契りを交わしたと主張する説があるが、これは預言者の使命に対する中傷を目的としたものであり、歴史的または神学的な根拠はない。

32 預言者ルートは、邪悪な情熱を燃やす彼の民に対して無力感を味わった。この悪人たちを自分ひとりで制することができるだけの強さか、あるいは彼の民の中から、彼を手助けしてくれる仲間が現れることを願った。手助けは、神の御許から授けられた。この客人たちは普通の人間ではなく、神が遣わした天使たちだったのである。

33 ここであらわれる「ヒジャーラト ミン スィッジール」という成語は、ルートの民ばかりではなく、クルアーン全体を通して、神に対して不従順な態度を取る民の破滅を伝える節に複数回あらわれる。「スィッジール」とは粘土を硬く焼いた石のつぶてを指す。アビシニアの王アブラハーが遠征に同行させた象の軍勢を全滅させたのもこの石のつぶてであり、また自らの利己主義の結果として破滅したマドヤンの民の最後にも用いられた。

34 こうしてルートの民は、彼ら自身の罪のために滅ぼされ、彼らの住んでいた国は石の積もるがれきの山となった。

35 次はマドヤンの人々についてである。マドヤンは、利益の追求における邪悪さの原型である。彼らは神を知ろうとせず、富を愛し、贅沢にふけり、そのためには他者を欺くことも厭わなかった。

36 七章八五節ならびにその注釈も参照。シュアイブは、ムーサーの義父エテロにあたる。出エジプト記では、「神に忠実な者」を意味するレウエルの名でも呼ばれる。マドヤン（聖書におけるミデアン）の地は、現代のアカバ湾の西岸からシナイ半島、死海の東岸であるモアブの山々までを指す。その住人たちはアモリ族に属するアラブであった。

37 シュアイブの民は、イブラーヒームから年代順に数えてわずか四世代めにあたる。彼らが住んでいたのは、ソドムとゴモラの近く、死海に連なるアカバ湾と呼ばれる地域であった。

38 シュアイブの民は、サムードを取り巻いたのと同様の災厄に見舞われて滅んだ。「咆哮（ほうこう）の一声」とは、火山の噴火に伴

う荒々しい爆風を指すのであろう。以降、普遍的な教訓に進む前に、ここで語りはムーサーの物語を一通りなぞる。ムーサーの物語は、啓示と統治者の暴虐の闘いの古典的な象徴として、クルアーンでは複数回にわたって言及されている。ここでは、本章の全体的な主題のひとつである、誤った指導者と無分別な因習に服従すること、またそのために主の御しるしを認識できなくなることの危険性という文脈の中で物語が語られる。

39 善良な牧人なら、自分が世話をする家畜の群れの渇きをいやしてやり、また水浴びなどをさせて心地よくさせてやるために、暑い日差しの中から過ごしやすく涼しい水飲み場へと導いてゆく。邪悪な牧人はその反対である。預言者は善良な牧人のように、その民を地獄の火炎ではなく楽園へと導く。

40 本章の一八節と六〇節でも、同じ語をもってアードの民の運命について言及されている。

41 「いまだに立っているもの」。エジプトは「いまだに立っているもの」の方に分類されるだろう。フィルアウンの軍隊は紅海で溺死したが、エジプトの民とその土地そのものは生き残った。神は彼らを滅ぼさなかった。

42 預言者は、審判の日とは、心の中に辛子の種ほどの重さの信仰を持ってさえいれば、誰でも主が火獄から救う日であると教えている。たとえどれほどの罪を犯していようとも、唯一の神を信仰する者であれば永遠に地獄にとどめられることはない。

43 イスラーム以前のアラブは、彼らの先祖の代から信奉するものとは矛盾するからと言い逃れをし、預言者が伝えた神の訓戒を拒否した。より一般的には、たとえ偽の神々であろうと先祖から受け継いだものを崇拝することに慣れてしまい、結果として偽の倫理規範を遵守することになったすべての人々に共通してみられるふるまいである。

44 預言者の教友たちが伝えている通り、この節ほど預言者を不安にさせた節は他になかった。彼は次のように語っている。「フードの章のおかげで、私は白髪になってしまった」。この節は宗教の精髄である。本当の意味で神の目を意識した者なら、神の戒（いまし）めに従い、神の道を歩まざるを得ない。預言者の全人生は、誠実な崇拝の行いそのものであったが、ここ





で彼は、「悔い改めてアッラーに立ち返る者」、すなわち信仰する者たちと共にしっかりと立つよう命じられているが、当時でさえムスリムの全員が全員、歩むべき道をしっかりと確立しているわけではなかった。彼を白髪にしてしまったのはこの不安である。彼は信仰する者たちの身の上を、真剣に案じていたのである。

45 礼拝とは、預言者がその教友たちに教えた通り、自分の家のそばを流れる小川のようなものである。一日に五回、ここで自らを洗い清めれば、汚れが残ることはない。

46 人間どうしの本質的なつながりは、人間は唯一の創造者によって創られたということ、また人間を導くためにそのことを思い出させる数々のしるしを遣わしているという普遍の認識によって取り戻すことができる。神を認識し、神の御許に帰ることを希求することによって、人間が創造されたことの目的は完全に達成されるのである。これは本章における重要なメッセージのひとつである。

47 解釈者の中でもムジャーヒドとイクリマーは、「そうなるように」という表現は、神が人間を本質的には「主の慈悲にあずかる者」として創造したという、いわば最初の恩寵を示すものであると解釈している。人間が互いに相手を自分とは異なる存在として認識する能力を指す、とする解釈者もいる。ザマフシャリーによれば、これこそ人間をその他の被造物とは決定的に異なるものとして特徴づけている、人間に備わる道徳的な選択の自由を指す。

48 「アル＝ガイブ（目には見えないもの［の領域］）」とは、隠されたリアリティについての知識そのものである。二章三節も参照。

# 第一二章　ユースフ

マッカ啓示

本章はその他すべての章と異なっている。つまり、扱われる主題がひとつのみなのである。そして扱われる主題とは預言者ユースフの生涯である。ヒジュラ［移住］の二年前に啓示されたと伝えられている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 アリフ、ラーム、ラー。これは、明白な啓典の御しるし。
2 われらはそれを、アラビア語のクルアーンとして下した。あなたがたも、考えるようになるだろう。
3 われらはあなたにこのクルアーンを啓示することで、もっとも美しい物語を語ろう。これ以前のあなたは、無頓着な者のひとりであった。
4 ユースフが、その父にこう言ったときのこと。「父よ。私は［夢の中で］、十一の惑星と太陽と月を見ました。私は、それらが私にひれ伏すのを見ました」。
5 彼［の父ヤアクーブ］は言った。「私の［愛する、小さな］息子よ。あなたの見たものを、あなたの兄たちに語ってはならない。さもないと彼らは、あなたに対して策を企むだろう。本当に悪魔は、人間のあ





からさまな敵。[1]
6 このように、あなたの主はあなたを選び、出来事の解釈を教える。そして以前にあなたの祖先であるイブラーヒームとイスハークの上にまっとうしたように、あなたの上に、またヤアクーブの一族の上にその恩寵をまっとうするだろう。本当に、あなたの主はすべてを知りもっとも賢明である」。
7 確かにユースフとその兄弟［の物語］には、［真理を］探し求める者への御しるしがある。
8 彼らがこう言ったときのこと。「本当にユースフとその弟［ビンヤーミーン］の方が、私たちよりも父に愛されている。私たちの方が大勢なのに。本当に父は、明らかな誤りの中にいる」。
9 「ユースフを殺すか、あるいはどこかの地に放り出してしまおう。そうすれば父も、その顔をあなたがたの方に向けるようになるだろう。その後にはあなたがたも、正しい民となるだろう」。
10 彼らのひとりが言った。「ユースフを殺すな。何としてでもやるというなら、彼を井戸の底へ投げ入れよう。そうすればどこかの隊商が、彼を拾い上げるだろう」。[2]
11 彼らは言った。「父よ。どうしてあなたは、私たちにユースフを任さないのですか。本当に私たちは、彼のことを気にかけているのに。
12 明日は、彼を私たちと共に送り出してください。そうすれば楽しく遊べるでしょう。それに私たちは、必ず彼をよく守りますから」。
13 彼［ヤアクーブ］は言った。「あなたがたが彼を連れ出すのは、私には嘆かわしいこと。また私は、あなたがたが彼を顧みずにいるあいだに、彼が狼に食われるのではと恐れている」。
14 彼らは言った。「私たちは大勢いるのに、もし彼が狼に食われるようなら、本当に私たちは敗者となってしまいます」。

15 こうして彼らは、彼［ユースフ］を連れてゆき、彼を井戸の底に投げ入れることで一致した。しかしわれらは、彼に啓示した。「［いつの日か、］あなたはきっとこの一件について、彼らがあなたに気づかないうちに、彼らに報せることになるだろう」。[3]

16 晩になると、彼らは泣きながら父のところへ［帰って］来た。[4]

17 彼らは言った。「父よ。私たちがユースフを荷物と一緒に残して駆けくらべをしていたら、狼が彼を食べてしまったのです。しかし私たちが真実を語っても、あなたは信じてはくれないでしょう」。

18 彼らは、彼［ユースフ］の肌着にいつわりの血をつけて持ってきた。彼［ヤアクーブ］は言った。「いいや、そうではない。あなたがた自身が、あなたがたにこのようなことをそそのかしたのだろう。しかし［こうなってしまった以上、今の私には］よく耐えることこそ美しい。あなたがたが述べることに対し、アッラーの助けを願う」。[5]

19 そうして、ある隊商がやって来た。彼らは水汲みの者を遣わし、彼は［井戸に］桶をおろした。彼は言った。「良い報せだ。これは少年だ」。そして彼らは、売り物にするために彼を隠してしまった。アッラーは、彼らがしていることをよく知っている。[6]

20 彼らは、たった数枚の銀貨というわずかな代価で彼を売り払った。彼らにとり、彼にはほとんど価値がなかった。

21 彼を買い取ったエジプトの人は、その妻に言った。「彼を大切に世話してやりなさい。おそらく彼は、私たちの役に立つ。あるいは、私たちの養子にしよう」。このように、われらはその地においてユースフに身を立てさせた。それは彼に、諸々の出来事の解釈を教えるため。アッラーは、思い通りにものごとを運ぶ。しかし人々の多くは知らない。





22 彼が成年に達すると、われらは彼に知恵と知識を与えた。このように、われらは行いの善良な者に報いる。

23 彼のいる家の夫人が、彼を誘惑しようとした。彼女は扉を閉ざして言った。「こちらへ来なさい、あなた」。彼は言った。「アッラーの加護を求めます。［あなたの夫である］彼は私の主人であり、とてもよく世話してくれています。本当に、不正をなす者は栄えません」。

24 確かに彼女は彼を欲した。しかし、主の証明を見ていたために、彼は彼女のことを気にも留めなかった。このようにわれらは、彼から悪と不品行とを遠ざけた。彼は、われらの真摯なしもべのひとりであった。[7]

25 それで二人とも、争って扉に駆け寄った。彼女が、後ろから彼の肌着を引き裂いた。扉のところで、二人は彼女の夫に出くわした。彼女は言った。「あなたの家人に悪をなそうとした者の報いは、牢獄につなぐか、あるいは痛烈な刑罰を科す他に何があるでしょうか」。

26 彼［ユースフ］は言った。「私のことを誘惑しようとしたのは、彼女の方です」。すると家族のひとりが証言した。「彼の肌着が前から引き裂かれているなら、彼女は真実を語っており、嘘をついているのは彼の方です。[8]

27 もし後ろから引き裂かれているなら、嘘をついているのは彼女の方で、彼は真実を語っています」。

28 彼［ユースフ］の肌着が後ろから引き裂かれているのを見ると、彼［主人］は言った。「これがあなたがた［女］の企みか。本当に、あなたがたの企むことは大それている。

29 ユースフよ。この一件から距離を置いてくれ。そして［妻よ、］あなたは自分の罪の赦しを願いなさい。本当にあなたは、過ちを犯した」。

30 市街の女たちは言った。「貴人の奥方が、使用人を誘惑しようとしたそうな。愛の情熱がそうさせたのでしょう。私たちが見るに、彼女は明らかな誤りの中にいらっしゃる」。[9]

31 そうした陰口を耳にすると、彼女は使いの者を送り、彼女たちのために宴の席を用意した。そしてひとりずつに短刀を与え、それから［ユースフに］言った。「皆さんの前に出て来なさい」。彼を目にすると、彼女たちは感嘆のあまり自分たちの手を切ってしまった。「アッラーに瑕瑾（かきん）なし［なんということ］。これは人ではない。貴い天使に違いない」。[10]

32 彼女は言った。「［まさしく］この人がそうです。あなたがたは、彼のことで私を非難している。確かに私は、彼を誘惑しようとしました。けれど彼は、自分の身を［罪から］守りました。もし［再び］私の命令どおりにしないなら、彼はきっと牢獄につながれ、さげすまれる者となるでしょう」。

33 彼は言った。「主よ。彼女たちが私を招いているものよりも、私には牢獄の方が好ましい。あなたが、私から彼女たちの企みを遠ざけてくれない限り、私は彼女たちに流され、無知な者のひとりとなるでしょう」。

34 そこで主は彼に応じ、彼から彼女たちの企みを遠ざけた。これぞすべてを聞く御方、すべてを知る御方。

35 そののち、［彼が潔白であることを示す］御しるしを見た後になって、彼はしばらくのあいだ牢獄につながれることになった。

36 彼と共に、二人の若者が牢獄に入った。彼らのひとりが言った。「私は［夢の中で］、自分が酒をしぼっているのを見ました」。すると他のひとりも言った。「私が［夢の中で］、頭の上にパンを乗せて運んでいると、鳥の群れがそれを食べるのを見ました。私たちに、その解釈を話してください。私たちが見るに、あなたは行いの善良な方です」。

37 彼は言った。「君たち二人をまかなう食べものが届いていない。それが届く前に、君たち二人にその解釈を話そう。それは私の主が教えてくれること。私は、アッラーを信じない民の宗旨を捨てている。彼らは、





来世［の真理］を拒んでいる。[11]

38 私は、私の祖先であるイブラーヒームとイスハーク、そしてヤアクーブの宗旨に従っている。私たちは、アッラーに何ものをも［同列に］連ねることはしない。これは私たちへの、また人々への、アッラーの御恵みによるもの。しかし人々の多くは感謝しない。[12]

39 牢獄の二人の仲間よ。［別々に］分かたれた複数の主の方が良いだろうか。それとも、唯一にして絶対の支配者アッラーの方か。[13]

40 この御方をさし置いて他の何ものかに仕えるということは、［単に］君たちやその先祖が名づけた、ただの名前に従っているだけ。アッラーは、それらに対して何の権威も下していない。ただアッラーのみが判断を下す。この御方は君たちに、ただこの御方にのみ従うよう命じている。真正の宗教とはこのようなもの。しかし、人々の多くはそれを知らない。[14]

41 牢獄の二人の仲間よ。君たちのうちひとりは、その主人に酒を注ぐだろう。またもうひとりは磔（はりつけ）になり、鳥の群れがその頭をつつくだろう。君たち二人が尋ねたことについては、このように決められている」。

42 それから［ユースフは］、彼ら二人のうち助かると思われる者に言った。「君の主人に、私のことを告げてください」。しかし悪魔が、彼［ユースフ］のことを主人に告げるのを忘れさせた。そのため［ユースフは］、数年のあいだ牢獄の中で過ごした。

43 ［ある日、エジプトの］王が言った。「私は［夢の中で］、七頭の肥えた雌牛が、七頭の痩せた雌牛に食われるのを見た。また七つの稲穂は緑で、それ以外は枯れているのも見た。長老たちよ、もしあなたがたに夢の解釈ができるなら、私の見た夢を説明してみせなさい」。[15]

44 彼らは言った。「夢と夢とが絡み合っています。それに私たちは、夢の解釈には長けておりません」。[16]

45 すると［牢獄の］二人のうち助かった者が、しばらく経った後で思い出し、言った。「私が皆さんにその
解釈を報(しら)せましょう。私を［ユースフのいる牢獄に］行かせてください」。
46 ［彼は言った。］「ユースフよ、真実の人よ。七頭の肥えた雌牛が、七頭の痩せた雌牛に食われている。
また七つの稲穂は緑で、それ以外は枯れている。これについて、私たちに説明をしてください。そうし
たら私は皆さんのところへ帰って知らせます」。
47 彼は言った。「七年のあいだ、いつもの通りに種をまきなさい。そして刈り取ったものは、食べるための
少しの分を除いて、穂のままで残しておきなさい。
48 それから、その後にやって来る七年は厳しい。そのために以前から残しておいたものを食べると、わず
かな蓄えが残るだろう。
49 それから、その後にやって来る一年は、人々に豊かな雨がある。［ぶどう酒と油を］しぼることができる
だろう」。
50 王は言った。「彼を私のところへ連れてきなさい」。しかし使いの者が彼［ユースフ］のところへ来ると、
彼は言った。「あなたの主人のところへ帰り、自分の手を切ってしまった女たちのことについて尋ねてみ
なさい。私の主は、彼女たちの企みをよく知っている」。
51 彼［王］は［女たちに］言った。「あなたがたがユースフを誘惑したときの経緯はどうなっているのか」。
彼女たちは言った。「アッラーに瑕瑾(かきん)なし［なんということ］。私たちは、彼は悪くないことを知ってい
ます」。貴人の妻は言った。「今こそ真理があかるみに出ました。私が彼を誘惑したのです。そして本当に、
彼は真実を語っています」。[17]
52 ［ユースフが言った。］「これで彼［主人］も、私が見えないところで彼を裏切ったのではないこと、また





アッラーが裏切り者の企みを手引きすることは決してないことをわかってくれるでしょう。
53 私は、自分が潔白なつもりもありません。本当に、主がその慈悲をかけるでもない限り、自我とは悪に
流されるもの。本当に私の主はもっともよく赦し、もっとも慈悲深い」。
54 すると王は言った。「彼を私のところに連れて来なさい。私のために彼を取り立てよう」。こうして、彼
は彼［ユースフ］と語り合い、それから彼に言った。「今日からあなたは、私の身の回りで地位あり信任
あつき者となる」。[18]
55 彼［ユースフ］は言った。「私を、この地の倉庫［の管理］に置いてください。本当に私はよく守り、知
識もあります」。
56 このようにわれらは、この地においてユースフに身を立てさせてやり、彼は、どこであれ望むところで
暮らせるようになった。われらは、われらがそうと望む者を慈悲に浴させる。われらは、行いの善良な
者の報酬を決して無為にしない。
57 しかし信じ、常に畏れる者たちには、来世の報酬こそより良いもの。[19]
58 やがて、ユースフの兄たちがやって来て、彼の前に出た。彼には彼らの見分けがついたが、彼らには、
彼は見知らぬ者と映った。[20]
59 彼らの分の食糧を配ってやると、彼は言った。「あなたがたと父を同じくする弟をひとり、連れてきなさい。
私が升(ます)を満たしたのを、あなたがたは見なかったか。私は、迎える者としてもっともすぐれている。
60 もしあなたがたが彼を連れてこないなら、私のところにはあなたがたのために計ってやれるものはない。
あなたがたは私に近寄ってもならない」。
61 彼らは言った。「彼について、私たちが父をくどき落としてきましょう。何としてでもやりましょう」。

62 それから彼［ユースフ］は使用人たちに言った。「彼らの品物を、彼らの鞍袋に入れておきなさい。家族のところへ戻ったとき、彼らはそれを見つけて、帰ってくることだろう」。

63 こうして父のところへ帰ると、彼らは言った。「父よ。私たちは升を満たすのを断られてしまいました。私たちと共に弟［ビンヤーミーン］を送り出してください。そうすれば、升を満たしてもらえます。それに私たちが、きっと彼をよく守りますから」。

64 彼［ヤアクーブ］は言った。「以前にその兄［ユースフ］のことであなたがたを信頼したのと同じように、私は彼［ビンヤーミーン］についてあなたがたを信頼するべきだろうか。しかし［ビンヤーミーンを］もっともよく守るのはアッラー。慈悲深い者の中でも、もっとも慈悲深い御方」。

65 彼らがその荷物を開けると、彼らの品物が返されているのが見つかった。彼らは言った。「父よ。これ以上の何を欲しがるでしょう。これは、私たちに返された私たちの品物です。これで家族の分のものを［再び］手に入れてきます。私たちは弟をよく守り、らくだ一頭分、升を増やしてきましょう。それくらいは、たやすい勘定です」。[21]

66 彼［ヤアクーブ］は言った。「あなたがたが何かに囲いこまれたのでもない限り、必ず彼を連れて帰るとアッラーにかけて誓わないうちは、私は決して彼をあなたがたと共に送り出しはしない」。そこで彼らが誓うと、彼は言った。「私たちが言ったことについては、アッラーがその見張りである」。

67 ［続けて］彼は言った。「息子たちよ。あなたがたは、ひとつの門から［皆で一斉に］入ってはならない。別々の門から入りなさい。しかしアッラーをおいて、私などあなたがたのために何の役にも立たない。ただアッラーのみが判断を下す。私はこの御方に委ねている。そしておよそ委ねる者とは、この御方にこそ委ねるもの」。[22]





68 彼らは父の命じるとおりに入った。しかしそれは、アッラーに対しては何の役にも立たなかった。それはただ、ヤアクーブの魂が必要としていたことに過ぎない。われらが教えたため、彼には知識があった。しかし、人々の多くはそれを知らない。

69 それから、彼らがユースフの前に出たとき、彼はその弟を迎えて言った。「私はあなたの兄だ。彼らの行いのせいで、あなたが憂うことはない」。

70 彼らの分の食糧を配ってやると、彼［ユースフ］は弟の鞍袋の中に杯をしのばせておいた。そののち、ひとりの者が大声で呼ばわった。「隊商の者たちよ、あなたがたは盗人だ」。

71 彼らは振り向いて言った。「あなたがたが失ったものとは何ですか」。

72 彼ら［使用人たち］は言った。「王の杯が失われた。それを持ってきた者には、この私がらくだ一頭分の荷を保証しよう」。

73 彼ら［兄たち］は言った。「アッラーにかけて。私たちが、この地に退廃を広めに来たのではないことは、あなたがたもすでに知っているでしょう。私たちは盗人ではありません」。

74 彼ら［使用人たち］は言った。「それでは、あなたがたが嘘をついていたら、その代償は何としようか」。

75 彼らは言った。「代償は、それ［杯］が見つかった鞍袋の者です。その者が代償です。このように私たちは、不正をなす者に報います」。[23]

76 そこで彼［ユースフ］は、まず彼らの鞍袋から［探し］始めた。そののち、弟の鞍袋の中からそれを取り出した。このようにわれらは、ユースフのために策を講じた。アッラーがそう望まない限り、［エジプトの］王の法の下では、彼［ユースフ］に弟を捕えることはできなかった。われらは、われらがそう望む者の位階を高める。しかし知識ある者すべての上に、さらなる知識の主がおわす。

77 彼らは言った。「もし彼が盗んだのなら、かつてその兄も盗んだことがあります」。しかしユースフは、自分の中に秘めることとし、彼らに打ち明けることはしなかった。彼は［ひとりごとを］言った。「より悪い立場にあるのは、あなたがたの方なのに。あなたがたの述べることについて、もっともよく知るのはアッラーである」。[24]

78 彼らは言った。「貴人よ。彼には、たいそう年老いた父がおります。ですから、彼の代わりに私たちのひとりを捕えてください。私たちが見るに、あなたは行いの善良な方です」。

79 彼は言った。「アッラーは、私たちの所有物をもっているのが見つかった者以外を捕えることを禁じている。さもないと、私たちまで不正をなす者となってしまう」。[25]

80 彼らは絶望し、自分たちだけで密談を交わした。彼らのうち、もっとも年長の者が言った。「父があなたがたに、アッラーにかけて誓わせたことも、またそれ以前に、ユースフのことで失敗していることもわからないのか。それゆえ私は、決してこの地を去ることはしない、父が私を許してくれるか、あるいは私にアッラーの判断が下るまでは。これぞもっともすぐれた判断の御方。[26]

81 あなたがたは父のところに帰り、こう言いなさい。『父よ、本当にあなたの息子は盗みをしました。私たちは、知っていること以外は証言できません。また、目に見えていなかったことについては守りようがありません。

82 私たちのいた町や、戻ってきた隊商に尋ねてみてください。そして本当に、私たちの語ることは真実です』」。

83 彼［ヤアクーブ］は言った。「いいや、そうではない。あなたがたの魂が、あなたがたにこのようなことをそそのかしたのだろう。しかし［こうなってしまった以上、今の私には］よく耐えることこそ美しい。





おそらくアッラーが、彼らをみな私のところへ連れ戻してくれるだろう。本当にすべてを知る御方、もっとも賢明な御方」。[27]

84 彼［ヤアクーブ］は、彼らに背を向けて言った。「ユースフに対する悲しみの、何という深さか」。彼はうちひしがれ、嘆きのために両の目は白くなった。

85 彼らは言った。「アッラーにかけて。ユースフを思い出すのをやめないと、重い病をわずらうか、あるいは身を滅ぼしてしまいます」。

86 彼［ヤアクーブ］は言った。「私はただ、私の苦しみと嘆きをアッラーに訴えているだけ。私は、あなたがたの知らないことをアッラーから教わっている。

87 息子たちよ。行ってユースフとその弟のことを尋ねなさい。アッラーの［慈悲の］息吹に絶望してはならない。本当に、［真理を］拒む民を除いて、アッラーの［慈悲の］息吹に絶望する者はいない」。[28]

88 そこで［再び］ユースフの前に出ると、彼らは言った。「貴人よ。私たちと一族の者に、困難が降りかかりました。粗末な品物ですが、持ってきましたので、どうか升（ます）を満たし、私たちに慈善をしてください。本当にアッラーは、慈善をする者に報います」。

89 彼［ユースフ］は言った。「自分たちが無知であったときに、ユースフとその弟に何をしたか、あなたがたはわかっているのか」。

90 彼らは言った。「本当に、あなたは確かにユースフなのですか」。彼は言った。「私はユースフです。そしてこれは、私の弟。アッラーは私たちをいつくしむ。本当に畏れ、よく耐える者なら、アッラーは、行いの善良な者の報酬を決して無為にしない」。

91 彼らは言った。「アッラーにかけて。本当にアッラーは、私たちよりもあなたの方を好ましいものとしま

した。また本当に、私たちは罪人でした」。[29]
92 彼は言った。「今日になって、あなたがたを咎めることはありません。アッラーはあなたがたを赦すでしょう。慈悲深い者のうち、もっとも慈悲深い御方です。[30]
93 私の、この肌着をもって行きなさい。そして父の顔の上にかけてあげてください。目が見えるようになるでしょう。それからあなたがたは、家族の皆を私のところへ連れてきてください」。
94 隊商が旅立つと、彼らの父「ヤアクーブ」は言った。「本当に、私はユースフの匂いをかいだ。あなたがたは、私が老いたと思うだろうけれど」。
95 彼ら「身の回りの人々」は言った。「アッラーにかけて。本当にそれは、いつも通りの老いたゆえの迷いです」。
96 それから、良い報せを伝える者が来て、彼「ヤアクーブ」の顔の上にそれをかけた。すると彼は、再び見えるようになった。彼は言った。「私はあなたがたに、『あなたがたの知らないことを、私はアッラーから教わっている』と言ったではないか」。[31]
97 彼らは言った。「父よ。私たちのために、私たちの罪の赦しを願ってください。本当に、私たちは罪人でした」。
98 彼は言った。「私はあなたがたのために、私の主に赦しを願おう」。本当にもっともよく赦す御方、もっとも慈悲深い御方。[32]
99 それから、彼らがユースフの前に出ると、彼は両親を迎えて言った。「エジプトにお入りください、アッラーの御心のままに、つつがなくやすらかに」。[33]
100 彼は両親を、「尊敬の」玉座に登らせた。彼らは、彼の前に身をかがめてひれ伏した。彼は言った。「父よ。





これが、以前の私の夢の解釈です。私の主は、それを真実たらしめました。私の主は、本当に私に良くしてくれました。私を牢獄から出したときも、また悪魔が私と兄たちのあいだに不和をもたらした後にも、こうして砂漠からあなたがたを連れてきてくれました。私の主は、御心にかなう者に細やかな愛情を注ぐ。本当にすべてを知る御方、もっとも賢明な御方。
101 主よ。あなたは私に権力を与え、また「夢を通して」出来事の解釈を教えました。諸天と大地の創始者よ、現世においても来世においても、私の守護者はあなたです。私を服従する者「ムスリム」として召し寄せ、私を正しい者たちに加わらせてください」。[34]
102 これはわれらがあなた「ムハンマド」に啓示する、目には見えないものの話。彼らが皆で策を講じていたとき、あなたはその場にいなかった。
103 たとえあなたが熱望しようと、人々の多くは信じない。
104 あなたはこれについて、彼らに何の報酬も求めない。本当にこれ「クルアーン」は、諸世界への戒めに他ならない。
105 諸天と大地にあるどれほど多くの御しるしを、彼らは通り過ぎ、立ち去っていくことか。
106 彼らの多くは、アッラーを、何ものかと同列に連ねた上でなければ信じようとしない。
107 彼らは、アッラーの懲罰が自分たちに覆いかぶさることも、あるいは自分たちの気づかないうちに突然にかの時が来ることもない、と安心していられるのか。
108 言いなさい。「これが私の道。私も、私に従う者も開明の上に立ちアッラーへと呼び招く。アッラーに讃美あれ。私は、多神を奉ずる者のひとりではない」。[35]
109 われらが、あなた「ムハンマド」以前に啓示して遣わしたのも、「あなたと同じように」町々の住民の中

にいた人のひとりに他ならない。彼らは地上を旅して、彼ら以前の人々の結末がどのようであったかを見たのではなかったか。畏れる者には、来世の館こそもっとも良いもの。それでもあなたがたは、考えないのか。[36]

110 使徒たちが絶望し、自分たちは嘘よばわりされているものと考えたとき、われらの助けが到来し、われらがそうと望んだ者たちが救われた。しかし罪ある民は、われらの威（い）を避けられない。

111 確かに彼らの物語の中には、分別をもつ者への教訓がある。これ「クルアーン」は、ねつ造された昔話ではない。以前からあったものの確認であり、あらゆるものごとの解き明かしであり、そして信じる民への導きともなり、慈悲ともなるもの。[37]

1 クルアーンは、ヤアクーブが、息子が夢で見たという十一の星が兄弟の象徴であることや、太陽と月が父と母を示していること、これは家族に何かしらの偉大な出来事が起こるであろうという意味であることまでは理解することができなかったと伝えている。しかしヤアクーブが、彼自身もまた預言者としての使命を課されたことのある者として、その夢の持つ預言的な性質や、それが帯びる深遠な意味合いを感じ取っていたことは確かである。

2 この竪穴（たてあな）、もしくは井戸は、十分な水が溜まっていない枯れ井戸だった。底には、ユースフを溺死させる深さの水はなかったものの、彼の姿を隠すには十分であった。

3 「あなたはきっとこの一件について、彼らがあなたに気づかないうちに、彼らに報（しら）せることになるだろう」。この意味については、本章八九節から九〇節にその答えがある。





4 陰謀を企てた兄たちは、自分たちの作り話を父親に信用させるために、日暮れの後になってから帰ってきた。弟を助けようと、必死になって探していたとみせかけるためであった。

5 ユースフは多色使いの衣服を着ていた。兄たちは、この衣服を血しぶきで染めてしまえば、父もユースフが野生の獣に殺されたと信じるに違いない、と考えた。しかしその血はユースフの血ではなく、兄たちがそのために殺した山羊の血だったのである。注釈者たちも指摘している通り、衣服そのものには綻（ほころ）びや破れなどがまったくなかったため、狼に噛み殺された者の着衣とは思えず、彼らの策略はほとんど説得力を持たなかった。

6 聖書によれば彼らは「イシマエル人」、つまりアラブである。「らくだに香料と、乳香と、もつやくを負わせてエジプトへ下り行こうとギレアデからやってきた（創世記三七章二五節）」。

7 「主の証明」とは、主がすべてをご存知であることをユースフに告げる、直感的な知識を指している。

8 ユースフは尊厳をもってその身を守った。怒りにまかせて争うには、彼はあまりにも高潔な人物だったのである。しかし彼には嘘はつけず、真実を語るほかはなかった。そしてそれは正しかった。「家族のひとり」が「シャヒード」すなわち証言者として立ったのである。この証言者は、その場にいた幼い子どもであったとも伝えられている。

9 ユースフの主人はクルアーンでは「アズィーズ」と呼ばれており、彼の名か、あるいは貴人に対する称号のいずれかである。人物としては聖書のポテパルに相当する。彼はユースフを丁重に扱った。使用人というよりも、むしろ客人として遇していたのである。アズィーズの妻は、自分の利己的な恋情のままにユースフを誘惑しようとした。それはユースフの純正な魂と、彼の気高い天命に反していた。ユースフが、彼の主人にあたる高官の妻の接近を拒んだのは当然のことであった。

10 「ムッタカ（宴の席）」という表現は、「贅沢な宴」「午餐（ごさん）」といった意味である。噂は広まり、貴人の妻を取り巻く婦人

たちの間で、彼女の評判は悪くなっていった。彼女は周囲の女性たち全員を宴に招待した。食後のデザートが並ぶ頃には、会話はますます自由奔放に、噂話や風聞で盛り上がっていた。婦人たちがめいめい、果物を手にとったナイフで切り分けようとしたその瞬間、女主人に呼び出されたユースフが入ってきた。ユースフの顔立ちの美しさ、姿かたちの見事さに、婦人たちは不意を突かれて取り乱し、果物の代わりに自分の手を切ってしまった。彼の美貌はその場にいた婦人たち全員を驚愕させ、彼女たちの心の中に大混乱を巻き起こした。貴人の妻は思った。「ああ、あなたがたの偽善が、今こうしてひとりでに露わになった。あなたがたは皆、そろって私を非難した。しかしあなたがたもまた自制心を失い、自分で自分の指先を切ってしまったではないか！」。

11 古代エジプトの宗教は、多神崇拝と国家崇拝、そして偶像崇拝に染まりきっていた。しかし、そうした中でも預言者は、希望を失うことなく唯一の真の神へ人々を招いた。ここでは、彼はただありのままに自らの経験を語っている。彼は、唯一の神がいつも彼を助けてくれていたことを知っていた。たとえ事態がどれほど悪く見えようとも、神への信仰を通して希望を抱き続けていたのである。

12 神は全能であり自足自存する以上、人間は、アッラー以外の何ものにも神的な価値を認めるべきではないという警告がされている。預言者ユースフは、同じ牢獄につながれた囚人の仲間を、真の信仰に導く機会を得ようとした。ここでの彼は、夢の解釈を聞かせることを約束した上で、まずは神の唯一性について手短な説諭を聞くよう彼らに求めている。

13 「［別々に］分かたれた複数の主」。この文脈では、神の美質、働き、属性がすべて唯一の神に属している方が良いか、それとも乱雑に分散している方が良いかどうかが問われている。ここでは災難の只中にあるユースフが、同じ牢獄につながれた仲間の二人に近づいていく様子に注目すべきだろう。ユースフは彼らに、文字通り完全に対等な立場で話しかけている。囚人として、同じく囚人に「複数の主人と、唯一絶対の主人のどちらに仕えるのが良いか」と尋ねているのである。





14 たとえ名のある神々を崇拝しようと、それらは人間の作り事に過ぎず、その名もたどれば祖先の記憶の彼方に端を発しており、その背後には何のリアリティも存在しない。何の権限があって、人間が神々を名づけることができるだろうか。唯一のリアリティはアッラー、神にある。権限はただ神にのみ属する。命令はただ神の御許からのみ下される。そして神は人間に、神の他に何ものをも崇拝してはならないと明示したのである。

15 この王は、紀元前一七〇〇年から一五八〇年ごろにかけて、東方からシナイ半島を経由してエジプトを侵略し支配した六人のヒクソスの王のひとりだったようである。この王朝の名称が、異国由来であることは間違いない。

16 王宮に仕える者のうち誰ひとりとして、夢の解釈や、解釈の結果に応じて策を講じるといった責任を負うのを望んでいないのは明らかだった。

17 「経緯はどうなっているのか」。これは「本当のところは何があったのか」という意味であり、ここでの王は、以前に起きた出来事について、ユースフが唆したのか、あるいは本当は無罪であるのかを知りたがっている。王は婦人たちの一件を案じ、ユースフに使いを送った。ユースフの返答は、使いの者を通して王に伝えられた。続いて婦人たちが呼び出された。「あなたがユースフによこしまなふるまいを命じたとき、何が起きたのか」と問われた貴人の妻は、即座に自らの犯した過ちを認め、彼女の取り巻きの婦人たちがその証言者となった。こうして、真実が明らかになった。

18 ユースフの解釈が正しく、かつ神意にかなうものであると確信した王は、ユースフに顧問／助言者となってくれるよう頼んだ。

19 預言者ユースフは、エジプトを統治する王直々に任命され、内政の一切を執りしきる最高の権威者の地位に就いた。一方、エジプトの財務大臣を勤めていた貴人はすでにこの世を去っていた。王は未亡人となっていた貴人の妻（クルアーンには明示されていないが、一般にズライハの名で知られている）をユースフにめとらせた。預言者ユースフは、干ばつのために必要な予防措置を講じ、農法を改善し、来るべき困難な時期のために、備蓄の仕組みをつくり上げた。干ばつの

年の間には、穀物を買おうと世界じゅうから人々がエジプトへやって来た。ヤアクーブもまた、息子たちをエジプトへ行かせた。ただし、ユースフと母を同じくする末息子のビンヤーミーンだけは家に残した。

20 預言者ユースフは、兄たちに身元を尋ねた。彼らは、自分たちの父は預言者ヤアクーブであり、もとは十二人の兄弟であったが一人は砂漠で死に、もう一人は父と共に家に残っていると述べた。

21 ワズィール（宰相）としてユースフは、国外からの穀物の買い手ひとりに対し、らくだ一頭分の分量を割り当てていたようである。そのため十人の兄たちは、必ず無事に連れて帰るから、ビンヤーミーンを自分たちと共にエジプトへ来させてほしいと父ヤアクーブに嘆願した。愛する息子ユースフを失った経験上、最初は信用せずにいたヤアクーブも、彼らの厳粛な誓いを受けて、「神は私たちが口にしたことすべての守護者である」と述べ、彼らがビンヤーミーンを連れて行くことを承諾した。

22 異国の身なりをした者たちが大勢で一緒に入ってゆけば、人の目にもつき、あらぬ疑いをかけられることになるかもしれない。

23 この時代のエジプトの法に従えば、盗みをはたらいた者は打擲され、さらに盗んだものの二倍の代価を償いとして支払わねばならなかった。ユダヤ教徒の法によれば、盗みをはたらいた者が償いとして支払う財貨を持っていなかった場合、その身を売る、すなわち奴隷とされるべきと定めていた（出エジプト記二二章三節）。

24 「もし彼が盗んだのなら、かつてその兄も盗んだことがあります」。ユースフが幼かった頃、彼を非常にかわいがっていたおばが、これもユースフを愛していたヤアクーブの思いに反して、ユースフを自分のそばに置きたがった。おばは策を練り、イブラーヒームから受け継いだ腰帯をユースフの腰に結ぶと、腰帯がなくなったと誰かれかまわず言いふらしてまわった。手分けして探すと、すぐにユースフが身につけているのが見つかった。法に従うなら、ユースフはおばのもとで暮らさねばならないところだった。ここでは、ユースフとビンヤーミーンに対する十人の兄たちの憎しみが再び露わにされている。彼





らはまたしても嘘をつき、ビンヤーミーンを悪者に仕立てるつもりでいた。しかし彼らがさらに恐れていたのは、父親の怒りをこうむることだった。

25 ここで十人の兄たちとユースフの間に、ちょっとした応酬が生じた。父親の怒りに触れることを恐れた兄たちは、自分たちの提案した取引を固く守らざるをえなくなった。

26 兄たちが父ヤアクーブと神の両方にかけておこなった厳粛な誓いは、当然ながら彼らを父と神の両方に縛りつけた。「もっとも年長の者」すなわち長男は、父の許しが得られない限り、自分はこの地を去るつもりはないという脅し文句を口にして、残りの者に自分たちの立てた誓いを思い出させた。この長男は名をロビルというが、クルアーンでは言及されていない。聖書の語るところよれば、この取引において最も活発に役割を果たしたのはヤフード（ユダ）である。彼はロビル（ルベン）、シャムーン（シメオン）、ラーウィー（レビ）に続いて四番目の息子であった。

27 ユースフの兄たちは何度も嘘をついた。そのため今となっては、預言者ヤアクーブも彼らを信用していなかった。彼は言った。「おまえたちは嘘つきだ。なぜエジプトの高官が、私たちの宗教の法を知っているのか。また、なぜ私たちの法に従って私の息子を罰したのか」。

28 大方の解釈者たち、とりわけタバリーが引用するイブン・アッバースによると、ここでの「ルーフ（息吹）」とは、「恩寵、慈悲」を意味する「ラフマ」とほぼ同義語である。息子たちの度重なる裏切りにもかかわらず、ヤアクーブは彼らを許し、依然として彼らの幸福を祈り、健全な助言を与え、ユースフと、今回はあわせてビンヤーミーンを探しに再びエジプトへ行くよう頼んだ。エジプトのワズィール高官がヤアクーブの法、すなわち預言者のもたらした神の法を知っており、盗まれた王の杯の代償として息子をエジプトにとどめ置いているというのである。これを聞いてヤアクーブは、ユースフがいまもどこかで生きているのではないかという希望を新たにした。彼はまた、ユースフはビンヤーミーンと共にエジプトにいるのかもしれないとも思ったことだろう。飢饉は世界じゅうに広まっており、ほとんどすべての人々が

エジプトを目指していたからである。九人の兄たちは、父に言われた通りにエジプトへ戻った。最初にすべきことはあのワズィールに会うことである。同情を得てビンヤーミーンの解放にこぎつけようと、彼らは父の苦悩を訴えることにした。

29 ここにきて彼らは、ようやく自分たちの悪事のために父と弟を裏切ったことを告白し、同時にユースフの裁きの正しさと、神が他の兄たちの上にユースフを選んだことを認めた。

30 ユースフは真の許しを示し、兄たちが悔い改めていることを認め、偉大さとはただ神によってのみ授けられるものであることを述べている。しかし、急を要する問題がまだひとつ残っていた。高齢のヤアクーブに、吉報を伝える必要があった。

31 八六節を参照。吉報を伝えに戻った者が、ヤアクーブの顔の上にユースフが着ていたものを投げかけた。ヤアクーブはすっかり目が悪くなっていたのである。息子を失った悲しみのために泣き暮らしていたため、涙で目がすっかり白くなってしまっていた。しかしユースフに関する吉報を伝えられると、彼は身体的にも霊的にも再び視界を取り戻した。

32 ヤアクーブは、彼の息子たちがその弟に対して犯した過去の罪を、完全に許すつもりでいた。彼は、ユースフが再び家族のもとへ帰ってくることを心待ちにしていたのである。彼にとり、それは自らの預言者としての生涯の終わりに、ヤアクーブを通して家族全員が神に立ち返ることを意味していた。

33 聖書の伝えるところによれば、ユースフの母ラーヒール（ラケル）は、ビンヤーミーンを生んですぐにこの世を去った（この点はクルアーンとも一致している）。したがって、ここでの「両親」の一人である母親とは、ユースフとビンヤーミーンの実母ではなく、ヤアクーブの別の妻であったとも考えられる。これは、たとえば里母として養育を手がける女性に「誰それの母」という呼び名を与える古くからのアラブの習慣とも合致している。

34 名高いこの「ユースフの祈り」は、彼の深い謙虚さの証である。最大の勝利を手にしたその瞬間も、彼の得た地位や権力、





霊的な賜りもの、家族内での尊敬が、彼を傲慢にすることはなかった。彼は、すべてがひとえに主のおかげであることを知っていたのである。

35 預言者による神への呼びかけ方について、ここでは、それは人間の理性によって到達でき、かつ検証することも可能な意識的な洞察の結果として描かれている。ここで「開明」と訳出した語には、「心を通して（ものごとを）見る」といった意味を読み取ることもできる。それは「意識的な洞察に基づいて理解する能力」を示している。ここでは預言者ムハンマドが、明白な証拠に基づく道へと人々を招くよう命じられている。

36 信仰、倫理、道徳についてのあらゆる問いに対する、クルアーン的なアプローチによる回答の極致が、幾度となく繰り返しこだまする「それでもあなたがたは、考えないのか」あるいは「理性を用いないのか」という表現に凝縮されている。

37 クルアーンの源泉とそのメッセージは新奇なものではない。本章の冒頭にある通り、「もっとも美しい物語（三節）」であるユースフの物語は、創世記を通してキリスト者もユダヤ教徒も知るところであり、すべての信仰者にとって慈悲の源泉である神の真理を、喜びとともに思い起こさせるものである。

# 第一三章　アッ＝ラアド　雷鳴

マッカ啓示

一三節に現れる語にちなんでこの名で呼ばれている。本章の主題は、預言者たちを通して下された神の啓示に含まれる道徳上の真理である。クルアーンの全体と同様、説き明かされているのは神の定める応報の法則についてである。報奨と懲罰とは、神の側の偏向や好悪によるのではなく、神が自ら創造した宇宙に定め、また宇宙全体に反映させている神の諸法則に、私たち自身が宇宙の一部であることを自覚し、すすんで従うか、あるいは拒絶するかの結果である。ほとんどの典拠によれば、本章は、マディーナで下されたふたつの節を除き、マッカ後期に啓示されたものである。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 アリフ、ラーム、ミーム、ラー。これらは、かの啓典の御しるし。あなたの主があなたに下したものは真理である。しかし、人々の多くは信じない。[1]

2 アッラーこそは、あなたがたの目に見える支柱なくして諸天を掲げた御方。そののち玉座の上に就き、太陽と月とを使役する。そのいずれも、定められた「究極の」時までよどみなく「軌道を」走る。かの御方は万事を司る。あなたがたが主と会うことを確信するようにと、諸々（もろもろ）の御しるしを解き明かす。[2]





3 大地を広げて、不動の山々や川を据えた御方。すべての種類の果実をそれぞれ「雌雄の」一対とし、夜をもって昼を覆う。本当にその中には、省（かえり）みる民への御しるしがある。

4 地上には、様々な料地が隣り合う。ぶどう畑や麦の田畑、それからなつめやしの、根を分かち合うものとそうでないもの。注がれるのは同じひとつの水でも、あるものはその他のものよりも食べるのにすぐれている。本当にその中には、考える民への御しるしがある。

5 あなたは驚くのか。本当に驚くべきは、「私たちが土に還ったとき、本当に私たちは新たに創造されるのか」という彼らの言葉。これらの者は、自分の主を拒む者たち。これらの者は、その首に枷（かせ）がかけられている。これらの者は、火獄の仲間。彼らは、永遠にその中に住まうだろう。

6 彼らはあなたに、善いものよりも前に悪いものをと急かす。彼ら以前にも、すでに同じような見せしめがあるのに。しかし本当にあなたの主は、人々のなす不正への赦しを有する御方。また本当にあなたの主は、応報に厳しくもある御方。[3]

7 「真理を」拒む者たちは言う。「どうして彼には、主から御しるしが下されないのか」。しかしあなたはひとりの警告者に過ぎない。またすべての民に、それぞれの導き手がある。

8 アッラーは、すべての女がそれぞれに宿すものを知っている。また子宮が干（ひ）ることも、満ちることも知っている。ありとあらゆるものの量目は、神の御許において定められている。[4]

9 目には見えないものも、目の前にあるものも知る御方。偉大にして至高の御方。

10 言葉をひそめようと、声高に言おうと、夜闇に身を隠そうと、白昼に堂々と歩こうと「主にとっては」同じこと。

11 それぞれの人に、「天使が」前にも後ろにも次々とついて、アッラーの命令により見守っている。本当に、

民が自ら変わろうとしない限り、アッラーが彼ら［の状態］を変えることはしない。アッラーが民に災難
を意図するとき、それを差し戻すことはできず、またこの御方をさし置いて他に庇護者はない。[5]
12 あなたがたに畏敬と希望の雷光を見せ、［慈雨をもたらす］重い雲を連れてくる御方。
13 雷鳴は、かの御方への称賛をもって讃美する。そしてかの御方への畏怖をもって、天使たちもまた。アッ
ラーについて彼らが言い争うあいだにも、かの御方は落雷を遣わし、誰であれ望みのままに打ちすえる。
強大なみわざの御方。
14 真理の祈りはこの御方にある。この御方をさし置いて他のものに呼びかけても、それらは何も応じない。
水に向かって［遠くから］手を差し伸べ、自分の口に入れようとしても、決して入るはずがないのと同じ
こと。［真理を］拒む者の祈りは、ただ迷いの中にあるだけ。
15 諸天と大地にあるものは、ことごとくアッラーにひれ伏す。好むと好まざるとに関わらず、朝に夕に、
それらの影と共に。
16 言いなさい。「諸天と大地の主は誰か」。言いなさい。「アッラー」。言いなさい。「あなたがたはこの御方
をさし置いて、自分の利害さえどうすることもできないものを庇護者として選ぶのか」。言いなさい。「目
の見えない者と見える者が同じだろうか。あるいは、影と光が同じだろうか。あるいは彼らは、アッラー
が創造したように創造したというものを、アッラーの『同輩』にしてしまったせいで、創造の意味があ
いまいになってしまったのか」。言いなさい。「アッラーはありとあらゆるものの創造者、唯一にして絶
対の支配者」。
17 かの御方は空から雨を降らせ、谷河はその量に応じて流れ、流れは水面に泡を浮かべて運ぶ。身を飾る
ものや道具を造るのに、［鉱物を］火の中で溶かしても、同じように泡が浮かぶ。このようにアッラーは、





真理と虚偽とを示す。泡は消えて跡形もなくなる。しかし人々を益するものは地上に残る。このようにアッ
ラーは、例えを示す。[6]
18 主に応じる人々には至善がある。主に応じない人々は、たとえ地上にある一切のものと、さらにそれと
同じだけのものをもってその身をあがなおうとするとしても［応報を免(まぬが)れない］。それは彼らにとり、最
悪の清算となるだろう。彼らの住まいは地獄である。何と悪い寝床だろうか。
19 あなたの主から下されたもの［クルアーン］が真理であるのを知る者と、［真理に対して］目の見えない
者が同じだろうか。分別をもつ者だけが、戒(いまし)めを受け入れることができる。[7]
20 アッラーの約束を果たし、誓約を破らない者、[8]
21 アッラーが結ぶよう命じたものを結び、主を畏れ、最悪の清算を避ける者、[9]
22 よく耐えて主の御顔を求め、礼拝のつとめを守り、われらが糧としたものの中から、ひそかにもあらわ
にも［施しに］費やし、また善によって悪を寄せつけない者。これらの者のために、結実の館がある。
23 永遠の園、それが彼らの入るところ。彼らの祖先、配偶、子孫のうち、正しい者もまた。そして天使た
ちがそれぞれの門から彼らのところへ入る。
24 「あなたがたに平安あれ。あなたがたはよく耐えた」。結実の館の、何という至福か。
25 しかし誓った後になってアッラーとの約束を破り、アッラーが結ぶよう命じたものを断ち切り、地上で
退廃を広める者。これらの者は忌まれるだろう。彼らには、悪い館があるだろう。
26 アッラーは、御心のままにある者の糧を拡げも、また狭めもする。彼らは現世の生を嬉しがる。現世の
生など、来世に比べればつかの間の楽しみに過ぎないのに。
27 ［真理を］拒む者たちは言う。「彼には、なぜその主から御しるしが下されないのか」。言いなさい。「アッ

ラーは御心のままに、誰であれ迷わせ、また悔い改めて立ち返る者を導く」。

28 信じて、アッラーを想い起こすことを心のやすらぎとする者たち。アッラーを想い起こすことで、心はやすらぐのではないか。

29 信じて正しい行いをする者たち。彼らには、至福と善美の還りどころがある。[10]

30 このように、すでに以前の民が過ぎ去った後の民にあなたを遣わしたのは、われらがあなたに啓示したものを、慈愛あまねく者を拒む彼らに読み聞かせるため。言いなさい。「この御方こそは私の主。その他に、いかなる神もない。この御方にこそ私は委ね、この御方にこそ悔い改めて立ち返る」。[11]

31 たとえそれによって山々が動き、大地が裂け割れ、死者が話しだすようなクルアーンがあるとしても。いいや、そうであっても命令はことごとくアッラーに属する。信じる者たちはいまだ得心できずにいるのか、もしアッラーがそう望めば、人々を一斉に導くこともできるということを。［真理を］拒む者たちは、自分たちが築いてきたことのために、アッラーの約束が果たされるまで災厄がたえず降りかかるか、あるいは彼らの館の近くにただよい続ける。アッラーは決してその約束を違えない。[12]

32 すでにあなた以前にも、嘲笑された［主の］使徒たちがいた。われは［真理を］拒む者たちにしばらくの猶予を与え、そののちに捕えた。われの応報は、どれほどのものであったか。

33 すべての者をそれぞれ見守り、またそれらが得たものを知る御方とは誰のことか。それなのに彼らは、アッラーに同輩があるものとする。言いなさい。「それらの名を言ってみなさい。それともあなたがたは、アッラーは地上のことは知らないだろうから自分たちが教えよう、とでもいうのか。それとも見かけだおしの言葉に過ぎないのか」。いいや、［真理を］拒む者たちには、自分たちの企みがすばらしいものに見えており、そのために道を踏み外している。アッラーが迷わせる者には、どのような導きもない。





34 彼らには、現世の生における懲罰があるだろう。しかし来世の生における懲罰はより厳しい。彼らには、アッラーに対してかばってくれる者もいない。

35 畏れる者に約束された楽園の様子とは、川がその下を流れ、その果実は尽きることなく、その陰もまた。畏れる者の結末とはこのようなもの。しかし、［真理を］拒む者の結末は業火である。[13]

36 われらが啓典を与えた者たちは、あなたに下されたものに歓喜する。しかし諸々（もろもろ）の党派の中には、その一部を拒む者もある。言いなさい。「わたしが命じられているのは、ただアッラーに仕え、何ものをも同列に連ねてはならないということだけ。私はこの御方に祈る。私の還りどころはこの御方にある」。

37 このように、われらはそれをアラビア語の判断［の規範］として下した。知識がもたらされた後になって彼らの欲望に従うなら、あなたには、アッラーに対してあなたの味方となる者も、かばってくれる者もいない。

38 われらはあなた以前にも、すでに［多くの］使徒を遣わし、また妻や子孫を彼らにもたせた。しかしアッラーの思し召しなくしては、どの使徒も御しるしをもって来ることはできなかった。すべての時代に、それぞれの啓典がある。

39 アッラーは、その御心のままに消し去るか、またはとどめ置く。啓典の源は御許にある。[14]

40 われらが彼らに約束したことの一部を、われらがあなたに見せようと、あるいは［その前に］われらがあなたを召し上げようと、あなたに課されているのはただ［主の教えを］明白にのべ伝えることだけ。そして清算はわれらにある。

41 彼らは見ないのか、われらがこの地に到り、その端から切り崩しつつあるのを。判断はアッラーにあり、それを覆（くつがえ）すものは何もない。たちまちにして清算する御方。

42 彼ら以前の者も謀りごとをした。しかし謀りごとはことごとくアッラーに属する。かの御方はすべての者が得るものを知っている。[真理を]拒む者はやがて知るだろう、結実の館は誰のものであるかを。

43 [真理を]拒む者たちは言う。「あなたは[主の]使徒ではない」。言いなさい。「私とあなたがたのあいだの証言者は、アッラーと、啓典の知識を備えた者があれば十分である」。

1 幾人かの注釈者は、この節における「啓典」という語は「神の命令」とも解せるもので、その場合は特に本章を指しているとする。イブン・アッバースは、これはクルアーン全体を指しての表現であると強調している（バガーウィーによる）。前章一〇二節から一一一節は、この節と連関している。

2 「何かよりも上にあるもの」を意味する「サマー（天）」という語は、クルアーンではほとんどの場合「サマーワート」という複数形で用いられるが、（1）時として雲を含め、目に見えるいわゆる「空」を指す。（2）星々や太陽系（私たち自身の住まうそれを含め、軌道をたどる銀河団）。（3）神の力能を指す抽象的な概念（神は存在するものすべての上に存在するという換喩的な意味において）を表す。

3 「善いものよりも前に悪いものをと急かす」。マッカの住民は、「神よ！　もしもムハンマドの言う啓示が、真実、あなたから下されたものだというのなら、私たちの上に空から雨のごとく石を降らせてみせよ、あるいは痛烈な懲罰を下してみせよ」と言ってはばからなかった。八章三二節も参照。

4 子宮の中の子どもの運命を知るのは主のみである。ここでは女性の妊娠が、究極の秘密を例示する象徴として挙げられている。出産という奇跡は神によってもたらされる。それと同様に、人間の目には見えなくても、神は世界で起きるあ





らゆるものごとを司っている。

5 ここで言及されているのは、ムアッキバートという呼び名で知られる天使たちのことで、いずれも人間を見守り、その行動を記録している。人が自分の得たものについて自惚れを強め、神の道から離れてゆけば、その祝福と富を奪われることになる。自分の力で得たように思えるものでも、実際には創造主から被造物への寛大なる恩恵なのである。

6 この節には、複数の比喩が含まれている。（1）神の降らせる雨を大地が受け取り、あるものは経路を伝って流れ、またあるものはひとつの場所に貯められる。これと同じように、地上に下される神の諸々の恩恵は、いったん受け取られたあとで、やがて各自の魂により様々に異なった方法で用いられる。（2）物質的な世界においては、水は純粋かつ有益なものである。たとえその表面に泡が浮き、汚れが混ざっていたとしても、それらは取り除くことができる。どれほど汚れていたとしても、神の恩寵と慈悲が、私たち人間の霊的な生命を浄めてくれるのと同じである。（3）泡は純粋な水を濁らせることもある。だが泡はいつまでも残るものではなく、やがてはかなく消えてゆく。真理もこれと同じで、貧弱な虚偽によって永遠に覆い隠せるものではない。

7 信仰と正義、真理の拒否と不正の間の明暗が分かたれる。正義の人とは、次のような資質を持つ人である。（1）訓戒を受け入れる者。（2）約束を守る者。（3）信仰に実践が伴っている者。（4）忍耐強く、神を求め続ける者。具体的には、次のような行いを欠かさない人である。（5）常に礼拝を守る者。（6）公私において慈善に励む者。（7）報復を控え、善をもって悪を寄せつけない者。

8 「アハド・アッラー（アッラーの約束）」とは、言い換えるなら「神との絆」「神との契約」である。ここでの契約とは、神への信仰を通して精神的な義務を受け入れ、また信仰の結実として、同胞である人類に対する道徳的・社会的な義務を果たすことを指す。

9 「アッラーが結ぶよう命じたもの」。ムスリム同胞との絆を含めて、家族との絆、貧困者や困窮者、孤児に対する責任、

隣人どうしの相互の権利や義務など、あらゆる人間関係から生じる結びつきを指している。

10 「トゥーバ（至福）」とは、内面的に満ち足りた状態を指す。内面的な喜びは言葉によって言い表すのは難しいが、来世において主の前に立つことを待ち望み、それを究極の目標として現世を生きる善良な人の日常生活には、常に来世の至福が反映されているものである。

11 「すでに以前の民が過ぎ去った後の民」とは、複数の預言者が時代ごとに伝えてきた諸啓示の連続性を示す表現である。

12 ある日、預言者がマッカの住民に説教をしていたところ、アブドゥッラー・イブン・ウマイヤという名の男が次のように言った。「マッカにある、あの二つの丘には大いに悩まされている。あれらを取り除いてほしい。そうすれば私たちは、十分な耕作地や畑を持つことができる。そして、川が流れるようにもしてくれ。それから、私たちの祖先の中から何某を生き返らせてくれ。あなたが真実を語っているのかどうか、彼が教えてくれるだろう」。すると、この節が啓示された。

13 この節に用いられている語の注釈は以下の通り。（1）「アカラ」は「食べる」という意味だが、果実や、霊的なものも含めてあらゆる種類の歓楽を意味する。（2）「ズィッルーン」も、本来的には「陰」であるが、避難所、保護、安全な場所といった意味もある。

14 「啓典の源」あるいは「啓典の母」。啓示の原型にして根源は神の御許にある。

# 第一四章　イブラーヒーム

マッカ啓示

本章は、三五節から四一節にあるイブラーヒームの祈りにちなんで名づけられている。イブラーヒームが、マッカの「耕せない谷」に、やがてアラブの祖となる息子イスマーイールを住まわせたときの祈りである。またそれとは別に、本章の主題はヒジュラ前の三年間にマッカで下された章群と同様の主題を扱っている。ただし、二八節から三〇節はマディーナで啓示されたものである。

前章と同じく、イブラーヒーム章の主なテーマは、人間への神の言葉の開示である。それは、開示の対象となった人々にも理解できる言語で下され、表現されたメッセージにより「暗闇から光へ（一節から五節）」人々を導くよう方向づけられている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 アリフ、ラーム、ラー。［これは、］われらがあなた［ムハンマド］に下した啓典。あなたが主の思し召しにより、人々を暗闇から光へ、威力ある御方、称賛にふさわしい御方の道へと連れ出すために。[1]

2 アッラー、諸天にあるもの、大地にあるもの、すべてこの御方に属する。［真理を］拒む者には、厳重な





懲罰の災禍（さいか）あれ。

3 来世よりも現世の生をより愛し、アッラーの道をさえぎり、ねじ曲げようとする者たち。これらの者は、遠く迷いさった者。

4 われらは決して、その民の言語以外をもって使徒を遣わしたことはない。それは彼らに、［啓典の教えが］明白になるようにするため。アッラーは御心のままに誰であれ迷わせ、また御心のままに誰であれ導く。もっとも威力ある御方、もっとも賢明な御方。

5 またわれらは、われらのしるしともどもムーサーを遣わした。「あなたの民を、暗闇から光へと連れ出しなさい。彼らに、アッラーの日々を想い起こさせなさい」。本当にその中には、良く耐えて、感謝する者すべてへの御しるしがある。[2]

6 ムーサーが、その民にこう言ったときのこと［を思いなさい］。「あなたがたに対する、アッラーの恩寵を憶えておきなさい。かの御方は、フィルアウンの一族からあなたがたを救った。彼らはあなたがたにひどい刑罰を科し、あなたがたの息子たちは皆殺しにされ、女たちは生かされた。本当にその中には、主からの大いなる試練があった。[3]

7 あなたがたの主が、こう宣言したときのこと［を思いなさい］。『もしあなたがたが感謝するなら、われらは必ずあなたがたに［対する恩恵を］増やすだろう。しかし、もしあなたがたが恩を忘れるなら、本当にわれらの懲罰は厳重である』」。[4]

8 ムーサーはこうも言った。「たとえあなたがたが、また地上にある者がことごとく恩知らずであったとしても、本当にアッラーは満ち足りた御方、称賛にふさわしい御方」。

9 彼らには、以前の者たちの話が届いていないのか。ヌーフ、アード、サムードの民について。また彼ら

の後の者たちについて、アッラーの他に知る者はいない。彼らの使徒たちが、明白な証をもって彼らに到来すると、彼らはその手で彼ら［使徒たち］の口をふさいで言った。「私たちは、あなたが遣わされて持ってきたものを拒む。また、あなたが私たちを呼び招いているものに対して、私たちは疑わしさをおぼえている」。[5]

10 使徒たちは言った。「諸天と大地の創始者である御方に、何の疑わしさをおぼえるというのか。この御方はあなたがたの罪を赦そうとし、また定められた時まであなたがたを猶予しようと、あなたがたを呼び招いているのに」。彼らは言った。「あなたがたは、私たちと同じ人間のひとりに過ぎない。あなたは、私たちの先祖が仕えてきたものから私たちを背かせようとしている。それなら私たちに、明白な権威をもって来なさい」。

11 彼らの使徒たちは、彼らに言った。「私たちも、あなたがたと同じ人間のひとりに過ぎない。しかしアッラーは、そのしもべたちのうち御心にかなう者に御恵みを施す。アッラーの思し召しのない限り、私たちはあなたがたにどのような権威ももって来ることはできない。それゆえ信仰者なら、アッラーにこそ委ねなさい。

12 どうして私たちがアッラーに委ねずにいられるだろうか。この御方は、すでに私たちを道へと導いているというのに。あなたがたに苦しめられようと、私たちはきっとよく耐えるだろう。そしておよそ委ねる者とは、アッラーにこそ委ねるもの」。

13 ［真理を］拒む者たちは、その使徒たちに言った。「あなたがたが私たちの宗旨に戻らないなら、私たちはあなたがたを、必ずこの地から追放するだろう」。そこで主は、彼らに啓示した。「われらは、不正をなす者を必ず滅ぼすだろう。[6]





14 またわれらは彼らの後にあなたがたを、必ずこの地に暮らさせるだろう。これはわれわれの威厳を恐れる者、われの脅威を恐れる者のため」。[7]

15 彼ら［使徒たち］は、［主からの］勝利を願った。すべての頑迷な暴君は、それぞれに失望することとなった。

16 彼の彼方には地獄があり、腐臭を放つ水を飲まされる。

17 彼はそれをすするが、ほとんど飲み込むこともできない。あたり一面から死がせまり来るが、死ぬこともかなわない。しかもこれらの先に、手厳しい懲罰がある。

18 主を拒む者たちを例えるなら、その行いは嵐の日の風に吹き散らされる灰のようなもの。自分で得てきたものであろうと、何ひとつ思い通りにすることはできない。これこそ、遠く迷いさった者。[8]

19 あなたがたは見ないのか、アッラーが真理をもって諸天と大地を創造したのを。望めばかの御方はあなたがたを消し去って、［代わりとなる］新たな創造をもたらすこともできる。[9]

20 アッラーにとり、それは何の造作もないこと。

21 彼らは、みな一斉にアッラーの前に出てくる。［現世において］弱かった者たちが、高慢だった者たちに言う。「私たちはあなたがたに従っていました。ですから私たちのために、アッラーの懲罰をどうにかしてください」。彼らは言うだろう。「もしアッラーが私たちを導いていたなら、きっと私たちもあなたがたを導いていただろう。［今になって］悪あがきしようと、耐えようと、私たちにとっては同じこと。私たちに逃げる手だてはない」。[10]

22 物事が決せられるとき、悪魔は言うだろう。「真理の約束をあなたがたに約束したのはアッラーだった。私もあなたがたに約束はしたが、しかし私はあなたがたとの約束を破った。私には、あなたがたに対す

る権威はない。私はただ、あなたがたに呼びかけただけ。しかしあなたがたは、私に耳を傾けた。それゆえ私を非難するな。むしろ自分を非難せよ。私はあなたがたの助けとはなれないし、またあなたがたも私の助けとはなれない。以前にあなたがたは私を［主と］同列に連ねていたが、本当のところ、私はそれを拒否していた。不正をなす者には、痛烈な懲罰があるのだ」。

23 信じて正しい行いをする者たちは、川がその下を流れる楽園へと受け入れられるだろう。そして主の思し召しにより、永遠にその中に住まうだろう。その中での、彼らの挨拶は「平安あれ」。[11]

24 あなたがたは見ないのか、アッラーがどのように例えを示すかを。良い言葉とは良い木のように、その根は揺るぎなく、その枝は天にとどく。[12]

25 主の思し召しにより、いつでも果実をみのらせる。アッラーは諸々（もろもろ）の例えを示す、人々が想い起こせるようにと。[13]

26 悪い言葉とは悪い木のように、地表から根こそぎにされ、安定することもできない。

27 アッラーは信じる者たちを、現世の生においても来世においても、揺るぎない言葉をもって揺るぎなくさせる。アッラーは、不正をなす者を迷わせる。アッラーは御心のままにものごとを行う。[14]

28 あなたがたは見ないのか、アッラーの恩寵を忘恩と引き換えにし、そのせいで自分たちの民を、壊滅の館に住まわせることになった者たちを。[15]

29 それが地獄、彼らが焼かれるところ。終の住みかの、何と悪いことか。

30 また彼らは、［人々を］道から迷わせるために、アッラーに同位のものを設けた。言いなさい。「［現世にいられるあいだは］楽しんでいなさい。しかし本当に、あなたがたの行き着く先は業火である」。

31 われのしもべである信じる者たちに言いなさい。「取引も友情も及ばない日が来る前に、礼拝のつとめを





守り、われらが糧としたものの中から、ひそかにもあらわにも［施しに］費やすように」。

32 諸天と大地を創造し、また空から雨を降らせ、それにより果実を育て、あなたがたの糧とするのはアッラーである。またあなたがたのために船を使役させ、その命令によって海を渡らせる。またあなたがたのために、川をも使役させる。

33 また太陽と月をあなたがたのために使役させる。いずれも、絶えず［軌道を］回り続ける。また夜と昼を、あなたがたのために使役させる。

34 また、かの御方は、あなたがたが願うものすべてを与えた。アッラーの恩寵を数えようとしても、数えきれないだろう。本当に人間は不正をなす、恩を忘れる者。

35 イブラーヒームがこう言ったときのこと［を思いなさい］。「主よ。この町を、つつがなくやすらかにしてください。また私と私の子どもたちが、偶像に仕えることのないようにしてください。[16]

36 主よ。本当にあれらは、人々の多くを迷わせました。私に従う者は、誰であれ私の身内です。しかし私に逆らう者がいようと、本当にあなたはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。

37 主よ。私は子孫のうちある者を、あなたの禁制の家のそば近く、未開の谷間に暮らさせました。主よ。彼らが礼拝のつとめを守るようにしてください。主よ。人々が彼らに心を寄せるようにしてください。そして彼らに、糧となる果実をもたらしてください。彼らは、きっと感謝するようになるでしょう。[17]

38 主よ。あなたは、私たちが押し隠すものもさらけ出すものも知っています。地にも空にも、アッラーから押し隠せるものは何ひとつありません。[18]

39 アッラーに称賛あれ。老齢の私に、イスマーイールとイスハークを授けた御方。本当に私の主は、祈りを聞き届ける御方。

40 主よ。私と私の子孫とを、礼拝のつとめを守る者としてください。主よ。私の祈りを、聞き届けてください。

41 主よ。清算の確立される日に、私を、私の両親を、そして信仰者たちを赦してください」。

42 不正をなす者の行いに、アッラーが無頓着だなどと思ってはならない。かの御方はただ彼らを、［恐怖のあまり］目線も動かせなくなる日まで猶予しているだけ。

43 ［その日、］彼らはわれ先にと急ぐ。頭をふり立て、瞬きもせず、我に返ることもなく、うつろな心で。[19]

44 それゆえ懲罰が科されるその日について、人々に警告しなさい。不正をなした者たちは言うだろう。「主よ。ほんの一刻のあいだ、私たちを猶予してください。私たちはあなたの呼びかけに応じ、また使徒たちに従うようにします」。［彼らはこう告げられるだろう。］「あなたがたは、自分たちが消え去るようなことはない、と誓ったではないか。[20]

45 あなたがたは、自分自身に不正をなした者たちの住まうところに暮らしていた。われらが彼らをどのように遇したか、あなたがたには明らかとなっている。またわれらはあなたがたのために、諸々の例えを示しもした」。

46 彼らは、確かに謀りごとをしていた。しかし彼らの謀りごとが、たとえ山々を消し去るほどのものであろうと、それはアッラーの御許にあった。

47 それゆえ、アッラーがその使徒たちとの約束を破るなどと考えてはならない。本当にアッラーは、威力ある報復の所有者。[21]

48 大地が大地でないものに変えられ、諸天もまたそうなる日。彼ら［人間］は、唯一にして絶対の支配者であるアッラーの御前に出てくる。





49 その日、罪を犯した者が鎖につながれ、束ねられているのをあなたは見るだろう。

50 彼らの肌着は瀝青で、その顔は火炎に覆われる。

51 アッラーはどの者にも、それぞれが得てきたことに応じて報いる。本当にアッラーは、たちまちにして清算する御方。

52 これが人々のための伝言。これにより警告を受け、かの御方とは唯一の神であることを知るための、また分別をもつ者が想い起こすためのもの。

1 この節と次の節では、神の三つの属性が説き明かされている。（1）あらゆる被造物の上に君臨する絶対的な地位。（2）賛美に値する存在であること、また神の他に賛美に値する存在はなく、すべての賛美は神の有である。（3）神の威力は、天と地のあらゆるところに行き渡っている。

2 ここでの「アッラーの日々」とは、ある民の歴史において、神の恩寵が絶頂を極めた偉大な時期を指す。

3 イスラエルの民とムーサーの物語を振り返ることで、最後の預言者の到来を啓典の人々に知らしめ、同時にクライシュ一族に対しても、与えられている神の恩恵について熟考させるという二重の目的が含まれている。

4 この節で用いられている「シャカラ（感謝）」という語には、様々な意味がある。この節の場合、感謝、認識、評価といった、物事に対する正しいふるまいを指すものといえる。その逆に、「恩を忘れる」と訳出した「カファラ」には、二章六節と同様、真理を隠ぺいしたり、拒んだりすることや、あるいは預言者の使命を否定するという目的で、授かった数々

の祝福や慈悲に感謝しないことを指している。「カーフィル」という語は一般に「不信仰者」などと解されるが、紐解けば「恩を忘れる者」「感謝をしない者」という意味であることは興味深い。

5 「手で口をふさぐ」とは、説得力のある論理的な反論ができない様子をあらわす慣用句的な表現である。ここでは、預言者の使命を否定しようとして失敗していることを意味する。

6 神を信じない人々は、信じる人々に対して、常に物理的な力や圧力を加えるといった手段を選ぶ。しかし物理的な力をふるうという選択肢は、信じる人々がそれに対抗するための力を神から授かることによってしばしば裏目にでる。暴力は、最終的にはそれを用いる者自身を滅ぼす。

7 ここでの「恐れ」とは、不正がもたらす邪悪な結末を避けるためにも、自らの行いを正しく方向付けねばならないと考える人が抱く種類の恐れのことを指す。

8 精神性を伴わない人々の働きは、それ自体が灰のように軽く実体がない。授けられた能力や機会を誤用した挙げ句に残された、何の役にも立たない燃え滓のようなものである。灰はあちらこちらへと吹かれてゆく。神を持たない者とはコンパスを持たない者であり、確たる方向性や目的を欠いている。彼らに吹く風もまた、ふつうの風ではない。日々もまた、一日の終わりにその日の働きがもたらすみのりを享受するといったものではない。激しい暴風が常時、吹き荒れているようなものである。これが神の怒りであり、彼らには内なる平和も、外なる益ももたらされることがない。

9 ここでは「真理」と訳出した「ハック」とは、真理の他にも「公正」「権利」といった意味がある。神の創造は真理によって築かれている。軽々しくいい加減なものでもなければ、無益なことのために創造されているのではない。

10 現世の生において、他人のことも、ひいては自分自身のことも欺いてきた人々の特徴とは、一言でいえば「責任転嫁」にある。相手のせいで惑わされたのだと互いを責めたり、自己弁護に終始したり、自分が犯した罪についてさえ、神が自分を正しい道へ導かなかったことが原因であると主張する。





11 「サラーム（平安あれ）」とは、挨拶の言葉であると同時に、自分の朋友があらゆる困難や苦労から解放されるようにという願いの表れである。信仰する者たちの間で交わされる場合、それは挨拶であると同時に祈りでもある。

12 「良い言葉」とは、ここでは神の言葉、神のメッセージ、あるいは真の教えと解される。より一般的な意味では、真実の言葉、善意や優しさからくる言葉として訳してもよく、そうした言葉は、真の宗教理解によってもたらされる。その反対に「悪しき言葉」とは、偽の宗教、冒涜、虚偽の言葉や説教、不寛容や誤謬を教えることを指す。

13 「良い木」とは、次の点をもって知られる。（1）美しさ。それは見る者に喜びを与える。（2）安定性。根がしっかりと大地に張っているため、嵐の中でもしっかりと立ったままである。（3）広々とした木陰。枝も高く、天からの日差しをすべて受け止める。（4）豊かにみのる果実。いつでも好きなときに得ることができる。これらは皆、すべての意味において「善いことば」にも当てはまる。

14 ここでの「揺るぎなくさせる」とは、真理に根ざしたものにする、という意味。「堅固な」「堅固さ」といった意味であり、この節においては揺るぎない真理を指し示している。また「カウル」という語は「言明、発話」を意味し、信念もしくは「概念」「教旨」「信仰」についての何らかの意見の表明とも定義することができる。この文脈に従うなら、ここでの「揺るぎない言葉」とは、「アッラーの他に神として崇めるべきものはなく、ムハンマドはその預言者である」という概念を言い表している。

15 これは明らかに、傲慢な指導者と、それに従う意志の弱い者たちの関係に対する暗示である。二一節を参照。ここでの「恩寵」とは、神の預言者たちを通して啓示されたメッセージを指す。地上の生において「神の恩寵」を「忘恩」すなわち真理の否定と引き換えにした者こそ、不幸である。

16 人間に与えられている神の恩寵を想起させる節の後で、イブラーヒームの祈りへと移っていく。この祈りは、先行する四節のすぐれた説き明かしともなっている。（1）三五節から三六節は彼自身の、

家長あるいは指導者としての祈りである。（2）三七節から三八節は彼の子孫たち、特に年長のイスマーイールの子らに関する祈りである。（3）三九節から四〇節は再び私的な祈りに戻るが、彼のふたつの支族、すなわちイスマーイールとイスハークの両方が明示されている。（4）四一節は、すべての民は恩寵を授かるに値するという、イスラームの本質を象徴する祈りである。そこには彼自身とその両親、そして唯一の神を信仰するすべての人々のための祈りがある。神の真理が普遍的であることとは別として、ムーサーの律法とイーサーの福音ゆえに、エルサレムはユダヤ教徒にとり象徴的な中心地となった。かつてアラブの民の中心であったマッカの地は、マッカ住民の主張とは裏腹に、その部族的な性格を放棄することによってこそ人々のための中心地となったのである。

17 マッカの谷は、すべての側面を丘に取り囲まれている。本来的に外界から隔絶されたその環境は、祈りと賛美という営みの中心となるのにふさわしい地である。

18 イブラーヒームの預言者としての意識は、イスマーイールの子ら（アラブ民族）に対してイスラエルの民が陰に陽に示す敵意や侮蔑を捉えていた。彼は神に祈り、一部の者については仕方がないとしても、大半の者についてはイスラームを軸として結束していくようになることを願った。そしてそれは、実際にその通りになったのである。

19 ここでは、恐るべき情景が描かれている。悪しき行いに耽（ふけ）っていた真理の拒否者たちが、置かれている状態に気づく。しかし気づいたときには遅く、もはや取り返しがつかない。彼らは呆然として、その目は虚ろである。いと高きところから下される審判への恐怖のために、彼らはあごを突き出し、天を仰ぐ。身体を巡る血が流れるのをやめたとき、心臓が空っぽになるのと同様に、彼らの心からすべての希望や思考が失われていく。その間にも、審判に向かって押しやられていくのである。

20 「消え去る」という語は、太陽が最も高い天頂に達したあとで、徐々に沈んでゆく様子を示している。人間には、現世の生において物質的な利益を手にすればするほど、自分の力がいつまでも続くと過信する傾向がある。神の使徒たちは、





常に彼らに対して警告を与えていたが、しかし彼らが耳を貸すことはついになかった。

21 ここで主は、以前の預言者に対してなされた神の約束が決して破られることがなかったように、預言者ムハンマドと、ムスリムに対する約束についても破られることは決してないと宣言している。神は威力ならびなく、その報いは万全である。

# 第一五章　アル＝ヒジュル　岩山の道

マッカ啓示

アル＝ヒジュルとは、サムードの民が住んでいた地域の呼び名である。本章はマッカで啓示された章群のうち中期に属する。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 アリフ、ラーム、ラー。これは啓典、明らかなクルアーンの御しるし。

2 おそらく［真理を］拒む者たちは、自分たちが服従する者［ムスリム］であったならと切望する［日が必ず訪れる］だろう。

3 彼らを、食べたり、遊びに興じたりするままにさせておきなさい。［むなしい］期待にさまようままにさせておきなさい。やがて彼らも、知ることになるだろう。

4 それと分かる定めなしには、われらは、どのような町も滅ぼすことはしなかった。[1]

5 どの共同体にも、その期限を早めることも、また遅らせることもできない。

6 彼らは言う。「戒めを下された者よ。本当にあなたは、とり憑かれた者だ。[2]





7 もし本当にあなたが真実を語っているのなら、どうして天使を連れてこないのか」。

8 われらは、真理によらずして天使たちを送ることはしない。さもないと彼らが、猶予されることもなくなるだろう。[3]

9 本当に、戒めを下すのはわれらであり、それを守護するのもわれらである。

10 われらは、すでにあなた以前にも、大昔の諸派に［使徒たちを］遣わしていた。

11 しかし、使徒が彼らのところへ来るたびに、彼らは必ずあざ笑った。

12 同じように、われらは罪ある者の心にそれが入り込むようにさせた。

13 すでに大昔の者たちの先例があるというのに、彼らはこれを信じない。

14 たとえわれらが彼らのために天の門を開き、次から次へと昇れるようにしたとしても、

15 彼らは必ず言うだろう。「私たちは目をくらまされてしまった。いや、私たちは魔術にかけられた民なのだ」。

16 われらは諸天に星座を置いて、見る者のためにそれらを飾り、[4]

17 またそれらを、すべての棄てられし悪魔から守護した。

18 盗み聞きをする者は別で、目にも明らかに燃えるもの［流星］に追われる。

19 またわれらは大地を広げ、その上に不動の山々を据えつけた。われらはその中に、すべてを完璧な釣り合いで育んだ。

20 またわれらはその中に、あなたがたのためにも、またあなたがたが養わない者のためにも、生活のすべを設けてやった。

21 何であれ、われらの許に貯蔵されていないものはない。われらはただ、そうと定められた［適切な］量を

下すだけ。[5]

22 またわれらは豊穣の風を送り、空から雨を降らせてあなたがたに飲ませる。しかし、それを貯蔵しているのはあなたがたではない。[6]

23 本当に、生かし、死なせるのはわれらである。また、相続者もわれらである。

24 われらは、あなたがたのうち先を進む者を知っている。後に遅れる者も知っている。[7]

25 そして本当に、彼らを一斉に集めるのはあなたの主である。かの御方はもっとも賢明であり、すべてを知る。[8]

26 われらは、黒泥の陶土に形をつけて人間を創造した。

27 またそれ以前に、われらは焼き焦がす火炎からジンを創造した。

28 あなたがたの主が、天使たちに告げたときのこと［を思いなさい］。「本当にわれは、黒泥の陶土に形をつけて人間を創造しよう。

29 それゆえ、われが彼を姿づくり、われの霊を彼の中に吹き込んだとき、あなたがたは彼の前にひれ伏しなさい」。

30 天使たちは、皆そろって彼にひれ伏した。

31 イブリースは別で、彼は、共にひれ伏すことを拒絶した。

32 かの御方は告げた。「イブリースよ。共にひれ伏さないのは、どういうことか」。

33 彼［イブリース］は言った。「私は、あなたが黒い泥の粘土に形をつけて創造した人間などにひれ伏しはしません」。

34 かの御方は告げた。「それなら、ここから出てゆけ。本当にあなたは、棄てられし者となった。





35 あなたは裁きの日まで、必ず忌まれ続けることとなろう」。

36 彼［イブリース］は言った。「主よ。彼ら［人間］がよみがえらされる日まで、私を猶予してください」。

37 かの御方は告げた。「それでは、あなたを猶予しよう、

38 そうと定められた時の日までは」。

39 彼［イブリース］は言った。「主よ。私は、あなたのせいで惑わされたのだ。だから私は、地上で彼らに［迷いの道を］すばらしいもののように見せ、必ず彼らを惑わせよう、ひとり残らず、

40 彼らのうち、あなたの真摯なしもべを除いては」。

41 かの御方は告げた。「これこそ、われへと至るまっすぐな道。

42 本当にあなたは、われのしもべたちの上にどのような権威も持たない。あなたに従い、［道を］踏み外した者を除いては。

43 本当に、地獄こそは彼ら全員に約束された場所。

44 そこには七つの門があり、それぞれに彼らの一部ずつが割り当てられる」。

45 畏れる者は、庭園と泉の中に住まう。

46 ［彼らは告げられるだろう。］「ここへ入りなさい、平安に、つつがなくやすらかに」。

47 われらは彼らの胸の中にある鬱憤をとり除く。［それゆえ彼らは］同胞として、豪奢な座の上で向かい合う。[9]

48 そこでは疲労に襲われることもなく、またそこから追放されることもない。

49 われのしもべたちに報せなさい。われはもっともよく赦す者、もっとも慈悲深い者であり、

50 またわれの懲罰は、痛烈な懲罰であると。[10]

51 また彼らに話してやりなさい、イブラーヒームの客人について。

52 彼らが［彼の家に］入ってきて、「平安あれ」と言ったときのこと。彼［イブラーヒーム］は言った。「私たちは、あなたがたが怖いです」。[11]

53 彼らは言った。「怖がることはない。私たちはあなたに、賢い男児［の誕生］という良い報せを伝えにきた」。

54 彼［イブラーヒーム］は言った。「老齢に達している私に、そのような良い報せを伝えようというのですか。いったいこれは、どのような良い報せなのですか」。

55 彼らは言った。「私たちは真理によって、あなたに良い報せを伝える。それゆえ絶望する者のひとりとなってはならない」。

56 彼［イブラーヒーム］は言った。「迷い去った者でない限り、誰が主の慈悲に絶望するでしょうか」。

57 また、こうも言った。「あなたがたのお役目とは何でしょうか、使者の方々よ」。[12]

58 彼らは言った。「私たちは、罪を犯した民のところへ遣わされた。

59 ルートの一族は別である。私たちは、必ず彼ら全員を救うだろう、

60 彼の妻を除いては。私たちは彼女を、後に残される者のひとりと定めた」。

61 それから、使者たちがルートの一族のところへ来たとき、

62 彼［ルート］は言った。「あなたがたは、［私にとり］見知らぬ民の方々です」。

63 彼らは言った。「いいや、私たちは彼らが怪しんでいることについて、あなたのところへ来た。

64 私たちは、あなたに真理をもって来た。本当に、私たちは真実を語る。

65 あなたの家族と共に、夜のあいだに旅立ちなさい。あなたは、その最後についてゆきなさい。そして誰にも、後ろを振り返らせてはならない。命じられたところへ進み続けなさい」。

66 こうしてわれらはこのことに決着をつけた。彼らは、夜明けには根絶やしにされる。





67 ［若い客人の到来を知り、］市街の住民が喜んでやってきた。

68 彼［ルート］は言った。「彼らは私の客人だ。私の面目をつぶさないでくれ。

69 アッラーを畏れなさい。私に恥辱を負わせないでくれ」。

70 彼らは言った。「私たちはあなたに、誰のこともかくまうなと禁じなかったか」。

71 彼は言った。「もしあなたがたが、何としてでもやるというなら、ここに［あなたがたの伴侶としてふさわしい］私の娘たちがいる」。

72 ［ムハンマドよ、］あなたの命にかけて。本当に彼らは、朦朧としてあてもなくさまよう者たちであった。

73 そうして咆哮の一声が、日の出に彼らを襲った。

74 われらは［その町を］逆さまにくつがえし、それから焼いた石のつぶてを降らせた。[13]

75 本当にその中には、識別する者への御しるしがある。

76 それは、［今もなお］道沿いに立っている。

77 本当にその中には、信仰者への御しるしがある。

78 またアイカの仲間も、不正をなす者たちであった。[14]

79 そこで、われらは彼らに報復した。そして本当にこの二つ［の町の跡］は、［今もなお］道沿いに立っている。

80 またヒジュルの仲間も、使徒たちを嘘よばわりした。[15]

81 われらは彼らに諸々のしるしを与えたが、彼らはそれらから背き去った。

82 彼らは［岩の］山々に家を刻み、それで安心していた。

83 そうして咆哮の一声が、日の出に彼らを襲った。

84 彼らが得てきたものは、何の役にも立たなかった。

85 諸天と大地とその間にあるもので、われらが、真理によらずして創造したものはない。本当に、かの時は到来する。それゆえ［人の過ちは］優しい態度で見のがしてやりなさい。

86 本当にあなたの主は創造者であり、すべてを知る御方。

87 われらはあなたに、繰り返されるべき七つ［の節］と偉大なクルアーンを与えた。[16]

88 われらが、彼らのうちの幾人かを楽しませているからといって、あなたの目を見はってはならない。また、そのことを嘆いてはならない。信仰者たちに、あなたの［優しさの］翼を垂れなさい。

89 そして言いなさい。「本当に私は、［警告を］明らかにするひとりの警告者」。

90 われらは、分割する者たちに対しても同じように［啓示を］下した、[17]

91 クルアーンを細切れにしてしまう者たちに。

92 あなたの主にかけて、われらは必ず彼ら全員を問いただすだろう、

93 彼らが行ってきたことについて。

94 それゆえ、あなたは命じられていることを宣言しなさい。そして多神を奉ずる者から距離を置きなさい。

95 あざ笑う者に対し、あなたにはわれらがあれば十分である。

96 アッラーと共に、他の神を並べる者たち。やがて彼らも、知ることになるだろう。

97 彼らが言うことのためにあなたが胸を締めつけられているのを、われらは確かに知っている。

98 称賛をもってあなたの主を讃美しなさい。ひれ伏す者のひとりでありなさい。

99 あなたの主に仕えなさい、確信すべきものが訪れるまで。





1 すべての集団に寿命があり、それがいつ尽きるのかは神の知るところである。自分たちがどのような集団になりたいのか、神に与えられた霊的な本質に従って意志を決定する機会は、彼ら自身の取捨選択に委ねられている。寿命が尽きるまでの間に、彼らには多くの猶予が与えられるが、定められた終わりが訪れれば、神を正しく畏れる者であろうと、あるいは真理の拒絶者であろうと、その終焉を早めたり遅らせたりすることはできない。

2 イスラーム以前のアラビア半島では、詩人は、ジンと呼ばれる精霊の一種に触発されて創作しているものと信じられていた。人々には、預言者ムハンマドを通してもたらされた啓典の書も、これと同様のものであろうと思われたのである。預言者の「作品」が同時代の最高峰の文芸や詩をはるかに上回る水準であったことから、人々は、彼はジンに憑依されているに違いないと推測した。預言者が誠実な人物であり、その動機に一切の私欲がなかったために主からの啓示を受け取れたのだということが、彼らには理解できなかったのである。

3 もしも天使が出現していたなら、信仰に入るにあたって求められる道徳的・知的な努力も不要となる。クライシュ一族に与えられた猶予の本来の目的も、その意味を成さなくなるだろう。

4 私たちが目にする宇宙には、無数の星々が輝いている。マゼラン雲、オリオン星雲、カニ星雲など、銀河や星団の美しい秩序には驚くべきものがある。宇宙を観察すればするほど、私たちが感じ取れる驚きもまた、精緻（せいち）の度合いを増してゆく。

5 宇宙にも増して驚くべきは、私たちが生きるこの地球である。抱える欲望だけは巨大ながら、能力的には脆弱（ぜいじゃく）きわまりない人間が生き延び、また繁栄していけるように、様々な秩序が複雑につながり、絡み合い、連環し、正確に定められているのである。

6 風はおしべの花粉をめしべに運び、花や草木が育つのを助ける役割を果たしている。風はまた、雲の行き先を決め、水蒸気を蓄え、大気の流れを作り出し、地球に命を与え、育む。人間はこのような奇跡の庭園

の中に置かれているのである。

7 「先を進む者」「後に遅れる者」。すなわち、以下のふた通りである。（1）人類史の原初に位置する人々から、過去に出現した人々。（2）現代から未来にかけて出現する人々。

8 大宇宙と地球について語り終えたところで、神の語りは人間、すなわち被造物の中枢にしてこの御し難き存在に移っていく。

9 過去のあらゆる諍い、妬みやそねみ、傷つけられたという感覚は、真の友愛に取って代わられるとき溶けて消える。人間どうしの不和は、究極的には神に無知であることが引き起こすものであり、楽園の庭にはそうした無知も残存することはない。

10 神は絶対者であり、その属性の範囲は想像を絶する広大さである。神のそば近くへと向かう者たちにとてつもない慈悲が注がれるのと同じく、計り知れない神の光に背を向ける者への懲罰もまた絶大である。以降、善と悪の間にある隔たりについて四つの物語が語られる。（1）イブラーヒームの人生に起きた出来事。（2）その甥であるルートの物語。（3）森の住人たち。（4）岩山の住人たち。

11 見たこともない出で立ちをし、主人のもてなしを辞した二人の客人の訪れは、イブラーヒームに疑念と恐怖をもたらした。彼らは神の遣わした天使たちであった。彼らは老齢のイブラーヒームとその妻に、息子の誕生という吉報を告げた。一一章六九節から七三節も参照。

12 親密なやり取りが交わされた後に、イブラーヒームは彼らに尋ねた。「あなたがたがここにやって来た使命は何でしょうか。私にして差し上げられることは何でしょうか」。客人である天使たちの使命とは、ルートの民を罰することであった。

13 七章八四節も参照。





14 続いて「アイカの仲間（「森の仲間」とも）」、マドヤンについてである。彼らと、彼らに遣わされた預言者シュアイブについては二六章一七六節から一九一節も参照。

15 「ヒジュル」については、マディーナの北二四〇キロメートルほどの場所に位置する山脈地域とされる。章名としてはこれを「岩山の道」と訳出した。

16 「繰り返されるべき七つ［の節］」とは、クルアーンの第一章を指す。

17 「分割する者」とは、信仰を持たない者をはじめ、クルアーンの中から自分の意に沿う部分だけを信じ、そうでない部分については信じようとしなかったり、無視したりする者のこと。

# 第一六章　アン＝ナフル　蜜蜂

マッカ啓示

この章の名は、義務とその意義の例として蜜蜂の生態について述べられている六八節に由来する。一一〇節を除き、本章はマッカ後期の時代に啓示された。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 アッラーの命令が到来する。それゆえ、それを急ぎ求めてはならない。讃美あれ、彼らが連ねるものを超越して、いと高くにおわす御方に。

2 かの御方は、しもべの中で御心にかなう者の上に、命令の息吹をもって天使たちを送る。「われの他に神はない。それゆえわれを畏れよ」と、警告させるために。

3 かの御方は諸天と大地を真理によって創造した。彼らが連ねるものを超越して、いと高くにおわす。

4 人間を、液のひとしずくから創造した。ところが、見なさい。彼「人間」はあからさまに反抗する。

5 また家畜を、あなたがたのために創造した。あなたがたは暖をとることもでき、また諸々（もろもろ）の益を得ることも、食べることもできる。





6 また、あなたがたが「夕に屋舎へ」連れ戻るときも、「朝に牧草地へ」連れ出すときも、それらには美しさがある。

7 またあなたがたが、自分たちでは大変な労苦なしにたどりつけない土地にまで、それらはあなたがたの荷物を運ぶ。本当にあなたがたの主は、憐れみ深く慈悲深い。

8 また馬、らば、ろばを、あなたがたが乗るために、また飾りのために「創造した」。また、あなたがたの知らない諸々（もろもろ）のものをも創造した。[1]

9 道を指し示すのはアッラーのすること。しかしその中には、まっすぐではないものもある。もしそれが御心であったなら、あなたがた全員を一斉に導いていたことだろう。[2]

10 あなたがたのために、空から雨を降らす御方。あなたがたはそれを飲み、またそれにより、「あなたがたの家畜の食べる」牧草地の草木が育つ。

11 またそれにより、穀物、オリーヴ、なつめやし、ぶどう、また諸々（もろもろ）のあらゆる種類の果実をあなたがたのために育てる。本当にその中には、省（かえり）みる民への御しるしがある。[3]

12 また夜と昼を、太陽と月をあなたがたのために使役させる。また星々も、その命令によって使役させる。本当にその中には、考える民への御しるしがある。[4]

13 また何であれ地上のあらゆるものを、あなたがたのために色とりどりにする。本当にその中には、想い起こす民への御しるしがある。

14 あなたがたのために、海を使役させる御方。それにより、あなたがたはそこにある新鮮な「魚の」肉を食べたり、あなたがたが身につける飾りものを採り集めたりする。あなたはその中に、波を切ってゆく船を見るだろう。それはあなたがたに、かの御方の御恵みを探し求めさせるため。あなたがたは、感謝す

るようになるだろう。

15 また、あなたがたと共に揺れることのないよう、大地には不動の山々を据えつけた。また、あなたがたが導かれるよう、川を、道を、

16 また諸々（もろもろ）の道しるべをも。また星々によっても、［人間は］導かれるだろう。[5]

17 それでも創造する者と、創造しない者が同じだろうか。それでもあなたがたは、想い起こそうとはしないのか。

18 たとえアッラーの恩寵を数えても、あなたがたには数えきれないだろう。本当にアッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。[6]

19 アッラーは、あなたがたの秘めるものもさらけ出すものも知っている。

20 彼らがアッラーをさし置いて呼びかけているものは、創造はされても、それ自体は何ひとつ創造しないもの。[7]

21 それらは死んでいるものであり、生はない。いつよみがえらされるのかも気づいていない。

22 あなたがたの神は唯一である。来世を信じない者たちは、彼らの心が［知ることを］拒絶している。彼らは高慢にふるまう。

23 まぎれもなく、アッラーは、彼らの秘めるものもさらけ出すものも知っている。本当にかの御方は、高慢にふるまう者を愛さない。

24 「あなたがたの主が下したものは何か」と言われると、彼らは「大昔の伝説だ」と言う。

25 復活の日、彼らは自分の重荷すべてと、知識がなかったために彼らに迷わされた者たちの重荷の一部をも運ぶだろう。彼らの背負うものの、何という悪さか。





26 彼ら以前の者も謀（はか）りごとをしていた。しかしアッラーは、彼らの建てるものを土台からくつがえし、また頭上からは屋根が落とされた。こうして、彼らの気づかなかったところから懲罰が科された。

27 そののちの復活の日、かの御方は彼らに恥辱を負わせ、こう告げるだろう。「あなたがたがそのせいで対立していた、われの『同輩たち』とはどこにいるのか」。知識を与えられていた者は言う。「今日、恥辱と悲惨は［真理を］拒む者の上にある」。[8]

28 自分自身に不正をなしているところを天使たちに召された者は、服従を申し出て、「私たちは、悪を行ってはいませんでした」と言う。［すると、天使たちが答える。］「いいや。本当にアッラーは、あなたがたの行ってきたことを知っている。

29 それゆえ地獄の門に入り、その中に永遠に住みなさい。高慢な者の居どころの、何と悪いことか」。

30 畏れる者たちは「あなたがたの主は、何を下したのか」と告げられると、「良いものです」と言うだろう。善事をはたらく者には、この現世において善事がある。しかし、来世の館の方がさらに良い。畏れる者の館の、なんという至福か。

31 永遠の園、それが彼らの入るところ。川が彼らの足元を流れ、その中では何であれ望みのまま。このように、アッラーは畏れる者に報いる。

32 高潔な人として天使たちに召された者は、こう告げられるだろう。「あなたがたに平安あれ。楽園に入りなさい、［現世で］あなたがたの行ってきたことのために」。

33 彼らは天使たちが来るのを、あるいはあなたの主の命令が到来するのを待つ他はないのではないか。彼ら以前の者たちもこのようであった。アッラーが彼らに不正をなしたのではない。ただ彼らが、自分自身に不正をなしただけ。

34 彼らのはたらいた悪事が彼らを圧倒する。彼らは、かつて自分があざ笑っていたものに囲い込まれるだろう。

35 多神を奉ずる者たちは言う。「もしアッラーがそうと望めば、私たちも、私たちの祖先も、かの御方をさし置いて他の何ものにも仕えなかっただろう。また、かの御方をさし置いて、何ひとつ禁止することもしなかっただろう」。彼ら以前の者たちもこのようであった。しかし使徒に課されているのは、ただ明白にのべ伝えることだけではないのか。[9]

36 すでにわれらは、すべての共同体に「アッラーに仕えなさい。ターグートを避けなさい」と、それぞれの使徒を遣わした。彼らの中には、アッラーに導かれた者もあれば、迷わされるに値する者もあった。地上を旅し、そして見なさい、「真理を」嘘であるとした者たちの最後がどのようであったかを。[10]

37 たとえあなた「ムハンマド」が彼らを導こうと熱望しても、アッラーは、御自らが迷わせた者を決して導かない。彼らには、助けとなる者はないだろう。

38 彼らは、アッラーにかけて「アッラーが、死者をよみがえらせることは決してない」と、つとめて誓う。いいや、それはかの御方の真理の約束。しかし、人間の多くはそれを知らない。

39 「よみがえらされるのは、」彼らが相争っていたことについて明らかにし、また「真理を」拒む者たちに、自分たちが嘘をつく者であったことを知らせるため。

40 われらが何ごとかを意図するとき、それにただ「在れ」と告げれば、それは在る。[11]

41 不正に扱われた後で、アッラーのために移り住む者たちについては、われらは必ず彼らを、現世におけるすぐれた宿りの場に落ち着かせるだろう。しかし来世の報酬こそ至大なもの、もし彼らが、知ってさえいたなら。





42 「移り住む者たちこそは」よく耐えて、自分の主に委ねる者たち。

43 われらが、あなた「ムハンマド」以前に啓示して遣わしたのも、「あなたと同じ」人のひとりに他ならない。もしあなたがたが知らないなら、戒めを下されている民に尋ねなさい。[12]

44 「彼らには」諸々（もろもろ）の明白な証と啓典の書を、あなた「ムハンマド」には戒（いまし）め「となるクルアーン」を下した。それにより、かつて人々に下されてきたものを、あなたが人々に明らかにするため。それで彼らも、省みるようになるだろう。

45 悪事を謀る者たちは、アッラーが、彼らを大地に沈めることはないと安心していられるのか。あるいは彼らの気づかなかったところから、懲罰が科されることはないというのか。

46 あるいは、彼らがあれこれとせわしなくしているところを、かの御方に捕えられることはないというのか。そうなれば彼らは逃れることもできない。

47 あるいは、彼らが恐れおののいているところを、かの御方に捕えられることはないというのか。しかし本当にあなたがたの主は、憐れみ深く慈悲深い。

48 彼らは、アッラーの創造するものを何ひとつ見ないのか。またその影が、右から左へと回転し、その身を縮めてアッラーにひれ伏すのも。

49 諸天にあるもの、大地にあるもの、ことごとくアッラーにひれ伏す。あらゆる生きものが、また天使たちが。彼らは、決して高慢にふるまわない。

50 彼らを圧倒する崇高な主を恐れ、命じられた通りに行う。

51 アッラーは告げた。「二神を選んではならない。神は唯一である。それゆえ、ただわれのみを畏れなさい」。

52 諸天と大地にあるものは、すべてこの御方に属する。宗教は常にこの御方に属する。それであなたがたは、

アッラーの他に何を畏れるのか。

53 あなたがたの受け取るどのような恩寵もアッラーからのもの。そして困難に遭うとき、あなたがたはこの御方に向かってうめき声をあげる。

54 それでいて、この御方があなたがたから困難をとり除くと、見なさい。あなたがたの中の一派は、その主に何ものかを同列に連ね、

55 われらから与えられたものについて、その恩を忘れる。うつつを抜かしていなさい。やがてあなたがたも、知ることになるだろう。

56 また彼らは、われらが糧としたものの一部を、自分たちでさえ知らない何ものかに割り当てる。アッラーにかけて。あなたがたは、ねつ造していたものについて必ず問いただされるだろう。[13]

57 また彼らは、アッラーには娘があるという。かの御方に讃美あれ。彼らには、彼らの欲しがるものがある。

58 彼らのうち誰かに、女児「の誕生」という報せが伝えられると、その顔は暗くかげり、悲嘆に沈んでしまう。

59 伝えられた報せが悪いといって、自分の民から身を隠してしまう。「恥をしのんでこのままにしておこうか、それとも土の中に埋めてしまおうか」。彼らの判断こそ、なんという悪さか。[14]

60 来世を信じない者とは悪いものの例であり、至高の例とはアッラーにある。もっとも威力ある御方、もっとも賢明な御方。

61 もしアッラーが人々をその不正のために捕えていたなら、この地上には何の生きものも残らないだろう。かの御方は、定められた時までは猶予する。そして期限が到来するとき、それは一刻たりとも遅らせることはできず、また早めることもできない。





62 彼らは、自分たちの嫌うものをアッラーに割り当て、その舌で嘘をつき、もっともすぐれたものは自分たちのためにある、などと言う。まぎれもなく彼らにあるのは業火であり、彼らは「その中に」置き去りにされるだろう。

63 アッラーにかけて。われらはあなた以前にも、すでに諸々の共同体に「使徒を」遣わした。しかし悪魔が彼らの行いを、すばらしいもののように見せていた。それで彼は、今日でも彼らの守護者である。しかし彼らには、痛烈な懲罰があるだろう。

64 われらがあなたに啓典を下したのは、彼らが相争っていることについて明らかにするために、また信じる民への導きとも、慈悲ともするために他ならない。

65 アッラーは空から雨を降らせ、死んだ後の大地に生をもたらす。本当にその中には、耳を傾ける民への御しるしがある。

66 また家畜の中にも、あなたがたへの教訓がある。われらはその下腹の中の、はらわたと血のあいだにあるものから、飲む者にとり心地よい純粋な乳をもたらし、あなたがたに飲ませる。

67 またなつめやしやぶどうの果実から、あなたがたは強い飲みものやすぐれた糧を得る。本当にその中には、考える民への御しるしがある。[15]

68 またあなたの主は、蜜蜂に啓示した。「山や樹木や、また彼ら「人間」の建てるものに、自分たちの巣をかけなさい。

69 あらゆる果実を食べ、あなたの主の、とどこおりのない道に沿ってゆきなさい」。その下腹からは、色とりどりの飲みものが出てくる。それには、人々の治癒となるものもある。本当にその中には、深く考える民への御しるしがある。[16]

70 アッラーはあなたがたを創造し、そののち、あなたがたを召し寄せる。あなたがたの中には、知っていたはずのことも何ひとつ分からなくなるほど、歳を重ねて衰える者もある。本当にアッラーはすべてを知り、あらゆるものごとにおいて全能である。[17]

71 アッラーは、あなたがたのうちある者に、他の者にまさる糧を恵む。しかし、まさって恵まれた者は、その糧を、彼らが召しかかえる者に手渡して平等になろうとはしない。彼らは、アッラーの恩寵を認めないつもりなのか。

72 アッラーは、あなたがたの中から伴侶をつくり、また伴侶から子どもや孫をつくる。諸々（もろもろ）の良いものを糧としてもたらす。それでも彼らは嘘いつわりを信じ、アッラーの恩寵［が真理であること］を拒むのか。

73 彼らはアッラーをさし置いて、諸天と大地の中に、彼らのための糧を何ひとつ所有してもおらず、また何もできないものに仕える。

74 それゆえ、アッラーに例えを用いてはならない。本当にアッラーは知っている。しかし、あなたがたは何も知らない。

75 アッラーは例えを示す。何の力も持たないしもべと、われらからのすぐれた糧をもたらされ、その中からひそかにもあらわにも［施しに］費やす者とが同じだろうか。アッラーに称賛あれ。いいや、多くの者は何も知らない。[18]

76 アッラーは例えを示す。二人のうちひとりは耳も聞こえず、何ひとつできず、主人には邪魔でしかなく、どこへ行かせようと、何も良いことがない。このような者と、公正を勧め、まっすぐな道の上にある者とが同じだろうか。[19]

77 諸天と大地の、目には見えないものはアッラーに属する。そしてかの時を定める命令は、まばたきひと





つほど、あるいはそれよりも短い。本当にアッラーは、あらゆるものごとにおいて全能である。

78 何ひとつ知らないあなたがたを、母の下腹から生まれさせたのもこの御方。それからあなたがたに聞く耳と見る目を、また諸々（もろもろ）を感知する心を持たせた。あなたがたは、感謝するようになるだろう。

79 彼らは見なかったのか、［主の法則に］服して空のただ中をゆく鳥を。それを支えているのはただアッラーのみ。本当にその中には、信じる民への御しるしがある。[20]

80 あなたがたの家を憩（いこ）いの場所とし、また家畜の皮を、あなたがたが旅をする日に、またあなたがたが野営をする日に、軽々と扱える天幕とした。また羊毛、毛皮、けものの皮を、しばらくのあいだの家財や身の回りのものとした。[21]

81 創造したものからあなたがたのための日陰をもたらすのはアッラーである。また山々に避難の場を設け、暑さからあなたがたを守るための肌着、戦闘からあなたがたを守るための肌着までもしつらえた。このように、かの御方はあなたがたの上にその恩恵をまっとうとする。あなたがたも、［アッラーの意に］服従するようになるだろう。

82 それで、もし彼らが背を向けるとしても、あなた［ムハンマド］に課されているのはただ明白に［教えを］のべ伝えることだけ。

83 彼らは、アッラーの恩寵を認めた上でそれを拒否している。彼らの多くは、恩を忘れている。

84 われらが、すべての共同体からそれぞれひとりの証言者をよみがえらせる日。そのとき、恩を忘れていた者は［申し開きも］許されず、償わせてももらえない。[22]

85 不正をなす者が懲罰を目の当たりにするとき、それは軽くもされず、また猶予もされないだろう。

86 また多神を奉じる者が、それらを目の当たりにするとき、彼らは「主よ。これらは私たちが、あなたを

さし置いて呼びかけていたものです」と言う。するとそれらは言い返す。「本当に、あなたがたは嘘つきだ」。

87 それらは、その日、アッラーに服従を申し出る。かつて彼らがねつ造していたものが、彼らから失われることになる。

88 ［真理を］拒み、アッラーの道をさえぎる者たちには、われらは懲罰の上にも懲罰を増す。彼らが、退廃を広めていたために。

89 われらがすべての共同体に対し、彼ら自身の中からそれぞれひとりの証言者をよみがえらせる日。われらはあなた［ムハンマド］を、彼らに対する証言者とするだろう。われらがあなたに啓典を下したのは、ありとあらゆるものごとを明らかにするため、また服従する者［ムスリム］への導きと、慈悲と、良い報せとするため。

90 本当にアッラーは公正と善良を、そして近しい親族に対して［惜しまず］与えることを命じ、また不品行と非道、そして抑圧を禁じる。かの御方はあなたがたに教示している。それであなたがたも、憶えておくようになるだろうと。

91 アッラーとの契約を結んだときは、その契約を果たしなさい。確かめた後になって、誓いを違えてはならない。あなたがたはアッラーを、自分たちのことを保証する者としたのだから。本当にアッラーは、あなたがたのすることをよく知っている。[23]

92 糸を強く紡いだ後になって、その縒りをほどいてしまう女のようであってはならない。ある共同体が、［別の］ある共同体よりもまさるからといって、あなたがたの誓約を、互いに相手をだますために用いてはならない。アッラーは、ただあなたがたをそれで試そうとしているだけ。あなたがたのあいだで相争っていたことについては、復活の日、かの御方が明らかにするだろう。





93 もしアッラーがそうと望めば、あなたがたをただひとつの共同体にしていただろう。しかし、かの御方は、誰であれ御心のままに迷わせ、また誰であれ御心のままに導く。あなたがたは、自分たちの行ってきたことについて必ず問いただされるだろう。

94 あなたがたは自分の誓いを、互いに相手をだますために用いてはならない。さもないと固く踏みしめたはずの足元がすべり、アッラーの道をさえぎったことの悪を味わうだろう。そうしてあなたがたには、痛烈な懲罰があるだろう。[24]

95 アッラーの約束を、わずかな代価と引き換えにしてはならない。アッラーの御許にあるものの方が、本当にあなたがたのために良い、もしあなたがたが知ってさえいたなら。

96 あなたがたの手許にあるものは消え去る。アッラーの御許にあるものは残り続ける。われらは、よく耐える者には、その行いの中で最善のものに応じて報いるだろう。

97 男であれ女であれ、信仰者として正しい行いをする者には、われらは必ず良い生涯を送らせ、その行いの中で最善のものに応じた報酬をもって報いるだろう。

98 あなたがクルアーンを読み聞かせるとき、棄てられし悪魔からの加護をアッラーに求めなさい。[25]

99 主を信じて委ねる者に対しては、彼は何の権威も持たない。

100 彼が権威を持てるのは、ただ彼を近しい友とする者、多神を奉ずる者に対してだけ。

101 アッラーは御自らの下すものについてもっともよく知っている。しかしわれらがあるしるしを、他のしるしと替えるとき、彼らは、「あなたがねつ造したのだろう」などと言う。いいや、そうではない。彼らの多くは、何も知らない。

102 言いなさい。「信じる者を確かなものとするため、またムスリムへの導きと、良い報せとするために、聖

なる霊が、真理によりあなたがたの主の御許から下したのだ」。[26]

103 われらは、「ただの人間が彼に教えているに過ぎない」と、彼らが言うのをよく知っている。しかし、彼らが指している者の言葉は異国のもの。そしてこれは、明白なアラビア語である。[27]

104 アッラーの御しるしを信じない者たち。アッラーは彼らを導かない。彼らには、痛烈な懲罰があるだろう。

105 アッラーの御しるしを信じない者は、ただ嘘いつわりをねつ造するだけ。これらの者こそ、嘘をつく者。

106 心は信仰にやすらいでいるのに無理強いされた者を除いて、信じた後になってアッラーを拒否する者、不信に向かってその胸を開く者には、アッラーの怒りがあるだろう。彼らには、大いなる懲罰があるだろう。[28]

107 これは彼らが、来世よりも現世の生の方を愛するため。またアッラーが、［真理を］拒む民を導くことはないため。

108 これらの者は、アッラーがその心と、聞く耳と、見る目とを封じた者。これらの者こそ、顧みない者。

109 まぎれもなく、彼らは来世における敗者となるだろう。

110 しかし試練にあった後に移り住み、励み、よく耐えた者に対するあなたの主は、本当にそれからのあなたの主は、もっともよく赦し、もっとも慈悲深い。

111 その日、各人がそれぞれ自分の申し開きのために召し寄せられる。各人はそれぞれその行いに応じて十分に報いられ、不当に扱われることはない。[29]

112 アッラーは、安全で平穏なある町の例えを示す。あらゆるところから糧がゆたかにもたらされていたが、［その住民は］アッラーの恩寵への恩を忘れた。それゆえ、かの御方は彼らの築いたものに対し、飢えと恐れの衣に包んで味わわせた。[30]





113 また、彼らの中からひとりの使徒が確かに来ていたのに、彼らは彼を嘘よばわりした。それゆえわれらは、彼らが不正をなしているところを、懲罰をもって捕えた。

114 アッラーがあなたがたの糧とした、合法で良いものを食べなさい。アッラーの恩寵に感謝しなさい、もしあなたがたがこの御方に仕えているのなら。[31]

115 かの御方があなたがたに禁止したのは、ただ屍体、血、豚の肉、そしてアッラー以外に捧げられたものだけ。それゆえ、誰であれ欲したのでも度を越したのでもなく、やむを得ずのことなら、本当にアッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。[32]

116 また、あなたがたの舌先で嘘をつき、「これは合法である、そしてこれは非合法である」と言ってはならない。それはアッラーについて嘘いつわりをねつ造すること。本当に、アッラーについて嘘いつわりをねつ造する者は栄えないだろう。[33]

117 わずかばかりの楽しみがあるだけで、彼らには痛烈な懲罰があるだろう。

118 われらはユダヤ教徒に、以前にあなたに語ったとおりのものを禁じた。われらが彼らに不正をなしたのではない。ただ彼らが、自分自身に不正をなしただけ。

119 しかし無知であったために悪を行い、その後になって悔い改め、また自らをただす者に対しては、あなたの主はもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。

120 本当にイブラーヒームはひとつの模範である。アッラーに従順な、純正な人であった。彼は、多神を奉ずる者のひとりではなかった。[34]

121 かの御方の恩寵に感謝していた。かの御方は、彼を選んでまっすぐな道へ導いた。

122 われらは、現世において彼に善事を与えた。来世においても、彼は正しい者のひとりとなるだろう。

123 われらはあなた［ムハンマド］に、純正な人イブラーヒームの宗旨に従うよう啓示した。彼は、多神を奉ずる者のひとりではなかった。

124 安息日［とその遵守］は、それについて相争う者のために設けてあるに過ぎない。本当にあなたの主は、復活の日、彼らが相争っていたことについて彼らのあいだに判断を下すだろう。

125 知恵と善良な教示をもって、あなたの主の道に［人々を］呼び招きなさい。そして最善のあり方で彼らと論じ合いなさい。その道から迷う者については、あなたの主がもっともよく知っている。また導かれた者についても、もっともよく知っている。[35]

126 もしあなたがたが、応報［として刑］を科すなら、あなたがたが負わされたのと同じだけを科しなさい。しかし、もしあなたがたが耐えるのなら、それは耐える者にとりもっとも良いこと。

127 ［ムハンマドよ、］あなたはよく耐えていなさい。あなたの忍耐は、ただアッラーによる他はない。彼らのために嘆くことはない。彼らの謀(はか)りごとのために悩むことはない。

128 本当にアッラーは、畏れる者、行いの善良な者と共にある。





1 移動や輸送のための手段についての言及であり、単に家畜の動物について描写したものと解釈することはできない。神のもたらす啓示の範疇(はんちゅう)には、ある時点では人間にとっては未知のものも含まれることを前提に理解すべきだろう。

2 形而下的な意味での「旅」は、形而上的な意味での「帰郷」の象徴である。導きに従う者たちによって見出されたまっすぐな道が存在する。周囲の風景の中に、目的地を指し示す数々の標を読み取ることのできる道である。それとは別に、曲がりくねった道がある。たとえ知識がなかろうと、究極的には神の慈悲に守られている人々のための不規則な道である。創造の目的は、被造物を創造者の許へ還りつかせることである。創造者によってもたらされた完成は、単に存在するだけではなく、それを知り、そこから学ぶこともできる。目的地までの距離や、距離から推測される困難さ、そして求められる道徳的・知的水準など、これらはすべて旅に属する事柄である。

3 神のおだやかな領域には、人間が有意義に用いることのできるようにと自然界のプロセスが配されている。その中には、知性をはたらかせる人々への数々の徴がある。

4 夜と昼の交替は、神が定めた天体の法則によって生じている。太陽、月、そして星々は、それ自体が有用なしもべたちである。すべては神の祝福と采配による賜りものであり、それなしにはどのような法則も存在せず、またそれらを活かす知性も存在しない。

5 長い距離を旅する際には、空の北極星や手元の羅針盤が道案内となって旅人を導く。別世界を目指す霊的な旅は、非常に長い旅路である。この旅をする者は一生涯をかけて、天の導きの探求や、あるいは神の啓示の熟考といった営みの中に道案内をみつけなくてはならない。

6 神の慈悲と赦し、また霊的な領域における人類に対する恩寵は無限であり、それは私たちの未来と、また来世の生のための最大かつ永遠の価値をもっている。

7 神は唯一の創造主であり、究極の実在である。神以外は、すべて神によって創造された神の栄光の反射である。神の他

に崇拝すべきものは何ひとつない。神のみが唯一、永遠の真理である。

8 この節で「同輩たち」と訳出した語は、「分かち合うもの」といった意味の語の複数形である。いわゆる「シルク」と呼ばれる、神の神性を分かち合う対偶となるものの存在を認め、主張することを指し、これは神の唯一性、統一性というイスラームの価値観「タウヒード」の対局にある概念であり、審判の日、創造主たる神に問いただされるだろう重大な罪であるとされる。

9 「もしも神が全能なら、なぜ神はすべての人に自らの意志を強制しないのか?」。昔から繰り返されてきた議論である。こうした問いを発する人は、人間に授けられている自由意志の存在を無視している。しかし完全ではないにせよ、ある程度の範囲で自由意志を行使できるということこそがあらゆる倫理の根拠となっているのである。神はすべての人に、あらゆるものごとについて知り、理解し、よりよい選択をするための機会を授ける。神が人間に強制せずにいるのは、現世が人間一人ひとりの選択が試される場であることも含め、全体としての神の計画に反するからである。

10 神はすべての民に彼らの中から使徒を立てて遣わし、善事をなし、悪事を退けるよう警告した。偽りの神々ではなく、唯一、真の神のみに従い、崇拝し、またその使徒たちに従い、彼らの歩む道を歩み、そのメッセージに耳を傾けるよう告げた。「ターグート」については二章二五六節の注釈を参照。

11 神の言葉は、それ自体がひとつの行為である。神の約束は、それ自体が真理である。神が何ごとかを意図したとき、その意図と、意図がもたらす結末の間には、時間も含めどのような条件も介在しない。神は究極の実在なのである。神に近似するものはなく、物質的な因果からも独立・自存している。なぜならそれらを創造したのは神自身であり、それらの法則を確立するのも神自身だからである。

12 イスラーム以前のアラブに対し、「預言者」が何であるか、その意味が理解できないなら、ユダヤ教徒に教えを乞うよう勧めている。彼らもまた神のメッセージを、ムーサーを通して授かっているいわば先達である。ムーサーは天使でも





神でもなく、ひとりの人間であった。「戒めを下されている民」とは、言い換えるなら神を思い起こすためのよすがとなるものを授かっている人ということであり、何らかの意見を述べるにふさわしい知恵を持つ賢人を示しているとも考えられる。

13 イスラーム以前のアラブたちは、「これは神の分、これは私たちの神々の分」と述べて収穫したものや家畜の肉の中から取り分けた。「神の分」として取り分けたものは貧者や客人にふるまわれたが、「神々の分」として取り分けたものは、数々の偶像のための儀式に費やされた。

14 女児の誕生をまるで不幸のようにとらえるのは、多くの文化にみられることである。この節が示すとおり、イスラームはこうした姿勢を非難している。イスラーム以前のアラブの間には、生まれたばかりの女児を生き埋めにして葬るといった慣習さえ存在していた。

15 なつめやしやぶどうからは、様々な種類の健全な非アルコール性飲料が作られる。ここでの「サカル(強い飲みもの)」が、醸造されたぶどう酒という意味で用いられているとすれば、それはこの節が、酩酊をもたらすものが禁じられる以前の啓示であるためである。本章はマッカ啓示であり、酩酊をもたらすものの禁止が啓示されたのは、その後のマディーナでのことである。

16 蜜蜂は様々な種類の草花や、果樹の花の蜜を体内に取り入れて運び、蜜蝋でできた巣穴に蓄える。花の種類によって、蜂蜜の色も変わる。蜂蜜は様々な病気の治療薬として、多くの医学的な伝統において用いられてきた。滋養に富んでいるため、病気を予防して身体の健康を守るのにも役立てられている。

17 神がその知識と権能をもって、自らの創造物のための慈悲深い計画をまっとうすることによってもたらされる、生命と自然の注目すべき変容について語ったあとで、人間もまたそうした創造の中のひとつであること、神の恩恵にすがるしかないか弱い存在であることを思い起こさせている。以降の節では、人間に授けられている恩恵と、その差異について

説き明かしてゆく。

18 このたとえ話には二人の人物が登場する。一人は力なき奴隷であり、もう一人はあらゆる形で恩恵を授かり、また授かった物質的な富を分かち合うことにおいては最も気前のよい自由民である。前者は、人間がこしらえた想像上の神々のようなものである。独立自存した存在ではなく、神の諸々の属性の現れである自然の力や神格としての主体をもたない、神の意志と権能に従う存在である。後者は、独立自存しつつ、同時にあらゆるものを存続させている神のあり方の一端を垣間見せるためのいわば比喩である。

19 続けて二つめのたとえ話にも、二人の人物が登場する。一人は口がきけず、何も説明することができず、また確実なことは何ひとつできない、単なる重荷でしかない者。これは文字通りにも、比喩としてもまさしく偶像そのものである。もう一人は命令を下す立場にあり、またその命令は真実であり正義である。命令だけではなく、実際の行為もまた正しい道の上にある。神には、そうした諸々の属性がある。

20 宇宙のあらゆる法則は、法を司る者によって記されたものである。神の法則の範囲外には原因も結果も存在しえない。
21 「憩いの場所」について。人間にとってもっとも高度な（すなわち到達するのがもっとも困難な）霊的な成就とは、純
粋で清浄な家庭を持つことに尽きる。この現世において、やすらぎとしずけさを備えた場所、愛情が育まれる場所であり、
また最も優れた者として来世に招かれるための準備をする場所としての家庭である。またアラビア語では、「家」「館」
を意味する「バイト」という語は、堅牢な建物だけではなく、たとえば移動中の臨時的な天幕も含め、あらゆる種類の
住居を意味することにも留意が必要である。ここで用いられている「ジュルード」という語は「皮革」を意味する「ジ
ルド」の複数形であるが、ここでは明らかに家畜の皮革に加え、毛皮、羊毛なども含まれていると思われる。「毛皮」
とした「ワバル」は「アウバル」の複数形であり、らくだの背に生える柔らかな毛がそう呼ばれている。らくだの毛は
布を織るのにも使われ、時には砂漠の遊牧民たちの天幕にも用いられている。





22 人間の多くは、自分たちが数々の恩恵を享受していると知りつつも、それらを神の創造物としてみなすことは拒む。それは神に対して果たすべき義務を放棄していることになるが、かといって神の存在を真実として認めることは、自分の無力さを認めることになるため、少なからぬ人がその時点で考えることをやめてしまうのである。

23 この節が指しているのは、具体的にはおそらくマッカからマディーナへの移住の十四か月前に、預言者に対する忠誠を誓った「アカバの誓い」か、その少し後に再びなされた同様の誓いのいずれかである。しかし一般的にはより広い範囲で、ふたつの角度から見ることができる。（1）誓約や契約は、すべて神の前でなされたものであり、忠実に守らねばならない（五章一節参照）。（2）特にすべてのムスリムは、信仰を告白することによって神と契約を交わしており、また日々の礼拝のたびに信仰の告白の文言を唱えることで、繰り返しその契約を確認している。したがって主に教えられた通りの義務を果たすよう、とりわけ忠実に守らねばならない。

24 九二節には、嘘をついたり、その場しのぎのための約束をしたりすること、またその動機についての戒めが示されていた。この節では、そうした行為がもたらす結末について告げられている。（1）他者に対して。他者を惑わせることの責任は、惑わせた者に課される。虚偽によってまっすぐに歩んでいた者に道を踏み外させ、信仰を失わせることは詐欺的な行為である。（2）自分自身に対して。自分自身の犯した過ちばかりではなく、他者を間違った道に引き込むことにより、二倍の懲罰を受けることになる。

25 悪魔には、神の庇護を求める者に手出しすることはできない。これについては、「呪われた悪魔に対する神の庇護を求める」という祈祷の文言に言い表される。邪悪に対する神の庇護を求めるとき、常にこの文言が唱えられる。また、クルアーンの朗読を始める前にもこの文言を唱える必要があるとされている。神の言葉を声に出して読む際に、悪魔の干渉を防ぐためである。

26 悪意ある者たちは、神の使徒たちには邪悪な動機があるものと決めつけ、ありとあらゆる憶測を吹聴した。イスラーム

以前のアラブの人々には、驚くばかりの言葉の数々が、なぜ無学の預言者の口から流れ出るのかを理解できず、師にあたる人物がいるに違いないと考えた。それが正しければ、クルアーンを通して知らされた以前の啓典についての知識を有していると同時に、アラビア語にも精通している人物がいるはずだが、それに当てはまる人物は存在しなかった。そもそもそれ以前に、クルアーンのアラビア語ほどに雄弁で、幅も深みもある言葉を創作できる者もいなかったのである。

27 マッカの住民の中には、クルアーンはムハンマドがねつ造したものだと考える者もいた。それ以外にも、ローマびと（ギリシャ人）の奴隷で、ジャブラ（あるいはヤーイシュ）という名のキリスト者から教わったものだと考える者もいたが、彼はアラビア語を知らない人物で、ムハンマドにクルアーンを教えることはできなかった。

28 アンマール・イブン・ヤーセルという最初期のムスリムについての言及である。彼もその両親も残酷な拷問をうけ、イスラームを棄教するよう強要された。父ヤーセルと母スマイヤは殺害され、イスラームの最初の殉教者となった。激しい拷問に耐えかねて、アンマールは棄教の言葉を発した。しかしそのことが預言者に伝えられると、彼は次のように言った。「アンマールは全身全霊、信仰者である。信仰は、彼の心臓の一部となっている。大切なことは常にそこにある。もしも彼らがあなたがたに、あらゆる手段をもって同じことを強要したなら、そしてそのせいで彼らがあなたがたに言わせたいことを言わせたなら、あなたがたは常に心の中で神を想い起こすようにしなさい」。これは、預言者が特にアンマールに対して与えた許可である。しかし、信仰する人を拷問にかける者はいつの時代にも存在する。不要な苦しみを終わらせるなら、時と場合によっては不信仰を表明する言葉を口にすることも許される。心の中の信仰を消し去ることは、誰にもできないことである。

29 清算の日、あるいは審判の日が到来したとき、魂はそれぞれ個人の責任において立たされる。自分以外の誰かを助けることも、助けてもらうこともできない。

30 ここでは比喩が二重に働いている。（1）豊かに富ませておいたあとで、「飢えと恐れの衣に包んで味わわせ」るとは、マッ





カ住民による七年に及ぶムスリムに対する迫害と、続くムスリムの追放である。そののち、マッカ住民は自分たちの時代が終わりを迎えつつあることに気づいて恐怖した。（2）「衣に包む」とは、アラビア語の慣用表現であり、何かを完全に取り囲むことを示す。偶像を奉ずるマッカ住民が、地域からの孤立を深めていたことを指している。

31 預言者の住む町としての祝福を失い、また主への感謝を忘れたことにより、マッカの食糧事情はたちまち悪化していた。

32 二章一七三節、六章一二一節と一三八節から一四六節も参照。

33 人間は、たいていの場合は自分勝手な目的のために、あるいは迷信から、自分で禁忌を設けては宗教の名の下に強制する。こうして彼らは自分自身だけではなく他者までも誤らせるのである。これほど、非難されるべきこともない。

34 「イブラーヒームはひとつの模範である」。ここでは「ウンマ」に「模範」という語をあてたが、この語は通常「共同体」と訳される。イブラーヒームは「唯一の神」という教えの西アジアにおける最初の体現者であり、彼の霊的な子孫は今や世界じゅうに存在するという意味では、イブラーヒームは確かに「共同体」である。偶像を崇拝するカルデアの民に生まれながら、彼はそこにとどまることなく、「唯一の神」という教えに従う自分自身の共同体に属したのである。

35 預言者の忍耐と自制心は、極限まで試された。ウフドの戦いでは、クライシュ族の率いるマッカ住民の軍勢は、彼のおじであるハムザを殺害したばかりか、彼の鼻と耳をそぎおとし、肝臓を取り出して切り刻むといった残酷なふるまいをした。無残なおじの遺体を目にしたとき、預言者は、もしも神が勝利を授けてくれたならば、七十二名の敵に同じような目に遭わせることを誓おうとした。するとその寸前に、次の一二六節が啓示された。それは自制心と寛容を勧める、これまでと同様のイスラームの教えそのものの啓示であった。最終的に彼が勝利し、マッカ入場を果たしたとき、彼はかつての敵をことごとく容赦し、周囲を驚かせた。

# 第一七章　アル＝イスラーゥ　夜の旅

マッカ啓示

本章は、預言者の奇跡的な「夜の旅」を取り上げるところから始まる一節にちなみ、この名で呼ばれている。その夜、預言者はエルサレムの神殿の丘へ旅をし、さらにエルサレムから、七層の天を通り抜けて神の御前まで昇った。本章はバヌー・イスラーイール、あるいは「イスラエルの民」とも呼ばれている。イスラエルの民についての言及に始まり、終わる章だからである。本章はマッカ中期の章群に属している。一部の歴史家によれば、八一節、あるいは七六節から八二節はマディーナ啓示であるともされている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 讃美あれ、禁制のマスジドから、われらがしるしを見せるために、われらがその周囲を祝福したはるか彼方のマスジドへ、夜にそのしもべに旅をさせた御方。本当にすべてを聞く御方、すべてを見る御方。

2 われらはムーサーに啓典を与え、それをイスラエルの民のための導きとした。「われをさし置いて、他の庇護者を選んではならない」。

3 「彼らは、」われらがヌーフと共に運んだ者の子孫たち。本当に彼は、感謝するしもべであった。[1]





4 またイスラエルの民には、啓典の中であらかじめ御言葉を告げておいた。「あなたがたは、必ず地上に二度の退廃を引き起こし、大いに高ぶることだろう」。

5 それで約束されていた二度のうち、一度めがやって来たとき、われらはあなたがたに対し、強大な武力のあるしもべたちを送った。彼らは館の中まで突き破り、こうして約束は果たされた。

6 そののちわれらは、再びあなたがたを彼らに対して切り返させた。また、あなたがたを財や子どもで補い、「以前よりも」その数を多くしてやった。

7 「もしあなたがたが善事をはたらくなら、あなたがた自身のために善事をはたらいたことになる。また、もしあなたがたが悪事をはたらくとしても、それもやはりあなたがた自身のため」。それで、約束されていた二度めがやって来たとき、あなたがたの顔は悲しみでおおわれた。最初のときのように、彼らはマスジドに入り、彼らの力の及ぶ限り破壊しつくした。

8 おそらくあなたがたの主は、あなたがたに慈悲深いことだろう。しかし、もしあなたがたが「罪を」繰り返すなら、われらも「罰を」繰り返すだろう。われらは「真理を」拒む者のために地獄を設け、牢の寝床とした。

9 本当にこのクルアーンは、もっともまっすぐな「道への」導きであり、また信仰者として正しい行いをする者に、大いなる報酬があるとの良い報せを伝えるもの。

10 また、来世を信じない者たちに、われらは痛烈な懲罰を用意してある。

11 人間は、良いものを祈るかのように悪を祈る。人間とは浅はかなもの。[2]

12 われらは、夜と昼とを二つのしるしとした。それから夜のしるしをかき消し、昼のしるしを目に見えるようにした。あなたがたに主の御恵みを探し求めさせるために、また年の数と「月日の」計算を知れるよ

うに。われらはありとあらゆるものごとを解き明かした。

13 われらはすべての人間の首に、それぞれの「鳥」を結わえつけておいた。そして復活の日、われらはその者のために一冊の記録を取り出し、開いてみせる。

14 「あなたの記録を読みなさい。この日、あなたの清算はあなた自身で十分である」。

15 誰であれ導かれる者は、ただ自分自身のために導かれ、また誰であれ迷う者は、ただ自分自身に反して迷うだけ。荷を負う者は他者の荷を負えない。われらは「警告のために」ひとりの使徒を遣わさない限り、懲罰を科すことはしない。[3]

16 ある町を滅ぼそうと意図するとき、われらは、「最初の警告として」その中で贅沢をしている者に命令する。しかし、それでも彼らが背くようなら御言葉が真理となり、われらはそれを破壊し、全滅させる。

17 ヌーフの後に、われらはどれだけの世代を滅ぼしただろうか。あなたの主はしもべたちの罪を熟知し、すべてを見る者として万全である。

18 誰であれ刹那「の現世」を欲する者には、われらも、われらがそうと望むだけ、われらがそうと欲する者に急いでやる。そののちわれらは、焼かれ、汚名を負わされ、見放されるだろうその者のための地獄を設けてやる。

19 しかし誰であれ、信仰者として来世を欲し、そのために尽力（じんりょく）する者。これらの者の尽力（じんりょく）は十分に認められるだろう。[4]

20 われらはこれらの「来世を欲する」者にも、あれらの「現世を欲する」者にも、それぞれにあなたの主の贈りものを差し出そう。あなたの主の贈りものに制限はない。

21 見なさい、どのようにわれらが、ある者には他の者より多くを恵むかを。来世においては位階においても、





恵みにおいても、「その差は」必ずさらに大きい。[5]

22 他の何ものもアッラーと共に並べてはならない。さもないと汚名を負わされ、見放されるだろう。

23 あなたの主はあなたがたに、この御方の他は何ものにも仕えないよう、また両親には良くするよう定めている。そのどちらかが、あるいはどちらもがあなたのところで老いるに至ったなら、そのどちらにも荒々しい言葉を吐いて「、苛立ちをぶつけて」はならない。彼らに言い返したりせず、ていねいな言葉をかけるようにしなさい。[6]

24 そして彼らに、慈悲からくる慎ましさの翼を垂れなさい。そして言いなさい。「主よ。幼かった私を彼らが育て上げてくれたように、二人に慈悲がありますように」。

25 あなたの主は、あなたがたの内側にあるものをもっともよく知っている。もしあなたがたが正しい者でいるなら、本当にかの御方は、よく悔い改めて立ち返る者をもっともよく赦す。

26 また親族に、与えるべきものを与えなさい。また貧しい者にも、旅の者にも。しかし無駄な浪費をしてはならない。

27 浪費する者は悪魔の同胞。悪魔は、いつもその主への恩を忘れている。

28 しかし、あなたもまた主からの慈悲を待ち望んでおり、それを求めるために彼らから立ち去るなら、せめて彼らにおだやかな言葉をかけるようにしなさい。[7]

29 自分の手を自分の首に縛りつけていてはならない。また、拡げられるだけ拡げ過ぎてもいけない。さもないと責められ、後悔して終わることになるだろう。[8]

30 あなたの主は、御心のままにある者の糧を拡げも、また狭めもする。本当にこの御方はしもべたちについて十分に知り尽くしており、すべてを見ている。

31 貧しさを怖れてあなたがたの子どもを殺してはならない。われらが、彼らも、あなたがたも養う。彼らを殺すことは重大な罪業(ざいごう)である。[9]

32 姦淫(かんいん)に近づいてはならない。それは不品行であり、悪い道である。

33 アッラーが禁制のものとした生命を、正当な理由によらずして殺害してはならない。誰であれ不正に殺害されたなら、われらはその直近の遺族に［一定の］権限があるものとする。しかし、殺害について度が過ぎてはならない。本当にその者［被害者］には［法の］援助がある。[10]

34 もっともすぐれたことのためでない限り、孤児が成人に達するまではその財に近づいてはならない。約束を果たしなさい。約束は、必ず問いただされることになる。

35 あなたがたが測るときは、正道に立って升(ます)と秤(はかり)を十分に満たしなさい。その方がより良く、また結果としてもっともすぐれている。

36 あなたがたが知りもしないことの後を追ってはならない。本当に聞く耳と見る目、また諸々を感知する心は、それぞれ必ず問いただされることになる。

37 居丈高になって地上を歩いてはならない。あなたがたには大地を裂くこともできず、その背丈が山の高さに達することもない。

38 これらはすべて悪事であり、主の御許では嫌われること。

39 あなたの主が啓示した知恵とはこのようなもの。他の何ものもアッラーと共に並べてはならない。さもないと地獄に投げ入れられ、責めを負わされ、見放されるだろう。[11]

40 あなたがた［マッカの住民］は、主はあなたがたには取り立てて息子をもたらしながら、御自らには天使の中から娘を選んだというのか。本当にあなたがたは大それたことを言う。[12]





41 われらは、すでにこのクルアーンにより彼らが戒め(いましめ)とすべきことを解き明かした。しかし彼らは、反感をつのらせるばかりであった。

42 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「もし彼らの言うとおり、かの御方と共に並ぶ神々があるとしたら、それらは必ず玉座の主となるための道を欲しただろうに」。[13]

43 かの御方に讃美あれ。彼らが言うことを超越して、もっとも崇高におわす。

44 七つの天と大地と、何であれその中にあるすべてのものはかの御方を讃美する。かの御方を讃美し称賛しないものは何ひとつない。ただあなたがたが、それらの讃美を理解していないだけ。本当にかの御方はもっとも寛容にして、もっともよく赦す。[14]

45 あなたがクルアーンを読み聞かせるとき、われらはあなたと、来世を信じない者たちとのあいだに、目には見えない壁をおく。

46 またわれらは彼らの心の上に覆いをかけ、彼らには分からないようにし、また耳も鈍くさせた。そのためあなたがクルアーンの中で、唯一あなたの主のみを想い起こさせるとき、彼らは反感をつのらせて背中を向ける。

47 彼らがあなたに耳を傾けるとき、彼らがどのようなことに耳を傾けているのか、われらはもっともよく知っている。また彼らが密談するとき、「あなたがたが従っているのは、魔法にかけられたただの男に過ぎない」と、不正をなす者が言うことも。

48 見なさい、あなたに対して彼らがどのような例えを示しているかを。しかし、彼らは迷い去っている。それゆえ、決して道を見つけることはできない。

49 彼らは言う。「それでは私たちが骨となり、砕けて塵(ちり)となったとき、本当に私たちは新たに創造され、よ

みがえらされるというのか」。
50 言いなさい。「あなたがたが石になろうと、鉄になろうと、
51 あるいはあなたがたが胸の中で、まさかこれのはずはないと思うようなものになろうと」。すると彼らは尋ねるだろう。「誰が私たちをよみがえらせるのか」。言いなさい。「最初にあなたがたを創始した御方」。すると彼らはあなたに向かって頭を振り、言うだろう。「それはいつになるのか」。言いなさい。「それは、おそらく近い」。[15]
52 その日、かの御方があなたがたを呼ぶと、あなたがたは称賛をもって応じる。あなたがたが過ごしたのは、ほんのわずかなあいだであったと思うだろう。
53 「ムハンマドよ、」われのしもべたちに、もっとも良いことを話すよう告げなさい。本当に悪魔は不和をもたらす。本当に悪魔は人間のあからさまな敵。
54 あなたがたの主は、あなたがたのことをもっともよく知っている。そうと望めばあなたがたに慈悲をかけ、またそうと望めばあなたがたに懲罰を科す。われらがあなた「ムハンマド」を遣わしたのは、彼らの世話をさせるためではない。[16]
55 あなたがたの主は、諸天と大地にあるすべてのものをもっともよく知っている。またわれらは、預言者たちのうちある者には他の者よりも恵み、またダーウードには詩篇を与えもした。[17]
56 言いなさい。「あなたがたがかの御方をさし置いて「これは神々であると」主張しているものに呼びかけなさい。それらにはあなたがたから禍害（かがい）をとり除くことも、とり替えることもできない」。
57 彼らが呼びかけるそれらでさえ、誰がもっとも主に近づけるかと手立てを探し求めている。かの御方の慈悲を望み、かの御方の懲罰を恐れている。本当にあなたの主の懲罰は、恐怖すべきものであるために。





58 どのような町であれ、復活の日より前にわれらが滅ぼすか、あるいは厳重な懲罰をもって罰さないものはない。これは「主の定めとして」啓典の中に記されていること。
59 大昔の者たちがそれを嘘よばわりしたことを除けば、われらが諸々（もろもろ）のしるしを送ることを止めるものは何もない。われらはサムードに、目に見えるしるしとして雌のらくだを与えもしたが、彼らはそれを不当に扱った。われらが諸々（もろもろ）のしるしを送るのは、畏敬させるために他ならない。[18]
60 われらがあなたにこう告げたときのこと「を思いなさい」。「本当に、あなたの主は人々を取り囲む」。また、われらがあなたに見せた情景は、人々に対する試みに他ならない、クルアーンの中で忌まれたあの木もまた。われらが彼らを恐れさせても、彼らはますます逸脱を深めるだけのこと。[19]
61 われらが天使たちにこう告げたときのこと「を思いなさい」。「アーダムの前にひれ伏しなさい」。それで彼らはひれ伏した、イブリースを除いては。彼は言った。「あなたが泥から創造したものに、どうして私がひれ伏さなければならないのですか」。
62 彼「イブリース」は言った。「あなたが私よりも貴ぶこの者が、あなたにはどう見えていますか。もしあなたが、復活の日まで私を猶予してくださるなら、私は、ごくわずかを除く彼の子孫をほしいままにしてみせましょう」。
63 かの御方は告げた。「立ち去れ。そしてもし彼らの中にあなたに従う者があるなら、本当に地獄があなたがたの報いであり、それだけで十分な報いだろう。
64 彼らの中で、あなたのその声でそそのかせる限りの者をそそのかし、あなたの騎兵と歩兵をもって彼らに挑みなさい。また財も子どもについても彼らと共同するがいい。いくらでも約束するがいい」。しかし悪魔の約束は欺瞞（ぎまん）に他ならない。

65 「われのしもべたちに対し、あなたには何の権威もない」。あなたの主は、保護者として万全である。

66 主は、あなたがたのために船に海を渡らせる。それはあなたがたに、かの御方の御恵みを探し求めさせるため。本当にかの御方は、いつでもあなたがたに慈悲深い。

67 あなたがたが海で困難に遭うとき、あなたがたがいつも呼び求めるものは失われる、ただしかの御方は別として。ところが、かの御方があなたがたを陸に救うと、あなたがたは背き去る。人間は、いつでも恩を忘れる。

68 あなたがたは、かの御方があなたがたを地の縁に沈めることはない、と安心していられるのか。あるいは石の嵐を送ることはないというのか。そうなればあなたがたは、庇護者を見つけることもできないのに。

69 それともあなたがたは、かの御方が再びあなたがたをそこ「海」に戻らせ、竜巻を送って、恩を忘れたためにあなたがたを溺れさせることはない、と安心していられるのか。そうなればあなたがたは、われらに反してまであなたがたをかばう者を見つけることもできないのに。

70 すでにわれらはアーダムの子らを貴び、彼らを陸に、海にと運び、諸々（もろもろ）の良いものをもってその糧としてやった。われらが創造した多くのものよりも、格別に恵んでやった。[20]

71 その日、われらはすべての人々を、その先導者と呼び招く。誰であれ右手にその記録を与えられる者、これらの者はその記録を読む。そして「なつめやしの種子にある」筋ほどさえも、彼らが不当に扱われることはない。[21]

72 しかし、こちら「の現世」で見えずにいた者は、来世でも見えずにいるだろう。そうして、ますます道から迷うだろう。

73 彼らは、われらがあなたに啓示したものからまさにあなた「ムハンマド」を誘い出し、われらについて他





の何かをねつ造させようとしていた。そうなれば彼らは、あなたを友人としていただろう。

74 もしわれらが、あなたが揺るがないようにしていなかったなら、あなたはすでにわずかばかり、彼らの方へ傾きかけていた。

75 そのときは、われらはあなたの生前に二倍、死後に二倍「の懲罰」を味わわせていただろう。そうなればあなたは、われらに反してまであなたを助ける者を見つけることもできないのに。[22]

76 また、彼らはまさにあなたを脅かし、この地からあなたを追放しようとしている。しかしそうなれば、彼らもあなたの後にはわずかの間しか「この地で」過ごすことはできないだろう。

77 すでにあなた以前に遣わしてきた使徒たちへの、われらの慣行である。あなたはわれらの慣行に、何の変更も見出さないだろう。

78 太陽が傾きはじめるときから、夜の暗闇がせまるまでのあいだ、礼拝のつとめを守りなさい。また夜明けにはクルアーンを「読みなさい」。本当に、夜明けのクルアーンには立ち会いの者がいる。[23]

79 また夜の一刻、自らすすんで「祈りのために」眠りから身を起こすなら、それはあなたのためになる。おそらく主はあなたを、称えられるべき位階に就かせるだろう。[24]

80 言いなさい。「主よ。私を、真実の入り口から入らせてください。そして真実の出口から出させてください。そしてあなたから私に、助けとなる権威をもたらしてください」。[25]

81 言いなさい。「真理は到来し、虚偽は消え去った。本当に虚偽とは、常に消え去るべきもの」。

82 われらは、信仰者にはいやしとも、慈悲ともなるクルアーンを下した。しかし不正をなす者には、ただ損失だけがますます増える。[26]

83 われらが人間に恩寵を垂れると、背を向けて遠ざかる。不幸に触れられると、絶望する。

84 言いなさい。「誰もが、それぞれのやり方でことを行う。しかしあなたがたの主は、もっとも道に導かれているのは誰かをよく知っている」。

85 彼らはあなた［ムハンマド］に、霊について尋ねるだろう。言いなさい。「霊は私の主の命令によるもの。あなたがたが与えられている知識は、ごくわずかに過ぎない」。

86 もしわれらがそうと望めば、あなたに啓示したものを取り上げることもできる。そうなればあなたは、われらに反してまであなたを保護する者を見つけることもできないのに。

87 ただあなたの主からの慈悲だけは別で、本当にかの御方のあなたへの御恵みは偉大なもの。

88 言いなさい。「たとえ人間とジンとが一緒に集まり、このクルアーンと同じようなものをもたらそうとしても、そのようなものをもたらすことはできない。たとえ互いに、手を貸し合ったとしても」。[27]

89 われらはこのクルアーンの中で、すべての例えを用いて人々に解き明かした。しかし人々の多くは、拒み、ただ恩を忘れるだけ。

90 彼らは言う。「あなたが私たちのために、大地から泉を湧き出させないうちは、私たちがあなたを信じることはないだろう。

91 あるいはあなたがなつめやしとぶどうの園を手に入れ、そのあいだを通る川を湧き出させて豊かに流れさせないうちは。

92 あるいはあなたが主張している通り、空の破片を、私たちの上に落としてみせないうちは。あるいはあなたがアッラーと天使たちを、私たちの目の前に連れてこないうちは。

93 あるいはあなたが黄金で飾った家を手に入れないうちは。あるいはあなたが天に昇らないうちは。たとえあなたが昇ったとしても、私たちに読める啓典を持って降りて来ないうちは、私たちがあなたを信じ





ることはないだろう」。［ムハンマドよ、］言いなさい。「私の主に讃美あれ。私が、ひとりの人間の使徒以外の何ものだというのか」。

94 導きがもたらされたとき、人々が信じるのを妨げるものは、彼らが「アッラーは、ひとりの人間を使徒として送り込んだのか」と言うことの他に何もない。[28]

95 言いなさい。「もし地上を安堵しきって歩いているのが天使たちだったなら、われらはきっと使徒として天使をひとり、天から彼らに下していただろう」。[29]

96 言いなさい。「私とあなたがたのあいだの証言者には、アッラーだけで十分である。本当に、かの御方はしもべたちについて十分に知り尽くしており、すべてを見ている」。

97 アッラーが導く者こそ、［正しく］導かれた者。そして迷わされた者には、かの御方の他にその庇護者を見つけることはできない。われらは復活の日、彼らを集める。目も見えず、耳も聞こえず、ものも言えずに顔を伏せる、彼らの住まいは地獄である。［炎が］おとろえるたびに、われらは勢いを強めて燃え立たせる。

98 これは、彼らがわれらのしるし［の真理］を拒み、また「それでは私たちが骨となり、砕けて塵（ちり）となったとき、本当に私たちは新たに創造され、よみがえらされるというのか」などと言っていたことへの報い。[30]

99 諸天と大地を創造したアッラーには、彼らと同じようなものも創造できることがわからないのか。かの御方は彼らに、疑う余地のない期限を定めた。しかし不正をなす者は、これ［の真理］を拒む。

100 言いなさい。「もし私の主の慈悲の宝庫をあなたがたが手に入れたとしても、あなたがたは費やすのを怖がって、それを出し惜しみするだろう」。人間はいつも吝嗇（りんしょく）である。[31]

101 われらはムーサーに、九つの明白な証を与えた。どのように彼［ムーサー］が到来したか、イスラエルの

民に尋ねなさい。フィルアウンは彼に言った。「私が見るに、ムーサーよ、あなたは魔法にかけられているのだろう」。[32]

102 彼［ムーサー］は言った。「あなたは、これらの開明を下したのが諸天と大地の主に他ならないことを知っている。そして私が見るに、フィルアウンよ、あなたは滅びるのだろう」。

103 そこで彼［フィルアウン］は、その地から彼らを追い出そうとした。しかしわれらは、彼と、彼と共にいた者とをことごとく溺れさせた。

104 その後に、われらはイスラエルの民に告げた。「かの地で暮らしなさい。それから来世の約束が来るとき、われらはあなたがたを、混じりあう群衆として連れてゆくだろう」。

105 われらはこれ［クルアーン］を、真理をもって下した。それゆえこれは、真理をもって下った。われらがあなたを遣わしたのは、ただ良い報せを伝える者として、また警告する者として他ならない。

106 またわれらは、あなたが時間をかけて人々に読み聞かせられるように、クルアーンを区切っておいた。またわれらは、段階を追ってこれを下した。

107 言いなさい。「これ［クルアーン］を信じようと、あるいは信じまいと。これ以前に知識を与えられている者は、これが読み聞かせられるとき、顔をうつむけてひれ伏す。

108 そして言う。『私たちの主に讃美あれ。本当に、私たちの主の約束は果たされました』」。

109 彼らは泣きながらその顔を伏せる。それは彼らの謙虚さをいや増す。

110 言いなさい。「アッラー、と呼びなさい。慈悲深い御方、と呼びなさい。呼びなさい、どのようにでも。美しい諸々の御名は、すべて御方に属する」。礼拝は騒々しくしてはいけない。声をひそめ過ぎてもいけない。その中間の道を求めなさい。





111 言いなさい。「アッラーに称賛あれ。かの御方は子をもうけず、王権を分かち合う者をもたず、［人間のように］弱さゆえの庇護者も必要としない」。かの御方の栄光を讃えなさい。

1 預言者ヌーフが神に命じられて築いた船があればこそ、大洪水の懲罰から逃れることができたにもかかわらず、陸地において再び偶像を崇拝し、罪ある行いに後戻りしている人々に対して、ヌーフの真実かつ誠実な崇拝の姿勢に目を向けるよう示されている。

2 人間は、怒っているときやうんざりしているとき、あるいは困難に直面したとき、しばしば忍耐を失い、自分自身を含めてあらゆるものを罵り、逃避しようとしがちである。

3 ある者が、別の誰かの負担を肩代わりすることはできないのである。それは不公正というものであり、罪人の説明責任を減ずることになる。無実の者に懲罰を加えても、悪事をはたらいた者の救済にはつながらない。

4 信仰を強めるには、努力と研鑽を要する。道徳的、霊的に善良であるには、善良でありたいと願うだけでは不十分である。どのような困難な状況においても、たゆまず努力を続ける者に神は報いる。

5 地位や財産、健康、容姿その他において、人間は平等ではない。神の恩恵は万人に開かれている。単に地上の益を望むなら、それを得ることはできるし、その結果としてより高い地位を得ることもできるだろう。しかしそれは一時的なものに過ぎず、永遠の生に照らせばほとんど価値はない。そうした人々の来世での地位は、現世での地位ほど高いものとはならない。時間も努力も、主との永遠の生のために注がずに過ごしてきたからである。現世と来世のいずれにおいても、

平等は実現可能ではない。

6 ここで「荒々しい言葉」と訳出した語「ウフ」とは、アラビア語で軽蔑や嫌悪、不快感を示す言葉や発語を意味する。上記の節では霊的な義務と道徳的な義務が、優先順位というよりはむしろ並列させる形で、主の戒めとして告げられている。人間は、神の他には何ひとつ崇拝するよう命じられていない。神以外に、崇拝にふさわしいものは何ひとつないからである。「あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神であるから、わたしを憎むものは、父の罪を子に報いて、三、四代に及ぼす（出エジプト記二〇章五節）」。

7 マディーナの貧しい人々の中には、預言者の財政的な援助にすがって生計を維持している者もいた。しかし時には、預言者にも彼らに与えてやれるものが何もないこともあった。そういう時の預言者は、彼らを助けられるようにと神に祈った。人々を助けることができなかったとき、彼は大いに自らを恥じ、彼らにかける言葉もないまま、視線を落として沈黙したと伝えられる。

8 慈善においては、理想的なバランスを追求すべきである。行いの正しい人々の叱責を招くほどに吝嗇であってはならないし、かといって家族を顧みず、自分に扶養の責任がある人々に不当な処遇を強いるほど過剰になってはならない。

9 イスラーム以前のアラブには、女児殺害の慣習があった。武力闘争が果てしなく続く社会では、息子は強さの源泉であり、娘は弱さの元凶とみなされた。現代においてもこうした考え方は、慣習としてムスリム社会・非ムスリム社会に広く共有されている。まさしく、「日のもとに新しきものなし」である。

10 キサース（報復）に関する法的な権利については、二章一七八節を参照。

11 二二節から三九節で説き明かされている道徳的な法の定めは、人間の内的な衝動と向き合い、自制心の弱い者、助けを必要としている者の注意を促す形で告げられている。唯一の神を認識することに始まり、また認識することに終わるのは、宗教上のすべての論理は、神は絶えずあらゆる場において存在するという理解の反映であり、確認でもある。次の





節からは、神の臨在と統一を認識できない人々に対する神学的な議論に移ってゆく。

12 マッカの住民に対し、彼らの宗教の教義が、彼らの実生活とは相反することを直視するよう促している。彼らは女児を劣ったものとして扱いながら、神には娘たちがいるものと想定していた。

13 多神崇拝が内包する矛盾についての指摘である。超越的な意志は複数ではなく唯一であるからこそ超越的なのである。

14 生物も無生物も、あらゆる被造物は神の栄光を賛美し、神の威力と知恵、善徳の証を立てている。預言者がこの賛美を聞くことができたのは、彼に授けられた奇跡のひとつであろう。かつて彼が教友たちと一緒に過ごしていたときのことである。彼は道にある小石を手に取って耳を傾けた。彼には、手の中の小石が神を讃えるのが聞こえたのである。

15 イスラームは、諸々の啓示の大いなる鎖の最後の環にあたる。必然的に終末についても、それが間違いなく差し迫っていることが強調される。

16 人間が、自らの創造主よりも自分の方が賢いといわんばかりの考えにふけることがあってはならない。主の知識は完全である。悪人としか思えない者に神の慈悲が授けられたり、善人としか思えない者に懲罰が下されたりしたとしても、神の計画に偽りはない。主の使徒たちでさえ、人間のなすべきことを采配したり処罰したりするために遣わされたのではない。ただ主のメッセージを教えるためにのみ遣わされたのである。ましてやただの人間に過ぎない者に、どうして同じ仲間である人間を裁くことができるだろうか。

17 他者を断罪したり、批判したりすべきではないだけではなく、神の預言者たちについても、虚偽の基準を設けて判断すべきではない。

18 様々なしるしや奇跡、前触れは、神が送り届ける警告である。悪行をはたらく者の心に恐れを抱かせ、正しい道へと戻るよう促す。しかし一部には、サムードの民に授けられたらくだのように、どんな奇跡をもってしても和らげることのできない、頑なな心を持った者もいる。しかしこのような人々を地上から一掃しようとすれば、世界全体が破滅するこ

とになってしまう。

19 解釈者たちは「取り囲む」の語を、七二章二八節への言及として解し、また「あなたに見せた情景」とは、本章の始まりで触れられていた、エルサレムから七層の天へ昇った預言者のミゥラージュ（昇天）を指すものとしている。これらの出来事はいわば審問であるか、あるいは試練であった。「忌まれたあの木」とはザックームを指す（三七章六二節から六五節）。地獄に育つその木もまた試練と表現されている（三七章六三節）。どれほどひどく不快な味がするとしても、他に滋養あるものがない以上、地獄の住人たることを定められた者は、その木になる実を食べる他はない。いずれも現世では目にすることはできない。未知のもたらすメッセージを受け入れることは、信仰の領域に属することである。

20 ここで人類の目指すべき真のヒューマニズムが説き明かされている。人間とは、宇宙における神の崇高な代理人なのである。陸と海を自由に往来し、神の下に地上をおさめ、人間の益となるよう神が配した良いものを、押し戴いて楽しむ姿がここに描かれている。これとは対照的に、世俗主義が主張するのは擬似的なヒューマニズムである。すべてのものごとの尺度が人間にあるかのように捉えているが、しかし人間など、元をたどれば単に知恵のついた猿以上の何ものでもなく、放っておけば一生の間、ひたすら快楽を追い求めて過ごすよう運命づけられている。しかしそれは実際には、思考や感性の欠落であり、その終わりにあるのは暗闇でしかない。それはイスラームが教える人間の完成ではない。目を閉ざしていたのでは、人間に授けられている真の栄光についても、その手がかりさえつかめないだろう。

21 ここで「先導者」と訳出したイマームという語は、「書物」と置き換えることも可能である。その場合は人々に授けられた啓示の書物とも、あるいは彼らの行を記録した書物とも考えられる。

22 真の預言者の特徴とは、ほんの少しも妥協しないという点にある。預言者の目的とは人々を惹きつけることではなく、人々の救済だからである。誘惑の持つ力は強大で、分かりやすいものではあるが、預言者たちはそれを克服し、歪みを最小限に留めてメッセージを伝えてゆくという、神から授かった強さを持っている。





23 ムスリムは、イスラームの信仰を共にする兄弟、姉妹たちと一緒に、一日に五回の礼拝をし、崇拝の念を表明することが求められる。特定の時間には特別な祝福があり、そのため、霊的な実践する機会が設けられているのである。とりわけ、明け方の礼拝は静寂に満ちており、揺れ動く雑念から心が自由になるひとときである。この時間帯、天使があたり一面を取り囲み、主に捧げられる献身的な崇拝の行為を穏やかに見守っている。

24 これは特に預言者に対して宛てられた啓示である。彼は常日頃より、義務として定められた五回の礼拝よりも多くの時間を礼拝で過ごしていた。ここで言及されているタハッジュドの礼拝は任意の礼拝であり、義務ではないが一般にも広く実践されている。「アル＝マカーム・アル＝マフムード（称えられるべき位階）」とは、最後の預言者として遣わされたムハンマドが授かった祝福である。審判の日、彼はその位階の名にふさわしく、裁きの場にまっすぐに歩み出るだろう。

25 「真実の入り口（と出口）」とは、次のうちのいずれか、あるいはすべてを指している。（1）死。（2）預言者のマディーナへの遷移。（3）人生における、あらゆる重要な局面の始まりと終わり。

26 信仰する者は、クルアーンには霊的な治癒があることを知っているため、ふさわしい読み方、聞き方をすることができる。しかし真理を拒む者は、やまいに罹っているにもかかわらず薬の効能を認めない人のようにふるまう。その結果、彼らのやまいは身体的にも精神的にも重くなってしまう。本章四五節から四六節も参照。

27 一般に「精霊」と理解される「ジン」とは、「強烈なもの」「方向感覚を狂わせるほどの暗闇」といったニュアンスから、人間の感覚からは隠されているもの、通常なら知覚できないもの、にもかかわらず、具象的か抽象的かにかかわらず客観的な現実として存在するものを指している。クルアーンによれば、「ジン」は灼熱の炎から創られている（一五章二七節）。あるいは煙のない焔から、あるいは七章一二節、三八章七六節にあるとおり、単に「火炎から」創られている。天使たちについては、預言者は「光から創られた」と語っている。ジンは人間の身体的な感覚を超越した存在である。悪魔、あるいは悪魔的な力もジンの範囲に包摂される。

28 マッカ住民がイスラームを拒んだ理由のひとつは、天使が遣わされずただの人間が預言者として遣わされたことである。しかしこうした問いについては、神は預言者に、次の節のように応じるよう告げた。

29 それぞれの民に、彼ら自身の中から使徒が遣わされたのは、その方が理解しやすいだろうからという理由である。未知の何かが華々しく劇的な現象として顕現するといったことを信仰の土台としてはならない。そうした感情を揺さぶるような現象を通したのでは、冷静な判断もしくは道徳的・知的選択の余地がない。神のメッセージと警告を、各自の自由で意識的な選択によって受け入れるのでなければならない。これが唯一、神の目から見て承認されうる信仰であり感謝のあり方である。

30 この「創造」を意味する「ハラカ」というフレーズは、クルアーン全体を通して幾度も繰り返される。死者を復活させる神の力能を否定することは、神の全能を否定するに等しい。前節の「目も見えず、耳も聞こえず、ものも言えず」という言葉に特徴づけられる、神の存在を否定する者そのものである。

31 イスラエルの民についての率直な言及である。彼らは、啓示とは彼らが生まれながらにして独占している権利であるかのように捉えており、彼らと出自の異なる民が、彼らよりも優れた導きを授かるはずがないと考えていた。しかしこうした選民主義的な思想は、今や人類全体に広まっている。

32 「九つの明白な証」の詳細については七章一三三節の注釈を参照。

# 第一八章　アル＝カハフ　洞窟

マッカ啓示

本章では、霊的な洞察力とその伝授の問題が扱われている。迫害を受け、洞窟に逃れた若者たちの物語（一〇節から二七節）にちなんでこの名で呼ばれる。この若者たちは長い間、洞窟の中で眠りについたかのようにして難を逃れたとされ、一部の著述家たちにより「エフェソスの七人の眠りびと」の物語としても知られている。ただしムスリム世界には、ズルカルナインの物語（八三節から九八節）や、ムーサーと共に旅をした「同伴者」の物語は、ムハンマドの預言者としての資質を試そうと、マディーナのラビたちが偶像を奉ずる者たちに命じて、預言者に質問させたある問いに対し、どう答えるかを教えるために啓示されたものであるとする堅固な伝統も残されている。

本章は、マッカ時代の中頃に啓示された。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 アッラーに称賛あれ、そのしもべに啓典を下した御方。その中にいささかの歪みもなく、

2 まっすぐにして、御自らの厳重な威を警告するもの。信仰者として正しい行いをする者には、すぐれた報酬があるとの良い報せを伝えるために。





3 彼らは、永遠にその中で過ごすだろう。

4 また、「アッラーは御子をもうけたもう」などと言う者にも警告するために。1

5 彼らも、彼らの祖先も、これについて何の知識もない。彼らの口から出る言葉こそ大それたもの。彼らの話すことは、嘘いつわりに他ならない。2

6 ［ムハンマドよ、］たとえ彼らがこの出来事を信じないからといって、彼らの後を追いかけていては、嘆きのためにその身を滅ぼしてしまうだろう。

7 本当に地上にあるものは、われらがその飾りとしておいたもの。また彼ら［人間］のうち、誰の行いがもっともすぐれているかを試すためでもある。

8 そして本当にわれらは、そこにあるすべてのものを、やがて不毛の砂地にするだろう。

9 あなたは、洞窟の仲間とラキームのことを、われらのしるしのうち、ひとつの驚異であると思うか。3

10 若者たちが、洞窟に難を逃れたときのこと［を思いなさい］。彼らは言った。「主よ、あなたの御許から私たちに慈悲を与えてください。そして私たちが真っ当にふるまえるよう取り計らってください」。

11 われらは、洞窟の中で何年かのあいだ、彼らの耳を塞いだ。4

12 そののちわれらは、二つのうちどちらの側が彼らの過ごした時間を正しく計れるかを知るために、彼らを起き上がらせた。

13 われらはあなたに、真理をもって彼らの物語を語ろう。彼らは主を信じる若者であった。それゆえわれらは、彼らへの導きをさらに深めた。

14 われらは彼らの心を強めた。立ち上がったとき、彼らは言った。「私たちの主は諸天と大地の主。私たちはこの御方をさし置いて他の何ものをも呼び求めない。さもないと私たちは、途方も無いことを言った

ことになってしまう。

15 これら私たちの民は、この御方をさし置いて他の神々を選んだ。どうして彼らは、そのことについての明らかな権威をもってこないのか。アッラーについて嘘いつわりをねつ造するよりも不正な者があるだろうか」。

16 「あなたがたは彼らからも、彼らの仕えるアッラー以外のものからも身を引いて、洞窟に難を逃れなさい。そのときあなたがたの主は、あなたがたの上に慈悲を広げ、ことが和らぐよう取り計らってくれるだろう」。[5]

17 彼らが洞窟の中の空き地にいるあいだは、太陽が、昇るときには彼らの洞窟の右へ寄り、また沈むときには左へ寄るのが見えたことだろう。それはアッラーの御しるしであった。アッラーが導く者こそ、「正しく」導かれた者。しかし迷わされた者には、師となる庇護者も見つけることはできない。[6]

18 あなたは彼らが目を覚ましていると思ったことだろう。彼らは眠っていた。われらは彼らを右に、また左に寝返りさせた。また彼らの犬は、「洞窟の」入り口で両の前足を伸ばしていた。もしあなたが彼らを見たなら、あなたはきっと背を向けて、恐怖のあまり逃げ出したことだろう。

19 このようなところに、われらは彼らを起き上がらせ、互いに尋ねさせた。彼らのうちひとりが言った。「どれくらいのあいだ、あなたがたはここで過ごしたのだろうか」。彼らは言った。「一日か、あるいは数刻か」。また彼らはこうも言った。「どれくらいのあいだを過ごしたかについては、あなたがたの主がもっともよく知っている。誰かひとりに、この銀貨をもたせて市街に行かせ、そこでもっとも清らかな食べものを見つけさせ、あなたがたに糧を買ってこさせよう。その者は、注意深くふるまわなくてはならない。あなたがたについて、誰にも気づかせてはならない。





20 もし彼らがあなたがたを見つけたなら、彼らはあなたがたを石打にするか、あるいは彼らの宗旨に後戻りさせるだろう。そうなればあなたがたは、きっと永遠に栄えないだろう」。

21 このようにして、われらは彼らのことを「市街の住民に」知らしめた。アッラーの約束は真理であり、かの時については疑う余地もないことを知らしめるためにも。彼ら「市街の住民」は、彼ら「洞窟の若者」のことについて互いに争った。彼らは言った。「彼らの上に、建てものを建てよう。彼らについては、主がもっともよく知っている」。彼らをとりしきる者が言った。「彼らの上には、マスジドを選ぶべきだろう」。[7]

22 誰かが言う。「彼ら「洞窟の若者」は三人だった。四番めは犬だ」。また誰かが、目には見えないものを憶測だけで言う。「彼らは五人だった。六番めは犬だ」。また誰かが言う。「彼らは七人だった。八番めは犬だ」。「ムハンマドよ、」言いなさい。「彼らの人数については、私の主がもっともよく知っている。ごくわずかを除いて、彼らのことを知る者はいない」。それゆえ彼らについては、外側のことの他は論じてはならない。また、彼ら「洞窟の若者」のことについては、誰にも結論を求めてはならない。[8]

23 なにごとについても、「私は、明日それをやり遂げよう」などと言ってはならない。

24 「もしアッラーが望むなら」、と言い添えなさい。忘れたときは、あなたの主を想い起こして言いなさい。「おそらく主は、これよりもより真っ当なところへ私を導いてくれるだろう」。

25 彼らは洞窟で三百年と、加えて九年を過ごした。[9]

26 言いなさい。「彼らがどれだけを過ごしたかについては、アッラーがもっともよく知っている。諸天と大地の、目には見えないものはこの御方に属する。何とすべてを見ることか、何とすべてを聞くことか」。彼らには、この御方の他に何の庇護者もなく、またこの御方は判断を下すことを、他の何ものとも分かち合わない。

27 あなたに啓示された、主の啓典を読み聞かせなさい。何ものにもその御言葉を変えることはできない。またあなたにはこの御方の他に、避難所を見つけることもできない。

28 朝も晩も主に呼びかけ、主の御顔を求める者たちと共に、あなた自身もよく耐えていなさい。現世の生の飾りを求めて、彼らからあなたの目をそらしてはならない。またわれらによって、われらを想い起こすことに無関心にさせられたため、欲望に従い、すべきことを怠っている者に従ってはならない。[10]

29 言いなさい。「真理はあなたがたの主から来る。誰であれ望むままに信じ、また誰であれ望むままに拒め」。本当にわれらは、不正をなす者のために業火を用意した。その塀は彼らを取り囲む。彼らが助けを求めると、溶けた銅のような熱湯を注がれてその顔を焼かれる。何と悪い飲みものだろうか、何と悪い寝所だろうか。[11]

30 本当に、信じて正しい行いをする者には、われらは、その善良な行いの報酬を決して無為にしない。[12]

31 これらの者には永遠の園がある。川が彼らの足元を流れる。その中で黄金の腕輪を飾り、上等の絹や錦の緑色の着衣を身にまとい、長椅子にくつろぐ。何とすばらしい報奨だろうか、何とすぐれた寝所だろうか。

32 彼らに、二人の者の例えを示しなさい。われらはそのひとりに二つのぶどうの園をもたせ、それをなつめやしで囲み、そのあいだを［作物の］畑とした。

33 二つの園はみのりをもたらし、不当なことは何ひとつなかった。またわれらは、それらのあいだに川を流れさせた。

34 この者には果実が［豊かに］あり、それでその仲間に話しかけて言った。「私はあなたより財も多く、また［一族の］人の数でもまさっている」。





35 こうして自分自身に不正をなしながら自分の園に入ると、こう言った。「私は、これがいつかは滅び去るものとは思わない。

36 また、かの［審判の］時が現れるとも思わない。たとえ私が主に連れ戻されたとしても、きっとこれの代わりとなるより良いものが見つかるだろう」。

37 その仲間は、会話しながらこう言った。「あなたは拒むのか、あなたを土から創造し、それから精のひとしずくにし、それから人間の姿にした御方のことを。[13]

38 しかし私には、その御方こそアッラー、私の主。私は、何ものをも主と同列に連ねることはしない。

39 どうしてあなたは、あなたの園に入るとき、『アッラーの御心のままに。アッラーによる他は、どのような力もない』と言わないのか。たとえあなたが、財と子どもにおいて私の方が劣ると見なしているとしても、

40 おそらく主は、あなたの園よりも良いものを私に与えるかもしれない。また空から［あなたの園に］一撃を送りつけ、平らかな砂地にするかもしれない。[14]

41 あるいは水が［地中に］沈んで、探し求めることもできなくなるかもしれない」。

42 はたして、その者の果実は［一撃に］囲い込まれてしまった。それのために自分がどれほど費やしてきたことか、棚もろともに崩れ落ちるのを見ながら、手を握りしめて［悔しがり］、「私が、何ものをも主と同列に連ねずにいればよかったのに」。

43 アッラーの他に自分を助けてくれる加勢の者もおらず、自分を守ることもできなかった。

44 このようなとき、庇護はただアッラー、真理のみにある。もっとも良い報奨をもたらす御方、もっとも良い結末をもたらす御方。

45 彼らに、例えを示しなさい。現世の生とは、われらが空から降らせる雨のようなもの。地上の草木はそれを吸い上げるが、やがて枯れ枝になり、風に吹かれてまき散らされる。アッラーは、ありとあらゆるものごとにおいて全能である。

46 財も子どもも、現世の生の飾りである。しかし永続する正しい行いこそ、あなたの主の御許においてその報奨はもっとも良く、また希望［を託すもの］としてもっとも良い。[15]

47 われらが山を動かすその日、あなたは大地があらわとなるのを見るだろう。われらは彼らを一斉に集め、誰ひとりとして残さない。[16]

48 彼らは、列となってあなたの主の御前に出される。「われらが最初にあなたがたを創造したときのように、あなたがたは、今まさしくわれらの許へ来た。いいや、あなたがたは、われらがあなたがたとの期日を定めるはずがないと主張していたのだが」。

49 そして［行いを記録した］書物が置かれる。するとその中にあるものについて、罪ある者が畏れかしこまるのを、あなたがたは見るだろう。彼らは言う。「ああ、何と惨めなことだろう。これは何という書物か。小さなことも大きなことも、ひとつ残らず書きとどめてあるとは」。彼らは、自分たちが行ってきたことが目の前にあるのを見る。そしてあなたの主は、誰のことも不当に扱わない。

50 われらが天使たちにこう告げたときのこと［を思いなさい］。「アーダムの前にひれ伏しなさい」。彼らはひれ伏した、イブリースを除いては。彼はジンのひとりで、主の命令に背いた。あなたがたはわれをさし置いて、彼とその子孫を味方に選ぼうというのか、あなたがたの敵であるというのに。不正をなす者にとり、何と悪い引き換えだろうか。[17]

51 われは諸天と大地の創造にも、彼ら自身の創造にも、彼らを立ち会わせなかった。われは迷わせる者を、［手





伝わせるための］腕に選びはしない。

52 かの御方が、「あなたがたが主張していた、われの『同輩たち』を呼びなさい」と告げるその日。彼らが呼んでも、それらは応じないだろう。われらは彼らのあいだに、破滅の谷を設けるだろう。

53 罪を犯した者たちは業火を見て、自分がその中に転げ落ちるのを察する。彼らには、それを免れる手立てを見出すこともできない。

54 われらはすでにこのクルアーンの中で、人々にすべての例えを用いて解き明かしておいた。しかし人間とは、言い争うことにかけてはもっとも多いもの。

55 導きがもたらされたとき、人々が信じ、主の赦しを願うのを妨げるものは何もない。大昔の者たちの先例が、自分たちにももたらされるか、あるいは懲罰が科されるのでもない限りは。

56 われらが諸々の使者を遣わすのは、良い報せを伝える者として、また警告者として他ならない。［真理を］拒む者たちは真理を破ろうとして、虚偽をもって言い争う。そしてわれらのしるしや警告を、笑いごととして受け取る。

57 主の御しるしに憶えがありながら、それらから背き去り、先に自分の手で送り出してきたものを忘れるよりも不正な者があるだろうか。われらは彼らの心の上に覆いをかけ、彼らには分からないようにし、また耳も鈍くさせた。たとえあなたが導きへと呼び招いても、彼らは決して導かれないだろう。

58 あなたの主はもっともよく赦す御方、慈悲の所有者。もし、かの御方が、彼らの得てきたことのために彼らを捕えようとするなら、たちまちにして懲罰を科していただろう。いいや、彼らには定めの期日があり、それ以外に逃れる先を見つけることはできない。

59 不正をなしていたために、われらに滅ぼされた諸々の町について。彼らを滅ぼすにも、われらは定めの

期日を設けていた。

60 ムーサーが従者にこう言ったときのこと［を思いなさい］。「私は、二つの海が出会うところにたどり着くまでは、どれだけの歳月がかかろうと［旅を］止めることはないだろう」。[18]

61 しかし二つ［の海］が出会うところにたどり着いたとき、彼らが自分たちの魚のことを忘れていたため、それは海へとすべるように去っていった。[19]

62 彼らがそこを通り過ぎると、彼は従者に言った。「私たちの朝食を出しなさい。本当にこの旅のために、私たちは疲れ果てた」。

63 彼は言った。「見ましたか。私たちが岩のところで休んだとき、私は魚のことを忘れていました。憶えておくべきことを私に忘れさせたのは悪魔に違いありません。不思議なことに、それは海の方へと去ってしまいました」。[20]

64 彼［ムーサー］は言った。「それこそ、私たちが探し求めていたものだ」。それで彼らは、自分たちの足跡をたどり、引き返していった。

65 それから彼らは、われらのしもべのひとりを見つけた。われらの許から慈悲を与えられ、われらの許でじかに知識を教えられた者を。[21]

66 ムーサーはその者に言った。「あなたにつき従ってもよいでしょうか。あなたが教わっている正しいことを、私も教わることができるように」。

67 その者は言った。「あなたには、私と共に耐えることは決してできないだろう。

68 自分には把握しえないことに、どうしてあなたが耐えられるだろうか」。[22]

69 彼［ムーサー］は言った。「アッラーの御心なら、私がよく耐えることが分かるでしょう。あなたの命じ





るどのようなことにも、決して逆らいません」。

70 その者は言った。「もしあなたが私につき従うなら、私の方から言い及ぶまでは、何ごとについても尋ねてはならない」。

71 そこで二人は出立し、それから舟に乗り込むと、彼はそれ［の底］に穴を開けた。彼［ムーサー］は言った。「穴を開けて、［舟に乗る］人を溺れさせようというのですか。本当にあなたは、大変なことをしでかしたものです」。

72 その者は言った。「だから私が言ったではないか。あなたには、私と共に耐えることは決してできない」。

73 彼［ムーサー］は言った。「忘れていました、私を責めないでください。ものごとを難しくしないでください」。

74 そこで二人は出立し、それからひとりの少年に出会うと、彼はこれを殺してしまった。彼［ムーサー］は言った。「誰かを殺したのでもない清らかな者を殺したのですか。本当にあなたは、ひどいことをしでかしたものです」。

75 その者は言った。「だから私が言ったではないか。あなたには、私と共に耐えることは決してできない」。

76 彼［ムーサー］は言った。「この後になって、もし私があなたに何かを尋ねたなら、私をあなたの道連れとはしないでください。あなたはすでに［私を置いていくのに十分な］言い分を私から受け取っています」。

77 そこで二人は出立し、ある町の住民のところまで来ると、彼らは住民に食べものを求めた。しかし彼らは、二人を客人としてもてなすのを断った。それから彼らは、そこに壊れかけた塀を見つけ、その者がそれを直した。彼［ムーサー］は言った。「もしあなたが望めば、これに対する報酬を取ることもできたでしょう」。

78 その者は言った。「これが、私とあなたとの別れとなる。［しかしその前に、］あなたが耐えられなかったことの解釈を報せておこう。
79 舟について。あれは海で働いている貧しい者たちのものであった。私がそれに傷をつけておこうとしたのは、彼らの背後に、すべての舟を力ずくで奪おうとする王がいたため。
80 少年について。彼の両親は信仰者で、私たちは、彼がその両親を逸脱と［真理の］拒否に追いやるのを怖れた。
81 私たちは、主が彼らのために、彼よりも清らかで慈悲に近しい子ととり替えるよう望んだのである。
82 塀について。あれはこの町の、二人の孤児の少年のものである。その下には彼らの財宝が埋まっており、また彼らの父は正しい者であった。それゆえあなたの主は、彼らが十分に成長してから、彼らの財宝が主の慈悲として掘り出されることを望んだ。私は、自分の裁量でことを行っていたのではない。これが、あなたが耐えられなかったことの解釈である」。[23]
83 彼らはあなたに、ズルカルナインについて尋ねるだろう。言いなさい。「私はあなたがたに、彼についての言及を読み聞かせよう」。[24]
84 われらは地上に彼の権勢を打ち立ててやり、ありとあらゆるものごと［を実現するため］の道を与えた。
85 そのようにして、彼はある道をたどった。
86 やがて太陽の沈むところにたどり着いたとき、彼は、それが濁った泥の泉に沈むのを見出し、またそのほとりに民がいるのを見つけた。われらは告げた。「ズルカルナインよ。あなたには彼らを罰することも、あるいは彼らに善事をなすこともできる」。[25]
87 彼は言った。「誰であれ不正をなす者なら、私たちは罰するでしょう。そののち主へと戻され、かの御方





は恐るべき懲罰をもって罰するでしょう。
88 しかし、誰であれ信じて正しい行いをする者なら、その者にはもっともすぐれた報いがあるでしょう。私たちはその者に話しかけ、たやすいことから命じるようにしましょう」。[26]
89 それから、彼は［また別の］ある道をたどった。
90 やがて太陽の昇るところにたどり着いたとき、彼は、それがある民の上に昇り、またわれらがそれに対し、彼らのための何の日よけも設けていないのを見出した。
91 このような通り。われらは、彼の持てるものを［すべて］網羅している。[27]
92 それから、彼は［また別の］ある道をたどった。
93 やがて二つの山壁のあいだにたどり着いたとき、彼はそのそばに、［彼の］言っていることをほとんど理解しない民がいるのを見つけた。[28]
94 彼らは言った。「ズルカルナインよ。ヤージュージュとマージュージュがこの地に退廃を広めています。あなたに貢ぎ物を納めますから、私たちと彼らとのあいだに防壁を築いてくれますか」。
95 彼は言った。「［貢ぎ物よりも、］主が私のために打ち立ててくれたものの方が、よりすぐれている。しかし、あなたがたは労力をもって私を手助けしなさい。私は、あなたがたと彼らのあいだに堤防を造ろう。
96 鉄の塊をもって来なさい」。やがて二つの山壁のあいだを平らかにしたとき、彼は言った。「吹きなさい」。やがてそれが火炎となったとき、彼は言った。「この上から注ぐ瀝青をもって来なさい」。
97 こうして彼ら「ヤージュージュとマージュージュ」は、それを乗り越えることも、掘り起こすこともできなくなった。
98 彼は言った。「これは私の主からの慈悲。しかし、主の約束が到来するとき、この御方はこれを塵にする

だろう。主の約束は、常に真理である」。[29]

99 そしてその日、われらは彼らが、互いに波となって押し寄せ合うままにさせる。喇叭（らっぱ）が吹かれ、われらは彼らをことごとく寄せ集める。

100 その日、われらは［真理を］拒む者の眼前に地獄を出現させる。

101 われの戒（いまし）めから目を覆われ、耳を傾けることもできずにいた者たち。

102 ［真理を］拒む者たちは、われをさし置いてわれのしもべを庇護者にすることができると思っているのか。［真理を］拒む者のもてなしのために、われらは地獄を用意してある。

103 言いなさい。「行いにおいて最大の敗者とは誰のことか、あなたがたに報（しら）せようか。

104 それは、自分ではうまくやっていると思っていても、現世の生での努力がすべて誤った方へ失われる者たちのこと」。[30]

105 これらの者は主の御しるしについても、この御方と会することについても［真理を］拒む者たち。彼らの行いは、全くの無に帰される。われらは復活の日、彼らには、何の重みもないものとみなす。

106 彼らの報いとはそのようなもの、すなわち地獄である。彼らが拒否し、またわれのしるしと、われの使徒たちを笑いごとにしていたために。

107 信じて正しい行いをする者たちには、楽園のフィルダウスがそのもてなしとなる。

108 永遠に、その中に住まうだろう。彼らは、そこからどこへも移りたがらないだろう。

109 言いなさい。「たとえ海が主の御言葉のための墨であったとしても、主の御言葉が尽きないうちに、海の方が尽きてしまうだろう」。たとえわれらがそれと同じものを、さらに加えてもって来たとしても。[31]

110 言いなさい。「私は、あなたがたと同じ人間のひとりに過ぎない。ただ私は、あなたがたの神とは唯一であると啓示されている。誰であれ主と会することを待ち望む者は、正しい行いをしなさい。そして主に仕えるのに、何ものをもその同列に連ねてはならない」。





1 「アッラーは御子をもうけたもう」。次の三点のうちいずれか、あるいはすべてが意図されているものと思われる。（1）ユダヤ教徒のある一派は、ウザイルを「神の息子」と呼びならわしていた。（2）キリスト者の多くは、イーサーを「神の息子」と呼びならわしていた。（3）偶像を奉ずるマッカ住民は、天使たちを「神の娘たち」と呼びならわしていた。

2 神が子を「もうける」とは、肩を並べる配偶を持たず自存する神の諸々（もろもろ）の崇高な属性との一貫性もなく、何らかの根拠をもって説明することもできない、単なる「言葉遊び」の域を出ないことである。

3 「ラキーム」とは、洞窟のある谷の名であるとも、あるいは洞窟の仲間の持っていた「碑版（ひばん）」を指すとも、また洞窟の仲間の連れていた犬の名であるとも伝えられている（犬の名については、ラキームとは別の名も伝えられている）。

4 「われらは、（……）彼らの耳を塞いだ」とは、洞窟の人々を外界から遮断した、とも解せる。古典的な解釈者たちは、上述の表現を、「神は彼らの耳をヴェイルで覆った」という意味にとらえている。

5 「和らぐ」とは、「何であれ益となること」を意味する。この文脈では、彼らが現世を放棄したこと（彼らは自分たちの信仰ゆえに迫害され、そのため自ら完全な隔離の状態に退いたのである）に対し、神が授けた霊的なやすらぎとなぐさめを指している。

6 日差しは洞窟の中を暖めはしたが、そこに眠る若者たちが、直接に太陽にさらされることはなかった。

7 「このようにして、われらは彼らのことを［市街の住民に］知らしめた」。これは、眠りびとの一人を洞窟から送り出して市街へ行かせたことを指す。彼らのうち一人が町へ食べるものを買いに出かけ、大昔の貨幣で代金を支払うと、町の人々は驚いて、今や唯一の神の教えに従って統治していた王のもとへ彼を連れていったといわれる。古めかしい衣装や彼の姿かたち、話す言葉や、今となっては使われていない古い貨幣に人々は興味津々となり、若者は彼らの身の上に起きた話を語った。王と町の人々は洞窟へ行き、彼の言葉が本当であったことを知り、神の力と優れた采配に感嘆を禁じ得なかった。町の人々は、この出来事の持つ重要な意味については考えが及ばず、事細かな枝葉末節について論じ合うことに興じた。どのような礼拝所がふさわしいかが話し合われ、最終的にマスジドが建立されるに至ったものの、クルアーンを通して説き明かされるまでは、本来の意義については忘れ去られたままだったのである。

8 彼らに与えられたしるしの偉大な価値にもかかわらず、町の人々も、後世の人々も、あらましの細部について意見を異にし、そのたびに論争となった。その地に建立すべき礼拝所のことや、あるいは眠りびとの人数などについて論じ合った。しかしこれらはいずれも瑣末なことである。

9 洞窟の眠りびとたちは三百と九年の間、そこにとどまっていたことになる。これが太陰暦を意味するなら、太陽暦に換算して三世紀ということになる。しかし繰り返しになるが、こうした議論には深い意味はない。

10 この節では、霊的なメソッドにおける重要な原則が定められている。（1）探求者は、主への祈りを欠かさず実践する正しい者たちとの交わりを保たねばならない。彼らの存在によって、自らを向上させるためである。（2）現世の享楽に気を取られてはならない。神と富の両方に、同時に仕えることはできない。（3）神を忘れた者の意思に従ってはならない。「本意ではない」としつつ黙って従うことは、神を忘れた者の状態を黙認し、その影響を認めてしまうことになる。（4）神の実在を忘れた者が従うのは自分自身の気まぐれである。見過ごせば見過ごすほど、その状態が強化さ





れてゆく。

11 限られた自由意志の範囲内での選択には、それに応じた個人的な責任が伴う。人間は、真理を選択するよう促されているが、それを拒めば地獄の業火の中に用意された懲罰という恐ろしい結末を自分ひとりで引き受けなくてはならない。

12 クルアーンの多くの箇所で繰り返し告げられているとおり、信仰して善行にはげむ人は必ず報われるだろう。正しい者の行いは、何ひとつ無為にされることはない。彼らの罪は神の慈悲によって覆い隠されるだろう。

13 富を誇り、自分の命令に従う者の数を誇っている者が、やがて来世を否定するようになっていく。この節では、その友人が、精液のひとしずくから人間を創造した神には、人間を望みのままに再び別のものに創造しなおすことも必ずできるであろうと忠告している。

14 ここでは「一撃」としてあるが、一般にはこの「ヒサーブ」という語は「清算」と解釈され、あらゆる懲罰を含むものとして用いられる。一部の解釈者たちは、この語を地震という意味で解している。地震は地下の水脈を変え、泥土や砂で河口をふさぎ、広い範囲にわたって荒廃をもたらすからである。

15 神の目から見て、善行には永続的な価値がある。善行とは、神の恩寵によって人間の内側から引き出されるものであり、それ自体が信仰に対する報奨である。また善行とは、来世において授かる最も気高い報奨に対する希望ともなるものである。善行とは、永遠に残る果実である。「アル＝バーキヤート・アッ＝サーリハート（永続する正しい行い）」という言葉は、クルアーン全体では上記の節と一九章七六節の二か所に現れる。

16 「山を動かす」とは、審判の日には、今ある地上の姿は跡形もなく消え去ることを意味している。

17 現世の生活を魅力的にみせるものが悪魔の欺瞞と結びつくとき、人間はすべての道徳的な良心を捨て、自ら破滅を招いてしまう。

18 霊性と自発的な独創性を養う薫陶の物語の始まりに、「ふたつの海」が現れる。この「ふたつの海」の意味は、必然的

にあいまいとして不明瞭であるが、一般には、二種類の大いなる知識の流れを指すものと解釈されている。知識とは、ムーサーに代表される知識（外的な法の知識）と、彼の旅の同伴者となるヒドルに代表される知識（内的な奥義、暗喩によってのみ示されるリアリティについての直接的・経験的な理解）の、ふたつが組み合わさって初めて完成する。解釈者のうち、これを地理的な側面からとらえる者は、「ふたつの海」が意味しているのは黒海とカスピ海、あるいはスーダンに位置する青ナイル川と白ナイル川であるという見解を示している。

19 ムーサーが探し求めていたのは、彼の導師となるヒドルであった。身体の必要を満たすための糧として持っていた魚の喪失が、霊的な必要を満たす導師の登場を暗示している。

20 新たな知識への旅が進むにつれ、探求者の疲労感も増えてゆく。特に探求者自身が、少しでも気が進まないとなればなおさらである。従者は魚が生き返り、逃げていったのを目撃していた。これは確かに忘れがたい出来事であったはずだが、それでも従者はその一件を、主人に告げるのを「忘れていた」のである。このように、人間を迷わせるのは習慣である。新たな知識は、常に罪深い惰性ゆえに見過ごされるか、失われる可能性がある。自らの歩みを振り返り、たどった道を再訪し、犯した過ちを自覚し、再点検することが重要となる。

21 霊的な導師とは、神の慈悲を受け取る者であると同時に、それを分け与える者である。威厳に満ちていながら、その根源にあるのは愛そのものである。また、神の御前からじかに知識を賜った者であると同時に、それを分け与える者でもある。それこそは、ムーサーが探し求めていたものであった。こうして伝授の求めと、求めに応じた試練が開始された。

22 ムーサーは法については精通していたが、真に求めていたのは人知を超越した霊知の成就であった。しかしこの時点では、ムーサーはそのことに気づいていない。自分が何を知りたいと望むのか、自分では知る由も無いという、探求者の抱える古典的なパラドックスである。

23 子どもたちの父親は、町の邪悪な住人たちの不誠実さを恐れて、自分の遺産を埋めて隠していた。そうすれば子どもたちが年頃になったとき、自分たちで掘り起こせるようそうしたのである。ヒドルが［壁を］修繕せずにいれば、壁は崩れ落ち、隠していた遺産も奪われていたことだろう。ムーサーに課された三つの試練の目的は、ムーサーが精通している法の限界を示すことにある。私たちは皆、法の制約を課されてはいるが、秘教的な知恵が、時としてその制約を超越した視野を提供してくれるということを認識しておかねばならない。

24 「ズルカルナイン」すなわち「二つの角の王（双角王）」が誰であるのか、ここでの寓話の文脈においてはさほど重要ではない。時としてアレクサンダー大王と同一視されることもあるが、ここでの彼は司祭の王、すなわち神の代理人であり、現世を支配すると同時に、来世では栄誉ある位階に就くだろう者として描かれている。彼の三つの遠征についての記述は、いずれも王として、あるいは権力を所有するということに関する優れた倫理観の具現化として表されている。これをもって、霊的な探求が開く可能性の扉について、次の四つの特徴を示した本章の円環が完成される。（1）一切を神に委ね、神のみに援助を求めること。（2）自我の形成ないし確立。自我なくしては自我の消滅もあり得ないからである。（3）外的な法と内的なタサウウフ道の遭遇。（4）神的な王権の栄光。

25 中には、この場所をアレクサンダー大王の支配地域のうち最も西方であるとする者もいる。マケドニアのオフリド湖である。ここには、石灰岩の山塊から湧き出す乳白色の泉がある。

26 司祭の王は、どれほど権力があろうと穏やかであるべきであり、常に自らの上位に最高の裁きの主がいることを自覚していなければならない。これが、第一のエピソードの教訓である。

27 神の代理者は、ありとあらゆる種類の人の存在を認める。未知の習慣に出会ったとしても、それが邪悪と直接に関わっていない限り、手出しや口出しをすることはしない。

28 彼の目の前に現れた第三の種類の人々は、第二の種類の人々よりも高度な技術を有していた。彼らは金属を加工する技術に優れていたのである。しかし、彼らは定期的にヤージュージュとマージュージュ（ゴグとマゴグ）と呼ばれる野蛮

な部族の攻撃を受けていた。彼らは、この部族が襲撃に用いる山あいの道の閉鎖を求め、その代償として貢ぎ物を捧げる心づもりでいた。おそらく［現代の］ブハラ近郊にある、トランスオクサニアとモンゴルの間にそびえ立つ山壁を指すものと思われる。彼はいかなる貢ぎ物も受け取らなかった。

29
この第三のエピソードの最後に、ズルカルナインは、彼を頼るのではなく、彼の主をこそ讃えるよう主張している。彼は、自分は主の名において統治している代理者に過ぎないことを告げたのである。彼は自分自身のみならず、人々の謙虚さをも高めた。心の清浄さのみが鍵となる復活の日、人間が自らの善行に頼ろうとすれば、それらはすべて塵となって舞い散ってしまうことだろう。この点を重要な気づきとして取り上げた本章は、その冒頭の節を思い起こさせる、終末の日に関する簡潔な通告をもって締めくくられる。

30
あちこちに危害をまき散らしつつ、自分たちでは善徳を行っているものと信じて一生を過ごす、独善的で自己愛の非常に強い人々が存在する。そうしたある種の悪意とさえ呼べる行為をはたらく人々が、この例に当てはまる。

31
啓典を通して授けられる説話は、驚くほど広い範囲に及ぶように思えたとしても、それは大海のひとしずくにすら満たない。神の諸々の属性、知恵と知識は無限である。

# 第一九章　マルヤム

マッカ啓示

本章は、一六節以降のマルヤム（聖母マリア）についての言及にちなんでこの名で呼ばれている。ヒジュラ暦開始の九年前、マッカの異教の民クライシュ族による迫害の増加により、最初の移住者たちがエチオピアへ出発する前に啓示された。移住者たちはエチオピアを統治するキリスト者の王の前で、ザカリーヤーとマルヤムに関する聖句を暗誦した。王はこれに深く心を動かされ、彼らを追放するようにとの、クライシュ族からの求めを退けた。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 カーフ、ハー、ヤー、アイン、サード。
2 あなたの主から、そのしもベザカリーヤーへの慈悲についての言及。
3 彼がひそかな祈りをもって、その主に呼びかけたときのこと［を思いなさい］。
4 彼は言った。「主よ。私の骨はおとろえ、頭は白いものだらけになりました。主よ。私は、あなたへの祈
りによって不幸になったことは決してありません。
5 私は、私が後に残してゆく身寄りの者たちのことを案じます。私の妻は身ごもることのできる体ではあ





りません。ですからあなたの御許から、跡取りを授けてください、
6 私の跡を継ぎ、またヤアクーブの一族を継ぐ者を。そして主よ、その者をあなたの喜びにかなう者にし
てください」。
7 「ザカリーヤーよ。本当にわれらはあなたに、男児［の誕生］という良い報せを伝えよう。その名はヤフヤー。
それはわれらが、以前には誰にも付けたことのない名である」。
8 彼［ザカリーヤー］は言った。「主よ。どうして私に男の子ができるでしょう。妻は身ごもることはできず、
私もすでに年老いているのに」。
9 かの御方は告げた。「その通り。［しかし］あなたの主は告げる、『それは、われにとりたやすいこと。わ
れはかつて、何ものでもなかったあなたをも創造している』と」。
10 彼［ザカリーヤー］は言った。「主よ。御しるしをあらしめてください」。かの御方は告げた。「三夜にわ
たり、あなたはすこやかでありながら、人々と話すことができなくなるだろう」。
11 それから、彼［ザカリーヤー］は聖所から出てきて、民に合図をした。「朝も晩も、［主を］讃美しなさい」。
12 「ヤフヤーよ。啓典をしっかりと受け取りなさい」。われらは、幼い彼に知恵を与えた、
13 またわれらの許の慈しみと純粋さとを。彼は畏れる者であり、
14 また両親をいたわった。彼は傲慢ではなく、逆らうこともなかった。
15 それゆえ平安あれ、彼の生まれた日に、彼の召された日に。そして彼が、生きてよみがえらされる日に。[1]
16 また、啓典の中でマルヤム［の物語］に言及しなさい。彼女がその一族から、東に面した場所へ身を引い
たときのこと。[2]
17 彼女［マルヤム］は、彼らから［自分を］隔てるための幕をはった。それからわれらは、彼女に、われら

からの天使［ジブリール］を遣わした。彼は均整のとれたひとりの男の姿をとって彼女の前に現れた。

18 彼女は言った。「あなたに対し、慈愛あまねく御方の加護を求めます。［近づかないでください、］あなたが畏れる者なら」。

19 彼［ジブリール］は言った。「私はあなたに清らかな男児を授けるための、あなたの主からの使者に過ぎない」。

20 彼女は言った。「どうして私に男児ができるでしょうか。誰ひとりとして私に触れておらず、また私は決して不貞ではありません」。

21 彼は言った。「その通り。［しかし］あなたの主は告げる、『それは、われにとりたやすいこと。われらはその子を人々へのしるしとし、またわれらからの慈悲としよう。そしてこのことは、［すでに］定められている』と」。

22 こうして彼女は［子を］身ごもり、遠く離れた場所へ身を引いた。

23 やがて陣痛が［始まり］、彼女をなつめやしの幹へと追い立てた。彼女は言った。「こうなる前に私が死んで、忘れ去られてしまえたらよかったのに」。

24 すると下の方から彼女を呼ぶ声があった。「嘆くことはない。あなたの主は、あなたの足元に小川をもうけた。

25 なつめやしの幹を、あなたの方へ揺らしなさい。熟したなつめやしの実が、あなたのそばに落ちてくるだろう。

26 それを食べ、飲み、なぐさめとしなさい。もし誰か人を見たなら、『私は慈愛あまねく御方に［沈黙の］斎戒を誓いました。ですから今日はどの人とも話しません』と言いなさい」。





27 それから、［ついに］彼女はその子を抱いて彼女の民のところへやって来た。彼らは言った。「マルヤムよ。本当にあなたは、驚くべきことをしでかしたものだ。

28 ハールーンの姉妹よ。あなたの父は悪人ではなかったし、あなたの母も不貞ではなかったのに」。[3]

29 そこで彼女は、その子を指さした。しかし彼らは言った。「どうしてゆりかごの中の幼な子と話せるだろうか」。

30 ［そのとき、ゆりかごの中の］その子が言った。「私はアッラーのしもべなのです。かの御方は私に啓典を与え、私を預言者にしました。

31 また私を、どこにいようと祝福される者とし、また私に、生きているかぎり礼拝と喜捨をするよう命じました。

32 私が母をいたわるようにし、私を傲慢で不幸な者にはしませんでした。

33 それゆえ私に平安がありますように、私の生まれた日に、召される日に、生きてよみがえらされる日に」。

34 それがイーサー、マルヤムの子。彼らが疑っていることについての、真理の言葉。[4]

35 子をもうけるなど、アッラーにあるべきことではない。かの御方に讃美あれ。何ごとかを決めるとき、それにただ「在れ」と告げれば、それは在る。

36 ［イーサーは言った。］「アッラーが私の主であり、あなたがたの主。それゆえ、この御方に仕えなさい。これこそ、まっすぐな道」。

37 しかし彼らのあいだには、［イーサーについて］異なる諸々(もろもろ)の徒党がある。［真理を］拒む者に災禍(さいか)あれ、大いなる日に立ち会わねばならないのだから。[5]

38 彼らがわれらへと来る日、彼らはどれほど［はっきりと］われらを聞き、見るだろうか。しかし不正をな

す者は、今日、明らかな誤りの中にいる。

39 ［ムハンマドよ、］後悔の日について彼らに警告しなさい。そのとき、ものごとに決着がつけられる。彼らが顧(かえり)みも、信じもせずにいるうちに。

40 本当に大地と、何であれその上にあるものを相続するのはわれらである。そして彼らは、われらに帰される。

41 ［ムハンマドよ、］啓典の中でイブラーヒーム［の物語］に言及しなさい。彼は真実の人であり、預言者であった。

42 彼がその父にこう言ったときのこと。「父よ。どうしてあなたは、聞きもせず、見もせず、何の益にもならないものに仕えるのですか。

43 父よ。あなたにはもたらされなかった知識が、まさに私にもたらされました。ですから私に従ってください。私があなたを、まっすぐな道に導きましょう。

44 父よ。悪魔に仕えてはなりません。本当に悪魔は、慈愛あまねく御方に逆らっています。

45 父よ。私は、あなたが慈愛あまねく御方からの懲罰に触れ、そのために悪魔を友とするのではと案じます」。

46 彼［の父］は言った。「あなたは私の神々を放棄するのか、イブラーヒームよ。もしあなたがやめないのなら、私はきっとあなたを石打にしよう。それゆえ長らくは私を放っておいてくれ」。

47 彼［イブラーヒーム］は言った。「あなたに平安あれ。私はあなたのために、私の主に赦しを願いましょう。本当にかの御方は、いつも私によくしてくれます。

48 私はあなたがたからも、またあなたがたがアッラーをさし置いて祈っているものからも身を引きましょう。私は、私の主に祈ります。私が、主への祈りによって不幸になることはないでしょうから」。





49 イブラーヒームが彼らと、また彼らがアッラーをさし置いて仕えるものからその身を引いたとき、われらは彼にイスハークとヤアクーブを授け、そのどちらをも預言者とした。

50 われらは彼らに慈悲を授け、また彼らの真実な声望を高いものとした。[6]

51 啓典の中でムーサー［の物語］に言及しなさい。彼は真摯であった。また使徒であり、預言者であった。

52 われらは、かのトゥールの山の右側から彼に呼びかけ、話を交わすために近寄らせた。

53 またわれらの慈悲により彼の兄ハールーンを、預言者として彼に授けた。

54 啓典の中でイスマーイール［の物語］に言及しなさい。本当に彼は、約束したことに真実であった。また使徒であり、預言者であった。[7]

55 彼はいつもその一族に、礼拝と喜捨とを命じていた。彼はいつも主の御許において、喜ばれる者のひとりであった。

56 啓典の中でイドリース［の物語］に言及しなさい。彼は真実の人であり、預言者であった。

57 また、われらは彼を高い地位に引き上げた。

58 これらの者は、アッラーがその恩寵を垂れた預言者たち。アーダムの子孫であり、われらがヌーフと共に運んだ者たちの子孫であり、イブラーヒームとイスラーイールの子孫であり、われらが導き、選んだ者たち。慈愛あまねく御方の御しるしが読み聞かされるとき、彼らは身をかがめてひれ伏し、涙を流す。

59 しかし彼らの跡を継いだ者たちは、礼拝をおろそかにし、劣情に従った。やがて彼らは必ず邪悪に遭遇するだろう、

60 悔い改め、信じて正しい行いをする者を除いて。これらの者は、楽園に入るだろう。そして彼らは、まったく不当に扱われないだろう。

61 ［彼らが入るのは、］慈愛あまねく御方がしもべたちに約束した、目には見えないところにある永遠の園。かの御方の約束は必ず到来する。

62 そこでは、ただ「平安あれ」の他に無意味な話を聞かされることもない。そこでは、朝も晩も糧がもたらされる。

63 これが楽園。畏れるしもべたちに、われらが相続させるもの。

64 ［天使たちは言う。］「あなたの主の命令による他は、私たちが下ることはない。私たちの前にあるもの、後ろにあるもの、そのあいだにあるもの、すべてかの御方に属する。そしてあなたの主は、決して忘れることはない」。[8]

65 諸天と大地と、そのあいだにあるものすべての主。それゆえ、この御方に仕えなさい。よく耐えて、この御方に仕え続けなさい。あなたは、この御方に類するものを知っているのか。[9]

66 人間は言う。「私が死んだとき、生きて連れ出されるというのか」。[10]

67 しかし人は憶えていないのか、以前に何ものでもなかった自分を、われらが創造したことを。

68 それゆえ、あなたの主にかけて。われらは、必ず彼らと悪魔とを集めるだろう。そののち、われらは彼らに膝（ひざ）をつかせて地獄の周囲に連れ出そう。

69 そののち、われらは必ずすべての宗派から、慈愛あまねく御方に対してもっとも無礼であった者を引きずり出そう。

70 そののち、そこで焼かれるにもっともふさわしい者とは誰か。それを知っているのは、まさしくわれらである。

71 あなたがたのうち、そこに降り立たない者は誰もいない。それはあなたの主の果たされるべき定め。[11]





72 そののち、われらは畏れる者を救おう。そして不正をなした者は膝（ひざ）をつかせたまま放っておこう。

73 われらの明白なしるしが読み聞かされるとき、［真理を］拒む者は信じる者に言う。「私たちのうち、どちらの側の方が良い地位にあり、会衆としてすぐれているのか」。

74 しかし彼ら以前に、家財も身なりも彼らよりすぐれていた世代を、われらはどれほど滅ぼしたことか。

75 言いなさい。「慈愛あまねく御方は、誰であれ迷いの中にいる者を、［現世における］懲罰なり、またはかの［復活の］時なり、彼らに約束されたものを彼らが見るときまでは長らえさせる。それで彼らは、誰がもっとも劣った地位にあり、どちらが弱い軍勢であるかを知るだろう。

76 アッラーは、導きを受け入れる者の導きを深める。しかし永続する正しい行いこそ、あなたの主の御許においてその報奨はもっとも良く、また帰着としてもっとも良い」。[12]

77 あなたは見たか、われらのしるし［の真理］を拒んでいながら「財も子どもも、きっと与えられるはず」などと言う者たちを。

78 その者は、目には見えないものを見届けでもしたのか。それとも慈愛あまねく御方の御許から、約束を得てでもいるのか。

79 断じて、そうではない。われらはその者の言うことを書きとどめ、懲罰を長引かせよう。

80 その者の言うことはわれらが引き継ごう。［財も子どももなく］たったひとりでわれらのところにやって来るだろう。

81 彼らはアッラーをさし置いて他の神々を選び取り、それを自分たちの威力［の源］にしようとする。

82 断じて、そうではない。それらは彼らが仕えるのを拒否し、彼らに対する敵となるだろう。

83 ［ムハンマドよ、］見なかったか、われらが、［真理を］拒む者に悪魔を遣わして［真理と対立するよう］

扇動させるのを。

84 それゆえ彼らに対して急ぐことはない。本当にわれらは、彼らのために［残された日の］数を数えている。

85 その日、われらは畏れる者を、［名誉ある］使節のように慈愛あまねく者へと集める。

86 またわれらはのどが渇いた［家畜の］群れを追い立てるように、罪を犯した者を地獄へと追い立てる。

87 慈愛あまねく御方から約束を得ている者を除いて、誰もとりなしの力を持たない。

88 彼らは言う。「慈愛あまねく御方は、御子をもうけたもう」。

89 確かにあなたがたは、とんでもないことを言い出したもの。

90 そのために諸天は裂け、大地は割れ、山々は粉々に崩れ落ちんばかり。

91 彼らが、慈愛あまねく御方に子があるものとして呼ばわったために。

92 子をもうけるなど、慈愛あまねく御方にあるべきことではない。

93 諸天と大地にあるものは、すべてがしもべとして、必ず慈愛あまねく御方のところへやって来る。

94 かの御方は、すでに彼らについて計算し、またその数を数えている。

95 復活の日、彼らはそれぞれ、たったひとりでかの御方のところへやって来る。

96 信じて正しい行いをする者たち。慈愛あまねく御方は、彼らに愛情を注ぐだろう。

97 われらがこれ［クルアーン］をあなたの舌にたやすいものとしたのは、あなたに、畏れる者に良い報せを伝えさせ、敵意ある民に警告させるために他ならない。

98 われらは彼ら以前に、どれほどの世代を滅ぼしたことか。彼らのうち、ひとりでも［生き残っているのを］感じ取れるか。あるいは彼らのささやきを聞き取れるか。





1 洗礼者ヤフヤーはヒルード（ヘロデ王）に斬首されてこの世を去った。しかし現世を放棄し、荒野を住まいとすることにより、その短い生涯において、彼は神の知恵や被造物に対する穏やかな慈しみと愛情を知り、清らかな人生を送ることの幸福といった幾つもの祝福を授かったのである。

2 「東に面した場所」とは、マルヤムの住まいから東側の場とも、あるいはエルサレムの神殿の丘の東とも受け取れる。

3 ムーサーの兄弟ハールーンは、イスラエルの司祭の系譜に連なる最初の者であった。マルヤムとそのいとこであるイリサバート（エリサベト、ヤフヤーの母）は司祭の一族の出であり、ヘブライ語でいうところの「ハールーンの姉妹」にあたる。

4 これがイーサー（イエス・キリスト）誕生のあらましである。クルアーンでは、彼の誕生には諸々の奇跡や驚異を伴うものの、ごく普通の人間の誕生そのものであったことが説き明かされる。

5 思想史上、イーサーの神性という教義をめぐって無数の教説や論争が展開されたこと以上に重大な出来事も稀であろう。

6 本章では離脱と隠遁という二通りのイメージがマルヤムとイブラーヒームを通して描き出され、続いてその他の「アッラー」がその恩寵を垂れた預言者たち」についての簡潔な覚書が続く。彼らの人生は誠実さ、すなわち本章を通して神が頻繁に言及する、慈悲深い神との契約の聖なる履行そのものである。

7 イスマーイールは主に命じられた通りに犠牲となることを、臆することなく父イブラーヒームに約束した。その後に、彼は代償の羊をもって贖われた。三七章一〇二節を参照。

8 ある時、マッカの住民が預言者に、ジブリールがやって来て新たな啓示をもたらすのはいつ頃になるかを尋ねた。預言者はその時がきたら答えると約束したが、ジブリールは期待通りには訪れなかった。マッカの住民が、預言者を嘲笑する機会を見逃すはずもなく、主は預言者を忘れたのだと吹聴した。

9 神は比類なく、その御名を分かち合うものは何もない。

10 「死なければ、生きたまま連れ出されるということか」という意味とも解釈される。マッカの住民は永生を望んでいたため、預言者に対してこのような発言をした。

11 罪深い者も、行い正しい者も、誰もが一度は地獄をくぐる。しかし、行い正しい者は火炎から守られる。

12 これらの文言は一八章四六節にあるものと同じだが、ここでは「希望」に代わって「帰着」という語が用いられている。

# 第二〇章　ター・ハー

マッカ啓示

本章の大部分は、ムーサーの来歴に深く関わっており、またその中からいくつかが詳細に語られている。章は審判の日、人間一人ひとりの責任がどのように取り扱われるかについての説き明かしで締めくくられている。人間はその日のために、慎重に準備を整えなくてはならない。

最初の数節は、マッカにおいて当初はイスラームと激しく対立していたウマル・イブン・ハッターブの人生における、非常によく知られたある出来事にも関連している。ある日ウマルは、剣を手に取り預言者を殺害しようと出かけていったが、その際に路上で、自分の妹がイスラームに改宗したことを知人から聞かされた。怒り狂ったウマルは、まず妹の住まいを訪れ、クルアーンに耳を傾けていた妹に、何を聞いていたのかと問い詰めた。妹が答えるのを拒むと、ウマルは妹を打ちすえて怪我をさせた。すると妹は、「ええ、私たちはムスリムです。好きなようにすればよい」と叫んだ。いくぶん落ち着きを取り戻したウマルは、妹に彼女が読んでいたものを見せてくれるよう頼んだ。そこで妹は、ウマルにター・ハー章が書きとめられた一葉を手渡した。これを読んで深く心を揺り動かされたウマルは、預言者に会わせてくれるよう願い出た。ウマルの入信は、大いに喜びをもって迎え入れられた。





慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 ター、ハー。

2 ［ムハンマドよ。］われらがあなたにクルアーンを下したのは、あなたを不幸にするためではない。

3 ただ畏怖する者への戒めとして、

4 大地と至高の諸天とを創造した御方から、下されたものとしてに他ならない。

5 玉座の上に就く、慈愛あまねく御方。[1]

6 諸天にあるもの、大地にあるもの、そのあいだにあるもの、また土壌の下にあるもの、すべてこの御方に属する。

7 あなたがたが声高に話そうと［、小声で話そうと］、あなたがたが秘めるものも押し隠すものも知っている。

8 アッラー。その他に、いかなる神もない。もっとも美しい御名はこの御方に属する。

9 ［ムハンマドよ、］あなたに、ムーサーの話は届いているのか。

10 火を見た彼が、その家族にこう言ったときのこと［を思いなさい］。「あなたがたはここにいなさい。私にはちらりと火が見えた。あの火から燃えがらをもって来るか、あるいはあの火に、導きを見出せるかもしれない」。[2]

11 彼がそこにやって来ると、彼は呼びかけられた。「ムーサーよ。

12 これぞわれ、あなたの主である。あなたの履物を脱ぎなさい。あなたは聖なるトゥワーの谷にいる。

13 われはあなたを選んだ。それゆえ、啓示されることを聞きなさい。

14 これぞわれ、アッラーである。われの他に、いかなる神もない。それゆえ、われに仕えなさい。われを

憶えるために、礼拝のつとめを守りなさい。
15 本当に、かの時は到来する。しかしわれは、そのあらかたを伏せておく。それによりすべての者に、それぞれの尽力に応じて報いるため。
16 それゆえ、これを信じず、自分の欲求に従う者のせいで、あなたがこれから遠ざかることがあってはならない。さもないと、あなたは破滅するだろう。
17 あなたの右手にあるそれは何か、ムーサーよ」。
18 彼は言った。「これは私の杖です。私はこれにもたれたり、羊の群れに葉を落としたり、他にも諸々のことに用います」。
19 かの御方は告げた。「それを投げなさい、ムーサーよ」。
20 そこで彼がそれを投げると、見なさい。それは動く蛇となった。
21 かの御方は告げた。「それを捕えなさい。そして恐れるな。われらは、それを元通りに戻そう。
22 あなたの手を、あなたの脇の下に入れなさい。それは傷ひとつない白さで出てこよう。これがもうひとつのしるし。
23 われらのより偉大な諸々のしるしを、あなたに見せるため。
24 フィルアウンの許へ行きなさい。本当に、彼は逸脱の限りを尽くした」。
25 ムーサーは言った。「主よ。私の胸を広げてください。
26 私の行うべきことを、たやすくしてください。
27 私の舌のもつれをほどいてください、
28 私の言うことを、彼らが理解できるように。





29 私をおぎなう者をあらしめてください、私の家族の中から、
30 私の兄のハールーンを。
31 彼によって私を強めてください。
32 私の行うべきことを、彼と分かち合わさせてください。
33 私たちがあなたを多く讃美し、
34 また私たちがあなたを多く想い起こすために。
35 本当にあなたは、私たちのすべてを見る御方」。
36 かの御方は告げた。「あなたの願いは聞き届けられた、ムーサーよ。
37 われらは、別のときにもすでにあなたをいつくしんだ。[3]
38 われらが、あなたの母にこう啓示したときのこと「を思いなさい」。
39 『その子を箱の中に入れ、川に投げなさい。川はそれを岸に打ちあげるだろう。われの敵にして、彼の敵でもある者が、彼を拾うだろう』。われはあなたに、われからの愛を投げかけた。あなたが、われの見守るところで育まれるようにと。[4]
40 あなたの姉がこう言ったときのこと「を思いなさい」。『この子の世話をする者を、あなたがたのために引き合わせましょう』。こうしてわれらは、あなたをその母に戻した。彼女の目がなぐさめられ、嘆くこともないようにと。また、あなたは人を殺したが、われらはあなたを苦痛から救い、諸々の試練にあわせた。それからあなたは、マドヤンの一族の中で数年を過ごした。そののち、決められていた通りにあなたは到来したのだ、ムーサーよ、[5]
41 われは、われのためにあなたを選んだ。

42 行きなさい、あなたも、あなたの兄も、われのしるしをもって。われの戒めを、おろそかにしてはならない。
43 あなたがたは、二人ともフィルアウンのところへ行きなさい。本当に彼は逸脱の限りを尽くした。
44 しかし、彼にていねいに話しなさい。おそらく彼は想い起こすようになるか、あるいは［主を］畏怖するようになるだろう」。
45 彼ら［ムーサーとハールーン］は言った。「主よ。彼が私たちに対し［危害を及ぼそうと］急ぐか、あるいは彼が逸脱するのではと案じます」。
46 かの御方は告げた。「案ずることはない。本当にわれはあなたがた二人と共にあり、すべてを聞き、すべてを見ている。
47 あなたがた二人は彼の許へ行き、言いなさい。『本当に私たちは、あなたの主の使徒です。だから私たちと共に、イスラエルの民を送り出しなさい。彼らを苦しめないでください。まさしく私たちは、あなたの主の御しるしをもってあなたのところへ来ました。導きに従う者には、平安があるでしょう。
48 本当に、それを嘘よばわりして背を向ける者には懲罰が科される、と私たちは啓示されました』と」。
49 彼［フィルアウン］は言った。「それであなたがたの主とは誰のことか、ムーサーよ」。
50 彼［ムーサー］は言った。「私たちの主とは、すべてのものにそれぞれの姿を与え、そののちに［それらを］導く御方のこと」。[6]
51 彼［フィルアウン］は言った。「それでは、過去の世代はどうなるのか」。[7]
52 彼［ムーサー］は言った。「それについての知識は、主の御許の書の中に［記録が］あります。私の主は決して迷うこともなく、忘れることもありません。[8]





53 あなたがたのために大地を寝台とし、またその中に、あなたがたのために諸々の道を通し、空から雨を降らせる御方」。それによりわれらは、様々な種類の草木を芽吹かせる。[9]
54 食べなさい。またあなたがたの家畜にも食べさせなさい。本当にその中には、理智ある者への諸々のしるしがある。
55 われらは、そこ［大地］からあなたがたを創造し、その中にあなたがたを戻し、そしてもう一度、そこからあなたがたを連れ出すだろう。
56 われらは彼［フィルアウン］にわれらのしるしをすべて見せた。しかし彼は嘘よばわりし、拒絶した。
57 彼［フィルアウン］は言った。「あなたは魔術で私たちをこの地から追放するために来たのか、ムーサーよ。
58 私たちもあなたに、それと同じような魔術を出そう。それゆえ、私たちとあなたがたとのあいだで約束を交わし、場を設けよう。そして私たちもあなたも、その約束を破ってはならない」。
59 彼［ムーサー］は言った。「あなたとの約束は、祭りの日としましょう。昼前には、人が集まるようにしてください」。[10]
60 するとフィルアウンは背を向け、策をまとめたのちにやって来た。[11]
61 ムーサーは彼らに言った。「あなたがたに災禍あれ。アッラーに対し、嘘をねつ造してはならない。さもないとかの御方は、あなたがたに懲罰を科して滅ぼすだろう。ねつ造する者は必ず破綻する」。
62 そこで彼ら［魔術師たち］は、自分たちがどうすべきか互いに論じ合ったが、その密談については秘めておいた。
63 彼らは言った。「この二人は確かに魔術師だ。その魔術であなたがたをこの地から追放し、またあなたがたの、模範となるべきすぐれた習わしを廃止させようとしている。

64 それゆえあなたがたは策をまとめ、そののち列となって来るがいい。この日、上位に立つ者は必ず栄えるだろう」。
65 彼らは言った。「ムーサーよ。あなたが投げるのか、それとも私たちが先に投げようか」。
66 彼［ムーサー］は言った。「いいや、あなたがたが投げなさい」。すると、見なさい。彼らの縄と杖は、魔術によって、まるで動いているかのように見えた。
67 そのためムーサーは、自分の中に畏怖をおぼえた。
68 われらは告げた。「怖れるな。本当にあなたの方が上回っている。
69 あなたの右手にあるものを投げなさい。それは彼らが作ったものを飲み込むだろう。彼らの築いたものはただの魔術に過ぎない。どこにいようと、魔術師は栄えない」。[12]
70 こうして、魔術師たちは［主に］ひれ伏して言った。「私たちは、ムーサーとハールーンの主を信じます」。[13]
71 彼［フィルアウン］は言った。「私が許しもしないうちに、あなたがたは信じるのか。本当にこの者は、あなたがたに魔術を教えたあなたがたの首領に違いない。それなら私はあなたがたの両手両足を、必ず交互に切り落としてやろう。そしてあなたがたを、必ずなつめやしの幹に磔（はりつけ）にしてやろう。それであなたがたも、どちらの懲罰がより厳しく、永続するかを知るだろう」。[14]
72 彼らは言った。「私たちにもたらされた明白な証よりも、また私たちを創始した御方よりも、あなたの方をまさるものとすることなど、私たちには決してできません。あなたが決めたい通りに決めてください。あなたに決めることができるのは、この現世の生においてのみです。
73 本当に、私たちは主を信じます。それにより私たちの過ちと、またあなたが私たちに強いた魔術に赦しがあるように。アッラーこそ最良であり、永続する御方です」。





74 本当に、罪を犯した者として主へとやって来る者には地獄があり、その中で、死ぬことも生きることもかなわない。
75 しかし正しい行いをした信仰者としてやって来る者、これらの者には高い位階があり、
76 川がその下を流れる永遠の園の中に、永遠に住まうだろう。それが自分自身を清らかに保つ者への報酬。
77 われらはムーサーに啓示した。「われのしもべたちと、夜に旅しなさい。海を渡る乾いた道程を、彼らのために打ち開け。［フィルアウンに］追われることを恐れるな、［海を］怖がるな」。[15]
78 フィルアウンはその軍勢を率いて彼らの後を追った。しかし海は彼らを圧倒し、彼らに覆いかぶさった。
79 フィルアウンはその民を迷わせた。彼らを導きもしなかった。
80 イスラエルの民よ。われらはあなたがたをその敵から救った。また、山の右側であなたがたと約束を交わし、あなたがたにマンナと、うずらとを下しもした。[16]
81 われらがあなたがたの糧とした、諸々（もろもろ）の良いものを食べなさい。しかしわれらの怒りを招くことのないよう、［その範囲から］逸脱してはならない。誰であれ、われの怒りを招いた者は必ず失落する。
82 しかし誰であれ悔い改め、信じて正しい行いをし、そののちも導きにとどまる者については、本当にわれはよく赦す。
83 ［山の上で、主はムーサーに告げた。］「あなたの民の前で何を急ぐのか、ムーサーよ」。[17]
84 彼は言った。「彼らは、私のすぐ後ろを追ってきています。私はあなたの喜びのために、あなたへと急いだのです」。[18]
85 かの御方は告げた。「われらはあなたの民を［去った］後に、あなたの民を試みた。するとサーミリーが、彼らを迷わせた」。

86 ムーサーは怒り、悲しんでその民のところへ帰った。彼は言った。「私の民よ。主はあなたがたと最善の約束を交わしたではないか。その約束［が果たされるまでのあいだ］が、あなたがたには長すぎるというのか。あるいは、あなたがたの上に主の怒りが降り下ろされるのを欲したのか。それであなたがたは、私との約束を破ったのか」。

87 彼らは言った。「私たちは、自分からすすんであなたとの約束を破ったのではありません。私たちは、あの［エジプトの］民の飾りものという重荷を運ばされてきたので、それを［火の中に］投げ入れたのです。サーミリーが［私たちにそうするよう勧め、また彼自身も］そうしたようにです」。

88 それから彼が、彼らのために［火の中に投げ入れられたものを用いて］鳴き声のする仔牛の姿かたちをしたものを作り上げると、彼らは言った。「これがあなたがたの神であり、ムーサーの神です。しかし、彼は忘れてしまったのです」。[19]

89 それが彼らにひと言も応じることはなく、害や益をもたらす力もないことが、彼らには分からなかったのか。

90 これ以前に、ハールーンはすでに彼らにこう言っていた。「私の民よ。あなたがたは、これによって試されているに他ならない。本当に、あなたがたの主はもっとも慈愛あつき御方。私に従っておきなさい。私の命令の通りにしなさい」。

91 しかし彼らは言った。「ムーサーが帰ってくるまで、私たちはこれを崇拝するのを止めない」。

92 彼［ムーサー］は言った。「ハールーンよ。彼らが迷うのを見ていながら、何があなたを妨げたのか。

93 あなたは私に従わないのか。私の命令に逆らうのか」。

94 彼［ハールーン］は言った。「私の母の子よ。私の髭や、私の頭をつかまないでくれ。本当に私は、『あなたは、イスラエルの民のあいだを分裂させた。あなたは、私の言うことを尊重しなかった』と、あなたに言われるのが怖かったのだ」。





95 彼［ムーサー］は言った。「それでは、あなたの方はどうなのか、サーミリーよ」。

96 彼は言った。「私は、彼らの見なかったものを見ました。私は［天の］使者の足跡から一握りの土をつかんで投げ入れました。私の自我が、そのように私を誘ったのです」。[20]

97 彼［ムーサー］は言った。「立ち去れ。あなたは生きている限り、『触れるな』と言うことになるだろう。また本当にあなたには、決して破れない約束がある。見なさい、あなたが念じ、崇拝していたあなたの『神』を。私たちは必ずこれを燃やし、そののち粉々にして海の中へ散らすだろう」。[21]

98 確かにあなたがたの神とはアッラーであり、その他に、いかなる神もない。あらゆるものごとをその知に網羅する御方。

99 このように、われらは以前に起きたことの話をあなたに語り、またわれらの許から、あなたに戒めを与えた。[22]

100 誰であれ、それから背き去る者は、復活の日、必ず重荷を運ばされ、

101 永遠にそのままにとどまる。復活の日に運ばされるものの、何と悪いことか。

102 喇叭が吹き鳴らされるその日、われらは［恐怖のために］翳る目をした、罪を犯した者たちを集める。

103 彼らは、互いに声をひそめて言う。「あなたがたは、［現世では］十日ほどを過ごしただけだろう」。

104 われらは、彼らが言うだろうことをもっともよく知っている。彼らの中でもっともすぐれた道程にある者は言うだろう。「あなたがたが過ごしたのは、ただの一日だけ」。[23]

105 ［ムハンマドよ、］彼らはあなたに、あの山々について尋ねるだろう。言いなさい。「私の主は、あれらを

粉々にして散らすだろう。
106 それから、何もない平らかな地にするだろう。
107 そこには曲がったところも、ひずんだところも見られないだろう。
108 その日、彼らは逸れようもなく呼ぶ者［イスラーフィール］に従う。慈愛あまねく御方のために声は慎まれ、かすかな物音の他には聞こえないだろう。
109 その日、慈愛あまねく御方に許され、その言葉が喜ばしいものとされている者を除いては、誰のとりなしも役に立たない。[24]
110 かの御方は彼らの前にあるものも、彼らの後にあるものも知っている。しかし彼らの知識では、それを把握することはできない。
111 顔という顔が、永生する御方、自存する御方の御前に謹んでかしこまる。不正を背負う者はまさしく破綻する。
112 しかし信仰者として正しい行いをする者なら、不当に扱われるのを恐れることはなく、剥奪されることもないだろう。
113 ［ムハンマドよ、］このように、われらはクルアーンをアラビア語で下し、またその中に様々な警告を解き明かしておいた。彼らも畏れる者となるか、あるいはその戒めを受け入れることだろう。
114 アッラーこそは至高、王者にして真理。あなたへの啓示が果たされる以前に、クルアーン［を読むこと］を急いではならない。「主よ。私の知識を増やしてください」と言いなさい。
115 われらはすでに、アーダムと以前に契約を結んだ。しかし彼は忘れてしまった。われらは、彼に決意のないことを見出した。[25]





116 われらが天使たちにこう告げたときのこと。「アーダムの前にひれ伏しなさい」。それで彼らはひれ伏した、イブリースを除いては。彼は拒絶した。
117 われらは言った。「アーダムよ。本当に、これ［悪魔］はあなたとあなたの伴侶の敵。それゆえ、彼のせいであなたがた二人が楽園から追放され、苦しむことにならないようにしなさい。
118 本当にこの［楽園の］中では、あなたがたは飢えることもなく、裸になることもなく、
119 またあなたがたは、この［楽園の］中では渇くこともなく、太陽［の熱］にさらされることもない」。
120 しかし悪魔が彼にささやいて言った。「アーダムよ。私があなたを、永遠の木と、おとろえることのない王国に案内しようか」。
121 彼ら二人がそれを食べると、自分の隠しどころ［恥部］があらわになった。彼らは、自分の身を楽園の葉で覆い隠しはじめた。このようにアーダムはその主に逆らい、誤ることとなった。
122 そののち、主は［恩寵により］彼を選び、彼の悔い改めを受け入れ、彼を導いた。[26]
123 かの御方は告げた。「あなたがたは、皆そろってここから降りてゆけ、互いの敵となって。しかし、もしあなたがたにわれからの導きが来たなら、われの導きに従う者は迷うこともなく、不幸になることもないだろう。
124 しかし、われの戒めから背き去るなら、その者の生活は窮屈になるだろう。われらは復活の日、その者を目の見えない者としてよみがえらせるだろう」。
125 その者は言うだろう。「主よ。なぜ私を、目の見えない者としてよみがえらせたのですか。かつて［生きていた間］は見えていたのに」。
126 かの御方は告げるだろう。「このように、われらのしるしがあなたに来たのに、あなたはそれを忘れていた。

127 そのように、この日はあなたが忘れられるだろう」。[27] このようにしてわれらは行き過ぎた者、主のしるしを信じない者に報いる。しかし来世の懲罰はより厳しく、また永続する。

128 われらは彼ら以前に、どれほどの世代を滅ぼしたことか。彼ら［以前の世代］の居場所だったところを歩いていながら、それは彼ら［以後の世代］にとり導きとはならなかったのか。本当にその中には、理智ある者への御しるしがある。

129 もしあなたの主から、あらかじめ御言葉がなかったなら、定められた期限がなかったなら、［懲罰は現世でも］起こるべくして起きていただろう。

130 ［ムハンマドよ、］それゆえ、彼らの言うことによく耐えていなさい。太陽の昇る前、沈む前にあなたの主を称賛しなさい。また夜の一刻と、昼の両端にも讃美しなさい。きっと満ち足りることだろう。[28]

131 われらが、彼らのうちの幾人かを現世の生の諸々の飾りで楽しませているからといって、あなたの目を見はってはならない。われらは［それらによって］彼らを試みている。あなたの主からの糧の方がもっとも良く、また永続する。

132 あなたの家族に礼拝を命じ、あなた自身もよく耐えなさい。われらは、あなたに糧を求めない。糧をもたらすのはわれらである。結実は、畏れる者のためにある。

133 彼らは言う。「どうして彼［ムハンマド］は私たちに、主の御しるしをもって来ないのか」。彼らには、過去の書巻にある明白な証が来なかったとでもいうのか。

134 もしわれらがこれ以前に、懲罰をもって彼らを滅ぼしていたなら、彼らは必ず言っただろう。「主よ。どうして私たちに使徒を遣わさなかったのですか。そうすれば私たちは、卑しめられ、辱められる前に、





135 あなたの御しるしに従っていたでしょうに」。[29] 言いなさい。「誰もが期待している。それゆえ、あなたがたも期待していなさい。平らかな道の仲間とは誰であるのか、導かれているのは誰であるのか、やがてあなたがたも知るだろう」。

1 「玉座の上に就く」については、七章五四節の注釈を参照。

2 ムーサーとその家族は、マドヤンを離れ、母が住んでいたエジプトの地へ向かった。旅の途中、ある寒い夜に赤子が生まれた。焚き火をおこす必要に迫られたムーサーは、遠くに明かりが燃えているのを見た。近づいてみると、この火は実のところ、神の啓示が下されることを示すしるしであったことが明らかになった。

3 ユースフは奴隷の少年としてエジプトの地に入り、当時の王の大臣にまでなった。王もその民もユースフに感謝していたが、時が過ぎ、世代が下ると、イスラエルの民を憎悪する者がエジプトの王位を継いだ。彼はイスラエルの民に男児が生まれたなら、時を待たずにただちに殺害するよう命じた。ムーサーの母はしばらくの間、生まれたばかりの彼を隠し通せてはいたが、やがて捕らえられるのではないかと恐怖していた。すると主は彼女に語りかけ、何をすべきかを教えた。

4 愛くるしい容姿に恵まれた赤子に、フィルアウンの一族はすっかり魅了され、赤子を家族の一員とした。ムーサーは現世において考えられる限り最上の方法で育てられたばかりか、神の采配によって守られ、次の節で述べられている通り、乳母として連れてこられた実母とのふれ合いの中で成長した。こうして自分の民に対する想いや温もりの感情もまた、

彼の内側に育まれていったのである。

5 ムーサーは、イスラエルの民を虐待するエジプトの民を殴り飛ばしたが、その際に自分の腕力の強さを見誤り、意図せず殺害してしまった。これが明るみにでたとき、彼はマドヤンの地に逃れることを余儀なくされた。

6 ムーサーの答えは簡明であり要点をついている。彼は「私の主」や「あなたの主」といった言い方はせず、エジプトの神、イスラエルの神といった論じ方はしない。彼が語るのは、創造者であり導き手としての、万民の主である唯一の神のみである。

7 フィルアウンはこれには応じず、代わりにムーサーの祖先に対する非難へ誘導しようとする。

8 人間は過ちを犯しもすれば忘れもするが、神の知識は万全である。神は過ちを犯さず、忘れることもない。神はすべてを知り、またすべてに優れている。

9 ここで神は、ムーサーを通して語りつつも、第一にムーサー自身に聞かせるために語っているかのようでもある。ここで再び彼は、フィルアウンの当てこすりによる挑発を避けつつ、自然界に存在する神の御しるしという主題に立ち返る。それまではあまりなじみのなかった、植物の雌雄についての言及にも注目すべきであろう。

10 ムーサーは神殿の祝祭の日を指定した。彼に課された第一の義務は、真理を説くことである。ムーサーは、兄のハールーンと共にすでに義務を果たしつつあった。

11 神殿の祝祭の日を主宰するのはフィルアウンであった。その日、神殿も通りもはなやかに飾り立てられ、人々には休暇が与えられた。

12 ムーサーは、神の命じるところに従い彼の杖を投げた。すると奇跡が起きた。杖は正真正銘の大蛇になり、魔術師が蛇に見せかけるのに用いた棒と縄をひと飲みに飲み込んだ。

13 彼らは改悛し、祝祭の日の余興が終わった後も、常にムーサーと行動を共にするようになった。互いの損得勘定に基づ





いた関係は、一方が自分の得にならないと思えばたちまちにして破綻する。損得勘定に基づいた友情もまた、一方が自分の損になると思えばたちまちにして敵意に変化するのである。ハールーンとムーサーの語る神を、魔術師たちが信じることがなければ、彼らはフィルアウンの側からは、名誉ある者として目されるようになっただろう。しかし真理と信仰に目を開かされ、悔い改めを経て新たに生まれ変わった魔術師（元・魔術師）たちは、つかの間の現世で授けられる賜り物よりも、永遠に続く来世の至福を優先したのである。この箇所については、七章一一〇節から一二六節もあわせて参照のこと。

14 ここでフィルアウンは、彼の魔術師たちを非難している。傲慢さと邪悪さがある限り、自分の狭い視野を超えて、神の創造する美しい真実の世界を会得することはできない。

15 この命令を受けてムーサーは、夜もふけてから、彼の民を連れてエジプトを去った。密偵の報告により、そのことを知ったフィルアウンは、軍勢を率いて彼らを追ったが、フィルアウンも軍勢も、押しせまる海原に飲み込まれて滅んだ。

16 「山の右側」とはシナイ［半島］のアラビア側を指す。エジプトへ出立する前に、ムーサーがその使命を最初に授かった場所であり、また脱出ののちには、律法を授かった場所でもあった。一九章五二節も参照。

17 ムーサーは、彼の民を連れてエジプトを脱し、シナイ半島に入ると、人々の世話をハールーンに託し、自分は神の啓示を受け取るために山へ向かった。

18 彼が山頂で主の御前にいたとき、その麓では彼の民による奇妙な光景が繰り広げられていた。彼らは試みられていたのだが、その試練を乗り越えることができなかったのである。サーミリーが黄金を用いて仔牛の像を造り、それを崇めるようイスラエルの民に勧めた。こうして彼らは道に迷い、大罪を犯す羽目に陥った。ハールーンは、これを防ぐにはあまりにも非力であった。

「サーミリー」については、ある人物の名であるとする説をはじめ、複数の説がある。

19 「彼（ムーサー）は忘れてしまった」。これはサーミリーと、彼に追従する者たちの一派の主張である。彼らはムーサーが、神を探してさまよっているものと考えていたが、その間じゅう、実際には彼は山頂で神と対峙していたのである。何日にもわたり彼が不在にしていたため、人々はサーミリーの強い勧めもあって、仔牛の像への崇拝になびいていった。

20 サーミリーは嘘をついた。天使ジブリールを見たといい、彼の足元から一握りの土をつかむと、それを仔牛の像に投げつけた。それは祝福の仕草のつもりであった。仔牛の像が、ムーサーに下された啓示と同様に天与の産物であると主張したのである。

21 「触れるな」。彼とその一派は、イスラエルの民の集団から排除されることになった。サーミリーの子孫は、最終的にはサマリアに彼ら自身の王国を打ち立てた。その地に住まう人々は、彼ら独自の教派を持つようになった。

22 この節でいわれている「戒め」とはクルアーンを指す。クルアーンでは、熟考に値する過去の出来事の数々が語られている。

23 人々は、終末を迎えてみて初めて現世における生の短さ、はかなさを思い知る。

24 預言者たちは全能の神の御前に立ち、それぞれ自分の民に赦しがあるよう願うだろう。預言者ムハンマドにも、民をとりなすことが許される。

25 本章では、フィルアウンとサーミリーというふたつの魂の霊的な失墜が語られた。ひとりは傲慢さ、もうひとりは霊的な欺瞞を通して転落していったが、ここでは人間の祖であるアーダムが直面させられた誘惑を通して、邪悪の原型に注意が向けられている。事が起こる以前に、破滅をもたらすものとして警告されていたにもかかわらず、わずか一度の誘惑でさえはねつけることができないほど、邪悪の誘惑は強力なのである。

26 「主は「恩寵により」彼を選び、彼の悔い改めを受け入れ」たとある通り、クルアーンでは、楽園から地上への降下は恩寵ある出来事として理解され、語られている。イスラームの視点からは、たとえ善美と合一という原初の故郷からの「追





放者」であるとしても、人間という生きものは本質的には悪ではない。イスラームは「原罪」という概念を否定する。アーダムの犯した罪はアーダム個人が引き受けるものであり、アーダムの末裔にはその責任を負うことはできないのである。イスラームの視点からは、人間は生まれつき善であり、悪ではない。誤った方向へ導くものがあるとすれば、それは本人を取り巻く文化的な背景や環境のみである。

27 現世にいる間じゅう、故意に不従順を示し、預言者が伝える神の御しるしに目を閉ざしていたのなら、来世で神の恩寵を目にすることはできないだろう。

28 解釈者たちは、この節をもって日に五回の義務の礼拝の根拠としている。すなわち日の出、正午、午後、日の入り、そして夜の礼拝である。しかし具体的な時刻については、クルアーンでは定められてはいない。儀式や典礼の詳細をのべ伝えることはクルアーンの目的ではなく、そうした規定は、預言者の言葉や行為の記録から導き出されている。

29 人々は、生ける使徒が目の前にいれば嘲笑し、証拠となるしるしを出すよう求める。証拠となるしるしが授けられればこれを嘲笑し、生きた使徒を連れてくるよう求める。預言者に対して人々が示す抵抗とは、絶望的なまでに不合理に満ちている。

# 第二一章　アル＝アンビヤーゥ　預言者たち

マッカ啓示

本章は全一一二節によって構成される。ヒジュラの五年から六年前に啓示され、マッカ時代中期の章群に属している。複数の使徒たち、預言者たちの物語が扱われた章である。偶像崇拝と戦ったイブラーヒーム、自然の摂理に背く不正に反対したルート、不信仰と対峙したヌーフ、神から授けられた能力と力を十二分に発揮することで神の栄光を具現化し、不公正や怠慢を制したダーウードとスライマーン、忍耐を失うことを恐れ、自信と尊厳を求めたアイユーブ、また同様に、堅固に耐え忍ぶ強さを求めたイスマーイール、イドリース、ズルキフル、軽率な怒りの感情を克服したユーヌス、霊的な孤独に耐えたザカリーヤー、そして現世に対する欲望に背を向けたマルヤム。内的な浄化の妨げとなる外的な障壁と、そうした悪を拒む人々を守護する神の威力についての確証が、彼ら、彼女らの物語を通して説き明かされている。共通しているのは、預言者たちは、人が想像するような雲の上の存在とは違い、どこまでも地に足のついた人間そのものであったという点である。彼らもまた、あらゆる種類の悪を最初から超越していたのではなく、一歩、また一歩と自らを高めてゆく他はなかった。



慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 人々に、その清算が近づいている。しかし彼らは、顧（かえり）みもせずに背き去る。



2 彼らの主から新たな戒（いまし）めが来るたびに、彼らは、それを遊び半分で聞くに過ぎない。

3 「新たな啓示を読み聞かされても、」彼らの心は散漫になっている。不正をなす者たちは、ひそかに密談をかわす。「これは、あなたがたと同じひとりの人間ではないか。あなたがたは、その目で見ていながら魔術にかかったのか」。

4 彼「ムハンマド」は言った。「私の主は、天と大地のあいだで語られる言葉をすべて知っている。すべてを聞く御方、すべてを知る御方」。

5 彼らは言った。「いいや、夢と夢とが絡み合っているのだ」。「いいや、彼がねつ造したのだ」。「いいや、彼は詩人だ」。「先人たち「に遣わされた使徒」のように、彼にもしるしをもって来させよう」。

6 彼らより以前にわれらが滅ぼした町は、そのいずれもが信じなかった。では、彼らは信じるだろうか。

7 あなた「ムハンマド」以前にわれらが啓示して遣わしたのも、「あなたと同じ」人間のひとりに他ならなかった。戒（いまし）めを授かっている人々に尋ねなさい、もしあなたがたが知らないのなら。[1]

8 われらは彼ら「預言者たち」を、食べものを口にしない体にはしなかった。また彼らは、永遠のものでもなかった。

9 そののち、われらは彼らへの約束を実現させ、また彼らと、われらがそうと望む者を救った。そしてわれらは、行き過ぎた者を滅ぼした。

10 われらはあなたがたに啓典を下した。その中には、あなたがたへの戒（いまし）めがある。それでもあなたがたは、考えないのか。

11 われらは、どれほど不正をなしていた町を打ち砕き、またその後に、別の民を興したことか。

12 われらの威（い）「が振るわれるの」を察すると、見なさい。彼らはそこから離れ去ろうとする。[2]

13 「逃げるな。あなたがたが享受していた奢侈（しゃし）へ、あなたがたの住みかへ帰りなさい。［それについて、］あなたがたは問いただされるだろう」。[3]

14 彼らは言った。「なんということだ。本当に私たちは、不正をなす者でありました」。

15 こうした彼らの叫びは、われらが彼らを、刈り取られて灰になったもののように絶やすまで止まなかった。[4]

16 われらは諸天と大地と、またそのあいだにあるものを、たわむれに創造したのではない。

17 たわむれがわれらの意図であったなら、われらは、われらの許にあるものでそうしただろう。

18 いいや、われらが嘘いつわりに真理を投げつけると、その頭は砕かれる。そして見なさい、それは果てる。あなたがたの述べることのために、あなたがたには災禍（さいか）がある。

19 諸天と大地にあるものは、何であれかの御方に属する。御許にある者たちは、かの御方に仕えるにあたり高慢にならず、疲れることもない。

20 夜も昼も、緩むことなく讃美する。

21 あるいは彼らは、［死者を］よみがえらせる神々を、地上で選びでもしたのか。[5]

22 もしその中にアッラー以外の神々がいたなら、彼らはきっと退廃を広めていただろう。アッラーに讃美あれ、彼らが述べていることを超越する玉座の主に。

23 かの御方が、その行いについて問われることはない。しかし彼らの方こそ、その行いについて問いただされるだろう。

24 それとも彼らは、かの御方をさし置いて他の神々を選んだのか。言いなさい。「あなたがたの証拠を出しなさい。これは私と共にいる者たちへの戒（いまし）めであり、また私以前の者たちへの戒（いまし）めでもある」。いいや、多くの者は真理を知らない。それで彼らは、背き去る。





25 われらがあなた以前に遣わした使徒にも、「われの他に、いかなる神もない。だからわれに仕えなさい」と啓示せずにはいなかった。

26 彼らは言う。「慈愛あまねく御方は、御子をもうけたもう」。かの御方に讃美あれ。いいや、彼らはただ貴（とうと）ばれるしもべであるに過ぎない。[6]

27 彼らが、かの御方に先んじて何ごとかを言うことはない。彼らは、ただかの御方に命じられた通りに行うだけ。

28 かの御方は彼らの前にあるものも、また彼らの後にあるものも知っている。彼らは、かの御方が認める者以外をとりなすことはしない。彼らはかの御方におそれおののき、謹（つつし）んでかしこまる。

29 彼らの中で、「私は、かの御方とは別の神である」などと言う者には、われらは地獄をもって報いるだろう。このように、われらは不正をなす者に報いる。

30 ［真理を］拒む者たちにはわからないのか。［かつて］諸天と大地はひとまとまりになっていたが、われらはそれを切り分けた。また水によって生あるものすべてを造った。それでも彼らは、信じないのか。

31 またわれらは、彼ら［人間］と一緒に揺れ動くことのないよう、大地に不動の山々を据え、またその中に尾根尾根を道としてしつらえた。それで彼らが、導かれるようにと。

32 またわれらは、空を守護された天蓋（てんがい）とした。しかし彼らは、これら諸々（もろもろ）のしるし［が示すところ］から背き去る。

33 夜と昼、太陽と月を創造した御方。それらはすべて、それぞれの軌道に浮かぶ。

34 ［ムハンマドよ、］われらはあなた以前の誰のことも、不死の者とはしなかった。それなのに、あなたは死んでも彼らは不死だというのか。

35 すべての者はそれぞれ死を味わう。われらはあなたがたを、悪いことや良いことをもって試す。そしてあなたがたは、われらに帰される。

36 あなたを見るとき、［真理を］拒む者たちはあなたを笑いごととして扱う。「あなたがたの神々について、何ごとか言うに及んでいるのはこの者か」。慈愛あまねく御方の戒め（いまし）［の真理］を拒む者は、彼らの方であるというのに。[7]

37 人間は急ぐよう創造されている。われはあなたに、われのしるしを見せるだろう。それゆえ、われを急かしてはならない。

38 彼らは言う。「もしあなたがたが真実を語っているのなら、その約束はいつ果たされるのか」。

39 ［真理を］拒む者たちがその顔からも背からも業火を払いのけられず、またどのような助けもない時のことについて知ってさえいたなら。

40 いいや、それは彼らに突然やって来る。そして彼らをうろたえさせるだろう。彼らにはそれをつき返すことはできず、また彼らは猶予もされないだろう。

41 すでにあなた以前にも、嘲笑された［主の］使徒たちがいた。しかしあざ笑っていた者たちは、自分があざ笑っていたものに囲い込まれてしまった。[8]

42 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「慈愛あまねく御方から、誰が夜となく昼となくあなたがたを守るというのか」。いいや、それでも彼らは、その主の戒め（いまし）から背き去る。[9]

43 それとも彼らには、われらから彼らを守る神々があるというのか。それらは自分たち自身さえ助けることもできず、われらに対する保護もない。

44 いいや、［それでも］われらはこれらの者にも、その祖先にも［現世の］楽しみを与え、その生を長引か





せてやった。らは見ないのか、われらがこの地に到り、その端から切り崩しつつあるのを。それでも彼らが、勝利を得る者だというのか。[10]

45 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「私は、ただ啓示されたことによってあなたがたに警告するだけ」。しかし聞く耳のない者は、警告をされてもその呼びかけが聞こえない。

46 しかし、もしあなたの主の懲罰の気配が触れようものなら、きっと彼らは言うだろう。「なんということだ。私たちは、本当に不正をなす者でありました」。

47 そして復活の日のために、われらは正道に即した天秤を設ける。それで誰も、何も不当に扱われることはない。たとえからしの種ひと粒の重さでも、われらはそれを取りあげ［て、量］るだろう。清算する者は、われらだけで十分である。[11]

48 われらはムーサーとハールーンに［正誤の］規範と光明を、また畏れる者のための戒めを与えた、[12]

49 目には見えない主を畏怖し、かの時を畏れかしこむ者のために。

50 これは、われらが下した祝福の戒め。それでもあなたがたは、それを拒絶するのか。

51 すでにわれらは、以前にイブラーヒームに［判断と選択について］善徳を与えた。われらは、彼［が預言者としてふさわしいこと］をよく知っていた。

52 彼が、その父と民とにこう言ったときのこと。「あなたがたが崇拝している、これらの立像は何なのですか」。

53 彼らは言った。「私たちは、先祖がこれらに仕えていたのを習った」。

54 彼は言った。「本当に、あなたがたもあなたがたの先祖も、明らかな誤りの中にいる」。

55 彼らは言った。「あなたは真理をもって来たのか、それともたわむれているのか」。

56 彼は言った。「いいや、あなたがたの主とは諸天と大地の主であり、それらを創始した御方であり、私は、そのことに対する証言者のひとり。

57 アッラーに誓って。あなたがたが背を向け立ち去った後で、私はあなたがたの立像のことで策を練るとしましょう」。[13]

58 それから彼は、大きなものをひとつだけ残して、それら［立像］を粉々にした。彼らがやがて帰ってくるだろうと［考えてのこと］。[14]

59 ［帰ってくると、粉々になった立像を見て］彼らは言った。「私たちの神々に、誰がこのようなことをしたのか。その者は、本当に不正をなす者だ」。

60 彼らは言った。「私たちは、イブラーヒームという若者が、これら［の神々］について何ごとか言い及んでいるのを耳にした」。

61 彼らは言った。「それでは、彼を人々の目の前に連れてこい。彼らが証言者となるだろう」。

62 ［イブラーヒームが連れてこられ、］彼らは言った。「私たちの神々に、このようなことをしたのはあなたなのか、イブラーヒームよ」。

63 彼は言った。「いいや、これ、この中でもっとも大きなこれがしたことだ。だからこれに尋ねなさい、もしこれらに、もの言うことができるなら」。

64 すると彼らは自分自身に立ち返り、それから［心の中で］言った。「あなたがただ。不正をなす者とは、まさしくあなたがた自身だ」。

65 そののち、彼らは再び［考えを］逆戻りさせて言った。「イブラーヒームよ。あなたは、これらが口をきかないことを知っていたのだ」。





66 彼は言った。「それではあなたがたはアッラーをさし置いて、いささかの益にもならず、害にもならないものに仕えるのか。

67 みっともないことだ、あなたがたも、あなたがたがアッラーをさし置いて仕えているものも。それでもあなたがたは、考えないのか」。

68 彼らは言った。「あなたがたにやるつもりがあるなら、［ただちに］彼を燃やしてあなたがたの神々を助けなさい」。[15]

69 われらは告げた。「火炎よ、涼しくなれ。イブラーヒームに平安であれ」。[16]

70 すると彼らは、彼に対し策を企んだ。しかしわれらは［彼らの策をくじき］、彼らの方を敗者にした。

71 われらは彼［イブラーヒーム］と［その甥］ルートを、諸世界のためにわれらが祝福した地へと救い出した。[17]

72 またわれらは、彼［イブラーヒーム］に［子の］イスハークと、加えて［孫の］ヤアクーブを授け、それぞれ正しい者とした。[18]

73 われらは彼らを、われらの命令によって導く先導者とした。また彼らに、善事をなし、礼拝のつとめを守り、喜捨をするよう啓示した。そして彼らは、ただわれら［のみ］に仕えていた。

74 またルートについて。われらは彼に知恵と知識を与え、醜悪な行いにふけるあの町から救い出した。本当に彼らは悪しき民、背く者であった。

75 われらは彼を、われらの慈悲の中へ受け入れた。本当に彼は、正しい者であった。

76 またヌーフについて。以前に、彼が呼び求めたときのこと。われらは彼に応じ、彼とその家族を大いなる［洪水の］災害から救い出した。

77 われらは、われらのしるしを嘘よばわりする民から彼を助けた。本当に彼らは悪しき民であった。それ

でわれらは、彼らをことごとく溺れさせた。[19]

78 またダーウードとスライマーンについて。ある民の羊が「夜の間に」耕地の中を食べ荒らしてしまい、そのことについて裁決が下されたときのこと。われらは彼らの裁決に立ち会っていた。[20]

79 われらはそれをスライマーンに理解させ、またそれぞれに知恵と知識を与えた。そしてダーウードのために山々を使役させ、また鳥たちと共に讃美させた。そうさせたのはわれらである。[21]

80 また彼には、「戦闘の際の」暴力を防ぐための「鎖でできた」鎧帷子（くさりかたびら）の作り方を教えた。それであなたがたは、感謝するようになるのか。

81 またスライマーンには嵐の風を「従わせた」。それは彼の命令により、われらが祝福した地に吹いた。われらは、ありとあらゆるものごとを知っている。

82 また悪魔たちの中には、彼のために「水底に」潜る者や、それ以外のはたらきをする者もあった。そしてわれらは、常に彼らを見張っていた。

83 アイユーブが、その主に呼びかけたときのこと「を思いなさい」。「本当に、私は「病や不幸の連続という」困難に遭いました。しかしあなたこそは、慈悲深い者のうちもっとも慈悲深い御方」。[22]

84 そこでわれらは彼に応じ、彼の困難をとり除いた。彼にその家族を倍にして与えた。われらからの慈悲として、また「われらに」仕える者たちへの戒め（いまし）として。

85 またイスマーイールとイドリースとズルキフルについて。いずれも、よく耐える者たちであった。

86 われらは彼らを、われらの慈悲の中へ受け入れた。本当に彼らは、正しい者であった。

87 またズンヌーンが、怒って出かけていったときのこと「を思いなさい」。彼は、われらの定めが自分の上に及ぶことはないと思っていた。しかし、暗闇の中で彼は呼び求めた。「あなたの他に、いかなる神もありません。あなたに讃美あれ。私は、不正をなす者でした」。[23]





88 そこでわれらは彼に応じ、彼を苦痛から救い出した。このように、われらは信仰者を救い出す。

89 またザカリーヤーについて。彼がその主に呼びかけたときのこと。「主よ。相続者のうち、あなたこそもっともすぐれた御方。「とはいえ」私を、孤独のままに放っておかないでください」。

90 そこでわれらは彼に応じ、彼にヤフヤーを授けた。彼のために、その妻を「身ごもるよう」いやしてのこと。本当に彼らは、互いに競い合って善行をなし、願望と畏怖をもってわれらに祈っていた。そして彼らはわれらに対し、「常に」謙虚であった。

91 また、その貞潔をよく保った彼女「マルヤム」について。われらは、彼女の中にわれらの霊を吹き込んだ。そしてわれらは彼女とその子を、諸世界のためのしるしとした。[24]

92 本当に、あなたがたのこの共同体が、あなたがたの唯一の共同体。そしてわれは、あなたがたの主である。それゆえ、われに仕えなさい。

93 しかし彼らは、彼らのあいだで「宗教に関する」ものごとを分裂させた。すべてはわれらの許へ帰りつくというのに。

94 誰であれ、信仰者として正しい行いをする者は、その尽力（じんりょく）を拒まれることはない。われらは、「彼らのために」それらを記録している。

95 われらが滅ぼした町「の住民」には禁制が敷かれ、彼らは帰ってくることができない。

96 ヤージュージュとマージュージュが解き放たれ、すべての丘「の斜面」から駆け下りてくるときまでは。

97 そして真理の約束が近づく。見なさい。「真理を」拒んでいた者は「恐怖のあまり、ただ」凝視する。「なんということだ。私たちは、このことを顧み（かえり）ずにいた。私たちは不正をなす者だった」。[25]

98 あなたがたも、あなたがたがアッラーをさし置いて崇めていたものも地獄の薪。あなたがたは、そこへ降りてゆくことになるだろう。

99 もしそれら［偶像］が神々であったなら、そこへ降りてゆくことはなかっただろうに。それらはいずれもその中に、永遠に住まうだろう。

100 その中で、それらはため息をつく。しかしその中では、何も聞こえないだろう。[26]

101 本当に、先んじてわれらからすばらしいものを得ていた者たち、これらの者は、そこ［地獄］から隔てられる。

102 そこのかすかな音でさえ、彼らが耳にすることはないだろう。そして彼らは、その魂が焦がれていたところに永遠に住まうだろう。

103 ［復活と審判の］大いなる恐怖が彼らを嘆かせることもない。天使たちが彼らを出迎える。「これが、あなたがたに約束されていたその日」。

104 その日、われらは書き記された巻物を巻くように、天を巻き上げるだろう。われらが最初に創造を始めたように、われらは再びそれを繰り返そう。それは、われらが自らに定めた約束。本当に、われらは必ず行う。[27]

105 戒め（いまし）の後に、われらはすでに詩篇の中にも書き記しておいた。「この大地を継ぐのは、われの正しいしもべたち」。[28]

106 本当にこの［クルアーンの］中には、［主に］仕える民への伝言がある。

107 そしてわれらがあなた［ムハンマド］を遣わしたのは、ただ諸世界への慈悲のために他ならない。

108 言いなさい。「私はただ、あなたがたの神は唯一の神であると啓示されただけ。それであなたがたは、服





従する者［ムスリム］になるのか」。

109 しかし、もし彼らが背を向けるなら言いなさい。「私は、あなたがたに対し公平に告げ知らせた。あなたがたに約束されたものが近いのか、あるいは遠いのかは私の知るところではない。

110 かの御方は、公然の言葉も知っている。また、あなたがたが隠すことも知っている。

111 そしてそれがあなたがたに対する試みなのか、しばらくのあいだの楽しみなのかは、私の知るところではない」。

112 ［ムハンマドは］言った。「主よ、真理による判断を下してください。あなたがたの述べることについては、私たちの主、慈愛あまねく御方の助けを願います」。[29]

1 「戒め（いまし）を授かっている人々」。アラビア語で「アフル・アル＝ズィクル」とは、タウラート（トーラー、律法）やクルアーンといった諸々の聖典に精通した学者を指す。この場合、そうした学者がムスリムであるかどうかは問われない。

2 悔い改め、行いを正す機会はいくらでもあったというのに、彼らはそのたびに神のメッセージを拒み、あからさまに反抗してきた。ところが、本当に怒りが下されるらしきことを感じ取ると、彼らは逃げ出そうとする。しかしそれでは遅すぎるのである。それに、どこに向かおうとも神の怒りから逃げおおせることなどできないのである。

3 悪事を重ねてきた者が後悔したとしても、今や何の役にも立たない。遅すぎたのである。彼らはすべてを失ったのであり、何ものにも救うことはできない。

4 悪事を重ねてきた者が、実際に［神の］怒りが下されるのを目にすると、一斉に逃げ出そうとするが、しかしどこにも逃げ場はない。

5 言及されているのは、人々が想像力から生み出す様々な種類の偽りの神々についてである。二一節から二三節では、偶像や地域ごとの神話に登場する神々なり、あるいは神格化された英雄や動物、樹木、自然現象など、地上において人間がその時々に崇拝してきた対象について述べられている。これらの崇拝対象は、崇拝する者自身が与える以外の生命を持たない。

6 「慈愛あまねく御方は、御子をもうけたもう」。これは、天使たちは神の娘であるとするアラブの迷信を指している。こうした迷信は、すべて神の栄誉に反する。預言者たち、天使たちは、神の被造物であり、しもべである以上の何ものでもない。

7 神への信仰を軽率に拒むのも、あるいは即座に懲罰が下されることを期待するのも、のちに現世と来世の両方における後悔の種となる。マッカの住民は、預言者を嘲笑して「あなたの言うことが本当かどうか分かるように、今すぐこの場で『懲罰』を起こしてみせてくれ」と言った。しかし「懲罰」が起きてからでは、真理を受け入れるには遅すぎる。実際に「懲罰」が近づいてくるのを目にすれば、彼らは決してそれが急いで下されるのを望みはしないだろう。むしろより多くの時間、より長い猶予を欲しがるはずである。

8 これと同様の節に、六章一〇節がある。時が満ちれば、今は嘲笑されているものと嘲笑している者の立場が、完全に入れ替わることになる。

9 この文脈において、「アッ＝ラフマーン（慈愛あまねく御方）」としての神に言及することには、あらゆる被造物を守る保護者とは神であり、また神のみであるということを知らしめるという意味がある。

10 解釈者たちによれば、神が減じる「地」とは、イスラーム以前の人々が支配していた領域を指す。マッカで啓示された





この節は吉報であり、クルアーンの奇跡のひとつとみなされた。ただし他の解釈者たちは、この節をマディーナでの啓示としてみなしている。その場合、これは未来に関する預言ではなく、ムスリムの勢いが増しているという、政治的な事実を述べたものということになる。

11 「復活の日のために、われらは正道に即した天秤を設ける」。これについて、解釈者たちは次のように解釈している。（1）審判の日、世界じゅうで起きていた不正が最終的に正される。（2）その日、輝きを放つ巨大な天秤が置かれ、人間の行いが量られる。

12 ここで用いられている「フルカーン（規範）」という語は、真実と虚偽を見分ける神の天啓としての能力か、あるいはそれ自体が基準であるクルアーンそのものを意味するとも考えられる。

13 イブラーヒームはこの言葉を、「誰の前でもなく」ひとりでこっそりとささやいたが、一人だけ、これを聞いていた者がいたとも伝えられている。彼は「偶像を奉じていた」人々に対し、彼らの偶像が無力であることを納得させようとしていた。しかし彼のとった手段は、決して不当なものではなかった。彼は人々に、彼らが偶像に背を向けて立ち去ったときに何かことを起こすだろうと事前に伝えているのである。偶像の方こそ、彼らに依存し世話を必要としているのだということを知らしめるためだった。そして人々は彼の言うことにとりあわず、彼の思うようにさせたのだった。

14 解釈書によれば、偶像を破壊したのちに、イブラーヒームは自分の斧を、中でも首領と目されている偶像の首にぶら下げた。しばらくして見世物の見物に出かけていた人々が帰ってくると、そこには破壊された偶像が散乱していた。

15 イブラーヒームの民はこの意見に賛成し、彼を火あぶりにしようと火を燃やした。そして彼の手足を縛り、炎の中に投げ入れた。イブラーヒームは言った。「私には、神のご加護があれば十分である。私が仕えるのはただ神のみである」。

16 神の命令により、炎がイブラーヒームを焼くことはなかった。その結果、彼に拷問を加えようとした人々は完全に挫（くじ）かれることになった。

17 ルートはイブラーヒームの甥にあたる。彼もまた預言者の一人である。イブラーヒームとその妻、そしてルートは、民の手から救われ、別の土地へと移住し、その地で彼らの教えを説いてゆくことになった。

18 解釈者たちによれば、実りある豊かな土地とはダマスカスとパレスチナであるという。いずれも多くの預言者たちが遣わされ、また信仰を説きはじめた土地であり、みのり豊かな土地であったのもそのためである。

19 解釈者のバイダーウィーによれば、ヌーフの民は真理を拒んだだけではなく、邪悪で有害な行いに染まっていた。これらふたつの罪のためにヌーフの民は自らを大いに損ねており、そこへ神は確固とした懲罰を下した。

20 ダーウードとその息子スライマーンは、羊飼いと農夫の間で起きた揉めごとの裁き手としてつとめたが、それぞれに異なった裁決に至った。ダーウードは、羊の群れと穀物の畑を等価とみなし、畑の持ち主に賠償として羊の群れをすべて差し出すべきであると結論した。一方でスライマーンは、畑を羊飼いに委ね、元どおりにして返せばよいと結論した。そして返すまでの間のみ、羊から取れる乳や羊毛、また生まれた仔羊を畑の持ち主である農夫に与えるようにとも述べた。ダーウードは息子の意見に同意し、自らの裁決を取り下げた。

21 クルアーンは、多くの章句において太陽や月、海や山といった物理的な意味での宇宙を構成しているエレメンツや、それらに伴う昼と夜のような自然現象のすべてが、人間の利益として供されるために存在すると告げている。山々や小鳥たちを従わせ、彼と共に神の栄光を賛美させたというダーウードの才能は、神が彼に授けた特別な贈り物の現れである。ただしそれは、そうした事物や生きものの賛美が聞こえる才能という意味であって、実際に彼が賛美を促したということではない。あらゆる創造物は、たとえ凡人には聞こえなくとも、常に神を褒めたたえる賛美の歌を歌っている。

22 バイダーウィーが述べている通り、アイユーブは大家族に囲まれた裕福な人物だった。しかし彼の一族は崩壊し、家族のほとんどが命を落とした。彼の所有物と財産も失われてしまった。彼は十年の間、大病を患って苦しんでいた。しかしこれらすべての災難にもかかわらず、苦痛を訴えようとはしなかった。神の意志に従うことと、健やかさを求めることは矛盾していると考えたのである。しかし妻の求めに応じ、彼はようやく神に祈る、すなわち委ねることに同意した。





23 「ズンヌーン」とはアラビア語で「魚の主」を意味し、預言者ユーヌスの呼び名である。巨大な魚との邂逅（かいこう）を称えて、この名を授かった。彼はしばらくの間、自分の民を信仰に招いたものの、受け入れられることがなかったため絶望し、怒りに身を任せ、彼らに下されるだろう災厄から逃れようと彼らを見捨てて立ち去った。ある典拠によれば、彼の民はようやく行いを改めて信仰の道に入ろうとしていたところだったのだが、彼は耳を貸さず足早に去ってしまったともいわれる。彼は船に乗り込んだが、海上で暴風に巻き込まれた。船の貨物を軽くするため、船から飛び降りることを余儀なくされた彼は、海中で巨大な魚に飲み込まれた。魚の腹中で、彼は上記の節の祈りを主に捧げた。

24 マルヤムと、その息子イーサーのこと。

25 九四節では、信仰する者たちの努力は決して無駄にされることはないと述べられている。九五節では、信仰を持たず、悪しき行いのために滅ぼされた人々には、行いを改めて正しい努力を積み重ねる機会は二度ともたらされないことが知らされる。なぜなら再び現世に戻り、悔悟することもできないからである。続く九六節では彼らの喪失は、復活の日の前触れともいわれる、ヤージュージュとマージュージュを閉じ込めていた壁が開かれ、また彼らが山という山に現れ、地上全体に散らばるまで続くと告げられている。別の解釈によれば、人々が墓からよみがえるまでともいわれる。九七節では、不信仰の者、堕落した人生を送った者は、あらかじめ定められていた裁きの日が到来したそのときになって、初めて自分が正しい道から逸（そ）れていたことを理解できるようになることが警告されている。しかしそのとき、彼らには自らを責める以外に何もできない。

26 きたるべき来世において、心の耳が「聞こえない」のは、現世において真理の声に耳を澄まさずにいたことが招いた、避けがたい結果である。同様に、目が「見えない」まま忘れ去られるのも、真理に対して霊的な目を閉ざしていたことに対する苦役の一部である。二〇章一二四節から一二六節も参照。

27
の姿と同様に創造する」という意味である。
「われらは再びそれを繰り返そう」とは、「われらはすべてを消滅させる。そしてすべてが消滅したあとで、再びかつて

28
この節で「詩篇」とした「ザブール」という語は、律法を指すものと解釈されることも少なくない。他にも解釈者たちの中には、これを時の終わりまで守られる、神の訓戒の碑版を示したものとして解釈する者もある。「ザブール」とは、神によって啓示されたすべての書物の総称でもあるからである。最後には善良さが勝利することを告げるこの啓示は、イスラームの楽観的な人生観をよく表している。

29
真理を拒む人々は、不幸や堕落、そして敗北がムスリムに降りかかるだろうと口々に述べた。彼らは、イスラームが勧める同胞愛は崩壊するものと考え、イスラームという宗教も短期間で消え失せるものと予想していたのである。だがこの節が告げている通り、預言者はすべての信頼を主に託した。他の解釈者によれば、信仰なき人々はクルアーンを魔術的な呪文として、あるいは夢想のたぐいとして受け止めた。預言者の祈りは、こうした虚偽の告発に対する反論である。彼はクルアーンの成就については、神が万事を保証するものと確信していた。

# 第二二章　アル＝ハッジ　巡礼

マッカ啓示

アル＝ハッジ、すなわち「巡礼」の章は、二六節から三八節にあるマッカ巡礼についての説き明かしにちなんでこの名で呼ばれている。ある典拠によれば本章はマッカ啓示とされているが、別の典拠ではマディーナ時代のものといわれている場合もある。本章は、主に聖なる家のもつ霊的な意味に始まり、巡礼と犠牲、攻撃を受けた際に真理を守るための努力や戦い、またそれ以外にも利己主義を克服し、虚偽を根絶するためにどうふるまうべきかを扱っている。ある部分はおそらくマッカ後期に、またそれ以外はマディーナで、それぞれ啓示されたものと思われる。しかし、時系列についての疑問は、ここではさほど重要ではない。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 人々よ、あなたがたの主を畏れなさい。本当に、かの「定められた」時の激震は大いなるもの。

2 その日、あなたがたは見るだろう。乳を飲ませる者はみなその乳飲み子を忘れ、身ごもっている者はみなその身ごもっていたものを流してしまう。人々は、みな酔っているかのように見える。酔ってはいないのに、アッラーの懲罰が厳重なために。





3 人々の中には、何の知識もなくアッラーについて言い争い、いつも反逆の悪魔に従う者がいる。

4 彼「悪魔」については、誰であれ彼を友とする者は迷わされ、烈火の懲罰へ導かれるものと定められている。

5 人々よ。もしあなたがたが、復活について疑いの中にいるのなら「、考えてもみなさい」。われらはあなたがたをほんのかけらから創造し、そののち精のひとしずくに、そののち血の凝ったものに、そののち胚（はい）の、形ある部分もあれば、形なき部分もある塊にした。それはあなたがたに「神のみわざを」明らかに示すため。それからわれらの望むまま、定められた時まで子宮の中に残しておく。そののち、われらはあなたがたを幼な子として生まれ出させ、それから十分に成長させる。あなたがたのうち、ある者は「若くして」召される。またある者は、知っていたはずのことが何ひとつ分からなくなるほど、歳を重ねておとろえる。「ムハンマドよ、」あなたは大地が荒れ果てるのを見るだろう。しかし、そこへわれらが雨を降らせると、それは弾み、ふくらみ、あらゆる種類の愛らしい双葉が芽を出す。[1]

6 それはアッラーこそが真理であり、死せるものに生をもたらし、あらゆるものごとにおいて全能であるゆえ。

7 本当にその時は到来する。そのことに疑いの余地はない。アッラーは、墓の中にいる者をよみがえらせるだろう。

8 人々の中には、何の知識も導きも、あるいは光を照らす啓典もなく、アッラーについて言い争う者がいる。

9 斜（なな）めにかまえて、アッラーの道から「他者を」迷わせようとする者。そうした者には、現世においては恥辱（ちじょく）があり、また復活の日にはわれらが、燃え盛る懲罰を味わわせよう。

10 これは、かつてあなたがたが自分の手で送り届けたもの。本当にアッラーはそのしもべたちを、決して

不当に扱わない。

11 また人々の中には、端の方でアッラーに仕える者がある。良いものが降りかかれば安堵する。しかし、もし試練が降りかかれば顔を背ける。そうした者は、現世も来世も失う。これこそ、明白な損失。[2]

12 彼らはアッラーをさし置いて、彼らの害にもならず益にもならないものに呼びかける。これこそ、遠く迷い去った者。

13 彼らは自分の益よりも、害に近いものに呼びかける。何と悪い主人だろうか、何と悪い同輩だろうか。

14 本当にアッラーは、信じて正しい行いをする者を、川がその下を流れる楽園へ入らせる。本当にアッラーは、意図する通りのことを行う。

15 現世でも来世でも、アッラーは彼［使徒］を助けないだろうと考えている者があるなら、誰であれその者には天まで縄を張らせなさい。それから、それを断ち切らせなさい。そののち、そうした策が自分の怒りをぬぐい去ってくれるものかどうか、よく見させるようにしなさい。[3]

16 このように、われらはそれを明白なしるしとして下した。本当にアッラーは、意図する通りに導く。

17 信じる者、ユダヤ教徒、サービアの徒、キリスト者、マジュースの徒、そして多神を奉ずる者［については］、復活の日、アッラーが彼らのあいだを明快にするだろう。本当にアッラーは、すべてのものについて証言する。[4]

18 あなたは見たことがないのか、諸天にあるもの、大地にあるもの、太陽も月も、星々も山々も、植物も動物も、また人々の多くもアッラーにひれ伏すのを。しかし懲罰に値する者も多い。そしてアッラーにさげすまれた者は、誰にも貴ばれない。本当にアッラーは、望む通りのことを行う。[5]

19 これら両者は、その主について反目し合う敵同士。［真理を］拒む者たちには、火炎の着衣が仕立てられ、





その頭上には沸騰した水が注がれる。[6]

20 それで下腹の中にあるものも、その皮膚も溶かされるだろう。[7]

21 また、彼らのために鉄の棍棒がある。

22 苦痛のため、そこから出てゆこうとするたびに、その中へ戻される。「燃えさかる懲罰を味わえ」。

23 本当にアッラーは、信じて正しい行いをする者を、川がその下を流れる楽園へ入らせる。その中で、彼らは黄金の腕輪や真珠を身に飾り、彼らの衣は絹である。[8]

24 ［現世において、］彼らはすぐれた御言葉に導かれ、称賛にふさわしい御方の道に導かれてきた。[9]

25 ［真理を］拒み、アッラーの道と、また在住の者か外来の者かにかかわらず、等しく人々のためのものとした禁制のマスジドとをさえぎる者たち、また誰であれ、その中で聖性を犯し不正を意図する者に、われらは痛烈な懲罰を味わわせるだろう。

26 またわれらがイブラーヒームのために、かの家の場所を定めたときのこと［を思いなさい］。「何ものをも、われと同列に連ねてはならない。また［カアバの周囲を］巡り回る者、［礼拝に］立つ者、頭を垂れてひれ伏す者のために、われの家を清めなさい」。

27 人々に巡礼のことを告げ知らせなさい。彼らはみな徒歩で、あるいは痩せたらくだに乗って、遠く深い峡谷を渡り、あなたのところへ来るだろう。

28 諸々の益［をもたらす祝祭］に立ち会い、定められた日々のあいだ、かの御方が糧としてもたらした家畜のけものの上に、アッラーの御名を唱えるために。それゆえ、あなたがたはそれを食べなさい。哀れな者、持たざる者にも食べさせなさい。[10]

29 それから、あらかじめ定められている通りの所作を終わらせ、諸々の誓いを果たし、古来の家を巡り回

らせなさい。[11]

30 「巡礼については」このような通り。誰であれ、アッラーの聖なることを重んじる者には、これが主の御許においてもっともすぐれたこと。また家畜は、あなたがたに読み聞かされているもの以外、あなたがたにとり合法である。そして嫌悪すべき偶像を避けなさい。偽証の言葉を避けなさい。

31 アッラーに対し、他の何ものをも同列に連ねることなく純正でありなさい。誰であれ、アッラーに何ものかを連ねる者は、まるで空から落ちて鳥にさらわれたか、あるいは遠い場所へ風に吹き飛ばされたかのようなもの。[12]

32 このような通り。アッラーの儀礼を重んじるのは、畏れる心によるもの。

33 それら「家畜」は、定められた時まであなたがたの役に立ち、そののち、古来の家のそばで捧げられる。

34 また、糧としてもたらされた家畜のけものの上にアッラーの御名を唱えるようにと、われらはすべての共同体に、それぞれの儀式を設けた。あなたがたの神は唯一の神。それゆえ、この御方に服従しなさい。「ムハンマドよ、」あなたは、謙虚な者に良い報せを伝えなさい。

35 アッラーを想い起こすとその心がおののき、降りかかることによく耐え、礼拝のつとめを守り、われらが糧としたものの中から「施しに」費やす者たち。

36 われらが、アッラーの儀礼のためとしたらくだは、あなたがたにとりもっとも良いもの。それゆえ並べられたそれらに対し、アッラーの御名を唱えなさい。そしてそれらが「屠られ、絶命して」横に倒れたとき、それらを食べなさい。表立って請わない者にも、請う者にも食べさせなさい。このように、われらはそれら「犠牲の家畜」をあなたがたに使役させる。あなたがたは、感謝するようになるだろう。

37 アッラーに届くのはそれらの肉でも、それらの血でもない。あなたがたの篤信が届く。このようにかの





御方はそれらをあなたがたに使役させる。あなたがたを導いたことに対し、あなたがたがアッラーを讃えるようにと。行いの善良な者に、良い報せを伝えなさい。[13]

38 本当にアッラーは、信じる者を防護する。アッラーはすべての不誠実な、恩を忘れる者を愛さない。

39 不正をなされたために戦う者には、それは許されている。そして本当にアッラーは、彼ら「の勝利」を助けることもできる。[14]

40 ただ「私たちの主はアッラーです」と言ったというだけのために、正当な理由なくしてその館から追放された者たち。もしアッラーが人々に、互いに対する自衛をさせていなかったら、修道院も、教会も、シナゴーグも、マスジドも、その中でアッラーの御名が多く唱えられるところは破壊されていただろう。アッラーは、この御方を助ける者を助ける。本当にアッラーは強大にして威力がある。

41 もしわれらが、地上でその身を立てさせたなら、礼拝のつとめを守り、喜捨をし、親切を勧め、非道を禁じる者たち。ものごとの結末はアッラーに属する。[15]

42 もし彼らがあなた「ムハンマド」を嘘よばわりするなら、彼ら以前にもヌーフの民が、またアードとサムードの民が嘘よばわりしていた。

43 またイブラーヒームの民も、ルートの民も、

44 またマドヤンの仲間も。またムーサーも嘘よばわりされた。われらは「真理を」拒む者を猶予し、そののち捕えた。それでわれらの拒絶は、どのようであったか。[16]

45 不正をなしている町を、われらはどれほど滅ぼしたことか。それらは屋根から崩れ落ちた。また捨てられた井戸も、高い城も「どれほどであったか」。

46 彼らは地上を旅し、その心で考え、その耳で聞いたことはないのか。彼らの目が見えていないのではない。

胸の中にある、心［の目］が見えていない。[17]

47 また彼らは、懲罰はまだかとあなたを急かす。アッラーは、決してその約束を破らない。あなたの主の御許の一日は、あなたがたの数える千年にあたる。[18]

48 不正をなしている町を、われらはどれほど猶予したことか。そののち、われらはそれらを捕えた。そして行き着く先はわれにある。

49 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「人々よ。私はあなたがたへの、［警告を］明らかにするひとりの警告者」。

50 信じて正しい行いをする者たち。彼らには赦しと、貴い糧があるだろう。

51 しかしわれらのしるしを頓挫（とんざ）させようと尽力（じんりょく）する者たち、これらの者は業火の仲間。

52 あなた以前にわれらが遣わした使徒も、預言者も、何かを望むとき、悪魔がその願望の中に干渉してこないことはなかった。しかしアッラーは、悪魔の干渉を無に帰す。そののち、アッラーはその御しるしを完成する。アッラーは、すべてを知りもっとも賢明である。[19]

53 ［主は］悪魔に干渉させ、心の中にやまいのある者、心を頑なにされた者に対する試練とする。不正をなす者は、深刻な不和の中にある。[20]

54 知識を与えられている者たちは、それがあなたの主からの真理であると知り、それを信じ、心を謙虚にするだろう。本当にアッラーは、信じる者を必ずまっすぐな道へ導く。

55 しかし［真理を］拒む者たちは、それについての疑いを抱き続けることだろう。彼らに突然、かの時が来るか、あるいは荒廃の日の懲罰が科されるまでは。[21]

56 その日、王権はアッラーに属する。かの御方は、彼らの間に判断を下す。信じて正しい行いをした者は、至福の楽園に入るだろう。





57 しかし［真理を］拒み、われらのしるしを嘘よばわりした者、これらの者には屈辱の懲罰があるだろう。

58 また、信じてアッラーの道のために移り住み、そののちに殺されたか、あるいは［死をもって］召された者には、アッラーは必ず最善の糧をもたらすだろう。そして本当にアッラーは、糧をもたらす者としてもっともすぐれている。[22]

59 本当にかの御方は、喜ばしいところへ彼らを入らせるだろう。そして本当にアッラーは、すべてを知りもっとも寛容である。

60 このような通り。誰であれ、自分が受けたのと同様の応報を科したのに、その後になって［再び］虐（しいた）げられるようなら、アッラーは必ずその者を助けるだろう。本当にアッラーは容赦し、もっともよく赦す。[23]

61 それはアッラーが夜を昼に入らせ、また昼を夜に入らせるため。本当にアッラーはすべてを聞き、すべてを見る。

62 それはアッラーこそ真理であり、かの御方をさし置いて彼らが呼びかけているものは嘘いつわりであり、本当にアッラーこそ至高の御方、至大の御方であるため。

63 あなたは見たことがないのか、アッラーが空から雨を降らせ、それで大地が緑になるのを。本当にアッラーは細やかな、熟知している御方。[24]

64 諸天にあるもの、大地にあるもの、すべてこの御方に属する。そして本当にアッラーこそは満ち足りた御方、称賛にふさわしい御方。[25]

65 あなたは見たことがないのか、アッラーが地上にあるものをあなたがたに使役させ、その命令によって船に海を渡らせ、また許しなくして地上に落ちることのないように天を掲げるのを。本当にアッラーは人々に対し、憐れみ深く慈悲深い。[26]

66 あなたがたを生かし、そののちに死なせ、そののちに［再び］生かすのもこの御方。本当に人間は恩を忘れる。

67 われらはすべての共同体に、それぞれのとり行なう儀式を設けた。それゆえ、そのことについて彼らにあなたと争わせてはならない。あなたは［彼らを］、あなたの主に呼び招きなさい。本当にあなたは、まっすぐな導きの上にある。[27]

68 しかし、もし彼らがあなたと争うなら、こう言いなさい。「あなたがたの行いについては、アッラーがもっともよく知っている。[28]

69 あなたがたのあいだで相争っていたことについては、復活の日、アッラーが判断を下すだろう」。

70 あなたは知らないのか、アッラーは天と大地にあるものをすべて知っているということを。本当にそれは、［御許の］書物の中に記されている。本当にそれは、アッラーにはたやすいこと。

71 それでも彼らはアッラーをさし置いて、かの御方が何の権威も下しておらず、また自分でも何の知識もないものに仕える。不正をなす者に、助け手はない。

72 われらの明白なしるしが読み聞かされるとき、あなたは［真理を］拒む者たちの顔に、拒絶の表情を認めるだろう。彼らはわれらのしるしを読み聞かせる者を、ほとんど襲撃せんばかり。言いなさい。「それなら、それよりもさらに不幸なことを、あなたがたに報せようか。それは業火のこと。アッラーは、［真理を］拒む者たちにそれを約束した。行き着く先の、何と悪いことか。[29]

73 人々よ。ここにひとつの例えを示そう。それゆえ、これに耳を傾けなさい。本当に、あなたがたがアッラーをさし置いて祈っているそれらのものには、たとえそのために皆で集まったとしても、蝿（はえ）の一匹さえ創造できない。また、たとえ蝿（はえ）に何かを盗まれたとしても、それを取り戻すこともできない。探求する方も、





探求される方も、いずれも弱いものである。[30]

74 彼らは、アッラーの真価を見極められずにいる。本当にアッラーは強大にして威力がある。

75 アッラーは天使の中から、また人々の中から使徒たちを選ぶ。本当にアッラーはすべてを聞き、すべてを見る。[31]

76 彼らの前にあるものも、彼らの後にあるものも知っている。万事はアッラーに帰される。[32]

77 信じる者たちよ。あなたがたは頭を垂れてひれ伏し、あなたがたの主に仕えなさい。より良い行いをするようにしなさい。そうすれば、あなたがたは栄えるだろう。

78 またアッラーのために、真理を尽くして励みなさい。かの御方はあなたがたを選んだ。また宗教の中で、難しいことは何もあなたがたに課さなかった。あなたがたの父、イブラーヒームの宗旨（しゅうし）である。以前にも、またこれ［啓典］の中でも、かの御方はあなたがたをムスリム［、すなわち服従する者］と名づけた。それにより使徒があなたがたの証言者となり、またあなたがたが人々の証言者となるため。それゆえ礼拝のつとめを守り、喜捨をし、あなたがたの守護者であるアッラーにしっかりとすがりなさい。何とすぐれた守護者だろうか、何とすぐれた援助者だろうか。[33]

1 第一に、死後の生について、本当に心の中に疑いを持っているのなら、すべきことは自分自身の本質に、あるいは自分自身を取り巻く本質に注意を働かせることのみである。自分自身の身体ひとつをとっても、それが生命のない物質から

精子や卵子、受精卵、胎児を経て赤ん坊として生まれ、子どもになり、少年期・青年期を経て年老いてゆき、やがて死を迎えるという成長の過程をたどる。これは驚くべきことではないだろうか。地上という低いところにおいてさえ、人間ひとり生の中に、これほど巧みな段階を与えた創造者が、その終わりに別の生を与えるとしても何の不思議もない。また外界を眺めてみれば、枯れて不毛な大地であっても、神の慈雨が降り注げば、そこに命が芽生え、様々な美しい姿かたちに育ってゆく。この偉大な美の創造者に、もうひとつの新たな世界を創造することができるのは確かである。第二に、無から完成へと至る人間の身体的な成長のサイクルを言葉で記述するとき、その美しさを余すところなく完全に理解できるのは生物学者であろう。身体的な成長と並行して、人間の霊的/精神的な成長にも、段階というものが存在する。これは神の創造的な美しさを通して理解することが可能になるかもしれない。第三に、この節では、神の豊かな慈悲と恩恵を語るのに、人間の生命の神秘が例としてあげられている。ここでは、来たるべき生か、あるいはそれよりも偉大な約束を授ける神の威力を説き明かすのに用いられている。

2 この節は、信仰する者のように見えても誠実ではなく、現世の利益を期待しているだけの人々に対する非難を意図したものである。ある解説によればこの節は、マディーナに移住したアーリブと呼ばれる一族のうち、ある者の言動に関連して啓示されたという。彼は常々、「この宗教の信徒になるとは、私も賢い選択をしたものだ。おかげで良いことずくめだ」と言っていた。彼の妻には健やかな子どもが次々と生まれ、財産も増える一方だった。彼は非常に喜んでいた。しかしいざこざが起きたり、そのために失うものがあったりすると、彼はたちまち不信仰の状態に戻り、「この宗教のせいで、多くの不幸に襲われるようになった」と不平をこぼした。現世と来世の両方を失う者とは、まさしくこれである。

3 「天まで縄を張らせ」るとは、「自分の家の天井から縄をぶら下げる」とも訳される。この節の意味は、おそらく次の通りである。「もしも神が、現世においても来世においても勝利をもたらしてはくれないだろうと思うなら、その者に縄なり梯子なりを持って来させ、天に登り、預言者に下される啓示を断ち切れるものかどうか、試させるといいだろう。





そしてそのような行いが、神の差し伸べる助けの手の妨げとなるものかどうかを考えさせるのがいいだろう」。

4 「サービアの徒」とは、ユダヤ教徒とキリスト者の中間に位置付けられる一神教的な宗教集団を指すものと思われる。その呼称は、おそらく「水に浸る」という意味のアラム語「ツェーバ」を語源としており、これは預言者ヤフヤー（洗礼者ヨハネ）に従った信仰者を連想させる。その場合、現代のイラクに一定のコミュニティを形成しているマンダ教徒を指すものと考えられる。一方で、いわゆる「ハッラーンのサービア教徒」と呼ばれた一種の神秘主義的な宗教集団が、イスラーム初期の時代まで存在していた。こちらは、ムスリムによるすべての一神教的な宗教集団に対する優遇を得るために、「サービアの徒」を名乗った可能性も否定できない。両者を混同しないよう留意すべきだろう。

「マジュースの徒」とは、古代ペルシアのゾロアスター教徒（いわゆる拝火教徒）のこと。

5 宇宙のすべては、部分に分かたれる。一方は物質的な世界、もう一方は精神的な世界である。生きものも無生物も、創造されたすべてのものは、神をその前提として存在している。自らの存在を神に委ねているこの状態を、彼らのサジダ、すなわち礼拝における平伏の姿勢であると解釈できる。これらの存在それ自体が、その神への依存を表明している。どうしてこれらが、崇拝の対象になりうるだろうか。

6 自らの主について告白し、主の意志を実践しようと努める信仰者と、自らの主を拒み、主の意志を無視する者とがここで暗示されている。

7 身体的な言葉で表現されている場合であっても、懲罰とはすべてに浸透するものであり、表面上にのみとどまるものではない。

8 本章一四節では、行いの正しい者の運命が、その場の都合で行いを変える日和見主義者や偽の神々を崇拝する者（八節から一三節）と対比され、説き明かされていた。ここでは、迫害と虐待を受け、カアバに入るのを妨げられ、平穏無事な人生を送るのに必要なあらゆる手立てを奪われた人々の例が取り上げられている。彼らのためには、ここでは運命はそ

うした苦難をすべて否定する黄金の腕輪、真珠、絹の衣といった暗喩を用いて語られている。

9 ここでの「すぐれた御言葉」とは、クルアーンの解釈者によれば、「神の他に崇拝すべきものなし」という一神教的な信仰の表明を指す。

10 物質的な生活と霊的な生活の、どちらにとっても利益となるものがここに説き明かされている。前者は、交易を促し、知識を増やすといった、社会的な交わりに関連している。後者は、神聖な結びつきを通して、はるか古代までさかのぼる人間の霊的な憧れを認識し、その一部を実現する様々な機会を指す。いずれにせよ巡礼とは、国境を超えたムスリムどうしの同胞の絆を強めるための契機をもたらすものと考えることができる。巡礼における特別な三日間とは、ズルヒッジャ月の八日、九日、十日を指し、その後にタシュリークの日と呼ばれる二日間、ないし三日間が続く（二章一九七節参照）。ズルヒッジャ月十日は、犠牲を記念する大祭の日（イード・アル＝アドハー）にあたる。家畜が屠（ほふ）られ、その肉が貧しい人々や困窮している人々に配られる。

11 「定められている通りの所作」。爪や毛髪といった身体上の余剰な成長については、巡礼のために聖別されたイフラームの状態にある間は取り除いてはならないとされる。こうした身支度は、巡礼が完了した十日めに整えることが許される。巡礼の精神は、外形的な儀式を一通りこなせば完成されるというものではない。巡礼者は、巡礼の間にたてた誓いや奉仕の精神を心にとどめ、その実行に努めるべきである。それがあって初めて、真のタワーフが完成するのである。

12 意義深いたとえである。真の唯一の神への崇拝から逸（そ）れた者は、楽園から墜落した人間そのもののようである。偽ものを崇拝の対象として選ぶ者は、天からの落下のさなかに空中で鳥にさらわれる獲物のようである。嵐（すなわち神の怒り）の中、激しい風に吹かれ、自身が想像していたどのような場所からも遠く離れた場所、神に逆らった人々の入る場所である地獄に投げ入れられる。

13 三四節では、犠牲の本質が説き明かされている。真の唯一の神が、血や肉を欲しているなどと考えるべきではない。流





血の犠牲によって神を慰撫（いぶ）するといった考え方は迷信的な幻想である。しかし神は、篤信の心という捧げものを受け入れる。目に見える形での儀式は、その象徴として必要とされているに過ぎない。神は人間に、動物を家畜として従える能力を授け、その肉を食することを許したが、それはただ神の名においてのみである。生きるために別の命を奪うという厳粛な行為において、神の名を唱えることがなければ、人間は命の神聖さを忘れてしまう。この祈願があってこそ人間は、自分自身の無秩序な残忍性を意識して制御し、「必要な分量のみ食べる」という原点に立ち返ることができるのである。

14 言い換えるなら、「なされた不正の度合いと相応の戦いが許されている」。前節での「信仰に至った者を、神は『あらゆる悪』から救う」という約束とも相まって、この節は身体的・物理的な自衛のために戦うことの許可を明示している。アブドゥッラー・イブン・アッバースによれば、この節は預言者がマディーナに向かうためにマッカを離れた直後、すなわちヒジュラ暦最初の年に啓示された。唯一、認められている自己防衛のための戦闘行為の原則については、それからおよそ一年ののちに啓示された雌牛の章により詳細に示されている。二章一九〇節から一九三節とその注釈を参照。

15 「親切を勧め、非道を禁じる」ことは、ムスリムの共同体の重要な義務であり、共同体そのものの立ち上げの目的のひとつでもある。イスラームとは、神の意志に正しく従うことである。これには、信仰と善行の両方が必要とされる。

16 預言者が詐欺を働いているとして糾弾（きゅうだん）されるのは特に目新しいことではない。いつの時代にも、同様のことが起きた。

17 アラビア語で「カルブ（心）」とは、知性と理性の座すところであると同時に、愛情や直観、感情の座すところでもある。神のメッセージを拒む者は、身体的な目や耳は持っていても、心の目、心の耳は持ち合わせていない。理解する能力が眠った状態にあるのなら、自分を取り巻く環境の中に、自然の摂理や神の怒りの徴を見出したり、あるいは遠くへ旅をし、様々な都市や遺跡を観察したりするなどして、知性を活発に働かせるよう努めるべきだろう。

18 もしも神が猶予を与えたのならば、それは与えられた人にとり、悔悟と改悛（かいしゅん）のためのまたとない機会ということになる。

神が猶予を約束したのなら、約束が破られることは決してない。しかし一方で、神はすべての人々を呼び集め、自らの行いについて申し開きをさせるとも約束している。そこには正義の執行と、罪に対する懲罰も含まれている。この約束もまた、必ず実現するのである。人間の計る時間とは、相対的なものに過ぎない。神の存在は絶対であり、時間や空間による束縛を受けていない。人間ならば一千年と数えるところでも、神にとってはほんの一日、あるいは一秒に過ぎない場合もある。

19 預言者も使徒も単なる人間である。彼らの行いは正義であり、その動機も純正であるが、人間の視点からすれば、神の目的をより広い範囲に知らしめたり、対立する勢力を懐柔したりするには、権力や財産がもたらす影響力を持っていた方がよいと思うかもしれない。しかしそれは、実際には神の計画には反している可能性もある。神はその慈悲と天啓により、そうした擬似的、あるいは無益な策を一掃し、神の戒めを確認し、また強め、神のしるしや啓示をもって神の意志を知らせる。

20 神の意志と計画にはそぐわない考えが人間の心に浮かぶとき、そこにはふたつの相反する効果があらわれる。邪悪な心にとり、それは邪悪からの試練であり誘惑となるが、信仰によってよく鍛錬された心にとり、それは自省を促し、信仰を強め、神の意志に沿うために、今まで以上に努力を重ねようという意識を刺激するきっかけとなる。

21 故意に真理を拒否する人々への懲罰とは、神から流れ出す慈悲の道を、そうした人々が自ら閉ざすことである。地上にある者すべての心の目からうろこがはがれ落ちる時が来ない限り、神は常に疑いと迷信の対象であることだろう。しかしその時を待っていたのでは、悔悟のための時間も残らなくなる。啓示を通して授けられていた導きから、益を得るにも遅すぎるということになるだろう。

22 「リズク」とは、維持に必要なもの、養いの糧を意味する。ここでは後者の意味を優先させて訳出した。死後に授かるリズクを考えたところで、それは途方もなく巨大な、暗喩の感覚でしか捉えられないからである。





23 通常、ムスリムたちは損害をこうむっても忍耐し、悪には善で報いるよう命じられている（二三章九六節）。しかし時と場合によっては、賢明な決断が人間としての感情の回復に役立つこともあれば、対立や戦時下においては「これ以上は善を返しようがない（物事には限度というものがある）」ということもある。その場合、加えられた危害を超過しない範囲での報復が許される。そうした報復を経て、公平さが取り戻された後になっても、相手側がさらに攻撃的な態度をとり、あらゆる限度を越えて実際に攻撃を加えてきた場合は、どのような過ちを犯そうとも神の庇護を受ける権利が保証される。神は過ちを何度でも拭い去り、また何度でも赦しを授ける御方である。

24 神の美名のひとつとしての「ラティーフ」は、その概念が表すところを言葉で定義するのは非常に難しい。（１）基本となる意味としては、繊細さ、精緻さ。（２）人の目には見えないほど、緻密かつ複雑玄妙な在りよう。（３）理解の範囲を越えた純粋さ。（４）繊細さと神秘の骨頂を十分に理解するのに完璧な情景。（５）非常に細やかなところにまで祝福を授けるほど、行き届いた親切と寛大さ。神は途方もなく鋭敏であり、どのような小さな物事にも、それに適した理解ある恩恵を授ける。

25 六一節から六三節には、それぞれの内容を通して、神のふたつの属性が告げられている。上記の節では、その全体像がまとめられている。このふたつの属性を知ることで、神の善徳をどう考えるかが理解できるようになる。神の愛のこもった優しさと慈悲は、お互いに依存し合う人間どうしの間で交わされる親切や、多くの場合は見返りを期待した優しさや慈悲とはまったく異なる。神は人間とは違い、あらゆる欲望を超越している。神が自らの創造物に依存することは決してあり得ず、見返りを求めることもない。したがって神の恩寵とは、授かったことにただひたすらに感謝し、賛美を歌いあげる以外にはない特別な性質を持ったものなのである。

26 大地も海も、神の命令によって人間に仕えるものと定められた。そのおかげで人間は、この地上で自分たちの生命を発展させ、またその恩恵を得ることができるのである。ここで「天」とした「サマー」の意味は次の通り。（１）何かし

ら高いところにあるもの、（2）屋根や天井、（3）空、楽園の天蓋、（4）雲や雨など。最後の雨は、神の優しさと慈しみを示している。神は、人間の利益のために雨を降らせる。またここでの「空」とは、神の意志によって定められた法則と軌道に従って運行する、星々や惑星をも含めた修辞表現であるとも考えられる（アル＝マラーギーの解釈による）。

27 儀式や典礼は、「宗教の法におけるより重大な問題」と比べれば、さして重要ではないように思われるかもしれない。しかしそれらは社会的・宗教的なつながりを組織するには必要不可欠であり、またそれらが個々人に及ぼす影響は軽視されるべきではない。いずれにせよ儀式や典礼は、それらが目に見える外的な象徴でもある以上、最も熱い論争を引き起こす場合がある。行き過ぎた論争は非難されるべきであるが、かといって儀式や典礼を過小評価してよいことにはならない。人間の社会的・宗教的な求めに最もふさわしいもの、それがイスラームにおける「最も正しい」儀式であり典礼のあるべき姿であろう。自分が正しい道を歩んでいると確信するムスリムなら、儀式や典礼について言い争うことに時間と労力を割くよりも、まずはすべての人々を受け入れるべきであろう。

28 論争になるのは、お互いに知識のないことをあるかのように論じるからである。言うべきことは、ひとつしかない。「私の行いについて、責任を負うのはあなたではない。またあなたの行いについて、責任を負うのは私ではない」。

29 これは皮肉である。「あなたがたは神の啓示としるしを嫌がる。だが悔悟しなければ、あなたがたにとってはこれよりもっと嫌なものが用意されている。避けられない懲罰に対して、あなたがたはどう反応するだろうか」。

30 偶像も、偶像を崇拝する者も、そろって愚かしくも貧弱な存在である。崇拝する方も崇拝される方も、どちらにも何の利益ももたらさない。

31 世の人々のために使徒として選ばれたのは、彼らと同じ人間である。天使のように精錬された存在では、お互いを理解し合い、親しくなることはできないからである。しかし時折、神の選んだ預言者に、メッセージを伝えるのに天使が遣わされることもある。神に選ばれ、愛される存在であるということを重視するあまり、彼らをあたかも神のようにみなし、





崇拝の対象とするべきではない。

32 「彼らの前にあるもの」「彼らの後にあるもの」とは、「人間の手中にあるもの、背中にあるもの」とも解釈される。ムジャーヒド、アターといった解釈者は、「手中にあるもの」とは「現世で、彼らの身の上に起こった出来事」を指し、また「背中にあるもの」とは、「来世で、彼らの身の上に起こる出来事」を暗示しているとする。一方でアッ＝ダカークやアル＝カルビーらはその反対に「手中にあるもの」が来世を指すとしている。「前へと向かう」先にあるのが来世であり、「後ろに残していく」のが現世だからというのがその理由である。

33 ここでは「励む」と訳出した「ジハード」を狭義の意味で捉えるなら、二章一九〇節から一九一節にその制約が明示されている通りである。しかし、霊的な利益を求めてなされる、真実で無私のあらゆる努力を表すのに、最も完全で一般的といえるのは、この語をおいて他にない。イスラームは本来的に、あらゆる人間が自らの能力を自由に、また思う存分に発揮するよう教える宗教である。アーダムの時代からの、それが人間にとっての普遍であるとしている。そしてこれを教えとして最初に説いたのが、ユダヤ教徒、キリスト者、そしてアラブのクライシュ一族にも共通する偉大な父祖イブラーヒームである。

# 第二三章　アル＝ムゥミヌーン　信仰者たち

マッカ啓示

本章は第一節に現れる語にちなんでか、あるいは信仰する者たちの勝利を主題としていることから、この章題で呼ばれているとも言えるかもしれない。預言者がヤスリブ（マディーナ）に移住する直前、マッカで啓示された最後の章であると考えられている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 信仰者は、確かに栄える。
2 謙虚に礼拝する者、
3 無意味な話を避ける者、
4 喜捨をする者、
5 また自分の貞節をよく守る者。
6 自分の配偶や、正当に召しかかえる者については別で、責めを負わされることはない。
7 しかしそれを越えて求めるなら、それは法外の者。





8 信頼に応じ、「羊飼いが羊を守るように」約束を守る者、
9 自分の礼拝を守護する者。
10 これらの者こそ相続者、
11 フィルダウスを受け継ぐ者たち。彼らは、永遠にその中に住まうだろう。[1]
12 そして本当に、われらは土の精髄から人間を創造した。
13 そののち、われらはそれを精のひとしずくとし、安全な宿りの場に置いた。
14 そののち、われらはそのひとしずくを血の凝ったものに創造した。それからこの血の凝ったものを胚に創造した。それからこの胚を骨に創造した。それから、われらはこの骨を肉で覆い、こうして別個の生命あるものとした。アッラーをほめたたえよ、創造者のうちもっともすぐれた御方。
15 そののち、その後になってあなたがたは必ず死を迎えるだろう。
16 そののち、本当にあなたがたは復活の日によみがえらされるだろう。
17 また、われらはあなたがたの頭上に七つの軌道を創造した。本当にわれらは、創造したものについて無頓着ではない。[2]
18 また、われらは空からちょうど良い量の雨を降らせ、地の中に留まらせる。そして本当に、われらはそれを取り上げることもできる。[3]
19 それにより、われらはあなたがたのために、なつめやしやぶどうの園を生じさせた。その中には、あなたがたのための果実が多くあり、あなたがたはそれを食べるだろう。
20 また、シナイの山からは、食べる者のための油や風味を産みだす木を生じ出させた。
21 また、家畜にもあなたがたのための教訓がある。われらは、それらの下腹の中にあるものをあなたがた

に飲ませる。また、それらにはあなたがたのための多くの益がある。また、あなたがたはそれらを食べ、

22 またそれらに乗り、また船に乗って、あなたがたは運ばれる。

23 われらはヌーフをその民に遣わした。彼は言った。「私の民よ、アッラーに仕えなさい。あなたがたには、[4] この御方をおいて他に神はない。それでもあなたがたは、畏れないのか」。

24 すると彼の民の中で、〔真理を〕拒んでいた長老たちが言った。「これ〔ヌーフ〕はあなたがた同様、ひとりの人間に他ならない。彼はあなたがたよりも優位に立ちたがっている。もしアッラーがそう望むなら、きっと天使たちを下していただろう。大昔の先祖からも、こんなこと〔があったと〕は聞いていない。

25 彼はただ、とり憑かれたひとりの男に過ぎない。それゆえしばらくの間、構えて待っていよう」。

26 彼〔ヌーフ〕は言った。「主よ、助けてください。彼らは私を〔嘘つきだといって〕拒みました」。

27 われらは、彼に啓示した。「われらの目の前で、われらの啓示によって船を築きなさい。そしてわれらの命令が到来して、かまどから水があふれ出たとき、あらゆる生きものをひとつがいずつと、またあなたの家族の中から、あらかじめ御言葉が申し渡されている者以外をその中に運びなさい。そして不正をなす者たちについて、われに話しかけてはならない。彼らは溺れるだろう。

28 そしてあなたと、誰であれあなたと共にいる者が船に乗り込んだとき、言いなさい。『アッラーに称賛あれ、不正をなす民から私たちを救った御方に』。

29 また、〔こうも〕言いなさい。『主よ。祝福された上陸の地に、私を上陸させてください。上陸をかなえる者として、あなたはもっともすぐれた御方です』」。

30 本当にその中には御しるしがある。われらは、常に試練をもたらす者。

31 それから、彼らの後には、われらは別の世代を興した。[5]





32 また、われらは彼ら自身の中からひとりの使徒を遣わした。「私の民よ、アッラーに仕えなさい。あなたがたには、この御方をおいて他に神はない。それでもあなたがたは、畏れないのか」。[6]

33 しかし彼の民のうち、〔真理を〕拒み、来世で〔神と〕会することを嘘であるとし、それでいて現世の生ではわれらのもたらす奢侈を享受しつつ、長老たちは言った。「これは、あなたがたと同様のひとりの人間に他ならない。あなたがたの食べるものを食べ、あなたがたの飲むものを飲んでいる。

34 そしてもしあなたがたが、あなたがたと同様のひとりの人間に従うなら、本当にあなたがたは敗者となるだろう。[7]

35 彼はあなたがたに、あなたがたが死んで塵と骨になったとき、〔再び〕起き上がらされると脅すのか。

36 とんでもない、とんでもない脅しをされたもの。

37 あるのは現世の生のみ。私たちは死にも生きもするが、よみがえらされることはない。[8]

38 彼はただ、アッラーについてねつ造したひとりの人間に過ぎない。私たちが、彼を信じることはないだろう」。

39 彼は言った。「主よ、助けてください。彼らは私を〔嘘つきだといって〕拒みました」。

40 かの御方は告げた。「もうすぐ、後悔するばかりとなるだろう」。

41 そして咆哮の一声が、真理によって彼らを襲った。われらは、彼らを枯れ屑のようにした。それゆえ遠ざかれ、不正をなす民よ。

42 それから、彼らの後には、われらは別の世代を興した。

43 どの共同体にも、その期限を早めることも、また遅らせることもできない。

44 そののち、われらはわれらの使徒を続けて遣わした。使徒がその共同体に到来するたびに、彼らは彼を

嘘よばわりした。それでわれらは、彼らに互いの後を追わせ、［名ばかりが残る］昔話にした。それゆえ遠ざかれ、信じない民よ。

45 そののち、われらはわれらのしるしと、明白な権威ともどもムーサーとその兄ハールーンを遣わした、

46 フィルアウンとその長老たちに。しかし彼らは高慢にふるまった。彼らは、高ぶった民であった。

47 彼らは言った。「私たちと同様の人間である二人を、私たちが信じるべきだというのか。彼らの民は、私たちの奴隷だというのに」。

48 それで彼らは二人を嘘であるとし、滅ぼされることとなった。[9]

49 われらはムーサーに啓典を与えた。それで彼らも、導かれるようになるだろうと。[10]

50 また、われらはマルヤムの子とその母をしるしとなし、二人を、流れる泉のある静かな高台に保護した。[11]

51 使徒たちよ。あなたがたは良いものを食べ、正しい行いをしなさい。本当にわれは、あなたがたが何を行うかすべて見ている。

52 本当に、あなたがたのこの共同体が、あなたがたの唯一の共同体。そしてわれは、あなたがたの主。それゆえ、われを畏れなさい。

53 しかし彼らは派閥となり、彼らのあいだでものごとを分裂させた。どの党派も、それぞれ自分たちの持てるものをありがたがっている。

54 それゆえ彼らについては、しばらくのあいだ惑乱（わくらん）の渦の中に放っておきなさい。

55 彼らはこう思ってでもいるのか。われらが彼らに財や子どもを差し出してやり、

56 彼らのために良いことを急いでやっているとでも。いいや、彼らは何も気づいていない。

57 主を畏怖し、畏れかしこむ者たち、





58 また主の御しるしを信じる者たち、

59 また主に何ものをも同列に連ねることのない者たち、

60 また主に帰りつくことに心をおののかせ、自分の与えるべきものを与える者たち。[12]

61 これらの者は、より良いことのためにわれ先にと急ぐ先駆者たち。

62 そしてわれらはどの者にも、その能力以上のことは負わせない。われらの許には真理を語る［記録の］書があり、それゆえ彼らが不当に扱われることはない。[13]

63 いいや、これについて、彼らの心は惑乱（わくらん）の渦の中にある。彼らの行いは、これをさし置いてなされ続ける。

64 彼らのうち贅沢にしている者を、われらが懲罰をもって捕えると、見なさい。彼らは［助けを求めて］うめき声をあげる。

65 「今日になってうめくな。本当にあなたがたには、われらからの助けはないだろう。

66 われのしるしは、すでにあなたがたに読み聞かされていたが、あなたがたは踵（かかと）を返して去ってゆき、

67 これに対して高慢にふるまい、夜ごとに罵っていた」。

68 彼らは、御言葉を深く考えることをしないのか。それとも彼らの大昔の先祖には来なかったものが、彼らには来るというのか。

69 それとも彼らにはその使徒が見分けられず、それで彼を拒絶するのか。

70 それとも彼らは、「彼はとり憑かれている」と言うのか。いいや、彼は、彼らに真理をもたらした。しかし彼らの多くは、真理を嫌う。

71 しかし、もし真理が彼らの欲求に従っていたなら、諸天と大地と、何であれその中にあるものはきっと退廃していただろう。いいや、そうではない。われらは彼らに、彼らへの戒め（いましめ）を与えた。しかし彼らは、

その戒めから背き去る。[14]
72 それともあなた［ムハンマド］は、彼らに貢ぎ物を貢ぐよう求めてでもいるのか。あなたの主の貢ぎ物こそ最良というもの。糧をもたらす者として最良の御方。
73 また、本当にあなたは、彼らをまっすぐな道へ呼び招く。
74 しかし来世を信じない者たちは、道から逸れてゆく。
75 たとえわれらが、彼らに慈悲を垂れ、彼らから困難をとり除いても、彼らは逸脱に執着し、その中をあてもなくさまようだろう。
76 われらは、すでに懲罰をもって彼らを捕えた。彼らはその主に屈することも、謙虚になることもしない。
77 やがてわれらが、厳重な懲罰の門を彼らに開くと、見なさい。彼らは、そこで絶望するだろう。[15]
78 あなたがたに聞く耳と見る目を、また諸々を感知する心を持たせたのは御方。あなたがたのうち、感謝する者はわずかであるが。[16]
79 またあなたがたを、地上に増やしたのは御方。そしてあなたがたは、御方へと集められるだろう。
80 生を与え、死をもたらすのはこの御方。夜と昼とを交替させるのはこの御方。それでもあなたがたは、考えないのか。
81 いいや。彼らは、大昔の人々が言っていたのと同じようなことを言う。
82 彼らは言う。「私たちが死んで塵と骨になったとき、よみがえらされるというのか。
83 すでに私たちも、私たちの先祖も、以前にこれを約束された。そのようなもの、大昔の人の伝説に過ぎない」。
84 言いなさい。「大地と、そこにあるものすべては誰に属するのか。もしあなたがたが、知ってさえいたなら」。





85 彼らは言う。「アッラーです」。言いなさい。「それでもあなたがたは、想い起こそうとはしないのか」。
86 言いなさい。「七つの天の主、大いなる玉座の主とは誰であるのか」。
87 彼らは言う。「アッラーです」。言いなさい。「それでもあなたがたは、畏れないのか」。
88 言いなさい。「ありとあらゆるものごとの王権は誰の手にあるのか。すべてを守るのは御方であり、御方に対する守りとなれるものは何もない。もしもあなたがたが、知ってさえいたなら」。
89 彼らは言う。「アッラーです」。言いなさい。「それでは、どうしてあなたがたは惑わされたのか」。[17]
90 いいや、そうではない。われらは彼らに真理を与えた。そして本当に、彼らは嘘をついている。
91 アッラーは子をもうけない。また、この御方と共に並ぶ神もない。さもないとすべての神が、それぞれ自分の創造したものを取り立て、お互いに相手を制そうとするだろう。彼らが述べていることを超越する、アッラーに讃美あれ。[18]
92 ［主は］目には見えないものと見えるものとを知る。彼らが［主に］連ねるものを超越していと高きにおわす。[19]
93 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「主よ。もしあなたが、彼らの［懲罰の］約束を私に見せようというなら、
94 主よ。私を、不正をなす民の中に置かないでください」。
95 ［ムハンマドよ、］本当にわれらは、彼らに約束したものを、あなたに見せることができる。
96 もっとも善なるものをもって、悪を追い払いなさい。われらは、彼らが述べていることをもっともよく知っている。
97 そして言いなさい。「主よ。あなたに、悪魔のささやきからの加護を求めます。
98 あなたの加護を求めます、主よ。さもないと、彼らが私の前に現れるでしょう」。

99 やがて、彼らのうち誰かに死が訪れるとき、その者は言うだろう。「主よ。私を［現世に］帰らせてください。

100 それにより私は、やり残してきた正しい行いをすることができます」。断じて、そうではない。それは、ただ言葉で言っているだけ。復活の日まで、彼らの後ろには境がある。[20]

101 そして喇叭（らっぱ）が吹き鳴らされるとき、その日、彼らのあいだの関わりはなくなり、互いに尋ね合うこともないだろう。

102 その秤（はかり）［の目方（めかた）］が重かった者、これらの者は［真に］栄える者。

103 また、その秤（はかり）［の目方（めかた）］が軽かった者、これらの者は、自分自身を損ねた者。永遠に、地獄の中に住まうだろう。

104 業火が彼らの顔を焦がし、その中で彼らは［苦しみのあまり］歯を剝（む）きだしにする。

105 「われのしるしが、あなたがたに読み聞かされたのではないか。しかしあなたがたは、それを嘘であるとした」。

106 彼らは言う。「主よ。私たちは不幸に打ち負かされてしまったのです。私たちは、さまよえる民だったのです。[21]

107 主よ。私たちを、この中から出してください。それでもし私たちが［悪を］繰り返すようなら、本当に私たちは不正をなす者です」。

108 かの御方は告げるだろう。「その中で卑（いや）しめられよ。われに話しかけてはならない。

109 本当に、われのしもべたちの中には、『主よ、私たちは信じます。それゆえ私たちを赦し、私たちに慈悲を垂れてください。あなたは慈悲深い者のうち、もっとも慈悲深い御方』と言う一派があった。





110 しかしあなたがたは、彼らをからかいの的にし、われを想い起こすことを忘れた。あなたがたは、彼らを笑っていた。

111 本当に、この日われは彼らに報いる、彼らがよく耐えていたために。本当に、彼らこそ勝利する者」。

112 かの御方は告げるだろう。「あなたがたは、地上で何年を過ごしたのか」。

113 彼らは言うだろう。「私たちは一日か、あるいは一日のうち数刻を過ごしました。数えている者に尋ねてください」。[22]

114 かの御方は告げるだろう。「あなたがたが過ごしたのは、ほんのわずかなあいだであった。もしあなたがたが、知ってさえいたなら。

115 あなたがたは、われらがあなたがたを無為に創造したとでも思っていたのか。またあなたがたが、われらに帰されることはないとでも」。[23]

116 アッラーは至高であり、王者であり、真理である。貴い玉座の主である御方の他に、いかなる神もない。

117 誰であれ、何の証拠もない他の神をアッラーと共にして祈る者には、主の御許にその清算があるだけ。本当に、［真理を］拒む者は栄えない。

118 言いなさい。「主よ、赦しと慈悲がありますように。あなたこそは、慈悲深い者のうちもっとも慈悲深い御方」。

1 上述の一〇節と一一節では、人間が授かる報奨について言及されているが、これを理解するには、現世において人間が置かれている実際の立場と、必然としての来世についての説き明かしが必要となるだろう。そこで次の節以降では、こと人間に関する、神の創造のみわざが要約されている。ここでは最も初期の段階、すなわち何も存在しない無から原始的な生の創造については言及されていない。だが人間の誕生についての説き明かしは、無機物から有機物への、創造のプロセスについてのそれでもある。大地にある無機質のものが、食物を通して生きた身体に取り入れられると、身体はこれを再生し、体内で精子が作られる。卵子もこれと同様である。これらが組み合わさって胚となり、母親の子宮でしばらくのあいだ保護され、養われるのである。

「フィルダウス」とは楽園のひとつを指す。もっとも高いところにあるとされ、クルアーンにおいてはこの節と一八章一〇七節に言及がある。

2 「タラーイク（タラーイカ）」とは、軌跡、通り道、軌道、道筋など、ここでは目に見える範囲での宇宙における天体の運動を指す。太陽系の惑星などは、定期的に、はっきりと地上からも観察できる。こうした天体の運動について、議論をより確実なものとするには、天文学を学ぶ必要があるだろう。しかし、ただ空を見上げるという最もシンプルな観察をするだけでも、その壮大な光景は、宇宙の美しさ、秩序、壮大さ、そして崇高さといった感覚を知ることはできるのである。

3 通常、雨はくまなく大地に行き渡る。一度、土に染み込んだ水分は、長い間その中に保たれ続ける。そして何層にも重なった土壌に浸透してゆき、やがて自然地理学でいうところの地質や地形を形成する。より高い保水力を有する土壌であれば、例えばトルコの一部の地域のように、雨季が年間わずか数か月に限定されていても、一年を通して河川が豊かに流れ続けることを可能にする。空からの降水については、雨の他にも、雪や雹（ひょう）などがある。これらもまた、大気と土壌の効率的な循環に一役買っている。高地や山岳地帯に雪や氷河がなければ、河川の一部は豊かな流れを維持できなくなるだろう。蒸発や降水と同様にすばらしいのが、地表における水の下方への流れである。水はありとあらゆる方法を通して海や空に戻ってゆき、再び霧となってやがて雲を形成するというサイクルを繰り返す。

4 一二章四三節と同様、動詞としての「イブラ」の根源的な意味は、「解釈する」「詳しく説明する」「指図する、指導する」などである。名詞としてであれば、上記の節や一六章六六節、または三章一三節のように「教訓」といった意味もある。

5 直訳すれば「別の世代」である。しかしクルアーン的な用法では、「カルン」という語は必ずしも「ある［特定の］世代」を指すものではなく、むしろ「時代」や、その時代に属する人々や文明を、歴史的な意味で表すのに用いられていることの方が多い。

6 おそらくアードもしくはサムードの民を示すものと考えられる。

7 現世の享楽に耽（ふけ）り、来世の生については否定する、快楽主義者と呼ぶには偏狭な部類の人々がいる。彼らはまた、自分自身の地平線を広げようと努力する人に嫉妬するが、ここではその様子が鮮やかに描写されている。彼らは、自分自身の知識の範囲を超えた深刻な話題にはただ退屈するばかりなのである。彼らは言う。先のことを語り合ったところで、一体どのような益があるというのか。今さえ楽しければ、それで十分ではないか。今ここにあるもの、それがすべてだ。先のことなど、後回しにすればいい。

8 彼らの言葉は、次のようにも聞こえる。「来世の生など、存在しない。私たちは、いつかは必ず死を迎える。ある者が死ねば、またある者が生まれ、またある者は生き残る。そしてそのサイクルが延々と続いてゆく。死者が生き返ることなど、どうしてあり得るだろうか」。

9 「この者は、私たちが奴隷として従わせている民族の生まれである。そのような者を、どうして私たちが、神の使者として受け入れなくてはならないのか」。人種差別的な優越感がもたらす傲慢（ごうまん）さが、エジプトの民にこのような言葉を言わせたのである。

10 ここで言及されているのは、ムーサーに課された第二の使命についてである。そしてそれは、イスラエルの民の信仰が不足していたために何の役にも立たなかった。

11 イーサーの処女生誕は、彼とその母の両方にとり奇跡であった。彼女は不貞を働いたとされ、誤った非難を浴びせられたが、その子イーサーは、自ら奇跡を現して、堂々と彼女の潔白を証明し（一九章二七節から三三節）、また彼の母に対して向けられた中傷がいかに卑劣であるか、自らの人生をもって人々に示した。母子に与えられた安全な避難所がどこであったのか、その答えを探し求める必要はない。それについては、一九章二二節から二六節に記されている。そこは時が満ちたならば出産できるよう、彼女が籠もっていた場所である。実り豊かなつめやしの木が育ち、その下に泉が湧いて小川が流れているという点からして、それが高台や丘の上であるのは明らかだろう。彼女はそこに引き移って隠遁生活を送っていた。そして彼女が、自分の一族の許へ子を連れて戻る準備が整うまで、母子はその場所に留まり、安らかに過ごした。

12 これは慈善の形であれ、あるいは自分の正義感を満足させるためであれ、人間には、自分の同胞に対する無形の「贈り物」も含めて、道徳的に「他者に与える」義務があることを暗に示している。

13 その記録は、各人が何を行い、何を考えてきたのかを明白に語るものであり、これに従って、公正な裁きが下されることになる。

14 神は全知全能である。その神が築き上げた宇宙もまた、完璧な計画に即している。もしも低劣で利己的な、無知な被造物が、自分自身の欲望に従って計画を立てていたなら、混乱と腐敗に満ちた恐ろしい世界となっていたことだろう。

15 あるいは、「彼らはすべての希望を失うだろう」。

16 「心」は、ここでは感情と知性の両方が座す場所として理解されるべきである。人間は自らの主に感謝し、また主から授けられた祝福を、主への奉仕のために用いなければならない。そしてその場合の「奉仕」とは、世界じゅうのあらゆ





る人々のためになる奉仕として表されるはずである。

17 これらの節が明らかにしている通り、イスラーム以前のアラブたちも、実際には神の存在を認めていた。彼らは、単にムハンマドの預言者性と、彼らに対する導きとして啓示された祝福の書を信じなかったのである。また、八二節にもある通り、彼らは復活と来世についても否定した。

18 この節を通して、宇宙の創造とその秩序を解説するのに多神論はそぐわないということが明らかにされている。宇宙の存在と、その秩序の卓越性は、神の存在とその唯一性の反映かつ証明なのである。

19 「目には見えないもの、不可視の領域、幽玄界」と、「目に見えるもの、可視の領域、現象界」は、二つの別個の知識領域である。目に見えないものについての知識は、ある種の直観的な能力によってある程度までは到達できるが、意識や感覚の働きを通して獲得するのは不可能であり、啓示を通して学ぶ方がより正しく伝わりやすい。一般的には、「目には見えないもの」の領域については信仰を通して受け入れられるべきであり、それはクルアーン第二章の開始と終了の節において示されている通りである。

20 「バルザフ（境）」とは仕切り、障害または障壁といった意味である。人間が死後、裁きの前に置かれる場所または状態を指す。二五章五三節、五五章二〇節も参照。彼らの背後には死という壁が、また眼前には裁きが下されるまでの静止した状態、すなわち「バルザフ」がある。

21 「私たちは、さまよえる民だったのです」。本当に多くの罪人が、自分たちの失敗は抽象的な「不幸」に原因があると考えている。寓話的なこの「対話」を通して、そうした罪人に特有の無為な弁解が描き出される一方で、同時に、自由意志という要素が間接的に強調される。人間は、自らの行動やふるまいに責任を負っているのであり、罪人たちは、自分たちの意図的な選択によって悪に屈したことを忘れている。一〇九節から一一〇節ではその点が、正しくふるまう人々を嘲笑していた彼らの様子を描き出すことによって思い出させられている。

22
ここでの時間についての問いと答えは、二つのことを暗示している。（1）信仰を持たない人々の注意力は、彼らが直面する永遠よりも、現世における非常に限られた短い生の方に引き寄せられる。ここでは、霊の領域と肉の領域を比較した際に、彼らがどれほどその価値について見誤っていたかが示されている。（2）知られている通り、時間とは過ぎ去るものであり、ほとんど跡形もなく消えてゆく。それはちょうど、与えられているこの命が一時的な猶予に過ぎないのと同じである。

23
神の創造は、偉大で崇高な目的もなくなされたのではない。それは戯れでもなければ、単なる娯楽や遊興のためでもない。こと人間に関する限り、その最も重要な課題は、その人の行いのすべてについて回る。詩人のヘンリー・ワーズワース・ロングフェローは「人生は現実、人生は厳粛。そして墓はそのゴールではない」と言ったが、まさしくその通りである。人間は神の真理を真剣に探し求めねばならない。そしてその際には神の慈悲が無限であり、慈悲の方もまた私たちを探し求め、手を伸ばそうとしているということが、必ずや励みとなるはずである。

# 第二四章　アン＝ヌール　光

マディーナ啓示

本章はヒジュラ暦五年から六年め、すなわち預言者ムハンマドの死の五年前に啓示された。章題は三五節から四〇節、神の光について説き明かす箇所に由来している。一部の解釈者たちは、この章題は、人類のあるべき善良なふるまいのために定められた行動規範を示すところからこう名づけられていると述べる。神の光と創造について説き明かすいくつかの節を除いて、本章はイスラームの法を見事に映し出したものといえる。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 これはわれらが下し、また義務とした一章。その中には、諸々の明白なしるしを下してある。それであなたがたも、憶えておくようになるだろう。

2 姦通した女と姦通した男については、それぞれに百回の鞭打ち（むち）を科しなさい。もしあなたがたがアッラーと終末の日を信じているなら、アッラーの宗教において、両名に対し憐れみを抱いてはならない。また信仰者の一群を、刑罰の場に立ち会わせなさい。[1]

3 姦通した男は、姦通した女あるいは多神を奉ずる女以外と結婚してはならない。また姦通した女も、姦





通した男あるいは多神を奉ずる男以外と結婚してはならない。このことは、信仰者に対し禁じられる。

4 貞潔な女を非難しておきながら、そののち四名の証言者をあげることのできない者たち。彼らには、八十回の鞭打ちを科しなさい。そして以降は、決して彼らの証言を受け入れてはならない。これらの者は背く者、

5 後になって悔い改め、自らを正す者を除いては。本当にアッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。

6 また、自分の配偶者を非難しておきながら、自分以外の証言者がいない者。その場合、自分が真実を語っているとアッラーに四度、誓うこと。

7 そして五度めに、もし嘘をついているのなら、自分がアッラーに忌（い）まれるように、と［誓うこと］。

8 またこの場合、彼女が刑罰を避けるには、嘘をついているのは彼であることを四度アッラーに証言し、

9 そして五度めに、もし彼が真実を語っているのなら、自分の上にアッラーの怒りがあるように、と［誓うこと］。

10 もしあなたがたの上にアッラーの御恵みも、また慈悲もなかったなら。またアッラーが、悔い改めを受け入れる御方、賢明な御方でなかったなら［どうなっていたことか］。

11 本当に、この作り話を広めたのは、あなたがたの中のある連中である。それを、あなたがたにとり不幸なことと思ってはならない。いいや、それはあなたがたにとり良いこと。彼らのうち、誰もがそれぞれに自分の罪を得ている。中でも、このことの大部分を担った者には大いなる懲罰があるだろう。[2]

12 あなたがたがそれを聞いたとき、どうして信仰者の男女とも、自分の良心において「これは明白な作り話です」と言わなかったのか。

13 どうして彼らも、［自分たちの主張を証明する］四名の証言者を連れてこなかったのか。証言者をあげな

いとき、アッラーの御許においてはこれらの者［の方］が嘘をつく者。

14 もしあなたがたの上にアッラーの御恵みも、また現世と来世における慈悲もなかったなら［どうなっていたことか］。これについてしゃべり散らしたことに対し、あなたがたは大いなる懲罰に遭っていただろう。

15 あなたがたはそれを舌先で受け取り、また自分には何の知識もないことを口先で言い、それを些細なことだと思っている。しかしそれは、アッラーの御許では大それたこと。

16 それを聞いたとき、どうしてあなたがたは「こうしたことを話すのは、私たちにはあるまじきこと。あなたに讃美あれ。これは、深刻な中傷です」と言わなかったのか。[3]

17 アッラーはあなたがたに教示する。もしあなたがたが信仰者なら、これまでのこの［行いの］ようなことは、決して繰り返してはならない。

18 アッラーは、その御しるしをあなたがたに明らかにする。アッラーは、すべてを知りもっとも賢明である。

19 信じる者たちのあいだで不品行が広まるのを好む者には、現世においても来世においても痛烈な懲罰があるだろう。あなたがたは知らなくとも、アッラーは知っている。

20 もしあなたがたの上にアッラーの御恵みも、また慈悲もなかったなら［どうなっていたことか］。しかし本当にアッラーは親切で慈悲深い。

21 信じる者たちよ。あなたがたは、悪魔の足取りをたどってはならない。誰であれ悪魔の足取りをたどる者は、必ずや不品行と邪悪を命じるだろう。もしあなたがたの上にアッラーの御恵みも、また慈悲もなかったなら、あなたがたのうち誰ひとりとして、決して清らかにはなれなかっただろう。しかしアッラーは、御心にかなう者を清める。アッラーはすべてを聞き、すべてを知る。





22 あなたがたのうち、恩寵と富とを恵まれた者が、親族や貧しい者、そしてアッラーの道のために移り住んだ者に［援助を］与えない、などと誓ってはならない。［むしろ］彼らを容赦し、見のがしてやりなさい。あなたがたは、自分がアッラーに赦されるのを好まないのか。本当にアッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。[4]

23 貞潔で、［罪を犯すことなど思いつきもしない］無頓着な信仰者の女を非難する者は、現世においても来世においても忌まれることとなるだろう。彼らには大いなる懲罰があるだろう、

24 彼らの舌が、手が、足が、彼らの行ってきたことについて証言する日に。

25 その日、アッラーは彼らにふさわしい正当な報酬を十分に支払う。彼らは、アッラーこそ明白な真理と知るだろう。

26 邪な女は邪な男のためにあり、邪な男は邪な女のためにある。純良な女は純良な男のために、純良な男は純良な女のためにある。これらの者は、他者が何を言おうと潔白である。彼らには赦しと、貴い糧があるだろう。[5]

27 信じる者たちよ。あなたがたは、許しを求めてその［家の住人である］家人に挨拶をするまでは、自分の家以外の家に入ってはならない。その方があなたがたのために良い。あなたがたも、憶えておくようになるだろう。

28 もし誰もいないことが見てとれたなら、許しを得るまではそこに入ってはならない。また、もし帰るよう言われたなら帰りなさい。その方が、あなたがたにとり清らかである。アッラーは、あなたがたがしていることをよく知っている。[6]

29 住んでいる者がおらず、あなたがたのための［必要な］ものがある家に入るのは誤りではない。アッラー

30 は、あなたがたが明かすことも隠すことも知っている。[7] 信仰者の男に、視線を自制して隠しどころを守るよう言いなさい。その方が、彼らにとり清らかである。そしてアッラーは、彼らの行うところを熟知している。[8]

31 また信仰者の女に、視線を自制して隠しどころを守るよう言いなさい。外側にあらわれるものの他は、その身の飾りを誇示してはならない。頭布を胸元にかぶせなさい。自分の夫、あるいは自分の父、夫の父、自分の息子、夫の息子、自分の兄弟、兄弟の息子、姉妹の息子、［身内の］女、自分が正当に召しかかえる者、欲情をもたない男の従者、女の私的な部分を意識していない幼な子を除いては、飾りを誇示してはならない。隠している飾りを知らせようとして、足を踏み鳴らしてはならない。信仰者たちよ、皆そろって悔い改め、アッラーに立ち返りなさい。そうすれば、あなたがたは栄えるだろう。[9]

32 そしてあなたがたのうち未婚の者、またあなたがたの召しかかえる男女のうち正しい者を結婚させなさい。たとえ彼らが持たざる者であったとしても、アッラーはその御恵みをもって彼らを富ませるだろう。アッラーは果てしなく広大であり、すべてを知る。

33 結婚のための［婚資という］手立てが見出せない者には、アッラーがその御恵みをもって彼らを豊かにするまで慎むようにさせなさい。また、あなたがたが正当に召しかかえる者のうち、［解放の］証書を求める者がいて、あなたがたが彼らの中に何であれ良いところがあるのを知っているなら、彼らのために証書を書きなさい。またあなたがたが与えられているアッラーの富の中から、彼らにも与えなさい。また、あなたがたの召しかかえる娘たちが貞潔であろうと欲するなら、現世の生の利得を求めて売春を強いてはならない。しかし、誰であれ彼女たちに強いる者がいたなら、強いられた後の彼女たちに対し、本当にアッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深いことだろう。[10]





34 確かにわれらはあなたがたに、明白なしるしと、あなたがた以前の過去の人々の例と、畏れる者への教示を下した。[11]

35 アッラーは諸天と大地の光である。例えるならその光は、燭のある壁龕のよう。燭は硝子の中にあり、その硝子はきらめく惑星のよう。それは祝福の木、東のものでもなく、西のものでもないオリーヴによって灯される。その油は、火に触れもせず輝きを放つ。光の上にも光を照らす。アッラーは、御心にかなう者をその光へと導く。アッラーは、人々のために例えを示す。アッラーは、ありとあらゆるものごとを知る。[12]

36 高く建てられ、御名が想い起こされるのをアッラーにより許された家の中に［その燈はある］。そこでは、朝に夕に讃美がなされる、

37 商売や取引のせいで、アッラーを想い起こし、礼拝のつとめを守り、喜捨をすることから気を逸らすことのない者によって。彼らが恐れるのは、その心も目も転倒する日。

38 アッラーは彼らの最善の行いに報い、またその御恵みによってそれを増やす。アッラーは、御心にかなう者に計り知れない糧をもたらす。

39 ［真理を］拒む者たちについては、その行いは［何もない］平らかな地の蜃気楼のよう。渇いた者には水と思えるが、来てみると何も見出せず、ただそこがアッラーの御許であるのを見出すだろう。それからアッラーは、その者に十分な清算をする。アッラーは、たちまちにして清算する御方。[13]

40 あるいは、深い海の暗闇のよう。その上には波また波が、さらにその上には雲が、暗闇の上にも暗闇を重ねる。手を［前に］差し伸ばしてもほとんど見えない。アッラーが光をもたらさない者に、光はない。[14]

41 あなたは見なかったか、諸天と大地にあるもののすべてが、翼を広げる鳥さえもがアッラーを讃美するのを。

すべてが、それぞれに自分の礼拝と讃美の仕方を知っている。アッラーは、彼らのすることをよく知っている。

42 諸天と大地の王権はアッラーに属する。そして行き着く先はアッラーにある。

43 あなたは見なかったか、アッラーが雲を渡らせ、そののちつなぎ合わせ、そののち［一個の大きな］塊にするのを。それから、そのあいだから雨が降りだすのが見えるだろう。また、雹(ひょう)を含んだ山のような雲を空から下し、望むままにある者には降らせ、また望むままにある者には退(しりぞ)けさせる。雷光のひらめきは、ほとんど視界を奪う。

44 アッラーは、夜と昼とを交互に繰り返させる。本当にその中には、見る目を持つ者のための教訓がある。

45 アッラーはすべての生きものを水から創造した。そのあるものは下腹で、またあるものは二本の足で、またあるものは四本の足で歩く。アッラーは御心のままに創造する。本当にアッラーは、あらゆるものごとにおいて全能である。

46 われらは確かに、明白なしるしを下した。そしてアッラーは、誰であれ御心にかなう者をまっすぐな道へ導く。

47 彼らは言う。「私たちはアッラーと使徒を信じ、従います」。その後になって、彼らの中のある者たちは背を向けた。これらの者は信仰者ではない。[15]

48 彼らのあいだに判断を下すために、アッラーとその使徒の前に呼び出されると、見なさい。彼らの中のある者たちは背き去る。

49 もし真理が彼らにあるのなら、従順に彼のところへ来ていただろう。

50 彼らの心の中にはやまいがあるのか。あるいは疑惑があるのか。あるいはアッラーとその使徒が、彼ら





を不公平に扱うのを恐れているのか。いいや、これらの者こそ、不正をなす者。

51 彼らのあいだに判断を下すために、アッラーとその使徒の前に呼び出されるとき、信仰者はただ「私たちは聞き、従います」とだけ言う。これらの者こそ、栄える者。

52 誰であれ、アッラーとその使徒に従い、アッラーを畏怖し、畏れる者。これらの者こそ、勝者である。

53 彼らは、アッラーにかけて「もしあなたが命じたなら必ず出発するだろう」と、つとめて誓う。言いなさい。「誓うことはない。相応に従いなさい。本当にアッラーは、あなたがたの行いを熟知している」。[16]

54 言いなさい。「アッラーに従いなさい。使徒に従いなさい」。それでもしあなたがたが背を向けるなら、彼［使徒］には彼の運ぶべきものがあり、あなたがたにはあなたがたの運ぶべきものがあるだけ。もしあなたがたが彼に従うなら、あなたがたは導かれるだろう。しかし使徒に課されているのは、ただ［教えを］明白にのべ伝えることだけ。

55 アッラーは、あなたがたのうち信じて正しい行いをする者たちには、それ以前の者たちに継がせたように大地を継がせること、彼らのために認められた宗教を、彼らのために必ず打ち立てること、またその後には、彼らの恐怖に替えて、必ず安心がもたらされることを約束した。彼らはわれに仕え、何ものをもわれに連ねることはしない。しかし誰であれ、その後になって［真理を］拒むようになるなら、それらの者こそ背く者。[17]

56 礼拝のつとめを守り、喜捨をし、使徒に従いなさい。そうすれば、あなたがたは慈悲にあずかるだろう。

57 ［ムハンマドよ、真理を］拒む者たちが、この［アッラーが創造した］地上において逃れられると思ってはならない。彼らは、業火がその住まい。行き着く先の、何と悪いことか。

58 信じる者たちよ。あなたがたが正当に召しかかえる者、成熟していない者にも、三つの時間については、

あなたがたの「居室に入る前に」許しを求めさせるようにしなさい。早朝の礼拝の前、日中に「午睡のために脱いだ」衣類を脇に置いているとき、そして晩の礼拝の後である。これら三つの時間は、あなたがたにとり私的なもの。これら「の時間」以外は、あなたがたのあいだで互いに相手のところを巡り回ることは「許しを求めなくても」誤りではない。このようにアッラーは、あなたがたのためにその御しるしを明らかにする。そしてアッラーは、すべてを知りもっとも賢明である。[18]

59 あなたがたの中の幼な子たちが成熟したときは、彼ら以前の者たちもそうしたように、あなたがたの「居室に入る前に」許しを求めさせるようにしなさい。このようにアッラーは、その御しるしを明らかにする。そしてアッラーは、すべてを知りもっとも賢明である。[19]

60 また出産の時期を過ぎており、結婚を望んでもいない女が、飾りを誇示することなくその着衣を脇に置くことは誤りではない。しかし控えめにしている方が、彼女たちのために良い。すべてを聞き、すべてを知るのはアッラーである。[20]

61 目の見えない者に落ち度はない。足の悪い者に落ち度はない。病人に落ち度はない。あなたがた自身についても、どこで食べようと落ち度はない、自分の家であろうと、父親の家であろうと、母親の家であろうと、兄弟の家であろうと、姉妹の家であろうと、父親の兄弟の家であろうと、父親の姉妹の家であろうと、母親の姉妹の家であろうと、「それらのうち」あなたがたがその鍵を持っている家であろうと、友人の家であろうと。皆で一緒に食べても、別々であっても誤りではない。しかし家に入るときは、あなたがたはアッラーからの祝福された良い挨拶をもって互いに挨拶しなさい。このようにアッラーは、その御しるしを明らかにする。あなたがたも、考えるようになるだろう。[21]

62 信仰者とは、アッラーとその使徒を信じ、また用事のために彼と共にいるときに、彼の許しを求めるまでは立ち去ることのない者のこと。あなたの許しを求める者たち、これらの者こそアッラーとその使徒を信じる者たち。それで彼らが、自分の事情のためにあなたの許しを求めたなら、彼らのうちあなたがそうと望む者は許し、また彼らのためにアッラーの赦しがあるよう願いなさい。本当に、アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。[22]





63 使徒への呼びかけを、あなたがたが互いにする呼びかけと同じようにしてはならない。アッラーはあなたがたのうち、ひそかに逃げ出す者について知っている。それゆえ御方の命令に反する者は慎重になりなさい。さもないと試練が降りかかるか、あるいは痛烈な懲罰が降りかかるだろう。[23]

64 まさしく、諸天と大地にあるものはすべてアッラーに属するではないか。御方はあなたがたのあるがままを知っている。その日、彼らはその御許へ帰される。そして御方は彼らに、彼らの行いを告げ報せるだろう。アッラーは、ありとあらゆるものごとを知る。

1 この処罰は、未婚の男女にのみ適用される。既婚の男女で、特定の条件が揃っていれば、投石による処罰の対象となるが、最も重要とされるのは次の点である。（1）姦通の当事者である男女の両方が、実際の性交の行為の現場を取り押さえられていること。（2）善良な性質の人物であることが認められた、四名の目撃者がいること。（3）姦通の当事者である男女の両方による、なんら強制のない状態での、自由意志による姦通の告白が四回、繰り返しなされていること。解釈者たちは、預言者ムハンマドのスンナ（慣行）と、神により授けられた禁令のいずれもが、未婚者の姦通に対する処罰が百回の鞭打刑であるのに対し、既婚者の姦通については投石による死刑の場合もあり、両者は区別されるものとの

見解を示している。またこの節により、四章一五節が廃止された。

2 ここで言及されているのは、ヒジュラ暦五年から六年ごろにかけて、ムスタリク族との戦いに遠征していた際の帰路で起きたある特定の出来事についてである。出発の号令がかかったとき、アーイシャはどこかに落としてしまった大切な首飾りを探しに外へ出ており、自分の天幕にはいなかった。また、彼女の乗る駕籠にはヴェイルがかけられていたため、誰も彼女が駕籠の中にいないことに気づかなかったのである。翌朝、ムハージル（移住者）の一人でサフワーンという名の青年が、うっかりと野営地に忘れ物をし、大急ぎで戻ってきたところ、置き去りにされていたアーイシャを見つけた。彼は自分のらくだに彼女を乗せ、自分はらくだを引き、歩いてアーイシャを連れて戻ってきた。この出来事は、イスラームに敵対していた者たちに、悪意ある醜聞を広める絶好の機会を与えることとなった。その張本人となったのが、この節の末尾でも「大いなる懲罰があるだろう」と告げられている、マディーナの偽善者たちの頭領だったアブドゥッラー・イブン・ウバイイである。彼はこれ以外にも様々な罪や悪行を重ねていたが、その状態のまま死没してしまったため、悔い改めを経ていない罪人として霊的な懲罰をも科されることになった。彼の手先となっていた者たちについては、法の定める通りの処罰を受け、悔い改めを経たのちに、自らの人生を再び生き直す機会を得た。

3 正しい道とは、虚偽の誹謗中傷を流すことには加担せず、きっぱりと拒否する姿勢を示すか、あるいは少なくとも無視することで、噂話が広まるのを阻止することであった。「スブハーナカ」、すなわち「あなた（神）に讃美あれ」といった文言は、感嘆句として驚きや否認、嫌悪感といった意味を込めて用いられることもある。この場合、「中傷については、私たちはそれを信じない。また中傷する者についても、私たちは関わり合いたくない」と、感嘆句によって間接的に述べていることになる。

4 この節によって、すぐに思い浮かばれるのはアーイシャの父、アブー・バクルである。彼は霊的にも、また財力という意味でも豊かに恵まれた人物であった。彼は自分の財産を、イスラームとムスリムたちのために、いつでも惜しみなく





捧げた。アーイシャを中傷した者の一人に、ミスターフという名のアブー・バクルのいとこがいたことが判明した。アブー・バクルは、ミスターフへの援助を打ち切ってしまいたいと考えたが、ムスリムの倫理上、最も高い基準に照らせば、ムスリムのコミュニティ全体の平和と団結のためには、過ちについては許し、忘れることが最も幸福な結果をもたらすということが、この節を通じて告げられたのである。もちろん、この節の教えは、すべての時代のあらゆる場面においても通じるものである。寛大な保護者たるもの、個人的な怒りを理由に、たとえ重大な過ちを犯した者であっても援助を撤回すべきではない。神が赦したにもかかわらず、自分たちは許さないという道理があるだろうか。そのようなコミュニティに、コミュニティとしての意義があるだろうか。

5 神の法則に従えば人と人は、性質や資質、性格、あるいは利害などが一致している際に、完全に相手と調和することができる。しかしこの節によって強調されているのは、預言者ムハンマドの結婚した女性たちは皆、高潔で、自立した女性たちであったという点である。同時にまた、偽善者たちの一派がなすりつけようとした中傷から、アーイシャを解放するという意味も込められている。「これらの者は、他者が何を言おうと潔白である」という言葉からも、それが男女を問わず預言者の一族を指していること、またそこにはアーイシャも含まれることは明らかである。

6 住居に関する定めは厳格である。プライバシーは貴重であり、それは上品さと節度のある、行き届いた生活を送るには不可欠な要素である。住居の所有者が許可しない限り、他者の住居に足を踏み入れてはならず、また留守中に勝手に入るのは論外である。

7 住人のいない家屋とは、旅館や商店、市場、浴場など、特定の人々の集団に割り当てられているのではなく、公共一般の使用を目的とした施設を意味している。

8 他者の私的な領域（いわゆるパーソナル・スペース、対人距離）を侵害することのないよう、視線を自制しなさい」という意味である。慎み深くあることの必要性は、男女の別なく同様である。「隠しどころを守る」とは、文字通りに理

解するなら露出を控えた穏当な服装を指す。慣習的には、合法的な場合を除いては「性的な衝動を抑制する」こと、すなわち性的な交わりは結婚を済ませた夫婦の間にのみ制限されるといった意味にも受け取られる。ここでの訳出には、両方の解釈を含めるようにした。ラーズィーはその解釈の中で、「視線を自制」することは、身体に加え、感情面における謙虚さにも関わることであるとしている。

9 「頭布を胸元にかぶせ」るとは、顔と両手、両足以外の身体すなわち胴体の全体を覆う服装を意味するという点で、大半の解釈者たちの見解は一致している。そこに髪を含めた首周りや、首下などが加えられる。一般にムスリムの学者たちは、「飾りを誇示してはならない」という文言は、身体の美しい部分や、あるいは身につける装飾それ自体が誘惑を招くおそれがあるため、配偶者である夫以外には見せないようにという意味であるとしている。しかしながら覆う必要がなく、外側に表されている部分の、たとえば指輪や腕輪、あるいは目周りの化粧といった装飾は許されるのか、あるいは禁じられるのかについては、様々な見解がある。

10 ムスリムの結婚には、妻に対して何らかの婚資を贈与することが求められる。これを支払えない男性は、支払う余裕ができるまで、貞節を守り、誠実に待たねばならない。未婚・既婚を問わず、「男性は自然の欲求を充足させる必要がある」といった言い訳による正当化は許されていない。

法的な意味では、奴隷制度は今や廃止されている。それが制度として有効だった時代に、イスラームは奴隷に課された運命を、できるかぎり負担の少ないものとした。奴隷は、男女ともに解放を求める権利を認められており、その場合は必要な額と期間を定めた書面が交わされた。また合法的な手段で代価を稼ぎ、結婚して家族を持つことも可能であったと思われる。また奴隷の身分にある者が善良であることが分かっている場合には、そうした要求を拒否してはならず（「証書を書きなさい」とは「彼らの要求を認めなさい」の意）、さらに奴隷の所有者に対しては、奴隷が自由を獲得するのに、自分の財から援助するよう命じられた。





11 おそらく、アーイシャに対して引き起こされた醜聞は、エジプトのユースフや、処女にして母となったマルヤムに対して引き起こされたものと類似しているという意味が込められていると思われる。

12 宇宙という存在の、根源的な本質は神であるということを告げる節である。またここでの「光」という言葉は、おそらく、あらゆる存在を支える永遠かつ唯一の維持者を意味すると思われる。あるいは神とは、宇宙全体というしるしを通して知ることのできる「光」であるとも、あるいは人間に授けられた、神の存在、唯一性、全能性、その他の神のあらゆる優れた属性を通して知ることができ、またそれらを通して至高の道へと人間を導く「光」であるともいえるだろう。

13 霊的な領域における神の慈悲としての光という考え方については、多種多様なメタファーによって説き明かされている。ここでは光を否定あるいは拒んだ者が、完全な暗闇の中で圧倒されているという、光ある状態とは対照的な光景によって、逆に光の存在が示されている。最初に神の光が絶対的なリアリティとして存在する。次いで、その光の後を追い従う魂が、絶対的なリアリティを鏡のように映し出す反射として存在する。一方で暗闇は絶対的なリアリティの否定に過ぎず、暗闇それ自体のリアリティを持たない。光の反射であるはずの存在が光を拒絶すれば、それは非リアリティということになる。暗闇について説き明かすのに、二つのメタファーが用いられる。一つはこの節における蜃気楼、もう一つは次の節における、深い海の底の暗黒である。

14 深い海の底に波また波が重なり合い、覆いかぶさり、さらにその上に重たく暗い雲が幾層にもなってのしかかる。暗闇とは何であるかが、まるで目に見えるかのように説き明かされている。通常の深さの海であってさえ、そこに住む魚たちはほとんど視力を持たない。海の中にあっては、視力など役に立たないからである。リアリティの領域における真の光の根源は神であり、その光から自らを切り離す者はまったくの暗闇の中にいる。唯一の真の光を否定することによって生じるその暗闇とは、単なる相対的な「暗さ」ではなく、言うなれば月夜の影の中にある状態である。

15 神の光と啓示を通して恩恵を授かることとも縁がなく、かといって公然と敵意を表明するわけでもないのが偽善者であ

る。彼らは自分本位で、利己的・世俗的な目的に従い無責任かつ不誠実にふるまう。彼らが裁きを求めるのは、それが自分たちにとって都合が良いときだけである。自分たちに明白に非がなく、自分たちの側に正義があると確信できているときに限って、彼らは積極的に預言者の許へやってきた。預言者が、たとえ自分の近しい友人であっても、判断を下すときは常に公平であることをよく分かっていたからである。

16 一部の人々、とりわけ偽善者たちは、見せびらかすための大仰な誓いを立てることを好む。かつてマディーナの偽善者たちも、預言者に対し、まるで自分たちには家も財産もすべて捨てる準備ができているかのように述べ、自分たちの覚悟を誇張して語った。このとき彼らは、最も厳粛な態度で誓いを立てる準備をしていたが、そうした見せかけだけでは何の意味もない。誓いとは、立てることよりも守ることにこそ意義がある。彼らには、誓ったからには守ることが求められること、また誓いとは日常生活の延長線上にあるべきであり、少なくとも熱狂的である必要はないこと、静かに義務を果たすことの重要性が説かれた。口先だけの言葉には何の価値もない。神は人々を、その実際の行為によって裁くのである。そして神は、明かされていることも隠されていることも、すべてを把握している。

17 もしも神の命じるところに、使徒が説き明かした通りに従わなかったとしても、遵守するよう強制されることはないだろう。使徒に課された使命とは、人々が自分自身の意志のありかを意識し、また自分自身の行動の意味を明確に説明できるようになるよう、成長させることにある。そして人々の行動の責任については、その行動をとった本人が完全に負う。

この節では、信仰して神の法に従う者に対し、次の三つが約束される。（1）彼らは大地における権力と権能を継ぐ者となる。それは利己的な目的のためでも、あるいは身内に対する偏重や偏愛でもなく、神の法をしっかりと維持してゆくためにである。（2）神が彼らのために選んだ宗教は、権利の宗教であり、それは誰に対しても公然と確立される。権利の宗教は、あらゆる抑圧や弾圧といった誤りを正すだろう。（3）正しい者が抑圧に苦しんだり、神の道のために家財や故郷を捨て去ったり、自分たちの信仰や宗教儀式を隠したりすることはない。正しい者には、必ずや平和と安寧





が訪れる。

18 ここでは、慎み深さが行き届いた社会の中での家族の間での礼儀やルールについて説き明かされる。使用人や子どもたちは、いつでも家の中を行ったり来たりすることが生活の一部であるため、むしろより多くの行動の自由が与えられ、守らねばならないルールも少ない。とはいえ、彼らにも制限が課される。夜間と、早朝の礼拝の前、すなわち夜明け前の時間帯には、自室以外の部屋に入る前に、静かに許可を求めなくてはならない。必要もないのに、他者の睡眠を妨害することがあってはならないからであり、また一つには、身支度を整えていない状態であることも考えられるためである。昼間であれば午後半ば、午睡の時間、また夜の礼拝の後の時間にも同じことがいえる。その時間帯にはくつろいだ格好をしていたり、仮眠をとっていたりすることも少なくないからである。成人であれば、ルールはより厳しくなる。時間に関わりなく、いつでも入室に際しては許可を得ることが求められる。

19 「あなたがたの中の幼な子たち」とは、必ずしも自分自身の子どもに限らず、自宅の中で、目の届く範囲にいる子どもたちすべてを指している。同居している子どもの場合もあれば、客人が連れてきた子どもの場合もあるだろう。いずれにせよ、しっかりとルールに従うようにさせなくてはならない。

20 三一節では、女性は自分自身の身体を覆うよう義務づけられた。また、意図や意識を高潔に保つためにも、誰が誰に対してその美しさを隠さねばならないのかも教えられている。自分の配偶者である夫に対し、自分を美しく見せようとする努力については大いに推奨されるものの、通りすがりの他者に見せびらかすために華美な服装をするのは法に適ったふるまいではない。ある程度の年齢に達し、結婚や性的な関係を望まない段階にある女性には、外衣をまとうことは特に義務づけられてはいない。しかしながら装飾は控え、引き続き外衣をまとう方がより好ましいあり方とされる。

21 この節では、イスラーム以前のアラブにまん延していたありとあらゆる類いの迷信や夢想が退けられ、排斥されている。
（1）目の不自由な者、足に障害を抱えた者、あるいは深刻な疾患を抱えた者は、神の怒りをこうむった者とみなされ、

客人として迎え入れることも、あるいは家族としてさえも、共に食卓を囲むことを忌避される習慣があった。このような考え方は決して受け入れてはならない。生きていれば、時に災難に襲われることもある。だが他者を襲った災難の原因を断定したり、断罪したりするような人間になってはならない。不自由で困っている人がいれば、するべきことはいたわりと親切な手助けを差し出すことである。(2)近親者の家で食事をすることは好ましいこととはされていなかった。この禁忌は、イスラームにおいては容認されていない。(3)同様の迷信として、実際に自分が所有している家以外では、食事をしてはならないというものがあった。他にも様々な迷信が存在していたが、イスラームには迷信のための居場所はない。人間は自由であり、その時々のニーズや状況に応じて自らの人生を律してゆくのでなければならない。

22
「用事のために彼と共にいるとき」とは、宣戦布告やジハードへの呼びかけに限らず、平時においても、祝祭、特別な礼拝、その他コミュニティ全体に影響を及ぼすものごとを指している。

「許しを求めるまでは立ち去ることのな」いよう求められるのには、妥当な理由がある。宣戦布告やジハードを含め、重要な物事について実際に行動を起こしたり、あるいは行政上の決定を下したりする際には、コミュニティの過半数の同意が必要とされるため、できる限り多くの人びとが意思表示の場に参加することが望ましい。

23
この節は、三つの意味に解釈・訳出することが可能である。第一の解釈は、大半の解釈者の見解に従う方法であり、上記もこれに従い訳出している。第二の解釈は次の通り。「アッラーの預言者の祈願は、他の一般の者の祈願と同じではない。預言者の祈願は重大な問題についてであり、それはアッラーに聞き届けられる類のものである」。そして最後に、第三の解釈は次の通りである。「預言者に対し、あなたがたがお互いに対するような調子で馴れ馴れしく話しかけてはならない。彼にふさわしい敬意を示す言葉遣いで話しかけなさい」。

# 第二五章　アル＝フルカーン　規範

マッカ啓示

本章は、（六八節から七〇節を除き）ヒジュラを実行する五年から六年前の間に啓示された。章題は第一節に由来する。「フルカーン」とは、クルアーンの別名のひとつであり、それは正しいことと誤ったことの判別を意味する。偶像を奉ずる人々の間に広まっていた迷信の愚かしさと、ムハンマドの預言をめぐる論争を扱っている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 そのしもべに、諸世界の警告者となるよう規範を下した御方をほめたたえよ。

2 諸天と大地の王権は御方に属する。御方は子をもうけず、王権を分かち合う者をもたず、ありとあらゆるものごとを創造し、その計らいを決定する。

3 しかし彼らは、御方をさし置いて他の神々を選んだ。それらは、創造はされても、それ自体は何ひとつ創造しないもの。自分の利害さえどうすることもできず、死ぬも生きるも、復活もままならない。

4 ［真理を］拒む者たちは言う。「これ［クルアーン］は、彼がねつ造した作り話に過ぎない。他の民が、それを手助けしたのだろう」。しかし彼らこそ、不正と偽証をはたらいた。





5 彼らは言う。「大昔の人の伝説に過ぎない。彼らが、朝も夕も口伝えしたのを、彼が書き記したのだ」。[1]

6 言いなさい。「これを下したのは、諸天と大地の秘密を知る御方。本当に御方はもっともよく赦し、もっとも慈悲深い」。

7 また、彼らは言う。「これはどういった使徒なのか。食べものを食べ、市場を歩くとは。どうして警告者となる天使が、彼と共に下されないのか。

8 あるいは［どうして］彼に宝物がもたらされないのか。あるいは［どうして］彼には食べるための果樹園がないのか」。また、不正をなす者も言った。「あなたがたが従っているのは、魔法にかけられたただの男に過ぎない」。

9 見なさい、彼らがどのような例えをあなたに示すかを。しかし、彼らは迷い去っている。それで道を見つけることができない。

10 ほめたたえよ、もしそうと望めば、［彼らの言っているものよりも］より良いもの、川がその下を流れる楽園を、あなたのためにあらしめることもできる御方。かの御方はあなたのために、数々の宮殿をもたせるだろう。[2]

11 いいや、むしろ彼らはかの時［の到来］を嘘であるとした。かの時を嘘よばわりする者に、われらは烈火を用意してある。[3]

12 遠く離れた場所から見るとき、それが激怒し、唸（うな）り声をあげるのが聞こえるだろう。[4]

13 彼らが、鎖につながれてその狭い場所に投げ込まれるとき、彼らは、滅ぼしてくれと請うだろう。

14 この日、たった一度の滅びを請うな。多くの滅びを請うがいい。

15 言いなさい。「より良いものとはこれのことか。それとも、畏れる者に約束されていた永遠の楽園か。そ

れが、彼らへの報いであり行き着く先である」。[5]

16 彼らの望むものは何でもあるその中に、永遠に住まう。それが、あなたがたの主の引き受ける約束。[6]

17 彼らと、彼らがアッラーをさし置いて仕えるものとが集められるその日、かの御方は告げるだろう。「あなたがたが、われのしもべたちを迷わせたのか。あるいは彼らが道から迷ったのか」。

18 それらは言う。「あなたに讃美あれ。あなたをさし置いて他の庇護者を取るのは、私たちにはあるまじきこと。しかしあなたは、彼らとその先祖を楽しませました。彼らが、あなたを想い起こすのを忘れて破滅の民となるまで」。

19 「彼らは確かに、あなたがたの言ったことを嘘よばわりした。それゆえあなたがたは［懲罰を］免（まぬが）れることはできず、また何の助けもない。あなたがたのうち誰であれ不正をなす者に、われらは至大の懲罰を味わわせよう」。

20 われらはあなた以前に、食べものを食べず、市場を歩かない使徒たちを遣わしたことは決してなかった。そしてわれらは、あなたがたのうちある者を、互いへの試練となるようにした。それであなたがたは耐えうるだろうか。あなたの主は、いつも見ている。[7]

21 また、われらと会することを予期していない者たちは言う。「どうして私たちに、天使たちが下されないのか。あるいは［どうして私たちに］、私たちの主が見られないのか」。彼らは自分の高慢により、激しく無礼にふるまうようになった。

22 彼らが天使たちを見る日は、罪を犯す者には良い報（しら）せのない日となるだろう。そして彼ら［天使たち］は言うだろう。「禁断の隔てである」。[8]

23 われらは彼らがしてきた行いに取りかかり、それを塵（ちり）にして散らばせよう。[9]





24 楽園の仲間は、その日、最良の居場所にあって、最善の寝所にいるだろう。

25 その日、天が雲もろとも裂け割れると、［その裂け目から］天使たちが次から次へと下される。[10]

26 その日、王権は真に慈愛あまねく御方に属する。［真理を］拒む者にとり、苦境の日となるだろう。

27 その日、不正をなす者はその手を噛んで言う。「使徒の道を共に選んでいればよかったのに。

28 悲しいかな、私はあのような者を友人にするべきではなかった。

29 戒（いまし）めがもたらされた後になって、彼は私を迷わせた。悪魔は、いつも人間を見捨てる者」。[11]

30 また、使徒は言っていた。「主よ。本当に私の民はこのクルアーンを、捨てるべきものとして受けとめています」。

31 このようにわれらは、すべての預言者にそれぞれの敵を、罪を犯す者の中からあてがった。導く者、助ける者は、あなたの主だけで十分である。

32 ［真理を］拒む者たちは言う。「どうして彼にクルアーンが、一度にまとめて下されないのか」。このように［するのは］、われらがあなたの心を揺るぎないものとするため。われらは、順を追って復唱させる。

33 彼らがあなたに例えを用いるたびに、われらは必ずあなたに、真理と、もっともすぐれた解き明かしとをもたらす。[12]

34 地獄にその顔を向けて集められる者たち。これらの者こそ最悪の場所にいて、道からもっとも迷っている。

35 われらはムーサーに啓典を与え、また彼と共に、その兄ハールーンをしておぎなう者とした。

36 われらは言った。「あなたがたは、二人ともわれらのしるしを嘘よばわりする民のところへ行きなさい」。それからわれらは彼らを破壊し、全滅させた。

37 また、ヌーフの民も。彼らは使徒たちを嘘であるとした。われらは彼らを溺れさせ、人々のためのしる

しとした。不正をなす者に、われらは痛烈な懲罰を用意してある。

38 また、アード、サムード、ラッスの仲間たち、そしてそのあいだの多くの世代も。

39 われらは、それぞれに例えを示した。またわれらは、それぞれを破壊し滅亡させた。[13]

40 また彼らは、悪の雨に降られた町を訪れてもいる。では彼らは、それを見なかったのか。いいや、そうではない。彼らは、復活を予期していなかったのである。[14]

41 彼らはあなたを見るとき、ただ笑いごととして扱う。「これのことか、アッラーが使徒として立ち上がらせた者というのは。

42 もし私たちが忍耐強くなかったら、あやうく彼のせいで私たちの神々から迷わされるところだった」。彼らが懲罰を見るとき、誰の方が道に迷っていたのか、やがて彼らも、知ることになるだろう。

43 あなたは、自分の欲求［の赴く先］を神とみなす者を見たか。それであなたは、その者の保護者になろうというのか。[15]

44 それともあなたは、彼らの多くが耳を傾けるか、あるいは考えるとでも思うのか。彼らは、家畜のようなものに過ぎない。いいや、むしろそれよりも道に迷っている。

45 あなたは、主が、どのように影を伸ばすかを見なかったのか。もしそうと望めば、それを静止させることもできる。そしてわれらは、太陽をその道しるべとした。[16]

46 そののち、われらはそれを、われらの方へゆるやかに引き寄せる。

47 夜をあなたがたのための衣とし、休息のために眠らせ、また昼を、［よみがえって］起き上がるためのものとした御方。

48 慈悲の前に良い報せとして風を送る御方。そしてわれらは、空から清浄な雨を降らせる。





49 それにより、われらは枯れた土地に生をもたらし、またわれらが創造した多くの家畜や人間に飲みものをもたらす。

50 われらはすでに、彼らのあいだにこれを［繰り返し］解き明かしてきた、彼らが想い起こすようにと。しかし人間の多くは、拒み、ただ恩を忘れるだけ。

51 もしわれらがそうと望めば、すべての町にそれぞれの警告者を立ち上がらせていただろう。

52 それゆえ［真理を］拒む者に従ってはならない。彼らに対し、これ［クルアーン］をもって大いに励みなさい。

53 二つの海を放つ御方。こちらは口当たりよく甘く、こちらは塩辛く苦い。また、御方はそれらの間に、境と、禁断の隔てを設けた。[17]

54 水から、一個の人間を創造した御方。それから彼［人間］のために、血縁と婚姻の関わりをもうけた。あなたの主は全能である。

55 しかし彼らはアッラーをさし置いて、害にもならず益にもならないものに仕える。本当に、［真理を］拒む者はいつも主に反する者の支持者である。

56 われらがあなたを遣わしたのは、ただ良い報せを伝える者、また警告者としてに他ならない。

57 言いなさい。「私はあなたがたに、これについて何の報酬も求めていない。ただ、誰であれそうと望む者が、主への道をたどることの他は」。

58 決して死ぬことのない、永生する御方に委ねなさい。称賛をもって讃美しなさい。しもべたちの罪を熟知する者は、御方だけで十分である。

59 諸天と大地と、そのあいだにあるすべてを六日の間に創造し、それから玉座の上に就いた御方。慈愛あ

60 まねく御方。それゆえ御方について、熟知している者に尋ねなさい。[18]
「慈愛あまねく御方にひれ伏しなさい」と言われるとき、彼らは言う。「慈愛あまねく御方とは何のことか。私たちは、何であれあなたの命じるものにひれ伏すべきだというのか」。そしてますます、反感をつのらせる。
61 諸天に星座を置き、その中に燃える燈と、光を照らす月を置いた御方をほめたたえよ。[19]
62 想い起こしたい者、感謝したい者のために、夜と昼を代わるがわるにあらしめたのも御方。
63 慈愛あまねく御方のしもべとは、慎ましやかに地上を歩む者たちのこと。無知な者に話しかけられたとき、彼らは「平安あれ」と言う。
64 また、その主に向かってひれ伏し、また立って夜を過ごす者たち。
65 また、このように言う者たち。「主よ、私たちを地獄の懲罰から免（まぬが）れさせてください。本当にその懲罰は、果てしないものです。
66 本当になんと悪い居場所か、宿りの場か」。
67 また、［財を］費やすのに行き過ぎることもなく、惜しみ過ぎることもなく、その中庸（ちゅうよう）を守る者、[20]
68 アッラーと共に他の神を呼ばわることのない者、アッラーが禁制のものとした生命を、正当な理由によらずして殺害することのない者、また姦淫（かんいん）することのない者。誰であれ、それをすれば刑罰が科される。[21]
69 復活の日には懲罰も倍にされ、屈辱の中に永遠に住まうだろう、
70 悔い改め、信じて正しい行いをする者を除いては。これらの者には、アッラーはその悪事を善事に変えるだろう。アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。[22]
71 誰であれ、悔い改めて正しい行いをする者は、本当にアッラーに悔い改めている。





72 偽りの証言をせず、また無意味な話のそばを通るとき、尊厳をもって通り過ぎる者。[23]
73 また、その主の御しるしが想い起こされるとき、耳も聞こえず目も見えなくなったかのようにその身をかがめることのない者。
74 また、このように言う者たち。「主よ、私たちの配偶と子孫の中から、目にも涼やかな［喜ばしい］ものを授けてください。私たちを、畏れる者の先導者としてください」。
75 これらの者は、彼らがよく耐えたために最高の居室をもって報いられ、またそこでは、挨拶と平安をもって迎えられるだろう。[24]
76 そしてその中に、永遠に住まうだろう。なんとすばらしい居場所か、宿りの場か。
77 言いなさい。「あなたがたが呼びかけないなら、どうして主があなたがたを気にかけるだろうか。あなたがたは確かに嘘よばわりした。やがて起こるべくして［懲罰が］起こるだろう」。[25]

1 彼らは、その見当違いの傲慢さから次のように言う。「これなら以前にも聞いたことがある。大昔から伝わる出来事のいいおとぎ話にすぎない。楽しむ分には構わないが、誰が真剣に受け止めるというのか」……啓示の持つ美しさ、力強さや、それが特に学問を修めたわけでもない人物を通して明かされた奇跡であることを指摘されれば、別の誰かが書いたものに違いないと憶測し始める。こうしたものを書くことのできる人物など、彼らの中から一人として輩出された試しがないにもかかわらずである。

2 この節は通常、来世の至福を象徴するものとみなされている。もしも神がそうと望めば、使徒たちは現世においても完

全な至福と権威を授かっていただろう。迫害を受け、嘲笑の的となり、故郷を追われ、真理に対する拒絶のはびこるこの現世に真理の旗を掲げることに全身全霊をかけて力の限り尽くすよりも、むしろ平穏無事な穏やかな人生を送ることもできたはずである。しかしそれでは、現に今も苦しみを抱えた多くの人々に対する、教えと手本を示す模範とはなれなかったことだろう。

3 審判の時を否定することは、正義と真実の勝利を否定することを意味する。そしてそれは、邪悪の支配を暗に肯定することでもある。しかし次の節では、邪悪それ自体が懲罰を受けるであろうことが示されている。

4 ここでは、地獄の業火が擬人化されている。飢えと怒りのために荒れ狂い、遠目からも欲望の息を噴き散らしているのが見てとれる。ここに至るまで、彼らは本当に自分たちが危険の中にいることを意識していなかった。今になってようやく、恐怖のために心臓が激しく動悸し始める。彼らはひとまとめに束ねて縛り上げられ、ごうごうと燃え盛る火炎の中に放り込まれる。

5 行い正しい人にとり、最後に授けられる至福とは、ある意味では報奨といえるだろう。しかし「報奨」という言葉では、本当のところを言い表すことはできない。（1）至福は、本来ならば彼らにふさわしいものよりもはるかに偉大である。（2）行い正しくあれるということは、それ自体がすでに報奨である。結果として授けられた至福を言い表すのに最も適しているのは、「最も高い望みが叶えられる」と言い表すことだろう。望めば、それは成就するだろう。彼らは神の御前に立つ。望む者にとっては、これこそが最も高く、また最も純粋な救いなのである。

6 神の御前を望むということは、たとえどんなに良いことであろうと、つかの間の現世に頼ることなくすべてを神に頼って祈ることである。そしてそれこそは神の約束である。神は約束を果たす者には、必ずや授けることを保証する。

7 神の普遍の計画においては、それぞれがそれぞれの目的のために奉仕している。富める者がいたとしても、貧しい者は彼らを羨むべきではない。富める者にとっては、自分の財産それ自体が、自分自身の美徳に課された試練となっている





かもしれないのである。その反対に貧しい者がいたとしても、正しい行いに努めようとするなら、富める者は彼らを軽蔑したり無視したりしてはならない。貧しい者が視界に入るなら、それは寛大さが試されている時なのかもしれない。

8 「禁断の隔てである」。ここで用いられている「ヒジュラン マハジューラン」という言葉は、古くからのアラビア語表現であり、「完全な喪失」といった意味がある。

9 すなわち、唯一の主を否定すれば、良かれと思ってなした行為やふるまいは、現世においては相応に報われることもあるだろうが、来世においては何の役にも立たない。

10 今は高く掲げられ、遠く離れた無人の空間と思える空が、その日、微塵に引き裂かれる。そしてそこに、栄光の一群 ― あらゆる位階、あらゆる階梯（かいてい）にある天使たちや光り輝く霊的な存在 ― が出現する。神の真の威光と至善が、まるで手で触れられるかのようにはっきりと目に見えるようになる。だがそれは、「堕落した泥の衣※」をまとった今の状態では、誰も目にすることはできない。※シェイクスピア『ヴェニスの商人』の台詞。

11 ここで用いられている「シャイターン（悪魔）」という言葉には、人間に影響を及ぼし、道に迷わせる張本人であるという意味が含まれている。二七節では、実際に真理を受け入れて正しい道を歩んでいた者が、その後に悪魔や世俗の友人に惑わされ、転落していく様子が描かれている。解釈者の一部は、ここでの言及をウクバという名のある特定の人物と関連づけている。イスラームの光を授かっていながら、後になって世俗の友人に引きずられて道を誤り、背教して冒涜に走るようになった。やがて彼は非業の結末を迎えることになった。

12 偶像を奉ずる者たちには、このクルアーンと類似するものをもたらすことはできない。逆に彼らは、神がもたらした真理に背く負の論争しか生み出せないのである。

13 「ラッスの仲間たち」。「ラッス」という語は「囲い込まれた井戸」を意味する。伝えられるところによれば、人里を離れて住まう人々が、そうした井戸の周囲に集い、それぞれに異なった偶像を崇拝していたという。一部の解釈者たちに

よれば、彼らはヤマーマにあるサムードの遺跡に住んでいたという。また別の解釈によれば、彼らが住んでいたのは現在のシリアとトルコの境界に位置するアンティオキアにある村であったともされている。

14 ルートの物語や、死海近くの平原に存在し、燃える硫黄のつぶてによって崩壊した、悪徳の都ソドムとゴモラについての言及である。舞台はアラビアとシリアを結ぶ交差路に位置する。一五章七四節から七六節を参照。

15 自分自身の情熱や衝動、欲望を崇拝する者は、最も教えや導きを授かる見込みのない者である。それ以外の問題であれば、教える者が諭すこともあるいは可能であろう。しかし無分別な衝動とは、理性で抑制できるものではない。内側にある熱狂的な欲望を殺してしまわない限り、そうした者を導きたいと望んだとしても無益である。法にも助言にも従わない者を背負うことなど、誰にもできない。物事を理解しようともせず、ただ神が彼らに授けた本能の赴くままにふるまっているだけならば、野生の動物よりも悪質である。

16 人為的なものに囲まれた生活を送っていると、光と影の持つ精巧な神秘を見過ごしがちである。人間は、当然のこととして夕暮れや朝焼けのもたらす色彩のすばらしさを賛美する。日の出の始まりには不思議でおぼろげな光があり、それは奇妙に長く、しかしはっきりとは定まらない曖昧な影を作る。それから東の地平線が一筋の黒に染まったかと思うと、繊細な色調と、そして光と影に彩られた真の朝焼けが訪れる。夜明けの光は、太陽から放たれる直射日光そのものではない。ある意味では光ですらなく、むしろそれは影あるいは光の反射なのである。そしてそれは少しずつ実際の日の出と混じり合い、より実質的な、あるいはより明確な、実際に太陽によって現される影へと形を変えてゆく。

17 あらゆる生命が必要に応じてその恩恵に授かれるよう、水は大地の隅々にまで行き渡っている。四八節から五〇節では、これを別の角度から言い換えた議論がなされている。すなわち水は生命そのものであり、また世界じゅうの生命を支えるようにも創られている。これは、誰もが認める物質界の真理である。しかし同時に水とは、霊的な生命の象徴でもある。啓示を通して明らかにされている通り、支え、維持してゆくという水の持つ原理原則は、神の意志によるものである。





18 宇宙の様々な秘奥へと通じる鍵を握るのは唯一、神のみである。人間には、ただ学び取ることしかできない。神の創造を探求し、啓示されたメッセージに耳を傾けることにより、たとえそれがどれほど遠くにあろうとも、神のみが所有するリアリティを垣間見ることができるようになる。それがはっきりとは理解できないようなら、知識ある者に尋ねてみるのがいいだろう。

19 太陽とは、空に置かれた輝けるランプである。そのとなりに、太陽の光を借りて照らされる月がある。ここでいう諸星座には、天空の軌道を表すいわゆる「十二星座」も、当然ながら含まれている。

20 通常の支出として捉えれば、これは賢明なルールであるといえる。しかし、最善を尽くすべき慈善においてもまた、やり過ぎは禁物である。例えば「他者の気を引こうとして」見せびらかしたり、考えなしに実行したりして、後になって「一方から奪って他方に返す」ようなことになってはならない。確かに吝嗇に陥るべきではないにせよ、常に自分も含めた全員の権利について心に留めておくべきであり、どのような時でも全体のバランスが公正に保たれるよう努めなくてはならない。

21 上記の節では、三つの犯罪について言い表されている。（1）偽ものの崇拝は、神に対する犯罪である。（2）生命を奪うことは、人類に対する犯罪である。（3）姦淫や不品行は、自分自身とその尊厳に対する犯罪である。ここに挙げられている犯罪は、すべて神とその創造物、そして自分自身に対するものであるともいえるが、しかし相対的に比較すれば、このように分けられるだろう。生命を奪うことについての禁止は、正当な理由がある場合は除外される。例えば殺人を犯した者への法的な処罰や、あるいは自己防衛、また合法とされる食肉を提供できるよう、イスラームの法に即した家畜の屠殺などがそれに相当する。

22 しかしながら、たとえどれほど大きな罪を犯そうとも、もしも心の底から悔い改め、またその後の行いを正すことにより、悔い改めが真実であったことが証明されたなら、神の慈悲にあずかることも可能となる。それにより悔い改めた者の性

質も、邪悪なものから善美なものへと変容を遂げるだろう。

23 解釈者のファフル・ラーズィーによれば「偽りの証言」とは、自分自身が虚偽の証言者とならないこと（つまり、この表現の最も広範な意味において「嘘をつかない」ということ）、また、そうと知りながら虚偽に基づく証言に手を貸さないことの、二つの意味がある。

24 ここでの「居室」とは、楽園の中でも最も高く、また霊的にも最も高い領域にしつらえられている。

25 もしも祈ったこともなければ信仰や崇拝を持ったこともなく、また感謝を表明したこともなければ、どうして神の温情を得られるだろうか。その一方で、偶像を奉ずる者たちは、神の定めた戒め（いましめ）に反する嘘を大声でふれて回った。その報いとして、来世において彼らは、神の宗教に関する虚偽をねつ造したことへの懲罰を受けるだろう。

# 第二六章　アッ＝シュアーラーゥ　詩人たち

マッカ啓示

本章は、詩人と預言者の違いが簡潔に指摘されている二二四節にちなんでこの章題がつけられている。詩人とは、ここでは言葉の上でのみ語り、実際には行動を伴わない者を指す。その一方で預言者は、自らが説くことを自分自身でも実践している。イスラーム以前のアラブやその詩人たちの間では、詩人に天啓を与えるのはジンのしわざであると信じられていた。

本章では、迫害の憂き目にあっていた信仰者たちに対するなぐさめとして、過去の預言者たちの物語の数々が語られている。神の使徒が迫害されるのは今に始まったことではないこと、また最後には必ず迫害する者が懲らしめを受けることが確証される。また、神の使徒たちはみな同じメッセージを携えて到来したことが示される。

本章は、マディーナで啓示された二二四節から二二七節を除き、マッカ時代中期の啓示である。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 ター、スィーン、ミーム。

2 これは、明らかな啓典の御しるし。

3 彼らが信仰者になろうとしないため、あなたは嘆きのあまり、自分で自分の身を滅ぼしてしまうだろう。



4 われらがそうと望めば、天から彼らにしるしを下しもするだろう。そうなれば彼らも、かしこまってうなだれることだろう。

5 慈愛あまねく御方から新たな戒めが彼らに到来するたびに、彼らは必ず背き去った。

6 彼らは［真理を］嘘であるとした。しかし彼らが嘲笑していたことについての報せが、いずれ彼らに届くだろう。

7 彼らは大地を見ないのか。またその中に、われらがどれほど様々な貴い種のすべてを育むかも。

8 その中には、本当にひとつの御しるしがある。しかし彼らの多くは、信仰者にはならない。

9 本当にあなたの主こそは威力ある御方、慈悲深い御方。

10 あなたの主がムーサーを呼び出したときのこと［を思いなさい］。「不正をなす民の許へ行きなさい、

11 フィルアウンの民の許へ。彼らは、畏れないのか」。

12 彼［ムーサー］は言った。「主よ。本当に私は、彼らが私を嘘よばわりするのを恐れます。

13 私の胸は狭められ［て不安になり］、舌も流暢に動かせません。ですから［私の助けとして］ハールーンを遣わしてください。

14 また、私は彼らに罪［に対する罰］を科されています。私は、彼らが私を殺すことを恐れます」。

15 かの御方は告げた。「いいや、そうはならない。われらのしるしをもって、あなたがた二人で行きなさい。本当にわれらは、あなたがたと共にいて聞いている。

16 そして二人でフィルアウンの許へ行き、言いなさい、『本当に私たちは、諸世界の主からの使徒である。

17 イスラエルの民を、私たちと共に送り出しなさい』と」。

18 彼［フィルアウン］は言った。「私たちは、子どもの頃のあなたを私たちのあいだで育てたではないか。

そしてあなたは、その人生の長い年月を私たちのあいだで過ごしたではないか。

19 それなのにあなたは、あのような行いをしでかした。本当にあなたは、恩を忘れる輩のひとりだ」。[1]

20 彼［ムーサー］は言った。「私はことをしでかした。それは私が、さまよえる者のひとりであったときのこと。

21 それで私はあなたがたを恐れ、あなたがたから逃れた。しかし、主は私に知恵を授けて使徒のひとりとしました。

22 あなたがたは私を［恩知らずだと］責めるが、イスラエルの民を奴隷としていながら、それが私への恩寵だとでもいうのですか」。

23 フィルアウンは言った。「それで、諸世界の主とは何のことか」。

24 彼［ムーサー］は言った。「諸天と大地と、そのあいだにあるものすべての主。もしあなたがたが、確信してさえいたなら」。[2]

25 彼［フィルアウン］は周囲の者に言った。「おまえたち、聞いたか」。

26 彼［ムーサー］は言った。「あなたがたの主であり、またあなたがたの、大昔からの先祖の主でもある御方」。

27 彼［フィルアウン］は言った。「本当に、あなたがたに遣わされたこの『使徒』は、とり憑かれた者に違いない」。

28 彼［ムーサー］は言った。「［私の主は、］東と西と、そのあいだにあるものすべての主です。もしもあなたがたが、考えるようになりさえしたなら」。

29 彼［フィルアウン］は言った。「もしあなたが私以外の神を選ぶなら、私は必ずあなたを囚人のひとりにするだろう」。





30 彼［ムーサー］は言った。「たとえ私があなたに、何か明白なものをもたらしたとしてもですか」。

31 彼［フィルアウン］は言った。「出してみせよ、本当にあなたが真実を語っているのなら」。

32 そこでムーサーが自分の杖を投げると、見なさい。突如として蛇が明らかな姿を現した。

33 それから彼がその手を差し伸ばすと、見なさい。それは誰の目にも［光沢を放ち］真白であった。

34 彼［フィルアウン］は、取り巻きの長老たちに言った。「これは確かに、腕の立つ魔術師だ。

35 彼はその魔術をもってあなたがたをこの地から追い出そうとしている。では、あなたがたはどうせよと言うか」。

36 彼らは［フィルアウンに］言った。「彼［ムーサー］とその兄のことはひとまず置いて、［その間に］市街に人集めの者を放ちましょう。

37 腕の立つ魔術師を、すべてあなたのところへ連れて来させましょう」。

38 こうして魔術師たちが、決められた日の決められた時刻に集められた。

39 また人々は「あなたがたも皆、集まったのか」と言われ、

40 「もし魔術師が勝利したなら、私たちは彼らに従いましょう」［と答えた］。[3]

41 こうして魔術師がやって来ると、彼らはフィルアウンに言った。「私たちが勝利したならば、必ず褒美がありましょうか」。

42 彼［フィルアウン］は言った。「当然だ。［加えて］その時はあなたがたを、必ず［私の］側近にしよう」。

43 ムーサーは彼らに言った。「あなたがたが投げようとしているものを投げなさい」。

44 それで彼らは、彼らの縄と杖を投げて言った。「フィルアウンの力にかけて。私たちは、必ず勝利する者となる」。

45 そこでムーサーが彼の杖を投げると、見なさい。それは彼らの偽ったものを飲み込んでしまった。

46 こうして魔術師たちは［主に］その身をひれ伏した。

47 彼らは言った。「私たちは、諸世界の主を信じます、

48 ムーサーとハールーンの主を」。

49 彼［フィルアウン］は言った。「私が許しもしないうちに、あなたがたは信じるのか。本当にこの者は、あなたがたに魔術を教えたあなたがたの首領に違いない。やがてあなたがたも、必ず知ることになる。私はあなたがたの両手両足を、必ず交互に切り落としてやろう。そしてあなたがたを、ことごとく磔（はりつけ）にしてやろう」。

50 彼らは言った。「かまいません。私たちは、主の御許に戻されるのですから。

51 本当に、私たちが最初の信仰者となることで、私たちの過ちが主に赦されるよう願うばかりです」。

52 それからわれらは、ムーサーに啓示した。「われのしもべたちを連れて、夜に旅立ちなさい。あなたがたは、必ず追われるだろう」。

53 するとフィルアウンは、人集めの者を市街に遣わした。

54 「本当にこれらの者は、ごく少数の集団に過ぎない。

55 これらの者は、私たちに対し激怒しているが、

56 私たちの方が多勢であり、用心深い」。

57 それでわれらは、庭園と泉から彼らを追放した、

58 財宝や、立派な屋敷からも。

59 このような通り。われらは、それらをイスラエルの民に継がせた。





60 そして彼ら［フィルアウンの軍勢］は、日の出に彼らを追ってきた。

61 双方が互いに相手を目にすると、ムーサーの仲間が言った。「私たちは、きっと追いつかれてしまう」。

62 彼［ムーサー］は言った。「いいや、断じて。本当に主は私と共にあり、私を導いてくれる」。

63 そこでわれらは、ムーサーに啓示した。「あなたの杖で、海を打ちなさい」。するとそれ［海］は割れ、割れたところがそれぞれ巨大な山のようになった。

64 われらは、そこにもう一方［のフィルアウンの軍勢］を引き寄せた。

65 そしてわれらはムーサーと、彼と共にいた者をことごとく救った。

66 そののちにわれらは、もう一方［のフィルアウンの軍勢］を溺れさせた。

67 その中には、本当にひとつの御しるしがある。しかし彼らの多くは、信仰者にはならない。

68 本当にあなたの主こそは威力ある御方、慈悲深い御方。

69 彼らに語って聞かせなさい、イブラーヒームの話を。

70 彼がその父と民とに、「あなたがたは何に仕えているのですか」と言ったときのこと［を思いなさい］。

71 彼らは言った。「私たちは諸々（もろもろ）の立像に仕えており、いつでもこれらを崇めている」。[4]

72 彼［イブラーヒーム］は言った。「これらは、あなたがたが呼びかけると聞くのですか。

73 あるいはこれらは、あなたがたを益するなり、害するなりするのですか」。

74 彼らは言った。「いいや、そうではない。私たちの先祖がこうしているのを習った」。

75 彼［イブラーヒーム］は言った。「それではあなたがたは、自分たちが仕えているものについて考えたことはあるのですか、

76 あなたがたも、あなたがたの代々の先祖も。

77 本当に、そうしたものは［すべて］私には敵です、諸世界の主を除いては。[5]
78 私を創造し、私を導く御方、
79 私に食べるもの、飲むものをもたらす御方、
80 私が病んだときに、私をいやす御方、
81 私を死なせ、そののちに［再び］生かす御方、
82 裁きの日に、過ちを赦してもらえるよう、私が願う御方。
83 主よ。私に知恵を授けてください。私を、正しい者たちに加わらせてください。[6]
84 後世においても、私を、真実を語る者としてください。
85 私を、至福の楽園を継ぐ者のひとりとしてください。
86 私の父を赦してください。本当に、彼はさまよえる者のひとりではありましたが。
87 彼らがよみがえらされる日に、私に恥辱（ちじょく）をもたらさないでください」。
88 財も子どもも、何の益ももたらさない日、[7]
89 まったき心をもって、アッラーの御前に来る者を除いて。[8]
90 楽園が、畏れる者［の近く］に引き寄せられる。
91 ［道を］踏み外した者には、業火が現される。
92 彼らは告げられるだろう。「あなたがたが仕えていたものは、どこにあるのか。
93 アッラーをさし置いて、それらにあなたがたを助けることができるのか。あるいは、それら自身を助けることができるのか」。
94 それで彼らも、［道を］踏み外した者も、その中に投げ入れられるだろう。





95 またイブリースの軍勢も［、その全員が］一斉に。
96 彼らは、その中で反目し合いつつ言うだろう。
97 「アッラーにかけて。本当に私たちは、明らかな誤りの中にいました、
98 あなたがたを、諸世界の主と同等にみなしてしまったときに。
99 私たちを迷わせたのは、罪を犯す者たちに他ならない。
100 もはや私たちには、とりなす者もおらず、
101 真実の友もいない。
102 もう一度［地上に］引き返して、信仰者のひとりになることができたなら」。
103 その中には、本当にひとつの御しるしがある。しかし彼らの多くは、信仰者にはならない。
104 本当にあなたの主こそは威力ある御方、慈悲深い御方。
105 ヌーフの民は、使徒たちを嘘であるとした。
106 彼らの同胞であるヌーフが、彼らにこう言ったときのこと［を思いなさい］。「あなたがたは、畏れないのか。
107 本当に私は、あなたがたにとり信頼に足る使徒である。
108 それゆえアッラーを畏れなさい。そして私に従うといい。
109 私はこれについて、あなたがたに何の報酬も求めない。私の報酬は、ただ諸世界の主のみにある。
110 それゆえアッラーを畏れなさい。そして私に従うといい」。
111 彼らは言った。「私たちは、あなたを信じるべきだろうか。あなたに従っているのはもっとも卑（いや）しい者たちであるというのに」。

112 彼［ヌーフ］は言った。「彼らが［過去に］行ってきたことについて、私が何を知っているだろうか。
113 彼らの清算は、ただ私の主の御許にある、あなたがたが気づきさえしたなら。
114 また私は、信仰者を追い払いはしない。
115 本当に私は、［警告を］明らかにするひとりの警告者に他ならない」。
116 彼らは言った。「ヌーフよ、止めないか。さもないとあなたは、石で打たれる者のひとりとなるだろう」。
117 彼［ヌーフ］は言った。「主よ。私の民は、私を嘘よばわりしています。
118 ですから私と彼らのあいだを裁いてください。そして私と、私と共にいる信仰者を救ってください」。
119 そこでわれらは、彼と、彼と共にいた者とを、満載の船に救った。[9]
120 そののちわれらは、後に残った者たちを溺れさせた。
121 その中には、本当にひとつの御しるしがある。しかし彼らの多くは、信仰者にはならない。
122 本当にあなたの主こそは威力ある御方、慈悲深い御方。
123 アード［の民］は、使徒たちを嘘であるとした。
124 彼らの同胞であるフードが、彼らにこう言ったときのこと［を思いなさい］。「あなたがたは、畏れないのか。
125 本当に私は、あなたがたにとり信頼に足る使徒である。
126 それゆえアッラーを畏れなさい。そして私に従うといい。
127 私はこれについて、あなたがたに何の報酬も求めない。私の報酬は、ただ諸世界の主のみにある。
128 あなたがたは虚栄を満たそうとして、すべての高地に碑を建てるのか。[10]
129 永遠に生きようとして、砦を選ぶのか。





130 力を振るうときは、暴君のように振るうのか。
131 それゆえアッラーを畏れなさい。そして私に従うといい。
132 畏れなさい、あなたがたの知るものを供する御方を、
133 あなたがたに家畜や子どもを供し、
134 また庭園と泉をも。
135 本当に、私はあなたがたのために、大いなる日の懲罰が恐ろしい」。
136 彼らは言った。「あなたが教示しようと教示するまいと、私たちには同じこと。
137 本当に、これは大昔の習わしに過ぎない。[11]
138 私たちが、罰せられることはない」。
139 こうして彼らは、彼を嘘であるとした。それでわれらは、彼らを滅ぼした。その中には、本当にひとつの御しるしがある。しかし彼らの多くは、信仰者にはならない。
140 本当にあなたの主こそは威力ある御方、慈悲深い御方。
141 サムード［の民］は、使徒たちを嘘であるとした。
142 彼らの同胞であるサーリフが、彼らにこう言ったときのこと［を思いなさい］。「あなたがたは、畏れないのか。
143 本当に私は、あなたがたにとり信頼に足る使徒である。
144 それゆえアッラーを畏れなさい。そして私に従うといい。
145 私はこれについて、あなたがたに何の報酬も求めない。私の報酬は、ただ諸世界の主のみにある。
146 ［やがては死を迎える］あなたがたが、ここで［いつまでも］安心していられようか、

147 庭園や泉の中で、

148 田畑や、ほっそりと花序（かじょ）を伸ばしてみのるなつめやしの木の中で、

149 またあなたがたが、［岩の］山々に、巧みに家を刻んでも。

150 それゆえアッラーを畏れなさい。そして私に従うといい。

151 そして行き過ぎた［浪費をする］者の命令に従ってはならない、

152 地上に退廃を広めて、改め直すこともしない者に」。

153 彼らは言った。「あなたは、惑わされているだけの者に過ぎない。

154 あなたは私たちと同じ人間のひとりに過ぎない。しるしを出してみせなさい、本当にあなたが真実を語っているのなら」。

155 彼［サーリフ］は言った。「これは雌のらくだ。これにも、あなたがたにも、それぞれがそうと決められた日に［順番に］水を飲む［権利がある］。

156 また、悪をもってこれに触れてはならない。さもないと、大いなる日の懲罰があなたがたを襲うだろう」。

157 しかし彼らはこれの腱（けん）を切り、そのために後悔することになった。[12]

158 懲罰が彼らを襲ったのである。その中には、本当にひとつの御しるしがある。しかし彼らの多くは、信仰者にはならない。

159 本当にあなたの主こそは威力ある御方、慈悲深い御方。

160 ルートの民は、使徒たちを嘘であるとした。

161 彼らの同胞であるルートが、彼らにこう言ったときのこと［を思いなさい］。「あなたがたは、畏れないのか。





162 本当に私は、あなたがたにとり信頼に足る使徒である。

163 それゆえアッラーを畏れなさい。そして私に従うといい。

164 私はこれについて、あなたがたに何の報酬も求めない。私の報酬は、ただ諸世界の主のみにある。

165 諸世界の万物のうち、あなたがたはただ男ばかりに言い寄り、

166 あなたがたの主が、あなたがたのために創造した配偶者は放っておくのか。いいや、本当にあなたがたは法外の民だ」。

167 彼らは言った。「ルートよ、止めないか。さもないとあなたは、追い出される者のひとりとなるだろう」。

168 彼［ルート］は言った。「本当に私は、あなたがたの行いを憎悪する。[13]

169 主よ。私と私の家族を、彼らの行っていることから救ってください」。

170 そこでわれらは、彼と彼の家族をことごとく救った、

171 後に残される者たちの中にいた、ひとりの老婦を除いては。

172 そののちにわれらは、他の者たちを滅ぼした。

173 それからわれらは彼らの上に、［石つぶての］雨を降らせた。警告を受けていた者たちにとり、恐るべき雨であった。

174 その中には、本当にひとつの御しるしがある。しかし彼らの多くは、信仰者にはならない。

175 本当にあなたの主こそは威力ある御方、慈悲深い御方。

176 ［マドヤンの］アイカの仲間は、使徒たちを嘘であるとした。

177 シュアイブが、彼らにこう言ったときのこと［を思いなさい］。「あなたがたは、畏れないのか。

178 本当に私は、あなたがたにとり信頼に足る使徒である。

179 それゆえアッラーを畏れなさい。そして私に従うといい。

180 私はこれについて、あなたがたに何の報酬も求めない。私の報酬は、ただ諸世界の主のみにある。

181 升を十分に満たしなさい。［しかるべき量よりも少なく測り、］損失をもたらす者になってはならない。[14]

182 まっすぐな［正確な］秤で量りなさい。

183 他の人からものを奪ってはならない。また地上をかき乱して、退廃を広めてはならない。

184 そしてあなたがたや、大昔の多くの世代を創造した御方を畏れなさい」。

185 彼らは言った。「あなたは、惑わされているだけの者に過ぎない。

186 あなたは私たちと同じ人間のひとりに過ぎない。そして本当に、私たちには、あなたは嘘つきだと思われる。

187 空の破片を、私たちの上に落としてみせるがいい、本当にあなたが真実を語っているのなら」。

188 彼［シュアイブ］は言った。「あなたがたの行いについては、私の主がもっともよく知っている」。

189 しかし彼らは、彼を嘘であるとした。そのため、影さす日の懲罰が彼らを襲った。本当にそれは、大いなる日の懲罰であった。[15]

190 その中には、本当にひとつの御しるしがある。しかし彼らの多くは、信仰者にはならない。

191 本当にあなたの主こそは威力ある御方、慈悲深い御方。

192 本当に、［それは］諸世界の主からの啓示。

193 それは信頼に足る霊［ジブリール］によって下された、

194 あなたの心に。それであなたが、警告者のひとりになるようにと、

195 明白なアラビア語によって。





196 そして本当に、これは先人の啓典にもあること。[16]

197 イスラエルの民の学者がそれを知っていたのは、彼らに対するひとつの御しるしではなかったか。

198 もしわれらが、これを異国の誰かに下していたなら、

199 たとえその者がこれを読み聞かせたとしても、彼らは信じるようにはならなかっただろう。

200 このようにしてわれらは、罪を犯す者の心にそれを入り込ませた。

201 痛烈な懲罰を目にするまでは、彼らは信じるようにはならないだろう、

202 ［しかし］それは突然に彼らに到来するだろう、彼らも気づかないうちに。

203 そして彼らは言うだろう。「私たちは、猶予してもらえないのか」。

204 それなのに彼らは、われらの懲罰を急かすのか。

205 考えてもみたか、たとえわれらが長年、彼らを楽しませ、

206 そののち、彼らに約束されていることが到来するなら、

207 ［現世で］楽しんだからといって、それが彼らにとり何の役に立つだろうか。

208 われらはどの町も、警告者［を遣わすこと］なくして滅ぼすことはしなかった、

209 戒めとして。われらは、決して不当なことはしない。

210 また悪魔たちが、それ［啓示］を下すのではない。[17]

211 それは彼らにはそぐわない。また彼らにそのような能力もない。

212 本当に彼らは、［啓示を］聞くことから除外されている。

213 それゆえ、アッラーと共に他の何ものかに呼びかけてはならない。さもないとあなたは罰せられる者のひとりとなるだろう。

214 そしてあなたに近しい親族に警告しなさい。

215 また、あなたに従う信仰者に対しては、あなたの［親切の］翼を垂れなさい。

216 また、もし彼らがあなたに逆らうなら、言いなさい。「本当に私は、あなたがたの行いにまったく関わりがない」。

217 そして威力ある御方、慈悲深い御方に委ねなさい、

218 あなたが［礼拝のために］立つのを見ている御方、

219 ひれ伏す者たちの中での、あなたの動きを見ている御方に。[18]

220 本当にすべてを聞く御方、すべてを知る御方。

221 悪魔たちが誰の上に降りるのか、あなたがたに報せようか。

222 彼らは、すべての罪深い嘘つきの上に降りる。

223 彼らは［熱心に］聞き入っているが、彼らの多くは嘘つきである。

224 また詩人たちについては、彼らに従うのは［道を］踏み外した者だけ。

225 あなたは見なかったか、彼らが、谷という谷をさまようのを、

226 また彼らが、自分ではやりもしないことを口にするのを。

227 しかし信じて正しい行いをし、アッラーを多く想い起こし、不正をなされた後に［ムスリムたちを］助ける者は別である。不正をなす者たちは、どのような転がされ方で転げるものか、やがて知ることになるだろう。[19]





1 フィルアウンはムーサーがエジプトの民を一人、殺害したことを思い出させ、「おまえは殺人者であるばかりか、恩を忘れる者だ」となじった。

2 フィルアウンはムーサーを「恩知らず」と呼び、エジプトの王宮で様々な恩恵を受け取っていたとしてムーサーを責めた。これに対し、ムーサーは次のように答えた。「恩恵とは何のことか。私の同胞であるイスラエルの民を奴隷にしたことも、あなたのいう『恩恵』に含まれるのか」。ムーサーは、今や個人としてではなく、神の預言者として語り始めたのである。

3 フィルアウンの時代、宗教といえばそれは魔術や、フィルアウンへの崇拝も含まれるという状態にあった。ここで呼び出された「魔術師」たちが、古代エジプト神話の神々の崇拝を司る神官であったことは間違いないだろう。そうした神殿では魔術が重要な役割を果たしており、ムーサーに対する彼らの勝利は、王宮の公式な宗教の正当性が民衆に示されることを意味したのである。このフィルアウンのように搾取するばかりの支配者に対し、「純粋な忠誠心」などというものが民衆の中に生じることはない。おそらくは神官として仕えていただろう魔術師たちも、欲得（よくとく）ずくの者たちであった。彼らが望んでいたのは、既成の秩序を守りつつ、その中で立身出世すること、またそれにより、王家と民衆に対する支配力を強めることだったのである。

4 彼らは、これこそが真実の敬虔な信仰であるかのように見せたがっていた。しかしイブラーヒームは、「あなたがたは、何に対して献身しているのか。それは献身にふさわしいものなのか」と尋ねることにより、問題の核心に一気に切り込んでいる。

5 ここで個人的な経験からの証言をはさむことを了承願いたい。多くの人々が、実際には人々の敵であるものを崇拝し、またそれを他者にも強要する。しかしそれらは、私にとっては敵なのである。それらは私にとり何ひとつ益をもたらさないし、また私を正しい道から迷わせるものでもある。それらの持つ力は、単に人々を迷わせるものに過ぎない。私が崇拝する唯一、真の神の力とは対照的である。神は私と世界のすべてを創造した。神は私を大切に扱い、また私をてい

ねいに導く。神は私をやさしく世話し、そして私がやがて死を迎えれば、神はその後で、私に新たな生を与えるだろう。神は私に赦しを与え、最後の救いを授けるだろう。このように言えば、本当の意味での崇拝に立ち返る人はいるだろうか。あるものと、別のものを比較して、その違いに気づく人はいるだろうか。気づいた人から見ればその違いは、まるで光と闇ほどにも対照的ではないだろうか。

6 真理と虚偽の区別が明白に示されたところで、イブラーヒームは、その祈りを通して、自分自身の最奥にあった望みを表した。

7 心を純粋に保つ他に、のちのち役立つことは何もない。現世におけるあらゆる「善行」は、その動機が純粋でない限りは何の益ももたらさないのである。至福の楽園と悲惨な業火の明暗がはっきりと示される。諸々の悪が、その真の姿を見せる。

8 善に対する報いはただ善のみである。そして悪は、ただ悪のみを招く。こうした種類のコントラストは、現世における生の中にあっても、霊的な感覚を通して人々に示される。

9 ヌーフの大洪水の物語は、一一章三六節から四八節に記されている通りである。ここで強調されているのは、ヌーフの忍耐と、災厄の脅威に対しても動じない平常心、また世界じゅうが背き去ったとしても、最後に残るのは神の勝利と真実であるという点である。

10 あらゆる物質文明には見世物や行列が付きものである。その信奉者たちは、まるで自らの卑しさ、貧弱さをおおい隠そうとするかのように、目立った場所という場所に、ありとあらゆる種類の出来事や物事にまつわるモニュメントを造り散らかす。何世代にもわたって誰もが覚えてすらいなかった、そしてまたすぐに忘れられてしまうであろう出来事や物事を「記念する」というのである。

11 彼らの言い分は、現代において宗教を敵視する人々のそれとまるで同じである。「あなたがたは古い迷信を復活させよ





うというのか。あなたがたが言うような、来世だの、懲罰だのといったものは存在しないのだ」。

12 彼らの後悔は遅過ぎた。自らすすんで徴を求めたのは彼らの方であった。そしてその徴はらくだの姿をもって授けられた。それは彼らの預言者サーリフを通し、彼らに対する試練として届けられたものだったのである。彼らはこの象徴を通して、すべての人々が水と自然の恩恵に預かる権利を有するという、平等の法則を尊重するようになっただろうか。彼らはこの法則を尊重することを拒んだ。雌らくだを故意に傷つけ、法則を冒涜したのである。彼らは自分たちの手で、自らに悪しき結末を招いたのである。

13 ルートはただ、義務感だけで彼らの中にとどまっていた。そこに漂う空気に、彼は嫌悪の情しか持てずにいたのである。義務から解放され、もはやこれ以上はここにとどまり続けなくてもよいことがわかったとき、ルートは喜んでその場から逃げ去った。彼は常々、彼を取り巻くこの場から救い出してくれるよう、祈っていたのである。

14 彼らは交易を生業とする人々であったが、詐欺や不正、不当な行為に手を染めていた。シュアイブは彼らに、神を畏れ、またシュアイブと同じ道に従うよう求めた。彼らと同じく、彼らの祖先もまた、神によって創造された人々であった。しかし彼らの祖先は、公正で良心的な行いによって繁栄を築いたのであり、決して詐欺や暴力的な不正によってではなかった。

15 おそらく火山の噴火にともなう噴石や降灰を指す。マドヤンの人々と同様であれば、地震も起こったものと思われる。

16 「先人の啓典」。ここでは「ザブール」を「啓典」と訳出してある。これはクルアーンでも言及されている通り、預言者ダーウードに授けられた啓典の呼称である。また、一般的な意味で「書（五四章五二節）」の総称としても用いられる。ここでは、以前の啓示を指すのにこの語が用いられている。

17 何か非常に目立った出来事が起こると、悪い方へ、悪い方へと解釈したがる人々というのが必ず存在する。そして何かにつけ、これは邪悪な者、つまり悪魔の仕業だと言う。クルアーンが驚くほど優れたアラビア語で下されたときにも、

敵対者たちは、それを悪霊の仕業として考える以外に、そのメッセージの持つ力を説明することができなかった。

18 立ったりひれ伏したりという姿勢は、文字どおり、ムスリムの礼拝の際の一連の動作である。預言者は、自分自身のためにも、またすべての人々のためにも熱心に礼拝した。預言者のふるまいは、喜びのときも悲しみのときも、人生のあらゆる場面において人々の模範となった。たとえ愚かな人々が、どれほど彼の揚げ足取りに執心しようとも、預言者の純正さと善良さについては、神が誰よりもよく理解していた。

19 この意味で、完璧な芸術家は、同時に完璧な人間でなくてはならない。現世では、完璧を達成することはできないかもしれない。しかしすべての人間は完璧を目標とすべきであろう。特に、技術的な面だけではなく、精神と本質においても最高の芸術家を目指そうという人ならなおさらである。預言者と同時代の人物であれば、ハッサン（ハッサン・ブン・サービト）とラービド（ラービド・ブン・ラビーア・ブン・マーリク・アブー・アキール・アル＝アーミリー）の名が挙げられるだろう。後者は「ジャーヒリーヤ（無知の時代）」と呼ばれたイスラーム以前のアラブの詩人の中でも、とりわけ称賛に値する七詩人の一人に数えられるという栄誉に輝いている。『サヒーフ・ブハーリー』には預言者がラービドの詩を褒め称えたというハディースが収められている。

# 第二七章　アン＝ナムル　蟻

マッカ啓示

アン＝ナムル、すなわち「蟻」の章とは、その語が現れる一八節にちなんで章題がつけられている。いわゆる「奇跡」を否定する一部の解釈者は、スライマーンの物語に登場する蟻の群れは古いアラブの部族を、また鳥たちは騎兵を、フドフド（ヤツガシラ）はある人物の名を、またジンは異国の兵を示すものとして解釈している。本章はマッカ時代中期の啓示群に属する。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 ター、スィーン。これは明らかな啓典、クルアーンの御しるし。
2 信仰者への、導きにして良い報せ。
3 礼拝のつとめを守り、喜捨をし、来世を確信する者たち。
4 本当に、信じない者たちに対しては、われらはその行いをすばらしいもののように飾ってみせた。それで彼らは、あてもなくさまよっている。
5 これらの者は、ひどい懲罰を科される者たち。彼らは、来世では最大の敗者となるだろう。
6 あなたは、もっとも賢明にしてもっともよく知る御方の御許からクルアーンを受け取っている。





7 ムーサーが、その家族にこう言ったときのこと［を思いなさい］。「私にはちらりと火が見えた。私はあそこからあなたがたに、何か知れたことをもって来よう。あるいはあの火から燃えがらをもって来よう、あなたがたが暖まるように」。[1]
8 しかし、彼がそこに来ると、彼は呼びかけられた。「祝福あれ、火の中にいる者と、その周囲にいる者に。アッラーに讃美あれ、諸世界の主に。
9 ムーサーよ。本当にこれぞわれ、アッラーである。もっとも威力ある者、もっとも賢明な者。
10 あなたの杖を投げなさい」。しかし、それがまるで蛇のように動くのを見ると、彼は背を向けて逃げ出し、振り返りもしなかった。「ムーサーよ、恐れるな。本当に、使徒がわれの許で恐れることはない、
11 不正をなした者を除いては。［しかし］そののち、後から善事をもって悪事に代えるなら、本当にわれはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。
12 あなたの手を、あなたの懐に入れなさい。それは傷ひとつない白さで出てくる。それはフィルアウンとその民への、九つのしるしの一部である。本当に彼らは、背く民であった」。
13 しかし、われらのしるしが目に見えて彼らにもたらされたとき、彼らは言った。「これは、明らかに魔術に過ぎない」。
14 そして彼らは、内心では納得していながら、不正と高慢のためにそれら［御しるし］を拒んだ。それで、見なさい、退廃を広める者の最後がどのようであったかを。
15 また、われらはダーウードとスライマーンに知識を与えた。彼らは言った。「アッラーに称賛あれ、しもべである多くの信仰者たちにもまさって私たちに恵む御方に」。[2]
16 そしてスライマーンは、ダーウード［の後］を受け継いだ。彼は言った。「人々よ。私たちは鳥の言葉を

教わり、またありとあらゆるものを与えられもした。本当に、これこそ明白な御恵みである」。[3]

17 スライマーンのために、ジンと人間と鳥からなる彼の軍勢が集められた。彼らが隊列を組み、

18 蟻（あり）の谷までやって来たとき、一匹の蟻（あり）が言った。「蟻（あり）たちよ。あなたがたの住みかに入れ。さもないとスライマーンの軍勢が、彼らも気づかないうちにあなたがたを踏み潰すだろう」。

19 それで彼［スライマーン］はほほえんだ。その［蟻（あり）の］言葉に笑い、そして言った。「主よ。あなたが私と両親に授けたあなたの恩寵に、私が感謝する者であれるようにしてください。［それにより］私が、あなたの喜びにあずかる正しい行いをなせるようにしてください。そしてあなたの慈悲をもって、私を、あなたの正しいしもべのひとりとして受け入れてください」。[4]

20 そして彼は、鳥たちの中を吟味して言った。「どうしてかやつがしらを見ないが、不在にしている者のうちであっただろうか。

21 私は、必ずあれを厳重な刑罰をもって罰そう。あるいはあれを討ち取ろう、明らかな理由を、私にもって来ない限りは」。

22 しかし、程なくして［やつがしらがやって来て］、それは言った。「私は、あなたが知るに及んでいないことを知りました。私はあなたに、確実な報（しら）せをもってサバアから来ました。

23 本当に私は、彼ら［サバアの人々］を統治しているある婦人を見つけました。彼女はありとあらゆるものを［豊かに］与えられており、また彼女には、大いなる玉座があります。[5]

24 私は彼女とその民が、アッラーをさし置いて太陽にひれ伏しているのを見つけました。そして悪魔が彼らの行いを、すばらしいもののように見せ、あるべき［真理の］道から彼らを妨げているのです。そのため彼らは［正しく］導かれていません。





25 そのため彼らは、アッラーにひれ伏さずにいるのです。諸天と大地に隠れているものを連れ出す御方、あなたがたの押し隠すものもさらけ出すものも知る御方に。

26 アッラー、貴い玉座の主である御方の他に、いかなる神もありません」。

27 彼［スライマーン］は言った。「あなたが真実を語っているのか、あるいは嘘をついているのか、やがて分かることだろう。

28 私の、この手紙をもって行き、彼らに届けなさい。それから彼らに背を向けて、彼らがどう返すかを見ていなさい」。

29 ［手紙を受け取ると、］彼女は言った。「長老たちよ。貴い手紙が私に届いた。

30 本当に、それはスライマーンからのもの。そしてそれには、『慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

31 私に対し、高ぶってはならない。服従する者［ムスリム］として、私のところへ来なさい』とある」。

32 彼女は言った。「長老たちよ、このことについて助言を述べよ。あなたがたの立ち会いなくして、私は、何ごとについても決めることはしないのだから」。

33 彼らは言った。「私たちは力も、強大な武力も持つ者です。しかし、命令はあなたにあります。ですから、どう命令するかよく考えてください」。

34 彼女は言った。「本当に王者たちは、町に入るときはそれを荒らし、住民の中でもっとも高位の者をおとしめる。彼らの行いとは、常にそのようなもの。

35 私は彼らに贈りものを送ろう。それで使者が、何をもって帰るかを見るとしよう」。

36 それで［使者が］スライマーンのところへやって来ると、彼は言った。「あなたがたは、財をもって私に

寄与しようというのか。しかしアッラーが私に与えたものは、御方があなたがたに与えたものよりもすぐれている。いいや、あなたがたの贈りものを嬉しがっているのは、むしろあなたがただ。

37 彼らの許に帰れ。私たちは、必ず彼らには抗えない軍勢をもって彼らに向かおう。そして必ず彼らをおとしめられ、さげすまれる者としてそこから追放しよう」。

38 彼［スライマーン］は言った。「長老たちよ。彼らが服従して私のところへ来る前に、彼女の玉座を私に持ってくる［ことができる］のは、あなたがたのうち誰か」。

39 するとジンの中から、［その頭目である］イフリートが言った。「私は、あなたがその座から立つ前にそれを持ってきましょう。私にはそのための力がありますし、信頼に足る者です」。[6]

40 啓典の知識を備えたある者が言った。「私は、あなたが瞬きをする前にそれを持ってきましょう」。それが彼の前に置かれたのを見て、彼［スライマーン］は言った。「これは私の主の御恵み、私が感謝するか、あるいは恩を忘れるかを試すためのもの。そして誰であれ感謝する者は、ただ自分のために感謝する。そして恩を忘れるのが誰であれ、本当に私の主は満ち足りた御方、高貴な御方」。[7]

41 彼［スライマーン］は言った。「彼女のために、彼女の玉座の装いを変えなさい。それで私たちは、彼女が［真理へと］導かれるか、それとも導かれない者のひとりとなるかを見てみよう」。

42 それで彼女が到着すると、［彼女は］こう言われた。「あなたの玉座は、このようなものか」。彼女は言った。「まるで、このようなものです」。［スライマーンは思った。］「私たちは彼女より以前に知識を与えられ、服従する者［ムスリム］となった。

43 しかし、彼女がアッラーをさし置いて仕えていたものが彼女の妨げとなった。本当に彼女は、［真理を］拒む民のひとりであった」。





44 彼女は「宮殿に入るように」と言われた。彼女はそれを見て水面かと思い、［裾をたくし上げて］その足をさらけ出した。スライマーンは言った。「本当に、これは硝子をなめらかに張った宮殿である」。彼女は言った。「主よ、本当に私は自分自身に不正をなしました。私はスライマーンと共に、諸世界の主たるアッラーに服従します」。[8]

45 また、われらはすでにサムードに、その同胞であるサーリフを遣わしていた。［彼は言った。］「アッラーに仕えなさい」。すると、見なさい。彼らは二派に分かれて反目し合った。[9]

46 彼は言った。「私の民よ。どうしてあなたがたは、善事よりも悪事を急ぎ求めるのか。どうしてあなたがたは、アッラーの赦しを願わないのか。そうすればあなたがたは慈悲にあずかるだろうに」。

47 彼らは言った。「私たちは、あなたやあなたと共にいる者を凶兆とみなす」。彼は言った。「あなたがたの凶兆はアッラーの御許にある。いいや、あなたがたは試されている民だ」。[10]

48 その市街には、地上に退廃を広め、改め直すこともしない九人の者がいた。[11]

49 彼らは言った。「アッラーにかけて互いに誓おう。必ず彼［サーリフ］とその家族に夜襲をかけ、そののち遺族には『彼の家族が破滅させられるところを、私たちは目撃していない。本当に、私たちは真実を語っている』と言おう」。

50 彼らは謀りごとを謀った。われらもまた、彼らも気づかないうちに謀りごとを謀った。

51 そして見なさい、彼らの謀りごとの最後がどのようであったかを。本当にわれらは、彼らとその民をことごとく崩壊させた。

52 そしてこれが、その不正のために崩れ落ちた彼らの［かつての］家々。本当にその中には、知っている民への御しるしがある。

53 また、われらは［主を］信じ、畏れてもいた者たちを救った。

54 またルートについて。彼がその民に、こう言ったときのこと。「あなたがたは、そうとわかっていながら不品行にはしるのか。[12]

55 あなたがたは劣情し、女をさし置いて男に言い寄る。いいや、あなたがたは本当に無知な民だ」。[13]

56 しかし彼の民の答えは、ただ「ルートの一族を、あなたがたの町から追い出してしまえ。自分で清浄ぶるような人々だ」と言うだけ。

57 それでわれらは、彼とその一族を救った、彼の妻を除いては。われらは彼女を、後に残される者のひとりと定めた。[14]

58 それからわれらは彼らの上に、［石つぶての］雨を降らせた。警告を受けていた者たちにとり、恐るべき雨であった。

59 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「アッラーに称賛あれ。この御方に選ばれたしもべたちの上に平安あれ」。より良いのはアッラーの方か、それとも彼らがこの御方と同列に連ねているものの方か。[15]

60 諸天と大地を創造し、あなたがたのために空から雨を降らせるのは誰か。それにより、われらは美しさに満ちた庭園を育む。その木々は、あなたがたには育むことのできないもの。アッラーと共に別の神があるだろうか。いいや、しかし彼らは［神と］他の何ものかを同一視する民。

61 大地を定住の場とし、そのただ中に川を設け、また不動の山々を据え、ふたつの海の間に仕切りを置いたのは誰か。アッラーと共に別の神があるだろうか。いいや、多くの者は何も知らない。

62 困っている者が呼びかけるとき、それに応えて悪をとり除き、またあなたがたを地上の後継者とするのは誰か。アッラーと共に別の神があるだろうか。あなたがたのうち、憶える者はわずかであるが。





63 陸と海の暗闇の中、あなたがたを導くのは誰か。慈悲の前に良い報せ（しらせ）として風を送るのは誰か。アッラーと共に他の神があるだろうか。アッラーは彼らが連ねるものを超越して、いと高くにおわす。[16]

64 あるいは創造を始め、そののちそれを繰り返すのは、また諸天と大地から、あなたがたを養うのは誰か。アッラーと共に別の神があるだろうか。言いなさい。「もしあなたがたが真実を語っているのなら、その証拠を出しなさい」。[17]

65 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「アッラーの他に、諸天と大地の目には見えないものを知る者はいない。また彼らは、自分がいつよみがえらされるかも気づけない」。

66 いいや、彼らの知識は来世について十分といえるのか。いいや、彼らはそれを疑ってさえいる。いいや、彼らはそれについてほとんど見えてさえいない。

67 ［真理を］拒む者たちは言う。「私たちや私たちの先祖が塵になったとき、私たちは本当に［墓から］連れ出されるのだろうか。

68 私たちも私たちの先祖も、以前からすでにこれを約束されていた。しかしこれは、大昔の人の伝説に過ぎない」。

69 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「地上を旅し、そして見なさい、罪を犯した者の最後がどのようであったかを」。

70 あなたは彼らのために嘆くことはない。彼らの謀（はか）りごとのために悩むことはない。

71 彼らは言う。「もしあなたがたが真実を語っているのなら、その約束はいつ果たされるのか」。

72 言いなさい。「おそらく、あなたがたが急かすもののいくつかは、あなたがたのすぐ後ろにある」。[18]

73 本当にあなたの主は、人々に対し御恵みゆたかである。しかし、彼らの多くは感謝しない。

74 本当にあなたの主は、彼らが胸にしまうものも、あらわすものも知っている。
75 諸天と大地の目には見えないもので、明白な書物の中に［記されてい］ないものは何もない。
76 本当にこのクルアーンは、イスラエルの民に対し、彼らのあいだで相争われていることの多くについて語るもの。
77 またそれは、信仰者のための導きともなり、慈悲ともなるもの。
78 あなたの主は、その知恵によって彼らのあいだを裁くだろう。もっとも威力ある御方、すべてを知る御方。
79 それゆえアッラーに委ねなさい。本当にあなたは、明白な真理の上にある。
80 本当にあなたには、死せる者に聞かせることはできない。また耳の聞こえない者が、背を向けて逃げ出そうとするとき、呼びかけを聞かせることはできない。
81 また目の見えない者を、その迷いから導くこともできない。あなたが聞かせることができるのは、ただわれらのしるしを信じる者たち、すなわち服従する者［ムスリム］だけ。
82 彼らの上に御言葉が落とされるとき、われらは彼らのために大地から一頭のけものを生じ出させ、「人々は、われらのしるしを確信せずにいた」と言わせる。[19]
83 その日、われらはすべての共同体から、われらのしるしを嘘であるとしていた者たちの群れを集め、彼らは［それぞれに］隊列を組まされる。
84 ［裁きの場に］彼らがやって来たとき、御方は告げるだろう。「知識では把握できずにいながら、われのしるしを嘘よばわりしていたのか。それともあなたがたは、何ごとかを行ってきたとでもいうのか」。
85 彼らの不正のために、御言葉が彼らの上に落とされる。彼らには、口をきくこともできない。
86 彼らは、われらが彼らのためにその中で憩（いこ）えるようにと夜と、ものを見られるようにと昼を設けたのを見ないのか。本当にその中には、信じる民への御しるしがある。





87 喇叭（らっぱ）が吹き鳴らされるその日［について知らせなさい］。アッラーの御心にかなう者を除き、諸天と大地にあるものすべてが恐怖し、それぞれ、その身を縮めてこの御方のところへ来る。[20]
88 あなたは山々を見て、堅固なものと思っている。しかしそれが、雲が通り過ぎるように通り過ぎてゆく。それはありとあらゆるものを完成させるアッラーのみわざ。本当にかの御方は、あなたがたのすることを熟知している。[21]
89 誰であれ善事をもってやって来た者には、それよりも良いものがある。彼らは、その日の恐怖から安全だろう。
90 誰であれ悪事をもってやって来た者は、その顔を業火の中に転がされるだろう。あなたがたは、行ってきたこと以外の何によって報われるというのか。
91 ［ムハンマドよ、言いなさい。］「私は、この町を禁制とした主にのみ仕えるよう命じられている。ありとあらゆるものはこの御方に属する。私は、服従する者［ムスリム］であれと命じられている。
92 また、クルアーンを読み聞かせるようにとも」。誰であれ導かれる者は、ただ自分自身のために導かれる。迷う者には、言いなさい。「私は、ひとりの警告者に過ぎない」。
93 言いなさい。「アッラーに称賛あれ。御方はあなたがたに、その御しるしを見せるだろう。そしてあなたがたも、それを認めることだろう。あなたがたの主は、あなたがたの行いに無頓着ではない」。

1 二〇章九節から二四節も参照。どちらにおいても、ムーサーの心に啓示の最初の黎明が訪れたことが告げられている。ここで強調されているのは、火の持つすばらしい性質と、霊的な光に触れることによってムーサーに起こった驚くべき変容についてである。その時、彼は家族と共にシナイの砂漠を旅している最中だった。普通の明かりを探し求めていたはずが、彼を神の至高の神秘へと導く光に遭遇したのである。彼の内面的な遍歴のすべてが、彼の偉大なる運命のための準備であったことは疑う余地もないことである。人間にとっては、この内面的な遍歴こそが重要なのであり、その人を取り巻く他者の目に映る立場や地位ではない。

2 二一章七八節から八二節も参照。ここでいう「知識」とは、人生においてより高みへと導く知識、意思決定を行い、判断を下す際に示される「知恵」、そして人生において一人ひとりに与えられている使命を果たすための理解を促すような知識を意味している。彼らはいずれも人間に過ぎず、かつ神の預言者であった。上記の節に示されている通り、彼らは共に、全く当然のこととして、自分たちの知識、知恵、そして能力を、あらゆる善なるものの唯一、真の源泉である神に帰した。

3 肝心なのは、スライマーンは父の王国のみならず、父の霊的な洞察力や預言者としての使命をも受け継いだという点である。これは必ずしも、父親から息子へと継承されるものではない。人間の発する言葉は、鳥や動物が有する、お互いに意思を疎通させ合う手段とは異なっている。しかし例えば渡り鳥の秩序だった飛行や、蟻（あり）やミツバチ、その他の生きものが自分たちの共同体を作り、規則正しく活動しているのを観察すれば、彼らには彼らのコミュニケーションが存在することは疑う余地もない。

4 スライマーンが祈りとして口にしているのは、大自然に対する彼自身の理解と称賛である。神の被造物の中でも、最もつつましく謙虚な者たちを偉大な神の祝福として受けとめる、彼の愛情に満ちた思いやりが表されてもいる。

5 サバアの女王（シバの女王。アラビアの伝統ではビルキースの名で呼ばれる）は、一見したところイエメンの人物であ





ると思われるが、アビシニアとも由縁があり、アビシニアの統治者であった可能性もある。イエメンはハバシャ族（アビシニアの語源といわれる）の生地である。イエメンの南岸とアビシニア北東部の海岸の間にあるのは、その距離わずか三二キロメートルほどのバーブ・アル＝マンディブ海峡である。紀元前一一世紀から一〇世紀にかけては、アラビアからアビシニアへの侵略が頻繁に行われていた。スライマーンが統治していた四十年間は、一般に紀元前九九二年から九五二年にかけてのこととされている。アラビア南部で発見された、前イスラーム時代の碑文に見られる、サバアとヒムヤルの両王国が用いていた文字は、アビシニアの言語であるエチオピア語に受け継がれていった。アビシニアには、『ケブラ・ナガスト（諸王の栄光の書）』という伝統的な歴史書があり、これはウォーリス・バッジによってエチオピア語から英語に翻訳されている（Oxford, 一九三二）。サバアの女王や、その一人息子でアビシニア王朝の創始者であるメネリク一世についての解説が記されている。

6 ジンの種族は、二つのタイプに分けられる。（1）イフリートに分類されるジン。信仰を持たず、あらゆる神の法に背く反逆者（ただし一部の解釈者は、「イフリート」とはジンの中でも忠実な者を意味するとしている）。（2）より一般的な、「煙なき焔（ほむら）」から創造された感覚的存在としてのジン。通常、人間の目には見えない。信仰を持ち、神の法に従う者もいれば、そうでない者もいる。

7 解釈者たちは、これを述べているのはスライマーンの宰相か、あるいは天使か、あるいはスライマーン自身のいずれかであろうと述べている。ここに登場する「啓典の知識」とは、神が彼に授けた知識を意味する。スライマーンはこの知識を用い、神の許しを得て、様々な物理的な力を意のままに操った。

8 象徴的な意味を解釈しようとすれば、長大な紙幅を費やすことになる。ここでは、あくまでも文字通りの意味に留める。到着したビルキースは敬意をもってうやうやしく歓迎された。そののちに、おそらく宮殿の外に置かれていた自分の玉座が、変化していることにも順応した。これらの出来事を経て、彼女は偉大な宮殿それ自体に入るよう促された。宮殿

の床は、なめらかに磨かれたガラス板でできており、それは水面のように輝いていた。彼女はすっかり水だと思い込み、身につけていた衣裳の裾をたくし上げて自分の足をあらわにした。

9 ここで言及されているのは、神に仕える人サーリフに対して秘密裏に策略を練っていた九人の男たちの一件についてである。彼らは、サーリフの教えは自分たちに不幸をもたらすものと考えた。しかし彼らが「凶兆」と捉えたものは、神による正当な懲罰に他ならず、しかもその原因となるのは、自分たち自身の悪しき行いなのである。彼らの策略は頓挫した。そして悪に手を染めていた共同体全体もまた、滅ぼされた。二六章一四一節から一五九節も参照。

10 あなたがたの占いの結果である「凶兆」については神が最もよく承知している、なぜならそうと定めたのは神自身だからである、という意味。

11 彼らは正義に背き、絶え間なくこれと争い、一向に考えを改めようとはしなかった。しかし彼らが正義を滅ぼすことはなかった。彼らの方が、正義によって滅ぼされたからである。

12 ルートの物語は、本章以外にも複数の章に言及がある。ここで強調されているのは、いわゆる「平原の町（ソドムやゴモラを指す慣用句である）」では、人々が自分でもそれが自分の本質とは相容れないものであることや、またその重大さを承知しつつも罪に耽っていた、という点である。これ以上は悪くなりようがない、という状態である。彼の妻は、明らかに信仰者ではなかった。以前から彼女が示していた、罪深き者たちへの同調が、彼女を運命づけることになる（五七節）。彼女は悲惨な結末を迎えた。後に取り残され、親類縁者と共に破滅を分かち合うこととなった。

13 ここで言及されている「無知」とは、自らの身体的・道徳的な自然を恥辱にさらすことの重大性と罪深さが、どのように彼ら自身を滅ぼすことになるかについての、霊的な意味での「無知」である。結局、それは彼ら自身を損ねることになるのである。彼らの罪の不正さについて、彼らも自覚していたことは、先の節ですでに述べられている通りである。

14 （行き先を持たないがゆえに）後に残った人を表すのに、ここで用いられているアラビア語は「ガービリーン」であるが、





これは「滅ぼされた者たち」か、「滅ぼされた後に生き残った者たち」のいずれを意味する可能性もある。ルートの妻は、燃える石の雨によって滅ぼされたルートの民と一緒に後に残されたと伝えられている。

15 神の啓示は、光、導き、そして慈悲であるとも説き明かされている。人は、神の啓示が与えられていることに感謝すべきである。また、神に選ばれ、神のメッセージを運んだ使徒たちの献身にも感謝すべきである。邪悪な者たちがそうしたように、彼らを排除したり、迫害したり、あるいは追放や殺害を企むのではなく、平安の挨拶を送るべきである。彼ら神に仕える人は、あらゆる苦難を経験し、通常の人生であれば味わえたはずの、あらゆる種類の恩恵も享楽も忘れて、ひたすら人々のために尽くしたのである。

16 外側の世界を取り巻く自然について触れた後に、内なる意識へと注意が向けられる。その後で、社会的・集団的生活や、国と国との間の交渉や交易、農業、工業、そして公共の経済的福祉へと議論がつなげられてゆく。次の節では創造について、その原初の段階から現世というプロセスを経て迎える来世という最終的な運命、新たな創造、新たな天地について熟考するよう求められる。

17 「創造を始め、そののちそれを繰り返す」。これは地上における人間の人生と、その身体的な死の後にある復活について、そして自然界のすべてに現れる、この世における誕生と死と再生のサイクルに関連している。糧、滋養、扶持といった意味の「リズク」という語は、ここでは身体的および精神的な意味合いが与えられている。「諸天と大地から」と告げられている通りである。

18 真理を拒む人々は言うだろう。「未来のことなど、どうして心配するのだろう？　その時が来たら、その時に考えればいいことではないか」。しかし、それは誤りである。審判の日は確実に訪れる。そして今過ごしているこの時こそ、各自が与えられている運命の時そのものかもしれないのである。悔い改め、行いを正すのに早すぎるということは決してない。人間がどれほど忘恩であろうとも、神はすべての人々の幸福を願っているのである。

19

あらかじめ約束されていた懲罰や報復が降りかかるとき、神は地中から一頭の獣をその前兆として遣わすという。その獣は懲罰の対象となる者に、語りかけることもあれば、傷を負わせることもある。この「獣」という語に関する解釈者たちの説は、実に多種多様である。おそらく異形の生きものであろう、とする者もあれば、巨大な家禽や昆虫ではないかとする者、あるいは地上での生を終えて埋葬された死者が、生者に対する警告として、神と信仰の諸問題について語りかけるとする説を述べる者もある。

20

大天使イスラーフィールがラッパを吹くとき、その第一声はそれまでの生に終わりを告げるため、続く第二声で死者が復活することになる、といわれている。一部の解釈者は、ラッパの第二の轟音は、終末の日に人々が復活することの暗示として示されているのであり、実際に轟音が鳴り響くわけではないとしている。また他の解釈者は、ラッパは「魂」を意味しており、ラッパを「吹く」とは、死者に「魂」を吹き込むことを表しているという。

21

「ありとあらゆるものを完成させるアッラーのみわざ」。神の芸術性については、どれほど賛美してもし尽くせるものではない。世界の現在とその未来、また存在するものはすべて神の計画の中にあり、どの出来事、どの事物にも明確な目的が存在する。神は人間である私たちが何ものであるかも、何を行い、何を考え、また何を必要としているかも完全に熟知している。

# 第二八章　アル＝カサス　物語

マッカ啓示

本章の章題は、二五節に現れる語に由来している。この章題は、主にムーサーの初期の努力と最終的な勝利に焦点をあてた物語を伝える、章の内容の本質をも正しく表している。預言者としての使命を授かり、苦闘を強いられていた絶望的な状況の中で下された啓示であり、マッカ時代最後の啓示群のひとつである。一部のアラブ伝記家の中には、本章はヒジュラ「移住」の間に啓示されたとする者もおり、また別の者は、移住中に啓示されたのは八五節のみである、ともしている。

マッカからマディーナへの移動中の預言者に下された八五節と、マディーナで啓示された五二節から五五節を除き、マッカ後期に下された啓示である。本章は全八八節で構成されている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 ター、スィーン、ミーム。

2 これは、明らかな啓典の御しるし。[1]

3 われらはあなたに、真理にもとづいてムーサーとフィルアウンについての話を、信じる民のために読み聞かせよう。





4 本当にフィルアウンは、その地に君臨し、またその住民を諸々の派に分けて、その中のある一派を虐げた。彼らの息子を皆殺しにし、また女たちは生かしておいた。本当に、彼は退廃を広める者のひとりであった。[2]

5 われらは、この地で虐げられている者たちに恩寵をもたらし、彼らを先導者とし、また受け継ぐ者とし、

6 この地で彼らにその身を立てさせ、フィルアウンとハーマーンとその軍勢に、彼らが危惧していたことを示すことにした。[3]

7 それでわれらは、ムーサーの母に啓示した。「彼に乳を飲ませなさい。しかし、彼の身について恐れのあるときは、彼を川に投げなさい。恐れることも、嘆くこともない。われらは、必ず彼をあなたに戻そう。そして彼を、使徒のひとりとするだろう」。[4]

8 それからフィルアウンの一族の者が、彼らにとっての敵となり嘆きとなる彼を拾い上げた。本当に、フィルアウンとハーマーンとその軍勢は罪人たちであった。[5]

9 フィルアウンの妻は言った。「［この子は］私とあなたの目のなぐさめになるでしょう。彼を殺さないでください。きっと私たちの益になるでしょう。それなら、息子に取り立ててもよい」。しかし彼らは、何も気づいていなかった。[6]

10 ムーサーの母の胸中はうつろとなってしまった。もしわれらが、彼女が信仰者のひとりとしてとどまるよう、その心を強めずにいたなら、彼女は彼について打ち明けてしまっていただろう。[7]

11 彼女は彼［ムーサー］の姉に言った。「彼を追いなさい」。それで彼女は、遠くから彼を見ていた。彼ら［フィルアウンの一族］は、何も気づいていなかった。

12 われらは彼［ムーサー］に、以前から乳母を禁じておいた［ため、ムーサーは乳母の乳を飲まなかった］。そこで彼女は言った。「この子の世話をする家の者を、あなたがたのために引き合わせましょう。この子に、

心からよりそう者です」。

13 こうしてわれらは、彼をその母に戻した。彼女の目はなぐさめられ、嘆くこともなくなった。彼女は、アッラーの約束が真理であることを知っただろう。しかし、彼らの多くはそれを知らずにいた。

14 そして彼が十分に成長し、成人したとき、われらは彼に知恵と知識を与えた。このように、われらは行いの善良な者に報いる。[8]

15 彼は、その住民が注意していないすきに市街へ入った。そして二人の者が、互いに争うのを見かけた。ひとりは彼と同じ側の者であり、またもうひとりは彼の敵の側の者であった。彼と同じ側の者が、敵の側の者に対して、彼に助けを求めた。そこでムーサーは彼を殴りつけ、絶命させてしまった。彼は言った。「これは悪魔のすることだ。本当に彼は、あからさまに迷わせる敵だ」。[9]

16 彼は言った。「主よ、本当に私は自分自身に不正をなしました。ですから、私を赦してください」。かの御方は彼を赦した。本当にもっともよく赦す御方、もっとも慈悲深い御方。

17 彼は言った。「主よ、あなたは私に恩寵をもたらしました。ですから、私は二度と罪ある者に手を貸すことはしません」。

18 朝になり、市街にいた彼は、恐れつつ周辺を見渡した。すると、見なさい。前日、彼に助けを求めた者が、［再び］助けを求めて彼に叫んでいた。ムーサーは彼に言った。「本当にあなたは、明らかに誤ってばかりいる」。

19 そして彼が、自分たち二人の敵にあたる者を殴りつけようとしたところ、その者が言った。「ムーサーよ。昨日あなたが殺した者のように、私のことも殺すつもりなのか。あなたはこの地で、自らをただす者のひとりにはなろうとはせず、他ならぬ暴君になろうとしているだけだ」。





20 そこへひとりの男が、市街の遠く離れたところから走ってきた。彼は言った。「ムーサーよ。長老たちが、あなたを殺そうと話し合っている。それゆえ［ここから］出てゆけ。本当に私は、心からあなたに忠告する」。

21 それで彼は恐れつつ、周辺を見渡しながら出ていった。「主よ。不正をなす民から、私を救ってください」。

22 そしてその顔をマドヤンに向け、こう言った。「おそらく私の主が、平らかな道へ導いてくれるだろう」。[10]

23 それから彼は、マドヤンの水場にやって来た。彼は人々が群がって［自分たちの羊に］水をやっているのを見つけ、また彼らとは別の、二人の女が［自分たちの羊を］後ろに下がらせているのを見つけた。彼は言った。「お二人はどうかしたのですか」。彼女たちは言った。「その羊飼いたちが［自分たちの羊を］引き上げるまで、［私たちの羊に］水をやることができません。それに私たちの父は、大そう年老いてもいますので」。

24 そこで彼は二人のために［彼女たちの羊に］水をやり、そののち背を向けて木陰に入り、こう言った。「主よ。あなたが私に下す良いものが何であれ、本当に私はそれを求めてやまない者です」。[11]

25 それから、二人の女のうちひとりが、恥ずかしそうに彼のところへ歩いてきた。彼女は言った。「私の父が、あなたを呼んでいます。私たちのために水をやってくださったことに、お礼をしたいと」。そこで彼［ムーサー］は彼のところへやって来た。彼［ムーサー］が経緯を物語ると、彼は言った。「恐れてはなりません。あなたは、不正をなす民から逃げおおせたのです」。

26 二人の女のうちひとりが言った。「父よ。彼をお雇いください。あなたが雇うのに最良なのは、力強く、信頼に足る人でしょう」。

27 彼は言った。「もしあなたが八年、私に雇われてくださるなら、私はこの二人の娘のうちひとりをあなた

と結婚させたい。あなたが十年をまっとうしてくださるかどうかは、あなた次第としましょう。私はあ
なたに対し、ことを難しくしたくはありません。もしアッラーが望むなら、私が正しい行いをする者で
あることが、やがてあなたにも見てとれることでしょう」。
28 彼は言った。「これを、あなたと私との間［の約束］としましょう。二つの期限のうち、私がどちらをまっ
とうしたとしても私に背を向け［約束を破ら］ないでください。私たちが言うことについては、アッラー
こそが保護者です」。
29 それからムーサーは、定められた期限をまっとうした。そして彼がその家族と旅をしていると、彼は遠
く離れたところに火を見た。彼はその家族に言った。「あなたがたはここにいなさい。私にはちらりと火
が見えた。私はあそこからあなたがたに、何か知れたことをもって来よう。あるいはあの火から燃えが
らをもって来よう、あなたがたが暖まるように」。[12]
30 彼がそこにやって来ると、彼は谷の右側、祝福された場所にある木から呼びかけられた。「ムーサーよ。
本当にこれぞわれ、アッラー、諸世界の主である。
31 あなたの杖を投げなさい」。しかし、それがまるで蛇のように動くのを見ると、彼は背を向けて逃げ出し、
振り返りもしなかった。「ムーサーよ、近寄りなさい。そして恐れるな。本当にあなたは、安全である。
32 あなたの手を、あなたの懐（ふところ）に入れなさい。それは傷ひとつない白さで出てこよう。恐怖に対しては、あ
なたの腕を両の脇に締め［て自らを守り］なさい。これらは、フィルアウンとその長老たちへの、あなた
の主からのふたつの証拠。本当に彼らは背く民であった」。
33 彼は言った。「主よ。私は、彼らのひとりを殺しました。それで彼らが、私を殺すのを恐れます。[13]
34 私の兄ハールーンは、私よりも雄弁です。ですから私を助け、私の［言う］ことを確かにする者として、





彼を私と共に遣わしてください。私は、彼らに嘘よばわりされるのを恐れます」。
35 かの御方は告げた。「われらは、あなたの兄をもってあなたの腕を強めよう。またわれらは、あなたがた
二人に権威をもたせよう。それで彼らがあなたがたに及ぶことはないだろう。あなたがたも、またあな
たがたに従う者も、勝利を得る者となるだろう」。
36 しかしムーサーが、われらの明白なしるしをもって彼らのところへやって来たとき、彼らは言った。「こ
れは、ねつ造された魔術に過ぎない。大昔の祖先のあいだでも、このようなものを聞いたことがない」。
37 ムーサーは言った。「私の主は、誰がその御許から導きをもって来るのか、また最後の［来世の］館を得
るのは誰であるのかを、もっともよく知っている。本当に、不正をなす者は栄えない」。[14]
38 するとフィルアウンは言った。「長老たちよ。私以外のあなたがたの神など、私は知らない。それゆえハー
マーンよ、煉瓦（れんが）を焼け。そして私に、高い塔を築け。［その塔を登って、］私がムーサーの神を見てこよう。
本当のところ、彼は嘘つきだと思うが」。
39 彼も、彼の軍勢も、この地において真理によらずして高慢にふるまっていた。彼らは、自分たちがわれ
らに帰されることはないと考えていた。
40 そこでわれらは彼とその軍勢を捕え、海に投げ入れた。それで見なさい、不正をなす者の最後がどのよ
うであったかを。
41 われらは彼らを、業火へと呼び招く先導者とした。復活の日、彼らに助けはないだろう。
42 われらは、現世において彼らが忌（い）まれ続けるようにした。そして復活の日、彼らは疎まれる者となるだ
ろう。[15]
43 先のいくつもの世代を滅ぼした後で、確かにわれらは、人々のための開明（かいめい）として、また導きと慈悲とし

44 てムーサーに啓典を与えた。彼らも、憶えておくようになるだろう。[16]
［ムハンマドよ、］われらがムーサーに命じることを決めたとき、あなたは［山の］西側にいなかった。
またあなたは、その証人のひとりでもなかった。[17]
45 しかしわれらはいくつもの世代を興（おこ）し、またその生涯を長くしてやった。あなたは、マドヤンの一族の
中で過ごし、彼らにわれらのしるしを読み聞かせたのでもなかった。しかしわれらは、常に［人間に使
徒を］遣わしてきた。
46 またあなたは、われらが［ムーサーに］呼びかけたときも、かの［トゥール］山のそばにいなかった。し
かし、［これは］あなた以前にひとりの警告者もなかった民に警告させるための、あなたの主からの慈悲。
彼らも、憶えておくようになるだろう。
47 さもないと、彼らがその手で送り出したもののせいで災難が降りかかれば、彼らは「主よ。あなたはな
ぜ私たちに使徒を遣わさなかったのですか。そうすれば私たちはあなたの御しるしに従い、信仰者になっ
ていたでしょうに」などと言うだろう。
48 しかし、われらの許から真理が彼らにもたらされると、彼らは言った。「なぜムーサーに与えられたのと
同じようなものが、彼には与えられないのだろうか」。彼らは以前にも、ムーサーに与えられたもの［が
真理であること］を拒んだのではなかったか。彼らは言った。「二つながら補い合う魔術だ」。また、彼
らはこうも言った。「私たちは、どちらをも拒む」。[18]
49 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「それなら、アッラーの御許からこの二つよりも導きとなる啓典をもって
きなさい。もしあなたがたが真実を語っているのなら、私もそれに従おう」。
50 しかし、もし彼らがあなたに応じないなら、彼らはただ自分たちの欲求に従っているだけのことと知り





なさい。アッラーの導きによらずして、自分の欲求に従う者よりも迷っている者があるだろうか。本当
にアッラーは不正をなす民を導かない。
51 まさしく今、われらは彼らに言葉を届けた。彼らも、憶えておくようになるだろう。
52 これ以前に、われらが啓典を与えた者たちは、それを信じている。
53 それが読み聞かされるとき、彼らは言う。「私たちはこれを信じています。本当に、これは私たちの主か
らの真理です。本当に私たちは、これ以前から服従する者［ムスリム］だったのです」。
54 これらの者は、倍の報酬を与えられるだろう。彼らはよく耐え、善によって悪を寄せつけず、われらが
彼らの糧としたものの中から［施しに］費やす。
55 そして無意味な話を聞かされるとき、彼らはそこから距離を置いて言う。「私たちには私たちの行いがあ
り、あなたがたにはあなたがたの行いがある。あなたがたに平安あれ。私たちは、無知な者を求めない」。
56 ［ムハンマドよ、］あなたが、あなたの愛する者を導くのではない。［そうではなく、］アッラーが、その
御心にかなう者を導く。導かれた者について、もっともよく知る御方。[19]
57 彼らは言う。「もし私たちが、あなたと共に導きに従ったなら、私たちはこの地から追放されてしまう」。
われらは彼らのために安全な禁域を確立し、そこにありとあらゆる果実が、われらからの糧として持ち
込まれるようにしたではないか。しかし、彼らの多くはそのことを知らない。
58 自分たちの生活に［感謝を忘れ、］得意げになっている町を、われらはどれほど滅ぼしたことか。彼らの
暮らしたところには、その後になって暮らす者もごくわずか。それは、われらがそれを相続したため。
59 あなたの主は、その［町の］中心に使徒を立たせ、われらのしるしを読み聞かせることなくして、どのよ
うな町も滅ぼすことはしなかった。また彼らが不正をなす民でない限りは、どのような町も滅ぼすこと

はしなかった。
60 何であれあなたがたに与えられたものは、現世の生の楽しみであり、飾りに過ぎない。アッラーの御許
には、それよりもさらにすぐれた、終わることのないものがある。それでもあなたがたは、考えないのか。
61 われらが善良な約束をし、それが果たされるだろう者と、われらが現世の生の楽しみを楽しませ、その
のち復活の日に［懲罰に］直面させられる者とが同じであろうか。[20]
62 その日、かの御方は彼らを呼び出して告げる、「あなたがたが主張していた、われの『同輩たち』とはど
こにいるのか」。
63 ［裁きの］御言葉が、その身の上に真理となりつつある者たちが言う。「主よ、これらは私たちが惑わせ
たものです。私たちは、自分が惑わされたのと同じように彼らを惑わせたに過ぎません。ですから、私
たちはあなたに対して［同位のものを立てておらず、］潔白です。彼らが仕えていたのは、私たちではな
いのです」。[21]
64 ［彼らは］告げられるだろう。「あなたがたの『同輩たち』を呼びなさい」。それで彼らはそれらを呼ぶ。
しかしそれらは彼らに応じない。彼らは懲罰を見るだろう。もし彼らが、導かれてさえいたなら。
65 その日、かの御方は彼らを呼び出して告げる、「あなたがたは、使徒に何と応じたのか」。
66 その日、［すべての］報せは彼らにとって曖昧になり、互いに尋ね合うこともできない。
67 しかし悔い改め、信じ、正しい行いをした者なら、おそらく［真に］栄える者になる。
68 あなたの主は望むままに選び、創造する。選ぶのは彼らではない。アッラーに讃美あれ、彼らが連ねる
ものを超越して、いと高くにおわす。
69 あなたの主は、彼らが胸にしまうものも、彼らがあらわすものも知っている。





70 アッラー、その他にいかなる神もない。称賛は先［の現世］においても後［の来世］においてもこの御方
に属する。判断はこの御方にある。そしてあなたがたは、この御方に帰されるもの。
71 言いなさい。「あなたがたは、考えてもみたのか。もしアッラーが復活の日まで、あなたがたの上に夜が
続くようにしたなら、アッラーの他にどの神が、あなたがたに光明をもたらすことができるのか。それ
でもあなたがたは聞こうとしないのか」。
72 言いなさい。「あなたがたは、考えてもみたのか。もしアッラーが復活の日まで、あなたがたの上に昼が
続くようにしたなら、アッラーの他にどの神が、あなたがたに憩いのための夜をもたらすことができる
のか。それでもあなたがたは見ようとしないのか」。
73 かの御方はその慈悲から、あなたがたのために、あなたがたがその中に憩うよう、またその御恵みを求
めるよう夜と昼とを設けた。あなたがたは、感謝するようになるだろう。
74 その日、かの御方は彼らを呼び出して告げる、「あなたがたが主張していた、われの『同輩たち』とはど
こにいるのか」。
75 われらはすべての共同体から、その証言者を引きたてて告げる。「あなたがたの証拠をもって来なさい」。
そうして彼らは、真理はアッラーにあることを知るだろう。かつて彼らがねつ造していたものが、彼ら
から失われる。[22]
76 カールーンはムーサーの民のひとりであった。しかし彼は、彼ら［ムーサーの民］を虐げていた。われら
は彼に財宝を与えたが、その［宝庫の］鍵は屈強な男たち複数をもってしても重いものであった。彼の民
が、彼にこう言ったときのこと。「有頂天になってはいけません。アッラーは、有頂天になっている者を
愛しません。[23]

77 アッラーがあなたに与えたものによって、来世の館を求めなさい。また現世の、あなたに割り当てられている分のことも忘れてはならない。アッラーがあなたに善をなすように、あなたも善をなしなさい。そして地上に退廃を広めてはならない。本当にアッラーは、退廃を広める者を愛しません」。

78 彼は言った。「私がこれを与えられたのは、私の持つ知識ゆえに他ならない」。彼は知らなかったのか、アッラーが、彼以前の何世代もの中で、力においても彼より強く、集めた［財や追従者の］数においても彼より多かった者を滅ぼしてきたことを。罪を犯した者の諸々の罪は、［神はよく承知しているため］問われるまでもないこと。[24]

79 それで彼はその身を飾り、その民の前に立ち現れた。現世の生を欲しがる者たちは言った。「ああ、カールーンに与えられているものと同じようなものが私たちにもあったなら。本当に、彼は大いなる幸運の所有者だ」。[25]

80 しかし知識を与えられている者たちは言った。「災禍あれ。信じて正しい行いをする者には、アッラーの報奨の方こそより良いもの。それをたまわることができるのは、よく耐える者だけ」。

81 われらは、彼も彼の館も大地に沈めた。彼には、アッラーの他に自分を助けてくれる加勢の者もおらず、自分を守ることもできなかった。

82 その前日まで彼の地位を欲しがっていた者たちが言い始めた。「本当にアッラーは、御心のままに、しもべたちのうちある者の糧を拡げも、また狭めもする。もしアッラーが私たちをいつくしんでいなかったなら、私たちも大地に沈んでいた。本当に［真理を］拒む者は栄えない」。

83 これが来世の館というもの。われらはそれを、地上で高ぶりもせず、退廃を広めることもない者のものとした。結果とは、畏れる者のためにあるもの。





84 ［審判の日に］善事をもって来る者には、それにまさる良いものを。しかし悪事をもって来る者なら、悪事をはたらく者にはただ彼らの行いに応じた報いがあるだけ。

85 あなたにクルアーンを課した御方が、戻るべきところにあなたを連れ戻すだろう。言いなさい。「誰が導きをもってやって来る者か、また誰が明らかな迷いにある者かは、私の主がもっともよく知っている」。[26]

86 あなたは、啓典をたまわることなど予期していなかった。しかしそれは、あなたの主からの慈悲に他ならない。それゆえ［真理を］拒む者に手を貸してはならない。

87 また、あなたにそれが下された後になって、彼らがあなたを、アッラーの御しるしから遠ざけることがあってはならない。あなたの主に呼び招きなさい。また、多神を奉ずる者のひとりになってはならない。

88 アッラーと共に、他の何ものも呼び求めてはならない。この御方の他にいかなる神もない。あらゆるもののごとは滅びる、ただこの御方の御顔を除いては。判断はこの御方のもの。そしてあなたがたは、この御方に帰されるもの。[27]

1 あるいは、「はっきりとして分かりやすい、簡潔で明快な書」。

2 王あるいは統治者が、自らの統治の対象の間に不当な差別を設け、また、とりわけ特定の集団に属するものをいやしめたり、抑圧したりするということは、王権という、神に対する責任を果たさないことであり、自らの王国に対する義務を放棄するに等しい。フィルアウンとその一派は、自分たちの血統を誇り、物質的な文明に酔いしれ、イスラエルの民にひどい苦しみを与えた。フィルアウンは、イスラエルの民に生まれた男児はすべて殺害するよう命じた。女児は、エジプトの民の快楽のために生かされた。こうした中でムーサーは、後述される通り、驚くべき形で死を免れた。

3 ハーマーンは、フィルアウンの側近として複数回、クルアーンに登場する。エジプトの大臣であったこの人物は、旧約聖書に登場するペルシャびとのハーマーンとは別であり、混同しないよう注意が必要である。側近や神官は、支配の頂点にあるフィルアウンに次ぐ権力や地位を有していた。クルアーンに登場するハーマーンが、神殿の神官でもあったことは、本章三八節と、四〇章三六節から三七節に見られるフィルアウンの求めからも明らかである。

4 この川とは、ナイル川の支流であった。エジプトの産婆たちは、イスラエルの民に生まれた赤子を殺すようフィルアウンに命じられていた。ムーサーは産婆の手にかけられずに済んだ。母がひとりで彼を産み、乳を与え、幼な子のムーサーを守ったのである。しかしそのことが発覚しそうになり、危険が迫ったとき、母はムーサーを自分の衣服に包むか、あるいは籠に入れるなどして川に浮かべた。川の流れはムーサーを王の宮殿へと運んでゆき、何も知らない宮殿の住人たちに、名もなき赤子として拾われることになる。

5 これが、神の計画であった。悪しき者たちは、自分たちを滅ぼす者、自分たちに懲罰を運んでくるだろう者を、自分たち自身の手で養うという罠の中に陥ったのである。ムーサーはエジプトの民を内側からながめて育つことにより、その空虚さと邪悪さを学んだともいえる。

6 悪は自らが手にした凶器によって、やがては自分自身を滅ぼすことになる。これはあらゆる場面に通じる摂理である。しかも自分自身を滅ぼすばかりではなく、意図せずして善の道を一歩前進させる原因にもなっているのである。非宗教的な言葉を用いるなら、これが時に「運命の皮肉」と呼ばれるものである。

7 ムーサーがフィルアウンの一族によって拾われたことを知ったとき、ムーサーの母は恐れと不安のために理性を失いかけた。

8 「成人」とは、十八歳から三十歳までの成熟した若者を指すと考えられる。身体的にも完成し、精神的・道徳的な習慣が形成されている。この意味でムーサーは、善良な心と、自分の民に対する純正さと誠実さ、そして共に暮らしていた人々





に対する従順さと公正さを持っていた。また、高い教育を受けて知恵と知識を身につけてもいたが、これはやがて訪れる葛藤との衝突の際に、彼の役に立つことになる。彼の内的な成長が完成したとき、彼は外的な世界へと足を踏み出すが、それ以降は神の使命が下されるまでの間、試練を課されては乗り越えてゆくことになる。

9 このことが起きたのは、エジプトでは今も習慣として残っている午後の昼寝の時間帯か、あるいは通常、人々が就寝する夜間のどちらかであろうと考えられる。一八節を見る限りでは、後者であった可能性がより高い。だが、別の見方もある。宮殿の住人には、いつでも好きな時に市街へ出歩き、平民たちの居住する区画を散策する自由など認められてはいなかった。それが宮殿の王子として育った者であればなおさらである。したがってムーサーは、衛兵たちの目を逃れ、私的に市街を訪れていたものと思われる。彼の目的は、世の中がどのように動いているのかを自分自身の目で確かめることであった。おそらくは実の母との接点も残されていたものと考えられ、自分の民が抑圧されていることも耳にしていたであろう。

10 彼の目的が、虐（しいた）げられていたイスラエルの子を解放することにあったのは明らかであり、決して虐（しいた）げていたエジプトの民を殺すつもりで殴りつけたのではなかった。しかし実際には、彼はエジプトの民を殺害してしまったのである。これはあらゆる意味において不幸な出来事であった。彼は誰にも秘密で市街を訪れ、卑（いや）しめられた弱き者たちの側に立ったのである。こうして彼の、エジプトの民としての人生が終わった。

11 おとめたちは口元に微笑を浮かべ、心からの感謝と共に立ち去っていった。木陰に戻っていったムーサーは何を感じていただろうか。彼はたった今、目にしたばかりの光景の中に、灯された小さな光を見出して神に感謝を捧げた。彼の行いは、善行として数えられるだろうか。彼に訪れた機会は、実に貴重なものだったのである。彼は、自らの渇きをいやした。しかしそれでも、彼が居場所のない放浪者であること、言葉にならない魂の切望を抱えていることに変わりはなかった。羊飼いたちは、彼の仲間たりえなかった。本当に彼は、絶望的なまでの喪失感を抱えた「持たざる者」だった

のである。このときムーサーは、どのような些細なことに対してでさえ、差し出されれば感謝の念がわくようになっていた。これは一体何であったのか。心地よい暮らしぶり、豊かな家畜の群れと大勢の家族、彼らを養い、見守る長老、そして美しく、また慎ましやかな娘たち。それはムーサーには、もはや再び手の届くことのない遠い世界の出来事のようであった。しかし天命は、彼のためにもうひとつの、思いもかけなかった出来事を用意していたのである。

12 砂漠を舞台にした、人情にあふれるエピソードが終わると同時に、神の召喚によってムーサーに課された神聖な使命の物語が始まる。上記の節は、二七章七節から一四節とも読み較べることができよう。こうした場面での語り口は、発せられた言葉を文字通りに伝えているわけではない。特定のエピソードやその文脈に関連づけられた、命令や出来事、思考などを、人間の言葉による一般的な表現に置き換えたものであることに留意すべきであろう。この節を通して、ここまでのムーサーの辿った道は、すべて彼に課された高潔な運命のための準備であったことが読み取れる。続いてこの後に、フィルアウンの、傲慢と冒涜というとりわけ重大な罪（三八節から三九節）について、またそれがどのように罰せられたか、またムーサーとフィルアウンがそれぞれどのような手段をとったかが語られる。

13 ムーサーは、自分の杖の見た目が蛇のように変化したことや、自分が置かれた神聖かつ不可思議で見慣れない空間に対して怯えたり、不安を感じたりしていたわけではない。その点においては、彼の心は完全に平静さを保っていた。しかし自らの使命に対しては未熟な状態にあり、どのような未来が待ち受けているのかにも、はっきりとした確信が持てずにいた。フィルアウンはムーサーの行方を追っていたし、またムーサーの命を狙ってもいた。そしてその原因を作ったのは、フィルアウンの手の者を一人、殺害してしまったムーサー自身である。フィルアウンに分があるのは明らかであった。ところが今ムーサーは、フィルアウンの許へ行き、彼とその追従者たちを懲らしめるよう命じられているのである。ムーサーは、自分の内側に芽生えた疑念や困惑を、一人の人間として率直に、神に向かって打ち明け、その上で、少しでも目に見える形での支えがほしいと訴えた。そしてかつては彼をなじり、叱責した人物でもある、彼の兄ハールーン





を名指しした。

14 六章一三五節も参照。この場合もそうだが、重要なことは唯一、神の目にどう見えるのか、究極の将来に何が待ち受けているかである。しかしこれらの訴えは、いずれも信仰がなければ通用しない。しかし、虚偽や、先祖伝来のしきたりとして結晶化してしまった悪習など、誰にとっても良いわけがないことは、たとえ荘厳な何かを信仰していなくとも、十分に理解できることである。

15 権力や、権力による庇護といったものは、媚びへつらう取り巻きたちや、官職を得ようと群がる利己的な者たちにとっては尊崇の的であるかもしれない。しかし、ひとたびそれらが誤用されたり、あるいはそれらの内実が暴露され、失脚したりすることになれば、現世における恥辱を被ることになる。もしも生きている間に暴露を免れようとも、多くの場合、悪事はその死後に発覚するものである。そしてその後は、抑圧と悪行によって神の大地を汚した者として何世代にもわたる呪詛の言葉を浴びせられることとなる。しかしそれさえも、来世における真の懲罰に比べれば無に等しい。来世においては、諸々の真の価値がよみがえる。そして現世では最も高い地位に置かれ、また最も隆盛を誇っていたものが、最も劣るものとして、最も低いところへ降ろされることとなる。

16 フィルアウンの暴虐と、またそれ以前の同様の暴政を滅ぼした後で、神は新たな啓示の時代を拓いた。ムーサーと、彼に下された啓典の時代の幕開けである。人間の歴史が、真新しく清潔な石板の上に再び刻まれ始めたかのようであった。完成されたその啓典（あるいは神の法、シャリーア）は、次の三つの視点から見ることができる。（1）暗闇の中で貪欲になることのないよう、人間に授けられた光や洞察として。（2）誤った道に迷い込むことのないよう、正しい道を示す道しるべとして。（3）神からもたらされた慈悲として。示された道に従うことにより、神の赦しと恵みを授かることができるようになる。

17 シナイ半島は、アラビアの北西にある。しかしここで言及されている「西側」とは、トゥワーの谷の西側を指すとも考

えられる。ムーサーが預言者としての使命を授かったトゥールの山も、谷の西側に位置していた。

18 フィルアウンの一派は、預言者ムーサーを魔術師扱いした。マッカ住民もこれと同じように、クルアーンの奇跡的な言葉の数々を魔術であるとみなし、クルアーンがムーサーのメッセージを確証すると「どちらも魔術だ」とつっぱねた。

19 真っ先に思い浮かばれる例でいえば、預言者が慕っていた叔父のアブー・ターリブが挙げられる。アブー・ターリブもまた預言者を愛し、彼を庇護した。当然のことながら預言者は、彼が真の信仰告白を経ずにこの世を去ってゆくことを憂慮していた。しかしアブー・ターリブはイスラーム以前に、アラブの部族であるクライシュの指導者として、自分たちの父祖の信仰にとどまるよう預言者を説得しようとした。これは預言者にとり、失望と悲嘆の瞬間であった。

20 ここで対比させられる二種類の人々とは、次の通りである。（1）正しい者に対して神が約束した善美を信じ、その約束を成就するために、全人生のあらゆる場面において最大限の努力をする者。（2）財産や権力、その他あらゆる自己満足を与えてくれる象徴的なものや偶像を崇めて人生を過ごし、神から授かっている恩恵に対する感謝を忘れる者。

21 偽ものを崇拝する者たちは、しばしば「誰それのために」と、自分以外の他者の名を呼ぶ。しかし彼らは、実際には自分自身のエゴを崇拝しているに過ぎない。偶像を崇めていた者たちは、自分たちが崇めていた偶像の名を呼ぶが、そのどちらもが共に恐ろしい懲罰の前に立たされるとき、それは何の役にも立たない。過ちを犯していた者は、それぞれに自分自身の行ってきたことと向き合う他はない。

22 それぞれの民、それぞれの国から到来した預言者たちが、自分たちが説いたのは真理すなわち神のメッセージ以外の何ものでもなかったことを証言する。一方で、彼ら預言者たちの遣わされた民のうち、彼らを拒んだ者たちは、何の権威があって拒んだのか、証言するよう求められる。

23 カールーンの途方も無い財産については、ミドラーシュ（ユダヤ教徒の、シナゴーグにおける口伝に基づく教えを集成したもの）に記述がある。それによればこの鍵は、三百頭のラマで引かねばならないほどの重さであった。「屈強な男





たち複数」と訳出した箇所は、一般には十名から四十名ほどを示すものと考えられている。旧式の鍵は大きく、また重たく、何百もの宝箱の鍵を束ねたものであれば、それはかなりの重量だったに違いない。

24 カールーンは、自分の得た財産は自分自身の功績や知識、手腕や才能のおかげだと考えた。そしてそのせいで分別を失い、傲慢になったのである。そして自分は誰よりも優れていると思い込み、周囲の人々に対して傲慢になり、威張り散らすようになっていった。

25 カールーンが栄光の日々の真っ只中にあったとき、世俗的な人々は彼を羨み、彼のそばにいれば自分たちも幸福になれるに違いないと考えた。しかし、知恵と分別のある人々はそうではなかった。これについては、次の節に説き明かされている通りである。

26 「戻るべきところ」とは、（1）マッカへの帰還。（2）やがて還りつく主の御前。この節は、マッカからマディーナに向かうヒジュラの旅路の途中、マッカに近いジュフファの地を通り過ぎる際に下されたとも伝えられている。心からの悲しみに沈んでいた預言者に、なぐさめとして授けられた節である。

27 これは本章全体の教えの要約である。唯一、永遠のリアリティとは神である。現象としての世界は絶えず流動的であり、変化に左右され、邪悪なものもいつかは過ぎ去ってゆく。永遠に残るのはただ神のみである。「御顔」については二章一一五節とその訳注も参照。

# 第二九章　アル＝アンカブート　蜘蛛

マッカ啓示

アル＝アンカブート、すなわち「蜘蛛」の章は、偽りの信仰のはかなさ、もろさを、蜘蛛の巣にたとえた四一節にちなんでこの名がつけられている。本章の大部分は、マッカ時代中期から後期にかけて啓示された。一部の典拠によれば七節と8節が、また別の者は章全体が、マディーナ啓示であるとされている。迫害が熾烈をきわめた時期のムスリムを慰撫する章である。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 アリフ、ラーム、ミーム。

2 人々は、「私たちは信じます」と言うだけで、試練にさらされることもなく［安楽の中に］放っておかれると思っているのか。

3 われらは、すでに彼ら以前の者たちも試みてきた。アッラーは、真実を語る者を必ず知り、また嘘をつく者を必ず知る。

4 それとも悪を行う者たちは、われらを追い抜けると思っているのか。彼らの判断の、なんという悪さか。





5 アッラーと会することを待ち望む者よ。アッラーの［定めた］時は本当に来る。すべてを聞く御方、すべてを知る御方。

6 誰であれ励む者は、つまるところ自分自身のために励む者。本当にアッラーは、諸世界から［何も必要とせず］満ち足りる。

7 信じて正しい行いをする者のために、われらは必ず彼らからその悪事をとり除き、彼らが行ってきたことの最善に対して報いるだろう。[1]

8 われらは人間に、両親には良くしてやるよう指図した。しかし、もし彼らがあなたがたに、つとめてあなたがたの知らないものをわれと同列に連ねさせようとするなら、彼らのいずれにも従ってはならない。あなたがたの帰りゆく先はわれにある。そしてわれはあなたがたに、あなたがたの行ってきたことについて告げ報せるだろう。[2]

9 しかし、信じて正しい行いをする者については、われらは必ず彼らを正しい者の中に受け入れるだろう。

10 人々の中には、「私たちはアッラーを信じています」と言う者がある。しかし、ひとたびアッラーのために苦しむことがあると、人々による試練をアッラーによる懲罰のようにみなしてしまう。そうして、あなたの主からの助け［と勝利］がもたらされると、彼らは決まって「本当に私たちは、あなたがたと共にいました」と言う。［自らの創造物である］万人の胸の内を、もっともよく知るのはアッラーではないのか。[3]

11 アッラーは、必ず信じる者たちを知り、また必ず偽善者を知る。

12 ［真理を］拒む者たちは、信じる者たちに言う。「［宗教上のことについては、］私たちの道に従いなさい。あなたがたの過ちを、私たちが背負ってあげましょう」。しかし彼らはその過ちを、何ひとつ背負いはしない。本当に彼らは、嘘をつく者たち。

13 しかし彼らは、必ず自分の重荷を運ぶ。自分の重荷と共に［それ以上の］重荷を運ぶだろう。そして復活の日には、彼らがねつ造していたものについて必ず問われるだろう。[4]

14 われらは、かつてヌーフをその民に遣わした。彼は、彼らのあいだで五十年を差し引いた千年を過ごした。そして彼らが不正をなしているところを、洪水が襲った。

15 しかしわれらは、彼と舟の仲間を救い、万人のためのしるしとした。

16 またイブラーヒームについて。彼がその民にこう言ったときのこと［を思いなさい］。「アッラーに仕えなさい。かの御方を畏れなさい。その方があなたがたのために良い、もしあなたがたが知ってさえいたなら。

17 あなたがたはアッラーをさし置いて諸々の像に仕え、偽りを作り出しているに過ぎない。あなたがたがアッラーをさし置いて仕えているものには、あなたがたに糧をもたらす力もない。それゆえアッラーの御許に糧を求め、仕え、感謝しなさい。あなたがたは、その御許へ帰されるのだから。

18 それであなたがたが嘘よばわりするとしても、あなたがた以前の共同体もやはりそうしていたのだから。使徒に課されているのは、ただ［教えを］明白にのべ伝えることだけ」。

19 彼らは、アッラーがどのように創造を始め、そののちそれを繰り返すのかを見ないのか。本当にそれは、アッラーにはたやすいこと。

20 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「地上を旅し、そしてよく見なさい、かの御方がどのように創造を始めたかを」。そののちアッラーは、生じるものを再び生じせしめる。本当にアッラーは、あらゆるものごとにおいて全能である。[5]

21 御心のままに罰し、また御心のままに慈悲にあずからせる。そしてあなたがたは、この御方へ戻される。[6]





22 地においても空においても、あなたがたはこの御方から逃れられない。アッラーをさし置いて、あなたがたには守る者も助ける者もない。

23 アッラーの御しるしも、この御方と会することについても［真理を］拒む者たち。これらの者には、われの慈悲はのぞめない。これらの者には、痛烈な懲罰があるだろう。

24 しかし彼［イブラーヒーム］の民の答えは、ただ「彼を殺してしまえ」あるいは「燃やしてしまえ」と言うだけ。しかしアッラーは、彼を火炎から救った。本当にその中には、信じる民への御しるしがある。[7]

25 彼［イブラーヒーム］は言った。「あなたがたは、ただ現世の生において［のみ通用する］自分たち同士の親しさを保ちたいがために、アッラーをさし置いて諸々（もろもろ）の像を取った。そののち、復活の日、あなたがたは互いに相手を拒み、互いに相手を忌み嫌い合うことだろう。あなたがたの住まいは業火。またあなたがたには、どのような助け手もないだろう」。[8]

26 ルートは彼［イブラーヒーム］を信頼した。彼［イブラーヒーム］は言った。「私は、私の主に移り住もう。本当にもっとも威力ある御方、もっとも賢明な御方」。[9]

27 われらは彼［イブラーヒーム］に、イスハークとヤアクーブを授けた。またわれらは、彼の子孫に預言の資質と啓典をもたせ、彼には現世の報酬を与えた。本当に彼は、来世においても必ず正しい人のひとりとなるだろう。

28 またルートについて。彼がその民にこう言ったときのこと［を思いなさい］。「本当にあなたがたは、あなたがた以前の万人が誰ひとりとしてしなかった不品行にはしる。

29 あなたがたは男に言い寄り、道を塞（ふさ）ぎ、あなたがたの集まりの中では邪悪にはしる」。しかし彼の民の答えは、ただ「私たちの上に、神の懲罰を持ってくるがいい、本当にあなたが真実を語っているのなら」

と言うだけ。[10]

30 彼は言った。「主よ。退廃を広める民に対し、私を助けてください」。

31 われらの使者たちが、良い報せをたずさえてイブラーヒームに到来したときのこと。彼らは告げた。「私たちは、この町の住人を滅ぼそうとしているところ。本当にここの住人は、不正をなす者たちだったために」。[11]

32 彼は言った。「そこにはルートがいます」。彼らは告げた。「私たちの方が、そこに誰がいるのかを知っている。私たちは彼とその家族を必ず救おう、彼の妻を除いては。彼女は、後に残される者のひとりとなる」。

33 そうしてわれらの使者たちがルートに到来すると、彼は［彼らを守れない自分を］無力に感じ、彼らのために悲しんだ。彼らは告げた。「恐れることはない、嘆くことはない。私たちは、あなたとあなたの家族を必ず救おう、あなたの妻を除いては。彼女は、後に残される者のひとりとなる。

34 私たちは、この町の住人の上に天からの大難を下そうとしているところ。彼らが、背き続けていたために」。[12]

35 われらはそれを、ひとつのしるしとして残しておいた、考える民のための明白な証として。[13]

36 またマドヤン［の民］には、［預言者として］彼らの同胞であるシュアイブを［遣わした］。彼は言った。「私の民よ、アッラーに仕えなさい。終末の日を待ちのぞみなさい。地上をかき乱して、退廃を広めてはならない」。

37 しかし彼らは、彼［シュアイブ］を嘘であるとした。すると地震が彼らを襲った。そして［翌朝、］彼らはその家の中でうつ伏せ［の亡骸］になっていた。[14]

38 また、アードとサムード［の民］のこと。［彼らの運命については、荒廃した］彼らの住みかからも、すでにあなたがたに明らかとなっている。悪魔が彼らの行いを、すばらしいもののように見せ、それで彼らは、ものを見る目を持っていながら、道からさえぎられてしまった。

39 また、カールーンとフィルアウンとハーマーンのこと。確かにムーサーが明白な証をたずさえて、彼らのところへやってきた。彼らは、その地で高慢にふるまっていた。しかし彼らが、その先へゆけることはなかった。[15]

40 われらは、それぞれをその罪のために捕えた。ある者には石の嵐を遣わした。ある者は咆哮の一声に襲わせた。ある者は大地に沈められた。ある者は溺れさせられた。アッラーが、彼らに不正をなしたのではない。ただ彼らが、自分自身に不正をなしただけ。[16]

41 アッラーをさし置いて他のものを庇護者にする者とは、例えるなら巣を編む蜘蛛のようなもの。そして本当に、家のうちもっとも弱いのは蜘蛛の巣。もし彼らが、知ってさえいたなら。[17]

42 アッラーは、何であれ彼らがこの御方をさし置いて呼び求めているものを知っている。もっとも威力ある御方、もっとも賢明な御方。

43 われらはこれらの例えを人々のために示した。しかし知っている者を除いては、これを考えようとしない。

44 アッラーは真理をもって諸天と大地を創造した。本当にその中には、信じる者への御しるしがある。

45 あなたに啓示した啓典を復唱し、礼拝のつとめを守りなさい。本当に礼拝は、不品行や邪悪をさせないようにする。アッラーを想い起こすことこそ、もっとも大いなること。アッラーは、あなたがたがなすことについてよく知っている。

46 啓典の民とは、彼らのうち不正をなす者を除いて、もっともすぐれた［礼儀正しい］あり方でない限り論じ合ってはならない。そして言いなさい。「私たちは、私たちに下されたものを信じ、あなたがたに下されたものを信じます。私たちの神とあなたがたの神はひとつです。私たちは、かの御方に服従します」。

47 このように、われらはあなたに啓典を下した。それで、われらが［以前に］啓典を与えた者はそれを信じる。また、彼らのうちある者もそれを信じる。［真理を］拒む者を除いて、誰もわれらのしるしを拒まない。[18]

48 ［ムハンマドよ、］それ以前には、あなたはどのような啓典も復唱せず、またあなたの右手も、それを書き記しはしなかった。それゆえ虚偽をなす者は疑っている。[19]

49 いいや、これぞ知識を与えられた者の胸の中にある明白な御しるし。そして不正をなす者を除いては、誰もわれらのしるしを拒まない。

50 彼らは言う。「どうして彼には、主から御しるしが下されないのか」。言いなさい。「御しるしは、ただアッラーの御許にある。そして私は、［警告を］明らかにするひとりの警告者」。

51 われらは、彼らのために読み聞かせる啓典をあなたに下した。彼らには、それで十分ではないのか。本当にその中には、信じる民への慈悲と戒（いまし）めがある。

52 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「アッラーは、私とあなたがたの間の証言者として十分な御方。かの御方は、諸天と大地にあるものをすべて知っている。虚偽を信じて、アッラーについては［真理を］拒む者、これらの者は敗者である」。

53 彼らはあなたに、懲罰はまだかと急ぎ求める。時が定められていなければ、懲罰はすでに科されていただろう。彼らも気づかないところから、突然にやって来るだろう。

54 彼らはあなたに、懲罰はまだかと急ぎ求める。本当に、地獄は［真理を］拒む者を囲みこむ。

55 懲罰が、頭上からも足元からも彼らを覆うその日、こう告げられるだろう。「あなたがたの行ってきたことを味わえ」。

56 信じるわれのしもべたちよ。本当にわれの大地は広い。それで、ただわれにのみ仕えなさい。[20]





57 すべての者が、それぞれに死を味わう。そののちあなたがたは、われらに帰される。

58 信じて正しい行いをする者、われらは彼らを、川がその下を流れる楽園の高い居室に留まらせ、永遠にその中に住まわせよう。労を惜しまぬ者の報酬の、なんという至福か、

59 よく耐え、自分の主に委ねる者たち。

60 なんと多くの生きものが、自分で自分の糧さえ運べずにいることか。アッラーはそれらにも、またあなたがたにも糧をもたらす。すべてを聞く御方、すべてを知る御方。[21]

61 もしあなたが彼らに「諸天と大地を創造し、太陽と月を使役させるのは誰か」と尋ねたなら、彼らは必ず「アッラー」と言うだろう。それでいて、どうして彼らは惑わされるのか。

62 本当にアッラーはそのしもべたちのうち、御心のままにある者の糧を拡げも、また狭めもする。本当にアッラーは、ありとあらゆるものごとを知る。

63 もしあなたが彼らに「空から雨を降らせ、それにより死んだ後の大地に生をもたらすのは誰か」と尋ねたなら、彼らは必ず「アッラー」と言うだろう。言いなさい。「アッラーに称賛あれ」。いいや、彼らの多くは考えようとしない。

64 この現世の生は、なぐさみとたわむれに過ぎない。本当に、来世の館こそが［真実、永遠の］生。もし彼らが、知ってさえいたなら。

65 船に乗るとき、彼らは宗教において真摯になりアッラーに祈る。ところが、かの御方が［無事に］陸へ送り届けると、見なさい。彼らは［たちまち、主に］何ものかを同列に連ねる。

66 そうしてわれらが彼らに与えたものについて恩を忘れ、うつつを抜かす。やがて彼らも、知ることになるだろう。

67 彼らは見ないのか、われらが安全な禁域を設けたのを。その周辺で、人々が略奪にさらされている。それでも彼らは嘘いつわりを信じ、アッラーの恩寵［が真理であること］を拒むのか。[22]

68 アッラーについて嘘いつわりをねつ造するか、あるいは真理がもたらされていながら、それを嘘よばわりするよりも不正な者があるだろうか。［真理を］拒む者の居どころは、地獄にあるのではないか。

69 われらのために励む者たち。われらは彼らを、われらの道に導こう。アッラーは、行いの善良な者と共にある。

1 贖罪あるいは免罪は、ひとえに神の慈悲にかかっている。自分自身の美徳や価値、あるいは誰かの犠牲の上に成立するものではない。

2 両親には、子どもたちに勧めることはできても強制することはできない。唯一、真の神以外の何かを崇拝の対象として子どもの眼前に掲げることはできないし、またそうすべきではない。

3 逆境に耐えかねて信仰を離れていながら、何か利益を得られそうな局面になると、変わらず信仰し続けていた者たちの友情に訴えようとする。こうした者は二重の非難に値する。第一に信仰と真理を拒んだこと、第二に心の中では恐れ、憎んでいるはずの者たちの仲間であるかのように見せかけたことについてである。あらゆる被造物は、その創造者たる神には何ひとつ隠し立てすることはできない。

4 偽善者の他に、公然と信仰を一蹴する類いの人々が存在する。彼らは、「自分の人生はあるがままに受け入れるべき」





と言う。そして「あなたの罪も私たちが一緒に背負ってあげましょう」とまで言ってのける。まるで本当にそれが可能であると言わんばかりである。魂はそれぞれに自分の負うべき重荷を背負うのであり、それを他の誰かの代わりに背負うことはできない。この原則は「罪の代償」を説く人々にも当てはまる。そうした論理に従えば、導き出される結論は不公正と無責任の両方を意味し、罪とは何かということ自体が本来の意味とはまったく異なったものになる。

5 「地上を旅し、そしてよく見なさい」。これもまた、文字通りの意味と象徴的な意味のいずれをもあわせ持っている。実際にこの広大な地球を旅してみれば、神の創造のすばらしさを目にすることができるだろう。北アメリカのグランド・キャニオンやナイアガラ。オーストラリアのシドニーに見られる美しい港の数々。山なら日本の富士や、アジアのヒマラヤ山脈やアルボルズ山脈。アフリカにはナイルの大瀑布が、アイスランドにはゲイシール間欠泉が、ノルウェーにはフィヨルドが、そしてトロムソの街では真夜中に太陽を目にすることができる。世界じゅうに、数えきれないほどの驚異がちりばめられている。しかし不思議の上にもさらに不思議なものは、これらを形づくる物質そのものにある。原子やエネルギーの持つ様々な力は、昆虫の中にも動物の中にも働いている。それは人間の意識や可能性においても同様であり、またそれらを「旅する」ことには何の制限も存在しないのである。

6 思うに、「この御方へ戻される」よりも、「あなたがたの戻るべきところは神の御許にある」の方が、翻訳としてはより好ましいのかもしれない。一七節でも示されている通り、神に仕える者が神の御許へ帰るのは、何も来世だけに限ったことではない。続く二二節でも説き明かされる通り、人間は、必要とするものを常に神から得ているのである。人間には、神の企図するところを頓挫させることはできず、また神以外の援助も保護もない。神に従おうと、あるいは無視しようと、人間はいつでも神と向き合った状態にある。

7 預言者イブラーヒームは炎の中に投げ込まれたが、神の恩寵により無傷であった。邪悪な者が何を企てようと、正しい人々を害することはできない。しかし、邪悪な環境に身を置き続けてはならない。イブラーヒームがそうしたように、

8 必要とあれば先祖代々の故郷から立ち去らねばならないこともある。

罪と邪悪に数えられるものとして、政治の中にあるのと同様の取引や駆け引き、身内の褒め合いといった行いが多く見受けられる。邪悪な者たちは互いに機嫌をとり合い、助け合う。互いの悪徳を仰々しい言い方で褒め合い、それをもって互いへの敬意や友情、愛情と呼び、あるいは悪徳を見過ごすことを「寛容」と呼びさえもする。彼らはそうした世渡りの術を駆使して、おそらく現世では繁栄するだろう。しかし彼らは自分自身を欺き、また互いを欺き合ってもいるのである。そうした彼らの関係は、来世では一体どうなるだろうか。

9 ルートはイブラーヒームの甥にあたる。彼はイブラーヒームの教えと信仰を支持し、イブラーヒームが父祖の地であるカルデアを去り、シリアとパレスチナへ移住する際に自ら申し出て彼と共に移住した。シリアとパレスチナの地で、彼は神から大いなる繁栄と調和を、またのちに神の光の旗をうち立てることとなる多くの子孫を授かった。

10 彼らはわがもの顔で往来にはびこり、恐るべき罪を、隠し立てするどころか人前で白昼堂々と、時には集会においてさえ犯してのけた。解釈者の一部はこの箇所を、往来で盗みを働くのに「道を塞」いだと解している。そのように解釈することももちろん可能であるし、また彼らの集会において行われていた犯罪というのが、集団での不正や乱暴なふるまいであったと解することも可能であろう。しかしここでの文脈が示しているのは、彼らに特有の恐るべき罪を、彼らが恥じることなく公然と人前で実践していたということの重大さである。これは堕落の極みであろう。

11 罪を犯し地上に退廃をもたらす人々を滅ぼすという使命を課されて到来した天使たちは、イブラーヒームを訪れ、老齢の彼が息子を授かるという吉報を与えた。

12 ここでの「大難」とは、雨となって降り注ぎ、町全体を完全に覆い尽くした硫黄を指す。おそらく地震や、火山の噴火によるものだろう。一一章八二節を参照。

13 死海の東側（町があった場所である）は、その全域が硫黄塩で覆われている。これは動物や植物が生息するには致命的





である。死海はアラビア語で「バハル・ルート（ルートの海）」とも呼ばれる。生命なき断絶と荒廃のその光景は、罪がもたらす破滅を象徴しているともいえる。

14 シュアイブとマドヤンの民の物語については、ここでの言及はこれのみである（より詳細な語りについては一一章八四節から九五節を参照）。彼らの罪とは、詐欺行為や商業的な倫理の欠落であった。彼らに科された懲罰とは、火山の噴火がもたらすような巨大な爆風と地揺れである。ここで指摘されているのは、彼らが地上で不正を働いたこと、また本章に特有の主題であるマアド（復活）あるいは来世について、彼らがまったく考えようともしていなかったという点である。

15 カールーンについては二八章七六節から八二節を参照。フィルアウンについてはクルアーン全体を通して頻繁に登場するが、二八章六節ではハーマーンと並んで共に言及されている。また、神に対する彼らの冒涜的な傲慢と反逆については二八章三八節を参照。彼らは自分たちの保身について多くの考えをめぐらせていた。にもかかわらず、彼らが迎えた結末は彼らにとり悪以外の何ものでもなかった。

16 一七章六八節を参照。この懲罰は、ルートが教えを説いた平原の町にも下されたものである。一一章六七節も参照。

17 蜘蛛の巣は、神の創造のしるしのうち最もすばらしいもののひとつである。それは蜘蛛の体にある出糸腺から紡ぎ出される、細い糸でできている。蜘蛛には多くの種類があり、できあがる蜘蛛の巣も多種多様である。巣は主に二つのタイプに分けられる。一つは管状の形をした巣または網で、まさしく糸で編まれた住みかまたは巣穴といったものであり、通常、一つまたは二つの出入り口がある。これなどは屋敷、あるいは一族の館と呼んでも差し支えないだろう。そしてもう一つが、より一般的ないわゆる蜘蛛の網である。中心点から四方八方に放射状に走る糸が、何重にも重ねられた同心円状の糸をつなぐ梁となって全体を支えている。蜘蛛にとり、これはいわば狩猟小屋である。この節から学ぶべき教訓とは、次の通りである。これほどまでに精緻に作られていながら、蜘蛛の巣は風に吹かれたり、動物に襲われたりといっ

た自然の脅威にさらされればひとたまりもなく壊れてしまう。だが人間の中には、そうした蜘蛛の巣のように薄弱で実態のないものに期待を抱いたり、抱かせたりする者がいるのである。人間が、真理を無視して擬似的な神々を崇拝の対象とするのは、まるで壊れやすい蜘蛛の巣を足場に希望を紡ぐようなものである。こうしたたとえ話は、単純なもののように思えるかもしれない。しかしそこに込められた深い意味と応用は、知識を求めること、また神の恩寵により求めが成就されることによって理解されうるだろう。

18 ヒジュラ暦六年から七年にかけて、預言者はビザンツ帝国の首都（コンスタンティノポリ）やペルシャ帝国の首都（マダーイン）、シリア、アビシニア、エジプトといったアラビア周辺の主要な国々のすべてに使節を派遣した。ペルシャを除けば、これらはすべてキリスト者の統治する国々であった。こうした使節は、キリスト者であるハニーファ族が統治するアラビア域内のヤマーマ（ヒジャーズ東部）や、あるいは自分たちの方からマディーナに使節を送ってきたハーリス族の統治するナジュラーンにも同様に派遣された。アビシニアを除き、これらの諸国は最終的にはほぼ全員がムスリムとなった。またアビシニア自体も相当数にのぼるムスリムを擁し、預言者の時代には多くの改宗者がマディーナを訪れるようになっていた。

19 預言者は、決して学識のある類いの人物ではなかった。クルアーンが啓示される以前の彼は、「神からメッセージを授かった」などと主張することは皆無であった。実際に啓示を授かるまで、啓典にあるような真理を人前で雄弁に説教する習慣もなければ、自分でものを書いたり、書写したりという経験もなかった。もし彼がそうした現世的な術に秀でていたなら、クルアーンは啓示ではなく他者の書いたもののひょう窃であるとか、自作し、それを暗記して人々に聞かせていたに過ぎないと主張する者たちの虚偽や憶測にもいくらかの妥当性があっただろう。クルアーンが啓示された背景自体が、それが神の下した真理であることを証明しているのである。

20 置かれた状況や環境、あるいは時代のために善行ができず、悪行を働かざるを得なかった、といった弁解は、それが誰





であろうと認めてはもらえない。私たち一人ひとりが悪を避け、善を求めなくてはならない。また私たち一人ひとりがそのための意志と忍耐、道義を保ちさえすれば、神の創造は、それらを実現するのに十分な広大さを備えている。変えねばならないのは村や都市、国そのものであるかもしれない。あるいは隣人や同僚かもしれない。あるいは自分自身の習慣や時間の過ごし方、あるいは人生における立場や人間関係、あるいは自分自身の衝動そのものかもしれない。

21 動物の創造を見るに、その多くがあまたの敵に囲まれ、自分の食べるものを見つけるのも、生活を維持するのもほとんど命がけの、無力の存在であるかのように思われる。しかしそれでも神の計画の中において、彼らは完全な糧と庇護を得ているのである。

22 「安全な聖域」とは、家畜や動物に対してさえ暴力をふるうことが非合法化された、聖別された町マッカの禁域を指している。

# 第三〇章　アッ＝ルーム　ローマびと

マッカ啓示

「アッ＝ルーム」、すなわち「ローマ（ローマびと）」の章は、第二節に現れる語からその名がつけられている。東ローマ帝国の軍勢は、アラビア近郊の全域においてペルシャに敗北を喫した。西暦六一三年にはエルサレムとダマスカスが、続いて翌年にはエジプトが陥落した。西暦六一五年あるいは六一六年には、ペルシャ軍はアナトリアを侵略し、コンスタンティノポリの脅威となっていた。典拠によれば、本章はマッカで啓示されたものである。アラブたちは、預言者と彼に従うごくわずかな信仰する者たちを前に、ペルシャ軍の勝利に歓喜してみせた。ローマが唯一の神を信じるキリスト者の帝国であったのに対し、当時のペルシャはそうではなかったからである。彼らは、多神を奉じるペルシャの軍勢が勝利したことをもって、「唯一の神」の力は、預言者が常に主張している通りに最も絶大で絶対的なものなどではないと主張した。

本章は、マッカ時代中期の啓示群に属する。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 アリフ、ラーム、ミーム。

2 ローマびとは打ち負かされた、





3 もっとも近い地において。しかし彼らは、その敗北の後になって勝利を得るだろう、[1]

4 数年のうちに。前にあっても後においても、ものごとはアッラーに属する。その日、信仰者は歓喜するだろう、

5 アッラーの助け「による勝利」を。かの御方は、誰であれその御心にかなう者を助ける。もっとも威力ある御方、もっとも慈悲深い御方。[2]

6 「それは」アッラーの約束。アッラーは、その約束を破らない。しかし、人々の多くはそれを知らない。[3]

7 彼らは、現世の生の外側は知っている。しかし来世については顧みない。[4]

8 彼らは、自分自身について省みようとはしないのか。アッラーが諸天と大地と、その間にあるすべてを創造したのは、ただ真理と定められた「究極の」時のため。しかし本当に、人々の多くは「いずれ」その主と会すること「の真理」を拒む。

9 彼らは地上を旅し、彼ら以前の者の結末が、どのようであったかを見たことはないのか。彼ら「以前の人々」は、彼らよりも強大であった。地上を耕し、彼らが建てたものよりも数多くを建てた。そして彼らの使徒たちが、明白な証をもって彼らに到来した。アッラーが、彼らに不正をなしたのではない。ただ彼らが、自分自身に不正をなしただけ。[5]

10 悪をなす者の最後は悪いもの。それはアッラーの御しるしを嘘であるとし、嘲笑したため。

11 創造を始めるのも、そののちそれを繰り返すのもアッラー。そしてあなたがたは、その御許へ帰される。

12 「定められた」かの時が現れる日、罪を犯していた者たちは絶望するだろう。[6]

13 彼らが「主の」同輩としていたものの中に、彼らをとりなす者はいない。「それで」彼らも、自分たちが「主の」同輩としていたものと「完全に」無縁となるだろう。

14 「定められた」かの時が現れる日、それは彼らが離ればなれになる日。

15 信じて正しい行いをする者たち、彼らは嬉々として「楽園の」草原にいる。

16 しかし「真理を」拒み、われらのしるしも、来世で会することも嘘であるとしていた者たち。これらの者は、懲罰に直面させられるだろう。

17 それゆえアッラーを讃美しなさい、日暮れにも、また夜明けにも。[7]

18 諸天と大地において、称賛はかの御方に属する。晩にも、また正午となる頃にも「称えなさい」。

19 死せるものの中から生けるものを連れ出し、また生けるものの中から死せるものを連れゆき、死んだ後の大地に生をもたらす。このように、あなたがたもよみがえらされるだろう。[8]

20 あなたがたを、塵から創造したことも御しるしのひとつ。見なさい。そののちあなたがたは、一人ひとりの人間として散っていった。

21 あなたがたのために、あなたがた自身の中からその伴侶を創造し、憩いを得るようにし、あなたがたのあいだに親愛と慈悲をあらしめたことも御しるしのひとつ。本当にその中には、省みる民への御しるしがある。

22 諸天と大地と、あなたがたのさまざまな言語と色合いを創造したことも御しるしのひとつ。本当にその中には、知識ある民への御しるしがある。[9]

23 あなたがたが夜にも昼にも眠れるのも、あなたがたが御恵みを探求できるのも御しるしのひとつ。本当にその中には、耳を傾ける民への御しるしがある。

24 あなたがたに畏敬と希望の「思いを抱かせる」雷光を見せ、空から雨を降らせ、それにより死んだ後の大地に生をもたらすことも御しるしのひとつ。本当にその中には、考える民への御しるしがある。





25 その命令により諸天と大地を立たせるのも御しるしのひとつ。そののち、かの御方があなたがたに呼びかけるとき、見なさい。あなたがたは大地から出てくる。

26 諸天と大地にあるものは、何であれかの御方に属する。すべてはかの御方に従順になびく。

27 創造を始め、そののちそれを繰り返す御方。そしてそれは、かの御方にはいっそうたやすいこと。諸天と大地における至高の鑑は御方にある。もっとも威力ある御方、もっとも賢明な御方。

28 かの御方はあなたがたのために、あなたがた自身をもって例えを示す。あなたがたは、われらがあなたがたの糧としたものを、自分が正当に召しかかえる者と分かち合うだろうか。それで互いに同等になり、あなたがたどうしが恐れあうように、彼らのことも恐れるだろうか。このようにわれらは、考える民にしるしを解き明かす。[10]

29 いいや、そうではない。不正をなす者たちは、知識なくして自分の欲求に従う。アッラーが迷わせた者を、誰が導けるだろうか。彼らには、助けとなる者はないだろう。

30 「ムハンマドよ、」それゆえあなたの顔を宗教へと向けなさい、アッラーが人々にそなえた本来の天性に沿って、純正の人として。アッラーの創造に変更のあるはずもない。真正の宗教とは、このようなもの。しかし、人々の多くは何も知らない。[11]

31 悔い改めてかの御方に立ち返り、かの御方を畏れなさい。礼拝のつとめを守りなさい。多神を奉ずる者のひとりとなってはならない。

32 自分たちの宗教を分かち、宗派となった者たち。どの党派も、それぞれ自分たちの持てるものをありがたがっている。

33 困難が人々に触れるとき、彼らは悔い改めて立ち返り、その主に祈る。そののち、かの御方が彼らにそ

の慈悲を味わわせるとき、見なさい。彼らのうちある者は、その主に何ものかを同列に連ねる。

34 われらが彼らに与えたものについて、恩を忘れたかのよう。うつつを抜かしていなさい。やがてあなたがたも、知ることになるだろう。

35 それとも彼らが同列に連ねるものについて、賛同を告げるような権威を、われらが下しでもしたというのか。

36 われらが人々に慈悲を味わわせるとき、彼らはそれを嬉しがる。しかし自分の手で送り出したもののせいで悪が降りかかるとき、彼らはたちまち絶望してしまう。

37 彼らは見なかったのか、アッラーは御心のままにある者の糧を拡げも、また狭めもする。本当にその中には、信じる民への御しるしがある。

38 それゆえ近しい親族に、与えるべきものを与えなさい。また貧しい者にも、旅の者にも。アッラーの御顔を待ち望む者たちには、それがもっともすぐれている。これらの者こそ、栄える者。

39 あなたがたが財を増やそうとして利子を用いても、アッラーの御許では何も増えない。アッラーの御顔を待ち望んで喜捨をするなら、これらの者こそ「報奨を」倍にされるだろうに。[12]

40 アッラーこそはあなたがたを創造し、そののちに養い、そののちに死なせ、そののちに「再び」生を与える御方。あなたがたが「主の」同輩としているものの中に、これらのうち何かひとつでもなせるものがあるだろうか。かの御方に讃美あれ。彼らが連ねるものを超越して、いと高くにおわす。

41 人々がその手で得てきたことのために、陸にも海にも退廃があらわになっている。これはかの御方が、彼らにその行ってきたことの一部を味わわせることで、彼らを「正しい行いに」戻らせようとしてのこと。[13]

42 「ムハンマドよ、」言いなさい。「地上を旅しなさい。そして見なさい、以前の者たちの結末がどのようであったかを。彼らの多くは、多神を奉ずる者であった」。

43 アッラーからの避けられない日が来る前に、あなたの顔を真正の宗教へと向けなさい。その日、彼らは「二つの群れに」分かたれるだろう。[14]

44 「真理を」拒む者は、誰であれ拒んだこと「の結果」を負う。また行い正しい者は、誰であれ自分のために「楽園の居場所を」用意する。[15]

45 それは信じて正しい行いをする者に、かの御方がその御恵みから報いるため。本当にかの御方は、「真理を」拒む者を愛さない。

46 また良い報せを伝える風を遣わし、あなたがたにその慈悲を味わわせ、かの御方の命令により船を渡らせ、あなたがたにかの御方の御恵みを探し求めさせることも御しるしのひとつ。あなたがたは、感謝するようになるだろう。[16]

47 本当にあなた「ムハンマド」以前にも、われらは使徒をその民に遣わした。彼ら「使徒たち」は明白な証をもって彼らに到来した。それからわれらは、罪を犯した者たちに報復した。信仰者を助けることは、われらのなすべきつとめ。

48 アッラーは風を遣わして雲をつちかう。それを御心のままに空に広げ、破片にして散らすと、あなたがたは、そのただ中から雨が降るのを見るだろう。それを、そのしもべのうち御心にかなう者に降らせると、見なさい。彼らは、たちまち大喜びする。[17]

49 これを彼らに降らせる以前には、絶望していたというのに。

50 それゆえ見なさい、「創造における」アッラーの慈悲の跡を。どのようにして、死んだ後の大地に生をもたらすかを。このように、かの御方は死せるものに生をもたらす。かの御方は、あらゆるものごとにお

いて全能である。

51 しかし、もしわれらが風を遣わし、［作物が］黄色くなるのを見ると、その後の彼らは［真理を］拒むようになる。[18]

52 ［ムハンマドよ、］それゆえ、本当にあなたには死せる者に聞かせることはできない。また耳の聞こえない者が、背を向けて逃げ出そうとするとき、呼びかけを聞かせることはできない。

53 また目の見えない者を、その迷いから導くこともできない。あなたが聞かせることができるのは、ただわれらのしるしを信じる者、すなわち服従する者［ムスリム］だけ。

54 アッラーは、あなたがたを［精の一滴という］弱さから創造した。そののち、弱さの後に強くし、そののち、強さの後に弱く白髪にさせる。アッラーは御心のままに創造する。すべてを知る御方、あらゆるものごとにおいて全能の御方。

55 ［定められた］あの時が現れる日、罪を犯した者たちは、自分たちはただ一刻を過ごしたに過ぎないと誓うだろう。このように、彼らは惑わされている。

56 しかし知識と信仰を与えられた者たちは言うだろう。「あなたがたはアッラーの［書が］定めるとおり、確かによみがえりの日まで過ごしました。そしてこれが、よみがえりの日です。しかしあなたがたは、知らずにいました」。

57 その日、不正をなす者の言い訳は何の役にも立たず、償わせてももらえない。[19]

58 そしてわれらは人々のために、すでにこのクルアーンの中に、ありとあらゆる例えを示しておいた。しかし、たとえあなたが彼らに御しるしを持って来ようと、［真理を］拒む者たちは、必ず「本当にあなたがたは、虚偽をなす者に他ならない」などと言うだろう。





59 このように、アッラーは知らずにいる者の心を封じる。

60 ［ムハンマドよ、］それゆえよく耐えていなさい。本当にアッラーの約束は真理である。確信を得ていない者たちのせいで、あなたがうろたえていてはならない。[20]

1 「もっとも近い地」とは、シャーム（シリア地方）であるというのが通説となっている。

2 「誰であれその御心にかなう者」。他の箇所でも繰り返し説き明かされている通り、神の意志または計画は恣意的なものではない。それは最も高次の叡智に満ちたものである。

3 「約束」とは、神によりすべての物事が決定されることを指している。神は、神を正しく信仰する者の行く手からあらゆる災難や困難を取り除き、また彼らが正しい目的を成功させ、歓喜に至れるよう手助けする。これはいつ・どのような場合においても当てはまることである。

4 内面的にはまったく異なる場合があるにもかかわらず、人間はとかく物事の外見に惑わされる。

5 マッカからメソポタミアやシリアへと北へ向かって旅した者も、あるいはヤマンやハドラマウトへと南へ向かって旅した者も、そこでは必ず古代文明の廃墟を目にしたはずである。伝承に従うなら、それらは自分たち自身の腐敗と神の意志に対する反逆のために滅ぼされた民の痕跡である。

6 「かの時が現れる日」。裁きが終わると、その「時」が到来する。現世においては崩壊しているかのように見えていた均衡が正される。善良な者には喜びがもたらされる。そして罪ある者は現実に直面させられる。すべての幻想が失われ、

絶望に襲われることとなる。

7 神を想起するのにふさわしい特別な時を、一生涯にわたって生活の営みの中に取り入れるよう勧めている。朝の早い時刻に起床した時、また夜の休息の時、またせわしなく働いている最中に、太陽が天頂を過ぎゆく時に、そして午後遅く、暮れ始める時に。これらのすべてが、日々の営みの区切りであると同時に、太陽の移動の各段階とも重なり合っている。後にマディーナで定められた一日に五回の規範的な礼拝の時刻は、これを基本として確立されたものである。（1）ファジュル（早朝・夜明け前）。（2）ズフル（太陽が下降し始める、正午の直後）。（3）アスル（午後遅く、昼と夕方の間）。（4）と（5）はいずれも晩の礼拝に相当する。マグリブ（日が沈んだ直後）と、イシャー（地平線から夕暮れの薄明かりがすっかり見えなくなり、休息と睡眠のための時間帯）のそれである

8 神の創造のみわざは、死せるものから生きとし生けるものを創り出す。科学でさえ、未だ生命の謎のすべてを説明することはできていない。生命は、成熟を経てやがて死を迎える。私たちは日々、その繰り返しを目撃している。

9 「さまざまな言語と色合い」とは、互いの違いの中に学びを得るという意味では、文字通り言語や肌の色の違いにのみ限定されない、地理的な側面や時代的な側面といった観点にも当てはめることができるだろう。

10 自分自身の人生や経験と、たとえ話とを照らし合わせ、俯瞰することで類似点を探り、学ぶべき教訓を見出そうとすることは、より高度な思索に至るための方法の一つである。そしてここでのたとえ話が教えようとしているのは、偽ものの崇拝についてである。偶像を使用人（「正当に召しかかえる者」）に例えている。

11 神の創造の御手を経ていることからも明らかなように、人間とは無垢で純粋であり、真正で自由であり、正しさと美徳へ向かう性質と、宇宙における自分自身の置かれた立場や、神の善美と英知、威力についての真の理解を有している。これこそが人間の本来の姿である。それは仔羊が穏やかな気質を持っていることや、馬が速く走る脚を持っているのとちょうど同じである。しかし人間は習慣や迷信、利己的な欲望、また偽りの教えといった網に捕らわれている。これに





より人間は攻撃的になったり、不潔や虚偽にまみれたり、他者に対して卑屈なまでに盲従したり、間違ったことや禁じられたことに期待を寄せたりするようになる。そのようにして同胞である人類への愛情や、唯一の真理である神に対する崇拝から逸脱するのである。

12 「リバー（利子）」とは、暴利や贈収賄、不当な利得、詐欺的な取引といった手法を用いて利益を増やそうとする行為全般を指す。経済活動におけるこうした利己的な僭越の行為は、それが個人間であろうと、あるいは国家間であろうと、すべて禁止の範疇である。

13 神の創造それ自体は、純粋かつ善美なるものであった。あらゆる不善や荒廃は、傲慢さや利己主義といった悪（あるいは善の欠如）によってもたらされたものである。不善が起これば、それを食い止めるために神の慈悲と善美が現される。悪の結果は悪に他ならず、またそれが「人々がその手であがなってきたこと」であることを特定した上で、懲罰（「行ってきたことの一部を味わわせる」）が用意されていることが示される。同時にこれは未来への警告でもあり、また悔い改めの扉に入るための招きでもある。

14 実際に「アッラーからの避けられない日」、すなわち裁きの日が到来してからでは、悔い改めるには遅すぎる。その日、人々は往来の不可能な障壁によって善と悪とに「分かたれ」、神の規範へと立ち返る機会も失われてしまうためである。

15 真理と信仰を拒絶したために拒絶されて苦しむことになる者と、正しい行いのために平安と救済を成就し、終わりなき至福に至る者。「二つの群れ」には、はっきりとした境界がある。

16 物質的領域の世界では、風は大気を冷やし、浄化するだけではなく、大地を肥沃にする雨という祝福を運びもする。また海路や空路を開き、人間が互いに距離を超えて交易し合うことを助けるのも風である。

17 再び、風を主題とするたとえ話が、今度は物質的な側面に加えて霊的な側面を想起させる描写で語られている。物質的領域の世界では、風が雲を相手に演じる役割が示される。風は地上の水を水蒸気として吸い上げ、必要に応じて雨雲を

運びもすれば、必要に応じて雨として地上に降らせもする。

18 自然の持つ力を描いた、また別のたとえ話。凪は、それを霊的に正しいやり方で用いる人に対しては、喜びや活力、豊かさをもたらす。

19 神のメッセージにある明白な警告を故意に拒んでおきながら、後になって「ああ、これについては気がつかなかった、知らなかった」と言ったところで何の役にも立たない。そうした言い訳は単なる虚偽に過ぎないし、それをもって悔い改めと称し、恩恵を求めるのは無理がある。それでは遅すぎるのである。

20 信仰を否定する者に嘲笑されたり、迫害されたり、あるいは神のメッセージを伝えるのを妨害されたり、またそうしたふるまいの数々が成功しているかのように見えている時でも、神の預言者は、努力を弛めたり、落胆したりすることはなかった。彼は確固たる信仰を持っており、また最後には、必ず神が真理を確立するであろうことを知っていたのである。忍耐と不屈の努力をもって、神に託された使命をまっとうした。信仰もなく、したがって確信も持たない敵対者たちの軽率さに対し、忍耐が勝利しないはずがなかったのである。

# 第三一章　ルクマーン

マッカ啓示

本章は、ルクマーンの叡智について言及されている一二節にちなんでその名で呼ばれている。ルクマーンはアラブ・イスラーム世界に語り継がれ、尊敬を集める賢者であるが、ユダヤ教系の文献においては言及のない未知の人物である。彼は黒人の元奴隷もしくは大工であったとされている。彼の名を冠する寓話の数々はイソップのそれとも相当に類似しており、一般にのべ伝えられている彼の出自も概ね妥当なものと思われる。本章は、迫害の只中にあったムスリムたちに、やがて必ず成功を収めるであろうことを確証するものである。

本章は、マディーナで啓示された二七節と二八節を除き、マッカ中期もしくは最後の頃の啓示群に属する。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 アリフ、ラーム、ミーム。
2 これは、賢明な啓典の御しるし。[1]
3 行いの善良な者のための導きと慈悲。
4 礼拝のつとめを守り、喜捨をし、来世を確信する者たち。





5 これらの者こそ、その主からの導きの上にある者。またこれらの者こそ、栄える者。
6 人々の中には、気晴らしの伝聞を買い込んで、知識なくしてアッラーの道から「人を」迷わせ、それを笑いごとにする者がある。これらの者には、屈辱の懲罰があるだろう。
7 また、われらのしるしが読み聞かされるとき高慢に背を向ける者。まるでそれが聞こえないかのように、耳が鈍いかのように。彼らには、痛烈な懲罰の報せを伝えなさい。
8 本当に、信じて正しい行いをする者には至福の楽園があり、
9 その中に、永遠に住まうだろう。アッラーの約束は真理である。もっとも威力ある御方、もっとも賢明な御方。
10 かの御方は、あなたがたの目に見える支柱なくして諸天を創造し、また、あなたがたと共に揺れることのないように、大地には不動の山々を据えつけた。またその中に、ありとあらゆる生きものを一面に散らばせた。また、われらは空から雨を降らせ、その中に、様々な貴い種のすべてを育んだ。
11 これがアッラーの創造というもの。この御方をさし置いて他のものが、何を創造したか見せてみなさい。いいや、不正をなす者は明らかな誤りの中にいる。
12 われらはルクマーンに知恵を与えた。「アッラーに感謝しなさい。誰であれ、感謝する者は自分のために感謝する。そして誰が恩を忘れようと「、それは自分を損ねるだけであり」、本当にアッラーは満ち足りた御方、称賛にふさわしい御方」。[2]
13 ルクマーンが、その息子に助言し、こう言ったときのこと「を思いなさい」。「私の息子よ。アッラーに何ものかを同列に連ねてはならない。本当に、何ものかを同列に連ねるのは大それた不正である」。[3]
14 われらは人間に対し、その両親について指図しておいた。母は弱りに弱りながら「その子を胎内に」身ご

もり、また乳離れまでには二年かかる。われに、またあなたがたの両親に感謝しなさい。行き着く先はわれにある。[4]

15 しかし、もし彼らがあなたに対し、つとめてあなたの知らないものをわれと同列に連ねさせようとするなら、彼らのいずれにも従ってはならない。しかし現世においては親切に彼らに付き添いなさい。そして、悔い改めて常にわれに立ち返る道に従いなさい。そののち、あなたがたの帰りゆく先はわれにある。われはあなたがたに、あなたがたの行ってきたことについて告げ報せるだろう。[5]

16 ［ルクマーンは言った。］「私の息子よ。本当に、たとえからしの種ひと粒の重さであろうと、そしてたとえそれが岩の中に、あるいは空の中に、あるいは地の中にあろうと、アッラーはそれを持ち出すだろう。本当にアッラーは細やかな、熟知している御方である。

17 私の息子よ。礼拝のつとめを守り、親切を勧め、非道を禁じなさい。そしてあなたに降りかかることをよく耐えていなさい。それが、大いなる決心のあらわれというもの。

18 人々を見下して、あなたの頬を背けてはならない。傲慢な態度で地上を歩いてはならない。アッラーは、思い上がって自慢ばかりする者を愛さない。

19 歩みは穏やかにし、声音は控えめにしなさい。声音のうち、もっとも聞き苦しいのはろばの声音」。

20 あなたがたは、アッラーが諸天にあるもの、大地にあるものは何であれあなたがたのために使役させ、あなたがたを、外側においても内側においてもその恩寵に浴させているのがわからないのか。人々の中には知識も導きも、あるいは光を照らす啓典もなくして、アッラーについて言い争う者がある。[6]

21 彼らが「アッラーが下したものに従いなさい」と言われるとき、彼らは「いいや、私たちは先祖から習ったとおりのものに従う」などと言う。たとえ悪魔が彼らを烈火の懲罰に呼び招いているとしてもか。





22 誰であれ善良な行いをし、自分自身をアッラーにあずけている者は、もっとも信頼のおける把手（はしゅ）を握る。ものごとの結末はアッラーに属する。[7]

23 ［ムハンマドよ、］誰か［真理を］拒む者があっても、その者が拒ぶのを嘆いてはならない。彼らの帰るところはわれらにある。われらは、彼らが行ってきたことを告げ報せるだろう。本当にアッラーは、胸の中に抱くことを知っている。

24 われらは、彼らをわずかばかり楽しませ、そののちに手厳しい懲罰に追いやるだろう。

25 もしあなたが彼らに「諸天と大地を創造したのは誰か」と尋ねたなら、彼らは必ず「アッラー」と言うだろう。言いなさい。「アッラーに称賛あれ」。いいや、多くの者は何も知らない。

26 諸天と大地にあるものは、すべてアッラーに属する。本当にアッラーこそは満ち足りた御方、称賛にふさわしい御方。

27 たとえ地上のすべての樹木が筆で、［その墨として］海に後から七つの海を加えたとしても、アッラーの御言葉は［書き］尽くせない。本当にアッラーは威力あり、もっとも賢明である。[8]

28 あなたがたを創造するのも復活させるのも、たったひとりをそうするかのようなもの。本当にアッラーはすべてを聞き、すべてを見る。

29 あなたは見ないのか、アッラーが夜を昼に入らせ、また昼を夜に入らせるのを。また太陽と月を使役し、いずれも定められた［究極の］時までよどみなく［軌道を］走らせるのを。また本当にアッラーは、あなたがたの行いを熟知しているのを。

30 それはアッラーこそが真理であり、この御方をさし置いて彼らが祈っているものは嘘いつわりであるため。本当にアッラーこそ至高の御方、至大の御方。[9]

31 あなたは見ないのか、その御しるしをあなたがたに見せるために、アッラーの恩寵により船が海を渡るのを。本当にその中には、よく耐える者、感謝する者すべてへの御しるしがある。 10

32 波が天蓋のように彼らに覆いかぶさるとき、彼らはアッラーに祈り、宗教において真摯になる。ところが、かの御方が彼らを陸地へ送り届けると、彼らのうちある者はあいまいな態度をとるようになる。しかし裏表のある者、［真理を］拒む者を除いては、誰もわれらのしるしを拒まない。 11

33 人々よ。あなたがたは主を畏れなさい。そして親が子に報いることも、子が親に報いることもできないその日を恐れなさい。本当にアッラーの約束は真理である。それゆえ現世の生に欺かれてはならない。アッラーについて欺く者に、欺かれてはならない。 12

34 本当に、かの［終末の］時の知識はアッラー、かの御方の御許にのみある。御方は雨を降らせる。かの御方は子宮の中にあるものを知る。明日に得るものが何であるのか、誰にもわからない。どの地で死ぬことになるのか、誰にもわからない。アッラーはすべてを知り、熟知している。 13





1 賢者と呼ばれた人物の名を章名にしていることからもわかる通り、本章の主題は知恵に関連しており、クルアーンもそれにふさわしく「賢明な啓典」、あるいは知恵の書と呼ばれている。下記一二節では、賢者ルクマーンへの言及がある。ここでいう「ハキーム（賢明）」とは、人間と神の知識に精通しているだけではなく、実際のアマル（行動）を通して実践している人を意味する。自らの力の及ぶ限り、人生において正しい道を進む人を指す。そうした人の知識は正確かつ実践的だが、人間は完璧ではない以上、必ずしも完全であるというわけではない。

2 本章に登場する賢者ルクマーンは、アラブの民間伝承に属する人物である。彼の人生についてはほとんど知られていない。一般に、彼は長寿であったとされている。奴隷もしくは大工であったとされ、世俗的な権力に背を向け、王侯の求めを拒み、つつましい暮らしを送ったと伝えられている。

3 「私の息子よ」、あるいは「私の愛する幼い息子よ」。息子と呼ばれた人物が、子どもであるか成人であるかに関わらず、自分よりも小さいものとして深い愛情を示す言語表現である。

4 このように、人生を始める契機を与えてくれた両親に対する感謝は、最終的には一個の独立した人間として、自らの存在の根源である神に対する感謝へと通じるものとして規定されている。一七章二三節、二四節も参照。

5 人間に対する義務と神に対する義務が矛盾する場合、それは人間の側の理解に誤りがあることを意味する。私たちは人間よりもまず神に従うべきであり、そのことを前提として何ごとも判断する必要がある。

6 神の恩寵と諸々の恩恵は、常に私たちに働きかけている。私たちはそれを目にすることもあれば、見過ごしていることもある。私たちの感覚で捉えられるものの中に、神の恩寵を見ることは可能である。しかしそれらの中においてさえ、時には私たちの知識の範囲を超えた働きかけがある。内面的、あるいは霊的な領域でのことなら、私たちのヴィジョンが明瞭でありさえすれば、神の恩寵がどう機能しているかが理解できることもある。多くの場合、私たちは恩寵を意識することなく過ごしている。しかしそれらが常に働きかけていることに変わりはない。

7 神こそは究極の目的地である。あらゆるものは神に還りゆく。人間は神に服従せねばならず、また神にのみ服従するのでなければならない。

8 神の御言葉、すなわち神の驚くべき御しるしと定めは数限りなく、あらゆる木々を筆にし、またすべての広大な海原を七倍に増やしてインクにしたとしても、とうてい書き尽くせるものではない。神の啓示の書は、どれも人間がその人生

を通して理解し、また活用できる事柄を扱っている。同時に、人間には絶対に推測することもできない神秘を超えた神秘、謎を超えた謎が存在する。私たち人間が、たとえ無限の資源を用いて神への賛美を書き記そうとも、神の威力と栄光、そして叡智を十分に説き明かすことはできない。

9 ここでも再び、唯一絶対の神という点が強調される。唯一、神のみが永遠の実在である。神と競い合う存在、あるいは権能を分かち合う同等の存在として挙げられるものはすべて虚偽に他ならない。神は私たちの想像をはるかに超越した、至高の創造者である。

10 自然の持つ様々な素晴らしい力は、人間が用いることができるようにとそれらを制御する神の恩寵として人間に授けられたものである。「サッバール（よく耐える者）」という語は、「シャクール（感謝する者）」を強調・集約する意味もある。

11 絶えず神の援助を探し求め、正義と、課された義務とを果たすことによって神の慈悲への感謝を示す、三一節で言及されるような人々とは異なり、単なる恐怖心に突き動かされて崇拝を行う類いの人々が存在する。彼らは、身体的な危険にさらされるとき ― 彼らが唯一、感じ取れる「危険」がそれである ― 、例えば海で嵐に巻き込まれたときには、彼らも真に神について熟考する。しかし、ひとたび危険が過ぎ去ってしまえば、彼らはたちまち無関心になり、再び悪と親身になりつつ、善人らしくふるまうようになる。三一節とこの節は、アブー・ジャフルの息子イクリマについての啓示でもある。マッカ征服の後に、絞首の憂き目にあうのを恐れ、海路伝いにヤマンへ逃げようとした彼は、海上で強い嵐に見舞われた。彼は不信仰であったことを後悔し、悔い改めて神に祈り、生き延びることができたなら、神の預言者の許へ行き、過ちを詫びてイスラームの道に入ることを決心した。彼の場合は、実際に残りの生涯をイスラームのために捧げて過ごした。

12 清算の日、誰も自分以外の他者を助けることはできない。最も愛情ある父親であっても自分の息子を助けることはできず、またその逆も然りである。誰もが、それぞれに自分自身に対する責任を負っている。





13 知識や神秘に関わる問いが、ここでは雨と子宮の両方を通して知らしめられる。実際にこの節には、本章の主要な五つの論点が網羅されている。（1）時間、（2）雨「の持つ意味」、（3）新たな生命の誕生（子宮）、（4）日々、私たちが過ごしている身体上の生、そして（5）私たちの死についてである。

# 第三二章　アッ＝サジダ　平伏

マッカ啓示

本章は、ヒジュラの五年前に啓示されたものである。章名は一五節に由来する。本章のおおよその文脈は、神の全能性についてである。神の全能性は、それのみで神を崇拝し、賛美する理由として十分に足るものである。一方で信仰する者たちが来世に待ち望むものと、信仰を否定する者のそれとを比較することにより、警告と勧告が与えられる。また預言者ムハンマドが彼の民から受けた仕打ちについて、彼に対する慰めとして、過去のイスラエルの民のふるまいが例として挙げられている。

本章は、中期のマッカ啓示群に属している。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 アリフ、ラーム、ミーム。
2 ［これは］疑う余地のない啓典、諸世界の主から下されるもの。
3 それとも彼らは、「彼がねつ造したのか」などと言うのか。いいや、これはあなたの主からの真理。あな
た以前には警告者が来なかった民に対し、あなたが警告するためのもの。それで彼らも、導かれるよう





になるだろう。
4 アッラーこそは諸天と大地と、その間にあるすべてを六日の間に創造し、それから玉座に就いた御方。
この御方の他に、あなたがたには庇護者も、とりなす者もない。それでもあなたがたは、いまだ憶えて
おこうとしないのか。[1]
5 かの御方は、諸天から大地までものごとを司る。そののち、それらは一日でかの御方へと昇る。その［一
日の］長さは、あなたがたの数える千年にあたる。[2]
6 それが目には見えないものと見えるものとを知る御方、もっとも威力ある御方、もっとも慈悲深い御方。
7 創造するあらゆるものごとを最善のものとし、人間の創造を泥から始めた御方。
8 そののち、卑しい水の精髄からその子孫をもうけ、
9 そののちに姿づくり、その中に、この御方の霊を吹き込んだ。そして聞く耳と見る目を、また諸々を感
知する心を持たせた。あなたがたのうち、感謝する者はわずかであるが。
10 彼らは言う。「［死んで］大地の中に失われたときになって、私たちが本当に新しく創造されることがあ
るだろうか」。いいや、彼らは、主と会すること［の真理］を拒む。
11 言いなさい。「あなたがたのことを託されている死の天使が、あなたがたを召し寄せる。そののち、あな
たがたは主に帰されるだろう」。
12 もしあなたに、主の御前でうなだれるときの罪を犯した者たちを見ることができたなら。「主よ。私たち
は見ました、聞きました。ですから私たちを［現世に］帰らせてください。私たちは正しい行いをします。
本当に私たちは、［今こそ］確信しました」。
13 われらがそうと望めば、誰しもが導かれていただろう。しかしわれの告げた「われは地獄を、必ずやジ

ンも人間も、全員で一緒に満たすだろう」との言葉が真理となる。[3]

14 それで「行いの結果を」味わえ。あなたがたは、この日に会うことを忘れていた。そのためわれらも、あなたがたを「地獄に放置して」忘れた。永劫の懲罰を味わえ、あなたがたが行ってきたことのゆえに。[4]

15 われらのしるしを信じる者だけが、それが想い起こされるときに身をかがめてひれ伏し、称賛をもって主を讃美する。そして彼らは、高慢ではない。

16 寝台からその身を起こし、畏れ敬いつつ希望をもってその主に祈る者、われらが彼らの糧としたものの中から、「他者のために」費やす者。

17 どの者も、その行ってきたことへの報いとして、目にも涼やかな「喜ばしい」ものが隠されているのを知らない。[5]

18 信じる者と、背く者とが同じようだろうか。彼らは、同じではない。[6]

19 信じて正しい行いをする者たち。彼らのために、その行ってきたことへのもてなしに安息の楽園がある。[7]

20 しかし背く者たち、彼らは業火がその住まい。その中から出ようと欲するたびに、その中に引き戻され、告げられるだろう。「あなたがたが嘘であるとしていた、業火の懲罰を味わえ」。

21 そしてわれらは最大の懲罰の前に、必ずそれよりも身近な懲罰を味わわせる。それにより彼らも、戻ってくることだろう。[8]

22 主の御しるしを憶えておきながら、そののちにそれらから背き去る者よりも不正な者があるだろうか。本当にわれらは、罪を犯す者には復讐するだろう。[9]

23 われらは確かにムーサーに啓典を与えた。それゆえあなたは、彼がそれを受け取ったことに疑いを抱いてはならない。われらは、それをイスラエルの民への導きとした。





24 彼らがよく耐え、われらのしるしを確信したとき、われらは彼らの中から、われらの命令によって彼らを導く先導者をあらしめた。[10]

25 彼らのあいだで相争われていたことについては、復活の日、あなたの主が彼らのあいだを明快にするだろう。

26 彼ら以前に、われらはどれほどの世代を滅ぼしたことか。彼らにとり、それは導きではないか。彼らは、彼ら「滅ぼされた世代」が住んでいたところの中を歩いているではないか。本当にその中には、諸々の御しるしがある。それでも彼らは、聞こうとしないのか。

27 彼らは見ないのか、われらが不毛の大地に水をひいて、それにより穀物を生じ出させ、それを彼らの家畜も、また彼ら自身も食べているのを。それでも彼らは、見ようとしないのか。

28 彼らは言う。「もしあなたがたが真実を語っているのなら、その勝利はいつ来るのか」。

29 「彼らに」言いなさい。「勝利の日には、「真理を」拒む者の「その日限りの」信仰は彼らの益にならず、また猶予してはもらえないだろう」。

30 それゆえ彼らから立ち去り、「しかるべき時の到来を」待っていなさい。本当に彼らも、待っているのだから。[11]

1 「一日」とは、私たちが日を数える場合のそれを意味するものではない。私たちが数える「日」とは、地球と太陽の巡りという条件に従ったものであるが、ここでの「日」とは、地球と太陽が創造される以前のものである。次の節では一日は千年と勘定され、また七〇章四節では五万年とも記されている。これらの数字はいわゆる「永遠」といったものではなく、非常に長い、計り知れないほどの年月としてとらえるべきである。

2 「かの御方へと昇る」とは、すべてのものごとは神による裁きを求めて神に向かう、という意味である。そして神によるあらゆる価値の復活は、一日、あるいはひと時、あるいはまばたきをする間になされることもある。

3 悪は避けうるものだろうか。確かに、すべての力能は神の有である。もしも神がそうと望み、またそうと計画したならば、神はその創造物に、何の選択肢も意志も持たせることのない世界を創造することも可能であった。だがそれは、神の意志でも、意図したところでもなかったのである。私たちの知る通り、人間は一定の選択肢と自由意志を持っている。かくして、神は人間が自らまっすぐで純粋な意志を選び取るようにと、人間のためにしるしと手段とを用意した。その必然の結果として、神の法への違背に対する罰が存在する。神の言葉は真理であり、必ず果たされる。罪もまた同様である。

4 ここで神の告げる「われらも、あなたがたを忘れた」とは、「故意に無視し、侮蔑をもって拒む」という意味である。欠如として、あるいは認識上の過誤という意味での「忘れる」は、完全無欠の存在である神にはそぐわない。「私の主は決して迷うこともなく、忘れることもありません（二〇章五二節）」と、明白に告げられている通りである。

5 「目にも涼やかな」とは、最も望ましく、また最も満足を与えるものを指す成句である。現在、置かれている状態では、将来において授けられる本当の至福がどのようなものであるか、私たちにはほとんど想像もつかないほどである。

6 二つの集団 ― 祝福される者とそうでない者 ― の将来が、一九節から二二節を通して説き明かされる。

7 ここでの「安息」には避難所や家庭といった意味もある。「家庭」という語感は、心に平安と幸福の姿を描き出す。そこに栄誉と歓待が加われば、幸福という概念がより深まる。





8 最終的な懲罰は、来世で下されることになる。それは疑う余地もないことである。しかしそれ以前に、それよりも小さな懲罰は、まさしく今、この現世においても下される。それは何らかの不幸という形で訪れるかもしれないし、あるいは良心の呵責（かしゃく）に苦しんだり、誰にも打ち明けられずひそかに嘆き悲しんだりといった形で訪れるかもしれない。しかし、こうした小さな懲罰は、実際には慈悲である場合もある。それが悔い改めと立ち直りの機会にならないとも限らないからである。

9 最も悪い罪ならびに罪人とは、神の啓示が伝えられたにもかかわらず、悪を好み、神の光に背を向けて立ち去る者である。

10 イスラエルの王や裁判官、預言者たちは、神の法に従い、善良な導きを与え続け、人々は信仰と忠節（忍耐）を保ち続けていた。しかしその状態が終わりを迎えたとき、神の恩寵は取り上げられ、人々は互いに争い合う党派となって分裂し、民としての統一性が失われ、事実上、滅んだのである。

11 これが信仰なき人々に対する命令であったとしても「待つがいい。われらも待っている」となり、また行いの正しい者たちに対してであったとしても同様に「待つがいい。彼らも待っている」となる。いずれにせよ、相手から「立ち去ることが勧められている。

# 第三三章　アル＝アフザーブ　諸部族の同盟

マディーナ啓示

本章は、ヒジュラ暦六年めの終わりから七年めの始めにかけて啓示された。その章題は九節から二五節、マディーナのユダヤ教徒ナディール族による、ムスリムに対する挑発についての言及に由来している。最終的には、彼らはマディーナから追放されることになった。彼らは砂漠を本拠地とするガタファーン族、クライシュ族、ターイフのとある一族を扇動し、またマディーナの別のユダヤ教徒クライザ族の援護を得てムスリムを攻撃しようと試みた。しかし、これに対してムスリムは、マディーナの周縁に塹壕を掘って守りを固めた。その結果、二十日間におよんだ包囲戦は失敗に終わった。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 預言者よ。あなたはアッラーを畏れなさい。［真理を］拒む者や、偽善者に従ってはならない。本当にアッラーは、すべてを知っており賢明である。

2 あなたの主から啓示されたことに従いなさい。本当にアッラーは、あなたがたの行いを熟知している。

3 アッラーに委ねなさい。執りしきる者はアッラーだけで十分である。

4 アッラーは、どのような男の体内にも二つの心臓を置きはしなかった。またあなたがたが、「自分の母も





同然だ」と［ズィハールを］口にするあなたがたの伴侶を、あなたがたの母とはしなかった。またあなたがたの養子を、あなたがたの実子とはしなかった。これらはあなたがたが口先で言っていること。しかしアッラーは真理を語り、［正しい］道へと導く。[1]

5 彼ら［養子］のことを、［実の］父［の名］をもって呼びなさい。その方が、アッラーの御許においてより公平なこと。もしあなたがたが彼らの父［の名］を知らないなら、あなたがたの宗教上の同胞や友人［の名］によって。これについて過ちを犯したとしても、故意ではない限り誤りではない。アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。

6 信仰者にとり、預言者とは、自分自身よりも近しい者。その妻たちは、彼らの母。血縁のある者は、アッラーの定めにおいては［それ以外の］信仰者や［マッカからの］移住者よりも互いに近しい。あなたがたが友人に親切にする場合は別で、これは啓典の中に記されていること。[2]

7 われらが預言者たちから誓約を受け取ったときのこと［を思いなさい］。あなたからも、またヌーフ、イブラーヒーム、ムーサー、マルヤムの子イーサーからも。われらは、彼らから厳粛な誓約を受け取った。

8 それはかの御方が、真実の人にその真実を問うため。［真理を］拒む者には、かの御方は痛烈な懲罰を用意している。[3]

9 信じる者たちよ。あなたがたに対する、神の恩寵を憶えておきなさい。あなたがたに軍勢が到来したとき、われらは彼らに対し、風と、またあなたがたには見えない軍勢とを遣わした。アッラーは、あなたがたがしていることを見ている。

10 彼らがあなたがたの上からも、また下からも到来したときのこと。あなたがたの目は眩み、心臓は喉元にせり上がった。あなたがたはアッラーについて、様々な推測にかられていた。

11 このように信仰者は試みられ、激しい動揺をもって揺さぶられた。

12 また偽善者や、心にやまいのある者がこう言ったときのこと。「アッラーもその使徒も、私たちに、ただ欺瞞（ぎまん）だけを約束したのです」。[4]

13 また、彼らの中のある一派がこう言ったときのこと。「ヤスリブの住民よ。あなたがたには踏みこたえることはできないだろう。それゆえ帰ってきなさい」。また、彼らのうちある一派が、預言者に許しを求めてこう言ったときのこと。「本当に、私たちの家は無防備のままにさらされています」。それらはさらされてなどおらず、彼らはただ逃げ出したかっただけのこと。[5]

14 もし彼ら［敵の軍勢］がどこからでも入ってきて、そののち彼ら［偽善者］に反乱を求めていたなら、彼らは少しもためらうことなく、きっとそうしていただろう。

15 すでに彼らは、アッラーと以前に約束を交わし、［敵に］その背中を向けることはしないとしたのに。アッラーの約束は、やがて問いただされる。

16 言いなさい。「たとえ死や殺害から逃げ出そうとも、逃げ出すことはあなたがたの益にはならない。そののちには、ただわずかばかりの楽しみがあるだけ」。[6]

17 言いなさい。「アッラーがあなたがたに悪を望もうと、あるいは慈悲を望もうと、誰があなたがたを守れるだろうか」。アッラーをさし置いて、彼らには守る者も助ける者も見つけられないだろう。

18 アッラーは、あなたがたのうち［他人を］妨げた者、またそのきょうだいに「私たちの方に来なさい」と言い、自分でも戦場にはほとんど来なかった者を知っている。

19 それはあなたがたに対し、出し惜しみをしてのこと。しかし彼らを恐怖が襲うとき、あなた［ムハンマド］は彼らが死に際の者のように目をまわし、あなたを見るのを見るだろう。しかし恐怖が拭い去られると、





彼らは舌鋒鋭くあなたを非難する。それは良いもの［戦利品］を欲しがってのこと。これらの者は、信じたことがない。アッラーは彼らの行いを、全くの無に帰す。そしてそれは、アッラーにはたやすいこと。[7]

20 彼らは、［諸部族の］同盟の軍勢はいまだ立ち去ってはいないものと思っている。もし［諸部族の］同盟の軍勢が来たなら、自分たちがアラブの［部族の］中にまぎれて砂漠に住まい、あなたがたについての報（しら）せを［遠く離れたところから］尋ねていられるものなら、と願うだろう。彼らがあなたがたの中にいても、わずかばかりを除いてほとんど戦わないだろう。

21 あなたがたにはすでにアッラーの使徒という、アッラーと終末の日を待ち望み、アッラーを多く想い起こす者のための最善の模範がある。[8]

22 ［諸部族の］同盟の軍勢を見たとき、信仰者は言った。「これはアッラーとその使徒が、私たちに約束していたもの。アッラーとその使徒は真実を語ったのだ」。それは彼らの信仰と、服従とを深めるばかりであった。[9]

23 信仰者のうちある者は、アッラーとの約束に真実であった。彼らのうちある者は［死をもって］それを果たし、またある者は［今もなお］待っている。彼らは決して変わることがなかった。[10]

24 それはアッラーが、真実を語る者にはその真実に報い、また偽善者には、御心のままに懲罰を科すか、あるいは悔い改めを受け入れるため。本当にアッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。[11]

25 アッラーは、［真理を］拒む者たちを彼らの怒りのうちに立ち去らせた。彼らは何も良いものを得ることがなかった。このように戦いにおいては、アッラーは信仰者にとり万全であった。本当にアッラーは強大にして威力ある御方。

26 かの御方は、啓典の民のうち、彼ら［敵の軍勢］に手を貸した者をその要塞（ようさい）から下ろし、またその心に恐

怖を投げ入れた。あなたがたは、そのうちのある者を討ち取り、またある者を捕虜とした。[12]

27 また、かの御方は彼らの土地と、館と、財と、またあなたがたが踏んだことのない土地を、あなたがたに受け継がせた。アッラーは、ありとあらゆるものごとにおいて全能である。

28 預言者よ、あなたの妻たちに言いなさい。「もしあなたがたが、現世の生とその飾りとを欲するなら、来なさい。私はあなたがたを養いもしよう。［離婚するなら、］こころよく自由にもさせてやろう。

29 しかし、もしあなたがたがアッラーとその使徒、また来世の館とを欲するなら、あなたがたの中で行いの善良な者に、アッラーは大いなる報酬を用意している」。[13]

30 預言者の妻たちよ。誰であれ、あなたがたのうち不品行にはしった者には、その懲罰も倍にされるだろう。そしてそれは、アッラーにはたやすいこと。

31 アッラーとその使徒に従順で、正しい行いをする者には、われらは二倍の報酬を与えよう。また彼女のために、われらは貴い糧を用意してある。[14]

32 預言者の妻たちよ。あなたがたは、［他の］女たちと同じではない。もしあなたがたが［主を］畏れるなら、軽薄な話し方をしてはならない。さもないと、心の中にやまいのある者が欲情することになる。相応の言葉で話しなさい。[15]

33 あなたがたの家の中にいなさい。昔の無明（むみょう）の時代のように、派手に着飾ってはならない。礼拝のつとめを守り、喜捨をし、アッラーとその使徒に従いなさい。家の者よ、アッラーはただあなたがたの不浄をぬぐい去り、あなたがたが清浄であることを望む。[16]

34 また、あなたがたの家で読み聞かされる、アッラーの御しるしと知恵とを憶えるようにしなさい。本当にアッラーは細やかにして、熟知する御方。[17]





35 本当に、服従する男女、信仰者の男女、従順な男女、真実を語る男女、よく耐える男女、謙虚な男女、慈善をする男女、斎戒する男女、貞節を守る男女、アッラーを多く想い起こす男女。アッラーは彼らのために、赦しと大いなる報酬を用意している。[18]

36 アッラーとその使徒がものごとを決めたとき、信仰者の男女はそのことについてどのような選択も［勝手に］するべきではない。アッラーとその使徒に逆らう者は、明らかに迷っている。

37 アッラーが恩寵を垂れ、あなたも手厚くしてやった者に、あなたがこう言ったときのこと［を思いなさい］。「あなたの妻をあなたの許にとどめ、アッラーを畏れなさい」。アッラーが明らかにしようとしていたことを、あなたは自分の中に押し隠そうとした。アッラーをこそもっとも畏怖すべきところ、あなたは人々を畏怖した。そしてザイドが彼女についてなすべきことを終え［て離婚し］たとき、われらは彼女をあなたと結婚させた。それは、なすべきことを終えたなら、自分の養子の妻と結婚しても信仰者に落ち度はないものとするため。アッラーの命令は、常に果たされねばならない。[19]

38 預言者が、アッラーに課されたことをなしとげても責めを負わない。それが以前に過ぎ去った者たちに対するアッラーの慣行。アッラーの命令は絶対の定め。

39 アッラーの言伝（ことづて）をのべ伝える者はアッラーを畏怖し、アッラー以外の何ものも畏怖することはなかった。清算する者は、アッラーだけで十分である。

40 ムハンマドは、あなたがたのうちどの男の父でもなく、アッラーの使徒であり、預言者たちの封印である。アッラーは、ありとあらゆるものごとを知る。[20]

41 信じる者たちよ。あなたがたはアッラーを多く想い起こし、憶えておくようにしなさい。

42 朝に夕に、かの御方を讃美しなさい。

43 あなたがたを暗闇から光へと連れ出すために、あなたがたの上に祝福をもたらす御方、そしてかの御方の天使たちもまた。かの御方は、信仰者に対しもっとも慈悲深い。

44 かの御方と会する日の彼らの挨拶は「平安あれ」。かの御方は彼らのために、貴い報酬を用意している。

45 預言者よ。われらはあなたを証言者として、良い報せを伝える者として、またひとりの警告者として遣わした。[21]

46 また、その思し召しによりアッラーへ呼び招く者として、光を照らす燈として。[22]

47 信仰者たちに、アッラーからの大いなる御恵みがあるとの良い報せを伝えなさい。[23]

48 ［真理を］拒む者や偽善者に従ってはならない。彼らの侮辱にとり合うことなく、ただアッラーに委ねなさい。とりしきる者はアッラーだけで十分である。[24]

49 信じる者たちよ。あなたがたが信仰者の女と結婚し、そののち彼女に触れる以前に離婚するときは、あなたがたが数えるべき［再婚までの］待機の期間を、彼女たちに課すことはできない。それゆえ彼女たちに扶養をなし、こころよく自由にさせてやりなさい。

50 預言者よ。本当にわれらは、あなたが婚資を与えた者、アッラーがあなたに［戦時の捕虜として］たまわったもののうち、あなたが正当に召しかかえる者、あなたの父方のおじの娘、父方のおばの娘、母方のおじの娘と母方のおばの娘のうち、あなたと共に移住した者、また信仰者の女で、自分自身を預言者に捧げ、預言者にも結婚の意志がある者を、あなたが妻とすることを合法とした。これは他の信仰者をおいて、あなただけのためのこと。われらは、妻や正当に召しかかえる者について彼ら［信仰者］に課してあることをよく知っている。これは、あなたに落ち度のないようにするためのこと。アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。





51 あなたは彼女たちのうち、あなたが望む者を先に延ばしてよく、また望む者を受け入れてよい。また、あなたが離れていた者を［再び］求めても誤りではない。彼女たちが慰められ、嘆くこともなく、またあなたが与えるものに、彼女たちのいずれもが満足するには、それがよりふさわしいこと。アッラーは、あなたがた［人間］の心の中にあるものを知っている。アッラーはすべてを知り、もっとも寛容である。[25]

52 この後になって、これ以上の女［との結婚］はあなたにとり合法ではない。たとえその美しさがあなたを喜ばせようと、あなたが正当に召しかかえる者を除き、妻をとり替えてはならない。アッラーは、常にありとあらゆるものごとを見守っている。[26]

53 信じる者たちよ。あなたがたは食事のために、その準備を待たずして許しを得ないうちに預言者の家に入ってはならない。しかし、呼び招かれたときは入りなさい。食べ終えたなら散会し、話をしようと居座ってはならない。それは預言者を苦しめること。彼［預言者］はあなたがたに対し［帰るよう告げるのを］ためらうが、アッラーは真実を［告げるのを］ためらわない。また、あなたがたが［預言者の妻たちに］何ごとかを尋ねるときは、とばりの後ろから尋ねなさい。それがあなたがたの心にも、かの女たちの心にもより清浄なこと。あなたがたは、決してアッラーの使徒を苦しめてはならない。また彼の後に、その妻と結婚してはならない。本当にそれらは、アッラーの御許においては大それたこと。[27]

54 あなたがたが何を明かそうとも、あるいは隠そうとも、本当にアッラーはありとあらゆるものごとを知る。

55 女たちにとり、その父、息子、きょうだい、兄弟の息子、姉妹の息子、身内の女や彼女たちが正当に召しかかえる者［と自由に往来すること］は誤りではない。アッラーを畏れなさい。本当にありとあらゆるものごとの証言者はアッラーである。

56 アッラーとその天使たちは預言者に祝福をもたらす。信じる者たちよ、あなたがたも彼を祝福し、また

彼に平安の挨拶をしなさい。[28]

57 アッラーとその使徒を傷つけようとする者は、現世においても来世においてもアッラーに忌まれ、また彼らのための屈辱の懲罰が用意される。[29]

58 また、何かしでかしたのでもない信仰者の男女を苦しめる者は、中傷「の責任」と明白な罪をその身に負う。

59 預言者よ。あなたの妻たち、娘たち、そして信仰者の女たちに、「遠出の際には」その身に「全体を覆う」外衣をまとうよう言いなさい。そうするのが、彼女たちがそれと知られるのにふさわしいことであり、苦しめられることもない。アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。[30]

60 もし偽善者や、心の中にやまいのある者たち、また市街の中にいる、うわさ話を広める者たちが止めないなら、われらはあなたを駆りたてて彼らと対峙させよう。そののち、彼らがあなたの隣人でいられるのもわずかのあいだとなるだろう。[31]

61 彼らは忌まれ、どこであろうと、見つけしだいその場で捕えられ、討ち取られるだろう。

62 それが以前に過ぎ去った者たちに対するアッラーの慣行。あなたはアッラーの慣行に、何の変わりも見出さないだろう。

63 彼らはあなたに、「定められた」かの時について尋ねるだろう。言いなさい。「その知識は、ただアッラーの御許にのみある」。しかし、あなたに何が知れようか。おそらくその時は近い」。

64 本当にアッラーは「真理を」拒む者を忌み、彼らのために烈火を用意し、

65 「彼らは」いつまでも永遠に、その中に住まうだろう。彼らには、守る者も助ける者も見つけられないだろう。





66 その日、彼らは業火の中にその顔を転がされる。彼らは言うだろう。「アッラーに従い、使徒に従っていればよかった」。

67 また、彼らは「こうも」言うだろう。「主よ。本当に私たちは、私たちの首領や有力者たちに従っていました。そして彼らが、私たちを「正しい」道から迷わせたのです。

68 主よ。彼らに倍の懲罰を与えてください。そして彼らを、大いに忌むこととしてください」。

69 信じる者たちよ。あなたがたは、ムーサーを苦しめた者たちのようであってはならない。アッラーは彼「ムーサー」を、彼らの言っていたことから潔白な者とした。そしてアッラーの御許において、彼は際立った者とされた。[32]

70 信じる者たちよ。あなたがたはアッラーを畏れなさい。真実の言葉を語りなさい。

71 かの御方はあなたがたのために、あなたがたの行いを改め、またあなたがたのために、あなたがたの罪を赦すだろう。アッラーとその使徒に従う者にこそ、大いなる成就がある。

72 本当にわれらは、諸天と大地と山々に信任を示した。しかし、それらは「信任を」背負うのをためらい、怖じ気づいた。しかし人間はそれを背負った。本当に「人間は」不正な者、無知な者。[33]

73 アッラーは偽善者の男女、多神を奉ずる男女に懲罰を科すだろう。しかしアッラーは、信仰者の男女の悔い改めを受け入れるだろう。アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。

1 ある男性が、別の男性の息子を「わが息子」と呼んだとしても、それを生真面目に言葉通り受け取っていたのでは、本来あるべき正則的な関係性を複雑化してしまうおそれがある。ここでは、ある種の男性の口をついて出るそうした「決まり文句」「常套句」を額面通りに受け取ってはならないことが指摘されている。男性が「わが息子」と言ったところで、真理は常に真理であり、そうした言葉をもって改ざんすることはできない。大多数のムスリムによる法に照らして厳密に述べるなら、そもそも「養子縁組」は認められていないのである。加えて、かつて「あなた自身の腰から生まれた息子の妻」だった女性との結婚は禁じられている。「ズィハール」については五八章一節の注を参照。

2 本章は、預言者の妻であった女性たちの尊厳と地位を確立する章でもある。彼女たちには、信仰者たちの母としての特別な使命と責任があった。彼女たちは、一般の女性たちと同じようではない。信仰する女性たちに対しては霊的な諸問題について教え、病人や貧者を見舞い、援助し、また預言者が使命を果たせるよう、万事をとりしきって支えたのである。

3 神の真理をのべ伝えることに従事した者は、どのようにしてそれを行ったのか、来世において問われることだろう。それはどのようにのべ伝えられたのか、どのように受け入れられたのか、誰が拒否し、また誰が援助したのか、等。信託を委ねられたすべての者がそうであるように、彼らもまた、信託に応じて完全な申し開きを求められるだろう。神はすべてを知っているため、その申し開きから新たな知見を得るということにはならない。しかし真理についての報せを受け取った後で、これを拒んだ者たちに対する証拠となり、真理を毀損した者の責任が、正当な形で問われることになる。

4 この年に起きたマディーナに対する大規模な攻撃の前に、ムスリムたちは首尾よく北部のシリア国境に到達し、さらに南部のイエメンまで範囲を拡大しようとしていた。預言者はこの拡大と、ムスリムの勝利を示す明らかな兆候を察知していた。彼らが塹壕の中に留まり、防衛一辺倒であるのを見た偽善者たちは、彼らは根拠のない希望にすがっているだけだとし、あざけりの言葉をぶつけた。しかしいざ蓋を開けてみれば、それが根拠のない希望などではなかったことが明らかになった。彼らが望んでいた以上の成果を実現したのは、この数年後のことである。





5 戦闘に参加するマディーナの男性は、全員が市街を後にした。そして全周囲に掘られた塹壕と、市街の間にある空き地で野営していた。これに不満を抱いた偽善者たちは、敗北主義的なうわさ話を広め、塹壕内によって一分の隙もなく防衛されているにもかかわらず、留守居にしている自分の家屋が心配なので戻らせてほしい、と口々に訴えた。

6 一般に、戦闘において臆病にふるまえば死を免れ得ない。また仲間たちを見捨てた逃亡者として、自分自身の味方の手によって罰せられることもある。同時に、敵に追われて殺害されることもある。戦場を逃れたとして、では一体どこへ逃れたというのだろうか。逃れるどころか、それは戦場をさらに広くするだけに終わる。自分の味方からは卑怯者の烙印を押され、復讐の対象とされてしまうのである。

7 「出し惜しみ」と訳出された語には、貪欲、強く握りしめる、吝嗇といった意味がある。ここでは、二重の意味が込められている。(1)彼らは戦闘に際して自分の個人的な努力や財産、所有物、有形無形の貢献など、自分が出費を負担することを渋り、出し惜しみする。加えて、(2)にもかかわらず戦闘が上首尾に終わると、実際に戦闘に参加した者たちよりも多くの戦利品を欲しがる。

8 信仰者たちの心理が示されている。神を畏れる者は、模範であり指導者であるムハンマドを手本として自らを導く。

9 一二節で偽善者たちが語っていることとは対照的である。援助と成就を授けるという神の約束は、自らの努力と信仰によっても左右される。卑怯な者や、疑うばかりで何もしない怠惰な者には何ひとつもたらされない。危険や困難があること、また時には邪悪と対峙しなくてはならないことなどは、前もって教えられている通りである。人間はそれらを、不屈の勇気をもって乗り越えていかなければならない。

10 真理のための戦いにおいては、今も昔も多くの者が自らのすべてを犠牲にしてきた。財産、知識、影響力、あるいは生命そのものを捧げてもなお、その目的のためには揺るぐことはなかった。そして殉教者の冠を戴くとなれば、祝福をもって受け入れられた。そうした者の一人に、アウス族の族長サアド・イブン・ムアーズがいた。イスラームの原則の忠実

な守り手であったこの勇敢な人物は、塹壕の戦いで受けた傷が原因でこの世を去った。彼の他にも、果敢に戦った上で生き延びた多くの英雄たちがいた。彼らもまた、自らの生命をなげうつ覚悟ができていた。どちらも忠実であることには変わりがない。彼らは変節することも、信念をゆるがせにすることもなかった。

11 罪人には、いつでも悔い改めの機会と、それに続く赦しの余地がある。ただし赦しとは、神の意志と計画に従って授けられるものである。悔い改める者の誠実さや、悔い改めたのちにどれほど善に近づくことができるかなど、神は最大限の寛大さをもって判断を下す。

12 クライザ族についての言及である。彼らは、マディーナを構成する市民として見なされ、市街を防衛するための厳粛な誓約にも加わっていた。ところがクライシュ族とその同盟軍による包囲と攻撃が始まると、彼らは敵方に興味をそそられ、裏切るようにして彼らの側を援助した。

13 預言者の妻たちは、それぞれに善をなす者たちであった。しかし同時に彼女たちは共同体の中でも高い地位にあり、特別な責任を負ってもいた。そのため与えられた権限を行使する際には、とりわけ慎重にふるまう必要があった。彼女たちの報奨も、そうした条件に応じて「大いなる」ものとなるだろう。たとえ現世ではごく当たり前のこととして享受される益を断念せざるを得なかったとしても、より高度な献身を捧げることは、より高度な霊的充足につながるのである。

14 「二倍の報酬を与え」るとは、まず信仰する行い正しい女性として、またそれに加え、信仰する者たちの母として人々に尽くし、神とその預言者に献身を捧げたからという理由による。来世における彼女の生が幸福であるよう、必要とされるすべての「糧」が用意されている。

15 これは本章全体の核ともなる節である。預言者の配偶者たちは一般の女性とは同じではなく、その結婚もまた、個人的あるいは社会的な事柄だけを考慮に入れて成立する通常の結婚とは異なっていた。前述したとおり、彼女たちには、イスラームの庇護の下に集まった多くの女性たちを導き教えるという、特別な地位と責任が課されていたのである。イスラームとは生き方であり、ムスリムたちは生き方を共にする家族である。イスラームにおいては、女性は男性と同様に多くの持ち場を有している。預言者の言行の伝承に見られる教えや導きの数々は、親密な優しさに満ちており、その多くは明らかに女性たちの視線を通して伝えられてきたものである。





16 神の法に従うこと、信仰する者の義務のすべてはその一点に尽きる。定められた日々の礼拝を（神に近づくために）行うこと、喜捨を通して日常生活における慈善を確立することの二点は、イスラムという宗教をとりわけ象徴するものとして頻繁に言及される。

17 神について語られる際に、繊細さ、心くばり、気づかいなどを意味する「ラティーフ」という語は、至大を意味する「カビール」という語と組み合わせて用いられることが多い。

18 神の意志への完全な服従を意味するイスラームには、この節で特に明記されている通り、あらゆる美徳が含まれている。これらの美徳は、男性同様に女性にも必要であるという点が強調されている。男女は共に同等の権利と責任を有している。それは霊的な領域においても、また来世における「報奨」においても言えることである。

19 ムハンマドの養子であったザイドと、預言者のいとこにあたるザイナブ・ビント・ジャフシュの結婚は幸福なものではなかった。預言者と同じ家系の出身であるザイナブが、元は奴隷であったザイドを見下していたのである。どちらもが預言者を愛する善良な人物ではあっても、お互いに対して相容れるところがないというのは、結婚生活にとっては致命的である。ザイドはザイナブとの離婚を望んだが、預言者に我慢するよう頼まれたため、彼はこれに従った。いとこどうしであることも含め、ザイナブは預言者と近しい間柄にあり、彼女がザイドと結婚した際には、預言者もかなりの額の贈与をしていた。そのような結婚が破綻したとなれば、人々は必ず様々なことを言うだろう。そうなれば、ザイナブの評判が台無しになるのは目に見えていた。預言者の心を占めていたのはこうした恐れであった。

20 例えば文書に封印が施されたなら、それは完了を意味し、それ以上の追加はできない。預言者ムハンマドは、使徒たち

の長い系譜に打たれた終止符である。神の教えはこの先も永遠に存在し続けるが、ムハンマドの後にはもはや預言者は到来しない。これ以降の世において必要とされるのは、預言者ではなく思索者であり、改革者である。

21 預言者は、以下の通りの働きをするために神から遣わされた。うち三つについては上記の節において、また残りの二つについては次の節で示されている。（1）無知や迷信によって不明瞭になっていたり、あるいは宗派間の論争という塵に覆い隠されてしまったりしている霊的な真理についての、全人類に対する証人として。（2）神の慈悲という喜ばしい報せの伝達者として。（3）注意散漫な者への警告者として。

22 この節で示されている預言者のもう二つの働きとは以下の通り。（4）神に授けられた権限の範囲において、全人類を悔い改めと罪の赦しへ招き、ひいてはイスラームへと導く権威者として。（5）加えて預言者は、全世界を照らす「光」もしくは「スィラージュ（燈）」として到来した。「スィラージュ」という言葉は、太陽を表すのにも用いられる。これは巧みな例えである。太陽が出現すればその光の前には、それ以外の小さな光はすべて存在がかすんでしまう。そしてイスラームという普遍の宗教のメッセージは、ありとあらゆるところにその光を届ける。

23 イスラームの光こそは最大の恩恵である。これを真に理解し、受け入れることができたなら、賛美せずにはおれないだろう。

24 頭ごなしに他者に命じたり、自分よりも優れた者に指図しようとしたりする人々がいる。拒めば、侮辱や危害を加えてくる。彼らに関心を払う必要はない。それが彼らのやり方、彼らの道なのである。神の支配の下に、すべての物事は正されるだろう。

25 結婚とは身体的な生のみならず、倫理的・霊的な生にとっても重要であり、その影響は結婚した当事者どうしのみならず、その子どもや、将来の世代にも及ぶ。特別でない状況など存在せず、また特別な状況の数に応じて、特別な問題が発生する。男女問わずあらゆる既婚者は、問題となる点のすべての側面と真剣に向き合い、考慮しなくてはならない。そし





て彼もしくは彼女の与えられた能力や性向を生かし、神の知恵と導きをもって、問題を解消するために最善を尽くさねばならない。

26 この節が啓示されたのは西暦にして七世紀である。この後、預言者が妻をめとることは二度となかった。例外は侍女のマーリーヤである。エジプト総督であるキリスト者ムカウキスの貢ぎ物として送られてきたコプトびとで、彼女は子を産み、イブラーヒームと名づけられたものの、幼いうちにこの世を去った。

27 預言者が彼の時代に、無作法なアラブの民に教えなければならなかったのと同じように、洗練された社会倫理の原則は、現代においても教えなければならないものである。この節で言及されている原則は、以下の通りに要約できる。（1）許可なく友人の家に入ってはならない。（2）食事に招かれたなら、あまり早めに訪問してはならない。あくまでも食事のために招かれたのであり、食事の準備を待ち構えるために招かれたのではない。（3）指定された通りの時間に訪問すること。（4）食事の後で、もてなしの主人に馴れ馴れしくしてはならない。（5）うわさ話に興じて、時間を無駄にしてはならない。（6）適切なふるまい方を意識すること。もてなしている主人は、礼儀正しいがゆえに「帰れ」とは言えずにいるだけかもしれない。

28 神とその天使たちもまた、預言者を最も偉大な人物として敬意を示し、祝福を送っている。神の慈悲と、最も高度な精神性へと人類を導くために、悲しみと苦しみを一身に引き受けた預言者に対し、一層の敬意を払い、祝福を祈ることが求められる。

29 「ラアナ」という語は、程度の差はあるものの、「イバード（「距離」、あるいは「放逐」の状態に置かれること）」とほぼ同義語である。したがって神の「ラアナ」とは、「あらゆる善なるものから罪人を拒絶する」あるいは「神の恩恵から排除する」といった意味である。

30 ここでは、「ジルバーブ」という語を「外衣」とした。具体的にはゆったりとして幅広な布を指すものと理解される。

覆うべき身体の部位についてはおおむね頭部を含む身体の全体を指すものと解釈されるが、顔や手を含むかどうかについては学派により異なる。

31
預言者の町においては、あらゆる種類の不適切な行為は退ける必要があった。そしてここでは、明白な言葉で警告がなされている。そしてその警告には効果があった。「偽善者」とは、イスラームの中にいるそぶりを見せつつ、その礼儀や道徳はイスラームに反する者のことである。「心の中にやまいのある者」とは、罪もない女性に嫌がらせをしていた者のことかもしれない。「うわさ話を広める者」とは、偽のうわさ話を流して、人々を騒がせた者かもしれない。ここで私たちは自問自答すべきであろう。「現代では、こうした者たちはもはや私たちの間にはいなくなった、と言えるだろうか」。

32
ムーサーの民はしばしば彼を怒らせ、彼に反抗し、また神の法に背いた。ムーサーの実の姉マルヤムと兄ハールーンは、ムーサーがエチオピアの女性と結婚したことをもってムーサーを非難したとも伝えられている。神はムーサーに対するこの非難を取り除き、彼が何ひとつ誤ってはいないことを明白にした。「われのしもべは非難されるにあたらず、信仰あつき者は皆われの館に入る」。罰として七日の間、マルヤムは重い病に苦しみ、その後にようやく赦された。ハールーンも同様であった。これは旧約聖書の物語である。預言者もまた、ザイナブ・ビント・ジャフシュとの結婚のために同じような非難を浴びせられた。

33
諸天、大地、そして山々といった神の創造物は、人間を除いてすべて信託あるいは責任を担うことを拒んだ。おそらくその方が、自らの意志を通して善悪の選択をするよりも、よほど幸福なことのように思えたのだろう。彼らは拒んだ。人間は拒まなかった。このことは、人間には意志があることを暗示している。しかしこのように述べると、まるで人間以外は善悪のどちらかを選択するつもりもないかのように聞こえてしまうかもしれない。そうではなく、彼らはむしろ自分の意志を全知全能の神の意志に完全に委ねることを選んだのである。それによって彼らは、自分の不完全な知識を





もって選択するよりも多くの幸福にあずかる可能性は高い、とはいえるだろう。

# 第三四章　サバア

マッカ啓示

本章は、第六節を除きヒジュラの八年前に啓示された章である。章名は神の全知全能を告げるところから始まる一五節に由来する。すべての存在が、自らにふさわしい報奨を授かるために、神と対面する時が到来することが説き明かされている。死後の復活とそれに続く生など存在しないと主張する人々への答えが述べられる。続いてダーウードとスライマーンに授けられた数々の恩恵について語られ、感謝するしもべと、忘恩の人々の違いが示される。最後に、クルアーンを信用しない人々に対する預言者ムハンマドの応答という形式で議論が提示される。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 アッラーに称賛あれ、諸天と大地にあるものはすべてこの御方に属する。来世においてもこの御方に称
賛あれ、もっとも賢明な御方、熟知する御方。
2 大地に入り込むものも、そこから出てくるものも、空から降るものも、そこに昇るものも、かの御方は
すべて知っている。もっとも慈悲深い御方、もっともよく赦す御方。
3 ［真理を］拒む者たちは言う。「かの時は、私たちには来ないだろう」。言いなさい。「いいや、私の主に





かけて、それは必ずあなたがたにやって来る。目には見えないものを知り、諸天にあるもの、大地にあ
るもの、塵ひと粒の重さであってさえ、かの御方から逃れられるものはない。その大小にかかわらず、
明白な記録の中に［書き記されてい］ないものはない。[1]
4 それはかの御方が、信じて正しい行いをする者に報いるため。彼らには赦しと、貴い糧があるだろう」。
5 われらのしるしを頓挫させようと尽力する者たち。これらの者には、汚らわしく痛烈な懲罰があるだろう。
6 知識を与えられた者たちは、あなたの主があなたに下したものは真理であり、威力ある御方、称賛にふ
さわしい御方の道へ導くものと見なす。[2]
7 ［真理を］拒む者たちは言う。「あなたがたが微塵となり飛び散ってから、［再び］新しく創造される、な
どと報せる男に引き合わせてやろうか。
8 彼はアッラーについて嘘をねつ造しているのか。それとも、とり憑かれているのか」。いいや、来世につ
いて信じない者たちは懲罰の中にあり、遠く迷い去っている。[3]
9 彼らは見ないのか、彼らの前にも後ろにも、空と大地があることを。もしわれらがそうと望めば、彼ら
を大地に沈めることもできる。あるいは彼らの上に、空の破片を落とすこともできる。本当にその中には、
悔い改めて立ち返るすべてのしもべたちへの御しるしがある。
10 われらはかつてダーウードに、われらからの恵みを与えた。「山々よ、ダーウードと共に讃美をこだまさ
せよ、鳥たちもまた」。われらは彼のために鉄を柔らかにし、[4]
11 「鎖かたびらを作りなさい。その鎖の輪を［正確に］計りなさい。そして正しい行いをしなさい。本当に、
われはあなたの行いをすべて見ている」［と告げた］。
12 また、スライマーンには風を。それは午前で一か月［の旅程を進み］、午後で一か月［の旅程を戻る］。

われらは彼のために銅の泉を湧き出させ、また主の思し召しにより、彼の前でジンたちを働かせ、彼らのうちわれらの命令から外れる者には、烈火の懲罰を味わわせた。[5]

13 彼らは、彼が望むものを造った。聖殿、彫像、貯め池のような鉢、［大地に］据え付けられた大釜。「ダーウードの一族よ、感謝して働きなさい」。われのしもべたちのうち、感謝する者はわずかであるが。

14 われらが彼の死を決めたとき、［ジンたちに］彼の死を教えるものは何もなかった。ただ一匹の地虫が、彼の杖を食べた。それで彼が倒れたとき、［彼がすでに死んでいたことが］ジンたちに明らかになった。もし彼らが、目には見えないものについて知ってさえいたなら、屈辱の懲罰の中で過ごさずに済んだだろうに。

15 かつてサバア［の人々］にも、その住まうところにひとつの御しるしがあった。それは右と左にあった二つの園。「あなたがたの主の糧を食べ、感謝しなさい。すこやかな土地に、もっともよく赦す主に」。

16 しかし彼らは背き去った。それでわれらは、彼らに堤の洪水を送り、彼らの二つの園を、聖柳や、棘のある木がまばらにある、苦い実のなる園に変えた。[6]

17 このようにわれらは、彼らの忘恩に報いた。恩を忘れた者以外に、われらが［このように］報いることなどあるだろうか。

18 また、われらは彼ら［サバアの人々］と、われらが祝福した町々とのあいだに目立った町々を設けて、その旅程を［安易になるよう］定めた。「夜に、また日のあいだに安心して旅をしなさい」。

19 しかし彼らは言った。「主よ、私たちの旅程［と旅程］のあいだを、もっと遠くにしてください」。こうして彼らは、自分たち自身に不正をなした。われらは彼らを過去の話にし、まったき微塵にして飛び散らせた。本当にその中には、よく耐えて、感謝する者すべてへの御しるしがある。[7]





20 イブリースにとっては、彼らについて推測していたことが真実になった。一部の信仰者を除き、彼らは彼［イブリース］に従った。[8]

21 彼［イブリース］には、彼らに対して何の権威もなかった。われらはただ、誰が来世を信じている者か、誰が疑わしさをおぼえている者かを知ろうとしたに過ぎない。［ムハンマドよ、］あなたの主はありとあらゆるものごとの守護者。

22 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「あなたがたが、アッラーをさし置いて主張しているものに呼びかけなさい。それらは諸天と大地のあいだで、塵ひと粒の重ささえ支配しておらず、またそのいずれにおいても、何ひとつ［アッラーと］分かち合っていない。また、かの御方が彼らの手を借りたこともない」。

23 かの御方が許した者を除き、その御許においてとりなしは何の役にも立たない。彼らの心から恐怖が消えるとき、彼らは［互いに］言う。「あなたがたの主は何を言っていたのか」。彼らは「真理です」と言うだろう。至高の御方、至大の御方。[9]

24 言いなさい。「諸天と大地から、あなたがたに糧をもたらすのは誰か」。言いなさい。「アッラーである。私たちか、あるいはあなたがたのいずれかが導きの上にあるか、あるいは明らかな迷いの中にいるかである」。

25 言いなさい。「私たちの犯した罪について、あなたがたが問いただされることはない。また私たちが、あなたがたの行いについて問いただされることもない」。

26 言いなさい。「主は私たちを集め、そののち、真理をもって私たちの間に判断を下すだろう。裁きの御方、すべてを知る御方」。

27 言いなさい。「あなたがたが『同輩』としてかの御方に結びつけているものを私に見せなさい。いいや、アッ

ラーこそもっとも威力ある御方、もっとも賢明な御方」。

28 われらがあなたを遣わしたのは、ただ［分け隔てなく］人々のすべてに対し良い報せを伝える者として、また警告者としてに他ならない。しかし、人々の多くはそれを知らない。

29 彼らは言う。「もしあなたがたが真実を語っているのなら、その約束はいつ果たされるのか」。

30 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「あなたがたには、一刻たりとも遅らせることはできず、また早めることもできないその日が約束されている」。[10]

31 ［真理を］拒む者たちは言う。「私たちはこのクルアーンも、またこれ以前のものも、決して信じるようにはならないだろう」。もしあなたに、不正をなす者たちが主の御許に立たされ、彼らのあいだで互いに言葉をぶつけ合うのを見ることができたなら。虐げられていた者が、高慢にふるまっていた者に言う。「あなたがたさえいなければ、私たちはきっと信仰者になっていただろうに」。[11]

32 高慢にふるまっていた者が、虐げられていた者に言う。「導きがもたらされた後になって、私たちがあなたがたを妨げたというのか。いいや、あなたがたこそ罪を犯す者だったのだ」。[12]

33 虐げられていた者が、高慢にふるまっていた者に言う。「いいや、あなたがたは夜となく昼となく謀りごとをしていた。私たちにアッラーを拒むよう、また、かの御方と同位のものを設けるよう命じた」。［あまりにも過酷な］懲罰を目の当たりにして、彼らは後悔の念を打ち明けることすらできない。そしてわれらは、［真理を］拒んでいた者たちの首に枷をつけさせる。彼らが行ってきたことの他に、何が報いられるだろうか。

34 われらが警告者を遣わすたびに、いずれの町の富める者も、必ず「本当に私たちは、あなたがたが遣わされてもってきたもの［が真理であること］を拒む」と言った。





35 また彼らは、「私たちには、多くの財や子どもがある。私たちが、罰せられることはない」とも言った。

36 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「本当に私の主は、御心のままにある者の糧を拡げも、また狭めもする。しかし、人間の多くはそれを知らない」。[13]

37 あなたがたをわれらの許に近づけるのは、あなたがたの財でも、子どもでもない。信じて正しい行いをする者には、その行いのために報いも倍にされよう。彼らは高きにある居室に安心して住まうだろう。[14]

38 しかしわれらのしるしを頓挫させようと尽力する者たちは、懲罰に直面させられるだろう。

39 言いなさい。「本当に私の主は、御心のままに、しもべたちのうちある者の糧を拡げも、また狭めもする。また、あなたがたが［善のために］費やしたものは、何であれかの御方が補うだろう。糧をもたらす者として最良の御方」。[15]

40 その日、かの御方は彼らをことごとく集め、それから天使たちに向かって告げる。「彼らは、あなたがたに仕えていたのか」。[16]

41 彼ら［天使たち］は言う。「あなたに讃美あれ。私たちの庇護者はあなたです。いいや、彼らが仕えていたのはジンたちで、多くはその信仰者でした」。

42 その日、あなたがたには互いに相手を益することも、害することもできない。われらは不正をなした者たちに告げるだろう。「あなたがたが嘘であるとしていた、業火の懲罰を味わえ」。

43 われらの明白なしるしが読み聞かされるとき、彼らは言う。「これはあなたがたを、あなたがたの先祖が仕えてきたものからさえぎろうとする男に過ぎない」。また、彼らはこうも言う。「これはねつ造された作り話に過ぎない」。また真理を拒む者たちは、それ［真理］が彼らに到来すると言う。「これは、明らかな魔術に過ぎない」。[17]

44 しかしわれらは彼らに、何ごとかを学べる啓典を与えてもおらず、またあなた以前にどのような警告者も遣わしていない。

45 彼ら以前の者たちも嘘であるとしていた。われらが彼らに与えたものは、彼ら［以前の者たち］の十分の一にもならない。それでいて彼ら［以前の者たち］は、われらの使徒たちを嘘であるとしていた。それでわれらの拒絶は、どのようであったか。

46 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「私はあなたがたに、あるひとつのことを教示しておく。二人でも、またひとりででもアッラーの御前に立ち、深く考えなさい。あなたがたの仲間［であるムハンマド］はとり憑かれてなどいない。彼は厳重な懲罰に先立つ、あなたがたのためのひとりの警告者に過ぎない」。18

47 言いなさい。「私がこれについて何か報酬を求めるなら、それはあなたがたのためのもの。私の報酬は、ただアッラーのみにある。ありとあらゆるものごとの証言者たる御方」。

48 言いなさい。「私の主は真理を投げかける。目には見えないものを知る御方」。

49 言いなさい。「真理は到来した。虚偽には、始めることも繰り返すこともできない」。

50 言いなさい。「もし私が迷うなら、ただ自らに反して迷うだけ。もし私が導かれるなら、それは主の啓示によるもの。本当に、かの御方はすべてを聞き、近くにおわす」。

51 もしあなたに、彼らが恐怖し、逃れることもできず、近いところで捕えられるのを見ることができたなら。19

52 彼らは「私たちは信じます」と言う。しかし遠いところにいながら、どうして［信仰に］至ることができようか。

53 彼らはすでに、以前から［真理を］拒んでいた。目には見えないものについて、遠いところからただ想像していただけ。





54 以前の同類の者もそうであったように、彼らと、彼らの焦がれるものとのあいだには障壁が設けられるだろう。本当に彼らは、不穏な疑念の中にいる。

1 二節ならびに三節は、神の創造した偉大な宇宙において人間が置かれた立場に気づくよう促している。信仰を持たない限り、人間は宇宙全体に響く祈りと賛美の普遍的な調和に自らを一致させることができない。信仰を持たない者のあり方は、限られた自由意志の範囲内に限定される。しかしこの自由意志とは、そもそも神から信託として委ねられたものであり、その意味で彼らは信託を裏切っている。しかし彼らも、五節にある通り、いずれは消え去らねばならない時を迎える。身体において、倫理において、あるいは精神や霊において、あらゆる原因には、その大小に関わらずそれに応じた結果が伴う。世界においてこれ以上に確実なことはない。

2 無知な者の疑念や無意味な憶測と正反対にあるのが、光を得た者の知識の確実性である。それは神が自ら明かしたものであり、また神の啓示は真理である。それは真の教えの道へと導く。真の教えの道とは神の道である。その道は、あらゆる賛美と称賛にふさわしい神の無限の愛と慈悲の中にある。

3 「遠く迷い去っている」。ここで用いられている「ダラール」という語には、「誤り」「迷い去る」「常軌（じょうき）を逸（いっ）する」といった意味がある。預言者ムハンマドが狂人ではないことは確かであり、また嘘をねつ造したのでもなかった。来世の生はまったくの真理である。この真理から遠く離れて、別の考えに耽（ふけ）る者は、現世と来世の両方で苦しむことになる。

4 鉄や鋼は硬い。しかし職人の手にかかれば、それらは柔らかくしなやかになり、行い正しい人を守る防具を作り出せる

ようになる。こうして作られたのが鎖かたびらや甲冑といった防護のための武具である。その製造の技については、伝統的にダーウードに帰されている。

5 旧約聖書には、スライマーンの神殿が何をどのようにして建てられたか、また水盤や燭台、ランプ、香炉など、神殿に何が備えられたかが記されている（『歴代誌』下三章から四章には、様々な高価な材料についての描写がある）。「……ソロモンはこれらのすべての器物を非常に多く造ったので、その青銅の重量は、量ることができなかった（『歴代誌』下四章一八節）」。

6 ここでは「堤」とした「アリム」とは、固有名詞であった可能性もあるし、または岩石を積んで築造したダムや堤防といった、大規模な土木建設全般を指すとも考えられる。例えばマリブ・ダムなどは、今もその痕跡が残されている。一八四三年、マリブ・ダムの町とその遺跡を訪れたフランスの旅行家T・J・アルノーは、その巨大な建造物とそこにあった碑文について書き記している（『アジアジャーナル Journal Asiatique』一八七四年一月号参照）。アルノーの測定によれば、ダムは全長およそ二マイル（約三・二km）、高さは一二〇フィート（約三六・五七六ｍ）に及んだ。その崩壊は西暦一二〇年頃であるといわれるが、一部の典拠によれば、それよりもはるかに後代のことともされている。

7 どん欲なサバアの民は、より多くの利益を得るために道を塞ぎ、自分たちが独占している宿場に旅人たちを足止めし、彼らから搾りとろうとすることがままあった。しかしこうした利己主義は、しばしば真の利益には反することである。イエメンの衰退と共に、イエメンとシリアをつなぐアラビアの道も衰退していったのは歴史的な事実である。

8 悪魔の頭目とされるイブリースは、その傲慢さから、至高の主に猶予を願い出た際に次のように言った。「私は、ごくわずかを除く彼（アーダム）の子孫をほしいままにしてみせましょう（一七章六二節）」。サバアの民に関して言えば、それが真実であったことが証明されてしまった。悪魔には人間に強制する力はない。彼らは自分の意志で自分を貶め、自分の力を悪魔に預けてしまったのである。





9 「彼らの心」の「彼ら」とは、ここでは神の最もそば近くに仕える天使たちを指している。裁きの日には、筆舌に尽くしがたい圧倒的な威力の顕現が起こる。それを目の当たりにすれば、天使たちでさえ何が起こっているのかほとんど理解できずに、しばらくはただ呆然として沈黙するという。

10 実際にその日が到来した時、それは猶予の期間が終わりを告げる日である。その日になってからでは何もかもが遅すぎるだろう。行動を起こすべき時は、常に今この瞬間である。

11 偶像を崇拝していたイスラーム以前の民にとり、クルアーンであろうとそれ以前の啓示であろうと、あらゆる啓典は排斥の対象であった。啓典の人々は、啓典を持たない彼らを軽蔑していたが、彼らのそうした傲慢で尊大な態度が、その後にクルアーンの形で下された最も新しく最も普遍の啓典が忌避される原因のひとつにもなっていた。自分の知識を誇り、他者に対して優越感を抱きつつ、自分が軽蔑しているその他者から搾取し、彼らを誤った方向へ導く。こういった形で相対的な地位を得る人間が、いつの時代にもこの地上に存在している。

12 裁きの日には、誤った方向へ導いた者、誤った方向へ導かれた者の間に口論が起こる。彼らは互いに相手を責めるが、どちらも自らの責任を果たそうとしないという点が罪深いことは同じである。

13 「リズク（恩恵、糧）」とは、この世のあらゆる種類の善なるもののことである。物質的なものに加え、権力や能力、機会、霊的な祝福なども相当する。これらのすべてがかならずしも利益につながるわけではないが、かといってそれを理由に、神の恩寵が存在しないかのごとく解釈する必要はない。

14 あらゆる現世のものごとは、いずれは消え去る影に過ぎない。それらに備わる本質的かつ永遠の価値はごくわずかである。しかし信仰を持って正しい行いに励む者は、真の自己成長の道にある。彼らが得るだろう報奨は、彼ら自身の美徳がもたらすものをはるかに上回る。彼らは神の無限の恩寵の中に加えられることだろう。

15 人生における良いものの配分が、一見して不公平に思われるときでさえ、そこには神の賢明かつ慈悲深い目的が存在す

る。偶然に生じたことなど、何ひとつ存在しないのである。神はいつ・いかなる時も、一人ひとりが本当に必要としているものを授ける。内なる成長をもたらすものを与えることにおいて、神は最善である。

16 ここで説き明かされているのは、真の神を崇拝するのではなく、天使たちや神という「権威」を崇拝したり、あるいは恩恵をもたらしてくれそうな精霊などを崇拝したりすることについてである。しかしこうした崇拝とは、名ばかりの擬似的なものに過ぎない。彼らが崇拝しているのは、実際には善なるものではなく、彼らを惑わすものであり、その多くは彼ら自身の欲望や願望であったりする。

17 光のみわざに偽装した悪に対する崇拝の他に、祖先の伝統に依存するという、また別の形の偽の崇拝がある。「なぜ、私たちの父祖がしてきたことをしてはならないのか」。新たに到来した預言者のもたらす教えが、祖先のやり方とは合致しないというただそれだけの理由で、彼らは真理を拒絶する。

18 四六節から五〇節は、預言者についての示唆を与え、ものごとを正しく思考する人に、彼の誠実さと真実を確信させるものである。ここで論じられているのは、預言者は何かに憑依されていたのでもなければ、正気を失っていたのでもないという点である。彼が通常の人と違っていたとすれば、ただ愛する人々に、恐るべき霊的な危機について警告しなくてはならない役割を担ったということ、また誰しもが、彼の伝えるメッセージを理解するわけではなかったということのみである。

19 議論に明け暮れる間にも、裁きの日は刻一刻と近づいている。その日になれば、確立された真理の反対側に陣を張っていた者たちから、彼らの立場を考慮してほしいとの声があがる。彼らは恐怖に襲われ、立ちすくむ。何ものも、真理には抗（あらが）えない。

# 第三五章　ファーティル　創始者

マッカ啓示

本章はマッカ時代初期、ヒジュラの七年前に啓示された。章題は第一節に由来する。しかし幾人かの解釈者たちは、やはり第一節にあらわれる語をもって本章を「天使たち」と呼んでいる。その全体的なテーマは、マッカの人々に唯一の神を崇拝し、善行をなすよう勧めることにある。また悪魔の足跡をたどる人々と、神の戒め(いまし)に従う人々との間を比較し、それぞれに用意されている報奨について説き明かされている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 アッラーに称賛あれ。諸天と大地の創始者、天使たちを二対、三対、四対の翼ある使者とした。かの御方は、創造においてその御心のままに増やす。本当にアッラーは、あらゆるものごとにおいて全能である。[1]

2 何であれ、アッラーが人々のために開いた慈悲は、何ものにも閉ざすことはできない。何であれ、かの御方が差し控えた後には、何ものにも放つことはできない。もっとも威力ある御方、もっとも賢明な御方。

3 人々よ。あなたがたに対するアッラーの恩寵を憶えておきなさい。アッラーの他に、あなたがたのために諸天と大地から糧をもたらす創造者があるだろうか。この御方の他にいかなる神もない。それなのに、





どうしてあなたがたは惑わされるのか。

4 ［ムハンマドよ、］たとえ彼らがあなたのことを嘘よばわりしようと、あなた以前の使徒たちもすでに嘘よばわりされてきた。万事はアッラーに帰される。

5 人々よ。本当にアッラーの約束は真理である。それゆえ現世の生に欺(あざむ)かれてはならない。アッラーについて欺(あざむ)く者［悪魔］に、欺かれてはならない。

6 本当に悪魔はあなたがたの敵。それゆえ彼を敵として扱いなさい。彼はただ、彼の徒党を烈火の仲間にしようと呼び招いているに過ぎない。

7 ［真理を］拒む者たちには厳重な懲罰があるだろう。しかし信じて正しい行いをする者たちには、赦しと大いなる報酬があるだろう。

8 自分の悪い行いをすばらしいもののように見せ、善いこととみなす者はどうであろうか。アッラーは御心のままに誰であれ迷わせ、また御心のままに誰であれ導く。それゆえ、彼らのために悔やんで、自分自身をすり減らしてはならない。本当にアッラーは、彼らのなすことについてよく知っている。[2]

9 アッラーは風を遣わし、それにより雲を流す。われらはそれを枯れた土地にかり立てて、死んだ後の大地に生をもたらす。復活とはこのようなもの。[3]

10 誰であれ栄誉を欲するなら、すべての栄誉はアッラーにある［と知りなさい］。良い言葉はかの御方へと昇る。正しい行いは高く掲げられる。しかし悪を謀(はか)る者たち、彼らには厳重な懲罰があり、その謀(はか)りごとは消え失せるだろう。

11 アッラーはあなたがたを塵から、そののちに精のひとしずくから創造し、それからあなたがたを［雌雄(しゆう)の］一対にした。どのような雌性(しせい)も、かの御方が知ることなしに宿すことも生むこともない。またどのよう

な長命の者も、啓典によることなくしてその寿命を長らえることも減らすこともない。本当にそれは、アッラーにはたやすいこと。[4]

12 二つの海は同じではない。こちらは新鮮で甘く、飲めば快い。そしてこちらは塩辛く、苦い。そしてあなたがたは、そのいずれからも、そこにあるやわらかな［魚の］肉を食べたり、あなたがたが身につける諸々（もろもろ）の飾りものを採り集めたりする。またあなたはその中に、波を切ってゆく船を見るだろう。それはあなたがたに、かの御方の御恵みを探し求めさせるため。あなたがたは、感謝するようになるだろう。[5]

13 かの御方は夜を昼に入らせ、また昼を夜に入らせる。太陽と月を使役し、いずれもよどみなく［軌道を］走る、定められた［究極の］時まで。それがアッラー、あなたがたの主。王権はこの御方に属する。あなたがたがこの御方をさし置いて祈るものは、なつめやしの種子の薄皮［程度のもの］さえ、どうすることもできない。[6]

14 たとえあなたがたがそれらに祈ろうと、それらにはあなたがたの祈りは聞こえない。たとえそれらが聞いたとしても、それらはあなたがたには応じない。それらは復活の日、あなたがたがそれらを［主と］同列に連ねることを拒むだろう。熟知している御方のように、あなたに告げ報（しら）せるものはない。[7]

15 人々よ。あなたがたは、アッラーに求めるばかりの持たざる者。しかしアッラーは満ち足りた御方、称賛にふさわしい御方。

16 かの御方は御心のままにあなたがたを廃し、［代わりとなる］新たな創造を興（おこ）すこともできる。

17 アッラーにとり、それは何の造作もないこと。

18 荷を負う者は、［自分以外の］他者の荷を負わない。たとえ荷を負わされた者が、その荷のために［他者を］呼ばわろうと、近しい者ですらその幾分かさえ負うことはできない。あなたにできるのは、ただ目に見





えない主を畏怖し、礼拝のつとめを守る者に警告することだけ。誰であれ自分を清らかにする者は、ただ自分自身のために清らかにする［のであり、他者のためではない］。行き着く先はアッラーにある。

19 目の見えない者と見える者は、同じではない。

20 また暗闇と光も、

21 また日陰［の涼しさ］と［日差しの］暑熱も、

22 また生けるものと死せるものも、同じではない。本当にアッラーは、御心にかなう者には耳を傾けさせる。しかしあなたは、墓の中の者に聞かせることはできない。[8]

23 あなたは、ひとりの警告者に過ぎない。

24 本当にわれらは、真理をもってあなたを、良い報（しら）せを伝える者、警告する者として遣わした。どのような共同体にも、必ず彼らのあいだに暮らしていた警告者が［遣わされて］いた。[9]

25 たとえ彼らがあなたのことを嘘よばわりしようと、すでに彼ら以前にも嘘よばわりする者たちがいた。使徒たちは、［アッラーの主権を示す］明白な証や詩篇、光を照らす啓典をもって彼らのところへ到来した。

26 そののちわれらは、［真理を］拒んでいた者たちを捕えた。それでわれらの拒絶は、どのようであったか。

27 あなたは見ないのか、アッラーが空から雨を降らせるのを。またそれにより、われらは様々な色合いをした果実をみのらせる。また山々には白や赤、様々な色合いや漆黒の縞（しま）がある。

28 人々や生きもの、家畜もこのとおりで、様々な色合いをしている。アッラーのしもべたちのうち、知識ある者だけがこの御方を畏怖する。本当にアッラーは威力あり、もっともよく赦す。[10]

29 アッラーの啓典を復唱し、礼拝のつとめを守り、われらが糧としたものの中から、ひそかにもあらわにも［他者のために］費やす者は、消え失せることのない商売を希求する者。

30 かの御方は彼らに十分に報い、さらにその御恵みから増やすだろう。かの御方はもっともよく赦し、もっとも感謝に報いる。
31 われらがあなたに啓示した啓典、それは以前のものを確認する真理。本当にアッラーはしもべたちについて熟知しており、すべてを見ている。
32 そののちわれらは、しもべたちの中から選んだ者に啓典を受け継がせた。彼らのうちある者は自分自身に不正をなし、またある者は穏やかであり、またある者はアッラーの思し召しにより、すすんで善事につとめる。大いなる御恵みとはこのようなもの。
33 永遠の園、それが彼らの入るところ。彼らは黄金の腕輪や真珠を身に飾る。彼らが身にまとうものは絹である。
34 彼らは言うだろう。「アッラーに称賛あれ、私たちから嘆きをぬぐい去る御方に。本当に私たちの主はもっともよく赦し、もっとも感謝に報いる。[11]
35 その御恵みにより私たちを、悠久の館に住まわせた御方。そこでは疲労に触れられることも、倦み飽きることもありません」。
36 しかし、〔真理を〕拒む者たちには地獄の業火がある。彼らには死さえも定められず、懲罰が軽くされることもない。このようにわれらは、すべての恩を忘れる者にそれぞれ報いる。
37 彼らは、その中から〔助けを求めて〕叫ぶだろう。「主よ、私たちを出してください。かつて私たちが行ってきたこと以外の、正しい行いをするようにしますから」。われらが、あなたがたを、戒めを受け入れる者が戒めを受け入れるに足る寿命を生かさなかったというのか。またあなたがたには、警告する者も到来していた。それゆえ〔あなたがたの行いの結果を〕味わえ。不正をなす者に、助け手はない。





38 アッラーは諸天と大地の、目には見えないものを知っている。本当にこの御方は、胸の中に何があるのかを知っている。
39 あなたがたを地上の継承者とした御方。誰であれ〔真理を〕拒む者は、自分が拒んだこと〔の結果〕を自分で負うだけ。〔真理を〕拒む者の拒絶は、その主の御許においては憎しみの他に何も増やさない。〔真理を〕拒む者の拒絶は、損失の他に何も増やさない。[12]
40 言いなさい。「あなたがたは、あなたがたがアッラーをさし置いて祈っているあなたがたの『同輩』について考えてもみたのか。それらが地上に創造したものを、私に見せてみなさい。それともそれらは、諸天において何か役割があるのか。それともわれらが、それらにとって明白な証となる啓典を与えでもしたのか」。いいや、不正をなす者は、互いにただ欺瞞だけを約束し合うに過ぎない。
41 アッラーは諸天と大地を、それらが別々に落ちることのないよう支える。もし別々に落ちてしまったなら、その後は〔アッラー以外の〕誰にも支えることはできない。本当に、もっとも寛容にして、もっともよく赦す御方。
42 彼らは、もし彼らのところに警告する者が到来していたなら、きっと他のどの共同体よりも自分たちの方が導かれていただろう、と、アッラーにかけてつとめて誓う。しかし彼らのところに警告する者が到来したとき、彼らはますます反感をつのらせるばかりに過ぎず、[13]
43 地上で高慢にふるまい、悪い謀りごとをしていた。しかし悪い謀りごとは、ただ本人を包み込むだけ。それでは彼らは、ただ大昔の者たちの〔身の上に起きた〕摂理を待つだけなのか。しかしあなたは、アッラーの摂理に何の変わりも見出さず、またアッラーの摂理に代わる何ものも見出さないだろう。
44 彼らは地上を旅し、彼ら以前の者の結末が、どのようであったかを見たことはないのか。彼ら〔以前の

45 者たち」は、彼らよりも強大であった。しかし諸天と大地にある何ものにも、アッラーを凋落（ちょうらく）させることはできない。この御方はすべてを知っており、あらゆるものごとにおいて全能である。

もしアッラーが人々を、その得てきたことのために捕えるなら、この地面に残る生きものは何ひとつないだろう。しかしこの御方は、定められた「究極の」時までは彼らを猶予する。そして彼らの期限が到来するとき、本当にアッラーは、常にそのしもべたちを見ている御方。

1 自然界について人間の知識が深まるにつれ、実証科学の範囲を超えた生命と霊性の問題についてはさておき、物質そのものの進化がどれほど複雑な現象であるかが分かってきている。

2 預言者の時代においても、また来るべき未来においても、真理を拒み虚偽を受け入れる人間の邪悪さは常に存在する。しかしだからといって、神の預言者がひるむことはなかった。何があろうと、最終的に万物は神へと帰りゆくのである。預言者は正しいふるまいを崩さず、またその正しさは審判の日にいたるまで損なわれることがない。

3 近くに水源もない乾燥した土壌では、何の希望も見出すことができず、何もかもが死んだままのように思えるかもしれない。同時に一方では遠く離れた海原に太陽の熱が降り注ぎ、蒸発した水分が空へとのぼり、雲が形づくられ、その過程で風が生まれる。風は、まるで神の意を理解しているかのように、雲を目的地まで運んでゆく。やがて雨が降り、乾燥した大地に注がれると、目を見開くばかりの光景が広がる。どこもかしこも、生命と躍動、そして美しさであふれるようになる。これと同じように、霊的な領域において神の啓示は神の慈悲であり、慈雨である。「復活」とは、来世と





いう新たな世界の幕開けであるともいえる。このように、この節には二重の意味が込められている。

4 ここで論じられているのは、人間の身体なるものの出自の低さについてである。人間の身体は塵にひとしい。その生命の原初である精子にいたっては、人間なら誰もが恥じて隠すべきとみなしている器官から射出されるのである。「自分ひとりでは何ひとつ満足に行うことができない」ということを個々人に対して自覚させるところに、性行為の神秘が隠されている。

5 二五章五三節とその注釈も参照。大いなる潮の大洋も、枝分かれした海も湾も、すべて「ひとつ」の水である。川や湖や池、地下から湧きだす泉といった甘い水の流れも、水としては「ひとつ」である。点在して他の何かと結びつき、一定の循環を繰り返している。水を閉じ込めた蒸気が、大気に湿り気を与えつつ空にのぼり、雲の中を運ばれ、再び凝縮して水や雪、みぞれとなって大地に降りそそぎ、川となる。川の流れは、やがて海へと戻ってゆく。その海からは真珠やサンゴが得られる。川床からは、繊細な色合いに染まった瑪瑙や砂金、水晶といったさまざまな美しい宝石が生まれる。

6 光の位相には、多様な使い道があるだろう。光の有無は、休息と活動の時間を分かつ目印でもある。陽光の有無は、人間の身体的、道徳的、霊的な生活に大きな影響を与えている。

7 クルアーンの多くの箇所に、様々な偽の崇拝の対象についての言及がある。それは聖者であったり、天使をはじめとする人間以外の何かであったり、あるいは自然現象の場合もあるが、それらすべてが審判の日、かつてそれらを崇拝していた人々について証言し、見捨てる。時の終わりになってようやく究極の現実を知ることになるという、人間の認知についての象徴的な暗示である。

8 生者と死者の、この上ない対比である。成長と成就が約束された未来に向かう人と、生彩なく滅びの道をたどる人がいる。神と共にある限り、すべては可能になる。神は死者に生命を授ける御方である。

9 啓示を下すのは神である。啓示には、熟考に欠いた者への警告があると同時に、耳を傾け、悔い改める者への吉報（キ

リスト者のいう「福音」)がある。

10 外界の自然の中では、様々な色彩を通して最も優れた色合いやグラデーションを理解し、その価値を知ることができる。しかし、内在する霊的な領域にある色彩の異なりやグラデーションは、それよりもさらに複雑玄妙であり精緻（せいち）でもある。誰がこれを本当の意味で理解できるだろうか。神に仕える、知性あるしもべのみである。霊的な領域を通り抜けてもたらされる、内的な知識を有する者だけがそれを知るのである。彼らこそ、内なる世界に真の感謝を捧げる者たちである。彼らは、神への畏れが知恵の始まりに他ならないことを知っている。

11 本章三〇節では、「もっともよく赦し、もっとも感謝に報いる」と告げられている。ここでは、アドンの園（永遠の国）に迎え入れられたことで彼らは成就し、約束されていたものを賜った状態である。望みはすべて叶えられ、悲しみに終止符が打たれたのである。

12 神は人間を、地上の「ハリーファ」すなわち継承者、あるいは「地上における（神の）代理者」として創造した。ここには二つの意味がある。（1）地上を統治する者としてのハリーファ。（2）罪を犯したために、代理者としての資格をはく奪された先人たちの継承者としてのハリーファ。（2）で示される前例から教訓を得、また（1）の意味における名誉と尊厳にふさわしい行いをすることにより、人間はまっすぐな道にとどまり、真に感謝する者となれる。六章一六五節も参照。

13 この言及について、真っ先に思い浮かばれるのがクライシュの一族である。啓典の人々に対する彼らの態度は、高慢な優越感の表れか、あるいは不誠実な言い訳のいずれかであった。彼らは、ユダヤ教徒もキリスト者も、彼らが授かった啓示から逸脱しているといって非難した。そして彼ら自身については、自分たちは神からじかに啓示を授かってはいないが、それは自分たちが最も規律正しいからであり、もともと神の法に従う素地が整っているからだと述べていた。これは預言者が、神からの使命を課される以前のことである。実際に彼が啓示を授かり、それをのべ伝えるようになると、





彼らは背を向けて去っていった。

# 第三六章　ヤー・スィーン

マッカ啓示

ヤー・スィーン章は、一般に「ヤー・インサーン（おお、人間よ）」という意味と解されている、最初の節にあるふたつのアラビア文字にちなんでこの名で呼ばれている。特別な敬意をもって重要視される章であり、逆境にあるときや病気のとき、あるいは断食中や、また臨終の際などに朗読される。本章は、マッカ時代中期の啓示である。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 ヤー、スィーン。
2 賢明なクルアーンにかけて。
3 本当に、あなたは使徒たちのひとりであり、
4 まっすぐな道の上にある。
5 「これは」威力ある御方、慈悲深い御方からの啓示であり、
6 その祖先が「しばらくの間」警告されておらず、そのため無頓着なままの民に、あなたが警告するためのもの。





7 彼らの多くに対し、すでに御言葉は真理となっている。それでも彼らは、信じない。
8 われらは彼らの首に、あごにまでかかる枷をかけた。そのため、彼らの頭は上がったまま。[1]
9 われらは彼らの前にも障壁を、また彼らの後ろにも障壁を設け、それから彼らに覆いをかけた。そのため彼らは、見ることもできない。
10 あなたが彼らに警告しようと、あるいは彼らに警告しなかろうと、彼らにとっては同じこと。彼らは、信じないだろう。
11 あなたが警告できるのは、戒めに従い、目には見えない慈愛あまねく御方を畏怖する者だけ。それゆえそうした者には、赦しと、貴い報酬の良い報せを伝えなさい。
12 本当に、死せるものを生き返らせるのはわれらである。われらは、彼が「先に」送り出したものと、「後に残した」足跡を書き記す。われらはあらゆるものごとを、明白な記録の中に数えあげている。[2]
13 彼らに例えを示しなさい。かの町の仲間に、使徒たちが到来したときのこと。[3]
14 われらが彼らに二人「の使徒」を遣わしたとき、彼らはそのいずれをも嘘であるとした。それでわれらは、三人めの者をもって彼らを強めた。彼らは言った。「本当に私たちは、あなたがたへの使徒である」。
15 彼らは言った。「あなたがたは、私たちと同様のただの人に過ぎない。慈愛あまねく御方は何も下していない。あなたがたが、ただ嘘をついているだけだ」。
16 彼らは言った。「私たちがあなたがたへの使徒であることは、私たちの主が知っている。
17 そして私たちに課されているのは、ただ「主の教えを」明白にのべ伝えることだけ」。
18 彼ら「町の仲間」は言った。「私たちは、あなたがたを凶兆とみなす。もしあなたがたがやめないなら、必ずあなたがたを石打にしよう。必ずあなたがたを痛烈な懲罰に遭わせよう」。[4]

19 彼らは言った。「あなたがたの凶兆は、あなたがたと共にあるもの。あなたがたが、［真理を］想い起こさせられたことがか。いいや、あなたがたは度の過ぎた民だ」。
20 すると市街とは離れたところから、ひとりの男が走ってきた。彼は言った。「私の民よ。使徒たちに従いなさい。
21 あなたがたに何の報酬も求めない彼らに従いなさい。彼らは導かれた者だ。
22 私を創始し、またあなたがたが帰されるだろう御方に、どうして仕えずにいられるだろうか。
23 この御方をさし置いて、他の何ものかをとるべきだろうか。もし慈愛あまねく御方が私に禍害を望んだなら、それらのとりなしは何の役にも立たず、私を救うこともできない。
24 そうなれば、本当に私は明らかな誤りの中にいることになる。
25 本当に、私はあなたがたの主を信じる。私に耳を傾けなさい」。
26 彼は「楽園に入りなさい」と告げられた。彼は言った。「私の民に、知ることができさえしたなら、
27 主がどのように私を赦し、また［どのように］私を、貴ばれる者のひとりとしたかを」。
28 われらは彼の後、その民に天からの軍勢を下しはしなかった。下すまでもなかった。
29 ただ咆哮の一声のみ。すると、見なさい。彼らは［寡黙な灰のように］絶えた。[5]
30 しもべたちにあるのは後悔だけ。使徒が彼らのところへ来ると、彼らは必ず嘲笑した。
31 彼らは見なかったのか、彼ら以前に、われらがどれほどの世代を滅ぼしたことか。彼らが、彼らのところへ［元通りに］帰ってくることはない。
32 本当にすべてのものが、ことごとくわれらの前に連れてこられるだろう。
33 枯れた大地は、彼らへの御しるしのひとつ。われらはそれを生き返らせる。そこから穀物を生じ出させる。





そして彼らは、それを食べる。[6]
34 またわれらはその中に、なつめやしやぶどうの園を置き、泉を湧き出させた、
35 彼らがその果実を食べられるようにと。それは彼らの手で作り出したものではない。それでも彼らは、感謝しないのか。
36 大地に育つものも、彼ら自身も、また［未だ］彼らの知らないものも、すべてを対として創造した御方に讃美あれ。
37 夜は彼らへの御しるしのひとつ。われらがそれから昼をはぎ取ると、見なさい。彼らは暗闇にいる。[7]
38 また太陽は、それのための居場所へ向かって［軌道を］走る。これが威力ならびなく賢明な御方の計らい。
39 また月には、われらは、それが凋んだなつめやしの枯れ枝［のよう］になって戻るまで、諸々の位相を定めた。[8]
40 太陽が月を追い越すことはあってはならず、また夜が昼を追い抜くこともない。それらは、それぞれの軌道に浮かぶ。
41 われらが彼らの子孫を、満載の船で運んだことも彼らへの御しるしのひとつ。[9]
42 またわれらは彼らのために、それ［船］と同様の乗るものを創造した。
43 もしわれらがそうと望めば、彼らを溺れさせていただろう。そうなれば、彼らの叫びが聞き届けられることも、彼らが救われることもなかっただろう。
44 ただわれらからの慈悲と、しばしの間の楽しみがあるだけ。
45 彼らが「あなたがたの前にあるもの、あなたがたの後ろにあるものを畏れなさい。そうすれば、あなたがたは慈悲にあずかるだろう」と告げられるとき、[10]

46 主からの御しるしが届けられるたびに、彼らはいつも背き去る。

47 また「アッラーがあなたがたの糧としたものの中から費やしなさい」と告げられるとき、［真理を］拒む者たちは信じる者たちに言う。「御心にかなえばアッラーが養うだろう者を、どうして私たちが養わなくてはならないのか。あなたがたは、明らかな迷いの中にいるに他ならない」。

48 彼らは言う。「もしあなたがたが真実を語っているのなら、その約束はいつ果たされるのか」。

49 彼らに待てるのは、ただ論争しているあいだに咆哮の一声が彼らを捕えることだけ。

50 そうなれば彼らは、遺言することも、家族のところに帰ることもできないだろう。

51 喇叭が吹き鳴らされると、見なさい。彼らは、墓から彼らの主へ駆けてゆく。

52 彼らは言うだろう。「なんということだ。誰が私たちを寝所から起き上がらせたのか。慈愛あまねく御方の約束とはこれか。使徒たちは真実を語っていたのか」。[11]

53 それは、ただ咆哮の一声。すると、見なさい。彼らはことごとくわれらの許へ連れてこられる。

54 この日、どの者も、何ひとつ不当に扱われることはない。あなたがたは、ただあなたがたの行ってきたことに応じて報いられるだろう。

55 本当に楽園の仲間は、その日、歓喜で忙しく、

56 彼らとその伴侶たちは、日陰の長椅子にくつろぐ。

57 そこには彼らのための果実があり、彼らの求めるものが［何でも］ある、

58 「平安あれ」との、慈悲深い主からの御言葉も。

59 しかし罪を犯す者よ、この日、あなたがたは脇へ下がっていなさい。

60 アーダムの子らよ。われはあなたがたと契約を結ばなかったか、悪魔に仕えてはならない、と。本当に





彼はあなたがたにとり公然の敵である、と。[12]

61 またあなたがたはわれに仕えるように、と。これがまっすぐな道である、と。

62 彼はすでに、あなたがたの多くの群衆を迷わせてきた。それでもあなたがたは、考えずにいたのか。

63 これが地獄、［悪魔に従った］あなたがたに約束されていたもの。

64 この日、そこで焼かれよ。あなたがたが、かつて［真理を］拒んでいたことゆえに。

65 この日、われらは彼らの口を封じる。彼らの手がわれらにものを言い、彼らの足が、自分たちの得てきたことを証言する。

66 われらがそうと望めば、われらは彼らの目［から視力］を消し去ることもできる。彼らは道を争って急ぐだろう。しかし彼らに、何が見えるものか。

67 われらがそうと望めば、彼らをその場で変容させることもできる。そうなれば、彼らは進むことも戻ることもできない。

68 われらが長生きさせる者には、われらはその創造を逆戻りさせることもできる。それでも彼らは、考えないのか。

69 われらが彼［ムハンマド］に［啓示し、］教えたのは詩ではない。それは彼にはそぐわない。これはひとつの戒め、明白なクルアーンに他ならず、

70 生ける者には警告し、［真理を］拒む者に対しては御言葉を真理とするもの。[13]

71 彼らは見ないのか、われらが、われらの手で彼らのために家畜を創造し、それを彼らに所有させているのを。[14]

72 われらは、それを彼らに飼いならさせた。それで彼らは、それに乗り、またそれを食べる。

73 それには彼らのための益や、また［様々な］飲みものもある。それでも彼らは、感謝しないのか。[15]

74 彼らはアッラーをさし置いて、おそらく助けてもらえるだろうと［他の］神々を選び取った。

75 それらには、彼らを助けることはできない。むしろ彼ら［偶像を奉ずる者］の方こそ、それらのための軍勢を連れてくるほどに。

76 それゆえあなた［ムハンマド］は、彼らの言うことに悲しんではならない。われらは、彼らの秘めるものもさらけ出すものも知っている。

77 人間は見ないのか、われらに、精のひとしずくから創造されたことを。それなのに、見なさい。人間はあからさまに反抗する。[16]

78 われらに対して例えを示し、自分の創造については忘れて言う。「誰が朽ち果てた骨を生き返らせるだろうか」。

79 言いなさい。「最初に生じさせた御方が生き返らせる。創造物すべてをよく知る御方。

80 あなたがたのために、緑の木々から火をあらしめる御方。見なさい、あなたがたはそれをもって火を点（とも）す」。

81 諸天と大地を創造した御方が、それと同様のものを創造できないというのか。いいや、これぞ創造者たる御方、すべてを知る御方。[17]

82 かの御方が何ごとかを意図するとき、それにただ「在れ」と命じるだけでそれは在る。

83 それゆえ讃美あれ、ありとあらゆるものごとをその御手で統べる御方に。あなたがたは、この御方にこそ帰される。





1 人が過ちを犯すと、必然として神の法がそれを律し、続いて裁きが下される。このように、クルアーン的な言葉を借りるなら、ものごとはすべて神に帰される。「彼らの頭は上がったまま」は、頑なに真理を認めようとしない、という意味にも解釈される。

2 善行であれ悪行であれ、人間の行為は、人間よりも先に神の法廷に送り届けられる。それらについて、申し開きを求められることは言うまでもない。加えて、現世における生が終わりを迎えたとしても、後に残してきた行為がもたらす影響やその成りゆきについての責任も問われることになる。

3 「かの町の仲間」。ここで語られているのは、現代のトルコ南東部に位置する都市アンティオキアである。マスィーフ・イーサー（イエス・キリスト）の弟子がこの地で説教を行ったところ、たちまちその教えが栄えるようになった。彼らが初めてキリスト者と呼ばれるようになったのも、アンティオキアの地においてである。その後アンティオキアは、キリスト教会の最も重要な宗教管区となった。ここで（例え話として）語られている物語では、この町は神のメッセージを拒んだために滅ぼされたことになっている。物語の重要性とは、物語として語ることによっていかに教訓を導き出せるかにかかっている。

4 ここで「凶兆（きょうちょう）」と訳出した「ターイル」とは「鳥」の意。古代ローマの占いにも似て、アラブにも様々な前兆を鳥に読み取ろうとする迷信が存在した。例えば英語で「吉兆」を意味する auspicious という語は、ラテン語で「鳥」を意味する avis から派生している。アラビア語の「ターイル」からは、「凶兆」を意味するタタイヤラ、あるいはイッタイヤラといった語が派生した。神の預言者たちは悪事を公然と非難した。そのため悪事をはたらく者たちは、彼らこそ自分たちに悪運をもたらす者だと受け取ったのである。

5 神の裁きや懲罰は、必ずしもドラマティックな演出を伴うものではない。ここでは「咆哮（ほうこう）の一声」がもたらす強烈な衝撃――地震や、激しく吹き荒れる暴風などがもたらす轟音ひとつ――で十分だった。

6 冬には、大地はどこを見ても死に覆われている。しかし神は、春にはそれを復活させる。この作用については二章一六四節、三〇章一九節なども参照。

7 夜から「昼をはぎ取る」とは実に印象的な表現であり、また非常に適切でもある。昼、あるいは光とは肯定的なものである。そして夜、あるいは暗闇とはただ否定的である以上の何ものでもない。否定的な負の側面は何ごとにもついてまわり、これをはぎ取ることはできない。しかし、もしも真理を、すなわち肯定的な正の側面をはぎ取ってしまったなら、その空白を埋めるものは何もない。うつろな負の側面の他には、何ひとつ残らなくなってしまう。この節含め、その前後が扱うのは神のしるしであり象徴である。人間を取り巻く物質的な世界にみられる事柄に、自分自身を当てはめて真剣に向き合うことにより、人間は最も深い霊的な真理を学ぶことができる。

8 「凋（しぼ）んだなつめやしの枯れ枝［のよう］になって戻る」。すなわち「細い三日月が満月になり、再び細い三日月になる」、月の満ち欠けをあらわす比喩表現。

9 「満載の船」とは、ヌーフ（ノア）の箱舟のこと。

10 人間は自分の過去がもたらす結果について熟考、用心し、また自分の未来を考慮して悪からその身を守るべきであろう。現在とは、過去と未来の間に浮かびあがるほんの一瞬に過ぎず、それについて考えたり語ったりしている間にも、たちまち過去となってゆく。

11 復活のとき、死者は前後不覚の状態で起き上がり、初めて目にする光景に混乱するだろう。それから彼らは徐々に、記憶と、自分の人格を取り戻してゆく。来世の存在については、神の恩寵と慈悲によって現世で過ごしていた間に、すでに教わっていたことを思い出す。かつてあれほど奇妙に聞こえ、まったく興味を持たずにいた神の使徒たちの言葉は真実であった。

12 これは不正をなす者に対する、穏やかな叱責である。そこには怒りよりも、悲しみがこめられている。彼らは「アーダムの子ら」と呼びかけられているが、それは次の二点を強調するためである。（1）人類の父祖アーダムは、楽園から失墜したのちに悔い改め、赦しを得た。これにより彼は、後世の人類すべてのために、崇高な運命と報奨の可能性という扉を開いた。彼らのしていることは、その父祖アーダムの名誉を汚すことである。（2）最も慈悲深い御方である神は、人類の公然の敵である悪魔が築き上げた罠に注意するよう、アーダムの時代から何世代にも渡り、繰り返し警告し続けていたはずである。

13 「生ける者」。生きている、という言葉は、アラビア語であろうと非アラビア語であろうと、一般に「身体的な生命活動を維持している」ことのみならず、生命活動に関わるあらゆる能動的な性質を指している。宗教的には、霊的な領域のリアリティに対する鋭敏な感受性を持ち合わせていない者は、死者とほとんど変わらない、ということになる。神のもたらすメッセージは、霊的な意味で「生ける者」である人の心にこそ、より深く染み渡る。

14 「われらが、われらの手で」。「手」と訳出してあるが、むろんこれは人間や被造物に備わる「手」とは異なる。「手」には「自分自身」という意味もあり、ここではすなわち「神が自ら創造した」という意味に解するのが正しいだろう。

15 家畜の「マナーフィウ（益）」は、食用・飲用以外にも例えば皮革としての皮や、冬着に用いられる毛皮、掛け布や敷物に用いられる羊やらくだの毛、香水の原料となるじゃ香などがある。

16 神の偉大さと慈悲を前に、人間の不従順さと愚行は驚嘆に値する。広大な海の一滴にも満たないものから創られた、とるに足らない被造物であることを思えば、驚きはますます深まるばかりである。その上、人間は自分を創った創造主に逆らい、対抗する手段として次々に偶像を作り上げては争おうとする無謀さをも持ち合わせている。

17 人間と諸天や大地を比べて、あらゆる被造物の中で、どの創造が最も難しいといえるだろうか。神は諸天と大地、その他あらゆる被造物を創造し、その上でなお、これと同様のものを無限に創造することができるのである。そのような神にとり、来世において人間を復活させることなど、何の造作もないことである。

# 第三七章　アッ＝サーッファート　整列する者

マッカ啓示

本章の章名は、第一節に現れる語に由来している。冒頭の三節は天使についてであり、啓示を運ぶ天使が、一対一で人間にじかに語りかける様子が示されている。一六四節から一六六節で明らかになる通り、伝承によれば東方全域の占い師や占星術師が、預言者の到来の際には空に彗星や多くの流星を目撃し、困惑におちいった。彼らの術では、空が何を表しているのかがまったく読み解けなかったため、通常であれば、夜には高い山頂で星を見て過ごす彼らが、怯えて出かけてゆくのを拒んだほどであった。そして占いを求めて集まる人々に、彼らにはもはやこれ以上の占いはできないこと、彼ら自身もまた完全に答えを失い、恐れていることを告げたという。本章は、マッカ時代中期の啓示の中でも最初のものにあたる。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 列をなして並ぶ者たちにかけて、
2 追い払う者たちの追い払いにかけて、
3 戒めを読み聞かせる者たちにかけて、
4 あなたがたの神は、本当に唯一である。





5 諸天と大地と、そのあいだにあるものすべての主、日の昇るところすべての主。[1]
6 本当に、われらは諸々の惑星でもっとも低い天を飾り、
7 すべての反逆の悪魔に対する守護とした。
8 彼らは至高の会議を盗み聞きできず、四方八方から撃たれ、
9 追い散らされる。彼らには、延々と続く懲罰があるだろう。
10 ［言葉の断片を］盗み聞きをする者は別で、彼らは鋭く燃えるもの［流星］に追われる。
11 ［ムハンマドよ、］彼らに尋ねてみなさい。彼らの方が強く創造されているのか、それともわれらが創造したものの方か。本当にわれらは、彼ら［人間］を粘る泥から創造した。
12 いいや、あなたは感嘆するが、彼らは嘲笑する。
13 戒められたときも、彼らは憶えておこうとしない。
14 御しるしを目にしたときも、彼らはただ冷笑するだけ。
15 彼らは言う。「これは、明らかに魔術に他ならない。
16 私たちが死んで塵と骨になっても、よみがえらされるというのか。
17 私たちの大昔の祖先も［同様に］か」。
18 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「然り。あなたがたは、その身を落とすことになるだろう」。
19 それはただ咆哮の一声、そのとき彼らは［ようやく］見てとり、
20 「なんということだ。これが裁きの日か」と言う。
21 これは、あなたがたが嘘であるとしていた決着の日。
22 「集めなさい、不正をなした者たちとその配偶者を、また彼らが仕えていたものを、

23 アッラーをさし置いて。それから彼らを、業火への道に導け。
24 そして立たせておけ。彼らは、問いただされねばならない。
25 『あなたがたはどうしたのか。なぜ助け合わないのか』と」。
26 いいや。この日、「ようやく」彼らは服従する。
27 彼らは互いに近づき、尋ねあう。
28 彼ら「のある者」は言う。「あなたがたは、確かに右側から「権威ある者として」やって来たではないか」。
29 すると彼ら「の別の者」は言う。「いいや、「そもそも」あなたがたは信仰者ではなかった。
30 あなたがたに対し、私たちにはどのような権威もなかった。いいや、「そもそも」あなたがたは逸脱した民だった。
31 主の「裁きの」御言葉が、私たちの上に真実となった。私たちは、「懲罰を」味わうことになる。
32 私たちはあなたがたを惑わせた。しかし私たちもまた、惑う者であった」。
33 それで本当に、この日、彼らは懲罰を分かち合う。
34 われらは、罪を犯した者を必ずこのように扱う。
35 「アッラーの他にいかなる神もない」と告げられるとき、彼らはいつも高慢にふるまい、[2]
36 そして言った。「とり憑かれた詩人のために、私たちの神々と別れるなどということがあるものか」。
37 いいや、彼は真理をもたらし、「以前の」使徒たちを確認する者。
38 あなたがたは、きっと痛烈な懲罰を味わうだろう。
39 あなたがたは、ただ自分の行ってきたことに報われるだけ、
40 アッラーのしもべである、真摯な者を除いて。





41 これらの者のためには、それと知られるとおりの糧があり、
42 果実がある。彼らは貴ばれるだろう、
43 至福の楽園の中で。
44 豪奢（ごうしゃ）な座の上で、互いに向かい合い、
45 流れる泉から汲んだ杯（さかずき）が、彼らの間を回る、
46 それは白く、飲む者に心地よい。
47 それには頭痛も、酩酊（めいてい）もない。
48 隣にはまなざしも控えめな、すばらしい瞳のお供がいる、
49 まるで「砂の下に」隠された「繊細な」卵のよう。
50 それから彼らは互いに近づき、尋ねあう。
51 彼らのひとりが言う。「私には、ひとりの友人がいました。[3]
52 彼は言っていました、『本当に君は、「彼の言っていることが」真実だというのか、
53 私たちが死んで塵と骨になっても、私たちは裁かれるというのか』と」。
54 また、こうも言う。「あなたがた、見てごらんなさい」。
55 そこで自分でも見てみると、彼が業火のただ中にいるのが見える。
56 彼は言う。「アッラーにかけて。本当に、あなたは私を滅ぼしかけた。
57 もし私の主の恩寵がなかったなら、きっと私は「懲罰に」直面させられる者のひとりになっていた。
58 それでは、私たちが死ぬことはないのか、
59 死は一度きりなのか、罰せられることもないのか。

60 それが本当なら、大いなる成就とはまさしくこのこと。
61 労を惜しまぬ者たちは、このようなもののためにはたらくべきだろう」。
62 こうしたもてなしの方が良いか、それともザックームの木か。[4]
63 われらはそれを、不正をなす者のための試練とした。
64 それは業火の底に生える木で、
65 それにみのる果実は、まるで悪魔の頭のよう。
66 彼らはそれを食べねばならず、それにより下腹は膨れ、[5]
67 そののち、その上から混ぜもののされた沸騰する水を飲まされ、
68 そののち、彼らの帰りゆく先は業火にある。
69 本当に彼らは、その祖先たちがさまよえる者であると知りつつ、
70 急いでその足跡を追っていた。
71 また、確かに彼ら以前の多くの先人たちも迷っていた。
72 また、確かにわれらは彼らのあいだに警告者を遣わした。
73 それで見なさい、警告を受けていた者の結末がどのようであったかを、
74 アッラーのしもべである、真摯な者を除いて。[6]
75 かつてヌーフはわれらに祈った。応じる者のうち、われらはもっともすぐれている。[7]
76 われらは彼とその家族を、大いなる「洪水の」災害から救い出し、
77 また彼らの子孫を、「地上に」生き残る者とした。
78 われらは彼のために、「称賛されるべき者としてその名を」後世に残しておいた。





79 「諸世界の「万民の」中で、ヌーフに平安あれ」。
80 このようにわれらは、行いの善良な者に報いる。
81 本当に彼は、われらの信仰あるしもべのひとりであった。
82 そののちわれらは、他の者たちを溺れさせた。
83 また、彼と類を同じくする者のひとりにイブラーヒームがいた。[8]
84 彼がまったき心をもってその主へとやって来たときのこと、
85 彼が、父と民とに言ったときのこと。「あなたがたが仕えているものは何なのですか。
86 アッラーをさし置いて、作り話の神々を欲しがるのですか。[9]
87 諸世界の主について、どのように考えているのですか」。
88 それから、彼はひと目、星々を見やった。
89 それから、彼は言った。「本当に、私は病気だ」。
90 すると彼らは背を向けて、彼から退(しりぞ)いていった。
91 それから、彼は彼らの神々に向かい、言った。「あなたがたは、食べないのか。
92 もの言うこともしないのは、どうしたことか」。
93 それから、彼はそれらに向かい、右の手で打った。
94 すると人々が、あわてて彼の方へ迫ってきた。
95 彼は言った。「あなたがたは、自分たちで刻んだものに仕えるのですか。
96 あなたがたのことも、またあなたがたの行いも、アッラーが創造したというのに」。
97 彼らは言った。「彼のために「薪(まき)を」積み上げ、それから彼を業火の中に投げ込め」。

98 彼らは、彼に対し企(たくら)んだ。しかし、われらは彼らをもっとも低い者とした。
99 彼は言った。「私は、私の主に向かおう。かの御方は私を導くだろう。[10]
100 主よ、私に正しい人のひとり［となる子］を授けてください」。
101 それでわれらは、寛容な男児［の誕生］という良い報(しら)せを伝えた。
102 それから、［この息子が］成長して彼と共にはたらくようになったとき、彼［イブラーヒーム］は言った。「私の息子よ。私は、夢の中であなたを［犠牲として］屠(ほふ)るのを見た。あなたはどう考えるか」。彼は言った。「私の父よ。あなたの命じられた通りにしてください。アッラーの御心なら、私がよく耐えることが分かるでしょう」。
103 それから二人が［命令に］服従し、彼［イブラーヒーム］が彼［息子］の額を［地面に］うつ向かせたとき、
104 われらは彼［イブラーヒーム］に呼びかけた。「イブラーヒームよ。
105 確かにあなたは、あなたの見た夢に忠実であった」。このようにわれらは、行いの善良な者に報いる。
106 本当にこれは、明らかな試練だった。[11]
107 われらは、大いなる犠牲をもって彼をあがない、
108 われらは彼のために、［称賛されるべき者としてその名を］後世に残しておいた。
109 「イブラーヒームに平安あれ」。
110 このようにわれらは、行いの善良な者に報いる。
111 本当に彼は、われらの信仰あるしもべのひとりであった。
112 またわれらは彼に、正しい人のひとりである預言者イスハーク［の誕生］という良い報(しら)せを伝えた。
113 われらは、彼とイスハークを祝福した。彼らの子孫の中には、行いの善良な者もあり、また自分自身に





対して明らかな不正をなす者もあった。
114 また、われらは確かにムーサーとハールーンをいつくしみ、
115 彼らとその民を、大いなる災害から救い出した。
116 われらは彼らを助け、そのため彼らは勝者となった。
117 また、われらは彼ら二人に［ものごとを］明確にする啓典を与え、
118 彼ら二人を、まっすぐな道へと導いた。
119 われらは彼ら二人のために、［称賛されるべき者としてその名を］後世に残しておいた。
120 「ムーサーとハールーンに平安あれ」。
121 このようにわれらは、行いの善良な者に報いる。
122 本当に彼らは、いずれもわれらの信仰あるしもべのひとりであった。
123 また本当にイルヤースは、使徒たちのひとりであった。[12]
124 彼がその民にこう言ったときのこと。「あなたがたは、畏れないのですか。
125 あなたがたはバアルに呼びかけ、もっともすぐれた創造者を捨てておくのですか、
126 あなたがたの主であり、またあなたがたの、大昔からの先祖の主でもあるアッラーを」。
127 しかし彼らは、彼［イルヤース］を嘘であるとした。そのために、彼らは［懲罰に］直面させられるだろう、
128 アッラーのしもべである、真摯な者を除いて。
129 われらは彼のために、［称賛されるべき者としてその名を］後世に残しておいた。
130 「イルヤースに平安あれ」。
131 このようにわれらは、行いの善良な者に報いる。

132 本当に彼は、われらの信仰あるしもべのひとりであった。
133 また本当にルートは、使徒たちのひとりであった。[13]
134 われらは彼の一族をことごとく救った、
135 後に残される者たちの中の、ひとりの老婦を除いては。
136 そののちわれらは、他の者たちを滅ぼした。
137 そしてあなたがたは、それら［の跡］の上を通り過ぎている、朝にも、
138 また夜にも。それでもあなたがたは、考えないのか。
139 また本当にユーヌスは、使徒たちのひとりであった。[14]
140 彼が、満載の船に逃れたときのこと。
141 彼はくじを引き、負かされ、
142 大魚に飲み込まれた。彼は、責められるべきであった。[15]
143 もし彼が、［主を］讃美する者のひとりにならずにいたなら、
144 彼ら［人間］がよみがえらされる日まで、彼は［大魚の］下腹の中で過ごしていただろう。
145 しかしわれらは、彼を不毛の岸に打ち上げた。彼は病気であった。
146 われらは、彼の上に瓜（うり）の木を生やさせた。
147 またわれらは、彼を十万、あるいはそれ以上［の民］に遣わした。
148 彼らは信じるようになったので、われらは彼らに、しばしの間の楽しみをもたらした。
149 ［ムハンマドよ、］彼らに尋ねてみなさい。あなたの主には娘があり、彼らには息子があるというのか、と。
150 それとも彼らは、われらが天使たちを女に創造するところに立ち会ったとでもいうのか。





151 断じて、そうではない。彼らの言うことは作り話である。
152 「アッラーは子をもうけたもう」とは。本当に、彼らは嘘つきである。
153 「かの御方は、息子よりも娘を選びたもう」とは。
154 あなたがたはどうしたというのか。どのように判断するというのか。
155 それでもあなたがたは、想い起こそうとはしないのか。
156 それともあなたがたには、明らかな権威があるのか。
157 あなたがたの啓典を持ってきなさい、もしあなたがたが真実を語っているというなら。
158 彼らは、かの御方とジンのあいだに関わりがあるとする。しかしジンたちは、彼らが［懲罰に］直面させられるだろうことをよくわかっている。[16]
159 彼らが述べていることを超越するアッラーに讃美あれ。
160 アッラーのしもべである、真摯な者を除いて。
161 あなたがたも、あなたがたの仕えるものも、
162 ［誰ひとり］誘い出して、かの御方から引き離すことはできない、
163 業火で焼かれる者を除いて。
164 ［天使たちは言う。］「私たちの中には、それと知られるとおりの持ち場のない者はいない。[17]
165 私たちは列をなして並ぶ者、
166 また本当に、私たちは讃美する者」。
167 また、彼らはいつも言っていた。
168 「もし私たちのところに、祖先からの戒（いまし）めがあったなら、

169 私たちも、アッラーの真摯なしもべであっただろうに」。
170 しかし彼らは、これを嘘であるとしていた。やがて彼らも、知ることになるだろう。
171 すでにわれらの言葉は、われらのしもべである使者の先に立ち、
172 彼らは必ず助けを得るだろう。
173 本当に、われらの軍勢は必ず勝者となる。
174 ［ムハンマドよ、］それゆえあなたは、しばらくのあいだ彼らに背を向け、
175 彼らを見ていなさい。やがて彼らは、目にすることになるだろう。
176 彼らは、われらの懲罰を急かし、求めるのか。
177 しかし彼らのいるところにそれが下れば、警告をされてきた者たちには悪い朝となるだろう。
178 それゆえあなたは、しばらくのあいだ彼らに背を向け、
179 彼らを見ていなさい。やがて彼らは、目にすることになるだろう。
180 あなたの主に讃美あれ、彼らが述べていることを超越する威厳の主に。
181 使徒たちの上に平安あれ。
182 アッラーに称賛あれ、諸世界の主に。





1 神は存在するものすべての主である。天と地、それからその間にあるものすべてが神に属している。神はまた「マシャーリク」すなわち「太陽の昇るあらゆるところ」の主である。注釈者たちによれば、それは年に二度の春分と秋分を指す。太陽が「東から昇る」と言えるのは、厳密にはこの二日間のみであり、それ以外の日は、幾分か北ないし南に傾いたところから昇る。

2 自己中心的な傲慢さは、罪と反逆の種子である。二章三四節（シャイターンの傲慢さについて）、四十章三六、三七節（フィルアウンの傲慢さについて）などを参照。それは、人間が自分の生き方や行動を改めるのを妨げる類いの傲慢さである。こうした人物が、先人の築いた流儀、あるいは社会や国家の名誉といったものについて語るとき、たいていの場合その思考の根底にあるのは自分自身のことや、不平不満を抱えた小さな派閥のことでしかない。唯一、真の神を人生と行動の基準とし、永遠のリアリティとして認識するということは、自己を切り捨てるということを意味する。そしてそれは、罪とは相容れない。対して自己から目を背け、責任を転嫁する先としての虚偽の神々をねつ造すれば、罪を犯すことへの障壁を低くすることができてしまえる。こうして彼らは、悪に面目を付与して正当化するようになる。そうするうちに、神の恩寵による助けがない限り、罪を手放すことがますます難しくなってゆく。

3 この「友人」は懐疑的な人物であり、宗教と来世を一笑に付していた。しかし今となっては、形勢が逆転してしまった。信仰に支えられた敬虔な者は善良な人生を送り、そして最終的には至福を成就した。冷笑していた「友人」は混乱の人生を送り、その果てに火獄の中で焼かれている。

4 「ザックームの木」。地獄に生えて苦い果実をみのらせるというこの木は、いわば地獄の象徴である。楽園の庭にあり、甘い果実をみのらせる木との対照をなしている。

5 果実や飲みものを通して、善と悪が辿る対照的な運命が語られている。これと同様の語りは、四七章一五節にもみられる。

6 いつの世にも、神に仕える誠実で献身的な人が存在した。彼らには、最も高度に霊的な生が開かれていた。この節が本

章四〇節と同じである点には留意が必要である。四〇節以降は、神を畏れる者とそうでない者のたどる運命の違いについて告げられていたが、この節で同じフレーズが繰り返されるのをひとつの区切りとして、以降は初期の預言者たちの具体的な例が挙げられてゆく。

7 ヌーフの物語はクルアーンの多くの場面に登場する。ここでは、人間が悪に立ち向かうとき、神は彼らを守るということ、また悪には、神の計画を覆すことはできないということが要点となっている。

8 イブラーヒームについての主要な物語は、二一章五一節から七三節にある。しかし彼と彼の息子が、課された試練（本章一〇二節から一〇七節参照）の下で示した自己犠牲の最も究極的なあり方については、ここで初めて告げられる。そしてこれは、本章の主題でもある。「……わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください（ルカによる福音書二二章四二節）」。

9 「作り話の神々」。すなわち、偽の崇拝について。偶像の数々や、星々、シンボル、いわゆる「マモン」や「セルフ」などが該当する。いずれも神の概念について誤っているか、あるいは歪曲するものである。または、一種の見せかけの信念であるとも言えるだろう。その場合、知識と実践に矛盾をきたしていることや、あるいは内的な良心の訴えを無視することで成り立っている。イブラーヒームはこの点を、自分の民に対して問いただした。

10 これはイブラーヒームの「ヒジュラ（移住）」であった。彼は、自分の民と土地を離れた。彼にとっては、祖先からの虚偽を受け継ぐ自分の民よりも、真理の方が慕わしかったからである。彼は自分自身を神に委ね、神の導きの下に、人々のための偉大な礎を新たに築いた。

11 イブラーヒームとその息子イスマーイールの両方に犠牲が求められたという点に留意が必要である。これは、父親と息子の意志と意図に課された試練だった。試練は、父親のヴィジョンを通して告げられた命令として下された。父親は息子に意見を求めた。息子はすぐさまこれに同意し、本当にそうした自己犠牲が求められたなら、約束に対し忠実であり





続ける姿勢を示すべきであると応じた。最初から最後まで、ここでは出来事のすべてが象徴的である。神は、そもそも動物の肉や血を必要としない（二二章三七節）。まして生身の人間となればなおさらである。

12 イルヤースとはエリヤと同一の人物であり、その物語は旧約聖書の『列王記』に記されている。エリヤはアハブ王（在位：紀元前八九六‐八七四年）やその息子アハズヤ（在位：紀元前八七四‐八七二年）が、イスラエル、サマリアといった王国を統治していた時代の人物である。彼はバプテスマのヨハネ同様に荒野の預言者であり、それは人々と生活を共にし、日常のあらゆる場面を采配し、導きを与えた預言者ムハンマドとはまた別の宗教実践のあり方であったといえる。

13 ルートについては、七章八〇節から八四節にも詳細がある。彼は死海沿いの平原の町ソドムとゴモラに遣わされた預言者であった。その住民は、彼の説諭に反して忌まわしい犯罪に染まっていた。

14 具体的な物語は二一章八七節から八八節、および六八章四八節から五〇節を参照。ユーヌスは使命を与えられてニネヴェの町に遣わされたが、その後に道を誤った。ニネヴェの町の住民に拒まれた彼は、神の懲罰が下ればいいと彼らを非難、誹謗した。後になって彼らは悔い改め、神の赦しを得ることになるのだが、それはユーヌスが怒りにかられて彼らから去った後のことだった。ユーヌスは、神が慈悲と赦しを与える存在であることを忘れてしまっていたのである。

15 メソポタミアの河川には何種類かの巨大な魚が生息している。ここで「大魚」と訳出したのは「フート」という語だが、おそらく魚の一種か、あるいはワニを指すとも考えられる。北海に面した河ならクジラの可能性もあるが、場所については言及がされていないため不明である。旧約聖書では、彼はヨッパ（現在のヤッファ）の港から地中海を渡る船に乗ったとされている。

16 少なくとも天使たちは、神への奉仕のみに従事する純粋な存在である。しかしイスラーム以前の民の迷信では、神に娘があるとするばかりではなく、あらゆる種類の霊的な存在が、その善悪に関わらず神と血縁関係を持つものとされていた。こうした神話においては、最も邪悪な力を持つ存在が、神と同等の地位にある男神、あるいは女神として描写され、

創造主である神の一族としてひとつの館に同居しているかのように語られる。ここでは神についてのそうした理解のあり方が、一段と強い調子で否定されている。

17
本章の締めくくりに、最初に示されたモティーフがここで再び示される。自分のことを神に仕える者のひとりとして定義する者は、天使であろうと、人間であろうと、自分の置かれた場所に満足し、与えられた使命に従い献身することに満足している。

# 第三八章　サード

マッカ啓示

本章は、第一節の冒頭にある単一のアラビア文字にちなんでこの名で呼ばれている。伝承によれば冒頭の十節は、クライシュ族が、預言者を庇護下におくのをやめるようアブー・ターリブに迫った際に啓示されたとも、あるいはアブー・ターリブが死去した際に啓示されたともいわれている。可能性が高いのは前者の説である。本章は、マッカ時代の中頃に啓示された。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 サード。戒（いまし）めに満ちたクルアーンにかけて。

2 いいや。［真理を］拒む者たちは傲慢で、争いたがる。[1]

3 われらは彼ら以前に、どれほどの世代を滅ぼしたことか。彼らは泣き叫んだが、もはや逃れようにも間に合わなかった。

4 また彼らは、自分たちの中からひとりの警告者が到来したことにも驚いていた。［真理を］拒む者たちは言った。「これは大嘘つきの魔術師である。

5 ［多くの］神々を、ただひとつの神にしてしまおうとは。本当にこれは驚くべきこと」。





6 彼らの長老たちも、立ち去りながら［言う］、「引き続き、あなたがたの神々を守り通しなさい。本当に、これは何か意図あってのこと。

7 このようなこと、今までの宗旨でも聞いたことがない。これは作り話に違いない。

8 しかも私たちの中で、彼ひとりにだけ戒（いまし）めが下されたというのか」。いいや、彼らが本当に疑っているのはわれの戒（いまし）めのこと。いいや、彼らはわれの懲罰を味わったことがない。

9 それとも彼らは、あなたの主である威力ある御方、惜しみなく与える御方の、慈悲の宝庫を持っているとでもいうのか。

10 それとも彼らは、諸天と大地と、そのあいだにあるものすべての王権を持っているとでもいうのか。それなら、手立てを尽くして［天に］昇るといい。

11 ［諸部族の］同盟の軍勢は、そこで敗北するだろう。

12 彼ら以前にもヌーフの民が、アードの民が、杭（くい）の所有者フィルアウンが、

13 サムード［の民］が、ルートの民が、アイカの仲間が、ことごとく同盟となり、

14 いずれも、それぞれ使徒たちを嘘よばわりした。われの応報が科されたのも当然のこと。

15 彼らに待てるのはただ咆哮（ほうこう）の一声のみで、もはや猶予もされない。

16 彼らは言う。「主よ、清算の日の前に、私たちの取り分を急いでください」。

17 あなたは、彼らの言うことによく耐えていなさい。われらのしもべ、力あるダーウードのことを想い起こしなさい。本当に彼は、常に悔い改めて［主に］立ち返る者であった。[2]

18 われらは、山々をして彼と共に晩にも、日の出にも讃美させ、

19 鳥たちも集まり、いずれもが彼と［讃美を］繰り返した。[3]

20 われらは彼の王国を強め、また彼には知恵と、明瞭な弁舌を与えた。

21 あなたに、訴え出た者たちの報せは届いているのか。彼らが、［ダーウードの］聖所の壁をよじ登ったときのこと。[4]

22 ダーウードの前に入ってきたとき、彼は彼らに驚いた。彼らは言った。「恐がらないでください。［私たち］二人は、訴えのある者どうしです。互いのうちどちらかが相手に不当なことをはたらきました。私たちのあいだに、真理による判断を下してください。決して不公平にはしないでください。そして私たちを、まっすぐな道へと導いてください。

23 これは私の兄です。彼には九十九頭の羊があり、私にはたった一頭だけです。それなのに、兄は『それも私に預けるように』と言いました。そして弁舌をもって私を言い負かしてしまいました」。

24 彼［ダーウード］は言った。「彼が自分の羊に加えて、あなたの一頭の羊を要求するのは確かに不正なこと。本当に、共同する者どうしの多くが、互いに相手に横暴なことをしている。信じて正しい行いをする者は別だが、しかしそうした者はわずかに過ぎない」。ダーウードは、われらが彼を試みたことを察し、主の赦しを願い、その身を伏してこうべを垂れ、悔い改めて主に立ち返った。

25 それゆえわれらも、そのことで彼を赦した。彼はわれらのそば近くに、善美な還りどころを得た。

26 「ダーウードよ。われらはあなたを、地上の継承者とした。それゆえ、真理によって人々のあいだに判断を下しなさい。あなた自身の欲望に従ってはならない。それはあなたをアッラーの道から迷わせるだろう。アッラーの道から迷う者には、清算の日を忘れたために厳重な懲罰がある」。

27 われらは諸天と大地と、そのあいだにあるものとを、たわむれに創造したのではない。それは［真理を］拒む者の憶測に過ぎない。［真理を］拒む者に火獄の禍あれ。





28 それともわれらが、信じて正しい行いをする者のことを、地上に退廃を広める者のように扱うだろうか。それともわれらが、畏れる者のことを、邪悪な者のように扱うだろうか。

29 ［これは］われらがあなた［ムハンマド］に下した祝福の啓典。彼ら［人間］がその御しるしを深く考えるように、また分別をもつ者が想い起こすように。[5]

30 われらはダーウードにスライマーンを授けた。なんとすばらしいしもべだろうか。本当に彼は、常に悔い改めて［主に］立ち返る者であった。

31 ある晩、よく馴れた幾頭もの駿馬が、彼の前に連れられてきたときのこと。

32 彼は言った。「本当に私は主を想い、［唯一の主の愛という］善良な愛をこそ愛する」。そうして、［彼が崇拝に専念しているあいだに］それら［駿馬］はついに［夜の］とばりの向こうに隠れてしまった。

33 「それらを、私のところへ連れもどせ」。それから彼は、それら［馬］の脚や頸を撫で始めた。[6]

34 われらはかつてスライマーンを試み、彼の玉座の上に屍［に過ぎないもの］を据えた。やがて彼は、悔い改めて立ち返った。

35 彼は言った。「主よ、私を赦してください。そして私に、私の後には誰にも属することのない王国を授けてください。本当に、惜しみなく授ける御方とはあなたのこと」。

36 そこでわれらは、風を彼に使役させた。彼が命じると、風はその意のまま静かに吹いていった。

37 そして悪魔の輩たちもまた。築く者もあれば、潜る者もあり、

38 またそれ以外には、鎖につながれた者たちもあった。

39 「これはわれらからの贈りもの。それゆえ勘定することなく譲るなり、あるいはとっておくなりしなさい」。

40 彼はわれらのそば近くに、善美な還りどころを得た。

41 われらのしもべ、アイユーブのことを想い起こしなさい。彼が主に呼びかけたときのこと。「悪魔が私を苦しめ、虐げています」。
42 「あなたの足で「地を」打ちなさい。これが、涼やかな水浴びと水飲みの場」。
43 われらは彼に、家族と、それに類するものとを「再び」授けた。われらからの慈悲として、また分別をもつ者への戒めとして。7
44 「あなたの手に「草の」束をとり、それで打ちなさい。そうすればあなたは、誓いを破ったことにはならない」。われらは、彼がよく耐えるすばらしいしもべであるのを見出した。本当に彼は、常に悔い改めて「主に」立ち返る者であった。
45 われらのしもべ、イブラーヒーム、イスハーク、ヤアクーブのことを、「崇拝のための」力があり、「洞察する」見る目のある者たちのことを想い起こしなさい。
46 われらは彼らを、特別なもののために選んだ。それは「来世の」館だけを想い起こすこと「、そのために努力すること」。
47 彼らは、われらの許において、選ばれしすぐれた者たちであった。8
48 イスマーイール、アル＝ヤサウ、ズルキフルのことを想い起こしなさい。彼らはすぐれた者たちであった。
49 これは、ひとつの戒め。正しい行いの者には、善美な還りどころがある。
50 永遠の園。その門は、彼らのために開かれている。
51 その中でくつろぎ、おびただしい果実も、飲み物も思いのまま。
52 隣にはまなざしも控えめな、似合いのお供がいる。
53 これが清算の日に、あなたがたに約束されたもの。





54 本当に、これがわれらからの糧であり、それは決して尽きることがない。
55 このとおり。しかし逸脱した者には悪い還りどころがある。
56 それが地獄、彼らが焼かれるところ。何と悪い寝床だろうか。
57 このとおり。煮えたぎる水と膿とを味わわされ、
58 またそれ以外にも、これに類する様々なものがある。
59 「人々を誤らせた者が言う。」「これはあなたがたと共に、「盲従して」やたらに急ぐ者たちの群れ。歓迎は無用である、業火で焼かれるだけなのだから」。
60 すると彼ら「追従していた者たち」が言う。「いいや、あなたがたにこそ歓迎は無用のはず。あなたがたのせいで、私たちまでこのようなところに連れてこられてしまった。終のすみかの、何と悪いことか」。
61 彼らは言う。「主よ。私たちをこのようなところへ連れてきた者には、業火の中で懲罰を倍に増やしてください」。
62 彼らは言う。「私たちが、かつて悪人として数えていた者たちの姿が見えないのはどういうことか。
63 私たちが嘲笑していたからだろうか、それとも私たちが見落としていたのだろうか」。
64 本当にこれが真理であり、業火の住民の論争である。9
65 「ムハンマドよ、」言いなさい。「私は、ひとりの警告者に過ぎない。アッラーの他にいかなる神もない。唯一の御方にして絶対の支配者、
66 諸天と大地と、そのあいだにあるものすべての主。威力ある御方、よく赦す御方」。
67 言いなさい。「これぞ大いなる報せ、
68 しかしあなたがたは、それから背き去る。

69 もっとも高位の者［天使］たちの集まりでどのような議論がされたのか、私には何の知識もない。[10]

70 ただ私が、［警告を］明らかにするひとりの警告者であることが啓示されただけ」。

71 あなたがたの主が、天使たちに告げたときのこと［を思いなさい］。「われは、陶土から人間［という存在］を創造しよう。

72 われが彼を姿づくり、われの霊を彼の中に吹き込んだとき、あなたがたは彼にひれ伏しなさい」。

73 天使たちは、ことごとく彼にひれ伏した。

74 イブリースだけは別であった。彼は高慢にふるまい、そのために［真理を］拒む者となった。

75 かの御方は告げた。「イブリースよ。われが両の手で創造したものにひれ伏すことから、何があなたを妨げるのか。あなたは高慢な者だったのか。それとも至高者にでもなったのか」。[11]

76 彼［イブリース］は言った。「私の方が、彼よりもすぐれています。あなたは私を火炎から創造した。しかし彼のことは泥から創造した」。

77 かの御方は告げた。「それならここから出てゆけ。本当にあなたは、棄てられし者となった。

78 あなたは裁きの日まで、必ず忌まれ続けることとなる」。

79 彼［イブリース］は言った。「主よ、彼ら［人間］がよみがえらされる日まで私を猶予してください」。

80 かの御方は告げた。「それではあなたを猶予しよう、

81 それと知られるとおりの日時までは」。

82 彼［イブリース］は言った。「それでは、あなたの威力にかけて。私は必ず彼ら［人間］をすべて欺いてみせましょう、

83 彼ら［人間］のうち、あなたの真摯なしもべを除いては」。





84 かの御方は告げた。「これぞ真理。われは真理のみを告げる。

85 われはあなたと、あなたに従う者すべてをもって地獄を満たしてみせよう」。

86 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「私はこれについて、あなたがたに報酬を求めない。私は、偽善者でもない。

87 本当に、これ［クルアーン］は諸世界への戒めに他ならない。

88 やがてあなたがたも、その報せを必ず知ることになるだろう」。

1 あらゆる時代において、教えと警告、それにしるしが、神からすべての人々へ授けられてきた。それでも人々は反逆し、罪を重ね、滅亡していった。悪行は自己破滅という結末をもたらす。神の裁きは、ただ自分自身の選択と行為の結果として下される。歴史に学ぶことができるのは、後からやって来た世代へのいわば恩恵である。

2 すべての自然は調和し、神を嘉し、賛美を歌う。ダーウードは音楽と詩篇という祝福の賜りものを授かった。それで丘という丘、鳥という鳥が、彼と共にひとつとなって、神を賛美して歌った。丘と木々の間に鳥たちが集い、ひとつの歌となってこだまする、祝福されたその特別な時間は、日暮れと、そして夜明けに訪れる。それは彼らにとって休息とやすらぎの時であり、また連れ立って飛翔する一日の始まりの時である。

3 一七節とこの節とが互いに響かせ合っているものには耳を傾けておくべきだろう。本章の韻律ないしリズムともいうべきものの大部分を提供しているのが、どちらの節の末尾にも共通する「アウワーブ」というアラビア語である。これにより、本章の根底にある「祈りと賛美をもって神に立ち返れ。それは現世のどのような権力や知恵よりもすぐれている」

という主題が、全体を通して繰り返しだまし続けているかのようである。

4 ダーウードは、祈りのために一定の時間を私室で過ごすのを常としていた。ある日、二人の男が、その私室の壁をよじ登るというやり方で侵入し、ダーウードの私的な時間を妨げるという出来事が起こった。ダーウードは突然の侵入者に恐怖をおぼえたが、彼らの言い分とは、「私たちは、王としてのあなたの公正な判断を求めてやって来ました。私たちは兄弟で、揉め事を抱えています。あなたに裁いてほしいのです」というものだった。

5 啓示とは単なる偶然や偶発的なものではない。それは真の祝福、それも神が人間に賜った祝福のうちもっとも偉大な祝福である。ひたむきな精神をもって啓示に向き合い、沈思黙考することにより、人間は自分自身と、周囲を取り巻く自然との関わりや、それらすべての創造者である神との関わりについて知ることができる。啓示の助けにより好奇心や疑念に対する回答を得、霊的な生についての真の教訓を学ぶことができるだろう。

6 スライマーンに授けられた権力や財産、地位や名誉といったものは、すべて彼に対する霊的な試練であった。他の人間であればうぬぼれて思い上がっていたかもしれない。しかしスライマーンはそうはならなかった。彼が授かった力は、ジンや人間、果ては自然現象にまで及んだ。彼はその力を享受しつつも、誠実、正直であり続けた。そして常に、神への献身の意識を保ち続けていた。

この節と前節の解釈やとらえ方には複数あるが、ここではアラビア語の語義に立ち返ると共に、預言者や使徒の「イスマ」、すなわち神による特別な庇護により、罪や過誤を犯すことから守られているがゆえの「無謬性（むびゅうせい）」に鑑み（かんが）このように訳出した。片時たりとも神への献身を忘れることのないスライマーンが美しい馬を愛でたのは、神の愛を知る者にとり、あらゆる美しいものは神の愛を想い起こさせるものであるからに他ならない。

7 もっとも激しい苦しみの中でも、アイユーブは忍耐し、信仰を保ち続けたが、彼の妻はそうではなかった。ヨブ記によれば、次の通り。「時にその妻は彼に言った、『あなたはなおも堅く保って、自分をまっとうするのですか。神をのろって死になさい』。しかしヨブは彼女に言った、『あなたの語ることは愚かな女の語るのと同じだ。われわれは神から幸をうけるのだから、災をも、うけるべきではないか』。すべてこの事においてヨブはそのくちびるをもって罪を犯さなかった」。彼は、感情にまかせて妻に暴力（身体的にも、精神的にも）をふるうのを避け、言葉をもって諭した。万事が解決した後になって、忍耐すること、常に心を安定した状態に保つのと同じく、おだやかさと謙虚さを忘れてはならないことを示すものとして、妻の誤りをただすにも、傷つけたり痛みを与えたりする心配のない草の束を用いるよう告げられた。

後世のイスラーム学者はこれを「アイユーブの許し」と呼び、懲罰を決定する場合において事あるごとに前例として参照している。

8 アラブの父祖といわれるイスマーイールは、自己犠牲の極致をあらわす存在としても知られている（三七章一〇一節から一〇七節を参照）。ここでは、人々への祝福として遣わされた、善良な者のひとりとして取り上げられている。

9 預言者ユースフが、牢の中で二人の囚人の仲間に説いた重要な教えのひとつが神の唯一性であったことが思い出されるくだりである（一二章三九節）。すべてを創造し、維持するのは神のみである。神の意志は、あまねくすべてのものごとの上に働き、邪悪な力には神の意志を打ち負かすことはできない。その恩恵をもって何度となく赦しを授けるのも、また神のみである。預言者が遣わされたのも、実にこの教えを伝えるためであり、そして現に彼はその教えを届けたのであった。

10 天上の高位者たちは、神の命ずるところに基づき、全宇宙におけるあらゆるものごとについて論じ合う。71節から85節にある通り、その詳細な内容については必ずしもすべてが人間に対し明らかにされているわけではない。しかし人間にとって何よりも大切なこととは、神の慈悲深さを知ることである。神は幾度でも繰り返し人間に赦しを与える。神を信じ、神に委ねる者に対し、邪悪は何ひとつ手出しできない。

11
「われが両の手で創造したもの」。「手」については三六章七一節とその訳注も参照。神が「われが両の手で創造したもの」と告げるとき、それは神が自ら創造したことを意味し、ここではアーダムが両親や通常の妊娠・出産といったプロセスを経ることなく神によってじかに創造されたことが示唆されている。タサウウフ（修身）の徒、修行者たちの解釈によれば、神の「両の手」で創造された人間には美しさと厳しさという神の二つの属性が反映されており、天使は、いずれか一つだけの属性をもって創造されていることを示す節であるという。

# 第三九章　アッ＝ズマル　勢揃え

マッカ啓示

本章は、七一節と七三節に現れる軍勢や集団を意味する語にちなんでこの名で呼ばれている。五三節から五五節はマディーナで啓示された。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 啓典はアッラーから啓示される。もっとも威力ある御方、もっとも賢明な御方。

2 本当にわれらは、真理をもってあなたに啓典を下した。それゆえアッラーに仕え、宗教において真摯でありなさい。

3 真摯な宗教とは、ただアッラーのみにあるのではないか。この御方以外の庇護者を選ぶ者は［言う］、「私たちがこれらに仕えるのは、ただこれらが私たちをアッラーに近づけてくれるからです」。本当に、彼らのあいだで相争われていることについてはアッラーが判断を下すだろう。アッラーは、嘘をつき［真理を］拒む者を導かない。[1]

4 アッラーが子をもうけるつもりなら、その創造したものの中から望みのものを選ぶこともできる。［そうしたことをはるかに超越する］かの御方に讃美あれ。アッラー、唯一にして絶対の支配者。



5 かの御方は、諸天と大地を真理により創造した。夜をもって昼を包み、また昼をもって夜を包み、太陽と月を使役し、定められた［究極の］時まで、いずれもよどみなく［軌道を］走る。まぎれもなく、威力ある御方、もっともよく赦す御方。

6 かの御方はあなたがたを一個の魂から創造し、そののち、それ自体からその伴侶をあらしめ、またあなたがたのために、つがいの八頭の家畜を下した。御方はあなたがたを母の下腹に創造し、また三層の暗闇の中に創造を重ねた。それがアッラー、あなたがたの主。王権は御方に属する。その他にいかなる神もない。それなのにあなたがたは、どこへ退いてゆくのか。[2]

7 たとえあなたがたが［真理を］拒もうとも、アッラーはあなたがたから［何も必要とせず］満ち足りている。しかし、しもべたちのためにその忘恩を喜ばない。あなたがたが感謝するなら、かの御方はそれを喜ぶだろう。また荷を負う者は、［自分以外の］他者の荷を負わない。そののち、あなたがたの帰りゆく先はあなたがたの主にある。そしてかの御方はあなたがたに、あなたがたの行ってきたことについて告げ報せるだろう。本当にかの御方は、胸の中に何があるのかを知っている。[3]

8 困難に遭うとき、人間はその主に祈り、悔い改めてこの御方に立ち返る。そののち、この御方からの恩寵にあずかると、以前に祈っていたことは忘れ、アッラーに同位のものを設け、その道から［人々を］迷わせる。［ムハンマドよ、］言いなさい。「わずかのあいだ、［真理を］拒んで楽しんでいなさい。本当にあなたは、火獄の仲間のひとりだ」。[4]

9 夜の一刻、［礼拝のために］従順にひれ伏し、または立ち、来世のことを怖れ、主の慈悲を待ちのぞむ者［と、そうでない者が同じだろうか］。［ムハンマドよ、］言いなさい。「知っている者と知らずにいる者

10 が同じだろうか」。しかし戒めを受け入れるのは、分別をもつ者だけ。[5]
「ムハンマドよ、」言いなさい。「信じるわれのしもべたちよ、あなたがたの主を畏れなさい。この現世に
おいて行いの善良な者には、善良なものがある。またアッラーの大地は広大である。よく耐える者は、
計り知れない報酬をもって十分に報いられるだろう」。[6]
11 「ムハンマドよ、」言いなさい。「本当に私は、アッラーに仕え、宗教においては真摯であるよう命じられ
た。
12 また私は、最初の服従する者「ムスリム」であれ、とも命じられた」。[7]
13 言いなさい。「もし私が主に逆らえば、私は大いなる日の懲罰が恐ろしい」。
14 言いなさい。「私はアッラーに仕え、宗教において真摯であろうとしている。
15 あなたがたは、この御方をさし置いて望みのものに仕えていなさい」。言いなさい。「敗者とは、復活の
日に、自分自身もその家族も失う者のこと」。本当にこれは、明白な損失ではないか。
16 彼らは上から業火をかぶせられ、その足元からもまた。このようにアッラーは、そのしもべたちを恐
怖させる。それゆえわれのしもべたちよ、われを畏れなさい。[8]
17 「その反対に、」ターグートを避け、それらに仕えることなく、アッラーに悔い改めて立ち返る者。彼ら
には良い報せがあるだろう。「ムハンマドよ、」われのしもべたちに良い報せを伝えなさい。
18 御言葉に耳を傾け、その最善に従う者たち。これらの者こそ、アッラーに導かれた者。またこれらの者
こそ、分別をもつ者。
19 では懲罰の御言葉がその上に真実となった者はどうか。「ムハンマドよ、」業火の中にいる者を、あなた
に救えるのか。





20 しかしその主を畏れる者には、彼らのために高く築かれ、川がその下を流れる、居室の上の居室がある。「こ
れが」アッラーの約束であり、アッラーは決して約束を破らない。
21 見なかったのか、アッラーが空から雨を降らせ、それを泉として大地から湧き出させるのを。そののち、
それで様々な穀物を生じ出させる。そののち、それは乾き、あなたがたはそれが黄色くなり、枯れ屑に
されるのを見るだろう。本当にその中には、分別をもつ者のための戒めがある。
22 アッラーがイスラームのためにその胸を広げ、その主の光の上にある者「と、そうでない者が同じだろ
うか」。災禍あれ、アッラーの戒めに対し心を頑なにされた者。これらの者は、明らかな迷いの中にいる。[9]
23 アッラーはもっとも美しい話を啓典として下した。「その語句は」互いによく似ており、何度でも繰り返
し語られるべきもの。それにより、その主を畏怖する者の皮膚は震える。しかし、そののちアッラーを
想い起こすことにより、その皮膚も心も柔らかになる。アッラーの導きとはこのようなもの。これにより、
かの御方は誰であれ御心にかなう者を導く。また誰であれアッラーが迷わせた者に導きはない。
24 復活の日、ひどい懲罰をその顔で受けねばならない者はどうか。不正をなす者は告げられるだろう。「あ
なたがたは、自分が得てきたことを味わえ」。[10]
25 彼ら以前の者たちも、嘘であるとしていた。それで彼らも気づかないところから懲罰を科された。
26 このようにアッラーは、彼らに、現世の生における恥辱を味わわせる。しかし来世の懲罰はさらに大きい。
もし彼らが、知ってさえいたなら。
27 われらは人々のために、このクルアーンの中にあらゆる例えを示しておいた。彼らも、畏れる者となる
だろう。
28 歪みなきアラビア語のクルアーンである。それで彼らも、畏れるようになるだろう。

29 アッラーは例えを示す。争いあってばかりいる同輩たちに属する者と、たったひとりにだけ属する者。彼ら二人が、同じだろうか。アッラーに称賛あれ。いいや、多くの者は何も知らない。

30 ［預言者よ、］本当に、あなたは［やがて］死ぬ。そして本当に、彼らも［やがて］死ぬ。

31 そののち復活の日に、あなたがたは主の御許で論争することになるだろう。

32 アッラーについて嘘をつき、真実が到来したときに嘘よばわりするよりも不正な者があるだろうか。［真理を］拒む者には、その居どころは地獄ではないのか。[11]

33 しかし真実をもたらす者、真実を受け入れる者、これらの者は畏れる者。[12]

34 彼らには、何であれ望むものがその主の御許にあるだろう。行いの善良な者の報いとはこのようなもの。

35 アッラーは、彼らからそのもっとも悪い行いを［赦して］とり除き、彼らのもっとも善い行いに対する報酬をもって報いる。

36 アッラーこそ、そのしもべたちにとり万全ではないか。しかし彼らは、この御方以外のものであなたを怖がらせようとする。アッラーが迷わせた者には、何の導きもない。[13]

37 アッラーが導く者を迷わせることのできる者はいない。アッラーこそ威力ある御方、報復の所有者ではないか。[14]

38 もしあなたが彼らに「諸天と大地を創造したのは誰か」と尋ねたなら、彼らは必ず「アッラー」と言うだろう。言いなさい。「あなたがたは考えたことがあるのか。アッラーが私を困難に遭わせるつもりのとき、あなたがたがアッラーをさし置いて祈るものに、その困難をとり除けるのか。あるいは、かの御方が私に慈悲をかけるつもりのとき、その慈悲を差し止められるのか」。言いなさい。「アッラーが私にとり十分な御方。およそ委ねる者とは、この御方にこそ委ねるもの」。





39 言いなさい。「私の民よ。あなたがたはできることを行いなさい。私もまた［できることを］行う。やがてあなたがたも、知ることになるだろう、

40 屈辱の懲罰は誰に来るのか、永劫（えいごう）の懲罰は誰に降るのかを」。

41 ［預言者よ、］われらはあなたに、真理によって人々のための啓典を下した。それで、誰であれ導かれる者は、ただ自分自身のために導かれる。また誰であれ迷う者は、ただ自分自身に反して迷うだけ。そしてあなたは、彼らの保護者ではない。[15]

42 死ぬときに、また死なずとも眠りのあいだに、その魂を召し寄せるのはアッラー。死が決められていた者についてはそのまま抑え、それ以外については定められた時になって送り出す。本当にその中には、深く考える民への御しるしがある。[16]

43 それとも彼らは、アッラーをさし置いて他の誰かをとりなす者として選ぶのか。言いなさい。「それらは何ひとつ支配できず、また考えることもしないのにか」。[17]

44 言いなさい。「とりなしはことごとくアッラーに属する。諸天と大地の王権はこの御方に属する。そののち、あなたがたはその御許へ帰される」。

45 ただアッラーだけが想い起こされるとき、来世を信じない者の心は嫌がり、縮こまる。しかし、この御方以外のものが想い起こされるとき、彼らは大喜びする。

46 言いなさい。「アッラー、諸天と大地の創始者にして、目には見えないものと見えるものとを知る御方。あなたのしもべたちのあいだで相争われていたことについては、あなたが判断を下すでしょう」。

47 不正をなした者たちは、たとえ地上にある一切のものと、さらにそれと同じだけのものをもって、復活の日、懲罰のひどさからその身をあがなおうとしても［応報を免（まぬが）れない］。アッラーから彼らに、彼らが

思いもしなかったことが現されるだろう。

48 彼らのはたらいた諸々の悪事があらわになり、彼らは、かつて自分があざ笑っていたものに囲い込まれるだろう。[18]

49 困難に遭うとき、人間はわれらに祈る。そののちわれらからの恩寵に浴させると、「私にこれが与えられたのも、私の知識のおかげだ」と言う。いいや、それもひとつの試練というもの。しかし、彼らの多くはそれを知らない。

50 すでに彼ら以前の者も、そのようなことを言っていた。しかし彼らが得てきたものは、彼らの役に立たなかった。

51 彼らの得てきたことの悪が、彼らに降りかかった。それゆえこれらのうち不正をなす者は、彼らの得てきたことの悪に見舞われるだろう。彼らには、逃れることはできない。

52 彼らは知らないのか、アッラーが御心のままにある者の糧を拡げも、また狭めもすることを。本当にその中には、信じる民への御しるしがある。[19]

53 ［預言者よ、］言いなさい。「自分自身に反し、踏み外してしまったしもべたちよ。アッラーの慈悲に絶望してはならない。本当にアッラーは、罪のことごとくをよく赦す。本当にもっともよく赦す御方、もっとも慈悲深い御方。

54 あなたがたの主に悔い改めて立ち返り、懲罰がやって来る前にこの御方に服従しなさい。さもないと、あなたがたは助かることもかなわない。[20]

55 あなたがたも気づかないうちに、突然に懲罰が科される前に、主からあなたがたに下されたもののうち、その最善に従いなさい」。





56 さもないと、自分が「何と無念なことか。私はアッラーのことをおろそかにし、あざ笑う者のひとりだった」と言うことになる。

57 あるいは「もしアッラーが私を導いていたなら、きっと畏れる者のひとりになっていたのに」と言うことになる。

58 あるいは懲罰を目の当たりにしたときになって、「もう一度［現世の生に戻る］機会さえあったなら、行いの善良な者のひとりになるのに」と言うことになる。[21]

59 ［こう告げられるだろう。］「いいや、すでにわれのしるしはあなたに到来していたはず。しかしあなたはそれらを嘘であるとし、高慢にふるまい、［真理を］拒む者のひとりとなった」。

60 復活の日、あなたは、アッラーについて嘘をついていた者の顔が暗くかげるのを見るだろう。高慢な者には、その［ふさわしい］居どころは地獄ではないのか。

61 アッラーは、畏れる者たちを救いの場に救うだろう。悪が彼らに触れることも、彼らが嘆くこともないだろう。

62 アッラーはありとあらゆるものの創造者。ありとあらゆるものごとをとりしきる御方。

63 諸天と大地の鍵はアッラーに属する。アッラーの御しるしを拒否した者は敗者である。

64 言いなさい。「あなたがたは私に、アッラー以外のものに仕えるよう命じるのか、無知の者たちよ」。

65 あなたにも、またあなた以前の者たちにもすでに啓示されているはず。もしあなたが［主に］何ものかを同列に連ねたなら、必ずあなたの行いは全くの無に帰される。そしてあなたは、敗者のひとりとなるだろう。

66 いいや、それよりもあなたはアッラーに仕えなさい。感謝する者のひとりでありなさい。

67 彼らは、アッラーの真価を見極められずにいる。復活の日、大地はことごとくこの御方の握る［御手の］中にある。諸天は御方の右の手に折りたたまれる。讃美あれ、彼らが連ねるものを超越して、いと高くにおわす御方に。22

68 そして喇叭（らっぱ）が吹き鳴らされる。アッラーの御心にかなうものの他は、諸天にあるもの、大地にあるものが気を失う。そののち、もう一度それが吹き鳴らされると、見なさい。彼らは立って［周囲を］見わたす。

69 大地はその主の光で輝き、［行いを記録した］書物が置かれ、預言者たちと証言者たちが連れて来られる。彼ら［人間］のあいだが真理により裁決される。彼らは不当に扱われない。23

70 すべての者が、その行いに応じて十分に報いられる。かの御方は彼らのすることをよく知っている。24

71 ［審判が終わると、真理を］拒んでいた者たちは群衆となって地獄へ駆り立てられる。彼らがそこにやって来ると、その門が開かれる。番をする者たちが彼らに言う。「あなたがたの中から使徒が到来して、主の御しるしを読み聞かせ、あなたがたの、この会する日について警告しなかったか」。彼らは言う。「その通りです」。［真理を］拒む者への懲罰［について］の御言葉が真理となった。

72 彼らは告げられる。「地獄の門に入り、その中に永遠に住まいなさい」。高慢な者の居どころの、何と悪いことか。25

73 その主を畏れていた人々が、群衆となって楽園へ駆り立てられる。彼らがそこにやって来ると、その門が開かれる。番をする者たちが彼らに言う。「あなたがたに平安あれ。あなたがたは純良であった。それゆえここに、永遠に入っていなさい」。

74 彼らは言う。「アッラーに称賛あれ、私たちに約束を果たし、私たちに大地を受け継がせ、また楽園の中では、どこででも私たちの望むままに暮らさせる御方に」。労を惜しまぬ者の報酬の、なんという至福か。





75 ［ムハンマドよ、］あなたは天使たちが玉座の周囲を取り巻き、称賛をもってその主を讃美するのを見るだろう。彼ら［人間］のあいだが真理により裁決される。言われるだろう、「アッラーに称賛あれ、諸世界の主に」と。

1 次の節以降では様々な創造の例が挙げられ、創造が唯一の計画に基づいていること、またその創造者が唯一であることが示される。礼拝や崇拝は、神以外の何ものにも帰されるものではない。神が望むのは、ただ神のみに捧げられる誠実な献身である。

2 八頭の家畜とは、らくだ、牛、羊、山羊のそれぞれ雄と雌を指している。生まれていない赤子を覆う「三層の暗闇」とは、下腹部、子宮、そして羊膜を指す。人間の存在の本質とその維持、成長、そして保護の役割を担うのが神であることは明白である。神こそは、存在の精髄である。

3 神はすべてにおいて自存し、何ひとつ必要とすることのない存在である。したがって、人間の感謝が神に影響を及ぼすことはない。しかし神は常に人間のことを気にかけており、そのため人間が感謝をすれば、それは神の喜びにつながるし、またその反対に、人間の忘恩と不服従は、神の不興を招くのである。すべては「あなたがた」個々人と神との間のことである。誰も「あなた」の重荷を肩代わりすることができないし、「あなた」にも他の誰かの罪を背負ってやることはできない。

4 邪悪を行う者、邪悪を教える者は、現世では栄えているように見えるかもしれない。しかし彼らが実際に満ち足りているかというと、可能性は限りなく低い。彼らは、地獄へと向かう道を踏み固めているだけである。

5 人間が、創造主に対する真に謙譲的で献身的なふるまいに到達できたなら、それはすばらしいことである。それはその人にとっての真の人生の始まりであり、また諸善を行う準備が整ったことを意味している。そうした人は、現世での虚栄に期待することなく、神の恩恵と慈悲に希望を託す。そうした人のことを、内なる人生の本当の価値について何ひとつ知らない人と比較することはできない。

6 人間は常に正しい行いをしなくてはならない。もしも環境や諸条件が、自分の信念に従って行動することの妨げとなる場合は、放逐されるか、あるいは自ら移住するといった苦渋の選択を迫られることにも備えなくてはならない。

7 イスラームとは、第一に神に対する「服従」を意味する。ムスリムとは神に服従し、その命令に従い、そうすることによって、神の法則に服従している宇宙との調和を果たす者を指す。イスラームにおいて、自然の法則は、全宇宙の事物を統治する神の采配ないし摂理という意味で「スンナトゥッラー」と呼ばれている。

8 人間という有限の存在に対し、あらゆる行為には結果があることを警告すると同時に、人間に授けられた有限の自由意志を正しいやり方で行使するようにも告げている。重大な忠告の節である。

9 人は神のメッセージに耳を傾けることにより霊的な理解を深め、神の光にあずかり、置かれている段階に応じた恩恵を、必ず見出すことができるようになる。彼ら・彼女らは、創造主の示す光の中を歩んでいる。神の光を自分の心から締め出してしまった者と同列に語ることはできない。

10 悔い改めることをしない罪人は、復活の日、その全身全霊を厳しい懲罰の下に置かれることになる。自分で自分をかばおうにも、手も足もその力を持たないまったくの孤立無援となる。

11 神について「嘘をつく」とは、実際に複数の神々を信仰しているかどうかよりも、神以外に神の神性を共有する人や事物が存在する、という考え方を指す。神が人間の姿で現れるといったいわゆる「化身」や、聖人・聖者と呼ばれる人物には半神的な力が与えられているとする捉え方も含まれる。





12 預言者ムハンマド、彼以前の神のすべての預言者たち、そして預言者たちを支持し、彼らの教えを実践したすべての行い正しい人々は、神の報奨を受け取ることだろう。

13 「しかし彼らは、この御方以外のものであなたを怖がらせようとする」。ここでいう神以外のものとは、聖人や聖者（その生死を問わず）、金銭や財産、権力、社会的な地位、国内外の相対的な優越性といった、人間の心がなびきがちな具体的な何かに始まり、自己満足をもたらしてくれる抽象的な概念（人間は自存できるといった考え方がその根本にある）や思想、あるいは人間の思考や欲望をたやすく支配してしまえる偽りの価値観などが挙げられる。

14 神の真理にしっかりとすがっているなら、何があろうと迷うことも裏切られることもない。

15 啓示は、神からその使徒を通してすべての人類とジンに送られたものである。もしも彼らがそれを受け入れたなら、それは彼ら自身の益となる。彼らがそれを拒んだなら、それは彼ら自身の損失となる。神から預言者への戒めとは、言い換えるなら「預言者であろうと、他者の行為の責任は負えない」ということである。

16 生と死、睡眠の不思議が説き明かされている。死が訪れたとき、人間は身体的な生の終わりを迎えるが、その魂が死ぬことはない。魂は、霊的な世界のリアリティにより近い存在の次元へ帰ってゆくのである。「その魂を召し寄せるのはアッラー」。

17 助けを必要としているときに、神以外の誰かや、あるいは何らかの力に頼ったり、仲裁や仲介といったものを求めたりするべきではない。預言者たち、聖者たち、あるいは英雄と呼ばれるような存在でさえ、神の許しがない限り仲裁の権限を持たないのである。

18 「かつて自分があざ笑っていたもの」。すなわち神の預言者たちが説く死後の生と霊的な真理のリアリティのこと。

19 神の贈り物は万人に授けられる。ある者は、他の者よりも多くを受け取ることもあるかもしれない。しかしすべては神の賢明な計画に沿ってなされることである。神の意志は公正である。神はあらゆる創造物の中に善を見出す。

20 死の間際の悔い改めは受け入れられない。四章一八節も参照。

21 二章一六七節、二六章一〇二節、また六章二七、二八節も参照。

22 神の絶対的な大権と統治を暗示するのに、「手」という語が明白に比喩として使用されている例は、クルアーンにも真正ハディースにも多く見られる。ここでの「右の手」も同様に比喩であり、加えて神には左右や上下といった方向はない。

23 一四章四八節も参照。復活の日には、「大地が大地でないものに変えられ、諸天もまたそうなる」。

24 九九章七節から八節も参照。「塵ひと粒の重みでも、善をなした者はそれを見る、塵ひと粒の重みでも、悪をなした者はそれを見る」。原子の粒ひとつ分でさえ善をなせば、それに見合った報奨を授かる。同様に、原子の粒ひとつ分でさえ悪をなせば、それに見合った懲罰を受ける。

25 人間が自分自身に満足するのは、単に自分を過大評価しているに過ぎず、それは高慢の始まりである。

# 第四〇章　アル＝ムゥミン　信仰者

マッカ啓示

アル＝ガーフィル（「赦す者」の意）の名でも知られる本章は、マディーナで啓示された五六節と五七節以外はマッカで啓示された。本章の名は二八節から四五節、フィルアウンの館にいたある信仰者が、ムーサーとハールーンに逆らわないよう、一族を説得しようと試みる場面に由来している。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 ハー、ミーム。[1]

2 啓典は、アッラーから啓示される。威力ある御方、すべてを知る御方。

3 諸々（もろもろ）の罪を赦し、悔い改めを受け入れ、応報に厳しい、豊潤の所有者。この御方の他に、いかなる神もない。行き着く先は、この御方にある。

4 ［真理を］拒む者以外に、アッラーの御しるしに異を唱える者は誰もいない。それゆえ彼らが［奔放に］土地を往来しようと、あなたは欺（あざむ）かれてはならない。[2]

5 彼ら以前にもヌーフの民が、また彼ら以降にも様々な徒党が［遣わされた使徒を］嘘であるとしていた。





すべての共同体がその使徒を捕えようと企み、虚偽をもって異を唱え、真理を打ち負かそうとした。しかしわれらは彼らを捕えた。その応報はどれほど［熾烈（しれつ）］であったか。[3]

6 このようにあなたの主の御言葉は、［真理を］拒む者の上に真理となった。本当に彼らは火獄の仲間。

7 ［主の］玉座を担う者もその周囲の者も、称賛をもってその主を讃美し、信じ、また信じる者たちのために赦しを願う。「主よ。あなたの慈悲と知識は、あらゆるものにあまねく及びます。それゆえ悔い改めてあなたの道に従う人々を赦してください。彼らを、業火の懲罰から守ってください。[4]

8 主よ。彼らを、あなたが彼らに約束した永遠の園に入れてください。彼らの祖先、配偶、子孫の中で、誰であれ正しい者もまた。もっとも威力ある御方、もっとも賢明な御方とはあなたのこと。

9 また彼らを悪から守ってください。あなたが悪から守った者は、その［復活の］日、確かにあなたが慈悲を垂れた者ということになります。大いなる成就とは、まさしくこのこと」。

10 ［その日、真理を］拒んでいた者は告げ知らされるだろう。「あなたがたに対するアッラーの嫌悪は、あなたがた同士の嫌悪よりもいっそう大きい。信仰へ呼び招かれていながら、あなたがたは拒んでいたため」。

11 彼らは言うだろう。「主よ。あなたは私たちに二度の死をもたらし、二度の生を与えました。今こそ私たちは自分の罪を認めます。何とかして抜け出す道はありますか」。[5]

12 それは、ただアッラーのみに呼びかけるべきときにあなたがたは拒み、かの御方に何ものかが同列に連ねられるときには信じたため。判断はただアッラーのみに属する、至高の御方にして至大の御方に。

13 あなたがたにその御しるしを見せ、またあなたがたのために、天から糧を下す御方。しかし戒（いまし）めを受け入れる者はいない、悔悟して常に立ち返る者を除いて。[6]

14 それゆえアッラーを呼び求め、宗教において真摯でありなさい、たとえ［真理を］拒む者が嫌おうとも。

15 あらゆる位階の高きにおわす、玉座の所有者。御心にかなうしもべの上には、その命令により聖霊を投じ、会するその日について警告する。[7]

16 ［墓の中の］彼らがあらわとなるその日、何ひとつアッラーから隠しおおせない。「この日、王権は誰のものか」。「アッラー、唯一にして絶対の支配者のもの」。

17 その日、誰もがそれぞれの得てきたことに応じて報いられる。それは不正のない日。本当にアッラーは、たちまちにして清算する御方。

18 ［預言者よ、］差し迫るその日について彼らに警告しなさい。そのとき心臓は喉元にせり上がり、息を詰まらせる。不正をなす者には親しい友も、聞いてもらえるようなとりなす者もいない。[8]

19 目をくらますものも、胸に押し隠すものも、かの御方はよく知っている。[9]

20 アッラーは真理をもって［人間を］裁く。しかし、彼らがかの御方をさし置いて呼び求めているものには、何も裁くことができない。本当にアッラーこそはすべてを聞く御方、すべてを見る御方。

21 彼らは地上を旅し、彼ら以前の者の結末が、どのようであったかを見たことはないのか。彼ら［以前の者］は、その力においても、地上に残した諸々の跡においても彼らより強大であった。しかしアッラーは、彼らをその罪ゆえに捕えた。彼らには、アッラーに対し彼らをかばう者が誰もいなかった。

22 それは彼らの使徒たちが、［アッラーの大権を示す］明白な証をもって彼らのところへ来ていたのに、彼らが拒んだため。それゆえアッラーは彼らを捕えた。本当に、強力にして応報に厳しい御方。

23 かつてわれらは、われらのしるしと、明白な権威とともにムーサーを遣わした、

24 フィルアウンと、ハーマーンとカールーンに。しかし彼らは「嘘つきの魔術師だ」と言った。





25 われらの許から真理が彼らにもたらされると、彼らは言った。「彼を信じる者たちの息子たちを殺し、女たちは生かしておけ」。しかし信仰を否定する者の企み（たくら）は、ただ誤りの中にあるのみ。[10]

26 フィルアウンは言った。「ムーサーの殺害は私にやらせなさい。そして彼［ムーサー］には、彼の主に［救ってくれと］祈らせなさい。本当に私は、彼があなたがたの宗教を変えるか、あるいはこの地に退廃を広めるのでは、と恐ろしい」。[11]

27 ムーサーは言った。「清算の日を信じないすべての高慢な者に対して、私は、私の主であり、またあなたがたの主である御方に加護を求めます」。

28 フィルアウンの一族の中で、自分の信仰を秘めていた信じるひとりの男が言った。「あなたがたは、彼が『私の主はアッラーである』と言うというだけで、人ひとりを殺害するのですか。確かにあなたがたの主から、明白な証をあなたがたにもたらしたというのに。もし彼が嘘をついているのなら、その嘘を負うのは彼です。しかし、もし彼が真実を語っているのなら、あなたがたを脅かしているものの一部はあなたがたに降りかかるでしょう。本当にアッラーは行き過ぎた者、嘘をつく者を導かない。[12]

29 私の民よ。今日、王権はあなたがたにあり、この地を支配しています。しかし、もしアッラーの威（い）が私たちにもたらされたなら、誰が私たちを助けてくれるでしょうか」。フィルアウンは言った。「私はあなたがたに、私の見るところを見せているに過ぎない。私はあなたがたを、ただ真っ当な道に導くだけ」。[13]

30 すると、信じるその男は言った。「私の民よ。本当に私は、かつて徒党を組んだ諸々（もろもろ）の者たちにあったのと同じような日が、あなたがたにもあるのではと恐ろしい、

31 ヌーフ、アード、サムードの民や、彼らの後の者たちと同じような窮地に立たされるのでは、と。アッラーは、決してそのしもべに不正なことを欲さない。[14]

32 私の民よ。本当に、私はあなたがたのために、「互いを」呼びあう日を恐れている。

33 あなたがたが背を向けて逃げようとするその日、アッラーに対してあなたがたをかばってくれる者はいない。誰であれ、アッラーが迷わせた者を導く者はいない。

34 以前にも、すでにユースフがあなたがたに明白な証をもたらしたというのに、あなたがたは、彼がもたらしたものを疑い続けていました。そして彼が亡くなると、あなたがたは『彼の「亡き」後に、アッラーが使徒を再び遣わすことはないだろう』と言いました。このようにアッラーは、行き過ぎた者、疑いを抱く者を迷わせる。[15]

35 アッラーの御しるしについて、何の権威も与えられていないのに異を唱える者は、アッラーの御許でも、また信じる者の許でも大いに憎まれるでしょう。このようにアッラーは、すべての高慢な暴君の心を封じるのです」。

36 フィルアウンは言った。「ハーマーンよ、私に高い塔を築け。私が通り道に至れるように、

37 諸天を通る通り道に。ムーサーの神を見てこよう。本当のところ、彼は嘘つきに違いないと思うが」。このように、フィルアウンには自分の行いの悪さがすばらしいもののように見え、「正しい」道から閉め出された。フィルアウンの企(たくら)みは、ただ破滅でしかなかった。[16]

38 すると、信じるその男は言った。「私の民よ、私に従いなさい。私があなたがたを、真っ当な道に導きましょう。

39 私の民よ。この現世の生など、一時の楽しみに過ぎません。来世こそが終の館です。

40 誰であれ悪を行った者には、それと同様の報いがあるだけ。しかし信仰者として正しい行いをした者なら、男であろうと女であろうとこれらの者は楽園に入り、その中で計り知れない糧をもたらされるでしょう。





41 私の民よ、私はあなたがたを救いへと呼び招いているのに、あなたがたは私を火獄へと呼び招くとはどういうことか。

42 あなたがたは私を、アッラーを拒み、私の知らない何ものかをかの御方と同列に連ねるよう呼び招く。私はあなたがたを、もっとも威力ある御方、もっともよく赦す御方へと呼び招いているのに。

43 紛れもなく、あなたがたは私を、現世においても来世においても招かれるに値しないものへと呼び招いている。私たちの戻るところはアッラーにある。行き過ぎた者は火獄の仲間となるでしょう。[17]

44 いつかあなたがたは、私の言ったことを想い起こすでしょう。私は、私のことについてはすべてアッラーに委ねています。本当にアッラーはしもべたちをよく見ています」。

45 そこでアッラーは、彼らの謀(はか)りごとの悪から彼を守った。しかしフィルアウンの一族は最悪の懲罰に封じ込められてしまった。

46 業火である。朝も晩も、彼らはそれにさらされるだろう。そして「定められた」かの時が現れる日、「フィルアウンの一族を、もっとも厳重な懲罰に入らせよ」「と告げられる」。[18]

47 彼らが業火の中で口論するとき、弱い者が高慢だった者たちに言う。「私たちは、あなたがたに従っていた。それゆえ私たちのために、幾らかでも業火を防いでください」。

48 高慢だった者たちは言う。「本当に、私たちのいずれもがこの中にいる。本当に、アッラーは、すでにしもべたちのあいだのことを決断したのだ」。

49 業火の中の者たちは、地獄の番をする者たちに言う。「あなたがたの主に、一日でも私たちの懲罰を軽くするよう呼びかけてください」。[19]

50 彼ら「地獄の番をする者たち」は言う。「あなたがたの使徒たちが、明白な証をもってあなたがたのとこ

ろへ来ていたのではなかったか」。彼ら［業火の中の者たち］は言う。「その通りです」。すると彼ら［地獄の番人たち］は言う。「それなら、［自分たちで］呼びかけよ。［真理を］拒む者の呼びかけなど、ただ誤りの中にあるばかりではあるが」。

51 われらは、われらの使徒たち、また信じる者たちを、現世の生においても、また証言者たちが立つ日においても必ず助けるだろう。[20]

52 その日、不正をなす者の言い訳は何の益にもならない。彼らは忌まれ、悪い館があるだろう。

53 かつてわれらはムーサーに導きを与え、イスラエルの民に啓典を継がせた。

54 分別［できる理性］をもつ者の、導きともなり戒めともなるもの。

55 ［ムハンマドよ、］それゆえよく耐えていなさい。アッラーの約束は真理である。あなたの罪の赦しを願い、晩に、また朝に、称賛をもってあなたの主を讃美しなさい。[21]

56 アッラーの御しるしについて、何の権威も与えられていないのに異を唱える者。彼らの胸の中にあるのは、手に負えない高慢さだけ。それゆえアッラーに加護を求めなさい。本当にすべてを聞く御方、すべてを見る御方。

57 まさしく諸天と大地の創造は、人々の創造よりも偉大である。しかし人々の多くは、そのことを知らない。

58 目の見えない者と見える者は等しくない。信じて正しい行いをする者と悪人は等しくない。あなたがたのうち、想い起こす者はわずかであるが。

59 本当にその時は到来する。そのことに疑いの余地はない。しかし人々の多くは信じない。[22]

60 あなたの主は告げた。「われに祈れ。われはあなたがたに応じよう。われに祈るに高慢な者たちは、その身を縮めて地獄に入ることになるだろう」。





61 あなたがたの憩いのために夜を、また［ものごとが］目に見えるように昼の光を設けたのはアッラーである。本当にアッラーは、人々に対し御恵みゆたかである。しかし人々の多くは感謝しない。[23]

62 それがアッラー、あなたがたの主であり、ありとあらゆるものごとの創造主。その他に、いかなる神もない。それなのに、どうしてあなたがたは惑わされるのか。

63 アッラーの御しるしを拒む者は、このように惑わされるもの。

64 あなたがたのために大地を定住の場とし、空を［掲げて］天蓋とし、あなたがたを形づくり、その姿を美しくし、諸々のよいものをあなたがたの糧とし［て与え］たのはアッラーである。あなたがたの主であるアッラーとはこのような御方。それゆえアッラーに祝福あれ、諸世界の主に。[24]

65 永生する御方に。その他に、いかなる神もない。それゆえこの御方に祈りなさい。宗教においては真摯でありなさい。アッラーに称賛あれ、諸世界の主に。

66 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「本当に私は、あなたがたがアッラーをさし置いて祈っているものに仕えるのを禁じられた。明白な証がもたらされ、私は諸世界の主に服従するよう命じられた」。

67 あなたがたを土から創造し、それから精のひとしずくに、それから血の凝ったものに、それからあなたがたを赤子として生まれ出させ、それから十分に成長させ、それから老いさせるのはこの御方。あなたがたの中には、その前に召され［て亡くな］る者もあるだろう。それでも、あなたがたを定められた時まで至らせる。それによりあなたがたも、考えるようになるだろうと。

68 生を与え、死をもたらすのはこの御方。何ごとかを決めるとき、それにただ「在れ」と告げれば、それは在る。

69 見なかったのか、アッラーの御しるしについて異を唱える者たちを。彼らはどれほど遠ざかったことか。

70 啓典も、われらが使徒にもたせて遣わしたものも嘘よばわりする者たち。やがて彼らも、知ることになるだろう。

71 彼らの首に枷(かせ)がかけられ、鎖で引きずられるとき、

72 煮えたぎるものの中に、そののち、彼らを焼く業火の中に。

73 そののち、彼らは告げられるだろう。「どこにあるか、あなたがたが同列に連ねて［仕えて］いたものは、

74 アッラーをさし置いて」。彼らは言う。「あれらは、私たちから失われました。いいや、以前の私たちは、何かに祈っていたのではないのです」。このようにアッラーは、［真理を］拒む者を迷わせる。[25]

75 「これは、あなたがたが地上において真理によらずして有頂天になり、また傲慢な態度であったため。

76 地獄の門に入り、その中に永遠に住まいなさい。高慢な者の居どころの、何と悪いことか」。

77 ［ムハンマドよ、］それゆえよく耐えていなさい。アッラーの約束は真理である。われらが彼らに約束したものの幾らかを、われらがあなたに示そうとも、あるいはあなたを［死をもって］召そうとも、彼らは、いずれわれらの許へ帰される。

78 われらはすでに、あなた以前にも［多くの］使徒たちを遣わしてきた。その中のある者についてはあなたに物語った。またある者についてはいまだ物語っていない。しかしいずれの使徒も、アッラーの許しなくして御しるしをもたらすことはできなかった。アッラーの命令が到来するとき、真理による決着がなされる。こうして、虚偽をなす者はここに失われる。[26]

79 あなたがたのために家畜をあらしめたのはアッラーである。あなたがたが、その中のあるものに乗ったり、またあるものは食べたりできるようにと。

80 ［その他にも］それらには、あなたがたのための諸々(もろもろ)の益があり、またそれらにより、あなたがたの胸の





中にある願望が満たされる。それらの上に［乗り］、また船の上に［乗り］、あなたがたは運ばれてゆく。

81 アッラーはあなたがたにその御しるしを現した。それなのにあなたがたは、アッラーのどの御しるしを拒否するのか。

82 彼らは、地上を旅し、彼ら以前の者たちの結末がどのようであったかを見たことはないのか。彼ら［以前の者］は、数において彼らよりも多く、その力においても、地上に残した諸々(もろもろ)の跡においても彼らより強大であった。しかし彼らが得てきたものは、何の役にも立たなかった。

83 彼らの使徒たちが、明白な証をもって彼らのところに到来したとき、彼らは、自分たちにある知識に有頂天になった。しかし彼らがあざ笑っていたものが、彼らを囲い込んだ。

84 われらの威(い)［たる懲罰］を見るときになって、彼らは言った。「私たちは、ただアッラーだけを信じます。そして私たちが、この御方と同列に連ねていたものを拒否します」。[27]

85 しかし、われらの威(い)［たる懲罰］を見てからでは、彼らの信仰は何の役にも立たない。それが過ぎ去ったしもべたちに対するアッラーの慣行。こうして、［真理を］拒む者はここに失われる。

1 これらの神秘文字については、二章一節の注を参照。

2 人が気ままにふるまえるのは、神が猶予を与えているからに過ぎない。行いによっては来世で懲罰を科されるだろう。

3 土地のあちらこちらに点在する荒れ果てた廃墟も、かつては信仰持たざる人々の住まいであったことや、彼らがどのように滅ぼされたかを思い起こすよう促し、行いを改めない限り同様の結末が待ち受けていることが警告される。

4 天上の神の玉座を担うのは八名の天使たちの役目である。彼らは全方位から玉座を囲み、「称賛は神にこそあれ、諸世

5 界を統べる御方よ」と声高に叫び、主の栄光と賛美を歌い上げる。六九章一七節を参照。

第一の「死」とは、現世における生以前の無存在の状態、あるいは人間が胚子であった状態を指す。生命を宿す以前の、泥土で形づくられた器の時点では死んでいるに等しい。第一の生は誕生によって始まる。地上における、いわゆる現世の生である。第二の死とは、地上における生を終えた身体の死、身体の生の終焉である。第二の生は復活に始まる。そのとき信仰を否定していた人々は言うだろう。「ここから逃れる方法はないものか？　地獄の火炎を抜け出し、しばらくの間、現世に戻って信仰する者として生き、信仰する者として死に、その上で信仰する者として来世に戻ってくることはできないだろうか」。

6 雨や太陽、大気がなければ、何ひとつ育たない。ここで示されている神の御しるしとしての「糧」は、いつ・どこにおいてもそれを賜われることが保証されている。それは「身体、精神、そして霊的な発達と成長」のために人間に授けられる、あらゆる種類の糧である。これについて神は、多くの章を割いて何度も繰り返し説き明かしている。

7 神はあらゆる栄誉と尊厳、権威の源泉であり、あらゆる位階や階梯（かいてい）を高め、昇らせるのは神である。神は「アッ＝ラーフィウ」、すなわち「高める御方」である。自らの創造物を祝福し、しもべや天使たちの位階を高める。「ルーフ（聖霊ないし息吹）」とは、啓示を含めあらゆる天啓を指す。「会するその日」とは、神のあらゆる被造物が互いにまみえる日でもある。どれほど遠く離れて散らばっていたとしても、復活の日にはすべての人々が一堂に集められ、主に迎えられる。以前に創造されたものも、以後に創造されたものも共に集められ、創造されたものどうしが出会い、かつ彼らを創造した者に出会う。

8 「シャファーア（仲裁、とりなし）」については一〇章三節も参照。クルアーンは、生死問わず聖者たちや預言者たちによる無条件の「とりなし」に対する信仰を認めていない。クルアーンは、神の「思し召しなくして、とりなせる者はいない」と述べる。審判の日、神がその預言者たちによる「とりなし」を認めるのは、すでに贖罪（しょくざい）が受け入れられている





者に限られる。

9 「目をくらますもの」には、複数の意味がある。（1）欺（あざむ）く者、だます者の目を指すとも考えられる。例えば憎しみを抱いているにもかかわらず、いかにも愛情あるかのように見せかける。（2）見るべきでないものを見る者の目。見てはならないものを見ることにより、目による罪を犯したことになる。

10 二四節で言及されているフィルアウン、ハーマーン、カールーンの三人のうち、フィルアウンとハーマーンはコプトびとだったが、カールーンはイスラエルの民であった。以降の節で告げられている通り、「彼を信じる者たちの息子たちを殺し、女たちは生かしておけ」と命じたのはフィルアウンである。しかしこの案をフィルアウンに吹き込んだのはカールーンであった。聖職者や神の義人を見下していたカールーンが、フィルアウンに提言したものとされる。

11 フィルアウンの「ムーサーの殺害は私にやらせなさい」という言葉は、彼の手勢にはムーサーを殺害できなかったことを示すと同時に、フィルアウンがどれほどムーサーを恐れたかを示している。王宮の人々の中には、フィルアウンにこう告げた者もあった。「ムーサーを恐れる必要はない。彼を放置しなさい。ムーサーを殺害すれば、民衆はあなたがどうしてそれほどまでにムーサーを恐れるのか、どうしてあなたにはムーサーを御すことができなかったのかと疑念を持つだろう」。

12 この信仰者は、フィルアウンのいとこであったとされている。

13 この節でフィルアウンが示唆しているのは「ムーサーの殺害」であるが、彼はそれを公然と告げることは避けていた。彼は自分の心の中に抱いていることを隠そうとしていた。

14 この節で名指しされている民とは、すべて神とその預言者に対する不服従ゆえに滅ぼされた。神は歴史を通して、人類が邪悪を捨てない限り、こうしたことは再び起こるであろうと幾度となく警告している。神は、一部の人々が考えるような不公正なことはしない。その行いにより故意に災難を招き入れているのは、常に人間の側なのである。

15 ユースフが遣わされてからと、ムーサーが遣わされるまでの間隔はさほど長くはなかった。エジプトの人々は霊的なメッセージを無視し、エジプトに住むイスラエルの民を迫害し続けていたが、それを救ったのがムーサーであった。

16 「通り道」と訳出した「アスバーブ」という語は、「方法」「手段」などを意味しており、この節と次の節に繰り返し用いられている。フィルアウンが天上の王国を地上の王国と同じようなものと考えており、霊的な事柄について、「高い塔」といった物質的なあり方でしか捉えられずにいることが強調されている。フィルアウンは、自分には理解できないことを述べ、自分の思いどおりにならないムーサーのことを、嘘をついているに違いないと思うようになっていった。

17 この節から理解できることは次の通りである。（1）崇拝するに値するのは神のみである。（2）私たちの還りつく先は、永遠の実在である神の御許である。（3）心の底から悔い改め、神が慈悲をもって赦しを授けるのでない限り、虚偽を崇拝することは、虚偽に加担したことに対する懲罰を招く。

18 ムーサーの時代、フィルアウンとその民には多くの災難が下されたが、彼らが来世で受ける懲罰は、現世における懲罰とはまったく異なっている。業火は昼夜を問わず常に燃え盛っており、またそれには終わりがないのである。

19 「火炎の中の者たち」。罪人たちは地獄の番人をつとめる天使たちに、仲裁をしてくれるよう願い出る。しかし天使たちは彼らを見張るよう命じられてその場にいるのであって、仲裁役としてではない。天使たちは無邪気に尋ねる。「あなたがたには、あなたと同じ人間の中から使徒が遣わされなかったのか。現世に生きている間に、使徒の警告を受け取らなかったのか」。彼らは現世にいる間にこそ祈るべきであった。祈りとは時間や空間を占めるものではなく、ただ信仰だけがその証となる。

20 ここでの「証言者たち」とは天使たちのことである。彼らは、使徒たちが真理を説いたこと、また信仰を否定していた者たちがそれを受け入れなかったことを証言する。

21 「アッラーの約束は真理である」。神の約束とは、信仰者たちが勝利者となることである。ムーサーがフィルアウンに立





ち向かい、勝利したことは、神の約束が真理であることの証である。

22 現世は、ちょうどそれに始まりがあるのと同じように、必ず終わりを迎える時が来る。それが復活の日、裁きの日であり、その時こそ地上における人間の生が完成されるのである。同時にそれは来世へと至る門であり、永遠の新たな生の始まりでもある。

23 昼と夜の交替は、神の慈悲と恩恵を知る者の注意をひくものである。夜は休息のために、また昼は主の恩恵を求めるためにある。

24 ここでいう「定住の場」とは、一時的に休息をとるための場所として解釈されることもあれば、あるいはその後に、来世における永続的な生が続くものという前提において、神によって定められた一定の期間、地上に生きることを指すとも考えられる。「糧」という語は、生存のための食べものや水などばかりではなく、身体や精神、道徳や倫理の別なく、あらゆる側面においてすべての人間が成長と発展のために必要なものを意味している。

25 偶像を崇めていた者たちは、自分たちが崇めていたのは偶像ではないと言って否定するだろう。しかし目の前に偶像を置かれれば、彼らはたちまち惑う。「偶像」といったとき、それは何も有形のものに限定されないことを理解する必要がある。当然ながらある種の思想、ある種の主義など、無形のものも「偶像」の範疇（はんちゅう）に含まれる。

26 使徒たちはあくまでも「遣わされた」のであって、自分の力量によって到来したのではなく、神の奇跡によって支えられていたことが指摘されている。神は十二万と四千の使徒や預言者たちを遣わしたとされているが、クルアーンがその名を挙げて言及し、その物語を伝えている預言者は二十五名にとどまっている。

27 神を信じず、現世の生の中で神の徴を無視していた人々の多くは、後悔して次のように言う。「私たちは神を信じ、かつて私たちが神と同位に配してきた様々なものを否定します」。しかし、永遠の地獄の業火が運命づけられてからでは遅すぎるのである。

# 第四一章　フッスィラ　解き明かし

マッカ啓示

本章は三節に現れる語にちなんでこの名で呼ばれている。その他に「ハー・ミーム章」、または「アル＝マサービーフ章」の名でも知られている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 ハー、ミーム。

2 慈愛あまねく、慈悲深い御方からの啓示。

3 御しるしが解き明かされた啓典、知力ある民のためのアラビア語のクルアーン。

4 良い報せ（しら）を伝え、警告するもの。しかし彼らの多くは背き去り、耳を傾けようとしない。

5 彼らは言う。「私たちの心には、あなたが私たちを呼び招くものに対する覆いがされている。私たちの耳は鈍くされ、また私たちとあなたのあいだには壁がある。それゆえあなたはあなたでことを行え。私たちも私たちでことを行う」。[1]

6 ［預言者よ、］言いなさい。「私はただ、『あなたがたの神とは唯一である』と啓示されている、あなたが





たと同じ人間のひとりに過ぎない。それゆえ、かの御方のまっすぐな道をとり、その赦しを願いなさい。災禍（さいか）あれ、多神を奉ずる者、

7 そのような者は喜捨もせず、来世についても［その真理を］拒む者。

8 信じて正しい行いをする者には、尽きることのない報酬があるだろう」。

9 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「本当にあなたがたは、二日の間で大地を創造した御方を拒んで、その御方に同位のものを設けるのか。その御方こそ、諸世界の主であるのに」。[2]

10 かの御方は、そこに不動の山々を据えて祝福し、また四日の間でその中に［生きるもののために］、求める者に応じてその要を満たすものを等しく計らった。

11 そののち、煙［のよう］であった天［の創造］にのぞんだ。またそれと、大地とに告げた。「いずれも［存在の領域に］来たれ、好むと好まざるとにかかわらず」。それらは言った。「私たちは、喜んで参じます」。[3]

12 そこでかの御方は、二日の間でそれらを七層の天に完成させた。またすべての天それぞれに啓示して諸法を定め、もっとも下層の天を燭（ともしび）で飾り、また守護した。それが、威力ある御方にしてすべてを知る御方の計らい。[4]

13 しかし、もし彼らが背き去るなら言いなさい。「私は、アードとサムードの［襲われた］落雷と同じような落雷をあなたがたに警告している」。

14 使徒たちが彼らに、「アッラーにのみ仕えなさい」と、前からも後ろからも到来したときのこと。彼らは言った。「もし私たちの主がそう望むなら、天使たちを下しただろう。私たちは決して、あなたがたが遣わされてもってきたものを拒む」。[5]

15 アードについては、彼らは真理なくして地上で高慢にふるまい、「力において、私たちよりも強いものが

あるだろうか」などと言った。彼らよりも、彼らを創造したアッラーの方こそ力において強い御方ということが、彼らには分からなかったのか。彼らは、われらのしるしを拒み続けた。[6]

16 それゆえわれらは、現世の生における恥辱の懲罰を彼らに味わわせるために、惨事の日々に、彼らの上に暴風を送った。しかし来世の懲罰はさらなる恥辱であり、彼らが助けられることはないだろう。[7]

17 またサムードについては、われらは彼らを導いたが、彼らは、導きよりも目を閉ざすことを好んだ。それゆえ恥ずべき懲罰の落雷が彼らを捕えた、彼らが得てきたことのために。[8]

18 われらは［主を］信じ、畏れてもいた者たちを救った。

19 その日、アッラーの敵が集められ、火炎への隊列を組まされる。

20 そして彼ら［全員］がそこへやって来たとき、彼らに反してその耳が、目が、皮膚が、彼らの行ってきたことを証言する。

21 すると彼らは、自分の皮膚に言う。「どうして私たちに反する証言をするのか」。それらは言う。「あらゆるものを語らせるアッラーは、私たちをも語らせます。あなたがたを最初に創造したのはかの御方であり、そしてあなたがたは、かの御方に帰されるのです。[9]

22 あなたがたは、自分の耳や目や皮膚が、あなたがたに反して証言することから［、そんなことになるとは思わなかったために］その身を隠そうともしませんでした。しかもあなたがたは、あなたがたの行いの多くをアッラーは知らないものと思い込んでいました。[10]

23 主についてのあなたがたの思い込みがあなたがたを凋落させ、あなたがたは敗者となったのです」。

24 それで、たとえ彼らが耐えようと、火炎が彼らの居どころとなり、たとえ彼らが言い訳をしようと、償わせてももらえない。





25 われらは彼らに、その同類を決めておいた。それらが彼らに、前にあるものも後ろにあるものも、すばらしいもののように見せていた。そして彼ら以前に過ぎ去ったジンや人々の諸々の共同体への御言葉通りのことが、彼らに対しても真理となった。本当に彼らは敗者である。[11]

26 ［真理を］拒む者たちは言う。「このクルアーンに耳を傾けてはならない。その［復唱される］あいだは騒がしくしていなさい。そうすれば、あなたがたは打ち負かすことができるだろう」。

27 しかしわれらは、［真理を］拒む者たちに必ず厳重な懲罰を味わわせるだろう。またわれらは、彼らの行いのうち最悪のものに対して必ず報いるだろう。

28 これが火炎、神の敵への報い。われらのしるしを拒んでいたことへの報いであり、その中が、彼らの永遠の住まいとなる。

29 ［真理を］拒む者たちは言う。「主よ、ジンや人間のうち、私たちを迷わせた者を見せてください。私たちの足の下に踏みつけ、もっとも低い者にしてやります」。

30 「私たちの主はアッラーです」と言い、そののちは［主へと至る道に］まっすぐに立つ者たち。彼らには天使たちが下る。「恐れることはない。嘆くことはない。あなたがたに約束されている楽園の良い報せを受け取りなさい。[12]

31 私たちは、現世と来世におけるあなたがたの庇護者。そこにはあなたがた自身が望むものがあり、またあなたがたの呼び求めるものがある、

32 もっともよく赦す、もっとも慈悲深い御方からの歓待として」。

33 ［人々を］アッラーに呼び招き、正しい行いをし、『本当に、私は服従する者［ムスリム］のひとりです』と言う者よりも美しく語る者があるだろうか。[13]

34 善と悪とは等しくない。より良いものをもって返しなさい。そうすれば、見なさい。あなたとのあいだに敵意のあった者でも、親しい友のようになるだろう。

35 しかしよく耐える者を除いて、それはかなわないだろう。［美徳という］大いなる幸運の所有者を除いて、それはかなわないだろう。[14]

36 悪魔からの誘惑があなたをそそのかすなら、アッラーに加護を求めなさい。本当にすべてを聞く御方、すべてを知る御方。[15]

37 夜と昼、太陽と月はかの御方の御しるし。太陽にも、月にもひれ伏してはならない。そのいずれをも創造したアッラーにひれ伏しなさい、もしあなたがたが仕えているのが、本当にかの御方であるなら。

38 たとえ彼らが高慢にふるまうとしても、あなたの主の御許にある者たちは、夜も昼もかの御方を讃美して倦むことがない。

39 かの御方の御しるしのひとつを、あなたは荒涼とした大地に見る。われらがその上に雨を降らせるとき、それは弾み、ふくらむ。本当に、それに生をもたらす御方が、死せるものを生き返らせる御方。本当に、あらゆるものごとにおいて全能の御方。

40 本当に、われらのしるし［の中にある真理］を歪める者たちが、われらから隠れることはできない。業火に投げ入れられる者の方が良いのか、あるいは復活の日、安心してまかり出られる者の方が良いのか［考えてみなさい］。あなたがたの望む通りにふるまいなさい。本当にかの御方は、あなたがたがしていることを見ている。

41 戒めが彼らに到来しても、［真理を］拒んだ者たち。本当に、それは威力ある啓典であるのに。

42 虚偽は、前からも後ろからもそれに近づくことはできない。それはもっとも賢明にして称賛にふさわし





い御方からの啓示。

43 ［ムハンマドよ、］あなたが言われていることは、すでにあなた以前の使徒たちが言われていたことに他ならない。あなたの主は赦しの所有者にして、痛烈な応報の所有者。

44 もしわれらがクルアーンを異国の言葉にしていたなら、彼らはきっと「もしその御しるしが、解き明かされてさえいたなら。異国の言葉なのに、アラブ［の預言者］とは」などと言うだろう。言いなさい。「これは信じる者たちのための導きとなりいやしとなるもの。しかし信じない者たちは、その耳は鈍くさせられ、その目は閉ざされている。これらの者は、遠く離れた場所から呼びかけられている」。

45 かつてわれらはムーサーに啓典を与えた。しかし［後になって］、それについて争いになった。もしあなたの主から、あらかじめ御言葉がなかったなら、彼らのあいだには裁きがついていただろう。しかし彼らはそれについて、この上ない疑わしさをおぼえている。[16]

46 正しい行いをすれば、その人自身のためになる。悪事をはたらけば、その人自身に返ってくる。あなたの主は、そのしもべたちを決して不正に扱わない。

47 かの［終末の］時については、かの御方のみの知るところ。かの御方が知ることなくして、どのような果実も花苞から出てくることはなく、またどのような雌性も［子を］身ごもり、生み落とすことはない。その日、かの御方は「われの『同輩たち』とはどこにいるのか」と彼らを呼び出す。彼らは言うだろう。「あなたにお報せします。私たちの中に［それらについての］証人はひとりもいません」。

48 以前に彼らが祈っていたものが、彼らから失われることとなる。彼らは、逃げる手だてのないことを察する。

49 人間は良いものを祈って飽きることがない。しかし不幸な目に遭うと絶望し、落胆してしまう。[17]

50 困難に遭った後に、われらからの慈悲を味わわせると、必ず「こうあるべきだ。それに、［審判の］時が起こるとも思わない。たとえ私が主に帰されるとしても、その御許には私のために最善のものがあるはず」などと言う。しかしわれらは、［真理を］拒む者たちに必ずその行いを告げ報せ、必ず手厳しい懲罰を味わわせるだろう。[18]

51 われらが人間に恩寵を垂れるとき、彼らは背き去って遠ざかる。しかし不幸な目に遭うとき、長々と祈り始める。

52 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「あなたがたは考えてもみたのか。もしそれ［クルアーン］がアッラーの御許からのものであり、あなたがたが［真理を］拒むなら、分裂して遠く離れた者よりも迷っている者があるだろうか」。

53 われらは、それが真理であることが彼らに明白になるまで、地平線にも、彼ら自身の中にもわれらのしるしを見せるだろう。あなたの主がありとあらゆるものごとの証言者であるだけで十分ではないか。[19]

54 まぎれもなく彼らは、その主と会することに疑いを抱いている。本当にかの御方は、ありとあらゆるものごとを取り囲む御方というのに。

1 クライシュの一族は、クルアーンを聞かされるのは不本意であると表明した。

2 この節とそれに続く創造の過程の描写に現れる日数については、神の一日は人間の千年に相当するともされていることを念頭に置いておくべきだろう。





3 いと高き神は、天地の両方に、彼らがなすべきとされることをなし、義務を果たすよう命じた。

4 「天それぞれに啓示して諸法を定め」るとは、天使や惑星、およびその他の天体を創造し、ひとつひとつにその役割を課すことを意味する。

5 使徒たちは、継続してそれぞれの民に遣わされてきたものと理解される。

6 アードの民は傲慢な人々であり、神の力は他のどのような力よりも強大であることを理解せず、自分たちの力を正しくはかることをせず、誤って過信していたのである。

7 日々そのものが邪悪であったのではなく、彼らの運命に従って惨事が彼らの上に降りかかり、結果として彼らにとり悪しき日々となったという意味。

8 サムードの民は、常日頃からアードの民と行いを共にしていた。彼らは、導かれることよりも、あえて導きに目を閉ざし、それまでの慣習に従うことの方を選んだ。

9 悪事をはたらく者は、通常、自分の悪事が露見さえしなければ何の問題も起こらないだろうと考えている。しかし神はすべてを見、またすべてを把握している。森羅万象の創造主には、自らの創造物に語らせることも可能である。彼ら自身の舌が、彼らの意志に背いて証言するだろう。

10 手も足も、身体のあちこちがこう述べる。「あなたは自分の悪事を、私たちから隠そうともしなかった。むしろあなたは私たちを、あなたの悪事のために用いた。私たちはあなたの望むまま、命じるままにしか動くことができなかったが、しかしあなたは、神がすべてをご存知であることも、私たちがあなたの悪事の目撃者となり、あなたの証言者となることも知らずにいた」。

11 現世においてジンと人類に対し、罪をあたかもすばらしいことのように見せていた「同類」、すなわち悪魔もまた地獄に入る。欺いた者、欺かれた者は、こうして共に後悔を分かち合うことになる。

12 信仰者が臨終を迎えるとき、天使たちが吉報を携えて到来する。神へと至る道に「まっすぐに立つ」とは、アブー・バクルによると「言葉においても行動においても、純正で前向きであること」、ウマルによると「偽善者にならないこと」、ウスマーンによると「行動が誠実であること」、そしてアリーによると「神の命じるところに従うこと」と解釈されている。天使たちがもたらす吉報とは、死は新たな生の始まりであること、また後に残してゆく者たちについても何ひとつ心配することはない、というものである。

13 神の使徒自身についての言及である。その他、複数の解釈者によると、これは礼拝の時刻を告げ、人々を礼拝に呼び集めるムアッズィンについてである。いずれにせよ信仰者で、神の命じるところに従い、善良な行いを通して人々を神へと招くなら、誰もがここで描写される者に当てはまることは明らかである。

14 悪を退（しりぞ）けるには、善をもってするのが最も望ましい。たとえば怒気（どき）に対しては忍耐や辛抱づよさ、無知に対しては寛容さと説得、邪悪に対する寛大な許しなどである。

15 悪魔のそそのかしは、人間が他者に善をなすのを妨げる。屈することのないよう、神の助けを借りて抵抗しなくてはならない。

16 「もしあなたの主から、あらかじめ御言葉がなかったなら」。この「御言葉」とは、清算と懲罰は審判の日に行われることを告げる啓示を指す。したがって啓典について論争したり、啓典を否定したりする者が、必ずしも現世で罰せられるわけではない。

17 「良いものを祈」るとは、財産や健康、幸福や平和、その他あらゆる恩恵を、神が授けてくれるよう願うということを意味する。「不幸」とは、貧困や病気、人生における困難や絶望を指す。

18 人生における困難が過ぎ去った後で、健康と幸福を再び我がものとしたときの人間の在りようがこれである。そうした際に、人は神に感謝するよりも、むしろ自分自身の手柄であると考える。しかし、それは実際には神がその慈悲をもっ





てもたらしたものである。そうした人が来世を信じることはない。

19 「地平線にも、彼ら自身の中にも」。「アーファーク（地平線）」とは、人間を取り囲む「外側の世界」を暗示する。人間の外側にある宇宙と、人間の内側にある魂に関わるすべての事象は、創造者たる神の唯一性を示す徴である。

# 第四二章　アッ＝シューラー　相談

マッカ啓示

本章は、ムスリムが共に物事にあたる際には、相談と協議を原則とすべきとする、三八節に現れる語にちなんでこの名で呼ばれている。二三節から二六節はマディーナで啓示された。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 ハー、ミーム。
2 アイン、スィーン、カーフ。
3 このようにあなた［ムハンマド］に啓示する、あなた以前の者たちにもまた。アッラーはもっとも威力ある御方、もっとも賢明な御方。[1]
4 諸天にあるもの、大地にあるもの、すべてかの御方に属する。至高の御方、偉大な御方。
5 諸天は［主の栄光のために］その上から裂けんばかり。天使たちは称賛をもって讃美し、大地にあるもののために赦しを願う。いいや、本当にアッラーこそはもっともよく赦す御方、もっとも慈悲深い御方。[2]
6 それをさし置いて［他の］庇護者を選ぼうとする者たち。彼らを見張るのはアッラーであり、あなたは彼らの保護者ではない。[3]
7 このように、われらがあなた［ムハンマド］にアラビア語のクルアーンを啓示するのは、あなたが、町々の母［であるマッカ］とその周囲にいる者に警告し、また疑う余地もない招集の日について警告するため。［その日、］ある者たちは楽園の中に、またある者たちは烈火の中にいるだろう。[4]
8 もしアッラーがそうと望めば、彼らを一つの共同体にしていただろう。しかしかの御方は、御心にかなう者をその慈悲の中に受け入れる。不正をなす者には、守る者も助ける者もない。[5]
9 それとも彼らは、この御方をさし置いて他の庇護者を選ぼうというのか。しかしアッラーこそ庇護者、死せるものに生をもたらす御方、ありとあらゆるものごとにおいて全能の御方。
10 あなたがたが何を相争おうと、判断を下すのはアッラーである。「それがアッラー、私の主。私はこの御方に委ね、悔い改めてこの御方に立ち返る」。
11 諸天と大地の創始者。あなたがた自身の中からその伴侶を、また家畜にもその［同種の］中からつがいをあらしめた。それにより、かの御方はあなたがたを増やす。かの御方に似るものは何ひとつない。すべてを聞く御方、すべてを見る御方。[6]
12 諸天と大地の鍵はアッラーに属する。御心のままにある者の糧を拡げも、また狭めもする。本当に、ありとあらゆるものごとを知る御方。
13 かの御方は、ヌーフにも指図したものをあなたがたの宗教として定めた。それはあなた［ムハンマド］にわれらが啓示し、またイブラーヒーム、ムーサー、イーサーに「宗教を確かなものとしなさい。その中で、離ればなれになってはならない」と指図したもの。あなた［ムハンマド］が彼らを呼び招いているこれは、多神を奉ずる者にとり大それたもの。アッラーは御心にかなう者を御自らのために選び、また誰であれ、

悔い改めて立ち返る者を御自らへ導く。

14 彼らは、知識がもたらされた後になって、彼らのあいだの嫉妬のために離ればなれになった。もしあなたの主から、あらかじめ定められた期限についての御言葉がなかったなら、彼らのあいだのことは裁決がなされていただろう。しかし、彼らの後に啓典を受け継いだ者たちも、これについて不穏な疑わしさをおぼえている。

15 ［ムハンマドよ、］それゆえ、彼らをこれ［信仰］に呼び招きなさい。命じられた通りまっすぐ［な正道］に立ちなさい。彼らの欲求に従ってはならない。言いなさい。「私は、アッラーの下した啓典を信じる。私は、あなたがたのあいだを公正に扱うよう命じられた。アッラーが私たちの主であり、またあなたがたの主である。私たちには私たちの行いがあり、あなたがたにはあなたがたの行いがある。私たちとあなたがたとのあいだに口論［する必要］はない。アッラーは、私たちを一緒に集めるだろう。行き着く先は、かの御方にある」。[7]

16 かの御方［の呼び招き］に［多くの人々が］応じた後になって、アッラーについて口論する者。その口論は主の御許では無意味である。彼らは怒りを招き、また彼らには厳重な懲罰があるだろう。

17 アッラーは、真理と［行為の重みをはかる］秤とをもって啓典を下した。おそらく、かの時は近い。しかし、あなたに何が知れるだろうか。

18 信じない者はそれを急ぎ求める。信じる者はそれを畏れかしこみ、またそれ［の到来］が真理であることを知っている。かの時［の到来］について［疑義を唱え］議論する者は、遠く迷い去った者。

19 アッラーはそのしもべに細やかで、御心にかなう者に糧をもたらす。強大な御方、威力ある御方。[8]

20 来世の収穫を欲する者には、われらはその収穫を増やそう。現世の収穫を欲する者に、われらはそれを





与えよう。しかし来世にその者の取り分はないだろう。[9]

21 それとも彼らには、アッラーの許しなくして彼らのために宗教を定めた同輩があるのか。もしあらかじめ決定の言葉がなかったなら、彼らのあいだには［現世において、すでに］裁きがついていただろう。本当に、不正をなす者には痛烈な懲罰があるだろう。[10]

22 あなたは不正をなす者たちが、彼らの上にその得てきたこと［の罪］が落ちるのを恐れおののくのを見るだろう。しかし信じて正しい行いをする者たちは、楽園の草原にいるだろう。彼らには、何であれ彼らの望むものが主の御許にあるだろう。至大の御恵みとはこのようなもの。

23 信じて正しい行いをするしもべたちに、アッラーが伝える良い報せとはこのようなもの。［ムハンマドよ、］言いなさい。「私はあなたがたに、これに対する報酬を求めない。［求めるのは、］ただ近しい親族への親愛だけ」。誰であれ善良な行いをした者には、われらは、その者のためにその善良さを増やすだろう。本当にアッラーはもっともよく赦し、感謝をもって報いる。[11]

24 それとも彼らは、「彼はアッラーについて嘘いつわりをねつ造した」などと言うのか。もしアッラーがそう望めば、あなたの心を閉ざすこともできる。アッラーは、嘘いつわりを消し去ることも、その御言葉により真理を真理たらしめることもできる。本当にかの御方は、何が胸の中にあるのかを知っている。[12]

25 しもべたちの悔い改めを受け入れ、諸々の悪事を容赦する。そしてあなたがたのすることをよく知っている。[13]

26 かの御方は、信じて正しい行いをする者には、それに応えてその御恵みを増やす。しかし［真理を］拒む者には、厳重な懲罰があるだろう。

27 もしアッラーが、そのしもべたちのために糧を増やしたなら、彼らは必ず地上で横暴になる。しかし、

かの御方は御心にかなうだけの量を下す。本当にアッラーはしもべたちを熟知し、またすべてを見ている。

28 彼らが絶望した後に、「救いの」雨を降らせてその慈悲を広げる御方。庇護者たる御方、称賛にふさわしい御方。

29 諸天と大地と、またそれら一面に散らばせた生きものを創造したことも御しるしのひとつ。そうと望むときには、それらをことごとく集めることもできる。

30 何であれ、あなたがたに降りかかる災難は、あなたがたがその手で得てきたことのため。それでも、この御方はその多くを容赦する。

31 地上において、あなたがたは逃れることはできない。アッラーをさし置いて、あなたがたには他に守る者も助ける者もない。

32 海原の上を、山々のように進む船も御しるしのひとつ。

33 そうと望めば、この御方は風を鎮めることもできる。そして「船は、」水面に静止したままになるだろう。本当にその中には、忍耐し、感謝する者すべてへの御しるしがある。

34 あるいは、彼らが得てきたことのために「、海に沈めて」壊すこともできる。それでも、この御方はその多くを容赦する。[14]

35 そしてわれらのしるしについて言い争う者には、逃げる手だてもないのを知るだろう。

36 あなたがたが与えられるすべてのものは、現世の生の楽しみに過ぎない。信じて主に委ねる者には、アッラーの御許に、それよりもさらにすぐれた終わることのないものがある。[15]

37 また大罪や不品行を避け、怒ったときにも赦す者、

38 また主「の呼びかけ」に応えて礼拝のつとめを守り、何事においても「、決めるときには」互いに相談し





合い、われらがその糧としたものから「施しに」費やす者、[16]

39 また抑圧が降りかかるときは、自分たち同士で身を守り合う者。

40 悪の報いは、それと同じような悪。しかし容赦して和解するなら、その報酬はアッラーが担う。本当にかの御方は、不正をなす者を愛さない。

41 不当に扱われた後に、「報復をもって」自分の身を守る者。これらの者を責めるべき筋はない。

42 責められるべき筋は、人々を不当に扱い、真理なくして地上において悪逆をなす者にある。これらの者には、痛烈な懲罰があるだろう。

43 しかしよく耐えて赦すなら、本当に、それは大いなる決心のあらわれというもの。[17]

44 アッラーが迷わせた者には、この御方の他に庇護者は誰もいない。あなたは、不正をなす者が懲罰を目にして「戻る道はないのか」と言うのを見るだろう。

45 あなたは彼らが「業火に」さらされ、恥のために身を縮め、盗み目でうかがっているのを見るだろう。信じる者たちは言うだろう。「復活の日に、自分自身とその家族を失う者が本当の敗者だ。不正をなす者は、永劫（えいごう）の懲罰の中ではないか。[18]

46 彼らには、アッラーの他に彼らを助ける庇護者はないだろう。アッラーが迷わせる者には、どのような道もない」。

47 アッラーからの避けられない日が来る前に、あなたがたの主「からの呼びかけ」に応じなさい。その日、あなたがたには避難するところもなく、拒絶することもできない。

48 たとえ彼らが背き去ったとしても、あなた「ムハンマド」に課されているのは彼らを見張るのではなく、ただ「教えを」明白にのべ伝えることだけ。われらが慈悲を味わわせるとき、人間はそれを嬉しがる。し

かし、自分の手で送り出したもののせいで悪が降りかかると、本当に人間は恩を忘れる。[19]
49 諸天と大地の王権はアッラーに属する。かの御方は御心のままに創造する。かの御方がそうと望む者に
女児を授け、かの御方がそうと望む者に男児を授ける。
50 あるいは男女を組み合わせ、また御心のままにある者を不妊とする。本当に、かの御方はすべてを知り、
全能である。
51 啓示によるか、あるいは隔ての後ろからか、あるいは使者［となる天使］を遣わし、その思し召しによっ
て啓示される以外に、人の身でアッラーから語りかけられることはない。本当に、かの御方は至高にし
て賢明である。[20]
52 このようにわれらは、われらの命令によりあなたに息吹を啓示した。あなたは啓典が何であるかも、ま
た信仰が何であるかも知らなかった。しかし、われらはそれを、われらの望むしもべを導く光とした。
そして本当に、あなたはまっすぐな道へと導く者、
53 諸天にあるもの、大地にあるもの、すべてが属するアッラーの道へ。あらゆるものは、アッラーへと帰
りゆくではないか。

1 他の預言者たちに下した啓典でも、クルアーンでも、神は等しくものごとを説き明かす。読む者の注意を促し、章の開始を報せると同時に、すべての預言者たちへの祝福の意味も込められた節である。

2 天の諸層のうち、最も高い層は、神の強烈な栄光によって常に破裂寸前の状態にある。





3 預言者に課された義務は、ただメッセージをのべ伝えることのみである。

4 「町々の母」。マッカはイスラームの中心地に相当し、「その周囲」とは全世界を指す。クルアーンがマッカの住民だけではなく、全世界の人々のために下されたものであることを確認する節である。

5 私たち人間の一人ひとりが異なる人格を授けられているのは、神の徴のひとつである。個人が個人として、どのように自分の意志を行使するかが試みられるのである。

6 神があらかじめ雌雄（しゆう）という機能を定めていることへの言及である。人間、動物、加えて草花などの植物を含むあらゆる生物が有する対称性と多様性が示されているが、この節では、神の唯一性と絶対的な一意性を強調するという意味があってのことである。「かの御方に似るものは何ひとつない」という言葉は、神の存在は根源的なものであり、それ以外の存在（あるいは存在せしめられる存在）と神との違いは、神の諸属性を通して見られる「違い」をはるかに超越していることを告げている。あるいは「何ひとつ並ぶものなき御方（一一二章四節）」である以上、人間の思考や想像では捉えられないともいえるだろう。神の存在のあり方とその他すべてのあり方の間にどのような違いがあるのかを知ろうにも、それすら人間の能力の範疇を超えているのである。

7 ここでは、使徒が従うべき道が定められている。すなわち真理へ人々を招くことに専心すべきであり、真理に背く人々の空疎な申し入れを承諾してはならない。

8 神はその慈悲ゆえに信仰する者、しない者のどちらも等しく養う。だが信じない者に対する神の慈悲は、来世においては取り上げられてしまう。

9 ここでは行いの善良な者に対し、現世と来世の両方において報奨のあることが約束されている。そしてその比喩として、土地を耕して畑をつくり、種を蒔き、その季節が訪れたときに収穫を手にする人が挙げられる。報奨は、ひとつが十倍になることもあれば、時には七百倍に、あるいはそれ以上になることもある。神は、物質的にも霊的にも、様々な報奨

を倍加する。しかし現世の虚栄にしか興味のない人には、来世では何の取り分もないだろう。

10 ここでは神は、神に同等の者を配して崇め、復活と審判の日を否定し、悪魔に従い、宗教が不法と定めているものを合法にしてしまう人々に語りかけている。

11 ここで預言者ムハンマドは、彼と、彼に従った人々すなわち宗教を同じくする同胞を、近しい親族であるかのように愛するよう人々に告げることを命じられている。人と人とを近しくするのは血縁だけに限られないが、部族主義が当然のこととされている土地では、このような教えはいかにも画期的であった。またこの節は、ムハンマドと、彼の授かった啓示を通して神に近づくことを人々に勧めるよう命じてもいる。

12 ここでは、預言者ムハンマドに対する神について嘘をねつ造しているという非難に対して、もしも使徒がそのようなことをすれば、彼の心はたちまち啓示から切り離され、閉ざされてしまうという応答がされている。

13 悔い改めは、機会を逃さずただちにすべきことである。他者に対する不正な行為は別として、たとえどのような罪であれ、神の慈悲は、いつでも心の底からの悔い改めに対して開かれている。そして悔い改めたのならば、（1）何であれ、それまでの罪深い行為から完全に離れること。（2）罪を後悔し、未練は残さないこと。（3）再び、罪深い行為に戻らないこと。

14 船に乗っていた誰かが以前に犯した罪のために、船全体が沈んだとしてもおかしくはない。しかし、多くの場合は赦され、守られている。

15 アブー・バクルが、すべての私財をイスラームのために捧げたとき、ある者が彼を批判した。この節は、その際に啓示されたものである。

16 この節は、イスラームにおける統治と施政の基礎が合議制にあることを示している。

17 耐え忍び、容赦するのは非常に難しいことである。しかしそれは勇気と決心の、最も高潔かつ最も立派なあり方である。





18 永遠の敗者とは、楽園の至福をはく奪されて地獄に住まう者である。

19 ここで預言者ムハンマドは、もしも人々から離れ去っていったとしても、案ずることのないよう諭されている。彼の使命は、ただ人々にメッセージをのべ伝えることだけであり、人々の監督者として遣わされたのではない。メッセージが伝えられた後に、どう判断するかは個々人に委ねられる。また第二の点として指摘されているのは、人は良いことがあれば大喜びするが、不幸に見舞われれば、たとえそれが自分自身で招いたことであったとしてもたちまち感謝を忘れてしまうということである。

20 ここでは啓示のあり方が説き明かされている。神が、その無限の慈悲をもって人間に物事を伝える際には、以下の三つの形態がある。（1）姿を現すことなく、ヴェイルの背後から語りかける。（2）神に命じられた使者（大天使ジブリール）を遣わし、何であれ神の意図する啓示を伝えさせる。（3）あるいは神が、直接、預言者の心に天啓をもたらす。

# 第四三章　アッ＝ズフルフ　黄金の飾り

マッカ啓示

本章は、三五節に現れる語にちなんでこの名で呼ばれている。人間の価値は、世俗的な富や所有物の多寡（たか）ではなく、霊的な姿勢による、ということが強調されている章である。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 ハー、ミーム。
2 明らかな啓典にかけて、
3 本当にわれらは、それをアラビア語のクルアーンにした。あなたがたも、考えるようになるだろう。
4 本当にそれは、われらの許の啓典の母の中にあって、至高にして賢明なもの。[1]
5 あなたがたが行き過ぎた民であるからといって、戒め（いまし）を差し控え、見過ごすべきであろうか。
6 われらは大昔の者たちに、どれほどの預言者を遣わしたことか。
7 しかし、預言者が彼らのところへ来るたび、彼らは必ず嘲笑した。
8 それゆえわれらは、彼ら「今の者たち」よりも強大な者を滅ぼしてきた。大昔の者たちの例が、先にあっ





たということ。
9 もしあなたが彼らに、「諸天と大地を創造したのは誰か」と尋ねたなら、彼らはきっと「威力ある御方、すべてを知る御方が創造した」と言うだろう。
10 あなたがたのために大地を寝台とし、またその中に、あなたがたのために諸々（もろもろ）の道をあらしめた御方。それであなたがたも、導かれるようになるだろうと。
11 定められた通りの雨を空から降らせ、それにより死んだ土地を生き返らせる。あなたがたも、そのように「土中から」起こされるだろう。[2]
12 すべてを対に創造し、またあなたがたのために船を、また家畜を、あなたがたが乗るものとした御方。
13 それはあなたがたがそれらの背の上に就き、それからあなたがたの主の恩寵を想い起こすため。またあなたがたがそれらの上に就いたときは、こう言うように。「讃美あれ、これらを私たちに服させる御方に。私たちでは、これらを束ねることはできなかったでしょう。
14 本当に私たちは、「いつか必ず」私たちの主に戻るでしょう」。[3]
15 ところが彼らは、かの御方のしもべである者を、かの御方の分身「であるかのよう」にしてしまった。本当に人間は、明らかに恩を忘れる。[4]
16 それともかの御方は、創造したものの中から娘を選び、あなたがたには息子を与えたというのか。
17 それでいて、慈愛あまねく御方に「ふさわしいものの」例えとして示したことが、彼らのうち誰かに「娘の誕生という」良い報せ（しら）として伝えられるとき、その顔は暗くかげり、悲嘆に沈む。[5]
18 「飾りたてるものの中で育てられ、議論において明白さに欠ける者か」、と。[6]
19 彼らは、慈悲深い御方のしもべである天使たちを女であるとする。彼らは、その創造に立ち会ったとで

もいうのか。彼らの証言は書きとどめられ、問いただされるだろう。
20 彼らは言う。「慈愛あまねく御方が望むなら、私たちがそれらに仕えることもなかっただろう」。しかし彼らはそれについて何も知らず、ただ憶測しているに過ぎない。
21 それともわれらが、これ以前に［天使を崇拝するよう命じる］啓典を彼らに与え、それを彼らが固持してきたとでもいうのか。
22 いいや、しかし彼らは言う。「私たちの先祖もあるしきたりに従っていたと習いました。それで私たちも、彼らの足跡に導かれているのです」。[7]
23 このように、われらがあなた以前に警告する者を遣わしたどのような町でも、そこの富める者は、必ず「私たちの先祖もあるしきたりに従っていたと習いました。それで私たちも、彼らの足跡に従っているのです」などと言っていた。
24 彼［警告する者］は言った。「たとえあなたがたが見つけた、あなたがたの先祖が従っていたものよりもすぐれた導きを、私があなたがたにもたらしたとしてもか」。彼らは言った。「本当に私たちは、あなたがたが遣わされてもってきたものを拒む」。
25 それでわれらは、彼らに報復した。見なさい、［真理を］嘘よばわりした者たちの最後がどのようであったかを。
26 イブラーヒームが、その父と民にこう言ったときのこと［を思いなさい］。「本当に私は、あなたがたの仕えているものとは何の関わりもない、
27 私を［無から］創始した御方を別として。この御方が、私を導くことだろう」。
28 彼はその言葉を、子孫のあいだに永続するものとした。それにより彼らも、戻ってくるだろうと［思っ





てのこと］。[8]
29 いいや、われらは真理と明らかな使徒が到来するまで、彼らもその先祖も楽しませておいた。
30 しかし真理がもたらされると、彼らは言った。「これは魔術だ。私たちは、それを拒む」。
31 彼らは言う。「どうしてこのクルアーンは、［マッカとマディーナという］二つの町の大人物に下されなかったのか」。[9]
32 あなたの主の慈悲を配分するのは彼らなのか。現世の生における生活のすべを、彼らに配分するのはわれらだというのに。われらは、彼らのうちある者の位階を上にし、他の者を使役させもする。あなたの主の慈悲の方が、彼らの積み上げるどのようなものよりもすぐれている。[10]
33 もし人々がひとつの共同体になってしまいさえしないなら、われらは、慈愛あまねく者を拒む者たちのために、その家々の屋根を銀でしつらえよう、また登るための階段も、
34 またその家々の扉も、またその上に横たわるための寝椅子も、
35 また金の飾りも。しかし、それらはすべて現世の生の楽しみに過ぎない。畏れる者には、あなたの主の御許に来世［の幸福］がある。
36 慈愛あまねく者の戒め（いましめ）に目を閉ざす者に、われらは悪魔をその同類としてあてがった。親しい友となるだろう。
37 彼ら［悪魔］は、彼らを道から妨げる。しかし彼らは、［正しく］導かれているものと思っている。
38 やがてわれらに至ったとき、そのある者は言うだろう。「私とあなたのあいだが、東と西ほどに離れてさえいたなら。親しい友の、何と悪いことか」。[11]
39 「あなたがたが不正をなしてきたのだから、この日、あなたがたには何の益もない。あなたがたは、［悪

魔と」懲罰を分かち合う」。

40 あなたは、聞かない者に聞かせることができるだろうか。あるいは見ない者や、明らかな迷いの中にいる者を導くことができるだろうか。

41 たとえわれらがあなたを「死をもって」連れ去ったとしても、われらは必ず彼らに報復するだろう。

42 あるいは彼らに約束したことを、あなたに見せるだろう。そして本当にわれらは、彼らに対し全能である。

43 それゆえ、あなたに啓示されたものをしっかりと握っていなさい。本当にあなたは、まっすぐな道の上にある。

44 本当にこれはあなたへの、またあなたの民への戒(いまし)め。やがてあなたがたは、「これについて」問いただされるだろう。

45 われらがあなた以前に遣わした、われらの使徒にも尋ねてみなさい。われらが、慈愛あまねく者をさし置いて他に、彼らの仕えるべき神々を設けただろうか、と。

46 かつてわれらは、われらのしるしとともどもムーサーを、フィルアウンとその長老たちへ遣わした。彼は言った。「本当に私は、諸世界の主からの使徒だ」。

47 しかし、彼がわれらの諸々のしるしをもたらしたとき、彼らはそれらを笑った。

48 われらは彼らに、次から次へより大きなしるしを見せた。それからわれらは、懲罰をもって彼らを制した。それにより彼らも、戻ってくることだろうと。

49 「しるしが示されるたびに、」彼らは言った。「魔術師よ、あなたの主があなたに約束したものにかけて。私たちのために祈ってくれ。きっと私たちも導かれるだろうから」。[12]

50 しかしわれらが彼らから懲罰をとり除くと、見なさい。彼らは約束を破った。





51 フィルアウンはその民に呼びかけた。「私の民よ。エジプトの王国と私の足の下を流れる川は私のものではないか。それでもあなたがたは、わからないのか。[13]

52 私の方が、この恥ずべき者、自分のことさえ明白に言いあらわせない者よりもすぐれている。

53 どうして彼には黄金の腕輪が持たされていないのか。あるいは彼と共に、天使たちが連れ立って到来しないのか」。

54 このように、彼はその民を「ムーサーを貶(おとし)めるよう」言いくるめ、彼らは彼に従った。本当に彼らは、いつでも背く民であった。

55 こうして彼らはわれらを怒らせた。われらは彼らに報復し、彼らをことごとく溺れさせた。

56 われらは彼らを過去の者とし、のちの世へのひとつの例とした。

57 マルヤムの子のことがひとつの例として示されるとき、あなたの民はそれを笑い飛ばす。

58 彼らは「私たちの神々の方がすぐれているのか、それとも彼「イーサー」の方か」などと言う。彼らは、言い争いたいがために彼を引き合いに出す。いいや、彼らは、言い争うことにかけてはもっとも多い民である。[14]

59 彼は、われらが恩寵を垂れたしもべのひとりに過ぎない。またわれらは彼を、イスラエルの民へのひとつの例とした。[15]

60 もしわれらがそうと望めば、あなたがたの中から「代わりに」天使たちをあらしめ、地上を継がせることもできる。

61 本当に、それ「イーサーの再臨」はかの時「の訪れ」を知らせるもの。それゆえ、そのことについて疑わず、われに従いなさい。これがまっすぐな道。[16]

62 悪魔にあなたがたをさえぎらせてはならない。本当に彼は、あなたがたにとり公然の敵。

63 イーサーは、明白な証をもって来るとこう言った。「私は、知恵をもってあなたがたのところへ来た。そしてあなたがたのあいだで相争っていることのいくつかについて、あなたがたに対し明らかにする。それゆえアッラーを畏れなさい。そして私に従うといい。

64 本当にアッラーこそは私の主であり、あなたがたの主。それゆえこの御方に仕えなさい。これがまっすぐな道」。

65 しかし、彼らのあいだの諸々の党派は相争った。それゆえ不正をなす者には、痛烈な日の懲罰の災禍(さいか)あれ。[17]

66 彼らは、その［復活の］時をただ待っているだけなのか。それは彼らに突然やって来る、彼らも気づかないうちに。

67 友人も、その日は互いに相手の敵となるだろう、畏れる者を除いて。

68 われのしもべたちよ。この日、あなたがたには恐れもなく、嘆きもないだろう。[18]

69 われらのしるしを信じ、［主に自らを］明け渡してきた者たちよ、

70 あなたがたも、あなたがたの伴侶も、歓喜して楽園に入りなさい。

71 彼らのために黄金の皿と杯(さかずき)が巡り、またその中には、各人が望むもの、その目の喜びとなるものがあるだろう。あなたがたは、永遠にその中に住まうだろう。

72 あなたがたの行ってきたことのために、あなたがたが受け継ぐ楽園とはこれのこと。

73 そこにはあなたがたのためのおびただしい果実があり、あなたがたはそれを食べるだろう。

74 罪を犯した者は、地獄の懲罰の中に永遠に住まうだろう。[19]

75 それが彼らのために緩められることはない。その中で、彼らはただ絶望するだけ。





76 われらが彼らに不正をなしたのではない。彼ら自身が不正をなす者だったのである。

77 彼らは叫ぶ。「マーリクよ。あなたの主に、私たちを終わらせてくれ」。彼は言う。「あなたがたは、そのままで過ごせ」。[20]

78 すでにわれらは、あなたがたに真理をもたらした。しかし、あなたがたの多くは真理を嫌う。

79 それとも彼らは、［預言者に対して］何ごとかをもくろんでいるのか。しかし、本当にもくろんでいるのはわれらの方である。[21]

80 それとも彼らは、われらには彼らの秘めるものも、その密談も聞こえないと思っているのか。いいや、われらの使者たち［である天使たち］が、彼らのところにいて書きとどめている。

81 言いなさい。「もし慈愛あまねく御方に子があるなら、私は最初に仕える者となっていただろう」。

82 諸天と大地の主に讃美あれ、彼らが述べていることを超越する玉座の主に。

83 それゆえ彼らについては、約束されているその日を迎えるまで放っておき、無駄話や遊びごとに興じさせておきなさい。

84 天においても、地においても、［崇拝されるべき］神とはこの御方のこと。賢明な御方、すべてを知る御方。

85 祝福あれ、諸天と、大地と、何であれその間にあるものの王権をもつ御方に。かの［終末の］時の知識はただ御許にのみある。あなたがたはこの御方に帰される。

86 この御方をさし置いて彼らが呼び祈るものに、とりなしの力はない。［それができるのは］ただ真理を証言する、知識ある者だけ。

87 もしあなたが彼らに「これらを創造したのは誰か」と尋ねたなら、彼らはきっと「アッラー」と言うだろう。それなのに、どうして彼らは［真理から］惑わされるのか。

88 彼「預言者」が「主よ、本当に彼らは信じない民です」と言ったとおり。
89 「ムハンマドよ、」彼らを見のがしてやりなさい。ただ「平安あれ」と言いなさい。やがて彼らも、知ることになるだろう。

1 「啓典の母」とは、天に保管されている原初の碑（いしぶみ）とも呼ぶべきものを指している。預言者たちに啓示されたすべての啓典は、ここから派生したものである。

2 「定められた通りの」とは、必要な分に応じて、という意味。「死んだ土地を生き返らせる」とは、雨を降らせることにより荒れ地を緑地に復活させるのと同じように、その時がくれば神は死者を復活させるだろうことを想起させるものである。

3 何かに騎乗して長距離の移動をするとき、それらを人間のために用意した創造主について思い起こすべきだろう。教友たちは、旅に出れば来世について思い巡らせた。自分たちの旅路を、それよりもはるかに大きな永遠へと至る長い旅路に重ね合わせたのである。旅に出るとき、使徒は常にこの節の前後を朗読したと伝えられている。

4 「御方の分身「であるかのよう」にしてしまった」。ユダヤ教徒はウザイルを神の子としてみなし、キリスト者はイーサーを神の子としてみなし、偶像を奉ずるマッカの民は天使たちを神の娘たちとしてみなしていることを指摘している。

5 イスラーム以前の時代、誕生した子が女児であることを知らされると、人々は、「その顔は暗くかげり、悲嘆に沈」んだ。女児の誕生は恥辱であるというのである。彼らは、生まれたばかりの娘を生き埋めにさえした。





6 「神には娘がある」としながら、現実には女児が誕生すれば疎（うと）んじられ、少なからぬ女性が虚飾で囲い込むように育てられ、努力を避けるよう習慣づけられることの矛盾が指摘されている。

7 天使を崇拝することの根拠がまったくないことは明らかである。また、祖先の習慣を無分別に模倣したところで何の価値もないことは言うまでもない。

8 預言者イブラーヒームは父の足跡には従わず、信仰するすべての人が、唯一の主、真の神をこそ信じるべきであることの例証となった。

9 偶像を奉ずる民の頭領のひとり、ワリード・ブン・ムギールの名で知られる人物が、侮辱を交えて次のように主張した。「最も裕福なのは、マッカではこの私であり、ターイフではウルワ・サカーフィーだ。何ごとにおいても私たちの方が、ムハンマドよりも優れている。クルアーンがムハンマドへの啓示だなどということは、およそありえない」。預言者ムハンマドは孤児であったし、裕福ではなかった。しかし神の目には、正しさにこそより価値がある。預言者は彼らの中では最も高貴な者であった。彼が、唯一の真の神を信仰するイブラーヒームと同じく、ハニーフの信仰を持つ者であったからである。

10 被造物に過ぎない人間に、誰が預言者となるのかを決めることはできない。預言者を選ぶのは神である。富や地位の分配も、神のみが決めることである。富める者と貧しい者、強者と弱者、知る者と知らざる者、支配する者と支配される者、すべては神の采配によるものである。

11 現世の生において、友人同士で悪の道へ誘い、誘われしていた者が、来世ではその友人を非難して言う。「私とあなたの間が遠く隔てられていたらよかったのに。私ときたら、何という邪悪な友人を持ってしまったことか」。

12 ムーサーの民、すなわちイスラエルの民は、苦難にあうといつでも「魔術師（ムーサーを指している）よ、あなたには主と交わした契約があるではないか。私たちのために、あなたの主に嘆願してくれ、私たちは必ずや正しい道を歩むよ

うにするから」と願い出た。しかし神が彼らの苦難を取り除いてやると、彼らはたちまち自分たちの言ったことを反故にした。

13 フィルアウンが言わんとしているのは、ムーサーよりも自分の方がはるかに優れているということである。彼は財産も宮殿も、また人々に対する権力も有していた。彼はまた、ムーサーが吃音であるのをあげつらい、貶（おとし）めようとした。

14 キリスト者の多数は、「神としてのイーサー像」を作り上げた。イスラームでは、イーサーは一人の人間であり、イスラエルの民に遣わされた預言者であると教えている。イスラーム以前のアラブたちは、イーサーのことを、自分たちの崇拝する偶像の神々と同じ類いのように考えていた。そしてなぜ異国の神像を、自分たちの神像よりも優れたものとして考えねばならないのかと疑問に思っていた。

15 「アブドゥッラー」、すなわち「神のしもべ」とは、ムスリムにとっては最も名誉ある称号である。創造主に対する隷属とは、同時に地上のあらゆる束縛からの解放を意味する。

16 裁きの日の前に、イーサーが天国から降臨することが示される。

17 イーサーを「神」もしくは「神の子」であると主張している者もいる。この節が示しているのは、そうした信条や解釈を主張することの責任は、主張する者自身が負うということである。

18 神への献身と奉仕は、その結実として、過去、現在、そして未来にわたってすべての恐れや悲しみからの魂の解放をもたらす。そのような献身、そのような奉仕は、神の徴と神の意志を信じ、自らの意志を神の普遍の意志に沿わせること、すなわち永遠と調和し、あらゆる場面において神の御心にかなうよう行動することによって示される。

19 ここでの「罪を犯した者」とは、神を否定し、賛美すべき至高の神に同位の何かを配した者を意味する。

20 地獄の住人は懲罰のあまりの厳しさ、耐えがたさに、「おお、マーリク（地獄を監視する天使の呼び名）よ、あなたの主に頼んで、私たちについてはもう終わりにしてほしい」と叫び、永劫（えいごう）の懲罰を受け続けるよりも、完全に無となることを選ぶだろう。しかしマーリクは彼らに答えて言う。「あなたがたは、ここに残らねばならない。ここから逃げ出すことはできない」。

21 クライシュの族長たちが、預言者に対して決定的な措置をとるべく秘密裏に会合を持ち、策を練っていたことについての言及である。真理に背いた計画を立てれば、真理によって滅ぼされることになる。その逆に、真理を受け入れれば、真理によって自由になれる。物事を司るのは、常にただ神のみである。

# 第四四章　アッ＝ドゥハーン　煙

マッカ啓示

本章の啓示は、世俗的なうぬぼれや権力が、霊的な力に抗（あらが）おうとしたところでいかに粗末なものであるか、また善悪の真の意味が、来世においていかに見出されるかを明白に説き明かすものである。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 ハー、ミーム。
2 明らかな啓典にかけて。
3 本当にわれらは、これを祝福された夜のあいだに下した。本当にわれらは、［絶えず］警告し続けている。[1]
4 その［夜の］あいだは、知恵ある決めごとのすべてが識別される、
5 われらからの命令として。本当にわれらは、［絶えず使徒を］遣わし続けてきた、
6 あなたの主からの慈悲として。本当にすべてを聞く御方、すべてを知る御方。[2]
7 諸天と大地と、そのあいだにあるものすべての主。もしあなたがたが、確信しているものなら。
8 この御方の他に、いかなる神もない。生かしも、死なせもする。あなたがたの主であり、またあなたがたの、大昔の先祖の主でもある御方。[3]





9 いいや、しかし彼らは疑念の中で遊びごとに興じている。
10 ［ムハンマドよ、］それゆえ見守っていなさい、天が明らかな煙をもって来るその日、[4]
11 ［それは］人間を覆うだろう。これは、痛烈な懲罰となるだろう。
12 「私たちの主よ、懲罰をとり除いてください。本当に、私たちは信仰者になっています」。
13 どうして彼らが戒（いまし）めを得られるだろうか。彼らには、すでに［警告を］明らかにする使徒が到来していたのに、
14 彼らは彼に背を向けて、「［他の誰かから］教わった者だ」「とり憑かれた者だ」などと言った。
15 われらが、わずかでも懲罰をとり除くと、あなたがたは必ず［信仰以前のあり方に］後戻りする。[5]
16 われらが至大の一撃を振るうその日。本当にわれらは、報復するだろう。
17 すでにわれらは、彼ら以前のフィルアウンの民も試みた。彼らに貴い使徒が到来し、
18 「アッラーのしもべたちを、私に引き渡しなさい。本当に私は、あなたがたにとり信頼に足る使徒である。
19 アッラーに対し、高ぶってはならない。本当に私はあなたがたのところへ、明らかな権威をもってやって来た。[6]
20 私は、私の主であり、またあなたがたの主である御方に加護を求めました。さもないとあなたがたは、私を石打にするでしょう。[7]
21 もしあなたがたが私を信じないのなら、私から離れていなさい」。
22 彼は主に祈った。「これらは、罪を犯す民です」。
23 「われのしもべたちを連れて、夜に旅立ちなさい。あなたがたは、必ず追われるだろう。

24 海は「渡った後も」そのままにしておきなさい。彼らは、必ず溺れる軍勢である」。[8]
25 どれほど「多く」の庭園と泉を、彼らは後に残しただろうか、
26 また田畑や、立派な屋敷や、
27 また、彼らを歓喜させた諸々の至福を。
28 「彼らの最期は」このようなとおり。そしてわれらは、他の民にそれを継がせた。
29 天も地も彼らのために泣いてはくれず、また彼らが、猶予されることもなかった。
30 われらはイスラエルの民を屈辱の懲罰から救った、
31 またフィルアウンからも。本当に彼は、行き過ぎた者の中でもいっそう高ぶっていた。
32 われらは、意図するところあって彼らを諸世界「の万民」の上に選び、
33 その中に明らかな試練が込められた、諸々のしるしを与えた。[9]
34 本当に、これらの者は言う、
35 「私たちにあるのは一度めの死だけ。私たちが、再び起こされることはない。
36 もしあなたがたが真実を語っているのなら、私たちの先祖を連れ戻してみせよ」。
37 彼らは、あるいはトゥッバウの民やそれ以前の人々よりもすぐれているのか。われらは彼らを破壊した。本当に彼らは、罪を犯した者たちであった。[10]
38 われらは諸天と大地と、またそのあいだにあるものを、たわむれに創造したのではない。
39 われらはそのいずれも、ただ真理により創造した。しかし、彼らの多くはそれを知らない。
40 本当に、決着の日とは彼らすべてに定められた時。[11]
41 その日、友はその友の役に立たず、彼らにはどのような助けもない、





42 アッラーの慈悲にあずかった者を除いて。本当にもっとも威力ある御方、もっとも慈悲深い御方。
43 ザックームの木は、[12]
44 罪ある者が食べるもの。
45 それは溶けた銅のように、下腹の中で煮えたぎる、
46 熱湯が煮えたぎるように。
47 「捕えて、業火のただ中に引きずりこめ。
48 そののちに、頭上から熱湯の懲罰を注げ」。
49 「味わえ。おまえは力強い者、高貴な者なのだろう。[13]
50 そしてこれこそ、あなたが疑ってきたもの」。[14]
51 畏れる者は、安全なところに入る、
52 庭園と泉の中に。
53 上等の絹や錦を身にまとい、互いに向かい合う。
54 このようなとおり。われらは彼らを、すばらしい瞳の美しきものと連れ添わせよう。
55 その中で彼らは、すべての果実をつつがなくやすらかに呼び求め、
56 その中で彼らは、一度めの死の他に、「二度と」死を味わうこともない。かの御方は、業火の懲罰から彼らを保護するだろう、
57 あなたの主からの御恵みとして。大いなる成就とは、まさしくこのこと。
58 われらはこれ「クルアーン」を、あなたの舌にとりたやすいものにした。彼らも、戒めを憶えておくようになるだろう。

59

［ムハンマドよ、］それゆえ待っていなさい。本当に、彼らもまた待っているのだから。

1 「祝福された夜」とは、一般には、ラマダーン月のおそらく二十七日目の夜であるとされる。栄光の夜、あるいは威力の夜とも呼ばれる。創造主から啓示の降り注ぐ夜は、まさしく祝福された夜というにふさわしく、それはまるで荒野に慈雨が降るかのようである。

2 神は友無き者の友であり、助ける者無き者の助け手である。神はあらゆる心の底からの祈りを聞き、またその知識はあらゆるものごとを包み込む。神は一人ひとりに最善のものを授けるが、何が最善であるかは人間の目にどう映るかによってではなく、神の完璧なる知識によって決まる。

3 アッラーとは真の神であり、それだけであらゆる種類の奉仕と崇拝に値する。

4 ここでの「煙」の意味は、解釈者によってふた通り存在する。（1）煙とは、飢饉と干ばつを意味する。預言者ムハンマドの時代に飢饉と干ばつが起き、クライシュ族の人々が預言者を訪れ、この苦しみからの解放を願ったという。（2）煙とは世界の終わり、すなわち「終末の刻」の徴である。預言者ムハンマドの伝承によれば、その時、東から西まで煙に覆われるという。

5 反抗的な者を除き、神は自らの被造物すべてに対し、あらゆる機会を授ける。同時に、時として神は様々な試練も授ける。一人ひとりが理性を働かせるか否かを確かめるためである。

6 ここでの「明らかな権威」とは、ムーサーが神の許しを得て示した奇跡を指す。

7 預言者ムーサーは、フィルアウンの手勢の脅威に対して何ら警戒することはなかった。彼はただ、次のように告げた。「私





の主であり、またあなたがたの主である御方に加護を求めます」。

8 ムーサーと彼の民が渡れるよう海が割れ、彼らは海と海との間を歩いて対岸へ渡りきることができた。しかしその様子を見て誘い込まれたフィルアウンの軍勢が、彼らの後に続こうとしたところ、海はたちまち閉ざされて彼らを飲み込んだ。

9 奴隷の身分から解放されたイスラエルの民は、のちにダーウードとスライマーンによって栄光の王国が築かれる乳と蜜の流れる地へ運ばれた。しかし選ばれた存在であるからといって、自分たちが何を行うかを選べる存在になれるわけではない。その意味では、神の御前において「選ばれし民」は存在しない。神はあらゆる民族、あらゆる個人に機会を与えるが、ふさわしくなければその場から退けられ、代わりに他の者がその地位を授かるだけである。イスラエルの民に授けられた数々の恩恵として、ムーサーの授かった啓示や、豊かな地カナーン、ダーウードとスライマーンの統治する壮大な王国、そして失われたものを取り戻すためのイーサーの到来などが挙げられる。

10 「トゥッバウの民」とは、一説によるとサバアの民のこと。あわせて五〇章注二も参照。

11 決着の日、正誤を分かつ判断が下される。その日は、同時に友人や親類縁者たちとの離別の日でもある。信仰ある者は楽園に、信仰なき者は地獄に、それぞれ入ることになる。

12 地獄に育つ木のこと。楽園に育つ優雅な果実とは完全な対称をなしている。

13 死の後に続く生を信じず、人間に課された神に対する究極の責任を愚弄したことに対する懲罰である。九六章六節から七節も参照のこと。「いや、本当に人間は逸脱する。自分に足りないところはない、と思いあがる」。

14 懲罰が現実となるのを目の当たりにして、信仰なき者は現世にいた間に疑っていた来世が真実であったことをようやく知り、後悔することになる。

# 第四五章　アル＝ジャースィヤ　ひざまずく

マッカ啓示

本章は、終末の日に私たち人類が置かれる状態を説き明かす二八節に現れる語にちなんでこの名がつけられている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 ハー、ミーム。

2 啓典はアッラーから啓示される。もっとも威力ある御方、もっとも賢明な御方。

3 諸天と大地には、信仰者のための諸々の御しるしがある。[1]

4 あなたがた自身の創造にも、［地上に］まき散らされた生きものにも、確信を得ている民への御しるしがある。[2]

5 夜と昼との交替にも、アッラーが天から下す糧にも、またそれにより死んだ後の大地に生をもたらすことにも、めぐる風の流れにも、考える民への御しるしがある。

6 これらはアッラーの御しるし。われらはあなた［ムハンマド］に、真理をもって読み聞かせる。それで彼らは、アッラーとその御しるしの後になって、どのような伝え話を信じようというのか。





7 災禍あれ、すべての罪深い嘘つきたちに。

8 アッラーの御しるしが読み聞かされるのを耳にしながら、聞こえないかのように高慢にふるまい続ける。そうした者に、痛烈な懲罰の報せを伝えなさい。

9 われらのしるしから何かを知ると、それを笑いごととして扱う。これらの者には、屈辱の懲罰があるだろう。

10 彼らの彼方に地獄がある。彼らの得てきたものも、また彼らがアッラーをさし置いて選んだ庇護者も役に立たない。彼らには、大いなる懲罰があるだろう。[3]

11 これこそ導きというもの。自分の主のしるしを頓挫させようと尽力する者には、汚らわしく痛烈な懲罰があるだろう。

12 アッラーはあなたがたのために海を使役させ、その命令によって船は渡る。それはあなたがたに、その御恵みを探し求めさせるため。あなたがたは、感謝するようになるだろう。

13 また諸天にあるもの、大地にあるもの、すべてをあなたがたのために使役させる。それらは、ことごとくこの御方からのもの。本当にその中には、深く考える民への御しるしがある。

14 ［預言者よ、］信じる者たちに言いなさい、アッラーの日々を望まない者［の過ち］を赦すようにと。そうした民には、彼らが得てきたことに応じてアッラーが［御自ら］報いるだろう。[4]

15 正しい行いをすれば、その人自身に返ってくる。悪事をはたらけば、その人自身に返ってくる。そののち、あなたがたは主に帰されよう。

16 かつてわれらは、イスラエルの民に啓典と、知恵と、預言の資質とを与えた。また諸々の良いものを彼らの糧とし、万人の誰にもまさって恵み、[5]

17 また彼らに、物事についての明白な証を与えた。ところが知識がもたらされた後になって、彼らは、［無知ゆえにではなく］彼らのあいだの嫉妬のために相争うようになった。彼らのあいだで相争っていたことについて、復活の日、本当にあなたの主は、彼らのあいだに決着をもたらすだろう。

18 そののち、われらはあなた［ムハンマド］を、ものごとについて定められた道筋の上においた。それゆえそれに従いなさい。何も知らない者たちの、一時の気まぐれに従ってはならない。[6]

19 本当に彼らはあなたにとり、アッラーに対して何の役にも立たない。そして本当に不正をなす者たちは、互いにかばい合う友同士。しかし畏れる者をかばう友はアッラーである。[7]

20 これ［クルアーン］は人々のための開明（かいめい）、確信する民のための導きと慈悲。

21 それとも悪事をはたらく者は、われらが彼らを、信じて正しい行いをする者と同じようにすると思うのか。彼らの生も彼らの死も、同等だと思うのか。彼らの判断の、なんという悪さか。

22 アッラーは、真理をもって諸天と大地を創造した。それで各人は、得たものに応じて報いられ、不正に扱われることはない。

23 考えてもみたか、自分の欲望を［自分の］神として選んだ者のことを。アッラーは、そうと知りつつその者を迷わせ、その耳と心を閉ざし、またその目の上に覆いをかけた。アッラーの［非難の］後になって、誰がその者を導くだろうか。それでもあなたがたは、想い起こそうとはしないのか。

24 彼らは言う。「私たちの、この現世の生以外には何もない。私たちは死にもするし生きもする。しかし私たちを滅ぼすものは、時間の他には何もない」。しかし彼らは、それについて何も知らない。彼らは、ただ空想に耽っているに過ぎない。[8]

25 われらの明白なしるしが読み聞かされるとき、彼らの論とはただこう言うだけ。「もしあなたがたが真実





を語っているのなら、私たちの先祖を連れ戻してみせよ」。

26 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「アッラーがあなたがたを生かし、そののちに死なせ、さらにそののち、疑う余地のない復活の日、あなたがたを一斉に集める。しかし、人々の多くはそれを知らない。

27 諸天と大地の王権はアッラーに属する。そして［定められた］あの時が現れる日。その日こそ、虚偽をなす者は［何もかも］失うだろう」。

28 その日、あなたはすべての共同体がひざまずきながら、それぞれの記録［のあるところ］へ呼び出されるのを見るだろう。「今日、あなたがたはその行いに応じて報いられる。[9]

29 「これはわれらの記録であり、あなたがたについて真実を語るもの。われらは、あなたがたの行ってきたことを［すべて］書きとどめさせておいた」。[10]

30 信じて正しい行いをした者［については］、主は彼らをその慈悲の中に受け入れるだろう。明白な成就とは、このようなもの。

31 それから信じずにいた者［については］、「われのしるしが、あなたがたに読み聞かされはしなかったか。しかしあなたがたは高慢にふるまい、そのために罪を犯す民となった」。

32 こう告げられたときのこと［を思いなさい］。「アッラーの約束は真理であり、［復活の］かの時［の到来］に疑う余地はない」。あなたがたは言った。「私たちは、かの時などというものは知らない。単なる空想に過ぎないと思う。私たちには、確信が持てない」。[11]

33 こうして彼らのはたらいた諸々（もろもろ）の悪事があらわになり、彼らは、かつて自分があざ笑っていたものに囲い込まれるだろう。[12]

34 ［彼らは］こう告げられるだろう。「今日、われらはあなたがたを忘れよう、あなたがたがこの日に会す

ることを忘れたように。あなたがたは業火がその住まい。あなたがたには、どのような助け手もないだろう。

35 それというのも、あなたがたがアッラーの御しるしを笑いごとにし、現世の生があなたがたを欺いていたため」。それでこの日、その［地獄の］中から出してはもらえず、償わせてももらえない。

36 それゆえ、かの御方にこそ称賛あれ、諸天の主、大地の主、諸世界の主に。

37 諸天と大地の権勢は、すべて御方に属する。もっとも威力ある御方、もっとも賢明な御方。

1 徴の数々は、唯一の神がもたらす調和と、その絶対的な力能を示している。

2 徴の中で最も興味深いもののひとつが、人間の創造ならびに、人間が存在へと至る際に通過する様々な段階である。

3 彼らの行為も、子孫も、財産も、彼らが崇拝の対象としていたものも、来世においては何の役にも立たなくなる。

4 「アッラーの日々」とは、人間が内なる純粋に向かって進んでゆくプロセスを指す。あるいは、約束されている来世の王国での日々のことでもある。また、解釈者によっては、「アッラーの日々」は「アッラーの力と懲罰」とも解釈される。

5 イスラエルの民は律法を授かり、地上の大権を有する民となり、また彼らの使徒としてはムーサーとハールーンが遣わされもした。

6 「何も知らない者たち」、すなわちクライシュ族の有力者たちは、預言者に彼の使命を放棄させようとしていた。この節は、彼らの欲望や愚かしい提言について彼に警告している。なお、ここでは「宗教法」「聖法」とも訳される「シャリーア」という語を「定められた道筋」と訳出した。





7 すなわち、「もしもあなたが、こうした何も知らない者たちの歓心を買いたいがためにアッラーの宗教に変更を加えたとしても、彼らには、アッラーの裁きと懲罰からあなたを守ることはできない」。

8 復活と来世を否定し、死を引き起こすのは時間あるいは自然であると考え、時間や自然を超越した本当の原因を知ろうとはしない人がいる。本当の原因とは、すなわち時間や自然をも創造した創造主にある。

9 各集団は、それぞれ神の御前に連れ出され、彼らの記録を渡される。それから個々人が、現世におけるそれぞれの行いに応じて報奨を授かるか、あるいは懲罰を科される。

10 天使たちは、すべての人間の行いを記録している。これらの記録は、他者に対する過ちを犯した者について証言するだろう。

11 ここでの「約束」は、死後の復活を指すものと解釈されている。

12 信仰なき人は、自分の行いの数々を来世において目の当たりにさせられる。罪を犯せば、現世において軽んじてきたものが、来世において重くのしかかるのである。

# 第四六章　アル＝アハカーフ　砂の丘

マッカ啓示

二一節にある「アル＝アハカーフ」という語からこの名で呼ばれる。アードの部族が住んでいた地域の特徴である。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 ハー、ミーム。

2 啓典はアッラーから下される。もっとも威力ある御方、もっとも賢明な御方。

3 諸天と大地とそのあいだにあるものを、われらが、真理と定められた［究極の］時によらずして創造したものはない。しかし［真理を］拒む者は、彼らに警告されていることから背き去る。[1]

4 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「あなたがたは、あなたがたがアッラーをさし置いて呼びかけているものについて考えてもみたのか。それらが地上に何を創造したのか、私に見せてみなさい。それともそれらは、諸天において何か役割があるのか。もしあなたがたが真実を語っているのなら、これ以前の啓典なり、あるいは知識の跡なり、［根拠となるものを］私にもってきなさい」。

5 アッラー以外の、復活の日まで応じることもないものに呼びかけている者ほど、迷っている者があるだろうか。





それらは、彼らの呼びかけにも無頓着である。[2]

6 そして人々が［裁きのために］集められるとき、それらは彼らに対する敵となる。彼らから仕えられることさえ拒むだろう。[3]

7 われらの明白なしるしが読み聞かされ、真理がもたらされるとき、［真理を］拒む者は「これは明らかな魔術に過ぎない」などと言う。

8 あるいは彼らは「彼［ムハンマド］がこれをねつ造したのか」などとも言う。［ムハンマドよ、］言いなさい。「もし私がこれをねつ造したなら、あなたがたには、アッラーに反して私を守るためにできることは何もない。あなたがたがこれについて何を言っているかは、かの御方がもっともよく知っている。アッラーは、私とあなたがたのあいだの証言者として万全である。もっともよく赦す御方、もっとも慈悲深い御方」。

9 言いなさい。「私は、［他の］使徒たちと何も変わらない。私に、またあなたがたに、何がなされるのかも分からない。私は、ただ私に啓示されたことに従うだけ。私は、［啓示または警告を］明らかにするひとりの警告者に他ならない」。[4]

10 言いなさい。「あなたがたは、考えてもみたのか。これ［クルアーン］はアッラーの御許からのものなのに、あなたがたがそれを拒んでいたなら［どうなるか］。イスラエルの民の中から、ひとりの証言者が、これはそうしたものと証言し、これを信じるようになったのに、あなたがたが高慢にふるまっていたなら［どうなるか］」。本当にアッラーは不正をなす民を導かない」。[5]

11 ［真理を］拒む者たちは、信じる者たちに言う。「もしそれが［本当に］良いものであるなら、これについて彼らの方が、私たちよりも先んじていたはずがない」。そして導かれないとなると、彼らは言う。「こ

れは、大昔の作り話だ」。[6]

12 これ以前にも、導きとして、また慈悲としてのムーサーの啓典があった。これは、それ「すなわち以前の啓典」を確認するアラビア語の啓典。不正をなす者には警告し、行いの善良な者には良い報(しら)せを伝えるためのもの。[7]

13 本当に「私たちの主はアッラーです」と言い、そののちはまっすぐであり続ける者。彼らには恐れもなく、嘆きもないだろう。

14 これらの者は楽園の仲間。彼らは、自分たちが行ってきたことへの報いとして、永遠にその中に住まうだろう。

15 われらは人間に対し、両親には良くするようにと命じてある。母は「子を胎内に」身ごもっては苦しみ、産んでは苦しむ。身ごもってから乳離れするまで、三十か月を要する。それから十分に成長し、齢も四十に達すると、「主よ。私と私の両親へのあなたからの恩寵に、感謝させてください。あなたの喜びにあずかるために、私を行い正しい人「として認められる者」にしてください。また私の子孫も正しい人「として認められる者」であれるようにしてください。本当に、私はあなたに悔い改める、服従する者「ムスリム」のひとりです」と言うようになる。[8]

16 これらの者は、われらが、その行いのうち最善のものを受け入れ、またその過ちについては見のがしてやる者たち。彼らに約束されていた真実の約束のとおり、彼らは楽園の仲間となるだろう。[9]

17 しかし、自分の両親に「みっともないことだ。あなたがた二人とも、私が「死後に墓の中から」連れ出されるなどと脅すのですか。私以前に、すでに何世代も過ぎ去っているというのに」と言う者もある。両親はアッラーの助けを願い、「災禍(さいか)なるかな。信じなさい、本当にアッラーの約束は真理なのだから」と





言う。しかし、その者は言う。「これは、大昔の人の伝説に過ぎない」。[10]

18 これらの者は、すでに過ぎ去った彼ら以前の、ジンや人間の共同体の中にいる者であり、御言葉がその身の上に真理となる者。本当に、彼らは敗者である。

19 すべての者に、それぞれの行いに応じた様々な位階がある。かの御方は、その行いに応じて十分に報いる。彼らが、不当に扱われることはない。[11]

20 「真理を」拒んでいた者が業火にさらされるその日。「あなたがたは現世の生で、諸々(もろもろ)の良いものを自分たちで浪費し、そのことを楽しんでいた。それで今日、あなたがたは恥ずべき懲罰をもって報いられる。あなたがたが地上で「正当な」真理なくして高慢にふるまい、背き続けていたために」。

21 アードの同胞「預言者フード」がその民に、砂の丘で警告したときのこと「を思いなさい」。「アッラーの他には、何ものにも仕えないように。私はあなたがたのために、大いなる日の懲罰が恐ろしい」。警告者は彼以前にも、また彼以後にも到来していた。[12]

22 彼らは言った。「あなたは私たちの神々から、私たちを去らせようとして来たのか。あなたが私たちを脅しているものを持ってきなさい、本当にあなたが真実を語っているのなら」。

23 彼は言った。「その知識は、ただアッラーの御許にあるのみ。私は、私がもって遣わされてきたものをあなたがたに伝えるだけ。しかし私には、あなたがたは無知の民であると見える」。[13]

24 それから、雲が彼らの谷に近づいてくるのを見ると、彼らは言った。「これは、私たちに雨を降らす雲だ」。いいや、しかしこれこそ、あなたがたが急ぎ求めていたもの。その風の中には痛烈な懲罰があり、

25 それは主の命令により、ありとあらゆるものを全滅させる。朝になると、見えるのは「誰もいなくなった後に残された、」彼らの住みかだけ。このように、われらは罪ある民に報いる。[14]

26 われらは確かに、あなたがたにもそうはしなかった興し方で彼らを興した。われらは彼らに、聞く耳と見る目と心を持たせたが、彼らの聞く耳も見る目も心も、彼らの役には立たなかった。それは彼らがアッラーの御しるしを拒んだため。そうして彼らは、かつて自分があざ笑っていたものに囲い込まれてしまった。

27 われらはあなたがたの周囲の町々を滅ぼし、われらのしるしを様々なものとした。それにより彼らも、［真理を否定することから］戻ってくるだろうと。[15]

28 アッラーに近づくためにと、彼らがこの御方をさし置いて選び取ったものは、どうして彼らを助けなかったのか。いいや、それらは彼らから失われてしまった。それは彼らの作り話、彼らのねつ造したものに過ぎなかった。[16]

29 われらが、クルアーンを聞くようジンの群れをあなたのところへ行かせたときのこと［を思いなさい］。その場に来ると、彼らは［互いに］言った。「沈黙して耳をかたむけよ」。それから、それが終わると背を向けて［帰ってゆき］、彼らの民への警告者となった。[17]

30 彼らは言った。「私たちの民よ。本当に私たちは、ムーサーの後に下された啓典を聞いた。それは以前のものを確認し、真理と、まっすぐな道程とに導くもの。[18]

31 私たちの民よ。アッラーへ呼び招く者に応じ、信じなさい。かの御方はあなたがたの罪について、あなたがたを赦すだろう。そして痛烈な懲罰から、あなたがたを救うだろう」。[19]

32 アッラーへ呼び招く者に応じない者は、地上から逃れられず、また彼らには、この御方をさし置いて他に保護者は誰もいない。これらの者は、明らかな迷いの中にいる。

33 彼らは見ないのか、諸天と大地を創造し、またその創造に決して疲れることもないアッラーには、死せるものに生をもたらすこともできるということを。いいや、本当にかの御方はあらゆるものごとにおいて全能である。





34 ［真理を］拒んでいた者たちが、業火にさらされるその日。「これこそ、真理ではないのか」。彼らは言うだろう。「まさしく、私たちの主にかけて」。かの御方は告げるだろう。「それなら、あなたがたが［真理を］拒んでいたことへの懲罰を味わえ」。

35 ［ムハンマドよ、］それゆえあなたはよく耐えていなさい、選ばれた偉大な使徒たちもよく耐えていたように。彼らのことで、急ぎ求めてはならない。約束されていたものを見るその日、彼らはまるで一日のうち一刻も過ごさなかったかのよう［に思える］だろう。これが伝言である。背く民の他に、滅ぼされるべきものがあるだろうか、と。[20]

1 あらゆる被造物は創造者の絶対的な力能の証明であることが述べられている。
2 偶像は生命も知性も持たず、それらは人工物に過ぎない。
3 来世において偶像は、現世でそれらを崇拝していた者たちの敵となる。
4 ここでの預言者ムハンマドは、彼は新説を唱えているのではなく、彼以前に遣わされた使徒たちと同様のことを説いていること、また彼らがそうであったように、彼も肉体を有する一個の人間であり、決して神的な属性を帯びた存在ではないことを告げるよう命じられている。そして偶像を奉ずるマッカの住民に対し、将来、彼らの上に何が下されるのかは、彼自身にも予知し得ないことであると警告している。彼は最初の預言者ではないが、最後の預言者であり、また最後の

警告者として到来した。過去から教訓を学ぶか否かは、マッカの住民自身に委ねられている。

5 「イスラエルの民の中から」あらわれた「ひとりの証言者」とは、アブドゥッラー・ビン・サラームのことを指す。カイヌカ族出身のユダヤ教のラビで、預言者がマディーナに移住したのちにイスラームに改宗した。

6 最初のムスリムたちの中には、奴隷だった者たちや貧しい人々が多く存在した。クライシュ族の有力者たちは、そのことをもってイスラームを劣るものであると決めつけた。

7 この節を含め、クルアーンの多くの節では、導きの書としてクルアーン以前には律法が存在したことや、クルアーンが以前の諸啓典を支持するものであることが繰り返し述べられている。

8 クルアーンの解釈者たちによると、この節の啓示のきっかけとなったのはアブー・バクルであったとされている。ムハンマドが預言者の使命を課されてから二年後に、アブー・バクルは四十歳の誕生日を迎えた。人間が人間として成熟し、能力的にも完成を迎える年齢である。彼の精神的な能力は、四十代を経てもなお成長し続け、さらに高みへと上昇していった。人間は自らの両親に対し親切にするべきであり、それはまさしくアブー・バクルが、彼の両親のために祈り、また偶像を奉ずる者たちからの迫害を受けていた多くの人々を救ったことにも通じている。彼は私財をなげうって多くの奴隷を買い受け、解放して自由の身にした。アブー・バクルは、最大の祝福とは、イスラームの道に入り、神に喜ばれる善行に励むことであるのを体現した。

9 神はアブー・バクルのような人や、彼のように信仰する者たちを受け入れ、彼らの最善の行いを認め、それに報いる。そして神は、彼らの犯した過ちについては不問に付す。

10 父と母、そして子の間の議論が示されている。神を拒絶する不従順な子の姿が描き出されている。この子は、自分の両親を信用していない。

11 信仰する者たちは高められ、楽園に召されるが、不信仰の者たちは地獄の奥深くに落とされるだろう。





12 アードの民は、海を見下ろす砂丘に住んでいた。この地域は「アハカーフ」と呼ばれていた。

13 預言者フードは彼の民への答えとして、「懲罰の時がいつ到来するのかは神だけが知っている」と告げた。

14 預言者フードと、アードの民のうち信仰ある者は救われた。

15 滅ぼされた居住地は、かつてサムード、アード、そしてルートの民が住んでいた町だった。

16 彼らは、自分たちが「神々」として崇めているものはアッラーの寵愛をうけており、したがってそれらを仲裁として、自分たちもアッラーに近づけるものと考えていた。しかし次第にそれらを崇めること自体が目的となり、それらに救いを求め、祈りを捧げることが信仰となっていった。

17 これはムハンマドがターイフ遠征からの帰還の途上、ナフルの谷で朝の礼拝をしていた時に起こった出来事である。ジンの民の集団（七名から九名がいたとされている）が、ムハンマドがクルアーンを朗読するのを聞きに近づいてきた。彼らはひとしきり耳を傾け、自分たちのジンの民のところへ戻ると、クルアーンが真理であることを証言した。七二章を参照。

18 ジンたちがすでに預言者ムーサーや啓典に対する信仰を有していたことが示されている。クルアーンを耳にして、彼らはそれが同一の神を根源として下されたものであることを理解し、ムハンマドとクルアーンを信じるに至った。

19 ジンがどのような様態にあるかについては、様々な学者の間に議論がある。アブー・ハニーファによれば、ジンには地獄の懲罰からの救済はあるものの、報奨を授かることはないとされる。イブン・アビー・ライラ、アブー・ユースフらは、ジンは地獄の懲罰からの救済と同時に報奨も授かるものとしている。

20 ここでは、ムハンマドは困難を耐え忍ぶよう助言されている。彼以前に遣わされた「選ばれた偉大な使徒たち」、すなわちヌーフ、イブラヒーム、ムーサー、イーサーといった他の預言者たちも多くの困難に直面したが、彼らは自らの目的のためにしっかりと踏み堪え、決してあきらめることはなかった。

# 第四七章　ムハンマド

マディーナ啓示

本章は、第二節にある預言者への言及にちなんでこの名がつけられた。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 「自らも真理を」拒み、「加えて」アッラーの道から「他者をも」さえぎる者。かの御方は、彼らの行い
を空しいものにするだろう。[1]
2 しかし信じて正しい行いをする者、またムハンマドに下されたもの、すなわち彼らの主からの真理を信
じる者。御方は彼らの悪事を消し去り、彼らのあり方を改めるだろう。
3 それは、「真理を」拒む者は虚偽に従い、信じる者はその主からの真理に従っているため。このようにアッ
ラーは、人々のために例えを示す。
4 あなたがたが「真理を」拒む者に「戦場で」会したときは、その首を討ち取りなさい。討伐し終えたときは、
「捕虜を」厳重に繋ぎなさい。そののち、戦いの重荷が下ろされたら、情けをもって解放するか、あるい
は代償を払わせなさい。「命じられていることは」このとおりであり、もしアッラーがそうと望めば、必





ず御自ら彼らに返報しただろう。しかしこれはあなたがたを、互いをもって試みるため。またアッラー
の道のために殺害された者たち、かの御方はそうした者の行いを、決して空しいものにはしない。[2]
5 かの御方は彼らを導き、彼らのあり方を改めるだろう。
6 そして彼らを、そうと知られるとおりの楽園に入らせるだろう。
7 信じる者たちよ。もしあなたがたがアッラーを助けるなら、アッラーはあなたがたを助け、その足元を
確かなものとするだろう。
8 しかし「真理を」拒む者たちにあるのは破滅である。かの御方は、彼らの行いを空しいものにするだろう。
9 それは彼らが、アッラーの下したものを嫌ったため。彼らの行いは、全くの無に帰される。
10 彼らは地上を旅し、彼ら以前の者たちの結末が、どのようであったかを見たことはないのか。アッラー
は彼らを全滅させた。「真理を」拒む者「の結末」も、これと同じ。[3]
11 それはアッラーが信じる者たちの守護者であり、「真理を」拒む者には、彼らの守護者がいないため。
12 本当にアッラーは、信じて正しい行いをする者たちを、川がその下を流れる楽園へ入らせる。しかし「真
理を」拒む者たちは「現世の生を」楽しみ、家畜が食べるように食べる。業火が彼らの居どころとなるだ
ろう。[4]
13 「預言者よ、」あなたを追放した町よりも力において強い町が、どれほど「多く」あっただろうか。われ
らはそれらを滅ぼした。彼らには、何の助けもなかった。[5]
14 主からの明白な証の上にある者と、自分の悪事をすばらしいもののように飾ってみせられ、自分の欲求
に従う者とが同じであろうか。
15 いうなれば畏れる者に約束された楽園とは「このようなもの」、汚れることのない水の川がその中を流れ、

また味の変わらない乳の川と、飲む者には美味なぶどう酒の川、そして清められた蜜の川がある。その中で彼らは、あらゆる種類の果実と、彼らの主の赦しを得るだろう。［これらのすべてを享受する者と、］業火の中に永遠に住まい、はらわたが裂けるまで熱湯を飲まされる者とが同じであろうか。[6]

16 彼らの中には、あなたに耳を傾ける者もいる。そしてあなたのところから立ち去ると、知識を与えられている者に言う。「彼は今、何を言っていたのか」。これらの者はアッラーがその心を封じた者、自分の欲求に従う者。[7]

17 導かれている者には、かの御方はその導きを深め、篤信を与える。

18 それでは彼らは、ただ［終末の］かの時が、突然に彼らに来るのを待っているだけなのか。兆しはすでに到来している。しかしそれが彼らに到来してしまったとき、彼らには想い起こせるだろうか。[8]

19 ［預言者よ、］それゆえ知りなさい、アッラーの他にいかなる神もないことを。そして赦しを願いなさい、あなたの罪のために、信仰者の男女のためにもまた。アッラーは、あなたがたの移るところも居るところも知っている。[9]

20 信じる者たちは言う。「章がひとつ、下りさえしたなら」。しかし判断を下す章が下され、その中に戦いについての戒め（いまし）があると、あなたは見るだろう、心の中にやまいのある者たちが、臨終を迎えた者のような目つきであなたを見るのを。彼らに災禍（さいか）あれ。

21 従順さと親切な言葉。彼らのために良いこととは、ものごとが決定されたとき、アッラーに対し正直であること。

22 それともあなたがたは［命じられたことに］背を向けて、地上に退廃を広め、あなたがたの血縁を切り離すつもりなのか。





23 これらの者は、アッラーに忌み嫌われ、耳も目も塞がれた者。

24 彼らは、クルアーンを熟考しないのか。それとも彼らの心には、鍵がかかっているのか。

25 導きが明らかにされた後になって、背中を向けて離れ去る者たち。悪魔は彼らをそそのかし、むなしい希望を長引かせるだろう。

26 それは彼らが、アッラーが下したものを嫌う者に「私たちは、あるものごとについてはあなたがたの命じる通りに従いましょう」と言ったため。アッラーは、彼らの秘めるものを知っている。

27 それでは天使たちが彼ら［の魂］を、その顔や背を打って召し寄せるならどうであろうか。

28 それは彼らが、アッラーを怒らせることに従い、またかの御方が喜ぶことを嫌ったため。それで彼らの行いは、全くの無に帰される。

29 あるいは心の中にやまいのある者たちは、アッラーが彼らの［隠している］憎悪をさらけ出すことはないと思っているのか。

30 もしわれらがそうと望めば、われらは必ずあなたに彼らを示すこともできる。あなたも彼らを、その目印によって見分けていただろう。しかしあなたは、彼らの語り方によって必ず見分けられる。アッラーは、あなたがたの行いをよく知っている。

31 われらは、あなたがたのうち誰が努力する者か、またよく耐える者かが知れるまで、必ずあなたがたを試みるだろう。またあなたがたの言動も試みるだろう。

32 ［自らも真理を］拒み、［他者をも］さえぎり、また導きが明らかにされた後になっても使徒と争う者たち。本当に彼らには、いささかもアッラーを害することはできない。御方は彼らの行いを、全くの無に帰すだろう。

33 信じる者たちよ。あなたがたはアッラーに従いなさい。また、その使徒に従いなさい。そしてあなたがたの行いが、無に帰されることのないようにしなさい。

34 ［自らも真理を］拒み、［加えて］アッラーの道から［他者をも］さえぎり、それから［真理を］拒んだ者として死ぬ者たち。アッラーが、彼らを赦すことはないだろう。

35 それゆえ臆してはならない。和平を呼びかけてはならない。あなたがたの方が優位に立つ。アッラーはあなたがたと共にあり、あなたがたの行いは徒労とはならない。10

36 本当に現世の生は、遊びか［一時の］気晴らしに過ぎない。あなたがたが信じ、畏れるなら、かの御方はあなたがたに報酬を与える。決してあなたがたの財を求めることはない。11

37 もしかの御方があなたがたにそれを求め、あなたがたに強いたなら、あなたがたは物惜しみし、かの御方があなたがたの［隠している］憎悪をさらけ出すことになるだろう。12

38 見なさい。あなたがたは、アッラーの道のために費やすよう呼びかけられている。しかしあなたがたの中には、物惜しみする者がいる。誰であれ物惜しみする者は、ただ自分自身に対して物惜しみしているだけ。アッラーは満ち足りた御方であり、あなたがたの方こそ持たざる者。もしあなたがたが背を向けるなら、かの御方はあなたがたを他の民と代わらせるだろう。彼らは、あなたがたと同じようにはならないだろう。





1 マッカの住民はイスラームに抵抗し、信仰者を迫害した。人は信仰を通して自らと宇宙全体の調和に至る。しかしマッカの住民は信仰を否定したために、それまでの善行も台無しにしてしまった。

2 この節によれば、虚偽に従う不信仰者と戦場で向き合ったならば、その首を刎ねなくてはならない。彼らが制圧され、無力化されている場合は、捕縛しなくてはならない。戦争が終結したなら、彼らは恩赦をもって解放されるか、賠償と交換される。それが神の命じるところである。神の道に奮闘し殺害された者は、その奮闘は無駄にはならず、報奨を授かるだろう。

3 ここでは不信仰者たちは、彼ら以前の時代の他の民たちが、不服従と不正という理由でどのように滅ぼされたかの警告を受けている。そうした歴史的な事蹟を思い起こし、地上を旅して滅ぼされた民の遺跡をその目にすることで教訓を得るよう、マッカの不信仰者たちを促している。

4 この節では現世における不信仰者のとる行動について、（家畜のように）貪り、無法で乱雑な性交渉を持ち、安逸にひたって過ごすものとして描き出されている。

5 この節における「あなた（ムハンマド）を追放した町」とはマッカを指す。過去には、マッカよりも強い町がいくつも滅ぼされたことを、不信仰者たちに思い起こさせている。

6 ハディースが説き明かすところによると、楽園のぶどう酒や蜂蜜は最初から「ぶどう酒」「蜂蜜」として創造され、泉から湧き出ている。現世でのそれらが発酵した果実から蒸留されたり、また蜂蜜はミツバチの腹から採集されたりするのは、過程をもたせることにより、人間にとって理解しやすいようにという神の取り計らいである。

7 ここでは、偽善者の行動が説き明かされる。預言者ムハンマドの前にいるときは、彼らは預言者の説教や話をおとなしく聞いているが、ひとたびその場を離れると、彼らはイスラームを知る者たちに、預言者が何を言っていたのかを尋ねるのである。その目的が、からかうことにあるのは言うまでもない。彼らの心は、彼ら自身の偽善のため封印されてい

るのである。

8 上記の節にある通り、「終末の時」の始まりはすでに到来している。最後の預言者ムハンマドが遣わされたこと、月が二つに割れたこと、飢饉や黒雲の出現などがその兆候であるとされる。

9 神は、人間が「現世」をせわしなく往来することについても、また「来世」を休息の場とすることについてもよく熟知している。

10 この節が啓示された当時、マディーナの片隅に住まう数百名のムハージルーン（移住者）とアンサール（援助者）からなる少数の人々が、宗教を異にするアラブたちに囲まれながらもイスラームの規範を守っていたことを念頭においておくべきだろう。そのような条件下において、彼らは「臆してはならない。和平を呼びかけてはならない」と、果断に立ち向かうよう奨励されたのである。

11 三八節にもある通り、神は自足する御方であり、人間に何かを求める必要もない。神が人間に対し、神の道のために費やすよう命じるのは、神のためにではなく、人間自身のためにそうするよう命じている。

12 世俗的な所有物に関して、人間が直面する試練について言及されている。

# 第四八章　アル＝ファトフ　勝利

マディーナ啓示

アル＝ファトフは、イスラームの拡大という点で非常に大きな勝利をもたらしたフダイビーヤの和議についての章である。
この章はヒジュラ暦の六年め、マッカとマディーナの間で啓示された。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 ［預言者よ、］われらは確かに、明白な勝利をあなたに授けた。
2 それはアッラーが、あなたのこれまでの、またこれからの罪を赦し、あなたの上に恩寵をまっとうし、あなたを正しい道に導こうと思し召してのことであり、1
3 またあなたを、力強く援助しようとしてのこと。2
4 信仰者の心に静謐（せいひつ）を下し、それにより彼らの信仰と共にさらなる信仰を増す御方。諸天と大地の軍勢はアッラーに属する。アッラーは、すべてを知り賢明である。3
5 それは信仰者の男女を、川がその下を流れる楽園に連れてゆき、彼らをその中に永遠に住まわせ、彼らから悪事をとり除こうとしてのこと。アッラーの御許において、大いなる成就とはまさしくこのこと。





6 アッラーについて悪い憶測をする偽善者の男女、多神を奉ずる男女には懲罰が科されるだろう。彼らの上に、凶運がめぐる。アッラーは彼らに怒り、忌み、彼らのために地獄を用意した。行き着く先の、何と悪いことか。
7 諸天と大地の軍勢はアッラーに属する。アッラーは威力あり、もっとも賢明である。
8 ［預言者よ、］われらはあなたを証言者として、吉報の使者として、また警告者として遣わした。4
9 それによりあなたがた［人間］がアッラーとその使徒を信じ、彼［使徒］を助け、彼を敬い、朝も夕も、かの御方を讃美するようにさせるため。
10 ［ムハンマドよ、］あなたに忠誠を誓う者とは、ただアッラーに忠誠を誓う者に他ならない。アッラーの御手は、彼らの手の上にある。それゆえ誰であれこの誓いを破る者は、ただ自分自身に反して破る者。アッラーに対する自分の約束を果たす者には、やがて大いなる報酬があるだろう。5
11 後に居残ったアラブ［の部族］たちは、あなたにこう言うだろう。「家財や家族のことで忙しかったのです。私たちのために赦しがあるよう祈ってください」。彼らは、舌先だけで心にもないことを言う。言いなさい。「もしアッラーがあなたがたに、害をもたらすつもりか、あるいは益をもたらすつもりなら、かの御方に対し、あなたがたのために誰が何をできるだろうか。いいや、本当にアッラーはあなたがたの行いを熟知している。6
12 いいや、むしろあなたがたは、使徒も信仰者たちも、決して家族の許へ帰ってこないと思っていた。そしてそれは、あなたがたの心の中ですばらしいことのように見えていた。あなたがたは悪い憶測をしていた。あなたがたは、救いがたい民となった」。
13 誰であれアッラーとその使徒を信じない者、［真理を］拒む者たちのために、われらは烈火を用意してある。

14 諸天と大地の王権はアッラーに属する。御心にかなう者を赦し、またそうと望めば誰であれ罰する。本当にもっともよく赦し、もっとも慈悲深いのはアッラーである。

15 後に居残った者たちは、あなたがたが戦利品をとろうと出立（しゅったつ）するとき、「私たちも、あなたがたと一緒に行かせてください」などと言うだろう。彼らはアッラーの御言葉を変えたがっている。言いなさい。「あなたがたは、決して私たちと一緒に来てはならない。アッラーは以前からそのように告げている」。すると彼らは言うだろう。「いいや、あなたがたは私たちを妬んでいるのだ」。いいや、わずかを除いて彼らはほとんど理解していない。[7]

16 後に居残ったアラブ「の部族」たちに言いなさい。「やがてあなたがたは、強大な民との戦いに呼び出されるだろう。あなたがたが戦い抜くか、あるいは彼らが服従するかである。もしあなたがたが「その呼び出しに」従うなら、アッラーはあなたがたに良い報酬を与えるだろう。しかし以前に背を向けたように、あなたがたが背を向けるなら、かの御方はあなたがたを、痛烈な懲罰をもって罰するだろう」。[8]

17 しかし、目の見えない者に落ち度はない。足が不自由な者に落ち度はない、病気の者に落ち度はない。誰であれアッラーとその使徒に従う者なら、かの御方は、川がその下を流れる楽園に入らせるだろう。背を向ける者は、痛烈な懲罰をもって罰するだろう。

18 かの大木の下で、彼らがあなたに忠誠を誓ったときのこと。アッラーは信仰者たちに喜んだ。彼らの心の中にあるものを知り、彼らの心に静謐（せいひつ）を下し、間近の勝利をもって彼らに報いた。[9]

19 それから、彼らの得た多くの戦利品によっても。アッラーは、もっとも威力ありもっとも賢明である。[10]

20 アッラーは、あなたがたが得るだろう多くの戦利品をあなたがたに約束し、また、あなたがたのためにこれを急ぎ、人々の手があなたがたに及ぶことのないようにした。それは、これをもって信仰者への御





しるしとし、あなたがたをまっすぐな道へ導くため。

21 これの他に、あなたがたの力が及ばないものについてもまた。アッラーは、すでにそれらを囲い込んでいる。アッラーは、ありとあらゆるもののごとにおいて全能である。[11]

22 もし「真理を」拒む者たちがあなたがたと戦ったとしても、彼らは必ず背中を向けて逃げ出すだろう。彼らには、自分たちを守る者も助ける者も見出せないだろう。

23 これが、すでに過ぎ去った以前からのアッラーの慣行。あなたはアッラーの慣行に、何の変わりも見出さないだろう。

24 あなたがたを彼らに勝たせた後に、マッカの谷間で、彼らの手があなたがたに及ぶのを制し、またあなたがたの手が彼らに及ぶのを制した御方。アッラーは、あなたがたがしていることをすべて見ている。

25 彼らは「真理を」拒み、禁制のマスジドからあなたがたを締め出し、また犠牲の捧げものが、届けられるべき場に届くのを妨げた者たち。「マッカに」あなたがたの知らない信じる男女がいて、あなたがたが、そうとは知らずに彼らを踏みにじり、罪を犯すことになりさえしなかったなら「、マッカへの進軍は許されていただろう」。アッラーは、御心にかなう者をその慈悲の中に受け入れる。もし彼ら「信仰者」が「それ以外の者と」分かたれていたなら、われらは彼らの中にいる「真理を」拒む者たちを、痛烈な懲罰をもって罰しただろう。[12]

26 「真理を」拒む者たちが、その心の中に熱狂を、すなわち無明（むみょう）の時代の熱狂をわき立たせたときのこと。アッラーは使徒と信仰者の上に静謐（せいひつ）を下し、篤信の御言葉を結わえつけた。彼らにはそれがふさわしく、また彼らもそれに値するため。アッラーはありとあらゆるものごとを知る。[13]

27 本当にアッラーは、その使徒の夢を真理とし「て実現し」た。もしアッラーが望むなら、あなたがたは必

ず安全に、禁制のマスジドに入るだろう。頭部を剃るか、短く切りそろえて、何の怖れもなく［巡礼をまっとうするだろう］。アッラーは、あなたがたの知らないことをよく知っている。それで前もってあなたがたに、この間近な勝利をあらしめたのである。[14]

**28** 導きと真理の宗教とをもってその使徒を遣わし、すべての宗教の上に優勢とする御方。アッラーは、証言者として万全である。

**29** ムハンマドはアッラーの使徒。彼と共にある者は、［真理を］拒む者に対しては揺るがず、互い同士には慈悲深い。あなたは彼らがこうべを垂れ、ひれ伏し、アッラーからの御恵みと喜びを求めるのを見るだろう。彼らの目印は、その顔にあるひれ伏した跡。律法の中にも、彼らのような者の例がある。また福音の中にも、彼らのような者の例がある。それはひと粒の種のように芽を出し、強くなり、太くなり、その茎でしっかりと立ち、種をまいた者を喜ばせるようなもの。それは［真理を］拒む者を憤慨させるだろう。しかしアッラーは、彼らの中でも信じて正しい行いをする者に、赦しと大いなる報酬を約束している。[15]

1 預言者の勝利は、彼に授けられた天の恩寵が完璧であったことの表れである。彼は歴史上において最も重要な人物の一人となり、その名は様々な機会において神の名と共に世界じゅうで口にされるようになった。

2 この節での神の「援助」とは、マッカならびにターイフ征服時のことを指している。いずれも預言者ムハンマドに対立した二大都市であったが、預言者に対立した人々は敗北した。預言者は、神の慈悲により尊厳と栄誉を得た。





3 ここでは「静謐」と訳出した「サキーナ」とは、心の静けさと安らぎを表している。これは危機的な状況にあったにもかかわらず、ムスリムたちがフダイビーヤで示した忍耐と冷静さを意味する。彼らが困難を克服することができたのは、預言者に対する彼らの完全な信頼の賜物でもあった。これもまた、神の恩寵のひとつである。

4 天の吉報を伝え、地獄の業火について警告すると同時に、預言者を信頼する者のために、来世において証言者をつとめることは預言者の義務である。

5 神の使徒に忠誠を誓う者とは、神に忠誠を誓った者であることを意味する。誓いを立てたムスリムの手は、預言者ムハンマドという一個人の手の上に置かれたのではなく、神の代理者の上に置かれたのであり、彼らは、神の使徒を通して実際には神に誓ったのである。「アッラーの御手は、彼らの手の上にある」とは、神は彼らと共にある全能の存在であり、彼らの話すことを聞き、彼らがどこで何をしているかを見ている、彼らの内面も外面も知っているということを表している。

マッカへの使者として派遣されたウスマーンが殺害されたという噂が届いた際に、フダイビーヤの宿営地で預言者が教友たちにある誓いを誓わせたという出来事についての啓示である。その誓いとは、ウスマーン殉教の報が真実であることが明らかになった場合、たとえ戦闘に発展しようと、ムスリムはただちにクライシュ族との縁を断つ、というものであった。のちにウスマーンは監禁を解かれて帰還した。

6 マディーナ郊外の住民に関する言及である。ウムラ（小巡礼）の支度をしていた預言者は、一緒に来るよう彼らを招いたが、彼らは信仰を口にしつつ、死を恐れて家から離れようとはしなかった。ウムラのためにクライシュ族の拠点であるマッカに出向くのは、自ら死に出かけるようなものだと考えたのである。

7 イスラーム暦にしてヒジュラ六年、フダイビーヤから帰還した預言者は、ハイバル奪取のために遠征した。この勝利により多くの戦利品がもたらされた。遠征に加わらず後に残った人々は、戦利品の分配を欲したが、この節において説き

明かされている通り、戦列に加わらなかった彼らが戦利品の分配を受け取ることはなかった。

8 この時点で「戦い抜く」ことから後ずさりした人々は、のちに「強大な民との戦い」への招集という形で試されることになる。ペルシャやローマといった帝国や、あるいはヤマーマ出身で「カッザーブ（詐欺師）」と呼ばれたハニーファ族のムサイリマを筆頭とする、預言者ムハンマド没後に出現したいわゆる「偽預言者」と、そうした人物と結託して政治勢力を形成した集団などが相当する。

9 ここでの「忠誠」の誓いとは、フダイビーヤにあったサムラの大木の下で交わされた「リズワーンの盟約」を指している。預言者の同胞およそ千四百名が、命を落としてでも最後までクライシュ族と戦うことを宣言した。神は彼らに平安を送り届けて新たな自信をもたらし、程なくしてハイバル奪取という「間近の勝利」をもって彼らに報いた。

10 ハイバルの制圧時に、ムスリムは多くの戦利品を得た。続く次の節はハイバルの戦いののちにムスリムが成就するその他の勝利を指している。

11 おそらくマッカ制圧を指す。

12 当時のマッカには、相当数のムスリムが住んでいた。彼らは移住の手立てもなく、信仰を隠すか、あるいは迫害を受けていた。もしも戦闘になり、ムスリムがマッカに攻め入っていたなら、そこに住むムスリムたちも巻き込まれ、殺害されていたかもしれない。

13 この節は「フダイビーヤの和議」に調印した際に起きた出来事に関連している。偶像を奉ずるマッカ住民は、「神の使徒」という預言者の署名を認めることを拒否した。信仰者たちはいたく悲しんだが、この節にある通り、心を鎮め、「篤信の御言葉」を思い起こすことにより落ち着きを取り戻した。預言者はアリーに、「神の使徒」に替えて「アブドゥッラーフの息子ムハンマド」と署名するよう命じた。マッカ住民はこれを受け入れ、和議に署名した。自制心を保つことがいかに重要であるかが知らされる節である。





14 フダイビーヤへと出立する前に、預言者ムハンマドは夢を見た。彼とその同胞が、勝利をおさめてマッカに凱旋（がいせん）する夢であった。彼が見たその夢は、常日頃からその実現を願っていた同胞たちを大いに満足させた。その年、信仰者たちのマッカ入場が妨げられると、彼らはいたく失望した。偽善者たちはこれを利用して、預言者の見た夢がかなう見込みはないと吹聴（ふいちょう）し、信仰者たちを説き伏せようとした。預言者の夢が現実となったのはその翌年である。マッカは無血開城し、信仰者たちはマッカ凱旋（がいせん）を果たした。偽善者には想像もつかないことであったが、これこそが神の知恵と計画であった。

15 最初の頃のムスリムは、数も少なく弱い存在であったが、後になるに従い数も増え、より強い存在となっていった。それは小さな種子に始まり、芽を出して強く育ち、やがて自らの茎をもって立ち、収穫をもたらす植物に似ている。これがイスラームの成長のあり方である。

# 第四九章　アル＝フジュラート　私室

マディーナ啓示

この章では礼儀作法、特に預言者に対するふるまいや態度について扱われている。四節に現れる「フジュラート（部屋、私室の意）」という言葉にちなんで名づけられた。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 信じる者たちよ。何ごとにおいても、アッラーとその使徒よりも［あなたがたの都合を］先んじてはならない。アッラーを畏れなさい。本当にアッラーはすべてを聞き、すべてを知る。[1]

2 信じる者たちよ。あなたがたは、預言者の声以上に声高になってはならない。あなたがたが互いに大声で話すように、彼に対して大声になってはならない。さもないとあなたがたの行いは、あなたがたも気づかないうちに全くの無に帰されるだろう。

3 アッラーの使徒の前でその声を抑える者とは、アッラーがその心の篤信を試みた者のこと。彼らには、赦しと大いなる報酬があるだろう。

4 ［預言者よ、］本当に、私室の外からあなたを呼ばわる者たちの多くは、考えることをしない者たち。[2]





5 もし彼らが、あなたが彼らの前に出てくるまで待てるものなら、その方が彼らのために良い。アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。[3]

6 信じる者たちよ。もし背く者があなたがたに［何かしらの］報せをもって来たなら、よく確かめるようにしなさい。さもないとあなたがたは無知のために民を傷つけ、自分たちのしでかしたことを後悔するだろう。[4]

7 あなたがたの中にアッラーの使徒がいることを知りなさい。もし彼が多くのものごとについてあなたがたに従っていたなら、あなたがたは必ず忌むべきことになっていただろう。しかしアッラーは、あなたがたにとり信仰を愛すべきものとし、それによりあなたがたの心を飾り、またあなたがたが、［真理を］拒むこと、背くこと、逆らうことを嫌うようにした。これらの者こそ、正しく導かれている者。

8 ［それは］アッラーからの御恵みと恩寵。アッラーは、すべてを知りもっとも賢明である。

9 もし信仰者が二派に分かれて争うなら、あなたがたは双方のあいだを和解させなさい。しかし、もし彼らのうち一方が他方を抑圧しているなら、抑圧している方と戦いなさい、彼らがアッラーの命令に立ち返るようになるまで。それでももし立ち返ったなら、公正に双方のあいだを和解させなさい。公平にふるまいなさい。本当にアッラーは公平な者を愛する。[5]

10 信仰者たちは同胞である。それゆえあなたがたは同胞のあいだを和解させなさい。アッラーを畏れなさい。そうすれば、あなたがたは慈悲にあずかるだろう。

11 信じる者たちよ。あなたがたは、どの民にも他の民を嘲笑させてはならない。彼ら［嘲笑された者］の方が、彼ら［嘲笑した者］よりもすぐれているかもしれない。また女たちも、他の女たちにそうしてはならない。彼女たち［嘲笑された者］の方が、彼女たち［嘲笑した者］よりもすぐれているかもしれない。あ

なたがた自身も中傷してはならない。互いをあだ名で呼ばわってはならない。信仰を得た後になって背信の名をつけるのは悪いこと。それで悔い改めないようなら、これらの者こそ不正をなす者。[6]

12
信じる者たちよ。あなたがたは、できる限り憶測を避けなさい。本当に憶測することは、場合によっては罪となる。互いに相手のことを探り合ったり、陰口をしたりしてはならない。あなたがたの中に、死んだ同胞の肉を食べたがる者が誰かいるのか。いいや、むしろあなたがたはそのようなことを嫌うはず。アッラーを畏れなさい。本当にアッラーは、幾度でも悔い改めを受け入れる、慈悲深い御方。[7]

13
人々よ。本当にわれらはあなたがたを男と女とに創造し、また民族と部族にしておいた。これはあなたがたに、互いのことを知り合うようにさせるため。アッラーの御許においては、あなたがたの中でもっとも貴い者とは、あなたがたの中でもっとも畏れる者のこと。本当にアッラーはすべてを知り、熟知している。[8]

14
アラブ［の部族］たちは言う。「私たちは信じます」。［ムハンマドよ、］言いなさい。「あなたがたは［未だに］信じていない。ただ『服従します』とだけ言いなさい、あなたがたの心の中には、まだ信仰は入っていないのだから。しかし、もしあなたがたがアッラーとその使徒に従うなら、御方はあなたがたの行いを、いささかも損ねることはしないだろう。本当にアッラーはもっともよく赦す、もっとも慈悲深い御方」。[9]

15
信仰者とは、アッラーとその使徒を信じ、疑惑を抱かず、自分の財も自分自身もアッラーの道に投じて励む者たちのことに他ならない。これらの者こそ、真実の人というもの。

16
［ムハンマドよ、］言いなさい。「あなたがたは、アッラーに自分の宗教を教えようというのか。諸天にあるものも大地にあるものも、アッラーはすべて知っているというのに。アッラーは、ありとあらゆるものごとをすべて知っている」。

17
彼らはイスラームを受け入れ、それであなたに恩を施したものとみなしている。言いなさい。「あなたがたがイスラームを受け入れたからといって、私に恩を施したことにはならない。いいや、むしろあなたがたを信仰に導くことにより、アッラーがあなたがたに恩を施したのである。もしあなたがたが、真実を語っているのなら」。

18
アッラーは諸天と大地の、目には見えないものを知っている。アッラーは、あなたがたが行っていることをすべて見ている。





1 「アッラーとその使徒よりも［あなたがたの都合を］先んじさせてはならない」。すなわち、「アッラーとその使徒の後に続くようにしなさい。何ごとを判断するにも、アッラーの啓典と預言者の生き方に導きを求めなさい」。

2 あるベドウィンの一団が、午睡中の使徒の部屋にやってきて、表へ出るよう彼を大声で呼ばわった。この節は、その時に啓示されたものである。

3 預言者に会うために、アラビアの様々な地域からやって来た人々の中には、礼儀作法にまったく無頓着な者も混じっていた。自分たちの到着を知らせるのに、使者を向かわせる代わりに大声で叫び、預言者の妻たちの部屋の外から、彼の名を呼ばわる始末であった。この種のふるまいは預言者を大いに悩ませたが、生来の情け深さから寛容に遇していた。しかしついに彼らのこうした非文明的な行為を叱責し、どうふるまうべきかを諭す神の執りなしが下されたのである。

預言者に会いにきて、たとえ彼を見つけられなかったとしても、常に彼の方から姿を現すまで忍耐強く待つべきであり、決して大声で彼を呼び出そうとしたりしてはならない。

4 ワリード・イブン・ウクバが、預言者の使者としてムスタリク一族を訪れた際のことである。ワリードとこの一族との間には、イスラーム以前のジャーヒリーヤの時代からの敵意がくすぶり続けていた。そのため疑心暗鬼に陥ったワリードは、戻るなりムスタリク一族が背教したと報告した。預言者はワリードの息子ハーリドを使者に送って真偽を問うた。その時、この節が啓示された。ムスリムは、この節が示す指針に従うべきである。すなわち、重要な報告を受け取った際には、どのような時であろうと鵜呑みにしてはいけない。その報告について確認し、また報告をもたらした人物についても調べるべきである。調べた結果、その人物が日頃から信の置けない不誠実な者であることが判明することもある。何ごとにおいても、何が真実であるかを慎重に確認しなくてはならない。

5 ムスリム同士が互いに争うことはムスリムの本分ではないし、原則としてあってはならないことである。しかし、もしもそうしたことが起こってしまったなら、この節にある手順を踏まえて解決するべきであろう。

6 侮辱や中傷には、言葉が用いられることもあれば、誰かの真似をしてみせたり、あからさまな罵倒ではなくとも暗に棘や含みのある言い方をしたり、誰かの言葉や行動、容姿や服装を笑ったり、ある者のささいな欠点を別の誰かに知らせ、一緒になって笑ったりすることも含まれる。

7 預言者は陰口について、「自分のきょうだいについて、本人を煩わせるようなやり方で語ることである」と定義している。これに対し、次のように問う者があった。「事実として、本人に欠点がある場合にはどうなるのですか」。預言者の答えは次の通りである。「欠点が事実であったとしても、陰口であることに変わりはない。また、もしもそれが事実でなかったなら、中傷したことになるだろう」。ここでの唯一の例外は、害悪を解決するために、本人が不在の場でそうした指摘を行うことが不可欠であり、それが結果としてやむなく陰口になってしまった場合のみである。そしてそれ以外の手





段があるにもかかわらず陰口に頼った場合は、より大きな害悪に発展する可能性が高い。

8 すべての人間は平等な者として誕生する。人間は皆アーダムとハウワーの子孫であり、自らの祖先を、他者のそれよりも優越していると吹聴するような高慢に陥ってはならない。誰かが他者よりも優れているということがあるとすれば、それは唯一、篤信においてのみである。

9 アサド一族の子孫を中心とした砂漠のアラブの一団が、預言者を訪れて次のように述べた。「私たちはイスラームに入信しました。私たちは、他の者たちと違ってあなたに戦いを挑むようなことはしませんでした」。この節では、彼らは口先だけで語っており、信仰が心の中にまで入ってはいないことが示されている。彼らは飢饉の折に、イスラームに入信したという前提で預言者に慈善を求めにやってきたのだった。

# 第五〇章　カーフ

マッカ啓示

最初の節に現れる文字にちなんでこの名がつけられている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 カーフ。栄光のクルアーンにかけて。

2 いいや、彼らは自分たちの中からひとりの警告者が到来したことに驚いている。［真理を］拒む者たちは言う。「これは驚くべきこと。

3 私たちが死んで塵となったときに［、その後で生き返るというの］か。なんと遠くからの帰りであることか」。

4 われらは、大地がどのように彼ら［の屍（しかばね）］をすり減らすかを知っている。またわれらの許には、よく守られた記録の書がある。

5 いいや、真理が彼らにもたらされたとき、彼らはそれを嘘であるとした。そのため彼らは、混乱の真っ只中にある。





6 彼らは頭上の天を見たこともないのか。われらがそれをどのように築き、また飾ったか［考えたこともないのか］。そしてそれは、亀裂ひとつないままではないか。

7 そして大地もまた。われらがそれを広げ、その上に不動の山々を据えつけ、またその中にあらゆる種類の草木を育んだ。

8 悔い改めて立ち返るしもべたちが、眼識（がんしき）を得るためのものとして、また戒（いまし）めとして。

9 また、われらは天から祝福の雨を降らせ、それにより数々の庭園を、また刈り入れるための穀物を育む。

10 また、たわわにみのる果実をつける背の高いなつめやしの木を、

11 しもべたちの糧として。またそれ［雨］により、われらは枯れた土地に生をもたらす。［復活の日の］立ち現れもこのようなもの。[1]

12 彼ら以前にも、［真理を］嘘よばわりする者たちがあった。ヌーフの民、ラッスの仲間、サムード、

13 アード、フィルアウン、ルートの同胞、

14 アイカの仲間、トゥッバウの民。いずれもその使徒たちを嘘であるとした。そのため、［彼らは］われの警告したとおりになった。[2]

15 最初の創造で、われらが衰えたというのか。いいや、［にもかかわらず］彼らは新たな創造を疑っている。[3]

16 かつてわれらは人間を創造した。その魂が何をささやくか知っている。われらはその頸動脈（けいどうみゃく）よりも［人間に］近い。

17 見なさい。一対の見張り［の天使］が、右に、左に構えて見張っている。

18 何か言葉も口にするたび、そのそばで見守る者が［記録の］用意をしている。

19 やがて死のもうろうとした状態が真理をもって訪れる。「これはあなたが避けようとしてきたもの」。

20 そして喇叭が吹き鳴らされる。これがかの警告の日。

21 すべての者が、それぞれの追っ手と、証言者と共にやって来る。[4]

22 「あなたは、このことについて本当に無頓着だった。われらは、ここにあなたの覆いをとり除こう。それで今日、あなたの視界ははっきりとするだろう」。

23 付き添いの［一対の天使のうち、片方の］者が言う。「これが私の［記録した］分であり、用意はできています」。

24 「あなたがた［天使の］両名は、［真理を］拒む頑な者たちを、すべて地獄に投げ入れなさい。

25 良いことを妨げる者、法外の者、［真理を］疑う者、

26 アッラーと共に他の神を設けた者。あなたがた両名［の天使］は、彼らを厳重な懲罰に投げ入れなさい」。

27 ［また、別の］付き添いの［悪魔の仲間の］者が［保身のために］言う。「主よ。この者を逸脱させたのは私ではありません。この者が自分で遠く迷い去ったのです」。

28 かの御方は告げるだろう。「われの前で言い争ってはならない。われはすでにあなたがたに警告していた。

29 われの言葉が変わることはない。われはしもべたちを不当に扱わない」。

30 その日、われらが地獄に「おまえは満ちたのか」と言う。すると［地獄は］「まだ入る者がありますか」と言う。

31 畏れる者［の近く］に楽園が引き寄せられる、もはや遠くはないところへ。

32 「これはあなたがたに約束されていたもの。よく悔い改めて立ち返り、［主の教えを］守る者、

33 目には見えない慈愛あまねく御方を畏怖し、心から立ち返ってきた者。

34 平安によってここへ入りなさい」。これが永遠の日。





35 その中には、彼らの欲するものが何でもある。また、われらの許にはさらにある。[5]

36 われらは彼ら以前に、彼らよりも強大な、どれほどの世代を滅ぼしたことか。彼らは土地という土地をめぐり歩いた。しかし、どこに［裁きの日からの］逃げ場があったであろうか。

37 本当にその中には、心ある者、耳を傾ける者、よく見ている者への戒めがある。

38 かつてわれらは諸天と大地と、そのあいだにあるすべてのものとを六日で創造した。しかし疲労は、われらをかすりもしなかった。[6]

39 ［ムハンマドよ、］それゆえ彼らの言うことによく耐えていなさい。あなたの主の栄光を讃美しなさい、太陽が昇る前にも、沈む前にも。[7]

40 夜のあいだにも主を讃美しなさい。また、［定めの礼拝のために］ひれ伏した後にも。

41 耳を傾けなさい、呼び出す者が間近から呼び出すその日に、[8]

42 彼らが咆哮の一声に真理を聞くその日に、［墓の中から］立ち現れるその日に。[9]

43 本当に、生を与えるのも死をもたらすのもわれらだけ。そして行き着く先はわれらの許にある。

44 その日、彼らのところから大地が裂け割れ、彼らは急いで出てくる。これが招集というもの、われらにはたやすいこと。

45 われらは、彼らの言うことをよく知っている。［ムハンマドよ、］あなたは彼らに強いるような者ではない。誰であれわれらの警告を恐れる者に、クルアーンにより想い起こさせなさい。

1 枯れた大地は水によってよみがえり、植物や樹木に新たな生命が宿る。人間もまた、復活の日に地中から出てくる。大地をよみがえらせる御方には、人間をよみがえらせることももちろん可能である。

2 前々節の「ラッスの仲間」については諸説あるが、預言者が遣わされたにもかかわらず、信仰を拒絶したために滅ぼされた民のこととされる。「アイカの仲間」とはマドヤンの民のこと。また「トゥッバウの民」とはイエメンの著名な王国を指すものともされている。以前にも、使徒たちに逆らう者は大勢いたということを思い起こさせ、使徒に対するなぐさめとしている。彼らは使徒たちを否定し、そしてそれゆえに罰を受けた。

3 神は最初の創造にも疲労を覚えることはなく、再び創造を繰り返すことも可能である。これは神にとり困難なことではない。

4 ここでの「追っ手」とは、各人に割り当てられた二名の天使のうち、悪行を記録して審判の日に連れていく方の一名を意味している。また「証言者」とはもう一名の、各人の右側にいるとされる天使であり、こちらは審判の日に備えて各人の善行を記録している。

5 「われらの許にはさらにある」。行いの正しかった人々は、至高至大の神の許しを得て、来世では自分たちの創造主の姿を「見る」ことができるようになる、という意味であるといわれる。また一部の解釈者によれば、未だかつて人間の目に捉えられたことも、耳に捉えられたこともない祝福を意味するともいわれる。無条件の限りない祝福を指すものと理解していいだろう。

6 神は六日間で天地を創造し、翌日の土曜日に休息を取ったという主張への反駁（はんばく）である。神が疲労のために休息を要するというのはあり得ないことである。時間の感覚については二二章四七節、三二章五節、七〇章四節も参照。

7 朝、正午、そして午後に捧げられる日々の礼拝の典拠となる節である。

8 復活の日、地中の人間をよみがえらせる大いなる招集の音声が鳴り響く。この招集に応じ、世界じゅうの全人類が神の





御前に参じることになる。

9 大天使イスラーフィールが二度、警笛のラッパを吹き鳴らす。二度めが鳴り終わるとき、人間はそれぞれの墓の中からよみがえり、裁きの場にやって来る。

# 第五一章　アッ＝ザーリヤート　まき散らすもの

マッカ啓示

「まき散らすもの」という章名は、第一節に現れる「ザーリヤート」という語にちなんでいる。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 まき散らすもの［風］がまき散らすもの［塵］にかけて。
2 重たいもの［雨］を運ぶもの［雲］にかけて。
3 ［水面を］軽々と進むもの［船］にかけて、
4 命令により［祝福を］くばるもの［天使］にかけて。
5 本当に、あなたがたに約束されたものは真実であり、
6 本当に、裁きは起こる。
7 数多の［星々の］軌道が織りなす天にかけて、
8 本当に、あなたがたの言うことは千差万別である。[1]
9 そこ［真理］から惑う者は、惑わされる。





10 憶測する者には滅びあれ。
11 惑乱（わくらん）の渦の中でぼう然とする者たち、
12 彼らは「裁きの日とはいつのことか」と尋ねる。
13 その日、彼らは業火の上で試される。
14 「あなたがたの責め苦を味わえ。これが、あなたがたの急ぎ求めていたもの」。
15 本当に、畏れる者は楽園と泉の中にいて、
16 主が与えるものを受けとるだろう。本当に彼らは、以前から行いの善良な者であった。
17 彼らは、夜はわずかだけ眠り、
18 夜明けには、赦しを願っていた。
19 乞う者も、奪われた者も、彼らの財の中から取り分にあずかっていた。
20 地上には確信する者のための諸々（もろもろ）の御しるしがある、[2]
21 あなたがた自身の中にもまた。それでもあなたがたは、見ようとしないのか。
22 天にはあなたがたのための糧と、あなたがたに約束されたものがある。
23 天と地の主にかけて、本当にこれは真理である。ちょうどあなたがたが、［今まさしく］話しているのと同じように。[3]
24 ［ムハンマドよ、］あなたにイブラーヒームの貴い客人の話は届いているか。
25 彼らは彼［の家］に入り、それから「平安あれ」と言った。彼は言った。「平安あれ、見知らぬ民よ」。
26 彼は、家族のところへ後ずさりし、肥えた仔牛を運んで来た。
27 そして彼らの前に置き、「あなたがたは、食べないのですか」と言った。

28 彼は、彼らに対しておののきをおぼえた。しかし彼らは「怖がることはない」と言った。彼らは、利発な男児［の誕生］についての良い報せを伝えた。[4]

29 すると彼の妻が［客人の前に］出て、大声をあげて自分の顔を打ち、「年老いて、みごもることはできないというのに」と言った。[5]

30 彼らは言った。「あなたの主がそう告げたのです。本当にもっとも賢明な御方、すべてを知る御方」。

31 彼［イブラーヒーム］は言った。「それであなたがたの［本来の］お役目とは何でしょうか、使者の方々よ」。

32 彼らは言った。「私たちは、罪を犯している民のところへ遣わされた、

33 彼らの上に、泥のつぶてを［雨のように］降らせるために。

34 それには度が過ぎた者のために、あなたの主の御許で烙印がつけられている」。

35 それからわれらは、そこにいる信仰者たちを救い出した。

36 しかし、われらがそこで見つけた服従する者［ムスリム］の家はたった一軒だけ。

37 われらはそこに、痛烈な懲罰を恐れる者たちのために、ひとつのしるしを残した。[6]

38 ムーサーの［物語の］中にもまた［御しるしがあった］。われらが、彼に明白な権威をもたせてフィルアウンに遣わしたときのこと。

39 しかし彼［フィルアウン］は、自分の手勢と共に背を向けて言った。「彼は魔術師か、あるいはとり憑かれた者だ」。

40 それゆえわれらは、彼とその軍勢とを捕えて海に投げ入れた。彼は責められるべき者であった。[7]

41 アードの［終焉の］中にもまた［御しるしがあった］。われらが、不毛をもたらす風を彼らに送ったときのこと。[8]





42 それが到来したところは、朽ち果てて何ひとつ残らなかった。

43 サムードの［一族の］中にもまた［御しるしがあった］。彼らが、「あなたがたは、しばしのあいだを楽しんでいなさい」と告げられたときのこと。

44 彼らは主の命令に対し、無礼にふるまった。すると見るまに落雷が彼らを捕えた。

45 彼らは立ち上がることもできず、その身を守ることもできなかった。

46 それ以前には、ヌーフの民もまた。本当に彼らは背く民であった。

47 われらは力をもって天を造り上げた。それを広大に拡げ続けているのも、まさしくわれらである。

48 またわれらは、大地を敷き広げた。なんとすばらしく敷き広げたことか。

49 またわれらは、あらゆるものを対に創造した。あなたがたも、想い起こすようになるだろうと。[9]

50 「それゆえアッラーへと逃れなさい。私は、かの御方からあなたがたへの、明らかにする警告者。

51 アッラーと共に、他のどのような神も並べてはならない。私は、かの御方からあなたがたへの、明らかにする警告者」。[10]

52 このように、彼ら以前の者たちも、その使徒たちが来るたびに「魔術師だ」「とり憑かれた者だ」と言った。

53 彼らは、それを受け継いできたのか。いいや、彼らは逸脱した民である。

54 ［ムハンマドよ、］それゆえあなたは、彼らに背を向けなさい。あなたは［他人の行いについての］責めを負わない。[11]

55 そして想い起こさせなさい。想い起こすことは、信仰者の益となる。

56 われがジンと人間を創造したのは、われに仕えさせるために他ならない。

57 われは彼らに、どのような糧も求めない。また彼らに、われを養うようにも求めない。

58 本当に、アッラーこそ糧をもたらす御方、揺るぎない力の所有者。12

59 そして不正をなす者たちの取り分は、［彼ら以前に不正をなしていた］彼らの仲間の取り分と同じようなもの。それゆえ彼らが、われにそれを急ぎ求めることのないようにしなさい。13

60 災禍あれ、彼らに約束されたその日を拒む者たちに。

1 使徒をどう呼ぶべきか、偶像を奉ずるマッカ住民の反応は千差万別であった。ある者は彼をとり憑かれた者と呼んだ。ある者は詩人、ある者は魔術師と呼んだ。

2 ありとあらゆるものが、創造主の存在を物語っている。

3 自らの声を疑うことなく聞くのと同様、疑うことなく真実の声に耳を傾けるべきである。

4 この息子がイスハーク（イサク）である。

5 息子を授かるとの報せを聞いたとき、預言者イブラーヒームの妻は驚愕し、また困惑した。そして自分は老齢であり、赤子を授かるのは不可能であると述べた。しかし神は全能であり、何ひとつ不可能なことはない。

6 その懲罰とは石のつぶて、積み重ねられた岩、そして黒い水であった。

7 フィルアウンは自分こそは主であるとし、頑なにムーサーの主を拒否し続けたことを咎められ、召し捕られた。

8 「不毛をもたらす風」とは、みのりに必要な花粉をはじめ、様々な善良なものを運ぶことをしない風のこと。

9 「対」とは、例えば雌と雄、天と地、太陽と月、谷と山、陸と海、夏と冬、生と死、甘味と苦味、闇と光など、あらゆるものにはその対極に位置するものが備わっているという意味。あるものを知るのに、その対となるものに思いをめぐ





らせれば、自ずと神の創造を知るに至り、神の偉大さを信じるようになる。対になるよう創造された被造物は、創造主の一性を知覚するための導きを、鏡のように映し出している。

10 預言者は、唯一、真の神のみを信じ、神に対偶を配することのないよう人々を招く。

11 使徒は長らく自らの義務を果たしてきている。それで十分である。

12 生活の糧を与えるのは神である。神は人間とジンを、自らの「生活の糧」として必要としているのではない。「ラッザーク」、すなわち「糧をもたらす者」は神の方である。

13 かつて神に対偶を配したために不服従に陥った民は、罰を受け滅亡していった。マッカの偶像崇拝者たちも、そうした過去の時代の民と同じく罰を受けることになるだろう。

## 第五二章　アッ＝トゥール　山

マッカ啓示

第一節に現れる「山」の語にちなみ、この名がつけられた章である。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 かの［シナイの］山にかけて。
2 記された書にかけて、
3 広げられた羊皮紙の中に。
4 訪れの絶えないかの家にかけて。[1]
5 高く掲げられた天蓋［の空］にかけて。
6 満々とみなぎる海にかけて。
7 あなたの主の懲罰は必ず起こる。
8 何ものも、それを追い払えない。[2]
9 その日、天は揺れに揺れて、





10 山々は動き出す。
11 その日、嘘だとした者に災禍あれ。
12 無駄話に興じていた者たちに。
13 その日、彼らは地獄の火炎の中に押し込められる。
14 「これこそ、あなたがたが嘘だとしていた火炎。
15 これは魔術か。それとも、あなたがたには見えないのか。
16 その中で焼かれなさい。耐えようが耐えまいが、あなたがたには同じこと。ただあなたがたの行ってきたことに報いられるだけ」。
17 本当に、畏れる者は至福の楽園の中にいて、
18 主が彼らに与えるものに歓喜する。主は彼らを、業火の懲罰から守る。
19 「満ち足りて食べ、飲みなさい、あなたがたの行ってきたことのために」。
20 彼らは並べられた座の上にくつろぐ。われらは彼らを、すばらしい瞳の者と連れ添わせる。
21 信じる者たち、また信仰において彼らに従ったその子孫たち。われらは彼らとその子孫とを一緒にさせる。われらは彼らの行いを、何ひとつ切り捨てない。誰であれ、自分の得てきたことだけが返ってくる。[3]
22 果実も、肉も、われらは彼らのほしいままに供する。
23 彼らは杯を交わし合う。その中で無駄話も、罪［の衝動］も起こらない。
24 彼らのあいだを、隠された真珠のような少年たちがもてなして巡り回る。[4]
25 彼らは互いに近づき、尋ねあう。
26 彼らは言う。「これ以前の私たちは、身内の中にいてさえ畏れかしこむばかりであった。[5]

27 しかしアッラーは私たちをいつくしみ、熱風の懲罰から私たちを守ってくれた。
28 本当に私たちは、以前からこの御方に祈っていたものだった。本当にもっとも徳ある御方、もっとも慈悲深い御方」。
29 ［ムハンマドよ、］それゆえ彼らに想い起こさせなさい。あなたの主の恩寵により、あなたは占者でもなく、とり憑かれた者でもない。
30 それとも彼らは、「ただの詩人だ。彼に凶運が巡ってくるのを待とう」とでも言うのか。
31 言いなさい。「待っていなさい。本当に私も、あなたがたと共に待つとしよう」。
32 それとも彼らの夢想がそう［言うよう］命じているのか。それとも彼らは逸脱した民なのか。
33 それとも彼らは「彼［ムハンマド］がでっち上げたものだ」とでも言うのか。いいや、彼らは信じていないのである。
34 もし彼らが真実を語っているのなら、彼らに、これと同じような話をもって来させなさい。
35 彼らは、無から創造されたのではないのか。それとも彼らが［彼ら自身の］創造者なのか。
36 それとも彼らが諸天と大地を創造したのか。いいや、彼らには何の確信もないのである。
37 それともあなたの主の宝庫が、彼らの許にあるというのか。それとも彼らが、その管理をする者なのか。
38 それとも彼らには［天に届く］梯子があって、そこでのことを聞けるのか。それなら聞いた者に、明白な根拠をもって来させなさい。
39 それともかの御方には娘があり、あなたがたには息子があるというのか。
40 それともあなた［ムハンマド］が彼らに代価を求め、それで彼らが借財を負うことにでもなったのか。
41 それとも目には見えないもの［の知識］が彼らの許にあり、それを書きとどめておくことでもできるのか。





42 それとも彼らは、［預言者に対して］何か企んでいるのか。しかし、［真理を］拒む者たちの方こそ企みにかかるもの。
43 それとも彼らには、アッラーの他に神があるのか。彼らが同列に連ねるものを超越するアッラーに讃美あれ。
44 たとえ空のかけらが落ちてくるのを見ても、彼らは「積み重なる雲に過ぎない」と言うだろう。[6]
45 それゆえ彼らを放っておきなさい、彼らが昏倒するその日まで。
46 その日、彼らの企みは何の役にも立たず、彼らにはどのような助けもない。
47 本当に、不正をなす者にはその他の懲罰がある。しかし、彼らの多くはそれを知らない。
48 ［ムハンマドよ、］それゆえあなたの主の決着までよく耐えていなさい。本当にあなたは、われらの見守るところにある。起き上がるときには、称賛をもってあなたの主を讃美しなさい。
49 夜のあいだも讃美しなさい、星々が遠のいてゆく後にもまた。[7]

1 「訪れの絶えないかの家」については、巡礼先のカアバ神殿をはじめ、天にある館、人の心を指すなど、様々な説がある。

2 ここで言及されている山とは、ムーサーが主と会ったシナイの山である。「記された書」とはタウラート（トーラー、律法）とクルアーン、また天に保管された永遠の記録を指す。またここでの「かの家」とはカアバ神殿のことである。

3 子どもの養育とは非常に重要で骨の折れる仕事である。信仰者として育てられた子どもは、両親もまた信仰者としてこの世を去ったという条件において、天国で再び両親と共に過ごす。すべての人間が、各々にふさわしいものを授かることになる。

4 クルアーンの解釈者の中には、二四節の「隠された真珠」とは、幼くして両親よりも先に天に召された子どもが、天のしもべとして奉仕していると解釈する者もいる。

5 ある善良な者が、できる限りの範囲で精神的な生活を充実させ、そのことに満足と感謝を覚えつつも、自分の愛する家族や友人についての不安を拭えずにいる。しかし影のようにつきまとい続けたそうした不安も、天国では神の恩寵によりすべて取り除かれる。

6 否定する者たちは証拠を求めるが、否定する者たちの目的はただ否定することにあるのであって、たとえ「空のかけらが落ちてくる」ようなことが起きようと、それを証拠として受け入れることはせず、むしろ自分たちの否定を補強するものとして読み替えてしまうだろう。

7 時間帯としてはマグリブ、イシャー、そしてファジュルの礼拝に相当する。

# 第五三章　アン＝ナジュム　星

マッカ啓示

本章は第一節に現れる「ナジュム（星）」の語にちなみ、この名がつけられている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 沈みゆくときの星にかけて。
2 あなたがたの仲間［ムハンマド］は迷ってもおらず、誤ってもおらず、
3 彼［自身］の欲望を語っているのでもない。
4 それは、啓示されるべく啓示されたものに他ならない。
5 彼にそれを教えたのは、強大な力ある者、
6 すぐれた知力の所有者。その者は自らの姿を立ち上がらせた、
7 地平のもっとも高いところに。
8 そののち、降臨して近づいた、
9 弓にして二本［の距離］か、あるいはそれよりも近いか。





10 そののち、かの御方はそのしもべに、御自らの啓示したところを啓示した。[1]
11 ［預言者の］心は、それが見たものについて嘘をつかない。
12 彼が見たものについて、あなたがたは彼と言い争うのか。
13 彼は別のときにもその降臨を目にしている、[2]
14 最果てのスィドラの樹の許で。
15 そのそばには、安息の楽園がある。
16 覆うものが［秘密を隠そうと］スィドラの樹を覆ったとき、
17 ［預言者の］視界は揺らがず、それでいて度が過ぎることもなく、
18 まさしく彼は、主のもっとも大いなる御しるしを見た。[3]
19 あなたがたは考えたことがあるのか、アッラートとアル・ウッザーのことを。
20 加えて、第三のマナートのことも。[4]
21 あなたがたには男児があり、かの御方には女児があるというのか。
22 それなら、それは奇妙な配分というもの。
23 それらはあなたがたやその先祖が名づけた、ただの名前に過ぎない。アッラーはそれらに何の権威も下さなかった。彼らは憶測と自分自身の欲望に従っているだけ。彼らには、すでに主の導きが来ているというのに。
24 それとも人間は、何でもほしいままにできるのか。
25 来世もその前［にある現世］も、アッラーに属するというのに。
26 諸天にどれほど［多くの］天使たちがいようと、アッラーにそうと望まれ、また喜ばれる者が許しを得た

後でない限り、そのとりなしは何の役にも立たない。
27 来世を信じない者は、天使たちに女の名前をつけるなどする。
28 彼らはそれについて何の知識もなく、ただ憶測に従っているだけ。そして本当に憶測は、真理に対しては何の役にも立たない。
29 ［ムハンマドよ、］それゆえ、われらの戒（いまし）めに背を向け、現世の生の他に何も欲さない者とは距離を置きなさい。
30 彼らの知識はその程度のもの。道から迷う者については、あなたの主がもっともよく知っている。また導かれた者についても、もっともよく知っている。
31 諸天にあるもの、大地にあるもの、すべてアッラーに属する。この御方は、悪事をはたらく者にはその行いに応じて報い、また善事をはたらく者にはその最善をもって報いる。
32 小さな過ちは別としても、大罪や不品行は避ける者たち。［彼らについては、］あなたの主は本当に赦しにおいて広大な御方。あなたがたを地上に生じさせたときから、またあなたがたが母の下腹の胚であったときから、あなたがたをもっともよく知る御方。それゆえ自分で自分のことを清らかだなどと思ってはならない。畏れる者について、もっともよく知る御方。[5]
33 ［ムハンマドよ、］考えてもみたか、［信仰に］背を向ける者を、
34 わずかばかり与えただけで、あとは物惜しみする者を。
35 そうした者の許に、目には見えないものを見る知識があるとでもいうのか。[6]
36 それとも、ムーサーの書巻にあることを告げ知らされていないのか、
37 また［使命を］成し遂げたイブラーヒームのことも。





38 荷を負う者が、他者の荷を負うことはできない。
39 人間は、ただ自分が努力したことだけを得る。
40 その努力は、いずれ［本人に］見えてくるだろう。
41 そののち、十分な報酬をもって報いられるだろう。
42 本当に、終着はただあなたの主にある。
43 笑わせも、泣かせもする御方。
44 死なせも、生かしもする御方。
45 本当に、雌雄（しゆう）の対を創造したのもこの御方、
46 放たれるときの、精のひとしずくから。
47 そして再び生じさせるのも、この御方による。
48 富ませも、満たしもする御方。
49 狼星（ろうせい）の主たる御方。[7]
50 最初にアードを滅ぼしたのもこの御方、[8]
51 またサムード［の民］も、誰ひとりとして残さずに。
52 またそれ以前には、ヌーフの民も。本当に彼らはもっとも不正で、もっとも逸脱していた。
53 また転覆させられた諸々（もろもろ）の町も。
54 そして覆いがそれらを覆った。
55 あなたがたの主の恩恵の、どれをあなたがたは疑うのか。
56 この者は、昔の警告者と同じくひとりの警告者。[9]

57 避けがたいことが、［すぐ近くまで］差し迫っている。

58 それをさらけ出せる者は、アッラーを置いて他にない。

59 あなたがたは、この話に驚くのか。

60 そして笑うのか。泣きはしないのか。

61 気晴らしにうつつを抜かすのか。

62 アッラーにひれ伏し、仕えなさい。

1 啓示はあくまでも神から下される。啓示を運ぶ大天使ジブリールは単なる使者に過ぎず、使徒に神のメッセージを伝える以上のことはできない。

2 預言者ムハンマドが夜の旅を通して七層の天を訪れた際のことを指す。

3 これらの節では、預言者の「夜の旅」について言及されている。ミウラージュ（昇天）の間に、彼は神の御しるしの数々を開示されるという栄誉ある経験をした。そうした栄光ある神の高みから、ひるがえって地上を見ればそこにはあまたの偶像とその崇拝者がはびこる無残な光景が繰り広げられている。ここでは人間は、四六時中「これを見よ！　あれを見よ！」と強要されるのである。

4 イスラーム以前のアラブには、三種の主要な偶像があり、それらは「神の娘たち」と呼ばれていた。

5 アーダムが泥土から創造されたことは、人間の弱さを思い起こさせるものである。人間は自らの創造の原点を忘れることなく、自惚れや傲慢に陥ってはならない。





6 これらの節は、ムギーラの息子ワリードについて啓示されたものである。彼は、一度はイスラームに入信したものの、のちに信仰から逸（そ）れていった。ワリードがイスラームに入信したとき、偶像を奉ずる者の一人が彼を非難した。ワリードは、自分は神の懲罰を怖れてイスラームに入信したのだと答えた。偶像を奉ずる者は、ワリードが代金を支払うなら彼の罪を引き受けると請け合った。するとワリードは彼の申し出を受け入れ、代金を支払い、信仰を放棄してしまった。

7 「アッ＝シウラー（狼星（ろうせい））」とは、シリウス星（おおいぬ座アルファ星）のこと。イスラーム以前のアラブにおいて、崇拝の対象となっていた星である。

8 当時、アードの名で呼ばれる部族がまだ存在していた。

9 アード、ソドムとゴモラ、ルートの民やヌーフの民など、葬り去られた過去の民のことを思い出させる節である。不正をなせば、神の警告を受ける。警告を軽んじれば、マッカの住民も彼らと同様の道をたどることになる。

# 第五四章　アル＝カマル　月

マッカ啓示

アル＝カマル、すなわち「月」と呼ばれるこの章は、最初の節「時は近づき、月は割れた」からその名がつけられている。空に浮かぶ月が割れるという不可思議な景色については、預言者の複数の教友の伝承として記録されている。ちょうどムスリムに対する迫害が始まったころにマッカの夜空に観測されたこの現象は、人々を大いに驚かせたという。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 時は近づき、月は割れた。[1]
2 たとえ御しるしを見ても、彼らは背き去って言う。「延々と続く魔術だ」。
3 彼らは［真理を］嘘であるとし、自分の欲望に従っていた。しかし、すべてのものごとにはその結末がある。
4 彼らには、彼らをおしとどめるための数多の報せがすでに伝えられていたはず。
5 それは深遠な知恵でもあった。しかし警告は役に立たなかった。
6 ［ムハンマドよ、］それゆえ彼らに背を向けなさい。呼び出す者が、嫌悪されるところへ呼び出すその日、





7 彼らは目を伏せ、いなごが散るようにその墓から出てきて、
8 呼び出す者の方へ、われ先にと急ぐ。［真理を］拒んでいた者は言うだろう。「これは苦境の日だ」。
9 彼ら以前にも、ヌーフの民が嘘であるとしていた。われらのしもべが嘘をついているとし、「とり憑かれた者だ」と言ってはねつけた。
10 彼は主に呼びかけた。「私は打ち負かされてしまいました。助けてください」。
11 そこでわれらは、注がれる水と共に天の数多の門を開いた。
12 また大地には数多の泉を湧き出させた。水が、あらかじめ定められていたことのために合わさった。
13 われらは、板と釘［で造った船］に彼を乗せて運んだ。
14 それ［船］は、われらの見守りの下に走った。これが、［真理を］拒まれたあの者への報酬。[2]
15 われらはそれ［船］を、ひとつのしるしとして残しておいた。それで、誰か教えを受け取る者はあるのか。[3]
16 われの懲罰と警告はどのよう［に厳しいもの］であったか。
17 われらはクルアーンを、憶えるにたやすいものとした。それで、誰か教えを受け取る者はあるのか。[4]
18 アード［の民］も、［預言者を］嘘であるとしていた。それで、われの懲罰と警告はどのよう［に厳しいもの］であったか。
19 われらは惨事の続く日々に、荒れ狂う風を彼らに送った。
20 人々が引き抜かれた椰子の幹のようになぎ払われた。
21 それで、われの懲罰と警告はどのよう［に厳しいもの］であったか。
22 われらはクルアーンを、憶えるにたやすいものとした。それで、誰か教えを受け取る者はあるのか。
23 サムード［の民］も、警告を嘘であるとしていた。

24 彼らは言った。「私たちの中にいるたったひとりの、ただの人に過ぎない者に従うのか。そんなことをすれば迷うだけ、錯乱に陥るだけ。[5]

25 私たちのあいだで、彼にだけ戒めが届いたというのか。いいや、彼は途方もない嘘つきだ」。

26 「彼らは明日には知るだろう、誰が途方もない嘘つきかを。

27 彼らに対する試練として、われらは一頭の雌らくだを送ろう。それゆえ彼らを見守り、よく耐えていなさい。

28 そして彼らに報せなさい、水は彼ら［と雌らくだ］のあいだで分かち合い、順番に飲むようにと」。[6]

29 しかし彼らは仲間を呼び寄せた。その者は、向こう見ずにもその［雌のらくだの］腱を切った。[7]

30 それで、われの懲罰と警告はどのよう［に厳しいもの］であったか。

31 われらは彼らに咆哮の一声を送った。彼らは［家畜を囲う］柵の枯れ枝のようになった。

32 われらはクルアーンを、憶えるにたやすいものとした。それで、誰か教えを受け取る者はあるのか。

33 またルート［の民］も、警告を嘘であるとしていた。

34 われらは彼らの上に石の嵐を送った。しかしルートの家族だけは夜明けに救った、

35 われらの許からの恩寵として。このようにわれらは、感謝する者に報いる。

36 彼［ルート］はわれらの一撃を彼らに警告していた。しかし彼らは警告を疑っていた。

37 彼らは、彼の客人までも［彼らに引き渡すよう］要求した。それでわれらは彼らの目［から視力］を消し去った。「われの懲罰と警告を味わえ」。[8]

38 そして朝早く、不動の懲罰が彼らを襲った。

39 「われの懲罰と警告を味わえ」。





40 われらはクルアーンを、憶えるにたやすいものとした。それで、誰か教えを受け取る者はあるのか。

41 かつてフィルアウンの一族にも、警告は到来していた。

42 しかし彼らは、われらの数多のしるしをすべて嘘であるとしていた。そこでわれらは彼らを、威力ある全能者の捕え方をもって捕えた。

43 あなたがた［真理を］拒む者の方が、これらの者よりも良いとでもいうのか。それとも啓典の中に、あなたがたのための免除があるとでもいうのか。

44 それとも彼らは、「私たちは皆で［互いに］助け合う集まりです」とでも言うのか。

45 その集まりはやがて敗北する。そして彼らは、背中を向けて去ってゆくだろう。

46 いいや、かの［裁きの］時こそが彼らに約束された期限。かの時は［現世での敗北よりも］さらにひどく、苦しいものとなるだろう。

47 本当に、罪を犯す者は迷いと錯乱の中にいる。

48 彼らがその顔を下に向け、業火の中へ引きずられるその日。「サカルが触れるのを味わえ」。[9]

49 われらはありとあらゆるものを、あらかじめ計って創造した。

50 われらの命令はたった一度、目をまたたくようなもの。

51 われらは、すでにあなたがたの同類を滅ぼしてきた。それで、誰か教えを受け取る者はあるのか。

52 彼らの行ってきたことは、すべて書の中に記されている。

53 小さなもの、大きなもの、すべて書き記されている。

54 本当に、畏れる者は楽園と川の中にいる、

55 全能の王者の御許、真実の座の中に。

1 マッカの住民が、預言者に奇跡を起こすよう要求した。そこで彼が月を指さすと、それは二つに割れたという。

2 「［真理を］拒まれたあの者」とは、預言者ヌーフのことである。ヌーフも、神の御目にかなった信仰者たちも、水上を旅して安全に進んでいった。

3 ヌーフの箱舟は、洪水の後、人々がそれを見て警告を受け取るよう、徴として山頂に残された。

4 記憶にとどめ、考え、理解することができるよう、クルアーンはすばらしくやさしいものとして下された。この書の全体を暗記しているムスリムは数多く存在する。

5 サムードの民は、自分たちに遣わされた預言者サーリフを否定した。

6 神の采配により、一日はらくだが水を使い、その次の日はサムードの民が使うことになった。

7 らくだを屠（ほふ）ったのは、クッダール・ブン・サーリフという名の冷酷な人物であったと伝えられる。

8 ルートの民は、若者の姿かたちをとって現れた天使たちを虐待しようとした。

9 「サカル」とは、「業火（ナール）」よりも激しく、辺り一面にあるものを次々と焦がしながら爆発的に燃え続ける地獄の炎のこと。七四章二七節から三〇節も参照。

# 第五五章　アッ＝ラフマーン　慈愛あまねく御方

マッカ啓示

最初の節にちなみこの名がつけられた章である。本章では、「あなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だというのか」という問いが、人類とジンの双方に対し幾度も繰り返される。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 慈愛あまねく御方は、
2 クルアーンを教え、
3 人間を創造し、
4 説き明かすすべを教えた。
5 太陽と月は算されたとおりに「移動し」、
6 星々と草木はそろってひれ伏す。
7 かの御方は天を高く掲げて、秤（はかり）を置いた。[1]
8 あなたがたが均衡から逸脱することのないように、[2]





9 量目を公正にはかり、均衡を欠くことのないように。
10 また、生けるもののために大地を構えた。
11 そこには果実が、房のあるなつめやしが、
12 殻のある穀物が、香る草花がある。
13 それであなたがた「人間とジン」の主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
14 陶土（とうど）のような粘土から人間を創造し、
15 また火炎の、煙なき焔（ほむら）からジンを創造した。
16 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
17 二つの東の主、二つの西の主。[3]
18 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
19 二つの海を放ち、出会わせながら、[4]
20 それらのあいだには境が設けられ、互いを侵すことがない。
21 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
22 そのどちらからも、真珠と珊瑚が出てくる。
23 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
24 海原に、山々のようにそびえ立つ船もまたこの御方のもの。
25 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
26 地上にあるものはすべて消え去る。
27 しかし永遠に残るのは、威光と寛大の所有者、あなたの主の御顔だけ。[5]

28 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
29 諸天と大地にあるものは、すべて主に願い求める。かの御方は日々、そのみわざをふるう。[6]
30 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
31 いずれわれらは、あなたがたのことにとりかかるだろう、二つのゆゆしき眷族（けんぞく）よ。[7]
32 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
33 ジンと人間の会衆（かいしゅう）よ。あなたがたに、諸天と大地の［あらゆる］境界を超えられるものなら超えてみなさい。［主の］権威なくして、超えることはできない。
34 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
35 あなたがたには、火炎の焔（ほむら）と煙が送られるだろう。あなたがたには、自分を守ることはできないだろう。
36 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
37 天が割れて、赤革のようなばら色になるとき。
38 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
39 その日、人間もジンも、その罪について問いただされすらしないだろう。[8]
40 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
41 罪を犯した者はその目印で見分けられ、前髪と足とを捕えられるだろう。
42 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
43 これが地獄、罪を犯した者が嘘であるとしていたもの。
44 彼らは、それと沸騰する灼熱の水のあいだとを巡り回る。
45 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。





46 しかし主の御前に立つのを恐れてきた者には、二つの楽園があるだろう。
47 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
48 どちらも、多くの枝がゆたかに茂る。
49 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
50 どちらの中にも、二つの泉が流れる。
51 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
52 どちらの中にも、すべての果実が対となってみのる。
53 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
54 錦（にしき）で裏打ちされた座椅子にくつろぎ、どちらの楽園の果実も手近にある。
55 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
56 そこには人間にもジンにも触れられたことのない、まなざしも控えめなお供がいる。
57 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
58 それらは、まるで紅玉か珊瑚のよう。
59 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
60 善に対する報いが、善でなくて何であろうか。
61 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
62 その二つの他に、もう二つの楽園がある。
63 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
64 どちらも、深い緑。

65 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
66 どちらの中にも、二つの泉が湧き出る。
67 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
68 そこには果実がみのる、なつめやしもざくろも。
69 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
70 そこにはすぐれた美しい者たちがいる。
71 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
72 美しいものは天幕の中に。
73 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
74 人間にもジンにも、かつて触れられたことのないもの。
75 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
76 緑の枕と美しい敷物の上にくつろぐ。
77 それであなたがたの主の恩恵の、どれを嘘だとあなたがたはいうのか。
78 あなたの主の御名に祝福あれ、威光と寛大の所有者に。





1 あらゆる被造物の中で、思考し、それを表現する能力を与えられているのは人間だけである。
2 ここで至高の神は、均衡を崩すことのないよう人間に命じている。現代においてはすでに均衡は乱されており、それは大気汚染や水質汚染、核汚染、森林破壊、土壌浸食、海面上昇といった深刻な問題となって露わにされている。神の戒（いまし）めに従い、現世の調和を乱さないよう努めたなら、こうした問題がもたらす大惨事も神により防がれ、人類、ひいては被造物全体の幸福な生が約束される。
3 冬と夏、両極の季節における日の出と日の入りの地点としての東西を指している。
4 海水と淡水など、「二つの海」が指すものについては諸説ある。
5 「主の御顔」については、二章一一五節、二八章八八節等とその訳注を参照。
6 被造物は、全宇宙を創造し、その上に自らの威力を行使してきた神に懇願してやまない。
7 「二つのゆゆしき眷族（けんぞく）」とは、人間とジンのこと。
8 行いのすべてが顔に現れるため、わざわざ問わずともおのずと知れてしまう。

# 第五六章　アル・ワーキア　出来事

マッカ啓示

第一節に現れる言葉にちなんでこの名がつけられている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 出来事が起こるとき、
2 それが起こるのを、誰も嘘であるとはしない。
3 あるものは低められ、またあるものは高められる。
4 大地が震えに震え、
5 山々は粉々に崩れ落ち、
6 散らばる塵となり、
7 あなたがたが、三つの群れに分かたれるとき、[1]
8 右側の仲間。右側の仲間とは何か。
9 左側の仲間。左側の仲間とは何か。





10 先頭にある者は、「来世においても」先頭をゆく。
11 これらの者は、「主の」そば近くに召される者たち、
12 至福の楽園の中に。
13 多くは大昔の者たちで、
14 後世の者は少ない。
15 錦織の座の上に、
16 くつろいで互いに向かい合う。
17 永遠の少年たちが彼らのあいだを巡り回る、
18 うつわや水差し、泉から汲んだ杯(さかずき)を捧げ持って。
19 それで彼らが頭痛をおぼえることも、泥酔することもない。
20 彼らが選んだとおりの果実、
21 彼らが望んだとおりの鳥の肉、
22 すばらしい瞳の美しいもの、
23 まるで隠された真珠のよう、
24 彼らの行ってきたことへの報いというもの。
25 そこでは無意味な話や罪な話を耳にすることもない。
26 ただ「平安あれ、平安あれ」の挨拶だけ。
27 右側の仲間。右側の仲間とは何か。
28 棘(とげ)のないスィドルの樹、

29 果実が重なってみのるタルフの樹。 2
30 伸べ広げられる木陰、
31 湧いてあふれる水の流れ、
32 おびただしい果実。
33 尽きることもなく、禁じられることもない。
34 高く掲げられた寝椅子。
35 本当にわれらは、これらを新たに生じさせ、
36 また手入らずの者とした、
37 よく似合いの、愛情深い伴侶として、
38 右側の仲間のために。
39 多くは大昔の者たちで、
40 後世の者も多い。
41 左側の仲間。左側の仲間とは何か。
42 焼き焦がす風と、沸騰する水の中に、
43 黒煙の陰に。
44 涼しくもなく、心地よくもない。
45 以前の彼らは、本当に贅(ぜい)の限りを尽くしてきた。
46 大それた過ちばかりを犯し続けてきた。
47 そしていつも言っていた。「私たちが死んで塵と骨になったとき、よみがえらされるというのか。





48 私たちの祖先もか」。
49 「ムハンマドよ、」言いなさい。「そのとおり。大昔の者も後世の者も、
50 必ずことごとく集められるだろう、そうと知られたとおりのかの日に。
51 それから、あなたがた、迷って「真理を」嘘よばわりしていた者よ、
52 あなたがたはきっとザックームの木から「その実を」食べ、
53 下腹が膨らんだところで、
54 その上から沸騰した水を飲む、
55 のどが渇いたらくだのように飲む。
56 裁きの日、彼らのもてなしはこのようなもの。
57 われらはあなたがたを創造した。それであなたがたは、どうして真実を認めないのか。
58 あなたがたは考えたことがあるのか、自分たちが漏らすもののことを。
59 それを創造したのはあなたがたか、それともわれらが創造者か。
60 われらはあなたがたのあいだに死を定めた。われらが出し抜かれることはない。
61 われらはあなたがたを同様のものと取りかえも、あなたがたの知らないものに造りかえもする。
62 あなたがたは最初の誕生を知っているはず。それでいてあなたがたは、どうして戒(いまし)めを受け入れないのか。
63 あなたがたは考えたことがあるのか、自分たちが耕してきたもののことを。
64 それを育んだのはあなたがたか、それともわれらが育む者か。
65 もしわれらがそうと望めば、それを枯れ屑(くず)にすることもできた。あなたがたは、ただ驚くばかりだっただろう。

66 「何ということだ、負債を抱えることになってしまった。
67 いいや、私たちは奪われたのだ」。
68 あなたがたは考えたことがあるのか、自分たちが飲む水のことを。
69 それを雲から降らせるのはあなたがたか、それともわれらが降らせる者か。
70 もしわれらがそうと望めば、それを苦くすることもできた。それでいてあなたがたは、どうして感謝しないのか。
71 あなたがたは考えたことがあるのか、自分たちがおこす火のことを。
72 その［火をおこす］ための木を培(つちか)うのはあなたがたか、それともわれらが培(つちか)う者か。
73 われらはそれを戒(いまし)めとして、また荒野をゆく者たちの便利のために供(きょう)した。
74 それゆえあなたの大いなる主の御名を讃美しなさい。[3]
75 いいや、われは誓おう。星々のありかにかけて。
76 本当に、それは大いなる誓い。もしあなたがたが、知ってさえいたなら。
77 本当にこれは高貴なクルアーン、
78 隠された書の中に［記されている］。
79 清らかにされた者の他は、誰もそれに触れることはできない。[4]
80 諸世界の主からの啓示。
81 あなたがたは、その言伝を軽んじるのか。
82 これを嘘よばわりすることで、糧［への感謝］にしようというのか。
83 それなら、どうして［魂が、臨終の間際に］喉元にこみ上げてくるとき、





84 あなたがたは、ただ座して見ているだけ。
85 われらは、あなたがたよりもその［臨終の］者の近くにある。しかしあなたがたには見えない。[5]
86 あなたがたが、本当に［来世におけるわれらの］報いを免れているのなら、
87 どうして［魂を］連れ戻さないのか。もしあなたがたが、真実を語っているのなら。
88 もしその［臨終の］者が、［主の］側近くに召された者のひとりなら、
89 安息と賜りものと、至福の庭園がある。
90 もし右側の仲間であったなら、
91 右側の仲間から、「あなたの上に平安あれ」。
92 しかし、もし嘘よばわりしていた者、迷い去った者であったなら、
93 沸騰する水のもてなしを受け、
94 業火で焼かれるだろう。
95 本当に、これは絶対の真理。
96 それゆえ、あなたの大いなる主の御名を讃美しなさい。

1 来世におけるいくつかの側面が説き明かされている。人間は三つの集団に分けられる。そのうち二つは楽園に入り、残りの一つは地獄に入る。一〇節の「先頭にある者」とは原初の信仰者たちのこと。

2 多くの解説者が、「タルフの樹」とはバナナのことではないかと説明している。

3 地獄の業火の中に入れられた罪人の告白（六六節、六七節）から一転して、様々な象徴的な言葉を通して神の全能について語られる。現世では精液の一滴から人間を創造するように、来世では無から人間を再び創造することもできる。神はまた、空から雨を降らせて植物を育て上げることもできる。

4 「清らかにされた者」。浄化を済ませた者でない限り、誰もクルアーンに触れることはできない。ここでいう「浄化」とは、一部の解釈者によれば手指などの洗浄を指す。他の解釈者に従うなら、イスラームに入信し、信仰者となり、さらに所定の浄めによって「浄化」する必要がある。いずれにせよ、清潔な者でなければクルアーンに触れることはできない。

5 死の間際に、魂が人間の身体の喉元までせり上がってくる。神は、臨終を迎える本人よりもその者のことを熟知している。人間には、自分と生死と神との密接な関わりを、理解できたようでいて理解できていないことの方が多い。

# 第五七章　アル＝ハディード　鉄

マディーナ啓示

本章は、二五節に現れる語にちなみこの名がつけられた。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 諸天にあるもの、大地にあるもの、すべてがアッラーを讃美する。もっとも威力ある御方、もっとも賢明な御方。

2 諸天と大地の王権はこの御方に属する。生かし、死をもたらす。ありとあらゆるものごとにおいて全能の御方。

3 最初の御方にして最後の御方、もっとも外側にある御方にしてもっとも内側にある御方。ありとあらゆるものごとを知る御方。[1]

4 諸天と大地を六日のあいだに創造し、それから玉座の上に就いた御方。大地に入り込むものもそこから出てくるものも、空から降るものもそこに昇るものも、かの御方はすべて知っている。あなたがたがどこにあろうと、あなたがたと共にある御方。アッラーは、あなたがたが行っていることをすべて見ている。[2]





5 諸天と大地の王権はこの御方に属する。万事はアッラーに帰される。

6 夜を昼に入らせ、昼を夜に入らせる。胸の中に抱かれるものを知る御方。[3]

7 アッラーとその使徒を信じ、かの御方があなたがたに継がせたものの中から［施しに］費やしなさい。あなたがたのうち、信じて［施しに］費やす者には、偉大な報酬があるだろう。[4]

8 あなたがたはどうしたのか、アッラーを信じないとは。使徒があなたがたを、主を信じるよう呼び招いているというのに。もしあなたがたが［本当に］信仰者なら、かの御方はすでにあなたがたの誓約を受け取っている。[5]

9 そのしもべに、明白な御しるしを下した御方。それによりあなたがたを、暗闇から光へと連れ出すため。本当にアッラーは、あなたがたに憐れみ深くも慈悲深い。

10 あなたがたは、どうしてアッラーの道のために費やさないのか。諸天と大地の遺産は、つまるところアッラーに属するというのに。あなたがたのうち、勝利するより以前に［自らの財を］費やし戦った者とそうでない者とは同じではない。これらの者の方が、後になって費やし戦った者よりも、その位階は高い。しかしアッラーは、いずれの者にも最善を約束している。アッラーは、あなたがたの行いを熟知している。[6]

11 アッラーに善良な貸付をする者は誰か。かの御方はそれを何倍にも増やすだろう。またその者には、貴い報酬があるだろう。[7]

12 その日あなた［ムハンマド］は、信仰者の男女の光が、彼らの前や右に放たれるのを見るだろう。「この日あなたがたへの良い報せとは、川がその下を流れる楽園のこと。あなたがたは、永遠にその中に住まう」。大いなる成就とは、まさしくこのこと。

13 その日、偽善者の男女は信じる者たちに言うだろう。「待ってくれ、私たちがあなたがたの光を借りられ

るように」。すると、「彼らは」こう告げられるだろう。「あなたがたは、後ろに引き返して「他の」光を探せ」。こうして彼らのあいだには、門のある壁が敷かれる。その内側には慈悲があり、その外側には懲罰が待ち受けている。

14 彼ら「偽善者」は呼びかける。「私たちは、あなたがたと共にいたではないか」。彼ら「信仰者」は言う。「いいや、まったくその通り。しかしあなたがたは、自分で自分を惑わせた。アッラーの命令が到来するまで、「何もせずにただ」待つばかりで、疑いを抱き、願望に欺かれていた。あなたがたは、アッラーについて欺く者「悪魔」に欺かれていた。[8]

15 それゆえ、この日あなたがたからの代償は受け取ってはもらえない、「真理を」拒んだ者たちからもまた。あなたがたは火炎がその住まい、それがあなたがたの庇護者だ。行き着く先の、何と悪いことか」。

16 アッラーの戒めと下された真理に対し、信じる者たちがその心を謙虚にする時がまだ来ないのか。以前に啓典を与えられていながら、「時を」引き延ばされたために心が頑なになってしまった者たちのようであってはならないのに。彼らの多くは背く者である。[9]

17 アッラーは死んだ後の大地を生き返らせることを知りなさい。すでにわれらは諸々のしるしをあなたがたに明らかにした。あなたがたも、考えるようになるだろう。

18 慈善をする男女、アッラーに善良な貸付をする者に、それは倍に増やされるだろう。彼らには、貴い報酬があるだろう。

19 アッラーとその使徒たちを信じる者、これらの者は、主の御許においては真実な者であり、証言者でもある。彼らのために、その報酬と光があるだろう。しかし「真理を」拒み、われらのしるしを嘘であるとする者、これらの者は業火の仲間。





20 現世の生は、遊びごとと気晴らし、虚飾と自慢に過ぎないことを知りなさい。あなたがたは、互いに財と子どもの多さを競い合う。例えるなら、それは雨後の草木のようなもの。耕す者は感心するが、そののち、あなたがたはそれが乾き、黄色くなり、枯れ屑になるのを見るだろう。来世には厳重な懲罰もある。アッラーからの赦しと喜びもある。現世の生は、ただ欺瞞の楽しみに過ぎない。[10]

21 あなたがたは、主からの赦しのために、また天と大地ほどにも広大な楽園のために、互いに競い合いなさい。それはアッラーとその使徒を信じる者のために用意されている。これがアッラーの御恵み。かの御方は御心にかなう者にそれを与える。アッラーは大いなる御恵みの所有者。

22 地上に降りかかる災難でも、またはあなたがた自身の上にでも、われらがそれを引き起こす以前から、すでに書の中に記されていないものはない。本当にそれは、アッラーにはたやすいこと。

23 それはあなたがたが、失ったものを悲しんだり、与えられたものを自慢したりすることのないようにするため。アッラーは、思い上がって自慢する者を愛さない。

24 こうした者は吝嗇で、他人にも吝嗇を勧める。たとえ誰が背を向けようと、本当にアッラーこそは満ち足りた御方、称賛にふさわしい御方。

25 われらは、明白な確証をもってわれらの使徒を遣わしてきた。また人々が正道に立つようにと、彼らと共に啓典と秤とを下しもした。またわれらは鉄を下した。その中には強い力と、人々のための諸々の益がある。これはアッラーが、目には見えないところで誰が御方とその使徒を助けるのかを知ろうとしてのこと。本当にアッラーは、強大にして威力ある御方。[11]

26 かつてわれらはヌーフとイブラーヒームを遣わし、また彼らの子孫には預言者の資質と啓典とをあらしめた。彼らのうち、ある者は導かれた。しかし、その多くは背く者であった。[12]

27 そののち、彼らの足跡にわれらの使徒たちを続かせ、またマルヤムの子イーサーを続かせた。われらは彼に福音を与え、彼に従う者たちの心に、情け深さと慈悲を置いた。しかし修道生活は、われらが彼らのために書き記しておいたことではなく、彼らが［自分たちで］取り入れたもの。それはただアッラーの喜びを求めてのこと。しかし彼らは、それを守るべき正しいやり方で守らなかった。それでわれらは、彼らのうち信じる者にはその報酬を与えた。しかし、彼らの多くは背く者。

28 信じる者たちよ。あなたがたはアッラーを畏れ、その使徒［ムハンマド］を信頼しなさい。かの御方はあなたがたに倍の慈悲を与え、またあなたがたが歩めるように光をあらしめ、あなたがたを赦すだろう。アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。

29 それで啓典の人々は、アッラーの御恵みにいささかも手出しできず、御恵みはただアッラーの御手にあることを知るだろう。かの御方は御心にかなう者にそれを与える。アッラーは、大いなる御恵みの所有者。[13]

1 神は最初の存在であり、神がすべてを創造し、神の前には何ひとつ存在しなかった。神は最後の存在であり、その存在は永遠であり、すべてが死に絶えた後も存在する。神は外側に顕（あら）われる。その存在と一性は、思考することができる者たちのために、あらゆるものの上に顕現（けんげん）する。神は内側に隠れる。感覚や知性では、神を把握することはできない。

2 「玉座」や「玉座の上に就」くことについては、七章五四節の注釈を参照。

3 神は夜を昼に、また昼を夜に交替させる。この節には、一日の昼夜の移り変わりだけではなく夏には昼が長くなり、冬には短くなること、また冬には夜が長くなり、夏には短くなることも示されている。





4 タブーク遠征に関連して啓示された節である。遠征に際して気前よく寄付を差し出したウスマーンについての言及である。

5 預言者ムハンマドは人々を神の道に招いたが、一部の者たちは彼を信じなかった。「アルワーフ（ルーフ、霊魂の複数形）」の領域では、神は被造物の霊魂とそれぞれに誓約を結んでいる。しかし霊魂を託された人間は、その誓約を守ろうとはしない。

6 マッカ征服以前から神の道のために施してきた者には、マッカ征服以降に神の道のために施すようになった者よりもすぐれた美徳がある。この節では、神の道のために施してきた者としても、また神を信じ、預言者を信頼し続けてきた者としても、その筆頭にいるのはアブー・バクルであることが間接的に指摘されている。

7 神に「貸付をする」とは、必要としている人々には気前よく差し出し、返済については寛大に構え、他者を助けるにあたっては、ただ神の喜びだけを見返りとすることを意味する。

8 偽善者たちは来世になってから初めて後悔するようになり、「私たちは、あなたがたと共にいたではないか」と言う。しかし実際には、彼ら彼女らは自分の欲望に従っていたのである。

9 律法や福音といった啓典を受け取った人々の中には、時を経るにしたがって当初の信仰を忘れ、頑なに形式だけを踏襲するようになっていく者も少なくなかった。マッカでは信仰のために苦しみに耐えていたのが、移住後のマディーナでは緊張感を失いつつあるムスリムたちもまた、過去の人々と同様の状態に陥っていることを警告し、神に真摯に向き合うよう勧めている節である。

10 来世の永遠に比べれば、現世の生はほんの一瞬である。現世において人間は試されているということを忘れてはならず、無益なことにかまけて過ごしていてはならない。

11 法と秩序を維持するには、力が必要不可欠となる。法と秩序は使徒たちを通してもたらされた。しかし力なくして公正

さは維持できない。製鉄の歴史は古く、人々の暮らしに欠かすことのできない金属であるが、単に固く強い材質であるというだけでなく、力の源泉そのものでもある。

12 クルアーンで言及されている諸々の啓典は、上述の預言者たちの子孫に啓示されたものである。

13 ここでは、啓典を信仰の根拠とする人々に対し、誰が預言者であるかを定め、またその証言者となるのは神であることが喚起されている。神は絶大なる厚情の主であり、誰がその慈悲を授かるかを決めるのもまた神である。「御手」については三六章七一節や四八章一〇節とその訳注も参照。ここでの「御手」は、決定権が神にあることを示している。

# 第五八章　アル＝ムジャーディラ　異議を唱える女

マディーナ啓示

本章は第一節に現れる語にちなんで名づけられた。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 アッラーは、自分の配偶者についてあなた［ムハンマド］に異を唱え、またアッラーにじかに訴えている女の言うことを聞いた。アッラーは、あなたがた二人の問答を聞いている。本当にアッラーはすべてを聞き、すべてを見る。[1]

2 あなたがたの中には、妻に対して「母親も同然である」と宣言［し、離縁］する者があるが、彼女らは彼らの母親ではない。彼らの母親とは、彼らを産んだ者だけ。本当に彼らは邪悪な、嘘の言葉を言う。しかし、本当にアッラーはもっとも容赦し、もっともよく赦す。

3 ［妻である］女たちを「母親も同然である」と宣言した者が、そののちに自分の言ったことを取り下げようというなら、［再び］互いにふれ合う前に、奴隷ひとりを解放しなければならない。これがあなたがたに教示されていること。アッラーは、あなたがたの行いを熟知している。





4 ［その手立てを］何も見出せない者は、［再び］互いにふれ合う前に、二か月にわたって斎戒しなければならない。それをなし得ない者については、六十名の貧しい者を養うこと。これがアッラーの定めた禁令。［真理を］拒む者には、痛烈な懲罰があるだろう。

5 本当に、アッラーとその使徒に敵対する者は、彼ら以前の者が貶められたように貶められるだろう。われらはすでに明白なしるしを下した。［真理を］拒む者には、屈辱の懲罰があるだろう。

6 その日、アッラーは彼らをことごとくよみがえらせ、彼らにその行いを告げ報せるだろう。彼らが忘れていることも、アッラーは数え上げている。アッラーは、ありとあらゆるものごとの証言者。

7 見なかったのか、諸天にあるもの、大地にあるもの、アッラーがすべてを知っているのを。三人で密談をしようと、その四人めは御方。五人であろうと、その六人めは御方。それより少なかろうと多かろうと、彼らがどこにいようと、アッラーは彼らと共にある。そののちの復活の日、この御方は彼らに、彼らの行ってきたことについて告げ報せるだろう。本当にアッラーは、ありとあらゆるものごとを知る。

8 見なかったのか、密談を禁じられた者たちが、そののち禁じられたことに後戻りしているのを。彼らは罪と、敵意と、使徒に対する不従順とによって密談をする。あなたのところへ来るとき、彼らはあなたに、アッラーがあなたにする挨拶とは異なる挨拶をする。そして彼らは身内で言う。「アッラーは、どうして私たちの言うことを罰さないのか」。彼らには地獄で十分であり、彼らはその中で焼かれるだろう。行き着く先の、何と悪いことか。[2]

9 信じる者たちよ。あなたがたが私的に話し合うときには、罪と、敵意と、使徒に対する不従順とによって密談をしてはならない。良心と篤信によって話し合いなさい。あなたがたを御自らに召し集めるアッラーを畏れなさい。[3]

10 密談はただ悪魔からのもの、信じる者たちを嘆かせようとしてのこと。しかしアッラーの許しがない限り、彼にはいささかも害することはできない。それゆえ信仰者なら、アッラーにこそ委ねなさい。[4]

11 信じる者たちよ。あなたがたの集まりで「場所を空けてください」と言われたときは、「言われたとおり」場所を空けなさい。アッラーはあなたがたのために場所を空けるだろう。また「立ってください」と言われたときは、「言われたとおりに」立ちなさい。アッラーはあなたがたのうち信じる者と、知識を与えられている者との位階を高めるだろう。アッラーは、あなたがたの行いを熟知している。[5]

12 信じる者たちよ。あなたがたが使徒と私的に話し合うときには、私的な話し合いの前にすすんで慈善をしなさい。その方があなたがたのためにもっとも良く、またもっとも清らかなこと。しかし「その手立てを」何も見出せなくとも、本当にアッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。[6]

13 私的な話し合いの前にすすんで慈善をすることを、あなたがたはためらうのか。それなら、たとえそれをしなくとも、アッラーがあなたがたの悔い改めを受け入れたなら、礼拝のつとめを守り、喜捨をし、アッラーとその使徒に従いなさい。アッラーは、あなたがたの行いを熟知している。

14 見なかったのか、神の怒りを招いた民を友とする者を。彼らはあなたがた「の身内」でもなければ、彼ら「の身内」でもない。彼らは、そうと知りながら嘘の誓いをする。[7]

15 アッラーは、彼らのために厳重な懲罰を用意した。本当に、彼らの行ってきたことの何という悪さか。

16 彼らは誓いの裏に隠れて、アッラーの道を妨げている。彼らには、屈辱の懲罰があるだろう。[8]

17 彼らの財も子どもも、アッラーに対しては何の役にも立たない。彼らは火炎の仲間。彼らは、永遠にその中に住まうだろう。

18 その日、アッラーは彼らをことごとくよみがえらせる。彼らは「今」あなたがたに誓うように、かの御方





にも誓うだろう。彼らは、それで何ごとかをなしたつもりでいる。本当に、嘘をつく者とはまさしく彼らのこと。

19 悪魔は彼らを支配して、アッラーを想い起こすことを忘れさせる。これらの者は悪魔の朋党。そして本当に、悪魔の朋党は敗者となる。

20 本当にアッラーとその使徒に敵対する者、これらの者こそもっともおとしめられるべき者。

21 アッラーは、「われとわれの使徒たちこそ、確かに勝利する」と書き記した。本当にアッラーは強大にして威力ある御方。

22 あなたは、アッラーと終末の日を信じる民が、アッラーとその使徒たちに敵対する者に親愛の情を持つのを見ないだろう。たとえそれが彼らの父、あるいは子ども、あるいはきょうだい、あるいは縁者であったとしても。これらの者について、かの御方はその心の中に信仰を書き記し、また御許からの息吹によって支える。かの御方は彼らを川がその下を流れる楽園に入らせ、永遠にその中に住まわせるだろう。アッラーは彼らに喜ぶ。彼らもこの御方に喜ぶ。これらの者はアッラーの朋党。本当に、アッラーの朋党の者こそ栄える者。

1 これはアウス・イブン・サーミトの妻ハウラ・ビント・サアラバの一件に関する啓示である。彼女も夫も共にムスリムだったが、彼女の夫は昔からのアラブの慣習を利用して彼女を離婚した。「ズィハール」と呼ばれるこの慣習は、夫が「おまえは私にとり母の背中のようなものだ」と、妻のことを自分にとり結婚が禁じられている関係にある女性に例えて離

縁を宣言し、これにより婚姻生活における夫の責任を免れるというものであった。それは無知の時代の無責任な慣習であり、ハウラはこれに深く傷ついた。彼女は夫を愛しており、また幼い子どもたちの養育について何の手立てもないことを訴えた。彼女は預言者にこの件を委ね、神に祈った。彼女の嘆きと祈りは受け入れられ、真の公正さとは程遠いこの慣習が断たれることになり、本章の啓示をもって「ズィハール」は廃止された。

2 マディーナ住民のうち一部の者には、集まって密談することが禁じられた。常に人々の間に不和や不信を広める相談ばかりしていたためである。彼らは預言者に会うと、「アッサラーム・アライカ（汝の上に平安あれ）」と挨拶をするふりをして、「アッサマー・アライカ」と言ったが、それは「汝の上に死あれ」という意味であった。しかし預言者は、これを知っても彼らの挨拶に応じ、「ワ・アレイクムッサラーム（汝の上にも平安あれ）」と、礼儀正しく寛容な態度を決して変えなかった。

3 この節は、密談そのものが禁じられてはいないことを示している。それが許されるか、禁じられるかはひとえに密談に参加する者一人ひとりの人格や、密談が交わされた経緯とその性質にかかっている。例えば誰かの名誉や尊厳の回復のためであったり、争いごとを回避するためであったりすれば、その密談はむしろ善行であるといえるだろう。しかし誰かの権利を侵害したり、争いごとを起こすためであったりすれば、それは明らかに悪行であろう。

4 信仰者同士を敵対させ、嘆かせる原因となるような密談は禁じられる。悪魔は常に「信じる者たちを嘆かせよう」と機会をうかがっていることを忘れてはならない。

5 新参の客のために場所を空けるよう求められたなら、信仰者はその通りにすべきであり、また再び立ち上がるよう求められたなら、親切心と礼儀に従うべきである。信仰の知識を持ち、それを実践する者はより高い階梯を成就するだろう。

6 どの預言者も、彼らの民に対して教えや相談の見返りに謝礼を求めたことはただの一度もなかった。彼らは、神にのみ報奨を求めた。ここでは預言者に私的な相談をしたいという者に対し、相談する前に、貧しい同胞たちのために何かし





ら慈善をすることが勧められている。これは当時、多くの人々が預言者と私的な時間を持ちたがり、中には単なるうわさ話や、他の者の陰口を吹聴したいだけの者などもいた。これが預言者の生活を大いに圧迫していたため、神がその負担を軽くしようと啓示した節である。

7 前節の啓示の後で、神は、預言者に相談をする前に慈善をするという信仰者に課された負担を軽くした。慈善とは、許される範囲の欠点を補うための償いのようなものである。施すものを持つ人は施すのがもっともすぐれているが、施すものを持たない人でも、預言者を訪れる機会を失うことはなくなった。

8 「誓いの裏に隠れて、アッラーの道を妨げている」。「私たちはイスラームの信仰者です」と誓うものの、実際には口先だけで誓っているに過ぎず、心の底から信仰しているわけではない人々のこと。

# 第五九章　アル＝ハシュル　放逐

マディーナ啓示

本章は二節から一七節にある、ユダヤ教徒のナディール族がマディーナから追放された経緯に関連してこの名がつけられている。彼らは預言者を殺害しようともくろみ、そのために追放された。偽善者たちはひそかに彼らに同情し、ムスリムとの交戦があれば、彼らの側につくこと、また、もしも彼らが追放されるようなことがあれば、彼らと共に移住することも約束していた。しかし偽善者たちは、ムスリムが彼らに向かって進軍した際も助けの手を差し伸べようとはせず、また彼らと共に移住することもしなかった。

本章の末尾二二節から二四節には、アッラーの美名が数多く挙げられている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 諸天にあるもの、大地にあるもの、すべてがアッラーを讃美する。もっとも威力ある御方、もっとも賢明な御方。

2 最初の集合のとき、啓典の人々の中にいた、「真理を」拒む者をその館から立ち退かせた御方。あなたがたは、彼らが立ち退くとは思っていなかった。また彼らも、アッラーに対して自分たちの砦が防いでくれるものと思っていた。





しかしアッラーは、彼らが思いもしなかったところから到来し、彼らの心に恐怖を投げ入れた。彼らは自分たちの手で、また信仰者たちの手で家々をとり壊した。それゆえ見る目をもつ者は、「このことを」教訓としなさい。

3 たとえアッラーが彼らに対し、放逐を定めなかったとしても、必ず現世において彼らに懲罰を科しただろう。また彼らには、来世において火炎の懲罰がある。

4 それは彼らがアッラーとその使徒に歯向かったため。誰であれアッラーに歯向かうなら、本当にアッラーは応報に厳しい。

5 あなたがたが椰子の木を切り倒そうと、あるいはその根の上に立たせたままにしようと、それはアッラーの許しあってのこと。かの御方は、背く者に恥辱を負わせる。[1]

6 何であれ、アッラーが彼らからその使徒に「戦利品として」渡したものについて、あなたがたがこれらのために「遠征して」馬やらくだを駆りたてたわけではない。しかしアッラーは、誰であれ御心にかなう者に対する権威を使徒に持たせた。アッラーは、ありとあらゆるものごとにおいて全能である。[2]

7 何であれ、アッラーが彼らからその使徒に「戦利品として」渡したものについて、町々の住民からのものは、アッラーと、使徒と、「使徒の」近しい親族と、孤児と、貧しい者と、旅路にある者のためにある。それはあなたがたの中でも、裕福な者のあいだだけに「富が」行き渡ることのないようにするため。何であれ、使徒があなたがたに与えるものを受け取りなさい。何であれ、彼があなたがたに禁じるものを控えなさい。アッラーを畏れなさい。本当にアッラーは応報に厳しい。[3]

8 また「戦利品は」、貧しい移住者のためにある。自分たちの館からも財からも追い払われ、アッラーの御恵みと喜びを求めてアッラーとその使徒を助ける者たち。これらの者は、真実の人である。

9 また、彼ら［が移住してくる］以前から［マディーナの町に］居をかまえていた、信じるようになった者のためにある。自分たちのところへ移住してきた者たちを愛し、その胸の中には、与えられたもの［戦利品］への欲望もない。たとえ自分たちの方が困っていても、彼ら［移住者］に重きをおこうとする。自分の貪欲を自制する者たち、これらの者こそ栄える者。[4]

10 彼らの後から来た者たちは言う。「主よ。私たちと、信仰において私たちよりも先だったきょうだいたちを赦してください。私たちの心の中に、信じる者に対するどのような悪意も持たせないでください。主よ。本当にあなたは優しく、もっとも慈悲深い」。[5]

11 あなたは偽善者たちが、そのきょうだいである啓典の人々の中にあって［真理を］拒む者たちに、「もしあなたがたが放逐されるなら、私たちもあなたがたと共に立ち退こう。あなたがたのことについて、私たちは誰にも従わない。たとえあなたがたが戦うことになっても、私たちは必ずあなたがたを助けるだろう」と言っているのを見なかったのか。しかしアッラーは、彼らが嘘をつく者たちでしかないことを証言する。[6]

12 たとえ彼らが放逐されることになっても、彼ら［偽善者］は共に立ち退いたりはしない。また、たとえ彼らが戦うことになっても、彼ら［偽善者］は助けたりはしない。もし彼らが助けるとしても、彼らは必ず［怯えて］背中を向けて立ち去るだろう。そののち、彼らには何の助けもないだろう。

13 彼らの胸の中では、アッラーよりもあなたがたに対する畏怖の方がより激しい。それは彼らが、何も理解していない民であるため。[7]

14 砦のある町から、あるいは壁の後ろからでもない限り、彼らが一緒になってあなたがたと戦うことは決してない。彼らのあいだでは闘争心も激しく、あなたは彼らが団結していると思うだろう。しかし彼らの心は一致していない。それは彼らが、考えることをしない民であるため。





15 少し以前の者たちと同じようなもので、その者たちも自分の行いの結果を味わうことになった。彼らには、痛烈な懲罰があるだろう。[8]

16 人間に対し「［真理を］拒め」と言うときの悪魔と同じようなもの。しかし、それで誰かが［真理を］拒むと、「私は、あなたにはまったく関わりがない。私は諸世界の主たるアッラーが恐ろしい」などと言う。

17 彼らの結末は、両者ともに火獄である。彼らは、永遠にその中に住まうだろう。不正をなす者の報いとはこのようなもの。[9]

18 信じる者たちよ。あなたがたはアッラーを畏れなさい。明日のためにあらかじめ何をしたか、それぞれ考えなさい。そしてアッラーを畏れなさい。アッラーは、あなたがたの行いを熟知している。[10]

19 アッラーを忘れ、そのために自分自身のことも忘れさせられた者のようになってはならない。背く者とは、こうした者のこと。[11]

20 火獄の仲間と楽園の仲間は同じではない。楽園の仲間こそ勝者である。

21 もしわれらがこのクルアーンを山に下していたなら、あなた［ムハンマド］は、それがへりくだり、アッラーを畏怖して崩れ落ちるのを見るだろう。このようにわれらは、諸々の例えを人々に示す。それにより彼らも、深く考えるようになるだろうと。

22 アッラー、その他にいかなる神もない。目には見えないものと、見えるものとを知る御方。慈愛あまねく御方、慈悲深い御方。[12]

23 アッラー、その他にいかなる神もない。王者たる御方、聖なる御方、平安の御方、信仰の御方、守護者たる御方、威力ある御方、圧倒する御方、至高の御方。彼らが同列に連ねるものを超越するアッラーに

24 讃美あれ。アッラー、創造者たる御方、創始者たる御方、造形者たる御方。もっとも美しい御名はすべてこの御方に属する。諸天と大地にあるものは、すべてこの御方を讃美する。もっとも威力ある御方、もっとも賢明な御方。[13]

1 イスラームの法は、正当な理由なく果樹や田畑を伐採したり破壊したりすることを禁じている。戦闘の際の破壊行為はある程度までは容認されうる。とはいえ、あくまでも軍事行動の目的から逸れることのないよう努めなくてはならず、例えば樹木を切り倒すことなどは原則として許されない。こうした法はいずれも神の意志に沿うために解釈されたものであり、ムスリムの遠征は法に従って行われなくてはならない。

2 ナディール族は使徒との盟約を結んでいた。しかし彼らは盟約を破ったためマディーナから追放された。本章の冒頭の各節は、この出来事を指すものである。

3 獲得した戦利品は、この節に従って分配されなければならない。八章四一節も参照。

4 アンサール（援助者、マディーナの住民たち）のムハージルーン（移住者、マッカの元住民たち）に対する態度は、この節で明示されているとおりであった。

5 「彼らの後から来た者たち」とは、以降、現世が終末を迎えるまでのすべてのムスリムのことを指す。





6 偽善者たちの頭領アブドゥッラー・イブン・ウバイイと、ナディール族との間のやり取りについての言及である。

7 偽善者たちは、神よりも、神を信仰する者たちの方を恐れていたが、それは神が彼らに対する懲罰を猶予していたためであった。

8 マディーナへの移住から二年後、マッカの住民はバドルの戦いにおいてムスリムに敗北した。ナディール族はそのことをすっかり忘れていたか、教訓を得るということをしていなかった。

9 ここでの「両者」とは、偽善者たち、また啓典の人々の中にいた、［真理を］拒む者たちを指す。

10 ここでの「明日」には、来世の意味もある。現世における一生は、神の御目にはほんの一日かそれよりも短い。現世の一生が終われば、瞬く間に来世にたどり着いている。神に意識を向けることの大切さが、繰り返し強調される。

11 神を忘れるということは、現世における自分自身の存在やその目的を忘れることと同義である。授けられた生命を無駄なことに費やし、霊的な可能性を閉ざしてしまうことにより、人間は徐々に神を忘れるようになっていく。

12 「ラフマーン（慈愛あまねく御方）」も「ラヒーム（慈悲深い御方）」も、「ラフマ」という同じ語から派生している。ラフマーンの慈しみはあらゆる被造物の上に注がれ、ラヒームの憐れみは審判の日、信仰者の上に注がれるとされる。

13 本章の末尾三節について、預言者は次のように語ったと伝えられている。「誰であれ『すべてを聴く御方、すべてを知る御方にシャイターンからの加護を乞う』と三度唱えた後で、この三つの節を朝に朗読する者があれば、神は七万の天使たちに、その日は一日中、その者に赦しがあるよう祈らせる。もしもその日、その者が命を落とすことがあれば、その死は殉教者の死としてみなされる。この三つの節を、夜のうちに朗読したとしても同様である」。

# 第六〇章　アル＝ムムタハナ　問いただされる女

マディーナ啓示

「ムムタヒナ（試みられる女）」とは第一〇節に現れる語であり、信仰者たちは、偶像を奉ずる者たちから逃亡してきた女性に対しては審問を行い、その上で彼女たちが本心からイスラームに入信したものと知れれば、偶像を奉ずる者たちの許へ送り返してはならないことが告げられている。これは、逃亡してきた者は男女を問わずすべて送り返すが、イスラームから宗旨替えをして戻っていった者については不問とし、偶像を奉ずる者たちが［イスラームの共同体へ］彼らを送り返す義務はないものとする、預言者が交わしたフダイビヤの和議における条件の変更を意味していた。引き渡した場合、女性たちはよりひどい迫害にさらされることになるという点と、また彼女たちが無力であるという社会的な状況が、この変更の理由である。避難してきた誠実な女性、また犯罪や、家族間の諍いが逃亡の原因ではない者については、送り返すかわりにムスリムが彼らのために［婚資を返還するなど］賠償を支払った。ただしムスリムの夫は、その妻がクライシュ族の許へ逃れ去ったとしても、クライシュ族に賠償を支払うことはなかったが、何らかの僥倖によってイスラームの共同体に財貨がもたらされた際に、妻に持ち去られた財産を、彼女に代わって共同体が補償することになった。一二節には、審問ののちに女性の逃亡者がなすべき誓約について記されている。啓示が下されたのは、ヒジュラ［移住］から数えて八年めのことであった。





慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 信じる者たちよ。あなたがたは、われの敵も、あなたがたの敵も、［あなたがたが愛情を持って付き合う］友として選んではならない。彼らに親愛の情を示してはならない。彼らは、あなたがたにもたらされた真理を信じず、またあなたがたが、あなたがたの主たるアッラーを信じたからといって、使徒とあなたがたとを追放した。あなたがたはわれの道のために奮闘し、われの喜びを求めて出てきたのに、彼らに親愛の情を持って［密会して］いる。われは、あなたがたが押し隠すものもさらけ出すものも、もっとよく知っている。あなたがたのうち、そうしたことをする者は、すでに平らかな道から迷っている。[1]

2 もしあなたがたよりも優位になると、彼らはあなたがたの敵となり、悪意ある手と舌とを伸ばしてくるだろう。彼らは、あなたがたが［真理を］拒むようになることを欲している。

3 あなたがたの親族も子どもも、復活の日、決してあなたがたの役に立たない。かの御方は、あなたがたのあいだに決着をもたらす。アッラーは、あなたがたが行っていることをすべて見ている。

4 イブラーヒームと、また彼と共にいた者たちの中には、あなたがたへの、すぐれたひとつの模範がある。彼らがその民にこう言ったときのこと。「本当に私たちは、あなたがたとも、またあなたがたがアッラーをさし置いて仕えているものともまったく関わりがない。私たちは、あなたがたとは無縁である。あなたがたが唯一、アッラーだけを信じるようになるまで、私たちとあなたがたのあいだにあるのはただ永遠の敵意と憎しみだけ」。しかしイブラーヒームだけは別で、彼はその父に言った。「私にはアッラーに対して、あなたのためになれる力は何もありません。しかし私は、必ずあなたのために赦しを願いましょう」。［そして彼は祈った。］「主よ。私たちは、ただあなたにだけすべてを委ねます。本当に私たちは、

5 ただあなたにだけ立ち返ります。行き着く先は、ただあなたの御許にだけあります。[2] 主よ。私たちを、［真理を］拒む者たちへの試練［の的］などにはしないでください。そして私たちを赦してください、主よ。本当に、もっとも威力ある御方、もっとも賢明な御方とはあなたのこと」。

6 この中にはあなたがたへの、アッラーと終末の日に希望を託す者への、すぐれたひとつの模範がある。たとえ誰が背を向けようと、本当にアッラーこそは満ち足りた御方、称賛にふさわしい御方。

7 おそらくアッラーがあなたがたと、あなたがたが敵意を抱く者たちとのあいだに親愛の情をおくこともあるだろう。アッラーは全能である。またアッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。[3]

8 アッラーは、宗教のことであなたがたに戦いをしかけたり、またあなたがたをその館から追放したりしない者たちに、あなたがたが親切、公平に接することを禁じていない。本当にアッラーは公平な者を愛する。[4]

9 アッラーはただ、宗教のことであなたがたに戦いをしかけたり、あなたがたをその館から追放したり、またあなたがたの追放に手を貸したりする者を友とすることを禁じている。誰であれ、彼らを友とする者は不正をなす者。

10 信じる者たちよ。女の信仰者があなたがたの許へ移住者としてやって来たときは、彼女たち［の信仰］を試みなさい。彼女たちの信仰については、アッラーがもっともよく知っている。それで彼女たちが信仰者であることが知れたなら、［真理を］拒む者たちのところへ帰してはならない。彼女たちは彼らに合法ではない。また彼らも彼女たちに合法ではない。しかし彼らが［婚資として彼女たちに］費やしたものは返すようにしなさい。あなたがたが彼女たちに婚資を与えるなら、彼女たちと結婚しても誤りではない。また、［真理を］拒む女と関わりを保ち続けてはならない。あなたがたが費やしたもの［の返済］を求め、





また彼女たちにも、費やしたもの［の返済］を求めさせなさい。それがアッラーの裁き。かの御方はあなたがたのあいだに裁きを下す。アッラーはすべてを知り、もっとも賢明である。

11 もしあなたがたの妻たちのいずれかが、あなたがたから、［真理を］拒む者の許へ去り、あなたがたが［何かしらを得て］優位に立つようになったなら、妻に去られた者たちに、かつて彼らが［婚資として］費やしたのと同じ分を与え［て清算し］なさい。そしてアッラーを畏れなさい、あなたがたはその信仰者なのだから。

12 預言者よ。もし女の信仰者があなたのところへやって来て、何ものをもアッラーと同列に連ねず、窃盗も姦通もせず、子殺しをせず、手足のあいだでねつ造した偽証をせず、正しいことについてはあなたに逆らわない、と誓うときは、その誓いを受け入れ、彼女たちのためにアッラーの赦しを願いなさい。本当にアッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。[5]

13 信じる者たちよ。あなたがたは、アッラーの怒りを招いた民を友としてはならない。［真理を］拒む者が、［埋葬された］墓場の仲間に絶望するのと同じように、彼らは来世に絶望している。

1 ここでの神の一人称は、所有格のため単数形（われ）であらわされている。

2 預言者イブラーヒームは、多神を奉ずる父に対し、神が彼に赦しを与えてくれるよう嘆願すると告げた。しかしその願いは聞き届けられなかった。信仰なき者のために赦しを乞うことは許可されてはいないことだからである。

3 信仰ある者たちに対し、信仰なき者と度を越して極端に諍いあってはならないことが告げられる。やがて神により、信

仰ある者と信仰なき者の間に友情が築かれる日が来ないとも限らないからである。そして後日、まさしくこれが実現した。のちにマッカの住民はムスリムとなり、イスラームの道において尽力（じんりょく）するようになったのである。

4 この啓示は、アブー・バクルの娘アスマが、マッカに残った彼女の母がマディーナに住む彼女を訪れた際に、多神を奉ずる母の訪問を受け入れても良いか否かを尋ねた出来事に起因する。一部の解釈者によれば、「宗教のことであなたがたに戦いをしかけたり、またあなたがたをその館から追放したりしない者」とは、イスラームを受け入れたものの、移住することができなかった人々を意味する。また別の解釈者によれば、ムスリムと交戦状態にない女性や子どもを意味するという。その上で、解釈者たちの大半が、この節で意図されているのはフザーア族であるという点で一致している。彼らは預言者と合意を交わし、条約に忠実であり、また預言者に戦闘を挑むこともなかった。

5 この節はマッカを征服したその日に啓示された。預言者は、崇拝の際には神に何ものもその同位者として配さないこと、窃盗や姦淫（かんいん）、子殺しの罪を犯さないこと、また子どもたちに対する夫の父権を毀損（きそん）しないことなど、信仰する女性たちの誓約を受け入れた。

# 第六一章　アッ＝サッフ　戦列

マディーナ啓示

本章は、イスラームのために戦う信仰者たちの様子を説き明かす第四節において用いられている「サッフ」という語からその名がつけられている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 諸天にあるもの、大地にあるもの、すべてがアッラーを讃美する。威力ある御方、賢明な御方。

2 信じる者たちよ。あなたがたは、どうして自分が行わないことを口にするのか。[1]

3 あなたがたが行わないことを口にするのは、アッラーの御許においてもっとも憎まれること。

4 本当にアッラーが愛するのは、かたく組まれた建物のように［一体となって］列をなし、この御方の道のために戦う者たち。

5 ムーサーが、その民にこう言ったときのこと［を思いなさい］。「私の民よ。私がアッラーからあなたがたに遣わされた使徒であるのを知っておきながら、どうして私を苦しめるのか」。彼らが［正しい道から］逸(そ)れたのは、アッラーが彼らの心を逸(そ)らさせたため。アッラーは背く民を導かない。





6 またマルヤムの子イーサーが、こう言ったときのこと［を思いなさい］。「イスラエルの民よ。私はアッラーからあなたがたに遣わされた使徒。私の前に啓示された［ムーサーの］律法を確認し、また私の後に遣わされる、アフマドという名の使徒についての良い報(しら)せを伝える者」。しかし彼［アフマド］が明白な証をもって来ると、彼らは言った。「これは、明らかに魔術に過ぎない」。

7 ［アッラーへの］服従に呼び招かれていながら、アッラーについて嘘いつわりをねつ造するよりも不正な者があるだろうか。アッラーは不正をなす民を導かない。

8 彼らは自分たちの口先で、アッラーの光を消そうとする。しかしアッラーはその光をまっとうする、たとえ［真理を］拒む者が嫌おうとも。[2]

9 導きと真理の宗教とをもってその使徒を遣わし、すべての宗教の上に優勢とする御方、たとえ多神を奉ずる者が嫌おうとも。[3]

10 信じる者たちよ。われはあなたがたを痛烈な懲罰から救うための、ひとつの取引を示そう。

11 それはあなたがたがアッラーとその使徒を信じ、自分の財も自分自身もアッラーの道に投じて励むこと。その方があなたがたのために良い、もしあなたがたが知ってさえいたなら。

12 かの御方はあなたがたの諸々(もろもろ)の罪について、あなたがたを赦し、川がその下を流れる楽園へとあなたがたを連れていくだろう。そして永遠の園にある、すばらしい館にあなたがたを住まわせるだろう。大いなる成就とは、まさしくこのこと。

13 また、あなたがたが愛するだろうもうひとつのものも。それはアッラーの助けと間近の勝利。信仰者たちに、この良い報(しら)せを伝えなさい。[4]

14 信じる者たちよ。あなたがたはアッラーの援助者となりなさい。マルヤムの子イーサーが「アッラーの

ために私の援助者となるのは誰か」と弟子たちに言い、弟子たちが「私たちがアッラーの援助者となります」と言ったように。こうしてイスラエルの民のうち、ある者たちは信じ、またある者たちは信じなかった。そこでわれらは敵に対して信じる者たちを助けた。それゆえ、彼らは優勢となった。

1　ムスリムの何人かが、神に最も喜ばれる行いとは何か、それさえ知れればそれをしていただろうに、と述べた。これに対して、神が愛するのは、神の道のために奮闘努力する者であるということを告げる節が下された。ウフドの戦いの際に、離反したムスリムが複数いたという事実が、この啓示の一因となっている。

2　誰が中傷しようとするまいと、神の宗教は勝利をおさめるだろう。

3　「本当に、アッラーの御許の宗教とはイスラームのこと（三章一九節）」。「イスラーム」、すなわち神に一切を委ねきって服従することを指す。

4　「間近の勝利」とはイスラームへのマッカ開放と、ムスリムによってもたらされた強大な帝国（東ローマ帝国、サーサーン王朝）の敗北を指す。

# 第六二章　アル＝ジュムア　集会

マディーナ啓示

啓示は、高潔さと知恵を教えるために、知識を持たない人々の間にのみ下されたのではない。以前に下されたメッセージを保持してはいるものの、それらを理解していない人も対象として含まれている。現世の利益にまどわされ、啓示から逸らされることのないよう、合同でのジュムアの礼拝（金曜礼拝）には粛然として参加するのが望ましい。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 諸天にあるもの、大地にあるもの、すべてがアッラーを讃美する。王者たる御方、聖なる御方、もっとも威力ある御方、もっとも賢明な御方。

2 文字を知らない者たちの中に、彼らに御しるしを読み聞かせ、彼らを清らかにし、啓典と知恵を教えるひとりの使徒を、彼らのあいだから立ち上がらせた御方。それ以前の彼らは、明らかな迷いの中にいたというのに。

3 またその他の、いまだ彼らに加わっていない者たちにさえも。もっとも威力ある御方、もっとも賢明な御方。



4 これがアッラーの御恵み。この御方は、御心にかなう者にそれを与える。アッラーは大いなる御恵みの所有者。

5 ［ムーサーの］律法を担っていながら、そののちそれを担えなくなった者とは、［何も理解しないまま］諸々の書物を運ぶろばのようなもの。アッラーの御しるしを嘘よばわりする民の例えの、何という悪さか。アッラーは不正をなす民を導かない。

6 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「ユダヤ教徒たちよ。人々をさし置いて、自分たちだけがアッラーの友であると言い張るなら、死を賜るよう願いなさい、もしあなたがたが真実を語っているのなら［、ただちに楽園に入れるだろう］」。

7 しかし彼らは、その手で送り出してきたことのために、決してそう願わないだろう。アッラーは不正をなす者のことをよく知っている。

8 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「あなたがたが逃れようとしている死は、必ずあなたがたに追いつくだろう。そののちあなたがたは、目には見えないものと見えるものとを知る御方へ引き戻される。かの御方はあなたがたに、あなたがたの行ってきたことについて告げ報せるだろう」。

9 信じる者たちよ。集会の日に礼拝の呼び声を聞いたときは、アッラーを想い起こすことに急ぎ、取引から離れなさい。その方があなたがたのために良い、もしあなたがたが知ってさえいたなら。[1]

10 礼拝を済ませたとき、地上のあちらこちらに散ってアッラーの御恵みを求めなさい。大いにアッラーを想い起こしなさい。そうすれば、あなたがたは栄えるだろう。[2]

11 しかし品々や娯楽を目にするとき、彼らは、立っているあなたを残してそちらの方へ駆けていく。言いなさい。「アッラーの御許にあるものの方が、どのような娯楽や品々よりも良い。アッラーは、糧をもた

らす者としてもっともすぐれている」。[3]

1　「集会の日」とは金曜日のこと。

2　礼拝が終わった後には、信仰者たちは神の惜しみなき恩寵を求め、神を賛美し、また病人を見舞ったり、友人を訪れたり、その他のなすべきことをするなど、善行にはげむよう推奨される。

3　あるとき、預言者が金曜礼拝のホトバ（説教）をしているところへ隊商が到着した。隊商が到着した際には、到着を知らせ、その喜びを示すために太鼓を打ち鳴らすという習慣があった。その太鼓の音を聞いて、多くの者がその場を立ち去ってしまい、預言者の話を聞くためにマスジドに残った信仰者はわずか十名ほどという始末であった。

# 第六三章　アル＝ムナーフィクーン　偽善者

マディーナ啓示

本章では、偽善者とその行動が扱われている。章題は第一節にある語に由来している。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 偽善者たちがあなたのところへやって来るとき、彼らは「私たちは、本当にあなたがアッラーの使徒であることを証言します」と言う。アッラーは、あなたがまぎれもなく使徒であることを知っている。そしてアッラーは、偽善者たちが嘘つきでしかないことを証言する。

2 彼らは誓いの裏に隠れて、アッラーの道を妨げている。本当に、彼らの行いの何という悪さか。

3 それは彼らが［一度は］信じるようになっていながら、そののち［真理を］拒むようになったため。彼らの心は封じられ、何ひとつ理解していない。[1]

4 あなたが彼らを目にするとき、彼らの姿には感心させられるだろう。そして彼らが語るとき、あなたは彼らの言うことに耳を貸す。しかし彼らは、立てかけられた材木のようなもの。彼らはすべての悲鳴はどれも自分たちに向けられたものと考える。彼らは敵、それゆえ彼らに用心しなさい。彼らにアッラー





の咎めあれ。彼らの、何と惑わされていることか。[2]

5 彼らに「来なさい。アッラーの使徒が、あなたがたのために赦しを願おう」と言うとき、彼らは顔を背ける。あなたは彼らが高慢に背き去ってゆくのを見るだろう。[3]

6 あなたが彼らのために赦しを願おうと願うまいと、彼らにとっては同じこと。アッラーが彼らを赦すことは決してない。本当にアッラーは背く民を導かない。[4]

7 彼らは、「アッラーの使徒のところにいる者たちには、やがて彼らが使徒から離れるまで何も費やしてはならない」と言う者たち。諸天と大地の宝庫はアッラーに属する。しかし偽善者はそのことを理解しない。[5]

8 彼らは言う。「私たちがマディーナに戻れば、きっと威信ある者たちが卑しい者たちを追い出すだろう」。しかし威信とはアッラーとその使徒、そして信仰者たちにあるもの。しかし偽善者はそのことを知らない。

9 信じる者たちよ。あなたがたの財や子どものことばかりになって、アッラーを想い起こすことをおろそかにしてはならない。誰であれそうした者は、敗者となってしまう。

10 死があなたがたのうち誰かにやって来る前に、われらがあなたがたの糧としたものの中から［主の道のために］費やしなさい。さもないと「主よ、もう少しだけ猶予をください。そうすれば私も慈善をなし、正しい者のひとりになります」などと言うことになる。

11 定められたかの時が到来すれば、アッラーは誰のことも猶予しない。アッラーは、あなたがたの行いを熟知している。

1 アラビア語における「心」とは、情緒と共に理解の座す場所としても知られている。

2 彼らにとり、自らの良心は常に災厄の種となる。少しでも悲鳴が上がれば、彼らはそれが自分たちに向けられた抗議であると思い込み、たちまち猜疑心に凝り固まる。こうした人々は、あからさまな敵よりもいっそう悪い。アブドゥッラー・イブン・ウバイイやムギース・イブン・カイスその他の偽善者たちはみな見た目も美しく立派で屈強な者たちばかりだったが、彼らは預言者の前にやって来ても、背筋を伸ばしもせず壁に寄りかかって話をした。ここでは彼らは、姿かたちは印象的でも、心も精神も持ち合わせていない木材の梁にたとえられている。

3 神はアル＝ガフール、すなわちすべてを赦したもう御方である。偽善でさえ、その他の罪と同じく、心の底から悔い改め、行いを正し、邪悪を去って、神の恩寵と赦しを求めようというひたむきな意志と姿勢を示すことで赦しが得られる。しかしここでの偽善者たちは、そうはしなかった。

4 傲慢かつ欺瞞に満ちた偽善者たちは、神のメッセージを拒否し、自らと神の恩寵との間に大きな隔たりを作り出した。彼らが反逆と逸脱の姿勢をとっている間は、預言者の祈りも彼らの救済とはならない。神が彼らを赦すことはないだろう。

5 マディーナの偽善者たちの頭目であったアブドゥッラー・イブン・ウバイイは、預言者に指導権を奪われたと感じ、決して彼を許そうとはしなかった。イブン・ウバイイはマディーナの人々を説得し、預言者と、その仲間たちを町から追放しようと試みた。しかしマディーナの人々は、偽善者たちを除いて皆が預言者を支持し、マッカからマディーナへ、預言者の後に従って「ヒジュラ」、すなわち移住してきたムハージルーン（移住者たち）を援助した。偽善者たちの頭目による提案は、預言者と、彼に従う者たちに物心両面における援助を差し出した、アンサール（援助者）と呼ばれたマディーナの人々によって拒否されたのである。この節が啓示されたのち、イブン・ウバイイは預言者の許へ出向くことも、彼に許しを乞うことも拒絶した。まもなくして彼は重い病気を患い、この世を去った。

# 第六四章　アッ＝タガーブン　だまし合い

マディーナ啓示

「だまし合い」とは、第九節に現れる「アッ＝タガーブン」の語に由来する。この語には「互いに失望する」といった意味合いもある。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 諸天にあるもの、大地にあるもの、すべてがアッラーを讃美する。王権も称賛もこの御方に属する。ありとあらゆるものごとにおいて全能の御方。

2 あなたがたを創造した御方。あなたがたのうちある者は［真理を］拒み、またある者は信じる。アッラーは、あなたがたが行っていることをすべて見ている。

3 真理によって諸天と大地を創造し、あなたがたを形づくり、美しい姿にした。そして行き着く先はこの御方にある。

4 諸天と大地に何があるかを知っている。あなたがたが秘めるものもさらけ出すものも知っている。アッラーは、胸の中に抱くものをよく知っている。

5 あなたがたには、以前の［真理を］拒んだ者たちの話は届いていないのか。彼らは自分たちの行いの悪い結果を味わった。彼らには、痛烈な懲罰があるだろう。[1]

6 それは使徒たちが明白な証をもって彼らのところへ来たというのに、彼らが「ただの人間が、私たちを導くというのか」と言ったため。彼らは［真理を］拒み、背を向けた。しかしアッラーは何も必要としていない。アッラーは満ち足りた御方、称賛にふさわしい御方。

7 ［真理を］拒む者たちは、彼らがよみがえらされることは決してない、と言い張る。言いなさい。「いいや、私の主にかけて。あなたがたは、必ずよみがえらされるだろう。そののち、あなたがたが行っていたことを必ず告げ知らされるだろう。それは、アッラーにはたやすいこと」。

8 それゆえアッラーとその使徒を信じなさい、われらがあなたがたに下した光もまた。アッラーは、あなたがたの行いを熟知している。

9 かの御方が、集合の日のためにあなたがたをことごとく集めるその日、それは互いにだまし、だまされる日。誰であれ信じて正しい行いをする者なら、かの御方はその悪事をとりのぞき、川がその下を流れる楽園に入らせ、永遠にその中に住まわせるだろう。大いなる成就とは、まさしくこのこと。[2]

10 しかし［真理を］拒み、われらのしるしを嘘よばわりする者。これらの者は火獄の仲間であり、永遠にその中に住まうだろう。行き着く先の、何と悪いことか。

11 アッラーの許しがない限り、どのような災難も降りかかることはない。誰であれ信じる者なら、アッラーはその心を導くだろう。アッラーは、ありとあらゆるものごとを知る。[3]

12 それゆえアッラーに従い、また使徒に従いなさい。それでもあなたがたが背を向けたとしても、われらの使徒に課されているのはただ［教えを］明白にのべ伝えることだけ。

13 アッラー、その他にいかなる神もない。それゆえ信仰者なら、アッラーにこそ委ねなさい。
14 信じる者たちよ。あなたがたの伴侶や子どもたちの中にもあなたがたの敵はいる。それゆえ彼らに用心しなさい。しかしあなたがたが容赦し、見のがしてやるなら、本当にアッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。4
15 あなたがたの財も子どもも、ひとつの試練に過ぎない。大いなる報酬は、アッラーの御許にあるもの。
16 それゆえ、あたう限りアッラーを畏れなさい。耳を傾け、従い、［主の道のために］費やしなさい。それがあなたがた自身にとってもっとも良いこと。自分の貪欲を自制する者たち、これらの者こそ栄える者。
17 アッラーに善良な貸付をするなら、この御方はあなたがたのためにそれを倍に増やし、またあなたがたを赦すだろう。アッラーはもっともよく恩に報い、もっとも寛容である。
18 目には見えないものと見えるものとを知る、もっとも威力ある御方、もっとも賢明な御方。





1 ヌーフ、フード、サーリフそしてルートといった預言者たちの民についての言及である。マッカの住民にも同様の結末が待ち構えていることが警告されている。

2 人々が集められる日は、真理を拒んできた者にとり期待を裏切られる日となるだろう。彼らは地獄に投げ入れられ、信仰を否定してきたことと、過誤（かご）とに対する罰を受ける。

3 神の知識と許可なくしては、どのような災厄も悪病も人間に及ぶことはない。したがって神と定命を信じる者は、何が起ころうともすべては天の定めと悟って受け入れる。そのため、回復も容易となるのである。

4 一部のムスリムの妻子たちは、相当に苦労することになるだろうと申し立て、マディーナへの移住を妨げた。移住によってより高い水準の生活が得られると知ったとき、移住せずにいたムスリムたちは、彼らを引き止めた家族の者たちを罰したいという思いにとらわれた。しかし家族の者たちを罰することのないよう、また彼らを許すよう促すこの節が啓示された。同時に、ある種の重大な局面においては家族がその差し障りとなる場合もあるという点についても同時に指摘されている。

# 第六五章　アッ＝タラーク　離婚

マディーナ啓示

男女の関係は社会生活上の重要な要素である。本章では、そのいくつかの側面が扱われている。預言者は次のように語っている。「許可されているもののうち、離婚は、アッラーが最も憎むことである」。このように結婚の尊厳は、家族生活の不可欠な基盤として擁護されている。同時にその一方で、この尊厳を無分別に崇拝するあまり、いわばフェティシズムに陥って、人間が生きてゆく上で当然守られるべき根元的な価値を犠牲にしてはならない。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 預言者よ。あなたがた［ムスリム］が女と離婚するときは、待つべき期間が過ぎた後で離婚しなさい。待つべき期間を［正しく］計算し、あなたがたの主たるアッラーを畏れなさい。明らかな不品行にはしったのでもない限り、彼女らをその家から追い出してはならず、また彼女らも出て行ってはならない。これがアッラーの定めた禁令。誰であれアッラーの禁令を越える者は、自分自身に不正をなす者。あなたは知らなくとも、アッラーはその後になって新たなことをもたらすかもしれない。1

2 ［待つべき］期間に達したときは、相応に遇(ぐう)してとどめおくか、あるいは良心をもって別れなさい。あな





たがたの中から公正な者二名を証人に立てて、アッラーのために証言させなさい。これがアッラーと終末の日を信じる者に教示されていること。誰であれアッラーを畏れる者には、この御方は［解決の］出口をあらしめ、

3 思いもよらないところから糧をもたらす。アッラーに委ねる者には、この御方だけで十分である。本当にアッラーは、必ず意図するところを成し遂げる。アッラーは、ありとあらゆるものごとに限りを定めている。2

4 あなたがたの妻のうち、すでに月経のない齢(よわい)を迎えた者でも、あなたがたに疑念があるなら、待つべき期間は三か月とする。いまだ月経のない者もまた［三か月とする］。身ごもっている者については、その期間は彼女らが重荷を産み落とすまで。誰であれアッラーを畏れる者には、この御方はものごとを安楽にする。

5 これがあなたがたに下されたアッラーの命令。誰であれアッラーを畏れる者には、この御方がその悪事を消し去り、また大いなる報酬があるだろう。

6 あなたがたの資力に応じて、あなたがたの住まうところに住まわせなさい。彼女らを苦しめようとして、害を加えてはならない。彼女らが身ごもっているなら、重荷を産み落とすまでの費用を彼女らのために払いなさい。もし彼女らが、あなたがたのために［赤子に］授乳をしてくれるようなら、彼女らに報酬を払いなさい。互いのあいだで道理にかなう話し合いをしなさい。しかし、もし互いに不同意となったなら、他の者に［赤子の］授乳をさせなさい。3

7 資力のある者は、その資力に応じて払いなさい。糧の乏しい者は、アッラーに与えられているものに応じて払いなさい。アッラーは誰に対しても、御自らが与えた以上のものを担わせることはない。アッラー

は、苦境の後には安楽をもたらす。
8 主と使徒たちの命令に対して不遜であった町が、どれほど［多く］あっただろうか。われらは［彼らに］厳重に清算し、恐るべき懲罰をもって罰した。4
9 こうして彼ら［その町の住民］は、自分たちの行いの結果を味わった。その結末はまったくの損失であった。
10 アッラーは彼らのために厳重な懲罰を用意している。それゆえアッラーを畏れなさい、信じ、分別をもつ者たちよ。アッラーは、すでにあなたがたにひとつの戒めを下している、
11 あなたがたにアッラーの明白な御しるしを読み聞かせる、ひとりの使徒を。それは信じて正しい行いをする者を、暗闇から光へと連れ出そうとしてのこと。それゆえアッラーを信じ、正しい行いをする者を、かの御方は川がその下を流れる楽園へ入らせ、永遠にその中に住まわせるだろう。アッラーはその者のために、もっともすぐれた糧をもたらす。
12 アッラーこそは七つの諸天を、またそれと同じように大地を創造した御方。命令は、それらのあいだから下される。それにより、アッラーがありとあらゆるものごとにおいて全能であり、またアッラーが、ありとあらゆるものごとをその知で網羅することを、あなたがたに知らしめるため。5





1 離婚は合法ではあるが、それはいと高き神の忌み嫌うことでもある。これは神が預言者ムハンマドに対して告げていることではあるが、信仰者たちもまた預言者と同様の責任を有する。離婚が避けられないとしても、待機の期間が終わるまで待たねばならず、また適切な取り決めがなされるまでは、住居から追い出したり、追い出されたりすることがあってはならない。待機の期間中に一方の当事者が後悔し、相手が戻ってくることを希望する可能性もある。その場合、お互いに関係を修復することも起こり得るだろう。

2 待機の期間が終わるまで、夫はその妻に対する尊敬と礼節を欠かすことなく、また名誉ある配偶者として待遇すること。いずれにしても、彼は二名の証人を用意しなくてはならない。離婚はスンナに従って行う必要がある。上述の通り、女性が住居を出るのは待機の期間が終わりを迎えてからのことであり、彼女の住居でもある場所から追放されるという態をとってはならない。すべては、二人の証人の立ち会いの下に行われなくてはならない。

3 「もし互いに不同意となったなら」。生活の糧に困窮していたり、母乳の出が悪かったり、あるいは彼女の健康状態が思わしくないなど、母親がその子どもを育てるのに妨げとなる状況が生じている場合を指す。心理的な困難もまた、そのひとつに数えられる。

4 この節で言及されている懲罰とは、おそらく次の通りのことを意味する。（1）来世における懲罰とは、清算と懲戒の意味を有する。（2）現世における懲罰とは、「民の生活の中に」もたらされる飢饉や、敵対者への敗北がもたらす飢餓、また天災か人災かに関わらず、神の意志の下に人類にもたらされる災害。

5 魂の王国にも階梯があるように、この地上における生においても同様の階梯が存在する。文字通りに解釈するなら、私たちの頭上にある天空にも何層もの層が重なっているのと同じく、地球の地殻もまた何層もの地層が重なって構築されていることを示唆するものとも理解できる。

# 第六六章　アッ＝タフリーム　禁止

マディーナ啓示

本章は、預言者が自分の個人的な判断に基づいてある食べものを禁止したという出来事からこの名で呼ばれている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 預言者よ。あなたの妻たちを喜ばせたいからといって、どうしてアッラーがあなたのために合法としたことを禁じようとするのか。アッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。1

2 すでにアッラーはあなたがた「ムスリム」のために、あなたがたの誓いを解くように命じた。アッラーはあなたがたの庇護者である。すべてを知る御方、もっとも賢明な御方。

3 預言者が、妻たちのひとりに、秘密にしておくようにと、ある出来事について打ち明けたときのこと。それを彼女が「別の者に」伝えて表ざたにすると、アッラーはそのことを彼「預言者」に教えた。そこで彼は、教わったことの一部を「彼女に」示し、また一部を伏せた。彼がそのことを彼女に報せると、彼女は言った。「誰があなたにこのことを報せたのですか」。彼は言った。「これを私に報せたのは、すべてを知る御方、熟知する御方」。2





4 もしあなたがた二人が、悔い改めてアッラーに立ち返るなら「赦しがあるだろう」。あなたがたの心は、確かに「禁じられた方へ」傾いていた。しかし、もしあなたがたが彼に対して手を貸し合うなら、本当にアッラーこそは彼の庇護者。またジブリールも、信仰者の中の正しい人も、これに加えて天使たちも彼に手を貸すことだろう。

5 もし彼があなたがたと離婚しても、おそらく彼の主は、より良い妻たちをあなたがたの代わりとすることもできる。「主に」服従する者、信仰ある者、よく悔い改めて立ち返る者、仕える者、斎戒する者、既婚の者でも、未婚の者でも。

6 信じる者たちよ。あなたがたは自分自身と身内の者たちを、人間と石とを燃料とする業火から守りなさい。その「業火の」上には、熾烈で厳重な天使たちが「見張り役として」ついている。彼らはアッラーに命じられれば逆らわず、命じられたとおりのことを行う。

7 「「真理を」拒む者たちよ。この日になって言い訳はするな。あなたがたは、ただあなたがたの行ってきたことに報いられるだけ」。

8 信じる者たちよ。あなたがたは心底から悔い改めてアッラーへ立ち返りなさい。そうすればあなたがたの主が、あなたがたからその悪事を消し去って、川がその下を流れる楽園へと入らせてくれることもあるだろう。その日アッラーは、預言者と、また彼と共に信じた者たちを辱めはしないだろう。彼らの光はその前の方に、また右の方に進むだろう。そして彼らは言うだろう。「主よ。私たちのために、私たちの光をまっとうしてください。そして私たちを赦してください。本当にあなたは、ありとあらゆるものごとにおいて全能です」。

9 預言者よ。「真理を」拒む者や、偽善者に対しては励みなさい。彼らに対しては厳しい態度をとりなさい。

彼らの住まいは地獄である。行き着く先の、何と悪いことか。[3]

**10** アッラーは、［真理を］拒む者たちのための例えを示す。それはヌーフの妻とルートの妻のこと。彼女らはわれらのしもべのうち、正しい二人の下にいた。しかし彼女らは二人とも彼らを欺いた。彼らには、アッラーに対して彼女らのためにしてやれることは何もなかった。そして「入る者たちと共に業火に入れ」と告げられた。[4]

**11** アッラーは、信じる者たちのための例えを示す。それはフィルアウンの妻のこと。［思い出しなさい、］彼女がこう言ったときのこと。「主よ。あなたの御許、楽園の中に、私のための家を建ててください。フィルアウンとその行いから、私を救い出してください。不正をなす民から、私を救い出してください」。[5]

**12** また、イムラーンの娘マルヤムのこと。彼女は自分の貞節をよく保った。われらはその［胎内の］中に、われらの息吹を吹き込んだ。彼女は自分の主の御言葉と啓典を真実とする、従順な者のひとりであった。[6]

1 この節が啓示されたのは、預言者ムハンマドが、妻の一人ザイナブの住居で過ごした際に起きた出来事に端を発している。他の妻たちのうちアーイシャとハフサは、預言者がザイナブのところで過ごしたことに嫉妬して、戻ってきた預言者に、彼の息はひどい悪臭がする、と口々に言った。これを聞いて預言者は、これからは二度とザイナブの用意した蜂蜜で作った飲み物は口にしないと誓った。ここでは預言者が、そのような誓いを撤回するよう神に命じられている。妻たちを喜ばせようとするのは決して悪いことではない。しかし、神が合法としたものを禁じるのは良いことではない。別の解説者によると、預言者ムハンマドが妻の一人ハフサのための日を、別の妻のマリアと過ごしたことをハフサが怒り、そのためムハンマドが二度とマリアに近づかない、と誓った際に啓示されたともいわれる。





2 預言者は、妻の一人ハフサに、自分の死後の後継者について遺言を託しており、その順序はまずアブー・バクル、次にウマルであった。内密にしておくべきこの秘事を、ハフサはアーイシャに打ち明けてしまった。そのことを、預言者は神の啓示を通して知らされることとなった。

3 九章七三節を参照。偽善者たちに対する論駁として、同じ言葉が用いられている。ここでの預言者は、信仰なきマッカ住民や偽善者たちと戦うよう奨励されている。

4 ヌーフの妻は常々、自分の夫は狂人であると人々に吹聴していた。ヌーフの妻もルートの妻も、神を信じることもなければ、自分の夫の預言者性を認めることもなかった。そして二人とも、信仰を否定した者として死んでいったのである。

5 フィルアウンの妻アースィヤは信仰ある女性だった。フィルアウンがアースィヤの手足を縛り、胸の上に重石を乗せ、太陽の日差しの下に置き去りにしたとき、彼女は自分の主たる神に、上記の節の祈りを捧げた。

6 伝統的には、イーサーの母マルヤムの父の名はイムラーンであったとされている。三章三五節から三七節と、その注釈を参照のこと。人々は不品行を働いたとしてマルヤムを責めたが、彼女は最も純粋かつ高潔な女性の一人であった。

# 第六七章　アル＝ムルク　威力

マッカ啓示

本章は第一節に現れる語「アル＝ムルク」にちなんでこの名がつけられている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 王権をその手に握る御方に祝福あれ。ありとあらゆるものごとにおいて全能の御方、
2 死と生とを創造した御方。それはあなたがたのうち、誰が善良な行いをするのかを試みるため。威力あ
る御方、もっともよく赦す御方、[1]
3 層を重ねて七つの天を創造した御方。あなた［ムハンマド］は、慈愛あまねく御方の創造の中に、何の矛
盾も見つけることはできない。それゆえ、目を上げて再度よく見てみなさい。あなたに、何か亀裂でも
見えるだろうか。[2]
4 それから、目を上げて再度よく見てみなさい。あなたの視線ははね返され、くたびれて元に戻るだけ。
5 われらはもっとも低い天を［星々の］燭（ともしび）で飾り、またそれらを、悪魔たちを撃つ流星の石つぶてとした。
またわれらは彼らのために、烈火の懲罰を用意してある。[3]





6 彼らの主を拒む者には、地獄の懲罰がある。行き着く先の、何と悪いことか。
7 その中に投げ込まれるとき、彼らは、それが沸き上がって轟音（ごうおん）を響かせるのを聞くだろう。
8 激怒のために張り裂けんばかり。［新たな］群れが投げ込まれるたびに、その番をする者たちが彼らに尋
ねる。「あなたがたのところには、警告者が来なかったのか」。
9 彼らは言う。「いいや、警告者がひとり来ていた。しかし私たちは嘘であるとし、『アッラーは何ひとつ
下していない。あなたがた［預言者たち］はひどい過ちを犯している』と言った」。
10 彼らはこうも言う。「もし私たちが耳を傾け、考えることさえしていたなら、烈火の仲間にはならなかっ
ただろうに」。
11 こうして彼らは、自分たちの罪を認める。しかし烈火の仲間は［赦しから］遠ざけられている。
12 しかし、目には見えない主を恐れる者には赦しと大いなる報酬があるだろう。
13 あなたがたがその言葉を秘めようとも、あらわにしようとも。本当にかの御方は、胸の中に抱くものを知っ
ている。
14 創造した御方が知らないはずがあるだろうか。細やかな御方、熟知する御方。[4]
15 あなたがたのために、大地を扱いやすいものとした御方。その中にあるあらゆる道を［旅して］歩み、こ
の御方が糧としたものを食べなさい。そして復活はこの御方にある。[5]
16 あなたがたは、天にあるあの方が大地を揺らすとき、あなたがたを沈めることはないと安心していられ
るのか。[6]
17 それとも天にあるあの方が、あなたがたに向かって石の嵐を送り込むことはないと安心していられるの
か。やがてあなたがたは、われの警告がどれほどであるかを知るだろう。

18 彼ら以前にも、すでに嘘であるとしていた者たちがいた。われらの拒絶はどれほどであったか。

19 彼らは見たことがないのか、その翼を広げたり、畳んだりしながら、彼らの頭上を飛ぶ鳥たちのことを。慈愛あまねく御方の他に、彼らを「宙に」支えるものは何もない。本当にこの御方は、すべてのものごとを見ている。

20 慈愛あまねく御方をさし置いて、誰があなたがたの軍勢となり、あなたがたを助けるというのか。「真理を」拒む者は、ただ欺瞞の中にいるに過ぎない。

21 もし、かの御方がその糧を差し控えたなら、誰があなたがたのために糧をもたらすというのか。いいや、それでも彼らは頑なに尊大さと反感をつのらせる。

22 うつむいてただ歩いているだけの「真理を拒む」者の方が、前を向いてまっすぐな道を歩く「信仰する」者よりも正しく導かれているというのか。

23 言いなさい。「あなたがたをあらしめ、またあなたがたに聞く耳と見る目を、また諸々を感知する心を持たせた御方。あなたがたのうち、感謝する者はわずかであるが」。

24 言いなさい。「あなたがたを地上に増やした御方。そしてあなたがたは、御方へと集められる」。

25 彼らは言う。「もしあなたがたが真実を語っているのなら、その約束はいつ果たされるのか」。

26 言いなさい。「その知識は、ただアッラーの御許にのみある。私は、「警告を」明らかにするひとりの警告者であるに過ぎない」。

27 しかしそれを間近に見ると、「真理を」拒む者たちの顔は苦悶のために歪むだろう。そして告げられるだろう。「これこそ、あなたがたが呼び求めていたもの」。

28 「ムハンマドよ、」言いなさい。「あなたがたは考えてもみたのか。たとえアッラーが私や私と共にいる者を滅ぼそうと、あるいは慈悲をかけようと、それで誰が「真理を」拒む者を、痛烈な懲罰から救うというのか」。





29 言いなさい。「慈愛あまねく御方。私たちはこの御方を信じ、またこの御方にすべてを委ねる。やがてあなたがたも知るだろう、明らかな誤りの中にいるのは誰であるかを」。

30 言いなさい。「あなたがたは考えてもみたのか。もしあなたがたの水が、すべて「地中に」沈んでしまったなら、あなたがたのために水を湧き出させるのは誰であるかを」。

1 「生」とは、無目的な現象ではない。また「死」によって、すべてが終わるのでもない。現世における「生」とは、むしろ「生に似せた状態」であり、それは来世における「生の真実の状態」へと続いている。現世は、人間が試されるために設けられた一過性の場所に過ぎない。

2 「亀裂」の他に、「欠陥」「欠点」とする解説者もいる。

3 悪魔たちを撃つ「流星の石つぶて」については一五章一六節から一八節、三七章六節から一〇節を参照。

4 人間の知識は不完全であるが、神の知識は完全である。神は自らの創造したものについては、確実に知悉しているのである。

5 地上にあるものは、すべて人間の目的のために、人間の益となるよう与えられている。そして地上にあるものは、すべて人間に従順である。この節は人間に、とりわけムスリムに対して進歩するよう励ましている。

6 全宇宙と、その中に起こる出来事のすべてを取り決め、天使たちを従えてそれらを采配するのは神である。神の許可なくしては、世界には何ひとつ起こらない。

# 第六八章　アル＝カラム　筆

マッカ啓示

「筆」という章名は、第一節に現れる「カラム」という語に由来している。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 ヌーン。筆と、それが記したものにかけて。[1]

2 あなたの主の恩寵のため、あなたはとり憑かれた者ではない。[2]

3 本当にあなたには、尽きることのない報酬がある。

4 本当にあなたには、大いなる徳がある。

5 いずれあなたは見る、そして彼らも見る、

6 あなたがたの、どちらが狂わされているのかを。

7 本当に、その道から迷う者についてはあなたの主がもっともよく知っている。また導かれた者についても、もっともよく知っている。

8 それゆえ嘘をつく者に従ってはならない。





9 彼らはあなたに妥協を求める。そうなれば、自分たちも妥協するつもりでいる。

10 あなたは、恥ずべき誓いをたてる者には誰にも従ってはならない。

11 冷笑する者、悪意ある噂を言いふらす者、

12 善事を妨げる者、法外の者、罪深い者、

13 乱暴［で冷酷］な者、加えて素性のあやしげな者に、

14 財や子どもが［多く］あるからといって［従ってはならない］。

15 そうした者は、われらのしるしを読み聞かされると「そのようなもの、大昔の人の伝説に過ぎない」と言う。

16 いずれわれらが、その鼻の上に格印を押すだろう。

17 本当にわれらは彼らを試みた、［かつて］果樹園の仲間たちを試みたのと同じように。彼らが「朝のうちに、すべての果実を摘みとってしまおう」と誓ったとき、

18 ［その誓いに］何の留保も設けなかった。[3]

19 すると彼らが眠っているあいだに、あなたの主から［果樹園に懲罰の］訪れがあった。

20 それで、［果樹園は］すべて摘みとられたようになった。

21 夜が明けると、彼らは互いを呼びあった。

22 「果実を摘むなら、果樹園に急ごう」。

23 そうして彼らは出かけてゆき、互いに声をひそめて言った。

24 「今日は、貧しい者は絶対に誰も［果樹園に］入らせないようにしよう」。[4]

25 彼らはそのように決意して、朝早くから出かけていった。

26 しかしそれ［果樹園の様子］を見たとき、彼らは言った。「本当に、私たちは迷っていた。

27 いいや、むしろ私たちの方が奪われてしまった」。

28 彼らのうち、もっとも慎ましい者が言った。「私は言わなかったか、『あなたがたはなぜ［主を］讃美しないのか』と」。

29 彼らは言った。「私たちの主に讃美あれ。本当に私たちは、不正をなす者でありました」。

30 それから彼らは互いに身を寄せ、相手を責め合った。

31 彼らは言った。「何と惨めなことだろう。本当に私たちは逸脱した者であった。

32 私たちの主は、これ［果樹園］をより良いものと代えてくれるかもしれない。私たちの主に願い求めよう」。

33 懲罰とは［、現世であれば］このようなもの。そして本当に、来世の懲罰はさらに大きい。もし彼らが、知ってさえいたなら。

34 本当に、畏れる者にはその主の御許に至福の楽園がある。

35 われらが、［服従する者である］ムスリムを、罪を犯す者のように扱うだろうか。

36 あなたがたはどうしたというのか。どのように判断するというのか。

37 それともあなたがたには啓典があり、そこから何かを学んだというのか。

38 その［啓典の］中から、何でもほしいままに選べるというのか。

39 それともあなたがたにはわれらとの契約があり、それが復活の日まで続くとでもいうのか。何でも自分たちで判断を下せるというのか。

40 ［ムハンマドよ、］彼らに尋ねなさい。彼らのうち、誰が［そうした主張を］保証するのか、と。

41 あるいは、彼らには［主に並ぶ］同輩があるというのか。もし彼らが真実を語っているのなら、彼らにその同輩を連れて来させなさい。





42 ［恐るべき事態が起きて］脛がさらけ出されるその日、彼らはひれ伏すよう呼び出される。しかし、彼らにはできないだろう。[5]

43 彼らは視線を落とし、恥辱に覆われるだろう。かつて彼らは、ひれ伏すよう呼びかけられていた。その頃なら、［ひれ伏すことができるほどには］すこやかであったのに。

44 それゆえ、この［クルアーンの］話を嘘よばわりする者については、われに任せなさい。われらは彼らの知らないところで、徐々に彼らを［滅びへと］連れてゆこう。

45 われは彼らを猶予しよう。［しかし］本当に、われの計画は揺るがない。

46 それともあなた［ムハンマド］が彼らに代価を求め、それで彼らが借財を負うことにでもなったのか。

47 それとも目には見えないもの［の知識］が彼らの許にあり、それを書きとどめておくことでもできるのか。

48 それゆえ、よく耐えてあなたの主の裁きを待ちなさい。苦悶のあまり叫び声をあげたときの、魚の仲間［ユーヌス］のようであってはならない。

49 もし彼の主の恩寵が、彼に届くことがなかったなら、彼は責めを負わされ、不毛の岸に投げ捨てられていただろう。

50 しかし彼の主は彼を選び、正しい人のひとりとした。

51 戒めを聞くと、［真理を］拒む者たちはあなたを睨みつけてうち負かそうとする。そして彼らは言う。「本当に、彼はとり憑かれた者だ」。

52 しかし、これ［クルアーン］こそは諸世界への戒めに他ならない。

1 最初の「ヌーン」は神秘文字である。バカラ章の冒頭でも解説した通り、この種の文字は「アル＝フルーフ・アル＝ムカッタア」と呼ばれている。この神秘文字が真に意味するところは不明である。しかし注釈者の中には、ここでの「ヌーン」の一字は、インク壺を意味するものであるとの解釈を付与する者もいる。また九六章四節にも、この節と同じく筆についての言及がある。これは人間に対する「読む」ことの奨励であり、また実際に読む者たちへの注意喚起であるとも解せる。

2 偶像を奉ずる者たちの意識に向けて、預言者性とは預言者に授けられた祝福であり、彼は偶像を奉ずる者が非難するような狂人ではないということを気づかせるものである。この節は偶像を奉ずる者たちに対する、嘘を述べているのは彼らの方であるという回答である。

3 ここでの「留保」とは、例えば「インシャーアッラー（神がそうと望むなら）」など。

4 何を収穫するにも、貧しい人々を参加させ、収穫物の中から分け与えるという習慣があった。

5 ある解説者によると、「脛がさらけ出される」とは、真理が公然と明るみに暴露されることを意味する。

# 第六九章　アル＝ハーッカ　避けがたい現実

マッカ啓示

冒頭の三節に現れる、復活を暗示する語からその名がつけられた章である。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 避けがたい現実。

2 避けがたい現実とは何か。

3 避けがたい現実とは何であるかを、あなたがたに分からせるのは何か。[1]

4 サムードとアード［の民］は、衝撃の惨禍［の訪れ］を嘘であるとした。

5 そのためにサムードは強烈な雷撃に滅ぼされ、

6 またアードは、猛烈な暴風に滅ぼされた。

7 かの御方は、それ［暴風］を七夜と八日にわたり、立て続けに彼らに科した。あなたにも、その中にいた民が、枯れて幹がうつろになったなつめやしのように倒れるのを見ることができただろう。

8 しかしあなたには、何か彼らが残したものを見ることができるだろうか。





9 それからフィルアウンも、彼以前の者たちも、転覆させられた数々の町も罪を犯していた。

10 また彼らは、その主の使徒に逆らった。それゆえかの御方は、抗しがたい捕え方で彼らを捕えた。

11 本当に、水が氾濫したとき、われらがあなたがた［の祖先］を舟で運んだのは、[2]

12 それをあなたがたへの戒めとし、また自覚ある［者の］耳に、それを自覚させるため。

13 喇叭がひとたび、吹き鳴らされるとき、

14 大地と山々は持ち上げられ、一撃で打ち砕かれ、

15 その日、起こるべくしてそれが起こる。

16 その日、天は割れておぼつかなくなる。

17 その縁という縁に、天使たちが控えている。その日、八名の者があなたの主の玉座を高く捧げ持つ。

18 その日、あなたがたはことごとく露わにされる。押し隠してきたものも、何ひとつとして押し隠しとおすことはできない。

19 それから、その右手に自分の記録を与えられた者は言う。「さあ、私の記録を読んでください。

20 私は、いつか必ず自分の清算に立ち会うだろうと確信していました」。

21 その者は、喜びの生に入るだろう、

22 いと高い楽園の中で、

23 諸々の果実の房は手近にあり、

24 「満ち足りて食べ、飲みなさい。過ぎ去った日々に、あなたがたがあらかじめ行ってきたことのために」。

25 しかし、その左手に自分の記録を与えられた者は言う。「私の記録など、与えられずに済んだなら。

26 自分の清算とは何であるか、何も知らなかった。

27 ［死をもって］すべてが終わったならよかったのに。
28 私の財は何の役にも立たず、
29 権威も私から去ってしまった」。
30 「その者を捕えてつなぎなさい。
31 そののち、業火で焼きなさい。
32 そののち、長さ七十腕尺の鎖で巻き締めなさい。
33 その者は偉大な御方であるアッラーを信じず、
34 貧しい者を養うよう勧めもしなかった。[3]
35 それゆえ、この日、ここに「支えてくれる」親しい友はひとりもいない。
36 汚れた膿汁（うみしる）の他に、食べるものもない。
37 あるのは、罪深い者の他には誰も食べないものだけ」。
38 いいや、われは誓う。あなたがたに見ることのできるものにかけて、
39 またあなたがたに、見ることのできないものにかけて。
40 本当に、この「クルアーンの」御言葉は貴い使徒からのもの。[4]
41 これは詩人の言葉ではない。あなたがたのうち、信じる者はわずかであるが。
42 これは占者（せんしゃ）の言葉でもない。あなたがたのうち、憶える者はわずかであるが。
43 それは諸世界の主からの啓示。
44 もし彼「ムハンマド」が、われらについて何かしら「嘘の」言葉をねつ造したなら、
45 われらは、必ず彼の右手を捕え、



46 その頸動脈（けいどうみゃく）を断ち切るだろう。
47 そしてあなたがたのうち、彼を守ることのできる者は誰もいない。
48 本当に、これは畏れる者への戒（いまし）め。
49 われらは、あなたがたの中に、これを嘘よばわりする者がいるのを知っている。
50 本当にこれは、「真理を」拒む者にとり悲嘆であるに違いない。
51 しかし本当にこれは、絶対の真理ではないか。
52 それゆえあなたの主たる偉大な御方の御名を讃美しなさい。

1 審判、あるいは清算がなされる日は途方もなくすさまじい日となるだろう。その日の重要性が強調されている。
2 ヌーフを襲った大洪水を示している。「われらがあなたがた人類の祖先を運んだのはわれら神である」ということを意味している。「われらがあなたがた「の祖先」を舟で運んだ」とは、「あなたがた人類の祖先をわれらが運んだ」ことを意味している。「われらがそうすることを惜しんだなら、あなたがた人類はこの世に存在すらしていないのである」。
3 信仰を拒否することの罪についての言及の直後に、貧者に食物を分け与え、養うよう奨励しないことが重大な罪として挙げられているのは注目すべき重要な点である。
4 そしてその言葉の主とは、いと高き神である。預言者ムハンマドはそれを天使ジブリールから受け取り、伝えた者である。

# 第七〇章　アル＝マアーリジュ　天に至る梯子

マッカ啓示

上昇してゆくための段階を意味するマアーリジュという語からその名がつけられた章である。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 問う者が問う、起こるべき懲罰について、
2 ［真理を］拒んだ者への、誰にも防げないそれについて。[1]
3 ［それは］アッラー、［天へ至る］梯子（はしご）の所有者からのもの。
4 天使たちも霊も、一日でかの御方へと昇る。その［一日の］長さは五万年にあたる。[2]
5 それゆえあなたは、美しい忍耐をもってよく耐えていなさい。
6 彼らは、それ［審判の日］を遠い先のことと見る。
7 しかしわれらは、それが間近であるのを見る。
8 その日、空は溶けた鉱物のようになり、
9 山々は羊毛のひとひらのようになる。





10 友がその友について尋ねることもない、
11 互いに相まみえたとしても。その日、罪を犯した者は、何か［を差し出すこと］で懲罰をあがなえたならとさえ願うだろう、自分の子どもを、
12 また自分の配偶を、きょうだいを、
13 自分をかくまってくれた、もっとも近しい親族を、
14 それで自分が救われるなら、地上にあるものことごとくを［差し出すだろう］。
15 断じて、それはならない。これこそは［地獄の］猛火。
16 頭皮を剥（は）ぎ取るそれが、[3]
17 ［真理に］背中を向けて去った者を呼び招く、
18 ［富を］集め、しまい込んでいた者を。
19 本当に、人間は気ぜわしく創造されている。
20 悪いことにあうと不安がり、
21 良いことにあうと吝嗇（りんしょく）になる、
22 礼拝をまもる者は別として。
23 いつでも礼拝をまもって行う者、
24 また自分の財の中に、そうと知られるとおりの権利を認める者、
25 乞い求める者、奪われた者のために。
26 また裁きの日を真実とする者、
27 また自分の主の懲罰を、畏れかしこむ者。

28 主の懲罰に、安心していていい者などいない。
29 また自分の貞節をよく守る者。
30 自分の配偶や、正当に召しかかえる者は別で、責めを負わされることはない。
31 しかしそれを越えて求めるなら、それは法外の者。
32 信頼に応じ、［羊飼いが羊を守るように］約束を守る者、
33 証言において堅実に立つ者、
34 自分の礼拝を守護する者。[4]
35 これらの者は、貴(とうと)ばれて楽園の中に。
36 それで、［真理を］拒んだ者たちがあなた［ムハンマド］の方へ駆け寄ってくるのは何のためか、
37 右にも、左にも、それぞれ群れをなして。
38 彼らの誰もが、至福の楽園に入れるとでもいうのか。[5]
39 断じて、それはならない。本当にわれらは、彼らが知っているものから彼らを創造した。
40 いや、われは誓う。［太陽が］昇るところと沈むところの主にかけて、われらにはできる、
41 彼らを、彼らよりも良い［他の］者と代えることも。われらが出し抜かれることはない。
42 それゆえ彼らについては、約束されているその日を迎えるまで放っておき、無駄話や遊びごとに興じさせておきなさい。
43 その日、彼らは墓から大慌てで出てくる。目当てのものめがけて競い合うかのよう、[6]
44 目を伏せ、屈辱に打ちひしがれて。これこそ、彼らに約束されていたその日。





1 この節で言及されている「［真理を］拒んだ者」とは、ナドル・イブン・ハーリスとアブー・ジャフルのことである。
2 「日」の長さについては、三二章五節も参照。
3 「頭皮」、もしくは頭蓋骨。この語はまた、手、足、あるいは内臓といった身体の一部を指すものとして解釈することもできる。
4 善良な人々の美徳が列挙されている。二二、二三節においても、また三四節においても、礼拝に繰り返し言及することでその重要性を強調している。
5 多神を奉ずる者たちは、信仰者に混じって預言者の話を聞いていた。最後の預言者のメッセージに従う者、すなわちイスラームを信じる者たちが楽園に入るというなら、自分たちはそれよりも先に入っているだろうと心の中で確信していた。
6 彼らが争って駆けてゆく先にある「目当て」とは、おそらく彼らの崇めている偶像であり、それが助けてくれるだろうと期待してのことである。

# 第七一章　ヌーフ

マッカ啓示

預言者ヌーフの物語と、彼の活躍が説き明かされる章である。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 われらは、ヌーフをその民に遣わした。「あなたの民に警告しなさい、彼らに痛烈な懲罰が科される前に」。

2 彼は言った。「私の民よ。私は、［警告を］あなたがたに明らかにするひとりの警告者。[1]

3 アッラーに仕えなさい。かの御方を畏れなさい。そして私に従うといい。

4 かの御方はあなたがたの諸々の罪を赦し、定められた時期まであなたがたを猶予するだろう。本当に、アッラーの［定めた］その時期が到来するときには猶予はされない。もしあなたがたが、知ってさえいたなら」。[2]

5 彼［ヌーフ］は言った。「主よ。私は、夜も昼も私の民を［真理へ］呼び招きました。

6 しかし私の呼び招きに、彼らはますます逃げ出すばかりです。

7 私が彼らを、あなたの赦しがあるかもしれない、と、呼び招くたびに、彼らは指を耳に差し入れ、外衣にくるまり、強情になって、ますます高慢になるばかりです。





8 それで私は、声をあげて彼らを呼び招きました。

9 それから私は、表立ったところでも訴え、また秘めたところでも語りました。

10 私は言いました。『あなたの主に赦しを願いなさい。本当に、かの御方はもっともよく赦す。

11 あなたがたの上に、空からゆたかに雨を降らせ、

12 あなたがたの財や子どもを増やし、またあなたがたのために、庭園や河川をしつらえる。

13 ［それなのに］あなたがたはどうしたというのか、アッラーの威光を認めないとは。

14 この御方があなたがたを、様々な段階を経て創造したのは確かなこと。[3]

15 見なかったのか、どのようにしてアッラーが、層を重ねて七つの天を創造し、

16 またその中に月を置いて光とし、また太陽を置いて燃える燈としたかを。

17 アッラーはあなたがたを、植物のように大地から育んだ。

18 そののちあなたがたを大地に戻し、それから再び引き出すだろう。

19 またアッラーは、あなたがたのために大地を［敷物のように］広げた、

20 あなたがたが、広々とした道を往来できるように』、と」。

21 ヌーフは言った。「主よ。彼らは私に逆らい、その財や子どもがただ損失だけを増すばかりの者に従っています。

22 彼らは、大それた謀りごとを企んでいます。

23 彼らは言っています。『あなたがたの神々を捨てるな。ワッドも、スワーウも、ヤグースも、ヤウークも、ナスルも捨てるな』、と。[4]

24 彼らはすでに多くの者を迷わせました。ですから［主よ、］不正をなす者については、その迷いの他には

何も増やさないでください」。

25 彼らは諸々の罪のために溺れ、それから火炎に入れられた。彼らには、アッラーの他にどのような助けも見つけることはできない。

26 またヌーフは言った。「主よ。［真理を］拒む者を、ただのひとりも地上に住まう者として残さないでください。

27 もしあなたが彼らを残せば、彼らはあなたのしもべを迷わせるでしょう。そして放埒な、［真理を］拒む者ばかりが生まれるでしょう。

28 主よ。私と、私の両親を赦してください。また誰であれ信じる者として私の家に入る者、信仰者の男女のことも。そして不正をなす者たちには、ただ破滅だけを増やしてください」。5





1 ヌーフの警告は公然となされた。それは「ムビーン」、すなわち明白であり曖昧な点は何ひとつなかった。事前の警告があったということは、ヌーフの民が悔い改めさえすれば慈悲が授けられただろうことを意味している。

2 この節での「諸々の罪」には、他者に対する権利の侵害は含まれない。

3 「様々な段階」とは、最初に基本的な元素があり、ついで化合物が生成され、組み合わさって滋養となるものが生じ、互いに作用しながら集まる四段階を踏まえて、やがて精子から凝血［を経て胚］となり、次に骨格が現れ、最終的には完全な形態の人間になってゆく過程を意味している。

4 「ワッドも、スワーウも、ヤグースも、ヤウークも、ナスルも」。これらは、ヌーフの民が最も重んじていた偶像の一群の名である。

5 ヌーフが用いた「家」という語は、彼の箱舟と捉えても、あるいは彼の礼拝所と捉えても間違いではないだろう。ほとんどの解釈者はヌーフの実際の家、もしくは礼拝所として解釈している。

# 第七二章　アル＝ジン

マッカ啓示

本章は第一節に現れる語にちなんでこう名づけられている。その意味するところは「精霊」であり、クルアーンは人類と同様に、ジンもその導きの対象としている。預言者のジンとの邂逅（かいこう）は、ターイフ遠征から帰還する旅の途中で起きた出来事であった。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「私に啓示があった。ジンの群れが［クルアーンを］聞いてこう言っている。『本当に、私たちは驚くべきクルアーンを聞いた。

2 これは正しい道へと導く。私たちはこれを信じよう。何ものかを私たちの主と同列に連ねることは決してしない。[1]

3 私たちのいと高き栄光の主は、配偶も、子ももうけない。

4 つまり私たちの中にいる愚かな者が、アッラーについて途方も無いことを言っていた、ということ。

5 私たちは、人間でもジンでも、アッラーについて嘘をつくことは決してないと思っていた。





6 しかし人間のうちある者は、ジンのうちある者の庇護を求めさえする。そのようなことは、かえって彼らの愚行を増やすだけに過ぎない。

7 そしてあなたがたが思っていたように、彼らも、アッラーが何ものかをよみがえらせることはないと思っていた。

8 私たちが天に触れてみると、そこは厳重な護衛たちと、燃え上がる流星で満ちていた。

9 私たちはそこに［隠れた］座をとっては、［盗み聞きしようと］耳をそばだてていたものだった。しかし聞き耳をたてる者がいても、今となっては、燃え上がる流星が待ち構えているのを目にするだけ。

10 地上の者たちにとり悪いことが意図されているのか、あるいは主が彼らにとり正しい道を意図しているのか、私たちにはわからない。

11 私たちの中には、行いの正しい者もあれば、そうではない者もあり、様々な異なる道筋にある。

12 しかし私たちは、地上においてアッラーを出し抜くことも、また逃げおおせることもできないことがようやくわかった。

13 私たちは、導きを聞いてすぐにそれを信じた。そして主を信じる者なら誰であれ、失うことも、荷を負うことも恐れない。

14 私たちの中には、［主に］服従する者もあれば、踏み外す者もある。誰であれ［主に］服従する者は、正しい道を探求する者。

15 しかし踏み外す者は、地獄の薪（まき）となるだろう』」、と」。

16 もし彼らが、その道筋にまっすぐであり続けるなら、われらは彼らに、必ずゆたかに水を飲ませ、

17 それにより彼らを試みるだろう。しかし主を想い起こすことから背き去る者は、厳しい懲罰へと追いた

てるだろう。

18 本当に礼拝堂とはアッラーのもの。それゆえアッラーと共に他の何ものにも祈ってはならない。[2]

19 アッラーのしもべ［ムハンマド］が立って祈ると、彼ら［ジン］が大勢で取り巻き、ほとんど押しつぶさんばかりだった。[3]

20 ［ムハンマドよ、］言いなさい。「私は、私の主のみに祈る。そして何ものもこの御方と同列に連ねない」。

21 言いなさい。「私はあなたがたを害したり、正したりする力を持たない」。

22 言いなさい。「［私が主に背けば、］アッラーに対し、私を守りきることは誰にもできない。またこの御方の他に、私には避難所を見つけることもできない。

23 ［私は］ただアッラーからの［真理の］預言をのべ伝えるだけ。アッラーとその使徒に逆らう者には地獄の業火があり、永遠にその中に住まうだろう」。

24 やがて彼らも、約束されていたものを［警告されていた通りに］目の当たりにしたとき、どちらが助け手として弱いか、またどちらが数において劣っているかを知るだろう。

25 言いなさい。「あなたがたに約束されているものが近いのか、あるいは私の主が長い期間を設けたのか、私にはわからない」。

26 かの御方は目には見えないものを知り、その秘密を誰にも明かさない、

27 かの御方に認められた使徒の他には。そしてかの御方はそれぞれ［の使徒］の前にも後ろにも守備をつけるが、

28 それは彼ら［使徒たち］が確かに主の預言を伝えたかどうかを知るため。かの御方は彼らを取り囲み、またありとあらゆることを数え上げている。





1 ターイフからの帰途で、預言者は朝の礼拝を先導していた。その時、その場にジンも居合わせていた。預言者ムハンマドには彼らの姿は見えなかったが、礼拝の後で啓示があり、ことの次第が明らかにされた。

2 神以外の何ものにも崇拝を捧げることのないよう、ムスリムに対して警告がなされている。マスジド（礼拝堂）については、およそ次の通り。（1）崇拝や礼拝を目的として建てられた場所のこと。（2）崇拝や礼拝の行為自体はマスジドで行わなければならないということはない。いわば地上すべてが崇拝のための場所である。（3）すべてのマスジドにはキブラがあり、そのキブラとはマスジド・アル＝ハラームの方角である。（4）身体を預けることのできる場所は崇拝、礼拝を行える場所である。

3 神の預言者が立ち上がったとき、ジンの種族たちは、クルアーンが唱えられるのを聞こうとして彼に群がった。一部には、預言者ムハンマドの宗教を消し去ろうとして（人間かジンかを問わず）偶像を奉ずる者たちが争って彼に群がった、とする解釈者もある。

# 第七三章　アル＝ムッザンミル　包まる者

マッカ啓示

本章は第一節にある「包まる者」を意味する「ムッザンミル」という語からその名がつけられている。預言者は、最初に啓示を授かったとき、妻ハディージャの許へ帰ると、彼を覆い隠してくれるようにと頼んだ。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 ［衣に］包まる者よ、[1]
2 ［祈りのために］夜に立て、わずかの時を除いて。
3 ［夜の］半分か、あるいはそれよりも短く、
4 あるいは、それよりも長く。そして整った調子でクルアーンを朗読しなさい。
5 われらはあなたに、重みのある御言葉を投げかけよう。
6 本当に、夜の始まりは［心と舌を］より強め、御言葉［を明確に朗読する］にふさわしい。
7 昼のあなたは、長きにわたりやるべきことがある。
8 それゆえあなたの主の御名を想い起こし、全身全霊を傾けてこの御方に仕えなさい。





9 東と西の主たるこの御方の他に、いかなる神もない。保護者として選ぶべき御方。
10 彼ら［真理を拒む者］の言うことによく耐えていなさい。尊厳をもって、彼らから離れなさい。
11 嘘よばわりする者については、われに委ねなさい。［現世の］贅沢を享受する者たちを、しばらく猶予しておきなさい。
12 われらの手には、［彼らのための］足枷（あしかせ）も、獄火もある。
13 喉につかえる食べものも、痛烈な懲罰もある。[2]
14 ［これが彼らの分け前となる］その日、大地と山々は揺れ、山々は砕け、砂となって流れる。
15 われらはあなたがたに、あなたがたの証人となるようひとりの使徒を遣わした。かつてわれらが、フィルアウンにもひとりの使徒を遣わしたように。
16 しかしフィルアウンはその使徒に逆らった。そこでわれらは、恐るべき捕え方をもって彼を捕えた。
17 それで、もし［真理を］拒むなら、あなたがたは［恐怖のあまり］子どもさえ白髪になるその日、どのようにして自分を守るのか。
18 ［その日、］天は割れるだろう。かの御方の約束はまさに果たされる。
19 本当に、これはひとつの戒め（いましめ）。それゆえ望む者には、主へと至る道をとらせなさい。
20 あなたの主は、あなた［ムハンマド］が夜のほとんど三分の二か、または半分、または三分の一、［祈りのために］立っているのを知っている。あなたと共にいる、一群の者たちについてもまた。アッラーは、夜と昼と［の長さ］を定める。あなたがたにはそれを計ることができないのを知り、かの御方はあなたがたを憐（あわ）れむ。それゆえクルアーンの［あなたがたそれぞれにとり］やさしいところを朗読しなさい。かの御方は、あなたがたの中に病気の者がいるのを知っている。他のある者は、アッラーの御恵みを探し求

めて大地を旅するだろう。また他のある者は、アッラーの道のために戦うだろう。それゆえ、「あなたがたそれぞれにとり」やさしいところを朗読しなさい。礼拝のつとめを守り、喜捨をし、アッラーに善良な貸付をしなさい。何であれ、あなたがたが自分自身のためにあらかじめ行った良いことを、あなたがたはアッラーの御許に見出すだろう。それはもっとも良く、もっとも大いなる報酬。アッラーの赦しを願いなさい。本当にアッラーはもっともよく赦し、もっとも慈悲深い。[3]

1　最初の啓示が預言者ムハンマドに明かされたとき、大天使ジブリールは天使の姿のままで彼の前に現れた。これを目にした預言者は恐怖のあまり全身を震わせ、妻ハディージャの許へ引き返し、彼を覆うよう頼んだ。この出来事が起こった後で、再び現れた天使ジブリールは、彼に次のように語りかけた。「汝（ムハンマド）、衣に包まる者よ」。

2　「喉につかえる食べもの」。地獄に生える、毒の棘（とげ）を持つザックームの木の実であろうと思われる。

3　預言者の教友たちの中には、すっかり消耗して足が腫れ上がるほどになるまで、夜のほぼ大半を礼拝して過ごした者たちもいた。夜を徹しての礼拝は預言者の義務であったが、教友たちには義務とはされていなかったにもかかわらずである。そのことを踏まえて、誰もが、自分の身体の状態に応じて夜間の礼拝を行うことが望ましい。何であれ、それが善であるなら、現世に生きている間に、死を迎える前に、自らのために行っておくべきである。たとえ最善を尽くして諸々（もろもろ）の善行を実践したとしても、その死後に後継となる者たちが、それを実践し受け継いでいくとは限らないのである。

# 第七四章　アル＝ムッダッスィル　身を潜める者

マッカ啓示

第一節にある言葉にちなんで名づけられた章である。預言者がまたしても突然に天使を見たとき、彼は自分の衣で身を包んだ。本章を通して預言者は、逃げ隠れせずにイスラームの宣教を開始するよう命じられた。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 ［衣に］身を潜める者よ、
2 立ち上がり、警告しなさい。
3 あなたの主を讃えなさい。
4 あなたの衣を清浄にしなさい。
5 汚れを避けなさい。
6 より多く［の見返り］を期待して与えてはならない。
7 あなたの主のためによく耐えていなさい。[1]
8 喇叭が吹き鳴らされるとき、
9 その日こそ、苦難の日。
10 ［真理を］拒む者には、何の安楽もない。
11 われが創造した者については、ただわれにだけ任せなさい。
12 われがゆたかに財をもたらし、
13 その身の回りに子どもたちをおいて、
14 ［万事を］とどこおりなく順調にしてやった。
15 それでも、われにさらなるものを欲しがった。
16 断じて、それはならない。その者はわれらのしるしに、頑迷な態度をとり続けた。
17 われは、ひどく骨の折れる苦役に服させてやろう。
18 その者は思案し、策を練った。
19 どのように策を練ろうと、破滅する。
20 そうとも。どのように案を練ろうと、破滅する。
21 そののち、［再び］目を向け、
22 眉をひそめ、顔をしかめ、
23 背中を向け、高慢にふるまい、
24 こう言った。「これは［昔からよくある］魔術のまねごとに過ぎない。
25 これは、ただの人間の言葉に過ぎない」。[2]
26 遠からず、われがサカルで焼こう。
27 サカルとは何であるかを、あなたがたに分からせるのは何か。

28 それは何ひとつ残さず、誰ひとり逃さず、[3]
29 生身を焼き焦がすもの。
30 十九［名の護衛の天使たち］が、その上にいる。
31 われらが火炎の護衛にするのは、ただ天使だけ。またその数をこうしたのは、ただ［真理を］拒む者を試みるため。［これにより］啓典を与えられている者に確信させ、また信じる者にその信仰を深めさせるため。啓典を与えられている者や信仰者が、もはや何の疑いも抱くことのないようにするため。心の中にやまいのある者たちや、［真理を］拒む者に、「このたとえ話で、アッラーは何を伝えようとしているのか」と言わせるため。このようにアッラーは、誰であれ御心のままに迷わせ、また誰であれ御心のままに導く。あなたの主の軍勢のことを知るのも、ただこの御方だけ。これは、人間への戒めに他ならない。
32 いいや、月にかけて、
33 去ってゆく夜にかけて、
34 明けはじめる朝にかけて。
35 本当にそれは、偉大なるもののひとつ。
36 それは人間への警告、
37 あなたがたのうち、前に進もうとする者であれ、あるいは後に残ろうとする者であれ。
38 各々は、それぞれが得てきたことの虜囚、
39 右側の仲間たちを除いて。
40 ［彼らは］楽園の中で、互いに尋ね合うだろう。
41 罪を犯した者について［言うだろう］、





42 「何があなたがたを、サカルに連れ込んだのか」。
43 彼らは言うだろう。「私たちは礼拝をしなかった。
44 貧しい者を養うこともしなかった。
45 無駄話に興じる者と共に無駄話に興じ、
46 裁きの日のことを、嘘よばわりし続けた。
47 そうして、ついに死が私たちに到来した」。
48 とりなす者のとりなしも、彼らの役には立たないだろう。
49 彼らは、どうして戒めから背き去ったのか、
50 ろばが恐れおののいて、
51 獅子から逃げていくかのように。
52 いいや。むしろ彼らは、それぞれ［自分だけの］書巻が［自分だけの目の前に］開かれることを欲する。
53 断じて、そうではない。いいや、彼らは来世を恐れていない。
54 断じて、そうではない。本当に、これはひとつの戒め。
55 それゆえ、誰であれ望む者はそれを憶えておきなさい。
56 しかし、アッラーの御心にかなう者の他は、憶えておこうとはしないだろう。畏れるにもっともふさわしい御方、赦しを願うにもっともふさわしい御方。

1 「より多く［の見返り］を期待して与えてはならない」とは、自分の施しを大層なものと思って恩を着せたりしてはならないということ。

2 クライシュ族の名士ワリード・イブン・ムギーラについての言及である。

3 「誰ひとり逃さず」。自らの死期を悟り、あわてて逃げ出そうとする者を逃さない。

# 第七五章　アル＝キヤーマ　復活

マッカ啓示

最初の節に現れる「キヤーマ」、すなわち「復活」の語にちなんでこの名がつけられている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 われは誓おう、復活の日にかけて。
2 われは誓おう、自らを咎（とが）める魂にかけて。
3 人間は、われらがその骨を再び集めたりはしないと思っているのか。
4 いいや、本当にわれらは、その指先を再びそろえることもできる。
5 いいや、しかし人間は、その先にあるものを否定し「、罪を犯し続け」たがる。
6 そして尋ねる。「復活の日とは、いつになるのか」。
7 やがて目がくらむとき、
8 月はかげり、
9 太陽と月が一緒にされる。





10 その日になって、人間は言う。「どこに逃げればよいのか」。
11 断じて、それはならない。避難するところなどない。
12 その日、居場所はあなたの主にある。
13 その日、人間は自分がすでに行ったこと、後に残してきたことを告げ報（しら）せられる。
14 いいや、むしろ人間は、自分自身の目撃者となる、
15 たとえいろいろな言い訳をしようとも。
16 「早く啓示を憶えようとして、」あなたの舌を急いで動かしてはならない。[1]
17 それを集めるのも朗読させるのもわれらのすること。
18 われらがそれを朗読するとき、朗読されたとおり「の読み方」に従いなさい。
19 そののち、それ「の意味」を明らかにするのもわれらのすること。
20 断じて、しかしあなたがた「人間」は刹那（せつな）「の現世」を愛する。
21 そして来世のことは放っておく。
22 その日、「ある者の」顔は輝き、
23 自分の主を仰ぎ見る。
24 その日、「別の者の」顔は曇り、
25 背骨が折れるほどの惨事のあることを思うだろう。
26 いいや、「人間の魂が」喉元までせり上がるとき、
27 「治してやれる者はいるか」と言われるとき、
28 人は、これが別離かと思う。

29 「煩悶のため」脚と脚とがもつれ合い、[2]
30 その日、あなたの主へと駆りたてられる。
31 真実を受け入れずにいた。礼拝もしなかった。
32 むしろ嘘であるとし、背を向けた。
33 自分の身内の許では、いばり散らしていた。
34 災禍あれ、あなたに災禍あれ。
35 災禍あれ、あなたに災禍あれ。
36 人間は、「何の目的もなく」そのままに放っておかれると思っているのか。
37 元は放たれた精のひとしずくではなかったのか。
38 そののち血の凝ったものとなり、それから形あるものに創造され、
39 そののち一対の雌雄にされたのではなかったのか。
40 「そのような創造者に、」死せる者に生をもたらすことができないというのか。

1 授けられた啓示を忘れることのないよう、預言者ムハンマドは舌を動かしそれを復唱しようとした。その場でただちに繰り返して最初にすべてを記憶すると、その後は何度でも繰り返し復唱することができるようになった。

2 「脚と脚とがもつれ合い」。現世から離脱することの苦しみと、自らの主の御許である「来世」へ向かうことの苦しみが重なり合い、足が思うように動かせずにいる。

# 第七六章　アル＝インサーン　人間

マッカ啓示

第一節に現れる語にちなんでこの名がつけられた章である。「アッ＝ダフル（時）」とも呼ばれる。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 人間には、人間とも呼べない時期があったではないか。[1]
2 われらは人間を、混ざった精のひとしずくから創造した。そして試みようと、見るための目と聞くための耳をもたせた。
3 われらは道へと導いた、感謝する者となるか、恩知らずの者となるか［選ばせるために］。
4 ［真理を］拒む者のために、われらは鎖と枷(かせ)と烈火を用意した。
5 正しい者は、カーフールで調(ととの)えられた杯(さかずき)を飲むだろう。[2]
6 アッラーのしもべたちが飲むようにと、とめどなく湧き出させてある泉。
7 彼らは［自分の］誓いを果たし、邪悪が広まるその日を恐れる。[3]
8 彼らは［自らの所有するものを］愛するにもかかわらず、貧しい者や孤児、捕虜を養う［ことに費やす］。





9 「私たちがあなたがたを養うのは、ただアッラーの御顔のため。あなたがたからの報酬や感謝を欲しているのではない。[4]
10 本当に私たちは、主の苦渋に満ちた怒りの日を恐れる」。
11 それでアッラーは、その日の悪から彼らを守り、輝きと喜びをもたらし、
12 彼らがよく耐えたことに対し、楽園と絹［の衣装］をもって報いる。
13 その中で長椅子にくつろぎ、彼らは灼熱の太陽も、凍(い)てつく寒さも見ずに済む。
14 そのすぐ上には木陰が広がり、果実が房となって垂れ下がり、
15 彼らのあいだを、銀の瓶(びん)と水晶の杯(さかずき)がめぐる。
16 それは水晶のように透きとおる銀で、彼らはそれを好みの量で満たす。
17 それから彼らは、ザンジャビールで調(ととの)えられた杯(さかずき)を飲むよう供(きょう)される。[5]
18 それは、その中にあるサルサビールと呼ばれる泉から。
19 彼らのあいだを、永遠の若者がめぐる。彼らを見るとき、あなたは散らされた真珠かと思うだろう。
20 その中を見わたすとき、あなたは至福と偉大な王国を見るだろう。
21 彼ら［王国の住人］には、上等の緑の絹と錦の着衣がある。銀の腕輪に身を飾られ、その主から純粋な飲みものを供(きょう)される。
22 「本当に、これはあなたがたへの報酬。あなたがたの尽力(じんりょく)は感謝をもって認められた」。
23 まさにわれらが、あなたにクルアーンを、段階を踏まえて［徐々に］下した。
24 それゆえ、あなたの主の判断によく耐えなさい。そして彼らのうち罪深い者や、［真理を］拒む者に従ってはならない。

25 朝も夕も、あなたの主の御名を想い起こしなさい。[6]

26 夜の一刻に、かの御方にひれ伏しなさい。長い夜に、かの御方を讃美しなさい。

27 本当に、彼らは刹那（せつな）を愛し、もっとも重大なその日を［考えもせず］背後に放り捨てる。

28 彼らを創造したのはわれらであり、その［体躯（たいく）の］継ぎ目を強めたのもわれらである。望むときには彼らを、彼らと同じようなものと［完全に］取り替えることもできる。[7]

29 本当に、これはひとつの戒め（いまし）め。それゆえ望む者には、主へと至る道をとらせなさい。

30 しかしアッラーが望まない限り、あなたがたには望むこともできない。本当にアッラーは、すべてを知りもっとも賢明である。

31 かの御方は、御心にかなう者をその慈愛の中に受け入れる。そして不正をなす者には、痛烈な懲罰を用意している。

1 単一の精子から妊娠期間を経て誕生するまでの人間の発達を指しているとも、あるいは原初における無からの創造を指しているとも解釈できる。

2 竜脳（りゅうのう）のこと。

3 神に献身する者とは、審判の日のために自ら備える人のことであり、そのために自らの立てた誓いを守り、果たしている。神の喜びを得るために、次の節にある通り、彼らにとって神への献身とは、世の人々のために尽くすことである。

4 「ただアッラーの御顔のため」とは、神の満足のため、あるいは神の承認を得るため、といった意味。「御顔」については二章一一五節の注釈を参照。





5 しょうがのこと。

6 ここで言及されているのは朝と昼、そして午後の礼拝である。次の二六節には、夕方と夜の礼拝についての言及がある。また深夜の礼拝は預言者にのみ義務とされている。

7 神は全能であり、そうと望めば人間を再び創造することも、あるいは別の創造と取り替えることも可能である。

# 第七七章　アル＝ムルサラート　遺わされるもの

マッカ啓示

第一節に現れるアル＝ムルサラートという語からその名がつけられた章である。第一節、二節そして三節は風について、また四節と五節は天使たちについての言及であると解釈されている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 次から次へと送られる風にかけて。
2 猛々しい嵐にかけて。
3 ［雨雲を］一面にまき散らす風にかけて。
4 規範を分別するものにかけて。
5 戒めを運ぶものにかけて、
6 根拠として、あるいは警告として。
7 あなたがたに約束されたことが起こる。
8 星々が消えるとき、





9 空が裂け割れるとき、
10 山々が吹き飛ばされるとき、
11 そして使徒たちが、定めの時に集められるとき。
12 それはいつの日まで延ばされるのか。
13 それは決着の日まで。
14 決着の日とは何であるかを、あなたがたに分からせるのは何か。
15 その日、嘘であるとしてきた者に災禍あれ。
16 われらは、前の世の者たちを滅ぼさなかったか。
17 そののち、後の世の者たちに継がせた。
18 われらは、罪を犯した者たちをこのように扱う。
19 その日、嘘であるとしてきた者に災禍あれ。
20 われらはあなたがたを、卑しい水から創造しなかったか。
21 それからわれらは、それを安全なところに宿させた、[1]
22 そうと知られるとおりの時が満ちるまで。
23 われらはそう定めた。何とすばらしい定めか。
24 その日、嘘であるとしてきた者に災禍あれ。
25 われらは、大地をうつわとしなかったか、
26 生けるものと、死せるもののための。
27 われらは、そこに高い不動の山々をそびえ立たせ、あなたがたに甘い水を飲ませた。

28 その日、嘘であるとしてきた者に災禍あれ。
29 「進め、かつてあなたたちが嘘よばわりしていたところへ。
30 進め、「立ちのぼる煙が」高い三本の枝のように陰となるところへ」。
31 しかしそれは日陰ではなく、猛火に対しては何の役にも立たない。
32 まるで火の粉を吹く砦のよう、
33 黄色いらくだの群れのよう。[2]
34 その日、嘘であるとしてきた者に災禍あれ。
35 それは、彼らが言葉を失う日。
36 申し開きをすることさえ許されないだろう。
37 その日、嘘であるとしてきた者に災禍あれ。
38 これが決着の日。われらはあなたがたも大昔の者たちも、ことごとく集めるだろう。
39 あなたがたに策があるなら、われに対して策をめぐらせるといい。
40 その日、嘘であるとしてきた者に災禍あれ。
41 畏れる者たちは、木陰と泉の中にいる。
42 彼らが望むとおりの果実がある。
43 「満ち足りて食べ、飲みなさい、あなたがたが行ってきたことのために」。
44 このように、われらは行いの善良な者に報いる。
45 その日、嘘であるとしてきた者に災禍あれ。
46 つかの間、自分たちで食べ、楽しむといい。本当にあなたがたは、罪を犯す者たち。





47 その日、嘘であるとしてきた者に災禍あれ。
48 「礼拝のために」立って頭を垂れるよう告げられたとき、彼らは頭を垂れない。
49 その日、嘘であるとしてきた者に災禍あれ。
50 これ「クルアーン」を経た後になって、どのような話を信じようというのか。

1 「安全なところ」、すなわち母の子宮のこと。
2 あるいは、「黄色い切り株のよう」。

# 第七八章　アン＝ナバア　報せ

マッカ啓示

第二節に現れるナバアという語からその名がつけられており、来世について説き明かす章である。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 彼らは、互いに何を尋ね合っているのか。
2 ［それは］大いなる報せについて。
3 彼らは、意を異にしている。
4 いや、いずれ彼らは知るだろう。
5 いや、本当に、いずれ彼らは知るだろう。
6 われらは、大地を敷き広げて安息の場としなかったか、
7 また山々を、杭として立てなかったか。
8 われらは、あなたがたを［雌雄の］対に創造し、
9 睡眠をあなたがたの休息とし、





10 また夜を［眠りのための］覆いとし、
11 また昼を、生計を立てるためのものとした。
12 また、われらはあなたがたの上に頑丈な七層［の天］を築き、
13 燃える燈を置き、
14 雲からはゆたかに雨を降らせ、
15 それにより穀物や植物を育て、
16 庭園を茂らせた。
17 本当に、決着の日は定められた時。
18 喇叭が吹き鳴らされるその日、あなたがたは群れをなしてやって来る。
19 天は開かれ、数多の門となり、
20 山々は動かされ、蜃気楼となる。
21 本当に、地獄は待ち伏せの場所、
22 逸脱した者が落ち着くところ。
23 彼らは、［終わりのない］長い歳月をその中で過ごす。
24 そこでは涼しさも、飲むものも味わえない。
25 ただ煮えたぎる熱湯と、膿があるだけ。
26 何とふさわしい報いだろう。
27 彼らは、清算を予期していなかった。
28 われらのしるしを、嘘であると決めつけていた。

29 しかしわれらは、ありとあらゆるものごとを書物［の中］に数えてある。
30 それゆえ味わいなさい。われらはただ懲罰を増やすだけ。
31 畏れる者たちは成功する。
32 諸々(もろもろ)の庭園、ぶどうの園、
33 似合いの、目をみはるような伴侶、
34 あふれそうな杯(さかずき)。
35 そこでは無意味な話も、嘘いつわりも耳にすることはない。
36 これがあなたの主からの報酬、贈り物、清算。
37 諸天と、大地と、そのあいだにあるものすべての主。慈愛あまねく御方。何ものも、この御方に語りかけることはできない。
38 霊と天使たちが、列をなして立つその日、慈愛あまねく御方の思し召しによって正しいことを語る者の他は、誰も話すことができない。
39 これこそは真理の日。それゆえ望む者は、主へと至る道をとる。
40 われらは、間近な懲罰についてあなたがたに警告した。その日、人はかつて自分の両手があらかじめ送り出したていたものを見るだろう。信仰を否定してきた者は言うだろう。「いっそ塵になってしまえたなら」。

# 第七九章　アン＝ナーズィアート　引き抜くもの

マッカ啓示

復活について説き明かす章である。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 荒々しく引き抜くものにかけて、

2 やさしく引き出すものにかけて、

3 泳ぐようにすべるものにかけて、

4 競って先を急ぐものにかけて、

5 ものごとをとりしきるものにかけて。

6 その日、震えるものすべてが震え、

7 それから、その後に続くものが続く。

8 その日、心はおののいて震え、

9 目は伏せられるだろう。



10 彼らは言う。「私たちは、本当に「墓の中から」元どおりに戻されるのだろうか。

11 朽ち果てた骨になった後だというのに」。

12 彼らは言う。「そのとおりなら、これは「私たちにとり」損な成り行きになる」。

13 それ「復活」は、たった一度の叫び声で、

14 見なさい。彼らは、地上にあらわれる。

15 あなたにムーサーの話は届いているか。

16 彼の主が、聖なるトゥワーの谷に彼を呼び寄せたときのこと。

17 「あなたは、フィルアウンの許へ行け。本当に彼は逸脱の限りを尽くした。

18 そして言いなさい。『あなたは、自分を清らかにしたくはないのか。

19 それゆえ、私があなたを主へ導こう。それであなたもただ「主を」畏れるだろう』、と」。

20 彼「ムーサー」は、偉大な御しるしを彼「フィルアウン」に示した。

21 しかし彼はそれを嘘であるとし、逆らい、

22 背中を向けて立ち去った。

23 彼「フィルアウン」は「自分の民を」集めて呼びかけ、

24 言った。「私こそ、あなたがたの至高の主だ」。

25 そこでアッラーは彼を捕え、見せしめとして来世と現世の懲罰を科した。[1]

26 本当にその中には、畏怖する者へのひとつの教訓がある。

27 あなたがたを創造することの方が難しいか、それとも天の方か。かの御方はそれを築き、

28 高く掲げ、整え、

29 その夜を暗くし、そこから明かりをあらわした。
30 その後で大地を広げ、
31 そこから、水と牧草地をあらわした。
32 山々をしっかりと据えつけ、
33 あなたがたと、あなたがたの家畜のために供した。
34 しかし、大いなる圧倒的な惨事が到来するとき、
35 その日、人間は自分が努力してきたことを思い出す。
36 獄火が、見る者すべての目にさらけ出される。
37 その日、逸脱していた者、
38 現世の生を好んだ者は、
39 獄火がその住まいとなるだろう。
40 しかし主の御前に立つことを恐れ、魂が「不正な欲望に」傾くのを防いだ者は、
41 楽園がその住まいとなるだろう。
42 彼らはあなた「ムハンマド」に、かの時について「それはいつになるのか」と尋ねるだろう。
43 しかし、何をもってあなたはそれを告げられるだろう。
44 終着は、ただあなたの主にある。[2]
45 あなたは、それを畏怖する者たちへの、ひとりの警告者。
46 それを目にする日、彼らが「現世で」過ごしたのはただ一晩か、あるいはその翌朝までだけだったかと思うだろう。[3]





1 あるいは、「そこでアッラーは彼を捕え、両発言の懲罰を科した」。その場合は二八章三八節、七九章二四節のフィルアウンの発言を指している。

2 万物の帰るところは神であり、それらについての知識もまた神に属する。

3 この節を含め、章の全体を通して死後の生について論じられている。死とそれに続く墓での生、そして審判の日の墓からの再生と、生前の行いの清算によって決められる最終的かつ永遠の住みかについてである。

# 第八〇章　アバサ　眉をひそめる

マッカ啓示

預言者がクライシュ族の名士たちと話をしているところへ、盲目の人アブドゥッラー・イブン・ウンム・マクトゥームがやって来て、イスラームについて教えを求めた。預言者といえども人の子であり、話の途中で割り込まれるのは好まなかった。目の見えないこの人が、何度も繰り返しせがんだとき、預言者は眉をひそめた。この章に含まれる一群の節は、この出来事についての言及である。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 ［預言者ムハンマドは］眉をひそめ、背を向けた、
2 目の見えない者がやって来たために。
3 しかし、どうしてあなた［ムハンマド］に分かるだろうか。彼は清らかになるかもしれない。
4 あるいは想い起こすようになり、その戒めが彼の益となるかもしれない。
5 何の助けも必要としていない者には、
6 あなたは［絶えず］関心を払うのに。





7 たとえ彼が自分を清らかにしなくても、あなたのせいではないのに。
8 しかし、熱心に求めてあなたのところへやって来た者、
9 畏怖を抱いている者に、
10 あなたは関心を払わなかった。
11 断じてあってはならないこと。本当に、これはひとつの戒め。[1]
12 それゆえ、誰であれ望む者にはそれを憶えさせなさい。
13 それは貴い書巻にあるもの。
14 高められ、清浄な、
15 書記［の天使］たちの手によるもの、
16 貴く、従順な者たち。
17 災禍あれ、人間よ。何という恩知らずか。
18 かの御方は、どのようなものから人を創造したのか。
19 その御方は精の一しずくから創造し、その釣り合いを計り、
20 そののち、道を通りやすくした。
21 そののち、死なせ、埋葬する。
22 そののち、その御方の望むときによみがえらせる。
23 いや、しかし人はその御方の命じたことを［未だ完全には］果たしていない。
24 人間に、自分の食べるものについて考えさせなさい。
25 われらはゆたかに水を注ぎ、

26 そののち、［芽吹きのために］大地を割って裂き、
27 そこに育むものは、穀物、[2]
28 ぶどう、青菜、
29 オリーヴ、なつめやし、
30 濃く生い茂る庭園、
31 諸々［もろもろ］の果実、牧草。
32 あなたがたと、あなたがたの家畜のために供［きょう］されるもの。
33 しかし［終わりを告げる］一声が到来するとき、
34 その日、人間は逃げ出す。自分のきょうだいから、
35 自分の母から、自分の父から、
36 自分の伴侶から、自分の子どもたちから。
37 その日、誰もがそれぞれ自分のことだけで忙殺される。
38 その日、［ある者の］顔は輝き、
39 笑い、良い報［しら］せに喜ぶ。
40 またその日、［別の者の］顔は土埃にまみれ、
41 暗鬱［あんうつ］にかげる。
42 これらの者こそ［真理を］拒む者、放埒［ほうらつ］な者。





1 ここでいう「これ」とは、クルアーン全体を指すとも、あるいはこの章を指すとも解されている。
2 「穀物」は、あるいは「種子」とも解される。

# 第八一章　アッ＝タクウィール　巻き上げる

マッカ啓示

「太陽が巻き上げられる」という描写から、その名がつけられた章である。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 太陽が巻き上げられるとき、
2 星々が落ちて光を失うとき、
3 山々が吹き飛ばされるとき、
4 産み月の雌らくだが置き去りにされるとき、
5 野生のけものが集められるとき、
6 海が沸いてあふれるとき、
7 魂が［再び］組み合わされるとき、[1]
8 生き埋めにされた女児が尋ねられるとき、
9 何の罪あって殺されたのか、と。





10 ［人間の行為を記録した］書巻が開かれるとき、
11 天が剥（は）ぎ取られるとき、
12 獄火が燃え立たされるとき、
13 楽園が引き寄せられるとき、
14 各々は、なしてきたことのすべてを知る。
15 われは誓おう、巡り潜（ひそ）むものにかけて、
16 流れ、退（しりぞ）くものにかけて、[2]
17 深まってゆく夜にかけて、
18 息づき始める朝にかけて。
19 本当に、この［クルアーンの］御言葉は貴い使者［ジブリール］からのもの。
20 玉座の主の御許に座を占め、力を有し、
21 つき従われる、信頼に足る者。
22 あなたがたの仲間［であるムハンマド］は、とり憑（つ）かれた者ではない。
23 彼は確かに、明白な地平線に彼［ジブリール］を見た。
24 彼［ムハンマド］は、目には見えないものについて［の知識を］出し惜しみしない。
25 これ［クルアーン］は、棄てられし悪魔の言葉ではない。
26 それなのに、あなたがたはどこへ向かうのか。
27 本当に、これ［クルアーン］は諸世界への戒（いまし）めに他ならない。
28 あなたがたの中の誰であれ、まっすぐな道を歩みたいと望む者のためのもの。

29 しかしあなたがたには望むこともできない、諸世界の主たるアッラーが望まない限りは。

1　魂が、かつての肉体と再び組み合わされることを指すとする解釈もあれば、魂の性質ごとに他の魂と組み分けされることを指すとする解釈もある。

2　一五、一六節の「巡り潜（ひそ）むもの」「流れ、退（しりぞ）くもの」とは惑星を指すとする解釈もある。

# 第八二章　アル＝インフィタール　裂ける

マッカ啓示

マッカにおいて、ナーズィアート章の後に啓示された。天空に裂け目が現れる終末の日について説いた章である。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 天が裂けて砕けるとき、
2 諸々（もろもろ）の惑星が散らされるとき、
3 海が噴き上げられるとき、
4 墓が覆（くつがえ）されるとき、
5 各々は、すでになしえたこと、なさずに残したことを知る。
6 人間よ。あなたの主たる高貴な御方について、何があなたを欺（あざむ）いたのか。
7 あなたを創造し、形づくり、整える御方、
8 御心のまま、どのような姿にもあなたを作り上げる御方。
9 いや、しかしあなたがたは裁きを嘘よばわりする。





10 本当に、あなたがたの上には監視する者たちがいる。
11 貴い書記たち、
12 あなたがたのすることを何でも知っている。
13 正しい者は、至福の中にいるが、
14 放埓（ほうらつ）な者は、獄火の中にいて、
15 裁きの日、彼らはそこで焼かれ、
16 そこから抜け出すこともできない。
17 裁きの日とは何であるかを、あなたがたに分からせるのは何か。
18 いったい裁きの日とは何であるかを、あなたがたに分からせるのは何か。
19 誰も他の者のために力の及ばない日。その日、命令はアッラーのものだけ。

# 第八三章　アル＝ムタッフィフィーン　量を欺くもの

マッカ啓示

第一節に現れる語にちなんでこの名がつけられた章である。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 災禍あれ、量を欺く者たちに。
2 自分が誰かから受け取るときは、十分に量らせておきながら、
3 自分が誰かのために量るときは、減らして損失をもたらす。
4 これらの者は、よみがえらされることを考えないのか、
5 大いなるその日に、
6 人間が、諸世界の主の御前に立たされるその日に。[1]
7 いや、本当に、放埒な者の記録はスィッジーンの中にある。
8 スィッジーンとは何であるかを、あなたがたに分からせるのは何か。
9 それは、書きとどめられた記録のこと。





10 災禍あれ、その日、嘘よばわりした者に、
11 裁きの日を、嘘よばわりしてきた者たちに。
12 法外の者、罪深い者の他は、誰もこれを嘘であるとはしない。
13 われらのしるしが読み聞かされると、そうした者は「大昔の人の伝説に過ぎない」などと言う。
14 いや、むしろ彼らの得てきたことが、彼らの心を錆びつかせたのだろう。[2]
15 いや、本当に彼らは、その日、彼らの主から必ず隔てられるだろう。
16 そののち、必ず火獄で焼かれるだろう。
17 そののち、必ず告げられるだろう、「これが、あなたがたが嘘であるとしてきたこと［の報い］」。
18 いや、本当に、正しい人の記録はイッリッユーンの中にある。
19 イッリッユーンとは何であるかを、あなたがたに分からせるのは何か。
20 それは、書きとどめられた記録のこと。
21 証言するのは、［主の］近くに召される者たち。
22 正しい人は、必ず至福の中に住まい、
23 長椅子にくつろぎ、［周囲を］見渡している。
24 あなたは、彼らの顔に至福の輝きがあるのがわかるだろう。
25 彼らは、封印の施された純粋な酒を注がれるだろう。
26 その封印はじゃ香で、これを競って求める者には、競って求めさせなさい。
27 それに混ぜてあるのはタスニーム［の水］、[3]
28 ［主の］近くに召される者たちが飲む泉。

29 罪を犯す者たちは、信じる者たちをあざ笑っていた。
30 彼ら［信じる者］が通りかかると、彼ら［罪を犯す者］は互いに目くばせし、
31 その身内のところへ戻ってきたとき、物笑いの種にしていた。
32 彼ら［信じる者］を見かけたときは、「本当に彼らは迷っている」などと言っていた。
33 彼らは、彼ら［信じる者］を監視する者として遣わされたのでもないのに。
34 しかし、この日は信じる者が［真理を］拒む者を笑い、
35 長椅子にくつろぎ、［周囲を］見渡している。
36 ［真理を］拒んだ者たちは、してきたことの代償を払ったのか。4

1 自分が売っている品物の瑕疵（かし）を隠す者があれば、神の怒りと天使たちの呪詛（じゅそ）をこうむることになる。この節が朗唱されると、イブン・ウマルは目に涙を浮かべた。

2 「アブー・フライラの伝えるところによると、アッラーの使徒は次のように語った。『信仰者が罪を犯すと、その心に黒い染みができる。悔い改めて罪を避け、赦しを願うなら、その心は磨かれる。しかし［罪が］増えるなら、［黒い染みも］増える。これこそ「いや、むしろ彼らの得てきたことが、彼らの心を錆（さ）びつかせたのだろう」と、アッラーがその書において告げていた錆（さび）のことである』。」（ティルミズィーのハディース）

3 「タスニーム」とは、楽園にある泉の名である。

4 この他、イブン・アーシュールの解説に従うならこの文は断定的疑問形であり、その場合「確かに報われたではないか」といった意味にも読み取れる。

# 第八四章　アル＝インシカーク　割れる

マッカ啓示

第一節に現れる語にちなんでこの名がつけられた章である。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 天が裂けて割れるとき、
2 従うべくしてその主に従い、
3 大地が引き延ばされるとき、
4 中にあるものを出し尽くして空になり、
5 従うべくしてその主に従う。
6 人間よ。本当にあなたは主の方へと懸命に勤しみ、やがてその御方に会うだろう者。
7 右手に［記録の］帳簿を与えられる者は、
8 その清算もたやすく、ただちに済まされ、
9 身内の者たちのところへ、楽しげに戻るだろう。





10 しかし、背の後ろに［記録の］帳簿を与えられる者は、
11 たちまちの滅びを求めて叫び、
12 烈火で焼かれるだろう。
13 本当に、身内の者たちの中で楽しんできた。[1]
14 本当に、引き戻されることなどないと思っていた。
15 いいや。主は、常に彼のことを見通していた。
16 いや、われは誓おう、夕の残照にかけて、
17 夜と、それが包み込むものにかけて、
18 満ちるときの月にかけて。
19 あなたがたは、必ずひとつの位相から別の位相へと移りゆく。
20 それなのに、どうして彼らは信じないのか。
21 彼らのためにクルアーンが読み聞かされるときも、ひれ伏そうとしない。
22 いいや。それどころか、［真理を］拒む者たちはこれを嘘であるとする。
23 しかしアッラーは、彼らの内側にあるものをもっともよく知っている。
24 それゆえ彼らには、痛烈な懲罰の報せを伝えなさい。
25 信じて正しい行いをする者は別で、彼らには尽きることのない報酬があるだろう。

1　これらの節では、利己的で他者を顧みない者の様子が描写されている。これらの節から必然的な教訓を得ない者は、悔いの残る結末を迎えることになるだろう。

# 第八五章　アル＝ブルージュ　諸星座

マッカ啓示

本章には、ズー・ヌワースによる虐殺への言及が含まれている。彼はナジュラーンのキリスト者たちを塹壕で燃やした。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 諸々の星座をもつ天空にかけて、
2 約束されているその日にかけて、[1]
3 証言する者と、証言されるものにかけて。
4 塹壕の仲間は討ち取られた。
5 火炎には燃料が給された。
6 彼らがそのそばに座すとき、
7 信仰者たちに対し、自分たちの行ってきたことを見届ける。
8 彼らは、ただ彼ら［信仰者］が、威力ある御方にして称賛すべき御方、アッラーを信じたというだけで立腹していた。
9 諸天と大地の王権はこの御方に属する。アッラーは、ありとあらゆるものごとの証言者。[2]
10 信仰者の男女を迫害し、そののち悔い改めない者には地獄の懲罰があるだろう。さらに彼らには、燃えさかる懲罰があるだろう。
11 しかし、信じて正しい行いをする者には、川がその下を流れる楽園があるだろう。これこそ大いなる成就というもの。
12 本当に、あなたの主の捕縛は厳重なもの。
13 本当に、［創造を］開始し、繰り返す御方。
14 もっともよく赦す御方、もっとも愛情深い御方。
15 玉座の所有者にして栄光の御方、
16 何であれ、意のままに行う御方。
17 あなたに、軍勢の話は届いているか、
18 フィルアウンの、またサムード［の民］の。
19 いいや。それでも、［真理を］拒む者たちは［真理を］嘘であるとする。
20 しかしアッラーは、彼らを背後から囲い込む。
21 いいや。これぞ栄光のクルアーン、
22 守護された碑板の中にあるもの。

1　「約束されているその日」とは、復活の日を指す。

2
ズー・ヌワースとは、西暦五七〇年の預言者の誕生よりも半世紀ほど前の人物。ヤマンのヒムヤル王国の最後の王であり、ユダヤ教に改宗すると、五二三年、ナジュラーンのキリスト者を弾圧し、塹壕（ざんごう）の中で焼殺した。神は来世における万事の証言者であり、誰もがその罪に応じた罰を受ける。罪人は、犯した罪の帰着から逃れることはできない。

# 第八六章　アッ＝ターリク　夜の星

マッカ啓示

本章の名は、最初の節にある「アッ＝ターリク（夜に訪れる者）」と呼ばれる、夜明けに現れるひときわ輝く星の呼び名に由来する。無知の時代の暗闇から現れた預言者の比ゆである。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 天空と、夜に訪れるものにかけて。
2 夜に訪れるものとは何であるかを、あなたがたに分からせるのは何か。
3 〔それは〕鋭く光る星。
4 その上に守護者のいない者はない。
5 人間は、自分が何から創造されたかを考えねばならない。
6 ほとばしる水から創造され、
7 〔その水は〕腰と肋骨のあいだから出てくる。
8 本当に、かの御方にはこれを帰らせることもできる。





9 秘められていたことが明かされるその日、
10 人には力も、何の助けもない。
11 〔雨の帰りどころの〕巡る天空にかけて、
12 〔芽吹きのために〕裂け割れる大地にかけて、
13 本当に、これ〔クルアーン〕は〔善悪を区別する〕決定の御言葉。
14 それは戯（たわむ）れごとではない。
15 本当に、彼らは策をめぐらせる。
16 しかし、われもまた策をめぐらせる。
17 それゆえ、〔真理を〕拒む者を猶予しなさい。猶予しなさい、しばらくのあいだは。

# 第八七章　アル＝アアラー　至高

マッカ啓示

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 あなたの、至高の主の御名を讃美しなさい。
2 創造し、釣り合いをととのえ、
3 定め、導く御方。
4 牧草地をはぐくみ、
5 それから、それを褐色の枯れくずにする。
6 われらは、あなたに復唱させる。あなたが忘れないように、
7 アッラーの御心にかなう限りは。かの御方は、あらわにされるものも押し隠されるものも知っている。
8 われらはあなたに、［道を］平らかで、たやすいものとしよう。
9 それゆえ想い起こさせなさい、戒めが益になるのなら。
10 畏怖する者は、戒めを受け入れるだろう。
11 しかし、もっとも不幸な者はそれを避けようとする。



12 もっとも巨大な業火に焼かれる者、
13 その中で死ぬことも、生きることもかなわない。
14 自分を清らかにする者は、必ず栄える、
15 主の御名を想い起こし［て唱え］、礼拝を守る者は。
16 いいや。しかし、あなたがた［人間］は、現世の生の方を好む。
17 来世の方こそはるかに良く、永続するというのに。
18 これは以前の書巻の中にもあること。
19 イブラーヒームの、またムーサーの書巻の中にも。

# 第八八章　アル＝ガーシヤ　圧倒するもの

マッカ啓示

第一節に現れる言葉にちなんでアル＝ガーシヤと名づけられた、マッカ初期の啓示である。来世における善と悪の運命の諸問題が扱われている。人生は神の計画に従って進む。人間は、最終的には自らの主と向き合い、自らの行いについて申し開きをすることになる。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 あなたに、「広がって」圧倒するものの話は届いているか。
2 その日、「ある者の」顔はうつむいて、
3 「無駄な」苦役に疲れ果て、
4 灼熱の業火に焼かれ、
5 煮え立つ泉から「の煮え湯を」飲まされ、
6 棘のある苦いものの他に、食べるものもない。
7 それは滋養にもならず、飢えも満たさない。





8 その日、「別の者の」顔は喜び、
9 「自分が重ねてきた」努力のために満ち足りて、
10 高められた楽園の中に「いる」。
11 そこでは、虚言を耳にすることもない。
12 そこには流れる泉がある。
13 そこには高く掲げられた寝椅子がある。
14 「手に届くところに」置かれた杯があり、
15 列に並べられた座があり、
16 広げられた敷物がある。
17 彼らはらくだについて考えないのか、どのようにそれが創造されたか。
18 また天空について、どのようにそれが高く掲げられたか。
19 また山々について、どのようにそれが据えられたか。
20 また大地について、どのようにそれが平らかに広げられたか。
21 それゆえ想起させなさい。あなたは、ひとりの想起させる者に過ぎない。
22 あなたは、彼らの上に立ち管理する者ではない。
23 しかし誰であれ、背を向けて「真理を」拒もうとするなら、
24 アッラーは、大いなる懲罰をもって罰するだろう。
25 本当に、彼らの帰り着くところはわれらにあり、
26 本当に、彼らの清算もわれらにある。

# 第八九章　アル＝ファジュル　夜明け前

マッカ啓示

第一節に現れる言葉にちなんでこの名で呼ばれている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 夜明け前にかけて、[1]
2 ［禁制の月の］十の夜にかけて、[2]
3 偶数と奇数にかけて、
4 過ぎてゆく夜にかけて。
5 この中に、理知ある者のための［十分な］誓いがあるではないか。
6 あなたは見なかったか、主がどのようにアード［の民］を扱ったか。
7 列柱そびえ立つイラム［の住居］のことを。[3]
8 その地に、かつてそれと同じようなものなど創造されたことはなかった。
9 また谷間の岩を掘り返したサムード［の民］のことを。





10 また杭の所有者フィルアウンのことを。[4]
11 その地において暴君となり、
12 多くの退廃を広めた者たち。
13 それゆえあなたの主は、彼らの上に悲惨な懲罰を注いだ。
14 本当に、あなたの主は望楼に立つ。
15 人間とは、試みのために主が寛大にとりはからい、恩寵をめぐむと、「主は私を重んじている」と言う。
16 しかし、試みのために主がその糧を減らすと、「主は、私を軽んじている」と言う。
17 断じて、そうではない。いいや、あなたがたこそ孤児を重んじずにいる。
18 貧しい者を養うよう、互いに勧め合いもせずにいる。
19 ［孤児の］遺産を貪りつくそうとする。
20 並外れた愛をもって財を愛する。[5]
21 断じて、それはならない。大地が平らかにされ、微塵にされるとき、
22 あなたの主が到来し［現れる］、列の上にも列をなす天使たちもまた。
23 その日、地獄が［眼前に］運び出される。その日、人間は想い起こすだろう。しかし［その日になって］想い起こせるのか。
24 人は言うだろう。「自分の生のために、あらかじめ備えてさえいたなら」。
25 その日、かの御方が罰するように罰する者は誰もおらず、
26 かの御方がつなぐようにつなぐ者は誰もいない。
27 安らげる静穏の魂よ、

28 あなたの主へと帰れ、喜び、喜ばれて。
29 われのしもべたちの中に入りなさい。
30 われの楽園に入りなさい。

1 日の出の前と日の入り後、太陽は地平線の下にあるにもかかわらず、大気中に光が散乱して完全には暗くならない「薄明」と呼ばれる時間帯がある。薄明は太陽の高度によって（1）太陽の伏角が五〇分から六度、人工照明がなくても屋外で作業が可能な常用薄明（市民薄明ともいう）、（2）太陽の伏角が六度から一二度、海と空の境（水平線）が見分けられる航海薄明、（3）太陽の伏角が一二度から一八度、六等星までが見分けられる暗さの前後に相当する天文薄明、の三つに分けられる。日本でいう「夜明（あるいは日暮）」は、太陽の伏角が七度二一分四〇秒になる時刻と定義されているが、ファジュルは太陽の伏角が一八度の時刻を指し、これは前述の「薄明」と呼ばれる時間帯のうち（3）の段階に相当する。以上のことから、ここでは「ファジュル」の語を「夜明け前」とした。

2 「十の夜」について、イスラーム暦第一二月のズルヒッジャ月最初の十日間であるとする解釈もあれば、第九月のラマダーン月最後の十日であるとする解釈もある。

3 イラムとは、アードの民の一部族のこと。

4 複数の解説者によると、フィルアウンが誰かを処罰する際は、地面に四本の杭を打ち、罰せられる者の手足をこの杭につないだという。彼のこうした残虐なふるまいから、人々は彼を「ズ・ル・アウタード（杭の所有者）」と呼んで恐怖した。





5 イスラーム以前、「ジャーヒリーヤ（無明の時代）」と呼ばれる時代のアラブたちには、女性や子ども、孤児に属するはずの遺産を簒奪する慣習があった。

# 第九〇章　アル＝バラド　町

マッカ啓示

本章では人間の創造とそのふるまい、またその他の存在とは違って人間だけに授けられている特別な資質について取り上げられている。この資質を善のために使った者には幸福な結末がある。しかしそうではない者には、その結果として不幸な住みかが待ち受けている。章の名は第一節に現れる語に由来しており、これはマッカを暗示している。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 いや、われは誓おう、この町［マッカ］にかけて。
2 あなた［ムハンマド］は、［れっきとした］この町の住民。
3 産む者、産まれる者にかけて。[1]
4 われらは、人間を困難の中に創造した。
5 人は、自分は誰にも左右されないとでも思っているのか。
6 自慢げに、「私は莫大な散財をしてやった」などと言う。
7 人は、自分は誰にも見られていないとでも思っているのか。





8 われらは、二つの目をもたせたではないか、
9 また、舌と、二つの唇とを。
10 また、［善悪という］二つの道を示した。
11 しかし、人は険しい道に挑もうとしない。[2]
12 険しい道とは何であるかを、あなたがたに分からせるのは何か。
13 それは奴隷を解放すること。
14 あるいは、飢えの日には養うこと、
15 近しい親族の孤児を、
16 あるいは、あわれな貧しい者を。
17 そして信じる者のひとりとなり、互いに忍耐を勧め合い、互いに親切を勧め合うこと。
18 これらの者こそ右側の仲間。[3]
19 しかしわれらのしるし［の真理］を拒む者、彼らは左側の仲間。
20 彼らの上を、業火が閉ざす。

1 ここで「産まれる者」と訳出した「ワマー ワラダ」は、「産まない者」の意ともなる。
2 ここで「険しい道」と訳出した「アカバ」とは、深い谷から高い山をたどる上り坂を指す語。
3 「右側の仲間」「左側の仲間」については五六章八節から九節も参照。

# 第九一章　アッ＝シャムス　太陽

マッカ啓示

本章は、第一節に現れる語にちなんでこの名で呼ばれている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 太陽と、その［朝の光の］輝きにかけて、
2 それを追うときの月にかけて、
3 それをあらわすときの昼にかけて、
4 それを覆うときの夜にかけて、
5 天空と、それを築いた御方にかけて、
6 大地と、それを広げた御方にかけて、
7 魂にかけて、またそれを形あるものにし、
8 それから、罪と徳［についての知識］を吹き込んだ御方にかけて。
9 それを清らかにする者は栄える。
10 それを損ねる者は破綻する。
11 サムード［の民］は、高慢にも［預言者のことを］嘘であるとした。
12 彼らのうち、もっとも邪悪な者が立ち上がったとき、
13 アッラーの使徒［サーリフ］は彼らに言った。「これはアッラーの雌らくだ。それゆえ、これに水を飲ませなさい」。[1]
14 しかし彼らは、彼のことを嘘であるとし、その［雌らくだの］腱を切った。そこで主は、その罪のために彼らを滅ぼし、［彼らの町を］平らかにならした。
15 かの御方には、結末への恐れなどない。

1 「それゆえ、これに水を飲ませなさい」あるいは、「それゆえ、その命とそれが水を飲む自由とを守りなさい」。預言者サーリフの雌らくだは、神が岩の中から連れ出した奇跡のらくだであった。預言者サーリフは、ある一日はサムードの部族とその家畜たちが水飲み場で水を飲んだなら、次の一日はこの雌らくだのみが水飲み場で水を飲む、という条件で彼の民と合意を交わしていた。だがサムードの人々は、雌らくだの死を望み、そして実際に殺害してしまった。その結果、神は彼らに激怒し、部族全体を滅ぼした。

# 第九二章　アッ＝ライル　夜

マッカ啓示

第一節に現れる語にちなんでこの名で呼ばれている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 覆うときの夜にかけて、
2 輝くときの昼にかけて、
3 雌雄(しゆう)を創造した御方にかけて、
4 あなたがたの努力は、本当に千差万別［の結末を迎える］。
5 それで［施しを］与え、［主を］畏れ、
6 もっともすぐれたものを真実とする者には、
7 われらは、安楽への道をたやすくしよう。
8 しかし、もの惜しみし、独りよがりで、
9 もっともすぐれたものを虚偽とする者には、





10 われらは、苦境への道をたやすくしよう。
11 滅びのとき、その財は何の役にも立たないだろう。
12 本当に、導きはわれらにあり、
13 また本当に、来世も現世もわれらにある。
14 われはあなたがたに、燃えさかる業火について警告した。[1]
15 そこで焼かれるのは、もっとも不幸な者だけ、[2]
16 ［真理を］嘘であるとし、背を向けた者。
17 しかし［主は］、もっとも畏れる者にそれを免(まぬが)れさせるだろう。
18 自分の財を与え、自分を清らかにし、
19 誰に対しても、好意の見返りを求めない。
20 求めるのは、ただ至高の主の御顔だけ。[3]
21 ［求めは、］いずれ満たされるだろう。

1 この節で神の一人称が「われ」と単数形になっているのは、温和で穏やかな語り口であることのあらわれである。
2 「もっとも不幸な者だけ」あるいは「自分自身の邪悪さのためにそこで焼かれることになる、もっとも不幸な者だけ」。
3 「主の御顔」とは、すなわち主の満足を指す。

# 第九三章　アッ＝ドゥハー　朝の光

マッカ啓示

第一節の語が章題の由来である。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 朝の光にかけて、
2 静まりゆくときの夜にかけて、
3 あなたの主は、あなたを見捨てたのでも、憎んでいるのでもない。[1]
4 あなたにとり、来世は最初［の現世の生］よりもはるかに良いもの。
5 やがて主は、あなたの喜ぶものをあなたに与えるだろう。
6 かの御方は孤児のあなたを見つけ、庇護したではないか。
7 迷っていたあなたを見つけ、導いたではないか。
8 貧しかったあなたを見つけ、富ませたではないか。
9 それゆえ、孤児を虐げてはならない。





10 また、乞い求める者を叱ってはならない。
11 しかしあなたの主の恩寵については、いつでも話して聞かせなさい。

1 啓示がしばらく途絶えていたとき、偶像を奉ずる者たちは預言者を嘲笑し、彼の主は彼を捨てたのだと言ってまわった。この章はその際に啓示されたものである。

# 第九四章　アッ＝シャルフ　安堵

マッカ啓示

章名にあてられている「シャルフ」または「インシラーフ」は「薄く押し広げる」という意味。心が狭いと些事（さじ）にこだわり、心が不安定になる。心を広げることによって、安堵（あんど）できるようになる。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 われらは、あなたの胸を広げたではないか。
2 あなたから、その重荷をとり除いたではないか。
3 それはあなたの背に、重くのしかかっていた。
4 それから、あなたの声望（せいぼう）を高めたではないか。
5 それゆえ本当に、安楽は苦境と共にあり、
6 本当に、安楽は苦境と共にある。
7 それゆえ［義務を］なし終えたとき、［崇拝に］立ち返りなさい。[1]
8 あなたの主に、すべてを明け渡しなさい。[2]





1　日々のなすべきことをし終えたなら、礼拝をもって自らをいやすように、という意味。
2　あるいは、「すべてにおいて、あなたの主に希（こいねが）いなさい。」

# 第九五章　アッ＝ティーン　いちじく

マッカ啓示

本章では、人間の霊的状態が説き明かされており、その章題は第一節にある語に由来している。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 いちじくとオリーヴにかけて、
2 シナイ山にかけて、
3 やすらかなこの町［マッカ］にかけて。
4 われらは人間を、もっとも美しい姿に創造した。
5 それから、もっとも低きへと引き下ろした。[1]
6 信じて正しい行いをする者は別で、彼らには、尽きることのない報酬があるだろう。
7 この後になって、何があなたに宗教を嘘よばわりさせるのか。
8 アッラーは、裁く者のうちもっともすぐれた裁く者ではないか。





1　四節「アフサニ・タクウィーム（もっとも美しい姿）」は「完成」を意味し、人間は被造物の中では最高かつ完璧に創られている。その上で、人間には知性が授けられている。もしも正しい方法で知性を用いなければ、最も低劣な階梯（かいてい）にいる自分を見出すことになるだろう。

# 第九六章　アル＝アラク　凝った血

マッカ啓示

本章の冒頭五節はヒラーの洞窟で啓示された。これがクルアーン全啓示の、最初の諸節にあたるとされている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 読め、創造者たるあなたの主の御名において。
2 人間を、凝った血から創造した。
3 読め、あなたの主はもっとも寛大な御方、
4 筆によって教え、
5 人間が知らずにいたことを教えた。
6 いや、本当に人間は逸脱する。
7 自分に足りないところはない、と思いあがる。
8 本当に、帰るところはあなたの主にある「というのに」。
9 あなたは見たか、禁じる者を、





10 ひとりのしもべが、礼拝するときに。[1]
11 あなたは見たか、それが導きの上にいる者なら、
12 あるいは、畏れるよう勧める者なら。
13 あなたは見たか、その者が「真理を」嘘であるとし、背を向けるなら、
14 アッラーが見ているのを、その者は知らないのか。
15 断じて、それはならない。もしやめないなら、われらはその前髪を掴(つか)んで引こう、
16 嘘をつく、罪深いその前髪を。
17 その一味を呼び集めさせなさい。
18 われらも、「地獄の」番人たちを呼び集めよう。
19 いや、断じてそのような者に従ってはならない。ひれ伏して「主に」近づきなさい。[2]

1　預言者が礼拝をしようとしたとき、それを阻止したアブー・ジャフルを指している。
2　平伏(へいふく)の状態にあるとき、人間は自分の創造者である神のもっとも近くにいる。

# 第九七章　アル＝カドル　天命

マッカ啓示

本章は、預言者へのクルアーンの聖句の啓示が始まった夜を指している。それ以降、何年にも及んだ神の啓示が初めて地上に届けられたのは、ラマダーン月の二三日、二五日、または二七日めの夜であったと信じられている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 われらは、それ［クルアーン］をカドルの夜に下した。[1]

2 カドルの夜とは何であるかを、あなたがたに分からせるのは何か。

3 カドルの夜は、千の月よりもはるかに良いもの。

4 その中を、主の思し召しにより天使が、精霊が、すべての命令をたずさえて降臨する。

5 これこそは平安［の夜］、夜の明けるまで。





1　本章の内容は、「威力の夜」「栄誉の夜」あるいは「天命の夜」として知られる夜についてである。この一夜は、千か月よりもなお優れているとされる。本章は、預言者がマディーナに移住する十三年前に啓示された。

# 第九八章　アル＝バイイナ　明白な証

マディーナ啓示

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 啓典の人々のうち［真理を］拒む者も、多神を奉ずる者も、離れ去ろうとはしなかった、明白な証が到来するまでは。[1]

2 アッラーの使徒が、清浄な書巻を読み聞かせるまでは。

3 その中には、真正の記録がある。

4 啓典を与えられている者たちが離ればなれになったのは、明白な証がもたらされた後のこと。

5 彼らに命じられているのは、ただアッラーに［のみ］仕え、宗教においてはこの御方に対し純正の人として真摯であること、また礼拝のつとめを守り、喜捨をすることだけ。これこそは真正の宗教。[2]

6 本当に、啓典の人々のうち［真理を］拒む者も、多神を奉ずる者も、地獄の業火の中で永遠に燃やされるだろう。彼らこそ、生けるもののうちもっとも悪いもの。

7 本当に、信じて正しい行いをする者、これらの者こそ生けるもののうちもっとも良いもの。





8 彼らの報酬は主の御許にある。川がその下に流れる永遠の園に、彼らは永遠に住まうだろう。アッラーは彼らを大いに喜び、彼らもアッラーを大いに喜ぶ。これこそ、自らの主を畏れる者のためにある。

1 ここで言及されている「啓典の人々」とは、最後の預言者ムハンマドと同じ預言の系譜に連なる書物を授かっている、ユダヤ教徒とキリスト教徒を指している。

2 「純正の人」については、三〇章三〇節も参照。

# 第九九章　アッ＝ザルザラ　地震

マディーナ啓示

審判の日を扱った章である。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 大地が震動して揺さぶられるとき、
2 大地がその重荷を吐き出し、[1]
3 「いったい、どうしたのか」と人間が言うとき、
4 その日、それ［大地］はすべての顛末を話すだろう、
5 あなたの主が啓示し［、話す許可を与え］たとおりに。
6 その日、人々はそれぞれ群れをなして姿をあらわし、向かった先で自分の行いを見せられる。
7 塵（ちり）ひと粒の重みでも、善をなした者はそれを見る、
8 塵（ちり）ひと粒の重みでも、悪をなした者はそれを見る。





1　終末の日、大地は死者、鉱物、溶岩など様々なものを地表へ吐き出す。

# 第一〇〇章　アル＝アーディヤート　疾走するもの

マッカ啓示

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 息を荒げて疾走するものにかけて、
2 火花を散らすものにかけて、
3 夜明けに襲いかかるものにかけて。
4 砂塵を巻き上げ、
5 真っ只中をつらぬく。
6 本当に人間は、自分の主に対し恩知らずである。
7 自分自身が、そのことの証言者である。
8 そして本当に、富を愛すること凄まじい。
9 しかし、知らないのか。墓の中にあるものがまき散らされ、
10 胸の中のものが暴露されるとき、





11 本当にその［復活の］日、主は彼らのことを熟知している。

# 第一〇一章　アル＝カーリア　叩く音

マッカ啓示

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 どんどんと叩く音。
2 しかし、どんどんと叩く音とは何か。
3 叩く音とは何であるかを、あなたに分からせるのは何か。
4 その日、人々は散らされた蛾のようになり、
5 山々は、羊毛のひとひらのようになる。
6 自分の秤が重い者は、
7 満ち足りた生に入る。
8 自分の秤が軽い者は、[1]
9 奈落がその里となる。
10 それが何であるかを、あなたに分からせるのは何か。





11 それは灼熱の業火。

1 「自分の秤が重い者」とは、現世において行ってきた諸々の善行によって、という意味。軽ければ、それは善行に欠ける生を過ごしてきたことを意味する。

# 第一〇二章　アッ＝タカースル　蓄えの競い合い

マッカ啓示

最初の節にある語にちなんでその名がつけられている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 あなたがたは、［所有する］蓄えの競い合いにかまけて［主のことを］おろそかにする、

2 ［自分の］墓を訪れるまで。

3 いや、やがてあなたがたも知るだろう。

4 いや、本当にやがてあなたがたも知るだろう。

5 いや、あなたがたが、確信できるだけの知識をもって知ってさえいたなら。

6 あなたがたは、必ず獄火を見るだろう。

7 本当にあなたがたは、必ずそれを確信の目で見るだろう。

8 その日、あなたがたは、必ず享楽［に恩恵を浪費したかどうか］について問われるだろう。[1]





1　何のために財を費やしたか、何のために時を費やしたか。人間には、現世で何を行うかについての責任がある。

# 第一〇三章　アル＝アスル　時間

マッカ啓示

九四章の後に啓示された章。最初の節にある、時間を意味する語にちなんでその名がつけられている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 時間にかけて、

2 本当に、人間は喪失の中にある。

3 信じて正しい行いをし、互いに真理を勧め合い、忍耐を勧め合う者の他は。

# 第一〇四章　アル＝フマザ　中傷者

マッカ啓示

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 災禍あれ、陰口をたたき中傷する者すべてに。
2 財をかき集め、その勘定にかまける者。
3 その財が、自分を不死にすると思っている。
4 断じて、そうはならない。打ち砕く釜に必ず投げ入れられるだろう。
5 打ち砕く釜が何であるかを、あなたに分からせるのは何か。
6 それは焚きつけられたアッラーの火炎、
7 心の中を見透かすもの。[1]
8 まさに彼らの上を閉ざして、
9 延々と続く柱の列となるもの。





1　地獄は個々人の心の中にあるものを見透かし、それぞれにふさわしい懲罰を与える。

# 第一〇五章　アル＝フィール　象

マッカ啓示

アビシニアの提督アブラハ・アル＝アシュラムという人物に関連する章である。キリスト者の彼は、ヒムヤル王国を支配していたユダヤ教徒をヤマンから放逐し、カアバの巡礼者たちを取り込むべく、サナアに教会を建立した。アブラハはカアバを破壊しようと、軍勢を率いてマッカを目指し、大規模な遠征をおこなった。彼は一頭ないし複数の象を伴っていたが、それはアラブを大いに驚かせた。伝承によれば、最後のあと一歩という地点で象が進軍を拒み、立ち往生しているところに翼ある生きものが飛来し、軍勢に投石したといわれている。預言者ムハンマドの生まれ年に起きた出来事であった。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 あなたは見なかったか、あなたの主が、象の仲間たちをどう扱ったか。
2 彼らの企みをくじいたではないか。
3 また彼らの上に、鳥の群れを送り、
4 石を砕い［て焼い］たつぶてを投げつけ、
5 彼らを、食い荒らされた藁のようにした。

# 第一〇六章　クライシュ

マッカ啓示

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 クライシュの安全のために、
2 冬と夏の隊商の安全のために、
3 この家の主に、彼らを仕えさせなさい。
4 飢えに際しては彼らを養い、恐れに際しては彼らをやすらげる御方に。[1]

1　諸部族が互いに激しく争い、しのぎを削る中で、クライシュ族が夏には北へ、そして冬には南のイエメンへと安全な旅を享受できていたのは、彼らがカアバの管理者の地位にあったためである。これはクライシュ族に対する神からの大いなる恩寵であった。この地位のおかげで彼らは財を蓄え、商人としても手広く活動することができたのである。

# 第一〇七章　アル＝マーウーン　助け合い

マッカ啓示

最後の節にある語にちなんでこの名がつけられている。来世をどうとらえるかにより現世の過ごし方は大いに変わる。来世を信じない者がその道徳観念をどう発達させるか（あるいはさせないか）、現世における他者への思いやりや手助けといった身近な慈善を通して考えさせる章である。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 あなたは見たか、宗教を嘘よばわりする者を。
2 それは孤児を追い払う者、
3 貧しい者を、養うよう勧めもしない者。
4 災禍あれ、礼拝する身でありながら、
5 自分の礼拝［の意味］にうわの空の者。
6 見せびらかすばかりで、
7 ［ほんのわずかな］手助けを断る者。[1]





1　章の冒頭では公然と宗教への反発を示す者について、四節以降では公然とムスリムであることを表明しつつ、ムスリムとしての判断力に欠ける者について指摘されている。二種類の人物の行動や態度に共通するのは、いずれも来世への備えを怠っているという点である。また礼拝は神に対してなされるものであり、他人の目線に対してなされるべきものではなく、そうした見せかけの礼拝が信仰者に禁じられていることは言うまでもない。

# 第一〇八章　アル＝カウサル　豊穣

マッカ啓示　または　マディーナ啓示

最初の節にある、「豊穣」「潤沢」といった意味の語にちなんでこの名がつけられている。明示されてはいないが、預言者に後継者として宗教を守る息子のないことを嘲笑した、信仰なき者たちへの応答という意味合いも含まれている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

**1** 本当にわれらは、あなたに豊穣を与えている。[1]

**2** それゆえあなたの主に礼拝し、「犠牲として捧げる家畜を」屠りなさい。

**3** あなたを憎む者は、きっと断たれるだろう。[2]





1 冒頭に示した通り、「カウサル」には複数の意味がある。偶像を奉ずる人々は、預言者を「アブタル」と呼び、彼には息子がおらず、よって誰からも忘れ去られるだろうと暗に揶揄した。しかし現実には、彼の名前は日に五回、ムアッズィンたちの礼拝の時刻を知らせるアザーンのたびに世界各地において声高く唱えられるようになった。

2 あるいは、「あなたを憎む者は、きっと子孫の絶える者となるだろう」。

# 第一〇九章　アル＝カーフィルーン［真理を］拒む者

マッカ啓示

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 言いなさい。「［真理を］拒む者たちよ、
2 あなたがたが仕えているものに、私は仕えない。
3 私が仕えているものに、あなたがたは仕えない。
4 私は、あなたがたが仕えているものに仕える者ではない。
5 あなたがたは、私が仕えているものに仕える者ではない。
6 あなたがたにはあなたがたの宗教があり、私には私の宗教がある」。[1]





1　ここではアラビア語の「ディーン」を「宗教」と訳出しているが、実際のイスラームは精神的な領域にとどまらず、社会や経済など、あらゆる領域を網羅する。それはいわば「生きるための完全なシステム」であり、それこそがただしく「ディーン」の意味するところである。

# 第一一〇章　アン＝ナスル　援助

マディーナ啓示

「手助け」「力添え」を意味する「ナスル」という語にちなんで名づけられた章である。一般にマディーナ啓示とされているが、ヒジュラから十年めの巡礼時に、マッカで啓示されたとする伝承も存在する。預言者の死期が近づいていることを、初めて公に示したものとして受けとめられている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1　アッラーの助けと勝利が到来し、
2　人々が群れをなしてアッラーの宗教に入るのを見たなら、
3　称賛をもってあなたの主を讃美し、赦しを願いなさい。本当に、これぞ幾度でも悔い改めを受け入れる御方。

# 第一一一章　アル＝マサド　椰子

マッカ啓示

第一節に現れる語をとって「ラハブ（「猛火」「烈火」の意）」とも呼ばれる章である。預言者の最大の庇護者であったアブー・ターリブの死後に家長の座を継いだアブドゥル・ウッザー、通称アブー・ラハブは、預言者を苦しめることをほとんど生きがいにしており、その妻と共にあらゆる迫害の限りを尽くした。ここでは彼とその妻が非難されている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

**1** アブー・ラハブの両手は滅びよ。彼も滅びよ。

**2** 彼の財も、得たものも、何の役にも立たない。

**3** 彼は猛々（たけだけ）しい火炎の中で焼かれるだろう、

**4** その薪（まき）を運ぶ彼の妻も［焼かれるだろう］、

**5** その首に、椰子（やし）の荒縄をかけられて。[1]





1　預言者が彼の親族を招いて、イスラームを説いたときのことである。そこに彼の叔父アブー・ラハブもいた。彼は預言者を非難し、「こんなことのために我らを呼び出したのか」となじった。するとこの章が啓示された。「マサド」は「鉄の鎖」とも解釈されている。その場合、五節は「その首に、鉄の鎖をかけられて」となる。

# 第一一二章　アル＝イフラース　真髄

マッカ啓示

本章の章名となった「イフラース」という語は、章のどこにも用いられていないが、それはこの章名がタウヒード（統一性）を扱う章の内容全体を考慮して命名されていることを示している。「クルアーンの真髄」とも呼ばれ、礼拝や祈りの際などに頻繁に唱えられる章である。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 言いなさい。「アッラー、唯一の御方。
2 アッラー、永遠にして絶対の御方。
3 産みもせず、産まれもせず、
4 何ひとつ並ぶものなき御方」。[1]





1 「イフラース」とは誠実さや深い献身、意図の純粋さなどを指す語として用いられる。土や石、木といった素材を用いて作成された立像や、火や、あるいは太陽や月、星といった対象を崇拝することが当然の常識とされていた社会においては、「唯一の神」とはいったい何のことなのか想像もつかなかったことだろう。その「唯一の神」について、いくつかの神の名（属性）を示しつつ簡潔かつ明確に示した章である。「サマド（永遠にして絶対の御方）」とは、あらゆる嘆願を最終的に聞き届ける存在である。また三節の通り神は「産みもせず、産まれもせず」、子や親はもちろんのこと、同位に立つ配偶もない存在であり、何ものをも必要としないが、あらゆるものから必要とされる「アハド（唯一の御方）」にして「何ひとつ並ぶものなき御方」である。

# 第一一三章　アル＝ファラク　夜明け

マッカ啓示

最初の節にある語にちなんでこの名がつけられている。本章ならびに次の章はそれぞれ別個の章ではあるが、相互に深く関連しており、またその内容も多くの点で類似していることから「アル＝ムアウウィザターン（神に加護を求める章）」の呼び名で知られる、いわば守護の祈りの章である。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 言いなさい。「夜明けの主に、私は加護を求めます。

2 その創造されたものの悪から、

3 更けゆくときの暗闇の悪から、

4 結び目に息を吹く［魔術師の］女たちの悪から、

5 妬む者が、妬むときの悪から」。

# 第一一四章　アン＝ナース　人々

マッカ啓示

前章と同様、「アル＝ムアウウィザターン（神に加護を求める章）」である。これら二つの章を唱えることで、悪意からその身が守られるとされている。

慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。

1 言いなさい。「私は加護を求めます、人々の主に、
2 人々の王に、
3 人々の神に、
4 こっそりと隠れてささやく者の悪から。
5 人々の胸の中にささやく者、
6 ジンであろうと、人であろうと」。

令和四年二月一日発行

『クルアーン　日本語読解』

クルアーン日本語読解制作委員会　アーディル大木博文
アルマンスール・アフマド
アハマド前野直樹
ハディ・ハーニ
兼定愛
西田今日子

日本語校正　下山茂
株式会社ヴェリタ

装丁・造本　グフロン・ヤジッド

発行　東京ジャーミイ出版会

本書に配してある「花と鉢と曲線」の図像は、日本で最初のアラビア語版クルアーン（『コーラン』、一九三五年）の印刷・発行をはじめ、学習者向けの教科書や国内外向けの情報誌の刊行を中心に活動していた旧・東京回教印刷所の印章を、東京ジャーミイ出版会のシンボルマークとして復刻したものです。

ISBN978-4--910474-00-7
東京ジャーミイ出版会